

日本戯曲全集
第五十巻

伊藤松雄
永田衡吉
河野義博
鈴木彦次郎
能島武文

田中総一郎
北村壽夫
北村小松
北村喜八
池谷信三郎

# 現代篇第十八輯

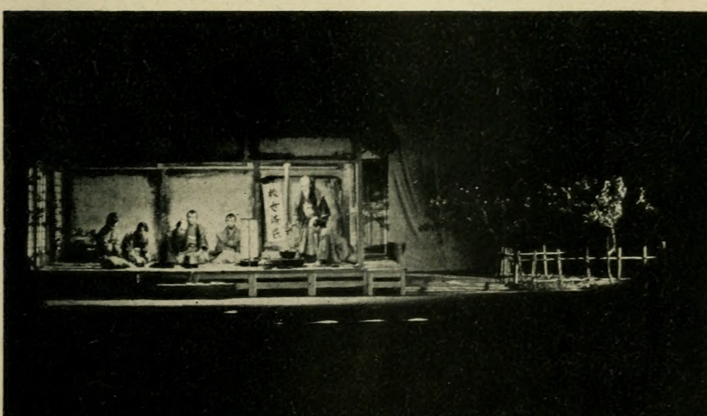
東京
春陽堂版



「想思草」　澤田正二郎上演



「暁の死」舞臺面



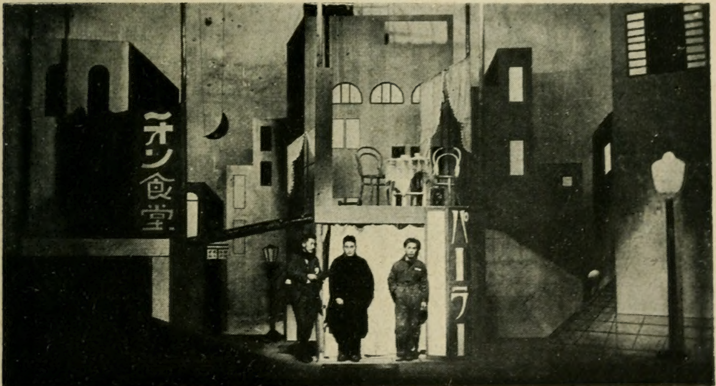
「甲斐の徳本」舞臺面



「秋風落莫」 澤田正二郎の源義朝



「故郷」寳塚國民座上演




「人物のゐる街の風景」舞臺にて右より吉田謙吉・著者・小山内薫



「猿から貰つた柿の種」　築地小劇場上演



「猿から貰つた柿の種」　築地小劇場上演



「駢馬哲學」築地小劇場上演



「駢馬哲學」築地小劇場上演



「三月三十一日」ロツテ・花柳はるみ　ゲルダ・伊澤蘭奢



「三月三十一日」ゲルダ・村瀬幸子　槇祐二・河原崎長十郎



伊藤松雄



田中總一郎



永田衡吉



北村小松



河野義博



北村喜八

# 日本戯曲全集　第五十卷　目次

## 伊藤松雄篇



## 永田衡吉篇

## 北村小松篇

伊藤松雄篇

# 月下香（一幕）

夏

ある海岸の別莊

球子　未亡人
幸子　亡夫の妹
茂　遺兒
輝子　茂のともだち
淵上先生
老爺
女中

ヴエランダのソウフアに寛つた球子は、書物を讀んでゐる。
庭の奥で、犬の吠聲が入亂れる
老爺が牝犬ジユリエツトを呼ぶ聲
しばらくして、次第に遠ざかる
やがて茂と幸子とが唄ふ童謡
球子倦んだ様に書物を伏せる

（茂と幸子とが庭前へ出てくる）

茂　母様……ジユリエツトつたら、あばれて、あばれて、逃げさうにしてますよ！

幸子　だつて、ね、小母様！　みんなして、男の犬がいぢめるんですもの……

球子　仕方ないのね！　で、爺やは？

茂　爺やは弱蟲だから駄目、グングンひきづられちまつてるンですもの……

球子　あんなに云つとくのに……しばつてさへおけばいいのに……

茂　しばつといちやア可哀想だつて云つてましたよ！

幸子　遊びにゆきたいのよ、あら、また吠えてるわ……

（犬の吠聲が入り亂れる。）

（老爺が『畜生！　畜生！』と叱る聲。）

（球子は不愉快さうに顔をしかめ乍ら、卓上のお菓子を二人の子供に與へる。）

（茂と幸子とは、垣根に近い大木の下、芝生に坐つて喰べる。）

（老爺が帰宿して出てくる。）

球子　爺や、駄目ぢやアないかね、あんな犬をよせつけちやア……

老爺　よせつけやアしませんが……よつてくるんでやす

よ、へへ、まつたく困りもんでやす。

球子　だつてお前、だからしばりつけておかなくちやアと云つといたのに……

老爺　そりやア奥様！　しばりつけといたつて同じことでやすよ、交尾期が来てゐやすでた……

球子　そ、そんなことはどうだつていいのよ。

老爺　ジユリエツトの奴もロミオがゐたころはあんなぢやアなかつただが……

球子　で、どうしたの？　逃げられてしまつたのかい？

老爺　まるで氣狂ひでやさア……

球子　困るねえ……

老爺　亡つた旦那樣が仰有つたつけが……

球子　何が？

老爺　ロミオとジユリエツトつてのは、なんでもえらく仲の好い同志の名前からおとりなさつたつて仰有つたが。

………

球子　ほほ、そりやア外國のお芝居にあるんだよ。

老爺　ロミオのゐるうちやア、あんなぢやアなかつたが、……旦那樣がお亡りになる……それから恰度一年しかも旦那樣の御忌日だと云ふのにロミオが死んでしまふ……

球子　もういいよ、もういいよ、あつちへいつといで、おき歸つてくるだらうから……

老爺　奥様！　畜生たんてあさましいもンでやすな、あんなに仲のよかつたロミオが死んでまだ一月かそこいらしかたつてゐないのに、もうこれでやすからなア！

（犬の吠えあふ聲。）

（だんだんふえて烈しくなつてくる。）

球子　もういいよ、それよか早くいつて見ておやり。

老爺　坊つちやま方、ゐらつしやらないかね？

球子　駄目よ爺や、子供たちなンかつれてつちやア……あんまりうるさかつたら鞭で叩いておやり、ぶちころしてやつたつてかまやしない……

老爺　へへ、さうもいかねえでやすよ、畜生にたつてたのしませてやらなくちやアね……

球子　あつちへおいでつてるぢやアないか？

老爺　陽氣が悪いだね……

（犬の吠聲。）

（老爺去る。）

（敦子ヴエランダへ出てくる。）

敦子　どうなさつたの？　お姉様、大きい聲なんかお出しになつて……

球子　だつて爺やがあんまり馬鹿なことばかり云つてるんですもの……子供たちのためにだつてよくはないわ……

敦子　以前はあんなぢやなかつたけれども……

球子　爺やは好い人間なのよ、だけどあの眼が妾大嫌ひなの、から、ぢいつと見詰めては一微らしく、何かものを云ひかける辯、まるで何んでもかでも疑ひぶかく思ひこんでゐるやうな……

敦子　あらお姉様、妾爺やのことを云つたんぢアありませんのよ……

球子　ぢやア……

敦子　いいえ、ジュリエットがね、以前はあんなぢやなかつたつてことを……ロミオが死んでからすつかりいけなくなつたのですわね……

球子　さうかしら……そんなこと、どうだつていいぢやないの……

敦子　そりやア、かまやしないけど。

（二人の子供たちはいつか裏庭の方へいつてしまふ。）

（童謡の聲がきこゆる。）

（折々犬の吠聲。）

（老爺が罵り或は叱する聲。）

球子　もう起きてもいいの？

敦子　大丈夫！

球子　でもよかつたわね。

敦子　まるで夢の様ですわ。

球子　あんなことつてあるもんぢやアない、あのままどうかなつてしまつたら、妾だつても一生苦しい思ひをしなくつちやア……

敦子　ほんとに潮が流れてゐるなソてこと、考へもしなかつたんですの……

球子　あなたは羨やましいわね、一昨日溺れかけて、すんでのことに死なうとした方が、そんなにはしやいだ顔つきをしてゐられるんだものね。

敦子　あら、妾そんなに浮々して見えますの。

球子　あなたこそ少しジュリエットよ！

敦子　まア！

球子　だつて……

（長い間。）

敦子　お姉様、あの方以前に御存知ぢやなかつたんですの？

球子　どなたを？

敦子　あの方よ！

球子　さア、どなたかしら？

敦子　いやな方ね、お姉様は……

球子　妾が海上さんを知つてゐる譯がないぢやアないの？

敦子　あら、別に深い意味でぢやアありませんわ。

球子　深い意味でなんかだつたら尚更ぢやないの。

敦子　御免なさい、妾一寸そんな氣がしましたのよ……お兄樣のおともだちか何かぢやアなかつたかしらと……

球子　いつて休んでらつしやい、駄目よ、まだ起きたりなんかしちやア。それに電氣マッサアジがくる頃でせう？

敦子　ええ――まだこの筋がつれて……ズキズキ痛みますの……

球子　ほら御らんなさい……それにあの方だつて……

敦子　さア、大低は……

球子　まるでジユリよ、まるでジユリエットだわ……

敦子　まア！　お姉樣！

球子　さア、いつて休んでらつしやいつたら……

敦子　ええ――ぢやア――

（敦子去る。）

（球子再び書物をよみかけたが、いらいらしてすぐ伏せる。）

（犬の吠聲がまた騷々しく聽える。）

（球子憎ましい面持で呼鈴を押す。）

（やがて女中が出てくる。）

球子　お佛間を開けといてね……

女中　はい！

球子　お花はお庭のを妾摘んでゆくから……

女中　はい！

（女中去る。）

（球子庭前へおりて花を摘む。）

（犬の吠聲。）

（球子深い嘆息。）

（やがて重い歩調で庭前から去る。）

（茂と幸子とが出てくる。）

幸子　あれよ、あれが綺麗だわ、よく熟れてるでせう？

茂　うん、僕とつたげよう、あんなもの譯あないさ。

幸子　だつて達きやアしないわ。

茂　だからこの四目垣へかう足をかけてさ……

幸子　だつて、これは腐れてるわ、グラグラしててよ。

茂　大丈夫、その代り押へててね、しつかりと……

幸子　ええ――でも恐いわ、大丈夫？

茂　ああ、大丈夫さ……

（茂四目垣へ足をかけて樹の果をとらうとする。）

（途端に誤つておちる。）

茂　あ痛いッ！　ああ痛いッ！

幸子　あら血が出てるわ！

茂　あ痛いッ！　そこ、そこが痛いの……

幸子　ドンドン出るわ、ハンケチでしばりませうか、だめよ、だめだわ。

茂　痛い、痛い、痛いッ。

幸子　あ、善いいことを知つてるのよ。

茂　痛い　！　何を？

幸子　怪我して血が出たとき、母様吸つて下さるのよ、いつでも……

茂　とまる？　血がとまつちまふ？

幸子　ええ、とまるわ……

茂　痛いのも直る？

幸子　ええ、すぐ直るわ、吸つたげませうか？

茂　――うん

（幸子、唇を傷口へつけて吸ふ。）

幸子　どう？

茂　うん――とまつた？

幸子　ええ――痛いのは？

茂　まだ少し……

球子　もつと吸つたげませうか？

茂　うん、もつと吸つて、もつと吸つて……

（球子が庭前をヴエランダの方へ戻つてくる。）

（二人の子供たちを認めておどろく。）

球子　茂さん！

（二人はびつくりして離れる。）

球子　茂さん！

（子供たちはぼんやりしてゐる。）

球子　幸子さん、またあとで遊んで下さいましね、茂さんは御詰りをしなくつちやアなりませんからね。

幸子　ええ――

（幸子しをれて去る。）

球子　茂さん！

（茂、幸子の去つた方を見送つてゐる。）

茂　幸子さん、ぢきね、僕ぢきに……

球子　茂さん！

（茂やつとそばへくる。）

茂　母様！　どうしてそんなに恐い顔なさるの？

球子　茂さん！

茂　え？

球子　あなたは……いやです、いやです、いやです……

（球子書物を投げつける。）

（茂泣きぢやくる。）

（犬の吠聲。）

（老爺の聲『畜生！　畜生！』と叫ぶ。）

（敦子が海上晃を案内してくる。）

球子　まア、いらつしやいまし。

海上　また上りました……おや、どうなさいました坊ちやん！

球子　どうぞ、おかまひにならないで下さいまし……

敦子　どう、叔母さんが……

（敦子茂をかばつて奥へつれてゆかうとする。）

球子　あの冷いものを……

敦子　ええ。

海上　どうぞおかまひ下さいますな。

（敦子茂と共に去る。）

球子　おかげさまで……

海上　もうすつかりおよろしいやうですね。

球子　ほんとにおかげさまで……

海上　あの分でしたら……何しろ私なんぞ、漁場での生活をはじめてから、どれほど溺れた人間を救つたかしれやアしません……

球子　――

海上　救うつて氣持は悪くありませんからね。

球子　そんなに好い御氣持がなさいまして!?

海上　え!?

球子　偶然でしたわね、それも恐ろしい偶然でしたわね。

海上　――

球子　さうぢやア御座いませんか、亡(なくな)つた主人の妹が、あなたに生命を救つて頂けたなんて……

海上　いやまつたく……

球子　敦子さんにとつちや、有難い生命の恩人でせうが…………妾にとつちや恐ろしい方ですわ……

海上　そんなことつて……

球子　さうぢやア御座いませんの？　あなたは敦子さんをお救ひになつて、さぞかし好い御氣持を覺えてゐらしやるんでせう？　だのに妾は……妾のせつかくおちついてゐた心持が、いまぢやアまつたく……

海上　まア、そんなことは仰有らないがいいでせう……

球子　何故でせう？　妾は救はれる反對に、潮の早い處へ突きおとされたも同然ぢやアありませんか、妾の苦しがつてもがいてゐる氣持が、あなたにはちつともお分りになつちやアゐないんですもの……

海上　まア、お互ひ、古い傷をうづかせるのは斷りませんからね……

球子　だつて……

海上　おやア、貴女は……

（短い間。）

（敦子が女中と共に入つてくる。）

（冷い飲物を卓上へ配るうち、誤つてコップを仆す。）

敦子　あらッ！

球子　御らん下さいまし、お嬢様はたんですかすつかりとりのぼせてゐらつしやいます。

敦子　まア、お姉様！

球子　さうぢやアありませんか。

（犬が烈しく吠立てる。）

（老爺が「畜生！　畜生！」と喚く聲。）

（騒々しい鞭の音。）

海上　どうしたつて云ふんでせう？

球子　ほほ、みんなのぼせきつてゐますのよ、氣狂ひのやうに、子供たちまでが……

敦子　お結構！

球子　さア、召上つて下さいまし、どうかしらお味は？

敦子　さア……

球子　どうぞ！

海上　有難う、結構です。

球子　御ビールは如何？

海上　いえ、かう暑くつちやア……反つてこの方が……

球子　おやア、今晩はぜひ御食事を遊ばしてゐらつしやつて下さいまし、ね、敦子さん！

海上　それどこぢやアありません。

球子　でも敦子(こちら)の御全快祝ひですもの。

海上　まつたく、もう時間がありませんから……

球子　まア、何の御時間ですの？

海上　ええ、立たなければならないのです、急に電報が來ましてね樺太(あちら)の漁場の改築やら、鑵詰工場の新築やらが思ひのほかはやく形づいて、もうすぐ完成することになつたんです。で、さうなつて見ると……

球子　でもまさかにあなた、今日が今日……

海上　いや、ここの海は潮流が恐いですからね……

球子　あなた様でも？

海上　無論ですよ。

敦子　まア、御戯談ばつかり……

海上　いや、まつたく、人の溺れてゐるのは救へても、自分が溺れると云ふことはまた別ですからね……

（短い間。）

海上　ああ、それよりも如何です、一度と申上げても樺太ぢやア……併しどんな機會にあつち方面へ旅をなさらないとも限りませんからね、いらつしやつちやア……

（海上はポケットから地圖を出して卓上へ擴げる。）

球子　樺太だけのこんな大きな地圖つて見たこと御座いませんわ。

敦子　あら、此處が亞庭灣ですのね、ぢやア大泊は……？

海上　なかなか地理がよくお出來になりますね……

敦子　まあ！　大泊からは汽車がありますのね、でもあなたの漁場は本斗と眞岡の中間だと仰有いましたわね……

海上　さうですよ、で（萬年筆を出す）あつ、これぢやアいけない、赤インキのがあつた筈です、待つて下さい。（別

の萬年筆を出す）ほらここが大泊でせう、で千歳灣この川が留多加川……これが眞岡……本斗はこれ……海馬島は恰度……

（敦子は地圖の上へ顏をのりだして、熱心にうなづく。）

球子　地理のお復習がそんなに面白いでせうかしら……

海上　この海岸一帶が……

（女中出てくる。）

女中　マッサアジがまゐつて居ります。

敦子　あ、さう、待たせておいて――

球子　それよかすぐやつて頂いたら……失禮して……

海上　ほう、まだ腕がつれますか？

敦子　ええ――

球子　だからさつきあんな失禮をしたのね、御免なさい、のぼせてゐるなンて云つて……

敦子　まア！　で、この海は荒いんで御座いませうね？

海上　ええ――それに潮が……併しこの海邊よりは安全かもしれませんね、はは、實に綺麗ですよ、海のいろが……

敦子　まア、さぞよろしいでせうね……

海上　泳いでゐると自分の身體が、すけて氣味がわるい位なんです……鏡の前に立たされたやうな感じですね……

敦子　まア、で、いつも……

球子　敦子さん、よく倦きない方ね、そんなにひとつことを……マッサアジだつた待たせちや氣の毒よ……

敦子　ええ、ぢやア――失禮して……

（敦子去る。）

海上　で、奧さん、この海馬島ですがね……

球子　もうたくさんですの。

海上　――どうしたんです？

球子　あなたは恐ろしい方ですこと。

海上　何故でせう……？

球子　あなたは、そんなにまでして妾に復讐なさらうと思つてゐらつしやるのね？

海上　復讐ですつて？

球子　ええ――

海上　戲談ぢやアありませんよ、そりやアそんな氣持をもつたことも、一時はあつたでせう、併しいまとなつちやア……

球子　いまだつても……いまこそぢやないでせうか？

海上　そんな卑怯な……まさかに。

球子　だつてあなたは、敦子さんの溺れかかつてゐる處を救つて下さつた、それから此處へ御見えになり出して、まだ三日目ぢやありませんか!?

海上　ええ――それが？

球子　しかも三日の間に敦子さんの心をすつかりとりこにしておしまひになつたぢアありませんか……つまり妾をよけいに苦しめようつてお考へからだぐらゐのことはいくら妾にだつて……

海上　思ひ過しはおやめなさい！

球子　いいえ、さうですわ、いまになつて過ぎ去つた大昔の……

海上　無論ですとも、だから私は敦子さんの溺れてゐらつしやる處を偶然お救ひ申したと云ふだけで、つまり通りすがりの人間、としてあなた方に左樣ならをしたかつたんです。處がそれですまなくなつたのはどなただつたでせう？

球子　妾が夫に死なれたことを御知りになると急に……

海上　いや、それもまつたく反對ですよ。もし卓爾君が生きてゐたら、僕はもつと輕い氣持で逢へたでせうに……僕にはもう過去つた昔のことは記憶にさへもない位ゐですからね、私はあなたを中心にして、兄弟のやうに親しかつた卓爾君と爭ひつづけるやうになつた、而して破れた。私は負けたんです。がそれもこれもいまとなつちやア、私にこの新生活を生むでくれたそもそもの動機となつてゐるんだから、むしろ感謝したい位ゐにさへ思つてゐるんです。あなたはその意味で私にとつちやア第二の母ですよ、學校を中途で捨てて海へ乘り出していつた、あの時の私は第二の誕生だつたんですよ。

球子　だつてあなたはいまだに……

海上　それも御親切過ぎた誤解と云ふものです。私は未だに獨身です、その代り永遠の青年であることを自負してゐますからね……海は私の戀人でもあるのです、まア、この腕の太さを御らんなさい、力の漲つたこの肉體を……こいつがいまの私にとつちやア唯一のたのみなんですからね。

球子　妾の夫はあの頃から弱う御座いましたわ。

海上　卓爾君は情熱が强かつたんです、それで私に勝つたんです、が、私は……

球子　ね、もう暫時、せめてもう暫く御滯在なさつてゐては下さいませんか。

海上　駄目です、私はゆかなくちやア……もう漁場では海の男たちが、手ぐすねをひいて私の歸りをまつてゐる筈ですからね……

球子　でも、敦子さんだつて可哀想ですわ。

海上　御免蒙りませう、あの方のためぢやアありませんよ。何故あなたは妾がと仰有らないんです、あなたは淋しいんだ、あなたはいつでも何かしら力のある者を欲してゐるんだ、若い頃は情熱にたよつた、だが、今は肉體にた

よらうとなさつてゐる……

球子　まア、そりやひどい御有り様ですわ……せめてもう暫時……

海上　いや御免蒙りませう。

球子　ほんとに、敦子さんのことだつて考へておやりなさらなくちやア……

海上　若い方は夢の樣な戀心をおもちなさるものです、きつと幻滅が來ますよ、まア充分熟れきる日をお待ちになつたらいいでせう、よい機會はこれからですからね……

球子　でも妾は……

海上　まさかにそんな……

（球子よろめくやうに海上の方へ身をよせる。）

（海上おもはずもその手をとらうとするが、ぢきにかるくつき放す。）

海上　いけない、いけない、坊ちやんの眼は卓爾君にそつくりだツ。

球子　え!?

（茂が庭先からのぞいてゐる。）

海上　えあの男がゐてくれたら、反つて私はもつと長居が出來たかもしれない……併し——

球子　まア、待つて下さい……

海上　いや、失禮しませう——坊ちやん！　さやうなら、この地圖は坊ちやんにあげませう、この小父さんのゐる處を母樣に教へて頂きなさい。

（海上立つて急ぎあしに去る。）

（球子力なく追ふ。）

（茂と幸子ヴェランダへ上る。）

（地圖を見てゐる中に茂赤インキの入つた萬年筆が置き忘れられてあるのを見つける。）

茂　ね、幸子さん、一寸あつちを見てゐてね！

幸子　なあぜ？

茂　いいことするのさ……

幸子　さう、いたづらしちやアいやよ……

（幸子向うをむいてゐる。）

（茂、急いで赤インキを腕にぬる。）

幸子　まアだ？

茂　もういいよ！

幸子　あらツ！

茂　これ、血なんだよ、いい？　で、僕、この階段からおちるの、而して痛い痛いツて云ふから、あなたが向うから驅けて來て僕を抱きおこしてくれるのさ……

幸子　ああ、わかつてよ……それからその血を吸つたげるんでせう？

茂　さう、いや？

幸子　ううん。

茂　おやア……

（幸子にヴェランダをおりて庭の奥の植込の處に立つ。）

（茂はわざとらしく大仰にヴェランダの階段からすべりおちる。）

（幸子驚いて驅けよる。）

茂　痛い、痛い、痛いッ。

幸子　あら、血が出てゐるわ！

茂　痛い、痛い。

幸子　吸つたげませうか。

茂　ああ、吸つて、吸つて……

幸子　もつと？　もつと？

茂　あゝ、もつと吸つて、もつと吸つて……もつと吸つて、もつと吸つて……

（球子が出てくる。）

（ぎよつとして仆れさうになる。）

（昂奮しきつて――。）

球子　茂さん！

（二人の子供たちはびつくりして起上る。）

（而して庭前を驅出して去る。）

球子　まあ！

（地圖を破る。）

（萬年筆をとりあげてぢつと見詰めてゐたが力なくおとす。）

（老爺が皮の鞭と犬をつないでおいた鎖とをひきずつて出てくる。）

球子　爺や、お客様をもう一度および申しておくれ、もう一度ぜひお歸り下さいましつて……

（老爺默々として併し不滿さうに去る。）

（敦子がしよんぼりと出てくる。）

球子　敦子さん、あの方はもう戻つちやアいらつしやらないかしら？

敦子　さア、妾にやア判りませんわ……

球子　だつて……

敦子　だつてと仰有つても……

（老爺が戻つてくる。）

球子　どう？

老爺　駄目でやすよ、お客樣は默つていつておしまひになつたでやすよ……

球子　そりや爺やの云ひ樣がわるかつたんぢやない？　妾がいつてくるからいいよ、妾がいつてくるから……

（球子がヴェランダからおりて庭前を急いで去る。）

教子　お姉様！

（教子は追ひとめようとしたが、またぐつたりとなる。）

老爺　ジュリエットの奴、たうとう鎖まで切つていつちまひいやしたよ、鞭のおどし位ゐぢや駄目でやすよ。

教子　お姉様つたら、お姉様つたら……

老爺　どうも陽氣が悪いだね、かうムシムシしちやア、人間だつて畜生だつていいかげんかう頭が狂つて來やすでたア……

（老爺淋しく笑つて去りかける。）

老爺　鎖を切つて逃げやがつた！　鎖でいはひつけといたつて、逃げる時にア逃げるんだ……

（老爺の姿が植込へかくれる。）

（教子しめやかに泣きはじめる。）

（だんだん聲が大きくなる。）

（遠くでまた犬の吠聲。）

（老爺が『畜生！　畜生』と追ひ廻す聲。）

（その聲に追はれてでもしたかの様に、球子が昂奮して、とり亂した態度のまま、庭前から出てくる。）

（立止つて出て來た方をふりかへり、老爺に命じるらしく。）

球子　追つぱらつておしまひ、みんな、みんなジュリエットだつておつぱらつておしまひ……もつとぶつてもつとぶつて……

（鞭の音がする。）

（犬の吠え叫ぶ聲。）

（鞭の音がする。）

（教子の泣聲がだんだん靜る。）

――幕――

# 霧（一幕）

——異境劇の中より——

人物

山川俊吉
中田良一
吉澤封介
村上三郎
西野耕一
今井宏
　いづれも三十歳前後。商業街（シテイー）に在る、山井、山菱、福原なぞの商事會社支店員。
老いたる給仕　英國人
佐藤達夫　富める留學生（廿五歳）
奥さん　と呼ばれる二十九歳の未亡人
室野鐵信　三十五歳の社會學者

舞臺　ロンドン。キヤベンディッシュ・スクエアーに在る、日本人倶樂部の廣間。扉二。一は隣れる圖書室に、他は廊下を經て、食堂、並びに撞球室に通じる。大きな窓正面に二。

山川、中田、吉澤、村上の四人は、一隅の卓を圍んで、ウヰスキイ・ソーダを飲み乍ら、雜談に耽つてゐる。西野一人だけは、ずつと離れた卓によつて、雜誌を讀んでゐる。と、今井が急いで入つて來る。

今井　今晩は！
（西野を除いた一同は「遲いなあ！」「何をしてゐたんだ？」「隨分待つたぜ！」なぞと、くちぐちに浴びせかける。）
今井　失敬々々。杏花樓へ寄つちやつてね。
吉澤　潮月だらう!?
今井　ふむ！　今は昔さ。
西野　厭な奴だなあ！
今井　なんだ、來てゐたのか。
西野　ま、來いよ。
（今井、西野と並んでかける。其處へ給仕が、ウヰスキイ・ソーダを五人分持つて入つて來る。無言の儘、一同に配つて去らうとする。）
今井　I want some whisky-soda, will you?
給仕　All right, sir.（去る）
中田　それからどうしたい？
山川　みじめなものさ。どうせおちついてねられるやうなベッドぢやなし……

今井　なんの話だい？

村上　いや昨夜ね……

西野　まあ聽いてろよ。（と今井を制して、それから低聲で一寸云ひ添へる）

今井　ふ、ふ、ふ、ふ。

山川　いやだなあ――もうよすぜ。

中田　まあ話せよ！　え？

（この間に給仕は、今井の處へ、ウヰスキイ・ソーダを持つて來る。而して直ぐ去る。）

山川　だつて……

村上　いいぢやないか。

山川　おや――で僕は、幾らか摑ませて歸らうとしたんだ。と女の奴、うるさく僕をひきとめてね……

吉澤　ふ、甘く見られたな。

山川　ううむ、處が大違ひさ、聽いてくれと云つて、喋舌りだした話つてえのは、ついこの頃死別れた亭主の事でね……

村上　ふむ、よくある奴さ。だから君は甘いんだ。

山川　そ、そりや僕だつて、こいつ長々と、いつもの身上話をされちやあ耐らない。と、どうだい君！　その死んだ亭主つてえのは、日本人なんだぜ、おい！

村上　へえ、そいつあ面白いね。

山川　さうら見ろ、のりだす癖に、なんでも手腕のあるコックで、ベルジヤムのオステンドへ、夫婦共稼ぎをしてゐたさなかに、急病で、ぽつかり死んぢまつたと云ふんだ。で、こつちへ戻つては來たものの、子供は小さし、末を樂みに、まあこんな稼業を始めちやつたかつてね、ホロホロ泣くんだ。こいつを聽かされて泪れるもんか。

吉澤　うむ、うむ、さうだらうとも。

山川　さ、それだけならまだしもだ。二人が一緒になつた頃、亭主のおふくろから、假令異人だつても倅の嫁だ――つてんで、送つてよこした日本キモノをひきずり出して來るやら、それに添へてあつた金釘流の手紙を讀まされるやつさ。揚句の果が可哀想に、ぐつすりねこんでゐる雜種兒まで、ゆすぶり起すと云ふ始末……

中田　そいつあ……

山川　まるで悔みに出かけていつたも同然。すつかりしめつぽくされちやつてね。

西野　で、何かい君！　結局五ポンドも投げだしたつてんだらう？

山川　あてられた！

（西野と今井、耐へきれぬやうに哄笑する。一同は、けげんな顏付でそつちを見る。）

今井　失敬々々。笑つちやすまないが、そいつあ相不變の

手さ。ウオタアロードの小路、あそこいらへんで、でつくはした代物ぢやないのかい？

山川　（うなづく）

西野　またかと思つたが、きいてたんだよ。

山川　人が悪いね。

西野　慣れないうちは仕方ないさ。僕だつて今井だつて、一遍は通つて來た路なんだ。

今井　素破ぬくなよ、詰らないことを。

（一同哄笑する。而して殘りのウヰスキイをぐつとのみほす。吉澤と村上とは、同じ卓の連中に、球を撞かうと、誘ひながけ乍ら立上る。）

今井　おい、夕刊讀んだかい？（と出す）

西野　ううん。有難う。（と、とつて擴げる）

今井　室野鐵信が退去命令を喰つたぜ！

西野　ほう、佐藤君とよく歩いてゐた。あつ！　これか！ほう、ポリシエヴイストの嫌疑……

（今井の言葉で一同は夕刊を持つた西野の方を見る。吉澤と村上とは扉のところで立止つて。だが西野の言葉が終ると二人は出てゆく。殘つた山川と中田とは低聲に、室野の噂を話しあふ。）

西野　手酷くやられてゐるなあ。

今井　うむ、一週間以内につてんだ。

（沈默が續く。暫時して撞球の音がゆるやかに聽えて來る。）

中田　今井君！

今井　え？

中田　奥さんの立つ時間は決つたのかい？

今井　ああ、明後日の正午。ヴイクトリアだ――いよいよ御別れさ。

中田　淋しくなるなあ。

西野　ふむ、お若い御連中にやあね。（夕刊を卓上へはふる）

今井　やせがまんを云ふなよ。

中田　卑怯な奴だなあ。

西野　（笑ふ）――おやつ！　村上君たちは撞き始めたんだね。

山川　確に淋しくなるね。僕はこつちへ着いた翌くる晩だつたか――ね。（中田に）君につれられてカルタをやりにいつたのがはじめだつたんだぜ。

中田　うむ、だけどほんとの奥さんはあんなものぢやなかつたんだ。あの時分にや、もう御主人が病氣だつたからなあ。

山川　さうだ、あれから一月ばかりで亡つた譯だね。――無論、僕なんかほんとの奥さんを知らないんだが、なん

だか、から、初めて逢つた時、一遍にひきつけられてしまつたよ。

中田　さう云へば君は、あの晩の歸り途、こんなだつたらホーム・シックどこぢやないつて云つたね。

山川　――そんなことを云つたかしら。

今井　ふふむ、恥しがらなくつたつていいよ。誰でもがそれさ。

西野　おい、不思議つてえとをかしくきこえるが、みんながみんな、あんなにひきつけられて押かけていつた癖に、只だの一人だつて積極的に奧さんへ迫らうとした者がなかつたなあ妙だね。

今井　さ、それだよ、まつたく分らないね。恐かつたんだな。

中田　ふ、君でもかい?!

今井　僕あ別口さ。

中田　ぢや何かい? 佐藤君……

西野　うむ、うむ、佐藤君がいつのまにか遊び仲間から外づれていつたなあをかしいね。

今井　さうさ。

中田　確に變だよ。ああ云ふお坊ちやんが、どうかすると(西野に)君の云ふ、積極的に迫らうとする――つまりああして遊びの中心に、奧さんをとりまいてゐるだけぢや耐へられないつてな氣持に動されるかも知れないね。

今井　うむ、純粋だからなあ。ほんきに思ひこんだら、どうしたつてさうなるよ。その癖いざとなつたらしりごみをするだらうがね。

西野　だから遊びから離れちまつたぢやないか。氣の毒に。

今井　そこへゆくと僕達は賢明なものさね。とりあへず、宵の口は奧さんをとりまいて、十時過ぎると、リジエント・ストリイトからピカデリイ・サアカスをおし歩いたつてね。

(一同哄笑する。)

中田　さうやつて御身代りを見たてるなんざあ純粋でなさすぎるよ。

今井　ふ、あさましいこつたが、お互ひ樣さ。

(一同笑ふ。長い間。撞球の音。)

西野　とにかく素晴しい妖婦(ヴアンパイア)だ。あの媚態(コケツト)な容姿(ようす)はどうだい?! 想つただけでも快感があるぢやないか。

今井　さうれ見ろ!

中田　室野の退去命令なんざあ僕達には關係なしさ。だが奧さんの歸つちまふなあ耐らないよ。

(撞球の音。)

西野 （立上る）
今井 撞くか？
西野 うむ（中田や山川に）いかう！
（四人つれだつて去る。暫時して給仕が入つて來る。途端卓上にちらかつた雜類を形づけて去らうとする。室野と佐藤とが入つて來る。給仕無言の儘挨拶をして去らうとする。）
佐藤 Give me two wisky-soda, and one lemon squash, later on, please.
給仕 Yes, sir.（去る）
（奥さんは極めて虔やかに、一隅のソーフアへ腰を下す。室野は窓によりかかつたまま、ぢいつと空模樣を見てゐる。沈默。撞球の音。笑ひ聲がまじつてきこえる。）
室野 また霧ですね。星がぼんやりして來ましたよ。
佐藤 つくづく厭になりますね。
室野 僅か三月かそこらでしたが、ロンドンは住みいいとこぢやありませんね。
佐藤 え――それにあなたは。
室野 いや、そんなことはヌキにしても。
佐藤 ――
室野 僕はこの國を出來る限り愛さうとしたんだけれど、それが反つて、この國から愛されないやうなはめをつくつてしまつた譯ですからね。
佐藤 愛されないどころか、貴方は憎まれたんですもの。このロンドンを、この英國を、貴方は呪ふのがあたりまへですよ。
室野 さ、さうだからと云つて、呪ひもしますまい――、だが愛着は毛頭もてませんね。
佐藤 奥さん！ お元氣をお出しになりませんか？ あつちはなかなか賑やかですね。
奥さん ええ。
佐藤 いつもの連中らしいですよ。
奥さん さうですか。
（この會話の間に室野は卓上の夕刊をとりあげて擴げる。）
佐藤 出てゐませう？
（室野默つてうなづく。奥さんはさぐるやうなまなざして、佐藤を見擧げる。）
佐藤 え、室野さんのことです。
室野 實に無理解な、同情のない記事ですね。君は？
佐藤 もう讀みました。
室野 （奥さんに夕刊を渡す） これで愈々日本へは歸らないことに決まつた譯です。

奥さん　まあ！

室野　厭な國ですね、これぢや日本と變りがないぢやありませんか、まだ惡いかもしれない。こんな國だとは想ひもかけなかつたもんですからね。少くとも日本よりはましだらう位ゐで、とりあへず此處へやつて來た僕の考へ違ひでしたよ。

佐藤　案外昔作らに貴族主義の國ですからね。

室野　貴族主義の國、それで好いんでせう。僕がソフオ・コータアでの、あの秘密會合に、僅か二度や三度出席したと云ふことがいけないんだとすればですね。

佐藤　いや、まつたく大袈裟すぎた、誤解、曲解、無理解からですよ。それに何のための大使館なんでせう？　實際愚劣極る外交振りぢやありませんか。

室野　まあ、さうムキになるにも及ばないことでせう。いや、いまになると、皮肉を云ふ譯ぢやないけれど、海外へ出してくれたことが不思議ですよ。併もかうして、三月かそこらで、今度位ゐの理由で大使館の庇護もなしに退去命令を受けるとなるとですね。

佐藤　これで貴方が日本にお歸りなさらないとすると體よく日本から國外追放をうけたも同然な結果になる譯ぢやありませんか。

室野　ま、ええ、さうですとも。

奥さん　どうしても御歸りにはなりませんの？

室野　厭ですね。それに歸らうとしたつてこのままぢや歸れませんよ。歸つたらきつと壓迫がひどいでせうし。それに歸らないことが眞實でもあるでせうしね。

奥さん　でも——。

室野　いや、奥さん、とにかくパリまではおともをいたしませう。併しそれから——どうせもうかうなれば、宿願通りドイツからロシア入りです。アメリカへと思はぬでもありませんが、いま恰度先輩の仲山達がマスクワにゐますし。

奥さん　でも、お國の奥さんや、お子さん達が御心配なさいますわ。御可哀さうぢや御座いませんか。

室野　それも據處ありません。もういまとなれば世界人としての眞實の自分を築くより外に生きる道はありませんからね。

奥さん　犧牲をお出しになつてもで御座いますか？

室野　犧牲、さあ、妻子は少くとも犧牲とならずにすむでせう。——苦しむことが犧牲だとばかりは考へられませんからね。僕も苦しむのです。誰も彼もが苦しむべきなんです。

佐藤　僕にはよく分つてゐます。併しあなたはほんたうにさうした放浪の生活に耐へられるやうな頑健なお身體で

もありませんからね。それが僕は氣になるんです。

室野　ありがたう。どうにでもして耐へてゆきませう。僕にはいま無限の希望と野心とが燃えたつてゐるんです。いままでの僕はあんまり神妙すぎたとさへ思はれます。日本にゐた時でも、只だ小原研究所の一學究生に過ぎなかつた。それをとやかく危險人物に拵へあげてしまつたのは一體誰の所爲だつたでせう。こつちに來てからだつて君も知つての通り尙更のことです。それが僅かあのこと位ゐで。もう僕にはこの上自分を僞つてゐる事は出來ませんからね。

（沈默。撞球の音。笑ひ聲。給仕が註文の飲物をもつて入つて來る。佐藤 "Put it there." と云ふ。給仕叮嚀にそれを卓上に並べ會釋して去る。佐藤はそれを室野と奧さんとにすすめる。が、奧さんは淋しさうに顏をうなだれてゐる。）

佐藤　どうかなさいましたか？

奧さん　いいえ。

室野　御氣分でも御わるいんぢやありませんか？

奧さん　いいえ――え、頂きますわ。（レモン・スカッシをとる）

室野　明後日の正午と――君！　タイム・テーブルを持ち合せてゐませんか？

佐藤　生憎――あ、隣室に……

室野　さう、ガイド・ブックがありましたね。尙いいんですよ、一寸失禮。（圖書室へと去る）

佐藤　奧さん。

奧さん　え。

佐藤　この頃急に御變りになりましたね。

奧さん　どなたも――皆樣がさう仰有いますわ。

佐藤　さうでせうね。御主人がお逝りなさつてからのあなた、いまの奧さんを僕なんかにはとても豫想さへ出來ませんでしたからね。

奧さん　――（淋しくうなづく）

（室野ガイド・ブックをくりひろげ乍ら戻つて來て、一隅の卓により熱心に見はじめる。）

奧さん　はじめの間、あんなに妾をしたつて下さつたあなたが、急に遠のいておしまひになりましたわね――妾を輕蔑なさつたんでせう？

佐藤　まさかそんなことはありませんよ。

奧さん　さうまで御感じにならなくとも、妾を――眞實の妾を理解して下さらうとはなさいませんでしたわね。

佐藤　何故でせう？　どうしてそんなことを御訊きになるんです？

奧さん　妾をどうお考へになりまして？　ね、是非きかし

て下さいましな。

佐藤　どうつて仰有つても、困りますね。

（白けた沈默。室野ガイド・ブックを閉じる。）

室野　御話中失禮ですが――僕はいつも佐藤君から奧さんのお噂さを伺つてゐまして――些しのおつきあひもなかつたんですから、こんなことを申上げるのはほんとに失禮なんですけれど……

奧さん　御遠慮なさらないで、どうぞ。妾かまひませんの、ぜひ伺はせて頂きたいので御座いますわ。

室野　いや、ほんとに失禮な申分なんですが――奧さんはとかく誤解されがちなお方のやうに想像されたんです。併しかうしてこの頃のやうに幾度か御目にかかつておつきあひして見ると全然反對のあなたをおしり申した譯なんです。

佐藤　あ、その誤解されがちつて仰有るのは――さあ何てつたらいいか――とにかく奧さんはあの遊びの集りでは女王だつたんです。而してあなたを中心としてゐたあの集りに入つてゐると遠い外國へ來てゐて、お互ひがまつたく孤獨でゐることだの、またそれから感じる寂寥だのつてことをすつかり忘れてゐることが出來たもんです。このことは僕達――少くとも僕にとつては實に有難かつたんです。併しさうした一面に――一寸云ひ憎いんですが――

奧さん　ええ、妾の……

佐藤　え――（默る）

奧さん　妾が人妻であり乍ら、また夫の地位と云ふやうなことを、あんまり考へなしに振舞つたのがいけないと仰有るのでせう？――それから、譬へば集つてゐらつしやつた、あなた方の心を、ひとつひとつ掴んで、手遊（おもちや）にでもしてゐるやうな――それがいけなかつたと仰有るのでせう？

佐藤　え――まあ――。

奧さん　皆さんは蔭で、妾の事を、妖婦（バムパイヤ）たの、媚態（コケツト）なようすがどうのと、よく問題になつたのですつてね??

佐藤　さ、そんなことは知りませんけど――僕はあの遊びの集りから離れることが實際何より辛かつたのです。みんなと一緒に、奧さんをとりまいて、カルタや踊りに夜を更すことは、樂しいことに相違なかつたんですもの。併し僕には、それがどうしても出來なくなつてしまつたのです。

奧さん　何故でせう？　どうなすつて？

佐藤　僕には――變な云ひ方かもしれませんが、その樂みが、いつの間にか何とも云へず苦しくなつて來たのです。

奧さん　まあ！

佐藤　奥さんが――

奥さん　妾が？

佐藤　――恐かつたんです。

奥さん　――。

佐藤　いいえ、眞實なんです。みんなは奥さんに屈從してゆきましたね。奥さんの靴のひもがほどけた時なんか、三人も四人もがそれを結ばうと爭つたことさへありましたね。

奥さん　まあ！　あれはみなさんの御戯談だつたんですわ。

佐藤　そんなことはありませんよ。一生懸命だつたんですよ。併し僕にはそれが出來なかつたんです。さう云ふ時の仲間入りだけはどうしても出來なかつたんです。而して僕は――奥さんから離れてからずつと、獨りで苦しんでゐたんです。

奥さん（始めて、ある淡い衝動を感じて、無言のまま、急に眼をおとす）

（白けた、長い沈默。）

室野　君は若過ぎたのさ。世間を知らなすぎたんですよ。ね奥さん！　さうお考へになりませんか？

（白けた、長い沈默。）

佐藤　御氣に障つたら御免下さい。

奥さん　ま、いいえ――いままで妾は、あなたが只だ主人の氣持をかねてゐらつしやつたのだとばかり思つて居りましたわ。主人は妾のかるはずみらしい、ああしたことを段々氣にするやうになつてまゐりましたものね――而してもうその時は、妾にもあの集りからぬけて好い時がまゐつたのですわ。

室野　何故なのです？

奥さん　妾がしてまゐつたことは罪だつたでせうか？　ほんとにいけないことだつたのでせうか？

佐藤　奥さん、奥さん、どうなさつたのです？

奥さん　もしきいて頂けますならば……

室野　ええ、ええ。伺つてよろしいことならば――どうぞ。

奥さん　御迷惑かも存じませんが――今夜こそあなた方にだけきいて頂きますわ。

佐藤　え――

奥さん　その代り、妾が此處を立つてしまひますまで、このことは、どなたにも仰有らないで下さいましね。

佐藤　ええ。

奥さん　もともと妾の結婚生活は幸福に終る筈はなかつたんですけど――結婚いたしてからもう九年目、こちらへ參りましてから滿五年にもなりますのに、その間中、夫の心を、ほんたうに確りと自分のものにすることが出來

たと云ふやうなことは只の一度もなくて過ぎてまゐりましたの。廿歳以上も夫と年の違ふこと、それからしてもかうなることがあたりまへだつたのかも知れませんわね。でもこつちへ參つてからは何と申しても夫より外にたよるものはなかつたので御座いますのに、その夫がいつとはなしたよりなく思はれて來ましたの。

室野　失禮ですが、御主人には、あなたが嫉妬を御感じなさるやうな事實でもおありになつたんですか？

奥さん　ま、いいえ、どういたしまして。もしもそんなでしたら、何もかうまで氣に病むことはいらなかつたんですけど。

室野　お子さんがおありなさらなかつたことなんかも……

奥さん　さ、それも理由の一つだつたかも知れませんわね――ですけど妾にして見れば、結婚の當座、自分を人形のやうに扱つて、その上盲目的に愛してくれた夫に、慣れすぎたせゐもあつたでせうし――また何よりの原因は、こちらにまゐつてからの二人の生活が、あんまり單調すぎて淋しかつたからでもありませうか。それに、主人は事業に沒頭してゆきますと、恐ろしいほど熱中するたちなのですもの、單調ないまの生活に、この上夫が倦いてでも來たらと考へ出しますと、自分がいまにも老い朽ちてゆくやうな淋しい氣持になるんですの。

佐藤　併し奥さん、眞實に信じあつておいでだつたら、そんな御心配はいらないでせう？

奥さん　え、それはもうさうなんですけれど、さうかうしてゐます中に、單調な、只だ無事なさうした生活だけでは、夫の心が、夫婦の生活がまるで信せられなくなつて來たのですわ。而して夫がこの生活に倦きぬいたと云ふ日が來たら、妾ひとりがとり殘されさうな心細い氣にもなつたんですわ。いまになつて想ひますと、妾には夫よりもずつと力があり、若さも、美しさもあり乍ら、この時だけは夫に負けてゐたんでしたわね。そこで妾は考へましたの。どんな手段でも、どんな方法でもよいから、單調な二人の生活を、もつと複雜にもつと生々とさせたかつたんですの。むろんいまの妾が新婚當座の生活に戻りたいなどと思つたのでは御座いませんのよ――それから妾は若い方達との御つきあひを始めましたの。そりや妖婦のやうにも、また無理にも媚かしさを裝つてゐたやうに、さぞ見えたで御座いませうね。それもこれも、みんなさうした形ばかりのことを主人に見せつけて、主人から嫉妬され・批難されるのをまつてゐましたの。主人は譯もなく感情を刺撃されましたわ。而して主人の愛情は煽られた火のやうにまた生々としてまゐりましたの。妾はやつと九年目に夫の心を眞實に掴むことが出來たや

うな氣がされましたわ。而していよいよああしたあそびを夫にしむけて見せましたの。

佐藤　そりや奥さん、あんまり御主人に對して慘酷ななさりやうぢやありませんか？

奥さん　さうでせうかしら？　それを妾はお伺ひしたいのですわ。妾としての妾が、この場合、二人の生活をお互ひに倦かさないためには、これより外にとる途がなかつたのですものね。

佐藤　ぢや——奥さんのなさつたことは、あなた御自身にとつては、この上もなく眞劍な問題を解かうとなさるための方便だつたと仰有るんですね？

奥さん　ええ——もしかう云ふことが申せますなら、主人（たく）はむろんのこと、あなた方から御覽下さつて、人妻として不貞な行ゐだと想はれがちなことも、眞實は何よりも貞操的な動機からおこつた行ひだつたと見て頂きたいのですわ。

室野　さあ——それが……

奥さん　どうぞ御遠慮なさらないで仰有つて下さいましな。御信じ下さらなくとも妾はかまひませんの。

（沈默。）

奥さん　でも、たうとう主人（たく）にはそのことを觀破られてしまひましたわ。而して亡りますときに、主人（たく）はそのことをはつきりと申しましたの。

佐藤　さう仰有れば、御主人がお逝りになる一寸前、僕が御見舞に上つた時、『私は實に幸福な夫として生きることが出來た。それもみんな、あの貞淑な妻のおかげだ』と殊更に仰有いましたが……

奥さん　え——妾も似たやうなことを申されましたわ。かうして亡られて見ますと、いまの言葉を思ふにつけても、此處に居ることが長びけば長びくほど、よくないことのやうにも考へられましてね。

佐藤　と仰有ると？

奥さん　御氣にさへないで下さいましね。妾のいままでしてまゐつたことは、夫があればまだしも、またいま申上げたやうな理由からこそ許されもしませうが、いまではもう、やもめとしての餘生のほかには何一つ殘されては居らぬ身なんですもの、いままで妾と遊んで下さつた方達からの復讐が恐ろしう御座いますわ。

佐藤　復讐ですつて？

奥さん　ええ——人妻でない女として、妾がですのよ……御分りになりまして？

（一同沈默。これ以前、いつか撞球の音止む。而して扉の外を通り過ぎる足音。ふと扉が開く。）

今井　（扉の外から奥さんを認める）今晩は！

奥さん　今晩は！
（今井の背後から、中田、西野、その他の連中が入つて來る。而して奥さんや佐藤と挨拶を交し、室野にも默禮する。）
今井　何時からゐらつしやつてらしたんです？
奥さん　先程から――。
西野　霧がひどくなりさうですが、もう御歸りなら御送りいたしませうか？　佐藤君！　一緒に歸りませんか？
佐藤　ええ――。
奥さん　あの、もう暫時――。
今井　おや――。
（一同一寸顔を見合せて無言の會話を交した末『お先きへ……』と口々に云つて、それからうちそろつて出てゆく。暫時沈默が續く。室野立つて窓際へゆく。）
室野　こりや、深くなりさうだ。
佐藤　奥さん！　よく分りました。――ぢや僕が、かりにもあなたの行爲を蔑んだやうにおとりになつたとき、反つて僕の輕薄な考へを、可笑しくお思ひになつたでせうね？
奥さん　いいえ――まあそれどころぢや御座いませんわ。反つて妾を愛して下さればこそ……
佐藤　（眼を擧げて奥さんを見る）
奥さん　と、申していけなければ、妾に御好意を持つてゐて下さつたればこそ、妾の挨拶を氣にして頂けたんだと、いまになれば御禮さへ申しあげたく思ひますわ。妾を取巻いてゐらつしやつたあの方達には、どれだけ眞實の愛が御分りになつておいでだつたでせう？　妾は、主人以外には、あなたの妾にとつて下さつたことこそ、眞實の愛から生れたなさりかただと思はれますわ。
佐藤　え――でも。でも僕の心持には、申上げにくい不純なものがあつたんです。それに……
奥さん　ああどうぞ、もう何も仰有らないで下さいましね！　この上伺ひたくありませんわ。妾は何もかもよく存じて居りますの。而してそれだけに、この際どなたからの御別れをも受けたくはなかつたんですけれど、今夜だけは、あなたからのだけは、快くお受けすることにしたんですからね。分つて下さいまして？
佐藤　ええ、では、もう何も申しますまい。
（沈默。）
室野　霧が深くなつて來ましたよ。急いで歸らうぢやありませんか。うつかりしてゐて、タキシーでも止まると大變ですから。ね君、奥さんをお送りして――。
佐藤　ええ――（立たうとする）
室野　いや！（手で制して、呼鈴を押す）

（給仕出て來る。）

給仕　Yes, sir.

室野　Get me taxi , please.

給仕　All right , sir.（去る）

室野　（ガイド・ブックをくり乍ら呟く）明後日(あさつて)の正午と……。

佐藤　ドウバアが二時半頃、カレイが三時半少し過ぎですね？

室野　え、ええ――三時四十五分……で列車が四時十五分に出ると、パリは夜の八時、大變都合がいいですね。

佐藤　明後日(あさつて)の晩はパリですか！

室野　（ガイド・ブックを置いて）奥さん御一緒に、いさぎよく明後日(あさつて)の正午にはこのロンドンを立ちませう。

奥さん　ええ――何分よろしく。

室野　あなたが遺骨を抱いて母國へ歸つてゆかれる、また僕が追はれて放浪の旅人となる、それは全く違つたものに見えるでせう。併し奥さん、いまのあなたは人妻として、御主人の愛の總べてを、その方の一生を通じて最後にかちえた勝利者です。僕も亦、或は追はれると云ふこと、それが反つて眞實の意味からは大きな勝利を與へられたんだと云ふことになるかもしれません。いまは、あなたにとつても、また僕にとつても、この霧に包まれたロンドンは、住みよい處ではなくなつた筈です。不愉快な、この厚ぼつたい霧の膜をうちやぶつて、此處を去ること、それには何の愛着が殘されるでせう？　ね、さうぢやありませんか？

奥さん　さう仰有つて頂けると心强う御座いますわ。それに、ふいつてパリまでも御伴が出來ますれば――どうぞ何分よろしく。

佐藤　（室野に）羨やましいと思ひます。あなたにはこれから死を賭しても殉じてゆかうとする、立派な主義が確立されてゐるし、（奥さんに）あなたはまた思ひの儘の愛に生きることが出來たと云ふよろこびをもつてゐらつしやる。だが僕はどうでせう？　未だに殉ずべき主義を奉ずるでもなければ、また今日までの僕にとつて、愛の生活とも云へるものは……只だ徒らな煩ひのみに過ぎなかつたんです。

室野　いいや、そんな、力を落すことはありませんよ。君はまだ若い、富もあれば學識もこれから深まつてゆくばかりの方ぢやありませんか。まだまだこれからの摸索時代は長いかもしれない。恰度この厚ぼつたい霧に包まれてゐるやうな時代ですよ。併しその中には、さうだ、きつとその中には何か一つ確りと摑む時が來るでせう。

佐藤　摸索時代！

給仕　（扉口から）　Taxi ready, sir.（去る）

室野　ぢや。（立つ）

（奥さん、而して佐藤も立上る。）

佐藤　（一寸躊躇したが）　大變失禮ですけれど——僕は——どうかあなた奥さんをお送して下さいませんか?!

奥さん　ぢや、あなたは?

佐藤　僕?　僕ですか?

奥さん　ええ。（窓から外を見て）　まあ深くなりましたわね。急がないといけませんわね。

佐藤　僕を獨りにして下さいませんか、もう少しの間。

室野　何故?——どうかしたんですか?

佐藤　え——いいえ。どうも。少し酒でものんで、霧の中を歩いて見たいんです。どこまででも。ゆけなくなるまで。

室野　詰らない——さ、一緒にゆきませう。

奥さん　ね、そんなこと仰有らずに。

佐藤　大變勝手ですけど、どうぞ。

奥さん　まあ!　どうかしてゐらつしやる。

室野　ぢや——酒でものんで、それからやつぱりタキシーでなるたけ早く歸ることにしたまへ。なに、まだ大丈夫ですとも。（一寸窓から外を見る）

佐藤　ええ、ぢや——奥さん!　室野さん!　僕を忘れないでゐて下さいね。

室野　無論。君はすつかり滅入つちやひましたね、いけないなあ、元氣をお出しなさい。僕は今夜の別れの晩餐を、心から感謝しますよ。

奥さん　どうも今晩は有難う御座いました。また明日も明後日もおめにかかれますわね。

佐藤　ええ、御機嫌よう!

室野　ぢや——また明日。さやうなら。

奥さん　御機嫌よう!

（二人は連立つて去る。佐藤は扉口まで送つてぢいつと見送る。それから急いで呼鈴をやけに押す。給仕慌てて入つて來る。）

佐藤　Another wi ky-soda. Make hurry, will you?（と少しぢれつたさうに云ふ）

給仕　（極めて冷やかに）I'm sorry, sir, bar closed, sir.

佐藤　Closed?（時計をちらりと見て、據處なくうなづく）——Heavy foggy?

給仕　Yes, rather, sir.

（給仕は卓上を形づけかかる。佐藤は獨りとり殘されたやうな淋しさを急にひしひしと感じる。窓際へ急いてより窓を押開ける。外には霧がふかぶかとたちこめてゐる。）

佐藤　奥さん！　奥さん！（と下に止つてゐるタキシーを呼ぶ、とたんに自動車爆音をたてはじめる）　Hallo! Sheaffer; make stop just a minute.

（それにかまはず執り出した自動車の音はだんだん遠ざかる。佐藤暫時淋しさうにしよんぼり佇んでゐる。

給仕上眼てちらりと佐藤を見る。）

佐藤（空元氣らしく）Well, I'll go. Good night, George.

（扉の方へゆきかける）

給仕　Want you taxi, sir?

佐藤（ぶあいさうに）No, thanks.

給仕　But it's too late, and cold, sir.

佐藤（少しうるさいので怒つたらしく）Never mind, I'll walk.（と云つてから、氣にかかるやうにまた窓のところへ戻つて、外をぢつと見る。）

（給仕は默つて、卓上のものを形づけ終ると、とぼとぼと出てゆきかける。）

佐藤（たちこめて來る霧を見つめてゐるといよいよ涙ぐましくなつて來る。それをぢつと耐へ乍ら小詩篇をくちづさむやうに獨ごつ）I'm a solitary, and so lonely.

給仕（ぐるつと振返りて、皮肉に、また憐れむやうに微笑を泛べ乍ら）Solitary? Lonely?（とつぶやき返す、而してまたとぼとぼと去りかける）

佐藤（むつとして、いま扉から消え去らうとしてゐる給仕の背後へ浴びせかけるやうに、大聲な日本語で）さうさう俺は獨りぼつちなんだ。だから俺は淋しいんだ――（とやけに怒鳴つたが、いつか訴へるやうな、而して甘えるやうな氣持になつて）だから――あ、俺は――俺は――（と泣聲になると、そのままソーフアへよろめくやうに身を投げて無言に泣出す。給仕は再び扉の外から、おづおづと、この狀を振返り見る）

――急に　幕――

（大正十二年九月）

# 曉の死（一幕）

人物

松山重藏　燈臺官吏
たつ　後妻
みよ　たつの連子
山田鐵次　たつの先夫、水夫

舞臺　峡灣に浮ぶ小さな島。その絶端に燈臺官舍内部。

初秋。曉近い頃。

（三人は寢てゐる。長い間。峡灣からは、汽船の警笛が、斷續して聽えて來る。）

重藏　おい！　おい！

たつ　は、はは、はい。（眼を覺して、ふかい吐息をする）

重藏　厭な夢でも見たのかい？

たつ　え――いいえ。

重藏　息苦しさうだつたよ――あ、まだ鳴つてゐる……

たつ　――何時ですかしら？

重藏　も――三時だよ、ぢき夜が明ける。

たつ　ずつと鳴りづめなんですか？

重藏　さあ――ねこんでしまつたからわからないが――さうかもしれない。どれ。（起上る）

（重藏は、燈臺への階段口へと去る。たつは吐息をして、それからみよに搔卷をかけてやり、立つて窓を細目にあける。遠く港の灯が見える。燈臺からの光りが、ふりこぼれてゐる。ぢいつと外を見つめてゐる。重藏が戻つて來る。）

重藏　なに、なんでもあるもんか、また……（急に默つて、寢床へ入る。間）ねたらどうだい？

たつ　え――あなた！

重藏　え?!

たつ　船から身を投げた人でもあつたんぢやないでせうかね？

重藏　うむ。

たつ　でもなけりや……

重藏　うむ――さうかもしれない。

たつ　（ふかい吐息。長い間。涙を啜る）

重藏　（わざと氣づかないやうに）まだねないのかい？

たつ　（ぢいつと悲みを耐へてゐる）

重藏　今夜は變だよ――何だか厭な晩だね。

たつ　（思はず泣聲を洩す）

重藏　チエッ、困るなあ！　またか！
たつ　（忍び音に泣く）
重藏　過ぎ去つたことを、考へるんぢやないと、あれほど云つてあるのに、え？　秋が來るといつもさうだ。
たつ　――え――もう十五年にもなりますわね。（みよを顧みて）これが三つの時でしたから……
重藏　もういいよ――あの時お前達親子は、一度死んだ人間なんだ。それが俺と一緒になつて、新しく生れついたんぢやないか――死んだ人間が、昔のことを憶ひ出してゐる筈はないんだ。
たつ　でも……
重藏　ぢや何かい……
たつ　まあ、また……
重藏　ああまでして、母子身を投げなければならなかつた時から見たら、この暮しが、どんなに幸福たかつてこと位、お前だつても、わかつてくれてる筈ぢやないか?! 秋が來た、そして今夜のやうに――そりやあの笛は、船から身投げをした人間でもあつてのことだらうが、そのたび昔のことを、厭なことを憶ひだされると、實に俺は耐らないんだ。
たつ　すみません。妾はいまの暮しが、幸福であればあるだけ、それに慣れるのが勿體ないやうで、どうしたつてあの時の、苦しかつたはめを忘れられはしませんわ。
重藏　そりやさうかもしれない――大きい聲を出したりして、俺がわるかつたよ――だが、みよは何も知らない子なんだからね、あれの小さい心にだけは、そんなことを知らせたくない……こりやお前からして云ひだしたことぢやないか、え？――あれはよくねてゐるかい？
たつ　え――
重藏　さあおやすみ、まだ夜氣が入りすぎるよ。そこをしめとくれ。
たつ　ええ（戸をしめかけて）おやつ！
重藏　どうした？
たつ　人――人ぢやありませんか？　あれ？
重藏　え〻？（起きて）何が？（窓による）
たつ　あれですよ、ほら、下のきりぎしを、這ふやうにして上つて來る、白い、ほら、あの白いもの。
重藏　う？　どれ？
たつ　あつ！　いまは止つてゐますわ、ですけど、さつきから見ると、十五六間も動いてゐますわ。
重藏　ふうむ！　ぢつとしてゐるね。動かない――
たつ　な、なんでせうね？
重藏　なに、なんでもあるもんか――さ、ねよう、ねよう。
たつ　ぢつとしてゐますわね――人、たしかに人の様です

わ。
重藏　なんだつていま時分あんなとこに――犬かなんかだらう、馬鹿々々しい。
（重藏はねてしまふ。たつはぢいつとみまもつてゐたが、戸を靜にしめてねる。長い間）
たつ　あなた！
重藏　なんだ？
たつ　みよは松木の淸さんと、心から想ひあつてゐるらしいんですよ。
重藏　どうして？
たつ　昨夜でしたわ、あれの机の上に『島の處女』つて云ふ小說がおいてあるんでせう?!
重藏　ふうむ……
たつ　……その書物に、淸さんからの手紙が挾まつてゐましたがね……
重藏　お前は見たのか？
たつ　ええ。
重藏　それで……？
たつ　二人はすつかり約束をしてゐるらしいんですよ。
重藏　それだけだらうか？
たつ　ええ――まさかそれ以上、どうかうつて譯はね……
重藏　若い者達だ、隨意にしてやるも好いが、度を過されては困る――お前も氣をつけてくれないといけないよ。
たつ　むかうの親御さんの御考へだつて、いま一應は、確めて見なければなりませんしね。
重藏　む、向うぢや、もう嫁に貰つたも同樣のつもりか何かで、あんなにしてくれるんだらうが――まだ、からきし子供だからな。
たつ　――あなた！
重藏　う？
たつ　――ほんとに妾がいけませんでしたわね、何も知らないみよのためにも、昔のことを憶ひ出すなんて……
重藏　さうさ、お前と俺とさへ忘れてゐれば、誰だつて、みよがお前の連子だの、あのとき身を投げた母子がお前達で、夜釣に出てゐた俺に救はれて一緖になつたのだとおもふものか、あれから十五年もたつてはゐるし、島へ來てからだつてもう十三年にもなるんだ。
たつ　え、さう、さうでしたわね。
（長い間。戸を急にはげしく叩く音。波の音。長い間。）
たつ　はい、はい、はい、あなた！　あなた！
重藏　う？
たつ　誰？　誰でせう？　ね？
重藏　誰？　あつ！　戸を叩いてゐるな。（起きる）いま時

分——をかしいな。(たつ上る)
たつ　氣をつけて下さい、あなた、うつかりあけられませんよ。
重藏　む、大丈夫だ——どなた？　どなたです？
外の聲　助けて下さい——救けて下さい、水に溺れたものなんです、助けて下さい……
重藏　水に溺れたものだつて云つてるぞ！　(土間へおりる)
外の聲　助けて下さい！　助けて下さい！　(と云ひ續ける)
たつ　男ですか？　女でせうか？
重藏　男らしい……火、火をたきつけるんだ、みよも起せ(戸をあけ乍ら)　しつかりなさい、しつかりなさい、いまあけたげる……えつ！　澁い戸だ！
(たつはみよを急いでおこして、すぐ火をたきつける。重藏が戸を押開けると、ころがるやうに、山田鐵次が入つて來る。)
重藏　し、しつかり！　さ、しつかりなさい。
(重藏は、ぐつたりしてゐる鐵次を抱きよせて、水を吐かせたり、濡れた肌シャツをとつてやつたり、ズボンを脱がせたりする。)
重藏　おい！　とてらだ、どてらをおかし、さ、火が燃えついたら、こつちへよこすんだ。
(たつとみよとは、『はい、はい』と答へて、みよはどてらを持つて來る。重藏はとつて、それを鐵次に被せてやる。その間にみよは、火をもつて來て、ゐろりへ入れる。たきそへた粗朶が燃え上る。)
重藏　さ、さあ、こつちへおより、そして温るんだ。
鐵次　あ、ありがたう御座います。ありがたう御座います。
重藏　まあ、まあ、默つて、お禮なんざあ……まあ(抱へてやつて)　氣分はわるくないかね？　水はすつかり吐いたね？　殘つてゐる氣はしないかね？
鐵次　え、ありがたう御座います。水はのんでもゐませんから——ああ、氣がせい／＼しましたよ。
重藏　溺れたと云ひなさつたが、泳ぎを知つてゐて、助かりなさつたんだね？
鐵次　泳ぎ?!——ええ——私は船乘なもんですから。
重藏　おや——船から……
鐵次　船？　いいえ滅想な。
重藏　滅想なつて——をかしいね——船から身を投げたか、それとも船脱けでもしなさつたか、どつちかなんだらう？
鐵次　いいえ、いいえ——つい醉つぱらつてゐ、ゐたもんだから、棧橋からおつこつたんでさあ、醉つた勢ひで、

何くそつてんで、本船めがけて泳ぎだしたものの、そのうち、たうとう溺れかかつたもんだから……

重藏　大分おちついて來なさつたやうだね。タバコを一本・どうだね？　のまないかね？

鐵次　ありがたう御座います。（貰ふ）

重藏　酒が好きなんだね、少し飲ろといいもんだ。（奥へ）おい、泡盛とコップを持つといで。

（みよコップを盆にのせ、泡盛の瓶を提げて來る。置いてすぐ去る。）

重藏　腹が空いてるだらうね。いま雜炊が煮えるだらうから――ま、一杯おやり、ぐつとおやり、身體が寒かあないかね？

鐵次　ありがたう御座います、ありがたう御座います。（受けてぐつとのむ）

重藏　あの汽笛は何だらうね？　ずつと鳴りつづけなんだが……

鐵次　あれ、あれですか？――知りませんなあ。

重藏　――お前さん！

鐵次　え？

重藏　疑ふ譯ぢやないが、船で何か、間違ひごとでもしでかしなさつての身投げか、船脱けぢやないのかね？

鐵次　そ、そんなこたありませんよ。そ、そんなこたあ……

重藏　お前さん！　ふるへてゐなさるね？

鐵次　さ、寒いんでさあ。

重藏　何もかくさないで、え、話しておくれでないか、氣にすることはないんだから。

鐵次　かくすたつて、かくさないたつて……

（白けた長い間。）

重藏　（奥へ）　雜炊はまだかい？

（白けた長い間。）

鐵次　――實は、死なうとして死にきれなかつたんでさあ。苦しくなつて來ると、つい泳いぢまつたんだね。それから、ここの灯が見えたんでさあ――燈臺の灯が、かう、惚れた女の顔見てえになつかしく想はれてね。

重藏　船の人だね――みんなさう想つてゐてくれるらしい。

鐵次　えへへ……この年をして、船乘に身を持崩した人間にや、人の情つてものが種切れなんでさあ……だからこ、この灯を見たとき、ここへさへ來たら、こちら様に救つてさへ頂けたら、涙の出るほど有難い氣がされやうも知れないつて思ひましてね……死ぬことが恐かつたの、厭になつたのと云ふよりや、苦しまぎれに泳ぎだすと、一杯の酒が、一杯の飯が、のんだり喰つたりして見たくなつたんでさあ……空つ腹で、寒さにふるへて、このまま

死んでゆくなあ、あんまりみじめすぎると思ふと……
(涙をのむ)

重藏　わかるよ、わかるよ、それが誰たつて、生きてゐたいつてえ證據だアね。

鐵次　生きてゐたい?!（泣く）私だつて——そりや心から死んだ方がいいつて譯はありやしないんだ。（泣く）

重藏　もつともだよ、もつともだよ。俺はこの島へ來てからもう十三年、それまでは、この港の方にゐたが、昔から釣が好きでね、夜釣にもよく出たもんだが——而して十人から人を救つてゐるよ。溺れた人、身を投げた人つて具合にね　ただ身投げにかぎつて、きつと殺してくれ、死なせてくれつて云ふ人ばかりだつた。それも、これも、みんな一時の昂奮からだらうが、俺にはどうしても、それが眞實の心からだとは思へなかつたんだよ……

たつ　（奥から）雜炊が出來ましたよ。

重藏　こつちへおよこし、さ、泡盛をもう一杯どうだね?

鐵次　へえ。

重藏　元氣を出して……（泡盛を酌ぐ）

たつ　（奥で）これを運んでおくれ!　どんな人だい?

みよ　恐ろしい人ですわ。

（みよ雜炊を持つて出る。その間にたつは、別の鍋を火にかける。）

重藏　さあ、どうだね、靜に、少し宛啜るんだよ。

鐵次　ありがたう御座います。（茶碗を双手に頂くやうにして啜りだす）
（側にみよが給仕をしてゐる。）

重藏　あれ、あそこにかかつてゐる、額が見えるかね?

鐵次　ええ——。

重藏　あれが、難破した船の人や、身を投げた人を救つたときの褒狀さ——みんな苦しい道を歩いて來た人達ばかりだつたよ。死ぬつてことになるまでは、なまやさしいこつちやないからね。

鐵次　（暫時默つて、雜炊を啜つてゐたが）お孃さんですかい?

重藏　一人娘でね。

鐵次　いくつにおなんなさるんです?

重藏　十八。

鐵次　十八?——恰度これ位ゐかな……

重藏　お前さんにも、娘さんがあんなさるのかい?

鐵次　いまぢやありませんよ。

重藏　すると——前にあんなすつたのかね?

鐵次　昔、ずつと昔のことですよ。女房もありや、子もあつたてえ、人並の暮しをしてゐたなあ——あ、憶ひ出しちやあならない、ならないと想ひ乍らも、つい考へ出さ

れましてね。
重藏　どうしてまた——え？　別れでもしなさつたのかね？
鐵次　こつちが罪を作つたんでさあ、す、捨てたんでさあ。いまさらどんな報いをうけたつて、いなやは云へませんやね、商賣で四苦八苦の揚句の果が、身の詰りつて譯でね……
重藏　だがいまぢや、捨てた女房子のことを、戀しくでもおもひなさるかね？
鐵次　おもへた義理ぢやありませんか——と云つて、年齢ですよ、すまない〳〵といまになつて、涙をこぼすときがありますさ、何處かで生きてゐてくれたにしろ、いまになつて、先の亭主だ、娘の親だと、名告りも出來ないこの身ぢや、おもふばかりでどうにも仕樣がありませんがね、せめては幸福といかないまでも、普通の暮しでもいい、無事だとだけでも知れてくれたら、この氣が休まりもしませうがね……（涙聲になる）
重藏　無理もない——と云つて、お前さんのしたことは、世間にためしのあることだよ。夫に捨てられた若い女房さんが、殘された子供を抱へて、生きてもゆかれず身を投げた、そんな話も度々のことさ——俺もさうした人達を救つたことだつて二度三度あるがね……

たつ（ふとこの話をききつけて、びつくりする）
みよ（無心に）その人達は、それからどうなつたんです？
たつ（奥から押止めるやうに）みよ！（と呼ぶ）
みよ　はい。（立つて奥へゆく）
鐵次（みよと呼ばれた聲をきいて、ぎよつとする。而してぢいつとあとを見送る。それから暗い顔になる）
重藏　——どれもこれもが似たやうなはめからさ。
鐵次（うなだれて）旦那……そ、そんな、話はもうやめて下さいな。
（白けた長い間。）
たつ（鍋から汁を椀に盛り乍ら）恐ろしい人だね、お前、置いたらすぐこつちへ來るんだよ。
みよ　ええ。
たつ　お父さんも、あんまり對手になりすぎるやうだね。
（みよ汁を持つて出て來る。）
重藏　さあ、どうだね、ほう、熱さうだな。さ、これを腹つてやすみなさるといい。さあ〳〵、
鐵次　ありがたう御座います（椀を兩手に受けて、ぢいつとみよを見守つてゐたが）お孃さん！　あなたは、み——よ——子さんと仰有るんですかい？
みよ　え？——ええ。
鐵次　あの——みよ子さんつて?!（汁椀をおとす）

重藏　ど、どうしなさつたね？——おい！　何かふくものを！　おい！

たつ　はい、はい。（布巾をもつて出て來る）

鐵次　御免なさいまし、もつたいないことをしてしまつて……

重藏　なあに、手がふるへてゐなさるからだよ。

（疊をふいてゐたたつと鐵次との顏があふ。審しさうな顏付、急に互ひの顏色が變る、而して顏をそむける。たつは慌てゝ、逃げるやうに立つて去る。）

重藏　どうしなさつた？　え？　どうかしなさつたかね？

（白けた長い間）

重藏　——さ、たべとくれ！

鐵次　え、もう充分に頂きましたよ。

重藏　ぢや、少し休んだらどうだね？

鐵次　え——（不安さうに邊りを見廻す）　もう朝ですな、夜が明けましたな。

重藏　そろ／＼明ける頃だね、どれ（起ち上つて、窓の戸をあける）あゝすつかり明けた——（もとへ戻つて）やすんぢやどうだね?!　それとも——氣分がわるいやうだね？

鐵次　もつたいない！　（そつと涙をのむ）

重藏　涙を流してゐなさるね！

（鐵次、無言のまゝ、涙を幾度か押かくさうと努める。みよは審しさうな顏付で、それをぬすみ見乍ら、膳をかたづける。たつは障子の蔭によつて、無音に泣いてゐる。と、急に奥の間で電信機がなりはじめる。重藏はいそいで立つてゆかうとする。）

鐵次　旦那！

重藏　む、なに電信だよ。（去る）

鐵次　電信?!

みよ　港からですよ——何か起つたんでせう。

鐵次　港から——何か——（慌てゝ）お孃さん！　お父さんはあなたを可愛がつてくれますかい？

みよ　ええ。

鐵次　お母さんも？

みよ　——ええ。

鐵次　お父さんとお母さんは仲がよささうですね……

みよ　——（默つて遠のく）

鐵次　は、は、は、は、詰らないことをきく男だ。は、は、は、は。（泣き笑ひをする）

みよ　（氣味わるさうに、急いで立つて、臺所へゆく）お母さん！

鐵次　電信?!　（と呟く）

重藏　（奥から大聲に）たつ！　たつ！　（と呼ぶ）

（鐵次は、ぎよつとして腰を上げる。たつは默つて奥へとゆく。鐵次はその後姿を見送つてから、無言のまま、奥の方へお辭儀をして、土間へそつとおりかける。途端にたつが急いで出て來る。而してその樣を見て涙をのむ。鐵次は何も云つてはいけないと手をふる。）

たつ　なんてえことを、まあ！

鐵次　（無理に笑つてゐろと示して）　幸福でゐて——え、幸福でゐてくれ！

たつ　まあ！　（止めようとする）

鐵次　うんや、往くんだ！　往くんだ！

たつ　ど、どこへ？

鐵次　あつちだ！　朝、朝が來たんだ！

たつ　（慌てゝ）　みよ！　お父さんをよんで……

みよ　はい。（奥へ）お父さん！　お父さん！　（入つてゆく）

鐵次　何故よぶんだ、俺を、この俺を、捕へようつてのか？

たつ　あつ！　ぢや、矢張……

鐵次　うむ。（出ていかうとする）

たつ　あつ！　あつ！　（止める）

重藏　（奥から）　待て！　待て！　（出て來る）

鐵次　あつ、旦那！　このまま、ね、このまま出てかして下さい、ね、旦那！

重藏　お前は俺をだましたんだ。お前は罪人た、殺人犯なんだ。街ではくちをした揚句に、二人まで人を殺して水へとびこんだんだ。

鐵次　あつ！　あつ！　旦那！　だました譯ぢやなかつたんです。云へなかつたんでさあ。云つたらどうなつたでせう？　え何もかも云つたら——ああ、どうなつたんでせう？

重藏　さ、一足でも出ていつたら最後、島の廻りは、街の見張りがついてゐるんだぞ……

鐵次　私を救つてくれようとでも思つてですかい？　この上、どんなことがあつたつて、もうこの上、御厄介にはなりませんや……旦那！　奥さん！　お孃さん！　達者で、幸福にお暮しなさつて……

たつ　（聲を擧げて泣く）

重藏　ど、どうしたんだ？

たつ　ど、どうにかならないんでせうか？　この人？

重藏　——

みよ　お父さん！

重藏　——う。

（緊張した間。鐵次は、いきなり座敷へとびあがり、そこを走りぬけて、正面の窓から外へととびおりる。）

重藏　待て！
たつ　あなた！　あ、あれは……（泣き崩れる）
重藏　えつ？　あ、あれが……
たつ　（うなづく）
重藏　あ、あれが！
みよ　あつ！　崖、崖から！　（壁によりそふ）
重藏　えつ！　（窓から）　あつ！　ああ――
たつ　（聲を擧げ、身をふるはせて泣く）
（峽灣の方からは、『おうい、おうい』と呼ぶ聲が、はるかに、はるかに聽えて來る。）

――急に　幕――

（大正十三年十月）

# 甲斐の徳本（一幕）

**時**

寛永六年、十月上旬

**所**

信濃諏訪湖畔、長地村東堀、徳本が自ら茅菴と稱せし草廬

**人物**

長田徳本
馬場徳寛
今井徳仙
磯貝天錫
お静
音兵衛
三五郎
その他、病人たち多ぜい

**舞臺**

上手に寄せて牛小屋
中央は、奥いつぱいに、徑を殘して藥草園が區劃られ、近く湖が望まれるそれより下手、溝縁をとりめぐらした、茅葺の菴。

邊りは、一面に榲桲（まるめろ）の栽培林、黃金色の實が、枝も撓わに熟してゐる。

前方の空地、陽當りよき處には、簀の子板にネコ（むしろの一種）を擴げ、布團を敷き並べ、病人たち多勢、或る者は全裸體となり、またある者は双肌を脫ぎ、或は四肢のみを、陽に曝し、光をいつぱいに浴びてゐる。音兵衛は溝縁に坐して、馬場徳寛や今井徳仙が診療に從つてゐるのを、ぼんやりと眺めてをり、お静は爐邊に、湯のたぎる間を待ちつゝ、煎藥の瓶に名札をつけてゐる。

百舌鳥が折々けたゝましく啼く、と、逃げまどふらしい小鳥の羽音――やがて、風もないのに枯葉が散る。

病人甲　有難う存じます、肉も日増にあがり痛みも餘程樂になりました。

徳仙　それは何よりぢや。そなたはどうぢやな!?　どれ診て進ぜよう。

（病人乙一禮して仰むけに寢る、徳仙ぢつと望診したのち、脈を檢し、腹診する。）

徳仙　脈は未だ浮いてゐる、腹水は大分減つたらしい……精々汗を出しなさるがよい、熱はあれから一向出ぬやう

ぢや喃!?
病人乙　はい、お蔭様と……些しも氣倦るう覺えませぬ、夜もよく眠れます。
德仙　それは結構、伏熱もないらしい、熱がある限り、この太陽風呂とても大毒ぢやで喃。
（德寛、黑布で隻眼を覆つた子供の側へ寄る。）
德寛　また涙が出るかな!?　些しは何か見えるかな!?
子供　あア、朝起きた時にやア、お天道様かあかアく見えるが……ぢツきに暗くなツちまウだ……涙も出るしなア。
德寛　ぢいつと、その黑い片をあてゝゐなされや、いま暫時の辛抱ぢや。
（神經質らしい若者に對つて、全裸體の脊髓を打診し乍ら。）
德寛　痛むかな!?　此處はどうぢや!?　痛むかな!?
若者　いえ痛みは忘れていました。
德寛　ほう、では病を恐れる考へも、些しは薄れたらしいな!?
若者　はい、とぎすまされた、剃刀の刃のやうだつた頭腦が、この頃では、かう何だかぼんやりとして來ました。
德仙　はははは、それでよいのぢや、そなた病患とては何もないのに、氣を病んでゐるのぢや、それが病氣だらうて……
（德仙や德寛の笑ひにつれて、病人達も聲をあげて笑ふ。と若者もつい誘はれて、憂欝な頬に微笑を浮べる。）
德寛　や、心風とても、極く輕いものぢや、安心なさるがよい……
（德仙は殘りの病人を默々として順次に診てあるく。德寛は、音兵衛を顧みて。）
德寛　お驚きで御座らう、これが先生の自然療養なのぢや、太陽風呂と、極く平易に申されてゐる、先生が常に、救急十九方、以て萬症に應ず、と主張なされ、且つは好んで用ひられる攻擊に基して、汗吐下の和以外、輓近あみだされたのがこの療養法で御座るよ。
音兵衛　いかさま甲斐の德本先生が御療治らしう御座ります喃。
德寛　はははは、あ、これ、お靜どの、お茶を汲んで下さらぬか!?
お靜　はい、やつと湯がたぎりました。
（德寛手を淨める間に、お靜、茶を汲んで二人にすゝめる。）
德寛　さ、お茶なと召上れ。
音兵衛　有難う存じまする、頂きます、先生はどちらまでおいで遊ばされたので御座いませう!?

徳寛　さ、それは分りませぬ、併し陽の落ちるまでには、必ず御歸り下御座いませう。

（徳仙診察を了したらしく。）

徳仙　皆の衆、些し冷ついてまゐつたやうぢや、陽の光りも鈍うなつたらしい、今日はこれで戻つたがよい。

（病人たち一同、肯き、一禮して肌をいれ、布團をたたんで背負ひ、それぞれ歸り支度を整へる、と、徳仙、手を浄め乍ら。）

徳仙　いつもの通り、藥はお靜どのから貰うてゆかれい、調劑すみぢや、名札を間違へぬやうにして喃。

（お靜、煎藥を濡縁に並べ、病人たちに手渡してゐる中、それまで、ずつと後方、藥草園に近く、身を潜めるやうにしてゐた、磯貝天錫を認め、ぎよつとする。が、天錫は平然として、にじりいて。）

天錫　私は、今日始めて參じ、太陽風呂とやら、この御療治をうけました者で御座いますが……

徳仙　おお、さうで御座つた喃。そなたは心風ぢや、明日、先生の御診斷をば、改めて願ふがよい、藥はいるまいて。

天錫　でも、御療治代をとつて頂かねばなりますまい!?

徳仙　はははは、藥は一貼十八文ぢやが、水や陽光は人間誰しもの所有ぢやで喃、飲まぬ者損、浴びぬ者損でも御座らうか。

天錫　さやうで御座いますか、どうも有難う存じました。

（病人たち一同ぞろぞろと立去るを、徳仙ぢつと見送つてゐたが、疲れたらしく、伸をして縁に上る。）

徳寛　先生の御口癖を、そのまゝ、ようとりをつたな。

徳仙　はははは、したが、彼奴異樣な人間ぢや、頻りと藥草園を觀望しつゞけ居つた。

徳寛　油斷のならぬ病人ぢやな。

徳仙　や、甲州の御客仁、どうなされた、ひどく考へこんでおぢやるな!?

音兵衛　はい、はるばると、先生を此處までお迎ひに參じましたるなれど、どうやら勤めも果されぬ樣な氣がいたされまして……

徳寛　何、お迎ひにお出でなされたとの!?

音兵衛　はい、甲斐の徳本樣は、荒るゝまゝに任されて、狐狸の住家、そのまゝで御座います。

徳寛　先生は日頃、唇に出しては何も仰有られたことがない喃。

徳仙　忘れて居られるのぢやらうて。

音兵衛　まさか、お忘れにはなりますまい、が、思ふことを厭うて居られるので御座いませう。

徳寛　何故!?

音兵衛　先年、公方樣御重態の祈祷、先生が江戸にお上り

遊ばされたを御記憶で御座りませうかな!?

徳仙　や、それならばよう存じて居る、官醫曲直瀬玄朔先生が切なる請を容れられてぢやつた。

徳寛　おゝ、その時ぢや、一診以て峻劑を投ぜられた處、衆醫、寄つて験したげた、併し、先生は、莞爾として其利害を辯じられた處、將軍家には深くその説を納れられ、降藥一劑積年の痼疾、御大患も、一日にして癒えられたげな……

徳仙　その話は、わしも先生からうかゞつて居る、いかさま、その折ぢやな、藥價宰あり……例の御口癖ぢや、一貼十八文より御受けなさらなんだとか……

音兵衛　左樣、左樣、その折で御座いました、白米一千苞に代へて、甲斐にあの廣大な徳本屋敷が賜られましたは……

徳寛　いかさま喃。

音兵衛　しかもこの御魂を見るにつけ、先生の御奇矯ぶりも、あまりと申せば度が過ぎまするで喃。

（音兵衛涙ぐむ。徳寛と徳仙とは、白けたる心持を感じて。）

徳寛　まア、さうまでお嘆きなさるな、甲斐へ戻られる日も近くで御座いませう。や、よい夕ぐれぢや、ま、あの夕陽が湖に映つた色を御覧なされい。

徳仙　喃、御客仁、湖畔でもそゞろあるかれては如何、御案内かたがた御伴を仕りませう、先生もやがては御歸りで御座らうよ。

音兵衛　はい、願つてもない幸で御座います。

徳仙　これ、お靜どの、後片付をたのみますぞ、湖畔をそぞろあるいて來ませう。

お靜　いつておいでなされませ。

（三人は濡縁を下り、藥草園を過つて去る。お靜はぢつとその後姿を見送つてのち、養の子っネコたば牛小屋の軒下にと片づける。邊りは次第に夕ぐれてゆく。と、天錫牛小屋の蔭より、忍びやかに姿を現はす。）

天錫　わしぢや、わしぢや。

お靜　お、兄上樣。

天錫　誰も居らぬか!?

お靜　はい、併し御油斷はなりませぬ。

天錫　驚いたであらうな!?

お靜　いえ、心ひそかにお待ち申して居りました。

天錫　髷形もこれこの通り、身裝りまで、かう變らうとは自らも思はなんだ。

お靜　で、いつお下りになりました!?

天錫　江戸を立つて五日にならう、そなたとは半年ぶりぢや、してその後の吉左右を知らせて。

お靜　吉か凶か、妾には分りませぬ、したが先生の御著述

だけは、概略窺見をいたしました。

天錫　ほう、それはお手柄ぢや。

お靜　御門下には、折にふれ、時に應じて祕方の口授を遊ばされます。さうした際に、物蔭の立聽きをそのまゝ、筆記いたしましたが、こ、これで御座います。

（懷より少さき半紙綴りを出して手渡しする。）

天錫　や、こりや、神機疾病訣、並びに採藥奇方ではないか!?

お靜　はい、眼に觸れましたには、虫干しの折、また幾綴りか御座いました。吾方採集算粉、德本多賀流針穴祕傳、腹診論、望診術、梅花無盡藏……

天錫　もう、よいわ、そりや概略理論書でがなあらう、わしが望みは臨床實踐の祕方が得たいのぢや、つまりは救急十九方とやら……

お靜　藥草園のお調べは!?

天錫　それとなし觀望はしたものゝ、只自らの貧しい醫學が恥かしうさへなりをつた。

お靜　さうでも御座いませう、妾はかうして、身狀を包みかくし、旅に病み惱うた、たよりもない女として、この菴に身を寄せてから半年、大望を胸に祕め、先生に侍くうち、いつともなく、われとわが身の願ひが、空恐ろしくさへなつたのでした。

天錫　とはまた何故ぢや!?

お靜　先生は、いつも晴れた青空のやうに、闊いかた、澄みわたつた、よどみのない、限りもなく擴やかなお心もて、この妾を慈んで下さいます。このやうに不敵な願望をもつ女とも御存じなく……疑はうともなさらずに、何の祕めごと、かくしごとさへなされませぬ。兄上樣、妾はこの上かうした勤めに從はねばならぬことが、厭はしうさへなりました。

天錫　さうまで思ひ入るとは性急ぢや、とにかく藥草園の種苗をば悉く手に入れずばなるまい。してその上には救急十九方の錠劑とやらの、何たるやをさぐらねばならぬ。先刻たづねてまゐつたは誰ぢや!?

お靜　あれは甲斐からの御客仁らしゆう御座りました。

天錫　甲斐からの客仁とな!?　油斷してはならぬぞ。

お靜　はい。

天錫　や、誰か來たやうぢや。

（牛の啼聲。天錫急いで牛小屋の蔭へかくれる。お靜は何心なげに唄ふ。）

お靜　〽甲州街道にイ、菊の木ヨ植ゑエて、便りイきくイき
イくウ、ヨウ、菊のウ花。

（牛の啼聲。やがて牛背にまたがり、右手に「救世濟民、藥價一貼十六文」と大書せる旗幟を摑み、首に藥

　痰をかけた徳本が、黄揚、鬖々とさせて現はれる。）

お静　お歸り遊ばせ。

徳本　やれ、やれ、いま戻りました。

お静　さぞお疲れで御座りませう。

徳本　なんの――

（自ら牛を小屋にひき入れ乍ら。）

徳本　そなたの唄聲が間近うきこえると、疲れも忘れて楼へ急ぐ氣になる、ははははは、したが〳〵甲州街道に菊の木植ゑて……は、よしにしやれ、いつたん捨てた甲斐の國に、いまではさうさう執着も未練もないが、矢張人間の心弱さぢや、たまにはわしとて甲斐のたよりが聽きたうもなる……野田紹安でも生きてゐてくれたなりや、かうまで甲斐の國を忘れはてもせなんだらうが喃。さ、お静どの、芋粥なとはやく爐にかけて貰はう。

お静　はい。

（徳本椽に上り、音兵衛が託した、振分の荷と葡萄籠とを認めて。）

徳本　や、誰か客仁かな!?

お静　はい、甲斐からの御客仁で御座ります。

徳本　ほう、道理でなつかしい葡萄の香がしたわ、や、ある、ある、これだな、一つ喰べてくれるか。

お静　あれ、まだ頂きはしませぬに。

（徳本、無雑作に籠の蓋をはれ、葡萄の房を摑みだす。）

徳本　なんの、かまふものか、よい、よい、そなたも喰べるがよい、ほ、ほう、なかなかよう熟し居つたな。これから見ると、榲桲の栽培は未だしぢや、辛抱、辛抱か。はははは、さ、喰べるがよい、甲斐の者は、葡萄の樹をもち乍ら、その效用も、栽培の方も心得ては居らなんだ、で、わしは棚を架け、蔓を引くの法を考案してやつた……あれからもう長い年月が流れた。いまは蔓が、どれほど這ひ纏はつてゐることだらう。葡萄の蔓が張られるやうに、わしの心がその末末に宿つてもゐよう。や、忘れてゐた、その客仁はどうなされた。

お静　はい、湖畔へそゞろあるきにゆかれました。

徳本　や、それはよかつた、ではぢきに戻つて來よう。さ、お静どの、芋粥をどつさりとしかけてくりやれ。

お静　はい。

徳本　静かな夕ぐれぢや喃。

（お静は爐邊に働く。徳本は立つて、湖を眺めてゐる。所へ、徳仙、音兵衛を案内しつつ戻つてくる。徳寛少し遅れて、薬草園をまじまじと眺めやり、苦悩な色を面にうかべる。）

徳仙　お歸り遊ばしましたか!?

徳本　やア、こりや音兵衛どのか!?

音兵衛　先生、お久しゆう存じます。

徳本　そなたも達者で何よりぢや、さ、お上りなされ、お上りなされ。

（音兵衛を招じる。徳仙、徳寛もつゞいて座をしめる。）

徳本　よう忘れて下さらなんだ喃。おもたせの葡萄には、早速に頂戴いたしましたわ、はははは、さ、皆も頂くがよい、唇にふくむと溶けるやうな味ひぢや。

（葡萄の籠が再び開かれる。）

徳本　喃、音兵衛どの、この實が熟れる頃になると、わしも甲州を思ひ出さぬでもない。が、此處には見られる通り、苗から育てた根株が御座る。それにわしが多年念願とする救世濟民の一義は、四方に周遊して、一處に留滯せずと云ふにある……

音兵衛　先生、先生は、わたくしがはるばると參りましたことを……

徳本　や、云はずとも知れてゐる、徳本駿の荒廢を嘆いて來なされたか、それとも、結句わしに戻れとすゝめに來なさつたのでもあらうよ。

音兵衛　仰せの通りで御座います。切に、一郷の者の願ひを御聽きいれ下さいまするやう……

徳本　や、それだけは許してくりやれ、厭ぢや、心から厭ぢや、徳本駿はわしのものではない、あれは公方樣の仰せに、背きされなかつたまでなのぢや、わしは變らぬ、が、友たちに家屋敷をもたぬ男がゐた、その者に與へて下されと、窮餘の一策、かこつけたまでぢや、所が、その男、案外な氣骨者ぢやつた、身代りの拜領は眞平と雲霞に逃げをつた、はははは、徳本駿が苗に迷うたはそれからのことなのぢや。

音兵衛　先生の御眞意は、よう辨へて居ります。したが、今日このごろ、甲斐は、葡萄の實りが紫紺色に美しく、波うつて居りまする。先生の御示教に手縋りました同業は、家々を富ますにつけ、先生の御遺徳は、いよいよ光をまし、一郷の者ども、追慕の念は止みがたく、是非一度は御歸りを願ひたいと、思はぬ者とては御座りませぬ。

徳本　勘辨してくりやれ、この上冗うわしの心を亂げてくりやるな。

音兵衛　恐れいりました。

徳寛　併し先生。

徳仙　音兵衛どのが願ひも……

徳本　いや、野田紹安でも存生であるなりや、たづねたい心が萌さぬものでもあるまい。が、わしは先刻も云つた通り、放遊隱棲が何迄も好ましいのぢや、藥草の栽培に心を傾けてよりこの方、何がなし、かうした草實を好んでも來居つた。甲斐には葡萄をば藤助には根株をばわし

が形見として殘さうよ。葡萄は甲斐に永劫變ることなく、住まふわしの姿ぢや、蔓によう蔓が這うてゐるかな!? 蔓の伸び育つまゝに、わしの貧しい道業も伸びてゆくのぢや、心して慈んでくりやれ、愛でてくりやれ、一樹と雖もゆめ枯らして下さるなよ。

菅兵衛　は、はい。

（一同默然としてゐる。暮の鐘がとうどうと傳つてくる。お静が行燈を運びだし、芋粥の大鍋を爐にかける。とつぷりと邊りは暮れきる。と、三五郎がおづおづ藥草園の中に現れる。徳寛がふとそれを認める。）

徳寛　誰ぢや、どなたで御座る!?

（三五郎、ぎつとしてあとしざりするを徳本顧みて徳寛を止め。）

徳本　あゝ、いや、お驚きなさるな、これ、徳寛どの、あれは客人ぢや、や、それなるお方、此處はわしの門人か、内輪の者ばかりぢや、さ、お上りなされ、さ、お上りなされ。

三五郎　は、はい、いえ、いえもう此處で結構で御座います。今宵伺ひましたも實は……

徳本　や、よう約束を違へずに來て下された、そなたは感心な方ぢや、正直な方ぢや、さ、まアお上りなされ、さ、さ、お上りなされ。

（三五郎いよいよ恐縮して、緣側にうづくまる。）

徳仙　先生、こなたはどなたで御座いますか!?

徳本　おお、この方か、こなたは泥棒どのぢや。

（一同啞然とする。三五郎もぎよつとして。）

三五郎　あ、もし……

徳本　いや、大切ない、ま、お上りなされ、さ、お上りなされ、そこでは話がしにくうてならぬ。何故おすゝめ申さぬ?

（徳仙と徳寛とは不審な面持をうかべつゝも、厭がる三五郎を無理にひきあげる。と、彼は行燈に顔をそむけて坐る。）

徳本　昨夜はをかしな晩で御座つたよ、おみたちが歸られる、お静どのも奥で安らかな寝息をたてはじめた。と、この方が不意に見えられてな、このわしに金を出せと云はれるのぢや。

三五郎　あ、もし、先生。

徳本　生憎、手許には、一文も御座らなんだほどに、明晩來てくれぬか、暮六ツを合圖にと約束し申した。や、正直な方ぢや、今宵は必ずお渡し申しますぞよ。

三五郎　いえもう、金は欲しう御座いませぬ、誠に申譯のないことをいたしました。こなたが德本先生のお邸とは露いさゝかも存じませなんだので御座います。御斷りや

ら、お許やらに今宵は參じたので御座います。

德本　何んの、遠慮はいり申さぬ。そなたの住む處さへ分つてゐたなりや、自ら、屆けてもよいとさへ考へてゐたのぢや、や、まつたく、御足勞で御座つた喃。

三五郎　いえ、もう、さうまで仰有られては、この五體の、置處が御座いませぬ。平に、御容赦下されませ。

（德本立上つて藥嚢をとりだす。德仙と德寛とは、顏を見合せて、不滿らしく、囁きあふ。戸外には、天錫が忍びあしに近より聽耳をたてゝゐる。）

德本　さ、受取つて下され、約束ぢや、受取つて下され、患家を今日は六軒ほど見舞ひ申した。一貼十八文が定めで御座る、百文ほどはあらう、不足かも知れぬ、が、さ、さ、受取つて下され、我慢して受取つて下され。

（三五郎途方にくれて泣出す。と、德仙は向になつて詰めよる。）

德仙　先生、先生は日頃、温藥人を殺し、冷藥人を殺さずと申されたでは御座りませぬか、その上、盜人や乞食の多いは、人生の病患ぢやとも仰せられてゐる、然るに、何故、その病患に對して、温藥をお與へなさるので御座ります!?

德寛　私もその點同感に存じ居ります。ひつくくつて村名主へ突出してやりませう。

（二人は矢庭に立上つて、三五郎を押へこまうとする。と、三五郎も急に屹となつて、思はず抵抗しようと身構へる。）

德本　はははは、まア、待て、人生の病患は、その根源が世の組織の缺陷に生じてゐるのぢや。なまなか攻撃の劑を用ひたとて何の役にも立ち申さぬ。反對の藥を示さうが常ぢや、見られい、こなたはいきり立つそなたたちに抗かはうとして身構へられたわ。よいかな、日頃云ふ、わしの望診術は、先づ其人の性狀を具さに診察してのち、閉塞を啓き、氣管を通し、然してのちお藥を投ずるのぢや。こなたはよい方ぢや、正直な方ぢや……さ、お氣に支へられな、さ、お受けなされ、さ、お持ちなされ。

三五郎　いえ、斷じて、頂くわけにはまゐりませぬ。どうぞこのまゝ、そちらにお納めおき下されませ。手前は三五郎と申す、流浪者で御座います。遠く鄕國をあとにいたし、いままでは職に離れ、その日の糧にも窮して居りました。が、盜みは、弱りぬいた心の隙を掠めるやうに萌した、ほんの出來心で御座いました。先生の明日の寄來よと仰せられた、そのお心に先づヒシと手前は撲うたれたので御座いました。只この上は、何か仕事をお與へ下されませぬか!?

（三五郎は再びさめざめと泣きいる。）

德仙　ふてぶてしい男ぢや喃。

德寛　や、申遅れて居りました。いましがた、湖畔よりの戻りに、氣づいたので御座いますが、藥草園が、心なしか、荒されて居りました。或は此奴の仕業かと存ぜられます。

三五郎　め、滅相な、そのやうなことを、何しにいたしませう。

德寛　いや、それは云ひぬけぢや。

德仙　いかさま喃、さう申せば、午下りに見えた怪しい新入りの患者があつたではないか!?

德寛　や、あれも同類か知れぬわ、頻りと藥草園を觀望いたし居つた喃。

德仙　どれ、調べて來よう。

德寛　さう、いたさう。

（二人は立上る。途端に天錫が思はず縁側へにぢりよる。お靜はぎよつとして身をそばめる。）

德寛　誰ぢや!?

天錫　お許し下されませ、藥草園の犯人は私で御座います。

德仙　や、そなたは、今日新入りの患者どのではないか!?

天錫　仰せの通り、私は自分の所業が今更恥かしくなつたので御座います。お許し下されませ、お許下されませ。

（さめざめと泣く。お靜も騒ぐ胸をひしとかい抱いて、灯影に身をうづくまらせ、事の成行をみまもつてゐる。）

德本　ま、お上りなされ、ま、お上りなされ、さ、何故お上げ申さぬ!?

（德仙、天錫の手をとつて、無理强ひに上へひきあげる。）

德本　新入りの患者どのか、どれ脈など拜見いたしませう。

（天錫が尻ごみするのにかまはず脈をとる。）

德本　脈が沈んで早打して居る、はは、失意の病ぢや、何か藏する處、ふかいと見えまするな。

天錫　お許しなされて下さりませ。

德本　何、許せと仰せあるか!?

天錫　はい、私は、先生の御祕方をば、盗みに參じた者で御座います。

德本　ははは、德本に祕方は御座らぬよ。恬淡寡欲寒窶自ら安んじ、號して知足齋とさへ名告るわれぢや、勢利を慕はず、僻陋に安んじ、救世濟民の實踐に當るわしが、何の區々たる、祕方に執しませう。醫は術に非ずして道で御座る、信念で御座るよ。

天錫　恐れいりました。私は三河國、世襲の醫家に生れ、磯貝天錫と申しまする者……

德本　ほう、磯貝どのか!?

天錫　はい、先生、嘗て岡崎に東照公に謁せられし際、御秘方の一薬を投ぜられたことが御座いましたな!?

徳本　さやう、確に記憶いたし居りますぢや、あの地には頗る卑濕(ひしつ)、民の多くが瘡毒(さうどく)を患ひ居るとかにて、救濟の道を講ずるやう、東照先君御自らこのわしに命ぜられましたぢや、で、その際一方を獻じましたが……

天錫　は、いまも尚、霧丸と名づけられ、無數の民を瘡毒の苦患より救うて居りまする。

徳本　ほう、それは始めて伺うた。

天錫　ために某し幼少時代、亡き父は、醫家としての聲望を悉く失ふに至り、腑甲斐なくも、自刃して相果てたので御座います。

徳本　やれ、やれ、それはお互に迷惑なことで御座るよ。

天錫　仰せの通り、が、幼心に彫(きざ)まれし一念は、ついいましがたまで先生をば、仇敵の様お怨み申して居りました。殊には近年、亡き父が縁故(ゆかり)に據り、淺學若輩の身も顧みず、江戸大奥藥醫の末班に加へられ居りまする中、過ぐる年、將軍家御重患のみぎり、先生が峻劑を投ぜらるゝや、我等一同駁論にいきりたちし所以は外でも御座いませぬ。先生を目して武田家の遺臣となすてふ疑惧(ぎぐ)よりその端を發し、加ふるに先生が日頃御懐抱遊ばさるゝ、救急濟民の一議は、世を惑はし、民の心を亂すの手段に過ぎずと斷じ、殊には侍醫に安んじらるゝは……

徳本　はははは、醫法末路、衰敗も極りました喃。徳本が攻撃の劑を用ふるは、信ずる處あればこそで御座るよ。富貴の家、往々忌憚して、山野村落の民、特に之を信じてくれますのぢや。ためには、沈痾痼疾と云はるべきもの、手に隨つて癒えざることなき驗をさへ示しませう。太陽風呂またその一方で御座る。武田家の遺臣とは面白いかづけことぢや、徳本には故郷さへも御座らぬ。醫道自らを生み、われ醫道を育て、その達成を願ふ心に一命をかけて今日に及びましたのみぢや。他に念とする一物も御座らぬ。はははは。

天錫　お笑ひ下さいますな。藥醫の中には先生が御秘方を目して國禁の切支丹術に據るものあらんなど臆測いたす輩さへ御座います。

徳本　いかさま喃。お疑ひは御自由ぢや、藥草園を御覽下さるがよい、徳本が信奉する醫道に岐路や間道は御座らぬ。坦々たる大道のみ、併も常に新しき開拓がそのさきざきへと伸びてゆきますのぢや。而して世の醫家が辿るべき道と申さば、この一路より他にあるべき筈は御座るまい。や、徳仙どの、御珍客へのおもてなしぢや、わしがかねての口授の十書をこれへ持ち出されい。

徳仙　はい。

（德仙立つていつて書箱より十書をとりだし天錫の前へ積む。）

德仙　御披見下さりませ。

（天錫は再びさめざめと泣いて、懐よりお静が密に筆記せし半紙綴りを德本の前へ差出して。）

天錫　お許しなされて下さりませ。素醫にそゝのかされての悪事、恥入つた次第で御座います。この愚者の罪は萬死にも相當いたしませう。殊には先生の御祕方を私したく存じてよりこの方、妹静に旨をさへ含めまして……

德本　や、それまで申さるゝな、何もかも存じてゐましたぢや。

（一同唖然として顔を見合せる。）

德本　わしは飽迄も醫術で御座るよ。したがそのわしをさへ慕うて下さる方々が、これこの通りいろいろな形ちでめぐり集うて頂ける、いや有難いことぢや、音兵衛どの、また三五郎どのとやら、御免下されや、いまわしの心魂はいよいよ澄んで來ましたぢや。德寛どの、德仙どのや、天錫どのとやら、そなたも筆記して下されや。

（德本端然として瞑目沈思する。德寛、德仙は急いで料紙をとゝのへ、筆に墨をふくます。が、天錫のみは低頭してゐる。）

德本　よいかな、や、天錫どの、どうなされた、さ、筆記にかゝられい。さ、遠慮は無用ぢや、德本が信奉する醫道は、冗くも申す通り德本の醫道では御座らぬ。天下萬民共に有し、共に用ふるに足る醫道で御座るよ。さ、筆を何故おとりなさらぬ。

天錫　は、はい。

（天錫さめざめと泣く。お静も聲をたてゝ泣く。音兵衛、三五郎共に涙を拭ふ。德本自ら筆をとつて、天錫に與へ、料紙函をその前に供してやる。天錫はつとして後に退り、涙をさめ、一禮してのち嚴然と威儀を正し筆を押戴いてとる。お静の泣聲のみがたかい。）

德本　や、お静どの、泣かれな。おみたち二人は感心な兄妹ぢや、嘆かれな、兄上のこれから辿らるべき醫道にはまだ遠く、はるかぢや。

お静　は、はい。

德本　よいかな!?「醫之弊——萬病利つかへて煩ふと思ふべし、人の身は上下ぬきとほしなり上焦より飲食を入るれば中焦にて化しこしらへて下焦へやる、水汁をば小便に送り、糟粕をば大便に送下して障りもなく腹中にて尅化し下す時は何の病もなく快く、身を熱せず、天氣の雲も晴れて日月の光も暗からぬやうになり、若し又腹中にて食物化しかね利つかへ水穀の毒を貯ふる時は身に寒熱こもり……」

（急に爐にかけてあつた鍋の芋粥がふきはじめる。お靜が慌てゝ蓋をとる。）

徳本　や、またれよ、芋粥が煮えたらしい。どれ、どれ、ほ、ほう、これは甘さうぢや。忘れて居つた空腹が急に耐へをるわ。口述はあとのことぢや。さ、みんなして喰べるとさう。

（お靜甲斐々しく、茶碗や箸を運び出し、芋粥を盛つては一同に渡す。）

徳本　どうぢやな、芋粥の味は!?　や、有難い一日ぢやつた。や、有難い一日ぢやつた。さ、喰べて下され、さ、喰べて下され。

（天鍋と三五郞とは箸を投げて泣く。）

（お靜の泣聲が殊に高い。）

――幕――

# 白粉の花（三幕）

人物

後藤辰次　騎手
　お仙　内縁の妻
中村吉三　騎手
成瀬正夫　刑事
一郎　お仙の子
明石英造　騎手
三吉　馬丁
大原幾之助　富豪
　夫人
井上勝　請願巡査
その他御用聞の男——女中、舞踏會の男女客多ぜい。給仕その他——

## 第一幕

郊外。ある競馬場に近い、騎手後藤の家。土間に隣つてその乘馬スキテン號の厩舍がある心持。仲秋。夕暮——宵。

後藤は上手の部屋に敷かれた布團の上に起上つて鐵砲をみがいてゐる。お仙は中央の部屋、櫺子窓に近い長火鉢に凭れて新聞を讀んでゐる。厩舍からはひづめの音や、いななきがきこえる。

お仙　『……刑務所では二時半頃に至りそれと氣付いて大騷ぎとなり、市内外各署に打電して非常線を張り大搜索中であるが未だ何等の手懸りがない。』まだよむのかい？
後藤　ああ——
お仙　ええ——『晩秋を飾る根岸競馬……』
後藤　あ……（半ば繃帶に包まれてゐる顏をしかめる）
お仙　ああ……こりや氣がつかなかつたねえ。
後藤　ああ——こ、こんな身體にせえならなけりや……（鐵砲を投げだす）
お仙　まあ——そ、そんなにぢりぢりしたつて……
後藤　せずにゐられるか、こ、このまま……も、もし俺の怪我がこ、このまま……
お仙　死なかつたのが何よりぢやないか!?
後藤　死んだ方がましだ。こ、この脚がなほらなかつたら、騎手の後藤は死んだも同然だ、死んだよりやよつぽどみじめな境涯におちるんだ。

お仙　だつてそりや……
後藤　誰のせゐでもねえ、うむ、俺のせゐぢやねえ……
お仙　そりやあたりまへさ、だけど……
後藤　結句俺の不注意からだと云ふのか？
お仙　まあ！
後藤　お、おめえにや、こ、この眼に見えねえ大きな力がこの世の中にあるつてことが譯らねえんだ、いいにつけ、わるいにつけ……
お仙　（笑つて）知つてゐるともさ、運だよ、え？　運だよ……
後藤　運だ！　（考へこむ、而してまた鐵砲をみがきはじめる）
（裏口で御用聞の聲が聽える。）
後藤　誰か來てゐるぢやねえか!?
お仙　勘定取だよ……
後藤　（默つてしよんぼりしてゐる）
お仙　お邸ぢやどうするつもりなんだらうね、あれつきりぢやないか!?
後藤　譯らねえ、俺にも譯らねえ。
お仙　なんぼなんだつてあんまりだよ、こつちが御全盛のうちは……
後藤　不具の騎手にや用無しだとでも云ふんだらう……
お仙　さ、それがさ……
（また御用聞の聲。）
お仙　あえつ！　うるさいねえ！　留守なんだよ！　あとにしておくれな、え？　明日、明日だよ！
（『何とかして頂きたいんですがねえ』と御用聞の聲。）
後藤　何處だ!?
（『へい、龜屋で御座いますが……』と答へる。）
後藤　明日にしろ！　え？　明日だよ！
（『へい』――御用聞が去る氣配。）
お仙　ああ――いやになつちまふねえ、こ、これがお前さん……
後藤　は、は、騎手の後藤と云はれた俺のお臺所かい!!秋の競馬季節も終りだつてえこの頃のさ……
お仙　いやだ、いやだ。こんなことなら……
後藤　えつ？
お仙　（づつけりと）本牧へ歸つちまひたいつてのさ……
後藤　――（唇をかみしめてゐる）
（ひづめの音といななきとが淋しくきこえる。）
中村　どうだね？
（騎手の中村が入つて來る。）
お仙　おやいらつしやい！
後藤　おお！

中村　具合はどんなだね、兄貴？

お仙　やつとまあ……（壁にたてかけてある松葉杖の方を見やる）

後藤　これだ！　（繃帶でまいた双脚を出す）

中村　當分は乘れねえな。

後藤　當分どころか、一生駄目だ、まあゆくゆくはお前えんとこの馬の世話でもさせて貰ふかな……

中村　冗談ぢやねえ……だけど何だつてえぢやないか、警察の方でもこの頃になつて反つてやかましく何してるらしいつて話だが……

後藤　何を？

中村　下手人をさ……

後藤
お仙　（同時に）　下手人!?

中村　なんでもスキテン號の蹄鐵を外れるばつかりに仕掛けておいたつてえ嫌ひがあるんだとさ。さう云や俺もあんときスキテンを見てゐたが、氣のせゐかスキテンの野郎足の運びがちつとをかしかつたぜ、何だつて兄貴にあれが分らなかつたものかなあ……

後藤　分らなかつたればこそあのまま先頭をきつたんだ。第二コーナアで變だと思つた、かう右肩がきたいにふれるんだ、第三コーナアへ來たときだつた、あの大曲りで奴、ぐつと右脚をつつこみやがつた、やつたた！　と、土埃が眼の前にぱつとたつた、あとは何も覺えちやゐねえ……

お仙　ああ、その話はもうやめにしとくれな、（中村にね、）病人の氣が立つばかりだから……

中村　すまねえ——で、邸ぢやてんでかまひつけもしないつて話をきいたが……

お仙　お話にもなつたもんぢやない……

中村　薄情なもんだね、そこへ持つてきて何だつてえぢやねえか、明石の野郎が……

お仙　えつ!!

後藤　明石つていや一度顏出しをしたきりだが、あいつ………

中村　根岸へスキテン號で出るつてえ噂さだぜ、いや噂ぢやねえ、今日の新聞にちやんとのつてゐらあ。（新聞をとる）

お仙　あ、新聞の話なんかどうだつていいぢやないか……

中村　だつて……ほれ此處た『晩秋を飾る根岸競馬——常勝馬スキテン號の新騎手として米國新歸朝の明石……』

後藤　讀んだよ、ああ讀んだとも、乘りてえ奴にや勝手にのらしとくがいいやね。（鐵砲をみがく）

中村　鐵砲だね？

後藤　ああ、こいつとも遊べねえ……こんな不具者になつ

ちまつちや、馬に乘ることと鐵砲をうつことと……こいつばかりが俺の仕事だつたんだ、俺の生命だつたんだのに……(立上る)

お仙　どこえ?

後藤　用を達してくるんだ!

お仙　大丈夫かね?

後藤　何も修業だ。(松葉杖をたよる)

中村　情けねえなあ。

後藤　何も情なかつて貰ひたかあねえ、こいつが一人並になりや、いつかどのお乞食になれらあ、は、は、は、は、ざまあ見ろだ!(去る)

お仙　氣が妙にたつてゐるんだからねえ。

中村　無理もねえや、日本一の騎手と謳はれた兄貴のことだ。

お仙　さつきお前さん、警察がどうのかうのつて云つたけど、そりやほんたうの話かい!

中村　ああ、蹄鐵事件はどうしたつて何か企む奴があつての仕業と睨まれてゐるらしいんだ。

お仙　ま、まさかお前さん、そ、そんなことつて——あの優勝競馬の始らうつて間際にさ……

中村　だつて……

お仙　そ、それにもう一應のお調べはすんぢまつてゐるんぢやないか。

中村　處がさうはいかねえのさ——女は魔物つてえからね。

お仙　えつ!!

中村　何さ、藤に女がゐるつてえ噂があつたもんだからね。

お仙　戲談ぢやない、あの人に限つて……

中村　かたいつてんだらう!? だからさ、企むだ奴の方へくつついて、絲をあやつつてる女があると云ふのさ。

お仙　と、とんでもない噂さだねえ。

中村　おかみさん、兄貴を大切にしておやんなさいよ。

お仙　なんだねえ、變に……そんなこと。

後藤　(出てくる)衣服を出してくんねえ。

お仙　あ、川上先生かい?

中村　繃帶更へか!? 痛いつてね話だなあ。

お仙　俥でなくてもいいかしら。

後藤　明日が日お乞食にならうつて奴が……

中村　俺等がいつしよにいつてやらあ。

後藤　それにも及ぶまい。

お仙　(中村に低聲で)つまらないことを何もきかせておくれでないよ。

中村　いいとも……

後藤　何だい?

お仙　いいえさ、氣をつけてね……

後藤　ぢやいつてくらあ……（後藤松葉杖をたよりに、中村に介添へられてとぼとぼと去る）

お仙　（ふかい吐息をして長火鉢の前にぐたりとなつて考へこむ）

（『夕焼小焼明日天氣になあれ』の唄聴えてくる。夕陽、格子窓を染める。豆腐屋のラッパ。省電の汽笛。……唄とぎれとぎれにとほのいてゆく。ひづめの音といななきがきこえる。）

（刑事の影が障子に映る。）

刑事　後藤さんはゐるかね？

お仙　どなたで？

刑事　あ、私だよ。（障子を叩く）

お仙　（障子をあけて）　まあ旦那！

刑事　留守かね？

お仙　いまあの川上先生のとこへ……

刑事　具合はどうだね？

お仙　もう大抵、歩いてゆけるやうになりましてよ、おかげさまで……

刑事　あ、おかみさん、後藤さんはタバコをやつたかしら？

お仙　いいえ、あのちつとも……

刑事　へえ――で、あの、何は、ほれ三公は？

お仙　吸ひますよ。

刑事　パイプかね？　それとも巻莨かね？

お仙　いつもバットのやうですね。

刑事　ぢや、こんな、そらマドロスと云ふやつさ、あれぢやちつともやらないね？

お仙　ええ。

刑事　何かね、明石さんとはおかみさん以前から懇意かね？

お仙　え、いいえ、別に……

刑事　かくさなくたつていいんだよ、失禮だが、おかみさんが本牧のほれキヨ・ホテルにゐなさつた頃のことさ、馴染みだつたつてえぢやないかね、つまり明石さんがアメリカへいつちまふ前のことさ……

お仙　まあ旦那いやですねえ！

刑事　は、は、は、おかみさんも男殺しだねえ！

お仙　えつ？

刑事　びつくりしなくたつていいさ、そ、その眼だよ、そいつで殺すんだから大丈夫さ。

お仙　（煙管を格子から出す）　失禮。

刑事　やあ、ありがたう。これで煙管と云ふやつもうまいもんだね。（返して）いや大きにお邪魔……

お仙　あのお茶ひとつ……

刑事　いや、あづけておきますよ。（去る）

（『夕焼小焼の唄』とぎれがちに聽える。夕陽はうすれて來る。うすぐらいなかにお仙はしよんぼりと考へこんでゐる。ひづめの音といなゝき。三吉が飼餌をやつてゐるらしく『どうどう』と云ふ聲がきこえる。と、一郎が戻つて來る。）

一郎　只今！

お仙　あゝお歸りかい、お前いい子だから、一走りお使ひにいつてきておくれな。（囁く）

一郎　うん。（出てゆく）

（自動車の警笛――省電の警笛、電氣がつく。）

（お仙力無く立上つてそれから食卓を出して調へる。）

（馬丁の三吉がのつそりと飼餌桶その他をもつて土間へ入つてくる。）

三吉　大將は？

お仙　川上先生とこへさ……

三吉　明石の野郎、お邸へ喰ひこんだつてえぢやありませんか？

お仙　ああ、もうそんなこと、どうだつていいぢやないかね。

三吉　何がいいもんかな、あの野郎、どの位うちの大將の世話になつてゐるかも忘れやがつて……メリケン踊りの曲馬師が……

お仙　何を云つてゐるんだねえ、それよか川上先生とこへ迎ひにでもいつといでなね。

三吉　ああ、さうだつた。（急いで去る）

一郎　（入つてくる）只今！

お仙　お歸り、御苦勞だつたね。

一郎　（低聲に）母ちやん、誰もゐないの？

お仙　ああ、何だい？

一郎　いまね、明石の小父さんが……

お仙　えつ！

一郎　（障子窓の外を指して）こ、これをくれたぜ。（双手からアメリカ銀貨がこぼれおちる）

お仙　し、しまつておくんだよ、父ちやんにめつかると叱られるからね。とられつちまふよ。誰にも、默つて、默つてゐるんだよ。

一郎　ああ！

お仙　（障子の方を見ずに）駄目、駄目だよ、あとでさ、あとにしておくれな。

明石　（姿は見えない）だつてお前、さつき一時間ばかりたつたらつて云つたぢやねえか。

お仙　二時間もたつてゐるぢやないか、もうす、すぐ歸つ

てくるんだよ。

明石　いけねえなあ！　馬見場裏でルウレットの場が立つてゐたもんだからついひつかかつちやつた。

お仙　へん、おきまりを……またすつてんてんなんだらう？

明石　なあに大當りよ。ふところに生きのいいやつがザクついてゐらあ。

お仙　甘く云つてゐるよ。

明石　大丈夫かい？

お仙　誰が――いつまでこんなでゐるものかね。

明石　ほんたうか？　ほんたうか？　（顔を出す）

（ひづめの音といななき。）

お仙　いけないよ、早く、早くさ！

（明石慌てて去る。暫時の間。後藤、三吉に介添へられて戻つてくる。）

後藤　誰かきたのかい？

お仙　いいえ。

三吉　變たな、只つたいま黒い影がそこの窓下からすうつと消えやがつたが……

お仙　ああ、刑事さんさ、ほらこないだも二度ばかり見えた成瀬の旦那だよ。

後藤　また來たのか?!　何だつて？――いやさうだらう、さうかもしれねえ。

お仙　何だい、お前さん、また變に勘ぐつちや困るぢやないか、ああ何だね――また中村にでもいやな智慧をつけられてきたんだね。

後藤　ふざけるない。（上る）

一郎　お歸り！

（勝手口で『こんちは毎度どうも……』と云ふ聲がする。お仙はとりに立つ。）

後藤　ついでに一本つけてくれ。

お仙　いいかしら？

後藤　よくつてもわるくつても仕方がねえ。

三吉　大將！　酒だけはおよしなさい、ね、そいつあいけませんよ、え!?　川上先生だつて仰有つた、もしうみでもしたらつて……

お仙　さうだらう!!

後藤　いいつてことよ。今夜はどうしたつて邸へ出かけるんだ。話をつけて來なくちや……

お仙　お前さん！

後藤　えつ!?

お仙　いやに氣がたつてゐるぢやないか。

後藤　なあに――その上で一切形をつけてやるんだ。

お仙　いやだねえ、そんなに眼を据ゑて……

後藤　茶碗をかしてくれ！
お仙　えつ！　いいのかい？
後藤　いいともさ、うんだところでそれつきりだ。できものや傷口ばかりぢやねえ、人間と云ふ人間、いやこの世の中の全體がうんでゐやがるんだ。はやくふつきつちまはなくちやいけねえ。ごまかしのかさぶたをよ！
お仙　妾にものませておくれ！　氣がくさくさしちまふ……
……（のむ）
（この前から一郎競馬の玩具を疊の上でやつてゐる。三頭立てで、絲車をくると竝んで走り出し、どれかが一着になる仕掛になつてゐる。）
三吉　俺ないこつちにかけるよ。
一郎　さうかい、僕あスヰテンだ。父ちやんがこいつにのつてゐるんだぜ。
三吉　スヰテンは栗毛ですよ、白ぢやありませんよ。
一郎　いいんだよ、三頭の中一等はやいからスヰテン號にしたんだよ。
三吉　そりやづるいや。
一郎　いいんだい！
お仙　三ちやん馬鹿だねえ、いいかげんにしときよ。
一郎　さ、いいかい――用意――ドン！
（絲車を廻してゐると一頭の白馬が倒れる。）

一郎　やつ！　スヰテンの奴倒れちまやがつた！
後藤　馬鹿！（一郎をなぐる）
お仙　（その腕をとめて）まあお前さん！
後藤　ええ離せ、離せ、こいつまでが俺を馬鹿にしてやがる。（ぢつとひきすゑて一郎の顔を見詰める）あつ！　そつくりだ！　そつくりだつ！（つきはなす）
（一郎泣く。三吉抱へて去る。）
お仙　何を云つてゐるんだねえ。え？　お前さん！
後藤　――（空を睨めて總身をふるはせてゐる）
お仙　いや、いや、そ、そんな恐い眼をしちや……、ね、昔、そんなに昔でもない、ほらハマのさ、ホテルへ通つておくれだつた頃の、あの元氣、あの時分の心持をさ、はやく思ひ出しておくれな！　ね、妾の顔や姿はそんなに變つたかしら？　そ、そんなにお前さんの心をひきつける力がなくなつたのかしら、妾の心はこれつぽつちだつて變つちやゐないんだよ、ね、こ、この手を握つて……しつかりと、さう、而してそつちの手をかう肩へかけて……さ、妾はのむんだよ、いいかい！　のませておくれ！　ぐつと……よく妾の唇をわつてのましたぢやないか、月がさしこんで、波の音がすぐあしもとで鳴つて……千鳥が泣いた晩のことおぼえてゐる？　妾やどんなことがあつたつて忘れやしない。醉つて云つたことまで

もさ『千鳥も泣きます、妾も泣きます！』つてと、お前さんは船唄を唄つてくれたぢやないか！
後藤　さうだ！　俺ああの唄もずゐぶん唄はねえなあ！
（ぐつたりとなる）
（ひづめの音といなゝきの聲。）
お仙　一郎！！　酒をもつてきておくれ！
三吉　へいーさ。一ちやん。（隘て）
一郎　（德利をもつて出る）はい！　（去らうとしてアメリカ銀貨をふりおとしてゆく）
後藤　（ちつと見てひろふ）こ、こりや！　アメリカ銀貨だな！
お仙　まあ、あの子どこからもつて來たんだらう!?
後藤　一郎！　一郎！
一郎　（出てくる）なんだい！
後藤　こ、こいつをどこからもつてきた！　え？　ど、どこからもつてきたんだ？
一郎　――
お仙　ひろつたんだらう？　えさうなんだらう？
一郎　ああ、ひ、ひろつたんだ！
後藤　どこで？　さ、どこでひろつたんだ？
お仙　馬見場さ、それにきまつてるぢやないか、弗銀なんかよく馬見場にやおつこつてゐるよ。あの草つ原へいつて見るがいいやね。
後藤　ああ――みんな仇敵だ、みんながみんな仇敵なんだ。俺が、俺が何もしらねえと思つてゐやがる……
お仙　な、何をさ、何だつてお前さん！
後藤　俺は何もかもきいたんだ、俺は何もかも知つてゐるんだ。て、てめえ、キヨにゐた頃、俺よかさきに明石と馴染んでゐやがつたんだらう、奴がシスコへ流れる前のことよ。
お仙　（笑ふ）何んだねえ、いまさら。そりや妾やかたぎさんぢやなし、いつ、誰が生娘だと云つて賣込んだい？キヨにゐた頃からの何もかもを知つての上で一緒になつたお前さんぢやないか、それを……戯談もいいかげんにしとくがいいや。一緒になる前、誰それとどうのかうのつて、どうせ妾や女だよ、獨りつきりの女、みよりのない女、それがどうにか生きてゆかうつてにや、この身體をうるよりほか道はないんぢやないか。だから妾やあのキヨで稼いでゐたのさ。お客さんだつて何もお前さんひとりと云ふ譯ぢやなし……そんなことをいまんなつて洗ひざらひ云ひたてる位なら女がひとりぽつちぢや生きてゆけないこの世の中の仕組に惡態口をきく方がよつぽど氣が利いてるよ。え？　お前さん、さうぢやないのかい？　誰だつてさ――みんな少しでも力のある者にや使

はれるんだ、玩具にされても仕方がないのさ。それがありきたりの仕組ぢやないか。お前さんだつて玩具ぢやないか、富豪のさ、立派に玩具にされてゐんぢやないか？

後藤　――（いきなり立上る）

お仙　ど、どこへ？

後藤　ゆくんだ、ゆくんだ。いつてくるんだ。邸へいくんだ。

お仙　晩にかい!?

後藤　とめるな！　明石の野郎が俺をだしぬきやがつたんだ。こ、この俺を不具者にしやがつたんだ。

三吉　大將！　大將！　（とびだして來てとめる）

後藤　ええ、とめるな、ゆくんだ。

お仙　氣のすむやうにするがいいやね。三ちやん。（ついてゆけと眼で知せてよろける）

三吉　おいきた！

一郎　（蔭で）母ちやん！　御飯！　母ちやん！　御飯！

お仙　ああ！　（酒を德利からあふる）

（後藤と三吉とは出てゆく。）

お仙　ああ、ど、どうにでもなるがいいや、（一郎に）お、お前、母ちやんがゐなくなつたらどうするい？

一郎　いやだ、いやだ。僕も一緒にゐなくならあ！

お仙　は、は、は、さうかい、さうかい！

（戸外に風がさやさやと鳴る！。）

お仙　いい子だ！　父ちやんたちどつちへいつたか見ておいでよ！

一郎　ああ。（出てゆく）

（お仙は泥醉してくる、三味線をはづして調子を合せる。）

一郎　母ちやん！　三公が父ちやんをかうして（介添して見せる）坂を下りていつたよ。ああ停車場の方へさ……

お仙　（笑ふ）さうかい、さうかい。（醉がいよいよふかまつてくる。三味線をばつたりとおとしてぢいつと秋風に耳をすませる）

お仙　おやつ！　誰か！　來たんぢやないかい？　え？　一郎！　た、誰か？　（腹這ひ乍ら障子を細目にあける）

一郎　誰もゐやしないよ。

お仙　（笑つて）ほ、ほ、ほ、風たつたかしら――おお！　白粉の花が夜になつたからまつかに咲いたよ！　すつかり秋たねえ……

――幕――

## 第二幕

富豪大原の邸。洋風客間。隣りして食堂舞踏場にされ

てゐる。第一幕のすぐあと。客間の一隅には大卓に飲みものや簡單な食事が招かれた人々のために飾りたてられ竝んでゐる。他の一隅には臺附の硝子箱が据ゑられ、なかには大原の所有たるスキテンが獲得した銀製その他の優勝盃、或はそれを記念すべき幾多のものが納められてある。

大原と夫人とは客間で二三人の客と話してゐる。舞踏場からは斷えず蓄音機による陽氣な舞踏曲が流れてくる。うすもののカーテン越しに踊る人々の影が見える。

客甲　如何です、御踊りになりませんか？
大原　あははは――いや賑やかなことだ。
客乙　奥様は如何です?!　お對手いたしませうか？
夫人　まあ妾など……
客丙　若様やお孃様はお達者なものですな。
大原　さうかね、何しろいつもホテルへいつてゐるやうだよ。若い者たちはああいふことが新時代とでも云ふんだらうな……
（女中が入つてくる。）
女中　明石樣がおいでになりました……
大原　おお……
夫人　ぢやあちらへ……

大原　いや此處でいいだらう。あいつもアメリカ歸りのことだから、踊るかもしれんよ。騎手よりはまづからうがね。
夫人　ぢやこちらへ……
女中　はい。（去る）
大原　君たち明石を知らなかつたね？
客甲　はあ！
大原　こんど家の騎手になつたんだ。根岸へこの土曜日に出さうと思つてね。
客乙　あの――後藤君はどうなりました？
大原　後藤か、あいつは先月目黒で落馬してね、スキテンの蹄鐵が外れたんだよ、第三コーナー――肝腎なとこさ、でも、スキテンに大した傷がなかつたのは何よりだつたが。
客丙　で、その後？
大原　何？　後藤か？　自業自得さ、脚を折り、生れもつかない不具者になつたらしい。おかげで秋の優勝をすつかりふいにしてしまつた。見給へ、こいつが二つも殖えるとこをさ。
客甲　どうも立派ですな。（硝子箱をのぞきこんで）社長？これは以前拜見しませんでしたね？
大原　うん、後藤が落馬の前日にとつた馬匹改良協會のト

ロフキーだよ。
（明石入つてくる。）
明石　御免下さいまし。
大原　や、よく來た、みんな社の若い連中だ。
（明石は一同と挨拶を交す。）
大原　どうだ、踊らんかね？（客達に）この男は以前根岸で騎乘をしてゐたが、ふいにアメリカへとんでいつてサーカスの曲馬師になつてゐてね……
明石　それだけはどうぞ……
大原　いいさ、――で、こんど歸つて來たんだ。性來流浪好きなんだな、それだけ面白い話をたくさん持つてゐるらしい。
客乙　さうでせうな。ひとつ向ふの女の話でも伺ひますかな。（笑ふ）
大原　どうだ？　踊らんかね？
明石　いえ……實は一寸內々お耳にいれておおき申したいことが御座いまして。
大原　ふうん、何だね？
明石　ええ――（一寸氣をかねてゐる）
大原　（客たちに）君達踊つてきたまへ！
（客三人は舞踏場へと去る。）
大原　奧はいいだらう!?
明石　いえ、恐れいります、どうぞ奧樣は！
大原　何んだね？
明石　實は――大變申上げにくいお願ひなので御座いますが、根岸へ出して頂きますことは御辭退申さうかと存じて伺ひましたので……
大原　辭退する？　何故？　どうしてまた急にそんなことを云ひだしたのだ？
明石　――ではこちら樣では何もおききおよびでは御座いませんのですか？
大原　何を？
明石　後藤があの大怪我をいたしました蹄鐵事件に就て……
……
大原　いや――
明石　誰かその害を加へるために出場前スキテン號の蹄鐵へ仕掛をしたと云ふ風に警察へ密告したものがあるらしいので御座います。
大原　ふうむ、いま頃になつて!!　怪しからん話だな。
夫人　まつたく變で御座いますわねえ。
明石　で、その疑ひが私にかゝつてきたらしいので御座います。
大原　君に？
明石　と申しますのも、後藤が、まだお邸の方とはつき

り手がきれてゐませんのに、あの男の怪我をよいことにして私が今度お邸の馬にのせて頂くと云ふことが……

大原　そりや嫉妬からだ。つまり馬は俺の持馬中での名馬スキテンだし、騎手が君だと云ふことになると、まるで根岸の優勝は決つてしまつたやうなものぢやないか、そこで何とかして君に思ひ止まらせる。さうすりや後藤は出られつこないし、外に一寸あのスキテンをのりこなせる男もゐない。自然スキテンも出られない……そこで企むだ妨害さ、それには違ひはないよ。

夫人　さうですとも、さうですとも。

大原　いや面白いよ、そんなことなら尚更君にのつて貰はなくちや……

明石　併し仲間の思惑も御座いますし……

大原　仲間の？

明石　はい、以前が以前で御座いますので……

夫人　そんな昔のことなんど……

大原　さうとも、そりや君が例の賭博事件からこつちにゐられなくなつて、アメリカくんだりへ流れ、曲馬師をしてゐたことは、いくぶん歸り新參の場合に肩身がせまくもならうさ。併し俺の口利きでもう一切は水に流してくれることになり、改めて仲間へ入れたんぢやないか？一體この上どうすればその思惑なんぞを氣にさへないですむんだね？

明石　まあさう御立腹下すつては困ります――實は後藤との御關係をこの際きつぱりとつけて頂きませんことには……

大原　うんさうか、さうだ、それもいいだらう。どうせこのさき役にもたたない不具者をああしておいたところで仕方ない話だからな。

夫人　さうですわ、ほんとにあの男とはもうこの際きつぱり解雇の云ひわたしをして手をきつた方がよろしう御座いますわ！

大原　うん、それなら好いのかね？

明石　はあ、さう願へるならば何よりで御座います。では一日もはやくスキテンをせめて見ませう。まあ御安心下さつて……私の腕をお信じ下さいまし。

大原　いや、ぜひたのむよ。（酒盃をとり）どうだね一杯！

明石　ありがたう存じます。（のむ）賑やかで御座いますな。私もあちらではよく酒場などで踊りまして御座いますよ。

大原　さぞ罪をつくつたんだらうな！

明石　いえどういたしまして、その方は？

夫人　まあ！

明石　いえ眞實で御座いますよ。

大原　甘くいつてゐるぜ、こつちへ歸つて來てからだつて……何もかも分つてゐるんだよ。もう俺の耳にさへはひつてゐるんだ！

明石　えゝ!?　何をで御座いますか？

大原　さうら見ろ、びつくりしたぢやないか、まあその方は當分おあづけにしといて骨折つて貰ふんだな。

明石　はあ、むろんで御座います。

大原　どうだね？　踊つて見ちや……

明石　いえ、こんななりをしてゐますので……

（女中入つて來る。）

女中　後藤さんが御見えで御座いますが……

大原　後藤？——騎手のか？

女中　はい、あの松葉杖をおつきになつて……

大原　ふうむ！

明石　（立上る）私が上つて居りますことは。

夫人　お前ね、（女中に）明石さんが來てゐらつしやることは……

女中　いえ何も申し上げませんでした。

大原　よし、よし、こんな晩にあいつの泣事をきくのは耐らないが……（明石に）併し話は早い方がいいだらう。

明石　はあ、ぜひ！

大原　ぢやこつちへ……

明石　私は？

大原　うむ、君は舞踏場から出てゆきたまへ。よかつたらそこで遊んでゆくさ。何、分りやせんよ。

明石　いえ、いづれまた明日にでも伺ひ直しをいたします。では御免下さい。

大原　やあ！

（明石と女中同時に去る。）

（舞踏場からは拍手や笑聲がどつと起る。）

（若い男女の客が多勢客間へなだれこんできて飲みものをのんだり果物をつまんだりして息を休める。給仕人二人ばかりが急がしげに往來する。やがて再び起る舞踏曲につれて舞踏場へみんなは去る。これよりさき後藤は松葉杖にすがつて扉口にたつたまゝぢいつとこの狀を見てゐる。）

大原　どうだな、脚の具合は？

後藤　おかげさまで不具者になりきりまして御座います。

大原　——

後藤　こ、これを御覧下さい、松葉杖です。脚一本なくしたおかげに、こんな脚が二本殖えましたよ。（淋しく笑ふ）

大原　——（夫人に）お前はあちらへいつといで。

夫人　ええ。（おづおづと立つ）

後藤　奥様にも居て頂きませう。
夫人　えつ!?
後藤　大變お賑やかで御座いますな。ほう立派なお酒や……
……
大原　後藤！　お前は醉つてでもゐるのか？
後藤　醉つては居りません。いくらのんでも醉へないんです。
大原　どうかしてゐるぞ！
後藤　變つてゐると仰有るんですか？
大原　さうさ！
後藤　まあ、どうぞ、今夜はどうあつても伺ひたいことがあつて上りましたんですから。
大原　なんだ？
後藤　私は一體、これからどうなるんで御座いませう？
大原　どうなるとは？
後藤　御覽のとほり私は不具者になつてしまつたのです。もう騎手としてばかりぢやありません……人並の男としては仕事の出來ない身體になつてしまつてゐるんです。
大原　それで？
後藤　負傷をして以來私はお邸から通り一遍のお手當以外溫かいお見舞に只の一度もあづかつてはゐません。
大原　それが不服だと云ふのかね？　療治代でも何でも所要のものは請求してくれたらいいぢやないか。誰も拂はんとは云やしないぞ。
後藤　いえ、私は、そ、そんな金錢づくのことで申上げてゐるんぢや御座いません。人情です。
大原　何？　人情！
後藤　さうです。あんまり人情のなさすぎる皆さんのお仕打が恨めしいのです。
大原　ふうむ、ぢや何か、お前は俺を不人情だと云ふんだな!?
後藤　さうです。さうぢやありませんか、奥様！　あなたにもきいて頂きます。私はいままでこちら樣の玩具同樣に扱はれてゐたんです、恰度子供が玩具をもてあそぶやうに。而してこはれてしまつたからすててしまふ。こんどのことはまるでそれと同じおしうちぢや御座いませんか。私はまつたくこはれた玩具です。みじめだとはお思ひにならないんですか？
大原　ふうん、それだけお前は自分の立場が分つてゐて何の不服があるのか？　こはれた玩具は文句なんぞつけやしないぞ。
後藤　そりや生きてゐませんからね。私は生きてゐるんです。生きてゆかなくちやならないんです。女房もあります。子供もあります。それを玩具同樣に……

大原　よろしい分つた。もう何も云ふな。そこでいままでの療治その他所要のものは充分に請求してもらはう、必ず拂ふ、また拂ふべきものだからね。その代り斷然この際騎手としての雇は解くからそのつもりでゐてくれ。而して目黒の家も厩舍もあのままに立退いてもらひたいんだ。明日にも。

後藤　ぢややつぱり……

大原　えつ？

後藤　明石！　明石がスキテンへ乘ると云ふのは、ほ、眞實なんですな、根岸で……

大原　さうだ、それだけ分つてゐて何の文句があるんだ？

後藤　外の人間ならともかくもです。曲馬師です。人もあらうに明石が……あれは前科者です。それぢやスキテンの奴があんまり可哀相ぢや御座いませんか。

大原　嫉妬だ、みつともない、よさないか、前科者だとしたつて腕はたしかだ。まして曲馬師がなんだ？　それよりお前は明石がお前を裏切つたと云ふこと、それが口惜しいのだらう。

後藤　口惜いとは思ひません。情けないのです。飼犬に手をかまれたも同然だからです。

大原　お前の考へ方はひがんでゐるよ。

後藤　ひがまずにはゐられませんからね。騎手としての私の位置はうばはれる……その上に……

大原　その上にどうした？

後藤　こ、これだけは云へませんや。（泣きたい心をぢつと抑へて）こ、これだけは……

大原　みんなお前の意氣地なしからだ。俺のかかりあつたことぢやない。

後藤　併し旦那！

大原　とにかく俺は今日限ぎりお前にはひまを出す。

後藤　せめてこの一冬、この脚がどうなりますか！

大原　そんな氣長なことは云つてゐられない。明日にでもあの家を出て貰ひたい。むろん相當のことはするつもりだが……

後藤　ぢや、やつぱり明石に……

大原　うむ、明石に根岸をのつてもらふことにきめた。（夫人に）おい。（耳打をする）

（夫人去る。）

後藤　旦那！　明石だけは何とかしてよして頂けませんか？

大原　そんなことは斷じて出來ないよ。

後藤　明石は私にとつて仇敵なんです。仇敵に見返へされるなんて……

大原　そりや時世時節だ。お前の不運さ、見るがいい、こ

の盃を、トロフヒーをさ。スキテンの奴三年に亙つてこれだけしめてゐるんだからなあ、お前たつてスキテンを當代隨一の名馬として認めない譯にはゆくまいが……

後藤　むろんです。それだけに明石のやうな奴をのせたくないのです。ね、旦那、あなたはスキテンを名馬となさるそのお唇で何故、私の腕を認めては下さらないのです？

大原　お前の腕!?　そりやあるだらうが、脚はもうないんだからなあ！（笑ふ）

後藤　そんな無慈悲なことは仰有らないで下さい。お願ひです、この盃にもトロフヒーにもスキテンと私との魂がこもつてゐるんです。さうはお思ひになりませんか？

大原　何を云ふ?!　お前か一流の騎手とか何とか云はれたは誰のおかげだと思ふんだ。それこそスキテンのおかげぢやないか。あれの魂と云ふならいざしらず、お前の魂なぞがなんでこの盃やトロフヒーにこもつてゐるものか？

後藤　そ、そりやあんまりです。そ、そりや……

大原　何故？　さつきお前は自分の唇から玩具だと云つたぢやないか!?　えつ玩具はあくまで玩具さ……

後藤　併し……

大原　併しどうした？　え？　口惜しいか、玩具と云つた自分の唇を恨むがいい。呪ふがいい。

後藤　（昂奮して）今日からは玩具ぢやありませんぞ。

大原　何だと？

後藤　きいて下さい。いままで資本家のあなたと云ふ人間に玩具にされてゐた私は、練習をしろ！　それから養生だ！　それ豫選だ！　優勝だ！　走れ！　走れ！　勝て！　必ず勝て！　と命ぜられるままに動きました。而して、こ、この生命をかけてこの盃やトロフヒーをかちえたんです。

大原　それが如何した。

後藤　そ、それが、そ、それが——いやさうです、さうです。こりやみんな私とスキテンとが協力して今日まで辿つてきたその足跡なんです。いまとなれば私の生き形見なんです。

大原　馬、馬鹿な！

後藤　何をなさる。もう今日限り私はあなたの玩具ぢやありませんぞ。そ、その證據には（よろめき乍ら一本の松葉杖にすがつて立上り）一切を葬つてやる。生き乍らに、自分で自分を葬つて見せるんだ。

（松葉杖をふるつて硝子箱を叩きこはす。）

大原　何をする！　馬鹿め！　おい、誰か來てくれ！　おい！

（舞踏場にむれてゐた男女がなだれをうつて客間へとびこんで來る。而してあれ狂ふ後藤をしつかりと押へる。）

後藤　さ、みんなきけ、俺はこの中で只つた一人の不具者だ。その代りいまこそはつきりと眼のさめた只つた一人の男だぞ。貴樣たちが一晩にさうして踊り狂ふ歡樂の金があつたら、俺の胸は尖らずにもすんだんだ。手遲れ、治療不完全、而して俺は立派な不具者になつてしまつた。だが恥しくはない、見ろ、不具者にもこれ位の復讐は出來るんだ。

（とめてゐる人々をふりはなつて、また松葉杖をふるひ硝子箱を打叩く。）

（請願巡査の私服がとびこんで來る。）

巡査　後藤！　馬鹿なことをするな！　何と云ふ亂暴をするんだ！

大原　大馬鹿者め！　併し君！　戸外へだけ追出してくれればよい。こんなことはなるたけ公けにしたくないからな。

巡査　はい。さあ出ろ！

後藤　出ますよ、出ますとも、井上さん！　お役目はつらいね。

巡査　何を云つてるんだ。

大原　（客に）やあ皆さん、とんだお騷がせをしてすみませんでした。さ、もうひとつ陽氣に踊つて下さい。何もおもてなしらしい支度も御座いませんが。

後藤　（扉口で）どうだ、みんな驚いたか！　俺は俺の生き葬式をやつたまでだ。さ、みんな葬式の唄でもうたへ、杯をあげるなら悔みの杯をあげろ、俺は今日、只つたいま玩具ぢやゐられなくなつたんだ、いや玩具にして貰へなくなつたんだ。（笑ふ）

巡査　まだ出てゆかんのか！

（夫人がおづおづと紙包みの金をもつて入つてくる、而して大原にわたす。）

大原　おい、（巡査に）盜人に追錢だ！　これをわたしてやつてくれたまへ。手切の金だ。

巡査　はあ！（とつて後藤に摑ませる）

後藤　（ぢつと見てやにはに封をきりそれを摑んで）さあ、ひろへ！　俺の、俺の、生き葬ひの撒き錢だぞ！（床へ叩きつける）

――幕――

## 第三幕

後藤の家の外。上手に厩舎、それに隣つて入口、そい

左方に櫺子窓——白粉の花が赤々と咲いてゐる。
灯影は泥醉したお仙の姿を障子にうつしてゐる。とりとめもないつまびきの三味線がとぎれてはつゞき、つづいてはまたとぎれる。厩舍からはひづめの音。淋しげないなき。
自動自轉車の音が近づいてくる。止る。やがて——明石がそつと出てくる。

明石　お仙！　お仙！

（三味線の音止む。細目に開いた障子の隙からお仙の顏が覗く。）

お仙　だあれ!?

明石　（傍白）醉つてゐやがる。俺だよ。

お仙　ああ！（障子を明けて）戯談ぢやない！　妾や御不動樣まで無駄足をしちまつたぢやないか!?

明石　さうか、そりやすまなかつたなあ！

お仙　どこで浮氣をしてきたのさ!?

明石　なんの、またいつもの傳であてにはならねえと思つたから、俺あひとつぱしり自動自轉車をすつとばしてお邸へいつてきたんだ。

お仙　えつ!?　おや、何と出逢つたんだらう？

明石　よく御存知だな！

お仙　「それくらゐのこと、知らいで何とせうぞい」——さ……で、旦那に逢はずとひつかへしたつてえのかい？

明石　なんのこつちは用ずみさ。ボールダンスが始つてゐたのに惜しいことをしちまつた。

お仙　面白くもない。この節のお孃さんだの奧さん方と來た日にや油斷も何もなりやしない。

明石　變に氣を廻しなさんな……そんなんぢやねえや。

お仙　どうだか分るもんかね、ハマのチャブ屋あらしが手解きで、メリケンくんだりへ流れたあげく、眼色毛色の違つたとこを一わたりや二わたり修業してきたお前ぢやないか……

明石　さうかもしれねえ……

お仙　憎らしい脣だねえ——でもお前、まさかにいまとなつて……

明石　何を？　ふん——何を云つてやがる、忘れてなるもんかな。（お仙の手をとつて接吻しようとする）

お仙　いけないよ、なんだねえ、格子先でさ。

明石　は、は、こいつあとんだ小格子だ！

お仙　で、何さ？

明石　手間どれようぜ、あの胸だ、それにいま頃はみつちり小言をくつてのお拂ひ箱だらうよ。

お仙　そ、そんなに話が甘くいつたのかい？

明石　譯はねえ、ほんの一くさり不貞て見せたばつかりよ。

お仙　思へば可哀さうな氣もするねえ！
明石　――
お仙　怒つたのかい？
明石　――
お仙　よう、怒つちや、いや！　お上りなね！
明石　いやだ！
お仙　どうしてさ！
明石　今夜はきつぱりと話をつけて貰ひてえんだ。
お仙　話つて？　どう？
明石　逃げるのよ。お前が逃去るのさ、此處の家を！
お仙　で、お前さんは。（格子へもたれる）
明石　醉つてゐやがる！　ちえつ！　俺あ何もしらねえつもりで明日からスキテンをこの馬場でせめてゐらあね。
お仙　そ、そんなことつて……
明石　なあに、人の噂も七十五日よ……
お仙　で、妾はどうなるんだい？
明石　當分はハマへいつてゐるさ。
お仙　お前、まさかに妾をだますんぢやなからうね。
明石　だます？
お仙　ああ、だますのさ、妾をハマへやつといて、仕誼によつちやキヨへでもまた賣らうつてんだらう？　え？　どうだ、妾の眼は何たつて見とほしなんだよ！

明石　叱ツ！　何てえ醉をだすんだ、まあ出て來たらどうだ？（窓を離れる）
（やがてお仙しどけない姿態で戸口を出てくる。遠く法華太鼓の音。）
明石　見ねえ、月の光りが向うの路を照してゐるだらう。馬場はまつぴるまみてえだ。ほれ、ここんとこへ來ねえ、こいつ向うから見ると不思議とかげになつてゐやがるのさ。
お仙　（吐息をする）
明石　苦しいのかい？
お仙　久しぶりのやけ酒だもの、かんべんして……
（二人は厩舍前の腰かけにかける。）
明石　苦しいか？。（肩へ手をやる）
お仙　ああ！　いいお月樣たねえ！
明石　――
お仙　お前、ほんたうにこんどと云ふ今度こそは實意を見せておくれなんだらうね？　妾やいままで散々嘘はかり喰はされて來たんだからねえ。
明石　へつ！　お前だつて嘘を喰はせもしたらうぢやねえか。
お仙　そりやお前、ほれ嘘も方便さ……だけどこれからは眞平だよ、ああ喰はすのもいやなら喰はされるなんて尚

更のことさ……思つても御覧な！　ハマのキヨホテルで稼いでゐる中、十八と云ふ身空でさ、心底惚れぬいたお前さんが、ちりあくたでもすてるやうに妾をおいてメリケンへいつちまふ、あとで妾や只でない身體をもてあましながら一體どうしたとお思ひなんだい？

明石　お前こなひだつから、只でない身體、只でない身體とよく云ふが、そ、そりや眞實のことか？

お仙　なんでそんな嘘をつくもんかね。そ、それが身二つになつて……

明石　ぢや、あの……

お仙　さうなんだよ、あの一郎が……一郎はお前さんの子なんだよ！

明石　さうか！

お仙　だからいまの何にこの身を任せたのも、一時の浮氣心や榮耀榮華をしたいためと云ふぢやなし、生れてくる子のために、また妾のためにだつて、生きてゆくにやややつぱり男にたよる外はありやしない。女つて……

明石　弱いものだつてえお極り文句か！

お仙　お前さん、戲談や上の空でききながす氣なのかい？

明石　なあに、うつかり脣がすべつたんだ！　まあ話しねえ。

お仙　それがまる五年振、ふらりとお前さんが戻つて來たぢやないか。たよるに事を缺いてこの家へさ……

明石　五年だつたかなあ。俺あ十年も流れてゐたやうな氣がすらあ。その間中內地が戀しくてならなかつたんだ。サアカスへ入つて曲馬師をつとめてはゐたがお前のことが眞實忘れられなかつたんだ。ある時なんぞは見物の中によ、お前そつくりの女がさ、ほれキヨにゐた頃の洋服姿、まるであれよ、ぢいつと眼を据ゑて曲馬の太夫を見詰めてゐるぢやねえか。俺あ鞍の上で逆立をしてゐたがはつとむねをつかれて危く落馬さ。

お仙　ほんたうの話かい？

明石　それ見ねえ、お前だつてもからかひづらできいてゐやがる……

お仙　かんにん！　妾や嬉しいんだよ！

明石　そこへもつてきて耳にしたのが馬券の復活、こいつあ昔どほりに景氣も立たうかと舞ひ戻つて來た譯さ。

お仙　……妾やお前から、どうでも何をしくじらせなくちやお前の立つ瀨がないときいたとき、あ、あんな恐ろしいことまでも……

明石　あいつをやつときさへすりや後腹やめずだつたものを……

お仙　でもお前、それよか蹄鐵の方がよからうつて智惠を出したんぢやないか。

明石　うんあいつはあつちで曲馬師仲間のよくやる手さ。女の掏摸、賭博で負けた腹いせ……しかもあいつゐ萬座の中で恥をかかせてやれるからなあ……

お仙　でも……

明石　さうよ怪我の功名ならいざしらず、怪我過ちになつちまつたんぢや仕様はねえ。

お仙　わたしやどうなることかと心配してゐたよ……それに今日も刑事さんがさ……

明石　なんのあの手順が素人衆に見すかされてたまるもんかな！

お仙　お邸ぢやどうだつたんだい？

明石　譯やねえ、お邸でもその疑ひつてえ奴は怪しからんと云つてたよ。その上何はお拂ひ箱のこつちは根岸からお抱への身さ。

お仙　まあ、よかつたねえ！　どうなることかと……

明石　どうなるもかうなるもあるもんかな。まあさこつちへおよりよ。

お仙　あれ人でもくると……

明石　なあに、お月様が見張つてゐてくれらあ！

（厩舎でひづめの音、いななき。）

明石　ええ、びつくりさせやがる、ばかにはずんでゐると見えるなあ！

お仙　はずむ筈さ！　この頃は三公かのそのそひつぱり廻す位が關の山だものね！

明石　さうか、明日からさぞ骨が折れるこつたらうなあ。

（厩舎の戸をあける）

お仙　夜ぢやないか！

明石　大丈夫だよ、ほれ見ねえ、向うの路は見通しだぜ！

（戸が開く）

（中にはスキテンがつながれてゐる。月影は奥の窓からもさしこんでゐる。遠く法華太鼓の音。）

明石　どう！　どう！　ひどくはずんでゐやがる！　まあここへ坐らうぢやねえか！

（積ワラをほぐして二人はすわる。）

お仙　初めてキヨで逢つた晩さ……

明石　何をとつぴやうしもねえ……

お仙　ほらキヨで……

明石　うん、違えねえ、このワラですつかり思ひ出したよ……

お仙　お月様がこつちの窓から枕許へさしこんでさ……鉢植の白粉の花が生々と咲いてゐた……お前さんはあのときひどく酔つてゐたぢやないか!?

明石　さうだ！　俺が何んでもベッドの綻びを見付けてワラをしやにむに摑みだしたんだつけなあ！

お仙　さうさ、それが初りで妾も醉つたよ、醉つたともさ、初めて覺えた戀心つてあんなものかしら、この胸がわくわくして醉はずにやお前の顏さへまじまじとは見られなかつたんだものねえ。思へば妾もうぶだつた……醉つた揚句が二人してとうとベツトのワラを山のやうに床へつんぢまつてさ……

明石　は、は、そいつを部屋中しきつめちやつてよ、二人でのみ倒れたまんま朝まで眠ちまつたんだなあ！　あいつアほれ十二天の崖つぷちで投身のあつた晩だつたぜ。

お仙　あの晩だつたかしら……

明石　何がさ。

お仙　妾が死んぢまはうと思ひつめてゐたのは！

明石　さうよ、いやにお前の氣がめいつて、めそついてゐたとこを俺と馴染んだのがそもそもよ。

お仙　（身ぶるひして）　あのとき死んぢまつてでもゐたら……

明石　どうなるものかな。死ななかつたればこそかうしてまたいい夢が見られると云ふもんだ。（お仙を抱く）

お仙　お前ちつとも變つちやゐないねえ。

明石　さうでもなからうよ！（ぐつと抱く）

（ひづめの音と共にいななく。）

お仙　あつ！　びつくりするぢやないか！

明石　ヘツ！　妬(や)いてゐやがる。（右手て一方の扉を内側からとぢる）

お仙　大丈夫かい？　え？

明石　お仙！

お仙　えつ？

明石　いいか、不具者(かたは)めが俺の情婦(いろ)をねとりやがつたんだ！　俺が誰にはばからなきやいけねえつてんだ！

お仙　だつてお前！

明石　いいつてことよ！（他の扉をまた内側からしめてしまふ）

（暫時の間――）

（家の內で一郎の聲「母ちやん母ちやん」）

（法華太鼓と犬の啼聲。）

（後藤ぢつと昂奮をおさへ乍ら三吉に介添(かいぞ)へられて出てくる。）

三吉　ね、大將！　まあ氣をお靜めなさいよ！　ね、大將、俺あたのむから……

後藤　たしかにありや明石の自動自轉車(オートバイ)だ。畜生！　どうするか見やがれ！

（家の內から一郎の聲「母ちやん！　母ちやん！」と云ふ。）

後藤　見ねえ！　三吉！　一郎が泣いてゐるぢやねえか！

三吉　大將！　大將！

（後藤はころがりこむやうに家の內へ入つてゆく。やがて障子をあけてぢつと戶外を見る。厩舍の內でスキテンがけたたましくひづめをならしていななく。）

（後藤まろぶやうに鐵砲を杖にして出てくる。）

三吉　大將！　大將！　穩便に、ね、大將！

後藤　こ、これ以上、男として我慢が出來るか!?

三吉　危い！

後藤　ええはなせ！　はなせ！　厩舍にゐやがるんだ。そ、それに違えねえ。

（厩舍の扉が一寸あいたが、急にまたしまる。）

後藤　うぬつ！

三吉　いけない！　大將！　危い！

（途端に發砲する。馬が倒れる音！）

三吉　大將！　と、とんでもねえ！

後藤　ええはなせ、見定めねえうちは……どうあつたつて承知が出來ねえ……

（二人もみあひ乍ら倒れると、三吉は漸く鐵砲をとり上げて側へ投げる、後藤は這ひよりとうとう厩舍の扉をあける、と、スキテンが膝頭を揃へて前に投げだし、苦しげにうめき乍ら、半身をのりだす。）

後藤　やつ！

三吉　おゝ！　大將！　こ、こりやスキテンが！

後藤　ううん！

明石　馬鹿め！　スキテンを打ちやがつた！

（明石、つづいてお仙がすばやくも身をひるがへして戶外へ出る。明石はお仙をかばつて身構へる。）

後藤　うぬ！　（起き直らうとする）

明石　何をしやがる！　（蹴倒す）

後藤　ああ、スキテンが、スキテンが……許してくれ、許してくれ！　（急に笑ひ出す）だがいいんだ、いいんだ、これで何もかもいいんだ。日本一の名馬も日本一の騎手もみんな同じやうな不具者になつちまつたんだ。こはれた玩具になつちまつたんだ。

三吉　だつて大將！　（泣く）

明石　は、は、日本一か、まだその夢はさめねえんだな。今日から俺は昔の情婦をつれて歸るからな。

後藤　なんだとお仙！

お仙　ああ妾やいくんだよ！　妾やものと古巢へ歸るのさ。それだけの話さね。

後藤　うぬ！　ど、毒婦め！　賣女め！

明石　手前はさしづめ孵卵器の役廻りだつたのよ！

（一郎の聲家の內から「母ちやん！　母ちやん！」ときこえる。）

お仙　さう、さう、可愛い雛子が殘つてゐたのをすつかり忘れてゐたねえ。（家の內へ戾らうとする）

三吉　大將、お、おらもう我慢が出來ねえ。（いきなり、投げすてゝあつた鐵砲へ手をかける。）

明石　何んだと!?（メリケンを喰はせる）俺のメリケンも知らねえで……ざまあ見ろ！

（お仙はいそいで家の內へ入つてゆく。）

後藤　さあ、ふみにじれ、ふみにじれ、こ、このこはれた玩具を思ひ存分ふんでふんでふみつぶしてくれ。（泣き喚き悶える）

明石　（笑つて冷やかに見下してゐる）

お仙　（一郞を抱いて出てくる）なんだい！　まだお前さんこはれた玩具をふり廻してゐるのかい!?　術のない人だねえ！　醉つたお酒もすつかりさめちやつた！　ね、坊や母ちやんとゆくんだらう？　え？　お前だつてこはれた玩具なんかすぐチヤイしちやふねえ！　（笑ふ）

――幕――

（大正十四年十月初旬稿）

# 想思草

人　物

おきよ　阿片中毒の娼妓
おとし　若い娼妓
おとよ　妓樓の女主人
佐藤辰夫　福原商事會社出張員
戸川茂　堀井商會支店長
李源　支那人ボーイ

**舞臺**　サイアム、バンコツク市。支那街に在る日本妓樓、旭ホテルの一室。上手に扉(ドア)。そこから階段にて階下の酒場(バー)に通じる。

正面に窓二つ。窓に近くオリーブ、タマリンドの鬱蒼たる茂み、それを透して、メナム河の水が光り、河沿ひの埠頭に横づかつた日本貨物船、福州丸の灯が見える。下手、壁際には、白蚊帳のかかつた寢臺(ベツト)。部屋の床一面に、畳代用のマツトが敷きつめられ、あたりには籐製の椅子、卓。外に座布團、鏡臺、古ぼけた三味線などが取ちらされ、赤いランプがともつてゐる。初秋の夜、九時近い。近所の支那茶館から、かまびすしいはやしの音。

（無人――扉の外、階段の下から騒がしい足音、罵る聲々。おきよが覺束ない發音で、「Get away! Kedamon!」と叫ぶ聲。おとしの「姐さん！　姐さん！」となだめるらしい聲。）

（暫時して、扉を開け放し、酔つて昂奮してゐるおきよが、轉るやうに入つて來る。あとから、おとしがそれをなだめるやうに、おど／＼とついて來る。二人とも、大形模樣のメリンスゆかたに、伊達卷をしめてゐる。おきよは、鏡臺わきへのけぞるやうに身を投げだす。）

おとし　危い！
おきよ　え？
おとし　まあ大丈夫？
おきよ　心配おしでないよ！
おとし　だつて――
おきよ　やかましいはやしだね、好い氣になりやがつて…
……
おとし　まあ！
おきよ　いくら賣物、買物だつてさ、マダムもあんまりぢやないかね。貴族々々つて、シヤムの王様だか、乞食(おこも)だ

か知れたもんぢやない。
おとし　ほんとにいやになつちまふわね。お客だともつて默つてゐりや、いゝ氣になつてつけあがるんだもの、いけすかないつたらありやしない。
おきよ　それも娼賣をしてゐりやこそさ――だつて今夜は今夜はつかしは、何が何だつて……ね、としちやん、妾の氣持も察しないでさ、あんまりだよ。
おとし　姐さん！
おきよ　ないのかい？　え？　飮ませておくれよ？
おとし　駄目、駄目、自棄酒だけはよして頂戴ね、後生だから……
おきよ　お前さん泣いてゐるんだね？
おとし　――
おきよ　お前さんの親切は忘れやしないよ。だけど今夜つて今夜だきや……
おとし　だから姐さん！
おきよ　え？
おとし　どんな都合したつて、出帆前にやもう一遍よるからつて――あゝ云つてお歸んなすつたんだから……
おきよ　あの人が來てくれるとお思ひなのかい？
おとし　そりや……
おきよ　妾やまた逢へるとは思へない――もう何時？
おとし　八時――廻つたかしら。
おきよ　そら御覽なね！　ね、としちやん！
おとし　え？
おきよ　自棄酒をのむなつてお云ひだけれど……こんなで別れなきやならないなんて。
おとし　それほど惚れてゐ乍ら、どうしてあの人の云ふ通り、内地へ歸して貰はないの？　え、姐さん！　妾にやそれが……
おきよ　解らないつてお云ひなのかい？　そりやこつちが、心の底から惚れてゐればこそさ、この上可愛い男の足手纏ひになつてまで、面倒をかけたかあないんだもの。
おとし　だつて姐さん！
おきよ　え？
おとし　心底惚れた色戀つてものは、さうしたもんぢやないと思ふんだけど。
おきよ　と云ふのがたゞの理窟さ。妾の氣持の解らない筈がないぢやないかね、ぢれつたい――妾やたゞの身體ぢやないんだよ。
おとし　――
おきよ　あ、あれがなくつちや、一日だつて生きていけない妾ぢやないか！
おとし　――

おきよ　いやだ！　いやだ！　ちよいと、お三味線をとつておくれな。

（おとし、默つて立上り、三味線をとつておきよに渡す。おきよ、ひかうとしたが涙をぢつとのむ。）

おとし　姐さん！

おきよ　え？

おとし　――。（下唇を嚙む）

おきよ　解つておくれかい？――因果なんだよ！

（二人はぢいつと涙をのむ。また階段の方が騷がしくなる。階段を驅け上らうとするらしい靴音、醉つた聲で"Say mad m ! where gone miss kiyo !"と怒鳴るのを女達のなだめる聲々。暫時して漸く靜る。おきよ舌打をして三味線を下に置く。とたんにおとよが入つて來る。）

おとよ　困つちまふぢやないか！　え、きよちやん！　あの位の人、なんとか巧く醉ひつぶしてくれりや好いのに……どうにもかうにも、妾の手にやおへないんだよ。

おきよ　すみませんね、マダム！

おとよ　すみませんねつて、お前さんの氣が知れない。あんまりだよ、え、きよちやん！　お客をおきつぱなしつて法はないぢやないか？

おきよ　あゝしつこくされちや、ケダモノめつて氣にもなるぢやありませんか？　それとも妾か……

おとし　まあ姐さん！

おとよ　何も妾や、叱言を云ひに上つて來たんぢやないんだよ。くどく云ふやうだけどあの人は貴族で、陸軍の大尉さんでさ、おたからだつてあのとほり、使ひ放れのいい方だし、家にとつても、お前さんにとつても、わるいお客ぢやないと思ふんだがね。そりやいままでなら妾だつて、佐藤さんて立派なお客をとつてゐたお前さんだもの、佐藤さんの顏をたてゝも遠慮して、厭なことなんぞ云ふ氣はないけど、その佐藤さんだつて、今夜はもうお立ちなさると云ふことだし、それにいまとなりやあの人が、千五百ピコルも出して、身受したいと云つて下さつても、つひぞお前さんは、うんと云はなかつた人ぢやないか。さうすりや別にいままでだつてあの人への、義理立てえ譯もない筈たし……ね、きよちやん、今更ふるアメリカに袖はぬらさじつてなやぼを云ひ出すお前さんでもなからう、それも今夜かいま、あの大尉さんをお客にとれつてんぢやないんだよ。うまく後釜に据ゑられるやう、機嫌だけでもとつといたら……

おきよ　えゝ、えゝ、マダム、もう解つてゐますよ。そりや妾だつて、いまさらお客の選りごのみをするんぢやないけれど、ね、マダム、今夜つて、今夜だけは、妾の一

生に一度あつて、二度とない晩なんですからね、忘れられない晩なんですからね。

おとよ　え？

おきよ　佐藤さんの身受の一條だつて、妾か厭だの、好かないだので、首をふらなかつたんぢやないつてことは、マダム、あんただつて知つてゐてくれる筈ぢやありませんか？　內地へ歸るのは、自分の生命を縮めに歸るのも同じだつてえことは、判つてゐる筈ぢやありませんか？　愚痴を云ふ譯ぢやないけれどね、マダム、妾だつて、あの臺灣樓の王(ワン)のおやぢさんさへ、無理やり旦那にもたされなきや、こ、こんな身體にやならなかつたんですからね。（泣く）

おとよ　きよちやん！　お前さんつたら、またそれを……

おとし　マダム！

おとよ　あゝ――解つたよ。解つたよ。ぢや今夜は、もう何も云はないからね――あの何の――佐藤さんのお船は何時だい？

おとし　荷役の都合で、はつきりしないけどとにかくトランクでも運ばせておいて、また來るからつて――なんでも十時、ね、姐さん？

おきよ　あゝ、さうはお云ひなさつたけど――。

おとよ　ぢやとしちやん、たのんだよ、いゝかい？

（おとよ退場。）

おきよ　人の氣も知らないで……

（これより前から、荷役のクレーンの音がひときはたかくきこえる。）

（急に雨の音。）

おきよ　またかい？

おとし　えゝ、ひどいふりだこと。

おきよ　むしくするから、降つたあとはさつぱりするよ。

おとし　あら、濡れちまふ！（窓をしめて）佐藤さんは運いのね、福州丸はまだ荷役がすまないんだもの、明日の朝になるかも知れないわね。

おきよ　一時延しは罪だよ……

おとし　戶川さんがついてる癖に、氣が利かないつたらありやしない……

おきよ　待たれるのはその人なんだらう。

おとし　まあ姐さんつたら……

おきよ　いゝわね、としちやんは、戶川さんはこの土地にゐつきりみたいな方だから、そこへいくと妾なんか、今夜別れたらそれつきり、一生たつても、また逢ふことなんて出來やしない。初めて逢つたときにや、神樣つてものは有難いと、つくぐ拜む氣にもなつたけど、いまとなりや、反つてそれが怨めしいんだもの……つい愚痴も

こぼしたくなるのさ。御免なさい。すつかり酔がさめちやつた。

（馬車の鈴の音が遠くからきこえる。二人はふつと默りかへつて顔を見合せる。鈴の音止む。間もなく階段を上つて來る足音。李源扉を開ける。）

李源　お――き――よさあん！　お――客さあん。

（戸川と佐藤とが入つて來る。二人とも手巾(ハンケチ)を出して、雨の雫をふいてゐる。）

おとし　いらつしやいまし。

おきよ　まあ！

戸川　待つたらう？

おとし　は無いでせう！

戸川　いや、失敬、失敬、實はね……

おきよ　好い御機嫌ね！　どこで？

戸川　どこつて？　困るな！　あれからトランクを積みこんでさ、ホテルで飯をすませると、こいつも亦お別れだからつてんで、トロカデロ（伊太利料理店）で一杯あふつて、それから馬車をとばして此處まで來る途中クキンスロードから公園の並木道を一廻りおかげでづぶぬれになりかゝつたよ。

おきよ　おぬぎなさいな！

佐藤　待つたらう？　わるかつたね。（上衣を脫ぐ）

おきよ　あきらめてゐましたわ。

おとし　お船は？

戸川　十時さ、あと一時間。

おきよ　ぢや――やつぱり今夜ね？

佐藤　あゝ――お米と相乘だ。

戸川　人間を積むのは佐藤君一人だつてえ話さ。クレーンで揚げるがものはないから、まあ十時までは別れの酒がのめる。

おきよ　のむわ、のむわ、ね、としちやん、お酒！

戸川　さ、酒だ！　酒だ！

（おとし、ベルを押す。）

（李源扉を開けて顔を出す。）

戸川　李！　酒だ！

李源　支那酒？　セイゴンビーヤ？

戸川　兩方だ！　うんと持つて來い！

李源　オーライ。

（李源顔をひつこめる。）

戸川　おいどうした？　無理もない。だが一刻千金だぞ、さう迷つちまつちや仕樣がないぢやないか、え？

おとし　姐さん！

おきよ　滅入つちまつて、御免なさい。のんだお酒もさめちやつた。

佐藤　またのんだのかい？
おきよ　わるい？
佐藤　――
おきよ　のまずにゐろつたつて、無理ですわ。
戸川　雨のやつ、晴れたた！　窓を開けろよ。あつい！
（おとし、窓をあける。李源、扉をあけて酒を持つて來る。而して退場。）
戸川　さ、酒だ！　飲むんだ！　飲むんだ。
おきよ　――
佐藤　お飲み！　僕も飲まう！　あゝ、みんなして飲むんだ！
おきよ　醉つて、醉つて、お別れだわね！
戸川　いまもトロカデロのヴエランダで話したんだが、三月前、この男が來たて頃はいつもあそこでぼんやりと、獨りウイスキイをなめてゐたものさ。淋しい、しよんぼりしたこの男の姿が、いまでも眼先にちらつくよ。そいつを俺が馬車へのつけて、こゝへひつぱつて來たんだが、あれがそも、きよちやんとの馴れ初めさ。
おきよ　そんなこと……何も今更。ね、後生だから……
戸川　まあいゝさ。それからだせ……
おとし　あなた！
戸川　いゝつたら……間もなく君が熱病で仆れる。病氣も有難いやね、ああなると……
おきよ　戸川さん！
おとし　およしなさいつては。
（おきよ、突伏して啜り泣く。佐藤默つて酒をあふる。おとし戸川にめくばせする。戸川一寸間のわるさうな顔をしたが默つてうなづき立上る。）
戸川　あゝ、すつかり醉つちやつた！　（扉口から出てゆく）
（あとを追つて出てゆく。）
おとし　戸川さん、どこへいらつしやるの？
（薄月がさしこんで來る。おきよの啜り泣く聲が高い。長い間。）
佐藤　おきよさん！
おきよ　え！
佐藤　くどいやうだが、もう一度、ね、もう一度だけきいて貰はなけりや。どうしても一緒に内地へ戻る氣はしないのかい？
おきよ　――え。どうかそれだけは許して下さいね。
佐藤　やつぱり……
おきよ　え?!
佐藤　いや、どうしても駄目か！
おきよ　もう、何にも云はないで……このまゝね、このまゝ別れゝば、それが妾は何よりなんですわ。

佐藤　何故？　え？　それが僕には解らないのだよ。而してくどくも云ひたくなるんだ――さ、さう泣いてばかりゐちや仕樣がない――え？　內地へ歸へるか、歸へらないか?!　僕がかう云ふ心持を起したと云ふのも幾度か云つてゐる通り、また、お前だつて解つてくれたとほり、色戀の果、またどうでも一緖に添はうのと云ふ譯ぢやないのだよ。十三の時別れたきり、十二年も逢はないと云ふ兩親に一目でも生きてゐる中に逢ひたいと、口癖に云つてゐたお前、夢にも泣いたナガサキの町、そこへ歸れるのがどうして厭なのだい？

おきよ　それがもつたいないんですわ。シヤムくんだりまで流れて來た妾が、こんな稼業のあばずれが、生れて始めて覺えた、人の情ですもの……御免なさい、これが妾の初戀でしたわ、その戀ばつかりに、あなたの前では、處女のやうな氣持でいままで暮して來たんですもの。それだけでさへ、妾にしたら恐ろしいやうな氣がされたんです。噓ぢやありません、ほんとうに、それが――そんな氣持になれた妾が間違つてゐたんです。

佐藤　何故？　僕のやうな弱い人間に、お前を救ふなんてことが出來つこはないんだ。だが――もし僕の云ふまゝに、せめて內地へ歸つてくれたら――さ、それも、どうしても歸れないつてえ譯は？　え？　譯があるなら、どうしてそれをきかしてくれないか？　ね、たのむよ？

おきよ　わ、譯ですつて？　いまさら譯だなんて……

佐藤　おきよさん！　お前はかくしてゐるんだ！　祕密、さうだ、ね、ふかい祕密があるんだらう？

おきよ　祕密ですつて？

佐藤　さうだ、いまお前の顏色が變つた！　え、さ、何故それを云つてはくれないんだ！

おきよ　（泣く）

佐藤　え、何故？　何故云つてはくれないんだ？　どうせこのまゝ別れるにしても、謎を殘して別れるのはいやだ。え、おきよさん！

おきよ　許して頂戴！　妾はいままで、あなたを、だましてゐたんです。

佐藤　え？　だまして……

おきよ　眞實のことが云へずにゐたんですもの、云つたらどうなつてゐたでせう？　どうしても云へなかつたんですわ。

佐藤　な、何を？　え？　何を？

おきよ　妾の身體は死んでゐるんです。生きた死骸なんですわ。

佐藤　ど、どうしたんだ？

おきよ　あの王（ワン）の畜生め！　あ、あいつがこんな身體にし

ちまつたんだ。あゝ、あいつさへあんなものをのませさへしなければ……

佐藤　何を飲ませたの？――あ、やつぱり、おや、お前は阿片(アヘン)をのんでゐたのか？

おきよ　え、それが云へなかつたんです。それが、どうしても云へなかつたんです。

佐藤　さうか――そんな噂もきくにはきいた、而していつだかお前に訊いたこともあつた、だがお前は僕に打明けてはくれなかつた。だからまさかといままでも思つてゐたんだ。

おきよ　憎んで下さい。かまひませんわ。

佐藤　誰が、どうして憎む。

おきよ　ぢや、可哀想だと、ちつとは思つて下さつて？　流れ流れたあげくが阿片中毒、自分でも恐ろしい女になつたもんだと、夜半(よなか)に眼がさめてしみじみ泣く晩も少くはありませんわ。でもあなた！　誰が、どうしてまた、好きこのんで、こんな身體になるもんですか、どうにもかうにも身動きが出來なかつたばつかりにですわ――ああそれにしたつて……

佐藤　まあ、さう昂奮しちやいけない。ね。

おきよ　えゝ。

佐藤　恐ろしいと思ふかい？　ほんとうに恐ろしいと！

おきよ　えゝ。

佐藤　ぢや、行くんだ！

おきよ　ど、どこへですの？

佐藤　内地へさ！　どんな苦しい思ひをしたつていゝ、其つもりで、いまの中毒から脱け出すんだ、え？

おきよ　駄、駄目ですわ、この、この生命がなくなりますわ。一日だつて、なしでは生きてゆけない身體なんですもの、いまさら何の手當があるでせう?!

佐藤　そんなにまで……(手をとる)

おきよ　生きてゐたいんです。どんな境涯にゐても、まあ生きてゐたいんですもの。

佐藤　さうか。

おきよ　涙も、つらさも、煙にとかせば甘く味へますわ。死ぬのはいや、死ぬのはいやです。

佐藤　さうか――あゝもうそんなにまで……

(牡牛の吠聲のやうな汽笛。)

佐藤　福州丸だ！(立ち上る)御覧！　タマリンドを透して見えるだらう？　あのマストの灯が。あれが僕の乘つて行く船だ。もう出帆だ！　廿分しかない。

おきよ　あれが……あれで内地へお歸りなさるんだわね！

佐藤　ナガサキへ歸る、ナガサキへどうでも歸りたいつて云つたのも……

おきよ　嘘でしたの。みんな嘘でしたの。
佐藤　――
おきよ　だけど、ナガサキ！　ナガサキ！　あゝ一目でもいゝ。（泣く）
佐藤　さ、お別れだ！
おきよ　ぐつと飲んで……妾もう、決して泣きませんわ、笑つて、笑つて、お別れしませうね。
佐藤　あゝ、今夜、いま僕は獨りで立つてゆくんだ。だが心の中だけは二人の積りだよ。それだけは解つてくれるね。
おきよ　えゝ。もう後生です。泣かさないで下さいね。笑つて、笑つて。
佐藤　あゝ、笑ふよ、笑ふよ。
おきよ　女つて、未練なものね！（とりすがる）
佐藤　ぢや……（出てゆきかける）
おきよ　この窓で、お別れしますわ、このランプを、ね、赤いランプを妾だと思つて下さいね。
佐藤　あゝ、ぢや御機嫌よう。
（おきよ啜り泣く。佐藤一寸ためらつたが、思ひきつてとびだしてゆく。おきよは「佐藤さん！」と追ふやうに起き直つたが、佐藤は階段から下りていつてしまふ。おきよはいそいで窓に倚る。）

おきよ　あ、あの船で。（泣く）ナガサキへ。（泣く）
（戸川が慌てゝ入つて來る。）
戸川　おやつ！　佐藤君は？
おきよ　――
戸川　やつ！　もう十分だ！（出ていかうとする）
おきよ　戸川さん！
戸川　え？
おきよ　これ、これを！（黒髪をいそいで少し切る）
戸川　うむ。（受取つて出てゆく）
（おとし急いで入つて來る。）
おとし　姐さん！
おきよ　としちやん！
おとし　塗らないの？　え？　姐さん？
おきよ　駄目、としちやん、後生だから、このランプを窓のとこでふつてゐてね、妾や妾や……
（汽笛が急に鳴り出す。）
おきよ　あ、あの笛をきいちやゐられないんだもの、鳴つてゐるわね、あの笛と一緒に佐藤さんはいつちまふんだ
（よろめくやうにして、阿片吸飲器をひきだし、ひつかかへるやうにして、ベッドへ仆れる）としちやん、ランプをたのんだよ。妾の心なんだからね。妾のお別れなんだからね。

おとし　で、姐さんは？
おきよ　(長煙管に阿片をつめ、火皿にかざし) 眠るんだよ、かんにんしとくれ、ね、涙も、つらさも、かうして煙りにとかしてさ、甘い煙りにとかしちまふのさ。(吸ひはじめる)

(汽笛が斷續して鳴る。)

おとし　姐さん！　姐さん！　福州丸が！　福州丸が！
おきよ　(幻を追ふやうに) 佐藤さん！　佐藤さん！　福州丸！　ナガサキ！　ナガサキ！(靜に眠りにおちてゆく)
おとし　姐さん！　姐さん！(泣きぢやくり乍ら、赤いランプを窓際でふつてゐたが、その儘、窓枠になきくづれる)

(汽笛は、遠く、遠くはなれてゆく。)

(階下からは他の娼妓達の唄聲が、シャム人の醉客が喚く聲々といりまぢつてうづまき上る。)

唄〽メナム河風、身に泌む夜は、故郷が戀しと、ついほろり
唄〽椰子の葉蔭に、ふと足とめて、月を眺めりやついにほろり

(汽笛も、いつか消え果て、唄聲も靜まりかへつてしまふと、おとしの啜り泣く聲ばかりがしめやかに部屋を流れる。)

――幕――

永田衡吉篇

# 厩戸皇子（五幕十場）

## 人

厩戸皇子（十五六歳）

穴穗部間人后　皇子の御母（五十六七歳）。

穴穗部間人皇子　間人后の長弟（三十代）

泊瀬部皇子　間人后の次弟。後に倉橋宮と申す（二十代）

物部守屋　大連（七十代）

蘇我馬子　大臣（四十代）

河上娘　馬子の長女。後に倉橋宮の妃（十八九歳）

負古郎女　馬子の次女。後に厩戸皇子の妃（十六七歳）

小手子媛　大伴糠手の女。倉橋宮の妃（十八九歳）

東漢駒　馬子方の名族

迹見赤檮　右同

中臣勝海　守屋方の名族

押坂史毛屎　右同

大伴糠手　廷臣

博士覺哿　高麗人。皇子の師（六十代）

醫博士王陵　百濟人。侍醫（六十代）

多須奈　後に德齊法師

止利　多須奈の子。後に鳥佛師（十歳位）

善信尼　多須奈の妹。日本最初の尼

禪藏尼

惠善尼

其他

三人の太子、從者、侍者、輿舁、廷臣、軍人、舍人。民衆、異形の人々

## 處

飛鳥地方

## 場面

序幕　飛鳥の皇陵

第一幕　第一場　雙槻宮の附近

　　　　第二場　雙槻宮の一室

　　　　第三場　雙槻宮の門内

第三幕　第一場　石川精舍
　　　　第二場　雙槻宮の一室
　　　　第三場　馬子の第宅の庭
第四幕　第一場　玄猪の宴
　　　　第二場　多武峯の山路
第五幕　　飛鳥の橘宮

前奏曲（催馬樂調）

しなてる　かたをか山に
飯に飢て　臥やせる
　そのたびとあはれ
親なしに　なれなりけめや
さすたけの　きみはやたき
飯に飢て　臥やせる
　そのたびとあはれ
（日本書紀聖德太子の歌）

序幕

飛鳥の皇陵。

深夜。微なる星の光。老樹に包まれた前方後圓の皇陵の前。周圍に池溝が繞つてゐる。烈風が梢を瀧のやうに吹鳴らす。一隅に繁りの巨木。其傍の灌木の叢に布にくるまつて一人の少年が眠つてゐる。池邊宮御即位の大嘗會の翌夜。則ち丁未年四月上旬。大和國には瘧病(天然痘)が流行して野には殆ど生色がない。

幕開く。上手下手より二個の影人が現れ銅を鳴らしつゝ默つて反對の方向に入る。續て、他の影人が池溝の縁を傳つて出る。

影人　（それは東漢駒である。立上つて正面奥を凝視する）何者だッ。（馳入る）

（多須奈、押坂兩人が其聲を聞きつけて馳出る。四邊を覗ふ。續て駒が銅を鳴らしながら歸つてくる。）

多須　（唐突に）野良犬にでも騙かられたのか。

駒　（聲で多須奈と知る。笑ふ如く）否、それよりもずつと莫迦々々しい事なのだ。讒間物部の神主の捧げた五十串の大幣が疾風に吹飛ばされて丁度衣の襦のやうに見えたのだ。

押坂　氣の張詰めてゐる時には笑話のやうな事が得て起り勝ちなものぢや。先刻、南の陵では、黄金蟲の群れ飛んだのを、それッ人魂だなどと立騒いだとのこと――（笑ふ）

多須　然し人魂の飛ぶ方が當然かも知れないよ。最前も向うの小川の邊で呻き聲がするので聽付けてみると、例の

疫病神に取憑かれた親子二人が水草の根元に重なり合ふて既う事切れてゐる始末ぢや。

駒　初瀬三輪邊りは尙更ひどいさうだ。御山の鷹や鳶が時を得顔に路傍に捨てられた人肉を漁つてゐるが、途行く人は平氣でそれを見てゐるとの事だ。

押坂　（諷喩的に）昨日までは喪屋を營んで神と同格に葬られた死屍も今日は泣女、遊部はおろか、神主の祝詞さへ受けないで鳥獸の餌食となる……

多須　阿鼻地獄といふのは此のことだらう。むざ〳〵と野垂死をする人達を想ふと私は堪らない氣がする。

駒　死ぬ者は勝手に死ぬまでだ。他の死を悼んだり悲んだりする暇は私には無い。自分で自分の幸福を圖るだけが精一杯といふものだ。

多須　（嘲る如く）汝は何といふ幸福な人だか。

駒　（平氣に高笑す）はゝゝ、譽められるのだか、貶されるのだか。

中臣勝海　（下手より登場）どうぢや。別條はないか。

押坂　嚴重な警護に怖れてか、今夜は怪しい氣振さへ見えませぬ。

中臣　それは頂上。

多須　此陵は扨て置き、他の皇陵は？

中臣　同樣、別條の無い樣子。流石の惡靈物怪も連日の熱誠を籠めた物部氏の御祈禱に平伏したのであらう。

押坂　適切り、それに相違はありませぬ。

駒　だが中臣氏、皇陵の無事平穩に引換へ、村々では今にも一揆騷動の起りさうな氣配。何しろ耕地の乏しい村では青菜一枚得られない有樣だから尤もな事ぢや。

中臣　全く、それがまた新しい心配の種なのぢや。比較的豐かな村では達者な青年を狩集めて貧しい村の掠奪に備へてゐるが、どうか一大事にならなければいゝがなあ。また村内は村内で隣同士が垣根の芹一本を淺猿しう爭うてゐる。家の中では親子兄弟までが一握りの粟を奪合うてゐる。皆に慘さを通り越したことぢや。

多須　（歩き乍ら）平和な罪の無い野の人々をば、何故此樣な修羅道に陷すのであらうか。

中臣　それは今更言ふ迄もない。あの石川精舍の外道佛が摩訶不思議の國とやらから此の神國を亡ぼしに參つたのぢや。

多須　（獨語の如く）物部側の人達は頻りに其事を言ひ觸らしてゐるやうだが――。

中臣　言觸らしてゐるとは慮外千萬――。それでは多須奈、汝に何と思うてゐる。

多須　それは是迄、平氣で鳥獸を狩したり人命を損ふことを誇つたり女々犯して恥ぢないやうな、言はゞ唯本能の

儘に暮らしてゐた我國人に深い謎――積惡の業報を見せたのだと思ひます。

中臣　成程、毛色の變つた人だけに考へ方も變つてゐる。私達神國の民は穢れといふ言葉を知つてゐるが、罪といふ言葉は知らない。汝は少し例のにかぶれてゐるらしいぞ。（自分に）だが、まあいゝ。（調子を變へて）これから北の陵を見廻つてくる。（行きかける）

押坂　焚火にあたつてからお出でなされ。ひどく底冷えがして參つたから。

中臣　有難う。歸りにあたらせて貰はう。では、皆さん。さよなら。

一同　さよなら。（中臣退場。焚火に寄る）

押坂　（傍らの少年に氣が付く）　誰だらう。此處に寢てゐるのは。

多須　私の子供の止利だよ。

押坂　さうか。地べたも同然な處へ寢かせては身體に毒ぢや。早く家へ連れかへつて臥ませなさるがいゝ。

多須　有難う。だが此の子は母親を失うてからは私の側を離れては片時も眠らないので、これには私もほと／＼困つてゐます。（眠れる子の手についた泥を拭き乍ら獨語）手も洗はないで寢込んで了うたね。梟に化るところだつたよ。

押坂　母親の無い子ほど不憫な子供は無い。（寢顔を覗く）此の無心な寢顔！（手を取つて）早く大きうなつてお父さんに御恩返しをするのだよ。

多須　（子供の調子で）有難うございます。

（話が途絶える。風騷ぐ。夜は森々として焚火は燃え盛る。）

押坂　時に、駒。精舍の外道佛は矢張その儘かね。大臣に關係の深い汝はよく知つてゐるだらうが。

駒　外道佛は表向き禁佛といふ事にして内實では蘇我氏一族の信心を差許されてゐる。尤も私などはあの黄銅の顔病面を覗いただけでも胸糞が惡くなるが。

押坂　其通り！　私も二年程前、大臣と大連とがあの佛像の事で諍うた時に一度見た事があるが直ぐに此眼を洗ひ淨めずには居られなかつた。髪は蛇の蜷局を卷き顔は水腫のやうに脹上り、掌や足の裏には、物部の有識が我國を呪ふ呪文だと言ふ、得體の知れぬ文字が刻まれてゐる。今、世間の噂では「この未曾有の大惡病を外道佛が持つて參つた證據は現前。惡病でくたばる人の相好は外道佛そつくりぢや。」と。さう聞いてみると、成程といふ氣がする。

駒　處が、近頃一族以外にも濳かに參詣する者があるといふ噂だが、物好きな人間もゐるものだな。

押坂　露見をしたなら重い罰を喰ふことであらう。

多須　然し人間は何を信仰しようと自由ではあるまいか。

押坂　それは以つての外だ。我國には歴とした神々が在しますのだから、それを信仰しなければならぬ。

多須　その考へは偏よつた考へだ。捉はれた謬見ぢや。

押坂　（激して）何と申す。

駒　さういきり立つたよ。場所も場所、時も時だ。（注意を他に向けるやうに）それよりか獲物の方はどうだらう。さあ、各々！　一廻り見廻つてくる事にしよう。（先づ立上つて四圍を見る）あゝ早く獲物に有りつきたいものだたあ。

（多須奈、押坂、立つて劍を釣り直ほす。）

中臣　（上手より再び登場）どうぢや、其後は。

駒　其後は喋舌り通しだわい。はゝゝ。處で北陵はどうであつた？

中臣　不相變ぢや――が、怖しい流言が頻りに喧傳されてゐる。

駒　今時に流言は附きものであらう。

中臣　根も葉もない流言ならば兎も角。大連殿の「今に怖しい事が起るぞ！　惡病よりも饑饉よりも皇陵の異變よりも――」といふ豫言がどうやら適中しさうぢや。

押坂　はて何事であらう。

駒　その正體を訊きたいものだ。

多須　早う言うて下され。

中臣　（背いて）私はまだ此耳を疑ひたい位ぢやが――汝達は、今日雙槻宮の御裏門から醫博士王陵殿の御輿が忍びやかに參内申した事を御存じか。また程經て、國栖の氷室へ密かに急使を立てられたことをお聞きではなかつたか。

駒　一向聞きもしなかつたが。（と二人を顧る）

多須　私もさうぢや。

押坂　私もぢや。

中臣　さうであらう。それを知つてゐる者は私等の中に一人よりゐない筈。其の一人の口から怖しい事實が漏れて參つたのぢや。

多須　（直覺して）むッ、帝には――。

中臣　しッ！（靜默。聲を落して）而かも餘程の御重態とのこと。（間）

押坂　昨日大嘗會の庭で麗しい御尊顏を拜しまつつた許りだのに――。到底、信じられないことぢや。

中臣　さ、そこなのぢや。御病症が何であるか、ほゞ御推察が出來ようがな。（駒を除き一同沈んで了ふ）

駒　（歩廻る）また世の中が騷がしくなるのだなあ。

押坂　（中臣に）然し左樣な御重態なら、厩戸皇子を御召

し遊ばすであらうに、今日は終日、斑宮の方角からは乘物の影一つ見えませなんだが。

中臣　成程、さう承れば疑はしい點もある。

多須　否、皇子を御召し遊ばさぬは、傳染の早い御病氣故、間人御后が御深慮を廻らされてゐるためかも知れませぬ。

押坂　その推測も尤もぢや。

中臣　これも皆佛法の爲めぢや。怖しい外道佛の呪ひからぢや。（駒。嘲笑す）汝は私を嗤うてゐるのか。

駒　うむ。（背く）汝の糞眞面目な言ひ方が可笑しいのだ。

中臣　（怒る）汝は禁制の外道佛が憎うはないのか。我國の神々が怖しうはないのか。

駒　私は東漢駒だ。それで充分だ。一體。汝は何人ぢや。

中臣　神國の民ではないと言ふのだな。それでは何故、皇陵の御警護をなし奉るのぢや。

駒　その前に先づ汝達の考へから承らう。

中臣　知れたこと。御奉公の赤心からぢや。

多須　今帝の篤き御殊遇に報い奉る爲めに外ならぬ。

押坂　私は中臣氏と同じ精神ぢや。

駒　（幾らか感傷的に）汝達のやうに一途に純な心持で御奉公の出來るのが羨ましい位ぢや。尤も大御心に對する私の考へは汝達と寸分の相違はないが、此度の御警護に就いては、もう一つ私は個人的な心願を有つてゐる。率直に言へば私が此の皇陵の獲物を生捕つたなら、馬子から或る褒美を貰ふことになつてゐる。汝達の想像にも及ばぬほど私の一生に輝きと幸福とを授けて與れる天地にも換へ難い褒美なのぢや。

中臣　腐腹漢！（唾を吐く。押坂も忌々しげに唾を吐く）

（時に怪しき音。各々屹となつて別々の方向から奥に消ゆ。舞臺空虚。烈風の音。）

止利　（悶える。眼覺めて起上る）父さん。父さん。（見廻す。長き間。正面を凝視す）灯が見える！　灯が見えるよオ！　父さん。

押坂　（上手より登場。止利と同じ方角を見る）灯だ！　此の夜深けに。

止利　あゝ消えた！

押坂　（續いて）あゝ消えた、烈風の中に。

中臣　（何時の間にか現れてゐる）確か、斑宮の方角。

押坂　大銀杏のほとり。

（不安の昂まるやうな深き間。再び怪音聞ゆ。押坂中臣馳入る。靜寂。）

止利　あゝまた見える。父さん。また灯が見えるよオ！

（叫び乍ら馳入る）

（舞臺空虚の儘。少しく右に廻る。）

（二丁の輿が下手から出る。厩戸皇子と博士覺哿とが乘つてゐる　松明は消えてゐる。三度怪音す。輿停る。）

從者　怪しき物音が致しまする。

覺哿　御陵を警める舍人の聲であらう。氣遣ふことはない。輿を進めてお呉れ。

（輿少し進む。悲鳴鋭く聞える。）

厩戸　（輿舁に）暫らく！（輿停る。深き間）

從者　（愕へて）物怪ででもござりまするか。

覺哿　（靜かな笑）物怪？（悲鳴斷續す）

厩戸　梟に襲はれた母鳥のやうに聲か切なう凋れて行く。輿をおろして貰ひませう。

覺哿　火急の御道程を未だ半ばも參つては居りませぬ。一刻の遲參が百年の悔を殘すやも計られぬ只今、何卒其儀は……

厩戸　あの聲を確めずに素通りをする事は私には出來ぬ。

覺臣　（詮方なく）日頃の御氣性、已むを得ませぬ。ほんの一時でござりまするぞ。（輿舁に）轅をおろして貰ひませう。（輿より降る。上手へ歩み乍ら重ねて）ほんの一時でござりまするぞ。（舞臺元に復る）

（正面池溝の傍て肉塊のやうな人間が四人の者に嚴しく鞭打たれてゐる。苦痛を忍ぶ哀音が慘として聞える。）

中臣　人間には相違ない。だが、それにしては何故物を言はないのだらう。

駒　全く強情い奴だ。（一同頻りに鞭打つ）

押坂　あゝ手が草臥れた。（手首を振る）

多須　腕が拔けさうだ。（腕を揉む）

駒　其鞭を皆貸して呉れ。私が打ち据ゑて呉れる。（二人の鞭を取る。風を切る鞭の音。呻聲）

覺哿　（下手より現れる）暫く鞭打つことを止めて下さい。

中臣　（意外に）さう言ふ汝は誰ぢや。

覺哿　粗忽を致しました。私は博士覺哿です。

中臣　あ、博士でござりまするか。私こそ失禮を仕りました。中臣勝海にござりまする。

覺哿　御大儀に存じます。

中臣　恐入りまする。漸く物怪を引捕へてござりまする。矢張り人間らしうは見えまするが手におへぬ代物で寸分の油斷もなりませぬ。

覺哿　それは御苦勞千萬。

中臣　何はともあれ、國家の爲め御安堵を願ひまする。即刻、これにて詮議を致しまする。

（覺哿は皇子に何か打語る。其間に左の對話が進む。）

押坂　（駒に）鞭を返して呉れ。腕が休まつたから。

多須　私のも返して呉れ。少し息むと力が百倍する。

中臣　さ、一齊に打つとしよう。白狀をするまで手を休めないで。(打擲す)
厩戸　(上手に進む)　其人を苦める手を休めて下さい。
覺哿　(紹介するやうに)　儲宮の御子におはしまする。
(四人驚畏して鞭を休めて默る。それは流言の當つたといふ驚きでもある。)
厩戸　其人を此儘釋放する譯にはゆかないでせうか。
中臣　皇子のお言葉ではござりまするが、皇陵の神聖の爲めには飽く迄、糺明を致さなければならぬかと存じまする。
厩戸　然し鞭打つことは糺明ではなくて罰することではありますまいか。罰は罪に伴はねばなりませぬ。
中臣　言葉を返へすは恐惶には存じまするが、皇陵を侵し奉ること自體が既に死罪にも當る大逆かと愚考致しまする。
厩戸　それは形式に泥んだお考へでせう。其人は盲目かも知れません。啞者かも知れません。又もつと不幸な白痴か狂人かも知れません。
覺哿　(其人の側に寄り優しく)　貴方は何處の何誰ですか。口がお利けでしたら物を言うて下さい。私は覺哿と申す者です。彼處には厩戸の皇子が居られまする。何卒憚からずに口を開いて下さい。
その人　(切れ／＼な痛ましい調子)　おゝ皇子が在られまするか。私は何處の何某と言ふ程の者ではありませぬ。いつも役人達からは撲たれる側の人間に過ぎませぬ。然し今は、實際鞭に相當する惡いことをしました。(苦しき呼吸)　鞭を握つてゐる方々。私を早く撲ち死めして、苦痛をとめて下され！
厩戸　おゝ痛はしいこと！　(老人に寄添ふ)
覺哿　言葉附からお察しして、貴方は深い思慮のおありになる方だと思ひまする。何故あつて皇陵を犯されたか、僞らずに打明けて下さい。私から御願ひしまする。
老人　(味氣なき苦しき調子)　私は卑屈な人間ぢや。あゝ咽喉がつまる。水を、水を飮ませて下され。
厩戸　博士、私は輿の中に醴酒を持つて參りました。宜しければ、それをあげて下さい。
老人　水で結構！　何萬の同朋が生死の間に苦んでゐるのに、私だけが甘い醴酒を戴くことは出來ませぬ。
厩戸　(默然として池溝の清水を手に掬つて老人に飮ませる。次に自分の上衣を脫いで慄へてゐる肩先に被せようとする)
押坂　(制する如く)　餘りに御勿體ないこと。
中臣　斯る大逆人をば却つて御憐憫遊ばすは、御政道の手前も如何かと存じまする。

押坂　理に偏する嫌ひはござりまするが申上げまする。罪を糺明致す爲に鞭打つ事か不可なりとすれば同じく愛憐むことも不可なりと申さなければなりませぬ。
覺賀　成程兩人の申される事は正理かあるやうぢや。(皇子に)御子。暫時これにて皆さんの御成敗を靜かに拜見する事に致しませう。
厩戸　然し、博士……
覺賀　(强ひて押止める。含意的に)　まづ。まづ。(皇子は已むなく覺賀に連れられて少し離れる。四人鞭を振つて氣構へる。其時夜はほの〴〵と明け初める。黎明の光はよぼ〳〵の老人を地上に見出す。髮は剝がれ鼻梁は挫かれ纖枯れた肩から胸へかけて鮮血が滴つてゐる。斷末魔の切なき息づかひ)
多須　(此の陰慘な光景に打たれてよろめく)　おゝ！　此の痛しき人肉の上に誰か鞭をあて得ようぞ！　(倒れる)
(中臣押坂は顏を背向けて立ちすくむ。)
駒　(平然と三人に)　如何するといふのだ。私に此の死ばり損ねた身體を呉れないか。大臣の邸へ擔いで行くのだ。いゝか？　(三人無言)
覺賀　駒、折角だが私に此人の事を委せては呉れないか。若し汝が褒美と言ふのなら私から差上げることにする。
駒　(笑を含んで)　博士から戴く御褒美では大方物足りますまい。
覺賀　それでは。
駒　日本の國を戴かうとも大臣の御褒美にはかへられませぬ。
厩戸　(右の對話中、老人の側に寄る)　是程までに酷い傷を受けてゐようとは！　私は自ら父上をば打擲したやうな切ない苛責を感じまする。(振向いて)博士。傷の手當を早く致して下さい。
覺賀　(老人の様を觀る)　何といふ痛しい傷口でございませう。(手を取る)　この切ない息づかひ。次第に身内が冷えてまゐりまする。(間)やゝ！　これは！　(狼狽して)最早、絶望かと存じまする。
厩戸　(老人の肩に手をかけたまゝ)　あゝ。(老人死す)
多須　(死屍に取縋る)　貴方を打殺したのは私でございます。許して下され。許して下され。(啼泣す)
厩戸　(悲しげに博士の手を取る)　私は如何して此の一人の死を償ふことが出來るでせうか。博士、私の採るべき途を敎へて下さい。
覺賀　(憂を帶びて)「時」がやがて告げて呉れるでございませう。今は唯、懇ろに亡骸を葬ることにござりまする。
多須　覺賀殿。何卒其の役目を私に仰付けらるゝやう御願ひ申しまする。

覺賀（厩戸に）多須奈が斯樣に申しまする。
厩戸　良きやうに取計うて下さい。
覺賀　畏りました。（多須奈に）此の老人にも親戚の者がありませう。尋ね出して懇ろな儀式を受けさせて下さい。然し如何なる理由があつたにせよ、皇陵を犯し奉る罪は決して輕くはありませぬ。その程をよく辨へて、此の不幸な人を葬つて下さい。
多須　委細心得ましてござりまする。
覺賀（厩戸に）それでは、御子。時刻が移りまするで。
（促して下手に歩む。中臣押坂後に隨く。下手へ）輿を廻してお呉れ。（輿で返答がある。輿を待つ間に焚火の傍で土人形を造つてゐる止利が目に付く）
厩戸　何と器用な子であらう。
覺賀　この腕では一人前の埴輪師も跣足でござりまする。
（中臣に）誰の子供ですか。
中臣　多須奈の子でござりまする。
厩戸（人形を手に取つて）此の胸の膨らみなどを見ると血が通うてゐる樣に思はれる。
多須（死骸の傍にゐたが驅けてくる）止利や。汝は何をしてゐました？　此の御方は厩戸皇子樣でございます。御挨拶を申上げなさい。
止利（父の顏を仰いだのみで又細工を初める）

多須（叱るやうに）これ、止利——。
厩戸　多須奈、さういふ事は強ひなさらぬがよい。（輕き間）折角、此子の豐かな才分を護つておやりなさい。
多須　忝うござりまする。（止利を向いて）我儘の行儀知らずで困りまする。
（輿來る。皇子、博士それに乘る。輿動く。）
厩戸　止利！（手を求める）
多須（止利の手を見て）餘りに汚れて居りまするで……
厩戸（構はずに止利の手を堅く握る）
多須（思はず）あゝ、御手に泥が。
（輿靜かに上手に去る。一同暫時見送る。其間に中臣と押坂は何か囁き合ふ。矢庭に止利の傍の人形を踏み碎く。止利わッと泣く。）
多須（驚いて振返る）何故亂暴をなさる？
押坂　知れた事。（一つの人形を取つて）此の人形は何だ。
中臣　外道佛そつくりではないかッ。
多須　そ、それは……
中臣　喧しいッ！（押坂と共に撲りつける）
駒（中に飛入る。中臣と押坂との腕を捉る）どうしたといふのだ。
中臣　離せッ。
押坂　默つて見てゐろ。

駒　何をぬかす！
押坂　退け！
中臣　退け！（駒を押坂と共に突飛ばす。駒との間に格闘が初まる。遂に駒は兩人を撲り倒す）
駒　わはヽヽツ。私は此世で一番强い人間だぞツ！
（陽出てて風鎭まる。）
（止利は多須奈に取縋つて泣いてゐる。）

――幕――

# 第二幕

## 第一場　雙槻宮の附近

飛鳥野の一部。雙槻宮と門と土塀とが見える。何處からともなく挽歌が聞える。日は曇つてゐる。棺の輿がいくつか續いて行き過ぎる。音もなき淋しき葬列である。前幕の翌午後。穴穗部皇子と泊瀬部皇子とが話し乍ら出る。

穴穗　私は私だ。他の幸福よりも自身の幸福の方が大切な位は汝にだつて分つてゐるであらう。
泊瀬　分つて居ります。然し御危篤の義兄帝の御枕頭で兄弟が牆に鬩ぐ樣な醜さは避けたいと思ひまする。橘宮は未だ若年ではあり、間人姉后は何と申しても女性ではありますし……
穴穗　汝は實際姉妹おもひだよ。
泊瀬　また皮肉ですか。（顏を背向ける）
穴穗　弟。汝は覺哿博士の御弟子で、古今東西の史實にも通じてゐよう。まあ考へても御覽。神代から今日まで骨肉が政權や敎權に就いて爭うた例しはざらにある。其爲め無論弊害もあつたがまた一面世の中の進步は爭鬪によつて助長され人民は幸福に導かれてゐる。古くは出雲の大國主命は八十人の兄弟を亡ぼして天下を取り、世は太平を謳うたと言ふ……
泊瀬　それは外形だけを見た理論でせう。私は兄上の人間らしい感情に訴へて物を言うて居るのです。
穴穗　だが、理論に裏付けられぬ感情は私の大嫌ひな、女女しい感傷といふものだ。（間）そこで私は大國主命が……
泊瀬　大國主命には兄弟を殺戮遊ばされてもそれが釋されるだけの德――治者の美德がおありだつたのでせう。
穴穗　と言ふと、私にはそれが缺けてゐると言ふ譯だな。
泊瀬　（きつぱりと）さうです。
穴穗　（冷笑）弟。侮辱をされても私はかツとなる性の人間ではないよ。實際、私には美德といふものは無いからな。だが今に衆望を荷ふ私を見て慚愧しない樣にしてお

呉れ。今度こそは人民の後援を第一に念頭に置いて取りかゝつてゐるのだから。

泊瀬　（無言）

穴穂　弟。いつそ今度の畫策を打明けて置かうか。（聲を落して）あの瘡病が種なのだ。何しろ眞向から生命を脅されてゐる者ほど度し易い者は無いでのう――。

泊瀬　神の怒りだと大連の一黨が言振らして居るのを知つてゐます。

穴穂　そこなのだ。一克な守屋老人は心底からさう信じてゐるのだが私はそこを利用、と言うては惡いが、それによつて、事を目論んでゐるのだ。迷信にせよ、立派な信仰にせよ、兎角信じ込んでゐる者の言ふことは恐しく民衆を動かす力のあるものだ。

泊瀬　（獨語の如く）　大連は氣の毒な方です。

穴穂　（それには無關心に）　まあ聞け。弟。處で昨夜、御重症の帝から潜かに大臣大連や我々近親の者に「三寶に歸依したいが卿等の議に從はう。」と言ふ詔が降つたのだが、宮中の佛法禁制は先帝の御遺詔。それで緊急に會議を開いて御奉答申上げるやうにと姉后や厩戸皇子の仰せなのだ。弟、汝も是非出て呉れるだらうね。實は其事を賴みに汝の邸へ參る途中だつたのだ。都合はどうだ。

泊瀬　他に差支はありませぬ。

穴穂　有難い。そこで其の詔には何卒贊成を表明して貰ひたいものだ。

泊瀬　兄上は？

穴穂　私か。私は……私は反對を申上げる。

泊瀬　何故ですか。

穴穂　さう詰るやうに問うて呉れるな。實は守屋を傀儡る爲にどうしても反對しなければ拙いのだ。

泊瀬　それでは何故私には贊成せよと仰言るのですか。

穴穂　其の不審は尤もだが、私の本意は結局贊成側が克つて豐國大師の御參內を乞ひ御授戒の式のある樣に願うてゐる譯だ。

泊瀬　さうなると守屋一黨の言振らして佛法を呪うてゐる窮民はどうするでせう。（穴穂無言。短き間）　兄上、私は今夜は參りませぬ！

穴穂　來ない？

泊瀬　えゝ。（泌々と）　兄上。衆望は集まつてくるもので、集められるものではありませぬ。火に誘はれる蜉蝣の群は微風にも吹散つて了ひます。

穴穂　（嘲笑）　成程、聖賢の書にさう言ふ風な名論のあるのは私だつて知つてゐるが、多くの場合、名論と實際とは仲の惡い雙生兒の樣なものだ。孔子は孔子で禹でも舜でもない。これはなぜか。つまる處、人民といふものは

名論家の考へる様に賢明でもなく、また賢明に成らうともしないものなのだ。汝は蜉蝣を例にしたが灯取蟲といふ奴は灯が無ければ生きて居られない。一つの灯を見付けて油を吸ふと他の火を探し廻る。人民を誘ふには先づ大きな火を燃やすことだ。

泊瀬　然し蒙昧な人民を賢明になるやうに導くのが政道の根本でせう。殊に我國のやうに精神(こゝろ)の世界といふものに觸れたことの無い人民は尚更です。

穴穂　それもさうだが汝は一體理想に走り過ぎるやうだ。實際の政治は汝の描いてゐる様に行くだらうか。理想家も何時かは現實にぶつかつて成程と肯く日が來るかも知れないよ。

泊瀬　私は理想家で結構です。凡て理想に殉ずることは人間の喜びとしなければなりませぬ。

穴穂　（幾らか皮肉に）立派な心掛けだ。處で今の一件をもう一度考へ直して、どうか承諾しては呉れまいか。

泊瀬　（地を見詰めた儘）出來ませぬ！

穴穂　ではあらうが、兄が此樣に頼むのだ。

泊瀬　（それには答へず）死を前にして、義兄帝が佛を求め遊ばすあの切ない、渇く様な御心持、あゝ信仰をさへ忍ばせらるゝ御胸中！　（黯然）

穴穂　其樣に思ふのならば賛成側に立てばいゝ。（含む樣に）まあいゝ。私は私で料簡がある。（上手を見る）お、守屋が來る。後方に大勢人民が！　どれ、迎へに行かう。（倉皇として上手に退場）

泊瀬　（淋しげに兄の後影を見送る。徐かに下手に退場）

（續て守屋と穴穂部皇子とを先頭に民衆がついて出る。民衆は病み疲れ衰へ饑ゑてゐる。其中に迹見赤檮が隱れてゐる。）

守屋　（民衆に向つて續ける）我が大八洲、瑞穗國の民草は皆天つ日嗣の御裔ぢや。文字にも御祖(みおや)と書いてみをやと訓む。是れ、神と人とが親子(しんし)の間に在る有難い證據ぢや。斯る芽出度き國體が外(と)つ國にござらうか。然るに摩訶不思議の邪教を拜して怪しまぬとは何たる事！　皆さん！　此の千古未曾有の大惡病は何の爲めでござる。おお神を恐れなさい。神を恐れなさい。

穴穂　（受け繼いで）大連殿の言はれる、神を恐れよとは則ち佛を憎めと申すこと。皆さんは石川精舍の外道佛をよもお忘れあるまい。あれこそ神の怨敵、否や人民の仇敵ですぞ。

民一　それよりも私達は疲れてゐまするで。

民二　お肚が空つぽでございまするで。

民三　病ひ神に取憑れてゐまするで。

民四　親父も妹もくたばつて了うたわい。

宍穗　（背く）皆さんの內に此人の樣に親兄妹を奪はれ夫や妻や子を失うた方がゐるならば、其の悲みをば憎みに代へて、佛法と蘇我氏とを呪ひ返さねばなりませぬぞ。

（挽歌が聞こえる）

守屋　あゝあの哀しい挽歌が蘇我氏の耳には入らないのであらうか。あゝ……

民五　藥を欲しいなあ！

民六　飯に有りつきたいなあ！

民七　菜ッ葉の切れはしでも喰べたいなあ！

守屋　（下手を見て）お、葬禮が參る。（民衆に）道をあけて！

（民衆は兩側に分れる。棺を乘せた貧しい輿が出る。老いた妻と子供と多須奈止利善信尼禪藏尼慧善尼其他村民が續く。妻は狂人らしく嬉々としてゐる。佛敎風の幢幡を立てゝゐる。民衆は哀悼を表する。守屋は瞑目して祝詞をあげてゐる。行列上手に入る。）

宍穗　（見送つて）あれは何者の葬禮ぢや。國禁の佛法に則つてゐる。

守屋　精舍の比丘尼がついてゐる。此眞晝中、而かも宮の御門先を、餘りに恐れ多いことぢや、さうぢや、御門の隼人に訴へてあの葬列を止めさせることにしよう。（行きかける）

宍穗　大連殿。お待ち下され。あの葬列を遮る位の勇者は此處にゐる神の子達の中にも居りませう。

守屋　如何にも、御尤もでござりまする。（民衆に向ひ）皆さん！　私は皆さんが神の子であることを信じまするぞ。

（民衆どよめく）信じまするぞ。

男　（飛出す。嗄れた聲）私は此の痩せ腕を捧げませう！（皮肉に）然しあの葬列を亂して死者を辱めたなら、私——此處にゐる私等に何を酬うて下さる？（守屋啞然）私共は飢ゑ切つてゐる。病みほゝけてゐる。いゝや此の廣い飛鳥野には百倍千倍萬倍の同朋が死病と戰うてゐる。守屋殿、私共が貴方の後方に跟いてきたのは例ものの御談義を聞いて、其の木沓の埃を吸ふ爲めではありませぬ。否、それだけならば未だ我慢が出來る。（上手を指す）あれ彼處に行く粗末な棺を辱めよとは！（熱涙降る）あの棺の中には私等の友が眠つてゐるのだ。友は氣狂の妻君や憐れな子供達の饑死を見兼ねて、恐れ多くも皇陵の御供物を盜みに行つたのだ。供物盜人は彼男ばかりではなかつたが、老人の傳なさ、逃げ遅れて散々の打擲を受け、果ては血にまみれて無慘の最期ぢや！（民衆共に泣く）

民一　泣くな。泣いてゐる時ではないのだ。

民二　否や、泣け。泣け。淚が我々を憤激させるまで泣け。

他の男　あの葬列は鞍部の多須奈の心盡しなのだ。彼は無慈悲な賴を押うた罪亡ぼしにあの友を葬るのだ。
民三　あゝ泣かずには居られないわい。（泣く。或る民衆は共に泣き或は之を見て笑ふ）
子供　（突然）　あッ爺さんが倒れたッ。
（一同の視線の集る處に一人の老爺が横はつてゐる。）
民四　爺さんも到頭死んで了うたのかなあ！
民五　皆の衆に護られて死ぬとは 仕合者だ。（民衆哀悼を表する）
守屋　（死者の側で神道風に祈る）
男　死んで結構な神様の國に行けるなら病んで地べたをのたうつよりはましだわい。
（民衆の中より「倉廩を開け！」と叫ぶ聲す。一同和す。次第に熱狂す。）
穴穗　（諭す樣に）　倉廩の鍵は大臣が保管してゐる。それは馬子の役目ぢや。私達の關るところではない。
民衆　馬子の邸へ押寄せろ！　（口々に叫び乍ら下手を向く。此の以前、門の外に厩戸皇子が現れる。一旦門内に消え再び現れて穴穗部皇子に逢ひに來る。上手の隅へ守屋をも招いて左の對話がある）
厩戸　叔父上。（手を出して）これは倉廩の鍵でございます。

穴穗　鍵？　どうして鍵を持つて參つた？
厩戸　母上の御許しを得て持つて參りました。第三番の倉廩を開いて施して下さい。
穴穗　三番の倉廩は汝のではないか。
厩戸　えゝ、さうです。
守屋　おゝ勿體ないこと！　卑しき民草に御子の御倉廩を開かせ給ふは恐れ多い儀と存じまする。
厩戸　其樣なことは決してありませぬ。何卒困つてゐる方々を少しでも恤はして下さい。
守屋　つら〳〵考へまするに御子の御考へは些か御未熟かと拜せられまする。總じて人民との間には障壁を構へることが肝要にござりまする。得て、人民は恩に慣れやすく、延いては御尊嚴をも傷付けまじきかと恐察致しまする。
穴穗　（守屋に）　貴方の御考へは却つて頑なに過ぎはしますまいか。危急の民を救ふは至極時宜に適した事と思ひます。それに后も御聽許のことですから直ちに倉廩を開いて窮民共を賑はすことと致しませう。
守屋　左樣な儀なれば已むを得ませぬ。では、御伴を致しまする。
穴穗　（厩戸に）　御子。それでは私が宜きやうにする。おさらば。

厩戸　（兩人に）お頼み申します。

守屋　御免下さりませ。（兩人下手に行く。厩戸皇子は門側に歸る）

穴穗　（鍵を鳴らし乍ら民衆に）倉廩は開かれた！　さ、私達に跟いて來なさい！

民衆　（感喜）おゝ穴穗部皇子様！　穴穗部皇子様！（兩人を先頭に下手に入りかける）

男　待つて吳れ！　同朋！（民衆振向く）私共は「飢ゑ」に引かれて行くのだぞ。「飢ゑ」にだぞッ。いゝか、忘れるな、いゝか。

民衆　さうだ。全くだ。全くだ。

民五　そんな事はどうでもいゝ！　腹さへ脹れたならそれでいゝのだ。

民六　皇子様は行つて了はれたぞ。早く跟いて行かう。

民衆　さうか。行かう。行かう。（狂喜の餘り老爺の死骸を忘れて騷然として退場）

厩戸　（寂然として後を見送る。中央に進む。死骸を見る。獨白）鞭に刻まれて死ぬ人。今路上に棄てられる哀れな骸。（默思）何故この人々は死なねばならなかつたであらうか。それをおもふと、私達は何ものにか濟まない氣がする……

（陽春の靜かなる夕暮。）

負古郎女　（花束を持つて上手奥より徐かに登場）厩戸皇子様。此の花束を御父上の御枕邊にお捧げ下さりませ。

厩戸　（靜かな眼で郎女を見る、花束を受ける。心を籠めて）有難う。負古郎女――。

負古　（花束から手を離して面を伏せる）

（物思はする靜かな間。鐘が鳴る。）

厩戸　（鐘の鳴る方を向いて）鐘が鳴る――。

負古　精舍の鐘でござりまする。

厩戸　今宵に限りなせ打鳴らすのでせう？

負古　御葬禮が初まるのでござりまする。

厩戸　どなたの？

負古　陵で亡くなられた哀れな老人の……

厩戸　（次第に鐘が濕うてくる）

（鐘の音。靜寂。）

## 第二場　雙槻宮の一室

間人后の御居室。庭前に散りそめし一本の櫻。前場より約一時間後。間人后は疲勞の體にて坐つてゐる。王陵が離れて物を言つてゐる。

王陵　斯樣な次第にございますれば、最早如何なる靈藥も所詮は熱砂に注ぐ水も同然效驗のほどが疑はれまする。唯此上は氷室の使者を待つて御尊體を氷中に置き奉るよ

り外に手段はござりませぬ。
問人 それが最後の手段と申すのかえ。
王陵 （言惜さうに）遺憾の極みに存じまする。
問人 （氣を取直して）斯うしては居られませぬ。御病室へ參りまする。（立ちかける）
王陵 （制して）唯今は快よく御寢の態に拜せられまする故……
問人 左樣なれば今暫時休息致しませう。御眼覺めの上は直樣知らせて給も。
王陵 はは。御免下さりませ。（退場）
厩戸 （登場。花束を持つ）お、母上。これにお在でゝしたか。唯今叔父上に鍵を托して參りました。
問人 御苦勞。せめてもの功德となりませう。（間）あの氷室の使者は未だかえ。
厩戸 唯今、漸く歸參致しました。
問人 あゝ、なんぼう待ちくたびれたことやら。（ほッとする）
厩戸 處で父上の御病態は如何なのでござりまするか。一向雲を攫むやうな氣持が致しまする。
問人 （肯く）まづ此處へお坐り。（厩戸花束を置いて坐る。濕やかに）夜中を急使たてゝ招き寄せ乍ら御病室へも入れ申さず、又落着いて物語りをする間もなく、汝の不審申すは尤もなれど。（聲曇る）
厩戸 先づ御病名は？
問人 さ、それが……あの怖しい流行の病。
厩戸 （愕然）あの瘡病！（長き間）
問人 それを聞けば、此の母が、豐國大師の御參內に御反對申上げる譯も自然お解りの筈。今、世に瘡病は佛法の祟りと言ふに、帝自ら御信仰遊ばされては民の怨恨は必定殊に黨爭の激しい此頃、これを機に民心を煽てゝ事を計る者の無いとも申されませぬ。それ故、よし父上が御授戒を受け給はずに御他界遊ばされようとも、民の平和には換へられませぬ。
厩戸 それもさる事ではござりまするが、父上の御靈を左樣に無にする事は出來ませぬ。穴穗部叔父上と守屋一黨とを除き凡て御賛成と推せられまするに、肝心の母上が御反對とは……
問人 御子。國が大事か、父上が大事か、何れでござりますか。
厩戸 國が亂れるとは杞憂と申すもの。又、朋黨の爭ひは行き盡く處まで行かねばなりませぬ。然し父上の事は靈の解脫を受けられるか、受けられぬか、人の一生で一番切實な深い問題でござりまする。母上の仰せは如何あらうと今夜の會議に私は初志を翻しませぬ。

間人　（毅として）許しませぬ！（兩人押默る）

覺哿　（急ぎ登場）王陵殿の懇なる御手當に依り、御苦惱は一しほ御減退の御容子に拜せられまする。然し乍ら打續く御高熱の爲め心の臓の御衰弱甚しく今夜は最も危惧に耐へざる御容態との事。斯く相成つては最早庶民に對し祕密に致すも詮なき儀故、何卒御公表の程願はしう存上げまする。

間人　其通りぢや。即刻大連と大臣とに申付けて御危篤の旨を公にして呉りやれ。

覺哿　委細拜承仕りました。（首を下げる）猶ほ帝には唯今御眼覺めあつて御后を御召しにござりまする。

間人　御眼覺とあれば直ぐに參上致しまする。（立つ）

厩戸　私も御連れ申して下さいませ。母上。

間人　今、暫らくは――。

厩戸　御目にかゝりたうてなりませぬ。一目……（取縋る）

間人　汝の身體は大切ぢや。良き折りにお招び申します。

（皇子の手を離す。覺哿に）唯今のことは……

覺哿　（受けて）はは。畏りましてござりまする。（立つて下手に行きかける。間人后退場）

厩戸　（涙ながらに）博士！　私は何ものかに寄り縋つてゐたいやうな氣がしまする。あゝどうすればいゝのか…

……

覺哿　御子！　悲哀は深く悲めと古人も申してござりまする。然し乍ら人生の深い事實に徹しなければなりませぬ。おつと踏み堪へ（布帛を出して皇子の頬を傳ふ涙を拭ふ）さ、お嘆しなされませ。御用が急ぎまする。（退場）

厩戸　（縁に出る。庭上の落花に對し）淋しいなあ。（間。空を仰ぐ）宵月が浮んでゐる。月もさみしげに。（再び土に委する花片を見て）父上の御靈も此儘土に歸つて了はれるのだらうか。（沈思）

（馬子下手庭より急ぎ登場。上手に民衆の喧騷が聞える。）

馬子　（手をつかへる）はは。皇子に渡らせられまするか。（厩戸振向いて會釋す）今夜の御會議に就き言上仕り度き儀が出來致し、急遽御參内申してござりまする。（周圍を見廻して）御后には？

厩戸　唯今、父上の御召しで御病室へ參られました。

馬子　では、皇子にまで事の次第を手短かに言上致しまする。某る人々が陋策を弄んで事件を醸すの怖れがござりまする故、御會議は即刻御取止め遊ばさるゝ樣御懇願申上げまする。

厩戸　（間）大方は推量して居ますが、然し馬子、詔の儀は……

馬子　其儀は此の馬子が國の大臣としての責任を負ひ、豐國大師御引見の儀を取計はせまする。
厩戸　汝の自信深い言葉附は私を喜ばせるが、母上が未だに御反對の事は存じて居られるでせうか。
馬子　如何にも承知致して居りまするが、御后の御憂慮は描ける虎を怖れらるゝの類かと恐察仕りまする。萬事は迂臣に御委せの程願はしう存じまする。（騷音頻りに起る。上手を見詰めて）實に訝しき騷音――。
王陵　（登場）御后の御召しにござりまする。
厩戸　（直覺する）父上には、はや……
王陵　御門外の喧騷に御安靜を亂され給ひ、御苦惱も一際御增進の態にて、頻りに御囈語を遊ばさるゝ御氣色。最早此上は御精神の和らぎを只管御祈り申上げる許りにござりまする。
押坂　（息を切らせて下手庭より登場）申上げまする。（王陵が話してゐるので差控へる）
厩戸　何事ですか、押坂史毛屎。
押坂　は。（平服）御門前……（息が切れる）
馬子　早く申上げよ。
押坂　御門前は一揆騷動。（切れ／＼に）先刻穴穗部皇子には大連殿と共に倉廩を開いて、人民共を些か賑はしましたる處、此事を聞き傳へたる他郷の者共。我も我もと押寄せ參り、倉廩には既に一握の米粟をも餘さず、手を空うして歸る窮民等は自暴自棄の體にて、倉を開け、外道佛を毀せ、などと雄叫び乍ら、恐れ多くも御門前を騷がせ奉る次第。取敢へず中臣勝海、東漢駒、迹見赤檮等御門扉をひた押しに閉め申して居りまする。されど無智蒙昧の者共故、殊に夜に入つては如何なる事態を釀すやも計られませぬ。何卒當面の御處置に就き御下命を仰ぎ度く、推參仕つてござりまする。
厩戸　民はまだ帝御危篤の儀を存ぜぬのか、それとも知つてのことであらうか。
押坂　（言葉に詰る）大方、未だ……
馬子　（慨然）帝を惱まし民を誤まる者は何者だ。風なくては梢は騷がぬ。（押坂の眼光と合ふ）御子、騷擾取鎭めの儀は迂臣に御命じの程願上げまする。
厩戸　懇ろに帝御危篤の趣を傳へて暫時靜謐を守られる樣說得致されたい。
馬子　は。萬事宜しきに取計ひまする。
厩戸　押坂、大儀であつた。お降り下され。
押坂　は。（馬子に一瞥を投げて退場）
王陵　（再び機を得て）先刻申上げまするが如く、ひたすら御精神の和らぎを得させ給ふやう、覺哿殿並びに不肖王陵、切に御懇願申上げまする。

厩戸　（決然と背く。馬子に）　直様、大師御參内の用意を致して下さい。

馬子　はゝ。（直ぐ立上つて劍を釣る。喧騷の聲）　では御免を蒙りまする。（勇んで退場）

覺哿　（急ぎ登場）　來目（くるめ）、殖栗（ゑくり）、田目（ため）の御子達も御一緒に參らせらるゝ樣、御后の御言葉でござりまする。

厩戸　それでは、醫博士。弟達を何卒――。

王陵　唯今。暫時これにて御待ちの程願上げまする。（下手奥へ退場）（靜かなる間。）

厩戸　博士、私は今日過つた事をしたと思ふ。一途な慈悲心から倉廩を開いて施しを致したが、思ひがけない結果を見なければならなかつた。父の功德にと思うた事が却つて父の禍ひとなる。否、民自らの禍ともなりました。一椀の食物に雀躍りをする人の傍らには千人萬人、嫉妬と憎惡とを燃して理性をさへ失ふ人々がある。又、今日雀躍りをした人も明日は同じく飢渴に泣かねばならぬ。考へてみるに慈善慈悲と申すことは偏頗な惡いことではありますまいか。

覺哿　物を以てする慈悲に平等と絕對とを望む事はできませぬ。否、機會と方法とを誤まる時は、善より惡を生じまする。

厩戸　（背いて）　さうだと想ふ。然し、博士、私はあの病人や飢死をする者を其儘見棄てゝ置くには忍びない氣がする。殊に何不自由もなく暮してゐる自分の境涯を省ると。

覺哿　民を導く者は其の御志を以て最も貴しと致しまする。よくそこに御氣附き遊ばされました。かまへて其の御心を失うては相成りませぬぞ。

厩戸　（少年の感傷を以て）　私は貧しくなりたい。飢ゑてみたい。渴いてみたい――。

覺哿　（夢を笑ふ如く）　はゝゝゝ。

（周圍に夜の色が滲出す。）

厩戸　博士、會議の時刻が逼りましたか帝御危篤の爲め俄かに御取止めの旨を傳へてお吳れ。理由は後程申上げるから。

覺哿　承知致しました。（下手へ退場）

厩戸　弟達は何故遲いのであらう。かうしては居堪らない氣がする。先きに行く事にしよう。（ふと足元の花束が眼に入る。拾上げる。強く唇付ける。そして足早に上手へ消える）

（空虛な舞臺の背景に一點の灯がちらつく。それは豐國大師を乘せた輿の灯である。花片頻りに散る。）

## 第三場　雙槻宮の門内

第一場に見えた門の内側。騒擾の後らしい氣配。前場より約二時間の後。

幕明く。門扉に近い處で守屋中臣押坂の三人が頻りに押問答を重ねてゐる。

守屋（續けて）ぢやと申して、先帝御在世の砌より篤き御殊遇を蒙りし身が……

中臣（袖を捉へたまゝ）否々、見す〳〵敵の術中に陥ちて萬一大連殿に不吉の儀がござつては、これこそ國の一大事、却つて先帝の御殊遇にも背き奉ると申すもの。

押坂　切に國家の柱石たる御身分を御自省あつて、今夜の御出仕は平に御止り下さりませ。

守屋　汝達の諫言もさること乍ら、所詮御奉公に朽ちる命ぢや……

中臣　御奉公は是からでござりまする。

押坂　御自重の程、切に。切に。

守屋（黯然）ぢやが私もとつて七十有五歳。惜むに足らぬ齡ぢや。

（中臣押坂言葉なく彫刻の如く立つ。）

押坂（ふと下手を見て）おッ警護の松明が見える。

中臣　見付かつては面倒ぢや。先づ暫時あれにて。（三人扉の内側に身を隠す）

（舞臺空虚。軈て馬子と駒と登場。）

駒（松明を持つてゐる）否、大臣からさう改つて禮を申されては恐入りまする。唯、時が時故、大師の御輿に狼藉者があつてはと思ひ、十二分に警戒は致しました。

馬子　天晴々々。恙なく大師の御參内を見たのは汝は元より馬子にとつて日本一嬉しいこと。おゝ駒！　重ねて禮を申すぞ。

駒（何か飽足らぬげに笑ふ）へツへツ……

馬子　先きに皇陵の狼藉者を引捕へて大連等の妖言を一掃し、いま又この勳功。何れ朝廷へ奏聞して重い御賞與をとらせることにしよう。處で今一度汝の力を借りたい事が出來致したのだ。餘の儀でもないが――忌々しい今日の騒擾。あの背後に糸を引いてゐる痴漢が居るかどうか、そこを汝の鋭い鼻先で嗅出して貰ひたい。

駒　それは嗅出すまでもなく分り切つたことでござりませう。

馬子　汝の鼻には敬服する。（微笑）私が守屋一味の者から常日頃怨敵扱ひを受けてゐる事は三歳兒さへよく知つてゐる。そこへ此度の瘡病ぢや。到頭その罪まで私に塗付けて、無智な人民を煽動して、後日の爲めを計つてゐる。先刻も倉廩の前で凡ゆる罵詈雜言を私に浴せてゐた

事は、密偵からちやんと報告があつた。それを耳にした時、憤怒の血汐が此の頰べたを熱火のやうに燃やしたが……だが、駒。私は私憤に驅られる性の人間ではない。たゞ公の爲め、我國の爲めに、今の間に背後の糸を斷切つて、(强めて) 切つて了はないと又何時かはかられぬ。後世の憂ひを斷つは今が時だ! そこで (駒の腕を叩く) 汝のこれを借用したいのだ。無論、兵馬は一令の下に集まり、巨勢比良夫、平群神手、迹見赤檮等にはそれぐ〜通じてはゐるが、汝の腕が一本缺けては千慮の一失を免れぬ。先づ今宵、守屋が御參内の期を見計うて、彼の邸宅に兵仗を差向け、一氣に火を放つ計畫なのだ。かうすればさしもの守屋も一兵を集める時機もあるまい。(駒、返答無し) 何故默りこくつてゐるのだ。名の無い戰は眞平だと言ふのかえ。心配無用! そんな間拔な大臣では無いわ。世間へ對して申開きの立つ手配はちやんと取つてゐる。先づ泊瀨部皇子には最前御了解を得て置いた。厩戸皇子はあの通りの世間知らずで、佛法には御贔屓。竹田、春日、彦人の各皇子は從來の關係から見て、矢張り佛法の御味方に定まつてゐる。中にも彦人皇子は皇子に帝位を望む御志ありと邪推し奉つて、中臣勝海が一七日の間、御繪像に對うて死の呪禁を續けたとある。無論、穴穗部皇子へ謀ひ申す爲めの守屋の入智慧であらうが、其事が彦人皇子の御耳に達してからは、兩人を蛇蝎のやうに忌まれてゐる。斯樣な譯で、形勢は凡て味方に有利なのだが、唯一つ不足なのは汝の鐵の腕だ。(駒、横を向く) はて、如何したのだ。何か私の言葉に不滿があるのか。理不盡なところでもあると言ふのか、え?

駒　(態と笑うて) 駒は理や非を兎角申す男ではありますまい。

馬子　其點は萬々承知してゐるが。(考へる。はたと駒の肩を打つて笑ふ) はゝ……

駒　(極り惡るげに) お笑ひなさるとは酷うござります。

馬子　はゝ。私がわるかつた。謝る。では駒。明後日、否、早い方がよい。明日の暮方、私の邸へ來て貰はう。其上で約定通り娘に紹介す事にしよう。(駒、微笑す) 私は其方面の事は凡て娘の自由にさせてゐる。子供には自由に延びるだけ延ばすに限るからな。(間) 大分、喋舌りすぎた。別れることにしよう。處で、今の頼みは引受けて呉れたらうな。

駒　確かに御引受け申しました。だが、私の一件も間違ひなく願ひまする。

馬子　(手を取つて握る) 此通りだ。ぢやあ、さよなら。私は此足で御病室へ參る。

(互ひに會釋し、駒は先づ門外に去る。馬子後を見て苦笑。上手へ行く。此間に扉の中で爭闘を想はせる一場のパントマイムがある。そこへ迹見赤檮が松明を持つて上手から現れる。馬子に行逢ふ。)

馬子　お、赤檮、御巡視御苦勞。(奥を指し) 彼方へ參るのか。

迹見　左様でござりまする。

馬子　では、燭火をたのむ。

迹見　畏りました。(松明を差延べ乍ら、兩人徐かに歩む)

馬子　(指で物を切る擬をして) これに拔りはあるまいな。

迹見　(得たり顔に) 天下の刺客、迹見赤檮ですッ。(高笑ふ)

馬子　む。駒風情とは違うて、私は千人力を得た氣がするぞ。

迹見　餘り煽てゝは困りまする。(笑ふ。退場)

(扉を排して押坂が躍り出す。兩人の後を追うて斬らんとするを、中臣、守屋制す。)

押坂　お、お離し下され！

中臣　血氣に逸つて事を爲損じようぞ。

守屋　(立塞がつて宥める) 押坂。まづ。まづ。

押坂　あの兩人奴を殺さぬ間は……

守屋　此處を何處と思ふぞ。(嚴として言放つ)

押坂　(はッとして劍を投げ棄てる) 無念！

守屋　此上は是非もない。敵の手の廻らぬ内、阿都(あと)の別業に立退き、兵馬を集めて齒向ふ迄ぢや。兩人！　汝等兩人は私が力と頼む肱股の士ぢやぞ。(兩人低頭)

(上手奥より門に向ひ遽しき輿が出る。)

中臣　(輿に覗ひ寄る) 穴穂部皇子。

穴穂　(闇を透かして見る) 中臣勝海か。

中臣　は。

穴穂　帝は遂に御薨去でござるぞ。大連殿は？

中臣　(力の拔けた聲で) 彼處に居りまする。

守屋　(皇子の言葉を聞くと共に腰を拔かす)

穴穂　守屋殿、守屋殿。軍馬は整うたか。先づ馬子に備へねばなりませぬぞ。

守屋　(皇子の方へ躄寄る。吃驚して一語を發せず。あはれに跪くのみ)

穴穂　(自烈度げに守屋を見詰めて思入)

中臣　(押坂此の光景に對し、そゞろ前途の不安を豫覺して暗涙)

――幕――

# 第三幕

## 第一場　石川精舍

馬子の邸内に在る日本最初の寺。

幕明く。暗黑。正面に一燈の搖ぐのみ。數人の僧形が影の如く灯の前で夕べの祈禱を捧げてゐる。彼岸の世界を想はせる鉦鼓の音に連れて低重な讀經が漂ふ。香煙が立昇る。讀經の聲が次第に高まると共に僧達は立上つて遙拜の貌をとる。始め無きが如く管絃樂の莊重な諧調が響いてくる。それがクライマックスに達した時、天上から白蓮の花が降りかゝる。同時に香煙が一時に立昇つて、全體を模糊の中に埋めて了ふ。樂、突如として止む。此夢幻的なシーンの後微かに東遊の太古の物憂さを帶びたメロデイが聞えて來る。それは多須奈の子止利が謳つてゐるのである。

一

うどの濱に
駿河なる　うどの濱に
打寄する波は　なゝくさの妹
ことこそよし　ことこそよし

そこ迄謳つた頃、シーンが明瞭(はつきり)としてきて、廻廊の階(きざはし)に腰をかけた善信尼と止利との姿が浮出る。背景は森の中の石山精舍の正面である。

前幕より約二旬の後。晩春の夜。

止利　(淋しく)お父さまはまだ歸らないの。

善信　もう直きお歸りにならうから、「うどの濱」の續きなと謳うて大人しくお待ちしておいで。

止利　もう謳ひたくないの。(間)何時の間にか月が消えて了ひましたね。

善信　惡い雲が隱して了うたのでせう。(寂靜。時鳥の聲)

止利　(ふと)叔母様。お父様は何故お坊様におなりなされたのでせう。

善信　それは知れたこと。無常を――と言うても坊やには分らないでせうが(言葉を考へて)父上は此間、御陵で一人の氣の毒な人を酷い目にお合せしてからは、大層世の中をお厭ひでしたが、今又、帝の御薨去に逢ひ奉つて、御悲歎の餘り到頭浮世をお棄てなされて出家の尊い御生涯にお入りなされたのです。

止利　坊様はえらい人なの。

善信　えらいといふよりも淨い人だと思ひます。

止利　坊やもなりたい。

善信　いゝえ。坊様になるには大きくなつて世の中の事がよく分つてからでないといけませぬ。

止利　（背く。靜かな間）　お父樣の遲いこと。

善信　今夜は殯宮の式祭があるので、（言ひつゝ階の上に立つて下手を指し）御覽。彼處に、ぼーつと一群の灯影が見えるでせう。あれが、帝の遺骸を祭られてゐる殯宮の前の火殘です。儀禮通りなら今頃は招魂をする遊部の謠が聞えたり、泣女の哀れな聲がほのかに漂うて來るでせうに。野の人々が惡疫に苦しんでゐるので、古の儀禮さへもお取止め遊ばされるとは、何といふ勿體ない大御心でせう。

止利　次の帝には誰方がお立ち遊ばすのでせうね。

善信　御順序通りなら厩戸皇子樣ですが、御子はまだ御若年の事故、彥人皇子か、それとも間人御后樣の御弟宮達の中から、誰方かお立ち遊ばされるでせうよ。

止利　彥人皇子は昨日呪のためにお薨れ遊ばされました。

善信　えッ。眞實ですか？

止利　今朝ほど、お父樣からお聞き致しましたの。

善信　まあ、怖ろしい！　（間）

止利　（上手を見て）　篝火が消えました。もう直ぐお歸りでせうか。

善信　（同じく上手を見て）　間もありますまい。さ、お立ち。お家まで送つて上げますから。

止利　有難う、叔母樣。（元氣に立上る。兩人下手廻廊より退場）

（舞臺空虛。晩春の夜の色濃くなる。時に貝古郎女が壺菫の白い花を胸一杯に抱へて下手から靜かに出る。惱ましげに階段を上り、灯の前に額く。一輪づつ白い花を取つて佛に捧げ始める。白い手と白い花とが闇の中に慄へる。）

貝古　（手を休めて）　あゝ、此の花を幾つお捧げ申したなら、わが願ふ喜びを惠んで下さるのか知ら。飛鳥川の岸邊に涙ぐむいぢらしい壺菫！　此花の淋しさが何故此樣に懷しまれるのでせう。空を飾る櫻花よりも、地を彩る艶かな芍藥の花よりも（手を合せて）佛樣。この切ない心願をお叶へ下さりませ。明らさまに、戀しい人の胸に囁くことも出來ぬ弱い心の上に尊い御手をお貸し下さりませ。今宵は、夜を籠めて此花を捧げてお祈りを致しまする。（扉の內陣に入る）

（下手に遽しい足音。貝古と同じ服裝の姉の河上娘が馳け出る。逃げ迷ふ如く精舍の內陣に入らうとして、ふと考へて、裏手へ廻つて消える。暫。覆面の者が追跡して來る。四周を見廻して背き扉の中に入る。悲鳴。やがて貝古を捉へて出てその儘下手に拉し去らうとす

る。）
頁古　あれえッ！　助けて……
覆面　靜かにしろ！（手を頁古の口に當てる）
頁古　（切れ〳〵に）どうなさるのでございます。お放し下さりませ！
覆面　白々しい奴！（髮を捉んで引張る）
頁古　あッ、痛ッ！（間）あなたは誰方でございます……
覆面　（不審げに頁古を見る）うむッ、（歎息）紛はしい服裝をして……えゝ、忌々しい！（矢庭に突放さうとしたが）今白い着物を着た女が此處へ參つた筈だ。さ、何方に失せたか有體に申せ！
頁古　（慄へ乍ら）一向に存じませぬ。
覆面　左様な筈はない！
頁古　否え、知りませぬ。つゆ存じませぬ！
覆面　（焼糞に）えいッ、からだッ！（いきなり頁古を下手の樹の根に蹴付ける。頁古氣絶す）ふん。（鼻で笑ふ。軈て覆面を締直す。苛々しながら獨白）いつもの松林迄誘き出して置き乍ら、いざとなつて、逃げ出すとは何事だ。俺は此様に女から馬鹿にされた經驗はない。（口惜氣に歩き廻る）本氣で、俺に戀をしかけてゐるのだらうか。鋸のやうに引寄せられて直ぐ突出されては堪らぬわい。それにしても、あの油の様な滑つこい科はどうだ。（微笑）この曉には守屋の討手に向はねばならぬ。今宵の中だ。草の根を分けても探し出さずには置かぬ！　その上で、彼女の凡てを握るか、凡てを亡ぼすかだ。（退場）
（泊瀬部皇子が下手から、忍びやかに出る。覆面の者の後影を見すまして、階に上る。と、下手の藪蔭から河上娘が姿を現はす。）
河上　（驚いた風に）皇子ではございませぬか。
泊瀬　おゝ娘。（相擁す）
河上　まあ、どうしてこんな處へ。
泊瀬　先づ腰をおかけなさい。その理由を話して上げようから。
河上　（不安げに）けれど、あの痴漢が……
泊瀬　いや、彼奴は行つて了うた。安心するがいゝ。（娘は仰山さうに安堵の息を吐く。兩人腰を下す）丁度、半時程前、私は厩戸皇子と一緒に此境内を漫ろ歩き乍ら當面の政治等に就いて語らうてゐた處、不思議なことに、日頃人氣のないあの松林の方に當つて怪しい人聲が聞える。忍んで參つて様子を伺ふと二人の男女。男は覆面。女は確かに汝だ。驚く間もあらせず、汝は差延べる男の手を振拂うて飛鳥の様に、林の中を馳け拔けて了うた。
河上　その様に、あなたが近くにお出でと知つたなら、躊

を上げて御助を願うたでござりませうに。

泊瀬　（續ける）　汝の跡を曲者が追蹤ける。そこで私も跡をつけて參つたが、丁度曲者は汝を見失うて何やら呟き乍ら彼方に引歸す樣子に、あれなる樹陰に忍んでゐたわ。

河上　御親切の程、身に泌みて嬉しう存じまする。

泊瀬　して、此の經緯は一體どうした譯？　それを聞かせて貰ひたい。

河上　（含羞を見せて）　氣恥しさに何事も申上げ兼ねまする。一重に御推量なし下さりませ。眞實（まこと）、かの覆面の者は東漢駒なのでござりまする。

泊瀬　東漢駒！　（神經質に眉を曇らせる）

河上　御潔癖な御氣性を想うて胸の張裂ける思ひが致しまする。私の不束から斯樣に淫らな狼藉を身に受けては女子の大事な操を失うたも同然でござりまする。此の上は、最早御緣も是迄と思召されて、何卒瀆れた者を御見捨て下さりますやう、私から御願ひ申します。

泊瀬　（獨語の如く）　其のいぢらしい言葉附。互ひに許さぬ處女（をとめ）の頃が思ひ出される。

河上　今の私は瀆れに染んだ女子でござりまする。（媚びある目で）　思へば、夢のやうな昔が戀しうてなりませぬ。

泊瀬　（續けて）　其の想出の消えぬうちは——。

河上　（進る）　左樣に御愛着にお迷ひ遊ばされては私の胸が切なうござりまする。藤張りと此身を芥の中に御棄てなされて下さりませ。

泊瀬　（探る樣な目で）　否、瀆れてはゐぬ者を……

河上　たとへ身は瀆れずとも、斯樣な不仕儀を御目に入れては。

泊瀬　（懊惱）　よしんば、駒に——。（激越して）　私は汝の一切を愛する！　瀆れも惱みも醜さも、凡てをこめて愛するのだ！

河上　眞實でござりまするか、泊瀬部皇子。

泊瀬　（いきなり接吻する）

河上　嬉しさが込み上げてきまする。（急に調子を代へて）否々、その接吻は……冷たうござりまする。

泊瀬　女は何故左樣に疑ぐり深いのであらう。

河上　それは致し方がござりませぬ。あの小手子媛への御寵愛をおもへば。

泊瀬　えッ。

河上　斯樣にお優しい御情も所詮は空（くう）に消える火花も同然。滿干（みちひき）のある樣な御戀慕にはもう厭々致して居りまする。

泊瀬　（考深く）　小手子と申すのか。

河上　はい、小手子媛！　大伴糠手の息女小手子媛！

泊瀬　今の世に、二人三人の妃をもつは世の習俗（しきたり）。人も我

も怪しまぬに。
河上　其の習俗が咒はしう存じまする。
泊瀬　（娘を抱締める）此の熱情をどうして疑ふのだ。お
お汝の身内が痺れ切るまで抱締めようぞ。
河上　お離し下さりませ。嫌でござります。
泊瀬　（離さずに）二人は、一番貴いものを許し合うてゐ
る。離れてはならぬ。死ぬるまで離れてはならぬ。
河上　あゝ、血の流れがとまりさうでございます。此の手
をお緩め下さりませ。
泊瀬　（懊惱）あまりぢや、娘。
河上　小手子媛をお棄て遊ばさぬかぎり……
泊瀬　あゝ。（よろめき乍ら退場）
（月出づ。見送る河上娘の顔には勝誇つた樣な笑ひが滲
出る。軈て下手に行く。負古に躓く。妹と知つて驚く）
妹！　妹！（介抱する。漸く蘇生する）まあ何といふ事
であらう、仰天して了ひました。妹や、氣を確かにお持
ち。さ、しつかりして！
負古　（微かに）姉上、有難うござりまする。
河上　何はさておき、この場の仕儀を早う聞かせて！
負古　はい。（斷え〴〵に）毎夜の通り、あの精舍の內陣に
て御祈りの眞最中、突然にこの襟首を掴む怪しき者。見
れば覆面。あはやと言ふ間に此處に引きずり出されて散
散の打擲。その擧句に、人違ひと知れたものか、曲者は
自暴になつて此の脇腹を、うむッと一蹴り！……其後は
更らに覺えもござりませぬ。
河上　（落付いて）憎い曲者！　何奴であらうの。して、
傷はないかえ。
負古　別段痛みもござりませぬ故。
河上　それはまだしも仕合せといふもの。では早う歸つて
此事を告げ知らせ、曲者を召捕る手配を致させませう。
さ、お立ち！　妹。
負古　（立つ）折よく姉上がお通り遊ばしたは、まことに
天の佑けと申すものでござりませう。
河上　大方左樣な事でありませう。
負古　それにしても姉上には今時分、何の御用で此の處へ
御越しなされました？（兩人下手へ歩む）
河上　（微笑）大方は推量して下され、妹。
負古　（淋しく）姉上は御仕合せにござりまする。
河上　（下手を見て愕く）お！　人影が。（狼狽）私は彼
方の路から――。御免なされ。（急ぎ上手に去る）
負古　（呆氣に取られて佇む）
廐戸　（下手より登場。負古を見て）負古郎女。
負古　（振向く。驚いて）貴方は廐戸皇子。
廐戸　曲者を追うて泊瀬部皇子が參りはしなかつたでせう

か。

負古　否え、御目にかゝりませぬ。

厩戸　（考へて）失禮致しました。御免下さい。（上手へ行きかけふと思ひ付いたやうに振返る。懸懃に）此間は綺麗な花束を頂きました有難う存じました。亡くなつた父上は、あの壺菫の淋しい花が大層好きで、御送り下さいました花束をば、死ぬる際までも眺めて居りました。

負古　あの樣なものを……お恥かしう存じまする。

厩戸　では、さようなら、負古郎女。又、お逢ひする日まで……（會釋す）

負古　さようなら、厩戸皇子。

厩戸　さようなら。（二三歩して停る。振り向かずに）もう一度、私の名をお呼び下さい。

負古　（胸とゞろく間）厩戸皇子。厩戸皇子。……

厩戸　ありがと！（急ぎ足に上手へ去る）

負古　（數歩跡を追ふ。兩手で心臟を押へて懊惱する）姉上はどうして皇子を怖れられるのでせう。あゝわが胸にもう嫉み心が忍んでくる……（胸を抱く）

（舞臺奥に騒音が聞えだす。）

德齊　（堂の裏から出る）お、負古郎女。此處にお在でゝございましたか。精舎よりの御歸りが餘りに遲うござりまする故、御迎へに參りました。

負古　それにいかい御心配をかけました。思はず時をすごして、（空を見て）もう月も落ちて了うたやうな。（軍馬の音高く響く。續いて喚聲）あの騒しい軍馬の響は何事でせうか、德齋法師。

德齊　大連殿御征伐の軍勢が唯今出發にござりまする。

負古　あゝ血を流す戰が到頭初まるのであらうか。未だ御喪中の間人大后や厩戸皇子の御心を如何樣に曇らせまつることであらう……（淋しく眼を空に向けると、篝火が映じてゐる。兩人廻廊に相並んで之を望む。時に上手の藪蔭より駒が劍に手をかけたまゝ躍出る。兩人の後姿に向つて靜かに詰寄るがやがて當てが外れた如く忌々しげに拔きかけた劍をがちりと元に納める。其音に兩人ははツとして振向く。ぢつと闇の中の覆面の者を見詰めたまま——）

## 第二場　雙槻宮の一室

前幕第二場に同じ。唯、櫻は葉ばかりになつてゐる。

二三日後の夜。

厩戸皇子は、棺と共に埋藏する父の遺愛の品々を整理してゐる。覺哿は、埴輪を檢べ乍ら、伎樂の話をしてゐる。

覺哿　管には笙、篳篥、横笛、鼓には太鼓、鞨鼓、鉦鼓、

また二つの鼓と申して大形の羯鼓がござりますが、是は高麗樂にのみ用ひて唐樂には用ひませぬ。

厩戸　して、それを奏でる調子は幾通りありまするか。

覺哿　六通りござりまする。即ち一越調、平調、雙調、黃鐘調、盤涉調、太食調の六種でござりまする。

厩戸　（整理を了へる）詳しく伎樂の話を聞いて、直ぐにも觀たうなりました。奇しき樂の音につれて袖を飜す舞人の伎が眼に映るやうに思はれる。

覺哿　高麗の都にはその演伎の座が七個處ござりまする。樂は相傳、朝廷の厚き御保護を受けて居りまする。

厩戸　其樣な美しい國が羨ましい。あゝ其の舞樂の伎に心の痺れるまでも醉うてみたい。

覺哿　凡そ、酒肉に醉ふ者は、醒めて悲哀の苦きを知ると申しまする。然るに、音樂繪畫詩歌――凡て天才の精神より湧出る甘泉に醉ふ者は、醉うて精神の養ひを得まする。孔子は、韶を聞いて三月、肉の味を知らず、とか曰うて居りまする。

厩戸　孔子は何といふ幸福な人でせう。然し博士、私は今、音樂等よりも宗教に就いて種々考へて居ります。自分の心を見詰めれば見詰めるほど、早く佛道に歸依して、心の淸い人間になりたいと思ひます。博士、一體どうすれば佛の信仰に入ることが出來るのでせうか。（覺哿默つてゐる）あの石川精舍の佛樣に日參をすれば、自然に淨土へ導かれるのでせうか。

覺哿　（首を振つて）なか〳〵。

厩戸　では、幾百卷となく經文を讀めば判るのでせうか。

覺哿　さう容易くもまゐりませぬ。

厩戸　では如何すればいゝのでせう。

覺哿　まづ捷徑を申せば、皇子が此日頃の御煩悶の源泉をば深く御省慮遊ばすが第一かと存じまする。（厩戸皇子は顏を赧む）否、戲談ではござりませぬ。

厩戸　私はあの處女の事等に惱んでは居りませぬ。眞面目に信仰の問題を考へて居ります。教理にも信仰にも明るい博士に導いて貰ひたいと、それ許り願うて居るのです。

覺哿　私は光ではありませぬ。唯、光に就いて饒舌をもつ學者にすぎませぬ。學者は人に信仰を與へる事はできませぬ。凡そ信仰の基は鏡の前に立つて獨り寂かに自分を正視するに在りまする。（長き間）

厩戸　（歔欷し初める）私は、今嘘を吐きました。博士、私はやつぱり、あの處女の事を想うて惱んでゐるのです。（間）私は逢ひたい。毎日でも。だが、その希ひを叶へる事の出來ない此身を思ふと、遣瀨なさに心の面が曇つてしまひます。

覺哿　（鷹揚に）詩人は、その心の上の曇りを眞夏の夜に

捧げる盃の泡の影、とか謡うて居りまする。

厩戸　泡の影。（涙頬を傳ふ）

覺哿　やがて、泡の影の消えてなくなる日が參りませう。一條の眞心の愛は石をも拔くとか。皇子、涙をお拭き遊ばせ。（可憐な厩戸の樣子に打たれて、若き日の懷想が老師の胸に芽ぐむ）皇子のいぢらしい御瞳が、此の皺枯れた胸に其上の日の懷かしい夢を展げて呉れる。高麗の都の泉水の邊りで、瑠璃色の瞳をもつた彼の乙女子を、夕べ夕べに待ち焦れた若者は誰であつたらうか。（自分の手を見詰めて）青春は遽しく過ぎて行く。（厩戸を見る）春光の如き御眼光。若草の御髮毛。軈て其の御歎きの深さが喜びの深さを計る物差とも相成りませう。

厩戸　然し、博士。戀は罪ではないでせうか。

覺哿　罪ではありませぬ。たゞ罪を作り勝ちなものでござりまする。（間）戀を知る事は則ち人間を知ること。人間を知つて初めて罪の宗教がお分りになりまする。

厩戸　（泌々と）有難う。よく分りました。

覺哿　（思出した樣に）先程、土部より申出でました、埴輪の檢分を致さねばなりませぬ。

厩戸　御面倒ですがお願ひいたします。

覺哿　では失禮致しまする。（奥に退場）

厩戸　（立つて庭を見る）すつかり葉櫻になつて了うた。あの頃は落花の吹雪であつたが。（日を算へる）御薨去からもう二旬あまり。（目を落す）

泊瀨　（登場）おゝ大分整理が進んでゐる。

厩戸　（振向いて）叔父上ですか。あらかた濟みました。

泊瀨　大儀であつた。（埴輪を見て）立派な出來ぢや。

厩戸　今夜で全部揃ひまする。

泊瀨　（坐りながら）姉上は。

厩戸　昨日斑鳩の鄕へ御微行遊ばされました。御歸りは明後日に相成りませう。

泊瀨　愈々精舍を御建立遊ばす御決心と見える。姉上にはそれが一番適はしい御生活であらう。御心配遊ばされた民衆の一揆も起らず、神罰とやらも現れず、それ許りか惡疫は下火になる。これでは姉上も晴れて佛道に御入り遊ばす事が出來る。處で、厩戸皇子。今日また一大事が出來致したのだ――。

厩戸　一大事とは何事ですか。

泊瀨　穴穗部の兄上が矢に當つて亡くなられたのだ！（厩戸驚く）昨日は中臣勝海が迹見赤檮に殺される。今日は兄上が慘しい御最期を遂げられる。明日――否、今頃は守屋も血の中に浸つてゐるかも知れぬ……（憂欝になる）

厩戸　（暫時無言）御樣子を詳しく承りたうございます。

泊瀨　兄上は守屋討伐の馬子勢に襲はれたのだ。（此時覺

部が歸つてくる。兩人が談話中なので去らうとする）博士、差支はありませぬ。何卒此處に！（覺部座につく）兄上の危いといふ噂は以前から聞かぬでもなかつたが、まさかと思うて多少は馬子を信じてゐたのだ。處が討伐軍は最初から豫定してゐた如く、急に途中から二手に分れ、一手は阿都へ、一手は兄上の邸宅に押寄せ、火を放つて取圍み、遂に兄上は落ち延びる暇もなく、佐伯丹經手の放つ矢に無慘の御落命と聞く。（間）あゝ姉上の御耳に入れたなら如何樣に御悲歎遊ばされるであらう、自ら抱く大望の爲めに此の痛ましい御運命とは――。

厩戸　あゝ何と申上げてよいか……涙が先走る許りでございます。（間。懐中から手紙を取出す）これは先刻馬子が持參致した手紙ですが一應御覽を願ひます。

泊瀬　（讀む）私も實はこれと同じ書面を受取つたが、多分他の皇子達へも送つたのであらう。然し、どうして此の趣旨を受入れる事が出來るだらう。酷らしい兄上の屍の傍で帝冠を奪うなどとは慮外な事ぢや。況んや、かかる世に權臣一人に推されて玉座に登る者の運命は唐土の例を引くまでもない。

厩戸　叔父上の御性格から申しても、其儀は御尤もかと存じます。

泊瀬　まつたくぢや。（覺部に）して、博士はどう思はれまするな。

覺部　左樣。臣は水、君は船――と申しまする。

泊瀬　船よく水を御すると申されまするか。（思入）む、萬萬一、私が玉座をふまねばならぬ時には、かの朋黨を眞先きに破壞して、兄上の……

厩戸　（下手庭から出る侍者を見ると同時に）叔父上！（と制する）

侍者　唯今、河内郡阿都より、早馬にて御注進にござりまする。

厩戸　直樣これへ。

侍者　は。（下手へ行つて使者を呼ぶ）

侍者　（登場。敬拜の後、早口に）阿都の別業に立籠り防戰に努めて居りました大連殿の守勢も、衆寡敵せず、刀折れ矢盡き、遂に軍兵は狩衣に身をやつして廣瀬の勾原に狩すると見せかけ、攝津國へ落延びようと致しましたが、大臣殿の軍勢に感付かれ、大連殿は竊かに榎の木に攀ぢ登つて大臣殿の攻勢を遣り過さんと致しましたが、迹見赤檮に見現はされて、よつぴく一矢に、あたら御落命にござりまする。續いて押坂史毛屎、其他一族一門、悉く御最期にござりまする。

（一同沈欝。）

覺部　（侍者使者に）御苦勞であつた。さがつて御休息

を。（兩人退場）

泊瀬　（昂奮して歩き廻る。獨白）朋黨の慘禍を除く勇者は誰であるか。一人身を挺して之を斷つ者は誰だ。強力な兵馬を有たぬ者は永久の虐遇を受けねはならないのか。兵權を握る唯一人の爲めに、夥しい血汐が無益に流されるとは耐へられぬわい。今は巷に出でてこれを叫ぶまでぢや。（退場）

厩戸　博士、一緒に叔父上の後を追うて下さい。

覺哿　（皇子を制して）皇子は其のまゝ！　私が宜しく御諫め申上げまする。

厩戸　では、御頼み申します。

覺哿　畏りました。（退場）

厩戸　（外の暗に眼を放つて獨白）騷々しい日と夜とが、いつまで續くのであらうか。殯宮に在す父上の御魂魄が靜かに眠る暇さへなく！（間）渦亂は渦亂を生んで、骨肉軍臣は流血の間に仆れる。早、二旬を閲して未だ新帝は立ち給はず、人は兵馬の間にのみ走せて世を省る者もない。軈てくる新しい御代が叔父上の血に祝はれて生れようとは！（正面を見詰めて）おゝ銀の弓を横へた樣な月の光りの飛鳥川。此の深夜の靜寂の中にも流れやまぬ清い水流――。永遠に流れるもの――。（間）おゝ野の人達！　權者のために引きずられて慘鬪の間に轉々する卿等もまた、軈ては死の訪れを受ける人の子ではないか。何故、隣人の愛に眼ざめて、長生の喜びに生きようとはしないのか。（胸を抱締めて）胸の髓が人懷かしさに痺れるやうだ。（月光水の如く流る）人の名を聲の限り呼び續けてゐたい。かの乙女子の名を……（庭に降りて葉櫻の根元に立つ。五月の紺碧の夜空には月が浮んでゐる。急に艷々とした櫻の幹に抱きつく。が、直ぐ反撥された樣に飛退く。そして身を慄はせて青草の上に立ちつくす）

## 第三場　馬子の第宅の庭

飛鳥川の流れを導いた半ば天然のまゝの庭園である。遙かに畝傍山を望み、林間には石川精舍と大野丘の塔とが隱見する。青葉を彩る紅紫樣々の色が咲亂れて居る。守屋討伐軍凱旋祝賀の日。皇子廷臣軍人等が大勢上手から下手の第宅のある方へ雪崩の樣に行過ぎる。

軈て馬子と東漢駒とが上手より出る。

馬子　（續けて）幼い時分から自由な育て方をしてきたので幾分我儘とも見える點はあるが、父の威光でそれを矯めることは私には出來ない。無論娘を汝に紹介したのは私であるが、それ以上の事を娘に對つて強制せよとは餘り蟲の良い話だ。汝は何も知らぬと思うて居ようが、あれから四五度も、私の眼を盜んで娘と逢引したのは誰だ

らう。然し私は娘を信じてゐるので些の干渉がましい事もしなかつたが、今日になつて娘に結婚を強ひて與れとは呆れ返つた話だ。

駒　成程、一應は御尤もにも思はれますが幾度も申上げる通り、娘は唯父上の、貴方の御許しさへ得て與れゝばと申すのですから、何卒一聲「許す。」と仰言つて下さい。でないと、私は貴方の御眞意を疑はずには居られませぬ。

馬子　私の心を疑ふ前に汝自身の心に問うてみるがよい。さういふ事を私の娘が言うたとすれば、それは娘がまだまだ汝を心から愛してゐない證據ではなからうか。若しさうなら、汝こそ無理な男と言はねばなるまい。繰返して言ふが、私は娘に對して自由な父である。娘から誰々に嫁ぐ！　と申出せば非人だつて許してやる！（駒の肩を叩いて輕く）駒。たかゞ女一人のために、親の威光まで借らうとは勇者にも似合はぬ事ではないか、え？

駒　さう申されると、顏中が火になります。（考へて）何だか愚弄されてゐるやうにも思はれる。

馬子　ははは。さう無暗に悲觀するにも當るまい。（再び肩を打ち乍ら）森の中に度々呼寄せてゐるからには、満更……なあ駒！　それは誰に問ふよりも（駒の胸を叩く）此處に聞いてみる事ぢや。

駒　（泣笑）戀をする者の自惚を是れ以上喋つて下さいますた。

馬子　（半ば冷かす如く）彼方(あちら)へ行つて汝の爲めにも祝盃を擧げよう。（下手に歡聲が聞える）大勢が待つてゐる。

（駒を引きつれて退場）

（舞臺空虚。「大臣萬歳。」の聲が奥から響く。厩戸皇子と貝古郎女とが肩を並べて上手から出る。）

貝古　（感情を籠めて）え、墓場までも。

厩戸　私も。

貝古　佛様にかけて？

厩戸　え。（肯く）今日といふ今日は、心底から嬉しさが溢れてくるやうです。長い陰氣な雨の後、大空に舞ひ上る日輪を仰いだ時のやうに。

貝古　私も御空を馳け廻りたいやうでござりまする。

厩戸　あの精舍の前で計らずもお目にかゝつたその夜から私は貴方の夢を見續けでした。胸が潮の高鳴る様にときどきして幾晩曉き明した事でせう。或時は戀をするのが罪惡のやうに思はれて信仰によつて戀を忘れようとした事もありました。けれど、それこそ自分に對する大きな虚僞だと氣が付きました。純潔な戀は佛様からも祝福せられます。私は貴方の、その瀆れのない黒い瞳を思うて遣瀬なさに、櫻の幹にぢつとしがみ附いたこともありました。

眞古　私もまた、芥子の花片をその御唇になぞらへてお吸ひしたこともありまする。

（流れの方へ靜かに歩んで行く。）

眞古　まあ、きれいな流れですこと。白百合の水に映つた影を御覽遊ばしませ。お河骨が咲いて居ります。（流れの中の石に片足をかけて手折らうとする。身が滑つて着物の裾を濡らす。少し大袈裟に）あ！　どうしませう。

厩戸（急ぎ背後から眞古を支へる）

眞古　こんなに濡らして……（裾をからげて搾らうとする。脛が現れる）

厩戸（それを見て憂欝な表情になる）

眞古（氣付いて）御免下さいませ。（裾を下ろす）着物を着換へて參りまする。

（奥からは頻りに歡聲が響いて來る。）

厩戸　では、私も饗宴の席へ參ります。

眞古　其處まで御伴を致しまする。

厩戸（輕く肯く。兩人下手へ退場）

（駒が正面奥から忙しい息をしながら登場。）

駒（流れの水を掬つて飲む）莫迦に渇く。（口をつけて飲む。飲み了つて汗を拭く。獨白）庭の隅々まで探しても影さへ見せぬとは。（「大臣萬歳」の聲高く聞ゆ）チエツ、忌々しい。手柄話に有頂天になつて酒を浴びてゐる頓智機奴！　業腹が煮えるわい。（四周を見廻し）場合によつては舌先の手緩い事はしないぞッ。（歡聲聞ゆ）癪に觸る聲だ。どれ行きがけに、狂人水を此の腹袋に詰込んでやらうか。（下手へ退場）

（泊瀬部皇子と河上娘とが上手の森の中から現れる。）

河上　それをお打明け申したなら私をお厭ひ遊ばすのは必定でござりまする。

泊瀬　結果はとまれ、早く言つておしまひ！　一旦聞かうとした事はどうしても聞かねば置かぬ私の性分ぢや。

河上　それでは申上げまする。（含羞んで）あの小手子媛憎さに、貴方の御心を御試し申したのでござります。

泊瀬　試したと？　あゝ女といふ者はなぜ左樣に邪智深いのであらうなあ。

河上　それ御覽遊ばせ、もう私を嫌うてござります。

泊瀬（作り笑ひをする）

河上　けれど、皇子。私の心はまだ〳〵安堵致しては居りませぬ。纎敵の小手子は父の糠手と一緒になつて私の事を讒誣する計りか、此頃では物部の呪師（ずし）を招じて、私を——否え、貴方までも呪禁うてゐるとの噂。彥人皇子もその呪禁の魔手にかゝつて俄かの御他界。それを想ふと身の毛もよだち血も氷る樣でござりまする。それに貴方と申せば……あゝ何にも申上まげせぬ。私をお疎み遊ば

す理由は愚かな私にも分つて居りまする故――。

泊瀬　その理由を明ら様に聞かせて貰はう。

河上　皇子、あれのためでござりませう。

泊瀬　あれとは何？

河上　其様にお惚け遊ばさずとも……

泊瀬　何だと言ふのだ、早く言うて呉れ。

河上　（摺寄つて）私は御后と仰がれる資格の無い女子でござりまする。

泊瀬　なんと申す。私が其様な大望を……

河上　抱いてはわるいと仰せられまするか。

泊瀬　成程、勸告のあるのは事實だが、血で血を洗ふ擾亂の眞只中に私の様な直情な人間が民草の上に立つは嵐に船を進めるも同然――。厩戸皇子並びに覺哿博士も切なる御諫言ぢや。元より心にもなき事故、今日の宴を好機に、はつきりと私の態度を公にする所存ぢや。

河上　（改まつて）皇子！　日外、「若し、わしが天が下を此上に乘せることが出來たならば――」と掌を開いて御微笑遊ばされた事をよもお忘れではござりますまい。其の時、私は此の御方こそ、久遠の光ぢやと心に堅く盟うた事をまざ〲と覺えて居りまする……

泊瀬　（述懐的に）其の時分の私は美しい理想に憧憬れる青年であつたが、今、眼の前に現世の醜さを見、且つは我が性格をば靜かに反省すると……

河上　（遮る）反省といふことは、いつも決心を鈍らす、性の悪い躓き石でござりまする。血の流れる荒野をば緑の野に復してこそ御稜威の輝かし榮えもござりませうに――。

泊瀬　それにしても、餘りに地の面は荒れ果てゝゐる。

河上　御不甲斐なさ！　あゝ是迄神かけて誓つてゐたことも、夢の中に萎んで了うのかしら……あゝ！

泊瀬　（卒然劍を外して娘の前に差付ける）わが親族の生贄に汝が父の血首を引提げて參れ！

河上　（動ぜず）此の劍は御返し申しまする。私は毫も不孝の罪は怖れませねど――先づ御勘考遊ばしませ。一人のはしたなき臣下の首を生贄にせよとは餘りに御自身の位置を輕んぜられるものとは思召されませぬか。

泊瀬　默れ！　私は傀儡師の手にはかゝらぬぞ。戀を楯みに、私をあやつらうとする馬子の心底は見抜いてゐる。その上は純潔無垢であつた二人の間に斯く暗影の差すを見ては、もう是れ限りぢや。

河上　それは怖しい邪推にござりまする！（涙乍ら）その御額の上に貴い冠の輝くまでは、お側を離れることは嫌でござります。

泊瀬　（強く）執拗いッ！

河上（一層執拗く）嫌、嫌、嫌でござりまする！（近寄る）

泊瀬（突飛ばす）退けッ！ それとも此の劍を受取るか。

河上（一旦倒れたがいきなり立上つて劍を奪ひ自分の咽喉元に擬す）

泊瀬（抱止める）何をする！

河上（無言のまゝ涙に輝く瞳を擧げて皇子を見る。悲痛さを帶びた顏は一段の美の魅力を增してくる）

泊瀬（娘の顏を凝視する。長き間。大きな旋風が心の中を吹捲くる。娘の顏に手を當てゝ切ない調子で）か、かむりを……

河上（半ば豫期したる如く、然し喜びに溢れたる表情にて）おゝ！（相擁す）

（下手奥より「萬歲！ 萬歲！」の歡聲にて幕靜かに降る。）

――幕――

## 第四幕

### 第一場　玄猪の宴

五年經過。壬子年十月亥の日。多武峰の北、倉橋なる倉橋宮居。庭園の下手に伎樂の舞臺を造る。庭園の眞き處に、倉橋宮、厩戸皇子、貝古郎女、河上娘、小手子媛、馬子、覺哿、王陵、駒、赤檮、椋手、其他文武百官亦數箇の卓子に椅つて酒盃を汲み交はしてゐる。其間を大勢の宮女が酒瓶を持つて注ぎ廻る。一同の視線は伎樂に注がれてゐる。伎樂は當時、高麗王の獻上したもので舞臺では烏冠を冠つた十餘人の樂人の作奏につれて高麗樂の狛桙（高麗人が往昔我國へ渡來の際玄海灘の荒波の上で感じるノスタルジアを謳つた樂）がもう終りに近付いてゐる。滿庭の紅葉は午後の陽を受けて眞紅である。人々が伎樂に熱中してゐる間に馬子と駒とだけが同じ卓で酒飲みに夢中になつてゐる。宮女に戲れる可笑味がある。暫時經つ。馬子が欠伸をする。一同は馬子を見るが直ぐ伎樂に眼を向ける。倉橋宮は之を見て不快な表情をする。伎樂が終る。樂人舞人退場。座が騷めく。宮女は盛んに酒瓶を持廻る。小手子媛が酒瓶を持つて倉橋宮の盃に注がうとすると河上娘は先廻りをして注ぐ。宮は娘の科介に暗い顏をする。盃をぐつと飲み干す。此度は小手子媛が先に注がうとする。又河上娘が押退けて注ぎにかゝる。宮は盃を手にした儘、娘の酒瓶を突退ける途端、盃は微塵に壞れる。娘は「痛ッ」と叫んで酒瓶を卓上に落とす。破片が散亂する。娘の右手に血が流れる。苛々としてゐた宮は手に殘つた盃の臺を娘の足元に投付ける。娘

に殊更高い聲で「痛ッ、痛ッ」と叫ぶ。醉拂つた馬子は眼を乾つと据ゑる。つか／＼と娘の傍に歩み寄つて無言のまゝ娘の二の腕を取り宮に流眄を呉れて其場を去らうとする。（以上、凡てパントマイム）

貝古　（馬子の袖を捉へて）父上！

馬子　離せ。

貝古　何卒、父上――。

河上　妹。その手をお離し！

貝古　御許し下さりませ、姉上。

河上　お離しと申すに！

（馬子は袖を振切つて娘を連れ上手に去る。座が白ける。駒、逆見、糠手等先づこそ／＼と退場し次いで文武百官も跋惡るげに去る。倉橋宮、厩戸、貝古、覺哿、王陵が殘る。）

倉橋　（堪へてゐたが堪らなさゝうに馬子の後を追はうする。四人之を止める）構はないでくれ。私は言ふだけの事を言ふのだ。

厩戸　でも、叔父上……

倉橋　餘りの驕慢無禮。

厩戸　（宮の手を取つて靜かに）たゞお忍び下さりませ。

貝古　（哀願する樣に）叔父上樣。何卒、此場は御宥恕の程願はしう存じまする。

倉橋　今日だけならば宥しも致さうが――。

覺哿　御胸中は豫ねてより深く御推察申上げて居りまする。さり乍ら、唯「時」の裁きをお待ちあるが肝要にござりまする。

厩戸　此の一時をひたすら御忍び下さりませ。

倉橋　「時」と言ひ「忍べ」と言ふ。私はこれ迄、時の裁きを待つて、忍び難き事も忍んで參つたのだ。然るに、かの娘までが父に見倣うて、此の傍若無人。（間）この忿懣は私一個の忿懣ではない。心ある民草は皆朋黨の害毒に眉を顰めてゐるのだ。廷臣より一兵卒に至るまで馬子の麾下を以て充されて居ようとも、私には信頼すべき民草がある。今は身を挺して理想の爲めに戰を決するまでだ……

厩戸　雄々しき御精神にはござりまするが、日外、博士の申されし如く、君は船、臣は水にござります。船はよく水を御して全きを得なければなりませぬ。ゆめ水に逆うてはなりませぬ。況んや激し易き急湍の水に於てはでござります。

倉橋　あゝ私に貴方の樣な篤い信仰と寛大さとが惠まれてゐたらなあ？

厩戸　叔父上の御理想が馬子等の沮止に逢うて忽ちに民草の上に具現致さずとも、善政と成德とは永遠に渉つて必

ず現れずには居りませぬ。王道は其の「永遠」を目安に致さなければなりませぬ。

倉橋　現實の波に弄されながら彼岸の光に希望をつなぐ貴方の心持は世にも羨しいわい。

舍人　（登場。敬拜）　今日の佳節に際し、山城國司より御祝着の爲め――。（と賀表を奉る）

倉橋　讀上げて吳れ。

舍人　は。（讀む）　時つ風、枝も鳴らさぬ太平の代に逢ひ奉り……

倉橋　止せ！　空疎な言葉は聞きたうはない。

他の舍人　（登場）　御上意にござりまする。

倉橋　何事ぢや、

他の舍人　吉野の奧、國栖の鄕より佳節御奉祝の爲め一匹の大野猪を御獻上にござりまする。

倉橋　む。其猪をこれへ曳き申せ。

他の舍人　は。（二三人の舍人と共に猪を曳いてくる。猪は跳ね廻る）

倉橋　見事な猪だ。玄猪神への生贄に此場に於て屠り申せ。（舍人躊躇ふ）

厩戸　生贄とは申せ、御殺生は如何かと存じます。

倉橋　（耳に入らぬ樣に）　早く斬捨てよと言ふに。

（舍人等速座に斬殺す。）

倉橋　わはゝゝゝ。（大いに笑ふ。軈て淋しく猪の骸を見詰めて諷刺的に）　何日か、此の猪のやうに――。

（一同屹つと宮の顏を見る。深き間。此の少時前に小手子媛が舞臺の階の隅に立つて樣子を見てゐたが隱れて了ふ。）

倉橋　（强ひて元氣に）　奧へ行つて飮み直したい。厩戸皇子。博士。今暫時、附合うて下され。（調子に悲哀がある）　ほんの暫時――。

（一同舞臺の階段を上つて退場。舍人等顏を見合す。舞臺少しく左に廻る。一面の庭で滿目の紅葉。大伴糠手が駒を拉して上手から現れる。）

糠手　（駒に耳語す）

駒　（初め少し驚く。軈て無氣味な苦笑に變る。力强く）　む。承知した！

糠手　しツ！　（怯々としてゐる）

駒　（上手の木立を指し）　其處で待つてゐて貰はう。私が呼出してくる。

糠手　否、大勢の中へ貴方が呼びに行つては人目に立ちます。私が參りませう。

駒　では賴む。私は其處でゆるりと待つてゐよう。

糠手　（小人らしく）　構へて他言めさるな。それでは御免下され。（上手へ退場）

駒　（糠手の後を見送って皮肉な笑ひを浮べる。獨白）　氣位娘の御寵愛が薄らいだからというて、馬子の威を借らうとする大痴け者。だが、あれを聞いたなら馬子も乾度火の玉になる。親莫迦が二人揃うたわ。（間）天よ、感謝をしてやるぞ。私の大願成就の日がやつてきたのだ。

（仰臥す。紅葉舞ひ散る）

馬子　（登場。糠手と話し半ばである。醉つてゐる）む。今日限り小手子はお拂箱になつたと申すのだな。

糠手　左樣な譯で。

馬子　（出鱈目に）よし。よし。

糠手　兎角、近頃の宮の御振舞には解し兼ねる節が多うござりまする。妃達は申すに及ばず、はしたなき宮女をさへ――凡て女性と申す女性を強つう御憎み遊ばすのでござりまする。

馬子　（碌に聞かない）成程。（駒の姿を見留めて）駒、どう致した？

駒　（起上る）餘程、御酩酊の樣に御見受けします。

馬子　此れしきで醉うたとも申されない。處で、改まつて用と言ふのは何ぢや。

駒　左樣に御酩酊では明日に致しませう。至極眞面目な儀でござるで。

馬子　醉うてゐるのは上皮だけぢや。心は確つかりしてゐる。

駒　此上、上皮だけをカッとおさせ申しては不可ませぬで。――

馬子　もたせ振りなら止めて貰ひたい。私は自分の爲めになる話には直ぐ正氣に返る性だから。

駒　では申上げるとしようか。（糠手肯く）實は大臣。（馬子の耳に口を當てる）

馬子　（燃える樣な怒りが次第に顏に上つてくる）眞實正銘か。

駒　（下手の猪を指し）先づ證據から御覽が願ひ度いもので。

糠手　（附加へる樣に）娘が確かに。

馬子　（激越）余を四つ脚に譬へて！　心外千萬！　（駒は皮肉な眼で馬子を見る。糠手は馬子の怒りが餘りに激しいので慄へてゐる）

馬子　駒！　汝は？

駒　（惡黨らしく大きく肯く。劍を拔いて腕を刺して盟ひを立てる）

馬子　（意を得し如く微笑す。深き間。突然駒の劍を奪うて糠手を殺す。高らかに笑ふ）

駒　（傍らに向ひ皮肉に笑ふ。その笑ひと共に舞臺暗黑となる）

## 第二場　多武峰の岨路

斧鉞の入らぬ深林。中に一條の岨路が通じて上手へ幾らか降りになつてゐる。下手に空洞のある杉の大木がある。下手奥からは樹を曳く聲が聞える。前場より二日後の午後。空虚な舞臺の下手から綱の先きを引張つた二三の樵夫が現れる。續て又二三人出る。續いて樟の大木の一端が見えだす。

樵甲　（下手奥に向ひ叫ぶ）綱先きを檞の根つ子に括り付けろ。

奥の聲　ようしきた。

樵甲　（舞臺の樵夫に）一押しぐつと押せ。（其通りにする。樵夫等終つて汗を拭く）

（下手から今は老いたる多須奈、即ち德齊法師と、鳥佛師と改めた止利とが出る。止利は沈鬱な表情をしてゐる。）

德齊　汝の氣に入つた樟樹が見つかつて私も漸く荷を降したやうな氣がする。

鳥　私も是程嬉しいことはありませぬ。此の森は何といふ莊嚴な感じのする森でせう。矗々と立竝んでゐる樹はみな佛像のやうに思はれます。

德齊　まことに心の中が淸々しうなる。（空を見上げて）日が暮れさうな、この樹は此處から谷川を流すとの事故、一足先きに村里へ歸ることにしよう。

鳥　え。

德齊　（樵夫に）皆の衆、お先きへ御免下され。

樵夫一同　御氣を付けて御歸りなされませ。

（德齊と鳥、上手へ退場。）

樵乙　時に、何誰樣が此の樟樹で佛像を御刻みなさるのかな。

樵甲　今の鳥樣がよ。

樵丙　へえ、あのむッつりしたちびが。

樵甲　笑はつしやるな。日本一の巧者（こうしや）だちふで。

樵丁　四五年前までは、佛像を拜んだだけでも酷い目に逢はされたものぢやがなあ。

樵戊　馬子樣が權柄を取つてからは佛樣に指をさしても首を拔かれる。

樵丙　いやはや、佛樣もお坊樣も御時勢で浮み出したわ。はゝゝ。

樵甲　それはさうと、此の木で刻む佛樣は、間人大后と厩戸皇子の御發願で先の帝御供養の爲めぢやと申す。佛は藥師如來、中宮寺へ御納めになるさうな。

樵乙　（木を撫ぜ乍ら）同じ木でも仕合せな生れぢやわい。

樵癸　何が仕合せなものか。山にをつて肥る方が仕合ぢや

て。（一同笑ふ）

（上手より土民四人が鶴嘴を持つて上つてくる。顔は菊石面である。）

土甲　は。えらう大ッかい木ぢやの。

土乙　何處まで曳かつしやるの？

樵甲　斑鳩までゝござる。

土民一同　大儀な事ぢや。

土甲　私等もちと手傳うて進ぜたいが先きが急ぐで、御免なされ。（樵夫等の間を分けて下手に行く）

樵乙　いかう急かつしやるが何處へ參られる。

土乙　倉梯までゝござる。

樵丙　鶴嘴を持つて、何の御用で。

土丙　墓掘りに。

樵甲　それは〳〵。早う歸らつしやれ。歸りは嬶衆の待つものだで。（一同笑ふ。土民下手へ退場）

樵乙　さあ、もう一息ぢや。

樵夫等　ようし！

（仕事を始める。綱を曳いて木の先端を正面奥に向け綱を解く。大音響を立てゝ木は谷間へ落ちる。跡片けを濟まし樵夫等は上手に退場。）

（舞臺空虚。鹿の遠音が聞える。軈て上手奥の崖に熊笹の音して、東漢駒が喪心した河上娘を小脇に抱いて現れる。駒は岩間の水を見るや娘を傍に寢かせて置いて、口に水を含んで飲ませる。娘、眼を開く。然し再び眠つて了ふ。）

駒　氣を確かに！（布帛に水を浸して娘の口に含ませて置いて腰に帶びた小劍を拔き、下手杉樹の洞を抉ぐる。そして娘の側に來て靜かに）明日は必ず軟かい蓐の上に臥させまする。今宵一夜の御辛抱を、何卒！（娘を抱いて洞の中に入る）

（上手森の奥から迹見赤檮が追跡して來る。足跡を探ぐつて一旦下手に去る。駒が洞から出る。餓虎の樣に其邊を漁り廻る。切株の側に樵夫の忘れて行つた握飯包を見付け雀躍してそれに噛り付く。下手より赤檮が再び現れる。駒を見て驚喜する。）

迹見　（態と落付いて）どうだ。甘いか。（駒驚く）驚くな。汝の首が賭物になつてゐる事位は知つてゐる筈だ。

駒　（度胸を据ゑる）うむ、言ふにや及ぶだ。

迹見　それでは娘を穩便に返して貰ひたい。

駒　（せゝら笑ふ）まあ歸つて貰はう。

迹見　頑張らずに返して呉れろ。

駒　今更、返す位ならば辛苦を嘗して此の山中までもお連れ申さぬわい。

迹見　成程、理窟だ。然し私が日頃の友情から穩便な手段

をと思ふのに、其の調子では、所詮舌先位では埒が明くまい。私とても汝の首があれば褒美は倍の倍にもなる。さ、駒。腰のもの丶生血を見せて呉れ。

駒　私にもう血を見るには耐へられないのだ。あ丶此様な不甲斐なしではなかつたがなあ。（迹見を向いて）若し汝に心底からの友情があるのなら、私達二人を此儘見逃して呉れ。馬子には「尋ね敢へず」と告げればそれで濟む事。汝には盟つて迷惑はかけぬ。私達は全然此の世を捨て丶三熊野の山中で、賤女、山賤となつて靜かな餘生を送る心ぢや。人間二人を救ふとおもうて汝の褒美だけを贐にして呉れ。頼む、頼む。

迹見　爵も報復も受けずに沒義道の快樂に耽らせてくれとは虫の良すぎる願ひだ。劍で奪うたからには最後まで劍に物を言はせるがい丶。

駒（益々哀願的に）今申す通り血汐に怖氣付いてゐる上に、此様に疲れ切つてゐる。（迹見劍を鳴らす）そんな音をさせないで呉れ。（地に額をつけて）もう一度汝の友情に訴へる。此通りだ。

迹見　鬼の念佛は止めて貰はう。

駒　獵師の懐中に入つた小鳥を憐れんでくれ。

迹見　其様な風に見せてゐるが、隙を覗うて私を討つ心であらう。いつもの手でな。

駒　今に及んで、何で——。

迹見　今に及んだから、其の奥の手も出ようといふもの。（大聲に）河上娘！　河上娘！

駒（同じく大聲に）娘！　娘！　お救ひ下さりませ！お救ひ……

迹見（矢庭に駒に斬つてか丶る）

駒（驚いて劍を拔いて切先を受ける）許して呉れ。迹見赤檮。

迹見（遮二無二切つてか丶る）

駒（受太刀のま丶叫びつづける）娘！　娘！

河上（物音に目ざめて洞穴から蒼ざめた首を出す。驚く）おッ！　危ないッ！　危ないッ！　劍を納めて！

迹見（切結んだまゝ娘を見る）お、娘には御安泰にござりましたか。此の痴漢を討取つて……（駒は将に斬られんとす）

河上（狂へる様に）赤檮！　劍を納めよと言ふに！（洞より出て中に割つて入る）

迹見　は。（已むなく劍を納めて娘の前に跪く）御健やかなる御尊容を拜し大慶至極に存じまする。片時も早く御父君に……

河上　父上に背いて此處まで落延びたわが身。歸る心は更更ありませぬ。

迹見　それでは宮に御殉死と申されましたは娘にも……

河上　（顔色變る）何ッ御殉死!?

迹見　すりや、非業の御最後を……?

河上　御最後！　あの、御最……（喪心して倒れんとするを駒が抱き止める）

駒　おゝ娘！　世の終りまでも此様に抱締めて居ようぞ！（間）五歳にあまる年月を血の中に喘いできたも何の爲め！（間）煮えたぎる戀は克つと言ふ。其昔、私を生殺しにした御身も強き戀の前には弱き捕虜となつて了うた。纔て好機は來た！　私は馬子の傀儡となると見せて實は馬子をあやつり、遂に素志を貫いて見事奪ひ返したのだ。然し、娘。私を無慘極る冷血漢だと思うて下さるな。（苦しげに）あゝ御身の胸を刺すべき劍の先にて……おゝ天よ、許して呉れ！（娘の耳に口をあてゝ）娘！　娘！　昨夜、上居の鄕社の床下で盟うて下さつた御言葉を忘れないで下され！　忘れないで下され！（振向いて）迹見赤檮、私達二人を信じて呉れ！

迹見　信じられぬわい。娘の盟言を聞かぬうちは。

駒　（娘に）あの床下の落葉を搔き集めながら打慄ふ身を毒と抱き合うて、盟うた御言葉を繰返して下され！　さすれば、赤檮とて、よも苦しめは致すまい。（娘の顔を見詰めて）早く！　早く！（娘無言。次第に其顔に油の様な笑ひが滲出る。訴へる如く、何故　其様な御顔を……。早く言うて下され！　ためらふ時ではありませぬ。（娘無言）なぜお默りなさる。卑怯でありますぞ。（次第に責めるやうな眼付になる。遂に堪らなくなる。卒然迹見に隙ありと見て急に向き直つて斬り掛る。迹見身をかはすと同時に左手に握つてゐた砂を駒の目に投げ付け一氣に肩先から斬りさげる）

駒　卑怯者ッ。

迹見　それは貴様のことだ。（駒は血の中を廻き廻る）縊るりと自分の血でも啜うて居れ。

河上　（駒を見て冷然）早く、留めを！

迹見　は。（留めをさす）

河上　（獨白）あゝ凡ては終つた。父上、おさらば！

（身を躍らして正面奥の谷川に投ず。）

迹見　あゝ！（谷川を俯瞰して嗟嘆す。）何事も無かつた様に友は靜かに眠つてゐる。（落涙）

（夕暮れて鹿の遠音淋しく聞ゆ。時に肅やかに時雨降りそむる。森林の落葉。大自然は夜の色に包まれて行く。寂。）

——幕——

# 第五幕

## 飛鳥の橘宮

厩戸皇子の宮。今の高市郡橘寺は其遺跡といふ。舞臺上手は居室、下手は庭である。其の向うは秋草の蕭々たる飛鳥野である。皇子は御病氣らしく蒼ざめて書見をしてゐる。負古妃は幼兒(山代大兄皇子)を抱いて其傍にしよんぼりしてゐる。話が長く途絶えてゐる模樣。前幕第二場より二三日後の夕暮。秋の殘照が野に薄らいで虫の聲がする。

厩戸　博士の御支度はもう調うたであらうか。

負古　彼是御出發の刻限でござりませう。(そつと涙を拭く)

厩戸　いつまでもお泣きでない。やがて母上も御着き遊ばすであらうから。

負古　その母大后に御合せ申す顏がござりませぬ。何卒御願ひの儀を御許しなされて下さりませ。

厩戸　(寧める樣に)またしても何を申す。父のために夫妻の緣をも絶ちたいとは淺慮と申すもの。一時の感情によつて深い結緣を破つては相成りませぬ。

負古　けれども私が御側にゐる故に、貴方樣は申すに及ばず、母大后にまで御心勞を御かけ申しては妻として何んぼう心苦しい事でござりませう。その上、貴方樣には父の言葉を飽くまで御信用あつて斷然御裁き遊ばされぬとあつては、あれ見よ、義父故に、厩戸はと、世の取沙汰も如何と案ぜられまする。斯く執物ふに申上げるは此の小さい心に餘つてのこと。何卒心中の苦惱をお汲み取りなされて下さりませ。

厩戸　其心持は一見、美しい謙遜の樣ではあるが、實は女の淺墓な考へに過ぎないであらう。一旦相觸れた者は永久に離れてはなりませぬ。世間ではよく性格の相違といふ理由から離婚をする者もあるが、それは性格の奧に在る「人間」に觸れないからのこと、況してや汝の樣に唯苟且の境遇の變化から離別などとは以つての外の儀ぢや。私の此度の心病はずつと深い處に根ざしてゐる。負古、涙を拭うて、まあ此方をお向き。(兩人居住ひを直す)祖父帝の御在世に、百濟國から佛法が渡來して此方、我國の思想、世態の大變遷を靜かに考へてみると、宛かも千年の路を二十餘年の間に歩んだやうなもの。一事一物として急激な波濤と遽しい疾風を受けぬものはない。その間にあり乍ら、傷み易い少年の心は、母上と博士と汝とこの三人の溫情の中に微傷をも受けずに羽ぐくまれて參つた。然し我國を吹きまくる颶風は依然として止まず、

遂に國の一切を擧げて空前絶後の奈落の底に吹落して了うた。天は震ひ、地は戰く。兇刃の閃く中に暗雲は低くさまようてゐる。度を失うた民草は疑心暗鬼を生じて恐れ戰慄いてゐる。此の暗黒時代を光明の御代に還すは眼覺めたる青年者の使命ではあるまいか、私は深く此の靈覺を感じて新しい時代の表へ歩みを進めるのぢや。

貝古　（皇子を仰いで）　それでは愈々――。

厩戸　巷に出づる決心ぢや。（間）　其爲めには汝の愛情と此の嬰兒の笑顔とが、此身を勵まして吳れねばならぬ。

貝古　御雄志のほどは天晴には存じますけれど、母大后の御聽許は如何なものにござりませう。

厩戸　御許し無きは覺悟の前――。

貝古　とは申せ……（幼兒泣出す）

厩戸　否、如何に仰せあらうとも。（幼兒泣きやまず）　どう致したのであらう。火でも付いた樣に。

貝古　今朝程より急に乳が上つて了うたのでござりまする。

厩戸　世の禍亂が此の幼き者をまで惱ませるとは――。

貝古　溫かい飲物の用意を致しまする。御免遊ばしませ。

（泣く兒を抱いて去る）

（侍女二人それぞれ藥湯と燭臺とを持ち來る。部室明るくなる。侍女退場。）

厩戸　（藥湯を服む。靜かに立つて縁先に佇む。日全く暮る。獨白）　帝を葬つて三日、倉梯の山麓には一莖きの火燄さへ立昇らぬ。道に仆れし旅人の樣に唯士民の鶴嘴の下に、儀式もなく眠らせ給ふ叔父上！（落淚。流星）　王者は何の爲めの王者なのであらうか。悲慘なる御最後を見奉るにつけ、父帝の御臨終を想ふにつけ、此の疑ひを重ねずには居られなくなる。身を殺して仁を成すと言ふ。孔子の措ける人間は斯と言はねばならぬ。身を殺し靈を捧げて尚ほ何ものも購ひ得ぬ王者の身の痛ましさ。（瞑目）　無我と捨身と――。それが王道であるのか。（間　蟲の聲）　巷には馬子を責めるの聲が高いと聞く、然し罪過が馬子に在るとも、駒に在るとも、私は兩人の何れをも責める事は出來ない氣がする。罪の大部分は時代に在る。無反省な權力過重の時代に在る。個人の罪は赦し、時代の罪は救はねばならぬ。（下手を見る）　お！　（思はず二三步進む）

（其時、德齊法師、鳥佛師、善信尼、禪藏尼、慧善尼等の一行が現れる。何れも長途の旅に疲れた樣子である。）

德齊　お久しうござりまする。（首を下げる）　皇子には御健かに。

厩戸　ようこそ。さぞお疲れの事でせう　奧で緩るりと御休息下さい。

一同（島を除く）有難う存じまする。

徳齊　大后様には些の御疲勞もなく御部室に御入り遊ばされてござりまする。

厩戸　御心遣ひの程忝なう存じます。

徳齊　して、博士の御出立は。

厩戸　頓てこれへ參られませう。船は明正午の出帆と早まつた故、遽かに夜中の御出發。

徳齊　漸く御間に合ひ申して安心致しました。（島を見乍ら）御發願の藥師如來の御像は昨朝より取りかゝりましてござりまする。尚ほ豫ねて御吩咐けの御念持佛の儀は今日持參致させてござりまする。（島は背にかけた包みから佛龕を取り出して皇子の前に差出す）實に未熟な鑿の跡にござりまする。

厩戸（龕扉を開いて見る。感歎の間）慈悲に充ちた寂かな眼光！　これこそ正身の御佛ぢや。涙ぐましい氣がする。（島に沁々と）私の心からの感謝を受けて下さい。

島（默したまゝ眼を伏せる）

徳齊（島に代つて）殊の外御意に協うて身に餘る光榮に存じまする。

厩戸（靜かに龕を抱いて棚の上に安置する）何卒、御休息を！　私も母上に御目にかゝりに參ります。

一同　はゝ。（退場。同時に皇子も退場）

（舞臺空虛。こほろぎ鳴く。博士の調度を積んだ三臺の輿が上手より出て下手に去る。舞臺再び空虛。頓て奧の間より「父上、父上」と呼ぶ聲が聞える。ついで帷が開いて憔悴した馬子が現れる。其袖に取縋るやうに負古がまろび出る。）

負古（切れ〴〵に）御所存のほどを先づ私に御漏らし下さりませ。夫の君は身心共にいたく御疲勞にござりまする。此上御心を惱まし奉るは……

馬子（昂奮してゐる）皇子御一人の前で申し上げたいのぢや。汝は彼方に避けて貰ひたい。

負古　父上の御耳には忌はしい取沙汰が聞えぬのでござりまするか。子の私さへ御心事を疑ひ申しまする。

馬子　父を疑うては呉れるな。私は汝が愛しければこそ、飛ぶやうにしてこれへ參つたのぢや。汝だけはせめて父に優しい子であつて呉れ、な、負古娘。（肩から抱いて）汝は小さい時分から、優しい氣立てのよい子であつた。人を欺かず、妬まず、皆から可愛がられてきた。然るに……汝には引きかへ、姉の娘は、汚れた……魔性の子ぢや……

負古　雄々しう御殉死を遊ばされた姉上をば惡様に申さるるとは――。

馬子（悶々）聞いて呉れ、負古。姉娘は……

貢古　（遁る樣に）　姉上は？

馬子　（投げる樣に）　邪淫に身を亡ぼしおつたわ。（貢古打たれる如く聲無し。一氣に）　兇漢東漢駒は、かの夜直ちに、娘と諜合して多武峯の山中まで落延びた處を、迹見赤檮に追跡せられ、駒は速座に斬罪。娘は萬丈の谷間に身を躍らして敢なく自滅ぢや。

貢古　（喪心した樣に）　信ぜられぬ事でござりまする……

馬子　眞實ぢや、眞實ぢや。貢古！　世を擧げて私を悪逆非道と罵らうとも、汝だけは、生みの子を信じすぎた愚かな父親をば少しは不憫と思うて呉れ。私は一昨日、皇子の御前で、罪は駒に在る、と強辯を重ねたが、先刻、詳しい迹見赤檮の物語を聞くにつれ、私の面皮は骨髓まで引剝れて了うた。矢張り罪は私に在る！　私は駒を唆かしたのだ。おゝ不埒な娘奴。屍を採出して寸々に斬り刻むぞ——と叫ぶ聲の下から……貢古！（切なく）　あの娘かどうか生き返らぬか、と言ふ氣がして參るのぢや。あゝ何といふ親子であらう。（茫然として空を見詰める）　私の爲めに瓦礫同然に失はれた人々の夥しき亡靈！　おお！

貢古　父上！　父上！

馬子　（現つに歸る）　それから、曳かれるやうに精舍に詣つて、長い夜を跪き明した。「人の前で無辜を盟ふ者も佛の前では積悪の罪が發かれる」慧國大師の一語が此胸を刺貫ぬく。（間）　軈て朝の光の中で汝の手紙を受取つた。娘！　此樣な父を有つた汝の苦衷は察するぞ。

貢古　その御苦悶を正面に見るには耐えない氣が致しまする。（上手を見て些か狼狽して）　皆樣の御出ましにござりまする。父上、暫時私の居間にて。

馬子　（肯く。兩人奥に退場）

（上手庭から間人大后、厩戸皇子、覺哿、王陵、德齊及び三人の尼が出る。大后は御腰は曲り白髪の老嫗となつてゐる。鈍色の法衣に水晶の念珠を手に掛けた全くの僧形である。近親に先立たれ老人の憂愁が何處となく漂うてゐる。一同おのづと停る。與が出る。飛鳥野は今、月明を待つてゐる。）

覺哿　（太い曇つた聲で一同に）　では、これにて最後の御袂別を申上げまする。先づ大后に首を下げる）

間人　（拔けた齒の間から）　お達者でな。

覺哿　（胸逼る如く）　また逢ひまつる日は……（語尾消ゆ）

間人　（暗愁）　彼岸で、な。（靜かに念珠を爪繰る）（憂ひの間）

厩戸　（一層顔色が蒼ざめてゐる）　博士。何卒御身體を大切にして下さい。十有七年も他鄉の風土に親まれた御身。

殊に高麗國は任那などとは異ひ、北方の雪深い國と聞きまする。時候の變り目や寒暑の厳しい時分には御無理を遊ばさないやうに……（聲曇る）

覺哿　忝う存じまする。皇子も、どちらかと申せば御蒲柳の御身故、充分御健康に御氣を付けなされませ。（皇子肯く）そして先刻承りました御決心の件が事實と相成つた曉には、その吉報を御使りの程御願ひ申上げまする。日本の御空を打仰ぎ乍らその日の到來を御祈り致しませう。

厩戸　其の便りが御手許に着いたならば、博士、貴方が十餘年の間、この胸の處女地にお蒔き下さつた智慧と道との實が芽生える日だと喜んで下さい。私に、星を見て其の輝きに涙ぐみ、野の花を見て其の美しさに沁入る、優しい心を養うて下すつたのは博士でございます。私はその心を以て民草の間に分入らうと思ひます。詩人の吹く蘆笛の音は世界の果をも搖かすと仰言いましたが、私は深く其の言葉を信じて居ります。（間）また、父亡き後は、博士を眞實の父上のやうに思うて隨分我儘を致しましたが、御別れに臨んで御詫びを申上げます。

覺哿　（皇子の手を取つて）其の御言葉こそ私への最善の餞け――。嬉しうございまする。（眼潤む）老先きの短い私に比べたならば、皇子には光に輝く長い御生涯が開けて居りまする。其の行旅に私の拙い御教養が何かと役立つこともございませうなら、此老人が現世に生命を享けたのも徒勞ではなかつたと申されませう。新しい時代に招かれて、日の御子が靜かな歩みを運ばれる日が廻つて參りました！　切に御自重あつて、上下億兆の民草のために……

間人　（涙をためて）覺哿。最前も申す通り、其儀許りは許しませぬ。前車の挫けた迹はまざまざと眼の前。せめて此の皇子には浄い生活を望みます。

覺哿　さり乍ら、精舍の中に身を淨うする許りが、諸佛の悲願に協ふとは申されませぬ。一粒の粟は地に落ちてこそ萬人の糧となるとも申しまする。

間人　いゝや、左樣に申されませうとも――。

厩戸　（宥める）母上、何卒、此場は。

間人　（涙を拭ひ乍ら肯く）

德齊　（覺哿を促す樣に、小聲で）最早、御時刻にござりまする。

（覺哿輿に乘る。皇子は妃が見えないので氣を揉んでゐる。）

覺哿　（王陵に）醫博士。國元への御使りはありませぬか。

王陵　（打萎れてゐたが顏を上げる）有難う。故郷へ歸られる貴方を想うて、私の胸は一杯になつて居ります。博

士。（進み寄る）貴方は高麗の國へ歸られたならば、立派な御子達や御孫達が待つて居られる。然し私は故郷の百濟の國にさへ最早一人の親戚も有ちませぬ。だが、博士。あの赤茶化た、低い山の連る百濟の路をお通りになる時には、路傍の草の葉になりと、王陵は日の本の朝廷に仕へて其處に屍を埋めるとお告げ下さい。せめてもの祖國への便りに――。

覺哿（涙乍らに背いて王陵の手を握る。兩人暫時彫刻の如くに立つ）

善信（進み出て）博士――。（次の言葉なく顏を掩ふのみ）

譯藏、慧善（涙聲て）おさらばでござりまする。

覺哿（丁重に背く）（輿動く）

厩戸（上手に貢古の姿を見付けて覺哿に）博士、暫時。貢古が。

貢古（輿に馳寄る）博士！（覺哿の袖に顏を掩うて泣く）

覺哿　御妃には御身健かに。（深き間）

（輿は庭を出てて飛鳥野に向ふ。月出づ。一同は群像の如くに立つて見送る。いつの間にか下手庭の隅に島佛師が現れて人知れず感慨深かさうに輿を見詰めてゐる。）

（軈て間人大后と貢古との眼光が合ふ。貢古直ぐ眼を伏せる。兩人の間にぶざまな間が置かれる。貢古涙をふく。間人大后は上手へよち／＼と歩み去る。此の光景を見て厩戸皇子の顏が曇る。振向いて博士の輿の方を見る。輿の灯が消える。）

厩戸（呟く樣に）あゝ、行つてしまはれた――。（喪心して其場に倒れる）

王陵（立騷ぐ一同を制して）靜かに！　靜かに！　一時の御立暗みと存じまする。（貢古に）御心配は御無用にござりまする。（德齊に）法師殿、御手をおかし下され。徐かに御居間まで御昇き申上げませう。

（月隱れて暗し。時に陣風燭を滅す。暗轉。直ちに皇子の夢の世界が開ける。）

## 夢の場

光のさゝぬ洞窟の底。上手上部に竹林の繁つた平地がある。洞底では樣々の異形の人間が陰鬱な聲て「無間苛責の大地獄。六道輪廻の底の底、絶滅飲食大餓鬼道」と唱へ乍ら食を漁つてゐる。摩訶波羅、摩訶提婆、摩訶薩埵の三人の太子は平地より之を俯瞰し大いに驚き何か囁き合ふ。弓を持つた波羅と提婆とは無理に薩埵を引張り去る。洞底で左の言葉が聞える。

（私が見ツけたのだぞ。）

（私だ。）
（私だ。）
（否、私ぢや。）
（うむ、畜生ッ、横合から取りあがつたな。）
（おぼえてゐろ！）
（ひッ……ひッ……）
（間。）
（今朝から食べずだ、なめくぢ一つ見付からないのだからなあ。）
（今、蕪を横合から盗んだ跛さん、私に片足くれろよ。）
（やるものか。なまけ者！）
（背中がお肚にくッつきさうだ。あゝかう食物がなくなつたら、どうするのかなあ。）
（岩も噛れまい。弱い者が強い者の餌食になるまでだ。）
（腕の無い小父さんから食はれるのさ。）
（べらぼう奴！　食はれて堪るものか。片輪だと思つて莫迦にするない！）
（はゝゝ……）
（間。此時、厩戸太子は獨り再び崖上に現はれて、ぢつと洞底を覗いてゐる。一方洞底の奥の方からは、微かに脚音が聞える。）——

（しッ！　静かにしろ！）
（何ぢや。）
（何事ぢや。）
（静かにしろと言ふに！）
（あの音が聞えないのか。）
（一同默ろ。脚音近付く。）
（お！　四つ脚の歩き方だ！）
（扉の處まで來たやうだ。）
（叩いてゐる！　叩いてゐる！）
（開けるな！　決して開けるな！）
（扉を強く打つ音。次いで壞れる音。一同褶伏する。一匹の虎が出る。）

虎　扉を開けるなと言つたのはどの餓鬼だ。（間）返事のないのは私が怖いのだな。（どこかで骨を噛む音）骨を噛んでるのは誰だ。（音止む）その骨を私に寄せ―　腹がぺこ〳〵に空いてるのだ！（返事がない）む！　寄こさないとかうだぞ！（爪牙を出して威嚇する）

躄　（虎に）物を言ふとこを見ると、貴様も元は人間らしいな。

虎　立派な人間様だ！（躄の傍に寄つて見る）おや！　君は中臣勝海ではないか。

勝海　さうだ。

虎（順々に見廻す）君は押坂史毛屎！　君は大伴狹手！　もう來てゐるのか。お、そこに居眠つてるのは守屋ぢやないか。

王陵　おい、その隣りが醫博士王陵樣だよ。

虎　む！　人殺しの名人。君は何時の間に此處へ來たのだ。

勝海　つべこべとよく喋舌る君は一體誰だ。名を名乘れ！

虎　私か――。私は東漢駒だ！

一同（驚いて默る）

駒（勝海に）私も君を殺した卑怯者の手にかゝつて殺されたのだ。人間で一番惡いことをしたといふ廉によつてな――。

勝海　一番惡いこと？　さうだらう！　四つ脚に姿を變へられるのはよく〳〵のことだ。

駒（物を食ふ音をきいて）何處の野郎だ。餓鬼の傍で物を食ふとは命知らずな奴！

守屋　かたつむりを嚙つてゐるのは私ぢや。守屋ぢや。大連ぢや。

駒　まだ大連をふりまはしてる。笑はせやがる。

守屋　さがれ！　人殺し！

駒　まだ威張つてやがる。あの世では大連樣だが、この世では私が一番強いのだ。空威張りをすると承知しないぞ！

守屋　なぜ、貴樣が一番強いと申すのぢや。

駒　餓鬼道では一番飢ゑてゐる者が一番強いのだ。私は四萬六千日の間、水一滴、飲まないでゐるのだ。

守屋　一番飢ゑてゐる者は一番弱い筈ぢや。

駒（皮肉に笑ふ）飢渇のどん底に陷る者は生命の爲めにはどんな事でもしでかすのだ。今に見ろ！　大連樣だらうが、なめくぢだらうが、殘らず食ひ亡ぼしてやるぞ。

守屋（幣を出して祓ひをする）

駒（嗤ふ）御幣と胃袋と何方が強いか見せてやる！（守屋に喰付かうとする。大きな音響。駒と甕の親子とな[illegible]して、一同掻消える。甕は自若として、子供の兩足を引裂かうとしてゐる。その光景をぢつと見て）その子は誰の子だ？

甕　誰の子でもない。私の子ぢや。

駒　何故、股を引裂かうとしてゐるのだ。

甕　腹が減つた。肉を喰ふのだ。

駒　我子を喰ふ！　呆れ返つた人非人だ。

甕　それでは、汝はこの子の肉を喰はうとはしないかね。

駒　それは私の子ではない。汝の子だ。

甕　それ見ろ。

駒　何がそれ見ろだ。他人の子を喰ふ位は平氣の沙汰だ。私はおまへの干乾びた肉をも喰つてやる！

壁　たべろ。勝手にたべろ！

駒　言はれるまでもないことだ。

壁　私は私で、この子の肉を喰ふからな。

駒　浅猿しさを通りこしてゐる！　もう一度問ふが、おまへは自分の子供を喰つて可哀さうだとは思はないか。

壁　おまへは私を喰つて可哀さうだとは思はないか。

駒　おまへと私とは他人だ。私は飢ゑてゐるのだ。生きてゆきたいのだ。

壁　私も飢ゑてゐるのぢや。生きてゆきたいのぢや。

（この少し前から斷崖の上で左の景がすゝむ。）

薩埵　（以前から腹這ひになつて洞底を覗いてゐる）

波羅　（提婆と共に薩埵を探しに戻つてくる。薩埵の姿を見付けて走り寄らうとする）

薩埵　（兄達の來るを知らず、駒と壁との對話の終つた瞬間、身を躍らせて洞窟に飛込まうとする）

波羅　（提婆と二人で薩埵を抱き止める）　危ない！　どうするのだ。

薩埵　離して下さい！　この臭軀を飢ゑたる者に與へるのです。

波羅　あの餓鬼共にか……

提婆　無茶にも程がある。私は家へ歸つて肉を取つて來る。

薩埵　その餘裕が無いのです！……………

提婆　（薩埵を掴んだまゝ底を覗く）　誰を助けようといふのだ。あの子をか、壁をか、虎をか――。（弓を示し）子を救けるには壁を射ればよい。壁を救けるには虎を射ればよいのだ。

波羅　否や、誰も助ける必要はないのだ。彼等は惡業の報いを受けて永遠に苦めばよいのだ。若し虎が傍若無人の振舞をするなら、その時こそ、弓があるのだ！

薩埵　離して下さい！　彼等が如何なる惡魔、如何なる阿修羅であらうとも、私の臭軀を食んで一時でも生き延びる事が出來るなら、私は滿足です。離して下さい！（兄達を突退けて洞底に落ちる。其瞬間に大音響がして舞臺暗黑となる。次いで何處からともなく「善哉、大士、大慈大悲」といふ合唱が聞える。洞窟には紅の色が滲んでくる。天樂と共に名華が降りくだる。左の頌の聲にて懸き幕靜かに降る）

大士救護運悲心。　等視衆生如一子。
勇猛歡喜情無悋。　捨身濟苦福難思。
定至眞常勝妙處。　永離生死諸纏縛。
不久當獲菩提果。　寂靜安樂證無生。

（此のシーンは法隆寺金堂の玉蟲厨子の密陀繪にあ

る、金光明最勝王經捨身品の圖からヒントを得たものである。）

幕の上る前から民衆の喧騒の聲がする。元の橘宮の翌朝である。飛鳥野から庭内へかけて雲霞の如く民衆が充滿してゐる。馬子が民衆の爲めに引据ゑられてゐる。上手に廐戸皇子が佇んで此の光景を見てゐる。場面緊張の儘。

民甲　大臣ではなうて毒蛇ぢや。毒草ぢや。
民乙　蛇は袈裟衣を脱いでも蛇ぢや。
民丙　皇子の新しい路を塞ぎまつる毒草は燒拂ッて了へ！
民丁　懺悔も後悔も信用しないぞッ。
民戊　見ろ、踏付けられた草は此樣に撥ね返つてきたのだ。
（民衆騷然）
廐戸　（民衆の方へ二三歩進んで）　お鎭り下さい。貴方方の申すことは一々御尤もであります。然し馬子は熱涙を流し地にひれ伏して、貴方方の爲すがまゝに身を委して居ります。其の大臣の心中は決して狂言ではありません。否、たとへ狂言にもせよ、一旦懺悔を盟うた者は暫時長い目で其の將來を見てやらなくてはなりません。私達は先づ寛大な態度に出でようではありませんか。
民甲　俺達から寛大さをもぎ取つて了うたのは大臣なのでござります。皇子、何卒御干渉なさらない樣に願ひます。（民衆に向ひ）それッ！
（民衆は馬子に向ひ「犬！」「熊！」「狼！」「蛇！」「狸！」などと罵倒し乍ら、手又は足にて撲つ。）
馬子　（堪り兼ねて立上る）　犬熊狼蛇狸——それは貴樣等の事だ。さあ、貴樣等の對手になつてやるぞ。（剽悍な風貌を露はして民衆を壓する。民衆一時怯む）
民乙　（やゝ皮肉に廐戸皇子に向ひ）　悔い改めた狂犬は斯の通りでござります。
民丙　本性を現した此の面構へを御覽下さりませ。
馬子　うむッ！　（齒を喰合せる）
廐戸　（馬子を制して民衆に向ひ）　馬子を斯の樣にさせたのは誰でせうか。人を獸の名で呼ぶ者は自ら獸同然の人間であります。（間）　人を裁き罰することは其の人を善良にまで導く事でなくてはなりません。然るに貴方方は憤激の爲に此の根本を忘れて却つて人の惡性を挑發し、懺悔する者の心を攪亂して了ひました。私は貴方方の一人が先刻叫ばれた樣に、蛇は袈裟衣を更へても蛇であることを知つて居ります。惡は人間の性の半面であつて如何に懺悔をしても消えるものではありません。然し、懺悔をする者の許されるのは惡を惡と識つて之を除かうとする心の生じた爲めです。

民丁　私等が代つて除いてやります。

民戊　馬子の懺悔は世間をごまかす爲めの懺悔です。

厩戸　では、其の胸元の石を拾うて一齊に馬子に對つて投付けなさい。（民衆動搖す）誰か佛の前で人を罰する石を投げ得る者がありませうか。私は飽くまで、馬子を庇ひます。彼の罪を罰する事なく凡てを許します。さすれば、私も貴方方の敵でありませう。さ！　私の面上にも石を投付けて下さい。

民癸　（老人）大臣は義父君故、斯く御庇ひ遊ばすのではございませぬか。（民衆の内に「さうだ」と叫ぶ者あり）

厩戸　（少し激す）其の疑惑は覺悟の前であります。若し私が馬子の首を斬つて飛鳥野の樗の木にでも梟けたならば、貴方方が如何に狂熱して私を喝采するか、よく知つて居ります。然し私は際物師の物眞似は致し度くありません。政は人間相互の愛と扶助との上に立たなくてはなりませぬ。この簡單な幼稚に見える考への下に眞の政は行はれなければなりません。（民衆口々に何か語る）

負古　（急ぎ登場）母大后には急に御歸庵の御意にござりまする。御引留めのほど御願ひ申上げまする。

厩戸　御諫止に御從ひ申さぬため御立腹のあまり御歸庵遊ばされるのであらう。今は詮方ない。御歸庵は御隨意ぢや。

負古　左樣に申されませうとも……

厩戸　よいわ！（負古止むなく默す）

馬子　（民衆に向つて）石を投げよ。石を投げよ。

（民衆再び騷然。一人石を投ぐ。續いて數個の石飛ぶ。馬子仆れる。負古父に取付く。厩戸皇子傍らに趨く。時に一つの石、誤つて皇子の額に當る。血滲む。）

民衆　（愕いて）おゝツ！

民甲　（憤然。民衆に向ひ）皇子を傷つけたのは誰だツ。

民丁　（率直に飛出す）私だ。過つたのだ。わるかつた。

民衆　謝まり申せ。謝まり申せ。

民丁　（皇子の前に額く）

厩戸　過失といふものは誰にもあります。其樣に謝まるには及びません。それは兎に角、馬子は此樣に打ち仆れて了ひました。貴方方の感情は滿足されたことゝ思ひます。それで一先づ此處を引上げては下さいませんか。

（民衆互ひに肯き合ふ。）

民甲　（進み出でて）皇子！　此際我々民草の熱望を容れられて天の御位に御卽きの程切に御願ひ申上げまする。

民衆一同　御願ひ申上げまする。

厩戸　（決然）私は生涯貴方方と一緒に居ります！　私を御信頼下さい。私は心から貴方方を愛します！

（萬歲の聲湧く。歡聲の内に民衆は漸次散り行く。場

面寂然。貢古の啼泣が聞えるのみ。）

厩戸　（馬子を抱く）　義父上。義父上。（馬子答無し。奥へ）誰かゐる。（近臣登場）奥へ舁ぎ申して直様醫博士を招じて――。

近臣　は。畏りましてございまする。（馬子を舁きて貢古と共に奥に退場）

厩戸　（飛鳥野の民家の影を眺めて獨白）あゝ、私は何を望んで民草の中へ歩んで行くのか。（間）或時は湍水の面の如く、或時はわだ海の荒狂ふ如く――。民草の力は久遠の謎である。

鳥　（影の如く上手庭より登場）皇子、御寺に歸りまする。

厩戸　歸られるか――。して、大后には？

鳥　御輿を早めさせられて、最早御發足にござりまする。

厩戸　最早御發足。（長き間。鳥の手を握る）此の御手の温かさ。五とせ前にもなる。飛鳥野の皇陵で、土くれにまみれた此の御手を斯うして握り締めたことを覺えてゐられるか、え？

鳥　えゝ（靜かに肯く）

厩戸　あゝ此の御手からは世にも貴いものが生れる。私が民草の間に羽育くまうとするものはそれに比べると遙かに小さいものゝやうに思はれる。

鳥　（ぢつと皇子の顔を仰ぎ見る）　血汐が滲んで居りまする。

厩戸　（額に掌をあてゝそれを眺める）

鳥　（同じくその掌の上に眼を注いだまゝ）

（こほろぎの聲。奥からは貢古姫の忍び泣きが漏れてくる。）

（下手の飛鳥野の一隅には間人大后の御輿とそれにつづく徳齊法師及び三人の尼僧の小さい姿が秋の芒の穗波の中に寂しく沒して行く。）

――大團圓――

（一九二三年）

# 悲劇 平維盛（三幕）

**人**

平維盛
重景　維盛の從者
石童丸　美少年、女優又は女形が扮す
瀧口入道時頼
了念
快念
大勢
其他。聞者、僧、山伏、武士、村人、舟夫等

**時**

壽永三年の春

**處**

紀州高野山
熊野那智浦

## 一、高野山中

森々たる杉木立。密葉の間から覗いてゐる切れ〴〵の空には早春の夕暮を想はする夕陽の影が仄かににじんで、波の様な國境の山々はいま静かな眠りに就かうとしてゐる。一すぢの細徑が上手奥から中央に延びてきて、くの字形に折れて花道に向ひ、下手寄りの大きな岩のところを一路は坂となつて奥へ降り、一路はそのまゝ花道へ延びてゐる。春寒き高野の奥にはまだ殘雪が路傍の草を埋めてゐる。幕明き前から春の夕をおくる峰谷々の寺院の鐘の音が惱ましげに聞える。

幕明く。鐘の音が止んで暫くたつと、坂口の岩蔭から藺の深編笠が一つ現れる。肩の荷物扮装などから見て高野詣りの旅商人とおもはれる。

男　（樹の間を透かしてあたりを見廻はす。徐々に小徑を辿つて中央の曲り角の邊まで來て上手奥を見る。思はず）おお、目印の梅が！（さう言ふなり急ぎ坂口に立戻り奥に向つて叫ぶ）おーいッ……見えましたぞう……おーいッ……

答へる聲（微かに）おーいッ……

男　（安堵の體にて笠を脫ぎ太古の森を見上げて）あゝ、得も言はれぬ寂けさぢや！（落陽の空を見て）あの陽の落ちるあたりに血腥い合戰があるとも思はれぬ……（溜息をつく。やがて、身を岩蔭に寄せて草鞋の紐を結ぶ）

（靜寂。花道から快念了念の少年僧が話しながら登場。

（快念は年長である。）

了念　それ、やはり朝敵であらうがの。

快念　なるほど今は朝敵ぢやが、やがて御味方となるは請合ひぢや。

了念　なんで左様なことが。

快念　まづ考へてみやれ。昨日までは平家の戰勝祈願をいたしてをつた當山が、明日は打つてかはつて源氏必勝の大祕法を修せられると申すではござらぬか。あの目先の明るい大僧正樣が譯もなう斯樣なことを致されようか。

了念　（無念さうに）この御山も權勢の强い方へ寢返りを打ち居つたか！

快念　これッ。（あたりを見廻しながら）寢返りなどと、もし本院の所化にでも聞かれたら……

了念　（構はず）あゝ日夜あがめ奉つた大僧正樣もこれでは俗人も同然ぢや……

快念　（聲を落して）高僧聖僧とて濁世の波の外には居られぬ御時世ぢや。興福寺園城寺とても同じこと——。そなたの師の房のやうな道心堅固な求道者は千人に一人……（兩人坂口まてくる）これやもう坂口。名殘惜しいがおさらばでござる。

了念　（淋しく會釋して）おさらば。

快念　明日また大祕法の場で。

了念　（背いて）逢ひませう。

快念　（坂を降つて退場）

了念　（とぼとぼと上手奥への徑を辿る）

男　（立上る。了念の後から）もうし、もうし……（聲を高めて）もうし！　もうし！

了念　（振向く）わたくしをお呼びでございまするか。

男　（いんぎんに）へい、御急ぎのところをお呼び止めいたしまして相濟みませぬ……（腰を屈めながら了念に近づく）へい、手前ことは江州彦根在の絹商人與兵衛と申すもの、三人連れにて初めて當山へ參詣致しましたが、只今あれにて漏れ承りますれば、明日は戰勝の大祕法とやらを修せられるとのこと、左樣に有難い御會式にめぐり逢ふのも大日如來の御導き——。是非とも御參拜を致したいと存じまするが如何なものでござりませうか。卒爾ながらお訊ね申しまする。

了念　その御會式は源氏勢の御祈願ゆゑ、武士の外は諸人禁制と承りまする。

男　それはそれは。してその源氏勢と申されまするとー——。

了念　東國から參つた範賴殿の手勢でござりまする。

男　（驚きを包んで）いつ當山へ御參着にござりまするな。

了念　そなたは橋本宿から本街道を御上りではございませぬか。

男　へい……その……和歌の浦見物を致してあの西山の裏路傳ひにこれまで參りましてござりまする。
了念　あの恐しい險岨を――。
男　いかにも左樣で――。
了念　和歌から橋本までは紀の川沿ひに樂な路がある筈。
男　え、え、その何でござりまする。急に歸國といふ事に相成り近路ときくまゝに難路とも知らずついうか／＼と……いやもう人跡絶えたる山中とて、連れの一人は步行さへかなはず……未だに姿も見えませぬ。（と木の間を透かして坂下を見る）
了念　（ぢつと男の樣子を見て小首を傾ける）
男　（向き直つて）　さて御出家。たゞさへ商人は心弱いものでござりまするに、武士達大勢居ると聞いて俄かに身內がじん／＼致して參りました。何卒明日の旅路の心得に、その源氏勢とやらの人數、屯の宿々など詳しう御教へなされて下さりませ。なるべくその宿々をよけて參りたうござりまするで――。
了念　（だしぬけに）　旅の人。これで御暇申しまする。
男　はて――。ま、ま、お待ち下さりませ。（了念を追うて憐れみを乞ふやうに袖を捉へて）さう仰せられずに、憐れな旅人を助けると思召して、何卒一部始終を御漏しのほど、へい、此通りでござりまする。（と、地に額をつけて懇願する）
（坂下より「おーいッ……」と呼ぶ聲に續いて何かきこえる。）
男　（心中うろたへる。坂下に向ひ大聲に）只今！　只今！（了念に）　あれが同行の者にござりまする。へい、御出家、只今の儀を切に御願ひ申しまする。
了念　一向に存じませぬゆゑ……
男　知らぬ筈はござりませぬ。へい、折入つてのお願ひでござりまする。
了念　いえいえ何にも存じませぬ。
男　それはあまりにつれなうござりまする、御出家。（と、了念を見据ゑる）
了念　（武士らしい眼光に射られて戰慄を感じる。思はず）わ、わかつたッ……
男　（とぼけて）　どうかなされましてござりまするか。
了念　師の房に申し上げるのぢや！　（と、逃げかゝる）
男　（袖をしかと握りしめる。落着いて）　何と申されまするな。
（呼ぶ聲が微かに「我君樣の御召し」と聞える。）
了念　あ、あれをききやれ！
男　えゝッ。（屹となる）
了念　平家の落人！

男　こ、これッ、さ、さやうな者では……

了念　お、お離し下され。（力をこめて男を突退ける。一目散に上手に馳け行く――。と、森の寂けさを裂く如く悲鳴をあげて残雪の中に倒れる）

（物すごき靜寂の間を縫うて微かなる呻き聲。）

男　（暫く彫刻の如く立つ。やがて靜かに死骸の傍に行き短刀を拔き取り涙ながら獨白）あゝ、また一人、可憐な者を殺めたか……あゝ。主君の爲めとは云ひながら、……許されよ御出家！　逆さまなれど俗人の念佛を受けて極樂往生して下され。南無阿彌陀佛、々々々。（長き間、坂下よりの呼ぶ聲に目ざめたる如くあたりを見廻し、死骸を抱いて奥の谷間に降り、やがて足早に坂口へ行つて奥へ降りて行く。）

（舞臺空虚。やがて話し聲が聞えて三人の旅人が坂口に現はれる。深編笠の痩せぎすな男は足をいためて左右の男の肩に手をかけて釣られながら歩いてゐる。右は先刻の男で重景。左は石童丸。眞中なのは維盛である。）

重景　漸く坂を登りつめましてござります。

維盛　左様か――。

重景　そこの曲り角まで參れば目印の梅も見えまするで今一息の御辛抱を願ひまする。

維盛　此の様にしてならまだ三里や五里の路は樂に歩けさうぢや。

石童丸　それではこちらが堪りませぬ。（汗をふく）少しの間、この手をお外し下さりませ。肩が痛うてなりませぬで。

維盛　ようし。これでよいか。（手を外さうとすると足先が地に付く）痛ッ……痛ッ……

重景　（よろめく維盛を支へる。石童丸に）もう七八丁のところぢや、さ、元氣をお出しなされ。

石童丸　（力なく）はい。（元の如く維盛の手を肩にかけ三人よち／＼と歩む）

維盛　あゝ斯様に我れとわが身が動かせないと思ふと、しみ／″＼そち達の有難味が分つてくる。両人共にいかい難儀をかけるなう。

重景　これしきの御奉公が何でござりませう。親重代の御厚恩を思へば　この骨を粉に致しても尙ほ足りませぬ。

維盛　そちから「親重代の御厚恩」といふ言葉をきく度にわしはいつも冷汗を覺える。お互ひの親同士が恩をかけたりかけられたりしたために、子供のわし達までが恩義のやり取りをしなければならぬといふ理由があらうかの。まあわしはよいとしても、そちの身になつてみると迷惑至極の沙汰であらうがの。

重景　御恩返しが何で迷惑でござりませう。

維盛　いや、總じて主君の恩などと申すものは戰場で一働きさせたいための方便に過ぎぬやうぢや。結局(つまり)は、「一將功成つて萬骨枯れる」で、忠とか義とか申す美名に醉うて戰場の露と消える者がまづ愚かといふものぢや。

重景　これは恐れ入つた御言葉にござりまする。

維盛　そこで兩人。そち達の忠義をもうこのへんにしてはくれまいか。

重景　重ね／＼の御串談、恐れ入りまする。

維盛　串談ではない。この通り至極正氣で申すのぢや。

石童丸　重景との、御氣をつけなされ。中將樣は狂言を遊ばすのがお上手ゆゑ。

重景　はははは。そなたの申される通りぢや。はははは。

維盛　正氣ぢやと申すに左樣に取られては近頃迷惑でござる。

石童丸　（その途端）おツ、白梅が！（三人思はず立止まる）

重景　（嬉しげに維盛に）あ、あれ御覽下さりませ。あの杉木立の蔭に！

維盛　うむ、草庵が見える！（やがて溜息をつく）

石童丸　（ぢつと透し見ながら）あゝ嬉しや！　永の舟路に島を見た思ひぢや。

維盛　（突然崩れる如く路傍に坐り込んで了ふ）

石童丸　おゝ我君樣が！

重景　（振向いて）如何なされましたな。

維盛　待ち望んだ白梅を見て氣のゆるんだせゐか……こ、この通りぢや。（大袈裟な表情をして吐息をし腰を撫ぜる）

重景　いま御休息遊ばされては、今度歩き出す時一しほ御み足が痛みまするで、こゝのところは御辛抱あつて……

維盛　ぢやと申して。（腰をさすりながら）こゝの骨が拔けてしまうたやうで、痛ツ、痛ツ……一歩も半歩ももう歩けぬわ。

重景　これはこまりました。草庵を眼前に見ながら……（自ら肯いて）やむを得ぬ、どれ、御介抱致しまする。

石童丸　私もお擦り申しまする。

維盛　それには及ばぬ。暫くぢつとして居れば痛みは治りさうぢや。しかし重景、此處にかうしてゐても大事はないか。

重景　されば。（とあたりを一巡して）大丈夫でござりまする。

維盛　左樣か。（近くを見廻して）ところで、小坊主奴の死骸はいづれへ打棄てたのぢや。

重景　（奥の下を指し）丁度あの松のところに。から御覽

遊ばせ。（指先で維盛の視線を導く）

維盛　む、見える。よつく見える。鷗の餌食にするには勿體ない美僧のやうぢやが……

重景　まことに眉目美しい雛僧にござりました。

石童丸　（すれたる如く横を向いてゐる）

維盛　これや石童丸。そちやそのやうな顏をして――。さ、こゝへおじや。重景もこちらへ。是非とも耳に入れたい儀がござるで。

（兩人維盛の左右に腰を下ろす。）

重景　改まつて何事にござりまする。

維盛　それは別段餘の儀ではござらぬ。（あたりを見て）尤も、斯様な路傍にて申すは如何かと存ずるが、あの庵に着いてからは少々話しにくい事故、日も暮れ人迹の絶えたるを幸ひに、今こゝで心靜かに語るでござらう。兩人共、耳を澄ましてよつくきいてくりやれ。

重景　何事にてもあれ拜聽致しまする。

維盛　實は八島出立の砌より、今日言はうか、明日語らうかと迷うて居たが、いまとなつては是非に及ばず、思ひ切つて明かさねばならぬ。なう兩人。（感傷的に）構へて驚くなよ。重景！　石童丸！（と、兩人の手を取つて）今日を限り主從の緣を斷つて貰ひたいのぢや。

兩人　えツ？

維盛　その驚きは尤もなれど、これには深い仔細のあることゝ――。

重景　如何なる仔細がござりませうとも、平家復興の曉までは決して御側は離れませぬ。

維盛　さ、そこぢや。重景、まづこの太古の森の中で今申す「平家復興」の儀をよくよく勘考して貰ひたい。かう眼をつぶつて、八島に漂ふ一門の上を想ふと、心の底から言ひ知れぬ淋しい波がひた／＼と打ち寄せてくる。その淋しさは世の運命が我々に告げる無言の豫言ぢや。わしは疾くからその豫言を耳にして、最早一門の行末については、かなしいあきらめの心を抱いてゐるのぢや。

重景　これはしたり！　八島御出奔の砌りには平家復興の祕策をめぐらすための御上洛と仰せられたではござりませぬか。

維盛　いかにも左様には申したなれど――。それは、一門竝びにそち達をたばかる方便であつたわ。

重景　（呆れて）方便！　あのたばかる……

維盛　左様に驚くまい。わしのこの胸底を割つてみせようなら、その責めるやうな眼光が同情のしづくに曇らうぞい。

重景　（膝を進めて）何はともあれ、先づ御仔細をば――。

維盛　（背く）目ざすは洛陽にあらず……まことは、此の

靈山を――。
重景　え?
維盛　靈山を目ざして出家遁世のため――。
重景　（驚いて）何と仰せられまする!
石童丸　それでは八島の浦の御一門を御見すてあそばされて御出家をば……
重景　（つゞけて）いかなればその樣な御決心を遊ばされたのでござりまするか。
維盛　一門を見すてたなどと申されては些か片腹の病めること。先づわしの申す一條をよく〳〵聞いてたもれ。（間）そち達も眼のあたりに見てよく知つてゐる通り、八島の合戰は如何にヒイキ目に考へても、味方に更々勝味はなし。只一つ、命とたのむは都畿內の殘黨なれど、それもこの四五日の旅路にても分る通り、今は悉く賴朝一味の掌中に丸め込まれて、もはや色褪せた赤旗の下に馳せ參じる醉狂者もない有樣。わしは八島に居る頃から既に事態をかうと悟つて、總大將の宗盛等に懇々と說ききかせたが、暗愚な宗盛は更なり、あの智者で通つた知盛や敎經までがわしの言を卽座に却けて錦の御旗や赤旗の力を信じ、今に平家の殘黨が隨所に起る夢を見てゐるのぢや。あまり時世が見えなさすぎるほどに、わしはあきれ果てゝそのまゝ口を噤んでしまうたが、靜かに彼等の心底を推量するに、まづ武名を靑史に殘したいといふ愚かな見榮に捉はれてゐるとよりは思はれぬ――。
重景　さり乍ら、たとへ藻屑と消ゆる御一門の運命とは申せ、見す〳〵これを外にみて、御出家遊ばさるゝとは、平家隨一の將軍たる御面目にもかゝはる儀かと存じまする。
維盛　その「將軍」は以後やめてくりやれ。かの富士川の水鷄に不覺を取つて以來、わしは自ら將軍と申さぬことに致してゐる。尤も、世の愚かな民草が三位中將殿などと崇めまつるゆゑ、惡い氣も致さず今日までゆるしてきたものゝ、心の中ではとつくに鎧甲をかなぐり捨てて、風流三昧の詩人の心でわしはゐるのぢや。
重景　俗世を厭ふ詩人にもせよ、一滴たりとも忠義の血汐が流れて居らるゝならば――。
維盛　（皮肉に）左樣な血汐はわしには通うてゐぬやうぢや。ぢやが、あの宗盛や知盛等に流れてゐる血汐を忠義の血汐といふならば以ての外の儀ぢや。まづ考へてもみやれ。まだ齡十指に足らぬ頑是なき主上を初め奉り、美しい女官達までをあたら死地に引き入れ申してそれが忠と申されようか、下萬民の生命をむざ〳〵と奪うてそれが義といへようか。罪ぢや、僞りぢや、世にもかやうな悲慘なことがござらうか。維盛、かゝる忠義にはほとほ

と愛想がつき申したわ。さりとて、わしには一門の公達等に此理を說ききかせて、源平の合戰をやめさせるほどの辯才もなく、まゝよ、此の上は飾りを下ろしてかの修羅道に苦しむ有緣無緣の衆生をば供養しまつらうと、心ならずも一門ならびにそち達までをたばかり、八島を拔け出で遙々と、瀧口入道時賴殿を賴りにこの山までは參つたのぢや。なう兩人、今は何せん力もつきて珠數爪繰らうとする淋しい維盛が心を汲み取られて、今宵高野の旅枕を最後に、主從の緣を斷つて下されい。なう兩人。ああこれも宿世の緣でござらう……(涙を拭く)

石童丸　嫌でござりまする。我君樣がお死に遊ばされるのならとにかく、さもない限りは、いついつまでも御側近うかはゆがつて下さりませ。

維盛　現世はおろか來世までも一緒に居たいは山々なれど、清淨無垢の沙門の身には俗世の緣は大禁物。こゝの道理をようきゝ分けて重景共々、明日は此山を降り、誰ぞ武勇すぐれた主君を取つて天晴れ名ある武士となり……

石童丸　いえ、いえ、私のやうな臆病者が武勇すぐれた主君をとるは鷹の仲間入りをする子雀も同然でござりまする。我君樣が高野の坊樣におなり遊ばすなら私も一緒に稚兒樣になりまする。

維盛　はて聞き分けのない！（重景に）この子をよきやうに宥めて共に下山を賴みまする。

重景　（ちつと考へてゐたが）それではやつぱり御遁世を。

維盛　覺悟の上ぢや。

重景　あゝそれと知つたなら……（奧の谷間をぢつと見下ろす。愁然たる間）

維盛　はて、そちにも似合はぬ。人の一人や二人殺めたとて、涙を流す弱者でもなからうに。

重景　とは申せ、罪なき者を――（寂。鹿の遠音。維盛に打向ひ）我君樣。拙者如き痴け者が出家を致すことは相成りませぬか。

維盛　（愚弄的に）そちや何を申す！　はゝゝ……そちが出家になる……はゝゝ……

石童丸　（突然）あれ！　庵に灯りがつきました！

維盛　なるほど。（あたりの暮色を見て）あゝ春の一日も暮れてしまうたなあ！（靜かなる間）どうやら庵の方から看經の鉦の音がきこえるやうな。（耳を澄ます）あゝあれが瀧口殿の鉦の音であらうか、悩み多いわしの心を救うて下さる入道殿の鉦の音か。（ベラ〳〵と小雨が降り初める）はて。（と梢を見て）雨か露か――。

石童丸　（同じく上を見て）雨にござりまする。なう重景殿、ひどう降らぬ間に、早うあの庵へ。

重景　（考へに耽つてゐたが）　それがおよろしうございまする。（と維盛の方を向く）
維盛　それでは立つとしようか。
重景　（先づ立つて）　さあ　手を。
石童丸　（同じく立つて）　御手を。
維盛　（兩人に兩手をとらせて）　やつとな。（立上る。一歩踏出す途端に）　痛ッ……タッ……タッ……（倒れる）
重景　（維盛の足先を見て）　おッ、生爪が！
石童丸　これは！
維盛　痛ッ……タッ……タッ……早く何とかして！……痛ッ……
重景　只今！（編笠の紐を裂いて傷口を縛る）　如何にござりまするな。
維盛　お、痛みはとまつた——。
重景　（しげしげと維盛の顔を打ちまもつて）　あゝ、これが最後の御奉公でございませうか。（涙ぐむ）
維盛　（恬淡として）　もう一度！　拐杖になつてくりやれ、なう兩人。
兩人　はは！（維盛の手を取つて肩にかけ、疲勞を堪へながら上手奥に向つて歩く）
維盛　（呑氣に）　山路は人杖に限るなう。（石童丸に）　これ、しつかりせぬか。ひよろひよろ竹では杖にならぬわ。
石童丸　はい——。（苦しき息をつゞけ跛をひき乍ら歩く）
重景　（石童丸を慰める如く）　今しばらくの辛抱でござるぞ。
石童丸　（汗をふき乍ら肯く）
維盛　これが忠義のしじまひぢや、と思うてわが身を勞はつてくりやれ。（二三歩く）
石童丸　（獨白的に）　あゝ、私も公達に生れたうございまする。
維盛　今忠義を盡しておけば來世は公達疑ひなしぢや。はははは。
石童丸　（眞面目に）　さういふ公達は來世は何に生れまする。
維盛　（言葉に窮し）　左樣さ……
（舞臺突然暗黑と化す。時に奥の谷間より蒼白き狐火燃え上る。）

## 二、瀧口入道の庵室

霧不斷の香を焚き月常住の燭を挑ぐとも言ふべき茅屋。室は方丈位。上手は壁、正面は戸、下手は押入になつてゐる。壁間には大日如來の繪像を掛け花を供へてある。その前に二個の經机。一つには堆き經卷と文

筥など。一つには讀みかけた經卷が祕つてゐる。室の上手奥に庫裡のある心。一面の荒れたる庭には白梅がくつきり闇に浮んでゐる。

前場と同じ夜の亥の刻。狩衣の維盛と墨染の時頼とが對座してゐる。維盛は延びた髯を頻りに氣にしてゐる。兩人の間に置かれた燭がジーッと音を立てる。話しの切れ目には玉川の流れがちろ〳〵と囁く。

維盛　では、御免を蒙りまして。（と脚を延ばして揉む）人目を避ける計りに裏山の難路を辿り、すつかり脚を痛めましたが、それだけにまたかうして打ち寛いで、貴僧と昔語りを致すのが一しほ嬉しうてなりませぬ。もし貴僧に御目に……

時頼　中將殿。「貴僧」などとは面はゆうござれば、昔のままに時頼とか、おまへとかお呼びなされて下さりませ。

維盛　いや、いや、昔は主君でもいま俗人の維盛が、墨染の御身を呼び捨てにはなりませぬ。

時頼　明日は同じく墨染の御身、その御謙遜は平に――。

維盛　つゆ謙遜ではござらぬ。實はわしこそ中將殿などと呼ばれて汗顏の至り、以後維盛どのとでも仰せ下されい。して、久々の御對面ゆゑ、あまりにむさくるしい體ではと存じ、斯樣な態につくろひましたが、東國勢とやらの眼につくやうなことはござるまいか。

時頼　人里遠き高野の奥、殊に夜も深し、その御心配には無用かと存じまする。

維盛　それにて安堵致した――。はて、只今は何やらの話最中でござつたな、（考へて）さう、さう、瀧口殿の御物語。（時頼を見て）して、其後、尼僧には如何なされましたな。

時頼　されば――。落飾の後は奈良の都の法華寺にて一向三昧に耽つて居りましたが。

維盛　どうかなされましたかな。

時頼　（眼を伏せて）去年の秋の央ばに――。

維盛　え？

時頼　相果てましてございまする。

維盛　相果てられた！（溜息）あゝ世にも稀れな﨟たき御身でござつたになあ。（改めて）まだ春秋に富む御齢で何故左樣なことにおなりになされましたな。

時頼　心の病が鬱して、と申しまする。

維盛　心の病が！（獨り肯きつゝ）さもあらう、さもあらう。（間）定めし貴僧には御手篤い御介抱を遊ばされたことでござらうの。

時頼　介抱などとは以ての外――。

維盛　それやまたなぜに。

時頼　三界を離れし沙門の身には、一目死顏に逢ふことさ

へ許されませぬ。
維盛　ふーむ。（茫然として考へ込む）僧になれば左様にしてまで俗世の縁を斷たねばなりませぬか。
時頼　いかにも。女人眷戀は佛道第一の戒めでございまする。
維盛　もしその戒を破れば如何成りまする。
時頼　生き乍ら無間地獄の苛責に逢ひ——。
維盛　と、申すは、如何樣な責め折檻でございまするな。
時頼　例へば猛火に灸られ……（維盛一々戰慄する）或ひは熱水に煮られ……或ひは淺猿しき禽獸の姿となり……
維盛　おゝ生きながら禽獸の姿となる！　ても怖ろしい。（身慄ひをする）
時頼　（空の星を仰いで）　はや亥の刻も過ぎましたれば、これより御剃髪の儀を營みまする。何卒、御支度を願ひまする。（庫裡に向ひ）了念、淨水を持つて參れ。了念！（答なし、不安氣に）はて——。（と、自ら立ちかける）
維盛　（首垂れたまゝちつと考へ込んだゐたが叮嚀な調子で）入道殿、しばらく！　剃髪の儀は暫時御見合せのほど御願ひ申しまする。
時頼　（意外の面持にて）　俄かの御見合せとは如何なる儀で——。
維盛　彼是思案仕るに、やはり俗人の身がなつかしうござるゆゑ。
時頼　え——。
維盛　今は何をか包みませう。實を申せば剃髪の儀は元々維盛が眞實心底からの願ひではござりませぬ。
時頼　これはまた異なことを承る。
維盛　今更斯く申すも恥かし乍ら——。（坐つたまゝ庫裡の方を見てから）さる仔細あつてかの兩人と縁を切りたさに、ふと思付いたのが此の出家遁世の狂言にござりまする。
時頼　（ちつと考へる）む、それには定めし深い仔細が——（膝を進めて）幸ひ、あたりに人影もなし、何卒拙僧にまで事の次第を詳さに御明し下され。
維盛　（萎れたまゝ）　遲かれ早かれ、貴僧の御耳に入れねばならぬことながら、まことに以て申しにくい儀で——。
時頼　假初には漏し難きことも、出家には包まず御明し下さるが……
維盛　いや、精進堅固な御出家の前では尚更漏らしにくうござる——。
時頼　御躊躇とは水臭し。今更申すまでもなけれども、拙僧ことはよそ人ならず、元は御一門につながる北面の武士。主君のためには碎骨粉身も辭せざる所存——。
維盛　それではいま申すことをかまへて賤しまず、蔑すま

ずに、よく〳〵人情の機微をお察しあつて、この維盛の胸の惱みを御察ひ下さるか、入道殿。

時頼　仰せまでもござりませぬ。

維盛　しからば思ひ切つて申さう。（顏をそむけて）八島を拔け出で遙々貴僧を御訪ね申したのは……（もぢ〳〵する）一重に妻子に逢ひたい一念からぢや！（狩衣の袖に顏を埋める）

時頼　中將殿、お隱し召さるな。その御言葉の裏には——。

維盛　裏も表もござらぬ、只々妻子に逢ひたいばかり！

時頼　それでは御訊ね申しまする。北の方樣をお慕ひ遊ばす一念ならばかの兩人を御遠ざけなされる譯がござりませうや。

維盛　はて、人情にうとい入道殿ぢや。あの木の股から生れたやうな重景奴にこのやうな女々しい心底を打明けたならまあ如何でござらうか。忠義一途な重景は、事によるとわしを刺殺して自らも返す刃で相果てるやも知れぬ。あゝ、平維盛ともあらうものが郞黨風情の手にかゝつて死なれようか。いやさ、妻子に逢はずにおめ〳〵犬死を致されようか。それゆゑ、出家するとて體よく緣を切つて了うたのでござる。また石童丸ことは根が女子のやうな男子ゆゑわしが女房の許へ連れてゆくことは……（言ひにくさうに）ちと憚りあり。彼を思ひ此を思うて、八島出立の砌よりいろ〳〵と愛想づかしの數々を盡してはみたが、重景の一途な忠義心と、石童丸の誠心には打ち克てず、漸くこの山の土を踏んでふと思ひついたのが出家の狂言。これには流石の兩人も納得致して明日は愈々、主從三人互ひに袂を別つことと成りましたが、今貴僧から破戒の罪障の怖ろしさを承り、かりそめの方便に出家ごとも相成らずとそゞろ末怖ろしうて……（と身を慄はす）あゝ罪障の御話を承はらずば、火にあぶられ、又は淺猿しい禽獸に姿をかへられるところでござつた。（考へて）これ時頼殿、出家せずにあの兩人と緣を切るに何ぞよい分別にござるまいか。知恵才覺の勝れた貴僧を見込んで維盛この通り御願ひ申しまする。（低頭平身する）

時頼　（瞑目。維盛の心情を察るが如く憐れむが如く一滴の露が眼を霑ほす）

維盛　御機嫌を損ぜられたか、入道殿。（膝を進めて）溺れる者の一摑の藁、いま貴僧に見すてられては、維盛進退谷まつて詮術もござらぬ。なう、時頼殿！　色界の苦勞も淺からぬ貴僧ではござらぬか。まあ一通りわしの物語りをお聞きあつて少しは憐れと思うてたも！（間）過ぐる年の七月、都六條にいとしい妻や子に別れてから早や八月なかば。陣中の明暮れに一日たりとも都の空を

御亦ぬ時とてはなく、日毎に玉章を取交して陣中の淋しさを打忘れて居りましたが、此の如月の始つかた、一の谷より八島の浦に逃れてからは命の綱の玉章もふッつりと絶え果て、遣る文は梨のつぶて。それからと申すものに、夜毎に悪夢に惱まされて、さては水さへ咽喉を通らず——。先刻、貴僧がわしの顔を見るなり、いたく旅やつれがしたと申されましたが、それは旅のせゐ許りではござらぬ。既に八島の陣中にて妻子を想ふあまりかく面やつれが致して居りました。（頬を撫でる。のびた髯を氣にして）後程、剃刀をお貸し下され。

時頼　（經机の上の文筥を指し）　あの文筥の中にござりまする。何卒御使ひ下さりませ。

維盛　では後刻拜借いたしまする。（言葉を前に繼いで）斯様な譯で、只一途に、妻子に逢うて倶に住みたいと願ふばかり、他には大それた望みも、また深い仔細もござりませぬ。なう、時頼殿、もしや巡禮か僧の口からなりと、都の消息をお聞きではござりませぬか。神佛にさへかつて漏らさぬ秘事を打明けたのも、貴僧の御同情と御力添へを仰いで、あの妻や子に逢ひたいため！（時頼默）時頼殿、何とか仰せ下され。さうお默り召されずに、何卒……

時頼　委細を承つて御心境深く御察し申しまする。（沁々と）さりながら、もし御父重盛公御存命にして此場に在ませば如何思召さるゝでござりませう。「おゝ、維盛、よく參つた。」と仰せられるでござらうか、但しはまた、弓箭を取つて御打擲遊ばされるでござらうか。中將殿、この儀をよく／＼お勘考下さりませ。今御一門の運命は如何？一天萬乘の大君はいかに在ます？（落涙）たとへ中將殿には弓箭を取つて戰はずとも、斷ち難き煩惱の絆を斷つて御出家遊ばさるるならば、御父重盛公にもさぞかし御滿足に思さるゝでござりませうに——。

維盛　（やゝ語氣を強めて）　左様な述懐は維盛聞き飽きましたわい。一門が危いとて、妻子を慕うてはなりませぬか。亡父重盛に賞められたさに煩惱を斷つて了うたなら、この維盛は生きて生甲斐がござらぬ。時頼殿、煩惱具足の身を救うて下さるが出家の役目ではござらぬか。

時頼　（瞑想的に）　救ひは——人間の救ひは只一つ。

維盛　その一つを授けてたも！

時頼　（つゞけて）　人間の救ひは一つ。たゞ歸命に在り——。

維盛　維盛の救ひは一つ。たゞ妻子に逢うて……

時頼　（涙ながら）　今は何をか申しませう。（維盛に向ひ）たゞ一つ、御耳に入れたき儀は北の方様六代御前の御消息——。

維盛　（驚喜のあまり）や、やッ、消息(たより)を知つてござるか？

時頼　御兩所にはこの春の初めつかた、都を後(あと)に何處ともなく――。

維盛　（放心の體）都を後に何處ともなく……

石童丸　（庫裡より轉ぶが如く登場）た、たいへんでござりまする！

時頼　（落着いて）何事ぢや。

石童丸　（舌がもつれる）重景どのが……た、只今……（奥より劍の音がきこえる）あ、あれッ……

時頼　（立つて奥の戸を一枚あける。夜の空が眞紅に染つてゐる。劍の音しきりに聞ゆ。ぢつと闇を見詰める）

維盛　（時頼の側に躄り寄つて）な、なにごとでござる。

時頼　必定、間者が。

維盛　えッ、間者が！（膽を潰す。空を見て）あ、あの空は――。

時頼　夥しい篝火の影。

維盛　これやどうしたことで。（戸の外に首を出して）西も東も一面の火の海ぢや。（劍の音に怯える）

時頼　察するに東國勢は戰勝祈願に名を借つて、落人詮議を致すと覺えまする。

維盛　落人詮議！　あゝ遙々網の中へひッかゝりに參つたのか！（時頼の裾を捉へて）逃げ路を教へて下され。

時頼　御狼狽へ遊ばすな。拙僧はこれから裏手の様子を見屆けた上、下の院まで參つて始終を訊ねて參りまする。

維盛　取殘されては心細い。わしも參りまする。

時頼　いや、殿(との)はとりませぬゆゑ――。

維盛　それでは早うお歸り下され。

時頼　畏りました。（下手縁先まで來て立止り）了念！　了念！（返答なし。首を傾けたまゝ奥に退場）

（一旦途絶えてゐた劍の音が下手の方から聞えてくる）

維盛　（下手の押入に石童丸と共に隠れんとして）待て。身に寸鐵を帶びずには心元ない。これや石童丸。刀を持て！

石童丸　（怯へてゐる）庫裡へ參るのは御許しなされて……

維盛　臆病者ッ。（自ら取りに行かんとして跫音に膽を消し引返す。文筥に目を留めて）む、何も持たぬよりは――。（打背き剃刀を取出し、石童丸と共に押入に入る）

（重景と間者が立廻りながら下手庭から現れる。劍光が閃々する。）

間者　（遂に刀を落されて）む、無念！（どッかと地上に坐し）さ、首を刎ねろ。

重景（繩をかける）

維盛（少し戸を開けて）間者は一人か。

重景　左樣でござりまする。

維盛　して――。繩をしかとかけたか。

重景　堅く縛めましてござりまする。

維盛（連出して來る）これや間者！　少々訊ねたい儀がある。包まずに申せ！（膝を進めて）東國勢は當山の何れに屯してゐるのぢや。有體に申せ。（間者默）なぜ默り居る！　早く申せ！

間者（大聲に）莫迦ッ。

維盛（飛び上る）ぶ、ぶれい者！　斬捨てゝくれる！

間者　武士の本懷ぢや。存分に斬れ！

維盛（聲を和げて）斬るとは僞りぢや。な、東國勢の居ぬ方角を敎へては吳れまいか。さすれば、命は助けてやる。

間者（嘲笑ふ。ぢろりと維盛を見て）貴樣は一體何奴ぢや。

維盛　我こそは小松左大臣が嫡子、權亮三位中將平朝臣……

……

間者　維盛とな！　む！（立上つて飛掛らうとするを重景に制せられる）

維盛（恐怖を抱き）重景、眞二つに致せ！

重景　言葉を返すは恐れ多うはござりまするが、いま此者に刀刃を加へて殺生戒を犯せば御剃髮の御障りとも相成りますれば、何卒、御助命の程願はしう存じまする。

維盛（言葉に窮し）剃髮も剃髮なれど、わが身も危なうござるで、速座に斬り捨て申せ。

重景　併しながら此者とても……

維盛（被せるやうに）迅く斬れと申すに！

重景（已むなく）は。（間者の側に寄つて沁々と）お見受け申せばまだ若年の御身。定めし親御も息災でござらう。言ひ殘すことあらば、拙者とても浪々の身ながら風の便りになりとお傳へ申すでござらう。

間者　御親切忝し。さりながらかゝる汚名を父母に傳ふるは如何にも心苦しきゆゑ――。

重景　では御遺言は――。

間者（首を振つて）何事も――。（默禱。淋しく眼を開き、重景の顏をしみ〴〵と眺めて）名も知らぬそなたがわしを討つも主君のため、わしがそなたに殺さるゝも主君のため。あゝ惡人の友を棄てゝ善人の敵を招けとはそなたの事か――。いまおなさけ厚きそなたの刃にかゝつて相果つるは今生の喜びぢや。（落涙。やがて維盛の方へ視線を向けて）これや維盛！　あの眞紅の空を見よ。我れ一人は斬つても、あの萬人は斬れまいぞ。（嘔と共に）

ペッ、畜生奴ッ。
維盛　無禮千萬！（重景に）それッ。
重景　は。（瞑目唱名。一刀の下に首を打つ）
維盛　死骸は直さま山犬の餌食に致せ。
重景　では、拙者が申受けて――。（と骸を抱いて上手藪の方に退場）
維盛　（空を見て不安と焦燥が昂まる）一人は斬つても萬人は斬れぬ、か。あゝ逃げ路も知らず――。（ぢつと考へてゐる）む！（肯く。懷中より剃刀を取出す。幾度か躊躇の後、髻を切る。それを掌に受けて打ち眺めて次第に黯然となる）
時頼　（打ち萎れて上手庭より登場）
維盛　入道殿、樣子を早うおきかせ下され。
時頼　されば――まことに以て言語道斷の至り。
維盛　と、申されますと。
時頼　一山の衆徒輩は掌を返すが如く源氏に欵を通じて今や敵將を圍んで酒宴なかばと承る――。
維盛　（落着いて）さもあらう。賣僧共の今日あるは維盛とくに承知してござつた。たう、時頼殿。味氣なき世とあきらめて維盛もすでに覺悟をきはめて居りまする。これを御覽下され。（と髻を差出す）
時頼　む、殊勝なる御決心。天晴平家の御大將ぢや。おゝ、嬉しうござる、三位中將殿！（涙ぐむ）
維盛　先刻の雜言面目次第もござりませぬ。何卒一切を水に流して、法の道に御導きの程偏に御願ひ申し上げまする。
時頼　（肯いて）人間一時無明の迷ひはあるもの。此の御覺悟を拜して拙僧の喜び何に比ふべくもござりませぬ。速刻御剃髮申上げるでござりませう。
維盛　何卒よろしく御願ひ申しまする。
時頼　暫時御猶豫下され。淨衣淨水を以て參りまする。（上手奥へ行きかける）
維盛　暫く。俗世の緣の終りに只一つ御尋ね申したい儀がござりまする。
時頼　何事にもあれ御尋ね下され。
維盛　されば御言葉に甘へて――。（と眼を外らせて）貴僧は先刻妻や子は都を後にと申されましたが、何處に落ちて參つたでござりませうか――此の一事が氣にかゝつて出家心の障りと相成りまする。
時頼　道行く人の噂には、吉野、十津川より熊野路かけて……
維盛　えッ、熊野路！　あの熊野路！　野には熊住み、浦には鯨の吼えるといふ！（身を震はす）こゝは同じく紀伊の國、その熊野とやらは大凡何れに當りまするな。

時頼　（上手正面を指し）　まづ彼方に當りませうか。
維盛　（その方角に向ひ）　おゝ、熊野三所大權現！　我が妻や子の安穩を護らせ給へ！　（ひれ伏して拜む）
時頼　（退場）
重景　（登場。手に髻の毛を掴んでゐる。維盛の頭を見て）む、我君樣にもすでに御飾りを。
維盛　む。この通りぢや。
重景　して、御剃髮の後は如何遊ばされまするな。只ならぬ當山の樣子を見るにつけ。
維盛　かくなる上は、一蓑一笠に身を托して先づ三熊野の靈地を巡禮修業の決心ぢや。
重景　あゝやむごとなき公達の御身が明日はいやしき巡禮の御姿とは！
維盛　かまへて歎きめさるな。これが浮世のならはしぢや。
重景　（感動して髻を維盛の前に差出す）
維盛　（頭と髻とを見較べて）　そちもか。む。假仕立の商人姿では最早敵の目は晦まし難い。（庫裡の方を見ながら）さあ今の内わしが剃つてやる……
重景　あいや。斯く髻を切りましたは命を惜む方便ではござりませぬ。
維盛　ふーむ。
重景　我君樣の御爲めとは申せ、先には罪なき若侍を殺め、今また敵ながら天晴れ忠義の武士を手にかけて心なき身にもそゞろ沁み入る無常の風……
維盛　これ重景！　何を申すのぢや。そちは石童丸共々此山を降る筈ではござらぬか。さあ、早う！　早う！
重景　御言葉にはござりまするが、斯く決心の上は墨染に身を包んで何處までも御伴仕る所存にござりまする。
維盛　それは困る。わしはひとりで淋しい遍路を致したいのぢや。
重景　御み足弱き我君樣にお一人の御遍路など何とておさせ申されませう。
維盛　その親切は忝なけれど、何卒無用にして下されい！
重景　いや親重代の御厚恩を思へば……
維盛　（苦りきつて呟く）　またか――。（上手に時頼の姿を見て）入道殿が參られる。剃髮の場に俗人は穢はしうござるで、遠慮下され。
重景　仰せなれば差控へまする。（庫裡へ退場）
時頼　（登場。法衣と水盥とを持つ）　何卒、御召替へを――。（法衣を差出す）
維盛　は、忝ない。（立つて狩衣を法衣に着替へる。始終何か考へてゐる樣子）
時頼　（下手庭を見て屹となる。狂へる如く）　了念！　了念！　（立上る）

維盛　先刻より了念々々とお呼びなされるは？

時頼　亡き横笛が弟にて拙僧に就き修道修業の者。今廿七ツ下り、東禪院に參りしまゝ未だ歸庵仕らず――。

維盛　お歳は。

時頼　十四。

維盛　顏は。

時頼　面長――。

維盛　上には白の麻衣、下には黒の腰衣。あの石童に瓜二つの？

時頼　如何にも石童殿に見まがふばかり。

維盛　すれや、重景の手にかゝりしは――。

時頼　えゝツ。

維盛　（誇張的に）あゝ痛はしや！

時頼　（急き入つて）重景殿には何故あつて了念をば……

維盛　さればでござる。（と聲を落し時頼の耳近く）……

時頼　（背きつゝ）うむ……美少年と見れば……手籠め……

……酷たらしく……（無念の表情）

維盛　わが郎黨のことをかく申すは心苦しうは存ずれど、まことに世に怖ろしい性根をもつた人非人にござる。速刻當山を御追放あるか但しは御舍弟の仇を打たるゝか――。

時頼　（沈思の體にて）只茫然として今は言葉もござらぬ。（歎息する）

重景　（維盛の前に躍り出る）我君様ツ。氣、氣でも狂はれたかツ。

維盛　（落着いて）これ、言葉を愼しまぬか。

重景　えゝツ、腸が煮えくり返るわいッ。（言葉出でず）

維盛　そちはわしのために了念どのを手にかけたといふ腹であらうがの。はははは。それは近頃迷惑千萬なことぢや。

重景　口惜しうござるツ。

維盛　左様に口惜しければ寸時も早う主君を棄てゝ國元へ立歸れや。（押入れを指し）あれに臥してゐる石童丸を喚び起して共に下山を致すがよいぞよ。

重景　むツ……

維盛　さ、さ、早う立ち歸れや！（押入れを向いて呼ぶ）石童丸！　石童丸！

重景　もうこれまでぢやツ。（矢庭に短劍を拔き維盛を刺さんとする）

時頼　（抱きとめる）

重景　お離し下されツ。わが君諸共……

時頼　ま、ま、鎭まりめされ。（刀を奪うて）今一時の憤怒に馳られて主君を刺し申してはそなたの忠義が立たうか。見れば髻まで切りし殊勝の御身が、これまた法體の

維盛殿を手にかけ申しては、大日如來の御前に相濟み申すか。

重景　(首垂れしまゝ涙を拭く)

時頼　(同情して)　そなたにも辯じたき儀は重々ござらう。時頼深くお察し申す。されど、事の是非曲直はひたすら御佛の御裁きに委せて、今は只、心靜かに佛道に歸依せられよ。やがて夜も明けなば拙僧も當山を立ち退く所存ゆゑ、元の主從三人が同じ墨染の友となつて雲水修行の旅に出よう。なう、中將殿。

維盛　いやいや、かやうな不屆者との道伴れは眞平でござる。

重景　(はらはらと涙を流す)　一旦の憤怒に驅られて無分別に及びし段、重景深く後悔仕る！　平にお許し下されい！

(床に額をつけて詫びる)

維盛　まかりならぬわ！

石童丸　(人聲に目ざめて押入れを出て影の如く三人の側に來る)　おゝ、我君様も重景殿も御出家におなり遊ばすか。(時頼の袖を捉へて)　入道殿。私も稚兒様になりたうござりまする。(と見上げる)

時頼　(ぢつと石童丸の顏に見入る。緊張の間。切なき調子にて獨白)　わが弟に——。(と言ひかけて下手の谷間を眺め、やがて維盛の方に視線を轉じて怨めしげな表情をする。遂に耐へかねて打伏して嗚咽する)

一同　(時頼に視線を注ぐ)

(空の篝火の影が次第にうすくなる。)

## 三、熊野那智の浦

渺茫たる海原である。上手に僅ばかりの白砂青松の濱邊がある。晩春の霞が一面に立ちこめてゐる。

幕の明く前から喧騒が聞える。

濱邊では漁夫村人武士僧山伏其他老幼男女が大勢、沖の一點を見詰めて騷いでゐる。渚には一雙の舟があつて傍らに舟夫が立つてゐる。

村人や漁夫等の間に左の言葉が聞える。

「おゝ漕ぐわ、漕ぐわ……

「矢を射るやうぢや。

「成程のう！　成程のう！

「島へ上るのぢやな。

「む。島へ上るのぢや！

「島からまた七里ヶ濱へでも逃げのびるのではあるまいかの。

「さうらしいぞ。

「これ、これ、何を申す。今にあの舟が止まるであら

う。あの邊がこの海でも一番深い處ぢやでの。
「如何なものでござらうかの。
「わしも如何かと思うてゐる。あの年寄の坊主にたばかられたに相違ござらぬ。
武士甲　（苛立つ）姦しいッ。默り居れッ。
（群衆一齊に默る。）
僧の聲　南無阿彌陀。〳〵。〳〵。
山伏の聲　なあまくさまんだら、さらだあ。せんだらまかろしやな。そはたや、うんたらたかんまん……
武士乙　（焦りかねて舟夫に）舟を出せ！
舟夫　へ、へ。（ためらふ）
武士甲　出せと申すに！
舟夫　へ、へ。（尙ためらふ）
武士乙　何を愚圖々々致すッ。
武士丙　（甲乙に）待て！　暫く樣子を……
武士甲　といふ間に、取逃したらどうする？
武士丙　大海に放つた笹舟ぢや。何處へ逃れる術もあるまい。
武士甲　む！（乙と顏を見合せて）あつたら褒美を逃がし居るなあ！
武士乙　（同じく口惜しげに）うむッ。（唾を吐いて）くそいま〳〵しいッ。

「おゝ、舟が止まつたやうぢや。
「人が動きだしたぞ。
「おゝ立上つた！
「また一人立上つた！
「眞實投身致すやうぢや。
「後から誰やらが止めてゐるやうぢや。
――（間）――
「おッ、危ないッ。
「おゝ……（寂）
僧の聲　南無阿彌陀佛。〳〵。〳〵。
山伏の聲　せんだまかろしやな。そはたらうんたらかんまん……

（舞臺少しく廻る。）

濱邊はかくれる。見渡す限りの青海波の中に小島が一つ浮んでゐる。土俗これを山成島と呼ぶ。奇しき形の岩の間に小松が四五本縞模樣に生えてゐる。下手寄りの岩石は深く掘れて窟になつてゐる。背景には遠く熊野の山岳を霞の底に望みその下手に那智の大瀧が銀泥をなすりつけたやうに天涯にかゝつてゐる。
晩春の光が波の上にきら〳〵と光つてゐる。
一葉の舟が上手奥から漕出る。中に維盛、時賴、重景、

石童丸が何れも僧形にて乘つてゐる。

舟夫　（ぶつきらな調子て）　このあたりでどうぢやろ。十五六尋は請合ぢや。

時賴　（伏せてゐた眼を上げて）　早や、山成島近くでござるか。

舟夫　島はそこぢや。（後向きになつて顚で指す）

（維盛を除き、一同首を巡らしてみる。）

時賴　（舟夫に）　では舟を止めて貰ひませう。

舟夫　ようしきた。（櫓をとめる）　あれ見さつせ、あれが日本一那智の大瀧樣ぢや。

時賴　重景（其方を見て拜む）

維盛　（料紙に筆を走らせてゐたが、これを時賴に渡す）

時賴　（低調に讀む）「生れてはつひに死ぬてふことのみぞ、定めなき世に定ありける。三位中將維盛。法名淨圓、年二十七歲、壽永三年三月廿八日那智の沖にて入水す。」

維盛　此世へ殘すかたみはそれ。何卒、辭世の歌をば淨圓を知るほどの人々に語りつたへて一片の回向をなりと御賴み申しまする。

時賴　委細畏つてござる。

維盛　（述懷的に）　あゝ熊野の靈地を踏んで七日あまり、運拙なくも那智詣りの野武士に見現されて有無を云はせず引立てられうずるところを、貴僧のおとりなしにより荒くれ男の手を放れ、自ら此浦に身を投げて、滄海の藻屑と消ゆるは、思へば不幸中の喜び！　あゝ重衡の如く縲絏の辱しめを受けて、京鎌倉の果までも生恥を晒すよりはなんぼう有難い佛緣でござらう。世の哀れを知る人人は定めし淨圓の心中を憐んで、世の末までも語り草と致されるであらう。維盛の滿足これにすぎませぬ。

時賴　御辭世といひ、只今の御述懷と申し、まことに大悟徹底の御心境、拙僧思はず落淚仕つてござる。

維盛　あゝ淨圓が心ほどうとましう濆れた心が世にもござらうか。なう、皆々。今はに臨みそなた達の厚い義理情けをおもうて淨圓身を切らるゝ思ひぢや。今は何事も詳さには申しませぬ。只々懺悔悔恨の淚に咽ぶ淨圓が胸を推量されてこれ迄の不德不義をば許されよ。（涕泣する）あゝ生れて廿有七年。金殿玉樓に起き臥す身が、現世の有爲轉變に遭うて……（と舟を見て）おゝ、この蝕んだ舟板の上を最後の床として奈落の底に沈み果てうとは！

重景　（感に堪へず）　御免下され。（矢庭に海に躍入らうとする）

時賴　（急ぎ抱き止める）

重景　お止め下さるな！

時賴　お待あれ！　淨圓殿を差し置いて死出の旅路を急がるゝは……

重景　高野の庵にて刃物三昧に及びし身の申しわけ、一足先に冥途の御道しるべを……

時頼　御心中もさることながら——淨圓殿もろとも御入水あつてこそ主従の縁も深しと申すもの。

重景　此上、あのおやつれ申した御横顔を見奉るに忍びませぬ。何卒、お、お離し下され。

石童丸　重景の足に取りついて）お死にやつてはいやぢや……いやぢや……

重景　そなたは以後入道殿を師と仰いで、天晴れ名僧智識となつて下され！

石童丸（泣きながら）お死にやつてはいやぢやわいのう……（泣伏す）

維盛（右の對話中。舟夫と海上を指しながら頻りに問答をしてゐる）

重景　我君様！

維盛（はつとして重景を見上げる）

重景　お先きへ、おさらば！（時頼の手の手を振切つて投身す）

一同　おゝ！（舟甚しく搖れる）

時頼（瞑目合掌して弔ふ）

（上手奥より濱邊の喧騷が聞える。）

維盛（その方を見て）人の死にやるををかしう囃してゐるとは、ても心なしの痴け者ぢやのう。あゝ淨圓の心は一しほ淋しくなりをつたわ。（氣を取直して）いやいや、かうしては居られぬ。（打倒れてゐる石童丸に向ひ）こりや石童丸！　覺悟はよいか。

石童丸（顏を上げずに）死ぬるのは嫌でござりまする。

維盛　わしも共に死ぬるのぢや。

石童丸（身を震はして）あゝ恐ろしうてなりませぬ。

維盛　何んで恐ろしいことがあらうか。この荒海の底にも美しい御國(みくに)が在るのぢや。

石童丸（海を見て）この海の底に——。

維盛　いかにも。

石童丸（海を見詰める。魅惑されたかの如く微笑が頰に浮び上る）我君様！（と維盛に取付く）

維盛　む、天晴れの覺悟！　さ、立ちや。（と手を取る。石童丸立つ。時頼に）入道殿。何卒、後世安樂の念佛を！

時頼（肯く。手を合せ珠數を爪繰つて）南無阿彌陀佛。

維盛　阿彌陀佛！（石童丸を小脇に抱へ、重景と反對の方向に投身す。舟搖れる。飛沫が上る）

時頼（ぢつと海底を覗く。やがて獨白）地下に在す重盛公もこのけなげなる御最期に定めし御滿足の事でござらう。あゝ一切煩惱の障礙は霧と散じて涅槃の月は主従三人(たり)の上に照り添ひ、（高野の空を仰いで）これにて了念

の怨恨も晴れて靜かに成佛いたすであらう。（にじみ出る涙を押しとゞめる如く瞑目して）若我成佛十方世界、念佛衆生攝取不捨。（珠數さら／＼と爪繰るうちに舟影下手に沒す）

（舞臺空虛。折柄、天低く垂れて島に打ちつける波の音が荒々しく聞えてくる。長き間。）

（島の正面の岩蔭から襤褸になつた人間の半身が現はれる。維盛である。衣は裂け顏は土の如く血が處々ににじんでゐる。蹌踉として死せる者の如く岩上に身を投げて切ない息を吐きつゞける。やがて陸の方を見詰め、また海上を見廻して、漸く安堵の息をつく。）

維盛　（那智の瀧に向ひ）おゝ那智觀世音大菩薩！　熊野三所大權現！　（岩上に額を擦りつけて拜む）

（日次第に暮れ行く。晩春の惱ましき熱風が吹いて波は一層荒れてくる。）

船頭にきいて置いた淺瀨の底を掻廻してゐるうちにこの島蔭に打ち上げられようとは！（感謝に耐へられぬ風にて再び那智の方に向つて拜む。その合せた手の上に血汐がぽたり／＼と落ちる。顏に手をやる。血が一面につく。傍らの岩間の水溜りに顏を映してみる。傷だらけの醜い顏容に泣き出しさうになる）いや／＼歎くまい。この相好の變つた傷だらけの顏こそはわしを維盛とも思はせぬ天の與へ、佛の御慈悲と申すものぢや。たとへ都大路を歩くとも「あれ三位中將殿よ」と後指をさす者もあるまい――これで天下を廣う暮せるのぢや！　さるにても天涯をさまよふわが妻や子に、此處にかうして長らへてゐるわしの消息を知らせたいものぢやなあ。おゝ、沖に片帆の影が見える！　この島ちかく參つたなら、呼び止めて陸地に渡り、草の根を押分けても妻や子を訊ね出さうぞ。

（風吹き募る。陰晴なる雲頻りに飛ぶ）風も吹け。波も荒れよ。煩惱の前には怖しいものは何もないのぢや。（足元を見て）おゝ帆立貝が！　海鼠！　若布！　（窩を見て）おゝ、ねぐらまで！（側に寄つて）ふはふはと軟かい藻を敷きつめて！　あゝわしはいつまでもこの島で暮したい程ぢや。

（間。）

やッ。わしを呼ぶは誰ぢや。（立ち狂ふ波濤を見て）おッ。惡鬼の姿！（間）あッまた一つ現はれた！　や、やッ、そちは重景！　そちは石童丸！（吼えるが如き波の音）うぬッ、われを罵るよな！　なに惡魔とな！　煩惱の犬とな？（嘲笑して）はははは、何とでも呼べや！　そち等はわし一人を蘇らせた神佛の冥利のほどを得知らぬのぢや。何故あつて煩惱の犬を生かして、忠義者を殺し

ふさるのぢや？　さ、これに返答かなはずば即座に消え失せい！（渚に進む）まだ失せをらぬか。もうこれまでぢや！　南無熊野三所大權現！　惡鬼成佛を得させ給へ！　成佛を得させ給へ！（黑き影消ゆ）はははは……（風やみて雨至る）

（維盛、寒さに身ぶるひなする。窟の方へ歩く）痛ッ。（つまづいて倒れる）痛ッ……タツ……タツ。（爪先をおさへる）おゝ高野で傷めた生爪のあとが！　痛ッ……タッタッ……む……むッ。やつとな。（幾度も膝頭をつかんで起上らうとするが倒れてしまふ。やむなく兩手及び膝頭にて四つ這ひとなり窟に向つて這うて行く。雨沛然と降る。裂けたる衣は宛かも尻尾の如く、その狀病める野良犬の如し。自らの姿を顧み、哀しい調子で）ても淺猿しい有様ぢやなあ！　犬畜生の姿をそのまゝ……あゝこれが無間地獄の苛責であらうか。ひッ、ひッ、ひッ……

（天暗く、强雨したゝかに犬を打つ。）

――幕――

（一九二四年）

# 秋風落莫（四幕）

義朝の心に似たり秋の風　芭蕉

## 人

源　義朝
　義平　長男
　朝長　次男
　頼朝　三男、少年
　砧　娘
　常磐　妻
　義隆　伯父
　爲義　父、現れず
鎌田政清
佐渡重成
平賀義信
金王丸
青墓長者大炊
延壽　その娘、義朝の妾
夜叉　義朝と延壽との子
玄光法師　大炊の弟
長田忠致
　景致　その子
　操　その娘、政清の妻
藤原信頼
其他。武士侍女拍子郎黨萬歳百姓等大勢

## 時

保元元年より平治三年に至る

## 處

京都。美濃。尾張

## 序幕

### 義朝の邸

京六條にある義朝の邸。泉殿である。鴨川の水を引く前栽。東山に對す。
保元元年七月、保元の亂の直後。
夜。
幕あく。
義朝、侍女に酌をさせながらひとり盃をかさねてゐる。
朝長。蚊遣りの煙の行方を見ながら沈思す。奥からは

（凱宴をおもはせる管絃樂。）

朝長　何が一番大事か、お父さまはお氣付きでせう、この苦々しい合戰の後で――。

義朝　（眉のあたりが神經的に慄へる）分つてゐる、分つてゐる、何が一番大事か――。父も言つてゐる。俺や父は一時の憑きものに魔されてゐたのだ。しかし息苦しい戰塵がをさまつてみるとしばらく心底に潜んでゐた正しい判斷や眞實の感情が再び蘇つてくる。最後に殘るものは骨肉の情だ。何と言つてもそれには勝てない。なあ朝長、全くおまへの言ふ通りだよ。（頻りに酒をあふる）

朝長　おぢいさまの御助命の儀が、どうか許されますやうに、わたしはそればかり祈つて居ります。

義朝　そのことなら心配は無用だ。俺には成算がある。（侍女、酒瓶を持つて出る）將卒等は酒戰にも勇しいとみえるの。ははゝ。さ、朝長、温いのを一つやれ。

朝長　わたしはいたゞけません。

義朝　そこを一つ飲め。凱旋の祝酒だ。

朝長　でも、いたゞけないのです……

義朝　父がさした盃だ。受けてみい。

朝長　わたしは……

義朝　固いぞ。おまへも遊女の子ではないか。（盃を泉石の上に投げる）

朝長　（憂鬱さが面上を掠める）

義朝　（それを見て）はゝゝ、父がわるかつた。はゝゝ、おまへが飲まぬとあれば、新しい盃で父が飲んでやるぞ。はゝゝ。（飲む。侍女に）義平はまだまゐらぬか。

侍女一　はい。

義朝　急いで館へ使者をやれ、父が待つてゐると。

侍女一　畏りました。（去る）

朝長　お父さま。

義朝　む。

朝長　お父さまは姉を信西卿の御嫡男にお嫁りになる御決心ですか。

義朝　さうだよ。どうしたのだ。

朝長　輕々しく公卿達の言葉を信じてはいけないとおもひます。

義朝　それは百も承知だよ。信西が姉を所望するのも、信頼が仲に立つて口をきいたのもみな此度の合戰で俺が――源氏の一黨が頭を上げてきたからのことさ。

朝長　それを御承知で姉をお嫁りになるのですね。

義朝　さうだよ。

朝長　それでは妹が可哀さうです。

義朝　（眉を曇らして）また例の清淨癖か。女とて源氏の一族だぞ。おまへや義平が命を賭して戰ふやうに姉もま

た源氏のために身を捧げるのだ。くさびになるのだ。世の中はちからだぞ。そのちからをしッかり握るには、門地あつて實力のない公卿ばらと、實力はあるが昨日まで地下人の悲哀をなめてきた我が一黨が堅く結びつくのだ。いゝか。政事は實際だぞ。繪空事ではないぞ。それに婿の是憲は親譲りの學生らしい立派な青年だ。砧にはすぎてゐる。それがなぜ可哀さうか。なぜわるいのだ。

朝長　目的の不純な結婚は乾度不幸をもたらすと思ひます。

義朝　どこを押して不純と言ふ。おまへのやうな者は坊主になれ。（立上る）俺は決して自分自身の爲にこの長い歳月の辛勞を重ねてきたのではないぞ。みな源氏一黨のためだ。一黨のためとは、いゝか、俺の後目をつぐおまへ等兄弟のためだぞ。それに何と言ふ。

朝長　お父さまのお心はよく存じて居ります。

義朝　（聴かずに）親といふものは詰らぬものだな。子孫のために半生を賭して漸く手に握つた珠玉も、子は塵芥と見る。

朝長　お父さま、わたしのひそかに惧れるのは、お父さまが目的のために、これまで輕蔑しきつてゐた公卿や門地を利用なさらうとするそのお心なのです。しかし今日は喜ばしい凱旋祝ひの日だ。何にも申しますまい。（言葉を切つて）それはさうとおぢいさまのお命ばかりは乾度お救ひなさる御決心ですか。

義朝　（憤激して）まだ父の心事を疑ぐるのか。先刻勅使信西を何と言つて追ひ返したか、忘れまい。やい朝長、おまへは俺が世間體や、父上の義理立てから助命の歎願に及んだと思ふのだな、俺は畏くも勅諚に背き奉り、一族一黨の御恩賞まで辭退して一人の老いたる父を救はうとしてゐるのだぞ。（暗涙を浮べて）俺は魔障の力に惹きずられて、父や弟に弓を引く呪ふべき合戰をいたしたが、勝つて勝軍の喜びはおろか、敗軍の痛みよりも尚ほ耐へがたい心中の苦みだ。俺は鬼武者よと謳はれた。だが朝長、俺は決して血を吸ふ鬼ではないぞ。言つて了ふ。先刻父を常磐に彼方へつれさせたのも決して父の同席を嫌つたのではない。いや、有様は、今宵こそ泉殿で一族水いらずの慰勞の宴を張らうと思つてお迎へ申したのだが、あの山寺の老鼠のやうに痩せさらぼうた御姿を目の前に見るに耐へず……

朝長　すみません、すみません。それほどまでにお父さまがお苦みになつて居るのを知らずに、すみません。

義朝　（氣を和らげて）俺はよく知つてゐるぞ。何が一番大事か、知つてゐるぞ。骨肉相和してこそ人間の生活があるのだ。俺のやうに若冠の頃から家を外にしてたゞ一

途に源氏再興の辛勞を重ね、果ては父をも敵として戰つた今となつては一倍家の平和骨肉の平和がおもはれる。
朝長　しかし、お父さま、勅諚を楯にして飽くまでおぢいさまのお首を求めてまゐつたらどうなさいます。
義朝　糸瓜のやうな力無しの公卿に何ができる。
朝長　その點が却つて心配になります。平氏の一族が公卿に加擔して後押しをするやうなことはありませんか。淸盛が叔父忠正の首を奉つたのも屹度お父さまにおぢいさまを打たせようとする下心でせう。
義朝　世間も周知のことだ。伊勢乞食がたとへ公卿と結んだとて所詮源氏の敵ではないのだ。それに義朝の勳功は一天四海を蔽うてゐる。昔から朝敵を亡ぼす者は半國を賜はるといふが、俺の功を以て一人の老いぼれた命を救ふぐらゐが何であらう。それも人倫に外れた所行ならともかくだが……（奥から怒聲が漏れる）誰だ。何をがなつてゐる。
朝長　兄さんらしい。
（廊下傳ひに義平が現れる。頑健な身體つき、怒氣をふくんでゐる。）
義平　いま政淸から萬事聞きました。なぜ莫迦なことをなされたのです。
義朝　まあ坐れよ。酒の相手におまへを待つてゐたのだ。

（義平、父の前に胡坐をかく）ところで何が莫迦なことなのか、義平。
義平　莫迦なことです。全く莫迦なことだ。
侍女一二　（酒瓶などを持つて出る）
義朝　はゝゝ、えらい權幕だな。驅けつけ三杯といふことがある。まあやれ。（盃をさす）そして、ゆるゆる承らうよ。はゝは。
義平　（立てつゞけに五六杯飲み干す）
義朝　はゝゝ、豪儀なやつだ。はゝゝ。
義平　父上。（改つて言ふ）
義朝　（侍女等に）彼方へ行つて將卒等の相手をせい。（侍女等去る）何だ。（義平の方を向く）
義平　なぜ爲義の助命を願ひでたのです。
義朝　（むッとして）爲義とはおぢいさまのことか。
義平　さうです。
義朝　ならば、なぜ呼びすてにする。六條判官爲義殿は俺の父御だ。
義平　父御ならばなぜ弓を引かれました。
義朝　（顏がくもる）
朝長　兄さん、もうそのことには觸れないで下さい。わたし達は現今のこと、現今から先きのことを考へなければなりません。

義平　莫迦なことを言うな。この合戰は骨肉を賭けたすばらしい軍だつたのだ。今更、後悔顏とは何だ。俺は坂東で叔父の義賢を殺した意氣で、斬つて斬りまくつた。
朝長　もうそんなことは仰言らないで下さい。
義平　俺は言ひたいことは言つてしまふ性分だ。弟、言つて置くがな、俺は、骨肉墻にせめぐだとか、血で血を洗ふなどといふ紋切型では辟易しないぞ。俺には骨肉も他人もない、敵は敵、味方は味方だ。いまどき肉身などが何になる。考へてみい。我々一族は血を分けたとは名ばかりでどんな親密さがあるのだ。早い話が、我々十人の兄弟姉妹はみな胎ちがひで、いはゞおやぢが氣まぐれに方々へ生みつけた蛾のやうなものではないか。おまへと俺は兄弟だ。しかしこの合戰が初まつてから初對面をした仲だ。どんな親しさがもてる。おまへの江口の母ごぜはどこにゐる、俺は俺で母を知らない。今若や乙若の母親を心から母上と呼べるかい。まだ美濃の青墓の宿にも妹がゐるさうだ。おまへは見ず知らずの妹を妹と思へるかい。む――、父上はお氣をわるくされたな。俺はこのことで父上を責めるのではない。俺には父上の辛勞はよく分る。源氏を興すために家をすて鄕國をすてゝ東奔西走された父上の辛苦と努力とは感謝に餘りがある。が、しかし俺の言ひたいのはかうだ。たゞ骨肉一點張りで表面の解釋をするのはいけないといふことだ――。おまへはなぜ涙をこぼしてゐるのだな。ふふ。
朝長　いゝえ、ちがひます。我々一族の宿命を考へてむしやうに淋しくなつたのです。
義平　何が宿命だ。おまへのやうな都育ちはすぐ、人生が何か大きなものに支配されてゐるやうにおもつて、ことごとに詠歎したがる。しかし人生とはそんなものではないぞ。おまへは乾度、俺と義賢叔父とのことをおもつて歎いてゐるのだらう。ことの序でだ。あの事實を話してやる。父上もお聞き下さい。（酒を飲んで）俺はな、武藏野の薄の中へ生み放しにされた蛾なのだ。俺は獨りで育ち獨りで成長した。俺の眼前には明け暮れ茫々たる武藏野と富士の高根が突ッ立つてゐた。風に身を切る。一面の薄原だ。俺は一挺の鍬を揮つてその原ッぱの土をおこしだした。一打ち二打ちも積れば怖しいものだ。俺は五年の間に一村にあたるほどの土地を開拓いた。朝長、想像してくれ。俺が初めてその黒土に蒔いた物の種が、ふツくらした畝の中からむく／＼と生え上つたときの喜びを。俺はぢツと見た。俺は人間の力と土の力との不思議な融合を見た。俺の眼には初めて涙が光つた。それがどうだ。六年目の春になつて叔父の義賢が輩下の土民を

戲けて、俺の拓いた土地を自分の領分だから返せといふのだ。俺は茫然とした。次の瞬間に俺は鐵を握つたまゝ叔父の館へ躍りこんだ。

義朝　義平、俺は決しておまへの打仕ちをわるいとは思つてゐないぞ。だがそれだからと言つて、骨肉はいがみ合つていゝとは言へまい……

義平　無論です。

義朝　（つゞけて）　殊に今度の合戦で、父と俺との場合は、おまへと義賢の場合とは異つてゐる。父も俺も共に高貴をいたゞく苦しい軍だつたのだ。

義平　父上の心中はさうかも知れん。しかし祖父や頼賢叔父等の心はどうだか。義賢叔父と五十歩百歩だ。義隆伯父も言つてゐる。爲義は義朝の功名を嫉んで敵味方に分れて萬一の僥倖を計らうとしたのだと。それが源氏の血だ。

義朝　そこだよ、義平。源氏がちからを掌握するにはまづその悪血を淨めてかゝらなければならない。俺自身の悪血はまづ父を救つて淨める。

義平　それも解りやうだ。骨肉や同黨伐異の精神からではいけない。正義と信念とによらなければ。

義朝　自ら骨肉の枝葉をもぎ取つて何の正義がある。天下のちからを握るには一族一丸となつて敵に透きを見せぬことだ。市民はいま源氏を畏敬してゐる。源氏の功名は津々浦々にまでひゞいてゐる。地下人と蔑んでゐた公卿ばらが急に色目をつかつて、娘まで所望する。播磨守。殿上人。俺達はもう地下人ではないのだ。先祖多田満仲以来、天の一方に潜んでゐた星が俺の力で、この手の中に轉がつてきた。おまへ等もそれ〴〵重い役につく。義平、その榮冠をいたゞく日に父の首を打つて、糺の森の欅の木に梟けることができるか。

義平　できます。

義朝　俺にはできない。父が北面にでも捕はれてお仕置きになつたのならそこにもあるが、あの通り影のやうな御身を人目を忍ぶ破れ法衣に包んで、頼賢等五人の子のために助命の歎願にまゐられたのだ。いゝか、父は自分の命を、俺の勳功によつて救へと言ふのではないぞ。御自身は敵将として觀念の眼を閉ぢてゐるが、頼賢等は罪も淺し、救つてこれからの片腕にせいと申されるのだ。何と慈愛に充ちた父のお心だ。俺は骨肉の情に心底が掻きやぶられるやうだ。

義平　（傍を向いて）　また骨肉ですか。俺はもう聞き飽いた。

義朝　言ふた。子を持つてみい。分る。乾度分る。

義平　（立つて歩く）　そんな人情沙汰から、義賢の一轍が

俺の心を開いてくれた。最初にかうときめたことは飽度やりきる。敵は最後の一人までやッつける。

義朝　俺もおまへの歳頃にはその氣性だつた。しかしそれではいかん。あの平氏の仲の良さを見い。あれでこそ伊勢乞食が今日の地位を獲られたのだ。

義平　平氏を羨むとは父上もたがゆるみましたな。

義朝　平氏を羨むではない。一族の平和を羨むのだ。

義平　俺はどこまでも坂東風だ。靜かに父上を觀るに、この四五年の都住ひで御氣風がよほど變つてしまつたやうにおもはれる。

義朝　(屹ッと義平を見る)

義平　一旦敵にまはした父を、わが勳功を楯に救はうとするなど、藤原風な情實政治のやり方だ。

義朝　何。(酒の力で抑へてゐた憂悶懊惱の情が次第に激動してくる)

義平　ミイラ取りがミイラとなる。父上の當年の意氣は何處に失せた。父上の態度は間違つてゐる。

朝長　兄さん。(兄を制する)

義朝　(朝長をかきのけて)　どこが間違つてゐる。

義平　間違つてゐます。

義朝　では父を打つのは正しいことか。

義平　この場合は正しいことです。

義朝　さうやに祖父を打ちたくば、まづ父を打て、この父を打て。(詰め寄る)

朝長　お父さま。

義朝　いゝや。俺を打て。

義平　打たなければならぬ時がくれば、世のため源氏のために不孝の子となります。

朝長　兄さん。お父さまのお心をこれ以上みださないで下さい。

義平　(背いて)　俺は坂東へ歸る。俺はこの三月の間の京(みやこ)洛生活(くらし)にすッかり愛想がつきてしまつた。娼婦にも劣る公卿殿上人や骨肉係累の蜘蛛の網で、人間の正義、信念を曇らせてしまふ。京洛は泥沼だ。父の足を奪ひ、源氏の氣風を汚す毒婦だ。父上のことは、朝長、賴むぞ。(急ぎ奥に去らうとする)

常磐　(出る)　義平殿。しばらくお待ち下さいませ。(涙を拭きながら義朝の側に行く義平は立ち上る)只今、御遺書をあそばされました。(書片を差出す)

義朝　(押しいたゞいて讀む)　子不念父母、父母常念子、衆生不念佛、諸佛念衆生——。

常磐　父上樣には、今の御諍ひを一間の中から御覽じなされて、此上は賴盛殿等御助命の成行を聞くまでもない。わがために義朝父子の不和をかもすならば却つてわが本

意にもとるゆゑ、迅く首を打つて寧れ。露世をらのす、とて、その御墨付にございます。

朝長　（急いで爲義の許へ去る）

義平　母上、御用はおすみですか。

常磐　はい。

義平　（すたすたと歸つてゆく）

義朝　待て。

義平　まだ何か御用ですか。

義朝　今一度訊きたい。齡六旬を超え合戰と病苦とに疲憊しながら尙ほ我等父子の不和を憂ふる祖父の心を、おまへは何とおもふ。

義平　何とも思ひません。

義朝　おのれ、惡源太、待て。（義平を目がけて馳け寄らうとする）

常磐　お待ち下さい。（義朝を制して）義平殿、あちらへ。

義平　（背いて去る）

義朝　離せ。

常磐　殿、義平殿は殿の御嫡男でござりまするぞ。その上、一騎當千の若武者で頁實殿の片腕ではございませんか。さ、お氣をしづめて、父上樣をお慰め下さいませ。

義朝　む。我れながら短慮な振舞であつた。政清、政清は居らぬか。

常磐　（廊下の端に行つて）政清殿。

鎌田政清　（出る）

義朝　父上御助命のことにつき、禁裡の消息はいかゞであらうか。

政清　只今、右少辨殿の御館へまゐつて消息を承らうと存じて居りました。

義朝　早くまゐれ。

政清　は。御免下さりませ、

義朝　待て。賴賢等の消息はまだ分らぬか。

政清　延景、重成、義信の三人それぞれ手分けして探らせて居ります。今宵の中、一人は消息をもたらさうかと存じます。

義朝　よし。行け。

政清　は。（去る）

（上手に馬の蹄の音がする。）

常磐　重成殿とみえまする。

義朝　氣色ばんでやつてくる。

佐渡重成　（馬より降りて現れる）殿にはこれに渡らせられまするか。

義朝　大儀であつた。近うまゐれ。

重成　御免。（泉殿に上る）

義朝　して、賴賢等の消息は。

重成　遺徳ながら。

義朝　何。

重成　今朝比叡山中にて平氏の奴原に召捕られ、北面の手に預けられて、先刻、酉の刻すぎに舟岡山にて御打首にあそばされましてございます。

義朝　（默然）

重成　（懐中から書狀を取出し）　頼賢殿が御兄弟に代つて最後の御染筆にございます。

義朝　（受取つて表書を見る）「舟岡山の露と消ゆるきわに、弟頼賢。兄者人。」亂れず、動ぜず、天晴な筆だ。（封を切る。初め默讀する。次第に聲をだして讀む。手先が震へて書狀が波立つてくる）「父の六條判官は俺たち五人の弟を捨てたのだ……俺たちが坂東を目ざしたのは無論父の安泰を計つて源氏發生の地を選んだのだ……がしかし敵の追手は近江路へ先着して關を固めた。父は悲觀した。阪本へ降つた。警戒は嚴しい。父は絶望してしまつた。そして急に兄者人にすがつて一命だけは助かりたいと言ひだしたのだ……俺たちはその愚を諫めた……爲朝は父を罵倒して凛然として去つてしまつた……その夜に、父はそツと脱けだして獨り京洛の方へ降つたのだ………いま重成から一部始終を聞いた。俺だちは驚かない……父は兄者人の涙もろい一面を知つてゐるのだ……父を警戒せよ。決して氣を許すな……俺だちはいま舟岡山の露と消える……敵として死に就く、坂東武士として………從容……最期に……（こゝまで讀み來つたとき、彼の總身は激怒のために震へる。一切を忘れ狂へるがごとく）義平、義平。（と怒號する。重成急ぎ奥に去る。彼はつゞけて）義平、義平。父を打て。父を打て。父を打て。父、父、父を打て――（破るがごとく叫びながら泉殿を踏みとゞろかして奥に去る）

（その叫喚を聞きつけて、凱旋の酒に醉つてゐた數百の將卒、侍女、白拍子等が上手下手から群がり出る。雜然騷然。）

（時に、上手から生首を引提げた義平が躍り出る。同時に泉殿の廊下から、義朝が尚ほ叫びつゞけながら出てくる。後ろに常磐、朝長が義朝を制しながら出る。義隆、砧、頼朝等がつゞく。）

（義平、泉殿に驅け上つて「父上」と、爲義の首を義朝の眼前に差しつける。義朝、無言のまゝその首に見入つたまゝ、長き間をおいて緊張裡に。）

――幕――

# 第二幕

## 他の室の前

庭前にて義隆（八十餘歲）と頼朝（まだ十三歲の少年である）とが木刀で試合をしてゐる。政清が傍で見てゐる。

前場より二三日後の午後。曇り日。

義隆　（木刀をたゝき落されて）敗けた。いまの打込みはすごかつたぞ。はゝゝゝ。（汗をふく）

政清　若殿の御上達は實にすばらしいものでございますな。殿の御寵愛の深いのもご尤もに存じます。

頼朝　おまへのお世辭はもうたくさんだよ。ねえ、おぢいさま、もうやめるのですか。

義隆　見事に眞二つにされて、俺はもう死んでしまつたよ。はゝゝ。

頼朝　でもまだ物を言つてるぢやありませんか。

義隆　物を言つてゐるのは死んだよその人だよ。陸奥六郎義隆は頼朝に打たれて死にました。はゝゝ。（部屋の敷居に腰をおろして水を飮む）

政清　今日はお午から今まで。おぢいさまはお疲れでございます。また明日になさいませ。（木刀を片付けて去る）

頼朝　詰らないなあ……。おぢいさま幾つ。

義隆　はツきり覺えないが、まだ九十にはならない筈だよ。

頼朝　それ、死んだと言ひながら、年頭り自分の齢を御言るぢやありませんか。

義隆　また一本やられたのか。どうも油斷のならぬ子ぢや。はゝゝ。あゝくたびれた。

頼朝　ぢや、おぢいさま、お話しをしてくれる、昨夜のつづきの。いゝでせう。

義隆　もう腕は動かぬが、頭ならまだ少々動きさうだよ。

頼朝　嬉しいな。（兩人、部屋に上る）

義隆　昨夜の話は、八幡太郎奥州攻めの話だつたな。まだお了ひにはならなかつたかなあ。

頼朝　まだなの。味方の軍勢が鳥海柵まで押しよせたところ。

義隆　あゝさうだな。鳥海柵へ押しよせた面白いところだ。時の大將は言はずと知れた八幡太郎義家。俺には祖父様、おまへから算へると四代も前の大祖父様だ。偉い將軍様でなあ。その時分のことをおもふと、坂東での源氏の勢ひは全くすばらしいものだつたよ。その合戰は九年もかかつてヤツと鳥海柵を陷れ、安倍貞任といふ手むしやらな豪族を亡ぼしたのだ。その時俺はおまへよりはまだ小さかつた。いま糺の森で首をさらされてゐる六條判官はその陣中で生れたのだよ……あゝ人の一生といふものは

わからぬものだなあ。（茫乎と空を見詰める）

賴朝　おぢいさま。

義隆　はゝゝ。どこまで話をしたかな。さうだ。自分の話だつた。俺はその時から陸奥六郎といふ名をつけて、合戰がすんでからも陸奥の國に殘つたのだよ。俺は子供の時分から呑氣者での。京洛へ上つて出世をしたいとも思はなかつたよ。だが弟の爲義は七八つの時分から嘘つきで仲々名譽心のつよい奴だつた。三つ子の魂、百までとはよく言つたものだよ。はゝゝ。

賴朝　おぢいさまは自分のことばかり言つてゐる。どうして八幡太郎義家が陸奥の國を平定して將軍樣になつたの。それを聞かせて下さい。

義隆　それは困つたな。俺にはどうも政略向きの話はわからんでな。

常磐　（出る）お稽古はすみましたか。御苦勞にございます。

義隆　今日も俺の敗けでな、はゝゝ。

常磐　ほゝゝ、お湯がわきました。どうかおめし下さいませ。

賴朝　行つてはいけないよ、おぢいさま。

常磐　そんな無理を申してはいけません。

義隆　汗をながしてきたいのだがなあ、賴朝。ぢやかうしよう、一緒にお湯にはいつて、中で話をするとしよう、な。

常磐　それがよろしうございます。

義隆　いゝ子だ、いゝ子だ。俺はおまへが一番可愛いゝ。天下を取るのは屹度おまへだよ。はゝゝ。（三人、話しながら奥に去る）

（群鴉しきりに啼く。下手の庭から物哀れな調子を帶びた朗詠がきこえてくる。燭火を背けては、ともにあはれむ深夜の月。花を踏んでは、おなじく惜む少年の春。）

（朝長の聲である。やがて激しい聲がきこえて、義朝が朝長の襟首を取つて引きずりながら出てくる。砧がこれを押しとゞめてゐるが義朝はきかないで朝長をこづく。）

義朝　（その眼は鋭く猜疑ぶかくなつてゐる）優長らしく都諷をうたふとは何だ。賴朝を見ろ。若冠の身でおぢいさまを相手に毎日武道を勵んでゐる。それにおまへは何のざまだ。俺の氣持がわからぬのか。いゝや、わかつてゐるのだ……

砧　お父さま、どうかお許し下さいませ。さ、お手を離して、お許し下さいませ。（父の手をもぎとらうとする）

義朝　いゝや、こいつは怖しい奴なのだ。父を呪つてゐる

のだ。知つてゐる、俺はちやんと知つてゐる。昨夜も賀茂へ參籠して人形（ひとがた）をつくり呪ひの釘を胸に打ちつけたのだ。

朝長　お父さま、それはあまりなお言葉です。

義朝　いゝや、さうだ、屹度さうだ。六條判官に代つて、おまへが俺を呪つてゐるのだ。

朝長　あまりのお言葉だ。（泣く）

義朝　何が一番大事か。よくも俺に敎へをつたな。そんなことが人間の智慧でわかるものか。親親たらざれば、子子たらず。親は絕對なものか。（朝長の胸倉をこづきながら）日頃からこの胸の中で俺の所行を批評しをつたが到頭俺を呪ひくさる。疾く比叡に上つてこの髮をむしつて了へ。（髮を捉んで引きずる）

砧　（手にしがみ付く）

政淸　（馳け出て義朝の手をもぎ離す）　殿、御無體をなさいますな。お氣をおしづめなさいませ。只今、信賴卿の御參邸にございますぞ。

義朝　何、信賴がまゐつた。

政淸　火急の御用と承ります。

義朝　む――。（朝長を睨んで）朝長、今日のことは許してやる。これからは武道を勵め。安閑として遊藝に耽つてゐる場合ではないぞ。（政淸を從へて去る）

砧　お兄樣。お怪我はございませんか。

朝長　有難う、妹。（頭をあげる）

砧　あ、お顏に血汐が。（紙を取出して、兄の顏にあてる）お父さまのなさりやうはあまりです。（肩を震はせて泣く）

朝長　わたしは母の胎內にゐるときからお父さまの冷たい顏をうけてきた。お父さまは、はしたない戲れ女に源氏の種を宿したことを恥たとおもつてゐるのだよ。だがお父さまにはその一面に情に脆いあたゝかい心がある。わたしの素性を憎みながらやはり可愛がつてくれたよ。わたしは折にふれてこんなことを思ふ。自分は生れてはならぬ家に生れ、生れてはならぬ時代に生れてきた、と。しかしそれだからと言つて、あのお父さまを離れて世捨人になる氣はしないよ。わたしはいつまでもお父さまの側にゐたい。お父さまはいゝ人だ。いつも心の矛盾に苦んでゐる善良な方だ。正直なために、おぢいさまを打つたことをあのやうに苦んで居られる――。妹、おまへも婚約の破れたのをお父さまの罪にしてはいけないよ。お父さまは公卿と婚を通じようとしたことを今では後悔して居られるのだよ。

砧　ですけれど、信西卿のなさり方はあまりにわたしだちを愚弄してゐるやうにおもひます。

朝長　わるいのは 両朝だ。そのために決してお父さまをわるく思つてはいけないよ、

砧　おもひません。お兄樣もね。こんなにひどいことをされても。（血のついた紙を見る）

朝長　わたしは死んでもお父さまを愛する。（兄妹擁す）

義平　（下手から出る）父上はどこにゐる。

朝長　信頼卿と御對面です。

義平　さうか。叙目の御內達だな。父上の播磨守、おまへの中宮大夫は動かぬところだらう。

朝長　兄さんは。

義平　俺は位階官祿は御免だ。

砧　では叙目の御沙汰にはあづからないのですか。

義平　む。鎮平だよ。俺はいつまでも裸一貫の惡源太義平だ。はゝゝ。おまへ、その傷はどうした。

朝長　何でもありません。

砧　お父さまがお撲ちになつたのです。

義平　父上が撲つた。なせ撲つた。

朝長　わたしがわるかつたのです。

砧　お兄樣が朗詠をなすつてゐたのが氣にくはないと仰有つてお撲ちになつたのです。

義平　ふむ――。父上はどうかしてゐるな。今朝は起きがけに猫を殺したさうだ。まだ血がにじんでくる。妹、彼方へ行つて傷の手當をしてやれ。

砧　はい、お兄樣、それでは奧へまゐりませう。

朝長　む。（義平に）御免下さい。（砧とともに去る）

（義平、部屋に上る。その時、襖の向うで「知らん、俺は知らん」といふ激しい聲がきこえて、さッと襖があく。義朝が現れる。後ろについてきた政清に「追ッ返せ。早く追ッ返せ」と叫んで襖を締め切る。義平がそこにゐるので義朝は急に頑な表情をする。）

義平　叙目の御內達ですか。

義朝　む。

義平　播摩守。

義朝　（不機嫌な表情になる）

義平　なぜです。

義朝　む。（腕を組んで考へこむ）

義平　で、播摩守は。

義朝　清、盛。

義平　何たることだ。して、父上は。

義朝　左馬の……

義平　左馬の頭。

義朝　（吐きだすやうに）權頭だ。

義平　權頭。はッはッはッ。天下の亂を鎮め父の首まで奉つた忠臣が四位の權頭。はッはッはッ。莫迦げきつたこ

とだ。物も言へない。はツはツはツ。

義朝　俺は嫌はれ者だよ。俺は殿上の禮儀作法を知らず、言辭も下手、交際も下手だ。俺はたゞ武力を操してゐるために一時重寶がられたにすぎないのだ。それに俺は嫌はれた上に怖れられた。父の助命のためには一族一黨の御恩賞まで辭退すると言ひ切つたのを、公卿ばらが義朝に謀叛心があるといつたのだ。そして俄かに平氏と結託してわが一黨を踏み潰さうとするのだ。

義平　父上は信頼に何と返答をなされた。

義朝　俺は席を蹴つて立つてきた。信頼はまだ言ひたいことがあると言ふ。政清もしきりに止めたが俺はもう聞く耳はもたぬと怒鳴つてやつた。

義平　して、父上はどうなさる。

義朝　考へる。義隆伯父の意見も聞きたい。

義平　考へる――また父上の迷ひがはじまりましたよ。

義朝　では、どうしろと言ふのだ。

義平　公卿と平氏とが結託してわが一黨を踏み潰さうとするなら、こちらは蹴り返してやるのです。

義朝　俺もさう思はないではない。だが俺のうしろには何がある。無い。敵には錦の御旗がなびいてゐる。それに俺はわしが一族が信じられないのだ。俺はおまへに兜を脫く。骨肉が何だ。父でさへあの通りだ。父でさへな。（猜疑ぶかい眼光を向けて）朝長は毎晩俺を呪つてゐるのだよ。父を殺すといふことはどんな場合でもいけないと言ふのだ。

義平　弟の言葉など氣にかけるには及びません。

義朝　と言ふと、（眼を据ゑて）父を殺してもいゝといふのか。さうだ、年張りさうだ。俺はおまへにいゝ手本を見せたのだ。おまへは札付きの叔父殺しだ。おまへの肚の中では「今度はおやぢの番だぞ。おやぢはいゝ手本を見せてくれたからな」さう言つてるだらう。

義平　何と申されます。

義朝　札付きの叔父殺し。なぜおまへが信じられないのか。

義平　父上、御邪推もことによりますぞ。

義朝　（耳に留めず）心ちりぢりの源氏一族が表面ばかりの一丸となつて錦の御旗に向ふ。笑止なことだ。ひゝゝ。俺は骨肉を信じないぞ。ひゝゝ。

義平　父上、御正氣に返らせられい。のう父上。（手を取つていたはる）所詮源氏は京洛とは相容れません。今こそ父上がこの泥沼から足を洗ふべき時ですぞ。輯平の坂東魂はまだ腐りません。坂東の處女地はそこに源氏の覇業を打ち立てんことを待つて居ります。

義朝　いかにも、俺が半生の努力のむくいはこの手にしみついた泥土だけか――。俺は坂東が懐しい。あの荒風の

中で幼い吾子等を育てたい。畢生の覇業を坂東にこそ殘したい。しかし……おまへや朝長はもう俺の覇業を助ける手足とはならない。いつかは乾度、俺を殺して。

義平　父上、祖父を打つた御傷心のあまりとは言へ慮外の御言葉ぢや。（歎く）

義隆（奥から常磐とともに出る。うれいを帯びて）かほどまでに吾子等を信ずることができないとは、おまへの心は益々荒んでゆかなければよいがなあ。俺の心配はそれだよ。弟はおまへの心に怖しい種子をまいてくれたなあ。あゝ。

常磐（乙若を懐ろに抱いてゐる）殿は今度の合戦で身心ともにいたく疲れて居りまする。今は何よりも御静養が第一かとおもはれます。

義隆　さうだよ。俺のやうに呑氣になつて身心を養ふことだよ。つとめて人を疑ふな。人の一生の大事も一寸した心の持ちやうから起るのだ。なあ義朝、呑氣にせい。（砧と侍女と今若乙若を抱き頼朝を伴うて出る）

義朝　おゝ頼朝か、さ來い。今若や乙若も笑へ。おまへ等は生み放しにされた蛾ではないぞ。父母が手鹽にかけて立派に育てるぞ。可愛いやつらだ。（頬ずりする）おまへ等も早く大きくなつて大伯父様に昔話をしていたゞくのだよ。伯父上、源氏の長老はあなたお一人です。どうかこの館にいつまでも留つて、家の父となつて下さい。この幼い者らがどんなに喜ぶでせう。

義隆　いゝとも。どこへ行つても家もなし友もなし樂みもない年寄りだ。この可愛いゝ子供らを相手に祖父の手柄話をしてきかせるのがせめてもの樂みだよ。

頼朝　嬉しいよ、おぢいさま。

義隆　おゝおゝ。

（上手の庭から信頼が政清の制するのもきかずに「火事を申上げずに歸參いたされぬ」と叫びながら、ちよこ〳〵と出てくる。）

信頼　これにおいでぢや。

義朝（不機嫌に）まだお歸りなさらぬか。

信頼　何と申されようとも、この儀だけは是非ともお耳にいれなければなりませぬ。

義朝　何ですか、信頼卿。

信頼　只今、しかし御一族の前でおッぴらに申上げるのも如何かと存ずるが。

義朝　構ひません。決して御遠慮には及びません。

信頼　されば申上げる。實は、今朝信西から申入れた御婚約お見合せの儀でござるが、あれは――有樣を申せば、當家をないがしろにして、俄かに清盛の娘と婚約を結はれたのでござる。

（一同意外の眼をみはる。）

義朝　（徐に信西を）　貴殿は近衛大将を信西に奪はれたので、さやうな根なしごとを申されるのではありませんか。

信頼　信頼さほどまでに義旗は仕らぬ。貴殿こそ眼に梁のあるか、先刻よりの堀河の向うにつゞく人群集を何と御覧じなさる。（一同、信頼の指の下手を見る）いま白拍子があまたまゐる。あれこそ西八條の館へ祝言に招かれる白拍子でござるぞ。

砧　お父さま、悔しうございます。（義朝の手をとつて泣き崩れる）

義朝　泣くな、泣くな。（ぢッと感情を抑へて棒のやうに立つ）

義平　むッ――。（無念さうに下手を見詰めてゐる。長き間）やッ、あれは。（一同、下手奥の藪蔭を見る）あの藪の向うから槍の穂先にひッかけてくるのは何だ。

（間。）

義平　首。

義隆　爲義の首だ。

（怖しき沈默。眼を掩ふ者多し。）

（築地の外に、槍先に梟けられた爲義の首が停る。）

信頼　おッ、これはまた何としたことでござる。（倉皇として去る）

義朝　義平。

義平　何です。

義朝　まぐさは……物の具は、よいか。

義平　（決然と）御心配には及びません。

義隆　義朝、前後を忘じてはならぬぞ。

朝長　父上、その襲へた身心を以て。

義朝　默れ。（砧の手を取つて）待つてゐろよ。

砧　（明るい表情で）はい。お父さま。

義朝　（カア／＼と群れ啼く鴉に）おまへらも待つてゐろ。今に餌食を與へるぞ。

## 第三幕

### 青墓の宿

美濃國青墓の宿の長者大炊の家の裏手にあたる株瀬川の土手。上手は赤土塀、裏木戸がある。下手は川を距てゝ雑木藪がある。高から紅山橋が空をよぎる。前幕より三年後、平治元年師走の末の方。川の眞菰は枯れ立つ。

叛臣の汚名を受け平治の亂に破れて都を落ちてきた朝はいま川面に糸を垂れて寒鮒を釣つてゐる。眉の間の深い皺が目に立つ。

やゝ離れて政清も糸を垂れてゐる。うすら寒い冬の日ざしが薮を通して水の上におちてゐる。義朝は浮子を見詰めたまゝ考へ込んでゐる。政清は時々義朝の方に氣を配る。長い沈默がつゞく。

義朝　政清。

政清　は。

義朝　俺がいま何を考へてゐるか言つてみい。

政清　これは恐れ入つたお言葉でございます。

義朝　はゝゝ、おまへは正直だな。愚問を眞にうけて、少しでも俺の氣に逆ふまいとする。心配するな。俺の氣持はぢツと浮子を眺めるまでに落着いてきた。

政清　何よりもお嬉しいことでございます。

義朝　ときに政清。おまへは義平が今日坂東へ立つと思ふか。

政清　馬の御手入れもすみました。屹ツとお立ちなされます。

義朝　馬の手入れがすんだから出立するとは言へまい。俺は立つまいと思つてゐる。

政清　何故でございます。

義朝　近う寄れ。（政清、近寄る）義平は朝長とぐるになつて俺をねらつてゐるのだ。

政清　殿、何と仰せられます。

義朝　おまへだから言ふ。あいつ等は俺を亡き者にして源氏の首領を奪はうとしてゐるのだ。まあ聞け。今度の合戰で、俺が戰略を誤つたので、あいつ等はすツかり俺の腕を見くびつてしまつた。俺はまた宣傳を誤つて遂に叛臣の汚名さへ着せられてしまつた。そこであいつ等は所詮俺の力では源氏再興は駄目だと思つてゐるのだ。

政清　今の場合、さやうな御心づかひは御心勞を增すばかりでございます。

義朝　心勞の原因はあいつ等にあるのだ。朝長が信濃路へ立つのを嫌らつて漸く俺に追立てられて出立したのも、義平がどうあつても俺を眞直に坂東へつれて行かうといふのも、兄弟ぐるになつて坂東へ俺を押し籠め、亡きものにしようとするのだ。

政清　その御心ゆゑに殿は御心勞が絶えぬのでございます。何卒こゝ暫らくは無念無想、たゞ、一竿の釣竿を友に悠々自適のほど願はしう存じます。

義朝　いや、義平が傍にゐる間は枕を高うし眠ることはできん。（立ち上つて）俺はまだ源氏の首領は讓らぬぞ。況してや坂東へ封じ籠まれて寢首をかゝれるやうなヘマはせぬぞ。

政清　またしても怖しい御邪推ぢや。

義朝　何で邪推といふ。あいつ等が父を殺さぬといふ見極

めたつくか。俺はいゝ手本を見せてやつたのだぞ。あいつ等に立派な口實をつくつてやつてゐるのだぞ。（藪の方を乾ッと見て）あれは誰だ。義隆大伯父ではないか。

政清　殿、義隆殿は二條河原で御討死あそばされたではございませんか。

義朝　いや大伯父は乾度生きて居られる。常磐や三人の幼兒と一緒に乾度跡つてくる。

政清　殿の浮子が動きます。

義朝　む。（急いで竿をあげる。何も釣れない。腹立たしげに竿を折つて投げ捨てる）お、蹄の音がする。（土塀の彼方を見る）

政清　馬ではございません。竹を伐つてゐるのです。

義朝　成程、竹を伐る音だな。

政清　笹がこのやうに流れてまゐります。

義朝　（水面を見て）末はいづくに行く。

重成　（裏木戸から出る）義平殿が今一度是非御對面申したいとの御事にございます。

義朝　陽も傾いたのにまだうせ居らぬか。先刻訣別いたした。もう會ふ用はない。早く出立しろと言へ。

重成　その儀につき殿にも今一度御熟考が願ひたいとの御言葉でございます。

義朝　俺の氣の進まぬことを無理に強ひるとは何か他意のあることか。

重成　さればこそ重ねて御對面を願はれるのでございます。

義朝　冗い。俺はこゝで京洛のたよりを待つて、その上で尾州野間の宿に下り、凶年を靜かにおくる決心だ。

政清　野間の長田は俺の舅だ。殿に必要なものは休息と靜かな自然だ。

重成　譜代の臣もない半島の奥の狭隘な土地へ殿をお伴れ申して何の休息が得られるか。

政清　この政清がゐる。

重成　きさまは殿に媚びてゐるぞ。譜代の臣のむらがる坂東をすてゝ、腹の底のわからぬ舅の館へ殿をお伴れ申すとはへつらひ者め。

政清　何とでも言へ。俺はひたすら殿の御休息を願ふばかりだ。

重成　坂東を措いてどこに休息の隙があるのだ。

義朝　汝までが義平の手先となつて俺を坂東へ押し籠めようとするのか。

重成　殿、何と仰せられます。

義朝　さうだ、さうだ。行け、行け、行つて義平に會ふ用はないと言へ。

重成　微臣の心中までお疑ひあるとは。（涙を拂つて去る）

（短い冬の日は暮れてゆく。荒涼たる美濃平野に蕭々として木枯が渡る。櫛のやうな新月が雪をふくむ綿雲に消されてはまた現はれる。）

義朝　世を偲ぶ日が今日もまた暮れてしまつたが京洛のたよりをもたらす馬の蹄の音を今日も聞くことができなかつたな。この雪空に頼朝はどこをさまようてゐる。常盤や砧や幼兒はどこに身をかくしてゐるか。義平や朝長が俺に齒向ふほど俺は京洛のたよりを聞きたくなる。金王丸よ、早く勇ましい蹄の音をきかせてくれ。自然の眠る中にも俺は眼を覺ましておまへの馬のいなゝきを待つてゐるぞ。のう政清、俺は妻や子の安泰な知らせを聞き次第、この海道筋の宿を立つて半島の奥の靜かな海ぎわへ落ちて行かう。俺はそこで和やかな伊勢の海を見ながらこの不幸な歳をおくりたい。身心の休息を得られたならぢッと越し方行く末を考へて新しい再起の力を養ふこともできよう。俺にはまだ一騎當千の力はある。だが心の力には飢ゑ切つてゐる。俺はそれを取り返してみせる。そして凶徒の汚名は拭つてみせる。俺の力で源氏を盛り立てゝみせる。義平や朝長の鼻を俺の自力で屹度あかせてやる。

義平（裏木戸からぬッと現れる）

義朝　誰だ。

義平　俺です。

義朝　まだうせ居らぬか。

義平　行きます。だが坂東へはまゐりません。

義朝　なぜ。

義平　父上がまゐらぬゆゑです。

義朝　俺は斷じて行かぬ、野間に一旦落ちつく前には。

義平　重ねておすゝめはいたしません。しかしわれら源氏は坂東の土と人とを決して忘れてはなりませんぞ。武藏野と富士の高根を忘れてはなりませんぞ。

義朝　分つてゐる。しかしおまへほどの執着はもたぬ。俺は白雪をいたゞく富士の高根よりも俺を靜かに眠らせる和やかな海を見たいのだ。蓑蟲の蓑を欲しいのだ。獨り居の安息所が欲しいのだ。

義平　父上は坂東を怖れてゐる。なぜ怖れなさる。（吃と言ふ）

義朝　………。

義平　土を怖れなさるか、人を怖れなさるか。

義朝　俺は疲れてゐる。何も言ふな。休息を與へてくれ。妻子の安否をきかせてくれ、何よりも。

義平　妻子の安否、それが源氏の旗頭左馬頭の御言葉ですか。

義朝　俺の疲れた心を慰めてくれるものは妻や子の面影だ

けだ。

義平　悲しい父だ。一擧にして兵を盛返す最初の計畫はどうなされた。いや、なぜ進まぬ朝長を急き立てゝ信濃路へ兵を募りにやられましたか。

義朝　…………

義平　またこの義平に坂東へ先達して兵を募れとお命じなされたのは抑々何のためですか。（義朝の心を見拔かうとして鋭い眼光を投げる）

義朝　（動搖する）

義平　なぜわれら兄弟を遠ざけますか。

義朝　俺は朝長の淸淨癖を好かぬ。聖人ぶつた冷たい眼光を好かぬ。

義平　では弟を欺いて。

義朝　…………

義平　父は子を欺く。さればこそ義平は坂東へはまゐらぬと申したのです。父上、それでも父上か。二度の合戰に生死をともにした父子ですか。父はわれら兄弟を怖れてゐる。坂東を怖れてゐる。それで明のある父と言へるか。源氏の首領と言へるか。（激越する）

政淸　義平殿、何卒……

義平　（矢庭に刀を拔いて義朝の胸にさす）

政淸　（遮てゝ後ろから抱き止める）

義朝　（唸るやうに）見ろ、父を打つ機會をねらつてゐたのだ。

義平　何。

政淸　しばらく、義平殿、しばらく。（義平に武者振りついて留める）

（この物音に大炊、重成、義信が出て義平を押しとゞめる。）

義平　（思ひ返して悲憤の涙をこぼしながら）俺は叔父殺しだ、惡源太だ。だが俺の眞意、俺の眞ごころが父にさへも通じぬとは——。心、心に通ぜずば父、父たらずだ。俺はもうわが心から父を斬つてしまつた。俺はひとりだ。父にも信ぜられぬ淋しいひとりを見る。父上、最後に一言申しておきますぞ。人間の最大不幸は信じてゐるものに裏切られることだ、と。おさらばだ。みなも、さらばだ。（大跨に行く）

（大炊及び從者等義平をとゞめる。）

大炊　いま御父子が仲違ひをされてはいつまた逢ふことができませう。思ひ返して下さいませ、義平殿。

義平　いや、俺は行く。今に見ろ、六條河原の獄門臺から、俺の首は父の哀れな心情を嗤つてやるぞ。はッはッはッ。（決然去る）

（肅然たる寂しさが場面を襲ふ。川のせゝらぎがきこ

える。やがて土塀の後ろに馬を走らす音がする。その蹄の音が遠ざかる頃、淡き新月の光りに街道を一目散に孤影悄然と去りゆく義平の姿が見える。）

大炊　坂東へは行かれず、赤坂の宿を右に見て飛騨街道へ馬をすゝめられる。

重成　あゝ何處にまゐられるのか……寒月を浴びて。

義朝　默れ。行きたくば附いて行け。

政清　しッ！

大炊　何でござる。

義信　熊笹を掻き分ける音がする。

政清　靜かに。

大炊　おゝ、中宮太夫殿ぢや。

義朝　何、朝長が。

從者等　大夫殿。おーい。

朝長　（跛をひきながら土手の熊笹の中に現れる、疲れた聲で）お父さまはおいでか。

政清　これにおいでゝございます。（從者等朝長の側に行き步行を助けてつれてくる）

義朝　なぜ歸り居つたぞ。

朝長　龍華越の手傷の痛みに耐へかね……また一つには、曉方の夢に不吉を見て、御先々のことが氣にかゝり、再び引返してまゐりました。

義朝　夢を見て引返した、痴け者め——いやさうではあるまい。

朝長　お父さま。美濃尾張の國々は危險にございますぞ。

義朝　どこを押して危いといふのだ。

朝長　源氏の落人は隈なく詮議をいたせとの通牒が宿々に廻つて居ります。殊にお父さまの御首には莫大な褒美がかけてあるとの噂にございます。

義朝　打てるものならこの首を打たせてやるわ、はゝゝ。

朝長　御笑ひごとではございませぬぞ、御身安全の地は坂東を措いて他にございません。

義朝　また坂東と言ふ。（疑ひ深い眼をして）愈々おまへは義平としめし合せてゐたのだな。

朝長　何をですか、お父さま。

義朝　おまへは始終俺を輕蔑し憎惡してゐるのだ。

朝長　え。

義朝　まあ聞け。砧の婚約一件でも、今度の合戰で信賴を賴みにしたことでも、またおまへの遊女腹を俺が卑んでゐることでも……おまへはいつも俺の仕打に不滿を抱いてゐるのだ。俺を事大根性、成上り者根性と卑んでゐるのだ。

朝長　お父さま……

義朝　いゝやさうだ。それで義平と心を合せて俺を……

朝長　御正氣とも思はれぬ御言葉ぢや。

義朝　（つゞけて）　おまへは傷の痛みにかこつけ、愈々義平と事を決行する爲に歸つてきたのだ。遊女腹の弱蟲め、俺を打てるなら打つてみい。

大炊　頭殿、あまりの御言葉ぢや、おつゝしみ下され。

從者等　殿、殿。（おし宥める）

朝長　まことお父さまのお心が左樣ならば、所詮生き甲斐もない朝長です。父に疑はれて子として生きてゆくことができませうか。

義朝　それ、肚を合せてゐる證據だ。義平と同じことを言ひ居る。

朝長　お父さま、朝長はその不幸なお心を衷心お歎き申しますぞ。生れてはならぬ時と處に生れ合せた朝長ぢや。現世の未練もない。父上、ご免。（かれて決心せる如く自刃す）

政清、大炊　（朝長の手に取りついて）　早まつたことをなされますな、大夫殿。

朝長　いや〳〵、おとゞめあるな。生きて甲斐ない朝長が、早く亡母の許に參つてこの眞情を語りたい。もとより世に執心の淺い朝長がこれまで命を長らへたのも父と生死をともにして亡母の許に參りたい一念からであつた。痴け者よと叱られるのを知りながら昨日の馬を今日引返してまゐつたのもそのためだつたが……あゝお父さまは手を切り足を斷ち、たゞ一人肉親の影にそふ者もなく孤影さみしく半島の塊に落ちてきゐるのですか。淋しい最後ぢや、朝長生きて見るに得たへぬ……（啼きつゝ言ふ）

義朝　最期のきはまでも父を批判し居るか。手を切り足を斷つたのは信義だ。賴政だ、義平だ、汝自らだ。俺は源氏の首領をおまへ等には讓らぬぞ。俺の命に代へるのは賴朝初め三人の幼兒だ。

朝長　いま眠る隈に父の晴れやかなお心を拜みたい――。お父さま――、おぢいさまをお打ちなさるまではかやうの御心ではなかつたに。

義朝　またしても俺を批判する。（狂氣のごとく躍りかゝつて朝長の胸を刺し貫く、朝長絕命す）

（時に早鐘が鳴る。次第に頻る。一同、驚いて四周を見る。土塀の内側に騷しい足音や叫び聲がきこえて、長者の家の者等が延壽と夜叉とを庇ひつゝ裏木戸から走り出る。）

家の者等　大變です、大變です。

大炊　どうしたのぢや、靜かにいたせ。

甲　嗅ぎつけたのです。

延壽　頭殿をおかくまい申してゐることを嗅ぎつけたのでございます。

（鬨の聲あがる。）

義朝　敵は土百姓か。

乙　はい、竹槍をもつた土百姓でございますが、中には鎧を着こんだ者も見受けます。

大炊　大凡の數は。

甲　まづ二三百人。

重成　（緊張して）政清、殿を速かに落し申せ。義信、つづけ。

義信　む――。（重成と）殿、御免。（裏木戸から馳け入る）

大炊　暫らくこれにお待ち下さりませ。（下手の土手に去る）

夜叉　お母さま。怖いよ。（延壽の腰にしがみつく）

義朝　父がゐる。怖いことはないぞ。夜叉、來い。

夜叉　（父を怖れる）

（鬨の聲。闇夜の爭闘が初まつたらしい。）

政清　殿、岸へ、お下り下さい。長者が舟を操つてまゐります。

義朝　俺は土百姓に追はれてこの宿を落ちはせんぞ。

（土民裏木戸を毀して突入する。家の者等悲鳴をあげながら延壽と夜叉をつれて下手の叢蔭に難を避ける。政清、義朝を庇ふひまに、土民等は義朝を目がけて突きかゝる。亂闘。叫喚、遂に土民等を皆殺しにする。義朝、その勢ひに乘じて土塀の內に赴かうとする。時に、重成が木戸口に現れる。）

重成　お、落ちなさいましたか。敵は益々勢を增します。迅くお落ち下さい。（去る）

政清　殿、さ、一先づ舟へ。

義朝　今一戰。血を見たので勇氣が增した。

政清　（制して）土百姓を斬つたとて何になりませう。御大切なお身にございますぞ。（柴舟が下る。大炊とその弟の玄光法師とが櫓を操つてゐる）

大炊　（叫ぶ）殿、政清殿、早くお出でなさりませ。

政清　只今、只今。（義朝に）長者が喚んで居ります。お伴をいたします。

義朝　（考へて）む、行かう。

政清　先づ。（義朝とともに川岸に下る）

義朝　長者、大儀に思ふぞ。（舟に乘る）

大炊　むさくるしい柴舟。しばしの御辛抱を願ひます。又これはわたくしが弟、萬齊、入道して玄光法師と申します。

義朝　お、萬齊か。久し振りに異なところで逢ふの。

玄光　何よりも御健かで大慶に存じます。

義朝　宜しく賴むぞ。

（凱歌があがる。義信が打たれたのである。土塀の後

ろまで敵の大勢が通つたらしい。)

義朝　両人を呼び返せ。

政清　は。(裏木戸に向ふ)

重成　(追ひ詰められて土塀の上に駆け上る。土民を防いでゐた長者の家の者等も殺されたらしい。彼は土塀の上で大刀を振りかざして下から刺しつける竹槍をなぎ拂ふ。遂に敵せず、大聲あげて)芋蟲めら、よく聞け。平治元年師走廿七日、左馬頭源朝臣義朝、青墓宿にて自刃し果つる。首を引ッきつて急ぎ六波羅へ注進しろ。(自ら刃尖を顔面にあてゝ面皮を剝ぎ取り腹掻き切つて土塀の向う側へどッと落ちる)

土民等　萬歳!　萬歳!　萬歳!

(早鐘歇む。歡聲次第に遠のく。)

義朝　(舟中に立つたまゝ愁然として)　政清。

政清　(舟の側に下りてくる)　は。

義朝　よしなき疑ひをかけられて狂言じみた悲壯の死狀——彼も正直者であつたな。(周圍を省みて)　いまは汝とただ二人。こゝまで落ちてまゐつた時は主從八人。

政清　御意の通りにございます。

大炊　娘よ、娘よ。

延壽　はい。(夜叉をつれ家の者等に守られて藪蔭から現れる)

大炊　殿のお立ちぢや。

義朝　いかい難儀をかけたな。達者で居よ。夜叉も達者でな。今度こそは土産をどッさり進ぜるぞ。な。

延壽　お父さまに御挨拶をなさい。

夜叉　(首を振つて母にまつはる)

延壽　この子はどうしたのぢや。殿、御無事を祈りまする。

玄光　星屑も消えた。今宵は雪らしい。(カンテラに灯をいれる)

義朝　政清、野間までは幾日かゝる。

政清　されば——夜三夜、日は二日。

義朝　すれば、靜かな海が見られるか……

大炊　弟、頼むぞよ。

玄光　安心なされ。大晦日には野間の宿だ。

(舟は搖々と枯立つ眞菰を分けて下る。)

義朝　(荒涼たる夜の川を眺めて)　そこに動くのは誰だ。

(發作的に叫ぶ)

政清　何と仰せられます。お氣をたしかにおもちなさいませ。

義朝　川を沮む人々を見ろ。俺はあの父も殺した。あの大伯父も援兵を送らず見殺しにしてしまつた。あれ朝長が生々しい血の中から俺を睨んでゐる。あゝ、骨肉を殺し

た俺、おれは、いつ何處で、誰に殺されるのだ。（急暗）

（舞臺眞暗。その中に「おーい、おーい」と遠く陸から呼ぶ聲がきこえる。その聲の微かになりゆきて、舞臺にほの白き曉の光がにじむと大河の上にひゝとして雪の降つてゐるのが見えてくる。闃寂――。）

――幕――

## 第四幕

### 野間の最期

尾州野間、長田忠致の館。伊勢の海を見晴らす一室。下手に廊下がのびてゐる。庭前より濱につゞく小松原。年の暮より降りつゞく雪はいま小歇みになつてゐる。翌くる平治二年の正月三日である。

いま室内では主人の忠致景致父子を初め義朝政清等が賀宴を張つてゐる。政清の妻操や侍女等が酒間を斡旋する。幕のあく前から冴えた鼓の音がきこえて三河萬歳がはじまつてゐる（はア常磐かに御萬歳……一本の柱が一の御宮にます高尾の大明神……さてこそこの御家は誠にめでたう候ひける」節と振り面白く舞ひをさめる。拍手。

義朝　はゝゝ、面白かつたぞ。太夫一こんとらせるぞ。

太夫　有難う候ひける。

忠致　はゝゝ、才造には俺がとらせる。

（萬歳、酒を飲む。）

義朝　俺も一さし舞ひたうなつた。太夫、鼓を打て。

太夫　畏つて候。

義朝　（白扇をひろげ自ら謠ひつゝ舞ふ）伊勢の海の、淸き渚の汐貝に、なのりそや摘まん、貝や拾はん。玉や拾はん。

（拍手。）

政清　殿には珍しう御歡興の體ぢや。政淸、かほど嬉しいことはございません。

忠致　俺も殊の外の面目ぢや。萬歳にいとまをくれる。大儀であつた。

太夫　さらば、御免候へ。（才造とともに去る）

義朝　（欄干に出て海を見る）松籟と海潮音のほかには人馬の聲も稀れな靜かな里。おなじ日の本にかやうな別世界があらうとは。海に向へば心和んで戰塵にまみれて怱忙として送つた歲月が悔まれる。人生、何が一番大事か。それはかやうな境に身をおいて初めて悟ることのできる問題ぢや。忠致、かやうな里に居れば、富貴榮達などてふことがいかにも愚かに見えるだらうな。

忠致　はい……いや、私共はさやうなものを望んでも所詮は得られぬものとあきらめて居ります。
義朝　あきらめるよりも悟るのが肝心ぢや。いや悟りきらぬ身で悟りを說くのも笑止なことだ。しかし、忠致、俺はこの里に落着いてわづか四日五日にすぎぬが、いッそ血腥い甲冑わざをすてゝ妻子とともに伊勢の海の海士にならうか……などと思ふほどに心が和んでまゐつたよ。何ごともそちらの手厚い歡待とこの靜かな自然の賜物だと心中に感謝をいたして居る。
忠致　何分にも片田舍のこと、手厚い歡待などとは汗顏の至りにございます。
景致　午後にも晴れたなら、初網をおかせてはいかゞですか。
忠致　よいところへ氣がついた。早速手配をさせておけ。
景致　では、御免を蒙つて。（下手へ去る）
忠致　さ、殿のお酌をせい。
操　畏りました。
義朝　俺はもうよい。長者は強の者らしい。改めて一こん差さう。（忠致に盃を差す）
忠致　重ねて盃を下さるゝ。忝ない。（受けて飲む）
義朝　時に、政清。玄光はもうどこまでまゐつたかな。
政清　まだ大野の宿はすぎますまい。

義朝　金王丸もおなじ街道をまゐればよいがなあ。（指を折つて算へる）京都を二十八日に出立しても今朝は着かねばならぬ。かうしてゐても氣にかゝるのはそのことだ。
景致　（出る）網は只今申し付けました。殿。
忠致　晴れゝばよいがな。東風ではな。
政清　さういふうちにチラ〳〵降つてきた。
景致　殿、お湯が湧きましたが、お召し下さいませ。
義朝　いつも新湯とは恐縮だな。
政清　殿、さやうなお氣遣ひはなさいまするな。
義朝　では、案内をたのむ。
操　畏りました。御案内をいたしまする。（下手の廊下へ義朝を案内して去る）
忠致　政清、水いらずぢや。くつろいで盃をかはさうぞ。
政清　（立ちかける）
景致　まあよいではないか。湯殿までお伴せずとも、妻や七五郎にとくと言ひきかせてある。久方ぶりの父子揃三人の水いらずだ。新春に逢ふのも珍らしい。さ、やれ。そなたも、酒を飲んでも、殿の前では心からは醉へまい。殿は長湯だ。まあゆる〳〵汲みかはさう。
政清　では、一こん。
忠致　一こんも二こんも三こんもやれ。はゝゝ。（侍女等に）そちらも退れ。三人の水いらずにそちらは無用ぢや。

景致　（侍女等去る）

忠致　（政清に酒をつぐ）

忠致　今度は俺が差して俺がつぐ。（政清に盃をさし、景致の持てる酒瓶を取つてつぎかける）

政清　もうたくさんでございます。（盃を持ちあげる）

（その時、景致は政清の後ろに廻りいきなり刀を拔いて肩先を斬る。政清、あッと叫んで後ろを向く。忠致、すばやく側らの刀を取つて胴體を斬る。政清空を掴んで死す。）

操　（廊下から歸つてくる。その光景を見て悲鳴をあぐ）

景致　しッ、しづかに。

（時に下手に鬨の聲があがる。忠致、景致その聲をきいて廊下を馳せて下手に去る。操は氣もそゞろに政清の死骸を目ざして廊下をゐざる。舞臺廻る。）

（中央、湯殿。上手から延びてきた廊下はそこに止る。下手は一面の小松原。いま湯殿を中心に、眞裸の義朝が手桶をもつて忠致輩下の郎黨十人と激しい立廻りをしてゐる。飛雪紛々。雪の上に血汐が散亂してゐる。）

義朝　鼠輩めらの闇討ちにあつて命を殞す義朝ではないぞ。政清、政清、そちもこの企謀に加擔し居つたのか。

（敵を追拂つて無念さうに叫ぶ）

（反對の側から再び敵が押し寄せる。操がまろぶやうに廊下から出る。）

義朝　政清は。

操　父と兄とに打たれました。

義朝　政清までが打たれたと。

操　（短刀を以て胸を刺して死す）

義朝　操。

操　夫の不覺をお詫び申しまする。（絶命）

（郎黨等鬨をつくつて攻めかゝる。義朝奮迅して大勢を斬り殺す。）

義朝　忠致父子はどこにゐる。己れ。（と叫びながら上手の館の方へ探しに行く。また大勢が蝟集して義朝に切りつける。）

（凄愴たる場面に踏みくだく蹄の音と轡の高鳴る音が近くひゞいてくる。京洛から夜を日についで驅け戻つた金王丸だ。）

義朝　おゝ金王丸か。遲かつたぞ。

金王丸　（この光景を見て言葉も出ず飛鳥のごとく馬より降りて敵を斬りまくる。敵、退く）

義朝　金王丸。

金王丸　殿、この狀態は。

義朝　長田父子に謀られたのだ。して賴朝は無事か。

金王丸　はい。青墓に御安着にございますぞ。
義朝　む——。して京洛の消息(たより)は。
金王丸　されば。
義朝　どういたした。
金王丸　（決然と）北の御方には三人の御子達と、伏見の里にて平宗清と申す者に捕へられました。
義朝　（急き込んで）して打首獄門にあつたのか。
金王丸　いえ。
義朝　どうしたのだ。
金王丸　（言ひ兼ねて）はい、淸盛に降りました。
義朝　淸盛に降つたとは。
金王丸　御推察を願ひます。それも一重に三人の御子達の御命をおもはせらるゝ慈母のみ心からと存じます。
義朝　（全身の血が一時に込み上げてくる、長き間。悲憤の情をこめて）子を救ひたさに淸盛めの妾となる！　保元このかた源氏當面の仇敵はそも誰だ。父を失ひ兄弟を失ひ、いま一族四散の憂目を見るもそも誰ゆゑだ。淸盛、淸盛、淸盛め——。伊勢乞食にまで身を委して子を救はうとは何たる女心だ。恥を知れ、恥を知れ、恥を知れ。（狂へるがごとく雪を踏みくだく）義平が最後に殘した言葉——。今こそ俺は人間最大の不幸を知つた。天下のちからを握り源氏首領の名をほしいまゝにする。兒戯だ。兒戯だ。そのために吾子を二人まで失うたとは、不覺な父の振舞であつたな。許せよ、吾子等。
（湯殿の蔭から橘七五郞といふ强力の大男が六叉の槍をつかつて義朝に突きかゝる。義朝、その切先を手捕にて彈き、槍の柄を握る。）
　野間の毛蟲らを踏みつぶすは容易いことだ。しかし、義朝の希望、光明はいま何にある。晴だ、晴だ……（七五郞、槍をしごく。義朝、再び槍の柄を握つて）人間、何が大事か。今、知る。女は夫の骸を越えて尙ほ子の愛に生きることができる、男子(をのこ)は、何のため、何のために生きるか。金王丸よ。再び馬を驅つて、源氏の殘黨と、世の人々に告げよ。左馬頭源義朝は謀叛人の手には死せず自(みづか)ら人生懷疑のため大往生を遂げたと。（自ら槍の穗先を以て腹を抉つて死す）
金王丸　殿、御死骸は金王丸がしかと申受けましたぞ。
義朝　いや首は六波羅へ送れ。淸盛と常磐を永劫に見据ゑてやる。金王丸、介錯せい。
金王丸　はは。（義朝の後ろにまはる）
　（忠致父子を初め狼藉者等、物かげよりこの光景を見て氣味わるげに笑ふ。）

——幕——

# 河野義博篇

# 故鄕（三幕五場）

——地主と小作人——

土屋貫一　小地主
同　德助　貫一の父
同　定次　同弟
同　秋子　同妻
同　一雄　同長男
山口篤子　貫一の妹、寡婦
同　かづ子　篤子の娘
宮川六助　小作組合の區長
同　周造　六助の長男
同　りん　同妻
同　もん　同娘
外に小作人政吉外十餘人、執達吏、巡査、貫一の雇人、村の男女大勢

## 第一幕

甲州。小地主、土屋貫一の家。下手半分から奥へかけて葡萄棚。上手は古びた家屋。その前は庭。五月の午後。貫一の妻の秋子は緣先で張物をしてゐる。父の德助は下手葡萄棚の下で消毒液を解いてゐる。雇人の富造は、それを消毒機械に移して、背中に負ひ、畦を追つて葡萄に吹かけて行く。消毒液の壺は綠青で美しく光つてゐる。

德助　この位、解いたら、あるかな。
富造　澤山ごいせう。（吹きかけて行く）
德助　今年は、蟲が多さうだな。困つたもんだ。
富造　仕方ねえから、幾度も消毒するでゴイすねえ。（間）
秋子　お父さん、お疲れになつたでせう。少しお休みなさい。お茶でも入れませうか。
德助　ウン。蔓の締りのこりがあるから、それを濟まして、お茶にするかな。貫一は大變おそいが、話が六ケ敷いと見えるなア。
秋子　さうですねえ。此の不景氣では、銀行でも融通しちアくれないでせうねえ。
德助　困つたもんだ。（藁を取つて葡萄の蔓を結び付けて行く。間。一雄泣いて歸つて來る。かづ子慰めながら付いてくる）
秋子　どうしたの、お前。
かづ子　吉公がカマツたんだよ、伯母さん。

秋子　何をカマはれるやうな事をしたの。男のくせに泣いたりなぞして、なんだね。見ともないよ。（涙を拭いてやる。肩の學校カバンを取る。篤子家から出て來る）
かづ子　あのねえ。一雄さんが東京言葉を使ふのが生意氣だツて言つたよ。
篤子　まあ、そんなツマラン事を言つて、カマウの。田舍の子供ツて、何故かうわけが分らんだらう。（篤子三十女。夫に死なれた淋しさが見える）
秋子　ほんとですよ。私、これだから田舍は嫌になつちまひますよ。お前も弱いぢやないか。何故言ひ返してやらないんだい。
篤子　今度、そんなことを言つてカマツたら、先生に、さう言ひなさい。叔母さんが、お駄賃をあげるから、もう泣くぢやないの。ね。
秋子　地主だつていふと、何とか言つちやア子供までイヂめるんだねえ。ほんとに嫌な時世になつたこと。
篤子　全く、かうイヂめられちやア、かなひませんねえ。今にどんなになるでせう。恐ろしいこと。
秋子　一雄さん。行つて、叔母さんにお菓子でもお貰ひなさい。今度そんなことを言つてカマツたら、先生にでも、お父さんにでも、さう言ひなさい。その位のことで泣くやうな弱蟲ぢや。いけませんよ。（一雄うなづいて、篤子、かづ子と一緒に家に入る）それから、お篤さん、お父さんのお茶の支度をしてあげて下さい。
篤子　ハイ。（家に入る。秋子は張物を日當りのよい木の幹へ立てかける。貫一歸つて來る）
秋子　お歸りなさい。どうしたの。
貫一　駄目だ。（緣側に力なく腰を下す）
秋子　伯父さんとことでも駄目でしたか。
貫一　駄目だ。それに一方は、この六月が返濟期限になつてゐる。此上の融通は一文だつて出來ないんだ。何ぼ困つても、此上貸せとは無心言へない。
秋子　でも待つてはくれるでせう。
貫一　返したくも無いんだから、待つて貰ふより仕方がない、實に俺も困つた。
秋子　去年の小作は一俵だつて入らないんですからねえ。小作人も隨分ですねえ。寄りたかつて、地主を取り潰さうといふんですよ。
貫一　さうなんだ。
秋子　今も、一雄が泣きながら學校から歸つて來たから、どうしたのかと思つたら、アレが東京言葉を使ふのが生意氣だつて、吉公とかがイヂめたんですツて。今まで東京にゐたものに、急に田舍言葉を使へたつて出來ないぢやありませんか。地主といふと、何とかかんとか言つち

ア、イヂめたいんですよ。
貫一　親達が、さう言ひ聞かして置くんだらう。こんな山の中まで、勞働問題とか何とか言つて騷ぐ時世になつたんだから遣り切れない。俺達のやうな二町歩や三町歩の小地主は上下に敵を受けて滅びるより外にないんだ。さうなれば仕方ない。腕づくでも、喧嘩しても、生きて行かなくちアならん。
秋子　何時まで、こんな時世が續くんでせう。田舍住ひはツク／＼嫌ですわ。
貫一　だつて仕方がないぢやないか。今更東京へ出て行くことも出來やしない。
秋子　伯父さんだつて人情がないんですねえ。家の困つてるのは十分知つてるくせに、助けてくれたつて、よささうなもんぢやありませんか。
貫一　資本家といふものは、さういふもんぢアない。金のことになれば親戚も他人も、變りないんだ。お父さんはどうした。
秋子　畑で葡萄の蔓を縛つてゐるでゞす。アラ、又、大勢でやつて來ましたよ。（小作人十人餘り組合長の宮川六助を先に入つて來る。ドヤ／＼と上へあがる。貫一も上る。雙方暫く默つてゐる。軈て篤子がお茶を入れて出す）
六助　（お茶を飲んで）小作の話で上りやしたが――（此間に雇人富造壺の消毒液を汲みに來る）
貫一　ヘエ。
六助　どうも、組合の規定で、あゝして受けなくちア困りやすが。
貫一　その話なら、幾度言つても同じことです。組合に規定があるなら、地主の方にも規定がある。無法な要求をしたつて、受付けられません。
六助　さう仰しやりや、それまででゴイすけんど、あれだけは負けてうけねえぢや、小作人が立行きやせんからねえ。
貫一　冗談言つてもらつちア困る。立行かんのは此方で、あんた達は立派に其日を送つてゐるぢアないかね。少しは地主の身にもなつて見て貰ひたいものだ。第一土地を持つてゐるのは地主で、權利から言つたツて、相當の自由があるべき筈だ。成程、あんた方は勞力こそ費してゐるが、それに對する報酬としては、充分な收入を取つてゐるぢアありませんか。
六助　それが決して充分ぢアゴイせん。なア政吉ちやん。
政吉　さうとも。そんだから、かうしてお願に上るで。
貫一　慾を言へば切りはない。算盤はじいて勘定して見たツて分る筈だが、地主は取り分の內から村税も縣税も國税も所得税も出してるんです。差引すれば、あんた達の

方は六分、地主は四分にしか當ツちアゐない。それを此上三割引け、十七貫俵を十六貫俵にしろ、なんて無法なことを言つたッて、ホイソレと承知出來ますか、ちッたア此方の身にもなつて貰ひたいものだ。

六助　それが組合の規定でゴイすからねえ。それに去年は取方が悪いから、三割は是非引いてお貰ひ申さねえなりやせん。

政吉　俺の田なんか平年の半分でゴイすからねえ。あんねえに取れんことも珍らしいだ。

貫一　シラバくれちアいけない。坪刈をしてチヤンと分つてるぢアないか。成程、平年より幾分悪いが、ならし五六分の減りにしか當らない。それを三割とは隨分吹掛けすぎる。

六助　此の村ばかりぢやねえ、一般にさうで。組合の規定で、反くわけにや行きやせんからねえ。なア、さうぢやねえか。

政吉　さうとも。反いたら非道い目に遇ふ。交際つてもくれんでねえ。

他の小作人　さうさ、打殺されらア。家イ赤い蟲をタケられるからなア。

小作人一同　さうだとも。隣村の仙吉ちやん見てえに石コヅキに遇ふからなア。

貫一　そんな事は俺の知つたことぢアない。又、小作人にさういふ組合の規定があるなら、地主にも仲間内の約束があるからねえ。

六助　それだから、かうして大勢上つて御無心申すでゴイす。さうして受けねえ納められやせん。

貫一　豪いことをいふが、納められんとはどういふわけだね。貸借關係になれば、小作米だつて金錢だつて變りない。期限がくれば、どうしたッて、納めて貰はねえ此方が喰つて行けない。内々探つて見れば君らは去年の暮に、五俵なり十俵なり皆な米屋へ賣つてるぢやないか。地主へは籾一粒納めないでよくそんな事が出來たものだ。此方ぢや高利の金を借りて、やつと暮の幕を引いてるに不人情にも切りがある。その上三割引けなんてよく言へたものだ。

六助　それだから御無心で、地主さんちゥものは、小作人を助けてくれていゝ筈で。それでなくちア地主さんぢやゴイせん。

政吉　さうだとも。威張るばかゞ能ぢアねえからねえ。

貫一　政吉ちやん、冗談言つちア困る。地主はイヂめられるばかりで、威張るどこの詮議ぢやない。威張るのは、あんた達だ。多數を恃んで勝手のことをしちア、年々地主をイヂめてゐるぢやないか。俺は村へ歸つてまだ三四

年にしかならないが、其間にどれ程、非道い日に遇つてゐるか分らない。十年前は十八貫俵だつたものが、十七貫になる。十俵納の地所は九俵納めに減る。此調子で行つたら、今に小作人が七分取つて地主は三分しか取れないことになつてしまふ。併も其内から御年貢を納めなくちアならないのだ。破産するより外に仕方がない。

小作人の甲　先祖代々、澤山儲けてるから、そんなことはゴイすめえ。

他の小作人　全くさ。今迄にウンと搾つてるからなア。

貫一　絞るとはなんだね。失敬なことを言つて貰ひたくないものだ。君等こそ地主を絞つてるぢアないか。

政吉　俺らが何を搾りやした。

貫一　現在搾つてる。十七貫を十六貫にしろ、その上三割負けろといふのは、まるで追剝の仕打だ。これが搾るでなくて何だね。

政吉　搾るぢアねえ、御無心で。御無心だから、かうして頭を下げて、幾度も幾度も足を運ぶでゴイす。それでなくて誰が頭を下げるもんぢやねえ。

貫一　そんな御無心が立つなら、世の中は闇になる、義理も人情もない。法律も權利もない。

政吉　この御無心を聞いてくれんなら、お旦那ぢやゴイせん。俺ア頭も下げげん。

貫一　誰も下げて貰ひたくない。馬鹿にするにも切りがある。（雙方喧嘩腰になる）

秋子　（堪へられなくなつて出てくる）女なぞが口を出すところぢやアありませんけれど、あなた方も隨分ぢアありませんか。家なぞは御覧の通りの小地主で、搾るの威張るのどこぢやありません。此方から、あなた方の方へ御無心する位です。五百俵、千俵と入る大地主なら兎に角、百俵や百五十俵の小地主では、家の遣り繰にどんな苦勞をしてゐるか、少しは察してくれてもよいぢやありませんか。去年の暮、納めて貰はねばならんのを、勝手な言分を拵らへて、籾一粒今以て入れてくれないなんて餘り胴慾過ぎます。

六助　決して納めんちうわけぢやゴイせん。只組合の規定だから、何とかなるまでア、納められんだけで。

秋子　規定だつてそんな無理な——

貫一　（怒鳴る）默つてろ。いくら言つたつて同じこッだ。

秋子　だつて、あんまり非道いですもの。

貫一　それが分る位なら、こんな事を言つちや來なア。（一寸間）

六助　それぢや、どうしても聞いちやくれやせんけ。

貫一　俺は掛引は大嫌だ。出來んものは何ぼ言つても出來ん。

六助　それぢや、仕方がねえ。そんなこんなら、お旦那でも、なんでもねえ。なあ、先祖代々、大かい顔ばかして、俺ラの親爺達を、イヂめて來たくせに、偶の御無心をせえ聞いちやくれねえなら、御庄屋さんでも何でもねえわ。

政吉　さうとも。俺のお爺は庄屋へ納める米がねえばかりに、娘をせえ賣つた。そして血の出るやうの金を納めた上に、婢まで玩弄物にされてらア。俺ア、少せえ時から、家が困るちウで、奉公に叩出され、日がな年中、コヅキ廻されて、頭へ瘤の絶えたこたアねえ。それも皆な庄屋のお蔭だ。俺アどの位え口惜しいか知りやしねえ。

小作人一同　さうだとも。全くだ。隨分非道えことをしてるからなア。

貫一　家の親爺が、どんな非道いことをした。したなら、したで話して貰はう。

六助　そりや、家のお旦那は、それ程ぢやねえさ。その前のお旦那は隨分非道かつた。

貫一　先祖が悪いことをしたつて、それを俺が、どうするものか。もう歸つて貰ふ。

六助　歸れッたッて、話が極らん内は歸れん。

貫一　極まつてる。斷然引くことは出來ん。

六助　そんなら、地所を返すばかりで。

貫一　何？　地所を返す。返すなら返すがいゝ。そんな嚇しに驚いて堪るもんか。

六助　嚇しでもなんでもねえ。それが組合の規定だ。

貫一　さういふなら此方も意地だ。さあ、皆な、返して貰ふ。その位の嚇しに驚いて、地主だなんて言つてゐられるもんか。馬鹿にしやがつて。

政吉　その代にや去年の籾は一粒だつて納めんぞ。

貫一　納めんなら、取つて見せる。假令、田が草地にたつたつて、お前らには貸さん。

秋子　さうですとも。かうなれば、私だつて野良へ出ます。田植でも何でもします。

政吉　ヘッ、東京の奥さんが早乙女か。よく似合はア。

秋子　何をしようと、大きにお世話だ。お前さんなぞの御厄介にやならん。

六助　まア、御免なつて。皆んな行くぢやねえか。地所はお返し申すがいゝわな。

小作人一同　返すとも、有がてえこんだ。（憎まれ口をききながら一同出て行く）

貫一　かうなれば戰だ。畜生、意地でも地所を取上げてくれる。

秋子　全くですよ。私ア口惜しくてなりやしない。（泣出す）

雋子　（出てきて）ほんとに、何んといふ憎らしい奴らだ

らう。

貫一　皆な覺悟しろ。泣いてなんぞゐる時ぢアないぞ。俺達は上下に敵を控へてるんだ。鬪ふより外に道はない。

（德助出てくる）

德助　困つた時世になつたなア。地所を返されたら、どうするだ。

貫一　どんな算段をしても自作するつもりです。ぐづ／＼しちアゐられない。町へ行つて辯護士に相談して來よう。愈々となれば、財産の差押だ。（急いで出かけて行く）

――幕――

## 第二幕

組合長の六助の家。下手は往來、その向うは六月の麥畑。早朝。朝飯が濟んで六助の妻おりんは臺所の方で、その片付けをしてゐる。六助は野良支度で緣側に腰を下ろし長男の周造と喧嘩口調で話してゐる。

六助　手前、何故野良へ出んだ。毎日々々遊び歩きやがつて、世間の手前もあらア。

周造　そんだから言つてるぢアねえか。東京へやつてくれよ。俺のいふ通り皇宮警手にしてくれろば文句は言はなア。

六助　生意氣をコイて、手前達に、そんなものになれるか。第一、手前は、此家の後取りぢやねえか。百姓の後取が百姓をしねえで何をするだ。

周造　俺ア百姓にや不向だ。皇宮警手たつて試驗せえ受かれば誰だつてなれらア。

六助　その試驗が手前達に受かるもんか。

周造　勉強せえすれば受かるとッて。俺アこれでも近衞の一等卒だ。肥へた馬へ乘つて、赤い旗の付いた槍を持つて、警護して行くのは氣持がいゝなア。俺ア去年のまゝ、軍隊にゐるだつた。

六助　馬鹿野郎。近衞の一等卒だつて錢がなくちや、何にもならんぞ。錢を溜める勘辨しろ。錢せえ溜めるなら、何にでもしてくれらア。

周造　二口目にや錢か。俺ア錢なんか慾しかアねえ。皇宮警手になれば豪いだぞ。銀筋の付いた帽子を被つて、宮城へ入れるんだ。試驗受けえ行くたから、錢をくれよ。

六助　一文も出來ん。

周造　くれん。よし、覺えてろ。くれんなら、くれんで、此方にも覺悟があらア。此家の財産は皆な俺のもんだぞ。

六助　業を喰らへ。手前見てえの奴に、鐚一文だつて讓つちやくれんぞ。

周造　俺に讓らねえ、誰にくれるだ。留助か。あいつだつ

て、百姓は嫌ぢアねえか。生意氣に洋服なんぞ着込みやがつて、運轉手が聞いて呆れらア。華族の運轉手なら、まだいゝが、田舍の乘合ぢアなア。土臭え奴が惚れるらよ。へへ。

六助　餓鬼はみんな仇た。何奴もこいつも、親不孝するより外に能はねえ。五十年丹精して、少しア息が吐けるやうになつたと思へば、此始末だ。おもんの奴はまだ起きねえのか。やい、起きアがれ。おりん、引摺り起して來う。

おりん　あれも此頃、身體が惡いやうだから、あんまり非道くしんがいゝだ。碌々飯も喰はんやうだから。

六助　手前が、さう言つて、甘く育てやがるから、餓鬼どもが増長こいて仕方がねえ。ヤイおもん、起きろ。身體が惡いにや、朝寢坊しちやいかなア。（納戸へ入つて行く）

おりん　無理はしんがいゝよ。

六助　さあ起きやがれ、ドウ畜生め。（引起してくる）

おもん　いやだよ。俺ア氣持が惡い。腹が痛え。何をそんな強情をするだ。

六助　増長コキアがつて、手前、昨夜晩く何處から歸つて來た。情夫(いろをとこ)のとけえでも行つてたか。私生兒(こども)なんぞ拵えやがつたら打殺すぞ。

おもん　何處へ行つたつて大きに世話た。

周造　二十七にもなるに、嫁にもやらずコキ使に使はれちア叶アなア。子供を何だと思つてるだ。馬や牛ぢやねえ、人間だぞ。

おもん　ふんとうだよ。家のお父(とつ)ツちやん見てえな強慾漢はねえわ。

六助　餓鬼どもが揃つて親に楯を突くだな。出て失せろ。手前達見てえの奴ら、一日も家に置けねア。さあ、行きやがれ。その代りにや、一文だつてくれんから、さう思へ。（打つ。喧嘩になる。母親止める）

おもん　一文もくれん。ウン、よく言つた。俺アなア、十の年から他家(よそ)へ奉公に出て、家(うち)イ錢を入れてるた。十六七時分からア、信州へ糸とりに行つて、毎年百圓からの金を入れとかア。一緒の娘達ア皆ンな、嫁に行つて、子供せえあるに、俺ア、この年になつても、嫁にもやつて貰へず、毎年糸とりだ。其間にや、野良へ使はれる。今に骨身が擦切れちまふわ。親ぢやねえ。鬼だ。俺ア、昨夜も寢てえて、姉(あね)さんが、川へ飛込んだわけが、心から分つた。俺も今に鐵道往生でもしてくれらア。さうしたら手前。嬉しいら。（泣出す）

周造　ヤイ鬼め、さア、金を出せ。金せえ出せば、こんな家は、いつでも出て行かア。

おりん　喧嘩は、よしとくれよ。世間へ聞えても、見ッともねえぢやねえか。お父ッちやん。周造、お前も、えゝ加減にしんか。おもん、身體が惡いにア、寢てえねえ毒だ。さア、此方イ來う。（娘を納戸へ引いて行く）

六助　餓鬼ッちうもんは、親アいぢめる外に能はねえだ。俺アこれでも來年は村會議員になるつもりでゐるに、餓鬼どもは、寄つてたかつて、親を馬鹿にしやがる。

周造　立派な村會議員さんだ。ヘツヘツ。

六助　俺が朝から晩まで、セツセと働くなア、皆な手前達の爲めだぞ。親代々、小作つくりで、イヂめられて來た念彼返えしに、せめて五十俵でも、地主になつて、仇討をしてくれるつもりで働いてるだ。その親の心も知らねえで、茶屋遊びなんぞコキアがる。魂を入れけえやがれ、畜生め。

周造　ヘツ立派な地主さんだア。地主イヂメすりや、何時か又、その仇討がくらア。何にして貰ふより、俺ア、銀筋の皇宮警手の方が餘ッ程有難え。さア、錢をくれ、俺ア東京へ行つて、試驗の準備をするだ。

六助　くれん。鐚一文だつてくれん。

おりん　周造、お前も少しア、家のことを考へてくれ。留助は留助で町イ飛出して、偶に歸つて來るかと思へば金をネダリだ。お父ッちやん一人で野良稼ぢや、やつて行けんぢやねえか。この一月歸つてくるまで、軍隊で仕放題のことをしてゐながら、これぢや非道すぎるよ。

周造　お母アまで、そんなことを言ふのか。勝手にしやがれ。（プイと家を出て行く）

六助　ヤイ、何處へ行く。

周造　何處へ行かうと、大きにお世話だ。

おりん　周造。（麥畑の向うに消えて行く）

六助　ドウ畜生め。此度歸つてきやがつても、家イは寄せんぞ。（間。六助草鞋をはき野良へ行く支度をする。政吉他の二三人の小作人と入つてくる）

政吉　飛んでもねえことになつたぞ、六助さん。

六助　何だ。

政吉　愈、土屋の方から喧嘩を賣つて來やがつた。出し拔けに麥を差押へやがつたゞ。

六助　何だ、麥を差押へたと。

政吉　ウン、今、不意に執達吏が來やがつて、家の家財道具へ封印しやがつてな、一方ぢや田の麥を差押へやがつた。俺ア力づくで、爭つて見たが及ばねえ。今大勢で刈つてやがるだ。俺アロ惜しくて仕方がねえ。どうしたらいいらなア。

六助　愈々やり出しやがつたか。あの野郎、狂氣を起しやがつたな。そんぢや此田へもやつてくるな。困つたこと

になつた。邪魔して刈らせねえやうにする外アねえ。

政吉　組合の者が加勢してくれんでたア。頼にならえ奴らだアねえか。

六助　お上が怖えだ。巡査來たか。

小作人の甲　俺アロ惜しいから政吉ちやんと二人で、先方の奴ら擲つてくれた。すると先方だア、駐在を迎えに行きやがつた。

小作人の乙　土屋の野郎は、全く氣違野郎だぞ。何をしやがるか知れねえだ。

六助　グヅ〳〵しちアゐられんぞ。皆な手をかしてくれ。此方イ廻つて來んうちに、麥を刈ッちまふだ。（鎌を取つて下手の麥田へ行き刈始める。土屋貫一、雇人三四人を引連れて田へやつてくる。後から執達吏）

貫一　オイ、オイ、麥は差押へてあるんだぞ。刈つたのは皆な、其處へ置いて行け。

六助　馬鹿アこけ。（麥束を田から家へ擔入れようとする。貫一の雇人それを奪ふ。雙方の間に喧嘩が起る）野郎、それを返せ。畜生、泥棒。

政吉　此方イよこしアがれ。（麥束を奪返す。小作人の仲間段々殖える）

小作人等　ワア、それ、遣付けろ。一本だつて麥を渡すな。皆な取返せ。（亂鬪。貫一の方が敗けて退く。執達吏出る）

執達吏　官吏に抵抗すると許さんぞ。さア、この身體へ傷一つでも付けて見ろ。貴様ら牢へ打込んでくれるぞ。

小作人等　何をホザく。監獄位え、怖かアねえぞ。やつちめえ、やつちめえ。（石が飛ぶ）

貫一　やい、亂暴するな、抵抗するな。巡査を呼べ。擲るなら、俺を擲れ。さあ、俺は何にもせんから、憎いなら、勝手に擲れ。お前ら泥棒より非道い奴らだ。俺を殺したかア、立派に殺して見ろ。

小作人等　ヤイ鬼め、地主の鬼め、やつちめえ。ソレ、やッつけろ。ワア（貫一の動かない樣子に、流石に手を出し兼ねて、石を雨のやうに投げる）ヤア駐在だ。お廻りがきたぞ。（小作人らが逃げて行く。執達吏と貫一は石に打たれ顏に血が滲んでゐる）

貫一　樣を見やがれ。弱蟲めら。オイ、早く麥を刈つちめえ。

巡査　血が出てゐるが――

貫一　何に、大したことはありません。

巡査　奴等の顏は分つてゐるから、後で直ぐ捕縛します。

執達吏　ドシ〳〵、麥を刈取つてしまへ。（巡査に）君、御苦勞でも、今暫らく此處にゐてくれたまへ。（巡査うなづく。雇人ら麥を刈る。此間に周造家へ歸つて來て、金品を持出し逃げて行く）

――幕――

# 第三幕

## 第一場

村の寺のある高臺。舞臺は寺から續いた葡萄畠。寺は見えない。下手へ傾斜して細い道が上下と正面奥の方へ通じてゐる。七月の盆。月明。葡萄棚には涼しい風が渡つてゐる。幕の明いた時、遠く寺の方で男女の盆踊の唄聲、手拍子など聞える。その唄。

〽お月ちよいと出て山の端を照す
　娘繻子の帶　腰ヲ照らす　ドツコイシヨ

一人の女、燈籠をもつて下手から上手へ通りすぎる。間。政吉悄然と奥の方から出て下手へ通過ぎようとする。六助に行遇ふ。

六助　政吉ちやんぢアねえか。（政吉知らん顏をして行かうとする）オイ、政吉ちやん。

政吉　お前さん、俺なんぞに用はねえ筈だ。

六助　お前さん、何か怒つてゐるのか。

政吉　怒つてるかもねえもんだ。俺一人に臭い飯を喰はしアがつて、お前達ア、涼しい顏してらア、畜生め。俺ア、今日で十日拘留喰つたゞぞ。罪があるなら、お前らも罪がある筈だ。友達甲斐のねえにも程があらア。

六助　俺だつて警察へ引張られたゞ。そんでも俺ア何もしん。あの時石を打つたのはお前ぢアねえか。俺ア立派に申し開きが立つたから罪はねえだ。

政吉　手前、駐在に袖の下を使やアがツつら。それに違えねえ。組合の區長をしてる癖に仲間を助けんチウ法はねえだ。こんな組合なら、俺ア拔かつちまふ。俺アお前を恨む。一生恨まア。

六助　恨みたかア、何ぼでも恨むがいゝわ。俺の知つたこんぢアねえ。

政吉　俺アお前に煽てられて、こんな馬鹿見た。地所を上げると嚇かせば、乾度土屋の方で三割引くといふから其通りにしたゞ。今になつて考へて見ろば、地所は取上げられる、麥はなし、皆なお前に瞞されたゞ。どうして日を送るだ。組合の區長なら、その位の才覺はしてくれていゝぢアねえか。くれんちウなら、俺アお前の家へネジ込まア。

六助　何を冗談こくだ。他人の事ア俺ア知らなア。

政吉　ウヌ、よくこいた。（武者振り付く）

六助　此野郎――（組打ち。上になり下になる。六助敵し兼れて隙を見て上手へ逃げる。政吉石を拾ひ後を追ふ）

政吉　ヤイ、待ちアがれ、畜生、泥棒――（追かけて入る。
　間。盆踊の唄）

〽揃た揃たよ　踊子がそろふた
　稻の出穗よりや　まだ揃ふた　ドッコイショ

（間。男女の群三々伍々、上手から下手へ或は葡萄畠
の奥へ通りすぎる。）

男甲　愛ちやん、こツち、おいでよ。今夜はゆつくり話し
　ちア。
女甲　そんねえに堅く手を握るぢやねえよ。
男甲　そんだつて、握られたら嬉しいら。
女甲　知らんよ。（通りすぎる）
女乙　いゝ指環だねえ。金け、誰に貰つたの。
女丙　貰つたぢアねえ。自分で買つたゞよ。
女丁　光ちやんなぞ、いゝねえ。指環買つてくれる人があ
　るもの、ねえ。
女乙　全くだよ。光ちやん、誰に貰つたか、當てゝ見つか
　ねえ。
女丙　いゝよ、そんなこと。
男乙　大勢、揃つたなア、一山十錢か。
男丙　ワハハハ、別嬪の大安賣か。
女達　知らんよ。此人達は。人を馬鹿にしてるよ。
男乙　いゝ帶だね、金ちやん。（抱付く）
女丁　嫌だよ、此人は。（振拂ふ）
女丙　此人は金ちやんに惚れてるだよ。
女丁　人を馬鹿にして、知らんよ。（通りすぎる）
男乙　（歌ふ）

〽一夜なりとも打解けて合ふて
　踊りましよぞえ盆踊　ドッコイショ

（女と一緒に去る。）

周造　（眼鏡をかけて氣取つてゐる）東京へ行くと、いゝ
　女がゐるぜ。
女　そんだから、わしらのやうな田舍者は嫌えつら。
周造　僕は皇宮警手だ。銀筋の入つた帽子を被つて、宮城
　へ入るだ。宮内省の女官は綺麗だぜ。
女　試驗が受かつたの。
周造　二三日の中には通知が來る筈だ。さうしたら、東京
　住か。こんな田舍の土臭い所は眞平だ。いまに、金ちや
　んをも東京へ連れて行つてやらア。
女　ふんとうに。（寄添ふ）
周造　僕はこれでも、近衞の一等卒だからなア。（煙草を吹

かして氣取り、近衛になるにや、男振りがよくて、學問が出來んと、只ぢやなれんだ。

女　ふんとに色男だよ、此人は。

周造　さうさ、色男さ。田舎で終る人間ぢやないんだ。

女　東京はいゝとこだらうねえ。

周造　直ぐ見せてやるよ。あつち行かう。（二人奥へ入る。間。貫一上手から、繪具箱を肩にした定次下手から出て行遇ふ）

定次　兄さんぢやア、ありませんか。

貫一　定次か。歸つて來たのか。

定次　ええ。田舎の盆が戀しくなりましてね。兄さん、そんな風をして、何處へ行くのです。

貫一　田の水見に行くとこだ。

定次　働きますねえ。田舎は矢張いゝなア。停車場から、テクツて來たら少し疲れた。（腰を下ろす）あゝ涼しい、蒟蒻が大きくなつたな。

貫一　お前は何時も、呑氣なことを言つてるなア。羨しい奴だ。

定次　僕が羨ましいですか。ハハ、どうして、畫家も此頃は食ふに追はれますよ。

貫一　でもお前は、さうして一人身で、何でも自分勝手に出來るが、俺を見ろ。小作人にやイヂめられる、借金は殖える、實にヤリ切れない。

定次　時の流行物でね、仕方がありませんさ。併し、さうして兄さんが飽迄、田舎に頑張つてゐるには感心しますよ。僕なんぞには一日も我慢出來ん。

貫一　俺だつて意地づくで、かうしてゐるのだ。この田舎には、心から飽き飽くせえしてゐるんだ。だが、戰はなくては生きて行けないからな。

定次　僕なら、ドシ／＼土地を賣つて東京へでも、何處へでも、行つてしまひますね。此の短かい人生を、下らぬ喧嘩なぞして送るのは馬鹿々々しいぢアありませんか。

貫一　さう言へば、さうだが、人間には執着もあり、意地もあり、まして、こゝは俺の故鄕だからなア。

定次　ハハ、、、兄さんも、何時の間には鄕土主義者になりましたね。田舎へ歸ると、矢張り、かうなるものかなア。

貫一　俺は、あの大地震の時、東京にゐて、ツク／＼さう思つたんだ。人間は皆な土を持たねばいけないつて。燒後の東京から、汽車で田舎へ歸つた時、豐かに實つた稻田を見たら、俺は何だか胸が一杯になつて熱い涙が出て來たんだ。これこそ、俺の故鄕だ。俺の生きてる處だ！と心の中で叫んだものだ。それが、歸つて住んで見れば、何といふ情ない有様だ。地主と小作人は仇同士だ。階級

盆踊も此處まで來れば徹底してゐる。敵を打たなければ此方が殺られてしまふのだ。

定次　十年前は、こんなぢアなかつたですなア。あの頃は、僕も白地の浴衣を着て、村の娘達と一緒に盆踊をやつたものだつた。

貫一　うん、あの頃はなア。この十年に世の中は隨分變つたなア。（二人シミぐとなる。間）

定次　時代思潮ですねえ。併し兎に角、變つて行くのは面白い。ハハハ、僕は、あの頃、戀をしたものだつた。ハハ。

貫一　お前も、そんなことがあつたか。

定次　何しろ、物懷かしい夏ではあり、若い心は何か夢見るものがなくてはゐられなかつたのですからなア。兄さん、僕がラヴした娘を知つてますか。ハハ。

貫一　知らんよ。お前に遇つちア堪らないなア。

定次　今だから白狀しますがね。アレですよ。そら六助さんとこの春ちやんです。

貫一　春――六助の？

定次　丁度、僕と同じ年で、小學校も一緒だつたでせう。何處か痺弱なところのある可愛いゝ娘でしたよ。丁度こんな夏の夜だつた。二人はお寺から、歸りに一緒になりましてねえ。

貫一　もうよせ、そんな話。お前の呑氣にも困つちまふ。

定次　まあ、聞いて下さい。懺悔話ですから。それに今夜は、お盆でせう。僕の罪滅しです。

貫一　あの娘は三四年前、河へ飛んで死んだぢやないか。お前が惡いことでもしたのか。

定次　別段惡いといふわけでもないが、兎に角、少しは罪がありますね。僕もまさか死になぞすまいと思つたんだが、肺病だつたさうだアありませんか。

貫一　そんな話だつた。家でも、役に立たんといふので、隨分虐待したさうだが、それやこれやで、悲觀したんだらう。

定次　少し僕も過りました。東京へ行くと、何時か春ちやんを忘れてしまつたのです。娘の方ぢや、僕のことを思つてゐたと見えますねえ。

貫一　そんな話は、もうよせ。人に聞かれるといかん。

定次　大丈夫ですよ。僕が惡氣があつて弄んだんでも、何でもないんだから。

貫一　それでも、世間では何といふか分らん。俺は田の水を見てくるからな。お前先へ歸つて、お父さんを喜ばしてくれ。此頃、お父さんも大變滯しさうだ。

定次　年の故でせうねえ。それぢや、お先。（繪具箱を擔いて立上る）春ちやんの、お墓參りでもして行くかな。

（口笛を吹きながら去る。）

貫一　幾つになつても呑氣な奴だ。（下手へ去る。葡萄畠の中から六助出る。今の話を聞いてゐたらしく、恨しさうな樣子で定次の行つた方を睨む。何か口の中で呟いてゐたが、決心したやうな樣子で奧へ入る。踊の唄聲）

〽首をかしげた稻穗に聞けば
　小作爭議は　よしてくれ　ドッコイショ

——幕——

## 第二場

六助の家。數日後の早朝。前に麥田であつた下手は稻田に變つてゐる。六助椽先で村の老人と話してゐる。

村人　えれえ事をやつたもんさなア。土屋の田へ苛性加里とか石油とかア流込んださうぢやねえか。

六助　（他處事のやうに）さうかえ。

村人　いづれ、二三日前の夜の仕事つらといふが、誰の爲業かなア。

六助　誰がやつたもんかなア。

村人　ひでえ事をしたもんだ。いづれ恨のある奴の爲業にや相違ねえか、土田の稻田は赤土見てえに、一本殘らず枯れチまつた。そんでも、よく此處の田は何ともねえなア。（下手の稻を見る）

六助　さう皆な、流し切れめえよ。

村人　刑事が張込んで探つてるさうだがなア。何でも目當は付いてるさうだ。

六助　（驚いたやうに）誰だか、お前さん知つてるかね。

村人　俺ア知らねえが、お上ぢやア目星を付けてるさうだ。一日二日のうちにや犯人を上げると駐在が言つてたさうだ。村も人氣が惡くなつたさなア。

六助　うゝん。

村人　土屋でも、えらい損害だ。五十俵地近く、稻をやられちア、大ッけえわ。喧嘩しちアお互に損だ。山田ぢや、皆な引拂つて東京へ行くさうだ。考へて見りや、今の有樣ぢア、地主も、やり切れめえよ。

六助　今迄、勝手のことをして來たからなア。

村人　どれ、行つて、畦の草でも刈つて來ざア。おもんさんの病氣はどうだね。

六助　（避けるやうに）なアに、何でもねえ。

村人　まア、お稼ぎねえ。（去る。六助何か考へてゐる。妻のおりん傍へ來る）

おりん　お前さん。

六助　（慳貪に）何だ。

おりん　さう邪慳に、言はでも、いゝぢアねえか。俺アおもんのことを相談してえだ。

六助　俺ア知らなア。

おりん　知らなアとッて、自分の娘ぢアねえか。あんな身體になつて見ろば、何とかしなくちア、世間へも恥かしいぢアねえか。

六助　勝手に男を拵えて孕みやがつたゞ。男に始末させやがれ。俺の知つたこんぢアねえ。

おりん　そんたつて、親の身になつて見ろば、何とか型をつけねえなるめえ。父無子を產ましちア、可哀さうぢアねえか。

六助　製糸で見番とでも、私通きアがつたに違げえねえ。

（おもん臺所へ水を飲みに出てくる）やい、おもん、此處へ來やがれ。何處の野郎と、私通きアがつた。

おもん　誰と何しようと、大きにお世話だ。

六助　なに。

おもん　親が親らしく、してくれねえ、誰が言ふことを聞くもんか。俺ア子供を產んだつて恥かしいたア思はなア。立派に約束がしてあらア。產んだ曉にや、男と一緒に此處を出て行くばかりだ。

六助　その男の名を明かせ、太え阿魔だ。

おもん　どつちが、太えか、世間に聞いて見ろ。廿七にもなるまで、嫁にもやらず、コキ使に、使やアがつて、着物一枚、着せちアくれんでねえか。そんな親が何處にある。日本中尋ねたつてゐなア。

おりん　おもん、喧嘩するぢアねえ。全くお父ッちやんが悪いだ。俺ア始終、さう言つてるに、家が困ると、嫁の口をも拒絶てしまつたゞ。

六助　當り前だ。手前の產んだ餓鬼を見ろ。一人たつて碌な奴はねえわ。周造も留助も、百姓を嫌やアがつて、家の役にや立たんぢアねえか。俺一人で、どうして、やつて行くだ、この貧乏世帶を。

おりん　お前さんが、餘り非道くするから、周造達が言ふことを聞かんだ。

六助　何をこくだ。手前が、あんまり、甘く育てやがつたからだ。（周造何處からか歸つて來る）野郎、昨夜、何處を、ウロ付き歩いてやがつた。家イは寄せんぞ。

周造　俺の家イ俺が歸るに、寄せんも糞もあるか。

六助　試驗に落第、こきアがつて、この恥晒し。

周造　手前が、錢を惜んで、勉強させてくれんからだ。お母ア、飯をくれ。

六助　飯なんぞ、くれん。

周造　くれんたア、何だ。

六助　人間なら、考へて見ろ。胴畜生め。

周造　親爺も少しア考へて見ろがいゝわ。子供は親の奴隷ぢアねえぞ。お前だつて、地主イジメをやつてるぢやねえか。世の中は廻り持だ。顧のクブシよ。あゝ、腹が減つた。（大の字に寝る）俺ア、少し法律を勉強して巡査の試験を受けるんだ。お母ア飯をくれんか。（母、飯の支度をする。巡査入つてくる。六助ハッとして思はず身を隠さうとする）

巡査　コラ、犯人はお前たらう。證據が上つたぞ。（捕へる）

六助　（抵抗しながら）何をする。

巡査　署へ來い。お前が、毒を流すところを見た者があるぞ。

六助　嘘をこけ。嘘た、嘘だ。誰が見た。

巡査　政吉が、知つてをる。サア、來い。

六助　行かん。行かん。（爭ふ）

巡査　抵抗するか。コラ。來いと言つたら、來い。

おりん　お旦那さん、お願でゴイす。どんな惡いことをしたか、知らんけど——（縋る）

巡査　うるさい。罪があるから、拘引するのだ。サア、來い。（引いて行く）

おりん　お旦那さん、お慈悲でゴイす。お父ッちやんがゐんと喰つて行けやせん。お旦那さん、どうか勘辨しておくんなつて。

巡査　エ、うるさい。言ふことがあるなら署へ來い。

周造　イ、、ざまだ。

おりん　お父ッちやん、お父ッちやん、お前何を惡いことしたゞ。これから先きどうして行くだ。お父ッちやん。（泣く）

周造　親父の畜生、ざまア見やがれ。あゝ腹がへッた。お母ア早く飯をくれんか。（又仰向に寢ろ）

——幕——

## 第三場

三月後の十月。貫一の葡萄畠。上手に土藏の一端。玉のやうな葡萄の房は美しく秋の日に輝いてゐる。定次三脚に腰かけ、草を取つてゐる父を描いてゐる。その向うに秋子と篤子、葡萄を摘んでゐる。

父　どうだ。もう仕上るか。

定次　直ぐです。

秋子　定さん、少しは動いてもいゝでせう、私達は。

定次　姉さん達は、背景(バック)ですから、構ひません。（間）篤子姉さん、手拭をとらないで下さい。

篤子　今ね、熱くつて汗が出たもんだから。（間。歌の聲聞える）

〽さあさ　摘もぞえ　葡萄の房を
葡萄　出秋にや　五千兩　シャンシャン
葡萄賣れば　財布も賣る
野邊にや　黃金の波が打つ　シャンシャン

貫一　（他處歸りの樣子で出てくる）　皆な、こつちにゐたのか。

秋子　お歸りなさい。

貫一　（繪を見て）　大分出來たな。お父さん、只今。

父　話はうまく、ついたかな。

貫一　どうも駄目です。僕は愈々決心しました。

定次　東京へ引上げますか。

貫一　さうするより外に仕方がない。

秋子　（嬉しさうに）　まあ、ぢや、愈東京へ、行けるんですねえ。

貫一　お前はさう言つて喜ぶが、俺は辛いんだ。實際殘念なんだ。言はゞ、敗けて逃げて行く態だからなア。

秋子　私はもう、こんな田舍には飽き、飽くせいしてゐます。女などウツカリ外へだつて出られやしない。この春こつち、家と小作人ぢや、仇同士ですもの。

定次　でも、兄さんは豪いよ。勇氣だけでも感心なものだ。併し詰らん爭さ、結局。

貫一　考へて見れば、全く無意義な事だ。こんなことをして、意地づくの喧嘩を續けて行つたら、終ひには矢張此方だ、參つてしまふ。精神的にも、物質的にも破產してしまふ。六助の奴も、半年位は出て來られまい。

定次　無智の悲哀ですなア。小作人も地主も覺醒すべき時だ。喧嘩して、どれだけ自分が幸福になるか、實に馬鹿馬鹿しいぢやありませんか。

父　それで、お前は、地所を皆な賣つてしまふつもりか。

貫一　さうするより外に仕方がないのです。地震の時から借金が嵩んで、もう一萬からになりました。去年は籾一粒入らず、今年は、あんなことで、稻を枯らしてしまひ、まるで收入の當がありません。グヅグヅしてゐれば二進も三進も出來なくなります。今、銀行で、話を極めて來ました。一部分は下田の伯父にでも引取つて貰ふつもりです。どうせ安値でせうが。

父　情ないことになつたなア。この葡萄畑も賣つてしまふのか。

貫一　それは、お父さんとの相談ですが――

父　これだけは、どうか、賣らずに置いてくれ。俺のやうの、年寄は、今更東京へ行く氣はしない。行つたところで、お前達の手足まとひになるだけだ。

貫一　だつて、お父さん一人、此處へ置いては行けないぢ

やありませんか。

父　この葡萄畑さへ殘して行つてくれろば、俺は此處で暮らして行く。篤だつて、東京へ行つたつて、役に立つまい。

篤子　お父さんが、どうしても、田舍におゐでるといふなら、私もお傍にゐて、お世話します。

貫一　さうして貰へば都合はいゝが、お前だつて、未だ若い。一生後家で通しも出來まい。

篤子　私はもう、これが自分の運命だと諦めてゐます。それに、かつ子もあるんですもの、あの子を置いて、他家(よそ)へ嫁付くことは出來ません。

貫一　そりや、俺が預つて教育位してやるが――

篤子　私は何だか、あの子を手離したくないのです。あの子だつて父親がないのですから、せめて母親の愛位は充分味はせてやりたいと思ひます。お父さんの御丈夫の中は御一緒に居りませう。

父　さうしてくれるか。俺はお前と、この葡萄畑さへあれば、不自由なく暮らして行ける。淋しいとも思はない。六十年來丹精してきた葡萄畑だからなア。これを離すのは子に別れると同じだよ。

貫一　お父さんが、さう仰有るなら、これだけは殘して置きませう。

定次　父さん、思切りませんか。人間の生活は何處へ行つても變りないですよ。こんな敵地のやうな土地に一人殘つて、どうするつもりです。

秋子　ほんとに、お父さんを置いて、私達ばかり東京へ行くのは、世間へつけてもねえ。

父　世間體なんぞ、どうでもいゝ。俺の心さへ滿足してゐれば、それでいゝだ。此土地も此家も、幾百年來住み馴らした先祖の土地だ。土にも家にも、心といふものがある。俺はそれを知つてゐるのだ。朝、畑へ出ると、土は懷しさうに、俺に話かける。長い間、御先祖さんと話し合うた土だ。その中には御先祖の足跡もあり、手の跡もある。汗や血も交つてゐる。家だつてさうだ。あの燻んだ太黒柱を撫ぜる度に、ツクヾヽと家を立てた御先祖のことを思出す。幾代も幾代も俺達を、雨風からカバつてくれた難有い家だ。木ツ端と思つちア濟まん。

貫一　そりやお父さんの言ふ通り、俺(わし)も此家と土とを愛します。故郷といふものを懷しく思ひます。東京で暮らしてゐる内、度々思ひました。蛙の聲や水の音が、どんなに私を故郷へ呼んだか知れません。懷かしい土の香や、葡萄畑の樂しさが、埃に疲れた私を引き付けました。都會生活の慌しさを見るにつけ、人間は歸るべき土を持たねばならんと考へたのです。併し、これが運命とでもい

ふのでせう。時代に生れ合はせた者の不幸です。すがすがしい風の音にも、太陽の光にも別れて又、あの息苦しい都へ行かねばならないのです。實に涙がこぼれます。

定次　併し兄さん、今の人間は、心にも土にも、故郷といふものを持つてやしません。若い者は爭つて都會へ走る。年寄だけが田舍を守つてゐるのです。實に逆ですねえ。都會は年々膨脹する。田舍は反對に淋びれて行く。近代文明の作つた最大の罪惡です。白耳義の詩人が歌つてますよ。「田園はうら淋びれたり、自ら守るなし。田園はうら淋びれたり、都市みなこれを喰らふ」つてね。

貫一　全く其通りだ。かうして生れ故郷の地所を賣つて、住みたくもない都へ行かねばならぬ者は俺達ばかりではない。大資本家と小作人との間に板挾みになつた小地主は、みんなかうなる運命を負はされてゐるのだ。

定次　一體、今のやうな時代が又とあるでせうか。人間同志更に理解なく、同情もなく、只、口先きだけで立派なことを言ひ合つてゐる。まあ、都會にゐる人間を御覽なさい。個性といふものも、自己といふものも、まるで無いぢアありませんか。浮草のやうに其日々々を送つて、不安極まる生活をしてゐるのです。田舍者は田舍者で、矢鱈に都會文明を謳歌し、その眞似をしようとする。何處へ行つたつて、ほんとの自分といふものを持つた人間はゐやしません。猿眞似でオッチョコチョイで、神經質で、口先きばかり新社會や、新道德を唱へても、心の中では眞の革命を恐れてゐる。資本家は金錢の夢に醉ひ、中産階級は生命のない傳統に執着し、無産階級は暴力の破壞を讃美する。過渡期とばかり言つてゐられるでせうか。第一、僕等はどうしたらいゝのです。善人や正直な者は生きては行かれません。世界人（コスモポリタン）になるか、山の中へ隠れるか。それも出來なければ死ぬより外はないです。あゝ、大正十年代の日本！　唾棄すべき日本！

貫一　さう思へば、飽迄生れた土に執着するお父さんは豪いなア。人間は何でもいゝから、心から愛すものを持たなくてはならん。併し俺達は、一體、何を愛したらいゝのだ。(間)

父　人間を愛す外、仕方がないのだ。土を愛す外、仕方がないのだ。お前達は新らしい學問をして、廣い世界を知つてをらう。併し俺は田舍者だ。土に生れて、土に死ぬ外、何も知らん。だがな、こんな土でも、愛せば愛す程、深いことを教へてくれるものだぞ。この美しい葡萄の房を見るがいゝ。これも土と葡萄とが、愛し合うて初めて實るのだ。葡萄と土と、どんなに深く愛し合うてゐるか、お前達にも分るだらう。芳しい春の花も、土と木と惜み合うたら咲きはせぬ。愛し合はなくては駄目だ。なア。

篤子　ほんとにお父さんの仰有る通りですわ。

父　しつとり濕つた黒土に鍬を入れる度毎に、俺は御先祖の身體へ觸るやうな氣がして難有くなる。祖先の土だなア！　地所は賣つても、此の葡萄畑と家だけは殘して行つてくれよ。今の亂脈も十年、十五年とは續くまい。其内には、何時か平和の時も來よう。お前達が、又故郷の土を懷かしく思ふ時も來よう。其時の來るまで、俺は殘つて、この葡萄畑も耕してをらう。なんぼ亂暴な小作人でも、手向もせぬ、この年寄を、打たうとはすまい。安心して東京へ行つて一旗あげて來い。なア貫一。

貫一　（ホロリ涙を落し）　お父さん、今のお父さんの言葉は決して忘れません。難有いそのお心を無にしないやうに、きつと成功して歸つて來ます。

父　さう決心したら、それでいゝ。俺は篤と二人で殘つてをる。また十年位、丈夫で働らくつもりだ。秋、お茶の支度でもせぬか。秋の夕暮はいゝなア。（子供の歌ふ聲）

　夕空はれて　秋風吹く
　月かげ落ちて　鈴蟲なく
　思へば遠し　故郷の空
　あゝわが父母　いかにおはす。

秋子　子供達が歸つて來たやうですねえ。それでは、お茶にしませうか。お篤さん、何かお茶受を拵らへて下さいませんか。

篤子　ハイ。（二人葡萄を入れた籠を持つて家の方へ行く。蟲の聲、風の音、子供の歌ふこゑ）

　すみ行く水に　秋萩たれ
　玉なす露は　芒にみつ
　思へば遠し　故郷の野邊
　あゝ　わが　はらから　いかにおはす。

——靜かに　幕——

# 敍事詩劇 サラセンの王宮（四幕六場）

人物

ワリード　アラビヤ（サラセン）國王
ワサ　王子（王の甥）
ムサ　王兄（ワサの父）
ファチマ　王妃
ラーマン　宰相
カアシム　印度總督
アリ　王子の老僕
ブルムーラ　印度王女
ララ　同
其他。宦官、武士、牢番、舞妓、侍女等

場所

アラビヤの首府ダマスクの宮殿

時代

西紀　七一五年

## 第一幕

### 第一場

ダマスク宮殿の廣間。舞臺の上手寄に王座、其上には天蓋が垂れる。王座と向合つて下手に王子ワサの座。後方はサラセン式の廊で柱列の間から美しい庭園が見える。入口は其廊の中央と下手、王子の座近くにある。時は春の宵、生温い風が廣間の隅に垂れた帳をゆすつて芳しい花の香を送る。廣間の中央には大きな紫水晶の燈架を釣り其中には香油を燃やす。燈架からは美しい金銀の綱を張つてそれには種々の花が掛けてある。床には美しい綸模樣のダマスク絨氈が敷いてある。王座に近い大香爐には盛に沒藥が燻つてゐる。國王ワリードは五十位、酒太りの糜爛した肉體、怪しく黑光りのする眼。並んで坐した妃ファチマは三十に近く意地惡るさうな目付をした女。王子のワサは二十位、聰明で瞑想的な貴公子。隣に控へた老僕のアリは六十に餘る律儀者。其他には宰相のラーマンと印度から呼寄せられたカアシム、黑い顏をした宦官など。幕の上つた時眞紅の衣をきた三人の舞妓と眞青な衣をきた二人の舞妓とが侍女等の彈く琵琶に合せて燗の舞を舞つてゐ

ろ。侍女等は弾きながら歌ふ。

　火がもえる
　蛇の舌から女の胸から
　青い火赤い火
　思の火
　誰を燒く
　仇し男を
　仇し女子を
　戀のむくろを

（時々間の手に太鼓を打込む。）

（踊と歌と殆んど同時にやむ。ワリド王は手にした酒盃を置いて。）

王　うむ面白い。仇し男を燒くか――ハハ……（頸飾の寶玉をとつて）當座の褒美だ。とつておけ。

舞妓の一　（進んで受取り）誠に難有う御座います。

王　（好色の目付きで其顔を見）お前は美しいなハハ（妃を顧みて）お前も何か褒美をやらんか。

妃　（少し嫉妬の起つた樣子で）あれしきの踊に何の褒美が入りませう。その褒美でも勿體ないほどです。

王　お前には踊か分らんと見える。妃になる前はお前も踊を踊つて予の氣に入つたものだが。こりや舞妓共退がらずともよい、（盃をとつて）美しい女子を見るのはよい氣持だ。ことに處女であれば猶更のことだ。女がいつも若く美しかつたら神樣は入らぬ。わしはその女を神と思うて仕へてゆく。

妃　あなたは馬鹿らしいことばかり仰有います。少しはお愼みなされたがよう御座います。

王　氣に逆らつたかな。ハハ……（王子ワサの方に向いて）こりやワサ、今夜の酒宴はお前のために開いたものだ。樂しくすごしてくれ。久しく此處を離れてゐて歸つてきても故郷のやうの氣もすまい。お前が此城を出てもう何年になるな。

王子　十年近くなりませう。

王　早いものだな。お前達にもいかい苦勞をかけた。予は國を奪はうと思うてしたことではない。あのまゝにして置けば兄上はどのやうのことを爲さるか知れぬ。お妃に亡くなられてから兄上は氣が狂るはせられ、あのまゝにして置いたら折角四海に雄飛した此アラビヤが滅びたかも知れない。それで家來どもとも相談して罪深いことではあるが、兄上を位から下し予が代つて王位に上つたのだ。悪く思うてくれるな。わしは皆んなアラビヤのため

を思うてしたのだ。ワサ、予はお前の叔父だ。お前に害を加へようなどとは夢にも思はぬ。此年になつてもわしには子がない。お前の所在を尋ねて呼寄せたのも予の跡を繼がせたい心からだ。お前は兄上の忘形見、これからは予の子になつてアラビヤ國の王位をついでくれ。決して思違をしてくれるな。

王子　叔父上のお心は難有く存じて居ります。あの時は年もゆかず、何やら、たゞ恐ろしいことに思つて爺と一緒に抜出したので御座います。これからは決して心得違はいたしません。

老僕　王子様をお連出し申したのは皆なこの爺が仕業で御座ります。王様お許しくださりまし。あの折はたゞもう御謀反のこととばかり合點して、このまゝにしてゐたら王子様の御身も危なからうと前後の思慮もなくこのお城を抜出し、一先づバグダードの知邊に身をかくし、それから此處に一年彼處に一年と彷徨の年月を送りました。

王　いかい苦勞をかけたな。予あ近頃年の故か世嗣のことが氣にかかつてゐる矢先、メッカの巡禮から歸つてきた僧の口からお前達のことを聞き、早速人を遣はして呼戻したのだ。これも神樣の御手引だ。ワサ予を實の父と思うてくれ、わしはお前を實の子と思うてゐる。ワサお前は涙ぐんでゐるな。

王子　何もかも夢のやうで御座います。長い間の漂浪やら今の身の上を考へると、人間の運命といふものが不思議でなりません。それで何やら涙ぐまれるので御座います。

王　さうでもあらう。併し人間は運命の開拓者にもなれる。わしなどはさうだ。運命は意地の悪い荒馬のやうなものだ。乘手次第で言ふことも聞くし振落しもする。併し高が馬だ。御せぬといふ筈はない。お前に長いことメッカにゐたか。

王子　二年あまり居りました。あすこは靜な神の國です。砂漠に立つて星の光を眺めながら人生を思ふと、神の力の偉大さ、自然の不思議さに心戰いて、私は砂漠の土に身を投げ、たゞ泣いて見たう御座いました。

王　お前は優雅い心をもつてゐるな。併し人間は神樣ばかり讃仰てはゐられない。神樣は空氣を清める香油や香料と同じだ。心の曇つた時信心すると邪念がとれて心が澄む。其外には餘り效能はないものだ。

王子　でも叔父上、一度はメッカへ御參詣なさるがよう御座います。そして椰子の木影に美しい夕星のかげを眺めながら砂漠の夜を御覧なさるがよう御座います。

王　砂漠の景色も面白からう。併しわしは自然の景色や神參よりも人間界の快樂の方が好きだ　わしの貴ぶものは此世の權力、帝王の豪奢だ。その權力を神が上にも大き

くして思ふがまゝの快樂に耽つて見たい。酒もよい。女もよい。踊も歌もよい。快樂は權力の侍婢だ。權力のあるところ快樂は必ずついてくる。右の手に權力、左の手に快樂を握つて國王の座に坐つてこそ男と生れた甲斐がある。財寶の國と言はれた印度も去年から予の領地になつた。印度を征伐したのは其處にゐるカアシムだ。わしはカアシムに禮をこそ言はねばならぬ。カアシムは忠義者だ。お前が謀反を計るなどと、ハ、、、、信ぜられぬことだ。

カアシム　仰の通りで御座います。この私が何の不平があつて王様に御謀反などと思もつかぬことで御座います。私も假に御召喚の御命令をうけました折は一向に合點がまゐりませなんだが、察するに誰か私の功を妬む者があつて王様に讒言したものと見えます。

王　併しそのやうの風說を耳にしたからは一應實否を正さねばと思うて召寄せたのだ。もう疑も晴れた。わしの爲めに忠勤を勵んでくれ。わしは正直の者が好きだ。正直は鍵のやうなものだ。融通はきかぬが、これさへあれば安心が出來る。今夜は目出度い祝の席だ。さあ改めて樂しく飮まう。

皆の者、わしとワサの爲めに祝盃を上げてくれ（盃なとる）こりや血のやうに赤いキプロスの酒をなみ〳〵とつげ。（侍女注ぐ）ワサお前の爲めに飮むぞ。皆も飮め。

一同（盃をあげて）國王萬歲、王子萬歲。（飮む）

妃　あなたは私のためにも盃をあげてくださるでせうね。

王　うん飮まう。皆、妃の爲めに盃をあげてくれ。（一同盃をとる）

妃　待つておくれ、私は血のやうな赤いお酒は嫌だ。私はあの黃金のやうなお酒が好きだ。カアシムの土產の黃ろいお酒が好きだ。（宰相に目配ばせする、宰相は侍女に其意を傳へる）

王　さうだ、予は忘れてゐた。こりや、カアシムの土產の酒をもて。何とやらいうたかなあの酒は。

カア　印度ではソーマと申して居ります。貴い五穀の精を搾つて作つた靈液だと申すことで御座います。

王　ソーマか。黃金の國といふ印度では酒までも黃ろいと見える。凡て物の美しさは色と匂にある。わしは酒をのぞいては香油と女が好きだ。この二つはわしの目と鼻を樂しませてくれる。イヤそればかりではない敬虔の心をさへ起させてくれる。もつと香を焚け、香油を燃やせ、（盃を取上げたが下に置き）イヤ〳〵黃ろい酒ならば同じ色の琥珀の盃で飮まう。あの盃は海の上の月のやうに透通る。もし酒に毒でもあると直ぐ色が曇る。私の御先

祖があの盃のために野蠻人のすゝめた毒酒の難を免れたことのある貴い盃だ。あの盃をもつてこい。それはさうと、プルムーラはもう來さうなものだ。

カア　（獨言のやうに）　プルムーラ――

王　お前が印度を從へた折わしの吩咐で送つてよこしたアロルの王女だ。これからわしの妾にしようと思ふ、イヤ妃にする心だ。印度の野邊にさくといふ雛芥子のやうの乙女、まだ此世の雨風にも遇うたことのない蕾の花だ。あゝ男を知らぬ女は貴い。

妃　あなたはプルムーラを妃になさるのですか。

王　妃にする。アラビヤの國王は教祖の定に從つて四人迄妃をもつことが出來る。プルムーラは生れたまゝの處女だ。予には男を知らぬ淸淨さが貴い。おゝプルムーラが來た。（プルムーラ美しく着飾つて後方の廊から入る、侍女一人その裳をもつ）プルムーラずつと近く寄れ、もう俘虜の身ではない。アラビヤ王の妃だ。此處へきて予に竝んで坐れ（プルムーラ王の隣に坐す、十六歳ばかり、豐艶な肉體に玉蟲と海老色の衣をつけ黑く大きな目をもつた印度の女）

王子　（プルムーラを熟視してゐたが思はず獨言）　よく似た女だ！

王　これプルムーラそのやうに俯向かず、もつと面を上げろ、花のやうな顏色もうつむいてゐては眺められん。

妃　（聲をとがらせ）　さあ皆私の萬歲を祝うておくれ。

王　おゝこれは忘れてゐた。（持つて來た琥珀の盃を取上げ）酒を注げ（侍女注ぐ）カアシム、お前の土產のこの酒は嘸よい味がするであらうな。（飮まうとしたが俄かにやめて盃を凝視し）うむ、此酒は濁つてゐるな――イヤさうではない、こりや琥珀の盃が變つた！（俄かに聲を荒らげ）毒を盛つたな。（一同驚ろく、妃と宰相が顏を見合せる。王は酒を注いだ侍女を睨んで）こりやそこな女子、お前は予に毒をもつたな。

侍女　（慄へながら）　王樣私は毒など盛つた覺えは御座いません。

王　默れ、盛つたに相違ない、それでなくてこの琥珀の盃が曇る筈がない。

侍女　私は一向に存せぬことで御座います。

王　きつと知らぬといふか。

侍女　ハイ、王樣。

王　誰か謀反人があると見える。お前の盃を見せろ（妃の盃をとつて見る）この酒はこのやうに澄んでゐる。毒を盛つたに相違ない。こりや女子、盛つた覺えがなくばこの酒を飮め。（盃を突出す）

侍女　王樣私は一向覺えは御座いません、お許しなされて

くださいまし。

王　エ、飲めといふたら飲め、不埒者め。こりや、あの女めにこれを飲ませろ。（侍士盃などとつて逡巡する）何をグヅ／＼する、王の命だ。口を開けて注込め。（侍士無理に侍女に飲ませる）

侍女　お慈悲で御座います。王様、アレお許しなされて——

——

妃　あなたは残酷(むご)いことをなさいます。許しておやりなさい。

宰相　恐れながら王様、そのソーマとやら申す酒はカアシム殿が印度から持參された品で御座います。誠忠なカアシム殿の獻上物で御座いますれば、其中に毒など含み居る筈もなからうかと存じます。

王　イヤさうでない。世の中は決して安心は出來ぬものだ。樂しい夫婦の床の中にも短劍が潜んでゐることがある。氣をつけねばならぬ。

宰相　成程左樣に承りますれば世の中は心の許されぬもので御座います。（王の氣を引くやうに）それについて思當らぬことがないのでも御座いません。

王　お前は何か心當でもあるのか？

宰相　と申すわけでも御座いませんが——（わざと氣を引くやうに）世の中は兎角間違の多いものの故事などいふものは餘り信ぜられぬものでは御座いますが——

王　お前は謎のやうのことをいふな。何か聞込んだことがあるなら正直にわしに言うてくれ。

宰相　御覽なされ王様、女めがソロ／＼苦しみ出しました。確かに毒を盛つた者があるに相違御座いません。ひよつとしたら手前の推量が——

王　お前はわしに何か隱してゐるな。知つてゐることがあるなら早く言うてくれ。

宰相　これは私が粗忽で御座いました。この胸の中に藏(しま)つて置くべきことを遂口に出して王様のお心をまでも亂しました。御免なされませ。併し王様、惡事は私が申上げずとも自然と現はれるもので御座います。誠忠た忠義たと言うて心は許されません。お妃様は何と御思召されます。（意味ありげに妃を見る）

妃　お前の言ふ通りだ。その酒はカアシムの獻上品、一應調べて御覽なさるがよう御座います。

王　（言葉を怒らせて）カアシム、お前の土産の此酒に毒があるとは何事だ！　罪は免れぬぞ。

カア　恐れながら王様、これには深い仔細のあることに相違御座いません。私に一向に存せぬことで御座います。

ブル　（苦しんでゐる侍女を見てゐたが、カアシムの言葉に氣がついて其顏を眺め、忽ち忿怒と怨恨の情に燃上り）

おゝ惡魔！

王　（驚いて振返り）プルムーラ、どうした？

プル　（それには答へず忿怒の血相すさまじく）惡魔！あの惡魔めが――（立上つて詰寄せさうな樣子、皆々驚く）

王　惡魔とは誰のことだ。

プル　（カアシムを指し）國を滅し、親達を殺し、そして私を、私を――（情が激して身體を慄はす）

王　どうした、プルムーラ。

妃　カアシムが何か惡いことをしたに相違ありません。

王　カアシムがお前をどうした？

プル　私の國は彼奴の爲に滅ぼされ、父上や母上は非業の最後をお遂げなされ、そればかりではない、あの惡魔めは私を捕へて――

カア　プルムーラ樣、いえ、アラビヤのお妃樣、私は――

王　（聲を怒らせ）お前は默つてゐろ。プルムーラハツキリ言へ。

プル　考へても恐ろしい。血に塗れた母上の屍の前で私を組敷いて、あのやうな恐ろしいことを――

王　なに、カアシムがお前を――

プル　辱しめました！（悲痛な涙を流す、王は猛然としてカアシムを睨み）

王　おゝ己れ！　あゝ今迄清淨の乙女と思うてゐたに――己が散々弄んだものをわしに勸めるとは憎んでも足らぬ奴！　謀反を企んだといふ噂も嘘ではあるまい。そして今の毒酒！　カアシムに繩をかけろ。

カア　王樣、もつての外のことで御座います、私が謀反なとど！

王　え默れ、ソーマの靈液たなどと詐つて予を毒害しようと計つたのは汝に違ない。あの苦みを見ろ、顏も紫色に變つて彈丸に當つた獸のやうに輾轉ちまはる樣を見ろ、己が罪の恐ろしいことが分らんか。ラーマン、謀反を計つた惡人とはカアシムに違ひあるまい。（毒酒を飮まされた侍女は斷末覺の苦悶）

宰相　誠に驚入つたことで御座います。

カア　王樣私が何のお恨みがあつて此樣な恐ろしい企をいたしませう。これには深い仔細のあることに相違御座いません。陰謀の原をたゞさねばお身の上が危なう御座います。私が謀反などと――

王　默れ、己が罪を棚に上げて人事らしく言ふ憎い奴、早く繩をかけろ、どのやうの惡事を働くか分らぬ奴だ。（武士カアシムを縛す）

カア　私は繩などかけられる覺はありません。王樣を毒害しようなどとけもないこと、誰か謀反を企む奴があつて

其罪を私に著せようとするので御座います。

王　また言ひくるめうとするか、（倒れた侍女を指し）その證據を見ろ。コーランをもつて來い。

カア　お慈悲で御座います王樣。

王　惡人に慈悲は入らぬ。入るものは死ばかりだ。

カア　王樣御賢察下さい、私は二十年の間劍戟の間を往來してたゞアラビヤの爲に、王樣のために身命を擲つて御奉公いたしました。去年印度の戰には此身にも數個處の傷を負ひ、（左の足を投出し傷跡を示して）この通り足に殘つた傷跡が戰の苦勞を語つて居ります。世の中には正しい目はないか。お情なう御座います王樣。

王　白々しい奴め、己が罪の恐ろしさが分らんか。予が今、裁いてくれる。

カア　お慈悲で御座います王樣——

王　（象牙の臺にのせたコーランを取上げ、恭しく額づいて祈を上げる、一同跪く）慈悲仁慈におはします神の御名を唱へまつる。讃ふべきかな御神、天地萬物の主、愛憐仁慈に厚く、永劫の世の裁斷の主、われら主にのみ御救濟を願ひまつる。われらを導きて邪路に踏迷ふことなからしめ給へ、彷徨の群に混じ戻天の徒と共に行くことなからしめ給へ。われらを正しき道に導きたまへ。

ラ、イラー、イル、アラー

モハメツト　レゾール　アラー

（最後の二句を一同聲を揃へて和す。王はコーランを開き刑罰の條を見ろ、聲を厳かにして。）

神の仰だ、カアシムの首を斬れ。（コーランを閉ぢる）

カア　無慈悲だ、天にも地にも神はないか。お恨み申します王樣。

王　自業自得と諦めもせず恨むとは太々しい奴め、それ早く首を刎ねろ。

宰相　御言葉にそむいては恐多う御座いますが、此處は王子樣御歸國の目出度い祝の席で御座います。斯樣な喜の席に血を流すも如何かと存じますれば、カアシムに私にお下げくだされたう御座います。

王　さうか、それならば引出して首を打て。あゝ折角の興もさめてしまつた。今一度席を改めて飲みなほすことにしよう。プルムーラ今夜は退れ。ファチマ奥へ行かう、舞妓も來い。（立上る）

妃　私は何やら心が晴々しました。さ參りませう。（王は皆を從へて下手から去る、宰相は武士と共にカアシムを引立てゝ侍女の屍を運ばせて廊から去る）

プル　あゝ仇がうてた、お父樣やお母樣の仇がうてた。早く行つてララを喜ばさう。（廊から去る。ワサは其後姿を見て考込んでゐる。老僕は氣遣しさうに傍によつて）

老僕　もし王子様、何を考へておゐでなさります。

王子　爺、私は恐ろしくなつた。あの靜かな沙漠の中から歸つて來て見れば此城の騷がしさ、恐ろしさ、様々な陰謀や暴逆や嫉妬や悲みやらが漲つて魔宮殿とも思はれる有様、今も今、ただ一杯の酒のために二人の人間が死んだ。何といふ恐ろしいことだらう。

老僕　併し王子様、かうして御歸城なされた上からは、さういふ諸々の惡事を除いて世を泰平にお治めなさるがあなた様のお役で御座ります。シッカリなさらねばいけません。

王子　（考込んで）罪惡の穢行つた宮殿の中に花のやうな乙女がゐる——爺お前は先へ行つてやすむがよい。私も後から行く。

老僕　左様で御座りますか、ならばお先へ御免蒙りまする。だがなあ王子様、必ずともにお氣を丈夫にお持ちなさりまし、物事は餘り深くお考へなさるものでは御座りません。これから此國はあなた様のもので御座ります。俺も長年の苦勞がやつと實を結んで、今夜のやうに嬉しいことは御座りません。（アサの肩に手をかけ孫にでも言ふやうに）なあ王子様、此上は爺が死ぬ迄にお妃様をお迎へなされて、玉のやうな和子様を此爺に抱かせてくださりまし。それがもう此爺が冥土への土產で御座ります。さう言へばあのメッカのお娘御のことはサラリとお忘れなさるがよろしう御座ります。長い間のお馴染ゆゑ無思慕に引かされもなさらうが、そこをよう諦めさつしやつてなあ——

王子　爺そのことはもう言つてくれるな。

老僕　これは爺が惡う御座りました。折角忘れてゐなされたものを餘計の口を叩いて申譯御座りません。年をとると愚痴が多くなつて入りもせぬ取越苦勞までいたします。御免なされまし。そんなら王子様、おやすみなされまし。（未だ心配さうに）必ずともにな——（去る、王子は廊の柱に凭れて）

王子　懷かしいメッカへはもう行けんか——それにしてもブルムーラとやらは、よくあの女に似てゐる。（考へ込む。奥て踊の歌、太鼓や琴の音）

—— 幕 ——

## 第二場

カアシムの縛がれてゐる牢。舞臺の上手に階段。それを下りて右へ折れると牢の入口。鐵の扉には鍵が下りてゐる。幕の上つた時牢番は階段の下に腰を下ろし、カアシムは縛されたまゝ牢の壁に凭れて首垂れてゐる。宰相を先きに布で顏を蓋つた妃が灯をとつて階段

を下りてくる。

宰相　（牢番に）これこれ扉をあけろ。（牢番は宰相と妃を見て驚きながら腰の鍵をとつて錠を開ける、宰相は妃に、入れとの意味で手眞似する、妃一寸内の様子を見、それから灯をとつて入る）お前は階段の入口で番をしてゐろ。お妃樣が手を叩いたらわしに知らせるのだぞ。（宰相は牢番を連れて階段を上り去る。カアシムは入つて來た妃を見て驚き立上らうとする、妃制して覆面をとる）

カア　おゝお妃樣――

妃　私はお前に話があつて來た。（壁に灯をかけ）此麼身になつてお前も嘸口惜しからう、私はよく察してゐるよ。

カア　お妃樣の前ながら王樣が恨めしう御座います。

妃　今更ながら非道な王樣、連添ふ私でさへも恐ろしいと思ふことが度々ある。あの癇癖な好色家――お前は嘸ぞ無念だらうね。

カア　餘りと言へば無道な爲されかたで御座います。お妃樣、あなたのお力でお助けくださいませんか、御恩報じは必ずいたします。

妃　（聲を蜜のやうにして）眞實私はお前が可哀さうでならない。お前の縛られたその姿を見ると淚が出る、私の身もいつかお前のやうになるのかも知れない。私はもう王樣に捨てられたのだ。（わざと落膽した樣子）

カア　と仰有るのは何故で御座います。

妃　捨てられたと同じことではないか。王樣はあの印度の女に心を移して私をば振向きもしない。お前たけは私の心を察してくれるだらう。兄の王樣を幽閉めて國を奪つた横道者、此儘にして置いたらお前のやうな忠義の者は皆な退けられ、惡人ばかり世にはびこり、長年盡したお前の赤誠も泡となつて印度も人手に渡つてしまはう。お前は殘念とは思はないかへ。

カア　無念とは思ふものの致方がありません。お妃樣、あなたのお力でどうぞ命の助かるやう、御前を取りなしては下さいませんか。

妃　今もいふ通り私はもう、あの人の寵愛を無くしたもの。願つた處で聞屆けては被下まい。命が惜しくばお前自身で助かるやうにするがよい。私も出來るだけのことはしてやらう。

カア　（悄氣て）と言つて今となつては、どうすることも出來ません。此繩目さへ解けたなら又方法もありませうけれど――

妃　と言ふと手足さへ自由になれば、それでよいといふのかへ。

カア　さうすれば私は此城を拔出して――

妃　拔出して？

カア　印度へ走り（急に心付いて口をつぐみ）イエ〳〵そんなことはしません。

妃　ホヽヽ隠さないでもよい。お前は印度へ走つて兵を集め此恨を報じようとするのだらう。あゝそれでこそ、ほんとにお前だ。私はお前に荷擔して一緒に私の恨を晴したい。だがよく考へて御覧、お前が印度へ行かぬうちに、あの人は乾度お前を捕まへるよ。そんな危險いことをするよりも復讐する心があるならば幾程も手近な道がある。（氣を引くやうに）明日とも言はず今でもある。お前どうだね。さうして見る氣はないかへ。だけれども、お前の心が確かでなくては、とても覺束ない。

カア　（段々網に引込まれ）さう仰有るのはどういふことで御座います。

妃　お前の心さへ確なら言うて聞かせてやる。ねえお前世の中で勝つのは善人ではないよ。あの人のことを思つても分る、今の榮華の身になつたのも兄の王様を幽閉めて位に卽いたからではないか。力量からいつたらお前の方があの飮んだくれの王様よりは、ずつと上だ。そのお前も時と場合で此樣な目に遇ふ――私はほんとうに氣の毒でならない。（眞から憐むやうに）縛られたその姿はねえ――

カア　世の中で強いものは力ではなくて地位です。私も自由に力が振へる位地が欲しかつた。

妃　お前の覺悟次第で位地はこれからでも得られるよ。お前ほどの男を犬死させるのは、ほんとに惜しい。誰も皆なさう言つてゐる。目的を貫く爲めには善惡を擇ぬのが男だ。カアシム私が來たのはその爲めだよ。確く決心して私の言ふことを聞いてくれるなら、其の繩を解いてやらぬでもない、命が助からぬといふでもない――（網が段々深くなる）

カア　命が助かると仰有るは――?

妃　お前は今手足が自由になれば印度へ走つて復讐の兵を擧げると言つたね。（駄目を押す）

カア　イエそれは――

妃　心配は入らぬ。此處は私達二人のことだ。其の覺悟のあるを見込んでこそ此麼相談もする。ねえカアシム、その覺悟があるならば印度まで行くには及ばない。今直ぐ此處でやつたらどうだ――

カア　此處で――?

妃　此處で。誰の手も借りずお前一人で――

カア　（無言で妃の顏を見て考へる）

妃　思ふ度に腹の立つはあの人の強欲と好色。お前も知つてゐる通り、元は私も侍女ではあつたが、かうして妃になつて見れば何時までも妃でゐたい。他の女に位地や寵

愛を奪はれる位なら、いつそ死ぬか、それともお前のやうに先方を殺すか――取る道はたゞ二つだ。女が大事に思ふものは榮華と愛。カアシムお前はよく私の心を察してくれるだらう。

カア　それで、私に王を殺せと仰有るのですか。

妃　私の爲めではない。お前の爲めだ。かう打明けたからは、私の言通りにするがよい。後の憂は少しもない。叔父とはいうてもお父樣の仇だもの、王子もあの人をば恨んでゐる。却つてお前のすることを喜ぶだらう。

カア　（無言て考へる）

妃　考へてゐる處を見れば不承知か、（嚇してかゝる）それならば又それでよい。（立上つて）私にも考へがある。お前が謀反することはよく分つてゐる――（行かうとする）

カア　お妃樣――（止める）

妃　だが考へても見るがよい。人の命と自分の命とどつちが貴い。今夜限りで首を切られるか、それとも私のいふ通りにするか。

どうせない命なら、恨を晴らすだけでも犬死するより増ではないか。（隱し持つた刀を出して）此刀を御覽。お前が生きるも死ぬもこれ一つできまるのだ。お前も野心のある男ではないか、潔くどつちとか返事をおし。

カア　（無言）

妃　あの廣い豐かた印度、お前が血を流して從へたあの國を人手に渡す氣か――カアシム、今のことは承知だらうね。

カア　あゝ命には代へられぬ！

妃　おゝそれでこそお前だ。それでお前の恨も晴らせる。（耳に口をよせ囁く）手筈は分つたらうね。（入口へ行つて手を叩く、宰相階段を下つてくる）カアシムを出しておやり。さあ、ラーマンと一緒に行くがよい。手筈を違へないやうに。（宰相カアシムを從へて去る。入違つて牢番登場）これこれ、そこらに誰もゐないだらうね。

牢番　はい、誰も居りませぬ。

妃　こゝへおいで、（牢の内へ引入れる）お前に頼みがあるが聞いてはくれまいか。

牢番　身に餘ることで御座います。私にかなふことなら何なりといたします。

妃　お前は忠義者だ。頼みといふは外でもない。（耳に囁く）

牢番　へえ――ブルムーラ樣を――

妃　生かして置いては爲めにならない。今夜のうちに首尾よくやればお金は澤山やる。

牢番　後のお咎は御座いませんか？

妃　何の咎があらう。お前に迷惑はかけない。お金をどつさりやるよ。

牢番　（嬉しさうに）へへお金をくださいますか。

妃　やるとも、（懐から金を出し）そら手附だ。

牢番　お情深いお妃樣、（金を數へながら貪慾な笑みを浮べ）お金、へへゝゝゝお金（頬擦する）一生御奉公しても此程のお金にはありつかぬものを――お慈悲深いお妃樣。お金へゝゝゝ。

妃　此刀で殺すがよい。（刀を出して與へ）今夜のうちだよ、よいか。

牢番　畏まりました。其代りどうぞ後の半分をな。

妃　やるとも、他言は無用だよ。

牢番　充分心得て居ります。ではこれから直ぐにやつつけませう。（牢番去る。妃は殘忍な笑を浮べて後を見ながら）

妃　思通りに行つた。ラーマンも好色家、今のうちに無き者にして置かぬと先きが案じられる。

（宰相のラーマンが階段を下つてくる、疑ひ深い目で四邊を見ながら妃に近づく）

宰相　今迄何をしておゐでです。

妃　お前は一刻でも私から目を離さないのだね。（少し腹立つた樣子）

宰相　油斷のならないお方ですから。

妃　それはお前のことだ。私はお前ほど氣が多くはない。

宰相　氣が多くなくてどうして私を手にお入れなすつた。ハ、、、、、それはさうとカアシムも甘々と謀に乘りましたね。

妃　毒酒には失敗したが此度は間違なからう。後で殺されるとも知らずに手先に使はるカアシムも可哀さうなものだ。

宰相　命の瀬戸際になると人間は白痴になる。アラビヤも印度も明日からは私とあなたのものです。世間の奴等は皆んな馬鹿なものだ。ハ、、、、、。

妃　でもあの王子は――

宰相　あんな青二才が――少しも心配は入りません。

（二人は話しながら階段を上る。）

――幕――

## 第二幕

プルムーラ姉妹の室。上手から少し斜に舞臺の中央まで突出す。前に廊が附いてそれを上つてよき處に入口がある。廊の下は庭で夾竹桃や檸檬の茂み。後方には睡蓮の池、其の向は糸杉の木立と黒い塔のかげ。同夜

のこと、月は朧に照してゐる。ブルムーラは妹のララと廊の柱の蔭で話してゐる。柱には鳥籠がかけてある。

ララ　姉様、カアシムはもう殺されたでせうか。

ブル　殺されたらうよ。これでやつと當の仇が打てた。今夜ほど嬉しいことはないよ。此上はあの國王を殺して思ふ存分國の恨を晴してやりたい。（ララを抱いて）ねえララ、姉様はきつと、さうして見せるよ。この身體と命を投出して乾度仇を打つて見せるよ。

ララ　（抱返して）さうなつたら、まあどんなに嬉しいでせうね。姉様きつと仇を打つてください。そして早く印度へ歸りませう。

ブル　歸らう。懐かしい故郷へ歸らうね。あそこにはお父様やお母様が埋つておゐでなさる。あの恐ろしい戰の後、二人は敵の目を盗んでお父様とお母様の亡骸を、お城の裏の菩提樹の森に埋めた。（妹の手を取つて）お前と私の纖弱い手で穴を掘り亡骸を埋めて土をかけた。（涙聲になる）あの折私は一緒に穴の中へ入つて死んでしまひたかつたよ。今頃はもうお二人とも土になつて掘返してもお姿は見えぬだらう。（二人は相抱いて泣く）殘つてゐるのは凝固つた怨恨を語る骨ばかり、あゝあのお恨は仇の血でなければ解けぬ。

ララ　姉様！（縋付く）

ブル　あゝ私に力があるならば仇の血潮を雨と降らせ瀧と流してお墓場の上に灑がうものを。私達二人は手をとつて血潮の雨に醉ひながら墓を廻つて踊狂ひ、倒れた仇の屍を踏みながら歡喜の歌を空までも響かさうものを――女と生れた腑甲斐なさに此麼に敵に捕はれて身の自由も奪はれては恨を晴すことも覺束ない。

ララ　姉様私は毎晩神様にお祈りしてゐます。早く仇のうてるやうに祈つてゐます。神様はきつとお助けくださいます。

ブル　國は亡び親達は死ぬ。廣い世界にお前と私とが吹流された小舟のやうに生殘つた。毎晩お前の小さな身體を抱いて寢る時、私は心の底から二人の運命の淋しさを思つては泣く。私達は高い崖の上から突落され、途中に生えた一本の草にシガミついて生きてゐるやうなものだ。助けを呼ばうにも咽喉が涸れて聲も出ぬ。其中には草の根もゆるんでくる。私達は身體中を戰慄せ血の涙を沸しながら苦しまぎれに崖に喰付く――それが私達の今の身の上なんだよ。（間）あゝそれにしても故郷は懷かしい、今頃はお城の裏の菩提樹の森に月がかかつて温い夜の氣にマタビの花が芳しい氣息を吐いてゐるだらう。地に埋もれた人の恨も知らぬ顔に夜鳴鳥が夢のやうな歌をうたつてゐるだらう。

ララ　シリシャの花も咲いてゐませう。婆羅門のお祭も直ぐで御座いますよ。私は早く印度へ歸つて赤い鳥のなくお城の森で遊びたう御座います。

プル　早く其日が來るやうに二人して神樣にお願ひしようねえ。お父樣やお母樣にお願しようねえ。

ララ　お祈しませう。此のお城はほんとに淋しい處ですねえ。姉樣もう行つて寢ませう。

プル　あゝ行つて寢よう、寢て神樣にお祈しようねえ。

（二人戸の中に去る。塔の方から鐘の音、王子ワサ出づ。夾竹桃の下に立つて何か考へてゐる。室の中から低い哀れな歌の聲がする。）

迦陵頻迦の鳥なく國は
朝も夕も鐘の聲
菩提樹の森、波羅密の園
野邊にや眞紅な芥子が咲く。

北はヒマラヤ南はガンガ
象にのせられ廣野の涯を
吹かれ吹かれて旅行く先は
波斯アラビヤ魔法の國よ。

雲は流れる故郷の空を
離れ行く身はいつ歸られう
赤い夕日は沙漠におちて
しよんぼり淋しい椰子のかげ。

ワサ　（恍惚と聞入つて）あゝ歌の聲、歌の聲！　メッカの女もあんな聲で歌をうたつた。あゝ、遇つて此思を打明けたい。（邸に近付く。戸が開いてプルムーラが出てくる。ワサは思はず身を退いて夾竹桃のかげに隱れる。プルムーラは柱の鳥籠を外し内に入らうとする。ワサは呼止める）プルムーラ。

プル　（驚いて振返り）誰です。

ワサ　（前に出て）私だ、ワサだ。

プル　何ですか。

ワサ　私はお前に——話したいことがあつて。

プル　私に用なぞある筈はありません。（中に入らうとする、ワサ取縋つて）

ワサ　待つてくれプルムーラ（プルムーラ立止る、ワサ近づいて）私はお前が——（感情が高まつて思はず取縋らうとしたが冷たいプルムーラの凝視に遇つて）そんな顏をして見ないでくれ——まあ腰を下して私のいふことを聞いておくれ、何から話してよいか分らない。（プルムー

ラは奇異の惑に打たれて鳥籠を持つたまゝ王子を見る、ワサは腰を下して）

ワサ　私は長いこと諸處を彷徨ひ歩いて種種悲しい思をした。私の故郷は此處ではなくてメッカだ。メッカで私は一人の女を知つた。僧の娘でアエシヤといひ、お前によく似た女だつた。カアバの神殿へお參詣に行つた折ミナの溪で初めて知合ひ、それから互に思合つて樂しい日を送つた。私はたよりない自分の淋しさを忘れ、アエシヤの愛に醉つて此二年を夢のやうに樂しく暮らして來た。このまゝに行けば私は何の悲しさも知らずに世を送つたものを運命は殘酷だ。アエシヤは熱病の爲めに介抱の甲斐もなく死んでしまひ、私は此城へ歸らねばならなくなつた。

ブル　（少し好奇心をそゝられ）どうしてゞす。（坐る）

ワサ　叔父の迎が來たからだ。今の王は私の叔父だ。まだ年が行かなかつたのでよく分らなかつたが父は叔父の野心の爲めに氣狂にされ、（背景の塔を指し）あの塔に幽閉められた。今日聞けば父はまだ死にもせず、あの塔の中にゐるといふ。私は明日にも還つて見たい。

ブル　あなたは王の子ではないのですか。

ワサ　さうではない。お前と同じやうに誰をたよりにする人もない淋しい者だ。父上が幽閉された後は、あの爺の手一つで育てられ、誰といつて心を語る友もない。いつも一人ぼつちだ。長い間の漂浪の末に漸く戀人を見付けたけれど、今はそれにも死別れて又元の一人になつてしまつた。ブルムーラ私の心を察しておくれ、私を愛しておくれ。

ブル　（輕蔑したやうに）愛す――

ワサ　愛しておくれ、私の友達になつておくれ。さうすればこんな淋しさはなくなつてしまふ。

ブル　（冷たく）私は愛といふことを知りません。又そんなものは欲しくもありません。

ワサ　人生の一番美しいもの、生命のこもつたものは愛だ。愛は神の心の現れだ。人間はお月様のやうに何時までも一人淋しく生きてはゐられない。愛さなければならん。愛されなければならん。

ブル　私はその愛を捨てゝしまひました。愛されようとも思はず、愛さうとも思ひません。何も仰有らずにお歸りください。（立上る）

ワサ　お前は何か思違をしてゐる。ブルムーラ、私のいふことを信じておくれ。私はお前をアエシヤだと思つてゐる。アエシヤを思ふやうにお前を思つてゐる。私は此處にお前の前に跪いて心の底からお前の愛をもとめてゐる。かう思ふ心に塵ほどの僞もない。（跪く）

ブル　私は卑屈な眞似は嫌です。

ワサ　お前はわざと其樣な無情いことを言つて私の願を退けようとする。自分の心を亂すまいとする。お前はほんとに愛といふことを知らないのだらうか、女の情といふものを知らないのだらうか。そんなことがある筈がない。お前の心の優和は姿に現れてゐる。私が眞心からいふことが分らん筈はない。プルムーラその優しい心があるならば私を愛しておくれ。私の願を聞いておくれ。私は誠心になる時は毎時も涙が出る。私の目を見ておくれ。私を愛しておくれ。

プル　私は涙は嫌です。

ワサ　お前は情ないことをいふ。併しそれはほんとの心ではない。お前は情を知らんのではなくて、わざとそれを殺してゐるのだ。その溫かな胸に起る優しい心に強ひて冷たい水を注すのだ。プルムーラこれほど思ふ私の心がお前には分らないか。誠の心には敵もない、仇もない。私を愛しておくれ、愛しておくれ。（プルムーラの手に縋る）

プル　（少し心が折れて）私だとて情を知らないのではありません。だけれども私はそれを知る前に無情な運命の手に苛責れて情も戀も思ふ暇なく大きくなりました。（段段氣が弱くなつて腰を下ろし）乙女心の羞耻も柔和も無くなり、此世に對する憎惡ばかり先立つて溫い心が持てなくなりました。夢見がちな乙女の胸に宿る戀の優和も樂しさも、私の心には生れて來ず、只夜晝となく胸に通ふは恨を晴らす念ばかり、復讐の血に醉ふ心ばかり――

ワサ　そんな心でゐるのか。

プル　私は心を墓場へ埋めてしまひました。親達の亡骸と一緒に土に埋めて死神の手に渡してしまひました。二度と其處から出て來ようとは思ひません。私は愛すよりも憎みたい、復讐がしたい。どうかすると張詰めた此心も弛むことがあります。其時私は心に太い針を刺し、蛇の毒を飼ふ。此樣なことを續けてゐたら心は張切つた絃のやうに自分と自分でハチ切れるでせう。それまでは生きてゐます。

ワサ　（自分の戀は忘れて）哀れなお前の心！

プル　（悲憤の情に燃えて）私は血を流したい。鐵槌を振つて水甕を折割るやうに仇の身體から熱湯のやうな血を流してやりたい。復讐の快味に醉ひながら血煙の中に躍つて其儘死んでしまひたい。アロルの戰に打負かされて無殘の死を遂げた幾千人の魂魄は、私一人の胸に宿つて恨を晴らせと叫喚きたてる。夜寢てゐると闇の中から恐ろしい物音が聞える。それはアラビヤ兵に斬倒された屍がお城の眞白な階段を轉落ちる音だ。焔に閃めく刃の下を髮を亂して逃げまとふ女共の喚聲だ。其聲は打物の響

と一緒になつて暴風に伴ふ雷のやうに鳴渡る。お城は恐ろしい血の雨に含まれて、お濠に咲いた白蓮の花も猩々緋のやうに赤くなつた。（呼吸を吐いて少し落付き）ああ私は復讐の神の犠牲に生れてきたやうなものだ。どうかして免れようと思つても、あのヒマラヤの山のやうなものが私の心に壓蓋つて身動きも出來ず氣息も絶々になつてしまふ。私を思つて下さるなら此心を察してください。私を助けて心の重荷をとつてください。

ワサ　お前は恐ろしい女だ。豪い女だ。お前の言葉を聞いてゐると何時か私までが強くなるやうな氣がする。私はお前を助けてやりたいやうな氣がする。

プル　私を助けてくださいますか。

ワサ　だけれども私の力で出來るだらうか。私は弱い男だ。とてもお前ほどの力はない。

プル　あなたはアラビヤの王子ではありませんか。なさらうと思へばどんなことでも出來る筈です。私を愛してくださるなら私の力になつてください。私を此の苦しい哀の境遇から引出してください。

ワサ　どうすればよいのだ。

プル　仇をとつてください。怨恨を晴らしてください。

ワサ　仇をうつ——

プル　私が命を欲しいものはカアシムの外にまだ一人あります。あなたは其人を殺して私を印度へ歸らせてくださいますか——イエ／＼とても駄目だ。思もよらぬことだ。王子樣、どうぞお歸りください。もう何も仰有らずにお歸りください。

ワサ　私は歸らない。プルムーラお前の望を言つておくれ、私はきつとする。

プル　言つたとて出來ることではありません。私とあなたとは別の世界に住んでゐるのです。どうぞこれでお歸りください。（立上る）

ワサ　プルムーラ私はお前を——

プル　もう何も仰有らないでください。私は人を愛することの出來ない女です。（戸口に行く、ワサ縋つて）

ワサ　プルムーラ——（プルムーラ振拂つて内に入る）可哀さうな女だ。（庭に下りて暫らく躊躇してゐたが吐息しながら去る。間。牢番出づ、四邊の樣子を伺ひながら戸口に近づき刀を拔いて戸を開けようとする。ワサ後から牢番の足をとつて引倒す。牢番は不意を喰つて倒れる途端に刀を取落す。物音に驚いてプルムーラが戸を開けて出る。牢番は起上つて逃げようとする、プルムーラは着てゐた寢衣を引被せる。牢番は目を隠されて度を失ひ倒れる。ワサとプルムーラは上から押付ける）

プル　紐をもつておいでララ、紐を紐を、（ララ帯をもつて

出ろ。プルムーラはワサと共に牢番を縛し柱に繋ぐ。ワサは刀を拾上げる）

ワサ　何しに來た。白狀しろ。（牢番は無言、ワサは刀を突付け）さあ言へ、此麼刀などもつて忍び寄つたのはプルムーラを殺さうとするのだらう。

牢番　全くもつて左樣の儀では御座いません。どうぞ幾重にもお慈悲をもつて此處のところはお見逃を願ひたう存じます。

ワサ　イヤ／＼白狀する迄は許さぬ。プルムーラ此男を知つてゐるか。

プル　少しも知りません。私を殺しに來たに違ひありません。

ワサ　それに相違ない。これ有體に言つてしまへ。隱すとお前の爲めにならんぞ。何の爲めにプルムーラを殺しに來た。白狀しろ。お前の心でか、人に頼まれたか。言へ、言はねばかうしてやる。（刀を鼻先に突付けて脅かす）

牢番　申上げます申上げます。命ばかりはお助けください。お慈悲で御座います。

ワサ　白狀するなら助けてやる。さあ包まずに言つてしまへ。

牢番　白狀いたせば此儘お許し下さいますか。

ワサ　許してやる。

牢番　それならば申上げます。先刻のことお妃樣が私をお呼びになりまして今夜の中にプルムーラ樣を殺すやうにと嚴重の御命令で――

ワサ、プル（同時に）　妃が！

牢番　左樣で御座います。私に少しも罪はないので御座います。どうぞお許しなされてくださいまし。私は根が正直者で御座いますので、いつも悪い奴に騙まされて飛んだ馬鹿の目を見るので御座います。今夜お妃から其事を仰付けられた折、私は幾重にも御辭退いたしたので御座いますが、是非ともしなければ許さぬと、嚇されるやら賺されるやらで遂々心にもない悪いことをいたしました。それが證據にはその刀はお妃のもので御座います。王子樣、プルムーラ樣、命ばかりはどうぞお助けなされてくださいまし。

ワサ　プルムーラお前はどうしてお妃に恨をうけた。

プル　知りません。何の爲めに私を殺さうとするのでせう。

牢番　嫉妬で御座います。お妃はプルムーラ樣が王樣の御寵愛をうけてお妃樣になるのを妬んでゐるので御座います。にくいお妃で御座います。あの女は男ずきで嫉妬深くて手に終へぬ奴で御座います。私がよく存じて居ります。

プル　それに違ひない。あゝ危ないことだ。

牢番　かう有體に白狀いたしました上は、どうぞ命ばかりはお助けください。お慈悲で御座います。
プル　（斷然と）私は許さない。
牢番　お情深いプルムーラ樣、どうぞ許してくださいまし。私は黄金に目が眩んだので御座います。決してあなた樣を殺さうなどと其んな曲つた心はもつて居りません。あの女に購まされたので御座います。プルムーラ樣お慈悲で御座います。もし王子樣、これ此通り血の涙でお願ひ申して居ります王子樣。
ワサ　助けてやれプルムーラ。
プル　私に慈悲はありません、此奴も仇の一人、（ワサから刀を取り）覺悟するがよい。
牢番　（縋上つて）おゝお慈悲で御座いますプルムーラ樣もしそれではお約束が異ひます。プルムーラ樣――（プルムーラ牢番を斬る）
プル　あのカアシムも私の手で殺したかつた。ホヽヽ、血が流れる。滅ぼされた國の恨は一人の血では償へない。王子樣先刻のお言葉は嘘では御座いません。眞實私を思つてくださることがよく分りました。此上には王子樣今一つのお願を聞屆けてくださいまし。
ワサ　願とは――
プル　（刀を差出して）私を殺さうとした此刀で――
ワサ　（無意識に刀を受取り）此刀で――
プル　あの女を殺してください。
ワサ　妃を――
プル　私を思つてくださるなら妃を殺して此身の難儀を救つてください。
（ワサ無言でプルムーラを見る。プルムーラはワサの前に跪く。）

――幕――

# 第三幕

## 第一場

妃の室、同夜の深更、上手奥は垂帳で包んだ床、二隅に燭臺、少し下手へ寄せ美しい氈をかけた寢椅子、小さな象牙の臺、其上には腕飾などが置いてある。入口は下手前の方にある。それと反對の側に網格子の高い窓。幕の上つた時人影は見えない、暫らくすると宰相が下手入口に顏を出す、同時に帳が開いて中から妃が出てくる。室中を一寸見廻して去る。上手の燭が消える、ワサ登場、床に近付き帳を排して中を見、妃の居ないのに一寸怪訝な樣子をして急足で去る。間。遠く鐘の音。微かな後夜の祈禱の聲。暫らくして妃が王を

引いて入る。王は酒の疲れで眠さうな樣子、妃の腕に凭れながら舌の廻らぬ口で

王　わしを何處へ連れて行くのだ。女共、そのやうにわしを嬲らないでくれ、お前は舞妓だな。お前の身體は蛇のやうにしな／＼して豹のやうに力強い。お前の腕で掬締められると氣息が出來ん。――あゝ予は轉がりさうだ。これ／＼もつとしつかり抱いてくれ。（王は躓いて倒れる）轉んだ。確かに轉んだ。わしが轉ぶとアラビヤ帝國が轉んだやうな大きい音がするぞハ、、、。あゝ先刻喰べた七面鳥めがまた腹の中でグウ／＼鳴いて居るわい。しぶとい奴だ。（妃は起さうとする）これ／＼待て／＼、腹の中で鷲鳥が踊を踊つてゐるぞ。こりや拍子をとつてやらずばなるまい。（便々たる腹を打つ。妃引起す）これこれ、わしを何處へ連れて行く。どうも今夜はひどく女に好かれる。奇體だな。身體の十ばかり欲しいものだ。い、わしが起きるのはアラビヤ帝國が起きるのだから中々容易でないぞ、ハ、、、（妃床に引いて行き帳を閉ざす）あゝ此處は安樂の國だ。帝王の國にも夜が來たと見える――（妃帳を出づ、安心したやうに四邊を見廻し灯を消す、月の光格子窓より入る、妃去る。間。ワサ入る、月光をたよりに床に近づき劍を拔いて中に入り妃と思つて王を刺す、王の悲鳴、唸聲。カアシム入る。床に近付かうとして出て來た王子と突當りさうになる。二人は驚いて劍を取直す。間、外で人殺々々と叫ぶ女の聲、續いて人の馳違ふ足音。俄かに騷がしくなつて大勢の呼聲や足音が近くなる。武士や侍女を先きに妃と宰相が入る。宰相は武士に相圖する、武士はカアシムを捕へようとする。カアシムは武士を切つて一散に逃出す。混亂）

宰相　曲者が逃げた。カアシムだ。カアシムを捕へろ――（武士後を追ふ。王子は殺したと思つた妃のゐるのに驚き、劍を落して床に走り帳を開く、中には血のたれる王の屍。王子は驚いて倒れる）

ワサ　ヤツ、叔父上！

宰相　王樣が殺された、謀反だ／＼。それカアシムを捕へろ、曲者を捕へろ。（王子は王の手をとつて泣出す。妃は落ちた血刀を拾上げ不思議さうに見る）

――幕――

## 第二場

王兄ムサの幽閉されてゐる古塔の二階、同夜の明方近く。塔の内部は略五角形をなし正面後方の壁は龕になつて其中に異形の偶像、前には香爐等。眞中に柱が立つてよき處に鐘がかゝる。左手の壁に大きな窓が開き月光が流込む。右手の壁の一部は遙かに退いて階段の

降口になつてゐる。幕の上つた時王兄は柱の下に眠つてゐる。肉の落ちた頰、蓬々たる髪、破れた汚い衣見るからに憐れな樣子、年は六十に餘る。王子が階段を上つてくる。喪心した蒼い顏をしてオッオッ内に入り眠つた父の姿を見て感慨に堪へぬ樣子。靜かに父上と呼ぶ。父の眠はさめぬ。王子は搖起さうかどうしようかと思ひ惑ふ樣子、今一度父上と呼ぶ。父は覺めて茫乎とワサを眺め、

王兄　（力のない聲で）　誰だな、わしに喰物を持つて來てくれる人か――

ワサ　（跪いて）　父上。私で御座います。

王兄　（起きて、ワサを繁々眺め）　ホーこれは珍らしい言葉を聞いた。父上？　わしのことを言ふのかな。父上？　わしには子があつたかな？　（立上る）

ワサ　さう仰有るのも御尤です。父上、久しくお別れしてゐたワサで御座います。

王兄　ワサ？　わしにも昔子供といふものがあつたと覺えてゐたが――慥にあつたに違ひない。わしの妃が時々腕に抱いてゐるのを見たことがあつた。

ワサ　父上その子供が私で御座います。ワサで御座います。

王兄　あゝ美しい妃！　わしが命よりも大事にした女、年もわしとは親と子ほども違つた故、わしは毎時も捨てられはしまいかと心配した。美しい女も、もう死んでしまつた。

ワサ　母上はお亡くなりなされても私はかうして生きてゐます。父上私がお分りになりませんか。

王兄　わしには妻もない子もない。人間にあるものは淋しい自分の命ばかりだ。運命の悲しさばかりだ。

ワサ　その運命が悲しう御座います。私は運命に弄ばれ苛責まれて心の底まで深い傷を負ひました。今はもう此廣い世界に私を救つてくれるものは何一つありません。總も運命の惡戯でした。弄ばれ傷けられた私に此上頼るものとては父上、あなたばかりです。（父の足下に跪いて）私はあなたのお胸に抱かれてこの苦しさを忘れたう御座います。父上憐れんでください。私は誤つて叔父を殺しました。（ワサ泣いて父に縋付く）

王兄　（怪訝な樣子でワサを眺めながら段々身を引き）　これ／＼そのやうにわしに抱付くな。それでなくてもわしは倒れさうだ。離れてゐろ、離れてゐろ。

ワサ　（すりよつて）　父上私はあなたの子です。此樣に苦しんでゐるのがお分りになりませんか。私は誤つて人殺をしました。意地の惡い運命が私を弄んだのです。あゝ私はお胸にすがつて思ふ樣泣きたい。父上罪深いあなたの子を胸に抱いて幼い昔に歸らせてください。血を分け

た親の懐の外に身をよせる處はもう無くなつてしまひました。（縋付く）

王兄　（茫乎考込み）　人間の悲み！　若い者の悲はすぐ直る。年寄の悲は墓場の中までつゞく。あゝわしはいかい年寄だ。

ワサ　父上、あなたはまだ私が分らんのですか。

王兄　（窓からさす月光を仰ぎ）　あゝわしの妃、美しい妃があそこにゐる。淋しいものに月ほど親しい友はない。悲しげな友よ、私はお前を待つてゐた。お前ばかりが一生の友だ。墓場への友だ。

ワサ　（泣きながら見上げて）　父上。

王兄　お前を見てゐると心地よい淋しさがわしの胸に湧いてくる。お前にもいかい悲があると見える。わしは毎晩鐘を鳴らしてお前を迎へ此胸の淋しさを物語る。するとお前はニツコリ笑つて、さもわしの心を察したやうに點頭いてくれる。

ワサ　そのお悲があるならば父上、私の心をも察してください。十年前は父上のお胸に抱かれてゐた私です。母上をお忘れなさらないなら私をもお忘れなさらんでせう。

王兄　（過去を回想して夢見るやうに）　あゝわしの美しい妃。鼓がなる。琴がなる。婚禮の歌が聞える。待女郎が花をちらす。赤い着物をきた舎人が美しい甕を叩く、新婚の床を飾る。玉のやうなわしの妃、わしはお前に眞珠の玉を振かける。珊瑚の雨を降らせる。お前はお月様のやうに其中から生れ出る。

ワサ　父上、そのお妃の忘形見が私です。

王兄　（依然と夢をつゞけ）　國が治まる。椅子に凭れた妃の顔は夜明の月のやうに白くなる。身體が風に靡る旗のやうにゆら〳〵する。赤い袍を着たわしの胸にがつくりと倒れる——あゝ眞白な花が崩れた。（ガックリと窓に凭れる）

ワサ　父上——（縋付いて父を仰ぐ）

王兄　妃はもうゐない——（間）わしは今夜も鐘を鳴らしてお月様をお迎へしよう。すると空の向から眞白い馬が飛んで來てわしを乗せ、遠い世界へ連れて行く。わしは其處で花嫁に遇うて昔話をする。わしはもう此世では年を取り過ぎた。悲の爲めに年をとつて一人ぼつちになつてしまうた。もう何處へも行く處はない。墓場ばかりだ。わしはいかい年寄だ。

ワサ　（足下に身を投げて）　父上。

王兄　（深く思に沈んで）　人間の悲み。若いものの悲は直ぐに直ほる。年寄の悲は墓の中までつゞく。（鐘を鳴らす。間。下が騒がしくなつて傷をうけたカアシムが氣息を切らして上つてくる）

カア　助けてください。助けて下さい。

ワサ　(驚いて)　おゝお前はカアシム――

カア　王子様ですか、どうぞ私を助けてください、切抜けてやつとこれまで逃げて參りました。何處へか隱してください。

ワサ　どうしたのだ。

カア　危ぶみながらも遂ひ瞞まされました。王子様御用心なさらんと危なう御座います。彼奴等は心を合せて惡事を企んで居ります。何處か隱してください。(身を隱さうとする。二人の武士とラーマンが上つてくる。武士はカアシムを捕へんとす。激しい格鬪の末カアシムは縛される。ワサは其隙に逃げようとする、ラーマンが立塞がる)

宰相　それ王子をも。(武士ワサを捕へんとす)

ワサ　私は捕はれる覺えはない。

宰相　無いとは仰有られまい。(王を殺した刀を突出し)此刀に覺えがありませう。(ワサ無言、武士縛す)

宰相　王子はその柱へ繋いで置け、老耄にはよい相手だ。カアシムは下へ引張つて行け。

(武士はカアシムを引立てゝラーマンと共に段を下る。)

ワサ　父上、助けてください。繩をといてください。

王兄　(獨言のやうに)　世の中は騒がしい。こゝは靜かだ。誰かゞわしを此處へ入れて外へ出さぬやうにしてしまつた。淋しさに馴れると人間は却つてそれを慕ふやうになる。初めて此處へ來たものは、籠を取換へられた鳥のやうに居心地が惡いと見えて、頻りに出たがつていふ。暫らくするうちには馴れてしまふ。

ワサ　父上これほど申しても私が分かりませんか。自分の子の見さかいすらつかないのですか。

王兄　わしの子供？　父と子は遠い世界にゐる。

ワサ　イエ〳〵あなたの子は此處に居ります。あなたの前に縛られて苦しんでゐます。お情けない父上。あなたは悲の爲めに心も破れ、お目も曇り、眞實の子が傍にゐるのもお分りなさらん、情けなう御座います。

王兄　人間は一生一人のものだ。はかない己が命一つをたよりに生きて行く。お空を眺めてゐると月の光の中から蜘蛛の糸のやうの細い糸が風に吹かれて流れてくる。あれが命の糸だ。何時切れるかも知れぬ心細さに戰きながら手繰りよせる。わしも長い間手繰りよせた。糸はもうつきさうだ。あゝわしはいかい年寄だ。

ワサ　かよわい命の糸。あゝ私もそれを手繰つて來た。糸の先きには死より外にないのも知らず、美しい愛や戀や、華かな人生が結付けてあると思ひながら手繰つて來た。

私の手繰つた糸は月の世界からは來ず、暗い運命の世界から來た。沙漠の涯までも彷徨ひ歩いて其末に死ぬ。それが私の運命だ。(伏して泣く、窓から見える空には曉の光がさす)

――幕――

## 第四幕

同じ塔の外、明けた日の夕暮。舞臺の上手に塔、その前に石段、石段を上ると鐵の扉。扉には錠が下りてゐる。扉の右には窓、その中にはカアシムが繋かれてゐるのだが幕の上つた時は見えぬ。石段を五つ下ると舞臺の中央になる。石段のあたりには血のやうな曼珠沙華が咲き、塔の壁には凌宵花が絡んで今を盛りと咲いてゐる。後方は糸杉の木立その後は城壁になつてゐる。日は今沈んだばかりで空は赤く焼けてゐる。ララが一人歌を歌ひながら曼珠沙華を摘んでゐる。

摩伽陀の國に咲く花は
赤い罌芥子、芼莨
西方淨土の金色の
雲の中からおちてきて
眞赤に咲いた曼珠沙華。

(聲をたよりにしてブルムーラが尋ねてくる。)

ブル　ララお前そこにゐたのかへ、姉様は探してゐたよ。

ララ　姉様御覽なさい、こんなに曼珠沙華が咲いてゐます。アロルのお城にも此花が澤山咲いてゐましたねえ。

ブル　お城の石垣や岡の上に咲いたのを覺えてゐる。でも私は此花が嫌だ。血のやうな色をしてゐて氣味が惡い。(西の空を見て)あゝもう今日も暮れた。あの赤い日の沈む國は何處だらう。

ララ　姉様きつと印度で御座いますよ。私達の故郷の。

ブル　いゝえ印度は此方だよ。(反對の方を指す)御覽、ララ、赤い旗のやうな雲が故郷の方へ流れて行くよ。沙漠を越え海を越えた遠い空の彼方に私達の故郷があるのだねえ。

ララ　あの赤い雲の行く方にお父様やお母様が眠つてゐるでなさるのですねえ。菩提樹の森で私達の歸るのを待つてゐるでなさるのですねえ。

ブル　人は死んでも靈魂は殘るといふから、屹度私達を待つてゐるでなさるに違ひない。お墓の上にはもう草が生えたらう。(カアシムが塔の窓から顔を出して二人を見る)

ララ　私達は人にも神様にも見放されたのですねえ、姉様。
プル　神様も恨めしい。何故私達をも一緒に殺してはくださらないのだらう。命は貴いけれど生きてゐるのは死ぬよりも辛いことがある。ララ、二人は一緒に死なうね。姉様はお前一人を力にし頼りにして生きてゐるのだよ。お前はお父様とお母様の形見、私はお前をお母様と思つて抱く、お父様だと思つて縋りつく、私の命と思つて抱寄せる。（ララを抱寄せて）破れた心に殘つた有丈の愛情をお前に注ぎかける。するとお前は細い柔かな腕で力一杯私に抱きついて姉様と言つてくれる。其聲はお前の心の底から出てくる溫い愛のこもつた貴い聲だよ、靈の底から出てくる生命の聲だよ。それを聞くと姉様は俄かに心丈夫になつて、沈んだ氣も引立ち身體中に力が湧いて來るよ。一人だと思つた此世に私の親身の妹がゐる、血と肉を分けた姉妹がゐると思ふと嬉しいのか悲しいのか熱い涙が湧出して止どもなく流れるよ。今もその涙が――（妹を抱締めて泣く、ララは堅く姉に抱付いて泣きながら）
ララ　姉様！
プル　私の可愛いゝララ――死ぬ時もかうして死なうね。
（二人は相抱いて泣く、夕焼は薄らぐ。間）
カア　プルムーラ様、（プルムーラ驚いて振返る）プルムーラ様。
プル　（初めて窓の中のカアシムを見付け）オ、お前はカアシム、まだ生きてゐたか！
カア　あの時殺されてしまつた方が却つて仕合でした。併し私はまだ死なうとは思はない。プルムーラ様、私は今迄の罪をお詫びいたします。私が好んであなたの國を滅ぼしたのでもありません。皆んなあの無道な國王の命令です。
プル　お前は自分の罪深いことも思はず、まだ私に辯解するのか。（詰寄る）
カア　さうではありません。罪深いことも知つてゐます。プルムーラ様。男らしくない私を笑つてください。命が惜しいからです。仇が打ちたいからです。どうぞお慈悲に刀を貸してください。此繩さへ切れゝばよいのです。
プル　仇に刀をかす馬鹿者が何處にある。
カア　人間は一つ躓くと心の定りがなくなつてしまふのです。私を獸と思つて下さい。其獸は命の惜しさに恥も忘れて此麼お願をするのです。どうぞ私を出してください。其代り私は此國を亡ぼして、あなたのお恨を晴らします。お二人を印度へお連れ申します。
プル　恥も情も知らぬ人非人。戰に勝つたとて無殘極まる亂暴を働いた鬼め、泣叫ぶ母親の腕を切つて娘を奪つた

のはお前だ。子供の私をまで捕へて靈の底までも蹂躪つたのはお前だ！（情が激して泣きながら窓の下に身を投げ）跣足で針の山を歩るかせても、軀を臼で砕いても飽足らん。まだ生きてゐたなら此手で殺して骨を嚙んでやりたい。（間）

カア　許してください。罪の應報が來たのです。欺かれるとは知りながらも命の惜しさに彼奴等の言葉をきいたのが誤りでした。プルムーラ様死ぬ前の只一つのお願ひです。私は此の恨を晴したい。私ばかりではない。王子様も彼奴等の爲めに此塔の中に縛られておゐでなさる。

プル　王子様が此塔の中に――

カア　お命も危ないでせう。プルムーラ様どうぞ此處から出してください。

プル　自分を喰ふ虎を檻から出す奴が何處にあるものか。よい今に私が殺してやる。それまでは縛られてゐるがいい。（窓を離れ石段を上つて扉を開けようとする、扉は開かない。あたりは何時か夜になり標るやうな月夜）あゝ扉が開かない！（身悶えして、段を下り塔の上を仰いで呼ぶ）王子様――ララお前も呼んで御覽――王子様――（塔の上で王子の答へる聲）王子様今私が助けてあげます。窓のところへおいでなさい。

ワサの聲　繩が解けん、プルムーラ。

プル　切れませんか。ララ早く行つて姉様の短刀をもつておいで（ララ行かうとする）いゝ私が行く――（行きかけたが止まつて）イエ／＼私は此處にゐなければいけない。早く行つておいで。早く。（ララ飛んで行く）王子様今助けてあげます。（アチコチ歩廻りながら）王子様あなたはお一人ですか、え？　お父上と――今私が刀を上げます。それで繩を切つて出ておいでなさい。縛られておゐでなさるなら何故お父様に解いてお貰ひなさらんのです。え？　お父様も縛られておゐでなさるのですか？（窓を仰ぎながら身悶えして）繩は切れても、どうして出て來られるだらう。戸は明かぬ。窓はあんなに高い。（イラ／＼しながら歩廻る）飛下ることは猶更出來ない、とうしたらよいだらう。神様智慧を借してください、王子様をお助けください。（跪いて祈る、ララ短刀を持つて馳せてくる）おゝ持つて來たか。王子様刀をあげます。（窓を覘つて投げる、數回して入る）王子様それで繩を切つて――切れましたか――繩を何處へか結付けて下りておいでなさい――（塔の上から繩が下がる）早く下りておいでなさい。（凌霄花の咲いた中をワサが繩に縋つて下りて來る、プルムーラ下から抱きかゝへる）

ワサ　プルムーラ――（感激して抱付く、プルムーラ思はず抱返し）

プル　王子様――（少し間）どうして塔などへ入つたのです。

ワサ　私はあの恐ろしいことをした後、身の置所がなくなつて此塔へ逃込んだのだ。

プル　身の置所？　あなたは私をお忘れになつたのですか。何故私のところへ來てはくださらないのです。私は今朝から、あなたを探してゐました。

ワサ　私は運命の恐ろしさばかり思つてお前のことは忘れてゐた。お前の顏を見るのが怖はかつたのだ。苦しかつたのだ。

プル　（怪訝な顏をして）私に遇ふのが苦しい、怖ろしい？

ワサ　（悄氣げて）運命の恐ろしさを思ふからだ。私は罪を犯した。

プル　罪を？　王を殺したことですか、自然の應報です。あなたは正しいことをなすつたのです。私の爲めに仇を討つてくだすつたのです。何とお禮申してよいか分りません。あなたは私や妹の大恩人です、私の國の恩人です

（跪く、ワサは益氣を沈ませ）

ワサ　さう言はれると餘計に苦しい。私はお前のために叔父を殺したのではない、誤つて叔父を殺したのだ。

プル　誤つて――

ワサ　あゝ運命は殘酷だ。妃だと思つたのは叔父だつたのだ。

プル　それではあなたは私の爲めにではなく間違へて王を殺したのですか

ワサ　さうだ、私は罪を犯したのだ、（聲を低くして）お前のために。

プル　私のために――あなたは、それで私を恨んでおゐでなさるのですか。（聲を鋭くする）

ワサ　プルムーラ許しておくれ、私はあの恐ろしいことをした後お前を憎んだ、戀を呪つた。でもかうしてお前に遇つて見れば矢張お前が戀しい、思切れない、憎まうと思つても憎めない。私は恨むことの出來ない男だ。

プル　（凝然と見てやがて憫れむやうに）ホヽヽヽ、男のあなたが、何故そのやうに氣が弱いのでせう。私は思のまゝに憎むことも出來ず愛することも出來ないやうな弱い心を持ちたくはありません。

ワサ　私はほんとに弱い男だ。お前のいふ通り思ひのまゝに憎むことも出來ず愛することも出來ない男だ。私の心は何時も運命の不思議に戰き人生の頼りなさに泣いてゐる。私は孤獨と悲哀の子だ。果てしらぬ夢に包まれて生きてゐる哀れな男だ。

プル　（詰るやうに）そのあなたが何故私を愛してくだす

つたのです。

ワサ　私は靈魂を求めたのだ。難船したものが助を呼ぶやうに私の心は何時も孤獨の淋しさに泣きながら永遠の友を求めてゐる。私の愛は靈魂の求める聲だ。果敢ない幻影とは思ひながらも、それがなくては生きてゐられない。沙漠の夜を行く旅人が星の光を賴にするやうに私はたゞ美しいものに自分の命を托さうとするのだ。思へば愛も幻だ。人生の矛盾は愛によつて消え又愛のために起つてくる。私はそれが悲しい。

プル　あなたは靈魂の世界ばかり夢に見て此世をお忘れなすつたのです。生きるも死ぬも皆んな此世でのことではありませんか、此世を措いて何處に生きる處があるのです。

ワサ　此世は恐ろしい業因の巷だ。人間は運命の踊を踊つてゐる。私は此世をのがれて運命の手の届かない靜かな世界へ行きたい。沙漠へ行つて星の光を眺めて考へてゐたい。プルムーラ私と一緒に行つてくれ。

プル　沙漠へ行つて運命が免れられるものなら人生は詰らんものです。あなたはアラビアの王位を捨てゝ沙漠へ行き隱者のやうな生活をなさる積りですか。私は嫌です。運命と組合つて勝つか負けるか。二つに一つです。

ワサ　アラビアの王も運命の前には蟲一匹と撰ぶ處にない。躓く石の一つにも運命は宿つてゐる。

プル（冷笑的に）あなたは私が怖いのでせう。（威壓的に）王子樣私は決してあなたを離しません。私は私の心をあなたに注込み、私の愛であなたを強くし思の晴れる時まで私の傍に引着けて置きます。（命令的に）さあ王子樣、あなたは第一に、あの扉を開いて中にゐるカアシムを引出してください。

ワサ　お前は強い女だ、私はお前を愛するには餘り弱過ぎる。

プル（詰寄つて）あなたは私を捨てゝ沙漠へ逃げるお積ですか。

ワサ　それが出來るほどなら此麼苦みもない。私はお前が思切れない。お前の強い心に引着けられて離れることが出來ないのだ。

プル　嘘です。あなたは叔父の仇だと思つて私を憎んでおゐでなさるのでせう。

ワサ（叱るやうに）プルムーラ。（老僕のアリが旅仕度をし駱駝を引いて出てくる、ワサのゐるのを見て嬉しさうに近寄り）

老僕　おゝ王子樣御無事で御座りましたか。

ワサ　おゝ爺か。

老僕（もう涙聲になつて）あゝ御無事でこんな嬉しいこ

とは御座りません。昨夜からあなた樣のお行衛がかいくれ分らず、宰相のラーマンめに殺されなされたなどと聞いた時は、ほんとかと思うて玉のやうの涙が流れました。子のやうにしてお育て申した、あなた樣のこと故、わしは氣も轉倒して地平へお伏つて泣きましたぞ。まあまあ御無事で此樣嬉しいことは御座りません。やつと手を廻して此塔においでのことを聞込みお救ひ申す用意をしてこれまで參りました

ロサ　さうだつたか爺、私はお前にも遇へず殺されてしまふのかと思つて、それはかりか悲しかつた。

老僕　御尤ぢや／＼、お優しいあなた樣のこと故嘸泣きもなさつたらう。今、町の知邊から駱駝をかり繩梯子の用意をしてお救出した上は一散に此城を逃出さうと旅の支度をして參りました。それはさうと、どうしてまあ塔を拔出して此處までおいでなさいました。

ワサ　プルムーラが助けてくれたのだ。

老僕　左樣で御座いましたか、プルムーラ樣誠に難有う御座いました。さあ王子樣此上は一刻も猶豫はなりません。早くあの駱駝に召して裏門から、こつそりと落延びませう。お城は皆んな仇で御座ります。グズ／＼しておゐでなさるとお命が危なう御座ります。

プル　お前は何をいふ、王子樣は何處へもおいでなさらない。誰が王子樣に敵對ふものか。

老僕　どうして／＼、敵對ふはさて置きお命も危なう御座ります。かうしてゐる中にもあのラーマン奴が此處へ來るかも知れません。さ王子樣早くお支度をなさいまし。

プル　イーエ王子樣はやらぬ。王子樣は何處へもおいでなさらぬ。私と一緒に戰ふのだ。これから惡者共を退治なさるのだ。（王子の前に立塞る）

老僕　滅相なことを。あなたと王子樣が何人おゐでなさらうと先方は大勢。此處は一時も早く落延びて又時を待つが何よりの上分別。さ、王子樣——（ワサの手をとる）

プル　（老爺の手を拂退け）王子樣はやらない。

ワサ　爺、私はプルムーラに助けられた。

老僕　折角塔から逃出しても此處でお命を落しては何の甲斐も御座りません。さ王子樣、早く駱駝にお召しなされ、爺がお供いたします。

プル　（氣が氣でなく）お默り／＼、王子樣は私のものだ。お前などと一緒にはやらん。

老僕　（少し腹を立てゝ）何を仰有る。王子樣のお身の上に迫まる危險をお知りなさらんか。さ、そこをお離しなされ、えゝお離しなされ。（二人は王子を爭ふ、ララはプルムーラに力を合せて老僕を突退ける）

ワサ　爺待つてくれ、プルムーラは私の恩人だ。捨てゝは

行かれぬ。

老僕　何のそのやうの義理立が入りますものか。言はゞ大事の前の小事、さ王子様。（手を引張る、プルムーラ突退ける）

プル　やらない、王子様は私のものだ。私のものだ。

ララ　（ワサの手に縋つて）王子様――

ワサ　プルムーラお前も一緒に行つてくれ、私と一緒に此處を落延びてくれ。

老僕　王子様、そのやうの事をしようものなら直ぐ敵に見付かります。女子供は手足纏、潔く思切つてさ早く――

ワサ　お願だプルムーラ、私と一緒に行つてくれ。お前一人を置いては行けない。

プル　いゝえ行きません。此處には私の仇がゐます。此通り可愛いララがゐます。どうして逃げて行かれませう。

老僕　（イラ／＼して）えゝもどかしい。王子様、捨てゝおしまひなさいまし、女に心を引かされて大事のお命にかかはつたら何となさる。

プル　逃げたくばお前一人で逃げるがいゝ。王子様はやらん。

老僕　やらんとは口廣い。王子様はあなたのものでは御座りませぬ。かういふ私がお小さい時分から手鹽にかけてお育て申したお方ぢや。誰に許されてそのやうの口廣いことを仰有る。

プル　（負けてはゐず）お前の知つたことではない。王子様、あなたは私を捨てゝあの老耄と逃げておいでなさいますか、そんなあなたではないでせう。早くあの老耄を追拂つてください。

老僕　（怒つて）黙らつしやい。あなたは王子様を大事とは思はぬか、王子様は申さばわしの子ぢや。あなたなどの口を出す所ではない、黙つてゐなさい。

プル　お前こそ黙るがいゝ。王子様を塔から救出したのは私だ。お前ではない。私は王子様に仇をうつていたゞくのだ。それまでは誰がきてもやりはせぬ。王子様早く邪魔者を追拂つてください。

ワサ　あゝどうしたらよいだらう――プルムーラ、どうか一緒に行つておくれ。

プル　いゝえ私は行きません。仇のうてる迄は死んでも此處を離れません。此儘私が逃げて行つたら、あのカアシム奴が後姿を見て笑ひます。

ワサ　お前はそれほど迄に執念が強いのか。

プル　執念一つで生きてゐる私です。仇をうたぬ中は行きません。

ワサ　私のためにそれを捨てゝくれ、プルムーラ。

老僕　愚圖々々しておゐでなさる時では御座りません。敵

が來ます、ラーマンめが來ます。さ、おいでなされ王子様。（ブルムーラを突退けてワサの手をとる）

ブル　（ワサに追縋つて其手をとり）王子様私は決してあなたを離しません。此手であなたを抱きすくめ、一寸でもやりません。さあ仇をうつてください。あの扉の中にゐる悪魔を引出してください、妃を殺してください、そして可哀さうな私達二人を印度へ歸らせてください。（ワサの手をとつて嘆く）

ララ　（姉と一緒に王子に縋り）王子様――

老僕　面倒の足手纏――（突退けて王子を引行く）

ブル　あなたは私を捨てるのですか。

ワサ　捨てはせぬ。たゞ一緒に行つてくれ。

ブル　たゞ一緒に――

ワサ　沙漠の涯のメッカへ。

ブル　（ワサから手を離し、決心した様子で）何處へでも逃げて行くがよう御座います。もう追かけはしません。

ワサ　ブルムーラ――

ブル　（冷やかに）あなたは生温い愛で人生を鈍色にぼかさうとなさる。私は百年を一日に縮め大きな生命の炬火を燃やして死なうとする。二人の行く道は違つてゐます。

老僕　王子様男らしく思切つて、さ早く駱駝にお召しなされ。女一人に代へられる時では御座りません。敵が來たら何となさる、さ御座らつしやい。（引張る）

ワサ　ブルムーラ今一度思直してくれ。此處ばかりがお前の生きる處ではない、沙漠の中にも樂しい人生はある。お前の復讐の心をすて、憎の念をすてゝ私と一緒に行つておくれ、憎みや復讐の念は決して貴いものではない、強いものではない。それよりも貴いのは愛だ、強いのも愛だ。

ブル　（冷たく強く）愛は弱いものです。子供のやうに移氣で涙脆く、何をでも掴むけれど、深くものゝ命に喰入ることがない。私はもつと強いものが欲しい、生命の底まで喰入るものが欲しい。私の憎惡（にくみ）は丁度ヒマラヤの谿に張る氷のやうに人の心に喰入つて破らねば置かぬ。私は此思で人を殺し自分を殺し悪魔のやうに笑つて死にます。早く行つてください。

老僕　さ王子様。

ワサ　愛を求めるものは破れる。あゝ私は敗者だ！（スゴスゴ老僕に引かれて行く）

ララ　（姉の手をとつて泣きながら）姉様。

ブル　あゝ一人だ。生きるにも死ぬにもたゞ一人だ。

ブル　泣くことはない。安心しておゐで、今姉様が仇をとつてやる、カアシムを殺してやる。刀は何處だ刀は、（探

廻る、軈て絶望的に）あゝしまつた！　塔の中だ。（決心してカアシムのゐる窓をよぢようとする、高くて手が屆かない。扉を開けようと石をとつて錠を打つ、錠は開かない）えゝ此扉々々、何故開かぬ〱（無念さうに齒軋したが）よいそれならあの繩にすがつて――（ヲサの下りて來た繩にすがつて野獸のやうに塔をよぢ上る）

ララ　姉樣。姉樣、危ない――

プル　心配することはない――今カアシムを殺してくる。

（上つて行く、間）

ララ　姉樣、姉樣、どうしたらう、姉樣、返事がない何も音がしない。（身悶えしながら窓の下や戸の處へ行つて、中の樣子に耳をかたむける。ラーマンが武士を三四人連れ、松明をとつて來る。ララの姿を認め）

宰相　この子は此處で何をしてゐる。（武士に）これ早く扉を開けて二人の首を切つて來い。一人行けばいゝ、後は私の傍にゐろ。（武士の一人石段を上り扉を開けようとする、此時塔の中にカアシムの悲鳴、プルムーラの聲）

プル　死ね、死ね、惡魔。惡魔！

（皆驚いて扉に近寄る。武士は錠を外して扉を開く、髮も亂れ衣も破れたプルムーラが片手にカアシムの首、片手に血刀を握つて寬の塔から躍出す。武士は驚いて身を引く、プルムーラは高く首を捧げ、敵を倒した勇者のやうな歩調で扉口に現れ。）

プル　仇かうてた。ララおいで、仇かうてた。（ララ段を上つて姉に抱つく）あゝ嬉しい、私は嬉しい。（大聲に）皆んな來い、國中の者が皆んな來い、お前達の仇かうてた、お前達の夫を殺し妻を奪ひ娘を犯した惡魔が死んだ。大きな聲で喜の歌をうたへ。
あゝ私の胸で太陽が燃える!! 世界が私のものになつた!! 皆んな來い皆んな來い、私と一緒に手をとつて踊を踊れ！

（プルムーラは歡喜と興奮の極に達して醉へるが如く、片手に首、片手に妹の手をとつて足を高く上げ勇躍して進む。石段の途中迄下りると俄かに崩れる大廈のやうに倒れ伏して氣を失ふ。ララは抱付いて）

ララ　姉樣姉樣――姉樣！

（プルムーラは倒れたまゝ無言、宰相と武士は松明を上げて見る。塔の上で王兄の打つ鐘の音）

――幕――

一九一八、二、一一

# 田中總一郎篇

# 戰　塵（三幕五場）

人物

加沼右京（二十五位）

坂部治兵衛（二十位）

その他

天正十二年四月、長久手の役の前後

## 第一幕

小牧山に於ける家康の陣營附近。

本陣を離れた前哨線である。

遠く、敵陣の篝火が明滅してゐるのが瞰下ろされる。

月は淡くなつた曉方近い時刻である。

右京と治兵衛は、拔き合つて睨み合つてゐる。

あたりに人影はない。

激しい鬪ひ。——

右京は、小石に躓いてよろめく。

治兵衛は、すかさず斬り込む。

右京は、防ぎながら、體を立て直して、今度は、鋭く攻勢に出る。

治兵衛は、段々と、木立の方へ壓せられてしまふ。

治兵衛　——えいッ！（すて身になつて斬り込む）

右京　うむ。——（右手にかすり傷を負ふ）

治兵衛　やあッ！（勢を得て、立ち直る）

（二人は、再び互角に睨み合ふ。）

（突然、遠方で、小銃の音がする。）

治兵衛　待て。

右京　何だ。

治兵衛　敵の攻撃だ。

右京　そんなことはどうでもいゝ。

治兵衛　よくはない。——引け。

右京　卑怯者奴。そんなことではごまかされないぞ。

治兵衛　なにッ！

右京　早く勝負をつけるのだ。三河武士が強いか、甲州武士が強いか、はツきりときめるのだ。さあ、來い。

治兵衛　（猛り立つ心を押へて）待て。その勝負はいつでも出來る。待てと云つたら待て。俺達は、今、そんなことをしてゐる場合ではない。

右京　どんな場合であらうが、それは俺の知つたことぢやない。俺は、甲州武士の魂を貴様に見せてやれば、それ

でいゝのだ。

治兵衛　貴樣と同じ言分は、俺にだつてあるのだ。先刻から貴樣の罵詈雜言を、默つて聞いてゐては、三河士の名折れだ。

右京　それならば尙更のことだ。さあ、早く勝負をしろ。

治兵衛　おのれ、それ程までに三河士の强さを知りたいのか。——さあ、來い。

右京　よし。——さあ。

（二人は再び睨み合ふ。）

（激しい打ち合がつゞく。——然し、勝負は、仲々つきさうにない。）

（——又、小銃がなる。）

治兵衛　待て。

右京　——又か。うるさい奴だ。

治兵衛　俺はどうしても、かうしてはゐられない。敵の攻擊を前にして、私事で爭つてゐては、殿にすまない。

右京　——この勝負をよさうと云ふのか。

治兵衛　よさうとは云はない。一時、延ばさうと云ふのだ。

右京　逃口上を云ふな。

治兵衛　何が逃口上だ。戰ひさへすめば、何日何時でも相手になつてやる。

右京　いやだ。俺はどうしてもいやだ。飽くまで、この場で勝負をつけろ。

治兵衛　判らない奴だな。よく考へて見ろ。貴樣だつて、今は、德川の祿を食んでゐる身ぢやないか。私事は後にして、先づ、主人のために働け。

右京　俺の身内には、祖父傳來の甲州魂が流れてゐるのだ。それを辱しめられて誰のために働く謂れがある。

治兵衛　それならば、何故、德川の祿を食んだ。貴樣の嘲ける三河士の祿をなぜ食んだのだ。

右京　時世時節だ。俺は腕一本で、何處の戰場へでも稼ぎに出るのだ。貴樣の樣に、恩とか情とかに强ひられて、自分自身を忘れてしまふ樣な下らない人間ぢやないのだ。

治兵衛　おのれ、又それを云つたな。

右京　幾度でも云ふ。俺は自分を知つてゐるのだ。自分の力を信じてゐるのだ。俺は自分の力で、自分の腕で、大きな稼ぎをするのだ。恩や情で立身出世はしたくないのだ。刀一本、槍一筋で、千石でも二千石でも、一國一城の主にでも、なつて見せるのだ。

治兵衛　その千石は誰からうけるのだ。その二千石は、誰から貰ふのだ。

右京　俺を知つてくれる人から貰ふのだ。德川殿でもいい。秀吉公でもいい。相手に選り好みはしないつもりだ。

治兵衛　畜生！　犬士！　二股武士だ。三河士の風上にも

おけぬ奴だ。

右京　何とでもいへ。これが當世だ。この戰國の世に、ちつぽけな義理人情にからんでゐては、いつになつたらうだつがあがるか判るものか。それの判らない貴樣達三河士は馬鹿だと云つてゐる丈だ。

治兵衛　馬鹿とは何だ。――おのれ、殿のことまで口にするからは、もう我慢がならぬぞ。

右京　あわてるな。俺は、まだ德川殿がどうのかうの云つてゐるのぢやない。德川殿とは、まだ取引をしたことがないのだからな。今度がはじめてだ。この戰ひで、俺のたてる手柄を、どれ位に買つてくれるかそれを知つた上で、俺は、德川殿の値ぶみをするつもりだ。德川殿が盲か眼明か、それは、近い中に判る。

治兵衛　よせ。そんな話はもうよせ。貴樣が嘲ける三河士は、そんな商人根性で殿に仕へてゐるのではない。三代相恩の御情に、一命をなげうつてゐるのだ。

右京　だから、馬鹿だと云ふのだ。

治兵衛　何つ！

右京　くやしければ向つて來い。勝負は素から望んでゐるのだ。

治兵衛　よし。――來い。

右京　さあ。

（二人は、三度、刀を持ち直して、立ち向ふ。）

（勝負は、どうしてもつかない。）

（――又、小銃がなる。）

（然し、今度は、治兵衛も我を忘れて戰つてゐる。）

（二人は、戰ひながら、樹立の中へ入る。）

（激しい小銃の音。）

（德川勢の一隊が、疾風の樣に通りすぎる。）

治兵衛　（樹立の中から刀を下げて出て來る）たうとう始まつたな。（おつかけて行かうとする）

右京　（同じ樣に刀を下げて出て來る）おい。待て。逃げるな。

治兵衛　逃げはしない。然し、戰は、もう始まつた。

右京　勝手にやらせておけ。――此方は此方で勝負をつけるのだ。

治兵衛　うるさい奴だな。

右京　うるさいとも。

治兵衛　もうおつつけ旗本もくり出すだらう。――おい、かうしてはゐられないぞ。

右京　俺は、どうしても、此方のけりをつけない中は、此處は動かない。

治兵衛　困るな。

右京　ちつとも困らない。

治兵衛　俺達は、物見の役を云ひつかつてゐるのだ。それだのに、こんなことをしてゐては、すまない。

右京　ぢや。それ程云ふのなら、降參しろ、俺の言分の方が正しいと認めろ。

治兵衛　馬鹿な、そんなこと——

右京　いやか。いやなら、やつぱり刀に物を云はせるより仕方がない。

治兵衛　今の場合、それは困ると云ふのだ。

右京　困るなら謝れ。

治兵衛　謝る謂れはない。

右京　それなら、刀だ。

治兵衛　——しつこい奴だな。

右京　甲州武士の持つて生れた性分だ。

（小銃の音。）

（喚聲。）

治兵衛　——おい。

右京　何だ。

治兵衛　かうしたらどうだ。どうせ勝負をつけるなら、敵陣へ斬り込んで勝負をつけよう。貴樣と俺と、どつちが大きな手柄をするか、それによつて、勝負をきめよう。

（小銃の音。）

どうだ。貴樣だつて、あの音をきいたら腕が鳴るだらう。

右京　うむ。——

治兵衛　これから、二人で槍先を合せて、斬り込まう。手柄の競爭だ。

右京　俺の手柄の方が大きかつたら——

治兵衛　その時には、貴樣の云ふ通り、謝りもしよう。尊敬もしよう。

右京　よし。きつとだな。

治兵衛　二言はない。——その代り、俺の手柄の大きかつた時には——

右京　この首をやらう。

治兵衛　面白い。——その言葉を忘れるな。

右京　貴樣こそ、後で逃口上を讓るな。

（二人、刀を收める。）

治兵衛　遲れてはならない。（樹に立てかけてあつた槍をとる）

右京　（同じ樣に槍をとつて）さあ、行かう。

治兵衛　うむ。

（二人、槍の穗をそろへて、走り去る。）

（小銃の音。）

（喚聲。）

# 第二幕

前幕から二十日程の後。
長久手、岐阜嶽附近の戦場。
森武藏守長可の率ゐる三千の上方勢は、決死の德川勢と衝突して、今や陣營は亂れ立つてゐる。

小銃の音。
喚聲。
敵、味方は、狭隘に入り交れて、戦つてゐる。
戦闘は、潮の干滿の様に、一進一退してゐる。
右京が一人の敵を相手に斬り結びながら出て來る。
一方から、治兵衞が二三人の敵と斬り結んで出て來る。
戦ひは、二ヶ所でつゞく。
治兵衞は、その中に一人を倒してしまふが、額にうけた傷の血潮が眼に入つて困つてゐる。
右京は相手を斬り倒す。

右京　（立ち去らうとして）　お、治兵衞か。
治兵衞　（氣がついて）　右京か。
右京　傷をうけてゐるな。よし、助太刀だ。
治兵衞　有難い！

（二人は、敵を一人づつ、引きうけて戦ふ。）
（やがて、二人共、その相手を倒してしまふ。）

右京　案外、手剛い奴だ。——傷はどうだ。
治兵衞　大したことはないが、血が流れて困つた。
右京　繃帯をしてやらう。（自分の上帯をさいて結んでやる）
治兵衞　有難い。
右京　——おい、治兵衞、今日こそは、この間からの勝負をつけるぞ。
治兵衞　うむ。この間は、つまらない小競合だつたから、目ぼしい獲物はなかつたが、今日は、大丈夫だ。
右京　うむ。今日は大きな稼ぎが出來るだらう。
治兵衞　うむ。鬼武藏もゐれば、池田勝入もゐる。手柄は欲しいまゝだ。
右京　その時こそは、貴樣に謝らせるか。
治兵衞　貴樣の首を貰ふのだ。
右京　そんなに欲しければ、この首はやりたいものだがさうもいかんて。
治兵衞　貰ふ時には立派に貰つて見せる。——さあ、行かうか。
右京　俺は、こつちへ行く。
治兵衞　さうか。——念のために教へておいてやらう。鬼

武藏は、今日は覺悟をきめてゐると見えて、白裝束をきてゐるぞ。

右京　えツ！　あの白裝束がさうか。それはしまつたことをした。先刻出逢つたのだが、大した奴でもないと思つて、見のがしてしまつた。

治兵衞　ぢや、まだ生きてゐるな。よし、一手柄してくれよう。

右京　まあ、俺が首を擧げるから、後でゆつくりやつて來い。

治兵衞　文句は後で云へ。――行くぞ。

右京　後で逢はう。

（二人、左右へ別れて馳け去る。）

（戰闘は、今や全く、亂軍になつてしまつて、上方勢は、浮足立つてゐる。）

（森武藏守長可が、白裝束で、馬の上から采配をふりながら、崩れ立つ味方の軍勢に押されながら出て來る。）

長可　卑怯者奴！　返せ返せ。ふみとゞまれ。

（然し、軍勢は、潮の樣に、流れ去る。）

（右京が飛出して來て、いきなり、長可に槍をつける。）

長可　下郎、この首をとつて手柄にせい。森武藏守長可の最後だ！

右京　覺悟！（槍をつき出す）

（長可は、甘じてその槍をうけて、馬から落ちる。）

（追撃の德川勢がどつと通りかゝつて、長可の首を擧げに近寄らうとする右京を妨げてしまふ。）

（右京は、槍をすてゝ、あせるが、どうしても近づけない。）

（昂奮してゐる追撃隊は、長可のゐることを知らないで、通りすぎてしまふ。）

（右京は、ほつとして、かけ寄らうとする時、馬の蔭で、長可の首を擧げた治兵衞が出て來る。）

右京　あツ！

治兵衞　おおツ！　右京か。――これを見てくれ。鬼武藏の首だ。

右京　えツ！

治兵衞　俺は、この崖の下でこゝにゐる鬼武藏の姿を見つけたから、崖をかけ上つて來たのだ。すると、どうだ。鬼武藏は、流彈でも喰つたか、馬から落ちたのだ。俺はしめたと思つて、すぐ樣、この通り首をとつたのだ。流石に敵の大將だ。もう覺悟を定めてゐた。早く首を擧げて、手柄にしろと云つてくれた。

右京　（耐へかねて）馬鹿、馬鹿、馬鹿、馬鹿。

治兵衞　何ツ！

右京　馬鹿。

治兵衛　どうしたといふのだ。
右京　（昂奮しきつて）　俺か、俺か、鬼武蔵に槍をつけたのだ。
治兵衛　何ッ！
右京　貴様は、人の手柄を横取りするのか。
治兵衛　横取りとは何だ。俺は、俺の力で、いや、俺を守つてくれる弓矢の神の加護でこの手柄をしたのだ。貴様こそ、この俺の手柄にけちをつける氣だな。
右京　手柄。手柄とは何だ。俺の槍先にかゝつて倒れてゐる者の首を擧げて、何が手柄だ。三河士の手柄といふのはそんなものか。
治兵衛　何ッ！　貴様は、今更、自分の首が惜しくなつてそんなことを云ふのだな。
右京　貴様こそ甲州武士の強さに驚いて、因縁をつける氣だな。――その首を渡せ。
治兵衛　馬鹿を云ふな。俺は、この刀でとつた首を渡してたまるものか。
右京　えいッ、渡せ。
治兵衛　いやだ。
右京　渡せ。
治兵衛　いやだ。
右京　刀にかけてもとるぞ。
治兵衛　とれるならとれ。――（ふと氣がついて）　貴様、今、自分で槍をつけたと云つたな。
右京　つけたからつけたと云つた。
治兵衛　本統か。
右京　甲州武士は、嘘は吐かぬ。
治兵衛　さうか。ぢや、死骸を調べて見るが、いゝか。
右京　いゝとも。よく調べろ。左の脇腹だ。
治兵衛　よし。（死骸の側へ行つて調べる）
右京　（離れたまゝ昂然としてゐる）――
治兵衛　あ、あつた、あつた。成程、槍傷だ。（元の所へ歸つて來る）
右京　どうだ。
治兵衛　嘘ぢやなかつた。
右京　それ見ろ。――俺は、倒すとすぐ首を擧げようとしたのだ。所が折惡しく、味方の奴等が大ぜいこゝを通りやがつた。俺は、それに妨げられて、死骸の方へ近寄れなかつたのだ。その間に貴様が横取りしやがつたのだ。
治兵衛　横取りとは云はさない。俺は貴様が槍をつけたのを見てゐなかつたのだから、自分の幸運を喜んだのだ。貴様が不運だつたのだ。然し、運不運は戰場の常だ。あきらめろ。
右京　何ッ！

治兵衛　俺達は、ありのまゝを申し上げよう。槍をつけたのは貴樣で、首を擧げたのは俺だと云ふことを。手柄は同等だ。俺に五百石の加増があれば、貴樣にも五百石の加増は下さるだらう。尤も、俺の幸運がなくて、貴樣の不運がなければ、貴樣は、自分一人で、千石の加増をうけたかも知れないが、それは、今更云つても仕樣があるまい。

右京　……

治兵衛　貴樣は、兩手をついても、この首はゆづつて貰ひたからうが、それ丈は、俺の方でも承知が出來ない。只俺は、行き懸り上、この手柄を自分一人のものにする氣はないから、貴樣が槍をつけたと云ふ證人には、俺がなつてやらう。それが、貴樣の不運を氣の毒に思ふ俺の親切だ。

右京　（默つてうなだれてゐる）

治兵衛　どうしたのだ、右京。

右京　—俺はつく／＼嫌になつた。

治兵衛　何が嫌になつたのだ。

右京　こんなことをしてゐるのが嫌になつたのだ。——不運は、いつまでも、俺にとつついて離れないのだ。

治兵衛　どうしてだ。

右京　今日の樣なことには、俺は、今迄、幾度となく出逢つてゐる。みす／＼自分の手にかけながら、その手柄を人に奪ひとられてしまつたことは、二度や三度ぢやないのだ。

治兵衛　さうか。

右京　戰場の不運は、俺をたうとう、こんな意姑地な男にしてしまつたのだ。俺は、あせればあせる程、運が惡かつたのだ。今度こそはと思つてかゝる仕事が、いつでも外れてしまふのだ。不運だと思つてあきらめることは、俺だつて知らないのぢやない。あきらめたいのだ。然しあきらめてもあきらめても、俺の不運は俺から離れないのだ。——俺はつくづく馬鹿々々しくなつたのだ。

治兵衛　さうか。そんなにまで運が惡かつたのか。

右京　いつかもこんなことがあつた。俺は、敵の士大將を組敷いて、今首を擧げようとした時に、何處から來たか流れ彈が、俺の脚にあたつた。俺は、思はず倒れたが、その時打ち處が惡くて、そのまゝ氣を失つてしまつたのだ。氣がついた時には、俺の側には、首のない死骸が横たはつてゐやがつた。その首を持つて大したお賞めに預つたのは、俺の同僚だつた。馬鹿なことだ。俺は、癪に障つたが、あきらめて、そこを飛び出してしまつた。

治兵衛　ひどい奴だな。そいつは。

右京　考へて見れば、そいつの幸運なのだ。そして、俺の

不運なのだ。――畜生、不運の奴、まだ俺にくつついてやがる。

治兵衞　さう〳〵と氣の毒だな。

右京　――治兵衞、貴様は、さう思つてくれるか。

治兵衞　うむ。話を聞けば氣の毒なことをした。然し、こいつは、俺のせゐぢやない。俺にしたつて、これからまだまだ、立身出世を望んでゐる身だ。今日のこの手柄を貴様にゆづつてやる譯にはいかないが、貴様の不運に同情してゐる友達として、このまゝ埋もれてしまふ貴樣の手柄を明るみへ出してやらう。

右京　本統か。

治兵衞　うむ。貴樣が槍をつけたのだと云ふ證人には、俺がなつてやる。さうすれば貴樣の手柄と俺の手柄は五分五分だ、それで。これから先の貴樣の運を直せ。

右京　有難い。よく云つてくれた。

治兵衞　貴樣もそれで氣持を直してくれ。意姑地な料見をすてゝ、これから先は、俺と一緒に手柄を勵み合はう。

右京　うむ。――この間からのいがみ合ひは、俺が惡かつた。赦してくれ。今日からは、親しい友達になつてくれ。

治兵衞　友達だとも、生死の仲を救ふ友達にならうな。

右京　――治兵衞、俺は生れて初めて明るい氣持になつた。（小銃の音、微かに聞える）

治兵衞　追打ちになつたな。――腹がへらないか。

右京　へつたな。だが、俺は、辨當を何處かで落してしまつた。

治兵衞　俺が持つてゐる。――半分宛食べよう。

右京　そいつは有難い。

治兵衞　腹をこしらへてから、もう一働きするか。

右京　さうだな。

（二人、心持よささうに笑ふ。）

（そして、一つの辨當を分け合つてたべ出す。）

（遠くで小銃の音――喚聲。）

## 第三幕

### 第一場

前幕から四時間の後。

香流川の邊。

上方軍を擊破した德川勢が、凱歌をあげて戰を收めた後である。

家康は、自ら、敵將池田勝入、森長可等の首實驗を終へた所である。

右手に幕が張られてある。

左手の河岸にそつた柳の木に六七頭の馬匹がつながれてゐて、四五人の小者が、河を瞰んで休んでゐる。中には、傷ついてゐる馬の手當なしてゐる小者もゐる。戰の後の靜けさ。——

右京が、幕の蔭から出て來る。手には一枚の紙を鷲づかみにしてゐる。非常に昂奮してゐる。

治兵衞　（そつと後を追つて出て來る。そして右京の後姿をぢつと見てゐる）——

右京　（立止つて、紙片を讀み直ほす）——

右京　（讀み終へて、こみ上げてくるくやしさをかくしきれないで、つか〳〵と川岸の方へ歩み寄り、紙片をづたづたに裂いて川の中へ棄てる）——

治兵衞　（驚いてかけよる）何をする。

右京　（ふり返つて一寸治兵衞の顏を見たまゝ又、眼を川の方へやる）——

治兵衞　（低く、然し、強く）御墨付を裂いてすてたな。

右京　（反抗的に）すてた。すてたがどうした。

治兵衞　惡い了見だ。もうそんな意姑地な心はすてると先刻誓つた筈だが。

右京　駄目だ。

治兵衞　不服だらう。不足だらう。それは、俺にもよく判る。俺が五百石で、貴樣がたゞの百石しか貰へなかつたのは、口をしいだらう。氣の毒だと思ふ。——然し俺を惡く思はないでくれ。俺は、最善をつくした。出來る丈の陳述はした。貴樣も聞いてゐた筈だ。それが用ひられないで、かう云ふ結果になつたのだ。

右京　貴樣を惡く思ひはしない。貴樣の好意はよく判つてゐる。——それにしても、それにしても、あまりひどい扱ひだ。俺は盲の主人に仕へたくはない。

治兵衞　殿は盲ではない。百石でも下すつたのは目のある證據だ。貴樣はこれまで自分の不運を慰めるために百石はおろか五十石、三十石の加增をくれた主人を持つたことがあつたか。祿高のことを云ふな。それよりも、自分の不運を慰めてくれる人の心を有難いと思へ。

右京　いやだ。俺は、そんな態のいゝ言葉でごまかされるのはいやだ。——貴樣が申し立てゝくれたことに噓はなかつた。俺の手柄が、貴樣と同等に値ふみされていゝと云ふことは、あの申し立てに一々うなづいてゐた人間なら、明かに判る筈だ。それが判つてゐてこの結果なのだから俺の心の蟲に收まらないのだ。それ丈判つてゐて何故こんな差別があるんだ。譜代の家來と新參の家來とには、それ程までの分け隔てをしなければならないのか。同じ樣に、槍一筋に命をかけて、生死の境をかけ廻つた

みぢやないか。――馬鹿々々しい。

治兵衛　それは、貴樣のひがみだ。さう云ふ差別をされたのではない。實は、俺にもよく判らないのだが、賞罰の規則にかう云ふ定めがしてあるのではないかと思ふのだ。

右京　俺は、それが嫌だと云ふのだ。――命がけでかけ廻つた揚句の果が、肝心の鴨は人に掠はれ、お情で百石頂戴か。俺は、もう、こんな商賣は飽つ平だ。

治兵衛　それを云へば、結局又、自分の不運を怨むより外に仕方があるまい。

右京　こんな馬鹿々々しい目に逢つて默つてゐる位なら俺は、自分の不運を一生涯怨み通し、呪ひ通して、それと鬪つた方がましだ。

治兵衛　そんな無茶なことを云ふよりも、どうだ、思ひかへして、こゝで、もう一辛抱して見ないか。

右京　いやだ。

治兵衛　俺は、昨日までは、貴樣の樣な意姑地な奴は、どうしても蟲が好かなかつたが、今では、心から同情してゐるのだ。事毎に、貴樣の云ふことなら反對しないではゐられなかつた俺が、今では貴樣のたつた一人の友達になつてゐるのだ。氣の毒だと思つてゐる。可哀想だと思つてゐる。優れた腕と力を持つてゐながらいゝ伯樂に逢ひはぐれる貴樣に、心から同情してゐるのだ。それ丈に、俺は、今貴樣と別れてしまふのは心殘りだ。

右京　よく云つてくれた。その心は、俺も嬉しくうける。だが、もう俺をひきとめないでくれ。俺は、まだ自分の不運に頭を下げたくはない。何處かに、俺の正しい運命か、幸運が待つてゐる樣な氣がするのだ。俺はまだ若い。俺はまだ俺の腕に自信を失つてゐない。――俺は、どこまでも伯樂を探して歩くつもりだ。

治兵衛　どうしても駄目か。

右京　（川を指さして）見ろ。百石は、あの通り、何處ともなく流れて行く。

治兵衛　俺だから、まあ默つてゐてやるが、他の者があれをみつけたら、大へんなことになるぞ。

右京　さうだつた。こいつはいけない。まご〳〵してゐて下らない咎め立てをうけては大へんだ。――ぢや、これで、俺は別れよう。

治兵衛　何處へ行くつもりだ。

右京　あてはない。――まあ秀吉公にでも仕官して見るか。

治兵衛　今日鬪つたばかりの敵に仕へる氣なのか。

右京　俺にとつては、敵も味方も、そんな區別はない。俺を知つてくれる伯樂に逢へばいゝのだ。

治兵衛　成程な。そんな考へになるのも無理はないな。——

右京　治兵衛、別れ際に一つ無心をきいてくれ。

治兵衛　何だ。

右京　貴様の馬を譲つてくれ。友達甲斐に頼む。

治兵衛　——よし。少し傷をしてゐるがいゝか。

右京　何でもいゝ。歩いてゐて斃るのも馬鹿なことだから
な。

治兵衛　（小者の一人に向つて）おい、傷はどうだ。

小者　どうやら軽くすみました。

治兵衛　さうか。——こゝへ曳け。

小者　はツ！

（幕の彼方で法螺貝が鳴る。）

右京　何だ、あれは

治兵衛　小幡の城へ引き上げるのだらう。

右京　それは好都合だ。それでは、俺は、反對に本地越に
犬山の方へ出よう。

（士が二三人出て來る。）

士　（小者達に向つて）馬曳け。

小者達　はツ！

（士達は去る。）

（小者達は、馬を曳いて幕の方へ行く。馬は、ぞろぞろ
と幾頭も幾頭もつゞく。）

治兵衛　もう暫らく待て。今は危險だ。

右京　さうだな。

治兵衛　（小者に）お前は先に行け。馬はこの人に借すの
だから。

（小者は、手綱を預けて去る。）

（軍馬の列は、仲々絶えない。）

（軍兵も現はれて、右往左往する。）

（右京は、逃げる隙がなくて困つてゐる。）

（治兵衛も氣を揉んでゐる。）

治兵衛　（左手を見て）あッ！　いけない。榊原殿が來る
ぞ。

右京　えッ！（ふり返つて）弱つたな。

治兵衛　暫らくまて。

（榊原康政が馬上でやつてくる。多くの従者を従へて
ゐる。治兵衛は目禮して見送らうとする。右京は、樹
蔭にかくれる。）

康政　（馬をとめて）治兵衛、何をしてゐる。

治兵衛　——馬が手傷を負ひましたので、手當をして居り
ます。

康政　さうか。——遅れない様にしろ。

治兵衛　はツ。

（榊原の一隊は去る。）

（右京が出て來る。）

治兵衞　おい、今の中だ。早く行け。

右京　有難い。（馬をうけとつてのる。）

治兵衞　――今度逢ふ時は、敵味方かもしれんな。

右京　うむ。――たつしやでくらせ。

治兵衞　貴樣も、今度こそは幸運をつかめ。

右京　有難う。（花道へ去る）

（治兵衞は、茫然と後を見送つてゐる。）

（暫くして、榊原康政が、只一騎で、急いで歸つて來る。

治兵衞は、はつとする。）

康政　治兵衞、治兵衞、加沼右京と云ふ奴を知らぬか。

治兵衞　右京がどうかしましたか。

康政　不埓な奴だ。新參の分際を以つて、御墨付を反古にいたして、川に棄てをつた。

治兵衞　えッ！

康政　それを見つけて拾つて來た奴があるのだ。このまゝすてゝおいては、御威光にかゝはることだ。何處にゐるか調べろ。

治兵衞　はッ！

康政　俺はこゝで待つてゐるから、すぐ調べろ。逃げうせた所で遠くは行くまい。

治兵衞　さあ。――

康政　――治兵衞、その方、馬はどうした。

治兵衞　はッ――。

康政　どうしたのだ。何をそんなもぢ〳〵してゐるのだ。馬鹿に元氣がないな。三河士は、そんなことでは駄目だ。今日一日の戰位でへこたれる奴があるか。

治兵衞　はい。

康政　さう〳〵、その方は、今日、大そうな手柄をしたさうだな。上様は口をきはめて賞めてゐられたぞ。流石は三代相恩の三河士だけあつて、立派な若者だと云つて皆も感心してゐた。

治兵衞　（たまらなくなつて、ぴたッと大地へ兩手をついて）お許し下さい。

康政　（訝つて）どうした、治兵衞。

治兵衞　實は、私一存の心得違ひから、たつた今さつき加沼右京を逃がしました。

康政　何ッ！右京を逃がした！

治兵衞　申譯がありません。

康政　馬鹿奴！云ひ譯は後で聞く。これからすぐに追つかけて、斬りすてゝ來い。

治兵衞　えッ！

康政　御威光を怖れぬ不埓な奴を斬つてすてゝ來い。康政一個の命令と思ふな。上意と思つて行け。

治兵衛　はツ！

康政　貴樣右京に馬を與へたのだな。――よし、この馬にのつて行け。（馬から下りる）とり逃がして、上樣の御威光をけがすな。行け。

治兵衛　（決心して）はツー

康政　內通して恩をうるな。いゝか。あくまでも斬つてすてろ。

治兵衛　はツ！

康政　行け。

治兵衛　はツ！（馬にまたがつて）御免。（右京の後を追ふ）

（榊原はぢつと見送つてゐる。）

## 第二場

山中。

炭燒小屋がある。

人は誰もゐない。

暮れ方である。――櫻の花が白い。

花道から、右京がやつて來る。

馬は大分弱つてゐる。

右京は、小屋の方まで來て、馬を下りて、馬の傷を見てやる。

右京　（締りのない小屋の中を覗いて）おい、誰かゐないか。――（返事がないので入つて行く）――

（治兵衛が馬をいそがせて追つて來る。）

右京　盥に水を入れ來て、馬の傷をしめしてやる）――

治兵衛　（近づいて）お、右京。

右京　（驚いて）治兵衛か。――何處へ行く。

治兵衛　――（困つて）う、うん。一寸、篠井にゐる親戚の處へ行く用事が出來たのだ。

右京　（訝つて）私用か。

治兵衛　――さうだ。

右京　（信じて）それは丁度いゝ道づれが出來た。途中まで一緒に行けるな。

治兵衛　俺もさう思つて急いで來た。

右京　さうか。今、馬が少し弱つたので介抱してやつてゐた所だ。

治兵衛　弱つてゐるらしいな。

右京　何あに、ゆる／＼行けば行けるだらう。先刻は、追手を恐れて少し急いだものだから參つたらしい。――どうだ、追手は來さうにないか。

治兵衛　――うむ。來ないだらう。

右京　それは好都合だ。內心びく／＼しながら逃げて來た

のだからな。――色々心配や迷惑をかけてすまなかつたな。有難く思つてゐるよ。

治兵衛　(焦々して)どうだ。そろ／＼出かけないか。

右京　うむ。行かう。――(あたりを見廻して)櫻が咲いてゐるな。綺麗だな。

治兵衛　早く出かけないと暮れてしまふぞ。

右京　見ろ。今が滿開だ。風流な心は持ち合はさない俺達だが、あの埃つぽい戰場をぬけてこゝへ來ると、何とも云へないいゝ心持がするな。――一枝折つて持つて行かうか。

治兵衛　そんなものを持つて行つた所で、何になるものでもない。――出かけよう。

右京　さう急くな。夜道に日は暮れない。――こいつの枝ぶりがいゝな。どれ一枝折つてくれるか。(鎧通しを拔いて、櫻の一枝を切りとる)――

治兵衛　(馬の上で焦々してゐる)――

右京　(枝をかざして)どうだ。花をかざした若武者の姿は。――

治兵衛　下らない。

右京　さう一がいに云つたものでもないて。

治兵衛　行かう。

右京　馬にのりながら)行かう。――だが、おたに、默りこくつて行くのもつまらないから、何か話し合ひながら行かうか。これまでの俺の手柄話でも語つてきかせようか。

治兵衛　よしてくれ。――俺は、頭がいたいのだ。默つてゐてくれ。

右京　頭がいたい。それはいけないな。それぢやもう暫らく休んで行つてはどうだ。

治兵衛　いや、さうしてはゐられない。

右京　ぢや、そろ／＼行かうか。

治兵衛　うむ。――

(二人、馬を併べて、假花道の方へ行く。)

右京　それから先は、道が狹い。貴樣先へ行け。

治兵衛　何あに、俺は後でいゝ。

右京　いゝから先に行け。つまらない遠慮をするな。

(治兵衛仕方なしに先に行く。)

(右京は、後に從ふ。)

## 第三場

山際の村落附近。

路は二股に分れてゐる。

中央に庚申塚がある。

もうとつぷりと暮れ落ちてゐるが、月が冴えてゐて明

ろい。

花道から、治兵衛を先にして、右京がつゞいて出て來る。

右京　――たうとう暗くなつてしまつたな。

治兵衛　――うむ。

右京　人家が見える樣だな。

治兵衛　（焦々して）――うむ。

右京　――どうした。頭の痛みは治つたか。きつと、朝の戰ひでうけた傷が痛むのだらう。

治兵衛　な、なに、大したことはない。

右京　さうか。

（二人、又默つて馬を進める。）

治兵衛　（氣がついて）　お、もう此處まで來た。

右京　どこだ、こゝは。

治兵衛　別れ路だ。俺の行く所は、この先の村だ。

右京　さうか。――ぢや、こゝで別れよう。

治兵衛　（ためらつて）　待て。

右京　何だ。

治兵衛　話がある。

右京　何の話だ。――あ、又、御意見だな。思ひ返して、德川殿に御奉公しろとすゝめる氣だらう。――それは駄目だ。もうその意見はきゝたくはない。

治兵衛　……

右京　――さうだ。それよりも、俺の方で話がある。

治兵衛　――な、なんだ。

右京　どうだ、貴樣もこれから俺と一緒に、秀吉公へ仕官しないか。

治兵衛　なにッ！

右京　まあ、聞け。――もう少し心を大きくして、天下の大勢を見ろ。濱松や岡崎ばかりが世の中ではないぞ。

治兵衛　……

右京　俺はこれでも天下の大勢を見てゐるつもりだ。秀吉と云ふ奴は成上り者には異ひない。然し、何處か偉い所があるぞ。德川は如何に強くても、もう今日では、袋の中の鼠だ。今度の小牧山の陣にしても、勝つた所で知れてゐる。秀吉は、びくともしないだらう。それ所か、ぢりぢり袋の口を締めにかゝられては、中の鼠はあがきがつかなくなる。――長いことはないぞ。德川の滅亡は眼の前だ。

治兵衛　……

右京　こゝらで一つ、牛を馬に乗りかへる氣にはならないか。――天下をとる人の下で大きな稼をする氣にはならないか。友達甲斐に誘つてやるのだが。

治兵衛　――いやだ。俺は三河士だ。

右京　また三河士か。――融通のきかない奴だな。甲州の山の中の荒武者でも、この通り、御當世むきになつてゐるのだがなあ。

治兵衛　（感情を押へて）　貴樣が俺の意見をきかなかつたと同じ樣に、俺も貴樣の意見なんぞ聞きはしないのだ。

右京　うむ。成程、尤もだ。――ぢや、やつぱり、これで別れよう。俺も折角持つた一人の友達のためを思へばこそ云つて見たのだ。だが、もうよさう。だがな、俺は貴樣を心からの友達だと思ふ心は變らない。立場が異ふから二人の意見は反對だが、一切の係累をのぞいてしまつたら、俺と貴樣とは、心から手をとり合つて扶け合ひ慰め合ひ、同じ路を歩いて行ける仲だと思つてゐるのだ。――どうだ。

治兵衛　うむ。

右京　友達だから別れが惜しいのだ。――かうして、自分の馬まで借してくれた貴樣の厚意は生涯忘れないつもりだ。

治兵衛　（稍々焦々して）　おい、右京、何時まで話し合つてゐてもきりがない。――（馬から飛び下りる）ぢや、もうお別れだ。

右京　さうか。もう行くか。（同じ樣に馬から下りる）名殘りをしいが――

治兵衛　（いきなり拔き打ちにきつてかゝる）――

右京　（肩先をきられて）　あッ！　な、なにをするのだ。血迷つたな。（痛手に屈せず拔き合はせる）

（櫻の枝は、二人の間に白く泛んでゐる。）

治兵衛　覺悟！　（斬り込む）

右京　――さ、さては、今まで、俺をだましてゐたな。――貴樣は、追手だな。

治兵衛　（默つて鬪ふ）――

右京　（激しく斬り込む）　おのれー

治兵衛　（同じ樣に肩先をきられる）――

（二人、睨み合ふ。）

（二人とも息づかひが荒い。）

右京　ひ、ひきやう者奴！　友達を裏切つたな。

治兵衛　君命だ！

（激しく斬り合ふ。）

治兵衛　（焦つて、前へのめる）――

右京　（すかさず斬り下げる）――

治兵衛　あッ！　（伏し倒れる）

右京　ざ、ざまあ見ろ。

治兵衛　う、う、うむ。（もがき苦しんでゐる）

右京　友達甲斐に、止めだけはさゝないでおいてやる。（小溝で手足を洗つて、刀を收め立ち去らうとするが、肩の

傷が意外に深いので困る）

治兵衞　右、右京、待つてくれ。

右京　何んだ。

治兵衞　何んにも云はないから、止めをさしてくれ。

右京　――

治兵衞　だまし打ちにしたのは、俺が惡かつた。然し、俺も苦しかつた。――

右京　――

治兵衞　貴樣をにがしてやつた俺が、貴樣の追手を命ぜられたのだ。――いやだとは云へなかつた。上樣の御墨付を反古にした不埒な奴、どんなことがあつても斬つてすてゝ來い。――さう命ぜられた俺の立場を察してくれ。

右京――

治兵衞　追つかけはしたが、おつつかねばよいと心の中で祈つてゐた。逢へなければ俺一人が腹切つて、申譯をする覺悟だつた。――だか、やつぱり逢つてしまつた。逢へば、そのまゝ別れることは出來ない。俺は苦しかつた。苦しまぎれのだましうちだつた。俺は卑怯者だ。俺は友達の裏切者だ。その通りだ。――だが、もういゝ。もうお終ひだ。一太刀でも斬つたから、俺は務を果してゐる。もういゝのだ。さ、止めをさしてくれ。せめて、貴樣の手で息を引きとらせてくれ。

右京　（感激して兩手をついて）――治兵衞、許してくれ。俺が惡いのだ。俺さへもつと素直な氣持になつてゐたなら……

治兵衞　もういゝ。もういゝ。何も云ふな。――俺は一轍な三河士だが、友情を知らない男ではなかつたと云ふことだけが判つてくれゝばそれで本望だ。

右京　（決心して）治兵衞。頑な甲州武士でも、義理人情は辨へてゐることを見せてやらう。（鎧をぬいで胸を押しひろげ、脇差を拔いて、腹を切る）貴樣と俺とは友達だ。何もかもすてゝしまつて、裸で抱き合へる友達だ。

治兵衞　（息絶えんとしてゐる）――

右京　――治兵衞。（相手の手をとつて）治兵衞、（その手に脇差を持たして、自分の頸をつかせる）

（二人重なり合つて死ぬ。）

（主を失つた二頭の馬が、淋し相に佇んでゐる。）

（月は、いよ／＼、冴えてゐる。）

# 團欒（三幕）

妻
主人
光子　その妹
新次　その弟
友子　その妹
研三　その弟
勝子　その妹
美子　その妹
厚　その弟
父

郊外の家
初夏

## 第一幕

晴れた日の午後。
座敷て、妻と光子が話してゐる。光子は二つ位の赤坊を抱いてゐる。
生籬の外を、六七人の子供達が、喚聲をあげて、戰爭ごつこをしながら、二三度、通りすぎる。

光子　まあ、隨分、賑やかね。
妻　毎日、あれですもの。時々、氣が變になるわ。
光子　せんにはこんなぢやなかつたでせう。
妻　えゝ。それや靜かだつたわ。
光子　さうね。引越でもあつたの。
妻　こん所二三ケ月の中に、四五軒あつたわ。そして、新しく來る家に、きつと、遊びざかりの子供が二人や三人はゐるんですもの。いやんなつちまふわ。
光子　兄さんは子供が嫌ひだから、厭な顏をしてゐるでせうね。
妻　えゝ。あんまり喧ましい時なんぞは、時々、こゝから怒鳴つてるわ。
光子　まあ。
妻　やかましい會社から歸つて來て、やつと落ついたと思ふと、あの騷ぎなんですもの、怒鳴るのは無理ぢやないと思ふわ。
光子　でも、あんまり大きな聲を出したりなんぞしちや、御近所に惡るかなくつて。
妻　妾も、それを心配して言ふんですけれど、ききやしな

いわ。大體、子供なんてものは、一軒の家に一人あつたら結構だ、それだのに、うちの近所ときたら、平均三人位づつもゐやがるからうるさいんだ、なんて——。

光子　まあ。——そんなことを言つたら、兄さんは、自分で自分の顔に唾をかけてるようなもんだわ。三人なんて生やさしいわ。うちの兄弟は、皆で、八人ぢやないの。

(笑ふ)

妻　(笑つて) それやさうね。——おや、夏子ちやん、いつのまにかねちやつたのね。

光子　もうねる時分なの。

妻　(立つて) 布團を出しませう。

光子　ええ、どうぞ。

妻　(布團を出して) こつちの方が涼しさうね。

光子　ええ、そこで結構。(赤坊をねかしつける)

妻　お茶でも入れませうか。

光子　もう澤山よ。勝子達は遲いのね。

妻　もう歸るでせう。

光子　あなたも大へんね。

妻　どうして。

光子　すつかりお母様にしちやつて。

妻　頼りないお母様ね。

光子　うちでもさう言つてたわ。姉さんは、本統に感心だつて。

妻　いやだわ。

光子　いえ、本統。うちでもね、兩親さへ一緒でなかつたら、小さい人を二人位ひきうけてもいいんだがなあつて言つてゐるわ。

妻　だつて、夏子ちやんがあつちや大へんだわ。

光子　でもね、皆、よくあなたに懷(なつ)いてゐるから安心だわ。

妻　それだけわね。

光子　九州から來る手紙には、いつだつて、そのことを喜んでかいて來てゐてよ。

妻　お父様やお母様のお氣に入るやうに育てることは、とても出來ないと思ひますけれど、これでも、妾一生懸命やつてるのよ。

光子　いいのよ。お母様なんか舊弊だから、もうこれからの子供を育てることなんか出來やしないわ。それよりか、あなたが、皆を自分の子供だと思つて、構はず、新しい育て方をして下さればいいんだわ。

妻　そんなこと——。

光子　妾、夏子が生れてから、色々、子供の教育のことを考へさせられたわ。

妻　そりやね。

(美子が學校から歸つて來る。小學校の一年生)

美子　只今。——あ、麻布の姉さん、夏ちやんは。
妻　夏ちやんはねんねしてるのよ。起しちや駄目よ。
光子　勝ちやんは、どうしたの、
美子　お當番だから、まだよ。
光子　さう。おやつをあげませうか。
美子　ええ。
妻　あ、駄目、駄目、そんなおててぢや。裏へ行つて、お顔とおててを洗つていらつしやい。
美子　はい。（裏へ去る）
妻　どうして、あんなによごして來るんでせう。
光子　ほんとうにね。
妻　エプロンでも、靴下でも、一日で眞黒なんですもの。
光子　やつかいね。
（美子出て來る。）
妻　おお、早いこと。おりこうね。
光子　はい。（菓子をやる）
（生籬の外へ近所の女の兒が來る。）
女の兒　美子ちやん。遊びませう。
美子　はい。（菓子を妻に預けて）後でね。（そのまゝ外へ飛び出して、二人で走り去る）
光子　まあ。
妻　あんなに遊びたいものでせうか。

光子　（時計を見て）さ、妾も、もうお暇しますわ。
妻　あら、どうして。
光子　これから新橋の驛で、うちと落ち合つて、活動を見に行く約束なの。
妻　御飯をたべて行つて下さればいいのに。
光子　いいわ、又來ますわ。（赤坊を抱き上げる）
妻　さう。
光子　兄さんによろしく。
妻　ええ。（赤坊をのぞいて）まあ、可愛いこと。
光子　（赤坊に頰ずりして）おお、いい子だこと。もう笑ふのよ。ほら。
妻　あ、ほんと。夏子ちやん。ばあ。
光子　ね、笑ふでせう。ほら、ばあ。——ぢや、さようなら。
妻　さようなら。又ね。
（妻は、光子を送り出して、歸つて來る。そして、そこいらを片づけながら、時計を見て、割烹衣をつけながら去る。）
（さつきの戰爭ごつこの群が、又通る。）
（勝子が歸つて來る。小學校の四年生。）
勝子　只今。
妻　（聲）お歸んなさい。

勝子　姉さん、美つちやんは。
妻　（聲）おんもでせう。――（出て來て）おやつ、あげませうか。
勝子　ええ。
妻　（菓子を與へて）今日は遲かつたわね。
勝子　ええ。御當番だつたの。――ねえ、姉さん、妾、今日、困つたわ。
妻　どうして。
勝子　今日ね、先生がねえ、皆に兄弟の數をおききになつたの。
妻　兄弟の數つて。
勝子　兄弟が何人あるかつて。
妻　あ、さう。
勝子　そいでね、いつとはな、一人の人は手をおあげなさいつておつしやつたの。
妻　何人位あつて。
勝子　六人位だつたわ。その次が二人の人。
妻　それは多かつたでせう。
勝子　ええ。十二三人。
妻　さう。
勝子　それから、三人の人。
妻　それは。

勝子　十人位あつたわ。
妻　（うなづく）――。
勝子　それから四人の人はね、五人しかなかつたわ。
妻　それやさうでせうよ。
勝子　五人の人はないの。
妻　さうかしら。
勝子　ええ。六人の人は二人よ。
妻　二人。
勝子　ええ。ねえ、姉さん、妾、困つたわ。
妻　どうして。
勝子　だつて――。
妻　何がだつてなの。
勝子　でもね、段々、手をあげる人の數がへつて行くんですもの。
妻　それやさうだわ。
勝子　そしてね、皆が、妾の顏を見るの。
妻　どうして。
勝子　だつて、妾、いつまでたつても手をあげないんですもの。
妻　（笑ひ出して）だつて、それや仕樣がないぢやないの。
勝子　妾、なんだか愧しくなつちやつたの、でね、妾、たうとう嘘をついたわ。
妻　それは。

妻　嘘つて。

勝子　先生が七人の方つておつしやつたとき、手をあげてしまつたの。

妻　…………。

勝子　だつて、うちぢや、麻布へいらした姉さんをいれると八人でせう。

妻　ええ。

勝子　妾、とても、それまで、辛抱しきれなかつたわ。――それでも、皆は、笑つてよ。だつて、七人の時に手をあげたのは、妾一人なんですもの。

妻　（苦笑する）――

勝子　妾ね、皆が、あまり、くす〱笑ふので、何だか悲しくなつちやつたわ。

妻　まあ、お馬鹿さんね。――それはね、皆さんは、きつと、御兄弟が尠ないので、勝子ちやんが羨やましかつたのよ。さうだわ。さうだわ。きつとさうよ。

勝子　さうかしら。

妻　え、さう。だから、何にも、愧かしいことなんかありやしないのよ。

（友子が歸つて來る。女學校の四年生。）

友子　只今。

妻　あ、お歸りなさい。――さ、勝子ちやん、晩御飯まで、おんもで遊んでおいでなさい。美つちやんも行つてるから。

勝子　ええ。（去る）

友子　姉さん、今、終點の所で、麻布の姉さんに逢ひましたよ。

妻　さう。

友子　夏ちやん、可愛くなつたわね。

妻　可愛いわね。

友子　妾、あんな赤ちやん欲しいわ。

妻　（笑つて）それぢや、麻布へ行つて、夏子ちやんを貰つてくるといいわ。――今日はね、麻布の姉さんとおしやべりをしてゐてお勝手が後れたの。手傳つて頂戴。

友子　ええ。今晩のお菜、なあに。

妻　コロツケよ。

友子　コロツケなら、妾、ならひたてのほや〱だわ。

妻　（笑つて）ぢや、ノオト御持參で來て頂戴。

（二人は、笑ひながら去る。）

（間）

（研三が歸つて來る。中學の三年生。）

研三　只今。（二階へ上る）

妻　（聲）お歸りなさい。

（間）

（戰爭ごつこの子供達が又通る。）

（主人が歸つて來る。）

主人　おい。

妻　（顏を出して）あ、お歸んなさい。

主人　どうも、仕樣がないな、近所の餓鬼共は。

妻　お晝からずつとあの通りですわ。

主人　段々日が永くなつて來るんだから、益々やりきれんな。

妻　あの、妾、一寸、今、手がはなせませんの。着物、向うに出してありますわ。

主人　あ、よし、よし。（奥へ入る）

研三　（二階から下りて來て）姉さん、御飯はまだですか。

妻　（聲）まだよ、今、友ちやんと大車輪でやつてるの。

研三　早くして欲しいな。今日は、晝飯に、パンを二十錢たべたきりなんです。

妻　（聲）まあ、二十錢もたべて、それでもお腹がへるの。

研三　それやへりますよ。放課後、柔道をやつたんですもの。

妻　（聲）そんなにお腹がへるのなら、柔道なんてよすといいんだわ。

研三　そんなことを言つたつて——

妻　（聲）もういいわ、そんなこと。もう三十分もしたら出來るんだから待つて頂戴。

研三　三十分。

妻　（聲）ええ。

研三　いやんなつちやうな。

妻　（聲）戸棚におせんべがあるわ。それでもおあがり。

（研三は、煎餅をとり出してたべる。主人が出て來る。）

研三　お歸り。

主人　また食つてゐやがる。どうして、そんなに腹がへるんだ。もうすぐ飯ぢやないか。

研三　だつて——

主人　お前はどうも食ひすぎる樣だな。時々腹が痛くなるのは、そのせゐだぜ。

研三　そんなことありませんよ。

主人　いや、さうだよ。今に、胃擴張になつてしまふぞ。——おい、夕刊が入つてないか見てくれ。

研三　はい。（去る）

（主人は煙草をつけて茫然としてゐる。）

（やゝ遠くて、子供達の喚聲がきこえる。）

研三　（夕刊を持つて來る）はい。（渡す）

主人　お前、勉強したのか。

研三　まだです。
主人　勉強は明るい中にやつておいて、夜は早く寢るやうにしなくちやいけないぜ。お前、昨夜も遲くまでやつてゐたらう。
研三　ええ。
主人　そして、電燈をつけつ放しで寢てしまつたらう。
研三　さうだつたかな。
主人　さうだとも、俺が消してやつたんだ。だめだぜ、電燈は消して寢なくちや。體の爲にもよくないし、第一、メエトル代が增えて仕樣がない。——さ、二階へ行つて勉强をして來い。
研三　ええ。（去る）
（主人は夕刊に眼をおとす。）
（子供達の聲が段々大きくなる。）
主人　ちえツ。まだやつてやがる。おい。
妻　（聲）はい。
主人　どうして、うちの近所はこんなに子供達が多いんだ。
妻　（聲、友子に）また始つたわよ。（笑ふ）
主人　いやんなつちやうな。俺が、そも〳〵こゝへ引越して來たのは、閑靜だつたからだぜ。それだのにどうだ、此頃のあの騷ぎは。
妻　（聲）だつて、そんなこと言つたつて、無理ぢやありませんか。遊びたい盛りが集つてるんですもの。
主人　遊ぶつてのはあんなんぢやない。
妻、友子　（聲、笑ふ）——
主人　一體、親の育て方が悪いんだぜ。
妻　（聲）そんなことないわ。
主人　いや、さうだよ。俺なんざ、子供の時分、あんな眞似はしなかつた。
妻、友子　（聲、笑ふ）——
主人　笑ひごとかい。——會社で一日頭の中がのぼせ上つてゐるのに、家へ歸つて來て、又あの騷ぎぢや、やりきれないよ。
妻　（聲）それやさうね。
主人　——引越さうか。
妻　（聲）又。
主人　いや、ほんとにさ。
妻　（聲）だめだわ。
主人　どうして。
妻　（聲）どこへ行つたつて、子供のゐない所なんぞありやしませんもの。
主人　——うむ。一體、世の中に、子供の數が多すぎるよ。一軒の家に一人位で澤山だよ。

妻　（聲）又、おはこが始まつた。

主人　俺は、眞理を言つてゐるんだよ。――今日もね、歸り路で、幼稚園の生徒だらう、五六十人、列をくんで歩いてゐるのに出逢つたんだ。手をつないで、歌を唄ひながら歩いてゐる姿は、可愛いらしいと言ふんだらうが、俺は可愛いらしいと感じる所か、憂鬱になつたぜ。

妻、友子　（聲、笑ふ）――

主人　さうかな。をかしいかな、俺がさう感じるのは。

妻　（聲）だつて――ぢや、賴んでよ、友ちやん。（出て來る）だつて、それや、あなた、をかしいわ。

主人　いや、ちつとも、をかしくないさ。おい、これを見ろ。（夕刊を示す）

妻　なあに。

主人　內閣統計局の發表する所によると、去年中の內地の人口の自然增加が、實に、九十四萬と言ふんだ。

妻　まあ。

主人　約百萬の人間が增えたんだ。去年一年で。日本開闢以來の盛況であるとかいてある。盛況はいいな。

妻　百萬とは大へんね。

主人　まあ、聞けよ。――（讀む）年々百萬の人間が一道三府四十三縣に增えて行く。其結果はどうなるか。食糧問題、失業問題等、深刻なる種々の社會問題は、この事實に關聯して、直ちに同胞の胸をうつのである。この事實を社會はどう見てゐるか。――ほんとに、他人事ぢやないよ。

妻　さうね。

主人　政務次官の談と言ふのがあるぜ。――（讀む）マルサスの人口論は確かだ。貧乏人は、子を産むことは罪惡ではないが、結果に於いて最善とは言はれない。子を育て得る程の富を得るものならばうんと産むべし。然し、産兒制限――

妻　あなた。（友子の方へ注意をする）

主人　うむ。――この政務次官は、歸する所の心配は食糧問題だけだと言つてゐるぜ。然かも、それならば我輩に名案があると言つてやがる。何だと思ふ、その名案と言ふのは。

妻　さあ。

主人　芋を食へと言ふんだ。芋を。

妻　まあ。（笑ふ）

主人　こいつあ、名案だな。（笑ふ）

妻　あ、さうさう、妾、忘れてましたわ。お父樣からお手紙が來てますわ。

主人　さうかい。（夕刊に讀みふける）

妻　（手紙をとつて渡して）何の御用かしら。至急つて書

いてあるわ。
主人　至急。——何だらう。（封をきつて讀む）
妻　お母様でも悪いのぢやないかしら。
主人　——何んだ。
妻　なあに。
主人　商用旁々、一度、皆の顔を見に上京するとさ。
妻　へえ。
主人　お袋に留守番をさせて、厚をつれてたつとさ。
妻　まあ。
主人　厚が動物園へ行きたがつて仕様がないから——
妻　のんきね。
主人　子煩惱な親父だな。
妻　で、いつおつきになるの。
主人　（指をくつて）この様子ぢや、明日か明後日だな。
妻　まあ、急ね。——友ちやん、お父様がいらつしやるんですつて。
友子　（聲）え、ほんと。（顔を出す）
妻　厚ちやんをつれてですつて。
友子　まあ、嬉しい。
主人　厚の奴、まだ、ぴい〳〵泣くだらうな。
妻　——友ちやん、もういいの。
友子　もう少し。

妻　ぢや、お講だけ、先に出しませうか。
友子　ええ。
（二人は去る。）
（子供達の聲、次第に大きくなり、遂に生籬の外で、喚聲をあげて、亂鬪を始める。）
主人　（突然）——うるさい。
（子供達は一寸靜まる。）
主人　いつまで騒いでゐるんだ。もういい加減にやめろ。
（子供達は、四散する。）
（主人は、獨り昂奮して縁側に突立つてゐる。）
（妻と友子は、主人の有様を見てさゝやきながら、膳を運ぶ。）
（勝子と美子の唄ふ童謠の聲が近づいて來る。）

——幕——

## 第二幕

夜。
主人は、友子に英語を敎へてやつてゐる。
妻は編物をしてゐる。
その側で勝子と美子が繪をかいてゐる。

主人　——判つたかい。
友子　ええ。

主人　それから。
友子　(頁をくつて) あ、さうさう、ここ。
主人　どれ。――なんだ、なんでもないぢやないか。
友子　だつて、此の字、字引にないんですもの。
主人　うそつけ。あるよ。
友子　ないわ、いくら捜しても。
主人　第一捜し方が拙いんだよ。――字引なんか捜さなくたつて、こんな單語位知つてるだらう。
友子　どれ。
主人　この字さ。このお終のTとHがなけりやなんだ。
友子　ギブ。
主人　何てことだ。
友子　與へる。
主人　判つてるぢやないか。與へるさ。
友子　だつて。
主人　判らない奴だな。動詞の三人稱單數現在にはSがつくこと位は敎はつたらう。
友子　ええ。
主人　それぢや、これは、ギブスぢやないか。
友子　だつて――
主人　よく、だつてだつてと言ふ女だな。THはSの發音と同じぢやないか。これは詩だからSをつかはないで、THをつかつてあるんだ。その次のテエクの尻のTHも同じことだ。
友子　なんだ、さうなの。ぢや判つたわ。
主人　譯して見ろ。
友子　主人は與へる。そして、主人は取る。
主人　馬鹿。この Lord を主人なんて譯す奴があるものか。――主は與へ、主は奪ひ給ふ。主つて、神様のことさ。
友子　まあ、さうなの。
主人　駄目だよ、お前は。女學校の四年なんて、實に低脳たもんだな。
友子　だつて、兄さん――
主人　また、だつてかい。
妻　あなた、そんなに言ふものぢやないわ。それぢや、敎へてやるのぢやなくつて、叱つてるんだわ。ねえ、友ちやん。
友子　きらひ、兄さん。
主人　さうかい。それで、俺は助かつたよ。
友子　いいわ。一人でするから。(字書を探り始める)
主人　お茶でも入れろよ。
妻　ええ。(編物をおいて茶を入れる)
主人　なんだい、それは。

妻　葉ちやんのスリツプ・オオバア。

主人　なんだ。――おい、稀には、俺のネクタイを編むとか、靴下を編むとかしろよ。

妻　ええ。――（茶を出して）少し苦いかもしれないわ。

（又、編物にかゝる）

主人　（のんで）贅澤だよ、子供にそんなものをきせるなんて。

妻　でもね、洋服があんまり汚れてゐるんですもの。――買つてやりたいけれど……

主人　買ふことあないさ。まだ結構きてられさうぢやないか。エプロンでもかけさせればいいのに。

妻　エプロンぢや一日で眞黒に汚してきますわ。洗濯が大へんなんですもの。

主人　厄介だな。美子、お前、學校であんまり惡戲をするなよ。

美子　（きづかないでクレオンを動かしてゐる）――

妻　そんなこと言つても駄目ですわ。こんな子供に。

主人　（伸びをして）明日は、日曜か。おい、明日の朝は、俺がおきるまで起したら承知しないぞ。

妻　ええ。どうぞ、御ゆつくり。

（研三が二階から下りて來る。）

研三　兄さん。

主人　うん。

研三　幾何を敎へて下さい。

主人　幾何だ。

研三　ええ。どうしても出來ないんです。

妻　あなた、敎へておやりなさいよ。

主人　――出して見ろ。

研三　これです。この五番です。

主人　どれ。（本を手にとつて見る）――鉛筆と紙をかせ。

研三　あ、二階へおいて來ました。とつて來ませう。

主人　馬鹿。人に物を敎はるのに、ちやんと準備をして來ないつて奴があるものか。友子、一寸、かせ。

友子　はい。（鉛筆と紙を渡す）

主人　（紙へ圖を畫いて考へる）――一寸、難かしいな。

研三　ええ。

主人　（鉛筆を投げ出して）駄目だ。出來ないよ。

研三　困つたな。

主人　お前、敎室で、先生の言ふことをよくきいてゐないんだらう。――今の俺に幾何や代數をやれと言つた所で無理だぜ。俺は、中學以來、お目にはかかつてゐないんだからな。その上、この所五六年と言ふものは、人のさつの勘定と數字を寄せたり引いたりしてゐるだけだからな。――もつと自分で考へて見ろ。

研三　先刻から隨分やつたんですけれど――
主人　出來るまでやりやいいぢやないか。
研三　（立ち去らんとして）兄さん。
主人　何だ。
研三　來週の金曜から土曜へかけて、修學旅行があるんです。
主人　何處へ行くんだ。
研三　日光です。それで、旅費を、今度の月曜に納めなきあならないんです。
主人　いくらだ。
研三　五圓です。
主人　行かなくちやいけないのか。
研三　行かないものは、醫者の診斷書がいるんです。
主人　うるさい學校だな。日光なんて行つたつて仕樣がないぢやないか。
妻　でも五圓で一晩泊つて來られるのなら、安いわね。
主人　――よし。よし。あした姉さんから貰へ。
研三　はい。（去る）
勝子　姉さん。
妻　なあに。
勝子　妾ね、運動靴、破れちやつたの。
妻　まあ。もう破れたの。
勝子　ええ。
妻　隨分早いのね。
主人　いつ買つたんだい。
妻　ついこの間だわね。まだ一月になるかならないかだわ。
主人　それでもう駄目かい。驚いたね。又、何だつて、運動靴なんてものが必要なんだらう。運動場なら、普通の靴をはかしたつていいぢやないか。
妻　それがね、中々大へんなのよ。お教室に入る時は、上靴つてのをはくの。そしてその他に運動靴がいるんですもの。
主人　馬鹿にしてやがるな。そんな贅澤な學校かい、あすこが。
妻　贅澤と言ふのぢやないわ。ただ、そんな規則になつてゐるの。
主人　つまらないことだね。俺達は、高等學校では、平氣で、下駄のまゝ教室へ入つたがな。
妻　そんなこと、言つたつて――
主人　仕方がない。明日にでも買つてやれよ。
妻　ええ。明日、買つてあげるわね、勝子ちやん。
勝子　ええ。
妻　あ、美つちやんは、もう寢ちやつたわ。勝子ちやん、

あなたも、もうお休みなさいな。
勝子　ええ。
妻　友ちやん。美つちやんを抱いていつてよ。そして、あなたも、もう寢るといいわ。
友子　ええ。――ぢや、お寢みなさい。（美子を抱く）
勝子　お寢みなさい。
（友子と勝子は二階へ上る。）
主人　もうよせよ、そんなもの。
妻　でも、もう少しなの。
主人　眼を惡るくするぜ。――今日、光子が來たんだつて。
妻　ええ。あなたに言はなかつたかしら。
主人　うむ。一人でかい。
妻　夏子ちやんをつれて。
主人　何にしに來たんだ。
妻　只、遊びにだわ。妾、晩御飯までつてとめたんだけれど、今日は、活動を見に行く約束だからつて――
主人　活動を。誰と。
妻　きまつてるぢやないの。
主人　さうか。夫婦相和しつて奴だね。
妻　――光子さんはいいわね。
主人　どうして。
妻　ああして出て歩けるんですもの。
主人　うむ。――
妻　御免なさい。又、嫌なこと言ひ出して。
主人　…………………。
妻　でもね、妾、ほんとに羨やましいと思ふわ。御主人に兄弟はなし、…………
主人　…………………。
妻　妾ね、決して小さい人達の世話をするのが嫌ぢやないの。一生懸命になつてやつてゐますわ。――でもね、これが、せめて、一人だけでも自分の子供だつたら……
主人　（妻の顏を見る）……
妻　今日、つく〴〵、さう思つたの。光子さんが夏子ちやんに頰ずりして――
主人　馬鹿。
妻　（驚いて、顏を見る）――
主人　よせ。つまらない。
妻　どうして。
主人　俺は、そんなこと、ききたかあないよ。子供。子供なんてものの何處が可愛いんだ。俺達は、子供の爲めに、どんな生活をしてゐると思つてゐるんだ。よせ、よせ。もうよしてくれ。
妻　（うなだれる）――
主人　俺は、さつき、幼稚園の生徒を見て憂鬱になつたと

言つたね。然し、俺の本統の心は、憂鬱なんて生やさしいものぢやないんだ。絶望だ。絶望するんだ。

妻　まあ。

主人　考へても見ろ。俺は大學を出てから今日まで、どう言ふ人生を送つて來たんだ。お前は、俺の女房になつてから、今日までどんな生活をして來たんだ。そして又、これから、恐らく、俺の頭が白くなるまでどんな生活をして行かなければならないか。考へて見ろ。

妻　…………

主人　光子のことは知らない。光子は、親父がちやんと嫁がしたんだから、俺は知らない。然し、新次から後の六人はどうするんだ。今年二十二の新次からやつと三つになつた厚まではどうなるんだ。

妻　そりや、あなた、お父様だつて、決して、あなた一人に皆の面倒を見させようなんてお考へになつたんぢやないわ。

主人　そんなことは判つてゐるよ。零落した現在の親父が、ちひさい子供達のことについて、どんなに心を痛めてゐるかと言ふことも、俺にはよく判つてゐる。然し、俺の今言つてゐることはそんなことぢやないさ。もつともつと、俺達自身の心の中の問題なんだ。——俺にしたつてお前にしたつて、まだ若いんだ。明るい人生が欲しい。樂しい生活が望ましい。それだのに、俺達の實際生活はどうだ。實際生活と言ふ言葉でいけなければ、俺達の精神生活はどうだ。——尠くとも今から二十四五年の間は、分にすぎた重荷を背おはされてゐるぢやないか。二十五年だぜ。二十五年だぜ。その永い年月の事を考へると憂鬱にならざるを得ないぢやないか。いや、俺は、絶望をさへ感じてゐるんだ。俺の頭が眞白になり、お前が皺くちや婆になつて、初めて、俺達夫婦は、二人きりになれるんだぜ。これが、お前、平氣でゐられるかい。

妻　そんなことを言つたつて、どうする譯にも行かないぢやありませんか。

主人　それやさうさ。どうにもならないさ。現に、かうして、大ぜいの兄弟が、俺一人の瘦腕にぶら下つてゐるんだ。——それだのに、お前は、まだこの上、子供が欲しいのか。お前、今、自分の子供が欲しいと言つたね。

妻　ええ。

主人　ほんとに、欲しいか。

妻　ええ。

主人　何故だ。

妻　ほんとの子供だつたら、たとへ、どんなに苦しい思ひをしても……

主人　…………………

妻　さうぢやないでせうか。

主人　…………………

妻　こんなこと言つても、妾は、決して、うちの人達が、世話甲斐のない人だとは思つてやしません。皆姉さん姉さんと言つて、したつてくれるのは、嬉しいと思つてゐますわ。――でも、やつぱり駄目。何かしら淋しいの。何かしら不滿なの。どうしたつて、どこまで行つたつて、兄弟と親子とは違ふと思ひますわ。

主人　…………………

妻　妾、あなたの氣持だつて、よく判つてる心算ですわ。判つてればこそ、妾は、尙更、自分達の子供と言ふもので、少しでも救はれたいと思ふの。――さうぢやないでせうか。

主人　違ふ。

妻　どうして。

主人　お前の心持は、まだ、そんな處をぶらついてゐるのか。女つて奴は、いつまで經つても、空想家で、感傷家だな。

妻　あら、どうしてでせう。

主人　お前の今言つてゐることは、徹頭徹尾、空想だよ。そして、感傷だよ。センチメンタリズムだよ。――飛んでもないことだ。俺達は、もつと、もつと、實際家でなきや駄目だよ。眞正面から、實際の人生にぶつからなきあ、この戰爭は敗けだ。きつと敗けだ。

妻　判らないわ、妾。

主人　おきき。お前の考は、現在の、この耐へきれない重荷の上へ、更にもう一つの重荷を、自ら求めてゐるんだぜ。重荷だとも。子供を育てることは、恐らく、女の一番大きな、むごたらしい重荷だよ。お前はそれで救はれようと言ふんだらう。ところが、どうして、救はれるものか。かりに、救はれる所があるにしても、それこそ、ほんの少しだ。これつぱかりの救しか得られやしないよ。それと引かへに、現在よりも複雜な、現在よりも苦しい重荷を、求めようと言ふんだ。馬鹿な。そんな無謀な冒險は嫌だ。俺は眞平だ。

妻　あなた。

主人　もう一度、よく、現在の俺達のことを考へて見るがいい。――一體、俺達は、何のために生きてゐるんだ。俺は、何のために、あくせく働いてゐるんだ。皆、皆、うちにゐる子供達のためぢやないか。六人の兄弟のために、俺は、俺の總てをつくしてゐるんだ。――それもいい。今、親父があゝして、經濟的にはどうすることも出來ない樣に零落してしまつたんだから、その親父の代りをするのが、長男である、俺の務めなんだらう。さう言

ふ運命なんだから諦めるんだなと、俺は、人によく言はれつけてゐる。――それや、經濟上の負擔だけのことなら、俺は、寧ろ、喜んで、俺の義務とやらをつくすんだ。それだけの問題なら、何の苦勞もあるものか。所が、實際は、決して、それだけではすむ筈がない。精神的にも、苦しい重荷をせおはされてゐるんだ。例へば、俺とお前の夫婦生活はどうだ。お前は、俺の女房になつた日から、俺の女房と言ふよりは、大ぜいの子供達のお袋だつたぢやないか。俺達は、夫婦生活の悟道に入る前に、もう人の兩親の務に入らなければならなかつたのだ。――俺は、幾度か、お前にすまなく思つた。可哀さうだと思つた。何遍も何遍も、俺は、心の中でお前に謝つてゐるんだぜ。

妻　…………

主人　この複雜さの中で、この煩雜さの中で、俺とお前は、若い時代を失つてしまはなければならないかと思ふと、俺は、悲しいと言ふよりもくやしかつた。――本統を、本統を言へば、俺は、親父やお袋を怨んだよ。――兄弟八人。世間の人はお賑やかで結構でございますと言やがる。何が結構なものか。――俺は、俺は、言つちやならない最後の一言を、親父やお袋に言つて、愧かしめてやらうとさへ思つたことがあるんだぜ。

妻　あなた。――

主人　案じることはないよ。俺だつて、人の子だ。そんなことは、決して、口にや出しやしないよ。――然し、ある時には、もしも、これが、金ですませるものなら、俺は、たとへどんな苦しい思をしても、金だけの關係にしてしまひたいと思つたこともある。だが、情ないことには、それも出來ない。そこまで強くはなり切れないのだ。少し頭の變な時なんぞは、お前と二人だけで、全然、知らない山の中かなんかへ逃げこんでしまひたいとさへ思ふことがあるのだが、やつぱり駄目なものだね。

妻　（微かに微笑む）――

主人　結局、俺とお前は、この苦しい中で生きて行かなきあならないんだ。俺はお前にすがり、お前は俺にすがつて、戰つて行かなければならないんだ。道は一つだ。外に救の手はないんだ。――俺は、お前が、俺の所へ來た時から、固く決心してゐるんだ。あの晩、俺の言つたことを、お前は忘れたかい。

妻　――

主人　俺達は、生涯子供はつくるまい。――俺は、訝かるお前に、謝まる樣にして、さう言つた。

妻　（うなづく）――

主人　この上子供があつたら、どうなる。俺達は、身も心

も、すり切れてしまふに相違ない。それを想へば俺とお前が、二人きりで、信じ合ひ扶け合つて、この苦しい運命を切り抜ける方が、どれだけ樂しい、生き甲斐のあることか判らない。――俺は、たしかさう言つた。

妻　（うなづく）――

主人　あの時、お前が、快く俺に同意してくれた嬉しさは、今でも忘れやしない。――俺だつて、自分の子供と言ふものを想像しないことはない。執着もあつた。希望もあつた。然し、それぢや、俺達自身が危いと思つたんだ。俺は、眼をつぶつて、その執着や希望をすてゝしまつたのだ。言つて見れば悲しいことだよ。情ないことだよ。然し、それ以上の悲しさや情なさの起ることを想ふと、俺は、勇敢に、決心したんだ。さうだ、勇敢に、寧ろ、悲壯に。

妻　（微かに泣く）――

主人　俺達のして來たことは、或る人には、道德上の問題として非難されるだらう。然し、然し、そんな非難を恐れてゐて、我と我手で墓穴を掘る氣にはなれないからな。――泣くなよ。みつともないぜ。俺は、今日、又、こんなことを言ひ出したのは、決して、お前を叱つてゐるんぢやないぜ。叱るどころか、子供が欲しいと言ふお前の言葉には、却つて、こつちが泣かされてるんだ。――然し、そこを諦めろと言つてゐるんだ。――叱るどころか、俺は、俺は、お前に、因果をふくめてゐるんだぜ。

妻　（嗚咽する）――

主人　泣くなよ。二階へ聞えるぜ。（自分もそつと泪を押へる）

（玄關の開く音。）

（新次が入つて來る。高等學校の三年。）

主人　新次か。――どうしたんだ、今頃。

新次　今夜は、會があつてね、もう寮まで歸るのは面倒だつたから。

主人　泊つて行くのか。

新次　ええ。

妻　新次さん、この前の日曜には、どうして來なかつたの。

新次　ボオルを見に行つちやつたんです。

妻　うちぢや、隨分、待つてたのよ。御馳走をこしらへて。

新次　さうですか。そいつはすみませんでしたね。――あ、さうさう、今日、夕方、麻布の姉さんに逢ひましたぜ。

妻　どこで。

新次　銀座で。夫婦つれでね。

妻　さう。一寸、うちへも見えたわ。

新次　さうですか。夏公は大きくなりましたね。可愛らしいや。
妻　さうね。
新次　姉さんも、いゝ加減に、一人位產むといゝんだ。
妻　まあ。
新次　ほんとですよ。隨分可愛いと思ふな。
主人　よせ、新次。
新次　え。
主人　俺は子供は嫌ひだよ。大嫌だ。
新次　さうかな。
妻　兄さんは、いつでもさう言つてるわ。
新次　それぢや仕樣がない。（笑ふ）
妻　新次さん、おなかはいゝの。おそばでもとりませうか。
新次　いえ、もう澤山。
妻　ぢや、これでも。（菓子と茶を出す）
主人　新次、お前、この次來る時、古本屋でも搜して、マルサスの人口論を買つて來てくれないか。
新次　へえ。マルサスの人口論。——何するんです。
主人　勉强するのさ。
新次　今時、不思議なものを讀むんですね。
主人　賴むぜ。

新次　えゝ。
（玄關で「電報」と言ふ聲がする。）
（新次が、立つてとつて來る。）
主人　（うけとつて見て）親父だ。
新次　どうしたんです。
主人　明日の朝つくつてんだ。
新次　え。
妻　まあ。急ね。
主人　皆の揃つた顏を見たいんだらう、光子も新次も呼んでおけとさ。
妻　まあ。
新次　何しに來るんです。
主人　商用旁々、皆の顏を見に行くと言ふ、手紙が來てるんだ。
新次　なんだ。
妻　光子さんの方はどうしませう。
主人　おい。研三、研三。
（研三が返事をして下りて來る。）
研三　（新次を見て）あ、ゐらつしやい。
主人　研三、光子の處へ電報をうつて來てくれ。明日朝來いと。
研三　はい。

（妻は、金を出して渡す。）

新次　（研三は出て行く。）親父の方の仕事は、少しはうまく行つてゐるんですか。

主人　駄目らしい。

新次　困りますね。

主人　仕樣がないさ。

新次　兄さん一人に迷惑をかけて、本統にすみませんね。

主人　――

新次　ねえ、兄さん。

主人　何だ。

新次　僕ね、最近、ひよつとしたら、家庭教師の口があるから、行かうかと思つてゐるんですが。

主人　――

新次　さうすれば、兄さんにも少しは樂をして貰へると思へるんです。

主人　一體いくらくれるんだ。

新次　さあ、友達の話ぢや、一週間に三度行つて、月三十圓位くれるだらうつて言ふんですが。

主人　よせよ、つまらない。

新次　どうしてゞす。

主人　三十圓の金で、低能兒のお相手をするなんぞは氣がきかないよ。そんな心配はしずに、のんきにしてゐろよ。――俺は、高等學校の時分から自分で生活してきたから、その苦しさとみじめさはよく知つてゐるんだ。切角、のんびりと愉快にすごせる高等學校生活を、それつ位の金で慘めなものにするのは惜しいよ。出來ないのならとにかく、お前の學資位は、どうにかやりくり出來るんだから、安心して、のんきに暮らす方がいゝな。

新次　えゝ。有難う。

主人　俺のことを心配してくれるのは結構だが、今のお前は、それよりも、もつと自分自身のことを考へなきやいけないぜ。今の樣な生活は、もう二度とは來ないのだから。

新次　えゝ。えゝ。

主人　金の要る時には、どん〳〵言へ。決して遠慮なんぞするんぢやないぜ。俺に出來ることなら、いくらでもしてやるからな。

（間。）

（研三が歸つて來る。）

研三　うつて來ました。

妻　御苦勞樣。

研三　（新次に）兄さん。

新次　何だい。

研三　幾何を敎へて下さい。

主人　さうだ。俺よりは、新次の方が、まだたしかだらう。（笑ふ）

新次　よし。敎へてやらう。（立つ）

妻　新次さん、寢る時に、さう言つて頂戴。布團は下にあるから。

新次　えゝ。自分で持つて行きますよ。

（新次と研三は二階へ上る。）

妻　あなた。

主人　何だい。

妻　あなたは、隨分、見榮坊ね。

主人　どうして。――あ、今のことか。

妻　えゝ。

主人　うん。見榮坊だよ。今、知つたのかい。

妻　でも。

主人　でも。

妻　氣の毒だわ。あなたが。（微かに泣く）

主人　（手をとつて）いゝんだよ。いゝんだよ。心配はするな。俺は、まだ〱倒れやしないよ。

（妻の嗚咽は、次第に高くなる。）

（主人は、妻の手をとつたまゝ、ぢつと瞑目してゐる。）

（柱時計が九時をうつ。）

――幕――

## 第三幕

朝。

父を中心にして、新次、友子、研三、勝子、美子、妻がゐる。

父の膝には、厚がゐる。

妻　――さ、厚ちやん、一度、姉さんのお膝へいらつしやい。

父　だめだよ、厚は。少し逢はない中に、皆の顏を忘れてしまつたらしいよ。

妻　まあ、さう、厚ちやん。

父　光子は來てくれるかい。

妻　えゝ。昨夜、電報をうつておきましたから。

父　さうか。それは有難う。光子が來たら、皆で、上野の動物園へ行かうと思ふんだ。

新次　動物園ですつて。

父　うむ。厚が汽車の中から、それを言ひ通してゐるからな。一つ、皆揃つて出かけようと思ふんだ。

妻　でも、今朝おつきなすつたばかりで、お疲れぢやないでせうか。

父　なあに。なんともないさ。それに、かうして、皆の元氣な顏を見ると、旅の疲れなんか、忘れてしまふからな。――勝子や美子は、無理を言やしないかい。

妻　え〻、ちつとも。それやおとなしくつて、えらいんですよ。（勝子と美子に）ねえ。

父　さうか。それはえらいな。お母樣に知らせてやつて、ほめて貰つてやらうな。

妻　え〻、どうぞ。

（玄關の開く音がする。）

勝子　麻布の姉さんよ、きつと。（美子と二人で迎に行く。）

（夏子を抱いた光子が入つて來る。）

勝子　（後から）姉さん、これから、皆で、動物園へ行くんですつて。

光子　え、動物園へ。――今日(こんにち)は。

父　あ、光子、よく來てくれた。

光子　お歸んなさい。突然でしたのね。

父　うむ。――お前の方は、皆、息災(そくさい)か。

光子　え〻、お蔭樣で。

父　どれ〳〵、夏子を一寸見せろ。――うむ。大きくなつたな。

光子　もう笑ひますのよ。

父　さうか。

光子　お母樣は、お變りありませんか。

父　うむ。相不變だよ。

光子　厚ちやん、よく來たわね。

父　さあ、皆、出かける用意をしろ。

光子　え、本統に動物園へいらつしやるんですか。

父　うむ。お前も一緒に行かう。待つてゐたんだよ。

光子　まあ、それは大へんですね。

妻　ぢや、勝子ちやん、美ちやん、おべ〻をきかへませう。友ちやんも早くなさい。研ちやんもね。

（友子と研三は二階へ、妻と勝子と美子は奥へ去る。）

光子　あちらはいかがでございます。

父　どうも、やつぱり不景氣でね。

光子　さうでせうね。――新ちやん、兄さんは。

新次　お湯でせう。

光子　さう。――これで、お母樣さへゐらつしやれば、家中全部揃ふ譯ですね。

父　うむ。さうだよ。かうして、皆の無事な顏が見られると、わしは、本統に嬉しいんだよ。

光子　ほんとにね。

父　新次。

新次　え〻。

父　お前、體は丈夫だらうな。

新次　えゝ。

父　もう、來年は大學だな。

新次　えゝ。

父　一生懸命に勉强してくれよ。

新次　えゝ。

父　もう、わしは年だ。子供が、一人々々、一人前になつて行くのが樂しみで仕樣がないのだ。世間の人はよく、子供が大せいで大へんだなんて言ふが、わしは、さうは思はないよ。慾を言へば、まだ欲しい位だ。大せいの子供が、色々な方面で、立派に一人前になつた日のことを想ふと、わしは、どんなに樂しいかしれない。あつちへ二日、こつちへ三日と、方々の子供達の家を渡り歩くんだ。

光子　まあ、お父樣、大そう年寄くさいことをおつしやるのね。

父　うむ。然し、樂しいものだよ。

（主人が歸つて來る。）

光子　あ、お歸りなさい。昨日はお留守に來まして。

主人　さうだつたつてね。――おや、皆は。

父　なにね、皆で、動物園へ行かうと言ふので、その用意さ。

主人　え、動物園へ。

父　うむ。

主人　これからですか。

父　さうだよ。丁度日曜で、皆、家にゐるから。

主人　そいつは大へんだな。

光子　兄さんもいらつしやいよ。

主人　勘辨してくれ。たまの日曜だ。俺は一日、ゆつくり寢ころがつてゐたいさ。

父　うむ。それやさうだらう。それぢや、留守を頼むかな。

主人　えゝ。

光子　新ちやん、あなたも用意したらどう。

新次　僕はよさう。

光子　あら、どうして。

主人　新次、行つてこいよ。――

新次　ぢや、行くかな。（立つ）

（勝子と美子が出て來る。）

勝子　さ、お父樣、行きませうよ。

父　うむ、行かう。行かう。

（妻、出て來る。）

妻　あ、お歸んなさい。――あなたも、お供なさらない。

主人　いや、俺は助けてくれ。

妻　さう。

父　ぢや、お前、來たらどうだ。
妻　妾、御飯の御支度がありますから。
父　うむ。それもさうだな。
（友子と研三が下りて來る。）
父　さ、皆、できたかい。ぢや行かう。
妻　行つていらつしやいまし。
光子　ぢや行つて來ますわ。
妻　歸りにおよりなさいな。御馳走をしておきますわ。
光子　えゝ、どうぞ。
父　なりたけ早く歸つて來るからな。
妻　どうぞ、御ゆつくり。
（皆、玄關の方へ行く。）
主人　おい。
妻　はい。
主人　傘を渡しておけよ。
妻　えゝ。
（新次が下りてくる。）
妻　あ、新次さん。
新次　え。
妻　（金を渡して、）あなた、これを預つて行つてよ。
新次　えゝ。
主人　新次。——親父は喜んでゐるんだ。嫌な顔をしないで、一緒に行つてくるんだぜ。
新次　えゝ。（出て行く）
（生籬の外を、父を先頭にして、子供達が一列に並んで通りかゝる。）
勝子、美子、　行つて參ります。
妻　行つていらつしやい。
父　（ふり返つて）大せいだな。
光子　一人、二人、三人、四人、五人、六人、七人、八人九人。——まあ。
父　一聯隊だな。
妻　厚ちやん、行つていらつちやい。
新次　おい、おい、そんなに、金魚のうんこの樣に、ぞろぞろ一列になつて歩くなよ。
（皆、笑ふ。）
（子供達は、口々に、行つて參りますと言ひながら去る。）
妻　嬉しさうね。
主人　誰が。
妻　皆が
（子供達の歌を唄ふ聲がきこえる。）
主人　嬉しいだらうさ。嬉しいだらうさ。俺だつて嬉しいぜ。（苦笑する）

（子供達の聲は、段々遠ざかる。）

（主人の苦笑は、やがて、泪に代つて、柱にもたれたまゝ、茫然とする。）

妻　あなた。あなた。――

――幕――

# 能島武文篇

# 裸になる一幕

人

青野七藏
妻　とら
長男一雄
次男松二
木村鈴子

現代

東京の郊外

**情景** 青野家の餘り廣くはない座敷。――鍵の手に廻り緣があつて前は庭になつてゐる。家は新築ではあるが、餘り立派ではない。まだ建つたばかりで、庭などには、唯木を植ゑたと言ふだけで、十分手が行き屆いてゐない。六月頃で、小さいながら庭木が茂つてゐる。

七藏、菜つ葉服のやうな色の剝げた服を着て、石油の空箱に砂利を入れたのを持つてよち〳〵と右手から左手へ通り過ぎる。

しばらくして、また左手から出て來る。今度は石油箱をごろ〳〵引きずつてゐる。

七藏 (空を見上げて)また落ちて來やがつたな。

(鳥渡立ち止まつたが、右手へ行つてしまふ。)

(また右手から砂利を入れて、重さうに抱くやうにして出て來る。一度立ち止まつて息をし、また歩いて行く。)

(今度は空手で歸つて來て、鍬を持つて左手の方へ行く。)

(雨、少し强くなる。)

(とら、緣側へ出て來る。)

とら あなた。もし。あなた。――庭ぢやないのですか。――どこへ行つたんだらう。

(呟きながら、緣端に立つてゐる。右手から傘をさして、木村鈴子出て來る。)

鈴子 奧さん。

とら おや、まあ。

鈴子 また降つてまゐりました。

とら どうでせう。この頃のよく降りますことは。

鈴子 かう降られたんぢや、洗濯物がたまるばかりで。

とら　さあ、お掛けなさいまし。
鈴子　有りがたうございます。
とら　さあ、どうぞ。
鈴子　（縁側にかけながら）旦那樣はお出かけでございますか。
とら　いゝえ。居りますんですけど、どこへ行きましたのやら、さき程から私も探してをりますんですよ。
鈴子　さつきお見かけしましたんですが。
とら　あの、何か、ご用でも。
鈴子　いゝえ。
（左手から、七藏、鍬を下げて出て來る。）
七藏　やあ、奧さん。はゝゝゝ。（鳥渡頭を下げて笑ふ）
鈴子　よくご精が出ますね。
とら　どこへ行つてるんです。隨分呼んだんですよ。
七藏　わしには聞こえなかつたがな。
とら　奧さんも、さつきからお待ちなんですよ。
七藏　やあ、そりや失禮しました。
鈴子　いゝえ。どうせ遊んでゐるんですから。
七藏　なに、こないだからの雨で、すつかり土が流れちやつたから、玄關の前へ砂利を置いてゐたんだよ。
とら　ほんとに何でもやりたがるんですよ。
七藏　あんまりひどいからな、あれぢや。
鈴子　よくお疲れになりませんね。
七藏　それぢや、一つやつていただきませうかな。
とら　何をまたお願ひしたんです。
七藏　うむ、なに、奧さんに花を生けて貰はうと思つてな。
とら　そんなことを。
七藏　好い趣向ぢやないか。折角一雄の野郎が歸つて來るんだから、花でも生けて頂いて驚かしてやらうと言ふんだ。
とら　でも、奧さんにお氣の毒ぢやありませんか。
鈴子　いゝえ。そんなこと、お安いご用でございますよ。
七藏　所でと、奧さん。何を生けて頂きませうかな。
鈴子　何でもよろしいんですがね。
七藏　何でも。
鈴子　お庭のもので好いんです。
七藏　（とらに）それは好いが、花生けはあつたかい。
とら　そんなものありませんよ。
七藏　ほい。そんなものありませんよと來たな。
とら　だつて、買つたことはないんですもの。
七藏　そりや弱つたな。はゝゝゝ。何かないかい。
とら　さあ。
七藏　買ふつたつて、今からぢや。――それに金もないか

……。
鈴子　そんなら宅のを持つてまゐりませう。
七藏　さうですか。
鈴子　汚いのですけれど。
七藏　いや、そりや、どうも。――そいつは有り難いな。――それぢや、どうぞ。
鈴子。では、直ぐ取つてまゐります。
（鈴子、右手の方へ出て行く。）
とら　あなたは少し蟲が好過ぎますよ。
七藏　なあに、好過ぎて惡いつてことはないよ。
とら　花生けまでかりたりなんかして……。
七藏　そんなことは仕方がないや。――そこでと、花は何が好いだらうな。
とら　それよりも、あなた、もう上へあがつて、着物をお着なさいよ。
七藏　幾時だい。今は。
とら　もう三時を過ぎましたよ。
七藏　よし／＼。――それぢや、鳥渡奥さんに何が好いか聞いて來よう。（行きかける）
とら　ほんとに直ぐ着更へないと駄目ですよ。
七藏　分つた。分つた。――どうも、長屋が出來ると、なかなか。（呟きながら右手へ行く）

とら　（玄關の方を見る）まだかな。――あゝ、氣忙しい。
（奥へ這入る）
（暫く間。）
（右手から七藏と鈴子と現れる。）
（七藏、手にかきつばたを持ち、鈴子は花生けを持つ。）
七藏　そいつは、お天氣になつたら、わしが早速直しませう。
鈴子　どん／＼椽の下へ流れ込むんでね。
七藏　そんなことはなかつたんだがな。
鈴子　ですから、家の中なんかも濕氣ましてね。困るんですよ。
七藏　なあに、わしが直せばすぐですよ。さあ、どうぞお上がり。――おとらや。おい。おとらや。
とら　（出て來る）
七藏　何してゐるんだね。
とら　今、ご馳走をこしらへてるんですよ。
七藏　ご馳走か。ふん。ふん。――奥さんに座蒲團を出さんか。
鈴子　よろしいんですよ。――ご免下さい。
とら　さあ。
七藏　花はお前、これで好いんださうだ。なにしろ家ので

　　　濟むから安いもんだ。
とら　下らないことを言つてないで、早くお上がりなさいよ。
七藏　いゝ、わしは木村さんとこの緣の下へ水が流れ込んで仕方がないと言ふから、ついでに直して來ようと思ふんだ。
とら　もう今日はお止しなさいよ。
鈴子　いつでも、よろしいんですよ、私の方は。
七藏　今、少し小降りになつて來たから、丁度好いんだがな。
とら　さあ、早く足を洗つていらつしやい。
七藏　しようがないな。（右奥の方へ廻つて行く）
とら　（座敷へ這入る）ほんとに、勝手なお願ひをして……
　　　……
鈴子　いゝえ。
とら　何か、水かなんかは。
鈴子　それぢや、これにお水をどうぞ。
とら　はい。（花生けを持つて這入つて、直ぐまた持つて來る）
鈴子　どうも恐れ入ります。
とら　鳥渡失禮します。（去る）
　　　（鈴子、花を生ける。）
　　　（暫く。）
　　　（七藏、襖をあけて、前の緣の儘、這入つて來る。）
七藏　やあ、こりやどうも、なか〳〵よくなりますな。
鈴子　いゝえ、しばらく生けないものですから……。
七藏　（一人で感心し首を振つて）ふむ。――なか〳〵ね。
とら　（顏を出す）あなた。
七藏　え。
とら　まだ着更へないんですか。
七藏　よし〳〵。――どうだい。お前。奥さんはうまいもんだな。
とら　何を言つてるんです。
鈴子　旦那さんはお口がお上手ですね。
七藏　なに、お世辭ぢやないですよ。
とら　それぢや、早く更へてしまつて下さいな。
七藏　さう、せかせるなよ。
とら　だつて、もう歸つて來ますよ。
七藏　歸つて來たつて構やしないさ。ねえ。奥さん。
とら　何年振りかで歸つて來るのに、その風ぢや何だと思ひますよ。
七藏　ぢや、早く出してお吳れ。
とら　さつきから出してありますよ。
七藏　なんた。――向うにあるやつか。
とら　さうですよ。

七藏　あれぢや、いやだ。

とら　いやつたつて、――おや。

七藏　折角、一雄の奴が歸つて來るのに、あれぢや、お前。

とら　好いんですよ。あれで。

七藏　よかないよ。

とら　分らず屋ね。

七藏　何屋だつて好いから、もつと好いのを着せてお呉れよ。

とら　これでございますからね。（笑つてゐる鈴子に言ふ）

七藏　ねえ。奥さん。折角、息子が歸つて來るのに、銘仙なんか着てさやね。

鈴子　（笑つてゐる）

七藏　何でも好いから、一等好いのを出してお呉れ。

とら　どうして男つて、かうおしやれでせうね。

七藏　女がだらう。ねえ。奥さん。

鈴子　さあ、どうでせう。

七藏　はゝゝ。こりや、しまつた。

とら　ぢや、どれでも好いから。

七藏　ほらな。さう來なくちや。

とら　早くして貰はなくちや。――私は忙しいんですからね。（退場）

七藏　ぢや、奥さん。鳥渡樂屋で着物を取りかへてまゐりますから。

鈴子　さあ、さあ。その間に舞臺の方も出來上りますわ。

七藏　（せりふのやうに聲を張つて）しからば、ご免。

とら　（顏を出して）まだですか。

七藏　はい。はい。

（七藏、奥へ去る。）

（暫く。）

（鈴子、花を生け終へて、床の間に飾る）

（七藏、着更へて出て來る。）

七藏　やあ、美事。美事。――これで、すつかり出來上りましたな。

鈴子　ほゝゝゝ。

七藏　もう何時、芝居が始まつても好いつて譯ですな。――所で、どうです。わしの衣裳は。

とら　（續いて出て來る）何を一人で、浮かれてゐるんですよ。あなたは。

七藏　わしの媼どんは、昔から氣むづかしやでな。

とら　あんたは、いつまで經つても子供ですよ。

七藏　だから、わしは長生きするんだ。今が子供で、これから五十年生きたつて大したものだ。

鈴子　氣のお若いのが、一番よろしいですね。

七藏　そりやさうと、奥さん。あなたに聞けば分るかも知

れないが。
鈴子　何です。
七藏　潮岬つてのはどこでせう。
鈴子　さあ、聞いたことがありませんね。
七藏　(立つて床の間の傍から、一枚の電報を取つて來る)シホミサキとだけしか書いてないんですがな。(電報を鈴子に見せる)
鈴子　アスヨコハマツク。
七藏　一昨日の日附で來たんですがね、――わしは東京灣の入口あたりぢやないかと思ふんですがな。――どうでせう。
とら　でも、それならもうとうに着いてゐる筈ですよ。
鈴子　ほんとにお待ち兼ねでございませうね。
とら　昨日も朝から一日、弟が行つてたんですけど、たうとう着かないんでございますよ。
七藏　觀音岬つてのは、わしは聞いてゐるけど……。
鈴子　さうですか。
七藏　わしはこれでも、あちらこちらへ行つたことがあるんでさ。
鈴子　なかなか、どうして、何でもご存知ですね。
七藏　わしや、奥さん。昔横濱にもゐたことがあるんですよ。
鈴子　さうですか。
七藏　あれでも三年位ゐたかな。
鈴子　好いとこださうですね。
七藏　どうして、好い所ですよ。わしはいつも濱で一等好い宿屋へ泊つてゐたんだからな。その頃は一等好い宿屋で、一番の部屋に泊つて一と月十五圓でしたよ。
鈴子　まあ、そんなに安いんですか。
七藏　一と月十五圓でさ。一番の部屋でね。
鈴子　今ぢや、どこを探してもそんな所はありませんわね。
七藏　わしの家は甲州ですからね。そこへ泊つちや、毎日毛唐と取引してたんですよ。その頃は、三番館や五番館へ行くものは、大きい取引をするものでもなけりや、行かなかつたんですからね。
鈴子　ぢや、英語だの何だのも、お出來になるんですね。
七藏　英語はわしは出來ないんでさ。
とら　ほんとに大きなことばかり言つて、わたくしなんかも、こゝへ來てから何度聞かされたか知れないんですよ。
七藏　英語は話せなくたつて、毎日使ふ言葉だけは分つてまさあね。だから、品物さへ持つて行けば、もうちやんと手形を呉れるんですよ。

鈴子　それぢや、よろしいですね。
七藏　あの頃は面白かつたな。——商館は十時でなけりや金は渡さないんですからね。女中に九時に起こして呉れと言つといちや、それまでぐつすり寢てゐるんですよ。九時に起こされると、わしの部屋は一番たから、直ぐ傍に顔を洗ふ所があるんで、そんで洗つて、飯を食つて出かけると、丁度十時で、ちやんと金を呉れるんでさ。——よかつたな。
とら　いくらよくつたつて、昔の話ぢやね。
七藏　二度とあんな時は來ないな。
とら　それほど朝寢がよければ、今だつて十時までも寢てゐれば好いんですよ。
鈴子　ほんとですね。好いお身分なんだから、もう。
七藏　いや、今ぢや十時まで寢たつて、あんなに面白くはないでさ。
とら　寢てゐなさいつて言つたつて、自分がぢつとしてゐないノですよ。
七藏　年をとると、どうも朝は早く目がさめてね。
鈴子　誰でもさう言ひますね。——でも、寢られる時にはうんと寢て、起きたい時には早く起きるのが一番好いんですね。
七藏　さう。さう。全くその通りですよ。——だから、わし等昔から、さうしてるんでさ。
鈴子　今ぢや、あなた、立派なお家も、——長屋だつて二軒も、お有りになるし、その上松二さんだつて好い方だし、今度はまたお兄さんが立派になつてお歸りになるし、こんな結構なことは有りませんね。
とら　でもね。またそれにはそれで、なか／＼好いことばかりもありませんよ。
鈴子　でも、私等が拜見したんぢや好いお身分ですよ。
とら　なあに、あなた、見かけだけで。
七藏　ねえ。奥さん、わしやこれでも二萬五千圓から借金が有るんですからね。
鈴子　まあ。さうですか。
とら　何を言ふんですよ。
七藏　本當だから仕方がないよ。わしはかう見えたつてちやんと判を押したんですからね。——全く二萬五千圓ですよ。
鈴子　でも、それだけ借して呉れる人は、私等にはありませんわ。
とら　私のとこ一人ぢやないんですよ。
鈴子　へえ。
七藏　一人ぢやなくたつて、返さなかつた日には、わし一人で返さなけりやならないんですから。

とら　だけど、そんなこと、わたしは眞平ですよ。
七藏　いやだつたつて、借りてるんだから仕方がありやしない。
とら　でも、家ぢや三千五百圓しか借りなかつたんですよ。
七藏　三千圓なんてことはありやしない。二萬五千圓だよ。
鈴子　でも何ですね。借す方も仲々大變ですね。
七藏　そりや全くでさ。
鈴子　よつぽど澤山持つていらつしやる方でなけりや。
七藏　わしんとこはお上から借りてるんですよ。
鈴子　まあ、さうですか。
七藏　ちやんと七人で組合をつくつて願ひ出ると借して貰へるんですよ。
鈴子　誰にでもですか。
七藏　誰にでもつて譯には行かない。やつぱりちやんと調べてからでなけりや。
鈴子　へえ。
七藏　その二萬五千圓で、この家を建てたんですよ。
鈴子　でも、もう結構ですわね。
とら　だけどね、奥さん。これまでは隨分苦勞をしましたんですよ。
鈴子　さうでございませうともね。
とら　まあ伜二人が大きくなつて呉れましたので、――皆がちやんとして呉れますんですよ。
七藏　わしが返さなくたつて、伜がちやんと月々拂つて呉れますさ。――まあその代り、この家は兄貴にやつて、お宅の長屋は弟のにするつもりですがね。
鈴子　はあ。
七藏　今度は一雄の奴も東京の本店詰めになるつて言ふから、わしんとこも賑やかになりますさ。
鈴子　まだお一人ですか。
七藏　いや、南洋からね、黒ん坊の女の子をつれて歸らうかなんて、先達も手紙を寄越したんですから、どうだかな。
鈴子　ほゝゝゝ。
とら　黒ん坊なんかご免たつて申しましたんですよ。
七藏　黒ん坊も面白いよ。――黒ん坊か。ははは。
鈴子　もうそろ〳〵お歸りでせうね。
とら　はあ。
七藏　黒ん坊。――黒ん坊の女の子をつれて、四年ぶりで歸つて來るのかな。
とら　わたしは黒ん坊なんかつれて來たら、家へは入れませんよ。

七藏　はゝゝゝ。面白いぢやないか。
とら　ちつとも面白くなんかありませんよ。ねえ。奥さん。
鈴子　言葉なんかも分りませんでせうね。
七藏　言葉なんかどうにでもなりまさ。――ふふふ。あいつ、一雄の野郎、この家も見たことがないんだな。わしが大家になつて、長屋が出來たことも知らないんだな。
とら　どうしたんでせう。まだでせうか。
七藏　船か沈んだかな。
とら　え。
鈴子　いくら何でも今日はお歸りになるでせう。
とら　私もさう思ふんですよ。
鈴子　さ、それぢや、私はお暇しませう。
七藏　まだ好いですよ。
とら　もつとお話なさいましよ。
鈴子　いゝえ。つい長話をして。
七藏　まだ奥さん。いくらでも話がありますよ。
鈴子　それはまた、この次に。
七藏　この次ぢや、つまらないですよ。
とら　そんなにあなた、無理にお止めしても。
鈴子　丁度雨も止みましたから。
とら　ほんとにご無理を申しまして。
七藏　やあ、どうも。――それぢや一雄が歸りましたら、お話にいらつしやい。
鈴子　え。よせていたゞきます。――それぢや、水はきの方を、お序でにどうぞ。
七藏　よろしい。わしが早速直しますよ。
（鈴子、歸つて行く。）
七藏　もう歸つて來さうなもんだな。
とら　あんたはほんとにお喋りだから駄目ですよ。
七藏　お喋りは駄目だつて規則はないさ。
とら　あんな下らない、昔のことなんか話したりして。
七藏　だつて、わしは苦勞をして來たんだから、立派な話だよ。
とら　あんたの話はさうは聞こえませんよ。
七藏　さうかい。
とら　擔ぎをしてゐたなんて、今とちつとも關係がないんですもの。
七藏　そんなこと言つたかい。
とら　ほんとに恥さらしですよ。
七藏　よし／＼。この次から言はないから、好いよ。
とら　あんたの素性だつて、分つてしまつたのも同じですよ。
七藏　分つたつて、今はちやんとしてゐるんだから好いん

だよ。

とら　でも、それぢや、わたしが恥かしくつて顔も出せませんよ。

七藏　好いよ〳〵。大丈夫だよ。

とら　さ、わたしは忙しいんだ。（行きかける）

七藏　それぢや、わしは一つ木村さんへ行つて來よう。

とら　だつて、もう歸つて來ますよ。

七藏　なあに、昨日だつて一日待つてゐたのに歸つて來やしなかつたから、今日だつてまだ分りやしない。

とら　それに木村さんへ行くと、あんたはまたお喋べりをするんだから。

七藏　何にも言やしないよ。

とら　ぢや、ちやんとしてゐらつしやい。

七藏　でも、水が流れ込むつて言ふから、今の間に鳥渡直して來よう。――床下へ流れ込んだりして、土臺がゆるんぢや困つちまふからな。

とら　そんなことといつだつて好いんですよ。

七藏　いや、駄目だ。

とら　大丈夫ですよ。

七藏　駄目だ。駄目だ。

とら　大丈夫ですつたら。

七藏　いや。若し今晩にでも大雨が降つて、家でもまがつたら大事だ。

とら　雨なんか降りやしません。

七藏　いや、きつと降る。大雨が降るよ。

とら　ほんとに、あなたは、一時間だつて、ぢつとしちやゐないんですね。

七藏　大雨が降つて家がゆがみでもしようものなら、また金が入つてことだ。――なあに、直ぐだよ。

とら　仕方のない人ね。

七藏　言つてる間には、濟んでしまふ。

とら　ぢや、あなた、その着物ぢや駄目ですよ。

七藏　よし。よし。分つた。分つた。

とら　折角着たものを、またぬいだりして。

七藏　なあに、着物を着る位、何でもありやしない。

（七藏、着物をぬぐ。とら、手傳ふ。）

七藏　（ぬぎながら）大雨が來て見ろ。大變だ。また金が入つて、苦勞もなんにもありやしない。あの家だつてわし等が隨分長らく住んだんだから、――大事の家だ。

（七藏、シヤツ一枚になつてしまふ。）

（緣端へ出て來る。）

（表の方で物音がする。）

とら　何です。歸つて來たんですか。

七藏　まだ歸りやしない。

（突然、襖をあけて松二が這入つて來る。）

松二　唯今。――どうしたんです。

七藏　やあ、歸つて來たのか。

とら　そら、ご覽なさい。

七藏　こりや。――こりや、困つた。

松二　何だつて裸になんかなつたんです。

七藏　好いよ。好いよ。――おい、早く着物をお呉れ。

とら　だから、私は言つたんですよ。

七藏　早く。早く。

とら　それよりも兄さんを、松二や、とめなくちや。

松二　兄さん。今這入つて來ちやいけない。

七藏　好いよ。好いよ。

とら　鳥渡待つてお呉れ。

一雄　（這入つて來る）唯今。――どうしたんです。

七藏　構やしないよ。一雄。

一雄　お父さん。

七藏　うむ。よく歸つたな。え。一雄。よく歸つたな。

（七藏、着物を着かけてゐたのを裸のまゝで、立つてゐる一雄に縋り付く。）

一雄　お父さん。

（間。――四人涙を浮べた目を見合ふ。）

七藏　よく歸つて來たな。（泣く）無事でよく歸つて呉れたな。わしは待つてゐたんだよ。着物を着てゐたんだよ。――さつきから着てゐたんだよ。――今、裸になつたんだよ。――うん。よく歸つたな。よく歸つたな。

――幕――

（十四年六月）

# 詩人の靴

人

靴屋
妻
詩人
洋裝の女

靴屋の店先。仕事場と住まゐ。ショウキンドウと硝子戸棚。

靴屋、破れて汚れた仕事着。ショウキンドウの靴を取り出して、陳列換へをしてゐる。硝子戸棚とショウキンドウの間を、靴を手に提げて、行つたり來たり、ごそごそしてゐる。

靴屋　（口の中で）えゝと。これはいかんな。こゝの所は、黑でなくちや……黑のエナメル、なあ……エナメル、エナメル、しようがない。これで我慢をするか。なあ、大將、我慢をして置け。ふゝ。どうだ。黑のエナメルを置いて。素敵。素敵。兩側は赤だな。赤の、半靴……と。

妻　（手をふきながら出て來る）あら。
靴屋　（面を上げる）なにさ。
妻　また、陳列換へ。どうして。
靴屋　さうさ。賣れたんだもの。
妻　どれ……どれかさ。
靴屋　ほら、こゝにあつた、黑の半靴。
妻　あら、いつ。
靴屋　今さ。お前が勝手にゐる間に賣れたんだよ。
妻　ほんと？――噓でせう。
靴屋　噓なものか。
妻　どら。――有るぢやありませんか。いやな方ね。
靴屋　はゝゝ。
妻　駄目よ、だまさうと思つたつて……。
靴屋　でも、賣れたとすれば、ねえ、當然陳列換へをしたつて……。
妻　だつて、あんたのやうに、さう度々換へなくたつて……。
靴屋　さうぢやない。商店に於ては、折々面目を一新するつてことが必要なんだ。
妻　くツゝ。あきれるわね。
靴屋　あきれなくたつて好いさ。――ねえ。さうぢやないか。かうして陳列換へをする。するとね、通る人が、お

や、この間は素敵な編上げがあると思つたのに、もう賣れたのかな、と思ふだらう。さうさ。誰だつて思ふさ。所が、その次通ると、また變つてゐる。好いのが並んでゐる。はゝあ。この家は賣れるんだな。おれも今度は一つこゝで買はう。この間の型が好かつたから、あれにしよう。仲々腕もしつかりしてゐるらしい。こんな郊外の中學校の前の店だけど、腕は本場で磨いたのに違ひない。確かにさうだ。細君にしたつて、田舍の靴屋の神さんにしちや、仲々どうして……。

妻　馬鹿ね。

靴屋　ねえ。さういふことになるぢやないか。だから、陳列換へだつて、馬鹿には出來ない……お前だつて、髷でも結つて、綺麗にしてゐなくちやいけないよ。え。早くお白粉でもつけるが好い……。

妻　およしなさいたら、好い加減に。

靴屋　何故。

妻　その間に、仕事でもした方がえらい人。

靴屋　仕事か。あんな直しなんか、いつだつて出來るさ。學生靴なんだもの。學生靴のぼろ靴……。

妻　學生靴だつて、ぼろ靴だつて、みんなお得意よ。惡口いつちや駄目。

靴屋　どうしてまあ、どいつもこいつもこんな汚い靴ばかりはいてるんだか……一人位、好い靴をはいてたつて好いのにな。

妻　今日は、歸るまでにしとく修繕はないの。

靴屋　へい／＼。唯今々々。

妻　お願ひだから、早くして頂戴ね。斷りをいふのは、あたしなんだから……。(道具を出して裁縫を始める)

靴屋　(またショウヰンドウの方へ行つて、陳列を續ける)全く、たまには一人位、好い靴を注文に來ないかな……赤と、赤を置いたと。ぼろ靴は閉口々々。ぼろ靴。ぼろ靴。うゝん、ちがふ／＼。エメナルだ。――これで好いかな。よし。これで好い。――ねえ。お前。

妻　なに。

靴屋　お前つたら。

妻　なにさ。

靴屋　來てご覽よ。

妻　なんの用、大きな聲で。

靴屋　早く／＼。早く降りといでよ。

妻　(しぶ／＼降りて來る)

靴屋　ほら、どうだ。素敵だらう。かうすれや、誰だつて立ち止まるよ。ねえ。好いだらう。

妻　えゝ。

靴屋　駄目。それぢやや。もつと、はつきりいはなくちや

妻　はつきりつて……。

靴屋　好いなら好いとか、惡いなら惡いと……。

妻　そんなこと……あんたが並べるんですもの、素敵にきまつてゝよ。

靴屋　きまつてやしないさ。これで、この眞中のやつが、エナメルのボタン靴だと、もつと〱引き立つんだよ。

妻　ほんとに、あんたつて人は……。

靴屋　なに。

妻　そんなに好い靴が作りたいの。

靴屋　（鼻白んで）どうして。

妻　だつて、毎日よ。いふことつてば、好い靴好い靴つて……。

靴屋　そりや、靴屋たもの……。さて、それでは、と……

（靴屋、靴を硝子戸棚へしまひ終へて、仕事場へはいる。——妻、上へあがつて裁縫を續ける。）

靴屋　あゝ。（靴を取り上げ、修繕をし始める）

（間。）

妻　ねえ。あんた。

靴屋　うむ。

妻　どう、あんたは。家へ歸らない？

靴屋　家つて？

妻　お父さんとこ。

靴屋　どうするのさ。

妻　家で仕事をするの、先見たいに。

靴屋　そんなこと。

妻　駄目？

靴屋　分つてるさ。

妻　でもね。

靴屋　碌に話も出來なくて、始終いら〱してるのなんか、考へたつていやだ。

妻　だつて、今度は平氣よ。夫婦ですもの。

靴屋　いくら夫婦たつて……。

妻　好いのよ、大きな顏してれや、お父さんとこですもの。

靴屋　食へないんぢやあるまいし……店まで出して貰つて。

妻　でもね、あんたが可哀想だから。

靴屋　あ。（大きく溜息をつく）

妻　（しみ〲と）そりや、あたしだつて、好い靴の注文があればと、始終思ふわ。でも……なければ仕方がないぢやないの。

靴屋　あゝ。エナメルはエナメルか。（仕事をし續ける）

（間。）

妻　（突然、低い聲て、鋭く）あんた。

靴屋　なに。

妻　來たわよ。
靴屋　何が。
妻　表。ほら、注文よ、きつと。
靴屋　よし〱。かくれてろ。女だ〱。
（妻、急いで硝子戸棚の蔭にかくれる。――靴屋、期待と緊張。）
（洋裝の女、はいつて來る。）
靴屋　（立ち上がる）いらつしやい。どうぞ〱。（ぺこぺこ頭を下げる）
洋裝の女　（面くらつて）あの、私……。
靴屋　はあ、唯今、はあ。
洋裝の女　いゝえ。私、あの……。
靴屋　どういふのにいたしませう。唯今、あまり出來たのがないんですが……何でしたら……。
洋裝の女　ちがひます。さうぢやないんです。
靴屋　は。
洋裝の女　あの、私、少し伺ひたいと……。
靴屋　はあ。
洋裝の女　吉村さんてお宅、この御近所にないかと思つて……。
靴屋　へえ。
洋裝の女　吉村さんていふんですけど、ありませんでせうか。
靴屋　吉村さん。
洋裝の女　えゝ。さうなんです。
靴屋　何屋です。
洋裝の女　商賣屋ぢやないんです。
靴屋　あ、お邸ですか。
洋裝の女　何でもね、乗合自動車から降りて、交番の前をまがると靴屋さんがある……。
靴屋　わたしんとこは靴屋でさ……。
洋裝の女　そこで聞けば分るつて、聞いて來たんですけど。――奥様が、やつぱり洋裝で、始終お出かけになる……。
靴屋　奥様ですか。
妻　（顔を出して）ほら、あんた、いつも女中さんが靴を持つて來て、話すぢやありませんか。
靴屋　あゝ。さうか。あの。
洋裝の女　分つて。
靴屋　えゝ。少し分り悪い所ですよ。
（靴屋、表へ出て行く。――洋裝の女、後からついて出る。）
（表の方で、靴屋がくど〱と何度も敎へるのが聞こえる。）

（間。）

靴屋　（ぼんやりしてはいつて來る）

妻　（肩をすぼめて、くすッと笑ふ）飛んだお客樣。

靴屋　がつかり、だ。（上り框の所に腰をおろす）風呂敷見たいな着物着やがつて、碌な奴が來やしない。

妻　ふゝ。

靴屋　でも、靴は鳥渡しやれてたな。あれや、安くないぜ。

妻　あたし、よく見なかつた……。

靴屋　なあに、大した靴ぢやない。たゞ鳥渡見られるといふとこさ。いくら好くたつて、あれぢや何にもなりやしない。

妻　ほんと。昨日は昨日で……。

靴屋　うんあれこそ注文だと思つた。

妻　あたしも。

靴屋　陳列箱を、しばらく見てゐたんだものな。

妻　ぢいとね。

靴屋　そして、つか〳〵とはいつて來るんだもん。胸がどきつとしちやつた。

妻　あたし、どうしようかと思つた……。

靴屋　おれだつてさ。所がいふことが好いや。靴を直しますか、だつて。

妻　今日持つて來るつて、まだ來ないわね。

靴屋　來ない方が好いよ。直しなんか。

妻　でも、若しかしたら、好い靴かも知れやしないわ。

靴屋　さうだな。

妻　昨日の靴だつて、しやれてたでせう。

靴屋　さうだ。あれや確かに相當する……せめて、あれ位の靴ならな。

妻　あんな靴はいてるんだから、もつと好いのを持つてるかも知れないわ。

靴屋　さうだね。まあ仕方がない、修繕で我慢するか。

妻　それだつて、好いぢやないの、好い靴なら……エナメルかなんかの、素晴らしい……。

靴屋　さうさな。だけど、張り合ひがなくて……。

妻　まあ、待つてゝ御覽なさい。今に來るから。

靴屋　どんな靴が來るか。

妻　エナメルよ。

靴屋　エナメルかな。エナメルだと好いんだがな。――まあ、何でも好いや。早く持つて來るが好いんだ……ああ。ほんとに、好い靴、つて、大きな聲でどなつてやらうかな。

妻　好いわ。どなつたつて。

靴屋　好いかい。本當にどなるぜ。

妻　ふゝゝ。――だけど、好い靴好い靴つて、どんな靴が

作りたいの。

靴屋　何でも好いさ、好い靴なら。

妻　でも、まあさ。何なら何つて。

靴屋　それや、色々あるさ。

妻　例へば。

靴屋　さうさな。ハンプスかな。

妻　ハンプスつて。

靴屋　知らないのか。ほら、すつかりエナメルで、淺くつて、前がリボンになつた……。

妻　あ。

靴屋　燕尾服の時、はく奴。あるだらう。

妻　あれ、ハンプスつていふの。知らなかつた……。

靴屋　何だ。靴屋の娘が駄目だな。

妻　だけど、あれ、好いわね。大好きよ、あたし。

靴屋　おれだつて、大好きさ。——好いぜ、背の高い人があれをはいた形と來たら……まあ、あれでなければ、總エナメルの半靴。でなけれや、ボタン靴。黒さ、勿論。どうも、赤はな……やつぱり黒の方が上品で好い。

妻　それや上品ね。

靴屋　あれをはいて、すつ〱と歩いてるのを見ると、全く胸がすくな。だが、それ以下はもう駄目。作るならエナメルだよ。ハンプスさ。ボタン靴さ。

妻　ほんとに。

靴屋　だのに、どうだ。この店と來たら。何がある。ボツクス。學生靴。兵隊靴。ゴム靴。これでも靴屋か。——毎日來る人といつたら、誰もいひ合したやうに、修繕修繕……しかも、どろだらけのぼろ靴。それたつてお客様だ。

妻　あんた。

靴屋　ねえ。おれはね。毎晩、靴を作つてゐる夢を見るぜ。

妻　噓。

靴屋　本當さ、しかもそれが、きまつてエナメルの靴なんだ。

妻　（何事かいはうとする）

靴屋　まあお聞きよ。つまらない何ぢやないんだから……
……。

妻　つまらないつて、いやしないわ。

靴屋　だからさ。かうなんだ。夢の中のおれはね、いつでも若いんだ。お前も、こんな田舍の安靴屋の神さんぢやない。銀座の安田靴店のお孃さんなんだ。若くて、綺麗で、頰の色たつて、林檎のやうに赤くつてつや〱してゐるんだ。

妻　知らないわ。

靴屋　ねえ。をかしいぢやないか。

妻　をかしかないわ。昔の二人なんですもの。

靴屋　それやさうだけど、店はこゝなんだ。この仕事場で、靴を作つてゐるんだ。エナメルの靴を……新しい皮を縫つて行く。きゆツ／＼つと糸が鳴る。何だかかう胸が鳴つてるやうにうれしいんだ。それといふのが、靴だけぢやない。いつもどつかからお前が見てゐる。お前の體は見えない。顔も見えないんだけど、澄んだ大きな目の、黒目だけが、ぢつと前に見える。それで安心して、仕事に氣が入れられる。する中に、もう直ぐピカ／＼光つた奴が出來上る。もううれしくて、いつまでも／＼その艶をこするんだ。

妻　すると。

靴屋　すると、どうだ。皮がむけて來るぢやないか。これや、いかん。さう思つて、一生懸命こする。こすると、むけて來る。さうしていつの間にか、おれの作つたのがぼろ靴なんだ。

妻　もう、いや。

靴屋　醒めて見ると、がつかり疲れてゐる……。

妻　厭だわ。さう……。

靴屋　しかも毎晩さ。おまけに醒めた後、きまつて眠られない。靴のことばかり考へるんだ。あしたこそは、構はない、起きたら作つてやらう。お客だつて、きつと來る。考へてゐる中に、うと／＼すると、またエナメルがどろだらけのぼろ靴になるんだ。

妻　（柔しく）あんた。

靴屋　うむ。

妻　もつと、こつちへいらつしやい。

靴屋　なに。

妻　そんなくよ／＼しちや駄目。もつとのんきにして、ね。

靴屋　でも、仕方がないんだよ。

妻　だつて、先はさうぢやなかつたんでせう。いつ頃からなの。

靴屋　もう前から……。

妻　でも、初めはさうぢやなかつたんでせう。こゝへ來た頃は。

靴屋　さうさ。

妻　ね。だから、もう少しあたしのことを考へて御覧なさい。

靴屋　考へてるさ。そんなこと。

妻　ぢや、もつとよく。初めこゝへ來た時のやうに。でなければ、家にゐた時のやうに。――さうすれば、さうぢやなくなると思ふわ。

靴屋　だつて、駄目だ。

妻　ねえ。そんなに氣を落しちや……。

靴屋　落しやしない。
妻　いつてたぢやありませんか。どんなに貧乏したつて、苦しくたつて、一緒になればつて……ねえ。しつかり氣を張り詰めてゐれば、どんな運だつて、悪くなりつこはない……向いて來るわ。しつかり、氣を張つてるの。しつかり。分つて。
靴屋　うむ。
妻　今に來るわ、注文だつて。きつと。素敵なのが。
靴屋　來れば好いけど……。
妻　大丈夫。きつと有つてよ。ハンプス。でなけれや、エナメルのボタン靴。
靴屋　そんな氣休め……。
妻　いゝえ。確かに、受け合ふわ。
靴屋　駄目だ〳〵。
妻　いや……それぢや。ぢや、あたしが注文するの。
靴屋　お前が。
妻　さうよ。――靴を一つ頂戴。
靴屋　どんな靴。
妻　駄目、そんな口振りぢや。お客様ぢやありませんか。
靴屋　お客様なら、表から來るんだ。
妻　好いわ。ぢや、表から來るから。（立つて入口の方へ行き、様子をしながら店の眞中まで來る）御免なさい。

靴屋　（笑ひながら）へい。
妻　いらつしやいつていふの……立つて。買はないわよ。
靴屋　しようがないな。（立ち上がる）
妻　靴を一つ頂戴な。
靴屋　はあ。
妻　出來で有つて？………なければ、作つていたゞきたいの。
靴屋　あなたが、お召しになるんですか。
妻　さうなの。
靴屋　威張つてやがんな……。
妻　靴屋は返事をするものよ。
靴屋　いやだ……。
妻　駄目……、有るの、ないの。
靴屋　ないんです。
妻　ぢや、作つて頂戴、一つ、至急に。
靴屋　作るんですか。
妻　今の流行（はやり）の型は、どんなのか知ら。
靴屋　流行の型といつた所で、お好き〳〵ですけど……夜會靴ですか。
妻　夜會靴……いゝえ。あれでなく。普通ので好いわ。ちよい〳〵の……訪問ぐらゐ。
靴屋　ぢや、まあキットで、エナメル付きといふことに…

…それともカンガルーにいたしませうか。

妻　どつちでも好いわ。高い方なら。

靴屋　では、カンガルーで、スタイルは極く流行のと……鳥渡、おや、お寸法を頂きます。（寸法帳を取り出す）

妻　あら、あんた、寸法なんか計るの。

靴屋　さあ、どうぞ、こゝへお足をお乘せ下さい……。（土間に寸法帳をひろげる）

妻　ぢや、早くして頂戴。

靴屋　（寸法をとりながら）仲々、好いお恰好ですね。

妻　いや……靴屋はそんなことして好いの……擽つたいつてば……いやよ。いやよ。助平な靴屋ね。

靴屋　おや、かうしたら……。（妻を高く抱き上げる）抱いたら。

妻　いやよう……およしなさいつたら。人が見るわよ。

靴屋　ねえ、お前、うれしいぢやないか。

妻　おろしてよう。

靴屋　（おろす）どうも失禮しました。

妻　分つてゝよ。お客樣に對して……。もう後の注文はよすわ。

靴屋　いえ。それや、どうも飛んだことをいたしまして……何にいたしませう。旦那樣のでございますか。

妻　だけど、どうしようか知ら。

靴屋　それでしたら、今非常にハイカラなのが出來てをります。一つ、御覽になるだけでも、どうぞ……。（有り合せのぼろ靴を、いくつも／＼出す）矢張り、黑の方がよろしいでせうな。

妻　まあ……隨分有るわね。

靴屋　如何ですか。この半靴は……この頭の角いのは。フランス型つて、今一番の流行なんです。もう、誰だつて、ハイカラな若紳士なら、みんなこれです。でなければ、こちらのボタン靴は如何でせう。――これはキットなんですけど、これだけ柔かいのは……鳥渡見た所カンガルーだといつたつて、大丈夫ですよ。まあ、これ程の品になれば、銀座にだつて自慢ぢやないんですけど、鳥渡ないでせうね。――仕事にしたつて、私はこれで銀座にゐたんですからね。銀座の安田ですよ。嘘ぢやない……本當ですよ。だつて、私の家内はその安田の娘なんですもの……嘘だと思へば聞いて御覽なさい。どうです、素敵ですよ、好い靴だな、なんて好いエナメルだ。

妻　あんた……。（夫に縋り付く）

靴屋　あ、お前か。え。どうだ。素敵ぢやないか。エナメルだぜ。カンガルーだぜ。キットだぜ。

妻　（泣きながら）さうよ。さうよ。エナメルよ。エナメルよ。

靴屋　キットだぜ。カンガルーだぜ。

（突然、妻から、詩人がはいつて來る。和服、長髪。一目見てそれと分るやうな様子。――新聞の包みを小脇に抱へてゐる。）

（二人、びつくりして見る。――離れる。）

詩人　（その場の情景に戸迷ひして立ち竦む）あ、あの……。

妻　あら……。

靴屋　あ、これや、どうも。さあ、どうぞお掛けなすつて。

妻　さあ、どうぞ。（小椅子をすゝめる）

詩人　え、あの……。

靴屋　あ、修繕ですか。

詩人　昨日、鳥渡お願ひしといたの、やつて貰ひたいと思つて。

靴屋　さうですか。ようござんす。實は家内と、もう見えさうなもんだつて、お待ちしてゐた所なんです。

詩人　いや、それで非常に無理をいつて濟まないんだけど、今直ぐやつて貰へないか知ら。

靴屋　修繕ですか。

詩人　さう。修繕です。實は……今晩から旅行するんでね。

靴屋　あ、旅行ですか。

詩人　え、さう。旅行するんです。それで、一つ、是非……。

靴屋　よろしい……。

詩人　やつて與れますか。

靴屋　それで、お待ちになるんですか。

詩人　え、待つてます。全くどうも、無理をいつて……。

（包みを渡す）

靴屋　おや、早速直しませう。（仕事場へはいる）何でせう。これで、外の店ぢや、すぐにつては鳥渡やらないでせう。

詩人　どうもどこでもやつてくれないんでね。

靴屋　さうでせうね。だけど、私なんかやはり出せば五分とかゝりやしませんや。（包みを開ける。中からは綠の切れたぼろ靴が現れる）あ、これや。

詩人　え。

靴屋　どうも、仲々。

詩人　隨分傷んぢやつてね。そこのうしろの方ね、兩方とも、すつかり糸が切れちやつて……それから右の方の、そこの前皮がとれちやつたんだけど、何か君ん所の有り合せをつけて、ね。それから、裏も兩方とも、すつかりはづれかけてるから、釘でも打つて……とに角、君の方で、一つすつかりよくして下さい。いろんな所、なんだ

から……元のやうになるやうに……。

靴屋　え……。（泣きさうな顔をしてゐる）

詩人　至急に、一つお願ひしますよ。

靴屋　え。（仕事を始めかける）

妻　（茶を淹れて持つて來る）どうぞ。

詩人　有りがたう。

妻　（ぼんやり自分の方を見てゐる夫と目が合ふ）あなた、早くしてお上げなさいよ。

靴屋　うむ。

妻　まあ、隨分好いお靴ですね。

詩人　少しどうも破れ過ぎちやつて……でも、何ですよ。これでも銀座の野間で買つたんですからね。

妻　まあ、野間でお買ひになつたんですか。

詩人　さうですよ。僕は靴道樂でね……その靴にしたつて、銀座を歩いてるとあんまり安いんで、つい買つちやつたんだけど……。

妻　まあ、さうですか。

詩人　一體に僕は散歩好きでね。特に詩を創作しようと思ふ時には……。

妻　詩をお書きになるんですか。

詩人　さうですよ。僕は詩人ですよ。

靴屋　詩人ですか。へえ。詩人とは知らなかつたなあ。

詩人　ねえ、君、その靴にしたつて、仲々好いでせう。

靴屋　えゝ。仲々好い靴ですね。

詩人　皮だつて、悪かないし……ねえ。さうでせう。悪かないでせう。

靴屋　（無意識的に）えゝ。悪くはありませんね。

詩人　型だつて、流行でせう。さう遅れてないやね……。

靴屋　遅れてませんね。

詩人　それや、君、僕は靴道樂ですからねえ……さうですよ。この靴にしたつて、僕は大好きなんだ……型が第一すつきりしてゐてね……どうも日本の國は道が悪いんで、僕のやうな靴道樂には閉口ですよ。いくら好い靴をはいたつて直ぐ駄目なんですからね……洋服生活も仲仲……。

（詩人、獨り得意になつてしやべり續ける。）

（靴屋、あきらめたやうに、毎日のことで慣れたやうに、默々と仕事を續ける。）

――幕――

（十五年六月）

# 東京小景（六場）

## 第一場

市のはづれ。

郊外電車出發點の乘客待合所の内部。狹い上に、紙屑など散らばつてゐて汚い。

一人の老婆と、嫁したるその娘とが、周りの板壁に沿つて作られた腰掛けにかけてゐる。

娘は銀杏返しに結つてゐるが、かなりくづれて、その上に砂ほこりを被つて、白く汚れてゐる。蟀谷に厚い梅干の肉をはりつけてあるのが、それさへもほこりと乾きとて、すつかり變色してゐる。

老婆の樣子は娘よりも一層みすぼらしい。着物は鹽たれて、皺の多い顔の、黑いほどに太陽に燒けたのが、性質の貪慾らしいのを、更に固く見せてゐる。

二人とも默つてゐる。何事か二人の間に、解け合はずに蟠つてゐるものがある。

人々は、二人には見向きもしないで、――往來する。切符を買ふ。かと思ふと、立ち止まつて電車の出て行くのを見送つてゐる。

かなりに長い沈默を置く。

老婆　さ、――それぢや、乘らうか。

娘　あ。

老婆　お前は、どうする。

娘　あたい？

老婆　うむ。

娘　直ぐに、家（うち）へ歸るよ。

老婆　さうかい。――もう、寄つてかないかい。

娘　今からぢや遲くなつて、――歸れば、夜になつてしまふから……。

老婆　お父つあん、待つてるだらうが……。

娘　え。（老婆を見る）

老婆　歸りにお前をつれて來ると言つといたけど、好いだらうね。

娘　好いさ。

老婆　ぢや、また今度來るか……。

娘　うむ。――遲くなると、うるさいから……。

老婆　さうかい。

（間。――娘、外の方ばかりを見てゐる。）

（老婆は、何事か焦立たしさうに、落ち付きのない目を、度々あたりにやる。）

老婆　（娘の氣をはかるやうに）そいぢや、切符を買はうかな。

娘　（すぼりと）あたいのは有るから好いよ。——來しなに、往復を買つたんだから……。

老婆　さうかい。おや、——おいらは……。

娘　（稍、腹立たしげに險を帶びて、ぶすりと）お母さんは烏山まで買へば好いのさ。

老婆　（娘の顏を見る）

娘　あたいは代田橋で降りるから……。

老婆　さうかい。（呟くやうに）こんなんなら、おいらも往復を買つとけばよかつたねえ。（間）おや。（立つて札賣場の前へ行く）烏山までおくんなさい。——なに、十七錢だつて。（財布を出して、ごそ／＼と中を見る）

娘　（知らぬ風をしながら、折々老婆の方を窺ひ見る）

老婆　（左の手に財布をさげ、右の手の上に十錢銀貨と二錢銅貨とを載せて、娘に）お前、おいら、細かいものがないんだけど、——烏渡、五錢だけかしとくれ。十二錢しか細かいものがないから……。

娘　うむ。（懷へ手を入れる）

老婆　片道十七錢なんだよ。（ちつと、娘の手元を見詰めてゐる）

娘　（錢入から十錢銀貨を出して）あたいのとこにも十錢しかないから、これで買へば好いや。——その二錢は殘しといて——また細かいのが入るから……。

老婆　うむ。（娘から金をうけとつて、札賣場へ行く）

娘　（錢入を手に持つたまゝ、その方を見てゐる）

老婆　烏山まで、片道おくんなさい。（切符と釣錢とをうけとり、前から手にしてゐた二錢と共に、ざらッと財布の中に入れる）

娘　（思はず表情あり）

老婆　（娘の樣子は知らず。財布の紐をくる／＼と卷いて、ゆつくり懷に納める）

娘　（目をそらす。——錢入を帶の間に入れる）

老婆　（娘の方を見る）

娘　（蝙蝠傘をついた手の上に、額を伏せる）

老婆　（娘からは離れた向うの方に、腰をかける）

（間。——この間は、長ければ長いほど心理的には複雜さを加へる。沈默の重さが一秒毎に加はつて行く。——）

（人々は、それには構はず往き過ぎる。）

（老婆、不安らしく、娘の方を見つづける。）

老婆　（靜かに）それぢや、行かうか。

娘　（むしろ邪慳に）あゝ。

老婆　（しばらくして）え。——まだお前氣持ちが悪いの

かい。

娘　（默つてゐて答へない）

（僅かの間。）

老婆　（腰掛から乘り出すやうにして）　ね、お前、――こつちの方が、好く風が通るよ。

娘　好いよ。こゝで。（額を手に乘せた儘、上げようともしない）

## 第　二　場

街上。

山の手の屋敷町。板塀を越して向うに青い葉が茂つてゐる。

午後。薄曇り。人の通りはさう多くない。折々御用聞きなどが通る位で、往來は途絶え勝ちである。どこからかピアノの、稽古するらしい音が聞こえて來ても好い。それがハタと絶えて、一時しんと靜まり返る。

向うから一人の青年が來かゝる。二十四五。さう美男子と言ふのではないが、色の白いのが、この青年を好ましいものにする。背が高く洋服を着た姿が、氣障と言ふほどではなく、か、可成り氣取つて見える。

青年が向うから來かゝつた時、反對の方から、數人の女兒と、その先生らしい二十前後の女とが來かゝる。女兒は皆尋常五六年生か或は高等科の生徒かと思はれる年輩。學校の歸りらしく鞄をかけたり、または風呂敷包みを手にして、洋裝の子、和服の子などが、左右から先生を取り卷いて、がや／＼と笑ひながら來る。先生は、これらの女兒の受持教師らしく、稍大様に、慈愛の裡に威嚴を保たうとはしてゐるが、流石若い女の、その影から直ぐ娘らしく、生徒達と一緒に騷ぎ出さうとしかけるものがある。背は低いが、袴を裾長にはいて、無理に高く見せかけてゐる。薄く目立たぬほどに、白粉を刷いてゐる。

女生徒たちは、まるで友達ででもあるやうに、先生の肩に手をかけたり、袂に縋り付いたりしてゐる。一二歩遲れて後から二人、ませた樣子で話しながら來る女兒もある。兩方、知らずに歩み寄つて來る。

先生　（笑つて、左の手に縋つてゐる女兒一を見下す）

女兒一　（笑ひながら）それや面白いつてないんですもの。

女兒二　こんなことをしたりするんですもの、ね、とく子さん。

女兒一　さうよ。さうよ。本當に……。

先生　それぢや、まるで人間のやうね。

女兒一　そりや、をかしなことをするのよ。ねえみた子さん。
女兒二　さうよ。こんなふう。（兩手でをかしい樣子をして、女達の方を見る）
女兒三
女兒四　（口々に）いやよ。いやよ。
（二人が逃げるので、またきやつ／＼と笑ふ。）
先生　（ちらと、前に來かゝつた青年の姿を認める）
女兒一　ですからね。先生、あんまり變な恰好をしたりするでせう。それで、お仕舞には氣味が惡くなるんですよ。――
先生　（返事をしない。稍堅くなり、女兒の言葉をよそに、襟元をかき合はせる）
女兒五　（後から來る子。――ふと先生を見る）
女兒一　（直ぐ前に續いて）兄さんなんかね、化け猫だつて、あたしのことおどかしたりなんかするんですよ。
青年　（丁度、一歩の前まで來る）
先生　（取り澄まして、稍下を向いてゐたが、前へ來てちらと青年を見る）
青年　（先生を見る）
先生　（一層堅くなり、面赤くなる）
女兒一　（返事がないので先生を見上げる。女兒五と目が合ふ）
女兒五　（いたづらさうな目元で、後から先生を見てゐたが、女兒一と目が合つて、笑ひ出さうとする。傍の女兒六を見る）
女兒六　（女兒五と後からついて來た子。――につと笑ふ）
女兒五　（青年と目が合ふ。――表情あり。肩を聳かし、顎をちゞめて、蓮葉に笑ふ）
青年　（女兒五と目を見合はす。稍得意に、少しは堅くなつて早足に行き過ぎる）
先生　（すまして先へ行く）
女兒五　（後を見る。振り返らうとして女兒六と目が合ふ。嘲ふやうに、目をしばたゝき、ちよつと舌を出し、首をちゞめる）
（女兒達、急に前よりはもつとはしやぎ立つて、前へ行く先生に追ひ縋らうとする。）
（青年の來た方から、二十位の八百屋の御用聞きが、自轉車で、ハアモニカを吹きながら來る。）
（女兒達、急にきやつ／＼と笑ふ。御用聞き赤くなり、すまして、却つてハアモニカを得意氣に吹き立てて、青年の後を追うて行く。）

## 第三場

山の手。

或る賑やかな表通りに面した喫茶店の二階。
正面に下からの階段がある。その上つた所に鉢植の棕櫚竹を置き、その陰に勘定臺があり、金錢出納器が乘せてある。
部屋の中は餘り廣くない。數箇の卓。卓のまわりには夫々數脚の椅子を置く。
廻りの壁紙の色も落ちついて、一體の調度の色合と共に非常に、安易な感じを與へる。

宵。今が人出の盛りで、椅子の空きがないほど入り込んでゐる。どの卓にも大抵は家庭的な、子をつれた親子や夫婦者などが多い。

階段から夫婦の客が上つて來る。妻は幼兒を負ひ、夫は別に男兒の手を引いてゐる。しばらく上つた所で、立つて見てゐたが、眞中の方に空席を見付けてかける。
夫、そこへ來た女給に飲み物など註文する。——女給、はこんで行く。
一組の青年達、賑やかに話しながら立つて降りて行く。
入れ違ひに、階段から一組の男女が上つて來る。男は四十を過ぎてゐる。女はまだ四十にはなつてゐない。堅肥りに肥つてゐる。年にしては派手な物を着てゐる。
初め女が上つて來る。ずうつとあたりを見廻し、鳥渡男の方を振り返つた後、ずつと奥、右手前方の卓に、入り口の方を向いてかける。男はむしろ力無いほどの歩き付きで、女に從つて行く。女の横の方に、こちらに後を見せてかける。女給、傍へ行つて男に註文を聞く。

男　（女の方をそつと見て、小聲で）　何にする。
女　（はつきりと）　紅茶とお菓子。
男　（女給に）　紅茶とお菓子を二つづつ下さい。
女給　はい。
男　（まわりを見ないやうに、ぢつと手の先を見てゐる）
女　（懐からスケッチブックを取り出す。卓の陰の膝の上に開いて、寫生をし始める）
男　（ぢつとしたまゝ、むしろそれをかくすやうにしてゐる）
（二人の傍の若い夫婦が、囁き合ひながら見てゐる。）
（女給、紅茶と菓子をはこぶ。）
男　（女の分を、女の前へ置く。それから默つて自分の分を飲み且つ食べる）
（稍、しばらく。）

（女、寫生し續ける。）

（客が出入りする。）

女　（二三枚寫生する。ふと目を上げる。若い夫婦の目と合ふ）

男　（飲み終へて、ぢつと膝のあたりに視線を落してゐる）

女　（飲み物を、一息にぐつと飲み干す。もう一度、あたりを見る。スケッチブックを懐に入れる）

男　（女を見る）

女　（顎を鳥渡指し出して、男に合圖する）

男　（立ち上がる）

女　（立ち上がる。前から見てゐた若い夫婦者の妻の顔をぢつと見る。その妻、目をそらす）

男　（勘定臺の前に行く）

女　（後から行く）

男　六十錢ですよ。

女　（默つて懐から金入を出し、金を拂つて、さつさと降りて行く）

男　（釣錢をうけとり、行きかけて、階段の降り口で、立つて背の方を、そつとぬすむやうに見る。――降りて行く）

---

## 第四場

京橋日本橋邊。

ある交叉點の電車停留所の前。

正面は煙草屋、カフェ、洋品店などが軒を並べてゐる。人道の端の方には、適當の間隔を置いて銀杏の街路樹。左の方に市營自動車の青色の停車標。その直ぐ左に、赤色の市街自動車の停車標が並んで立つてゐる。

夕暮のラッシュ・アワーで、電車を捉へようとして立つてゐる人々が、右手の、停留場の名を記した電柱の前に一團になつてゐる。左手の自動車停車標の傍にも、數人の男女が立つてゐる。

その眞中のあたりに、人々からは離れて一組の男女が立つてゐる。男は會社員らしい。餘り好い身なりではない。洋服の肩は擦り切れようとし、その顔は蒼く痩せ、精神衰弱的な陰鬱さを宿してゐる。女は令孃らしく、流行の結髪、流行の髪飾、小脇に日傘を抱へてゐる。

二人、話しながら絶えず電車の來る方を注意する。男の詞は普通ではあるが、その陰に稍丁重さがある。それが二人の間を溶け合はせない。

右手の群集は、電車の着く毎に潮の引くやうに、さつとその方に寄る、さうして少し減る。が、直ぐまた集まつて來る。――群集は時間の經つと共に、段々多くなつて行く。

しばらく、二人無言。

女　（思ひ出したやうに、半ば獨り言のやうにも）隨分、滿員ばかりね。

男　え？（振り返つて、女の方を見る）

女　（皮肉に聞こえるほどに）毎日、往き來の電車で、大變ね。

男　さうでもありませんよ。馴れてますからね。

女　あら、あんなに……。

男　もつと混む時があリますよ。

女　あたしなんか、夕方出た事がないから、まるでもう……。

男　（皮肉のやうに）惡い相手につかまつたもんですね。

女　ふゝ。

（電車が着いたので、群集がさつとその方へ引かれて行く。）

男　乘りませうか。

女　さうね。

男　あれなら、乘れる。

女　でも、あの人ぢやあ……。

（男、少しあせつて來る。）

男　また來た。

女　（焦立たしさうに）ほんとに、どれもこれも滿員ね。

男　え。――自動車のやうな譯には行かない。

女　乘合も來ないのね。

（間。）

男　どうです。一そのこと、もう少し歩きませうか。

女　え。――でも、隨分、歩いたから……。

男　さうですね。

女　ですけど、偶然お目にかゝれて嬉しかつたわ。久しぶりで町を歩いて……。

男　公園をぬけて行けばぢきぢやありませんか。歩いたつて、三十分もかゝりやしません。

女　だけど、遲くなると……。

（間。）

女　乘つちまいませうか。

男　乘れゝば好いけど……。

女　中の方は、割合にすいてゝよ。

男　でも、あの人ぢやね、押されて、――いつそ遲くなつてしまへば空くんだけど……。

女　遲くなつたらつて、幾時頃に。

男　七時まで待てば大丈夫ですよ。
女　いやよ、あたし、そんなこと。――そんなに遲くなつたら、叱られてしまふわ。
（間。――男、女の横顏を見る。）
女　引つ返しはないのかしら。
男　え。――もう一つ向うからならあります。
女　乘りませうか、あれに。――少し位、押された方が面白いわ。
男　でも、お孃さんのなさる事ぢやない。
女　いゝわ。そんなひやかして。――ほんとに、歸れやしない。
男　だから、散歩するつもりで。
女　あ、あんた。空いたのが來たわ。（言ひ捨てゝ、左の方へ、行くと思ふうちに、折柄、停まつた市營自動車にひらりと乘る）
男　（女の後に隨ふ。が、女が思ひがけず自動車に乘つたので、その儘踏み臺の前に立つてゐる）
女　（さつさと奥の方へ這入つてかける）
男　（人道の方へ上る）
女　（後を見る。男がゐないので、稍あわてゝ窓外を見る）
男　（人道の端に立つてゐる）
女　（昂然と）さようなら。
男　さよなら。
女　その中、遊びにいらつしやいね。（その儘、澄して前方を見る）
男　（何事か言はうとして一足前へ出る。よして反對の方を見る）
（自動車、動きかける。）
女　（振り返る）
男　（ぢつと向うを見てゐる）
女　（自尊心を傷けられた面持。直ぐ目を元へ戻す）
（自動車、行つてしまふ。）
男　（まだしばらく立つてゐる。振り返つて自動車の後を見る。直ぐ振り返つて、自動車の行つた方向とは反對の方へ、ぼつ／＼歩きかける）

## 第五場

京橋邊。

カフエの内部。可成りに廣い。一方に出入りの口。衝立てが立てゝある。直ぐその横に二階への階段がある。反對の側に酒場。その傍に金錢出納器を乘せた勘定臺。料理場の口。酒場の後の棚には、洋酒の瓶が、色

とり〳〵に置かれてある。

夜。十一時頃。宵の中は賑やかに騷がしかつたのも、今は、卓もあちらこちらに、空しく電燈の光を反射してゐて、何となく荒涼として見える。

客は一體に、贅澤な流行の身粧の方が多い。あたりもバラックの間に合はせながら、木組も相當頑丈で、壁紙の色や鉢植の色などで、可成りの落ち付きを得てゐる。

一人の勞働者が這入つて來る。生醉ひの元氣で、衝立ての陰から威勢よく顏を出す。が、中の、あかるくて、しかもどこか冴え〳〵と更け渡つた空氣に、稍鼻白む樣子で、一瞬立つてあたりを見渡す。入り口に近い二三の視線が、その方に集まる。で、避けるやうに、入り口に近い卓の一つに進み寄る。足がふら〳〵する。どつかり椅子にかけ、卓の上に肘を突く。

女給　（その傍へ近づく）

勞働者　（下から見上げて）酒を持つて來い、酒を。

女給　お酒はなんにいたします。

勞働者　なんでも好いんだ。酒なら好いんだ。

女給　日本酒はないんでございますが。

勞働者　酒がねえ。

女給　はい。洋酒しかございません。

勞働者　ふん。ぢや、ビールはあるか。――それもねえか。

女給　おビールはあります。

勞働者　ぢや、ビールだ。

女給　おビールはどちらにいたします。黒ですか。

勞働者　うム。（女給を見る）

女給　白ですか。

勞働者　（間。――吐き出すやうに）白だ。

（女給、鳥渡勞働者の顏を見る。それから默つて酒場の方へ來る。他の女給達と、その方を見て私語す。勞働者、そつとあたりを見廻す。女給、ビールを持つて行つてつぐ。）

勞働者　（まだ壓迫を感じてゐる。コップに注ぐのを見たまゝで）料理を持つて來い。

女給　は？

勞働者　食ふものを持つて來いつてんだ。

女給　お料理は何にいたします。（獻立表を卓の上にひらく）

勞働者　お、――おれにや、こんなもなあ讀めねえや。な、讀んで吳れ。

女給　（笑ひを嚙み殺しながら讀んで聞かせる）

勞働者　（遮る）おう。おう。――そんな橫文字を言つた

つて、ちんぷんかんぷんで分らねえや。――一體、何があるんだい。

女給　は？

勞働者　おれつちの食ふもなあ、何があるんだつてことよ。

女給　何でもございます。オムレツに、ビフテキ、コロツケ、カツレツ。

勞働者　（突然、大きな聲で）それだ、それだ。そのカツだ。カツだ。

（人々、一時に勞働者の方を注視する。）

勞働者　（注視に氣付く。稍小聲で）うん。そのカツを持つて來てくれ。

女給　はい。（料理場の方へ行き、註文を通す）

勞働者　（自分でついで飮む。またつぐ）

女給　（ナイフとフォークを勞働者の前へ持つて行く。このナイフとフォークは銀色の金物で、十分によく光つてゐる）

勞働者　（しばらく卓上のナイフとフォークとを見てゐる。手にとつて見る。重さをはかる。そつと下に置く。しばらく。腹掛の丼から大きな縞の財布を引き出す。卓の下で、膝の上にザラッと金をあけ、勘定する。ふんとせゝら笑ふ。ザラ／＼と金を財布に戻し、紐を卷いて懷に入れる。再び肘を突く、ビールを飮む、小聲に唄ふ）

女給　（カツレツの皿を持つて行く）

勞働者　酒を持つて來いや。（ナイフとフォークを持つて、肉を切らうとする。切れない。フォークを置いて片手に皿の上の物を押へて切る。段々醉つて來る）

（人々、勞働者が財布を見るあたりから、皆好奇の目をもつて、その方を見てゐる。）

勞働者　（醉つて少しづつ氣が強くなつて來る）

女給　（ビールを持つて行きつぐ）

勞働者　（ぐつと飮む。目を上げて、ぢつと周圍の人を見据ゑる。人々、段々一人々々に目をそらす）はゝ……。

（もう一度、人々注視す。）

勞働者　（凄いほどの目元で、ぢつと人々の目をうける。人人、そらせる）はゝゝ。（大きく笑つて、ふら／＼と立ち上がる）

ボーイ　（その方に近寄る）

勞働者　おい、便所はどこだ。

ボーイ　あの、便所は二階ですが……。

勞働者　何だ、二階だ。

ボーイ　は。下のは、鳥渡こはれてゐますので……。

勞働者　はゝゝ。どこまでもふざけてやがら、どこでい、二階は。

ボーイ　は、こちらです。
勞働者　はゝゝ。
（二階へ上がつて行く。）

## 第　六　場

淺草邊。街上

カフエの前。カフエは丁度街の角にあるので、ガラス戸の入り口が角の兩側に見える。道はこの角から右と左とに、ずつと向うの奧の方へ行つてゐる。夜。可成り更けてゐる。人の通りも疎らである。左右の入り口から、カフエへ人が出這りする。それも入る人よりは出る人の方が多く、それさへも段々途絶え勝ちになる。

しばらく。

右手の道から、勞働者三人出て來る。醉つてふら／＼と、足元があぶない。甲と乙と肩を組んでゐる。

丙　畜生め。こゝをどこだと思つてやがるんでい。
甲　おりや、いやだ。
丙　勝手にしろ。態々淺草三界まで來て、その儘おとなしく歸る馬鹿がどこにあるかい。
甲　いやだ。おりや、何てつたつて、行くのはいやだ。
乙　まあ、好いよ。なあ、兄い。お前は少し強情だよ。
甲　何が強情でい。
乙　まあさ。——折角三人一緒に來て置きながら、別々に歸るなざあ、いやぢやないか。たあ吉。
丙　さうよ。
甲　だから、一緒にもつと飮まうつてんぢやないか。
乙　よし／＼、誰も飮まないと言やしないや。なあ、酒も飮……。
丙　酒はもう澤山だ。
乙　お前は默つてなよ。
丙　いゝや、默つちやゐないぞ。おりや……。
乙　分つたよ。分つたよ。
甲　分つたか。——ぢや、おれと一緒に飮むか。
乙　飮むから、一緒に行くんだぞ。
甲　いやだ。いやだ。
乙　いやだつて、——そんな勝手な奴があるか。
甲　何が勝手でい。
乙　さうぢやねえか。手前が毎日詰らなさうな面をしてやがるから誘つて來てやりや、好い氣なことぬかしやがつて……。
甲　ふん。手前らに、おれの氣が分つて堪るものけい。
乙　何だと。

丙　おい、だからよ。そんな奴は相手にするなつてんだ。

甲　なあ、悪いことは言はねえ。おれと一緒に歸れ。――手前、かゝあが待つてるぢやねえか。

丙　かゝあなんか、くたばつてしまへ。

甲　默つてろ。手前なんか。

丙　ふん。手前がする時には、散々好いことをしときやがつて、かゝあが待つてるもねえや。

甲　だから、言ふんだ。かゝあに死なれてから、あわてたつて後の祭りだ。なあ。

乙　よし、よし。もう分つたよ。

甲　分つたか。おや、もう一杯飲まう。酒でも飲まなけりや詰らねえや。――おう。こかあ、カフヱだ。（構はず左手の入り口から這入つて行く）

丙　厄介な奴だな。

乙　まあ、好いから、――あいつ、うまく酒を飲ましてな。おれ達だけで行かうや。

丙　うむ。さうしよう。奴、どうした。

乙　うむ。

甲　（入り口から顔を出す）おい。何してやがるんだ。ぐづぐづと。

乙　おう。行くぞ。

（甲、這入る。）

丙　奴、地震で女房に死なれてから、いやに諄い臭くなりやがつたな。

乙　まあ好いから、一杯だけつき合ひなよ。

（二人、後から這入つて行く。）

（往來の人、段々少なくなる。）

（支那ソバ屋のチャルメラの音が遠く聞こえて來る。段々近くなる。遂に右手の奥から現れる。長く長くチャルメラを吹きながら、ゆつくり左手に去る。）

（しばらく。）

（乙と丙と、左手の入り口から出て來る。）

丙　（乙を見て、につと笑ふ）

乙　（笑ひ返す）

丙　行かう。

乙　うむ。

（兩人、烏渡中を振り返つた後、急ぎ足に左手の方へ行つてしまふ。）

（しばらく。）

（右手の入り口から、甲、出て來る。前よりも醉つてゐる。入り口の前に立ちどまる。目を据ゑて、あたりを見る。）

甲　ふん、行つちまひやがつた。

（ふらふらと角まで來る。角の所の電柱にもたれる。）

ぢつと足元に目をやる。）

甲　（電柱にもたれたまゝ）ふん。馬鹿野郎が、後になつて、女房のこと、後悔したつて追つ付かねえんだぞ。畜生。

（しばらく。）

（ふら／＼と、電柱を離れる。）

甲　（しよぼんと立ち止まつて）あゝ、つまらねえな。――酒を飲んだつて、つまらねえな。ほんとにつまらねえな。

（呟きながら、右手の奥へ行つてしまふ。）

（遠くチヤルメラの悲しげな音が聞こえる。）

（十三年十一月）

# 姉の花嫁（三場）

人物

梅子　姉　寡婦
靜代　嫁せる妹
信次郎　弟
母親
初子　弟の妻
松田
お種

## 第一場

梅子の家の客間と茶の間。
客間の方に、母親、床をとつて横はつてゐる。

母親　まだかい。

梅子　（茶の間の長火鉢で牛乳を沸かしてゐる）今ですよ……。

母親　少し位、ぬるくても好いよ。

梅子　待つてらつしやい……。（間）どうしてお母さんはそんなに食べものゝことばかりいつてるんでせうね……誰も上げないなんて……沸きさへすれば上げるんだから……牛乳なんてものはね、ちやんと熱くしなければ藥にならないんだからね……そんなに、やい〳〵つていつちや、あたしや一日お母さんの口のまわりについてなくちやいけやしない……。

母親　もう、お前、熱くなつたらう。

梅子　うるさい人ね……。上げますよう。いはなくたつて。（牛乳を注いで持つて來る）

（表の戸を開ける音がする。）

母親　（立つた儘でゐる梅子を見上げて）早くしとくれよ。

梅子　待つてらつしやい。誰か人が來たやうだから……。

（牛乳を母親の枕元へ置いて出て行く）

母親　（手を延ばして牛乳をとり、横になつた儘で飲みかける）

梅子　（話しながら出て來る）何さ、上がれば好いぢやないか。いやな人だよ。家へ來てまで他人行儀にして……。あら、お母さん、こぼすよう……。（急いで母親の枕元へ行つて、牛乳をとり上げる）

靜代　（續いてはいつて來ながら）だつてさ……あら、どうしたの。

梅子　しやうがないんだよ。何でもほしがつて……。

靜代　母さん。どう……。

母親　あ……。

静代　痛むの、やつぱり。

母親　痛くつてね……。

静代　なにさ泣いたりなんかして……をかしいぢやないの。（枕元のハンカチで母親の涙をふいてやる）泣きやむのよ、もう……

梅子　痛いつていつちや、泣く……誰それが來てくれたといつちや、泣く……もう泣いてばかりゐるんだよ。

静代　（うなづいて）うれしいんだね。（母親の顔に近く顔をよせて）これからはね、もう閑になつたから、毎日來て上げますよ。

母親　來てくれるかい……。

静代　だからね、毎日でも來て上げるからそんなに泣いちや駄目よ……。さ、泣きやんで……牛乳を飲んでゐたんでせう。

母親　あ。

静代　ぢや、あたしが飲まして上げようね。（牛乳を手にとつて飲ませる）

梅子　飲ませろ〳〵つて、いつてる所だつたんだよ、あんたが來た時……。あんまりまた急いで飲むと、せき込みますよ。

静代　（飲ませながら）でも、つらいわね。毎日ねたぼつかで動くつても自分ぢや自由になりやしないし……。

梅子　まだ先はかうぢやなかつたんだけど、この頃になつて、まるでもう……やつと右の手が少し動く位で……なにをするにも、直ぐお梅や、お梅や、だからね……あたしの方がたまりやしない……。

母親　ほんとたよ。自分ながらはがゆい位さ。もう。まるで……。

静代　たほらないのかね。

梅子　せめて先みたいに自分の用だけでも足せればね、お母さんもどんなに氣持が好いかしれやしないと思ふんだけど……。

静代　さうね。

梅子　今のやうぢや、あたしまで一日付きつきりだからね。自分の體だか何だか、分りやしない……。

静代　信次郎に、させれば好いぢやないの、少しは……。

梅子　何をするものか……。

静代　うんと、いつてやれば好いのに……。

梅子　だから、あんたが來たら頼まうと思つてゐたのさ、あたしなんか、いつたつて聞きやしないんだもの。

静代　あたしだつて聞くかどうだか……。

梅子　静ちやんなら聞くんだよ。だから……。

静代　どうしたの、今日は。

梅子　ゐるだらう……。
靜代　何してゐの、毎日。
梅子　何をしてゐるんだか……飲んでばつかゐてね……。
靜代　（大きな聲で）信ちやん。（間）信次郞。
（向うで「おう」といふ返事。）
靜代　それで、どうしたの、この間の話は……駄目？
梅子　文句ばかりいつてるんだもの。
靜代　何にしても早く貰つてやらなくちや、駄目よ……。
梅子　だから、それもみつしりいつとくれよ。あたしには、もう手に負へやしない……。
靜代　あたしの口でいつて好ければ、えゝ、いくらでもいふわ。うんと一つ叱り付けてやれば……無理をいつたつて聞かなければ好いのよ。
母親　だつてね、お前、當人がいやといふものを、無理に何して……。
梅子　お母さんがまた、甘いんだから……。
信次郞　（はいつて來る）なんだい。
靜代　なんだいもない……あたしが來てゐるんぢやないの。
信次郞　靜代なんか來たつてしやうがありやしないや。それとも何か、うまいお土産でも持つて來たのか。
靜代　誰がお前なんかに……。

梅子　出かけるのかい。
信次郞　さうさ。
梅子　靜ちやんが話があるんだつてさ。
信次郞　何の話さ。おれ、今日忙しいんだけどな、二時に會ふつて約束したんだから、行かなきや待つてゐるんだ。
靜代　好いから、おすわりよ。――そんな約束位遲れたつて好いぢやないの。
信次郞　さうぢやない。おれが行かなきやどうにもなりやしないんだ。しやうがないな。（しぶ〳〵すわる）
梅子　誰がお前のことなんか、そんなに待つてるものかね。
信次郞　馬鹿にしてら。姉さんなんか何も知らないから、そんなことといふけど、おれだつて、そんな馬鹿にしたもんぢやないんだ。原信次郞さんていへば、大したもんなんだからな。
靜代　ぷッ。
信次郞　笑つてやがら……。
靜代　だからさ、そんなにえらい人なら、えらい人で好いから、もう少しお母さんのことでも見て上げなきや駄目ぢやないの、姉さんばかりにさせて、まるであんたはしやしないんだつて、いふぢやないの。

信次郎　することが有りやしないんだもの。

靜代　ないんぢやない、しないのだらう。

信次郎　だつて、あんなこと男になんか出來るものか。

梅子　出來ないなんて、そんな……。

靜代。（遮つて）まあ、そんなことはどうでも、信ちやん、早く身を固めたらどう。お母さんだつて、さういつまでも姉さんに任せきりにしといちや……若し姉さんがないとか、有つても先みたいに近藤さんが生きてらしたら、姉さんだつて、そんなにいつも世話が出來やしないんだから、さうすれや、いやでも、信ちやん、あんたが引受けてしなけれや……。

信次郎　だから、好いのさへ見付けて呉れたら、明日だつて結婚するつていつてるんだ。お母さんの世話だつて……。

梅子　駄目だよ、そんな出鱈目いつたつて……。だから、あたしが心配して松田さんにも頼み、誰にも頼んで、あれが好いか、これが好いかと思つたつて、（左手を伸して寫眞でも見るやうな樣子をしながら）「姉さんの好きなのなら好いんだよ……ふん、なあんだ、これや、狆が火を吹いたやうな顏をして……」かうだからね……。自分は一體どれほどの美男子だとでも思つてんだらう。

靜代　駄目ね、そんな小むづかしいことをいつてちや……。

信次郎　小むづかしいんぢやない……本氣になつて考へてるだけなんだ。

梅子　馬鹿々々しい……誰がそんなこと……ねえ、靜ちやん、まあ聞いておくれよ。そんなに本氣なら本氣らしくすれば好いぢやないか……。所が毎晩々々、べろん／＼になつて歸つて來るんだからね。大抵一時か二時……遲い時はもう三時……しかも夜、夜中、どん／＼どん／＼と、近所もくそもあれやしない、たゝくんだよ。ほんとに、あんなに遲くまで、どこで飮ませる家が有るんだらう。

信次郎　いらん心配してら……。

梅子　さうしちやその度に、きつとどつか破くか、何かして來るんだからね……節子が逃げて行つたのも當り前だと、あたし思ふよ。

信次郎　下らないことをいつてら、ねえ、お母さん。

母親　ふゝゝ。

梅子　お母さんが、またあの通りだからね、何でもふんふんなんだよ、こいつには……。だから、好い氣になつて……。

靜代　（笑ひたくなるのを堪へて頷く）

梅子　あたしはね、こんな二人の女中のやうなことをしてゐたら、その中に自分の方が先へ參ると思ふよ。

靜代　それぢや姉さん、大袈裟よ。

梅子　何が大袈裟なものか……。だつてね。あたしはかういふことをいへば、皆が心配すると思つたからいはなかつたんだけど、かうね、左の脇腹から胸へかけて、毎日痛んで仕方がないんだよ。

靜代　どうして。

梅子　どうしてだか。（右手で左の脇を撫でて）こゝいらなんか。心が痛くて、押へると……いたゝた……とても、あたしは……肺病ぢやないかと思ふんだけど……。

靜代　ぢや早く見て貰へば好いのに……ほつといちや、いけないわ。

梅子　あたしもね、死にやしないかと思つて……自分は死んでも好いけど。お母さんがどうなるかと思つて……可哀さうで……。（涙聲になる）だつてね。こいつの歸つて來るのが二時だらう。漸く寢ついたと思ふと、もう直ぐお母さんが「梅や、起きとくれ。」だらう。どんなことがあつたつて、四時には起すんだからね。それを濟ませてあげる……少しうと／＼したと思ふと、六時には「まだ牛乳は來ないかね。」「御飯にかゝらなくて好いかい。」さ。この節六時といへばまだ薄暗いよ。それから起きる。御飯をたく。上げる。一時間するかしないに、もうまた食べものゝことだらう。やれ何、やれ何で、一日中手が離せやしない……その間には、こいつが十時頃には起きて來る。飯……あたしはお湯へ行く時間だつてありやしないんだよ。

靜代　だつて……。

梅子　さうだらう。お晝を過ぎたら直ぐ出てしまふだらう。もう夜しか歸つて來やしない……お母さんを一人でほつといて行く譯にも行きやしない……でもまあ、漸く晝の間、鍵をかつといて行くんだけど、落ちついて、洗ふなんて、とてもそんな……疲れなんかちつとも休まりやしないんだよ。

靜代　ほんとね。

梅子　あたしは何の爲に生きてるのか分りやしないよ。

信次郎　姉さん、もう好いんだらう。僕は行くぜ。（立ち上る）

靜代　まあお待ちなさいよ。

信次郎　もう行かなくちや遲くなつてしまふよ。

靜代　ぢや、好いから、あんたもつと考へなくちや駄目よ。姉さんの手傳もして、むづかしいことをいはないで早くきめなくちやいけないわよ。

信次郎　分つてるよ。ぢや、お母さん行つてくるよ。（行つてしまふ）

梅子　何て子だらう。

母親　でも、あの子も可哀さうなんだよ。

梅子　そんなことをいふから好い氣になるんだよ。ほんとにお母さんは甘いね。

靜代　何にしても早く嫁を探さなくちや駄目だわ。姉さんの證だつて、ね、さう〳〵……。

梅子　それなんだよ。もう今度こそはね、何でも好いからきめようと思つて……。

靜代　さうも行きやしないだらうけど。この間の話なんか好いと思つたのにね。

梅子　「鼻が上を向いて、結構ですな。」かうだからね。斷るつたつて、さう始終、ね……まあ松田さんだから氣を悪くもしないで、いつも〳〵親切にいつて呉れるんだけど、これが古くからの知り合でなければ誰が心配してくれるものか……。

靜代　世話好きなのね、あの人も。

梅子　あゝ。早く嫁でも貰つて樂にならなくちや……。あたしは三越だつて、帝劇だつて、もう何年も行きやしない……。

（表の戸が開いて人の聲がする。梅子、立つて行く。）

松田　（梅子と一緒にはいつて來る）さうですか。今そこで信次郎さんに會ひました。やあ、靜代さんも來てゐるんですね。お母さん、如何です。（すわる）

母親　相變らずですよ。

梅子　今もあなたの噂をしてゐたんですよ。

松田　悪口を仰有つたんでせうな。

梅子　いゝえ。信次郎のことでね、どうしても御無理を願はなくちやいけないつて……。

松田　さうですか。

靜代　どんなことが有つても、今度は無理をいはせないやうにしようつて、いつてたとこなんですの。どんなに御無理でも松田さんにお骨折をしていたゞかなくちやいけないつて……。

梅子　第一ね、あたしが一人ぢや、どうにもならないんですよ。お湯へ行くつたつてお母さんを一人でほつとかなくちやいけないし……何だか、この儘ぢや、あたしが死にさうなんですよ。

松田　まさか……。

梅子　ほんとなんですよ。何だか、胸が痛くて、死ぬんぢやないかと思つて……いゝえ。あたしなんかね。どうせ、こんな後家だからいつ死んだつて泣いてくれるものもあれやしないけど、お母さんがね、可哀さうで、若しも今あたしが死んだら、どうするだらうと思つて……。（涙を袖でふく）

松田　いや、所で、早速ですけど、今日も實はそのことで

上つたんですがね。

梅子　まあ、さうですか。ほんとうに御親切に……どういふんです。

松田　それですがね……。（風呂敷をほどいて、寫眞を取り出す）實は……。

梅子　へえ。（寫眞を開いて見る）

靜代　なか〳〵ハイカラね。素敵だわ。とても當世ね。

母親　早く見せとくれよ。

## 第　二　場

第一場と同じ客間と茶の間。

母親の枕元に靜代、すわつてゐる。梅子、長火鉢で乳を沸かしてゐる。

母親　まだかい。

梅子　今ですよ。

母親　少し位ぬるくても好いよ。

梅子　はい〳〵……。（牛乳を注いで持つて來る）

靜代　あたしが上げませうか。

梅子　好いよ〳〵。あたしが飲ませるから……はい。どう、少しぬるかつたかも知れないね。

母親　この位の方が、熱くなくて、却て好いね。

梅子　さう。ぢや、これからいつもこの位にしたげようね。――もつと上げませうか。まだ半分あるんですよ。

母親　また後で貰ふよ。

梅子　ぢや、もつとしてから……ほしかつたら、いつでも上げますよ。牛乳なんていふものはね、飲めば飲むほど藥になるんだから……。

靜代　カステラを上げませうか。

梅子　さうだわ。それをお貰ひなさい。靜ちやんが持つて來てくれたんだから……。

靜代　（カステラの一片を母親にとつて與へる）でもね、母さん、信ちやんの嫁もきまつたから嬉しいでせう。

母親　あたしも今度は、ほんとうに安心したよ。かうしてね、姉さんの世話になつてゐるのも好いけど、まるでもう體の自由といふものがきかないのでね……だから、姉さんに氣の毒で……。

梅子　何をいつてるのよ。お母さんはまるで、あたしがお母さんの世話を嫌つてでもゐるやうに聞こえて、見つともないぢやないの。まあ、靜ちやんだから好いやうなものゝ……。

靜代　ほんとうよ、母さん……。

母親　だけどね……かうして寢てゐて、あたしはいつも姉さんに濟まないと思ふんだよ。それもあたしのことばかりぢやない、信次郎のことまで、みんなだからね……。

梅子　だから、もう直ぐ樂になるから好いのよ。……さうすれや、あたしもお母さんのことに、かゝり切りになれるからね……。

母親　あたしのことだつて、嫁にして貰つても好いから、體を大事にしておくれ。お前に若しものことでもあられると、あたしはもう、どうして……。(涙聲になる)

梅子　大丈夫よ。お母さんは……、(これも聲がふるへようとする)

靜代　(間)それといへば、姉さん、先達胸が痛いといつてたのはどうして……？

梅子　うむ……。

靜代　見て貰つて？　胸の痛むのは、氣をつけなければいけないつて、家でいつてゝよ。

梅子　何でもないんだらう……。

靜代　何でもないんだらうつて……自分のことぢやないの。

梅子　だつて、もう痛くもなんともないんだもの。(手を胸へやつて撫てて見る)大丈夫……何でもないんだよ。

靜代　さう……。

梅子　それよりもね、あんたが來たら相談しようと思つてたんだけど……。

靜代　なに……婚禮のこと。

梅子　向うが派手な家だから。

靜代　誰か來たやうよ。

梅子　誰だらう……。(立つて出て行く)松田さんかも知れない、きつと……。(向うて「まあ、お種さん」といふびつくりしたやうな聲。)

梅子　さあ、どうぞ。(間)いゝえ。靜代なんですよ。(間)さあ／＼、どんなにお母さんが喜ぶでせう。

(お種を先に、續いて梅子現れる。)

梅子　ほんとにお珍らしい……。

お種　御免なさい。小母さん如何でございますか。(母親の枕元近くすわる)

母親　まあ、お種さん……ほんとに。

お種　(靜代とも挨拶をする)いつも上がらうと思ひながら貧乏閑なしで……。

梅子　あたしの方こそ、思ひながら何や彼や、一日中お母さんのことにかゝりづめだもんで……。

お種　あたしも、いつもそれを考へちや、お梅さんもお大抵ぢやないだらうと思つてゐるんですよ。――でも、今度はお目出度うございました。

梅子　お蔭さまで、やうやくね……。

お種　これは、ほんの……。

梅子　まあ、そんなことして頂いて……。
お種　(間)来月の七日、とか……。
梅子　えゝ。
お種　ぢや、もう、十日……
梅子　ないんですよ。
お種　さうですね、ぢやなか〳〵……。
梅子　あんまり急なんですけどね、まあ早い方が好いと思つて……。
お種　大變でせう、いろ〳〵。
梅子　別にこちらぢやすることつてないんですけどね、向うさんがなか〳〵派手にするらしいんで……。
お種　それや、ね。
梅子　元々派手好きなお家なんださうですけどね、道具がなか〳〵……それに娘はその子一人なんでせう……ですから……。
お種　それぢや、尤もですわね。
梅子　簞笥が二棹とか三棹とかに、鏡臺と姿見ていふんですが、大きなの……あれに、茶簞笥だの、何だのつて、それに長持でせう。
お種　ぢや七荷ていふんでせうか。
靜代　そんなに、姉さん?
梅子　さうなんだよ。

靜代　駄目ね、そんな大げさぢや。
梅子　だつて、向うでするといふもの、しやうがないよ。
靜代　だつて置くとこが……。
梅子　それさ。この間も大笑ひだつたんだけど、信次郎の部屋に置くつたつて……。
靜代　さうよ。
梅子　だから、部屋中荷物を一ぱい置いといて、自分達は簞笥の上か、長持の中にでもゐるが好いやつて……。(笑ふ)
靜代　(笑ひたいのを無理に堪へて)笑ひごとぢやないわ。ほんとに、もつとよく話しちやどう……なんか仲人が好い加減のことをいつてるのぢやないの、向うへ行つて……。
梅子　そんなこと……あたしはかくさずみんな話したんだもの。
靜代　でも、變ね。
お種　だつて、好いぢやありませんか。出來ない所ぢや、そんなこと、しようたつて……。
梅子　それが初めはそんなお話ぢやなかつたんですけどね……。
靜代　どうしたの。
梅子　二三度信次郎と話をしてからといふもの、向うのお

父さんといふ人が急に信次郎が好きになつて……。
静代　信次郎が行つたの。
梅子　さうよ。
静代　へえ、……づう／＼しいわね。
梅子　なあに、近頃ぢや、大抵毎日行くのさ。そしちや、二人で、どこへ行つた、こゝへ行つたつて……全く、近頃の若い者は……。（むしろ幸福さうに）
静代　でも好いぢやないの、その方が、仲が良くなつて………。
お種　段々活動寫眞なんかゞ來るもんですから、日本人も西洋式になつて行くんですね。
静代　（笑ふ）
お種　（間）でも、結構ですわね。
梅子　道具がそんなだから、自然あんた、着物がね、大變で……夏冬の紋付が二重ねづつに、何とかつていつたつけ、訪問着……シユークリームぢやなかつた……。
静代　シヤルムーズよ。
梅子　さう／＼。シヤル、ムーズさ。その訪問着が二枚、
お種　へえ。あたしなんか見たことがありませんわ。
梅子　この頃はやつて來たんださうですよ。何でもね……何だか、あたしもよく知らないけど、その外にお召、錦紗、それから銘仙なんてものは、うんとあるんですとさ。
お種　へえ、ねえ。
梅子　鳥渡あれだけの嫁はありませんよ。信次郎の嫁には勿體ないつて、いつてる位なんですよ。
静代　姉さん……。
お種　（間）小母さんも御安心ですわね。
母親　早く來てくれないとね、お梅が可哀さうで……。
お種　ほんとうに……。おや、失禮しますわ。
母親　ごゆつくりなすつてゐらつしやい。
お種　でも、家をその儘にして來たもんですから……。七日にはお邪魔でも、お手傳ひさせて頂きに上りますわ。
梅子　好いんですよ。家で式をしないつもりですから……それよりも、十日が濟んだらあんたの所の何と、お嫁さんと御一緒に道具でも見に來てやつて下さいな。
（お種、挨拶して歸つて行く。）
梅子　（送つて行きながら）あたしも留守番が出來たら、ゆつくり寄せて頂きますわ。
（梅子の後から静代も共に送つて行く。間もなく、静代、歸つて來る。母の枕元にすわる。梅子、歸つて來る。）
静代　駄目よ、姉さん。
梅子　（立つた儘で）なに。

靜代　お種さん、變な顏してたぢやないの。あんまり姉さんが、あんな自慢をするもんだから……。

梅子　あたしは知らないよ。

靜代　のんきね、姉さんは……。だつて、あすこのお嫁さんは何でせう、ほら……。

梅子　かまやしないよ、そんなこと……それよりも靜ちやん、まだ歸りやしないでせう。

靜代　なに。

梅子　今の間に、烏渡お湯に行つて來たいと思つて……。

靜代　好いわ。ぢや、早く行つて來て頂戴。

梅子　まあ、これで嫁でも來れば、ちつとは落ちついてお湯にもはいつてられるだらうと思つて……。

靜代　さうね。

梅子　それよりも、あたしは芝居を一ぺん見たいと思ふんだよ。

靜代　隨分、昔は二人で見たわね。ほんとに、姉さんは芝居好きだつたから……。

梅子　もう何年て見やしない……。

靜代　一緒に行きませうか。

梅子　どこにしよう。

靜代　どこでも好いわ。

梅子　歌舞伎座か……梅幸も好いね。

靜代　梅幸は……帝劇ね。

梅子　さうよ。あたしは、帝劇でも、歌舞伎座でも、震災後はまた知らないんだよ。

靜代　あたし、歌舞伎座へは行つたわ、去年。

梅子　ぢや帝劇にしようか。

靜代　え。それが好いわ。

梅子　ぢや、帝劇と……。あ……。帝劇か。（間）何か好いものをやつてくれると好いね。女優劇も好いぢやないか。踊りかなんか、……好い淸元に常盤津でも聞きたいね。何やつてるんだらう、今。

靜代　いやな、姉さん。今月はどうせ駄目ぢやないの。

梅子　あゝ、さうか。來月だね。

靜代　それより早くお湯にいつてらつしやいよ。

梅子　ほんとだ……その方が肝腎だつた……はい〳〵と……だけど、あたしは帝劇も何だけど歌舞伎座へも是非行つて見たいと思ふよ。淺草へも行きたいし……上野の展覽會は、もう過ぎちやつたか知ら……。

靜代　えゝ。

梅子　ぢや、お花見だ……。小金井だの、荒川だの……ああ。

靜代　好いわね……。

梅子　（大きな溜息）いくつ體が有つたつて足りやしない

ね。(間)

靜代　さあ……早くよ。

梅子　はい〳〵……。(芝居がかりで)しからば……

信次郎　(はいつて來る)

梅子　おや〳〵。これは〳〵。若旦那さま。お歸りでございますか。

信次郎　なに、いつてるのさ。

梅子　どうなさいました……えらいお早いお歸りで……奧さまは、今日は如何でございますか。へゝゝ。お顏色がお惡いやうでございますが、喧嘩でもなさいましたか。まさか……。

信次郎　およしよ、姉さん。

梅子　はい〳〵……でも、いつにないお早いお歸りで、つい御心配申上げますんですよ……まさか、今から喧嘩は、ちつと早過ぎますしね……。

信次郎　馬鹿だな。

梅子　さやうで……私は元からの馬鹿でございますよ。どうも生れつきの御機嫌買ひでございましてな……。

信次郎　およしつたら、姉さん……氣味が惡くなるぢやないか。

(梅子、をかしさうに笑ふ。靜代も笑ひを制し切れない。)

信次郎　いやになつちやふな……。人の顏を見るなり、變なことをいふかと思ふと、また笑ひ出しちやつて……。

(もう一度、笑ひ。)

梅子　(笑ひをこらへて、陽氣に)しからば拙者は風呂屋に參らう。御免。(靜代の笑ひ續けるのを殘して、役者氣取りに出て行く)

(間。)

信次郎　おれの惡口をいつてたんだらう。

靜代　あら、どうして……。

信次郎　きまつてるんだ。(間)結婚が氣に入らないんだ。だから……。

靜代　さうぢやなくつてよ。

信次郎　そんなに何なら、斷つたつて好いんだ。おれは、何も、そんな……。

母親　姉さんは、嬉しいんだよ……分つてるぢやないか……。

## 第三場

第一場第二場に同じ。

母親、やはり客間に臥てゐる。その傍に簞笥、その他前場になのつた新しい調度類が置かれてある。茶の間の方に、梅子、小掻卷をかけて寢てゐる。

（間。）

母親　お梅や（返事がない。間）お梅や。梅は、ゐないのかい……。

梅子（寝た儘で）なんですよ。

母親　済まないがね……牛乳を温めておくれよ。

梅子　もう……まだ早いぢやないの。

母親　さつき、三時がなつたんだよ。

梅子（舌をならして）耳だけは一人前ね……今して上げますよ。（その儘起きない）

（長い、可なりの間。）

（表の戸が開く。）

梅子、起きようとする。）

靜代（はいつて來る）今日は……。あら、どうしたの、姉さん……どつか、悪いの。

梅子　何でもないんだよ。

靜代　顔の色が悪くつてよ、いつもより……。風でも引いたんぢやない……。

梅子　何だか……體が……

母親　まだかい……。

梅子　今ですよ。

母親　少し位、ぬるくても好いよ。

梅子　うるさい人ね……。

靜代　牛乳……。（長火鉢の方を見る）おや好いわ。あたしが沸すから……寝てゐらつしやい。姉さん……

梅子　好いわ。

靜代　好かなくつてよ。ね、構はないから……。好いわよ。（母親の枕元に來て）母さん、どう……。姉さんはね、體の具合が悪いといふから、あたしが今沸かしてあげますから、ね、待つて頂戴。

母親　どうしたんだい……え。

靜代　何だか、體がいけないんだつて……ぢや、直ぐだから……。（長火鉢の方へ來て、牛乳を温める）ちやんと、蒲團でも敷いて寝なくて好いの……。

梅子　それほどぢやないのよ。

靜代　どうしたの、一體。

梅子（強ひて元氣らしく笑つて）なに、庭のね、大掃除をしたんだよ……。どぶから何から……。

靜代　そんな無理するんですもの……。

梅子　それだけなら何でもなかつたんだけど、お母さんの汚れ物だの、信次郎の物だの、これつ位、一抱も洗濯したんだよ。

靜代　信次郎の物なんか、何に……させれば好いぢやないの。

梅子（間。ぢつと、睨むやうに靜代を見る。いつかその

目から涙がこぼれ出す）

靜代　どうしたの、姉さん……。え。どうしたのよ。

梅子　（鼻を啜つて）そんな物、洗ふくらゐなら、あたしがするものか……。（泣く。間）牛乳がふくぢやないか……。

靜代　あゝ。（牛乳をついで母親の枕元へ持つて行き飲ませる）少し熱いかも知れませんよ。

母親　お梅はどうしました。

靜代　姉さん、お母さんが心配してゐてよ。

梅子　（客間の方へ起きて來る）何でもないんですよ、お母さん。

母親　氣をつけておくれ。お前にねられると、あたしはしやうがないから……。

梅子　あたしなんか、一層死んぢやつた方が好いんだよ。さうすれや信次郎だつて、ちつとはお母さんの世話をするだらう……ねえ、お母さん。

靜代　でも、どうしたつていふんだらう。

梅子　あたしにはどうして好いか分りやしない……いくら何だつて、あんなに喧嘩ばかりしてゐる夫婦なんて、まだ二月になるかならないぢやないか。それだのに、お前……。

靜代　あたし、この間姉さんが來た時に、そんな話をしてゐたけど、まさかそれほどぢやないと思つて……姉さんが大袈裟にいつてるんだと思つたのよ。

梅子　誰が大袈裟になんかいふものか。（間）それも一年とか二年とか、經つた夫婦なら別だけど……。

靜代　何だつていふのよ。

梅子　馬鹿々々しい……。何だの、彼だのつて、下らないことを……あたしはもう聞いてもやりやしない……。ほんとにあんなのこそ氣が合はないつていふんだね。そしちや、ひい／＼ひい／＼つて、しまひには泣いて……昨日なんかあんまりひどかつたから、あたしはうんといつてやつたんだよ。それほど二人が氣が合はなくて喧嘩ばかりをしてゐられちや。あたしは見てゐられないからつて……松田さんに話してどうでも好きなやうにして上げるからつて……。さういはれゝば何にもいへないんだよ。つんと、かうさ。（すました樣子をして）下ばかり見て、一時間でも二時間でも默つて、馬鹿にしたやうな恰好をして……それだからまた信次郎が口惜しがるんだよ。あいつはあんながら／＼やだらう。お喋舌りの馬鹿だからね……「ふん」てな格好をするんだらう……「何をおれを馬鹿にするんだ。」するときつと「やつぱり先の奧さんが可愛いんでせう。」

靜代　やつぱり惚れてるのよ。

梅子　「さうさ。先の奴はもつとおとなしいや……。」

靜代　そんなことといふんですもの。それぢや誰だつて口惜しがるのが當り前よ。

梅子　折角嫁を貰つたつて、こんたんぢやあたしは何にもなりやしない。却て……。

靜代　だつて、姉さん、洗濯物なんか知らん顏してゐれば好いのに……。

梅子　だつて……今朝さ。何だか井戸端でごそ〳〵してゐると思つたら、信次郎が自分の汚れ物を洗ひかけてるんぢやないか。

靜代　（たかしさを堪へて頷く）

梅子　口惜しかつたから、ひつたくつて、さつさと洗つてやつたんだよ。

靜代　あんまり癇癪起すと毒よ。

梅子　毒だつて構やしない。病氣にでも何でもなつてやるから……。

靜代　そんなこと……よくいへば好いぢやないの。

梅子　あたしのことなんか聞きやしないんだもの。お前いつとくれよ。靜ちやんのことなら、聞くらしいんだから。

靜代　あたしでよければ、いつても好いけれど。

梅子　さうしてくれなくちや、あたしは、もう堪りやしないよ……。

靜代　あたしの口でいつて良くなることならいくらでもいふわ。

梅子　有り難うよ。あたしはもうあんただけが頼りなんだから……。（靡がふるへようとする）

靜代　（間）しつかりしなければ駄目よ。

梅子　だつてね、あたしは折角、あゝもして、かうもしてと思つてゐたのに、まるであいつ等はあたしのことなんか考へてくれやしないんだもの……碌に家になんかゐてたことなんかありやしない……いつだつて、あたしのこと邪魔ばかりにして、まるで婆やかなんか見たいにして……これぢや、もうあたしは今に死んぢまふよ。

靜代　そんな緣起の惡いこと……。

梅子　だつて、あたしはきつと肺病に違ひないよ。毎日胸が痛んで仕方がないんだもの……。左の、脇から胸へかけて、何かしようと思ふと、もう痛んで。

靜代　先に痛いつていつたとこでせう。

梅子　もうとても先よりは痛みがひどいんだよ。

靜代　それや見て貰はなくちやいけないわ。ほつといちや駄目かも知れなくてよ。

梅子　駄目だつて好いよ。そんなに喧嘩ばかりしてゐるんなら、あたしはもうどんなことだつてしてやるから、洗

濯だつて何だつて……體なんかどうなつたつて。

靜代　しつかりしなくちや、姉さん……。

（表の戸開く。靜代立たうとする。）

信次郎　（はいつて來る）たゞ今。

初子　（後からはいつて來る）遲くなりました。

信次郎　お土產。

靜代　どこへ行つて來たのよ。

信次郎　うむ……。どこでもない。散歩さ。銀座へ行つて來たんだ。三越へ行つてそれから松屋へ行つて來てやつた。

靜代　（目くばせする）

初子　おしやべりね。

信次郎　話をしてるんぢやないか。どうだい。靜ちやん。今度一緒に活動寫眞へ行かないか。今日も見て來ようと思つたんだけど、止して來ちやつたんだ。

梅子　（ぷいと立つて行く）

靜代　姉さん……。（後を追つて行く）

（向うから梅子の啜り泣く聲が、段々大きく聞こえる。）

——幕——

# 寂寥の國（四場）

人物

省一
信二郎　弟
おとら　二人の母親
みつゑ　おとらの姪
おえん　婆や
小間使　二人
醫師
子守女

關西地方の或る小都會

## 第一場

酒造業菱屋の奥の一間。餘り大きくはないが、古風な日本風の味を持つて、亘く落ちついてゐる。
みつゑと信二郎、はいつて來る、すわる。

信二郎　なに……なんの話。
みつゑ　えゝ……。（間）
信二郎　どうしたの……なんか、あつたの……話つていふのは何……君をどうかしたの、君のとこの人が。（間）どうしたのさ、默つてゐて……用事ぢやないのかい……ぢや、行くよ。（立ちかける）
みつゑ　信二郎さん。
信二郎　（腰を下して）なにさ……信二郎さんなんて、改まつて……。
みつゑ　あたし……。
信二郎　早くいへば？　……何を考へてるのさ。體でも惡いんぢやないかい。顏色が良くないぜ。
みつゑ　何だか……體が……。
信二郎　胸？
みつゑ　夕方になると、がつかりして……。
信二郎　熱が出るんだらう……だから、僕が用心しなければいけないつて、前にいつたんだ。僕だつて誰だつて、家の系統はあんまり強くないんだから……。
みつゑ　何だか頼りない氣がして……今にも死にさうな……。
信二郎　（思ひつめた語氣で）ね、みいさん。
みつゑ　なに。
信二郎　これね、今までにも、もう何度も聞かうと思つた

ことなんだけど……どうなの、一體、君のとこの何は…………大事にするの、君のこと。

みつゑ　（訴へるやうに見上げる）

信二郎　大事にしないんだらう。

みつゑ　（淋しく目を伏せる）

信二郎　夜なんかは？　……歸つて來るの、ちやんと。

みつゑ　（頷いたやうに見える）

信二郎　歸つて來るつて……來ないんだらう……分つてゐるんだ、僕にはちやんと。（間）毎晩のやうに遊びに行くんだらう（長い間）僕がいつた通りぢやないか。その位のこと、あの顏を一日見ただけで、僕には初めから分つてゐたんだ。その上、醫學校の時分から評判だつたんだつていふんだからね。だから、僕がいけないつて……不贊成だつて……いつたつて、みいさんには、何をいつてるんだと思はれやしない……「默つてゝ頂戴ね。」

みつゑ　信さん。（許しを乞ふやうに、また悲しさを訴へるやうに）

信二郎　（間）今更いつたつてしやうがないつていふのか。さうさ。今更そんなことといつたつて、しやうがない……それ位のこと、知つてるさ。――ぢや、どうするつていふの……。それよりも、どうすれば好いか、それを考へる方が肝腎だと思ふんだ。ねえ、僕は……。

みつゑ　あたしは、もう……。

信二郎　もう。……何？（間）まさか……。

みつゑ　えゝ。さうなの。あたしはもうとても我慢が出來ないの。ねえ、信さん、お願ひですから、あたしに離縁がとれるやうにして頂戴。ほんたうに、あたしは何といつて、あなたにお詫びして好いか……あたしのこと、あんなに思つてくれてるのに、たうとう聞かなくて……だから、あたし嫁入りして見て、信さんの罰が當つたんだ、つく〴〵さう思つたの。だから、今日まで誰にもいはないで、ぢつと獨り我慢して來たんです。でも、もうこれ以上……まるで、もうこの頃になつちや家へなんか一晩も歸らないつていつても好いくらゐ……女の所から病院へ通つてゐるんです。ね、信さん、お願ひだから、あたしを助けて頂戴。あなたが好いつていつてくれなければ、あたしにはどうすることも出來ないの。叔母さんだつて、あなたさへ好いつていへば、ねえ、信さん、お願ひだから……。

信二郎　僕には、なんといつて好いか分らないな。

みつゑ　どうして？　……だつて、結婚の時、あんたは………。

信二郎　それや、あの時は反對したさ。だけど、今は今……
……離縁といふことになれば、また別さ。

みつゑ　やつぱり信さんは、あたしのことを憎んでるのね。

信二郎　何をいつてるんだ。

みつゑ　いゝえ。さう。あの時の言葉をはつきり思ひ出すわ。「僕は忘れ切つてやるんだ。忘れ切れなくつたつて、忘れ切つた樣子をしてやる。」

信二郎　だから、どうしたといふのさ。本當なら、僕はこんな相談をされたつて知らん顏をしてゐて好い人間なんだ。その方が利巧なやり方かも知れないんだ。しかし僕は君を憎むとか憎まないとか、さういふことでなしに、夫婦といふものはそんなものぢやない……夫婦のどちらかゞ氣に入らないからつて、直ぐぷいと別れるやうな、そんな無責任な結合ぢやないと思ふんだ。それに君はまあ歸つて來るんだから好いやうなものゝ、歸されるんだつたらどうだと思ふ。それや君のとこの何は、そんな人だからまあ何とも思ふまいがね、しかし好い氣持はしないだらう。そして尙更人間らしい幸福から離れて行かないとも限らない。みいさんにしたつて、離緣して果して眞の幸福かどうか……それを考へるから、僕がいろ／＼いつてるんだ。だのに、それが分らないんで憎んでいふかなんかのやうにとるのなら、それこそ僕とは他人だ。

みつゑ　信さん、御免なさい。あたし、そんなつもりで………。（間）でも、信さん、あたしにはもうどうしても我慢が出來ないの。他の苦勞なら、どんな苦勞でも我慢するわ。でも、こればつかりは、いや……これ以上、我慢しろつて……それは、死ねつて、あたしにいふことよ。あたしに……。（顏をおほつて泣く）

信二郎　（間）みいさん。

みつゑ　好いの。あたしなんか、どうなつたつて……死ぬ方が好い。あたしなんか死んだつて、誰も泣く人なんか……。

信二郎　（强く）みいさん。下らないことをいふもんぢやない……。それよりも、まあ君を虐待するつて、聞いて見なけれや分らないけどね、場合によつちや、みいさんの爲に贊成しても好い……しかしね、僕が好いつていつても、兄貴がいけないつていつたらどうする。離婚することは勝手だけど、家へ置いてやらないつていつたらどうする。だつて、離婚すれば、また前のやうに家へ歸つて來なければいけないんだらう。

みつゑ　さうなれば、あたし工場の女にでもなんにでもなるわ。自分の爲にする苦勞なら、どんな苦勞だつて何でもないわ。

信二郎　一年も經てば、また我慢が出來ないつて、いやしないか。

みつゑ　冗談ぢやないの。今までのことを思へば、どんな

ことだつて出來るわ。きつと……幸福になるんですもの。神樣にだつて、何にだつて誓ふわ。

信二郎　誓つたりなんかしなくても好い。

みつゑ　ね、だから、信さん。あたしのこと力をつけて頂戴。あんたさへしろつていつてくれゝば、あたしどんな苦しいことだつて働くわ。

信二郎　まあ、何も殊更そんな苦勞をしなくても好いからね。女工なんてならなくても、小學校の先生にだつて何にだつてまだ外に働く道はあるんだからね。

みつゑ　えゝ。さう……。（大きな吐息をつく。と、それに續いて涙が止め度なく流れる）

信二郎　（間）どうしたのさ。

みつゑ　えゝ、あたし……。

信二郎　何も……。

みつゑ　うれしくつて……。

信二郎　さあ、しつかりするんだ……これからが大變だよ。

みつゑ　信さん。

信二郎　あんまり泣いてゐちや……兄貴でも見るといけないから（間）……僕は向うへ行くよ。（出て行く）

（みつゑ、涙をふいてゐる。――間。）

省一　（はいつて來る）ほう……みい公、何を泣いてゐるんだ。えゝしつかりしろよ。さ、おれがゐるぢやないか。

――幕――

## 第二場

第一場と同じ菱屋の奥の一間。

數週間の後。

みつゑ、續いて小間使現はれる。

みつゑ　（立つた儘で）叔母さんも、ゐない、と……。ぢや、だあれもゐないのね。

小間使　いゝえ、旦那樣はゐらつしやいます……お呼びしてまゐりませう。今お藏の方へいらつしやいましたばかりですから……。

みつゑ　好いのよ、呼ばなくても。

小間使　いゝえ。直ぐでございます。直ぐでございます。

（急ぎ足に出て行く）

（みつゑ、後を追はうとする。が、氣をかへて思ひとまる。――間。すわる。變にいら〳〵と落ちつかない樣子が見える。）

小間使　（はいつて來る）今直ぐ行くつて仰有つてでした。こしきが上るもんでございましたら、それを御覽になつてから。

みつゑ　さう、どうも御苦勞さま……。

小間使　（座蒲團を出して來る）どうぞ。

みつゑ　構はないでよ。好いんだから。

小間使　どうかなさいましたんですか。

みつゑ　え……顔の色？

小間使　どつかお惡いんぢやないんでございますか。

みつゑ　何でもないのよ。鳥渡したゞけ……。

小間使　まあ、さうでございますか。私、また……。

みつゑ　ねえ、おさきさん。あたしね、若しかしたら、この家の者になるかも知れないのよ。そしたら、どう……。

小間使　どうつて、私なんか……ぢや、お歸りになるんでございますか。

みつゑ　さうなの。

小間使　本當ですか。

みつゑ　本當よ。そしておさきさんなんかと一緒に働くの。どう……置いてくれる？

小間使　（急に笑ひ出して）御冗談を……眞面目な顔して仰有るんですもの……ほんとに奥さんは……。

みつゑ　いやな、さき、そんなに笑つて……本當だつてば……あゝ、もう一度娘になるんだ……。

小間使　まあ……ぢや、本當なんでございますか。

みつゑ　何、いつてるのよ。嘘なんか……誰が。

小間使　でも、奥さまなんか、好い御身分で……。

みつゑ　身分なんか好くつたつて何にもなれやしないわ。（間）本當よ、さき。お金なんか一文もなくて好いからね、親切な人の所へ行かなくちや駄目よ。あたしが、一年ほどの間に、どんな苦しみをしたか……いづれゆつくり話すけど、ほんとに、世の中なんて、何でも惡いことはみんな女の勢にするものなのよ。……男が浮氣をしたつて、惡いのは女の方のやうに、さういふんだから……。

小間使　（頷く）

みつゑ　妻なんて名前は好くつたつて、女中の方が、どれだけましか知れやしないわ。臺所のことだけだつて隨分頭を使ふのに、その上家の苦勞、お金の苦勞……後から後から、この上どんな苦勞が來るのかといふ氣がする位……それだつて男は平氣な顔して遊んでゐられるんだから……でも、もう今度は好いわ。どんなことが有つたたつて、あたし……ね、もう一度娘になつてみんなと働くんだから……。

小間使　だつて、奥さまが、そんな……。

みつゑ　奥さまなんて、止してよ。今日からまた元のみいさんだから、さう呼ぶのよ。好いこと……一緒に働くわよ。朝だつて……何時に起きるの。

小間使　六時……えゝ、まあ六時頃でございます。
みつゑ　六時、(間)好いわ。ぢや、六時ね。一緒に起きろわ。御飯をたくんでせう。
小間使　えゝ。でも、御飯は婆やさんが。
みつゑ　ぢや、さきは上を掃除するのね。それでは、あたしは表から庭の方をするわ。
小間使　表は、藏と一緒に男衆がしてくれるんでございますよ。
みつゑ　ぢや、あたしの仕事がないぢやないの。
小間使　ですけど、奥さまなんか。
みつゑ　好いわ。ぢや、二人で一緒にするのね。何から何まで……朝から晩までよ。あゝ、朝から晩まで、自分の體なのよ。自分で働くのよ。ね、さき、自分の體なのよ。(涙聲になる)
小間使　奥さま……。(間)おや、いらつしやいました。
省一　(いくらか酒氣を帶びてゐる)　奥さまがどうしたつて、おさき……よう、みい公か。なにしに來たい。(すわる。小間使出て行く)え、どうした。泣いてるのか。何をしよんぼりとしてゐるんだ。(間)今日は婆さんもゐないし……どうもおれの所も弱つちやつた。今年はうんと儲つた所が、うんと費るしな……何や彼やでな。しやうがないよ。信二郎には大怪我をされるしな……。
みつゑ　どうしたんです。
省一　どうしたつて、お前、あいつが馬鹿なのよ。學校で實驗の時に、藥を間違つたとか何とかいふんだがな、やられちやつたんだ。(手て顏を打つやうにして見せる)
みつゑ　まあ、顏に。
省一　さうよ。
みつゑ　いつです。それは。
省一　先週のいつとかつて……、もう十日にもなるか。何しろ目をやられたんで、つぶれるかも分らないつて話だがな。可哀さうな奴よ。
みつゑ　それで叔母さんいつてらつしやるんですか。
省一　さうよ。今日退院するつてんでな。ほんとにおれも弱つちやつた。
みつゑ　さうでせうね。
(間。)
省一　お前はどうしたのよ。
みつゑ　何のこと。
省一　大將のことを大々的に嫌つてるんださうぢやないか。おれはよく聞かなかつたが、婆さまが何だかいつてたが、どうするんだい。
みつゑ　あたし、そのことで……。
省一　(間)　別れるつてのか……まあ、それやそれも時と

場合で好いが……おれはどうもお前の所の大將に隨分何してゐんでな。
みつゑ　えゝ……。（間）でも、兄さん、あたしにはもう一日も我慢が出來ないんです。これ以上辛抱する位なら死んだ方が……。
省一　まあ待ちなよ。死ぬことはいつでも死ねるんだから、まだ死ななくても好いがね。ぢや、どうしても駄目だつてのか。
みつゑ　あたし、實は今日はもう歸らないつもりで、いろんなものを仕末して來たんです。だから、兄さん、どうぞ、あたしのこと可哀さうだと思つて置いて下さいな。兄さんにいけないつていはれゝば、あたしにはもう行く所がないんです。
省一　さうか。（長い間）
みつゑ　ねえ、兄さん。
省一　まあ仕方がない。いやだつていふものを無理に歸れつてことも出來ないからな。
みつゑ　ぢや、あたし……。
省一　うむ、さうよ。安心しろ。おれがついてら。
みつゑ　兄さん、ほんとに、あたし……。あたしは兄さんのことを一番心配したんです。若し……。
省一　はゝゝ。おれだつてそれ位のこと分らない人間ぢやないや。（間）さうだ。その中おれが好いお婿さんを世話してやら。
みつゑ　いゝえ。あたしはもう兄さんさへ許して下されば、一生女中代りに置いて頂きます。
省一　そんなことはいけない。從妹を女中に使ふなんて、そんなことが出來るものか。なあにおれにまかして置きな。おれが日本一つて花婿さんをな……。
みつゑ　あたしはもう結婚なんか……。それ位なら死んだ方が好いと思ひますわ。
省一　生意氣なことをいふな。おれが探してやるといふのに、いやだなんていつて見ろ。おれは勿體なくも麥屋の主なんだぞ。家長なんだぞ。その命令にそむいて見ろ。
（おとら、おとらに手をひかれるやうにして瀕中綱帶をした信二郎、その後から小間使、おえんなどついて來る。）
おとら　たゞいま。
信二郎　誰？
みつゑ　信さん。（走つて行く）
信二郎　みいさん？
おとら　（省一に）どうしたのさ、大きな聲で。
省一　いや……。
みつゑ　叔母さん。

省一　默つてろ。貴樣なんかの出る所ぢやない。お前は唯おれの命令に從つてゐればいいんだ。みつゑばかりぢやない……家長たるおれの命令に背く者は今後斷然容赦しないから……そのつもりで居れ。（いひ切つて出て行く）

――幕――

## 第三場

菱屋の酒倉の内部。麴室の前。

一二ヶ月の後。

向うの方で、騷がしく罵り合ふ聲が聞こえる。中で省一と信二郎の聲が、とりわけ大きく聞き分けられる。その間を女の聲。突然はたとやむ。間もなくみつゑ、今はもう繃帶をとつてゐるが、顏には一面ひつつりが出來、黑眼鏡をかけた信二郎を、かゝへるやうにしてつれて來る。二人とも足袋はだしの儘。衣服など取亂してゐる。

信二郎　大丈夫だつたら、みいさん……はなして……。

みつゑ　いゝえ。いけない。いけない。

信二郎　好いよ／＼。あんな兄貴なんか……構やしない……。

みつゑ　お願ひだから、信さん、落ちついて頂戴。お願ひだから……ね。

信二郎　うむ。（まだ息が彈んでゐる）

みつゑ　あたし……ほんとに……。

信二郎　どつこも怪我をしなかつた、みいさん。

みつゑ　あたしは何とも……ほんとにあぶなかつた……もう少しで、頭に當るとこ……。

信二郎　あぶないつて、誰かゞいつたから頭を下げたんだけど。（間）目さへ開いてゐれや……。

みつゑ　掛けませう……木があるから、そこに。

信二郎　うむ。

みつゑ　（信二郎の手をとつて、傍の材木に掛けさせる）

信二郎　（掛ける。間。ぢつと待つてゐたが、みつゑが掛けた樣子がないので）みいさんは……？（手で、掛けた後の木の長さを探りながら）掛けられるんだらう？

みつゑ　えゝ。

信二郎　（間）掛けたら好いぢやないか。

みつゑ　えゝ。

信二郎　（少し端の方へ寄る）

みつゑ　好いのよ。その儘で……掛けられるんだから……。（端の方へ掛ける）

信二郎　もつと、こつちへ掛ければ好い……。

みつゑ　えゝ。
（長い沈默。）
信二郎　靜かだね、こゝは……。
みつゑ　（間）夜だから……。
信二郎　（間）能藏なの。こゝは……。
みつゑ　えゝ。
信二郎　おや、麴室（かうぢむろ）は、どこ？
みつゑ　あんたの右手の方よ。
信二郎　さうか。
（長い沈默。）
信二郎　なんて、兄貴なんだか。（呟く）
（また長い沈默。）
（みつゑ、息をころして泣く。）
信二郎　（氣配（けはひ）で、それと感じる）泣いてるの……。（間）みいさん、みいさん。何を泣いてるの。泣いちや駄目。しつかりしなくちや……。（みつゑの肩に手をかける）
みつゑ　信さん。（縋り付く）
信二郎　しつかりするんだよ、しつかり。兄貴なんか、何ていつたつてこはがつちやいけない……。
みつゑ　信さん……。あたし、死にたい……。
信二郎　死んぢや駄目。死んぢや駄目。
みつゑ　でも、あたしはもう生きてはゐられないの。生きてるのは、いや、こんな苦しい思ひをして生きてるのは。
信二郎　だつて、僕だつて、生きてるぢやないか。
みつゑ　えゝ、信さん。
信二郎　何のために離緣をして自由の體になつたんだ。まさか、死ぬためぢやあるまい。兄貴が何だ。兄貴が嫁になれといつたつて、みいさんの覺悟さへしつかりしてゐれば、こはくなんかないぢやないか。
みつゑ　でも、あたしはもう、どうしても生きてるのは、いや。いやよ。死なして頂戴。
信二郎　そんなことといつて……みいさんが死んだら、僕はどうするんだ。
みつゑ　信さん。（泣く）
信二郎　みいさん。僕……僕は……。
みつゑ　あたしも……あたしも。
信二郎　みいさん。
みつゑ　信さん。
（自然と二人の口が合ふ。長い長い接吻。――靜かに離す。）
（みつゑ、信二郎の膝に泣き伏す。長い沈默。）
信二郎　兄貴が何といつたつてね、僕がついてゐるから、しつかりするんだよ。

みつゑ　えゝ……。

信二郎　いけないつていへば、家を出るばつかりなんだから、二人で……。

みつゑ　えゝ……。

信二郎　さうなれば、僕だつて働くからね、どんなことでもして……。

みつゑ　えゝ……。(間)でも、大丈夫でせうか。

信二郎　なに……。そんな弱いことといつちやいけない。そんな弱いこと……。

みつゑ　信さん。

信二郎　え。

みつゑ　お願ひだから、一緒に死んで頂戴。あたしはもう、生きてるのは、いや。どうぞ、信さん。

信二郎　そんなこと、それや……。

みつゑ　だつて、信さん、あんたは、あたしのこと……。

信二郎　愛してるよ。

みつゑ　だから、お願ひだから一緒に死んで、ね。あたしはもうこれ以上、とても苦しくて生きてはゐられないの。だからあたしを可哀想な女だと思つたら……。

信二郎　まあ、お待ちよ。それや、僕だつて一緒に死なないことはない……。僕は本當にみいさんのことを思つてゐるんだ。特に今度目がつぶれてから、一日だつてみいさんのことを考へない日といつてはないんだ。さう／＼。僕が病院から歸つて來た日、丁度みいさんが歸つて來た日だつた。それだつて僕は何か二人に特別な因緣でもあるやうに思へて、どれだけそのことを考へたか知れない……。今だからいふけど、僕は目がつぶれてから、何度死なうと思つたか知れない。病院にゐる時だつた。歸つたつて、みいさんは僕のことなんか相手にしてくれないだらう……。

みつゑ　あたし……。

信二郎　さう考へたのさ。生きてたつて、一々人に世話になつて、まるで死骸も同じだ。死んでしまへ……さう思つて……夜だつた。寢臺から起き上つた……。

みつゑ　そして。

信二郎　そして部屋から出ようと思つた。さうしたら、「はばかりでございますか。」つて、看護婦が起きて來やがつた。僕は便所へはいつて、いつまでも／＼おれは自分で死ぬことさへ出來ない人間だ、さう思つて、どれだけ泣いたか知れない……。(間)歸つて來て、さうあの日も兄貴がみいさんに嫁に行けとか何とかいつてたね。僕はあれを聞いて、何故歸つて來たらう。歸つて來なければ好かつたと思つた。でも、それからみいさんが親切にしてくれるから、さうなんだ、みいさん……あんたがゐてく

れたから、それで僕は生きてゐられたんだ。生きてゐる頼みがあつたんだ、そのみいさんに死なれて、僕はどうすれば好いんだ。それでも生きてゐろといふのか。こんな死骸も同じやうなものになつても、まだ生きてゐなけれやいけないといふのか。誰がそんなに、おれに苦しめといふんだ。

みつゑ　信さん。（縋りつく）　しつかりして……。

信二郎　そんなに苦しめようといふのなら、僕だつて男だ。立派に、男らしく運命に從つてやる……。さあ、死なう。

みつゑ　信さん。

信二郎　みいさん……。一緒に死ぬんだ。

みつゑ　え。

信二郎　どうしたんだ。（間）しつかりするんだよ。

みつゑ　誰か……。

信二郎　え。

みつゑ　誰だか……どうしませう。

信二郎　麹室の後……。

（信二郎、手をひくみつゑを、むしろ促すやうに、互ひに肩に手をかけながら、麹室の奥にかくれる。）

（可なり長い間。）

（おえん、あたりを伺ひながら現はれる。）

おえん　若旦那さま。……信二郎さま。（間）お孃さま。若旦那さま。

（呼びながら一度奥へはいる。が、また現れて、元の方へ歸つて行く。）

（間。）

（麹室の奥の方で、鈍い大きな物音がする。）

（間。）

（おえん、續いておとら現はれる。）

おとら　確かに、こつちの方へ行つたと思つたんだがね。

おえん　どうしてもいらつしやらないんでございますよ。

おとら　（呼ぶ）信二郎。（間）向うへ行つて見よう。みつゑ。

（二人、奥の方へいつてしまふ。間。歸つて來る。）

おとら　不思議だね……。

おえん　藏の男衆達を起して、探させることにいたしませうか。

おとら　それも大袈裟だからね……。鳥渡。（手で制する）

（二人、ぢつと聞き耳を立てる。何物かの苦しさうな息使ひ。）

（おとら、目で麹室の方を指す。二人、靜かに麹室に近寄る。奥の方に體がかくれる。）

おえんの聲　あ。（絶叫）

おとらの聲　（同時に）あ。（間）みつゑ。みつゑ。
おえん　（驅け出て來る）大變です。大變です。
おとら　（追つて出て來る）これ、騷いぢやいけない、騷いぢや……。
おえん　どういたしませう。奥さま、どういたしませう。
おとら　早く、お醫者さまを、お醫者さまを……。誰か呼んどくれ、誰かを……。好いから、省一を呼んどくれ。
（おえん、驅けて行く。）
（おとら、寢室の奥へかけ込む。）
（間。）
（向うの方で、省一の大聲に呶鳴るのが聞こえる。その間を、おえんのかきくどくやうな聲が繼つて聞こえる。）

――幕――

## 第四場

第一場、第二場とは異つた菱屋の奥の一間。
一二年の後。
人なし。

省一の聲　（向うで）馬鹿野郎。それがどうしたんだ。主人が忙しい思ひをしてるのが何が文句があるんだ。（間）生意氣なことをいふな。
（省一、あら／＼しく現れる。行き過ぎようとする。後からおとら、追つて來る。）
おとら　省一。
省一　好いから、ほつといて下さいよ。いつも／＼、めそめそ泣いてばかりゐやがつて……。
おとら　だつて、お前。
省一　お母さんがまた、あんな奴の御機嫌をとるからいけないんだ。ほつとけば好いんだ……。（いひ捨てゝ出て行く）
（おとら、後を追はうとしたが、氣をかへて火鉢の前にすわる。）
（間。）
（おえん、はいつて來る。）
おえん　（すわる）お出かけに。
おとら　（頷く。間）また二三日……。
おえん　ほんとに……。
（間。――みつゑ、現はれる。蒼い顏色、物思ひに疲れた樣子をしてゐる。）
おえん　まあ、奥さま……。
おとら　好いのかい、起きて來て。
みつゑ　えゝ。（おとらの向側にすわる）
おとら　大丈夫かい。

みつゑ　えゝ。

おとら　ぢや、もつとこつちへお寄り。寒いといけないから……。

おえん　何かお掛けになるものを取つてまゐりませうか。

みつゑ　好いの、婆や……それよりもね、由美子を探して來て。

おえん　はい。（出て行く）

（長い沈默。）

おとら　ほんとに大丈夫かい。

みつゑ　えゝ。

おとら　無理をしちやいけないよ。

みつゑ　えゝ。

おとら　もつと、氣を伸んびり持たなくつちや……。（間）溫泉へでも行つたら、どうだい。

みつゑ　………。

おとら　それとも……。

みつゑ　（面を上げる）

おとら　（間）お前、どうしてほしいとか、かうしてほしいとか、いふことはないかい。（間）それとも……しばらく別居して見たら、どうだらう。ね、これは、あたしだけの考へなんだけど……省一はあんな奴だし、いつになつても放蕩をやめさうにもないし、だから、お前がどうしても苦しくていやだといふやうなら、離緣をとつてあげても好いと思つてるんだけどね……なあに、省一なんか、何といつたつて構やしない……さうしてお前、獨り身になるなり、またお前、好きな所へ行くなり……。

みつゑ　………。

おとら　ねえ、どうだらう、さうしちや。あたしはお前のお母さんに對しても濟まないと思ふんだよ、お前のさういふ樣子を見るとね、大きなことをいつて引き受けておきながら……。

みつゑ　（無言）

おとら　（間）ねえ。さうおし。その方が好いよ。省一は私の子だけど、親の私でさへ愛想がつきた位なんだから……ね、さうしようね。それが好いだらう。

みつゑ　お母さん。お願ひですから、あたし、今の儘にしといて頂戴。

おとら　だつて、お前。

みつゑ　（間）あたしがどつかへ行つたら、由美子はどうなるんです。

おとら　え。

みつゑ　お願ひですから、この儘にしといて頂戴。あたしはもう決して、今の暮しから好くならうなどとは思ひま

せん。たまにつか、好くならうなどと考へて……子供の時から、そんなことばかり考へて、その爲に齋藤の家を出たり、しまひにはたうとう信二郎さんをないものにしたりなどして……世の中なんて決して好くなることはないんです。ですから、もう決して、どうしようなどとは思ひません。人間といふものはみんな苦しむやうに生れついたのだと、あたしは諦めてゐます。あたしにはもう、今では由美子だけ、由美子だけなんですから……。（泣く）

おとら　（これも泣いてゐる）

みつゑ　（間）ねえ、お母さん、お願ひですから、由美子と離さないで頂戴。（間）由美子をあたしから取り上げないで頂戴。由美子さへあれば、どんな苦しみだつて、ぢつとこらへてゐられます。

（長い間。）

おとら　あんまり風にあたると惡いから。

みつゑ　えゝ。婆やはまだ歸つて來ないんでせうか。

おとら　今直ぐつれて來るよ。さあ、お休み。

（みつゑ、立ちあがつて奥へ行く。おとら送つて行く。やがて出て來て、反對の方へ行く。）

（間。）

（おとら、由美子を抱へ、いそ／＼として奥の方へ行く。）

――幕――

# 北村小松篇

假面劇

# 猿から貰つた柿の種（二幕七景）

人物

猿――猿の假面をつけた、或はタキシードを着或はゴルフをやる紳士の樣な派手な外出着を着、或は又燦爛と光るパジヤマを着る紳士
斷髮の猿の淑女――猿の假名をつけた淑女。何等の理由なしに斷髮である
蟹――蟹の假面をつけた青年
蟹の娘――蟹の假面をつけた少女
栗――栗の假面をつけたプリプリ張り切つた、バネ仕掛けの樣な感じのする動作の青年
猿の使用人――A、B、C、D、E、F、G
番兵――A、B
　すべて主役と調和する假面を用ふ
その他蟹だの栗だの蜂だの、假面をつけた群衆

場所
　劇場の舞臺
日時
　隨時

## 第一幕

### 第一景　公園

宵である。ベンチが一つ。それから青白い光を放つ古風なガス燈が一本立つてゐる。
蒼ざめたナッパ服を着た蟹が登場する。

蟹　あゝくたびれた。たうとう又夜になつてきやがつた。仕合はせだのインスピレーションだのなんてものはざらにその邊の木の枝なんぞにひつかゝつてるもんぢやないと見える。（ベンチの所へ行つてドッカと腰をかける）あゝあ、本當に夜になつちまやがつた。（ふと傍を見る）やつ！　こりや何だ！　（とり上げる。そこにあつた包みの中からおむすびが出て來る）おむすびだ！
（その時、ひどくスマートな恰好にタキシードを着た猿が登場する。）

猿　やあ！　君は蟹君ぢやないか。何をしてるんだね。

蟹　やあこれは……なあに今おむすびをみつけたとこなんですよ。うまさうなむすびですぜ！　かう鹽かげんもよささうだし、第一米のつやがいゝです！

猿　つやがいゝ？　どら見せて見給へ。

蟹　えゝ、見せるだけならおめにかけませう。

猿　（見る）なるほどこりやよつぽどいゝ米だ……仲々うまさうだ。（匂ひをかぐ）なるほど香ばしくつて君の云ふ通り鹽かげんも素的によさゝうだ。全くうまさうだね。

蟹　ですがあんまりいぢつちや困りますね。先取特權つてやつがありますからね。

猿　あゝ、なに、なにも僕はそれを取らうなんて云ふ了見ぢやないよ。（とおむすびを蟹に返して、ハンカチをとり出して指先を拭く）

蟹　いや、そんな風に云つたわけではないのですが自分では仲々いゝ見つけものだと思つてるんです。つまり小さな仕合はせですから。やつぱり私にもたまにはこれ位の仕合はせは來るもんだと思ひましたね。

猿　たよりない仕合はせだね。あすになつてしまへばなくなつてしまふ仕合はせなんだね。

蟹　まあ、さうも云へるかも知れませんね。

猿　然し君！　君は本當に君の仕合はせと云ふ事を考へた事があるかい？

蟹　そりや勿論ありますね。大ありです。

猿　たとへばどう云ふ風にだね？

蟹　さうですね。つまり一口に云つて見ればしつかりとした生活をしたいと云ふ事です。例へば未來に對して不安のない堅實な生活です。あしたの事でくよ〳〵したり、あしたの生活におびやかされたりせずに、たゞ將來の喜びのために生きて行ける樣な生活をしたいものだと思ひますね。

猿　さうだ！　君は仲々しつかりしてゐる。まるで君の甲良の樣にしつかりしてゐるね。さうですよ。さう云ふ生活をのぞまなくちやだめだよ。目の前のちよいとした仕合はせに目がくらんで將來をあやまる樣な生き方をするのは最もつまらない生活ですよ。例へば今はみぢめでもいゝ。將來の大きな喜びのためにそのみぢめさをあへてする樣な勇氣こそ偉いものですよ。例へば君も御存知と思ふが、そのおむすびの樣な仕合はせは本當の仕合はせでないですよ。君がそのおむすびを今喰べてしまへば、あすの事は又暗黒でせうからな……

蟹　まあさうです。ですが私が今このおむすびをみつけた事は有難いと思ひますね。未來は漠として分らないにしろこのおむすびを喰つたら又あすの事を求める勇氣がつ

きますからね。

猿　ですか、今こゝに君が確實な將來のある仕事が――そりや現在は苦しいかも分りませんよ。その代りに將來に於て非常に有利な安定のある生活の出來る仕事があるとすればそのおむすびをすてる勇氣がありますかね。

蟹　そりや勿論です。私は安定のある生活を欲しいと思つてゐます。

猿　つまり百年の計をたてる事だらうね。

蟹　まあ、さうも云へます。

（間。）

猿　しかし、つやのいゝおむすびだね。（と云ひながらチヨツキのポケツトから一つの柿の種をとり出して、蟹に見せびらかすやうにもてあそぶ）それに非常にいゝ美しい宵だ！

蟹　（猿のもてあそんでゐる柿の種を見て）その、あなたのもつてるのは何ですか？

猿　やあ、これですか。これはその何だ、一口に云へば君いその百年の計つてやつさ。

蟹　それが？……私には分りませんな。ちよつと拜見……

猿　（蟹に大事さうに渡す）

蟹　何ですかね。不思議なものですね。

猿　なに、云つて見ればゞ、それは一個の柿の種にすぎないがね。

蟹　柿のたね？（と猿に柿の種を返す）

猿　あゝ。（うけとる）

蟹　柿の種がどう云ふ事になりますかね。

猿　つまりこれが僕の財産でもあるのさ。勿論こいつは君のおむすびとはちがつて、今、すぐ、たゞちに君のお腹を肥す樣な役にはたゝないのだがね。

蟹　なるほど、そいつは喰ふもんではないのですか！

猿　さうだよ。こいつは現在は實に眇たる一個の物質にすぎないが然しこいつのもつてゐる內容と將來には驚異すべきものがあるよ。

蟹　なるほど。

猿　こいつはつまりかうしておけばたゞの物質にすぎないが、誰かこの一個の物質を資本だと思つて愛すべき大地にうづめ、そして朝な夕なに勤勉にこいつのために水をやり、こやしをやつて働くと云ふとこの一個の柿の種は驚くべき結果をもたらす事になるんだよ。

蟹　（熱心に）なるほど。

猿　つまり君のそのおむすびよりもうまい柿の實が無數になると云ふ事になるのさ！

蟹　（益々熱心に）なるほどね。

猿　君は桃栗三年柿八年と云ふ言葉を知つてゐるかね。

蟹　いゝえ。

猿　さうかね。では聞かせてあげるが、桃や栗は種をまいて三年たてばその勤勉にむくいられる様に實がなるのだが、この柿は八年間努力しなければだめだと云ふのだ。この柿は八年の努力でもつてはじめて美しい燦爛たる玉の様な實をつけると云ふ事になるのさ！　（と他のポケツトから一個の柿の實をとり出して見せる）

蟹　（驚いて）こりや立派なもんだな。實に立派なもんだ！

猿　さうさ。そしてすばらしくうまいな。（ワグリト喰べる。そして丁寧に種をとつてはポケツトにしまひ込む）實にうまい。

蟹　うまさうだな！　たまらないな。私もおむすびを喰はう！

猿　ちよつと待つた！

蟹　どうして？

猿　君はこの柿の種をほしくはないかね。八年間――たつた八年間努力すればこんな水々しい柿の實が無數にとれる様になる所のこの柿の種を！

蟹　そりや欲しいと思ひますね。私は現在は少々苦しくつても將來がそんなに確實なもんでさへあれば私は八年位の努力はして見たいと思ひますね。未來に希望をもてると云ふ事は現在の生活にとつても仕合はせな事だと思ひますからね。

猿　では、もしも君がそのおむすびを手ばなす勇氣がありさへすれば僕は特別に君にこの柿の種を一つ上げてもいい。

蟹　そりや、それや本當ですか？

猿　あゝ、僕が噓を云ふもんかね。ことに君がさう云ふ風な心がけなら僕は喜んであげるよ。現在の利慾に迷はない心がけには僕は大に理解があるつもりだ。（と柿の種を差し出す）

蟹　ありがたい！　（とおむすびを捨てようとする）

猿　（あわてゝ）いや捨てるには及ばない。僕が貰つておかう！

蟹　さうか！　（と氣がぬけた様におむすびを見て）だが實にうまさうなおむすびだな。

猿　いや、僕の方では何も強ひてとは云はないよ！

蟹　いや！　僕はたゞおむすびに名殘りを惜んだゞけの話です。誰だつて、どんなちつぽけなものでも自分のものを手ばなす事は惜しい様な氣がするもんですから……。（笑ふ）ことに、こんなつやのいゝおむすびなんぞ又いつ手に入るかと思ふと……

猿　そりや君のセンチメンタリズムだよ。

蟹　さうですかね。なに、かまひませんよ。私は本當に、將來の輝かしい仕事のためなら、このおむすび位手ばなす勇氣はもつてるつもりです。ですが柿の種の方は確實でせうな！

猿　勿論！　僕が種をやつた連中は皆立派にやつてゐるよ！

蟹　（驚く）あなたはそんなに偉い柿の種をいくつも持つてゐるんですか？

猿　いやなに、一つの柿には時によると六つも種がはひつてる事があるからね！

蟹　こりや驚いた、すると八年の後にはこの一つの柿の種が幾十倍にもなると云ふわけですね。

猿　さうとも！（種をさし出す）

蟹　（種とおむすびをとりかへる）こりや有難い。感謝します。私は何だかかう本當に今に仕合はせになれさうな氣がします。

猿　君が感謝して與れると嬉しいよ。（と、おむすびのにほひをかぐ）

蟹　（落々として）おや僕は行かう！

猿　さうだ。土の匂ひの高い所へ行き給へ。それには僕のもつてる土地が一番だ。あすこへ行き給へ。僕のもつてる土地へ行き給へ。そして日のよくあたる所へうめるんだよ。そして朝夕の世話を忘れたら僕はもう知らないよ。

蟹　何から何まで有難う。僕はちかつて精を出します。ではさ樣なら。

猿　さやうなら。

（蟹はほく／＼して退場する。猿は一人うなづいてほほ笑む。）

猿　（おむすびを玩賞して）こりや全くいゝおむすびだ。可哀さうに蟹の奴！　又とこんなおむすびにはありつけまい！（ワグリと一口たべる）こいつあ素的だ！　何ていゝ鹽かげんだらう！　ふむ。いゝ齒ざはりだ。飛び切り上等の白米にちがひない。こいつは近來の當りもんだ。（うまさうにむしやむしやたべる）

――幕――

## 第二景　庭

猿の所有地内に於ける蟹の貧しい住家である。庭の眞中に柿が芽をふいてゐる。

あたゝかい春の日である。

蟹がその邊の草をとつたり葉をしらべたりしてその芽を大事さうに育てゝゐる。

蟹　實に愛らしい芽だ。のびて行くものを見てゐる事は實

にいゝものだ。

（蟹の娘が登場する。）

娘　今日は！

蟹　やあ！　よく來ましたね、しばらく。

娘　本當にしばらくね。

蟹　ちつとも見えませんでしたね。

娘　あなたこそよ。あなたは近頃ひどく一生懸命で働いてらつしやるんですつてね。

蟹　えゝ、僕は働きがひのある目的物をしつかりと握つてゐるんですよ。

娘　（笑ふ）おむすびととりかへた希望なんでせう。

蟹　それがをかしいんですか？

娘　でもづゐ分いゝおむすびでしたつてね。（夢見る樣に）鹽かげんのよさゝうな、つやのいゝ、とび切り上等の白米で出來てゐるおむすびでしたつてね？

蟹　あなたは誰からそんな事を聞いたのです？

娘　誰からつて事ないけど、そんな噂を聞きましたわ。皆で惜しい事をしたもんだと云つてゐますわ。そんなおむすびなんてもう二度ところがつてやしないだらうつて云つてゐましたわ。

蟹　そりやさうかも知れません。本當にあれは上等のおむすびでした。僕だつてあれを食べずに猿にやつた事は何だか時々惜しい事をしたと云ふ氣がする事もありました。だがもういゝんです。ごらんなさい。こゝにこんな美しい可愛い芽が出て來ました。

娘　この草、何ですの？

蟹　柿の木の子供ですよ。もう八年たつてごらんなさい。このあなたの目には草にしか見えない柿の芽が堂々たる立派な木になるんですよ。そして秋の空高くつや〱した立派な柿の實がなる樣になるんです。

娘　でもあなたが猿にだまされたつて云つてる人もありますよ。

蟹　だまされたんですつて？

娘　えゝ。さうよ。そしてあたしもさう思ふんです。あなたはひどく夢を見てらつしやるんだつて！

蟹　僕は夢なんぞ見てやしません。あなたゞつて現在見てらつしやるぢやありませんか。この私の丹精で育つた柿の芽を……もう八年たつてごらんなさい……

娘　八年ですつて！　づゐ分先の話ね。

蟹　でもこれからの八年は僕にとつちや空つぽな生活ぢやありません。しつかりと目的と希望を摑んだ生活です。こんな生活を或は充實した生活と云ふのかも分りません。

娘　それで八年間の私の生活は？

蟹　あんたは僕の生活を理解して呉れなきや困ります。

娘　でもあたしにして見ればあなたは柿の事にばかり心醉なすつてらつしやる樣に見えるわ。あんまり立派な柿の事ばかり考へてらつしやるのよ！

蟹　でもあなたは僕の生活を理解して呉れなくちや困ります。

娘　でも八年つて云へば私達の青春はもうすつかりなくなつてしまふ事よ！

（猿が、斷髮の猿の淑女をつれてやつて來る。）

猿　やあ！

蟹　やあ！　お揃ひで御散歩ですか！

猿　あゝ！　お天氣がいゝもんだから地所を見廻り方々遠乘りに出かけたわけさ、新らしいシトロエンを手に入れたもんだからね。

蟹　そりや結構ですね。時に喜んで下さい。こんな立派な芽が出ました。

（斷髮の猿の淑女と蟹の娘は、だまつてジロ〳〵見合つてゐる。）

猿　なるほど。こりやよささうだ。君の丹精のたまものだよ！

蟹　いや皆あなたのおかげですよ！

猿　とにかく近所のにはとりとか、ドラ猫とか、野良犬とか云ふ奴に氣をつけ給へ！　せつかく育てたやつを掘りくり返されると困るからね。そんな奴等は見つけたらブチ殺したつてかまはないさ！　（いやに大きく氣どつてゐる）

蟹　なるほどね。

猿　又色々と分らない事は私がさしづして上げませう。（斷髮の淑女の方を見て）どうです。こゝにも私の柿の種からこんな美しい芽がふき出してゐるのです。

淑女　（いやにすまして）本當ですわね。ではよそへ廻りませう。

猿　では左樣なら。

蟹　づゐ分お急ぎですね。

猿　いやなに今日は夕方からホテルに招待會があるのでね。

蟹　そりや結構です。

猿　ではさ樣なら。

蟹　ごめん下さい。

（猿等退場。）

娘　（口惜しさうに）いやなの！　あんたまるであの人の意志で働いてゐる人みたいね。

蟹　さう云ふわけぢやありませんよ。たゞ私は私の生活の力を與へて呉れる柿の種を私にくれた彼に敬意を拂つて

ゐるのです。

娘　あたしには分らなくなつたわ。まるであなたはあの猿の奴隷よ！

蟹　とんでもない。私には立派に自由な意志と誇りとがあります。

娘　あたし情ないわ。あたし歸るわ。

蟹　どうしたんです。

娘　あたし家へ歸つて考へるわ。柿の實と自尊心とどつちが大切だか！（歸りかける）あんたもお考へになるといゝわ！

蟹　あなたは僕の生活が何のためだか理解して吳れなければ困ります。（とめようとする）

娘　あたし一人で考へるわ！（退場する）

蟹　（ぼんやりと後を見送り）女はどうしてあゝ云ふ風に目先の事しか分らないのだらう！　だが僕は落膽しない。絶々落膽しない。（さう云つて空箱の上に腰を下して考へ込む。やがて）かう云ふ時は本を讀むに限る。（一たん退場して本をもつて來、もとの空箱の上に坐つて讀む。「柿の木の培養法――美しき村版」と表紙に書いてあるのが見える）

（非常に元氣のいゝ歌聲が聞えて來る。栗が歌ひながらやつて來るのである。）

栗　Grandi kani
Grandi kani
Arabon
　baru
Arabon
　baru
Arabon
　baru
Arabon
　baru
A
A
A
Ui!!（彼はかう歌ひながら片手にダイナマイトをブラ下げ、それをふり廻しながらやつて來るのである）おい！　大將ゐるかい！

蟹　ゐるよ！

栗　なるほどゐたね！

蟹　君はいつもすばらしい元氣たね。

栗　さうだとも僕はいつも破裂しさうに元氣たよ。

蟹　その元氣を我々生きもの全體のために骨折る事につかふとすばらしいと思ふね。

栗　(笑ふ)　又初めやがつた……だが大將、俺と君と仲よしだからかうして來るんだが君は近頃またひどく柿の木にこつてるんだつてね。

蟹　こつてるのでなく、これが生くべき道だよ。

栗　君と俺とは同じ樣に甲良で包まれてるんだがまるつきりたちが違ふんだな！　考へて見ると可哀さうな男だな……

蟹　誰がさ！

栗　君がさ！

蟹　どうして！

栗　戀人に愛想をつかされたぢやないか。さつき道であつたよ。その上あんな猿みたいな奴にペコペコしてるつてぢやないか。

蟹　僕はペコペコしてやしないよ。たゞあいつの呉れた柿の種のために敬意を拂つてるだけだよ。

栗　(笑ふ)　恐れ入つた敬意たな。その敬意を拂ふ柿の種はあの猿のやつ女でも相手に喰つた殘りの種かも分らないぢやないか。

蟹　僕は他人の生活をうらやみはしないよ。

栗　だが君は猿の生活に敬意を拂へるかね。

蟹　敬意を拂つてもいゝ所もある。だがなによりも自分で一つの柿の木を育てる事は喜びだ！

栗　君一人たけがだらう！

蟹　それでもいゝぢやないか。

栗　いやよくない！　今に君がそんなに希望をもつてゐる柿の實も猿にとられる。

蟹　とられると思へば腹がたつが種をもらつたお禮だと思へばいゝよ。それ位の禮儀は心得てゐるよ。

栗　あきれた！　君は禮儀を心得てゐて仕合せだ。だが猿に禮儀はありますまいつて！

蟹　だがお互によい所を發見し、尊敬しあふのはいゝ事だ。

栗　利用されますつて！

蟹　君は世の中の惡い方だけ見てゐる！

栗　その方が根強いからさ、君もも少し賢明であればよく分るさ。

蟹　君は僕に何を云ひたいのだ！　僕の希望や生活を破壞しようと思ふのか！

栗　君の生活だの希望だのつてものは猿の意志の中にあるからさ！

蟹　お互にお互の生活にたち入るのは不愉快だ！　やめて呉れ！

栗　そんな生活なんかほつちまへ！　柿の種にしばられる樣な生活なんか捨てつちまへ！

蟹　歸つて呉れ給へ！　君はお互に愛し合ふと云ふ喜びを知らないんだ！　仕事を愛すると云ふ喜びを知らないんだ！　（木を地べたへたゝきつけろ）

栗　（ダイナマイトを振り廻す）　それがいけねえんだ！　それが身をほろぼすんだ！　（體操でゝもするやうに歩き廻ろ）見ちやゐられねえや！

蟹　歸つて呉れ給へ！　それを踏みつぶしでもされた日には……君！　歸つて呉れ給へつて云つてるんだ！

（地團太踏む。）

――幕――

# 第二幕

## 第一景　庭

第一幕より八年後である。もう柿の木は大きくなつて木には一杯美しい實がなつてゐる。その下に栗が腰を下ろし、その前を悠然と蟹が歩き廻つてゐる。

蟹　どうだい！　俺の生活はむくいられたぢやないか！　こんな立派な柿の實がなつてゐるぢやないか！　これが仕事をする喜びと云ふもんだ！　どうだい！

栗　まあいゝさ！　のぼせ上つてゐる時は何を云つたつて分るものではない。

蟹　僕はのぼせ上つてなんかゐない！　僕はこの通り悠々として伸び／＼してゐる。

栗　君は八年間のぼせ上つてゐたんだよ。

蟹　いや、そんな事はない！

栗　喜んでゐるのは猿だけだらうさ。この柿の實は一體誰のものであるか！

蟹　いや僕のものだ。いや、僕の手の中にあるものでないにしろ僕の丹精の結果生れ出でたものだ！

栗　そんな事は猿には問題ぢやない。

蟹　然し實に立派な柿だなあ！　僕の丹精がこんな結果になるのは嬉しい事だ。勿論自然に出來てしまつた樣な氣もする。それにかう望みがかなつて見れば少し不安な樣な氣がしないでもないが、これから毎年秋になるとこんな立派な實がなると思ふと嬉しいね！

栗　まあ、喜べる中喜べだ！

蟹　俺をすてゝ行つた女にこれを見せてやりたい位だ。勿論、あてつける意味でなしに喜んでもらへるためにだ！

栗　そんな事をしなくて仕合せだ！

蟹　君には僕の心持ちは分るまい。

栗　その通り。だが君には今に俺の心持ちが分るよ。俺は

それを待つてゐんだ！

蟹　まあいゝ！　だが實にすばらしい柿の實だ。

（猿の使A、B、Cが登場する。）

A　こゝだ！

B　なるほど、なつてやがら！

C　仲々いゝ實だ！

A　ごめん下さい。

栗　そら來た！

蟹　やあ！　猿さんのとこからですか！

A　さうです。どうかこれをごらん下さい。

（一通の手紙を出して渡す。そしてB、Cに目くばせする。）

（猿の使、B、Cは物をも云はず袋を下げて柿の木へのぼる。）

蟹　（手紙を開きかけて）　おい君達、勝手にそんな事をしては困るぢやないか！

A　まあ、どうぞそれを御らん下さい。

蟹　だが君！

A　まあごらん下さい。ごらんになれば分ります。

（B、Cは柿をもぎはじめる。）

蟹　（柿の方を氣にしながら讀む。そして栗へ）　君、かうだ！　聞いて與れ給へ「八ケ年間の土地の損料及び柿の種代として本年度の柿の實九割を請求候也」え？　君！

栗　それがどうしたい。

蟹　そんな馬鹿な話はあるものか！

栗　俺はそんな話は知らないよ！

蟹　（Aへ）　君、こんな事は困るよ！　こんな不法な事はない。僕は猿君がこんな事をしようとは思はない。あれは僕の知人だ！

A・　でも旦那様がおよこしになりました。

栗　君！　禮儀だよ！　君の云ふ所のさ！

蟹　そりや、取りに來なくつてもこつちからお禮は出すつもりだつたんだ！　だのにこんな不法な請求が來るなんて！　君！

栗　だが事業と友情は別もんだぜ！

蟹　僕はさう云ふ世の中を憎む。

栗　憎み給へ。

（BとCは手早く袋の中にいゝ柿の實をとり入れる。）

蟹　（無茶苦茶に歩き廻り手を振り動かす）　君……君等はこの柿が誰の努力で出來上つたものだか知つてゐるかい……おい！　八年間の俺の生活を知つてゐるかい！

A　私はたゞ柿をとる事を云ひつかつて參つたんでございます。

蟹　こんな馬鹿な話はない。おい君！　栗！　どう思ふ！

君は何て友情のない面をしてるんだ。

（BとC、柿をほとんど全部もいて下りて來る。）

蟹　その柿をそんなにもつて行くわけはない！　おい！

A　私は旦那の使ひの者でございます。

蟹　おい。そんなに持つて行くと云ふたら僕は腕力に訴へるぞ！　おい！　（とB、Cに掴みかゝる）

B　ではこちらも腕力で致します。（蟹を一遍てぶつとばしてしまふ）

A　ではさ樣なら！

（猿の使ひのA、B、Cは退場する。ぶつとばされた蟹は聲をたてゝ泣く。）

栗　おい、見つともないぢやないか！

蟹　君は何て友情のない奴だ。知らん顔をして見てるなんて！　（起き上る）

栗　これもつまり友情さ！

蟹　君の云ふ事は一から十まで情ない。俺は一人で猿の所へ行つて來る。膝づめ談判だ！　（身ぶるひして立ち上る）

栗　それがすんだら又來給へ。

蟹　僕は解決して來る。（身ぶるひして退場する）

栗　（それを見送つてからバネの樣に飛び上つて、唸りながらダイナマイトをふり廻す）

—幕—

## 第二景　猿の室

實に立派な華かな室である。大きなひぢかけ椅子に傲然と猿がよりかゝつて上等の葉卷をくゆらしてゐる。その傍には斷髮の淑女が坐つてゐる。彼等の前の大きな卓には澤山の——實に澤山の柿がつまれてゐる。使の猿DとEが大きな盆に山の樣につまれた柿をもつて來る。

D　旦那樣。柿をとつて參りました。

猿　よし〳〵。もつて行つて倉庫の中につめてをけ！

D　かしこまりましてございます。

（DとEは盆をもつて去る。）

淑女　秋になるとあんな立派な柿がどん〳〵はひつて來るので本當に愉快でございますね！

猿　あゝ……あの柿の種が又夜にたつのだ！　一つの種からあれ位づつの柿がとれるのだからね。

（召し使ひFとGが又大きな盆の上に山の樣につまれた柿をもつて來る。）

F　旦那樣……柿が參りましてございます。

猿　よし〳〵、もつて行つて倉庫へつめて置け！　中位の所は皮をむいて干し柿を作るのだ！　そして市場へ出

せ！

FとG　かしこまりました。（盆をもつて去る）

猿　（淑女へ）生干しのやつを燒酎に漬けると中々いゝものだ！

淑女　私は樽柿を好きでございます！

（使ひの者A・B・C袋をもつて登場する。）

A　旦那樣。蟹の家から柿をもつて參りました。

B　仲々すばらしい柿でございます。（出して見せる）

猿　なるほどこりや全くいゝ出來だ。あいつ仲々一生懸命だつたからな。これぢや少し割り增しをやつてもよいな。

C　なあにあれだけで結構でございますよ。

猿　さうか。ぢやもつて行つて樽柿にして呉れ。

A、B、C　かしこまりました。（と袋をかついで去る）

猿　仲々いゝ柿だつた！

（番兵A登場する。）

番兵A　旦那樣、蟹が御面會に參りましたが何だかひどく憤慨してゐますからつき返しませうか！

猿　いやかまはない。通せ！　どうせ柿の事だらう。

番兵A　かしこまりました。（去る）

（いきなり蟹がとび込んで來る。）

蟹　あんまりだ！　あんまり不法すぎる。

---

猿　何だ。靜に話したらいゝぢやないか！

蟹　靜かも何もあるものか！　君は俺に幸福を約束しながら俺の生活をめちや／＼にするつもりか！

猿　いや、君の努力は認めるよ！

蟹　みとめる？（身ぶるひする）とんでもない事だ！　俺は八年間この柿をそだてる事ばかり苦心したんだ。

猿　俺の方では八年間その柿をどう云ふ風に利用するか考へてゐたんだ。

蟹　利用？

猿　利殖だ！　俺はそしてこの地位を築いたんだ。

蟹　俺の生活はどうして呉れるんだ！

猿　又來年まで柿の木を世話するのさ！

蟹　九割の請求は途方もなさすぎる。

猿　だが考へて見る事だぜ！　根本は柿の種だぜ、柔い土だぜ！　その種と土を誰がやつたい！

蟹　ぢやその種と土から誰が育てた！　その生活は何だ！

猿　すぎ去つた過去だ！

蟹　俺は柿の木全體を要求する。俺が柿の木を支配し柿を分配する！　こゝには柿が多すぎる。

猿　お前はのぼせてゐるぞ！

蟹　幸福のない世界を作るのはお前達だ！　猿だ！　猿だ！

猿　うるさい奴だ。おい！　おい！　（手をたゝく）

（番兵B現れる。）

番兵B　檀那様。（かしこまる）

蟹　猿だ！　猿が罪悪だ！

猿　うるさい奴だ。こいつを追ひ出して呉れ。

番兵B　かしこまりました。

（番兵Bは蟹を摑み上げこづき廻して連れ去る。蟹は「猿だ！　猿が罪悪だ……」とどなりながら連れて行かれる。）

淑女　何て下等な蟹でせう、何て無作法な！

猿　あいつ等はすぐ恩を忘れるのだ！

——暗轉——

## 第三景　庭

柿の木の下で栗がダイナマイトをふり廻してゐる。カンカンに怒つて蟹が踊つて來る。

蟹　實に横暴だ！　途方もなさすぎる。途方もない貪慾だ！

栗　どうだ！　分つたか！

蟹　あいつらのロジックはあやまつてゐる。

栗　君のやつと同じ事だ！

蟹　あいつは俺に幸福を約束してゐたんだ！　だが俺の生活は何だ！

栗　さうとも！あいつらは誰にでも幸福を約束して見せるんだよ、自分が幸福を與へる特權でもある様な顔をしてるんだ。だが本當はイルージョンなんだ。幸福なんてものは猿の意志にはない事だ！　どうだいロジックで解決がついたかい？　猿に君のことが分つたかい？

蟹　だめだ！　絶望だ！

栗　さうだ！　百年の計畫なんてものはロジックでは初まらないんだ！　（ダイナマイトをふり廻す）

蟹　俺は平和な解決を希望してゐた！

栗　だが！

蟹　だが?!

栗　解決なんてものはエネルギーの仕事だ！　猿から柿の種を貰つた奴等は皆、皆、待ちかまへてゐる！　皆自分達の幸福は何だつたか知つてゐる！　本當の幸福つてものはどんなものだか知つてゐる。そして待ちかまへてゐる！

——幕——

## 第四景　猿の寢室

立派な、はでなベッドに猿が寢て、いびきをかいて眠つてゐる。

時計が夜中の三時をつげる――

と、突然、すばらしい大きなダイナマイトの破裂する響がして寢室のドアがすつとぶ。

猿は驚いてとび起きる。その時栗と蟹がとび込んで來る。蟹はも一つダイナマイトを室の隅になげつける。

轟然たる音響と共に柿だのセルロイドのキユーピーだのが四散する。

猿　（この有樣を見るとひざまづいて泣く）蟹樣！　私が惡かつた！　こんな事になる前に何とか云つて呉れたら、柿も、柿の木も、柿の種も、土地も、皆差上げたんだのに――

蟹　今になつて勝手な都合のいゝ事を云つたつてだめだ！

（えりくびを掴む）

猿　お許し下さい！　皆差上げます。

蟹　俺達はもう誰からも何も貰はない！　すでに世界は俺達のもんだ！　土地は世界のものだ！　美しい空に柿の木が伸び〳〵とそびえてゐる。こりや初めからお前のもんぢやない！　俺のもんでもない！　僕達皆のものだ！

猿　お助け下さい！　柿は……柿の木は……

（ひきずられて行く。）

――暗轉――

## 第五景　庭

夜あけてある。曉の空の前に柿の木がシエルエツトを作つてゐる。そしてその柿の木の枝に、猿が首に繩をつけられてつるされてゐる。

それを蟹だの栗だの蜂だのゝ群集がとりまいてゐる。

一段と高い所に蟹が登る。

蟹　（宣告文を讀む）「前略……彼が與へた柿の種から生れ育つたこの柿の木の枝に、ぶら下つて往生をとげるこそ彼に最も當然な、ふさはしい往生だと信ずるものであります……」

（すばらしい拍手。樂隊は勇壯活潑な行進曲をやりはじめる。群集はそれに足なみ合はせて退場する。夜が次第に明けて來る。と柿の木の上で鴉が一羽「ガオ、ガオ」と鳴く。）

――幕――

# セント・ヘレナへ行つたボニー（三幕五景）

## 人　物

ナポレオン、ボナパルト

書物にはかう書いてある。「……雪白のチヨツキ、ズボンも今日は徒らに寒げに赤き襟章と黄金色のエポレットに飾られた萌黄色の上衣には、昨日の榮華を語れる如く、レジヨン、ド、ヌール勳章が光なく佩けられてゐた……」と。これは第一幕のナポレオンの參考にならう。又「ナポレオンには始終脣及び左肩に起る常習の痙攣があつた。殊に腹をたてた時は身體を動かしてやまなかつた。それを側からよく見てゐると足が一番ひどく震動してゐた」と。これは二幕目にも一幕目にも役にたつ。――作者は以上の色彩と調子でもつてフオアチメークが描いたカリカチユアの様な人物を欲する。

ド、ラ、カーズ伯爵

たゞニハトリの如くに……。

サー、ハドソン、ローエ

セント、ヘレナの總督である。ド、ラ、カーズの「ナポレオン回想錄」によると「ハドソン、ローエ氏は年四十五前後、身長尋常なれど身體痩瘠形容枯槁、赤顏赤髮にして面上に赤斑を印し鋭眼伸視、厚眉高く突出して眼を覆ひ其色稍赤し」と、そしてナポレオンが「其相貌絞罪に價する」と云つたとある。

提督、サー、ジヨーヂ、コクバーン

作者はこの人物を典形的なジヨンブルにして見たい。

その幕僚A、B、C、士官、水兵a、b

式部官ナヴァール

理髮師サンチニ

ベルトランの娘ホルタンス

作者はこの令孃を妙齡の美人とする。

窈窕花をあざむくマリー、ルイゼ

一隊の兵士に扮する子供大勢

モントロン、ベルトラン、マルシヤンの諸將軍

ベルトラン夫人、その他の從者達、僧ヴイグナリ師、醫師達
英國の大佐、兵士數名

場　所

セント、ヘレナへ向けて航行する英國軍艦ノーサンバーランド號内及びセント、ヘレナ

時　日

一八一五年より一八二一年に到る

## 第一幕　軍艦ノーサンバーランド號

### 第一景　甲　板

ナポレオン　わしは又新らしい奴を一つ見つけた。（それがいかにも氣になるといふ風に歩き廻る）

ラ、カーズ（ニハトリの如く）何事でございませうか、陛下！

ナポレオン　窓だ！　わしは又新しい窓を一つ見つけたのだ。一體此の軍艦には窓が幾つくつついてゐるんだ。

ラ、カーズ（首をひねつて）私にはどうも分りかねますでございます、陛下。

ナポレオン　わしはどうしてかう窓が氣にかゝるのか不思議だ。若い頃からなのだ。わしは軍隊と一所に行軍してゐても街の窓を勘定せずにはゐられないのだ。だから、だから窓からのぞいてゐたあのイタリーの女を殺す様なはめになつたのかも知れない。

ラ、カーズ　その事も御回想錄の中に記入致しておきませうでございますか。

ナポレオン　いや、こんな事はいらん事だ。

ラ、カーズ　はい。では窓の數を聞いて參りませう。（去りかける）

ナポレオン　いや、いやそれには及ばん。（そり返つて歩きながら）だがわしの見たのは、はたして窓なのか穴なのか氣になると云ふだけなのだ。

（一人の水兵が帽子をぬいて汗をふきながら登場する。彼はナポレオンを見るや否やあわてゝ帽子をかぶつて過ぎ去る。）

ナポレオン（あつけにとられて）あれは何だ！

ラ、カーズ　たゞの水兵でございます。

ナポレオン　それは分つてゐる。わしの云ふのはなぜ急に帽子を被つたかと云ふのだ！

ラ、カーズ　恐れ入ります、陛下！　あれは英國閣臣が陛下に對する待遇の名策でございます。

ナポレオン（苦々しく）ナポレオン一世をボナパルト將

軍と云ふ名で呼ぼうと云ふのと同じ手だな。ナポレオン一世を！（急にプリ〳〵する）何と云ふ馬鹿どもだ！

ラ、カーズ（恐縮する）さ樣でございます陛下！

ナポレオン（すぐ氣がぬける）わしは英國の賓客だ。……わしは斷じて囚人ではない。賓客を待遇するのに不名譽をもつてすると云ふ法がどこにある。それが英國流のヂエントルマンシップと云ふものか！「ボナパルト將軍にして再び歐洲の平和を亂す方法又は機會を有する事あらば我國及我國王は同盟國に對する義務を缺くことゝなるをもつてやむなくその行動の自由を制限せざるべからず。依てセント、ヘレナを將軍が將來の居所として之を選定せり……」（聲を大きくして）何て尻の穴の小さい考へだ。之が賓客を扱ふ禮儀か！

ラ、カーズ（困る）奴等は血迷つてゐるのでございます。陛下！　えゝ、例へば立派な獅子が家の中にやつて來た時とか、立派な白熊に握手を求められた時とか云ふぐあいに！

ナポレオン　わしは斷じてけだものではない。

ラ、カーズ　は、はい。私はたゞその例へを申し上げたのでございます。

ナポレオン　あまり上手な例へではないな。

ラ、カーズ　恐れ入ります陛下。でございますが奴等には拔山蓋世の英雄と云ふものが分らないのでございます。奴等にはそのたゞ山をぬかれたり世界をもつて行かれたりする事が恐しいばかりなのでございます。

ナポレオン　ふむ。だがわしがフランスと云ふ國の皇帝を止めてたゞ一個の英雄として英國の船に乘つたのだから英國の奴等は又とない光榮を感じなけりやならんはづだ。それだのにケース提督の奴め！　わしにこの劍をよこせとほざきをつた。（急に調子を下して）わしはよほどあの時怒つたと見える、右肩のいつもの痙攣が止つた位だつた。

ラ、カーズ（汗を拭く）ごもつともでございます、陛下。

ナポレオン　思ひ出す樣に）「ナポレオンはエルバ島に君臨し……」（ふとラ、カーズに）お前知つてゐるか！

ラ、カーズ　はい。（小首をかしげて）「ナポレオン及びマリア、ルイゼは皇帝及び皇后の尊號を保有し……」それから、二百萬フランの年金を佛國より受くる事……」

ナポレオレ（嚴然と）よし!!　それが前の條件であつた。所がどうだ。コクバーンはわしの手にたつた千五百ナポレオンの金貨を殘してあとは皆とり上げてしまつたではないか。

ラ、カーズ　心細うございます。

ナポレオン　心細いですむと思ふか！
ラ、カーズ　恐れ入ります。
ナポレオン　（急に）わしとコクバーンとなぐりあひをしたらどつちが勝つと思ふ。
ラ、カーズ　それは勿論陛下でございませう。
ナポレオン　ふむ、さうだ。（又）わしと英國皇帝となぐりあひをしたらどつちが勝つと思ふか！
ラ、カーズ　それは、勿論、陛下でございませう。
ナポレオン　（傲然と）ふむ、さうだ。だのになぜわしは英國皇帝に從ひ、コクバーンの監視をうけてゐるのだ！
ラ、カーズ　（困る）それは陛下――
ナポレオン　どう云ふわけだと云ふのだ。
ラ、カーズ　勿論、それは陛下。――海の上だからでございます。
ナポレオン　（大きくうなづく）なるほど。海の上だ！（手摺につかまつて下を見る）こゝへ飛び込めば死ぬばかりだ。（ラ、カーズをふり返り）勿論、人間つて奴は、どこへ行かうと死ぬばかりにはちがひないが……だが、それにしてもわしはセント、ヘレナへ行く事は嫌だ。
ラ、カーズ　私も反對でございます。陛下、（センチメンタルになる）セーヌの岸邊には綠のそよ風が吹いてをりますでございませう。パリー、パリー、シヤンゼリゼ……（頭を振りつゝ兩手をさしのべる）
ナポレオン　（つり込まれて）奴等はナポレオン二世をたてるのを嫌がつてゐた。それに、マリー、ルイゼは（ふと我に返つた樣に地團太ふむ）お前もわしの眼光がおとろへたと思ふか！　お前もチエバウルの奴がほざいた事を本當だと思ふか！
ラ、カーズ　（夢からさめた樣に）決して、決して陛下！
ナポレオン　わしの炯々たる眼光は、鏡に映して自分で見てさへ天の意志の樣だと思ふ位だ。わしの一目でドクレーもオージエローも、ワンダムでさへも屈從したではないか。
ラ、カーズ　左樣でございます。
（一人の水兵bがやつて來る。）
ナポレオン　（目をむいて）こらつ！
水兵b　はいッ！（ちゞみ上る）
ナポレオン　わしを見ろ！
水兵b　はい！　見てをります閣下！
ナポレオン　貴樣にはわしがどう見える。
水兵b　はい！
ナポレオン　正直に云つて見ろ！
水兵b　はい！
ナポレオン　（性急に）云つて見ろと云ふのだ。（地團太踏

む）

水兵b　はい。私どもは（死にもの狂ひの勇氣で）閣下を見るまでは――恐ろしい――神様の樣なものだと思つてをりました。

ナポレオン　（大きく）では――どう思ふのか！

水兵b　（辯解的に）でも、私どもは閣下がヘドをお吐きになるのを拜見致しました。

ナポレオン　（どなる）馬鹿！　わしは船には慣れてないだけだ！　行けッ！

水兵b　（すつとんで行く）

ナポレオン　（不機嫌に）海の上だからだ！

ラ、カーズ　（おど／＼して）あいつ等は、鹽水につかつて流れて來た丸太ん棒も同じ樣に神經がすりへつてるのでございます。

ナポレオン　英國人は神經がにぶいと聞いてゐたが驚いた。これほどとは思はなかつた。あいつらは、たうていインスピレーションに惠まれない輩である。（歩き廻る。そしてつぶやく）「オポレオンはエルバ島に君臨し……」こいつは前の條件だつた、條件とは何だ。「セント・ヘレナは彼の將來の居所としてこれを選定す……」こいつも條件だと云ふのか！（調子を高めて）大體わしは初つから條件を與へられる人間ではないのだ、運命はわしと共に在る。わしが條件の總てだつたのだ。條件は支配者だ！　わしはナポレオン一世だ！

ラ、カーズ　（たよりなく）さ樣でございます、陛下。運命と申すものは全で浮氣な貴婦人の樣なものでございます。

ナポレオレ　（むきになつて）お前はまさかマリー、ルイゼの事を云つてるのではあるまいなー

ラ、カーズ　（驚愕して）と、とんでもない、陛下！　誠にとんでもない事でございます。

ナポレオン　（カンシヤクを起す）わしはなぜコクバーンとなぐりあひをしないのだ！

ラ、カーズ　（驚く）陛下！　高貴、偉大なる陛下は小人と伍を同じうなさるべきではございません。拔山蓋世の陛下は、失意に狂ふ小人輩とは自ら別でございます。それは小人輩ならば或は亂暴も致しませう。でございますが陛下がそんな事を遊ばしてはたゞ恥を後世にお殘しになるばかりでございます。（雄辯に）不肖私は陛下の御回想錄の記者として極力それはお止め申し上げなければならない義務を感じます。小人陛下を何するものぞ、運命は陛下と共にあります！　彼のシーザーの壯烈悲絕なる最後をお考へ下さいまし。英雄の行く所は悲壯極りない所でございます。悲壯極りない事が、又、英雄の一つ

の資格であると不背私に信じて疑はないものでございます、陛下！（かしこまる）

ナポレオン（そり返る）　さうであつた。小人我を何するものぞ！（しばし傲然としてゐる）

（一人の士官登場。）

士官　ボナパルト將軍閣下に申し上げます。

ナポレオン　何だ。

士官　お退屈でございましたらばカルタのお相手を申し上げようとのコクバーン閣下のお言葉であります。

ナポレオン　カルタ？　よからう！（ラ、カーズに）おい！　カルタをやるのだ！

ラ、カーズ（困る）　陛下！

ナポレオン　お前はわしが負けると思つてゐるのか！

ラ、カーズ　然し陛下！

ナポレオン（士官に）今行く！

士官　はい！　歸ります！（去る）

ラ、カーズ　然し、陛下運命は誠に浮氣な貴婦人の樣なものでございます。それにたつて千五百ナポレオンしかありません事を……

ナポレオン　金か！　金は小人にまかしておけ！

ラ、カーズ　ではございますが。セント、ヘレナは陛下……

ナポレオン（傲然と）　小人我を何するものぞ！（去る）

ラ、カーズ（ニハトリの樣に）　千五百ナポレオンより…………陛下……（後を追ふ）

――幕――

## 第二景　コクバーンのケビン

コクバーンとその幕僚A、B、C、それにナポレオンが卓をかこんでカルタをやつてゐる。ニハトリの樣にのぞき込んでゐるのはラ、カーズである。

ナポレオン（熱狂して血眼になつてゐる）　わしは十六回勝つたぞ！　十六回！　あと一回しかわしにはやらんのだ！（興奮して札をくばる）

コクバーン　閣下にはどうも不思議な神が味方をしてゐる樣にお見うけします。（彼は北方的に微笑をたゝへてゐる）

幕僚A（熱心に、殘念さうに）　どうも不思議です。コクバーン閣下がかういけないなんて事は！

ナポレオン　わしの萬能を見せるのだ！（得意に）　軍事に關してなら勿論だ。火藥を作る者がないならわしが作つてお目にかけよう。砲車でもよい。鐵砲でもよい。軍學ならなほさらよい。わしは砲兵士官だつたが外交家でもあつた。財政家で行政家で、その上に皇帝だつた。この調子ではその上カルタも行ける。たゞ繪を上手に書け

ない位のもんだ、

コクバーン　お說の通りです。では始めませう。

ナポレオン　わしはロヂの戰を思ひ出す。

幕僚A　では參りませう。

ナポレオン　よろしい！

（一同はしばし無言で勝負を爭ふ。甲板からはのん氣な船歌とも軍歌ともつかない樣なものが聞えて來る。）

ラ、カーズ（ニハトリの樣にのぞき込みながら）陛下！陛下！

ナポレオン　しつ！　默つてゐろ！

幕僚A　どうも不思議だ！

幕僚B　コクバーン閣下！　これでいゝのですか。

コクバーン　どうも致しかたない。（微笑してゐる）

（勝負は又續く。）

ナポレオン（札を見て考へながら）こゝがかんじんの所だ。……グルーシーが、……五分……たつた五分おくれたばつかりに！（と札をはる）――どうだ、どうだ！

（ナポレオンが又勝つ。）

ラ、カーズ（踊り上る）ナポレオン一世陛下萬歲！

（一同驚く）

ナポレオン　これ！　靜に！

コクバーン（丁寧におじぎをして）閣下には勝利の神がついてゐる樣にお見うけ致します。

ラ、カーズ（ホクホクして）全部で陛下、六萬ナポレオンの勝利でございます、陛下。（喜びたつ）

ナポレオン（傲然と）わしの運命はまだつきてはをらぬ。

コクバーン　恐れ入りました。

ナポレオン（一同に目で挨拶して室を悠々と出て行く）

ラ、カーズ（ニハトリの樣について行く）

（コクバーンとその幕僚はホッとした樣に顏見合せる。幕僚B、Cは退屈さうに出て行く。）

幕僚A（殘念さうに）いまいましいな。閣下、こんな馬鹿々々しい勝負つてありませんや！

コクバーン（笑ひ出す）何を云つてるんだ。

幕僚A　馬鹿々々しい負け方ですよ閣下。

コクバーン（笑つてAの肩をたゝき）今日は君八月の十五日だよ。

幕僚A　それがどうしたのです？

コクバーン　ナポレオンの誕生日だと云ふのさ！　今朝連中が皆集つてゐたではないか。つまりこれもわしの心づくしのバースデープレゼントだと云ふのさ。

幕僚A（驚いてコクバーンを見つめ）誕生日の送り物！

コクバーン　政府の命令とは云ひながら四千ナポレオンも

取り上げた時はさすがに氣の毒だつた。かりにも皇帝だからな。
幕係A　（すべて分つた樣に突然大きく笑ひ出す）
コクバーン　（莞爾としてパイプに火をつける）

――幕――

# 第二幕　セント・ヘレナ

## 第一景　ナポレオンの室

ロングウッドの館に於けるナポレオンの室の事は「回想錄」やその他の書物に極めて詳細に描かれてあるが、こゝではことさらにそれにわづらはされない事にする。
室に、ナポレオンと例のラ、カーズ。
ナポレオン　（カンシヤクを起してゐる）あの塀の所に美しくたれ下つてゐた柳の枝を誰が切つてしまつたと云ふのだ！
ラ、カーズ　はい私どもにはどうにもいたし方ないのでございます。
ナポレオン　皇帝は、誰だか云へと云つてゐるのだ！
ラ、カーズ　コクバーンが歸つてからこの島は大變いけなくなつて參りました。
ナポレオン　誰だか一言云へばいゝのだ。
ラ、カーズ　はい。例のハドソン、ローエの奴でございます。陛下――
ナポレオン　（それでは仕方がないといふ風にふくれながら）あいつか！　あいつは何と云ふ汚らしい奴だ。わしはあんな面を見た事がない。戰場で大砲でやられた面だつてあれよりはいゝ顏をしてゐる。あいつはまるでわにかゝつた鬘狗の樣な面だ。わしがこの島の知事だつたら、あいつの面を見たゞけで絞罪にしてやる。
ラ、カーズ　御說の通りでございます。
ナポレオン　あいつが來てから島のお天氣まで變つてしまつた樣た氣がして不愉快だ。あいつはあの柳の枝を僞つてわしが逃げ出すとでも思つてゐるのか、ナポレオン一世がなまけものみたいに柳の枝にぶら下るとでも思つてゐるのか！
ラ、カーズ　とにかく、あいつは實に下等極まる英國人でございます。あいつはロンドンの霧の中の馬車馬や、海外逃亡人だのゴルス人だのヨーロッパの卑賤陋劣な背叛者や賣國奴しか見た事のない奴でございます。尊敬すべき人を見た事がないのでございます。
ナポレオン　さうだ。さうだとも、こんなお天氣の島の知

事など霧を喰つて生きてゐる奴にしか向かないんだ。だがわしはあんな奴を相手にするのは不名譽だ。わしの心靈は晴れた青空の様に氣高いのだ。わしはかつて軍隊を統率した時の意氣と玉座にあつて諸王をたてた時の様に獨立不羈の精神を忘れてはゐない。（吐息する）然しコクバーンはローエの奴に比べると物の分つた男であつた！

ラ、カーズ　（吐息して）さ様でございます。

ナポレオン　（夢でも見てゐる様に）だがわしはかう思ふのだ。（聲をひそめて）セント、ヘレナを脱出する事だ！

ラ、カーズ　（とび上る）ひえつ！

ナポレオン　（手で制す）靜に！

ラ、カーズ　これはどうも、不肖私は、心臓が破れるかと思ひまして……

ナポレオン　現在の時局に於て二三十年を出ずしてヨーロツパは悉く共和國になるだらうと思ふのだ。

ラ、カーズ　それは又どう致しまして！

ナポレオン　政治家がわしを倒したわけなのだ！

ラ、カーズ　（目をパチクリして）それがさつきのお話しと何か！

ナポレオン　だからお前達は頭が惡いと云ふのだ！　いゝか！　今に人民の壓迫に對して諸國の皇帝がわしを必要とする時か、或は人民が皇帝を倒す必要からわしを必要とする時か、どつちかの必要が今に來るのだ。どつちみち解決はわしの様な實行家がゐなくてはだめなのだ。

（と又一人で空想と喜悦にひたる。）

ラ、カーズ　はい！　なるほど！　（深く考へ込む）

（間。）

ナポレオン　（ふと考へ込んでゐるラ、カーズに氣がつき）おい！　何を考へてゐるのだ？

ラ、カーズ　は、はい。はなはだ申し上げにくい事でございます。

ナポレオン　何事だ！

ラ、カーズ　はい、又、ハドソン、ローエのやりくちでございまして。

ナポレオン　又何か云つてよこしたのか！

ラ、カーズ　はい、つまり……

ナポレオン　何だ！

ラ、カーズ　つまり、かうでございます、陛下。つまり「ロングウッドの費用が甚だ嵩むから、陛下に於て食費を節せらるゝか、又は費用を分擔遊ばさるゝか……」と申すのでございます！　愚にもつかない事で！

ナポレオン　だから、わしの家族と交渉を許さなければためだと云へ！　わしに對して金錢上の事を云つてよこす

等は最もけしからん事だ！　わしは英國の賓客だ！
ラ、カーズ　（泣きさうになる）　はい！　さ樣でございますが陛下！　ローエの奴、その上に、一人に付葡萄酒一本……つまり陛下に對し奉りましても……
ナポレオン　（かつとする）　馬鹿！　葡萄酒一本でパリの匂ひが思ひ出せるものか！　金はもうないのか！
ラ、カーズ　はい、ノーサンバーランドで陛下がお勝になりましたあのお金も、もはやなくなつてしまつてをります！　何とも、はい。
ナポレオン　ふむ。仕方がない。だがコクバーンはよく物の分つた奴であつた。わしはあいつならレジョン、ド、ヌール勳章をやつても惜しくはないと思つてゐる。（と一つの銀の皿を摑み出して）仕方がない。又これを處分しろ！
ラ、カーズ　もつたいない事でございます。（おしいたゞく）陛下！　（と出て行く）
（間――式部官ナヴアール登場。）
ナヴアール　（あわてゝはひつて來る）　陛下！　お願ひでございます。理髪師のサンチニをお叱り下さいまし！
ナポレオン　何だ！　何事だ！
ナヴアール　ハドソン、ローエの奴が遠くを歩いてゐたのが見えたのでございます。致しまするとサンチニがあいつを殺してやると云つてきかないのでございます。もしやりそこねました日には陛下、どんな下らない事が起りますか！　サンチニをお叱り下さい。
ナポレオン　やりそこなつては危險だ！
ナヴアール　もしやつつけなければならない場合陛下の御命令でしたら私どもは理髪師風情の樣にやりそこないは致しませんが。
ナポレオン　よし〱、サンチニを呼べ！
ナヴアール　はい！　（かしこまつて去る）
ナポレオン　（皇帝らしい人を裁く樣な態度を作つて歩き廻る）
（やがてサンチニがナヴアールと一所に來る。）
ナヴアール　陛下！　サンチニが伺候致しました。
サンチニ　（泣いてゐる）　陛下！
ナポレオン　サンチニ！　貴樣の心持ちは皇帝がよく分つてをる！　だから無謀なことをしてはいかん。
サンチニ　（感激してひれ伏す）陛下！　（聲をたてゝ泣く）
ナポレオン　剃刀ではためだ！　サンチニ！　皇帝の名によつて嚴命する。そんな無謀な事はしてはいかん。やりそこなつたら困るのだ！　よいか。
サンチニ　陛下！

ナポレオン　よい！　行け！
サンチ＝　陛下！（去る）
ナポンオン（ナヴァールに）あいつは仲々の忠義者だ！
ナヴァール　さ樣でございます。
（所へ今度は、ラ、カーズがあわてゝはひつて來る。）
ラ、カーズ　陛下！　ハドソン、ローエの奴が參りました。如何致しませうでございますか。
ナポレオン（顏をしかめる）仕方がない。通せ！
ラ、カーズ　陛下！　去る）
（あとからナヴァールもかしこまつて出て行く。やがてラ、カーズがローエを導き入れる。）
ラ、カーズ　陛下！　ハドソン、ローエ殿！　（かしこまる）
ローエ（ちよいと會釋をして）ボナパルト將軍御機嫌はいかゞでございますか！
ナポレオン（不機嫌に）そんな將軍はかつてピラミッドの下及びタボール山下にゐた事があると聞いてゐる！
ローエ　さ樣でしたかな！　所で！（紙片を差し出す）
ナポレオン（あごでラ、カーズへ命令する）
ラ、カーズ（ローエに近づき手をさしのべる）
ローエ（まるで、ラ、カーズを輕蔑する樣な態度で紙片を渡す）
ラ、カーズ（目を通して）恐れながら陛下又金錢上の問題でございます。
ローエ（笑ふ）さ樣でございます。
ナポレオン　貴樣は賤しい金錢上の云ひがかりをつけてわしを恥しめるつもりか！
ローエ　いゝえ、どういたしまして、私はたゞ私の職責に忠實なだけでございます。なるほど金錢は或は賤しむべき憎むべきものかも分りません。ですがこれは經濟組織の問題でございまして、たゞ今はどうもやはり金錢のない人間に對しましてはそれだけの事しか出來ない樣なわけでございます。若しボナパルト將軍に於かせられても……
ナポレオン（かつとする）その將軍ならエヂプトへ行つて尋ねて見ろ！　わしは貴樣から經濟問題を聞かうとは思はん。わしがすぐれた財政家である事を知らんのか！
（プイと室を出て行つてしまふ）
ローエ（苦笑する）仲々短氣だな！
ラ、カーズ（色をなして）ローエ閣下！　少し敬ふべき所には尊敬をもつてして頂きたいものです！
ローエ　敬ふべき所？　なるほどね、ド、ラ、カーズ伯爵。
ラ、カーズ　それはなるほどナポレオン一世陛下は只今はフランスの帝位を退かれました。だが我々はナポレオン

一世と云ふ拔山蓋世の英雄を尊敬するのはあたり前だと云ふのですよ。

ローエ　（笑ふ）　例へば蜃氣樓ですな！

ラ、カーズ　あんたにはどうも偉大なナポレオン帝が見えない樣だ。あまり目の前にゐでになるので丁度さうだ、つまり象があんまりそばにゐるんで横腹しか見えない樣なもんだ。そして象つてものは灰色なもんだとあんたは云ふ樣な人なんだ！

ローエ　私は夢を見てゐないだけの話ですよ！　伯爵！

ラ、カーズ　夢？　夢でたまるものですか。ナポレオン大帝の遊ばされた偉大な事業が！　英雄の意氣が！

ローエ　英雄！　なるほどね。だが伯爵！　私はやつぱり夢を見てをらんと思ふですよ。わしはね、たゞ、今まで聞いた事も見た事もない途方もない無頼漢の監視をやつてるだけなんですよ。

ラ、カーズ　（あつけにとられる）　ブ・ラ・イ・カ・ン!?

（間――。）

ローエ　さうですよ。よござんすか伯爵！　自分の妻君の連ッ子をはらまして、そいつを弟におしつけるなんぞは赤ん坊が見たつて惡者のやる仕事でさ！　英國の紳士はいや紳士でなくつたつてそんな男を尊敬出來ませんね！

ラ、カーズ　（あきれはてゝ）　あんたは、何を途方もない事を……

ローエ　途方もないのは英雄の方ですよ！　一體英雄なんてものは何の役にたちますね。英雄が我々人民に何をして呉れようつて云ふんです。大陸を封鎖して皆をペシャンコに困らしておいて密輸入の頭をはねる位のやりくりならヒレネーの山の中の山賊の方が手ぎはがよからうと思ひますね。つまり自分に都合のいゝ法律を作らうつてなら泥棒は眞先に立派な法律家にならうてもんですよ。さうだ。それからベネチアだ。私は大體世の中に美しい女達が生きてゐる事は有難い事だと思つてゐますね。わたしは詩人ではないが美しい物を讃美する人間らしい喜びはもつてゐるつもりですよ。所が英雄はどうでせう。ベネチアで窓から首を出してゐた美人がありましたね。その美人の方を人々が英雄よりもよけいに見たと云ふのでその美人を捕へて毒を飮ませるなんぞは途方もなさすぎますよ！　つまり途方もないのは英雄の方で、私は神樣の代人をつとめるだけの事なんです。私ほど勇敢な男こそ神の目にかなつた英雄ですよ！

ラ、カーズ　あんたはあきれはてた惡黨だ！　でなきや氣違ひだ！

ローエ　どう致しまして、親愛なド、ラ、カーズ伯爵！大體英雄の事を皆夢に見てゐるんですよ。つまりあつけ

にとられてゐるんですよ。途方もなさすぎるんで神様とまちがへるんですよ。とんでもない事だ！　人間つてやつは自分の手にをへない奴にはおべつかをつかふと云ふ弱點があるんでしてね。そして利用されちまつてもまだあつけにとられてゐるんですよ。そんなのがよつてたかつてまつり上げたのが英雄ですよ。だから英雄なんてものは途方もないもんだけれど實は集團の意志以外にとび出せつこはないんです。つまり御らんの通り、私は一個の役人だけれど、私の後には集團の意志と神の心がついてゐますからいくらナポレオン一世でも何でもかなはないんですよ。つまり英雄たなんて云つたつて、のぼせ上るのと同じに不自然なんです。

ラ、カーズ　（口惜しさうに）だが見てごらんなさい後世の歴史家はあんたの事を覺えて呉れるとしたらたゞ敬ふべき英雄を敬はなかつた不德漢としてだらうと云ふ事を私は忠告したいね。

ローエ　結構！　皆目がさめるまではそれで結構ですね。だが今の所はつきりと目の醒めてゐるのはこのハドソン、ローエ一人だと云ふ事も覺えてゐてもらひたいもんだね、私をつかはしてよこした集團たつて、まだ、不自然だと云ふ事にしか氣がついてないんだからな。歴史家なんて奴は案外センチメンタルなもんだ。歴史家は思想家で眞理の探求者だとばかりは限らないんだからね。そんな歴史家こそ今に擁護される時が來るんだよ。まあ見給へ！　ナポレオンと云ふ一人の途方もない無頼漢が現れたばつかりに苦しめられた樣々の人達の苦しみと同じ苦みがその張本人に報いられるのはこりや一番通俗的な因果律ですよ。

ラ、カーズ　（あきれはてゝ口をあいて聞いてゐたが）閣下は神學のお話しにいらつしたのかね。

ローエ　いやたゞね英雄と云ふ字はいかにも堂々としてゐるがつまりお伽話だと云ふのですよ、お伽ばなしは生活ではないつて云ふんですよ。つまり我々集團はそんなお伽話の犧牲になる必要がちつともない。我々集團のためにはナポレオン大帝であらうが何であらうが問題でないと云ふだけですよ。

ラ、カーズ（氣違ひでも相手にする樣に）さ、分つた！　分つた！　だからお歸り下さい。

ローエ　分るもんか！　あんたのお話しぢやないが、あんたは象にくつゝいてゐる蚤みたいなもんだから分るわけはないよ！

ラ、カーズ　それでもいゝから、さ、今日はおひきとり下さい。

ローエ　いや、私はね。ボナパルト將軍があの息子の大理

石像を傍におく事を禁止しようと思つて來たんです！

ナポレオン（登場する）まだ歸らないのか！

ラ、カーズ　ローエ閣下は陛下、どうも少し氣が變です。

ナポレオン　氣違ひだつたのか？

ローエ　冗談云つちやいけません！　私はたゞ將軍があの大理石の像をそこへおいてはならんと云つてるのです。

ナポレオン（怒髮天をついてどなる）馬鹿野郎！　それはならん！

ローエ（ちよつと壓迫されるが、滿身の勇を鼓して）だがワーテルローで私の甥も死んでゐます。息子に死なれて嘆き悲しんでゐる父親達――わけても母親達の悲しみは當然將軍の上に歸つて行かなくちやならないと私は信じて疑はないからです。大體あなたほど今まで人間を無視し、人間の感情を無視した人はゐません。だから今度は無視される番なのです。

ナポレオン（怒つてワナ〳〵とふるへる）貴樣はナポレオン大帝の何ものたるかを知らんのか！（いきなりローエをはりとばす）

ローエ（すつとんでぶつたふれる）あたり前の拳骨ですね。（と起き上つて劍に手をかけるが、ふとやめて丁寧におじぎをし）分りました！　と同樣あなたも今にお分りになるでせう！　人間が人間に愛されないと云ふ事はどう云ふ事であるか！　大帝と云ふものは天國に昇るお伽話の王樣であるか！　それともそのあたり前の拳骨であるか！（敬禮もしずに出て行つてしまふ）

ナポレオン（身ぶるひして地團太ふみ、無茶くちやに手をふつて歩き廻る）あんな、あんな無禮極惡極まる不敬漢が、このナポレオン大帝の前に現はれるなんて！　こりや！　こりや何と云ふ星のめぐり合はせだ！

ラ、カーズ　陛下！（ハンカチをとり出して　さめ〴〵と泣く）

ナポレオン（なほ吠える樣に）こりや！　實に、歴史上の由々しい大問題ではないか！（無暗にふつてゐた手を、ふとポケツトに入れる。ふと、おとなしくなる。そしてポケツトから氣がついた樣にネーブルを二つとり出す）だがよし、泣く場合ではない。これ！　もうよせ！　それよりもこのネーブルをお前の息子にもつて行つてやれ！　わしは泣いてなんかゐはせん！（とネーブルを一つラ、カーズに渡す）

ラ、カーズ　陛下！（ひざまづいてネーブルを抑しいただく）

（その時、どや〳〵と英國の大佐を先頭に數名の兵士がはひつて來る。）

ラ、カーズ　（とび上ろ）　誰だ！
ナポレオン　（どなる）　無禮者め！
大佐　ボナパルト將軍閣下！　小官はセント、ヘレナ島總督、サー、ハドソン、ロ－エ閣下の命により密に文書を歐洲へ歸還する從僕に托した伯爵ド、ラ、カーズ並びに、その計畫を知りつゝ密告する事をしなかつた彼の息子エムマヌエル、ド、ラ、カーズを逮捕に參りました。
ナポレオン　（兩手を高く上にふり上げて目をむき）　馬鹿野郎！　（とどなり、くつてかゝらうとする）
ラ、カーズ　（あわてゝそれをさへぎる）　陛下！　陛下！
大佐　（冷然と）　ボナパルト將軍閣下！　外には軍隊が一個小隊待つてをります。（丁寧におじぎをする）
ナポレオン　（手のやり場に困るそして唸る）　わしは千萬の軍隊も怖れはせん！
（兵士等はラ、カーズを捕へる。）
ラ、カーズ　（ネーブルを抱いたまゝ、情けなさゝうに）　陛下！
（兵士等はラ、カーズをひきたてる。）
ナポレオン　（どうする事も出來ず）　わしの！　わしのド、ラ、カーズ伯爵！
（兵士等は「陛下！　陛下！」と救ひを求めて泣くラ、カーズをつれて去つて行く。）

大佐　小官は任務をへて歸ります！　（敬禮をして出て行く）
ナポレオン　（ネーブルをその場へたゝきつける。そしてワッと聲をあげて泣き出す）

―― 幕 ――

## 第二景　「沈默の谷」

ゼラニアムの花、草薔薇。それからかの有名な柳の木。
ナポレオンがたつた一人、柳の木に背をもたせ、足をなげ出してLの字形になつて、ボンヤリと氣力なく日なたぼつこをしてゐる。
花をつむ男女であらう、甘い戀歌を歌ふのがひゞいて來る。
長い間――。
やがて、こつそりと足音をしのばせて、ベルトランの娘ホルタンスが登場する。
ホルタンス　（小さゝ甘く）　陛下！
ナポレオン　（ふと夢からさめた樣に）　何だ！　ホルタンスか!?
ホルタンス　陛下！　何をお考へになつてらして!?
ナポレオン　うん、可愛いお前の事を考へてゐたのさ！

ホルタンス　（すねて見る）　またあんな事ばつかり！

ナポレオン　お坐り！

ホルタンス　いや！

ナポレオン　ナポレオン大帝は、ホルタンスにお坐りと命令する！

ホルタンス　（甘へる様に）　陛下！　（と貴婦人の様な敬禮なしてナポレオンの傍に小雀の様に坐つて華やかに笑ふ）

ナポレオン　（ホルタンスの肩に腕をのせてかい抱く様にして）お前はよく忘れないでやつて來たね！

ホルタンス　（何思ふか恥かしさうに手で顔をかくす。——やがて又小さく甘く）　陛下、本當に何お考へ遊ばしてらつしやいましたの？

ナポレオン　捕つてヨーロッパへ行つたド、ラ、カーズの事や、フランスの事や、パリの事や！

ホルタンス　（すねる様に）　うそ！　マリー、ルイゼ様の事でせう？

ナポレオン　どうして？

ホルタンス　どうしてでも！

ナポレオン　いゝや！　皇帝はド、ラ、カーズ伯爵に十萬フランの御はうびをやらうと思つてゐるんだよ！

ホルタンス　まあ！

ナポレオン　お前、パリへ歸りたくはないかい？

ホルタンス　いゝえ、陛下と御一所ならあたくしこの方がよろしうございますわ。

ナポレオン　有難う！　（夢見る様に）　でも、マリー、ルイゼは薄情ものだ！　エルバへ行つた時だつて手紙一本呉れないんだからな。

ホルタンス　（ナポレオンの腕からのがれようとすれて）ほら、やつぱりマリー、ルイゼ様の事でせう！

ナポレオン　なに、お前がやさしいつて事を例へて云つたまでの事さ！　（とホルタンスを抱く。が急に吐き氣でも來た樣に、ゲプ……と云つて苦い顔をする）

ホルタンス　（驚く）　あら!!

ナポレオン　（急に又やさしく）　なに何でもないよ。わしは何たか近頃、胃が惡い樣だから！

ホルタンス　いけませんわ！

ナポレオン　なに、お前がゐさへすれば、わしは苦しい事を忘れるよ。（とホルタンスを抱いてひどく接吻しながら横にならうとする。ホルタンスもしがみつく。がナポレオンは急にホルタンスをつきはなして立ち上り二三歩行つて激しく、ゲーゲーと云つてヘドを吐く。ホルタンスはあつけにとられて見てゐる）

——幕——

## 第三幕　ナポレオンの室

これを正確に誌せば千八百二十一年五月五日の事である。がこゝではたゞナポレオンが死ぬ日の夜だとしておかう。大暴風雨が吹き荒んで「沈黙の谷」の柳の木をひつこぬいたのは四日だと回想錄にもあるが、こゝではやはり嵐を吹き荒ばせよう。
初め舞臺は暗黒である。
幕があくと遠くから陽氣な、樂隊の音が響いて來る。勇ましいマーチである。樂隊はだん〳〵近づいて來る。とスポットが一臺舞臺の中央をてらす。
下手から愉快な、子供の扮した、まるで玩具の樣な、ファンタスティックな美しい軍服を着、サンランと輝く勳章をつけた兵隊がサーベルを下げ或は銃をになつて、足なみそろへて現れて來る。彼等は舞臺の中央のスポットの光の中を通つて上手へ切れる。木馬に乘つたナポレオンが（この場合は同じ扮装のかへ玉でもよい）つゞくその木馬のひもをひつぱつてゐるのは窈窕花をあざむくマリイ、ルイゼである。最後に兩手をしばられたハドソン、ローエが子供の兵隊にひつぱられてつゞく。――玩具の樣な兵隊は皆、上手へ切れてしまふ、進軍の足音と、マーチの音が消えて行く――嵐の音――舞臺が照明される。
ナポレオンは病床にねてゐるのである。床の傍には先づ侍ヴィクナリ師、それから醫者達、床にはなれて、（事實とは異ふが）ナポレオンに附いてセント、ヘレナまでやつて來た諸々の將軍、即ちモントロン、ベルトラン、マルシャン、ベルトラン夫人その他ホルタンス等々が一團と集つて椅子に腰かけてゐるのである。

ナポレオン　マリー、ルイゼ……皇帝は戰場へ行くのだ！（唸る）

ホルタンス　（たまらなくなつた樣にナポレオンの傍へ行き）陛下！　ホルタンスでございます！　（と泣く）

ヴィクナリ師　お孃さん！　靜かになさい！　神樣が陛下の魂を呼んでゐらつしやるのです。

ナポレオン　（唸る）

（一同唸り聲を聞くと一齊に立ち上る。）

ナポレオン　ジヨセフイーヌ。皇帝のねまきはどこへ行つた！　マリー、ルイゼがもつて行つた？

ホルタンス　（悲しさうに）　陛下！　ホルタンスでございます！

ナポレオン　（彼女の手をとり）　マリー、ルイゼ！　わしはお前の事を、毎日、毎日、思つてゐた！　もう、もう寢よう！

ホルタンス（今度はナポレオンの手をふりはなし自分の顔を覆ひ、クルリとナポレオンに背をむけて一同の所へ歸る）

ナポレオン（靜になる）

（一同、靜に吐息して腰をかける。）

ナポレオン（又唸る）

（一同一齊に立ち上る。）

ナポレオン（すゝり泣く）

（一同吐息して坐る。）

ナポレオン（吠える樣に唸る）ウオーツ！

（一同驚いて一齊に立ち上る。）

ヴイグナリ師（靜に祈る）神樣、あなたの哀れな一人のみなしごの苦しみをおやはらげ下さい。

ベルトラン夫人（すゝり泣く）我等の陛下！

ナポレオン（吠える樣に唸つてからすゝり泣く）

（一同靜に坐る。）

ナポレオン（も一聲、すばらしく吠える。そして舌を出して死ぬ）

醫者（悲痛に）御臨終でございます！

ヴイグナリ師（靜かにひざまづく）神樣――

（一同悲嘆にくれる。女の聲と男の聲との泣き聲が、二部合唱の樣に次第に高まる中に。）

――幕――

# 人物のゐる街の風景

（三幕十場）

**人　物**

唱　三

啓　一

雪　子

庄　子

素晴らしく美しい淑子

トーマス

そ の 他

**舞　臺**

港街——

街路とパーラーとビルデイングの上の動物園と書齋と病院の室と、それから明滅する廣告塔その他を含む構成。

## 第一幕

### I　街路（舞臺全體照明）

唱三が夢でも見てゐる樣に街燈の柱によりかゝつてゐる。サンドウイツチマンがのんきに煙管で煙草を吸ひながらゆつくりと歩いて去る。汽船の汽笛。啓一が登場する。

啓一　やあ！

唱三　よう！

啓一　旅から歸つたつてのは聞いてゐた。久しぶりでお茶でものみに行かないか。

唱三　有難う。だが僕は何だかまだかうして見てゐたい！

啓一　見てゐたいつて？（笑ふ）さう云へば君はまるで夢でも見てゐる人の樣だつたぜ。でなきやサルヴエーシヨン、ハンターだ。

唱三　あゝ、僕は先づ救はれたいね。

啓一　神樣か——

唱三　いや、僕はね、こゝにゐてかうして人の通りを眺めてるんだ。ひよつとしたら僕の救ひがその中に混つてやしないかと思つてね。

啓一　驚いたね。君はやつぱり夢想家なんだね。

唱三　僕は眞面目なんだよ。僕は人を探してゐるんだ。

啓一　ぼんやりとつゝ立つたまゝでかい。一體誰の事なんだ。

唱三　運命的に刻み込まれたビアトリチエさ。

啓一　ビアトリチエ？　萬歳！　君に戀人が出來たんだね。

唱三　あわてちやいけないよ！（苦笑する）僕は旅で會つた不思議な女の人の事を云つてるんだ。

啓一　ぢや勇敢にその人のお城へ押しかけよう。

唱三　一人でがてんしては困るよ！　僕はその人の家も名も知らないんだ。

啓一　え？（あきれる）君は夢を見てるんぢやないか？そんなあてにならない話なんかだめぢやないか。

唱三　だけど僕は失望しないよ！　人間は誰だつてあてのない事をあてにして生きてる樣なものなのだからね。ね君、君はこんな事を考へないかい？　人間同士知り合ひになるつて事は何てすばらしい事だらうつてさ！　幾千萬――幾億萬の人間――地球の上の人間――それが皆知り合ひになつたらどんなにすばらしい事だらうな！　まるで知らなかつた同士が知り合ひになる――お互に知らなかつた運命が觸れ合ふんだ！　人間全體が皆僕の前に姿を現はすんだ。そしてお互にお互の悲しみを悲しみ喜びを喜び合へるんだ。つまり僕の生活と人類全體の生活とつながるんだね。僕は人類の生活を無視する事が出來ない！　人類は僕の生活を無視することが出來ない――

啓一　そいつあすばらしい空想だよ。

唱三　空想にすぎないのかね。

啓一　空想でないとした所で事實はさうではないね。（一人の男が二人をヂロ／＼見ながら通りすぎる）手近い話があれだ！　あれは知らない人だ。あの男の生活が僕等にどうかゝはりがあるんだ？　本當の事だよ！

唱三　だから僕は情ないんだよ！　だから僕は僕の救ひを探してるんだよ！　僕の魂はまるで道連にはぐれた迷兒みたいなんだからね。

啓一　それにしてもさつきの戀人の話はどうなつたんだい？

唱三　うん。（間）眉のはつきりした。上つそりの長いまつげに包まれた柔い目つきさ！、それからヴアイオラ、ダナの樣な唇をもつた女の人なんだ！

啓一　すてきだな。

唱三　本當だよ。旅でひよつこりと僕の世界に現れた女の人だ！　君、眼をつぶつて見給へ！

啓一　（目をつぶる）

唱三　船は嵐でゆられつゞけたんだ。僕がひどい船よひに

苦しみつゞけたと思ひ給へ！　それをいたはりつゞけてゐる夢の様な僕が好きだと思ふ女がゐると思ひ給へ！

啓一　うん！　分るよ。

唱三　島につくまで船はゆれてゐたんだ。島に着いてから僕は別れの挨拶をしたんだ。「ゆうべは大變お世話様でした」つてさう云つたのさ！　そしたら柔い目が笑ひながら「ゆうべの事は云ひつこなしです」……

啓一　（目を開いて）やあ！　たまらねえな！

唱三　（苦笑する）よさう！

啓一　いや僕は聞くよ！

唱三　ぢや目をつぶり給へ！　それから南の方の島を想像して呉れ給へ！　夕方なんだ！　人つこ一人ゐない濱で僕は又、ひよつこりとその女の人と出會したんだ。僕達は砂の上に坐つて話をしてゐたんだ！　だけど僕はどんな話をしたんだかまるで覺えてゐない。たゞ「もう遲くはないでせうか。もう遲くはないでせうか」つて云つてたのを覺えてゐる。

啓一　うん、うん。

唱三　女の人はそつと膝をくづして砂を手でいぢりながら「いゝえ！　ちつとも！　どなたも家で待つてらつしやりやしないでせう」つて笑ふんだ！　その中に月が出たんだ。かう云ふ事實があつたと思ひ給へ！　あんな魅力のあるすばらしい女が二人とあるものか僕はエクスタシーの頂上にゐたんだよ。僕は感情を僞つてなどゐなかつた。どつちが強ひたんでもない。はなたれた人間の感情つてものはまるでお伽話の様に美しいものだ。ね君！　人間の約束だの交渉だので、あんなすばらしい奇蹟が出來るもんか！　さうだよ僕にとつちや奇蹟だよ。僕はこんな事が起るなんて一度だつて想像した事がなかつた！　すばらしい女つてものは皆僕の世界の外にゐるものだと思つてゐたんだ！

啓一　それで？　それから？

唱三　それだのにその女の人が又急に僕の世界から消えてしまつたんだ。

啓一　君はやつぱり夢を見てるのぢやないのかね。

唱三　夢なもんか。夢に似た話にやちがひないけど！　さうさ。とてもすばらしい希望のかなつた夢を見て目が醒めてからそんなすばらしいものは現實には無いもんだと云ふ事がはつきりと分つた時の憂鬱に似た話だよ！　だけど僕のは夢ぢやない！　事實だよ！

啓一　女はどうなつたんだね。

唱三　次の日から島にゐなかつたのさ！　たぶん、朝早くたつた船で、街の雜踏の中へ歸つて行つてしまつたんだらう。一つの形見も殘さずに、たゞ僕の魂の中に大きな

幻を刻み込んでゐなくなつてしまつたんだ。
啓一　君はもてあそばれたんだね。よくある手だ！
唱三　よくある!?　（しばらくして吐息の樣に）だが僕はかつて夢想だにしなかつた事だ――僕の魂は迷兒だよ！
啓一　可哀さうな男だな！
唱三　だけど僕はあの人に會ふよ！
啓一　（驚いて）いつ！　どこで！
唱三　いつか、どつかで偶然にさ！
啓一　（又あきれる）君は全くの夢想家だよ。
唱三　さうかな。
（間――汽船の汽笛。）
唱三　僕は君が羨しいよ！
啓一　どうして。
唱三　君はしつかりと道連れの手を握つてゐるからさ。
啓一　君は庄子の事を云つてるのかい？
唱三　あゝ、ふり分け髮の庄子さんの事さ！
啓一　あれはたよりない道づれだ！　あの兒は近頃自分の道連れに藥のビンを抱いてるんだ！
唱三　でも僕はあの人が好きだ！
啓一　君にやらうか！
唱三　（驚く）馬鹿な！
啓一　（笑ふ）冗談だよ！　だけど僕はもうかなりあの兒と會はないよ。
唱三　一度又三人でどつかへ遊びに行かないか。僕はあんな人達の話を聞くのが好きなんだ。若い人達のお伽話の樣な話をさ！
啓一　（吐息の樣に）あゝ！
（二人はいつとはなしに歩き出す。）
唱三　僕は然し人間同士知り合ひになる事は全くすばらしい事だと思ふね！
啓一　あゝ、すばらしい重荷かも分らないぢやないか――
（二人退場する。）

## II　パーラー

雪子が出て來て帶の間から平たい美しい香水のビンをとり出し、その中の液を小さな注射器にすひとり、自分の白い腕に注射する。
奧から鼻にかゝつた西洋人の歌が聞えて來る。
"Far away in Canada
Far across the sea
There's a lass who fondly waits
Making a home for me――"
雪子は注射を終へて腕をさすり立ち上つて窓から遠い港の方を眺める。

トーマスが出て來る。

トーマス　雪子さん！　何してるのさ！

雪子　船が出て行くわよ！

トーマス　(笑ふ)　船は出て行くのさ！　俺達の船も今に出て行くのさ！　ハリケーンのあばれる中を、リオ、デ、チヤネイロからケープタウンへ、ケープタウンからリスボンへ、リスボンからマルセーユへ、その中に俺達は人生の喜びを味ふのさ！　港にはどこにでも綺麗なゴム人形が並んでらあ！　カーヂフにもニユーオリンスにもハバナにもヴエノスアイレスにもシドニーにも、そしてほうら、ここにもさ！　(チユツとキスをする)

雪子　(目をつぶる)

トーマス　優しいペパミント！　(笑ふ)　俺達はたつた今人生の喜びを味ふんだ！　こんな風にしてね！　あすは海の底かも知れないんだ！　(チヤールストンを夢中になつて踊り出す)

雪子　およしなさい。ひつくり返つてしまふわよ。

(トーマスがチヤールストンを踊つてゐる時街路を庄子が通る。彼女は疲れてゐる。咳をする。それからビルデイングの所で丁度ひつ返しに登場して來る啓一にバツタリと出合ふ。)

庄子　まあ！　こんな所で會へるなんて！

啓一　今歸り？

庄子　えゝ。(ビルデイングを見上げ)　ね、又あすこのてつぺんへ行つてお話ししませうよ！

(二人は一所に退場する。ベーラーではトーマスが踊りをやめる。)

トーマス　これがウオーミングアツプさ！　さ室へ行かう！

雪子　えゝ。(うなだれる)

(二人奥の室へ消える。トーマスの歌聲が聞える。)

トーマスの聲　: Yes we have no banana, we have no banana to-day——　ハ、ハ、ハ、ハ、ハ——

III　ビルデイングの屋上

庄子と啓一が現れて腰かける。

庄子　あたし、どうしてこゝが好きなんだらう——

啓一　…………

庄子　あたしこゝへ登るときつと一番最初にあなたとこゝへやつて來て、そしてあの檻の中のライオンを見て半日暮した事を思ひ出すせゐかもわかんないわね。そりや不思議な位よ！　(咳をする)　あたしあの頃の事を考へると何だかかういとしい氣持ちになつちやふの。(小さく笑ふ)　あたしずばらしいスターになれると思つてゐたん

だわ。
啓一　失望してゐるの？
庄子　いゝえ。でもあたし近頃は別の氣持ちになつてゐるのよ。あたし勞働してゐるつて事がはつきり考へられるのよ。ほこりが一杯に飛び廻つてゐるダークステーヂの中で、夜つぴて大道具のにかわ臭いにほひをかぎながら強いライトを浴せられてさ！　そしてカメラが音をたてて廻るのを聞いて暮すなんて！　さうよ！　本當の勞働よ！　あたし考へてるの。華かなスターの夢なんかもうなくなつちやつたわ。ただあたしフイルムの中に映つてゐる自分の色んな顏を見てゐると自分の存在つて事が不思議にはつきりと感じられるのよ。こんな自分の姿でも、いくらか皆の樂しみのたしになるんだと思ふとあたし自分ぢや自分を決して輕蔑しやしない事よ！　（咳をする）
啓一　さうですとも！
庄子　あなたはこの頃どうしてらつしやるの！　手紙も下さらないし、ちつともこゝへもいらつしやらないし！　御勉強？
啓一　あゝ、少しばかり。
庄子　あたしね。何遍たつた一人でこゝへ登つて來て、何遍たつた一人でライオンを見てそれから何遍街に一杯灯がつくのを見てからたつた一人で歸つたか知れない事よ！
啓一　僕は本を讀んでゐたのです。
庄子　（たよりなさゝうに）　本に何が書いてありまして。
啓一　" Out of the day and night
A joy has taken flight;
Fresh spring, and summer, and winter hoar,
Move my faint heart with grief,
But with delight
No more O, never more!"……
庄子　どんな事ですの！
啓一　何だか知らないけど、こんな文句がひよいと頭に浮んだのさ！
庄子　（默つて街を見つめそれから）　いつか又そつとあたしを小さなトリツプに連れて行つて下さらない？
啓一　いつかね。
庄子　和製のラモン、ナヴアロがあたしをどつかへ行かうつて誘ふのよ！
啓一　（默つて街を見つめる）
（この頃より舞臺一面に暗みを帶びて來る。そして廣告塔が、やつと呼吸を初めた樣に明滅し出す。）
庄子　（ふるへる聲で）　何をそんなに見てらつしやるの？

啓一　（我に返つた樣に）遠くの方に灯がともつたのです。

庄子　（顏をふせる。咳をする。肩が忍び泣く）

啓一　（驚く）どうしたの？　泣いてるの？

庄子　分らないわ。あたしひよいとあの檻の中のライオンがアフリカかどつかの沙漠の中を日が暮れてからポコポコ歸る所を考へたのよ。そしたら笑へるんだと思つたのに涙が出ちやつたの。（唇を差し出す）

啓一　（それをさける樣に）秋になると街の灯が美しいね。

庄子　なぜ今日は街の事ばつかり云つてらつしやるの？　なぜ今日は接吻して下さらないの？

啓一　（思ひ出した樣に接吻する）

庄子　何て冷いんでせう!!

啓一　どうしたのさ！　え？　庄子さん。

庄子　又いつか御一緒にお話ししませうね。あたし今日は一人で今度の役の事を考へるわ！

啓一　どうしたのさ！

庄子　あたしを一人でそつとしておいて下さいな。

啓一　本當かい！　（そつと立ち上る）本當にあんたは………

庄子　（さへぎる樣に）さ樣なら！

啓一　（驚いて）では、又……

庄子　さ樣なら！

啓一　さ樣なら！

（啓一退場する。庄子はぢつと、暮れてしまつた街を見てゐる。舞臺にもう夜の暗さである。やがて庄子を照してゐたスポットが暗くなる。）

IV　パーラーが明るくなる

唱三が一人ぼんやりと登場する。椅子に腰を下して街の灯を見る。街路のうす暗がりて、そつとキスをし合つてゐる男女がゐる、パンをかぢつてゐた乞食が錢をかん定する。トーマスが服裝をなほしながら出て來る。勿論酔つぱらつてゐる。それを雪子が送つて來る。

トーマス　バイバイ、ペパミント。やさしいペパミント！

雪子　さ樣なら！

トーマス　（ポケットから紙幣を一枚とり出して雪子の手に握らせ）も一つ。チエリオ！　（かぢりつく）

雪子　（唱三に氣がねする樣に）およしなさいよ。およしなさいつてば！

トーマス　（笑ふそれから鼻聲で歌ひながら出て行く）

" Good night, ladies——

Good night, ladies! Good night, ladies!

We're going to leave you now.
Merrily we roll along, roll along, roll along,
O'er the dark blue sea ——"

雪子　（見送つてから口惜しさうに）けだもの！　（パーラーの隅へ行く）

（トーマスは街路へ出て口笛をふきながら去つて行く。さつきまで接吻し合つてゐた男女が逃げる様に退場する。）

唱三　逃げなくつたつていゝぢやないか。

雪子　逃げるんぢやないわ。（坐る）でもあたし、あんたにはこんな所見せるんぢやなかつたわ。あんたあたしをさげすむでせうね。あのけだもの！　（それから帯の間からさつきの平たいピンと小さな注射器をとり出す）でも仕方がないわ。今日はあたしの祕密を皆見せて上げるわ。（注射し初める）　ね！

唱三　（驚いて）　モルヒネかい？

雪子　（うなづく）　さうよ。眠るんだわ！　眠るんだわ。（痛さをまぎらす様に、ブラームスの子守唄の所々を口づさむ）醒めちやいけないんだわ？醒めちやいけないんだわ。（注射を終へて腕をさする）　あたし苦痛を寝かしつけるのよ！　あたし何も知らない子供の時分二階から落つこつたんだわ。それからあたしの體の神經は私の體が生れたまゝのものに返らうとするのを待ちかまへてゐるのよ！　醒めちやいけないんだわ、醒めたらひどい苦痛が來るんだもの。あたし苦痛からのがれたい。あたしも平和に生きて行きたい。あたしそのためにはどんな事でもするんだわ。平和な體で生きたいと思つてする事が命を縮める事になるかも分らないんだけれど！　あんた可笑しいと思ふ？　馬鹿だと思ふ？　だけど本當よ。こんな人間もゐるのよ！　藥が體に廻つてゐる平和な時が本當のあたしなのか？　生れたまゝの醒めた體にならうとして苦しむのが私なのか分らない人間かね！　でも私だけぢやないわ。あたしのはモヒだけど、何か別なものに醉はなきや生きて行けない人間がゐるんだわ。醒めた體で世の中を暮せない人が幾らあるか分りやしないわ！　そんな人の希望はよそから見たら恐ろしい馬鹿なものかも分らないけど、やつぱりこんなものよ。（ピンをすかして見せる）希望も憧憬も目的も生活も皆、こゝへ集つて來るんだわ。何て生活なんだらう。

唱三　僕には分る。僕は迷兒だから。

雪子　さうよ。迷兒にならない人間が一體幾人ゐるんだらう。（そつと唱三によりそふ）　でもあんたは親切な人ね。

唱三　僕はコーヒーが欲しい。

雪子（小さく笑つて去る）

（教會の鐘が鳴る。街路の乞食はブツ／＼つぶやきながら退場する。）

雪子（コーヒーをもつて來る）あら、お寺の鐘が鳴つてるわよ！（唱三の傍に坐る）あたしの生れたのは北海道よ！　あすこでも尼寺の鐘が鳴つたわよ！　遠い遠い昔の樣な氣がするわ。緋色の原つぱで羊が遊んでゐたわよ。あたし何だつてこんな事を思ひ出すんだらう。あたし神樣つて奴を殺さうと思ふわ。だつてなぜあたしの生活！　あたしの希望がこんなものに支配されなきやならないの。（紙幣を卓の上にのせる）平和に生きたいために、お藥を買ふために、こんなものを貰ふために！　何て生活だらう！　なまじつか神樣などを生かしておくと呻つてゐて仕方がない！　なぜ尼寺なんか思ひ出すんだらう。あの鐘が何だつて云ふのだらう。あたしが神樣に負けるとでも云ふのかい！

唱三　君はお酒をのんでるね。あの異人の船乘りが飲ましたんだね。

雪子　さうよ。あいつは私にお金を呉れたわ！　「これで人生を買へ！」つて！

唱三　君はモルヒネだ。僕は何だらう。僕はあいつの幻た。あの幻にひきずられてゐるんだ。（立上る）

（暗くなる。）

V　書齋が明るくなる

啓一が旅の仕度をしてゐる。唱三が登場する。

唱三　今晩は。

啓一　君か。

唱三　君は何をしてるんだ。トランクなどもち出して。

啓一　僕は旅へ出る。

唱三　旅に？

啓一　あゝ。

唱三　いつ。

啓一　今夜十一時に！

唱三　ぢやなぜひるま云はなかつたんだ。

啓一　僕はこつそりと行かうと思つてたんだ。亡命客の樣にさ。

唱三　亡命客？

啓一　あゝ、僕は亡命する。僕は太陽の愛が考へられなくなつたんだ。

唱三　僕には君の云ふ事がハッキリ分らないね。

啓一　明らさまに云へば僕は庄子から離れようと思ふんだ。

唱三　庄子さんから？　君は庄子さんをおいてけぼりにし

ようつて云ふのかい。あのおとなしいフイルムの中のみなしごを！　君の事を太陽の様に思つてる庄子さんを！
啓一　僕は太陽一つを考へる事が出來なくなつたんだ。僕を庄子から離さうとしてゐる力を今日僕ははつきりと感じたんだ。不思議な魅力だ！
唱三　君は何を云つてるんだ！
啓一　僕の命の事だ、僕の中にある命や僕の外にあるなつかしい大きな創造物全體の事なんだ。考へて見て吳れ給へ！　僕は春になれば、港の水平線の向うで何か約束してゐる樣な光りの魅力に魅惑されるんだ。十一月になると夜の街に一杯ともる灯や街路樹の上に、重たくのしかかるミストの魅力を痛感するんだ。それに比べて庄子は何と云ふ小さな存在だらう。
唱三　君は庄子さんを捨てるのか！
啓一　僕はあの子に人生の喜びを見失なつてしまつたのだ！　あれはまるでしをれた花の樣なものだ！　その上僕はあの子が結核だと云ふ事が分つたんだ。
唱三　君は愛の感激を知らないんだね！
啓一　僕はそれが恐しい。僕はあの子を感激させて悲劇的な英雄になるのが怖いんだ！
唱三　然し君はあの人の不運が、卽ち君の不運の一つだと云ふ事は考へられないのかい。君にあれほど近かつた人の不運かさ！
啓一　不運が公平に分配される必要はないと思ふ。
唱三　僕には分らない。僕はあの人の戀人ぢやない。けど僕はたゞ庄子さんと友達だと云ふだけで君の今の仕打ちを恨む事が出來るよ！
啓一　仕方がない。僕は大きな創造物に引かれるよ！　僕が生れたまゝの命をのびのびと伸すためにさ！　僕は冷酷でもいゝ！　だがこんな冷酷な力はどこから僕にはひり込んだんだ。何が一體僕をこんなに冷酷にするんだ！
唱三　僕はあの人の不運を默つて見てゐられるだらうか！
（暗くなる。時計が十時を打つ。）

## VI　街路がうす明るくなる

庄子が一人空箱の上に腰かけてゐる。唱三が步いて來る。
唱三　そこにゐるのは庄子さんぢやありませんか？
庄子　（氣がつく）えゝ、さうですわ。
唱三　そん所にたつた一人で何してるんです。
庄子　あたし考へてゐますの。この次の役の事を！（咳をする）
唱三　でもこんなにおそくまでゐるのは毒ですよ！
庄子　えゝ。でもあたし考へてゐましたの。あたしのこの

次の役は可哀さうな役よ！　あたしは捨てられた娘ですの。
唱三　本當ですか!?
庄子　どうして？
唱三　いゝえ。別にどうしてゞもないけど。
庄子　さう。でもあたし今日街の中を歩きながら考へましたのよ。この次の役の事を考へるとあたしぢつとしちゃゐられないわ。娘の生活は鱗でした。男に對する希望でした。それだのにその娘は捨てられるのです。あたし、どう云ふ風にやればいゝんだか！（間）ね。どう云ふ風にやればいゝんでせう！
唱三　あなたは今夜どうかしてゐますね。
庄子　あなたこそ！
唱三　僕が？　どうして！
庄子　あなたは今日は馬鹿にあたしに優しいのね。
唱三　そりやあなたの方がどうかしてゐますよ。（笑ふ）
庄子　えゝ。あたしはどうかしてるかも分りませんわ。女つてものはほんとにたよりないものですから――！
（やゝ長い間。）
唱三　家へ歸りませう。
庄子　あたし、こゝの方がいゝわ。
唱三　さうですか。

（も一つの間。）
庄子　（急に）あたし、どうしてこんなに淋しいんでせう。街を歩いてゐるくせに、人が澤山ゐる中を歩き廻つたくせに、どうしてこんなに淋しいんでせう！（せき込む）
唱三　もう皆寢る時間ですよ！
（一人の醉つぱらひが通りかゝる。）
醉つぱらひ　ちえ！　うまくやつてやがら！　（去つて行く）
（二人は驚いて同時に立ち上つてそれを見送る。）
庄子　（たへられなくなつた樣にすゝり泣く）
唱三　（指で涙をふく）行きませう！　もう皆寢る時間です。

――幕――

## 第二幕

### I　結婚式

賑かな音樂で幕があく。舞臺全體が明るい。
啓一と、素晴らしく美しい淑子の結婚式を現す。
人々は音樂に足を合はせて二人の上に喜びを浴せて一人一人退場する。啓一と淑子とが二人つ切りになる。

啓一　僕は滿足です。

波子　あたしも滿足です。

（二人抱き合ふ。舞臺暗くなる。）

## II　貧しい病院の一室

庄子と雪子とがベッドを並べて寢てゐる。その傍で唱三が手紙を讀んでゐる。

唱三　「――僕は悲劇的な感情を捨てゝしまつた。僕は君が思ひもよらない樣な現實的な利慾のために、さうだ、あらゆる追想や過去の誘惑を壓倒する樣な利慾のために結婚した。僕は結婚して外國へ行く。僕はまだ見た事のない實際ある世界――夢想でなく空想でなく――實際ある世界の魅力に引つぱられて君等にお別れする。――」

庄子　いゝわ。かまはない。かまやしないわ。

雪子　（つぶやく）皆通りすがりの人たんだ。皆行つてしまふんだわ。通りすがりにあんたには子供を、あたしには恐ろしい毒を置いて行つたんだわ。

唱三　僕等はこんなあいつの我儘まで默りこくつて見てなくちやならないんだらうか！　あいつは他の女と結婚した。だがこゝに生れて來る子供に對しちや責任をもたなくちやならないと僕は思ふ！

庄子　いゝわ。あたしもう不思議におちついてゐられるわ。あたしあなたにいつかお話ししたわね、次の役をどうしませうつて！　でもあたしやつぱりやり通したわ。あたし自分は輕蔑しやしない。

唱三　僕はあなたの忍耐が不思議です。僕でさへこんなに感じなければならない樣なこんな大きな不仕合はせがあるのに！

庄子　でも切ない時間はもう過ぎてしまつたわ！　人間つて不思議なものね！　そしてあたし今かう思ふの！　戀愛なんて人間の生活の全部ぢやないつて！　こんな事新らしい發見ぢやないわ。でも自分の事になると本當に切なかつたわ。もういゝの！　戀で人間が結びついて幸福になれるなんて！　あたし今お伽話の樣に思へるわ。皆思ひ違ひをしてゐたんだわ。でも人間つて生きてゐる中見當違ひをしちや又償つて行かなくつちやならないんだわね。あたし一度は戀の敗殘者だと思つてゐたわ。でも今ぢやさう思はない。戀の勝利つて何だらう！　結婚だの、情死だのぢやない樣な氣がするわ！　戀の報酬は人間が欲しかつてるもんぢやなくつて宇宙が與へて吳れたものなんだわ。あたしそれが分つた樣な氣がするの！

唱三　僕は何も分らない。僕はあいつの所へ行つてたづねる。僕等三人の友達がこゝにかうして平和に生きてゐられるのにあなたに子供を生ませるあいつや僕の魂を迷兒

にした女が僕等をかへり見ずに別の世界へ行つてしまふのが分らない。（立ち上る）　僕はあいつの所へ行つてたづねる。（去る）

雪子　（床の上に起き上つて注射器をひそかに とり出して注射する）

庄子　あら、又初めたのね！

雪子　えゝ、あなた可笑しいと思ふ。苦痛なしに生きたいために！　お薬を買ふためにした事がなほさらにあたしに苦痛を與へたり命を縮める様な事になるなんて！　通りすがりの人間が皆あたしにお金を呉れて、あたしの命を少しづつもつて行つたんだわ。あたしの體の中に毒をおき去りにして行つたんだわ！　知らないかほをして！　何て生活だらう！　あたし初めつからやりなほしたい！　あたしも「あゝ生きがひがあつた」と云へる様な生活がしたい！　（忍び泣く）

（暗くなる。）

III　書齋が明るくなる

啓一とすばらしく美しい淑子が、陽氣なヂャズのレコードをかけて踊つてゐる。ノック。二人踊りをやめる。

啓一　おはいり。

唱三　（はひる。そして淑子を見ると電氣にうたれた様に立ちすくむ）

淑子　おゝ！　（同時に立ちすくむ）

啓一　どうしたのだ！

唱三　君にいつか云つた日が來た！　偶然の日が來た！　君は知つてるか！　僕の話を！　旅から歸つた或日街で話したビアトリチエの話を！　幻の女を！　僕の魂をおいてけぼりにした女の話を！　僕の希望を！　僕の生活を！　この人だ！　この人だ！　この人の名は何と云ふのだ！

啓一　これは僕の妻だ！

唱三　（淑子へ）　あなたは僕を知つてゐる！　あなたは僕にすべてを與へた！　僕のすべてをもつて行つた！　島の！　島の砂濱を知つてる筈だ！

淑子　（目まひでもする様に）　私は知らない！　この人をあつちへやつて下さい！

唱三　知らない？　知らないと云ふ事はどう云ふ事だ！（啓一へ）　僕は君に聞く。知らないと云ふ事はどう云ふ事だ？

啓一　君は歸つて呉れ給へ！　君は夢想家なのだ！　（唱三を室の外へつき出す）　こゝは俺達の家庭だ！　（室が暗くなる）

唱三の聲が消えて行く　知らないと云ふ事はどう云ふ事だ！

IV　IIと同じ

暗の中から赤ん坊の聲がする。明るくなる。

雪子　あの聲は、あたしに何のかゝはりもないのだらうか。私達はやつぱりお互に通りすがりの人間なんだらうか！

庄子　あたしははつきり分る樣な氣がするわ。私達は一人づつ生れて來たんだ。私達は人から慰められたり人を慰めたりするために生れて來たのではなかつたのね。あたしはあの男のために生れて來たのではなかつた！　あの男はあたしのために生れてゐたんぢやなかつたんだわ。あたし達は皆――皆――別な命のために生れてゐたんだわ。

雪子　ではあたしは？

庄子　冷い力があたし達の上に働いてゐたんだわ。あたし分る樣な氣がするわ。

（暗くなる。赤ん坊の聲が消えて行く。）

V　街路がうす明るくなる

ホリゾントには三ヶ月が懸つてゐる。唱三がひどく酔つぱらつて歩いて行く。

唱三　友達――戀人――親――息子――誰が誰に救はれるんだ！　知り合ひになると云ふ事はどう云ふ事だ！　知らないと云ふ事はどう云ふ事だ。俺は人類全體が知り合ひになる喜びを考へてゐたんだ！　皆！　だめだ――俺は誰に開けばいゝんだ――俺は誰の所へ行けばいゝんだ！　どこをどう歩いて行けばいゝんだ。（去つて行く）

――幕――

# ステツセル（三幕）

人（登場順）

アンナ
ステツセル夫人
マルチエンコ中尉　ステツセルの副官
ヴヨルシニン少尉　アンナの夫
バラショフ　赤十字社總監（六十五歳）
コンドラチエンコ少將
ステツセル中將
マリー
リヤピニン軍醫　マリーの夫
軍人、紳士、婦人等大勢
女中
兵士A
兵士B
アントン　要塞砲兵伍長
イワン　その戰友兵士
ピヨートル　同
負傷兵　ポーランド人
擔信兵
兵士等
カーチヤ　ヴヨルシニンの子供（五歳）
レース大佐　參謀長

時
一九〇四年——一九〇五年

所
旅順要塞に於ける事件

## 第一幕

明治三十七年二月八日夜、旅順に於けるリヤピニン軍醫邸の客間である。この日は露暦正月二十六日、マリア命名日で、マリー夫人の夜會が催されてゐる。正面の扉は開かれてそこから廣間を見る事が出來る。

幕開く。客間には煖爐近くに椅子をよせて、アンナ一人、何か考へにしづみつゝぢつとを火見つめてゐる。彼女は時々力なく咳をする。

廣間からは賑かな舞踊曲が響き、それにつれて舞踊する男女の姿が見える。男は大部分軍人である。やがて

ステッセル夫人、靜かに登場する。

夫人　まあ、ヴョルシニンの奥さん。こんな所にたつた一人でゐらしつたの。

アンナ　あら、奥さん。――私、何ですかすぐ體が疲れていけませんの。（咳をする）

夫人　（アンナの傍に腰かける）お氣分がすぐれないのですか。

アンナ　氣候の加減でございますわね。こちらは私の體には合はないんださうでございますから。

夫人　あなたは南の方へいらしつた方がいゝと思ひますわ。

アンナ　さうですつて。でも私、夫をこんな所へ一人殘して行く氣にはなれませんわ。

夫人　カーチヤはどう遊ばして？

アンナ　乳母にまかせてありますの。

夫人　お可哀さうに――。

（間。）

アンナ　ですけど私達はこんなに踊り廻つてゐていゝのでせうか。

夫人　でも神様のおかげで今日のマリアの命名日も樂しく暮せますわね。（ほゝ笑む）

アンナ　（心配げに）ね、奥さん。戰が始まるのでせうか。

夫人　さうね。ですけど日本は手出しなど出來やしませんよ。

アンナ　さうでせうか知ら。でも私、それが氣になつて、氣になつて仕方がありませんのよ。こんなにこんなに遠く國を離れて來て戰爭をするなんて。――ステッセル閣下は戰爭をおやりになるおつもりですの。

夫人　夫はあまりその事は申しません。ですけど戰は軍人の意志で始まつたり終つたりするものではないと云つてをります。

（短い間。）

アンナ　ね、奥さん。あなたペテルブルグをお思ひになりません？

夫人　思ひますわ。時々ね――。

アンナ　本當に。ペテルブルグはどんなでせう。私、ペテルブルグはローレン伯爵の夜會でお終ひでした。――一昨年でした。（咳をする）私不思議にあの夜の事がはつきりと思ひ出せますわ。歸りがけ馬車の中から見てゐた街の景色などがはつきりと思ひ出せますの。（涙ぐむ）

夫人　本當に、私達はもう、ずゐ分永い事ペテルブルグと離れてゐますわね。でも私どこにゐても聖母様と夫を信じてゐますから。

アンナ　本當に奥さんはよく神様のお守りをうけてらしつ

てお仕合はせですわ。

夫人　あら、どうなすつたの。神樣のお守りがあなたにないとおつしやるの。

アンナ　（やがてハンカチで顏をふき、强ひて笑顏を作る）私、馬鹿ね。――私、軍人の妻でしたわね。（咳込む）――でもなぜ神樣が戰爭をお許になるか不思議ですわ。

夫人　まあ、あなた、どうしてそんなに戰爭の事を氣になさるの。始まると定つてやしません。――ね。向うへ參りませう。賑な方へ――。

アンナ　えゝ。（咳をしつゝ力なく立上る。そしてステツセル夫人と共に廣間へ出る）

（間――廣間から拍手の音――マルチエンコ中尉、ヴヨルシニン少尉、バラシヨフ總監登場。）

ヴヨルシニン　海軍の連中は今夜はスタルク夫人の所へ集つてるでせうな。

マルチエンコ　勿論でせう。

ヴヨルシニン　バラシヨフ閣下、いかゞです。（シガレツトケースを開いて出す）

バラシヨフ　（手と頭をふりつゝ）いや、ありがたう。

ヴヨルシニン　おゝ、閣下は禁酒禁煙でしたね。（一人で煙草をくはへてケースをポケツトへ入れる）

バラシヨフ　年よりはどうも疲れていかん。（腰かける。そして傍に立つて煙草に火をつけるヴヨルシニンへ）ね、ヴヨルシニン少尉。こんな所で云ふのは何だが奥さんは南の方へやらなきやいかんですな。

ヴヨルシニン　えゝ、有難うございます。實は一昨年の冬前には家内はもう南の方へ行つてる筈だつたのでございます。所が私がこちらへ參る樣に命令をうけましたらせひ一緒に行くと申しますので。

バラシヨフ　なるほどね、ふむ。（深くうなづく）――私も極東赤十字事業の全權代表といふ名譽を背負つてはるばるとやつて來てゐますよ。――だが私は獨りもんだからかまはない――。（淋しく笑ふ）

マルチエンコ　ですが閣下の御名譽は非常なものです。

バラシヨフ　名譽！　名譽、（頭をふる）名譽は若い人達に呉れてやりたいよ。（笑ふ）アレキシーフ大守は、ステツセル中將にもこゝから動けない職務を與へたよ。

マルチエンコ　ステツセル閣下は、きつと素晴らしい戰をおやりになりますよ。――先づ朝鮮を占領するんですね。そして一擧に――

バラシヨフ　戰爭か！　やれ〳〵――私はね、近頃ふと思つてステツセル中將とも話したんだがね。――軍人は何かのためにもてあそばれてゐるんぢやないかと思つたのさ。あるものには笑はれ、あるものには憎まれ、あるも

のにはだまされてゐる樣なね。

マルチエンコ　（笑ふ）そんな馬鹿な事が！

ヴヨルシニン　（煙草をふく）然しね。實際ステツセル閣下はのんき過ぎやしないかな。――陸上防禦はまだ――

マルチエンコ　それはコンドラチエンコ少將閣下の方ですよ。ステツセル閣下は始終室の中にとぢこもつてをられます。作戰計畫をして居られるんですよ。

（コンドラチエンコ少將、ステツセル中將と語りつゝ登場。ステツセルは始終別の事を考へてゞもゐる樣な樣子である。）

コンドラチエンコ　ね。ステツセル中將、私はけしからんと思ひますよ。

ステツセル　何です。

コンドラチエンコ　（笑ふ）いや私はね。今頃はもう陸上防禦は全部完成してゐなけりやならんと思ふのですよ。この形勢では――（煙草をふく）私はね。アレキシーフ大守の言論程まで我々の手の方も進めておかにやならんと思ふのですよ。

ステツセル　なるほど、なるほど。

バラショフ　コンドラチエンコ少將、あなたは主戰論ですか。

コンドラチエンコ　（笑ふ）私はツアルの命に從ふばかりですよ。たゞね、目下の形勢では、とにかく陸上防禦は重要ですからね。

バラショフ　ふむ、ふむ。

コンドラチエンコ　私はどうも錠前がしつかりしてないと眠れないたちでしてね。

バラショフ　然し私は主戰論者のベゾブラゾフ氏が南の方へ旅に出たと云ふのは、どうも何かあると思ひますね。

コンドラチエンコ　然し我々には訓電が來てゐますよ。

バラショフ　だが、グデデナジンによるとプレーウエ氏等も非戰論らしく思はれましたがね。

コンドラチエンコ　（笑ふ）險呑險呑！　私はペテルブルグよりも東の海の方を氣にしてゐますよ。

バラショフ　だが、私は戰は嫌ひだ。

（突然、遠くから砲聲がひゞく――一同立上つて顏を見合はす。）

コンドラチエンコ　何です今頃。

ステツセル　さあ！

（砲聲――廣間の音樂がやむ。そしてマリー夫人以下ステツセル夫人、アンナ等、大勢登場する。）

マリー　皆さん、お聞きになりまして？

ステツセル　（マルチエンコへ）君、ちよつと參謀部に問ひ合せて見給へ！

マルチエンコ　はい（去る）

マリー　まあ驚いた事。せつかく皆さん面白く踊つてらしつたのに——

アンナ　私、何だか、胸がどき／＼しますわ。

コンドラチエンコ　（窓から外を見て笑ふ）寒さうな風が吹いてゐるばかりだ。どこかでスタルク夫人のためにでも花火か何か上げてゐるのかも知れない。海軍の連中は時々あんな事をしますからね。

マリー　本當にびつくりしましたわね。（卓上のコップに酒を注ぐ）皆樣。いかゞ？

（客等、コップをとる。）

コンドラチエンコ　有難う、有難う。

ヴヨルシニン　どうも皆神經質になつてゐますからね。（笑ふ）黄色い小人どもに火をあびせる樣に——（杯を上げ）

（一同手を打ち笑ふ。）

コンドラチエンコ　ハハハ——では私はおだやかに奥さんの健康でも祝さうかな。（杯を上げる）

マリー　ありがたう。

ヴヨルシニン　皆さん、踊らうぢやありませんか。大丈夫。旅順には鐵の扉がありますよ。

（マルチエンコ登場。）

マルチエンコ　閣下、只今參謀部へ問ひ合はせましたら今夜旗艦のレドヴイザン號で夜間演習があるからその砲聲だらうとの事です。

ステツセル　御苦勞。

マリー　まあ、よかつた。では皆さん。

（一同又廣間へはひつて行く。ステツセル、コンドラチエンコ、マルチエンコ、バラショフ殘る。——やがて廣間からは前の樣に樂の音がひゞく。）

コンドラチエンコ　（ステツセルに）だが前進陣地だけは完成しなければならんですね。

ステツセル　要塞戰だね。

コンドラチエンコ　左樣——

バラショフ　どうも私は戰は嫌ひだ。

マルチエンコ　あれが日本人どもの砲聲だつたら——

バラショフ　いや私はどことどこと云ふのでなしに戰が嫌ひなのさ。人間は殺し合はなくても死ぬにきまつてゐるんだからな。

マルチエンコ　然し國家は戰はずに優越する事が出來ないと思ひます。

ステツセル　（笑ふ）君の信念はいつもかたいな。

コンドラチエンコ　（皮肉に）あなたには好い副官です。

ステツセル　ふむ。（默す）

マルチエンコ　私は私の天職を信じるのみであります。

パラショフ　人間の天職！　ふむ、ふむ。君は立派な軍人だ。

（再び遠くより亂調子の砲聲。）

マルチエンコ　おや！

コンドラチエンコ　確に砲聲だ！

（廣間の一同再び登場する。）

マリー　マルチエンコ中尉、演習なのですか。

マルチエンコ　さう云ふ返事でした。

ヴヨルシニン　（笑ふ）大艦隊が浮んでゐますよ。日本人相手なら演習も同じですよ。

（一同不安らしく耳をかたむける。やがて警戒の號音がひゞく。）

マルチエンコ　警戒の號音です。

コンドラチエンコ　（目を輝かす）たうとうそれだ！

（一同混雜する。）

マリー　まあ。戰爭!!　（卓にもたれる）

アンナ　戰爭！　（夫へ）カーチヤはどうするでせう。私前つからこんな事が氣になつてゐたのですわ。（咳込む）

ステツセル　では諸君！　我々が密かに豫期してゐた時が來ました。日本は公然と我々に向つて挑戰を初めた。我我は一個人の考へでこの時局をどうする事も出來ない。今我々に許されてゐるたゞ一つのなすべき事は最善をつくして戰はなければならないと云ふ事です。私がツアルの名の下に、諸君に命令を下さなければならない時が來たのです。諸君、諸君も私と一緒に一つの大きな衝動の中に、諸君自身を沒入していたゞきたい。では任務のある人は皆夫々自分の任務について下さい。（一同拍手する）

マルチエンコ　小猿め！

コンドラチエンコ　（笑ふ）無謀な小猿めだ。（ステツセルに何かさゝやく）

（間。）

（一同マリーに禮を云つて歸つて行く。）

ステツセル　では奥さん。さ樣なら。我々は公務につかなくちやなりません。

マリー　まあ、閣下、本當に——

夫人　さ樣なら。國のためですわ。

マルチエンコ　我々が何をするか奥さん、見ておいて下さい。

マリー　どうなるのでせう。

パラショフ　さ樣なら。災難が起りまさ。やれ〳〵。

（一同去つてしまふ。室しばし空虛。やがてマリー來りあたりを見る。リヤビニン急ぎ帽子をかぶつて登場

する。)

リヤビニン　私も行かなくちやならない。

マリー　私を一人おいて？

リヤビニン　公務だ。(接吻して去る)

(マリー、崩れる樣に椅子に坐る――長い間。砲聲――女中おづ／＼と登場する。)

女中　(ふるへる聲で) 奧樣。あの、お廣間の方を片づけませうか。

マリー　あゝ。

(女中靜に退場。時計一時を打つ。)

――幕――

## 第二幕

明治三十七年十二月十六日夕。

東鷄冠山北堡壘第一胸墻上。

幕開く――兵士A、Bが寒さにふるへながら防禦の位置に立つてゐる。砲聲や銃聲がしきりに聞える。

兵A　寒い、又冬になつちまやがつて、畜生！

兵B　街へ行きたい。俺は夏の最盛りに一度街へ下りた切りだ。

兵A　いつ防寒具が渡るんだ。

兵B　いつまでこんな保壘のてつぺんで吹きつ曝しになつてなきやならねんだ。

兵A　(吐き出す樣に) 一生だ！

兵B　馬鹿な。そんな事があつてたまるものか。

兵A　お前、そんな長い命でもあると思つてるのか。(死體を指す) こいつを見るがいゝや。さつきまで、やけにべら／＼しやべつてゐたぢやねえか。あすにでも街へ下りられる樣な事を云つてたぢやねえか。

兵B　そんなにたやすく死んでたまるものか。

兵A　この次の彈丸(たま)が來るまでさう思つてるがいいや。

(ヴヨルシニン少尉登場。)

ヴヨルシニン　何をべちやべちやしやべつてるんだ馬鹿！外壕まで敵が來てるぢやないか。

(兵士A、B、あわてゝ緊張した風を示す。アントン、イワン、ピヨートル登場して防禦の位置につく。ヴヨルシニン退場。)

アントン　畜生！

(間。)

兵B　班長殿。バルチツク艦隊が來るつてのは本當ですかい。

アントン　馬鹿、そんな空慰めが腹のたしにでもなると思つてるのか。

イヷン　コンドラチエンコ少將が昨日砲臺でやられたつてのは本當か。
アントン　確に本當らしい。
兵B　（微笑する）早くけりがつくぞ。
ピヨートル　ステッセル中將の生きてる中はだめだ。
イヷン　ステッセル中將は負傷したつきりだ。
ピヨートル　さう云へば俺達の隊長様のヴォルシニン少尉の妻君が血を吐いて死んだつてぢやないか。
アントン　しつ、大きな聲を出すない。（間）だがな、この東鷄冠山はあくまで守り通さなくちやならねんだとよ。所がこの胸墻も危えもんだぜ!!　日本兵のやつ突撃を休んで地の底を掘つてるに違ひねんだ。この上何を俺達にしろつてんだ。ちえ。（ピヨートルに）いゝものを見せてやらうか。（ポケットから手紙様の紙片を取り出す）
ピヨートル　何だい。
アントン　敵がよこしたんだ。
ピヨートル　敵が？　どうして！
アントン　俺が外側防禦窖にゐる時よ。命知らず奴が忍びよつてなげ込んで行つたんだ。
ピヨートル　（それをよむ）勸降狀ぢやねえか。
アントン　うむ。捕虜になつたら待遇（もてなし）してやるつてんだ。
ピヨートル　ふむ。

イヷン　（間。）腹がへつた。
兵A　いつ防寒具が渡るんです。班長殿。
アントン　分るもんかい。俺あ街へ下りた時自腹を切つて買つたんだ。寒かつたらお前も下の奴等の様に、その邊にころがつてる日本兵の死骸から外套でもひつぱがして來るがいゝや。
ピヨートル　（紙片を何遍もよみ返してから）おい、やらうぢやねえか。
アントン　すきを見てよ、待て、待て。
ピヨートル　いつ、ドカンと來るか分りやしねえ。相手が靜かになると底きみが惡い。いつ地の底から根こそぎにされるか分らねえぞ。
イヷン　日本人め、地の底をもぐつて來やがるんだな。
アントン　おい皆、逃げ出さうぢやないか。
兵B　逃げたつて捕るにきまつてる。俺あ殺されるのはいやだ。將校は皆ピストルで見張りをしてゐる。それよりはかうしてゐた方がいくらかいゝや。
アントン　馬鹿。敵の中へにげ込むんだ。
兵A　まつぴらだ。捕つたら銃殺だ。
ピヨートル　相手が靜かだとうすきみが惡い。
イヷン　やつつけよう。

兵A　何を。
イワン　やつを。
兵B　ピストルをもつてるぜ。
（間。）
アントン　寒い。
イワン　ゆつくりと眠りたい。
ピヨートル　交代がないのか。
兵A　俺達はこゝへ閉ぢ込められちまつたんだ。
ピヨートル　俺あ初めつから戰爭なんて不賛成だ。
兵B　何しにこんな事をしてるんだかちつとも分りやしねえ。俺あ誰を殺さうてんだ。誰に殺されようつてんだ。
イワン　だしぬけに召集と來やがつた！
ピヨートル　俺あ初めつから　、、、、
。（獨言の樣に）　。ちえ。（鼻汗を
ぐいと拭く）
。畜生!!
イワン

（榴霰彈が破裂する。ピヨートル、兵Aが即死する。他の者は砂をかぶる。）
アントン　ぷーつ！　畜生。（外濠へむかつて爆彈を投げる）
イワン　くたばりやがつた。いつまでこんな事をしてゐたつて限りがねえや。
兵B　畜生！（外濠の方をにらむ）
（一人の兵、手の傷をおさへつゝ走つて來る。ヴヨルシニンがそれを追ひかけて來る。）
ヴヨルシニン　どこへ逃げるんだ馬鹿！　卑怯者！（ピストルをうつ）
負傷兵　（倒れる）やりやがつたな。
ヴヨルシニン　命令に背く奴の見せしめだ！　ポーランドの犬め！
負傷兵　何？　犬だ？　――ツアールの犬め！　俺達の祖國を盜んだ泥棒犬の足め！（悶絶する）
ヴヨルシニン　命令に背くとこれだぞ。伍長！　見守れ。
アントン　はい。
（ヴヨルシニン退場。）
イワン　聞いたかい。
兵B　ちえ。
イワン　やつつけよう。

アントン　まて、まて。

イヷン　貴樣も俺達を見張るつもりか。

アントン　馬鹿。嘘も方便だ。

。――しつ、將校が來たぞ。

（ヴォルシニン、マルチエンコ、僧侶が登場する。）

マルチエンコ　御苦勞。

（三人の兵、目禮する。）

マルチエンコ　（ヴォルシニンへ）　貴下の勇敢な防戰を閣下に報告しませう。（三人の傍へ通りながら）　國家の光榮のためだぞ。しつかりやつて吳れ。ステッセル閣下も名譽の負傷をされたが砲臺の上まで來て居られる。今しばらくの我慢だ。軍人の名譽を忘れてはいかんぞ。

（マルチエンコ、ヴォルシニン、通りぬけて去る。）

僧侶　お身たちの上に幸福のあります樣に――（兵士達、ちよつとうなだれて十字を切る）たゞ神の守りを信じて戰ふがよい。（死骸へ）――あ、尊い犧牲者達たな。（ひざまづく）お身達は名譽ある死に場所を見出したのだ。安らかに、天國に眠り給へ。（默禱して去る）

兵B　（胸から銀の十字架を出して片手に抱いて默禱する）

イヷン　吹つ曝しの天國た。

アントン　（兵Bへ）　お前どつからそんなものをもつて來たんだ。

兵B　砲臺にゐる時、スミルノフ中將閣下からもらつたんでさ。

イヷン　糞坊主め！　もうだまされやしないぞ。（何かアントンにさゝやく）

（砲聲――はげしくなる。兵二名走り過ぎる。ヴォルシニン少尉走つて來る。その時彈丸が破裂する。）

イヷン　あつ。（と後へさがつてヴォルシニンを打つ）

ヴォルシニン　（卽死する）

アントン　（叫ぶ）　擔架！　少尉殿が戰死だ！

（兵士二名走り來る。マルチエンコ、僧侶も登場する。）

マルチエンコ　あゝ！　ヴォルシニン少尉！　（ひざまづいて帽子をとる）

僧侶　（靜に）　神よ。勇士の魂を導き給へ――

（兵、少尉の死骸を運ぶ。マルチエンコ。僧侶とつゞいて退場する。）

イヷン　神樣のせゐだ。名譽の戰死だ！

（間。）

兵B　いつまでかうしてゐるんだらう。（ふるへる……間）かうやつてゐると、生れ故鄕が見える樣だ。ふう寒い。

早くけりがついて呉れりやいゝ。このまゝ靜になつて呉れりやいゝ、俺が生きてる中に――。

イワン　蟲のいゝ事を云つてやがらあ。

（間。）

兵B　戰がすんだら國へ歸るんだ。そしておふくろの顏を見たい。妹の顏を見たい。

アントン　貴樣の妹は別嬪か。

兵B　自慢するんぢやねえが別嬪でしてね。あいつは村のお醫者の息子と惚れ合つてゐたつけ、今頃はもう一緒になつて窓ぎはの椅子に腰かけてゐるのかも知れない――家の窓の所から森が見えたつけ――森の向うに敎會の屋根が――

（その時砲彈が破裂する。兵B、ガクリと崩れる樣に即死する。）

イワン　おや！　やられちまひやがつた。

アントン　運のない奴だな。おいイワン、日本軍の捕虜にならうぜ。

イワン　よし來た。今の中だ。見張りのゐねえ中だ。（武器をすてゝ白いハンカチを出す）

アントン　はふんだぞ。彈の下をくゞるんだぞ。うまく行けば極樂だ。

イワン　どつち道、命はねえんだ。

（二人、這ひ出して行く。）

――幕――

## 第三幕

明治三十八年一月一日の未明、ステツセル中將の館、その私室である。

幕開く――ステツセル中將一人窓によつてまだ暗い空を眺めながら深い考へに沈んでゐる。絶え間ない銃砲の響――時折の微な閃光――。煖爐の火は燃えしぶる。館の中はしんとしてゐる。やがて、靜かなノックの音。

ステツセル　誰だ。

夫人の聲　私でございます。

ステツセル　（動かず）おはひり。

（ステツセル夫人登場。）

ステツセル　もう起きたのか。

夫人　昨夜もあなたはお休みにならない樣でございましたね。

ステツセル　お前はよく眠れたか。

夫人　眠れませうか知ら。私はロシアを愛してゐます。（腰かける）それにあの小さなみなしご達が、ママ、ママつ

て呼ぶのですもの。――でも子供達はよく眠つてゐます。

ステッセル　可哀さうな子供達だ。

（間――一人の女兒が寢間着のまゝ目をこすりつゝこの室にはひつて來る。）

夫人　まあ、カーチヤ、どうしたの。もうお目がさめたの。

子供　ママは？

夫人　ママはすぐ歸つて來ますよ。こゝへおいで。（膝の上に抱いて接吻する）

ステッセル　誰の子供だね。

夫人　ヴヨルシニン少尉の子供です。――カーチヤお眠り。まだ夜は明けないよ。（子供は彈丸の破裂する音に おびえる）あれはお山の向うの大砲の音だよ。憎い日本兵を打つたまの響だよ。――お忘れでないカーチヤ。カーチヤはパパやママの仇をとるのだよ。――（子供は夫人の膝の上にうと〳〵とする）――私寢かして參ります。

ステッセル　（うなづく）

（夫人退場……間。ノックの音。）

ステッセル　おはひり。

（マルチエンコ、バラシヨフ登場。）

バラシヨフ　お早う。

ステッセル　これは御苦勞樣。

バラシヨフ　あなたの傷を見ようと思つてな。どうです。

ステッセル　有難うもういゝでせう。

（バラシヨフ、ステッセルの頭部の手當をしつゝ會話をつゞける。）

バラシヨフ　松樹山は敵のものになつたのですつて。

ステッセル　（うなづく）　望臺へも敵は蟻の樣に這ひ登つてゐるでせう。

マルチエンコ　本當に蟻の樣にしつゝこい奴等です。いくら殺しても殺しても這ひ上つてきます。この間も二十二名の敵兵が無謀にも日砲臺の壘壁によぢ登つて來たさうです。

バラシヨフ　驚いた奴等だ。――勿論戰死したらうね。

マルチエンコ　勿論です。皆つき殺したと報告がありました。一人の兵士はよぢ登つて來た奴の頭を銃でもつてなぐりつけたさうです。そしたら頭蓋骨が柘榴の樣に割れたと云つてをります。

バラシヨフ　（顏をしかめる）　どうもはや、虐殺のしあひだ。（ステッセルへ）　あなたの傷はもう大丈夫です。

（夫人登場。）

夫人　おや。バラシヨフ閣下、お早うございます。

バラシヨフ　奥さん御免下さい。

ステッセル　子供は眠つたのかね。

夫人　はい。

バラショフ　孤兒達ですか。

夫人　えゝ。ヴォルシニン少尉の奥さんの事など考へると本當に。(涙ぐむ)

バラショフ　戰爭がいけなかつたのです。私は初つから戰爭は嫌でしたよ。

夫人　病院の方はいかゞでございますの。私子供達の世話で參れないのでございますけれど。

バラショフ　衞生材料の缺乏で弱りぬいてゐますよ。なにしろ毎日々々三百と云ふ新しい患者が送られて來るのですからね。それに新しい食糧は無し――何かの方法でそれを得る樣にしなければ――それに奥さん、病院には開戰以來もう、事實六回病院と陣地の間を往復してゐる兵士がゐますよ。

マルチエンコ　運のいゝ奴ですね。

バラショフ　運のいゝ、ふむ。(淋しく笑ふ。ステッセルの傷の手當を終る)

ステッセル　有難う。

バラショフ　柘榴の樣に裂けた傷口が、紫色になほると又すぐ陣地へ送られて又傷いて――それでも死なずにゐるのだからね。いやはやむごたらしい責苦だ！

夫人　でも私は、あの可愛い子供達を殘して行つた不運な勇士達の面目をたゝせてやりたいと思ふのでございますよ。

バラショフ　ふむ、ふむ。――(ステッセルに)この要塞は守り通せるのですか。

ステッセル　とに角、戰つてゐるのは我々や參謀長ではなく兵士達なのだから。

夫人　どうなるのでせう。

マルチエンコ　私達の體にロシアの血の通つてゐる間は大丈夫でございますよ。

バラショフ　然し壞血病には弱りました。これ、私もこの通り――(齒ぐきの處を示す)

夫人　まあ。

バラショフ　私は御覽の通り醫者ですからね。私は若い時から大學で病理學を勉強したし――私は醫術を信じてゐましたよ。所がどうでせう。敵に包圍されて新らしい食物や材料が無くなると醫學も一種の空想ですよ。いやはや。醫術もつまり境遇によりけりですな。私は人間の病を救ひたい、又私の天職はそれだと信じてゐました。奥さん。所が私も一種の空想家にならにやなりませんですよ。――開城でも――

マルチエンコ　(遮る)バラショフ閣下、不吉な言葉はおつゝしみ下さい。こゝは神聖な陣中です。

パラショフ　なるほど、私が悪かつた。マルチエンコ中尉――（短い間）だが神聖な陣中では神聖な空想のみが守護神だと云ふのかね。私は二萬の傷いた同胞と、五千の非戰鬪員や婦人子供達の事を考へてゐるんだよ。私は同胞を愛してゐる。

マルチエンコ　私はロシア全體を愛してゐます。

パラショフ　私はだが、あへて二萬の傷いた同胞と數を限るよ。私の見る範圍でもな。然し私もつまり神聖な空想に禮拜してだまつて室の中で病理學の本でも讀み直さにやならないのかね。私は一個の醫者でありたいと希ふのだがね。

マルチエンコ　我々の目下考ふべき事は、祖國と云ふ事だけだと思ひます。

パラショフ　勿論。（目を圓くする）　私が祖國を愛さないとでも云ふのかね。病院や戰線で呻いてゐる人達が祖國を呼び故郷を呼ぶ聲を聞いて見給へ。そんな人々を愛さずに、祖國を愛する事が出來ようか知ら。

マルチエンコ　（激す）　何はともあれ、我々は戰つてゐます。我々はあの銃聲を聞いてゐます。我々は勝たなければなりません。

パラショフ　君等は軍人の名譽しか知らないのだ。

マルチエンコ　私はロシアの名譽を知つてゐます。私は一個の人間の長命術は學びませんが國家の長命術を學んでゐます。閣下が醫者である事を誇りとなさる樣に、私は國家にとつて軍人である事を誇りと考へます。

夫人　（止めるが如く）　マルチエンコ中尉！

マルチエンコ　はい。（默す）

パラショフ　さうだ。私は一個の人間の命を大切にする事を學んだ醫者なのだからな。私はたゞ一つの小い人間の命にも宇宙の意志を見ようとしてゐたのだからな。――ではさ樣なら、奧さん、御免下さい。私は病院へ行かなくては――

ステッセル　御苦勞樣。

夫人　もうすぐ夜が明けるでせうね。

（パラショフ退場。マルチエンコ、之を送つて退場。夫人、それを見送つて戸を閉す。）

夫人　ちよつとでもお休みになりませんか。皆はあなたを信頼してゐます。お體が大切ですわ。あなたのお體は旅順全體なんです。

ステッセル　（うなづく）　うむ。だがもう夜が明けるだらう。（窓による）　お前も二人の云ひ合つてゐた事を聞いたか。

夫人　えゝ。（間）　でも私は旅順を思つてゐるのでございますよ。ロシア人の事を思つてゐるのでございますよ。

私は私達がかうして旅順とロシア人とを守つて戰つてゐるのは正しい事だと思つてゐます。

ステッセル　ふむ、ふむ。（間）だが戰はない方が正しいとは思はないか。

夫人　（笑ふ）まあ、そんな事は出來ませんわ。それこそ空想ですわ。向うから仕かけて來たぢやありませんか。私はあの最初の日の事を今でもはつきりと覺えてゐますわ。敵がゐる限り戰はないなんて云ふ事は出來ませんわ。

ステッセル　さうだ。お前の云ふ通りだ。――だが人間は一體いつまでお互に敵同士でゐなくちやならないのだらう。いつまで環境が人間をこきつかはなくちやならないんだ！　私の短い過去に於てさへ、三度ももう戰爭に出會してゐる。だが私は最初のトルコとの戰爭の時などは若い參謀として充分感激に醉つてゐた。あの時も私は負傷したんだ。北淸事變の時も、今度も私は負傷した。今度こそ私は魂の底の底まで負傷してしまつた。

夫人　魂の底まで!?

ステッセル　私はみぢめな人間達の事を思ふよ。境遇と云ふものゝために恐ろしい苦役を負はされてうめいてゐる人達の事を思ふよ。

夫人　私にはそんな事は分りません。ですけれども私は旅順を悲慘な境遇に落したくはございませんよ。

（空が次第に白んで來る。）

ステッセル　空が白んで來た。山の上で煙が凍りつく樣だ。私達がこんなに戰つてゐるのに知らん顏をして夜があけて來る。

夫人　まあ、兵士達が勇ましく戰つてゐるのでせうね。あの煙!!

ステッセル　あの雲を見て御覽。何と云ふ美しい單純な光だらう。――地上にもあんな風な、深い單一な生活がなくちやならない筈だ。

夫人　あなたは今日は軍人でない樣な事をおつしやいますね。

ステッセル　私は軍人ばかりぢやゐられない。（その邊を歩く）私は人間から世界へ生みつけられた筈だ。だがそこに國家があつたんだ。國家は私を人間から奪ひとつたんだ。

夫人　（窓から山の方を見）兵士達があんなに勇しく戰つてゐるのですもの。

ステッセル　山の上で寒さと戰つてゐるのだ。絕望と戰つてゐるのだ。自分の本心と戰つてゐるのだ。（窓の所で立ち止つて山の方を見る）自分の運命に對する怒りを敵愾心にしてゐるのだ。

（ノックの音。）
ステッセル　おはひり。
（マルチエンコ登場。）
マルチエンコ　閣下、東鷄冠山は危險にせまつて居ります。仕方のない奴等です。
ステッセル　ふむ。（考へつゝその邊を歩む）
夫人　どうなるのです。マルチエンコ中尉。
マルチエンコ　私達は——
ステッセル　マルチエンコ中尉。君はこの城塞を守り通さうと思ふか。
マルチエンコ（直に）　勿論です。
ステッセル　どんな犧牲を拂つてもか。
マルチエンコ　それは勿論の事です。大きな光榮の前に犧牲は何でもありません。
ステッセル　大きな光榮——ふむ、ふむ。
マルチエンコ　閣下はそれが御不審なのですか。ロシアの軍人をお疑ひになるのですか。
ステッセル　無駄な犧牲になるまいか。
マルチエンコ　無駄ですつて？　なぜそんな害があるでせう。又今の作戰の上にそんな事を考へる必要があるでせうか。我々はロシアの歴史のために何事でもあへてする勇氣をもつてゐます。それを名譽と信じます。

ステッセル　さう思はない兵士がゐるとは思はないか。
マルチエンコ　閣下はなぜ兵士の一人々々をお考へになるのですか。兵士は我々の命令通りに動けばいゝのです。
ステッセル　私は人間を無視する事が出來なくなつたのだ。我々は逃亡兵を銃殺したね。
マルチエンコ　えゝ、致しました、又すべきです。
ステッセル　君はあいつ等の最後の叫聲を聞いたね。
マルチエンコ　えゝ。
ステッセル　君は戰線の悲鳴や苦悶の泣き聲を聞いたね。
マルチエンコ　ですが、今更らなぜそれを我々は氣にする必要があるでせう。閣下、我々の氣にしなければならないのは兵士の悲鳴だの死骸ではなく、大きな國家の歴史だと思ひます。
ステッセル　君は國家の歴史と光榮は多くの國民の悲鳴の上に築かれなくちやならないと云ふのかね。
マルチエンコ　では閣下は犧牲を惜しむとでもおつしやるのですか。
ステッセル（重く）　さうだ。
マルチエンコ　閣下は少しお休みにならなくちやいけないと思ひます。それは可笑しい事です。（笑ふ）
ステッセル　私は場合を切りぬけようとあせつてゐる我々を滑稽に思ふよ。

夫人　あなた。私達はそんな議論なぞしてる時ぢやないと思ひますわ。

マルチエンコ　さうです。バルチック艦隊が來さへすればもういゝのですから。

（間。）

ステツセル　（一人言の如く）罪だ！

マルチエンコ　（激して叫ぶ）罪ですつて。何の罪でせう閣下、國家は絶對です。

ステツセル　君は虐殺が罪でないと云ふのか。

マルチエンコ　ロシアの歴史と名譽を、どうしろとおつしやるのです。我々は罪を恐れるよりも國家の屈辱を恐るべきです。我々の名譽はどうなるのです。

ステツセル　多くの兵士達の命よりも我々の名譽の方が大切だと云ふのか。

マルチエンコ　我々の責任の事です。

ステツセル　軍人としてのか、人間としてのか。

マルチエンコ　我々は空に生れた神の臣下ではありません。ロシアに生れたツアールの臣下です。ロシアの軍人です。我々は今までツアールの名の下に閣下を信頼してゐました。

（やゝ長き間。）

ステツセル　レース參謀長を呼んで呉れ。

マルチエンコ　どうなさるのです。

ステツセル　私は決する事がある。

夫人　あなたはロシア人をお忘れにはなりませんね。私はロシアの女ですよ。私はロシアを賣る樣な事は出來ませんよ。

マルチエンコ　閣下、もうしばらくです。

夫人　ロシアに勝利のあります樣に――（夫の前にひざまづく）

ステツセル　私は人間に勝利のある樣に思ふ。レース大佐を呼んで呉れ。

マルチエンコ　どうなさるのです。

ステツセル　（嚴然と）マルチエンコ中尉、私は要塞司令官だ。私は開城を決する。

夫人　開城!?

マルチエンコ　（同時に）開城!?　不服です。

ステツセル　この上慘な市街戰を見ようと云ふのか。

マルチエンコ　閣下は卑怯です。

夫人　あなた。

マルチエンコ　ロシアに叛逆なさるのですか。

夫人　ロシアの運命を考へて下さい。（泣く）

マルチエンコ　降服は軍人にとつて此の上もない屈辱ぢやありませんか。私は不服です。閣下がもしその說を主張

なさるなら——（ピストルを出す）

夫人　まあ、中尉、待つて——（その手をとらへる）

ステッセル　マルチエンコ中尉！　敵に降服するのは人間の恥辱にならない。

マルチエンコ　恥辱でないで何でせう！

ステッセル　今の我々の降服は救世主の屈辱だ。敵に降服するのは決して人間の屈辱にはならない。空想に屈從して人間同士虐殺し合ふこそ人間の恥だ。人間の上に正義はたゞ一つしかない。

夫人　でもあなた。ツアールの怒りを思つて下さい。

ステッセル　それは私一個の命に關する事だ。

マルチエンコ　（ピストルを落して落涙する）お終ひです。

ステッセル　レース大佐を呼べ。

マルチエンコ　私は服しません。

ステッセル　私は司令官だ。

マルチエンコ　私をお裁き下さい。

（間。）

ステッセル　（戸に行き）　レース大佐。レース大佐。

聲　はい。

夫人　降服するのですか。捕虜になるのですか。

ステッセル　（別の事を考へる樣に）兵卒は救はれるのだ。

（レース大佐登場。）

レース　お呼びですか。

ステッセル　（間をおいて）　旅順要塞司令官は日本軍に開城を申込む。

レース　開城!?（驚愕する）

ステッセル　この上人命をそこねる事は不必要だと思ふ。

レース　はい。（頭を下げる）

マルチエンコ　終りです。八ケ月の苦心は皆無駄になります。せめてバルチック艦隊の來るまで——（涙をふく）

夫人　私達はどうなるのです。

ステッセル　ロシアへ歸るのだ。裸になつて生れた土地へ歸るのだ。牢獄——そこへでもいゝ。（窓に近づく）

夫人　（椅子にもたれてすゝり泣く）

ステッセル　夜が明けるのだ。私は太陽の啓示を見た樣な氣がする。——人類の祝福をうける樣な氣がする。

——幕——

# 借りた室（三幕）

人

小澤進　慶大生（二四）
杉本省三　同（二五）
黒田正彦　同　子爵の息（二七）
黒田玲子　その妹（二〇）
野田（五七）
花田葉子（二五）
その母（五五）
木村しげ子（一七）
山下京子　タイピスト（一九）

所

東京郊外なる中流家庭の洋室

時

現代、學生の第三學期

## 第一幕

贅澤ではないが感じのいゝ洋室。庭へ出るのと隣りへ通ずるのと扉が二つ。それから窓。そこから氣もちよい郊外の外景が見られる。二月初めの晝。小澤が引つ越して來たばかりである。彼は友人の杉本と一所に室内を方づけてゐる。

杉本　全くだよ、進ちやん。君は運のいゝ男だ。こんな室にありつくなんてさ。

小澤　たまには僕にも幸福が來なくちや、やり切れない。然しやつと安心した。しげちやんとこの小母さんに退去命令をもらつた時ばかりは僕は卒業論文の出來かけをかかへてどうしようかと思つたね。この寒空に室を探して歩くのはまつぴらだからね。こゝこそ僕の最後の根據だ。僕は勉強する。

杉本　君は僕に感謝しなくちやいけないよ。

小澤　大きにね。だけど君にはあれ位の助力は當然提供しなければならない義務があるのさ。初まりつて云へば君等が僕の所をいゝ遊び場かなんぞと心得て、毎晩々々二階へ上り込んで歌つたり騒いだり、罪もないしげちやんにふざけたりするもんだからいけないんだ。君等のバレーがすつかり小母さんを怒らせちやつたんだ。

杉本　さう云ふ譯には譯だね。然し僕はいゝ氣持だつた。

小澤　僕の追ひ出されたのがかい。

杉木　いゝや第一相互の七階でさ。

小澤　ふん。君の七階の歡喜が僕の二階の破產を產んだのさ。

杉木　しげちやんは どうして ゐたい。さぞ泣いて ゐたらう。

小澤　知るもんか。あれつきり小母さんがやかましいんだ。

（間。）

杉木　然し、しげちやんは君を思つてるらしいぞ。君の失戀にとても同情してるんだから。

小澤　戀の話は止してもらはう。あの子にそんな事なんぞあるものか。君の口には僕は、もうだまされやしない。君の女性觀なんぞあてにならないからな。おかげで僕は散々な目に會つた。苦い經驗だつたよ。

杉木　前の奴はあれは初めつから「わる」だつたからね。あんな女を本氣に思ひ込んだ君が不運だつたのさ。だけどあんな女一人位逃げたつて屁でもないぢやないか。

小澤　所が僕は君みたいに屁でもなく出來ないんだ。僕は人間同士の恐ろしさを痛感してしまつた。僕は女が怖い。僕はもう女には當らずさはらずだ。ひどい目に會ふからな。

杉木　だが、なんぼ君でも、こゝのには當らずさはらずぢやすむまいよ。君の「運命の憂鬱」が又初まるぜ。

小澤　僕は目の保養をしながら最後の勉强をする。

（隣室からの扉にノックの音。）

杉木　（小さい聲で）來たぜ。

（二人かたくなる。ノックの音。）

葉子の聲　はひつてようございますか。

小澤　どうぞ。

（葉子、茶をもつて登場。）

葉子　もうお片づきになりまして。

小澤　えゝ、大體片づきました。

葉子　お茶を一つ召し上れな。（その邊を見て）本當に大變でしたわね。そしてピアノはどこへお飾りになりますの。

小澤　（杉木と顏をちよつと見合せて）ピアノはこの邊に飾りたいと思ひます。

葉子　まあ。ようございますわね。どんなに美しくなるでせう。でもこのお室にこの電燈の傘は似合ひませんわね。（笑ふ）私何か考へて上げますわ。實を申しますと私今、ピアノを稽古して居りますものですから。

小澤　あゝ、さうでいらつしやいますか。

葉子　では又、御用がありましたらお呼び下さいまし。

小澤　えゝ、有難うございます。

葉子　御免遊ばせ。

（葉子退場。）

小澤　おい君。省ちやん。

杉本　え。

小澤　どうしよう。

杉本　かまふもんか。

小澤　いけないよ。君の知慧はいつも機械的でいけない。人間的ぢやないんだもの。僕は又ヂレンマにおち入りさうだ。

杉本　だつて約束を違へたんぢやないからいゝよ。これだつてピアノだ。（箱を指す）

小澤　そりや詭辯だ。僕はたまらなくなつた。僕は人間の心を弄んだ様な氣がする。その上君、せつかくありついた室から追ひ出される事になつたら。

杉本　君の末梢神經は君の禍だよ。向うを笑はせちまやいいんだ。それでいけなかつたら仕方がない又探さう。

小澤　君は軍人の様に憂ひげがなさすぎる。僕はこの室から出たくない。僕はこの室を氣に入つてゐる。何とかしようぢやないか。

杉本　うん。（考へながらその邊を歩く）

（間。）

杉本　ぢやかうしよう。

小澤　どうするんだい。

杉本　黒田君の所へ行くのさ。

小澤　君の考へは戰術的だ。外交的に何とか出來ないだらうかね。

杉本　君は臆病でいけない。もつと大膽になるんだ。君こそ一年志願の入營延期兵ぢやないか。黒田の殿様だつて、君が小母さんの所から追はれた責任の一つを、もたなくちやならない人間なんだ。あの晩キネマのタイピストの京子さんを連れて來たのは殿様だ。

小澤　大丈夫かね。

杉本　かまふもんか。子爵閣下はリユーマチで逼塞中だらう。

小澤　うん。だけど黒田君も今日こゝへ來る筈なんだが行きちがひになりはしないか。

杉本　ぢや君は葉子さんへさう云つて來たまへ。黒田つて云ふ子爵の息子が來たら待たせて吳れつて。

小澤　うん。うん。ぢや云つてかう。

（小澤退場……間……やがて登場。）

小澤　云つて來た。

杉本　ぢや行かう。大急ぎだ。

（二人庭の方へ退場……間……葉子とその母登場。）

母　ピアノはまだ來ないのかい。

葉子　えゝさうよ、大きい物なんですもの急に運べやしな

いわ。でも本當にいゝ方が、來て下すつたのね。
母　でもお前氣をつけなくちやいけないよ。
葉子　まだそんた事をおつしやるの、大丈夫よ、あの方は不良ぢやない事よ。おどく〲した所があつて。慶應のお坊ちやまよ。
母　それだといゝがね。(間)どこへいらつしやつたのだい、まだとり散らかしたまゝで。
葉子　ピアノの事でお友達に話す事があるんだつて。
母　さうかい、さうかい。
（母退場、葉子本棚の前に立つて中から佛語の本をとり出して見る。母再び登場。）
母　葉ちやん。こんな方が今玄關にいらつしやつたよ。（名刺を出す）小澤がもう越しましたかつて。
葉子　（本を卓の上において名刺を見）黑田正彥つて、この方はね、お母さん、華族樣よ。
母　へえ。小澤さんのお友達かい。
葉子　さうですつて。庭からこつちへ御廻りになる樣におつしやるといゝわ。
母　ぢや、さう申し上げようね。
（母退場。やがて庭の方の扉から黑田登場。）
黑田　ごめん下さい。
葉子　どうぞお上り下さい。小澤さんが今あなた樣がいらつしやつたら、お待たせして吳れつていらつしやいました。
黑田　どこへ行きました。
葉子　何でもピアノを運ぶ事についてお話しがあるんだつて。
黑田　ピアノですつて？
葉子　えゝ、ピアノを。
黑田　小澤がピアノを運ぶんですか。
葉子　えゝ。それがどうかなさいまして。
黑田　（急にうなづき）あゝ、分りました、分りました。
（母、茶を持つて登場。）
母　ごめん下さい。
黑田　さき程は失禮しました。時々遊びに來ますからよろしく。
母　えゝ、もつたいない。
黑田　（笑ふ）小母さん。今時そんな云ひ方をするもんぢやありませんよ。
母　まあ。（笑ふ）
（杉本、小澤、ハアハア息を切らして登場。）
小澤　やあ、驚いた。
杉本　やあ、殿樣。來てたのか。
母　あらいやだ、殿樣だつて。（笑ふ）

黑田　何て云ふ息づかひだい。

小澤　走つたよ。省ちやんにはかなはない。

葉子　私失禮致します。

黑田　いや。

母　どうぞ御ゆつくり。

黑田　えゝ、ありがたう。

（母、葉子退場。）

小澤　君はどつちを廻つて來たんだい。君のところまで行つたんだよ。

黑田　よそから來たんだ。どうしたつて云ふのだい。

杉本　ピアノを借りに行つたのさ。

黑田　いやに皆でピアノ、ピアノつて云ふぢやないか。僕は何も知らなかつたから、さつき危くぼろを出す所だつた。

小澤　お願ひだから貸して呉れ給へ。僕が論文を書いてしまふまで、たつた二ケ月。

黑田　だつて玲子が毎日練習してるんだ。

杉本　玲子さんなら毎日ここへよこしたつていいぢやないか。

黑田　（小澤を指して）　アドニスは危いからね。

小澤　そんな冗談でなくさ。僕の焦躁を考へて呉れ給へ。僕は誓ふよ。玲子さんと決して戀をしない事を。いや誰にだつて僕は出來ないんだ。僕には苦い經驗がある。

黑田　然し、ここのはすばらしいな。

杉本　そんな事は後に廻して相談しよう。

黑田　一體何だい。

小澤　ね、君。僕は氣が小さいんだよ。僕は僕を信賴して呉れる人の一人でもの信賴を裏切りたくはないんだ。あの人達はもう冗談の餘地のないほど信用してるんだからそれを裏切るのは罪だよ。それにここを追ひ出されて見給へ。一生働いたつて僕なんぞはこんな室に住めつこないんだ。君等の樣な貴族の長男は、學校を出たつていくらもそんな室――いやもつと上等な室に住めるんぢやないか。僕のそんな生活を考へて見て呉れ給へ。そしてかりそめのこんな住家に、これほどまで憧憬し執着してゐる僕の心持ちを分つて呉れたまへ。そのかはり僕はこの室を折々君と君の光榮あるタイピストである所の京子さんのためにスペアする事は惜しまないから。

黑田　それで。

杉本　で、とにかくね、君も進ちやんが、しげちやんの小母さんとこを追はれた原因を作つたのだから、今度は進ちやんがうまく室にをさまる樣に助けるのが當然の義務だつて云ふのさ。

黑田　そりやさうだ。それで。

杉本　殿様は分りが悪いな。それでね。それで君の光榮あるリユーマチのペールもメールも避寒中で、花が咲くまでは東京に歸らないだらう。どうせ用のない殿様だ。
黒田　あゝ。
杉本　だから玲子さんさへ「うん」と云や、ピアノを持ち出したつてかまはないんだらう。
黒田　そりやさうさ。
杉本　それでいい。さ行かう。
黒田　おい。だけどぶち込むんぢやないね。
杉本　冗談いつてら。君はまだわけを知らないのかい。新聞を見なかつたのかい。
黒田　あゝ。
杉本　ぢや僕が話さう。わけはかうなんだ。進ちやんが追ひ出されたらう。いい室が欲しいだらう。だからピアノ持參だが室を借りたいつて「時事」に廣告を出したのさ。だから幸にこんないい室が授かつたんだ。さもなきやこんな室がどうして見つかるものか。
黒田　なるほどね。そして進ちやんがその手段を後悔してゐるのだね。
杉本　分つたらう。とにかく一所に君の所へ行つて玲子さんに話さう。
黒田　あゝ。

小澤　すまないけれど君。たのむよ。
杉本　ぢや行かう。黒田君。
（杉本、黒田退場。小澤一人で物を片つけはじめる。隣室からノツク。）
小澤　はい。
葉子　（登場）あらお一人？
小澤　えゝ。
葉子　私この御本を拜借したいと思つて。
小澤　あゝ。本ですか。
葉子　えゝ。「リルリ」。
小澤　あなたは佛語をおやりになるのですか。
葉子　Non monsieur pas encore, pourquoi me faites-vous cette question?（笑ふ）
小澤　お見そこね申しました。あやまります。（おじぎをする。）
葉子　あらいやですわ。それよりか少しお手つだひ致しませう。
小澤　えゝ、もう結構です。
葉子　だつてこんなものを置いちや駄目ぢやありませんか。（と一つの箱を取り上げる。）
小澤　（あわてゝ）それは。（と取り返さうとする時蓋が落ちる。）

葉子　あら、これあなあに。（のぞき込む。）

小澤　面目次第もありません。

葉子　ピアノ？

小葉　（力なく）えゝ。

葉子　あら本當だわ。卓上ピアノね。（それを卓上に置く）可愛いこと。

小澤　…………

（葉子、しよげ切つてゐる小澤を見て急に可笑しくなり聲を立てゝ笑ひ出す。）

葉子　まあ、小澤さん。ピアノを御持參になつたのね。袂を顏にあてゝ笑ひながら去りかける。）

小澤　葉子さん。ちよつとお待ち下さい。ちよつと待つて下さい。（哀訴する樣に）お話があります。J'ai quelque chose à vous dire! Voulez-vous me rendre un service!

葉子　（笑ひつゝ）Que désirez-vous?……

小澤　僕は辯解しなくてはすまないのです。まあ、お掛け下さい。僕は決して嘘をつくつもりではなかつたのです。

葉子　（からかふ樣に）えゝ、決して嘘をおつきにならないわ。新聞で拜見した通りピアノ御持參でお越しになつたのですもの。

小澤　あなたは私を卑しい人間だとお思ひになるかも知れません。不良少年だと見られても仕方のない立場に僕はゐます。けれども僕は決してあなた方のお心を弄ぶつもりではなかつたのです。たゞ室を探すのに夢中だつたのです、そして私は何の氣なしに友達の氣まぐれを應用してしまつたのです。僕はほんの氣まぐれがこんな結果になると思ひませんでした。氣まぐれが眞實にぶつつかつたのです。僕は今眞面目になつてそして苦しんでゐます。僕は人の信頼を裏切れないんです。僕はピアノを黒田君から借りてここに置く事にしましたから追ひ出さないで下さい。僕を追ひ出さないで下さい。ここのお室で僕に卒業論文を書かせて下さい。（ひざまづく。）

葉子　まあ小澤さん。

小澤　でも考へて下さい。小鳥や、小さなけだものでさへ自分の巢は自分の氣に入つた樣に作るんです。それだのに人間ばかりは、人間の次男ばかりは學校を出てしまへば氣に入つた巢なんか、夢に見ながら働かなくちやならないんです。あなたは啄木を御存知でせう。あの不仕合せな詩人の啄木をね。あの人だつてさうだつたんです。自分の住みたい住家を夢に見ながら死んでしまつたんです。……僕はこのお室が本當に氣に入りました。

葉子　そんなにお氣に召しまして？

小澤　えゝ。だつて僕はこんな室に住む事などは僕の希望

にすぎないとあきらめてゐました。所がどうでせう。それが私の前に可能性をもつた現實となつて現れてゐるのです。これを失つたら私の一つの理想は又永遠に亡びてしまひます。ですから私を追ひ出さないで下さい。

葉子　えゝ、えゝ、よく分りました。よござんすわ。そんなにお氣に召したのなら私追ひ出しは致しませんわ。大きなお坊ちやま。

小澤　ぢや、おいて下さいますか。

葉子　えゝ、えゝ、これも何かの御縁なんですわ。どうせ四月までは室が空いてるんですからあなたに御勉强さへ出來ればね。

小澤　僕は感謝します。

（杉本登場。）

杉本　おい進ちやん。（この樣を見て、バツが惡さうに）これは失禮。

葉子　まあ、あわてゝどうなすつたのです。そして黑田さんは。

杉本　あとから歩いて來ます。

葉子　まあ、さう。御苦勞樣ね。（笑ふ）　ぢやこの本は拜借さして下さいましね。

小澤　えゝ。

（葉子退場。）

杉本　おい進ちやん。少し早すぎるぢやないか。もう出來ちまつたのかい。

小澤　ちがふよ。違ふよ。これを見たまへ。（卓上のピアノを指す。）

杉本　バレたのか。（笑ふ）　黑田の方も成功したよ。玲子さんはかへつて喜んでるのさ。毎日外出が出來るつて。

（黑田、しげ子登場。しげ子は桃割れをゆつてゐる。）

黑田　省ちやん、なんだつて君は駈け出すんだい。

杉本　寒いからさ。雪になりさうだ。

小澤　君、ピアノは貸して吳れるね。

黑田　あゝ、あした運ばせる。

小澤　僕は感謝する、本當に。

しげ子　小澤さん今日は。

小澤　やあいらつしやい。小母さんはまだ怒つてるかい。

しげ子　いいえ。

小澤　さうかい。

しげ子　えゝ。でもここはいいお室ね。あのね。あたしね。お母さんにそ云つて小澤さんがもう一度卒業するまで家に來て頂ける樣にしたんですけど。

小澤　それはすまなかつたね。

しげ子　だつてこれぢやお歸りになりやしないわね。

杉本　しげちやん。泣きついてせがむんだよ。さうすりや

進ちやんはきつと歸るさ。
しげ子　いやな杉本さん。チヨコレートを上げないことよ。
杉本　これは大變だ。あやまります。
小澤　おや小母さんは歸つてもいいつて云ふのかい。
しげ子　えゝ、
小澤　なにしろ二年もゐたのだからね。
しげ子　いいわ、いいわ。あたしのとこの二階よりこつちの方がづつといいわ。こつちにいらつしやい。あたし又遊びに來ますから。……（間）……今日は歸ります。
杉本　もう歸るの。
しげ子　えゝ、さ樣なら。
小澤　小母さんによろしくね。その中に仲なほりに伺ひますつて。
しげ子　えゝ。さ樣なら。
（しげ子退場。）
杉本　おい進ちやん、君は幸福者だ。だがあんな娘つこを惱ますのは罪だよ。
小澤　大丈夫。しげちやんと僕は決して戀なんぞしないんだ。だからしげちやんだけが僕のただ一人の怖くない女だ。
（雪がチラ／＼と降り出すのが窓越しに見える。）
黑田　雪になつた。
小澤　でも家が出來てからでよかつた。

――幕――

# 第二幕

第一幕と同じ室。學生らしい室飾りと感じのいい亂雜さ。ピアノ。ストーヴ。電燈には葉子が作つて與れた飾りがしてある。大きなカレンダーは日曜を示してゐる。二月半ばすぎの夕暮近くである。

葉子、ピアノを練習し、小澤それをうつとりと聞いてゐる。室の中を黑田が歩き廻つてゐる。

小澤　君、どうしたつて云ふのだい。歩いてばかりゐてさ。
黑田　だつてもう來さうなものぢやないか。
小澤　さう焦れるものぢやないよ。きつと來る。誠意がありさへすればよ。
黑田　だがあの人は忙がしいのだからね。
小澤　日曜でもかい。
黑田　あゝ。（時計を見る）もう二十分も過ぎてるよ。（扉を開いて見て今度は腰を下す。）
小澤　ね君、話しをして待つてゐようぢやないか。

黒田　何の話しだい。
小澤　さうさね。さしあたり京子さんの話しでもしようよ。
黒田　京子さんのどんな話？
小澤　つまり君は京子さんをどうするつもりだかつて云ふ事をね。度々こんな風にして僕の室で會つてゐてつまりがさ。
黒田　つまり京子さんを僕は……君の口調をまねると痛感し盡すんだね。味ひつくすのさ。
小澤　と云ふと。
黒田　ま、考へ給へ。銀座の街だよ。夕方でね。人が……皆働いてゐる人なんだよ。そんな人々が歸つて行く頃の混雜と色彩を考へて見たまへ。
小澤　ふん。それで。
黒田　そこへ京子さんが人にもまれながら出て來るんだ。……一體僕は遊んでゐる人間を嫌ひさ。家の玲子みたいにね。退屈で倦怠し切つてゐる女位醜いものはありやしない。僕はだから京子さんが好きさ。あの人はいつでも緊張してゐるんだ。そして僕に會ふといつでも一番先に云ふ言葉はかうなんだ。「あたしまあ本當につかれてしまつたこと。あたしひまが欲しいわ」つてね。そして「U・S」かどつかで二人でコーヒーでもすゝるとやつとほつと吐息をするんだ。そんな事は口癖だつていい。「何て退屈なんでせう」つて言ふ言葉よりか、「私ひまが欲しいわ。本當に疲れてしまつた」つて云ふ言葉の方が幾千倍美しいか知れやしない。
葉子　（ピアノを止めて）何のお話？
小澤　京子さんのお話です。
葉子　私も伺ひたいわ。いけないこと。
黒田　かまひません。
小澤　それで。
黒田　それでね。僕達は散歩するんだ。
小澤　こんなに寒くつてもかい。
黒田　あゝ。君の室もいいけど、散歩してる方がづつといい。働く人達の戀はペーヴメントか公園でなくちや感じが出ないんだ。
葉子　まあ。感じで戀をなさるの。
黒田　えゝ。感じだの氣分をそつちのけにした戀なら犬だつて出來ますよ。
葉子　（笑ふ）それで？
黒田　それでね。僕等は歩くのです。話をしながらね。人生について話しながらね。
小澤　あの人はそんな話をすきなのかい。
黒田　あゝ。あの人は人生にまき込まれてゐるんだから

ね。

小澤　なるほど。そして……

黒田　それから別れるのさ。ね君考へて見たまへ。裏通りの小路なんだよ。暗い小路でね。やれ三味線の音と、チヤルメラの音が遠くで聞える樣な小路へ京子さんは消えて行くのさ。「辛い生活だわ、でもあたし働くわ。働いてさへゐればちつとも不安なんかないわ。おやすみなさい」つてね。

小澤　それで。

黒田　それだけさ。君にはこんな氣分が分らないのかい。

小澤　それで君も働かうと思ふのかい。

（ノックの音。）

黒田　（返事もしず）さ來た。（急に立上つてドアの方へ行く。）

葉子　ま驚いた。どうなすつたの。

小澤　京子さんが來たんです。

（黒田扉をあける。野田登場。）

野田　ごめん下さい。これは若樣、恐れ入りました。

黒田　何だ。お前か。

野田　（小澤へ）私は黒田家の家令でございますが、とんだお邪魔に出ました。

小澤　いいえ。

野田　（黒田へ）若樣。今日は御邸まで御歸りが願ひたうございます。

黒田　今日は日曜ぢやないか。

野田　はい。さ樣でございますが少々取り入つたお話がございますので。はい。

黒田　僕は用があるんだ、話ならここでして呉れ。

野田　いや。ここでは困る事でございます。ぜひ御歸りが願ひたうございます。

黒田　困つちまふな。（間）ぢや、ちよつとでいいかい。

野田　はい。

黒田　やり切れないな、日曜氣分がめちやめちやぢやないか。

野田　申しわけございません。

黒田　ぢや進ちやん。來たらさう云つて呉れない、先に行つて呉れつて。

小澤　どこへ。

黒田　さう云へば分る。

小澤　ぢや云つて置くよ。

黒田　たのむよ。本當に仕方がないな。葉子さん。さ樣なら。

葉子　さ樣なら。

（黒田退場。）

野田　どうも飛んだお邪魔を致しました。

（一足遅れて退場。）

葉子　黒田さんは怒られるんぢやないでせうか。

小澤　黒田君は年中あの家令と喧嘩ばつかりしてゐるんですよ。

葉子　だけどまあ、あなた方はこんなに遊んでばかりいらつしやつていいんでせうか。私この頃心配になり出しましたわ。論文はどう？

小澤　論文ですか。間に合ふでせう。これは卒業するために書くんですから。

葉子　まあ厭だ。

小澤　だつてさうぢやありませんか。卒業してしまへば、今僕の書いてゐる論文位、何の役にたつものですか。だけど遊ぶのは違ふんです。遊ぶのは人間を痛感するためなんです。社會へ出てしまへば僕等はもう、社會を痛感するだけなんですからね。せめてその時に乾からびて齒のたゝない、人間のミイラになりたくはないと思つてね。論文に書いた理屈なんぞ社會へ出たら一番先きにミイラになつてしまふでせう。僕等の理論をあてにして與れる世の中なんぞあるものですか。おまけに少しばかり本氣に議論でももち出さうものなら貧乏するか牢屋の中へぶち込まれるにきまつてるんです。

葉子　だけどどうもあなたの調子が何かにつけて絶望的でいけませんわ。

小澤　だつて僕の希望なんぞ何になるものですか。僕は天才ではありません。僕は學校を出るや否や無資產になるんです。僕は次男です。そして兵隊にとられてゐるんです。あの無智な、威張りたがり屋の、憂ひげのない人間の仲間にはひらなくちやならないんです。ね。葉子さん。僕は爭鬪ほど厭なものはありません。だのに僕は僕の理想を自分で裏切る役をしなくちやいけないんです。考へて御覧なさい。頭の中で爭鬪はいけない。正義とは國家を超越したものでなければならない。人間は平等でなければならない等と考へながら銃をもつて人をうつ稽古をしたり、國家の干城である事を誇つたり、絶對的な階級生活をしなければならない人間の姿を考へて見て下さい。それは滑稽と悲慘との極みです。人間が塀を作らなければ生活が出來ない、人を殺す事や人の裏をかく事を習はなくちや國家が建たない。國家的な正義と云ふ名の下に人間の正義を汚さなければ生きられない等と云ふ事は不思議な事ぢやないでせうか。小學校の先生がかう敎へます。「皆さん、皆さんは喧嘩をしてはいけません。敗けるが勝ちです」つてね。あなたもお聞きになつたでせ

う。そしてその後で何と云ふかと思ふと「皆さんは他日立派な軍人となつて一旦緩急ある場合は國のために盡さねばなりません」と何喰はぬ顔で教へてゐます。ぢやなぜ「おなかの一杯な時は盗みはいけません。たゞし腹がへつて死にさうな場合は盗んだつてかまひません」つて教へないのです。

葉子　だつてそりや仕方がないわ。戰なんて云ふ物は向ふから仕掛けて來ないものとは限らないんですもの。

小澤　だからです。理想に何の價値があるものですかつて云ふのです。正義だ。道徳だつて云つたつて皆こんな風な條件附きなんです。皆方便なんです。だから僕はそんな物を信じやしません。

葉子　あなたは學問や努力つて云ふ物も信じなさらないのですか。

小澤　僕は學問を尊びます。ですけれどもあらゆる人が皆高い程度までしたんでなくつちや、學問はつまり學問に過ぎないんですよ。よござんすか。僕は爭ひは嫌ひです。國家の正義のために人間の正義を汚す事をいやしみます。だから僕が軍人を止め國家を止める事を努力し力行したらどうでせう。僕は牢屋へぶち込まれるばかりです。僕はそんな努力は眞平です。けれど生きる事には僕は努力します。そして「今」を痛切に生きたいと思つてゐます。然しこんな「たい」と云ふ事等はつまり理想で僕はこの通り淋しいんです。では僕の生はなんでせう。そんな事は云はるべき事ぢやないんです。痛感し得るだけの事なんです。

（間。）

葉子　ね。小澤さん……

小澤　え。

（杉本、京子登場。）

杉本　や、今日は。

葉子　あら、いらつしやい。

京子　今日は、又御邪魔に出ました。

杉本　そこの所で一所になつてね。黒田君は？

小澤　家令が來てひつぱつて行つたよ。

京子　ぢやお歸りになりましたのね。あたし忙しかつたのですもの。御休みで御天氣でせう。あたしお洗濯しましたのよ。（笑ふ）女の用事つてこまこまして本當に厭ですわ。それであたし遲くなつちまひましたの。

小澤　でね。あなたへ先に行つて下さいつて云つて行きましたよ。

京子　あらさうですか。どうもすみません。ぢやあたし、「U・S」にゐますから、いらつしつたら、さうおつしやつて下さいましね。本當にあたしにもだまつて遊べるひ

まがあつたらね。
杉本　あなたは歸るんですか。
京子　えゝ皆さん、さ樣なら。
小澤　ぢや來たらさう云ひます。
京子　どうぞ。
葉子　左樣なら。
（京子退場。）
杉本　（小澤をのぞき込み）どうしたんだい。
小澤　痛感しちまつたのさ。
葉子　小澤さんはね。さつきから悲觀してる所なんです。
（笑ふ。）
杉本　進ちやんの病氣なんです。進ちやんは色々な人に好かれるくせに淋しがり屋なんです。
小澤　それがいけないんだよ。皆で僕を氣輕な面白い人間だと云つて遊んで呉れる。僕はだから何をした所でつまり面白い人間に過ぎないんだ。その他の何でもないんだ。
杉本　君は臆病でいけない。快活に笑つてしまへ。笑つてのけるさ。
小澤　そりや僕だつて快活にはなれるよ。どんな女だつて男の前ぢや、はにかめる程度にね、だがそれ以上ぢやないんだ。君等は運命の淋しさつて云ふものや果實のない愛つてものがどんなものだか知らないんだ。
杉本　君。運命は淋しくつて冷酷なものにきまつてるんだ。それに勝つのは笑ひがあるばかりだ。笑つてのけるのさ。そんなものに感激して ふさぎ込む奴は あるものか。愛したら奪つてやれ。魂を奪つてやれ。
小澤　僕は君の樣には悟り切れないんだ。人間は人間の魂を奪へない。愛した所で奪へないんだ。そこに運命の憂鬱がある。
葉子　私は小澤さんの憂鬱が好きよ。
小澤　（笑ふ）仕合せな憂鬱の奴め!!
（ノックの音。）
小澤　はい。
（玲子登場。）
玲子　私よ。あら皆さん。
小澤　玲子さんですか。今日は遲いんですね。
玲子　えゝ、野田に云はれちまつたんです。
葉子　お兄樣も?
玲子　えゝ。盛に意見を云はれて閉口してゐますわ。野田は私達の外出を止めて、忠臣義士のつもりでゐるのよ。
（笑ふ）だから私そつとぬけ出して來たんです。
杉本　一體どうしたつて云ふんです。
玲子　何ね、ピアノをもち出した事なんですの。（笑ふ）

葉子　あらいやだ。小澤さん、返してお上げなさいよ。

小澤　えゝ。……

玲子　いいえ、いいえ、そんな事何でもない事よ。ピアノ位、私差し上げたつていい事よ。

杉本　かまはない貰つちまへ。

小澤　いやそんな事は出來ない。

葉子　あの杉本さん。私ちよつと買物に行きたいんですけど一所に行つて下さいませんか。

杉本　Très volontiers, je suis prê à vous suivre!（ナイトの樣に丁寧におじぎをする。）

小澤　僕も行きたいな。

葉子　今日はあなたは玲子さんのお相手をなさらなくちや。

玲子　小澤さん。ゐて頂戴な。

小澤　ピアノの稽古には僕はいらないでせう。

玲子　だつて……

杉本　君は家にゐたまへ。

小澤　運命の憂鬱を痛感しちまふな。

葉子　そこをお忍びなさい。やがて光明が輝くでせう。チヨコレートの一罐があなたの目の前に現はれるでせう。

（笑ふ。）

（杉本庭の方へ、葉子隣室へ退場。）

小澤　（つまらなさうにその邊を歩く…思ひ出した樣に）ピアノの事で野田さんが子爵に何とか云つたのですか。

玲子　そんな事云へるもんですか。（笑ふ）私フランス語は少しきややらないのよ。ね小澤さん。Veuillez-vous asseoir.

小澤　Merci.（卓の上から論文の原稿を手にとつてめくる）

玲子　J'ai besoin de vous parler, mon amour!

小澤　そんな事を云つてはいけません。mon amour なんて。

玲子　いけないでせうか。

小澤　（論文の原稿を卓にのせて）だつて考へて御覽なさい。

玲子　でも私、考へ通したんです。幾晩も、幾晩も、私眠れない晩がどんなにあつたでせう。

小澤　こんなに二人つきりの時はお互にセンチメンタルになるのはよしませう。僕は氣が弱いんですから。

玲子　だつて私もう。どうすればいいんだか自分一人ぢや分らなくなつたんです。

小澤　どうしたつて云ふんですか。

玲子　ひどいわ、御存じのくせに……（すゝり泣く）

小澤　困りますね。玲子さん。泣いちや。

玲子　ね、小澤さん。私に mon amour と云はせて頂戴

ね。後生ですから。私あなたのためならどんな事でもしますから。私あなた無しの生活なんか出來ないわ。
小澤　ちよつと待つて下さい。待つて下さい。あなたはひどく興奮してゐます。それに僕は黒田君と約束があるんですから。
玲子　だつて戀は人間同士の約束ぢやないわ。
小澤　そりやさうです。けれどもね。も少し考へて下さい。あなたは僕を戀したつて仕方がないんです。あなたは貴族のお姫樣です。僕はナイトではありません。僕は一個の平民の次男です。
玲子　私そんな事なんぞ信じやしないわ。そんな區別が何になるでせう。私の戀にとつちや塵一つの値打だつてありやしないんだわ。私は私の戀のためには何も惜しみやしないんです。ピアノだつて名譽だつて。
小澤　玲子さん。よく分ります。だけども興奮してはいけません。戀にとつちや塵一つの値打ちだつてない物でも生活にとつちや大變な役目をするものが幾らもあるんですからね。あなた方の樣な世の中の男と云ふ者を御存じない方々は興奮するのが一番危險です。興奮すると運轉手であらうが僕みたいな學生であらうが一番手近にある男を一個の偶像にしてしまつて、これを禮拜なさらうとするからいけないんです。あなたは御自分の戀に感激していらつしやるのです。戀だけを惱みと思つていらつしやるんです。貴族同士ならまだそれでもいいんです。けれども僕は貴族でもナイトでもありません。たゞ一個の志願兵にすぎません、僕は働かなければ喰へない身の上なのです。そりや戀すれば一所になりたいのは自然な事ですけれども人間はかくあるべき事をやつたからとて滿足が出來るものぢやありません。
玲子　ぢやあなたは一人の女を見殺しになさるの。私をお捨てになるの。
小澤　考へ過ぎちや困ります。正當に考へなければね。よござんすか。あなたはこの葉子さんのお家の室と、この室に住んでゐる學生である所の現在の僕にばかり迷つちやいけないのですよ。そりや今はかうして何もしないで父から金を貰つて、ピアノを聞いたり、憂鬱になつたり、毎日髯を剃つたり、カラーを三日に一度づつ取り換へたりしてはゐます。あなたはそんなものにだまされてはいけないのですよ。來月になつてごらんなさい。私は急に無資産になるのです。四月には二等卒になるのです。そして來年からはどこかの會社で眞黒になつて、髮剃りだのカラーだの音樂會だの劇場だのをそつちのけにして働かなくちやならないのです。こんな室にはもう一生住めつこないのですよ。私の妻は朝早くから起きてお

米をといだり、着物をぬつたり、洗濯をしたりしなくてはならないのです。その中に子供でも出來たらどうです。室中金屬をすり合せる樣な赤ん坊の泣き聲やおむつや毀れた玩具だらけになるのです。赤ん坊はウンコをするでせう。あなたはそれを洗濯して、おむつの幟を高々とかかげるだけの力がおありですか。

玲子　ありますとも。

小澤　云つただけぢやだめです。誰だつて何でも出來る氣はしてゐるものです。その時になつてごらんなさい。籐椅子の上でコーヒ！をすゝつたり、フランス語でしやべつたり、甘いさゝやきなんぞしてゐる暇なんかあるものですか。戀の夢なんぞ赤ん坊の屁一つでもなくなつてしまふんです。あなたは手桶に水一つお汲みになつた事さへないでせう。寒中の水がどんなに冷たい物だか、薪をたきつけるのはどんなに煙たいものだか、そんな薪がどんなに高い物だか、御存じないでせう。僕はあなたの將來のために、云ひかへれば僕のために云ふのです。僕が今、あなたに「うん」と云へばあなたはもう有頂天になつて私に噛りついて接吻して下さるでせう。私も淋しくはなくなるでせう。然し學校を出てしまへば接吻してゐる暇もなくなるんです。僕は淋しさなんぞ忘れて働らかなくちやならなくなるんです。さうすると今度はあなたの方で淋しくなるんです。そんな時になつて貴族の方々はどうするか僕はちやんと知つてゐます。あなたは貴族で育つたのです。奥女中と自動車と、學習院で育つたのです。習慣は恐れなければなりません。あなたが戀の平等を生活にまで主張なさりたいのならあなたのお子さんを貴族的に育てない事です。けれども僕等はもう駄目なんです。僕等はあまりに斯樣に育ちすぎました。

玲子　あんまりだわ。あんまりだわ。

小澤　困りますね。

玲子　あなたは私を何とも思つて下さらないのだわ。

小澤　何とも思つてゐます。思つてゐるから云ふんです。ぢやどうすればいいんです。

玲子　（小澤にすがりつく）接吻して頂戴。

小澤　すぐそれだからいけません。のつぴきならなくなつてから苦しんだつて駄目ですから。ね。いゝ子です。駄駄をこねてはいけません。そんな事はたつた二人ゐる時冗談にも云つちやいけません。男は接吻一つであなたを殺せるのですから。

玲子　（益々すがりつき）殺して頂戴、殺して……一度接吻して頂戴！

小澤　（熱にうかされた樣に立上ろ）いけません。いけま

せん。あなたはのぼせてゐます。危險です。危險です。
こんな氣分は一番危險です。
（ノックの音。）
人が來ます。はあ助かる。玲子さん。
玲子　ね小澤さん。今の中にたつた一度。
小澤　何てあなたはのぼせてゐるんです。
（ノックの音。）
聲　あたしよ。
玲子　あれはどなた。（シンとなる）いゝわ。私歸るわ。
女の方でせう。
小澤　玲子さん。嫉妬してはいけません。
玲子　いゝ事よ。（涙を拭く）いい事よ！
（玲子退場、入りちがひに、しげ子登場。）
小澤　はあ、危なかつた。
しげ子　どうなすつたの。
小澤　胸がどきどきしてゐる。
しげ子　どなたなの、あの方は。
小澤　黑田君の妹の玲子さんさ、も少しであの人に敗ける
所だつた。しげちやんが來て吳れて助かつた。
しげ子　まあさう。（間）これはお土產。
小澤　ありがたう。何。これは。
しげ子　お好きなもの。

小澤　チヨコレート？
しげ子　えゝ。
小澤　ありがたう。ありがたう。
（小澤包をとく、しげ子幸福さうにそれを見る。）
しげ子　どなたもいらつしやらないの。
小澤　あゝ。
しげ子　あたしゐてもいゝ？
小澤　いゝともさ。
しげ子　ね小澤さん。
小澤　どうしたの。まあ、おかけ。
しげ子　えゝ、ありがたう。（間）ね、小澤さん。あたし
やきもちなんかやきやしないことよ。たゞあたし小澤さ
んが好きだから來るの。かまはないでせう。
小澤　そりやかまはないけど、あんまり好き過ぎちや困る
よ。
しげ子　好き過ぎたつてあなたに御迷惑をかけなきやいゝ
でせう。
小澤　困るね。
しげ子　どうして？　あたしあなたを好き過ぎれば御迷惑
なの？
小澤　さうだと云ふのぢやないけど、あなたが可哀さうだ
から。

しげ子　さうよ。そりやあたし、初めつから可哀さうよ。生れた時からね。あたしにはお父さんがないんですから。そして勝手にあなたを好きがるんですもの。あたし我儘なんだわ。だからあたし仕方がないけど。

小澤　何だつてそんな事を云ひ出すの。今日に限つてさ。

しげ子　お母さんがお嫁に行けつて云ふの。

小澤　はあ。どこへ。

しげ子　よそへ。知らない人の所へ。

小澤　で、しげちやんは行く氣かい。

しげ子　あたし、知らない人の所なんかいやだわ。でも仕方がなきや行つちまふの。行つたてかまはないでせう。

小澤　そりやかまはないけど、全つきり知らない人ぢやね。

しげ子　でも知らない人だつて知つた人より可愛がつて呉れるかも分らないわね。

小澤　そりやさうだけど。（考へ込む……間。）

しげ子　あら、小澤さん。どうなすつたのお話ししませうよ。あたしあなたのお話しを聞いてゐると自分の不仕合せなんか忘れてしまふ事よ。私あなたのお話しがすきなの。お嫁に行つてもあたしお話ししに來たいわ。いゝでせうね。小澤さん。戀だなんてものは若げのいたりで年とれば亡びてしまふものなんでせう。さうおつしやつたわね。あたし働くんだわ。知らない人の所へお嫁に行つて朝から晩までね。さうでせう。美しい着物だの綺麗な指輪だのつて云ふものは銀座の街でガラス越しに見るんでせう。そして夫にぶたれてもあたし泣きやしないわ。ね。さうでせう。

小澤　あゝ。

しげ子　ね。そんなお話しをまたしませうよ。チヨコレートを喰べながら。さ。（喰べる）ね。あなたも上らない。あら、あなた、どうなすつたの。チヨコレートが目にしみて？

小澤　（涙をそつとふいて）僕はね。しげちやんが可哀さうになつたのさ。

しげ子　だつて仕方がないわ。（そつと涙をふいて笑ふ。）

小澤　しげちやん。あなたは僕をにくいと思はない。

しげ子　なぜ。

小澤　僕がしげちやんを戀さなかつたから。

しげ子　そんな事何でもないわ。あたしだつてあなたが戀なさるなんて思はない事よ。

小澤　本當かい。

しげ子　あたし戀なんてしたかないわ。さうでせう。したつて仕方がないと思ふの。だつて二年も前にあんたがあんなに本氣に戀してた方だつてあなたを何とも思つてや

しなかつたんでせう。

小澤　あゝ。たゞ僕を馬鹿な奴だと思つてゐたゞけさ。

しげ子　だからあたし小澤さんが好きよ。

小澤　それで安心した。チヨコレートを仲よく喰べようね。

しげ子　えゝ。（小澤の所へ行つてピツタリと寄る）ね小澤さん。

小澤　いけない。いけない。もつとはなれなくつちや。

しげ子　さう。（少しはなれる）だけどあたしお嫁に行くなら小澤さんの所へ行きたいわ。

小澤　なぜ。

しげ子　（うつむいて）すきだから。

小澤　ぢや同じ事だ。（小さく笑ふ。）

しげ子　いえ、いえ、ちがふの。あたし泣きやしないわ。たゞ行きたいと思つただけなの。だけどこんな「たい」なんか、あてにしちやゐられないわね。

小澤　あゝ。

（黒田登場。）

黒田　これは失禮。しげちやん來てゐたの。

しげ子　えゝ。しばらくね。黒田さん。今あたしお妹さんを見たわ。綺麗な方ね。

黒田　しげちやんにくらべればお話にならないがね。

しげ子　まあ厭だ。

黒田　（小澤に）來たかい。

小澤　あゝ。「U・S」で待つてるつて。

黒田　さうか。ありがたう。（間）時にね君。

小澤　何だい。

黒田　すまないけどピアノを返して呉れないか。

小澤　あゝいゝよ。玲子さんが怒つてるのかい。

黒田　いや。たゞもう君の所へは行けないつてゐたよ。（笑ふ。）

小澤　誤解して呉れちや困るよ。

黒田　分つてるさ。それにおふくろが歸るんだつてさ。野田にさんざん、しやべられて閉口しちまつた。

しげ子　あたし、おいとましますわ。

黒田　どうして。遊んで行つたらいゝぢやないか、僕は用があるから歸るけど。

しげ子　でもおそくなると又母さんに叱られるから。

（電燈がともる。）

小澤　電燈がついた。

しげ子　（小澤に）歸つていゝでせう。

小澤　あゝ、ぢや小母さんによろしく。

しげ子　だめよ。今日はあたし内證で來たから。

黒田　ぢやそこまで一所に行かう。

しげ子　えゝ。ぢや小澤さん、さ様なら。

小澤　さ様なら。又おいでね。

しげ子　えゝ。

黒田　失敬。

（しげ子、黒田退場。小澤、彼等を見送つてから卓に向ひ、ゴチヤゴチヤした原稿紙をそろへて、それを見ながら頭を掻きはじめる。）

――幕――

## 第三幕

第二幕と同じ室。ピアノも無く、本棚も無い室飾りは第一幕の時と同じ。たゞ卓とストーヴと、それから葉子が飾つて呉れた電燈の傘が元のまゝで、電燈はボッカリとともつてゐる。三月末の靜かな宵である、小澤ボンヤリと考へ込んだまゝ卓の前に腰かけてゐる。葉子、靜に登場。

葉子　まあ何てひつそりした室になつてしまつたのでせう。たうとうお別れの日が來ますのね。

小澤　えゝ。あすになれば皆御別れです。このボッカリとともつてゐる電燈を見てゐたらすつかり寂しい氣持ちにさせられてしまひました。

葉子　（窓に行つて外を見る）でも氣がつかないでゐる中に又春が近づいて來てゐますわ。何て重たい空の色でせう。來てごらんなさい。星がボンヤリかすんでゐます。

小澤　（立上つて窓へ行く）春が來ると……それだのに僕の心はどうでせう。若い希望で躍らなくなりました。まるで空家の樣にひつそりとしてゐます。たゞ現在の別れと云ふ氣持ちで一杯です。

葉子　別れつて何と云ふ痛ましい氣持ちでせう。

小澤　さうです。僕達がこのお室で逢つた、集つたと云ふ瞬間にもうこの痛ましさは萠してゐたのです。

葉子　でも私もあなたも、お互に地上に生きてゐて、まるつきり知らなかつたと云ふ事よりは幸福だつたと思つてゐます。

小澤　さうかも知れません。けれども、それを祝福出來ない樣な運命があつたとしたらどんなでせう。僕は今、それを考へてゐました。

葉子　（小さく笑ふ）「運命の憂鬱」でせう。

小澤　えゝ。それに違ひありません。（間）何と云ふ事でせう。僕はあしたの今頃は汽車の中でゆられてゐるのです。

葉子　青森の方はまだ寒いでせうね。でも御兩親がどんなに喜んで待つてゐらつしやるでせう。

小澤　僕に學問した事を後悔させて呉れなきやいゝんですがね。そして四月には軍隊生活です、八甲田山のふもとの雪どけのぬかるみを一生懸命で駈け廻るでせう。それがすむと社會生活と勞働が僕を待つてゐます。僕は今僕の門出を祝福すればいゝのか悲しめばいゝのか分らない氣もちです。

葉子　でも皆祝福したいものですわね。（間）この二ケ月は本當に短い間でしたけれど何と云ふ生活でしたらう。私おかげで若い娘の生活を味ひ盡しましたわ。こんな時はもう再び來ないでせう。

小澤　來るものですか、それを弔ひませうか、祝福しませうか。僕の運命はほら、あそこの壁でクス／＼笑つてゐます。あの卓の下で笑つてゐます。僕はどうすればいゝのでせう。

葉子　私はあなたに感謝してゐます。

小澤　僕こそ――

（二人の手はいつの間にか互に取られてゐる。）

けれどもそこで私の運命が笑つてゐます。お前は一體、弔ふのか、祝ふのかつて。

葉子　あなたは祝福なされないでせうか。

小澤　僕は弔はなくちやならないのでせうか。

（長き間。）

葉子　小澤さん。では何にも云はずに葬りませう。

小澤　葬らなくちやならないんですか。

葉子　（うつむく）えゝ。（間）私達はこれから皆別々に生きて行くのですわ。あなたは廣い世界へ。私は籠の中へ。――さうですわ。それを一生懸命で祝ひませう。そして思出を弔ひませう。

小澤　僕は今日まで忍んでゐました。

葉子　そんな事は云はずにおいて下さいな。

小澤　なぜです。

葉子　あなたの「運命の憂鬱」を見るのが辛いから――それからお互のためにですわ。だつてすべての事を打ち明けて御覧なさい。さうすればどんなに親しい人だつてきつと何かその中に一所になる事の出來ない運命がひそんでゐるのですもの。そんな事をするのは不幸の一つだと私思ひますの。

小澤　でもたつた一つ僕の心に解決を與へる事を云つて下さい。それがどんな方向に向ふ物だつて僕は滿足しますから。

葉子　だつて私にそんな事は云へませんわ。

小澤　ぢや二人で云ひませう。

葉子　二人で？　一所に？

小澤　えゝ。

小澤 （間。）ね、云つて下さい。
葉子 ぢや云ひませうか。
小澤 え﹅。
葉子 本當によござんすか。
小澤 え﹅。
葉子 あなたもおつしやるんですよ。
小澤 え﹅。
葉子 よござんすか。さ、ぢや云ひますよ。
小澤 え﹅。
葉子 四月になれば――
小澤 四月になれば――
葉子 巴里から――
小澤 巴里から――
葉子 私の――
小澤 私の――私の、それから？
葉子 私の――あのね。私の――夫になる人が――
小澤 歸つていらつしやる ―― （卓の所へ來て顏を伏せる）
葉子 小澤さん。
小澤 分りました。分りました。ちよつと靜にしてゐて下さい。僕は今僕の心をぢつと握りしめなければ――。
葉子 許して下さい。
（長き間。）
小澤 （顏を上げる）葉子さん。本當でした。今まで何も云はなかつた事はどんなに仕合せだつたか知れません。僕はあなたのお心持ちを伺はなくつてすみます。今は解決だけで澤山です。
葉子 私の心持ちを間違はずにゐて下さい。
小澤 よござんす、葉子さん。皆若い思出の中にかくれて行つてしまふでせう。胸の奧の奧の一番深い所へ葬りませう。僕はお室を借りたゞけでした。僕は出て行かなくちやなりません。あなたのお心はこのお室の御主人の物なんです。僕はこ﹅から出て行かなくちやなりません。人生だつて云はゞ借りた室なんです。そこから僕等がやがて、一切の希望と思出とを捨て﹅出て行かなければならない樣に、僕は順々に出て行きませう。このお室から――僕の夢を捨て﹅あなたのお心から涙を捨て﹅。そしてやがてこの人生からも一切の喜びと苦しみをすて﹅出て行つてしまふでせう。僕達は皆歸つて行かねばなりません。借りた室から歸つて行くのです。その時になつて未練を云ふのは止しませう。お互に乘つた。生きた。それがすべてゞす。僕達はやがて同じ樣に歸つて行きます。借りた室から偉大な僕達の故郷へね。丁度今僕がこ

んな氣持ちで僕の故郷へ歸つて行く樣に。

葉子　さうですわ。私にもあなたの夢を弔はして下さい。

（ノツク。）

小澤　皆來ました。

（杉木、黑田、京子。登場。）

杉木　さ皆來た。お別れを云ひに來た。

黑田　僕はも一年學校にゐる事になつた。先に世の中へ行つて呉れ給へ。

小澤　君、僕はおかげで最後の幕を、この氣に入つたお室で花々しく切り落したよ。

（二人手を握り合ふ。）

杉木　おい、何だつて暗い顏をするんだい。殿樣はも一年學校で青春を樂め。僕等は一年早く人生を苦しむんだ。其が何だい。笑つてのけろ。笑つてのけろ。

京子　私つかれてしまつたこと。（タイプライターを打つ手つきをしながら）Messrs Paramount Film Company……（笑ふ）でもこんな事何でもないのよ。世の中へ出てらつしやい小澤さん。あなた方はもう私達のお仲間よ。

葉子　（寂しげに笑ふ）フレー、フレー小澤さん。

小澤　さうです、笑つてのけろ笑つてのけろ。

杉木　だが今夜しげちやんのゐないのは淋しい事だね。

小澤　手紙はやつたが一人の時とはちがふからね。

杉木　かまはない、かまはない笑つてのけろ。さ、葉子さん。皆で御別れの晩餐を喰べに行きませう。

葉子　えゝ。私表から出ますわ。（退場）

杉木　さ行かう。

京子　黑田さん、行きませう。（調子をつけて）Union Film Company, Union Boulvard. Now york……（黑田へ）あなたニユーヨークへいらつしやりたくない？

黑田　非常に行きたい。

（一同退場……長き間。庭からの扉にノツクの音。しげ子靜に登場。今日は丸帯をゆつてゐる。）

しげ子　今晩は――あらどなたもゐらつしやらないわ。（チヨコレートの包みを卓の上に置き、なつかしさうにその邊を見廻す）

（しげ子退場……時計が淋しく七時を打つ。）

――幕――

# 令狐生冥夢錄（五場）

——剪燈新話より——

人

令狐譔
近所の男
閻魔大王
明法官
成令言　前外務大臣
不義をした美人とその情夫
芋を盜んだ小男
蘭英　もと遊女
鬼A、B、C、D、E、F

## 第一場　令狐譔の家

春のおだやかな外景を眺めながら令狐譔が一人で酒を飲んでゐる。やがて、あわたゞしく近所の男がやつて來る。

男　（窓の所で）先生！
譔　誰だい！
男　や！　ゐらつしやいましたな！　私ですよ！
譔　君か！　ま、あがり給へ！　又ろくでもない話を持つて來たんだらう！
男　ろくでもないは恐れ入りますね！
（男が室へ上つて來る。）
譔　どうしたい！
男　所がどうしたいもなにもありませんぜ先生！　今日と云ふ今日は先生をあつと云はさずにやおかないんだから。先生に頭を下げさせずにやおかないんだから。（坐る）
譔　君は俺の所へ來るたんびまるで世の中が妖怪變化で一杯になつてる樣な顔をしてるんだね。だがこつちで一杯行かう！　（と杯をさす）俺はまだ頭を下げないつて！
男　（杯を受け唾をぐつとのみ込んで）所がね、先生かうなんですよ！
譔　さうだとも！　かうだよ！　（と酒をつぐ）
男　や！　こりや！　（恐縮するが、一杯、口につぎ込むとすぐ又）だけどね、先生！　今度と云ふ今度こそ不思議ですぜ！
譔　不思議？　（小い間）ふむ、又不思議か！　だがこの前

も云ふ通り不思議と云へば天地萬有が卽ち不思議だよ！　ん？　このたそがれのこがね色のうすもやは何と云ふ事だ！　この飲み心地のいゝ春は何と云ふ不思議だ！　君！　桃の花のこの可愛らしい香氣は又何とした事だ！　その上に、この醉心地と來たらこりや全く何とした事だ！　かう考へたんぢやきりがない！　これ卽ち不思議でなくて自らの大調和だよ！

男　ね先生！　そりや少々のんきすぎた考へ方と云ふもんですよ！　そりや桃の花や夕方の話は誰も氣にしてやしませんやね。そんなものは子供の時分から慣れっこでさ！　そんなものは不思議の部類ぢやないつて事は誰だつてちやあんと知つてまさね。

譔　だから一杯行かう！

男　所がこれが一杯所の話ぢやないんですつて！

譔　ひどくむきになるね！

男　むきになりますとも！　先生！　今日はようく聞いて貰ひませう！

譔　そりや何でも聞くよ！　だが東門の鬼の話はもうまつぴらだぜ！

男　よござんとも！　ま聞いて下さい。こりや全く大變な話なんだから――先生！　あの金もちの烏老おやぢを知つてますね。

譔　知つてるとも！　あいつあ金もちでけちんぼで頭が禿げて、おまけに色氣狂ひだ！

男　さうですよ。その上に先生あいつの鼻と來た日にや見物ですぜ！

譔　知つてるよ！　この村で、いゝや、この廣い世界中探して歩いたつて、あんなみつともない赤つ鼻つてありやしないぜ！

男　さうですよ。全くいやんなつちまふな！　あの赤つ鼻と來たら！　あのしみつたれ方と來た日にや全くお話しぢやないんですよ。先生！　あいつに泣かされたなあ、私ばかりぢやないんですからね！

譔　知つてるよ！　あいつを不愉快に思つてる點ぢや僕は君等には決してまけやしないよ！　僕は大體赤つ鼻つてやつは先天的に大嫌ひなんだ！　それに去年の不作で領地のものが苦しんでるのに自分だけ倉を立てゝ、小作人が芋をぬすんだからつて追放するなどは大いに俺を怒らしたね！

男　さうですとも、さうですとも！　私だつてね！　家内がひどく病みつきやがつたんで、しかたがねえからあのおやぢから金を借りたんですよ！　所がその利子と來た日にや法外なんですからね！　私やまあよくあの利子を拂ふものだと自分であきれ返るほどですよ！

課　皆もう拂つちまつたのかい！

男　どう致しまして！　だから今まで毎日毎日の催促でさ！　赤つ鼻御自身の御來駕でね！　妾ばかりかこひやがつて本當に——　（急にこゝで調子を變へて）　それがね！　先生不思議ぢやありませんか、この二三日前から赤つ鼻が來なくなつたんですよ！

課　（大きく笑ふ）　なるほどね！　こいつあ世にも不思議な事だ！　この話は今まで君がもちこんだ東門の鬼の話よりもお寺の光りものゝ話よりも不思議だぜ！

男　（あわてゝさへぎる）　いや！　こりや不思議に違ひありませんが私の云ふのはこの事ぢやないんですよ。そりや第一赤つ鼻が毎日催促に來ないつてのは不思議の部でも面白え不思議でさ。ですがその不思議はすぐ解けましたよ。つまりあの糞ぢゝいめ！　いゝあんばいに病氣だつたんです。

課　なるほどね。

男　全くいゝ氣もちだつたな！　私達貧乏人の恨がつもりつもつてなつたんだと思ふと全く胸がすきましたね。ですがあの時の騒ぎつたらありませんでしたぜ！　先生は夕方の靄だの桃の花だので知らないでせうが醫者だ藥だつてんで町まで六頭だての馬車が醫者を迎ひに行く始末でさ。所がやつて來た醫者と來た日にや一尺もあごひげの生えたおつそろしく頬つぺたのこけた爺さんでね。どう見たつて藪でさ！　町だつていゝ醫者はあの赤つ鼻あけちんぼだつて事あ知つてますからね。

課　ふん！

男　それで死んぢまつたんですよ。全く胸がすつとしましたよ。塀の外であいつの生き死にを氣にしながら騒ぎを見物してた私どもは、先生、全く萬歳をやりかねなかつたね。

課　なるほどね、やれ〱！

男　世の中にや全く死んで人にほつと安心させる様なのがゐますからね！

課　我々もお互にさうかも知れんて！

男　先生悟つた事ばかり云ふからいやんなつちまふなあ！

課　だがね君！　いくらけちんぼだつて赤つ鼻だつて死ぬのはちつとも不思議ぢやないよ。一體死ぬと云ふ事はね君……

男　（さへぎる）　いけねえ先生！　ところが私の話はこれからなんですよ！　これからが不思議なんですから默つてお聞きなさいよ。赤つ鼻ああんなにけちんぼで極道もんでも家内ぢや口惜しいと見えてこれが先生大した御法事と來やがつたね！　え？　大した金のかゝつたもんでしたよ！　坊主の野郎もうけやがつたぜ先生！

諜　なるほどね。俺は一體坊主つてやつも嫌ひだよ！　あいつ等は近頃は檀家のたいこもちだ！　葬式業者になり下つてるんだ！

男　全くだ！　金になる、御馳走になると思や坊主だつて一生懸命にお經を讀みまさね。え！　だからお聞きなさいよ。斷つておきますが全く驚いちやいけませんぜ！　これが三日目の朝で！　え？　先生よござんすか！

諜　いゝよ！　いゝとも！

男　こゝがかんじんの所なんだ！　よくお聞きなさいよ。三日目の朝なんですね、驚ろいちやいけねえ、あの赤つ鼻の糞ぢゝいめ！　まるで夢から醒めた樣に生き返つたつてから不思議ぢやありませんか！

諜　（鼻で笑つて）　お話しだらう！

男　（むきになる）　冗談云つちやいけねえ！　こいつを嘘だなんてつたら俺あ先生だつて何だつてかまはねえぶつ殺してやるから！　え？　全く嘘もかけ値もない正眞正銘の本當の事なんだから不思議ぢやありませんか！

諜　（やゝ動かされて）　本當かね！

男　本當も嘘もあるもんか！　私あたつた今ちやんと見て來た所なんでさ。

諜　見た？

男　見ましたとも。生き返られた日にや借金の催促でこつちの命の方が危えと思つたもんだからこつそりと塀にのぼつて庭越しに眺めましたね。驚くぢやねえか、全く先生、これが生き返つて床の上に坐つてるんですよ！　私あも少しで叫び聲をたてゝ氣絶する所だつた！

諜　そんな事があつたのか！

男　え、ありましたとも！　そして、これからがなにいけねえや！　あの糞ぢゝいめ！　から云ひやがつたんですとさ！　え？　先生「吾死して後家人廣く佛事をなし多く楮幣を焚く冥官之を喜び許されて還る事を得たるなり」だとさ！　え？　これこそ正眞正銘かけ値のねえ地獄の沙汰も金次第つて奴ぢやありませんか！

諜　ふむ。もしこれが本當だとすると實に怪しからんね。

男　もしも糞もねえ本當だつて云つたら聞きわけがねえな！　嘘だつたらちつとも不思議ぢやないが本當だから不思議だつて云つてるぢやありませんか！　さ？　だから今日は約束通り頭を下げて貰ひませう。

諜　だがこれが本當ならちつとも不思議ぢやない！

男　え？　まだあんな事云つてら！　ぢや一體全體こりや何て事ですね！

諜　こりや不思議でなくてけしからん方に屬してるよ！

男　先生にやかなはねえな！　負け惜みが強いんだもの！

諜　不思議でたまるものか！　けしからんよ。あゝ、けし

からんとも！　一體今どきの富豪だの政治家だの役人たのつてのはグルになつてるんだ！　富豪は細民を虐げ政治家は民を惑はし、役人は賄賂をとつて蓄へる。皆グルになつて都合のいゝおきてを作り上げるんだ。これがこの現世のみならず地獄にもあると云ふにいたつては言語道斷な話だ！　天上天下の一大怪事だ！

男　そりやさうですよ。

課　金の威力に目がくらんで天下の法をまげ赤つ鼻を生き返らせる樣では今の閻魔大王つて奴も役人根性の大馬鹿野郎だ！　現世の惡法にかくされた正をたて邪をいましめなければならない娑婆と冥土の間の裁判官がそんなざまだからこの世の中の金持ちや政治家や役人は惡くなる一方だ！　そんな下らない馬鹿閻魔なら烏の糞にも劣る奴だ！

男　（手をたゝく）その通りその通り！　（が、ふとおぢけづいて）だが閻魔樣をそんなに惡口云つてもいゝのかね。

課　いゝも惡いもあるものか！　あの赤つ鼻を生き返らしたのが何より證據だ！　閻魔大王が間抜けで馬鹿で俗惡な安役人と同じ證據だ！　實にけしからん事だ！　こんな歌でも唱つて聞かせてやれ！　（朗吟する）

一陌金錢便返レ魂　公私隨處可レ通レ門
鬼神有三德開二生路一　日月無三光照二覆盆一
貧者何緣蒙二佛力一　富豪容易受二天恩一
早知善惡都無レ報　多積二黃金一遺二子孫一

男　だが私や地獄へ行くなあいやだから閻魔樣を惡く云ふ仲間にやはひりませんぜ！　私やたゞ不思議だから先生に頭を下げさせようと思つてやつて來たんですからね！　私やたゞ赤つ鼻の糞ぢゝいの事を云つてるんですからね！

課　赤つ鼻も閻魔大王も同じ樣な極道おやぢだ！　だからグルになりやがつたんだ！

男　先生は醉つぱらつちまつていけねえや！　私やね、あんまり先生は不思議なんてものはねえつてもんだから今日こさと思つてやつて來たんですよ！　私あもう歸りますぜ！　（こそ〳〵と去りかける）

課　あゝ！　いゝとも！　閻魔の野郎赤つ鼻とグルになつたからいつか俺が意見してやらあ！　大馬鹿野郎めが！

（と大の字なりになつて寢る）

男　だがも一度ことわつておきますが私あ閻魔樣の方にはかゝはりはありませんぜ！　おや先生！　さ樣なら。（こそこそ歸る）

（あたりが次第に暗くなる。とやがてどこからともなく鬼ＡＢが現れて來る）

鬼Ａ　こら！

鬼Ｂ　おい！　起きろ！

譔　（目をこすつて起ろ）誰だい！　又不思議な話か？

（と鬼を見て）や！　こりや何だ！

鬼Ａ　騒いちやいけねえ！

鬼Ｂ　冥土からのお迎だ！

譔　何だつて！

鬼Ａ　さ來い！

鬼Ｂ　たて！　一緒に來るんだ！

譔　え？　本當か？（とさはつて見てとびのき）こりや本物だ！

鬼Ａ　本物だとも！　閻魔樣の立派なお使だ！

譔　いやだ！　俺あんな人と知り合ひぢやない！

鬼Ｂ　あつてもなくても來るんだ！

（譔、あばれる。鬼と立ち廻りになるがつひに捕へられる。）

鬼Ａ　こいつ仲々暴れものだ！

鬼Ｂ　だから王樣の御機嫌をそこねてしまつたんだ。

譔　畜生貴樣達は閻魔のイヌか！

（と引きずられて行く。）

―暗轉―

## 第二場　閻魔大王の廳

正面の殿上に机を前にして金冕をつけ錦の袍を着た五月人形の樣な閻魔大王が坐し、傍で天神樣の樣な明法官が居眠りをしてゐる。閻魔はカン〳〵になつて焦れ切つてゐる。

鬼ＡＢが令狐譔をひつぱつて來る。

鬼Ａ　冥王樣！　お吩咐けの人間を召しとつて參りました。（と譔を引きすゑる）

王　御苦勞！（そこで鬼ＡＢは左右に控へると王はカンカンになり破れ鐘の樣な音で駄々つ子の樣な調子の聲をはり上げ）こりや令狐譔！　貴樣實にけしからん奴だ！

譔　（まだ醉つてゐる。それでふくれて）どうしてですか王樣！　私はあなたの方がよつぽどけしからんと思ひます。

王　（なほ聲をはり上げ）わしに向つてけしからんとは何事だ！（机をドシンとたゝく）このわしの前に出て最初にほざいた言葉がけしからんとは何事だ。

譔　ですが王樣！　私は無理無態にこゝへ引きずり込まれたのです。理由を聞くとあなたの御機嫌をそこねたためだと云ふのです。こりや王樣、個人的な感情問題ですよ。

天命を左右する職權をこの場合ふり廻すのは職權濫用ですよ。

王　だまれ青二才！

諜　さうです。私はおほせの通り青二才でまだ若くて前途があるのです。だからまだこゝへ來るのは早すぎますよ。

王　（身ぶるひして）こいつ！　こいつ！　ウッ！　云ひをつたな!!（とひどく机を敲く。机はこはれてしまふ。居眠りして居た明法官も驚いて目を醒す）やッ！　机がこはれた！　こら鬼！　新らしい机を倉庫から出して來い！

鬼B　はい！（去る）

明法官　王樣！　何事でございますか！　王樣！　お氣をおしづめ下さいまし！

王　（頭をふり動かして）こいつは實に手にをへぬ人間だ！

諜　ですけどお考へ下さい！

王　考へる餘地があるものか！　貴樣はさきほどからさんざつぱらわしの惡口を云ひ散してゐたではないか！　このわしに聞えぬと思ふのか！　貴樣はわしを何と云つた！　赤つ鼻と同じ極道おやぢだとほざきをつた！　間抜けで馬鹿で俗惡な安役人と同じだと云ひ散らしをつた！（唸る）貴樣の樣な無禮極まる奴は犁舌の獄へ下してやる！　貴樣のそのベラ／＼な赤毛布の切ればしみたいな舌をひつこぬいてやるのだ！

諜　舌を!?（情なさうに）そりやいけません王樣！　そりやあんまり御無體と云ふものです。王樣らしくもない感傷主義で職權濫用と申すもんです。嘘でもついたと云ふのならともかく私は何もやましい事を云つた覺えはないんです。たゞ王樣の方でなぜ私が王樣の事を間抜けで馬鹿で安役人と同じだと云つたかよく考へてごらんにならないだけなんです。

（この間に鬼が新らしい机をもつて來て恐る／＼王の前におく。）

王　カ・ン・ガ・ヘ・ル？

諜　さうです！　考へて頂きたいのです。王樣はたゞ感情一點張りだから困ります。明君と云ふものはとくと物事を考へるのです。

王　こいつ！　どこまでこの閻魔大王の前で大きな口を利くやつだ！　貴樣の樣な奴は……

諜　（急にカン／＼に憤慨する）こんなに云つても分らねえのか！　分らなきやもう云つて聞かせねえ！　舌でも齒でも拔いて呉れ！　かうなつたからにや仕方がないからもう何も云はねえが、云はねえかはり腹の底で、間抜

けで分らず屋で大馬鹿野郎だと七生まで思つてゐてやるから。さ！　さつさと舌でも何でもぬいて呉れ！

王　（このすさまじい勢にちよいと面喰ふがブル／＼と身ぶるひして目を怒らし）こいつ！　こいつ！　（と手をふり上げてふり廻す）

明法官　（あわてゝとめる）王樣！　お氣をおしづめ遊ばして！　恐れながら王樣！

王　こいつ！　生意氣千萬な奴だ！　（唸る）

譔　さ！　釘拔きでも何でももつて來て呉れ！　舌を拔いた位で俺の考へを無くしたと思ふなら御目出度い話だ！　さ！　俺の舌を拔いてつんぼの馬鹿殿樣みたいにそりつ返つてるがいゝや！

鬼A　（すつくと立つて）王樣！　釘拔きをもつて參ります！

王　いや待て！　こら令狐譔！　貴樣は生意氣な奴だが一應しやべらせてやる。有難いと思つて腹の底まで云つて見ろ！

譔　……。（無言で力み返つてゐる）

王　こりや！　令狐譔！　舌を拔くのは中止してやる！　しやべつて見ろと申すのだ！

譔　さうですか。ぢや申しますが私は何の罪でこゝへ來たのです。

王　貴樣はさつきから――いやたつた今もこのわしを間拔けで馬鹿だとほざきをつた。これ卽ちわしの權力を無視する不屆千萬な事だ！

譔　なぜ私が云つたとお思ひになります。

王　なぜ？　貴樣がか？

譔　えゝ、さうです。私が王樣を極道おやぢだと云はなくちやならなかつたのは何故でせう！

王　それがなぜだと云ふのか？　（ちよつと考へて急に又腹をたて）え――つ！　わしが貴樣に訊問されてるのぢやないぞ！　貴樣がわしに訊問されてるんだ！

譔　そりやさうです。ですが王樣にやあの赤つ鼻の烏老おやぢの極道ぶりが分らないから情ないつて云つてるんです。あいつの倉はどうして建つたんです。あいつの金はどうしてたまつたんです。

王　あいつは仲々辛抱なおやぢだ！

譔　だから王樣。情ないんですよ！　分らねえな本當に！

王　それにあのおやぢはわし達を尊敬する事を知つてをる！

譔　尊敬もおべつかもけぢめがつかないほど王樣は耄碌してるんですか？

王　（どなる）わしはまだ耄碌なんかしてやせん！

譔　だから云ふんですよ。あんな極道な赤つ鼻を生き返ら

せるのは私をこゝへひつぱり込んだと同じに職權濫用だ、とんでもない瀆職だつて云つてるんですよ。そりやあいつは村長で地主で金持ちだからお賽錢の高は大したものに違ひありません。死んだ時の佛事や大王樣への御機嫌伺ひはなみ大抵のもぢやないにきまつてます。ですがあいつの生きてる時貧乏人をいぢめた事は大したもんです。そんな極道ぶりが帳消しになるなら御賽錢が賄賂ぢやありませんか！　金銀これ何ものぞ！　（と自分のもつてゐたありつたけの錢をその邊におつぽり出して汚いものでもすてた時の樣に手をはたく、鬼達、目を丸くして錢を見る）

明法官　（王にさゝやく）　王樣、こいつの申す事には仲々味がございます。

王　（唸る）　む――何者にも恐れぬこいつの肝つ玉には少少驚いた！

譔　そこで王樣！　お賽錢の高にかゝはらず正は正、邪は邪ではありませんか！　正しい道のために惡口したものの舌を拔いて邪をかくすためにこびへつらふ奴等を甘く御覽になる樣では地獄に何の權威があるものですか。そんな地獄なら、やめておしまひなさい。

王　（むきになつて）　わしは今更地獄をやめようとは思はん。

譔　そこで天命のつきた烏老を娑婆へ歸したのと私をむりやりこゝへひつぱり込んだのとを一體どうして呉れます王樣！　さ！　それでも私の舌をお拔きになりますか！

王　（唸る）む――（明法官にさゝやく）こいつちよつと厄介者をひつぱり込んだな！

明法官　こいつの云ふ事は仲々道理にかなつてますから王樣の一時のお怒りを一つお納め遊ばしてこいつをも一度娑婆へ歸し、逆に地獄の裁判明かなる事を宣傳させた方がよからうと思ひますが！

王　ふむ。それもよからう。（さて譔に向つて）　こりや令狐譔！　貴樣は仲々面白い奴だ！　貴樣のその意氣に免じて今日は放還してやる、有難いと思つて歸れ！

譔　（踊り上り）　や！　ではお許し下さいますか？　こりや有難い。それでこそ閻魔大王樣だ！　所で――（困る）王樣！　あいにくと私には道が分らないのですが！

王　こいつ仲々現金な奴だな！　こら鬼！　こいつをもとの所へ連れて行け！

鬼A　かしこまりました。（譔に）　さ！　一緒に來い。

譔　（二三歩行つてから急に考へなほした樣に）　王樣！　こゝでも一つお願ひがあるのですが！

王　何だ。

譔　どうせこゝまで來たついでゝすが、どうか一つ地獄を見

せて頂けませんでせうか!?

王　こいつ仲々圖々しい奴だ！　見てどうするのだ。

譔　私は天命を全うした上は極樂へ行くものですから何かの參考のためにこの機會に拜見しておきたいのです。

王　こいつ益々驚いた奴た！　こんな奴は初めてだ！（明法官に）どうしたものだらう。

明法官　かまはないと存じますが。

王　よし！　では特別に貴樣にだけ見せてやる！　歸る途中で鬼について見て行け！　もう用はない！

譔　有難うございます。（と一禮して鬼と一緒に去る）

王　人間も近頃は仲々甘く見て居られん！　わしはすつかり喉がかわいてしまつた！　水をもて！　水を――

――暗轉――

## 第三場　地獄へ行く道

はなみちから鬼Ａと令狐譔と出て來る。スポツトが一つ彼等を照すのみあとは暗黑てある。

鬼Ａ　全く貴樣は命冥加な奴た！　あんなに火の樣に怒り散して手のつけられない王樣に許されて歸るなんてさ！　今日の王樣の怒り樣つたらなかつたぜ！

譔　だけど何てつたつて俺はこゝへ來る人間ぢやないんだ！　僕は天道にそむく樣な事はしてゐない、俺の許されるのは理の當然だよ！

鬼Ａ　理窟が通つて仕合はせだよ。（せゝら笑ふ）だがお前の顏つたらなかつたぜ！

譔　そりや誰だつて驚くさ。それに酒も可なり醒めたからな！　だがやつぱり道理がへこんぢやならない！　理をへこませて恐れ入るなんぞは！　それこそ地獄と云ふもんだ。だが王樣はおつかない顏の割には氣がいゝな！

鬼Ａ　さうともさ！

譔　たゞ少しぼんやりだ！

鬼Ａ　しつ！　又あすこへ歸りたいのか！

譔　やつ！　こりやどうも！

鬼Ａ　然し俺達の勤めもなみ大抵ぢやないぜ！

譔　さうだらうな！

鬼Ａ　本當よ。ろくな奴あ來ないからな！　それに千年も前から同じ樣な奴ばつかりだ。少し變つた奴も來ないもんかな。

譔　そりや王樣がちよいと古いからよ。王樣の頭さへ新らしくなりや地獄行きも極樂行きもがらつと種が變るだらうさ。

鬼Ａ　さうかな。

譔　だから俺は參考のために一番通俗的な所を見せて貰ひたいね。

鬼A　と云ふとどんな所だい！
譔　つまり例へば嘘つきとかぬすびととか、姦通とか云ふ
所をね！
（このあたりで幕の中から妙な音樂が聞えて來る。）
譔　や！　何か聞えるね。
鬼A　いよ〳〵地獄さ！
譔　さうか。何だかかう遠くに天竺の奇妙な建物でも見え
さうな氣がするね。
鬼A　さ！　內へ案內しよう！
譔　大丈夫かね！　又出て來られるね！
鬼A　心配するな！　俺がついてゐる！
（二人幕の中へはひる。）

## 第四場　地　獄

舞臺は色々な風にしきられてゐる。鬼は一々その扉をあけて見せるのである。が、この場面は決して觀客を恐怖させたり不快を感じさせるものではない。むしろ假裝舞踊會に近い感じを與へた方がよいのである。さつきからの音樂はやはりこの舞臺を支配する。
鬼Aに導かれて令狐譔がやつて來る。

鬼A　（第一の扉を開く）　こゝが舌をぬく所だ。
（鬼CとDががんばつてゐる。鬼Cが書き物をひろげゐる。）
鬼C　（宣告文を讀む）　元外務大臣成令言!!
成令言　（現はれる。彼は非常に立派な燕禮と輝く大臣の服をつけ數個の勳章を下げてゐる）
鬼C　（宣言文を讀む）「元外務大臣成令言は一介の小官から大臣の榮職を得るまで無慮四萬八千の嘘を放言してゐたものである。その上暗殺される前公に發表した賠償費問題の辯明及び彼が職務とした外交の辯舌中に六萬三千の嘘を發見する。堂々たる外交、邸宅、及びその妻妾はその嘘の中から湧いた蟲同然のものである。これ等の嘘を通算して以て慣例によりその舌を拔くものである。」
鬼D　（大臣の口をあける）
鬼C　（大きな釘拔きで舌を拔く）
譔　こりや仲々しつかりしてるね。この調子で行くと地獄萬歲だね！
鬼A　だが外務大臣つてやつはこりや慣例だからね！
譔　さうか！
鬼A　見ろ。あの拔いた舌を！　立派に二枚あるんだから！　こゝで拔いて見ればちやんと分るからな。
譔　なるほどね。こりや面白い！
鬼C　（再び宣告文を讀む）「……元嘉興の遊女蘭英！」
蘭英　（すてきな美女、しな〳〵と出て來る）

鬼A　（扉をしめると）

讃　おい！　だめぢやないか！　これを見せて呉れ！　これをさ！

鬼A　同じ事だ！　皆同じ事だよ！

讃　惜しいな！

鬼A　勝手な事を云ふな！　見せるものだけ見ておけ！

（第二の扉を開く。と、美しい若い――全く惚れ〴〵する様な若い女と青年が抱き合つてはなれないので鬼Eが面喰つてゐる）

鬼E　こら！　はなれてしまへ！

女　はなれるもんか！

鬼E　はなれろ！　この不義者めらが！

女　不義だつて！　不義とあ何だよ！　この糞鬼め！　これが靈肉一致の法悦だ。

鬼E　えつ！　分らなきやも一度云つて聞かせる！　貴様は烏老様の第九番目の夫人だ！

女　あゝ、それにちがひないよ！　それがどうしたんだい!!

鬼E　貴様の抱いてゐるのは烏老様ではない！

女　あゝ！　さうだとも。あんな砂糖キビのしぼりつからみたいな小父さんでたまるものか！

鬼E　えゝつ！　けがらはしい！　この姦婦！

女　何をつ！　姦婦だつて？　この盲鬼！　ぢや烏老は何だい！　あいつあ あたしの親に金を摑ませてあたしを第九番目の奥様にしたんだ！　あいつこそあたしを強姦したんだ！

鬼E　（顔まけして汗をふく）けつ！　けがらはしい！

讃　こりや情死した烏老おやぢの第九夫人だね！

鬼A　さうだ！

女　あたしは初つからあの赤つ鼻はきらひだ！　この人が好きだ！　（益々抱きつく）

鬼E　こら！　はなれろ！　（汗をふき奥に向つて叫ぶ）おい！　誰か手つだひに來て呉れ！　來て交代して呉れ！　俺あ少し氣が變になつた！

鬼A　（扉をしめる）

讃　（驚いてゐたが）こいつあちよつと考へものだ！　（と頭をひねる）

鬼A　女つてやつにはかなはないよ！　地獄さわがせだ！　戒律を破つた尼様なんか手にをへないぜ！

讃　さうかな！

鬼A　（第三の扉をあける。一人の小男がわめきながらあばれてゐる）

小男　そりや無理だ！　無理だ！

鬼F　（どなる）いゝや、貴様はたしかにぬすんだ！　烏

老様の芋をぬすんだ！

小男　それにやちげえねえ！　だがその芋あ何だ。倉の中に山ほどある芋の中のたつた十八だ！　十八盗んだつて倉の中にやまだ山ほど殘つてた！

鬼F　俺は盗んだ事を云つてるのだ。

小男　俺の畑は洪水で流れちまつた！　烏老の旦那の地所だ！　俺の芋はどこへ行つた！　俺の芋は天道樣が盗んで行つた！　だから俺あ天道樣の代りに烏老旦那の芋をぬすんだ！

鬼F　貴樣はその罪によつて……

小男　いゝや！　その前に俺の芋を盗んだ天道樣に會はして吳れ。俺あ聞きてえ事がある。俺達あ腹がへつてた。子供も女房もよ！（泣く）子供の可愛くねえ親があるか！　人間喰はずにや生きてられねえ！　烏老の旦那無慈悲で俺に芋を吳れねえだ！　俺あ立派に芋を盗んだ！だが俺あ喰はねえ！　女房も喰はねえ！　皆子供がくつた。だが子供の方が先にくたばつた。烏老旦那の倉ん中にや芋あ五萬とある！　芋あ何のためにある！　芋あ人を喰ふものか！　人が芋を喰ふものか！　俺にぬすつとさせたな誰だ！　俺の畑を洪水でもつてつたなあ誰だ！天道樣か！　芋かどつちだ！

鬼F　貴樣はその罪により手をもがれなければならない！

小男　そんな馬鹿は云はねえもんだ！

鬼F　ちやんと規則に出てゐる。（書きつけを見せる）

小男　そんな馬鹿な規則はねえ！

課　さうだ！　全くだ！

鬼A　これ！　さわいではいかん！

課　だが君、こりや全く不法だ！

鬼A　法はまげるわけに行かない！

課　あの男の方が理窟がある。俺はあの男に味方をする！

鬼A　その罪をにくむのである。

課　ちえ！

鬼F　覺悟いたせ！

小男　俺あ承知しねえ！　覺悟なんかしねえ！　無理だ！助けて吳れ！（と云つてあばれながら兩手をもがれる）

課（思はず小男へ加勢に行かうとする）

鬼A　これ〳〵！（扉をしめる）

課　こりやいけないよ！　俺もどうもこんな事はありさうな氣がしてゐたんだ！　だから見せて吳れつて云つたんだ！　こんな馬鹿な事はないよ！

鬼A　だが盗人は……

課　一口に盗人と云つてしまふからいけないんだよ。あいつらは本當は極樂行きでなくつちやいけないんだ。だから閻魔樣は古いつて云つてるんだよ！

鬼A　そんな事を云つたつて俺には分らない。俺達はたゞ規則通りやつてるだけだ。

譔　歎かはしい事だ！　一そ地獄なんてない方がいゝかも知れない！

鬼A　とんでもない！　ぢや俺達あ何をすればいゝんだ。俺達あどうなるんだ！

譔　俺は家へ歸つて考へるよ！　こりや閻魔様のせゐか！　地獄のせゐか！　それとも我々の世界――即娑婆のせゐか！

鬼A　よく考へて呉れ！

――暗轉――

## 第五場　令狐譔の家

第一場と同じ。たゞし第一場は夕方であるが今は夜明けてある。

鬼Aと令狐譔が登場する。

鬼A　おい。こゝまで送つて來たらもう大丈夫だらう！

譔　やあ！　なるほどこりや家へ歸つて來た。

鬼A　ぢや俺は歸るぜ！

譔　やあ！　だが金はすつかり無くしたから何もお禮は出來ないよ。酒でいゝなら飲んで行き給へ！　（と徳利を出す）

鬼A　や！　こりや有難い。（と徳利からラッパのみにのんで）ぷーつ、いゝ心持ちだ！　だがお前こんだあ、どなりちらして呉れちや困るぜ！　俺あもう歸るけども！

譔　分つた！　分つた！

鬼A　ぢや達者で暮せよ！

譔　やあ！

（鬼は去る。――暗くなる――やがて明るくなるともう朝である。ごろ寢をしてゐた譔ふと起き上りキヨロキヨロとあたりを見る。第一場に出た近所の男が又前の樣にあわたゞしくやつて來る。）

男　先生！　先生！　（はひつて來る）　あれ！　もう起きてらあ、珍らしい事があるんだな。

譔　何だい！　朝つぱらからあわてゝさ！　だがどうも不思議だ！

男　いやあ！　もう私は昨日の不思議を取り消しに來たんですよ！

譔　いや何ね！　俺は今地獄から歸つて來たばかりなんだよ！

男　えゝ？　（とあきれる）

譔　俺は閻魔大王の前で啖呵を切つて來たんだ！　あの赤つ鼻を生き返らすのは職權濫用だと云ふ事についてね！　それから地獄を見學して來たんだ。

男　え？（一層あきれる）さうかなあ！

譚　そして鬼が這つて來たんだ。（徳利をふつて見て）はらこの通り飲んで行きやがつた！

男　いやね！　あの赤つ鼻はゆうべの中に又くたばつちまひましたよ！

譚　あたり前さ!!

男　先生にやかなはねえな！　いやに悟つた樣に云ふんだもの！

譚　さうさ。つまり君！　地獄の裁きを最も完全にする方法はだね！

男　え？

譚　つまり完全な地獄を存在させる事については閻魔の頭の古い新しいもよりだね。

男　へえ！

譚　つまり地獄のこの問題は君、閻魔一個の問題よりもこの現世をだ！　我々の生きてゐる現世を完全にするかしないかと云ふ事できまるんだね。つまり現世を完全にしなければ地獄はでたらめ極まるものになるんだよ！　あゝ！

男　何だか知らねえが私あ赤つ鼻の死んぢまつたのを知らせに來たんですよ。

譚　（徳利をさし出して）この事について君に話して聞かせるから酒を買つて來て吳れ給へ！

男　へえ？　朝つぱらからお酒を？

譚　あゝ、どうもやつぱり考へて見ると現世の方がでたらめすぎるよ。だから地獄だつていきほひ……

男　（あきれて）先生！　變ですぜ！（のぞき込む）

譚　うん！　だからこれは一人閻魔の問題でなく我々全體にかゝはる問題だと俺は君に云ふね。あゝ！　（幕下り初める）

男　へえ！　ですがやつぱり先生！　一寢入りした方がよかないかなあ！

――幕――

# 活動狂時代（七景）

人

篠田
良子
篠田の妻
久保田
若い女優
ファンの青年
同　女
門衞
その他劇中映畫に出る人々

## 第一景

活動寫眞撮影所の一隅。

衞門に近い日當りのよい棚の所。門の外にはポプラーの並木があつてのどかに晴れた空が青々と見える。

ポカ／＼と日の當つてゐるこはれたセットのあとへぼんやりと腰を下して篠田と良子が日向ぼつこをしてゐる。閉ざされた門の所で小僧と女中風の女が中を一生懸命にのぞき込んでゐる。

遠くのステーヂの方から落ちついたタンゴのレコードをかけてゐるのが響いて來る。篠田が、ぼんやりとそれに耳をかたむけ——ふく口笛で會はせてゐる。ふと、一人のモダンスタイルな青年がやつて來て、門の所から内をのぞき込む。

一人の女優がはでな姿でしやなりしやなりと門をはひつて通りすぎる。と、青年は決心した樣に門衞の所へ行く。

青年　あの、すみませんが所長さんにお目にかゝりに來ました。

門衞　御用件は？

青年　用件はもう所長さんの方へ度々申しておきました。お目にかゝれば分るんです。

門衞　はあ、あなたは昨日も見えた方ですね。

青年　さうです。だから、どうか所長さんに會はせて下さい。

（それで、篠田と良子はこの青年の聲に耳をかたむける。）

門衞　この前も申し上げた通り、紹介狀でもおもち下さらないと困るんですよ。

青年　だから私も云つてるんです。お目にかゝればこの私が、如何に熱誠を以て日本の映畫のために働かうとしてゐるかお分りになる筈です。

門衞　で？　御用件は？

青年　つまり、つまり、私は日本映畫のために働きたいのです。無報酬でもいゝのです、私は決心してゐます。

門衞　やあ！　俳優志願ですか！

青年　やあぢやないですよ。これは私の終生の希望です！

門衞　俳優志願者はお斷りですね！

青年　どうしてですか！　あなたに私を斷る權利があるのですか！（少々演說口調で）　私は俳優として立派にやつて行ける自信をもつてゐます。私は牧場で夢の樣な戀をさゝやく場面や一人勇しく惡漢の手からヒロインを救ひ出す場面を立派にやつてのける自信をもつてゐます。そも／＼日本の映畫には人物が少いです。君は今僕を斷るけれどもこれがそも／＼將來の日本の映畫のために非常な番狂はせの原因になるかも知れないと思はないのですか！　天才を發見出來なかつた責を君がもたなければならないと云ふ事を！

門衞　とにかくお斷りします。さう云ふ方面は雜誌社の方へいらしつてお話し下さい。

青年　だけど君！　君は映畫を愛さないのですか！　君には俳優を發見する目がない！

門衞　私は、あなたの樣な方をお斷りするためにやとはれてゐるのです。お歸り下さい。

青年　君！

門衞　お斷りします。

青年　君！　それはあんまり情ないですよ！　君！

篠田　良ちやん！　どうだい！（苦笑する）

眞子　日本の映畫に番狂はせが來るはよかつたわね。

篠田　本當だ！

眞子　皆、あの氣でやつて來るんだわね。

篠田　全くだよ。（吐息する）　だけど、笑ひ事ぢやない樣な氣がするよ！　全く俺もずゐ分考へることがあるよ。俺はすばらしい天才だ！　だが誰もまだ俺の天才を發見して與れないんだ！　一體全體この會社の監督は天才を發見する目がない……俺は時々さう思ふよ！

眞子　私もよ！

篠田　君もか……。（間）　だが、俺は誰が云つたんだか忘れたが、現代では天才の飛躍はほとんど空想みたいなもんだと云ふのが本當かも知れんなんて、考へる事もあるんだ。つまり俺達ゃ迷つてるんだね！　いくら天才だつてあたりが天才なんかいらなきや仕方がない話だ。（欠伸する）あー、あ、いつまで待つてりやいゝんだらう！

うだつがあがりやしない。

眞子　全くね！　まるであたし何だか近頃氣ぬけがした様よ。

篠田　本當だ。（間）支那人なんてうまい言葉を云ふもんだな。「ヒニクのタン」「髀肉の嘆」なんてな！

眞子　あたし、こゝに入所した時の事を考へると今でも心が踊るんだけどなあ！　鬼の首をとつた氣もちつてきつとあんな氣もちよ！　あたし、全く堂々とあすこの門をくゞつたわ。まるで日本の映畫界はこのあたしの兩方の肩にのつかつてゐる様な重大な責任を感じてゐたわ！

篠田　こゝにゐる三百人の大部屋の役者は皆、さう思つてゐたにちがひないよ。（考へる）三百人――全くずゐ分ゐやがるんだな。この他に自分で役者になりたい奴や天才だと思つてゐる奴等一體何萬人ゐやがるんだらう――外にゐる何萬人はこゝにゐる三百人を羨しがつてるだらうし、こゝの三百人は大幹部の五六人を羨しがつてるだらうし！

眞子　本當にね。

篠田　立身出世なんて俺達にや空想ぢやないのかな！

眞子　空想ぢやないわ！　だつてカフエーの女給だつた杉野さんだつて今ぢや大スターだもの……

篠田　ありや初期だつたせゐかも分らないよ――考へて見ると今の世の中ぢや一職工がロックフエラーになるなんて事は空想なんだからな！

眞子　あんた絶望してゐる？

篠田　さあね。（欠伸する）いゝお天氣だな！　こんな日もこんな汚い所へ來てあてにもならない運をまつてるなんて妙な生活だよ――街へ行きたいな！　郊外はいゝなあ！　君！　行かうか！

眞子　どこへ……

篠田　田園都市の方でもいゝや……こんないゝお天氣に散歩するのは全く魂の洗濯になるぜ！

眞子　でも何か役がつくかも分らないわ！

篠田　そりやまあ、かうして待つてるにこした事はないだらうが……こんなたよりない生活はたまらないなあ！

眞子　でもさつきの人達の事を思へば仕合はせだわ。

篠田　仕合はせ……か！（口笛を吹くが、ふと）どつちみち俺なんざ仕合はせぢやないなあ！

（一人の大スターがその夫である所の監督とはひつて來る。）

スター　あゝ、さう！　あたし今日歸りにホテルへ廻つて行つていゝ？

監督　何だい。

スター　お茶の會よ。

監督　さうか！
（二人は通りすぎる。）
夏子　（うらやましさうに）本當にあたしも早くスターになりたいなあ！
篠田　女はいゝよ！　女はとくだよ！
夏子　なぜ？
篠田　いゝ監督を捕へちやいばいゝぢやないか！
夏子　ずゐ分ね、この人！　あたしなんぼなんでも藝以外でスターにならうなんて思やしませんよ！
篠田　そりや偉いもんだね！
夏子　ほんとよ！
篠田　だけど俺、空想するね、俺もあのすゞ子さんの様なスターをワイフにしてゐたらすばらしいだらうなんてね！
夏子　男つてそんなもんね。
篠田　そんなもんて、何だい！
夏子　そんなものよ。マダムがあるくせに！
篠田　さうか！
夏子　マダム、どう？
篠田　だめさ！（吐息する）やんなつちまふな！　俺、あいつを田舍へ歸しちまはうかとおもふよ。
夏子　およしなさいよ。可哀さうに。
篠田　可哀さうなのはこつちだよ。あいつは俺の事を空想家だつて云やがるんだ。あなたは空想にひきずられてあたしの生活までめちや〳〵にするつて云やがるんだ！
夏子　あんたマダムをなぐる？
篠田　なぐる事もあるよ――自分でも迷つてゐる最中に自分の仕事を輕蔑されるのは不愉快だからね！――俺達の生活はみぢめだよ。今日だつてその通りさ。俺達の心持ちはだん〳〵はなれて來てるんだよ！　あいつは俺に田舍へ歸つて小學校の教師でもしろつて云ふんだ！
夏子　そりやさう思ふかも分んないわよ。
篠田　だけど、俺は俺の可能を信じるよ。ワイフより何より俺は俺の可能を世界の前に見せてやりたいんだ！　俺は人間は野心をもつてゐゝと思ふよ。
（その時、時代劇の扮裝をした役者達がカメラをかついだモダンなスタイルの連中と門を出て行く。）
篠田　（それを見送つてから）ね、良ちやん！　今夜又街を歩かう！
夏子　でも……マダムに惡いわ！
篠田　惡かないよ。俺にだつて少しは氣のはれる時間があつていゝよ！　俺は君と話したり歩いたりしてゐる間だけが氣が晴れ〴〵するんだ！
夏子　おや〳〵！

篠田　(相手を見もせず)　俺は君がすきだ！

眞子　大した事を云ふわね！　でもいゝわ。つき合つて上げるわ！

(そこへ監督の久保田が來る。)

久保田　おい！　篠田君！　そんなところで甲羅をほしてたのか！

篠田　(急に立ち上る)　は！　何ですか？

久保田　君！　今度俺の方でやつて貰ふよ！　實あね。變な喜劇なんだ！　色々考へたんだがね、君のタイプは俺、喜劇にいゝともんだ。君！　出來るだらう！

篠田　は！

久保田　つまりキートンとランドンの間を行つてもらひたいんだ！　もつともつと大變なやつだがね！　俺今日所長と話して君を拔擢したんだよ。

篠田　有難うございます！　助かります。

久保田　(篠田の肩をたゝいて笑ふ)　助かりますはねえだらう……ハハハ……。ぢやたのむぜ！　あした本讀み！　その時又……

(久保田は去る。)

篠田　(嬉しさあまつて小踊りする)　俺のは空想ぢやなかつたよ！　俺のは現實だよ！　(それから又腰かけて口笛をふく。すぐやめて心躍る如く)　良ちやん街へ行かうぜ！　行つて歩き廻らうぜ。今夜！

眞子　おめでたう。(淋しげに)　いゝなあ！

篠田　俺は、何だか、初めてあの門をくゞつた日の心持ちがよみがへつて來た樣だ！

眞子　小村組の撮影見に行かない？

篠田　(微笑をたゝへてあふむけに寢て)　僕はこゝにゐるよ……いゝ空だなあ！　實にいゝ空の色だなあ！

眞子　ね！　篠田さん！　あんたスターになつたら私を相手役に選んでよ！

篠田　よしきた！　ひきうけた！

眞子　本當よ！　本當よ！　ゆびきり！　(ねころんだ篠田の手をあたゝかく握る)

——幕——

## 第二景

常設館のスクリーン、それに次のシナリオによる篠田の演じる映畫が音樂の伴奏とともに映寫される。

(字幕)　玉手箱　(溶明——暗)

(字幕)　原作脚色　北村小松
監督　久保田忠
撮影　青山順二　(溶明——暗)

1 （字幕） **浦島伯爵家の虫干し** （溶明——暗）
（溶明） 浦島伯爵家の庭。家寶と見える一ケの古びた玉手箱が蟲干しに出てゐる。

2 籐の椅子によつて家令がゐねむりをしてゐる。

3 木立ちのかげから妙なやせた男の顔がヒヨイと玉手箱の方をのぞく。

4 同じうゑこみの所から小男の顔がヒヨイと玉手箱の方をのぞく。

5 屋根の煙突の所から海馬のキバの様に八字ひげをブラ下げた男がひよいと玉手箱の方をのぞく。

6 家のかげから篠田の扮した男が妙な格好で玉手箱の方をのぞく。

7 この四人の男（泥棒）の各位置から見た玉手箱のフラツシユ四ケ。

8 篠田がそつと玉手箱の方へ忍んで行かうとする。ふと仰天してひきかへす。

9 人の足音が聞えたのである。（足大寫）

10 妙な男が木立のかげへかくれる。

11 同じく小男がうゑこみの中にかくれる。

12 屋根の上の八字ひげは煙突の中へかくれる。

13 篠田が再びそつと顔を出す。

14 浦島伯が家令の傍へ來る。そしてどなりつける。

（字幕） **こら！ 家寶を前にして眠るやつがあるか！**
家令はとび上る。ぺこぺことあやまる。

15 そして家令は玉手箱を大事に家の中へ持つて行く様に命ぜらる。家令はうや／＼しく玉手箱をさゝげ、伯爵はその後からひげをしごきつゝ家の中へはひる。

16 屋根の上。煙突から八字ひげの泥棒がそつと首を出す。

17 篠田。ニヤリと笑つて顔をひつこめる。（溶暗）
（字幕） **そして夜になつて** （溶明——暗）

18 伯爵の室。（溶明）
伯爵はもうグー／＼眠つてゐる。（ダブル）

19 次の室。
次の室では家令が玉手箱に、つやぶきんをかけてゐる。眠くなる。コクリとする。驚くが、とど傍の椅子に腰かけてゐねむりをはじめる。

20 と、最先にマントルピースの所から八字髯の泥棒が顔を出す。とたんに驚いて顔をひつこめる。

21 ついたてのかげから小男の泥棒が顔を出し、玉手箱と家令の様子を伺ふ。と、これも驚いて顔をひつこめる。

22 そつと、カーテンのかげから妙なやせた泥棒が忍び出る。彼は、忍び足で一歩、一歩玉手箱に近づく。

23 彼の心臓がゴト／＼動いてゐるのが見える。（大寫）
24 彼は今や玉手箱をぬすまうとする。
25 と、家令が大きなくしやみをする。
26 それで仰天してやせた泥棒は目を廻し氣絶する。
27 家令は眠りつゞける。
28 と、今度はえたりかしこしと小男が、ついたてのかげから出て來る。
29 廊下の足音。（足大寫）
30 小男、驚いて卓の下にかくれる。
31 ドアを、そつと開いて篠田がしのび込む。そして家令の眠つてゐるのを見ると彼は大膽にづか／＼とやつて來て玉手箱を小わきにかゝへる。
32 マントルピースから顔を出した八字ひげはこれを見て口惜しがる。
33 篠田は悠々と、そこにある、葉巻をとつて、マッチをする。
34 （大寫）そのとたんに彼の足は、氣絶してゐたやせた泥棒の手をふむ。
35 やせた泥棒、氣がついて思はず

（字幕）**ド・ロ・ボ・ー**

36 篠田、仰天する。葉巻をおつぽり出す。
37 葉巻は爆彈の様にマントルピースの八字ひげにあたつて火をとばす、八字ひげは仰天してマントルピースからとび出す。
38 家令が目をさまして、仰天する。腰がぬける。
39 一同は各々それ／＼仰天する。篠田は最先に逃げ出す。
40 庭。――篠田が逃げる。あとを三人の泥棒が追ふ。
41 四つ角。
四つ角をまがるや篠田はいきなり一人の紳士とぶつかる。二人ともひつくり返つて氣絶する。所へ最初に追ひついて來た小男マンマと玉手箱をせしめる。他の泥棒が追つて來るので小男はにげる。二人の泥棒が追つかける。
42 道。三人の追つかけ。
43 家令が腰をぬかしてる所へ伯爵が來る一部始終を聞いて大に怒る。

（字幕）**玉手箱をうばひ返して來いでないと之だ！**

と古風な刀をぬく。家令はすつとんで室を出る。
44 道。――家令が玉手箱をさがしに行く。
45 四つ角。氣絶してゐた篠田と紳士とが正氣に返る。喧嘩になる。珍妙なたちまはり、とゞ篠田が勝つて、紳士を、人形の様におつぽり出して悠々と去つて行く。

46 彼は、ふと玉手箱の事を思ひ出す。それでオートバイの様に無茶に走つて行く。(溶暗)

47 お宮の森。(溶明)
家令が首をつりかける。
（字幕）**主家への申しわけ……**
首をつる。とたん彼方にある發見をする。

48 お宮の境内。
三人の泥棒が、まんじともえとなつて玉手箱を奪ひあつてゐる。

49 家令、首を外さうと思ふが仲々とれない。デタバタする。

50 三人の泥棒の珍妙な玉手箱奪ひ合ひ。

51 そこへ篠田がかけつける。彼は怒り心頭に徹して、まづ小男をなぐりとばす。

52 小男はすつとんで行く。

53 そして、そこに置いてあつた古ぼけたうば車にぶつかるやその中へころがり込むと同時に車は勢を喰つて走り出す。

54 篠田とあと二人の泥棒のたちまはり。

55 首を外さうともがく家令。(フラッシュ)

56 小男のはまつたうば車は走つて行つてお宮の池の中へはまつてしまふ。

57 篠田は今度はやせた泥棒をけとばす。

58 やせた泥棒はすつとんで行つて、板塀へぶつかり、頭で塀をつきやぶつて上半身そこへめり込んでしまふ。

59 篠田と八字鬚が玉手箱の奪ひ合をつづける。とゞ三度篠田は勝つ。卽ち、八字鬚を美事にぶつとばす。

60 八字鬚は、すつとんで行つてお宮の所へ眠つてゐた大男のたちん坊へグイとぶつゝかる。大男は驚いて目をさます。八字鬚は、はづみを喰つて再び篠田の方へ行く。

61 篠田と八字鬚は再びとつくみ合ふ。

62 「何でえ!」大男はのそりと立ち上つて二人の方へ行く。

63 大男は懸命にわたり合つてゐる篠田と八字鬚を林檎でもたゝきつぶす様に簡單にはりたふす。そして珍らしさうに玉手箱をひろひ上げる。

64 首をつゝてゐた家令、やつと首をはづすが、勢つきて再び腰をぬかす。

65 大男は、もとの所へ來て珍らしさうに玉手箱を見、
（字幕）**何がへえつてやがるんだらう**
とひもをとく。ふたをあける。と俄然、玉手箱の中でマグネシユームがパツともえる——大男は仰天して氣絶する。

66 にはとりが朝の來るのをつげる。(溶暗)

(以上のシナリオを演出するにあたつては篠田の演技をづぬけて奇拔にする事である。)

—— 幕 ——

## 第 二 景

公園。ガス燈の光の青白い宵である。

新進篠田一郎主演、新作「珍型ヒステリー」全六卷と云ふアンドンを背負つた廣告屋が通りすぎる。やがて前とは段ちがひなさつぱりとした服裝をして、ボトンホールに赤い花をさした篠田と、これもかなり女優らしくなつた眞子とがむつまじく登場する。

篠田　驚いた……驚いた。あゝ、やられちやとてもかなはんよ。自動車なんか、たゝつこはす勢だからな！

眞子　大したもんね。全くだわよ。あんた、もう忘れてしまつたでせう。しよつちうダークステーデの横つちよで日向ぼつこしちやくさつてた事を！

篠田　忘れやしないよ。だから僕は御約束通り、君を相手役にするゐせんして上げたぢやないか！　今に君の人氣もすばらしく出るから！　まつといで！　さうなつたら、今度はこつちがよろしくたのみますぜ！

眞子　あんな事云つてるわ。——だけど、御あいさつつてやつはあんまり有難くないわね！　お金になる外は！(笑ふ)

篠田　あゝ、だけど人氣をとる上からは仲々いゝ事だよ。

眞子　何だか知らないけれど大したもんよ。あーあ……驚いた。こしかけませうよ。ね、あなた！

(二人はベンチへこしかける。篠田、ポケツトへ手を入れてタバコを探す。無い、三四通の手紙を摑み出す。それを見て、眞子は氣を利かして煙草を出してやり、マッチをする。この樣子は決して單純な友達ではない事を明に示す。)

眞子　又、手紙？

篠田　あゝ。

眞子　見ていゝ？

篠田　見てもいゝよ。

眞子　(手紙をとつて見る)「……私の敬愛する篠田樣……あなたの藝術は私の救ひの天使ですわ……」これも女のだわ。あんたは妙な役ばつかりやつてるけど素顏が素顏だから割りに女から手紙が來るんだわ！　(一つをしまひ、他を見る)「篠田さま、私、あなたの素顏を拜見して驚きましたわ。どうしてこの貴公子にあんな妙な姿がお出來になるでせう……もつたいないわ。……あの日からあたしもう映畫の方は見るのをよしてブロマイドを私

の大事た日記帳にしまつておく事に致しましたわ。……」
ちよいと！　いゝの？　え？　（しまふ）
篠田　知らないよ。
貞子　マダムはやくでせうね。
篠田　知らないよ！　誰の事でやくかね！
貞子　まあ！
篠田　ね、君……どこへ行かう。
貞子　まつすぐに歸らないの？
篠田　何を云つてんだい、俺達の世界は一軒や二軒の家の中ぢやないんだぜ！　俺は世界の篠田だ！　少くとも日本の篠田だ！　（笑ふ）
貞子　大したもんだわね。（笑ふ）
篠田　どこにしよう。
貞子　どこでもいゝわ。あら、人が來るわ。
（二三人の人が出て來る。）
A　おい！　篠田だ！
B　さうだ！　向うは東條貞子ぢやないか！
C　さうだ！　さうだ！
A　おい！　（ふり返り）おい！　來いよ！　早く！　篠田がゐる。
篠田　（貞子をさそつて立ち上る。そしてかなり氣どつた風に）さ！　行きませう！　も少し行けば車があるでせう！
（篠田と貞子が去る。人々は數歩おいて、ゾロ〳〵くつゝいて行く。）

——幕——

第四景

篠田の家。
青白い顏をした篠田の妻が針仕事をしてゐる。
醉つ拂つた篠田が歸つて來る。
妻　お歸んなさい！
篠田　天下の篠田樣がお歸りになつたんだ！
妻　（だまつて夫の顏を見つめる）
篠田　何を不景氣な顏をして見てるんだ！
妻　…………。
篠田　ちえ！　又メソ〳〵してやがら！
妻　ね！　あなた！　あなた、ちつとも恥かしくないんですか？
篠田　何がさ！
妻　そんなに醉つぱらつて歩いてさ。ならずものみたいに……（涙ぐむ）
篠田　ならずものみたいに？
妻　さうよ！

篠田　馬鹿！

（間。）

妻　あたしは恥かしくつてならないんですよ。

篠田　篠田一郎の妻でゐるのが恥かしいつて云ふのかい！

妻　あなたは、だつて、何になつたおつもりなの？

篠田　俺は一流のスターだ！　藝術家だ！　立派なもんぢやないか！　その妻が恥かしいなら早速辭職して貰はうぢやないか！

妻　……あたしはそんな事云つてるんぢやありません……あなたはあたしをいぢめてばかりゐらつしやるのね。貧乏な時は貧乏な様に、少し樂になればなつたやうに――それでもいゝわ。それでもいゝけどあたしはあなたがそんな事ばつかりしてゐらつしやるのが情ないわ。

篠田　何が氣にくはないんだよ。

妻　あなたの夢よ！

篠田　夢？　俺あもう夢なんか見てねえぞ！　お前はあの時分俺が出世するのを空想だと云つてメソ／＼云やがつた。出世すりやしたで夢だつてやがる。

妻　あなたは出世なんかしてゐません！

篠田　なに？　（かつとする）よし！　ぢや俺の名聲は何だ！　俺の地位は何だ！

妻　だから私は情ないわ。あなたはそんな夢を見る方ぢやなかつたわ。あなたは幻惑されてるのよ。あなたは、いつでも醉つ拂つてらつしやるのよ……私達はあんまり暗い生活ばかりつゞけすぎたんであなたがこんな事してらつしやるのも無理はないと思ふけど、あなたは今まで人間の生活など云ふものをこれつぽつちも考へてらつしやりやしないわ。人間の生活を忘れて生きてるのは夢だと思ふわ。あなたはあなたが私達全體の前に何だか！　あなたの藝術や地位が私達全體の前に何だか忘れてらつしやるわ。御自分だけの、御自分だけの享樂しか考へてらつしやらないわ。

篠田　俺は理窟を聞きに家へ歸つて來たんぢやないんだ！　俺の生活は、俺の天才を信じないもの にや分りやしない！

妻　何て事をあなたは考へてるのでせう！　あなたは、會社が作つた天才を本當だと思つてらつしやるのね。私は信じないわ！　あたしはあなたがあんな馬鹿々々しい活動の天才でなんかない方がいゝわ。營利會社の道化役者！　何て恐ろしい天才でせう。

篠田　道化役者？

妻　（涙聲て）えゝ！

篠田　俺は道化役者なんかぢやないぞ！　（立上る）悲劇役者の出來そこない奴！　俺はお前みたいなメソ／＼し

てゐる奴は嫌ひだ！　はつきり云つてやるが、きらひだよ！

妻　（だまつて子供の着物をぬひはじめる）

篠田　おい！　嫌ひだつて云つてるんだ！　（肩をつく）

妻　（涙にぬれた目て見上げる）

篠田　俺はお前なんかと一所にゐるのは御免た！　俺は選ばれた人間だ！　貴様なんかに輕蔑されてたまるものか！　貴様なんかに……（と出て行つてしまふ）

（妻はそれを止めもしない。涙ぐんだまゝ子供の着物をぬひつゞける。）

――幕――

## 第五景

アパートメントの眞子の室に通ずる廊下。ソファが一つ。ピンク色にシエードされた電燈。

篠田が蹌踉と登場する。もう夜ふけてある。彼は行つて眞子の室の扉をコツコツとたゝく。――返事がない。

篠田　（コツコツとたゝく）君……君……良ちやん……僕だよ……（再びコツコツとたゝく。――返事がない。ハンドルをとつて見る鍵がかゝつてゐる）……留守かな？……（彼は仕方なささうにソファへ行つて腰かける）

（長い間。）

（やがて、眞子の室の戸がソッと開く。そして眞子が顔を出してあたりを見る。）

（ソファーにゐた篠田も氣がつかない。眞子もソファーが物かげになつてゐると見えて篠田に氣がつかない。）

眞子　（小く、室の中へ）歸つたわ！

（その聲で、ふと、篠田は眞子に氣がつき、身をひそめる。）

（眞子の室から監督の久保田が出て來る。）

久保田　（眞子へ）仲々やるんだね！　だけどちよいと驚いた。

眞子　いやだわ……あの人何でもないのよ下の小野さんの室でコレ（と鼻さきを指てチョイとさはつて）でもやりに來たついでなんでしよ?!

久保田　ま、いゝや！　でもこんなとこめつかるとうるさいからな！　彼の方でも……

眞子　……だから今度、どつかへ連れてつて下さらない？

（と久保田の首に兩手をまいて顏をその胸にうづめる）

久保田　あゝ、いゝよ！　（と眞子をちよいと抱きしめて）ぢや、又！　（と去る）

眞子　お休みなさい。（と久保田を見送つて靜に室の中に

はひる）

ソフアーにゐた篠田、つと立ち上つて眞子の室へ近づき、戸をたゝかうとしてやめる、何か知ら醉もさめ氣もくぢけたかたちで再びソフアーへ行つてドカリと腰を下し、兩手に頭をかゝへて深くうなだれる。――長い間。やがて、廊下の電燈がパツと消えると、月の明りが窓から蒼くさし込む――時計がものうげに二時をうつ――

――幕――

## 第　六　景

第一景と同じ撮影所の一隅。

第一景の時と同じ樣に、篠田と若い淋しい顏の女優が坐つてゐる。篠田は新聞をひろげて讀んでゐる。門衞の所で第一景と同じ樣に一人の女が押問答してゐる。

女　……どうしても所長さんにおめにかゝれないのでせうか。

門衞　おことわりします！

女　私はこんなに、こんなに熱心ですのに、こんなにこんなに映畫に身も心も捧げてゐますのに。

門衞　お斷りします。お歸んなさい。

女　お願ひです！

門衞　だめです。

（それで女は涙ぐんで今度は門の所から內をのぞく。）

若い女優　……あたし方針をまちがへたのぢやないかと思ふわ。いつまで待つてゐても何にもなりやしないわ。

篠田　ふーむ。（新聞を見つゞける）

若い女優　あたし止めようかと思ふけど、止めたつて誰もう堅氣だと思つて呉れやしないわね。

篠田　ふーむ。

（その時、眞子が監督の久保田と意氣揚々とはひつて來る。篠田は新聞て顏をかくす樣にしてゐる。二人は通りすぎる。）

若い女優　……あたしも早く眞子さんの樣になれたらなあ……

篠田　皆、空想かも知れないよ。俺は近頃、時々我々と人生と關聯して考へる事があるよ！

若い女優　さう？（空想的に考へ込んでゐる）あたしに天才はないのかなあ！

篠田　こゝぢや我々の天才は何の關係もないよ。資本家が天才を作るんだ。

若い女優　あなたは、どうしてこの頃あすんでばかりゐらつしやるの？

篠田　馬鹿々々しくつて出來なくなつたんだ。だから役がつかなくなつてしまつたんだ。一體全體皆の見てるのは何だらう！　活動寫眞だ！　活動寫眞は資本家の事有だ。藝術でもなけや天才も必要ぢやないかも知れんよ。

若い女優　さうか知ら……

篠田　今に俺はきつと首になるよ。それだつて人生は一寸も不仕合はせになりやしないし俺を惜しんでも呉れやしないよ。俺と毎日顏を合はせてゐる、こゝの中の人だつてもう俺がゐなくつても何のさしさはりもないよ。俺は近頃時々さう思ふよ。俺達だつてもつと直接人生にかゝはりのある生き方をした方がよい……さう思ふよ。

（給仕が登場する。）

給仕　こんな所にゐたんですか？　篠田さん！　書とめです！

篠田　有難う！　（印を出して手紙をうけとる）

（給仕去る。）

篠田　（手紙を開いて見る）

若い女優　（小く歌を歌ひ出す）

篠田　（讀む）「お金を送つて下さい。子供が生れます……あなたは私を嫌ひだとおつしやつたけど、私はあなたより他にたよる人がありません。あなたの名譽で今お金が出來るなら、私はあなたの名譽を心から有難いと思ひます。――夢ではないと思ひますわ。あやまりますわ。私は今、とても苦しいのです。お金を送つて下さい……」

若い女優　（のぞく樣にして）奧さんから來たの？

篠田　（うなづく）田舍へ行つてるんだ！

若い女優　所長さんから借りるといゝわ。

篠田　うむ。（手紙をくりかへし讀む）

若い女優　（小く歌を歌ふ）

篠田　（默つて立ち上る、そして手紙をポケットへ入れて去る）所長の所へ行つて來よう。

若い女優　（欠伸をする）

――幕――

## 第七景

第三景と同じ公園。

夜である。

篠田が再び醉ひをおび、蹌々踉々と登場する。

篠田　（つぶやく樣に）……君には金を貸しすぎてゐる……何で返すつもりなんだ……會社は金貸しぢやない。それに君はもう下り坂だ！　……それもよからう……天才だつて何だつて……所長の前ぢやペシヤンコだ……俺の名譽か……營利會社の道化役者か！　（ベンチへ腰を下すそして再びポケットから手紙を出して見る）「……

お金を送つて下さい……子供が生れます……あなたの名聲で今お金が出來るなら私はあなたの名聲を……心から有難いと思ひます。……夢ではないと思ひます。あやまります……」（手紙をポケットに入れる、そして、も一度、吐息の樣に）……夢ではないと思ひます……あやまります……（うなだれる）

――幕――

# 北村壽夫篇

社會喜劇　**駙馬哲學**（六幕）

當世立志傳

場景目次

第一幕
（1）指南所卒業式
（2）運は拾へ
第二幕
（1）茸と茸
（2）富豪の居間で
（3）ある取引
（4）戀
第三幕
（1）解散々々
（2）小夜曲
（3）密談
（4）獵官運動
（5）奥さまの招待
第四幕
（1）陰謀
（2）失意の人
（3）不意の訪問
（4）假面を脫いだ猿
（5）あひびき
第五幕
（1）現物仲買店
（2）離れ座敷
（3）辯護士商賣
（4）誰も知らない
（5）夜
（6）その深夜
第六幕
（1）株主總會
（2）帝國ホテルにて
（3）看板書替

**登場總人物**

指南所の先生
事務員
ある男
學生多ぜい
伯爵夫人

その令孃
乞食多せい
伯爵
富豪
書生
新聞記者
第一の夫人
第二の夫人
第三の夫人
第四の夫人
第一の暴力團員
第二の暴力團員
支配人
仲買店の人々
姐さん
小間づかひ
富豪の妻
その息子
女中
若い職業婦人
無頼漢
第一の客
第二の客
第三の客
第四の客
藝者三人
若い辯護士
寫眞師
株主總代數名
重役達
會係係
少年
親族の人々、來賓
ボーイたち、寫眞師
入學志望者たち

## 第一幕

### （1）指南所卒業式

指南所の先生
事務員
ある男
學生多勢

建物の入口に、「駙馬哲學指南所」といふ墨痕鮮かな看板がある。卒業式のことて、室内に貧弱な萬國旗の裝飾。三寶に餅が乘せてある。すべては嚴肅に冷たくアカデミックである必要がある。學生たちは並んでゐる。間——

事務員　（咳ばらひをして）　さて、當指南所の第五十六回卒業式を始めます……。順序第一——全學生諸君校歌合唱……（先生がオルガンを彈く。學生合唱——）

ああ有難き御代なれや
我らはこゝに先生の
熱き敎にみちびかれ
出世の道を學ぶなり

四民は今や平等ぞ
世渡る術に優れなば
畑うつ農夫の小倅も
大臣宰相おもふまゝ

人と生れし人は皆
勳章爵位、戀と金
願はぬものはあらざらん
プロレタリアもブルジョアも
あゝ有難きことなれや
我らはこゝに立身と
出世の學をまなぶなり
この幸ひを何かせん
この喜びを何かせん

この幸ひを何かせん……

（間。）

事務員　（咳をして）　順序第二、先生の卒業生に對する訓示……

（老先生、壇にのぼる——。）

事務員　諸君、謹聽をねがひます。

（謹聽々々と叫ぶものあり。）

先生　（威儀を正して）　えゝ。本日、當駙馬哲學指南所の第五十六回卒業式を擧行いたしますることは、ひとり私のみならず衆共に喜ぶところの大いなる喜びでございます。（拍手の音あり）　この時に際して、些か感ずる所存をのべ、卒業生に對する餞と致しますると共に、また、在學の諸君に對して、當指南所の方針、希望、心得に就

いての大切なる注意となすことを得まするならば、私の本懐これに越すことはございませぬ。さて――諸君、諸君は、笈を負うてこの指南所に研鑽の功を積んで居られます。が、古い學生諸君は言はずとするも、やゝもすれば、新入生の方の中に、未だ、よく、本指南所の性質、教授課目の意義をのみこんで居られない人があります。私は、まづ、この時に際して、それに一言を費したい。（水を飲む）そもそも、この駙馬哲學とはいかなるものか。駙馬とは副馬、即ちそへ馬のことで、養子といふ意味につかはれてゐますが、從つて、その意義の轉化は、巧言令色、よく主人の前に尾をふつて、從順を裝ひ、お氣に入りとなり、遂には權勢金權の庇護をかち得、着々として社會に立身出世の道を拓く怜悧なる人物を指して呼ぶところの名稱をなすものであるのであります。駙馬――しかり、權門の愛寵を娶つて以て閨門の基礎を固むる者も、また、この範疇に入るのであります。お簾の塵を拂ひ、鞄を持ち、汲々として勢力に媚びる者悉く駙馬に非ざるは無し。駙馬とはこれであります。然らば、駙馬哲學とは如何。他なし。駙馬道の科學的研究、その哲理の思索的實證的採究の學問である。即ち、是を哲學史的考察よりすれば、ジエームスの實證派哲學より出でて、そこに多分の民族的乃至國民的精神特質を加味按配して成りたる新興哲學でありまして、現今、最も時代各方面の精神と合致いたしまするため、宛然各派哲學の帝王なりと稱へらるゝに至りました哲學上の一派であります。（水を飲む――）駙馬哲學指南所は、即ち、以上陳べました學問の研究所である。このことは、改めて申上げる必要があるまいと存じます。然らば、何故に、この學問が、かくも注目せられ、かくも今日の隆盛を致すにいたりましたか。その理由は自己の掌を指すより容易にして明らかであります。即ち、こゝに社會構成の規約上、牢として拔くべからざる重大なる約束がある。椅子の數の制限――例へば諸君もご承知の通り、總理大臣の椅子は一個であり、私たちは、いかなる手段を以てするも、これを二個或ひは三個とすることができません。代議士の總數は定められ、重役の數も限りがあります。その他、いかなる微賤なる階級に渡りましても、この公約は守られてをります。考へてもごらんなさい。かの許可地に於ける待合、料理店、藝妓置屋の數すらも、聞くところによれば、聞くところではです……（拍手、ひやひやと叫ぶものあり――）その數が定められてあると言ふではありませんか。限りある位置に限りなき人間。椅子の悲哀はこゝにあります。もし、社會が論理的正確を以て、その才能、天賦、力量の價値を直ちにその各々の椅

子に與へるなら一切の問題は不必要です。が然し、由來、不合理は却つて合理となりたがるもので、社會の形式が整ひ、形式それ自身が進歩發達するにつれて、本然の價値も亦、一切の形式の上に移されてきたのでありまず。形式が位置を作り形式が人を作る。試驗である。資格である。免狀である。凡愚なる學士號所有者は、恐怖なしに天稟ある無稱號者を見下してゐる。が然し、資格登用も亦、そのまゝではゐない。數が滿ち、加ふるに人間は功名野心の權化であるからであります。おれがおれがの狀態です。人を蹴倒してもの修羅場です。思慮あり才能あるものはこの愚劣さ、この淺ましさに堪へることが出來ない。しからずんば、衆愚は自衞上、たまく、才幹あるものを壓迫し埋沒する。恐ろしいからである。世はいかばかりの團栗でありませう。彼らは自信を持つてゐないのです。おゝ、かくて、この世はいかばかりの團栗でありませう。團栗。團栗。團栗。そして、彼らは、悉くが背伸びをしてゐる。が、お伽噺ならずんば木を落ちた團栗は大きくはなれないのであります。

諸君！　駘馬哲學の醍醐味はこゝにあります。資格は入場券であります。が、入場券は優待券ではありません。駘馬哲學はその運用の妙を極むることに於いて、實に人生の優待券、社會に於ける選手章であります。（拍手あり——）回顧すれば、本指南所を開いてより星霜五十有六年。人材を送ること算するに暇ありません。社會各方面に於ける本指南所出身が、いかに活躍し、それぐの世界にナンバーワンを唱へつゝありませう。今日、社會上有力なる地位を占むる者の全部は、當然、當駘馬哲學指南所出身者であるからであります。換言すれば、當駘馬哲學指南所出身者に非ずんば、社會、現在社會上の成功は得られないと言つていゝのである。當指南所の盛運また宜なりと言ふべきではありませんか。（水を飲む——）加ふるに爲政者に於ては、深く、思ひをこゝに致すものあり。來年度より、國庫はその幾分を割いて當指南所を補助し、且つ、その卒業生に對しては、特に人生學教師なる檢定を與へ、特別奏任官として大いに國利民福をはからしむる計畫があると言ひます。當所の光榮、これに過ぐるものがありませうか。（拍手あり——）今年度は、不幸にして、唯一人のみの卒業生を出たすだけであります。が、君は、よく、以上のことがらを理解し、拳々服膺して、内は當指南所の實質を發揚し、外に向つては、よく、修め得たる學の蘊奧を披瀝して、立身出世、致富成功、以て國家のため、社會民福のため、率先、事に當られんことを希望に堪へませぬ、さらば、諸君！　えゝ。一言蕪

辭をつらねてご挨拶と致します。（喝采拍手あり。――）
事務員（咳をして）順序第三。卒業生の答辭……
（拍手。ある男、すゝみ出る――。）
ある男（讀む）「……茲に卒業式を擧行せらるゝにあたり、不肖淺學菲才、碌々の身に賜はるに懇篤厚情の言を以てせらる。欣び何に堪へんや。將來のこと誓つて恩師が訓技に副はん。感慨迫りて次ぐに言葉なし。願はくば諒察して受けよ。第五十六回卒業生、ある男……」……
（拍手）
先生（笑顏で）文章がいゝ。君は秀才だ。
ある男 どう致しまして、皆んな先生のお仕込みです。（席へもどる）
事務員 順序第四、萬歳三唱……
（全員、起立する――。）
先生（音頭をとる――）駙馬哲學指南所ばんざい……
一同（手をあげて）ばんざい……
先生 ばんざい……
一同 ばんざい。
先生 ばんざい。
一同 ばんざあい……
（短かい間――。）
事務員 これで卒業式は終りました。皆さん別室には茶話會の支度がしてあります。おい、君、君、待ち給へ。會を開く前に、當指南所の掟による會費をもらひます。自辨ですから……一人前五十錢。
（帽子を廻はす。學生、渋々、金を投げ込む――。）
先生 さあ、大いに祝宴を張りませう。
（先生と學生たち退場――。）
事務員 やれ／＼。皆さん、これで卒業式は終りました。ところで……

## （2）運は拾へ

伯爵夫人
その令孃
ある男
乞食多勢

ある觀音堂附近の路。夕ぐれ。
ひとりの乞食が地にうつ伏してゐる。
伯爵夫人と令孃が通りかゝつて、金を投げてやる――
乞食（大聲に）お有難うございます。
令孃 大きな聲……
夫人 默つて――見るものぢやありません。
（二人、より添つて堂の方へ消える――。）
乞食 お有難うございます。

（間――ある男、登場――。）
乞食　お有難うございます。
ある男　…………
乞食　お有難うござい……
ある男　おい。おい。
乞食　お有難う……
ある男　遣るんぢやないよ。
乞食　え……？
ある男　訊くんだ、お前の頭（かしら）はゐるかい？
乞食　頭にご用ですか。
ある男　用だ。用だとも。すぐに呼んでくれ。飲ませるぜ。
乞食　お有難うございます。なあに目と鼻でさあ。（立ち上つて――）おうい。上州よ。頭をよんでくれよう。
ほかの乞食（彼方で）合點だよう。
乞食　へい。旦那、すぐ、めえりますよ。
（ある男、しきりに堂の方角を見てゐる。乞食、腕をくんで首を傾げる――。）
乞食　もし。頭がめえりました。
乞食の頭（登場して）お有難う……
ある男　君か。親分は、乞食の……
乞食の頭　へい。
ある男　頭でも苅つたらどうだ。
乞食の頭（頭を撫でて）これが、その元手で御座えますよ。へい。わざと虱を集（た）からせとくんでさあ……
ある男　ぷうつ。
乞食の頭　で、ご用つてのは何ですね。
ある男　そこだ。
乞食の頭　え……？
ある男　いや、あすこだ。おい、君は何でも仕事をしてくれるかい？
乞食の頭　何でもつて……
ある男　僕あ、君の命をくれとは言はないさ。
乞食の頭　ご冗談ばかり――旦那のお頼みなら何でも致しますぜ。何しろ不景氣ですからね。
ある男　知つてるよ。心得てるよ。酒手はたんまりだ。
乞食の頭　お有難うござい……
ある男　そこでと……ちよいと耳を貸してくれ。
乞食の頭　へい。（耳を寄せる――）
ある男　あつ臭い。
乞食の頭　子供の時から耳垂れでね……
ある男　どうも堪らない。おい。なるたけ遠くにゐて耳を貸してくれ。
乞食の頭　そんなこたあ出來ませんや。

ある男　いゝかい。いゝかい。ぢやあ、言ふぞ。いゝかいど、どうも堪らん……いゝか。（囁く）

乞食の頭　（うなづく）

ある男　（囁く――）

乞食の頭　はい。はい。それで……

ある男　（囁く――）それで……さうして……それから………な。な。分つたか。

乞食の頭　はい。はい。分りました。分りました。こいつあ、旦那、よく歌舞伎にある圖でげさあ。

ある男　はつ〳〵。

乞食　（傍から）　粹筋かい？

乞食の頭　しつ。聲が高い……

乞食　いよう。大統領。お貰ひ屋あ……

乞食の頭　ばか野郎。ぶん毆るぞ。（ある男に――）旦那、合點合點ですよ。へい。萬事承知の助で……

ある男　しつかり頼んだぜ。そのかはり、多分に色はつけてやる。

乞食の頭　承知しました。なあに、これが始めての仕事でもありませんや。おやあ、かゝりますよ。

ある男　うまくやつて呉れ。

乞食の頭　へい。

ある男　こいつも引張つてつてくれ。

---

乞食の頭　（乞食に）　房州。いゝ仕事だぜ。來い。

乞食　へい。へい。お有難うござい……

（二人の乞食、去る。ある男、ほかの方角へ去る――間。乞食多勢、ぞろ〳〵と出て來る。乞食の頭、いちいち指圖して、ずらりと路の兩側にうづくまらせる――。）

乞食の頭　野郎ども。たのんだぜ。あ、來た〳〵。それ。葱を背負つた鴨だぜ。

（伯爵夫人と令孃、歸つて來る――。）

令孃　（呆氣にとられて）　お母さま。まあ、この乞食……恐い。

（乞食、いつせいにお有難うございますを始めだす。夫人、錢をばら〳〵と投げる。乞食どもは、お有難うを繰返しながら、だん〳〵、輪になつて迫つてゆく――。）

夫人　あげますから。あげるから退いてちやうだい。

（錢を投げる。乞食、ひろひながら迫つてゆく――。）

令孃　お母さま。お母さま。

夫人　困つたわねえ。困つたわねえ。もう細かいのがないんだもの……

乞食　（口々に）――

――お有うござい。わたしは長い間の癩病でございます。

―― 生れつきの瘡かきでございます。

―― この手をつけませうか。ひぜんとしつで困つてゐます。

―― 奥さま、私は癆症でございます。ゴホンゴホン。

―― お有難うございます。横根で歩けないのは手前でございます。

―― お孃さま、この癩病の膿をつけて差上げませう。昔からの緣結びの咒ひでございます。咒ひでございます。

令孃 きやツ！

夫人 お退り。お退り。許さないよ。

―― お有難うございます。お有難うございます。

夫人 お退り。お退りつてば……

（途方にくれて後退りする。乞食どもは迫つていく。ある男、登場――。）

乞食の頭 旦那。

ある男 しつ！

乞食の頭 へい。すみません。

ある男 （夫人に）奥さん。ご安心なさい。僕がお助けします。こら、乞食。どけ、どけ。金は僕がやる〱。

（乞食たち、お有難うを續けながら、輪をといて、ある男を圍む――。）

ある男 どけ。どけ。貴婦人に對して無禮な奴らだ。どけ。どけ。僕が、お情をめぐんでやる。いくら遣らう。五十圓か。百圓か。二百圓か。

乞食 （口々に）――

―― 一錢で結構でございます。

―― 三錢くださいまし。

―― 二錢くださいまし。

―― 五錢くださいまし。

ある男 何て、けちな奴らだ。たつた、それだけか。ようし。遣るぞ。二十錢づつ遣るぞ。二十錢づつ……（ポケツトを探る。あつちこつちのポケツトを引搔きまはして――）あつ。

乞食 （口々に）お有難うございます。

ある男 おい。乞食諸君！ 二十錢づつ遣る……たしかに遣る……

乞食 （口々に）二十錢、二貫づつ……

ある男 うん。遣らうと思つてゐたら、財布がない。財布はあつても中味が無い……？

乞食の頭 無い……？

ある男 無い。すつからかんだ。君たちの方がブルジョアだ。

乞食の頭 冗、冗談ぢやねえ。

ある男 誰が冗談いふもんか。正眞正銘の告白だ。

乞食の頭　旦那。それで濟みますかい。旦那が止めなすつたから、わしら、あの奥さまに集かるのをやめたんですぜ。なあ、兄弟。

乞食　(口々に)

——さうとも、さうとも。

——それが、ふいにされて堪るもんか。

——納りをつけてもらへ。

——さうだ。さうだ。

ある男　弱つたなあ。

乞食の頭　ね。どうして呉んなさる？　このまゝぢや濟まされめえ。

ある男　どうしたもんかなあ。

夫人　(氣の毒さうに)　あの、お金なら、少々はございますけれど……

ある男　(驚いて)　えつ、そ、そんなことをされちや芝居がめちや〱だ。

夫人　え……？

ある男　こつちの話です。奥さま。ご心配なさらないで下さい。僕が解決します。(乞食の頭に——)　おい、僕は謝る。心から謝る。さうして……

乞食の頭　ふん。さうして……？

ある男　一つのものを君に上げる。

乞食の頭　何をくれるつて……

ある男　これだ。(頭の手を握つて——)　これだ。暖かな握手だ。僕は何ひとつ上げるものを持つてゐない。さあ、握り返してくれ。友だちにならう。(小聲で——)　さあ、喜んだ。思ひつきり飛上つてくれ。

乞食の頭　(小聲で——)　合點。合點。(大聲で)　旦那。もつたいねえ。何てことだあ。あり難え。かたじけねえ。旦那がたに手を握られたなあ初めてでがさあ。

ある男　仲間にも言つてくれ。

乞食の頭　やい。野郎ども。喜べ。できるだけ、大きな聲で喜べ。

乞食　(口々に)——

——あり難うございます。

——お有難うございます。

——百圓もらつたより嬉しうごぜえます。

——お有難うございます。ご冥加でごぜえます。

——御功徳でごぜえます。

ある男　これで許してくれるかい？

乞食の頭　許すも許さねえもございません。わしどもは、喜んで、もう、あつちへ參ります。いゝ汐時でごぜえます。

ある男　うん。行つてくれ。この狂言は大入袋だぜ。

乞食の頭　しつ。
ある男　こんな下世話はちよんぷいぷいさ。行つてくれ。
　行つてくれ。
乞食の頭　一件はおあとで願えます。
ある男　よの字だ。しの字だ。
乞食の頭　お有難うござえます。
　（乞食ども、お有難うござえますを繰返しながらぞろ〳〵と去る
　――。）
ある男　はつはつはつはつはつ……撃退しました。はつはつは
　つ。
夫人　まあ。何てお禮を申上げませう。
ある男　あぶない所でしたね。僕が來なかつたら……
夫人　えゝ、えゝ。有難うございました。何しろ、若い娘
　をつれてをりますので……
令孃　（ハンケチを出して）あの、お淨めあそばせ。あん
　な手をお握りになつて……
ある男　こ、こりや恐縮です。もつたいない。
令孃　でも。
夫人　どうぞ。御遠慮なく。
ある男　僕、手拭がありますから。（手拭をだして手をふ
　く――）はつはつ。あれは頓智で追つぱらつたんです
　よ。

夫人　頓智ですつて……？
ある男　えゝ。ネタは――ぢやない。材料は、ツルゲネー
　フの散文詩です。本はよんで置くもんですな。つまり、
　人道主義を惡用しただけなんですよ。そも〳〵……
令孃　あつたわ。ありましたわ。ツルゲネーフに。乞食に
　握手するお話が。
ある男　あつたでせう。それですよ。その物語を實行した
　までゝす。
夫人　で、あの、失禮でございますが。
ある男　いや、お禮なんぞ、決して。――僕、そんな男では
　ありません。
夫人　いゝえ。ちよいと、お所とお名前を伺ひたうござい
　ますの。
ある男　あゝ、それでしたか。僕、文字通り無名の男で、
　住所も、實は……
夫人　あら、これは失禮。あたしどもの名前も申上げませ
　んで。
ある男　もう、とつくに存じあげてをります。
夫人　まあ。
ある男　奥さまが、今を時めく藤代伯爵令夫人でゐらつし
　やることは、誰だつて知つてゐます。奥さまを知らない
　日本人がゐるもんですか。奥さまは、姫さまと――花の

やうな、月のやうな、楊貴妃のやう……

令嬢　あら……

ある男　美しい姫さまと、月の一日の午後に、こゝの觀音さまへお詣りになることだつて、町の常識になつてゐますよ。乞食だつて知つてる筈です。もし、知らない者がゐたら、そいつは日本へ歸化した奴ですね。でなければ必ず危險思想の所有者でせうね。

夫人　どう致しませう。あたくしたち、全く、その藤代でございますが……そして、あなたは！

ある男　僕ですか。僕は、その、就職難で困つてゐる青年なんです。

夫人　就職難で……

ある男　さうです。いま、不景氣ですからね。さう、これは自慢ぢやありません。誤解を省くための自己紹介ですが、僕一ヶ月前に駙馬哲學指南所――ご存じでせうが大學程度です。あそこを一番で、首席で出たんです。今年の卒業生の中で、僕はトップでした。即ち首席です。ところが、口がありません。不景氣で人を入れない上に、僕、一人も、引きがないのです。引きがなければ、どんな秀才でも就職難はまぬがれないので……

夫人　まあ、お氣の毒ですこと。

ある男　實際、弱ります。それに、貧乏なもんですから。ご覽なさい。靴といへば、穴があいて、こんなに親指が顏をだしてゐるし、服といへば……

（夫人、令嬢と相談してゐる――。）

ある男　それから、帽子は先生のお古で……

夫人　それで、お勤めのご志望は？

ある男　そ、それです。それです。その、僕は、誰か政界の立物の秘書官……

夫人　秘書官でいゝのですか。

ある男　いゝどころぢやない。唯一の希望です。

夫人　では、どうぞ、宅へゐらして下さいませんか。主人にも骨を折らしてみようと存じますわ。

ある男　御前――民權黨總理――伯爵――そ、それは本當ですか。

夫人　御緣ですもの。それに恩人でゐらつしやるから。

ある男　（感激して）うゝつ。

夫人　明日、いらして下さいまし。よく、申して置きますわ。

ある男　でも。

夫人　いらつしやいますね。

ある男　止します。

夫人　なぜ？

ある男　俗に臺所からといふ言葉かあります。もし、奥さ

まのお口で職を得たら、男一匹の恥辱ですからなあ。
夫人　まあ。何てお堅い方でせう。何も、あなたが猟官運動にいらしたわけぢやございませんもの。それどころか、方々の知事さんがたたつて、あたくしの所へお百度をお踏みになるくらゐですわ。ちつとも恥ぢやございませんわ。
ある男　ぢやあ、行きます。喜んでいきます。
夫人　家をご存じでゐらつしやいます？
ある男　えゝ、あらかじめ――いや、日本人なら誰だつて知つてゐます。知らない奴は猿くらゐのものですよ。
夫人　では、明日――けふはこれで失禮いたしますから。あ、あの、お名前は？
ある男　僕、ある男といふんです。
令嬢　ほつ〳〵。
夫人　ある男さん……
ある男　はい。ある男です。名前といふものは、どうせ符牒ですもの。八兵衛でも鰯の頭でも適用しますよ。まして、僕の名は、自から、ある種の人間を代表してゐるやうで意味深長だと思ひますね。
夫人　まあ、出世なされば改名もできますから――では、これで失禮いたします。
ある男　明日、あがります。

夫人　どうぞ。では……
令嬢　ご機嫌よう。
ある男　さようなら。
（伯爵夫人と令嬢、去る。間――乞食ども、ぞろ〳〵出て來る――。）
ある男　よう。
乞食の頭　へつ〳〵〳〵。
ある男　ご苦勞だつたなあ。うまく行つたぜ。
乞食の頭　なにしろ、やる事が細かいんで――骨を折りましたよ。
ある男　ご苦勞、ご苦勞。ぢやあ、骨折賃だ。二十錢づつ。何人だ？
乞食の頭　十四人半あります。
ある男　半とは何だい？
乞食の頭　へい、子供がひとり。
ある男　よし〳〵。（金をだして――）さ、一圓札が三枚。
乞食の頭　（うけ取つて）お有難う。
ある男　釣をくれ。十錢あまるぞ。
乞食の頭　乞食からお釣り……
ある男　早くくれ給へ。
乞食の頭　へい。（釣錢をだして――）はい。
ある男　（受取つて）たしかに――ぢやあ失禮。あばよ。

（去る——）

乞食（口々に）お有難うございます。お有難うございます。

乞食の頭　へつ。可怪しな旦那だなあ。

（乞食ども、地に坐つてお辭儀をしてゐる——。）

## 第二幕

（１）葺と葺

伯爵

令孃

富豪

ある男

書生

小間づかひ

伯爵邸の應接室——ある午後。

富豪が、たいぎさうに肥つたからだで歩いてゐる。彼はこの場合、葉卷を忘れてはならない。

美しい小間づかひが茶を運んでくる——

小間づかひ　粗茶でございますが……

富豪　ありがたう。伯爵は、すぐにお出でになるかね。

小間づかひ　はい。たゞ今、お風呂からお上りあそばしました。

富豪　さうか。さうか。奥さんは？

小間づかひ　あの、篤志看護婦會の方へ——けふ、總會がございますさうで……

富豪　なるほど。奥さんもおたいていぢやないな。ところでと——（呼びとめて）おい。おい。

小間づかひ　はい。

富豪　ほかぢやないが、君は、トツケルカといふ菓子を知つてるかね？　外國のらしいが。

小間づかひ（首を傾けて——）さあ。

富豪　トツケルカ。トツケルカ——滋養になるといふので勸められてゐるんだが……

小間づかひ　トツケルカでございますか？

富豪　さう。トツケルカさ。すこし買つてもらひたいんだがね。

小間づかひ　どんなお菓子でございませう。始めて承ります。

富豪　何でもビスケツトの親類らしい。あゝ、書いて置いたよ。（ポケツトから紙を出して——）たしかにトツケルカだ。トツケルカ。そら、横によんでみ給へ。

小間づかひ（紙を受とつて——）あら……

富豪　ちがふかな。

小間づかひ　トッケルカではございません。左からお讀みあそばすのですわ。

富豪　左から——すると、カル、ケット。カル、ケット、カル……

小間づかひ　（笑を堪へて——）カルケットでございます。逆さまにお讀みあそばしましたので……

富豪　なるほど。はつはつはつ。左書きだつたんだね。はつはつはつ。何しろ、學校出の社員の仕事なんで——はつはつ。ところで、一箱買つてもらひたいがね。

小間づかひ　承知いたしました。

富豪　私の自動車へ入れておいて下さい。

小間づかひ　はい。

富豪　（金をだして——）そら——たしか、一圓五十錢ときいたから。

小間づかひ　（うけ取つて——）かしこまりまして御座います。

富豪　カルケットか、チレオインにトッカピン。熱冷ましがアセチリン……

（小間づかひ、笑ひを殺して去る——伯爵扉をあけて登場。）

伯爵　やあ。

富豪　やあ。

伯爵　どうぞ掛け給へ。（椅子にかける——）けふは復讐のつもりかね？

富豪　いや、なあに……（腰をおろす——）この前は白の手がよかつただけですからな。あなたとは二目と違ふまい。

伯爵　（葉卷をつけて——）はつはつ。金まうけでは三舍を避けるがね。

富豪　碁と、あの方は上だと仰言るんですな。

伯爵　はつはつはつ。或ひは……

書生　（登場して——）ご面會人でございます。

伯爵　誰だね？

書生　民標黨の崎山代議士です。

富豪　群馬の肥料屋さんか。

書生　葡萄酒を一ダース持つていらつしやいました。私に五圓くれました。

伯爵　ちよいと客來でお目にかゝれないと言へ。あすは本部へ出るから……

書生　はい。

伯爵　うるさくてたまらん。何しろ、陣笠の數が多いので……

（書生、退場——。）

富豪　私は自宅では逢はないことにしてゐますよ。

伯爵　まあ、さうも行かないし……うゝ、さう〳〵。さうだよ。いよ〳〵。今議會は解散するらしい。どうも、その氣運が濃厚になつて來たよ。

富豪　ふん。やつぱりですか。

伯爵　與黨は腹をきめたらしい。たゞ、貴族院との交渉の結果だけなのだ。しかし、さうなるより活路はあるまいて、與黨を支持する政話會の中にも、幹部不信認分子が多いし、幸無四派は、最初から政府の政策を喜はないときてゐる。現内閣は四面楚歌だよ。

富豪　五人たらずの勅選の補充ぢや追ひつきませんな。

伯爵　どうして――ともかく、政府を倒すものは奢侈品課税法案ですよ。ばか者め。自から墓穴を掘るとはこれだ。智慧のないにも呆れるぢやないか。考へてもみ給へ。議員の三分の一は實業に關係してゐるのだ。はつはつ。誰が、自分どもの不景氣を喜ぶものがある。いつたい。今の大藏大臣は無能なんだよ。これは組閣當時、我輩の明言したところだが……

富豪　政府は解散の準備をすゝめてゐるのですか？

伯爵　大いにさ。一ヶ月を出ない中に、地方官の大更迭をやるよ。明日から開かれる地方官會議が、いはゞ、その試驗だ。まづ、我輩の見るところでは、七つ八つ、首のすげ換はあるでせうな。殊によると、部長級にまで累はおよぶね。

富豪　風樓に滿つか――で、民權黨は……？

伯爵　おさ〳〵怠りない。

富豪　でせうが、大丈夫でせうかな。今度は普通選擧ですから――ちよい〳〵、無産派とかいふ奴に喰はれるでせう。

伯爵　はつはつはつ。

富豪　自信がおありですか？

伯爵　それは、此の間の府縣會議員でわかつてるぢやないか。み給へ。少しも變つちやゐない。選擧民を支持してゐるのは、やはり有力者なのだ。但し……

富豪　但し、しかし、今度は……

伯爵　なあに。時期尚早だ。なるほど、新有權階級は力あり實質はあらう。が、遺憾ながら政治的訓練がない。驅引を知らない。彼らは理想の上に現實を建てようとしてゐて、現實の上に理想を建てようとはしてゐないのだ。敗因はこゝだね。何しろ、政治は生きものだから――だから、彼らが議會の交渉團體となり得る日は、恐らく、ずつと遠いだらう。ちらりほらり代議士は出來ても、やはり、我黨と反對黨との對立は暫らく續くね。

富豪　與黨はきり崩しを始めましたか？

伯爵　この間も……

書生　（登場して――）新日本新報社の記者が、ご意見を承りたいと申してをります。民權黨院外團の代表者がおいでになりました。
伯爵　新聞記者は斷つてくれ。
書生　はい。
伯爵　代表者は待たしておけ。
書生　はい。
伯爵　けふは、ほかの面會はしない。
書生　はい。
伯爵　溫室の戶を閉めておけ。
書生　はい。
伯爵　行つてよろしい。
（書生、去る――。）
富豪　で、きり崩しが始まると……
伯爵　多分、だいぢやうぶでせう。
富豪　と、仰言ると……
伯爵　あなたがたの友情を信じてゐるし……
富豪　友情――
伯爵　支那の戰爭ぢやないが軍資金次第ですからねえ。
富豪　仰言るまでもない。私の友情はすでに一再ならず示す光榮を有してゐますよ。で、今度は……
伯爵　あり難う。黨を代表してお禮を申上げる。

富豪　この前の時は會社を一つ潰しましたよ。もちろん、實質、私の金なので問題はありませんでしたがね。
伯爵　それは、仲間のものも、よく記憶してゐる。よく。
富豪　しかし、ご安心ください。私はまだ、三十六の會社を持つてゐます。憲政のためなら、力を惜しみはしません。
伯爵　必らず、善い酬いが來るでせう。善い酬いと――ところで、話はちがふが、例のパルプの權利ね……
富豪　はあ。どうなりましたかな？
伯爵　拂下げは可能らしい。出來るよ。わたしも骨折がひがあつて喜んでゐる。
富豪　一部でせうか。それとも……
伯爵　いや、林全部ださうだ。
富豪　しめた。
伯爵　ずゐぶん廣大なもんらしいね。なあに、話してみると案外で、政府はあそこの民間經營を希望してゐたくらゐだつたさ。たゞ、希望者の競爭に君が勝つたといふわけ。
富豪　どうも、何とも、色々……
伯爵　ともかく、當路の者に逢つてみたまへ。
富豪　えゝ、明日にでも――どうも驚きますね。また、株式會社が一つ。前言を取消して、合計三十と七會社――

伯爵　三つや四つ潰してもいゝ譯だ。
富豪　義理としても。はつはつはつ。
伯爵　はつはつはつ。
（令嬢、紅茶を持つてくる――。）
富豪　やあ。お邪魔をしてゐます。
令嬢　（茶をだして――）あつちに、小父さまのとこの康彦さんがいらつしやるの。
富豪　伜が、また、來てゐますか。
令嬢　だつて、フランス語を敎へていたゞいてゐるんですわ。お父さま。お茶を……
伯爵　ありがたう。
富豪　伜をすこし叱つてやつて下さい。どうも、いさゝか思想が面白くない。
伯爵　どんな風に？
富豪　まあ、あれが當節の流行かも知れませんがね。社會主義みたいな點があつて――ほかに、惡い眞似はしませんがね。
伯爵　お前さんにはどう見えるかね？
令嬢　ちつとも變ぢやございませんわ。あのかた、立派なかたですわ。
伯爵　しきりに辯護をするね。
令嬢　（顏を赤らめて――）あら……

富豪　性質も荒くはないが、どうも、讀むものが感心できません。
伯爵　そこだ。そこだよ。我黨が出版法取締改正案を提出しだしたのは――いつたい、センサアシップがなつてをらんのだ。この節は、ろくでもない文士どもが殖えてきて困る。文章經國は昔の夢になつた。
令嬢　お父さま、お客さまが待つていらつしやいますわ。
富豪　待たしてお置きなさい。
伯爵　うん。構はないよ。祕書官はどうしたかね？
令嬢　お父さまのお靴を磨いてゐますわ。
伯爵　靴を磨いてゐる――はつはつ。買つてやつたモーニングコートを着てかい？　はつはつ。
富豪　祕書官といふと……
伯爵　あゝ。今度、換へました。なあに、偶然の機會で、家内が外から拾つてきたのさ。役に立つ男らしい。
令嬢　お呼びしませうか？
伯爵　さうだね、呼んでもらひませう。
令嬢　ぢや、すぐに……（退場――）
富豪　今晩あたり、築地はいかゞです？
伯爵　料理屋もあきましたよ。
富豪　ではと――待合にしませうかな。ひとつ、目新らしい所で。時間は……

伯爵　えへん。えへん。
富豪　さう。とにかく。それから……
　（ある男、登場――。）
伯爵　この男だよ。
ある男　はじめてお目通りいたします。
伯爵　商業會議所相談役の伏島さんだ。
ある男　はい。何分、よろしくお願ひいたします。閣下の秘書官に採用いたされました、ある男でございます。
富豪　はあ。はあ。
伯爵　秀才ださうだがね。
富豪　學校は……
ある男　駙馬哲學指南所でした。
富豪　わたしの母校だね。
ある男　では、やはり、卒業生で……
富豪　わたしは、第一回の卒業たつた。伯爵は第何期でしたか？
伯爵　わたしは在學はしなかつたが、あすこの教師を家庭教師にやとつたものだ。その時分は、駙馬哲學指南所とはいはなかつたよ。あれは中途でかへたのだ。
富豪　さう。當時は、立身出世術指南所といつたもので す。だが、昔も今も中味は變らないが、時勢につれて名前だけが變つたといふ譯でね。たとへば、郵便脚夫を集配手、職工を工手、高利貸を金融業者とよびだしたやうにです。
伯爵　議會にも請願が出てゐるよ。娼妓を慰安婦、慰安を與へる婦さ。藝妓を技藝婦と改稱させたいといふ……
富豪　はつはつ。慰安婦はいゝ。しかし技藝婦は帝劇から苦情が出さうですな。はつはつ。では、失禮を――
伯爵　さうかね。では……
富豪　さやうなら。どうも。
伯爵　いや。
　（三人、出てゆく。間――小間づかひ、登場して茶器をかたづける。）
書生　（出てきて――）やあ、別嬪さん。
小間づかひ　なあに。玄關番さん。
書生　こいつ。そんな事を――さあ、許さないぞ。こいつ。罰としてキスを一ぺん……
小間づかひ　（逃げて――）言ひつけるわ。奥さまに申上げるからいゝ。
書生　はつはつ。冗談だよ。冗談だよ。言ひつけられて堪るもんか。さあ、安心して通りたまへ。
　（小間づかひ、去る――玄關番、窓を開ける。椅子を直す。それから、卓上の函をあけて莨を五六本、袂に入れる。）

ある男　（登場して――）　おい。おい。

書生　…………

ある男　何をしてゐるんだい？

書生　默つてゝ下さい。莨は返しておきます。

ある男　はつはつ。驚いたらしいね。安心し給へ。僕は慈悲のある人間さ。莨は持つていつてもいゝ。その代り、僕の慈悲心を忘れないことだ。

書生　失禮します。

ある男　（呼びとめて――）　ちよつと……

書生　ご用ですか。

ある男　君は望をもつてるかね？

書生　望つて――

ある男　將來の希望さ。理想だ。

書生　そんなものはありません。一生こゝにゐて、偉い人たちに逢つてゐたいだけです。

ある男　（吹出す――）……

書生　あなたは望があるんですか。

ある男　なくてさ、大望があるさ。

書生　どんな大望……？

ある男　まづ、第一流の人物になることだな。成功者の中の成功者になつてみせるよ。

書生　さう考へてゐるんですね。

ある男　考へてゐる。自信がある。見てゐ給へ。いゝかい。僕は、今の大ブルジョアたちが、どうして成功したか、その手段と徑路とを熟知してゐるんだ。いゝかい。玄關子、君も出世したかつたら、これからの僕の歩きかたを注意してゐ給へ。君が觀客で僕が俳優さ。そこで、親愛なる觀客諸君よだ。しばらく、この男にお目とめられて下さりませう。立ちいでましたるこの紳士は、人間の野心功名榮達富貴の念願の權化でございます。彼は、この後、いかなる道を、いかに歩んでまゐりませうか。これ、古往今來の大ブルジョアが、誰しも歩んだ道でございます。卽ち、この紳士の歩みゆく姿こそ、こゝに皆さんがたが、その目をもつてご覽になれる生きた標本なのでございます。實物敎訓でございます。由來、芝居は勸善懲惡。わが子の出世をお望みの方も、良人大切の女房がたも、この芝居、一番ご觀劇の必要がござりませう。永當、永當……あゝ、息がきれる。苦しい。

書生　ど、どうかしましたか。

ある男　あゝ、苦しい。大丈夫だ。

書生　あなた、前身は役者ですね？

ある男　（侮辱を感じて）　何だと……

書生　どこか、のつぺりしてゐるし。

ある男　失敬な。待て。待ちたまへ。

書生　呼リンが鳴つてます。呼リンが鳴つてます。（逃げ
去る――）
ある男　ばかめ。役者だつて言やがる。紳士だ。僕は秘書
官だ……さうしてあいつは永遠の玄關番だ。ふつふつふ
つだ。へつへつへつのへつだ……

（２）富豪の居間で

富豪
妻
息子
ある男
女中

日本座敷――やゝ暫らく富豪の妻、額に手をあて凄ま
じい憂欝の中に落込んでゐる。
壁にかけてある紅の被ひの三味線が二挺。女中、襖を
あけ、手をつく――
女中　あの、申しあげます。
妻　…………
女中　奥さま。
妻　…………
女中　あの……
妻　（破裂して――）うるさいねつ。
女中　（驚いて――）……
妻　うるさいつ。何の用ですよ。早くおつしやい。
女中　あの、あの、表にゐる人を、どう致したらば……？
妻　ばか。お前の知つたこつちやない。
女中　でも……
妻　お退り。引つこんでおいで――ばか。ばか。大ばか…
……（泣く）
女中　…………
妻　お出で。恥知らず。恥知らず。恥知らず……
（女中、泡をくつて退場――妻、泣く。それから、手
當り次第に器物を投げ、書類を破り、手提金庫の銀貨
や紙幣を雨と降らす。泣く――）
息子　（登場して）あつ。あつ。
妻　（號泣して――）……
息子　どうしたのです。母さん。どうしたつて譯で……
妻　恥知らずが、あの恥知らずが――お前のお父さんが、
また恥を掻かしたんだよ。（泣く）
息子　また――
妻　あたしは死んでやる。死んでやるとも。きつと、死ん
でやるんだから。
息子　困るなあ。あゝ。さうか。玄關の前にゐた、あの二
人づれですね。

妻　あたし、もう、今度といふ今度こそ生きてゐられない。助平親爺め。かさかき爺め。あたしは、あたしは、あたしは……

息子　さう、父さんを侮辱しちやいけません。

妻　お前まで、あの爺の味方をする……？

息子　まあ、冷靜になつてください。

妻　なれません。なれませんよ。誰も彼も、皆んな、あの爺の加勢をするんだ。あたしは獨りぼつちだ。死にますとも。生きてゐるものか。

息子　弱るなあ。お父さんはどこに居るんです。

妻　お離れにかくれてゐるんだよ。恥知らずが――

息子　ともかく呼んできませう。僕はどうしやうもない。(襖をあける。と富豪が立つてゐる――)あつ。父さん。あなた、立聞きしてゐたんですね。

富豪　そ、そんなこたあない。その、低氣壓の樣子がひどいので……

妻　何ですつて。この助平爺め。よくも人に恥をかゝした。低氣壓とは何です。低氣壓とは……(良人を中へ引摺り込む――)

富豪　痛いよ。苦しいよ。手を、手を離してくれ。

息子　母さん。落ついてください。見つともない。手を離しなさい。

妻　助平爺。恥知らず。あたしは、きつと、死んでやるから。死んでやるとも。

息子　何といふ家庭だらう。まるでゴミタメだ。僕の家庭はごみ溜だ。お父さん、あなた、何をしたんです。

富豪　…………

妻　伜の前にだつて言へないぢやありませんか。犬だつて懲りることは知つてゐる。狒々爺。狒々。大狒々。

息子　ねえ、お父さん。

富豪　お前の聞く話ぢやない。書齋へいつてバイオリンでも彈いてゐなさい。

息子　(憤激して――)僕を子供あつかひになさるんですね？　僕だつて、これで大學生ですよ。家庭の亂雜が聞きのがし出來るもんですか。

妻　お父さんには言へないのさ。あたしが言つてあげる。暴露してあげる。お父さんは、お父さんは……

富豪　これ。おい。

妻　(反抗的に――)若い女を、おもちやに……

(富豪の鐵拳が妻にとぶ――。)

妻　(號泣して武者ぶりつく――)

息子　お父さん。

妻　さあ、殺してください。お毆ちなさい。お殺しなさいさあ。

息子　お母さん。母さんてば……

妻　殺しなさい。殺せ。殺してください。

富豪　離せ。離さんか。離さんと、毆ちのめすぞ。

妻　離しません。離しません。死んだつて離すもんか。

富豪　（妻を蹴倒す――）ヒステリイめ。ひきずり者め。くそ婆め。（毆る）

妻　さあ。殺せ。殺せ。殺してくれ。

富豪　梅干婆め。くそつ。くそつ。

（女中が襖をあけてみて仰天して逃げて去る――。）

息子　（父をとめて――）お止めなさい。お母さん。あなたも默つてらつしやい。

妻　殺せ。あたしを殺せ。さあ。

息子　お父さん。手出しはいけません。

富豪　この婆をつれてつてくれ。

息子　お母さん、いきませう。

妻　ほつといてお呉れ。いくもんか。さあ、殺しておくんなさい。

息子　行くんです。行かないと――

妻　ほつといて。ほつといて。

息子　いらつしやい。行くんです。

（妻を無理につれて去る――。）

妻　（彼方で叫ぶやうに――）浮氣ぢゝい……

富豪　（小聲で――）ふん。死にそこないめ。あ、たいへんだ。金がぶちまいてある。（ぶつ〳〵言ひながら金を拾ふ）もつたいない。ごく潰しめが――ちえつ。こりや、待合の受取だ。怪しからん。

息子　（登場して――）お父さん。

富豪　…………

息子　僕は、もう堪らない。僕だつて自殺したくなりますよ。

富豪　お前も手つだつてくれ。一錢だつて失くしちやつまらん。そら、その隅に白銅が落ちてる。

息子　あゝ。あゝ。

富豪　（金を拾ひながら――）ごく潰しめ。けふの財産を作るまで、おれはどんな苦勞をしてきたんだ。

息子　お父さん。あの外にゐる男と女をどうするのです。お目にかゝれない中は歸らないと言つてゐます。地べたに赤い毛布を敷いて、ぶつつわつて……

富豪　警察へ電話をかけろ。

息子　逢はないんですか！

富豪　おれが逢ふ……

息子　こつちに罪があるんでせう。

富豪　ばかな――おれは、たしかに金をやつた。

息子　ぢや、賣淫ですね。

富豪　もちろん。おれは常に正義だ。よしんば罪があるにせよ。商業會議所相談役が、あんな者に逢へるか。

息子　逢ふべきですね。

富豪　何……

息子　逢ふべきだと言ふんです。恐らく罪はこつちにありさうです。逢はないなんてブルジョア根性の惡い特質だ。僕にはその狡さが許せない。

富豪　貴樣、ロシアだな。

息子　僕は日本人です。

富豪　日本人にはそんな暴言はない。

息子　正當の言葉です。おや、誰が母さんの理性を失はせ、家庭を無茶苦茶な混亂に導いたのです。

富豪　お前の母親のやきもちだ。さう言つて惡きやヒステリイだ。

息子　誰がヒステリイにさせた？

富豪　誰でもない。長年の婦人病さ。

息子　…………

富豪　もう、あつちへ行け。お前は默つて勉强してりやいい。今に、いゝ嫁さんを見つけてやる。

息子　（泣いて――）こんな階級にうまれなきやよかつた。もつと人間らしい、階級に生れゝばよかつた。

富豪　（凝視して――）……

息子　この憂鬱――呪はれた僕。僕――

女中　（登場して――）藤代伯爵様の祕書官様がいらつしやいました。

富豪　祕書官――（喜びの色を浮めて）こつちへ通せ。

女中　はい。（去る）

富豪　渡りに舟だ。おい。お前もあの男を見習ふがいゝ。あの男は何ひとつ、うまく遣らないものはないんだぞ。

息子　僕は鞄持ちにはなりませんよ。

（ある男、登場――。）

富豪　やあ。

ある男　ご免くださいまし。

（息子、退場しようとする――。）

ある男　若さま。今日は……

富豪　康彦、ご挨拶をしないのか。

息子　おやあ、さよならだ。（去る）

富豪　あれは變人で困つてゐるよ。

ある男　有望でゐらつしやいますとも。なあに獨創性のある人間ほど凡人とは變つてゐるものなのです。お樂しみですな。ところで、けふは用事ではございません。實は、ふと、ご門前を通りかゝりますとね。お玄關の前に、赤い毛布を敷いて、男と女とが……

富豪　見たかい。見たかい。そ、それで困つてゐるところだ。
ある男　どうも、ご名譽にかゝはります。察するところ、無心でございますかな。
富豪　さう。だが。困つたことに、わしにも弱味がある。恥かしい次第で……
ある男　と、とんでも無い。それはどんな種類の遊興だつて、あなたがたには氣拔きです。まづ、一流の人物の特權とでも申しますか。例へば、鰻を召上るのと同じくらゐに當り前の話ですよ。
富豪　君とはまだ近づいて日も淺いが――
ある男　いや、何も仰言いますな。私がのみこんで居ります。解りました。解つてをります。で相手にはお金が拂つてございますね。そんなら……
富豪　商取引は決濟だが、その節、醉つたまぎれに寫眞をうつしてね。それを證據品として持つてきてゐるらしいのだ。
ある男　な、なあるほど。譯はありません。ご安心くださいまし。
富豪　いゝかな。
ある男　萬事――しかし、私は光榮さへ感じてゐますよ。實は、お役にたつことでもと、外出の際には、いつも迂回してご門前を通つてをりますのです。それが、たまたま、偶然……
富豪　おゝ、さうでしたか。
ある男　主人のご親友は主人ご同樣ですから……では、行つて參ります。ちよいと、應接室を拜借いたします。
富豪　すみませんなあ。
ある男　どうしまして……
富豪　わたしも隙間から覗いてゐよう。
ある男　どうぞ。どうぞ。すると、役者のはうも氣が入ります。どうぞ。
富豪　賴みます。
ある男　はい。はい。
（胸を叩いて見せて去る――。）
富豪　（獨語して――）値切れるだけ値切つてください。

## （3）　ある取引

ある男
若い職業婦人
無賴漢
富豪
女中

洋館このみ。接客室――間――

この家の女中が、招かざる一對の珍客を案内して來る。

若い職業婦人の美しさは言はずもがな、連れの男も、昔のそれの様な荒々しい無頼漢ではない。ちよいと、紳士には踏める男だ。女は和裝が願はしい。

女中　（椅子を示して——）お掛けなさいまし。

無頼漢　ありがたう。

女中　どうぞ。

（無頼漢、會釋して腰を下す。）

女中　どうぞ。

婦人　いたゞきます。（掛ける——）

女中　すぐ、いらつしやいますから……

無頼漢　いろ／＼、ありがたう。

（女中、去る——。）

無頼漢　うまく行つたね。

婦人　だいぢやうぶ……？

無頼漢　何が——だつて、逢ふのが目的できたんぢやないか。

婦人　何だか恐いわ。はじめてなんだから。生れて……

無頼漢　びく／＼するなよ。おれがついて居るよ。熱いコーヒーでも持つてこねえかな。かれこれ二時間の立ちん坊で咽がから／＼だ。

婦人　巡査なんか呼びはしない……？

無頼漢　この家でかい？

婦人　えゝ。

無頼漢　お孃さまは困るなあ。呼びつこないから出かけて來たんだぜ、金持つて奴は恥は知らねえが、外聞つてやつは、とても重んじるもんなんだぜ。だから……

婦人　逢つたらどうしようつて言ふの？

無頼漢　ちえつ。仕樣がねえなあ。色女をおもちやにされて、わざ／＼お禮に來る者があるかよ。

婦人　お金——？

無頼漢　きまつてらあ。今夜は箱根へいかうぜ。そのつもりで居るがいゝ。

婦人　…………

無頼漢　君は默つてりやいゝ。萬事はおれが話すよ。

婦人　あたし。來なけりやよかつた。

無頼漢　おぢけがついたな。

婦人　あたし、氣味がわるいわ。

無頼漢　しつかりして呉れよ。銀座のわるの持物たら　お前さんにだつていゝ修行ぢやないか。弱音を吹くんなら最初から泊り込みなんかしないがいゝ。

婦人　だつて、あんたが命令したんだもん……

無頼漢　だから、いゝぢやないか。お互ひの幸福のためさ。

こんなことでも無きゃ、僕らは、まとまつた金は見ることもできないんだ。なあに、金持の金を貧乏人が貰ふのは、悪いことでも恥かしいことでもありやしない。あいつらの税金といふもんさ。特權税――傲慢税――有閑税――

婦人　誰か來たわ。

無頼漢　うん。來た。來た。でも、親父は逢はないだらう。雜（スーパ）の見習だ。息子かな。番頭かな……

婦人　番頭はゐないでせう。

無頼漢　しつ。しつ。

（ある男、登場――。）

ある男　（丁寧に――）これは、ようこそ……

（婦人、無頼漢、挨拶する――。）

ある男　いや、どうも失禮いたしました。何しろ、私、政界實業界と各方面にあらゆる要事を持つてをりましてね、えゝ、けふは勸業銀行へ行つて土地資金融通法の注意を與へるやら、さう／＼、内閣へ出かけて三時間ぶつつゞけて書記官長の油を搾つて書記官長は頻りに葉卷をすゝめましてねえ。安いもんぢやありません。コロナ、コロナ、マグナーつて言ふ奴、一本八圓するんですがね。うそぢやありません。この通り……（ポケットから葉卷をだして見せる――）それから、大臣室へいきますと――話は飛びました。私は自動車リンコルンを農林省へぶつ飛ばしたんです。圓タクへも乘れませんからな。すると、どうです。農林大臣閣下はぽつねんとして退屈さうに鼻糞をほぢつてはストーブの鐵板になすつてゐる。そこで私は得々として山林國營論を講演したんですよ。それから肥料分配論を約四十分。すると、どうです。大臣は私の肩を叩きましてかう言ひましたよ。「どうも君の識見には敬服した。君は、いつでも總理大臣になれる男だよ……」それから。

無頼漢　すると、あなたは總理大臣ぢやなかつたんですか？

ある男　な、なんですつて……そ、そんなに見えますかね？

無頼漢　お話をきいてゐると……

ある男　いや、失禮。失禮。なあに將來は首相になるつもりでをりますよ。さて、それから車を走らせたのが郵船會社です。どうも、この節のあそこの遣り方はなつてゐない。どうしても釘を一本……

無頼漢　失禮ですが、用談にうつりたいと思ひますが。

ある男　用談――おゝ、さう／＼。いや、これはどうも。さあ、お掛けなさい。これは／＼、あなたがた立つてゐらつしやいましたね。お掛けください。ご婦人は裾から流感をしよひこみます。現に私の知つてゐる男爵夫人

が……

無頼漢　で、僕は、あなたを責任あるお方としてお話しいたしたいんですが。

ある男　（腰かけて――）さ、お掛けなさい。責任ですつて――さう〳〵、然り、私は位地のある男ですよ。こゝの主人の全權です。まあ、お掛けなさい。平つたくなりませう。友だちになつて話さうぢやありませんか。さ、どうです。え、どうです。（ポケットから出して――）コロナ、コロナ、マグナー……

無頼漢　僕は莨はいりません。

ある男　いけませんか。ぢや、私がいたゞきませう。で、用談といふのはどんなことですかね。コロナ、コロナ、女優にでもありさうな名前ですねえ。コロナ……

無頼漢　ご紹介しておきますが、これは、籍のは入つた僕の女房です。

ある男　存じてゐますよ。存じて――と言ふのは私の推察ですが、なるほど、私はつく〴〵羨望を感じるくらゐお美しい。

無頼漢　注意していたゞきたいですね。これは內緣の妻ぢやございませんので……

ある男　結構です。結構です。天下晴れて　と言ひ　ますかな、籍の入つた――それは、ある場合には絕對の證言になりますからねえ。たとへば戸籍謄本をとりよせてみると、はつはつ、例へばですよ。はつはつ、もし……

無頼漢　もし……

ある男　なあに冗談です。あなた、眞面目なお顔をなさいますね。顏面神經痛でもありますかね。無ければ結構。はつはつ。私は冗談を言はうとしたのです。例へば、あなたが濡れごとをなさる。奥さんが訴訟をなさる。奥さんが勝訴になる。戸籍謄本一本でねえ。しかも謄本は誰だつて取れる……

無頼漢　ほかぢやありません。こゝのご主人が、この女を自由になさつたのです。

ある男　（驚愕を見せて――）な、なんです?

無頼漢　どうも恥かしい話ですが――

ある男　ほ、ほんとですか?

無頼漢　うそは言ひません。證據の品もあることです。

ある男　でも、こゝのご主人が――

無頼漢　と言ふのも、實際、貧乏のさせる業で、この女は銀座のカフエーの女給をさせてあるのです。カフエーオリンパス――そこへ、こゝのご主人は時々、お酒を飲みにお寄りになる。この女がお給仕にでる。どこか御意に適つたか可愛がつて下さつて、あげくの果が、ちやうど十日前のことです。無理々々、この女を自動車へのせて

ですね。築地のある家へつれこんだのです。

ある男　ほう。へえ。

無頼漢　僕は、ゆすりでも騙りでもないから正直に話します。こんな話をするのさへ胸が裂かれる思ひです。察してください。女房が、現在の女房が、いくら、しがない女給風情たつて、僕は――（泣く――）僕は、僕は……

ある男　おゝ、おゝ……（半巾を目にあてる――）お察しします。おゝ、おゝ。

無頼漢　胸が、煮えくり返ります。僕は、ふと、あとで耳にして、こいつを半殺しの目にあはせました。人に煮え湯をのませる賣女だ。畜生だ。見せませうか。こいつの横つ腹には、五つも六つも大あざが出來てます。

ある男　それが本當の玉に疵です。おゝ、おゝ、おゝ……（泣く）

無頼漢　話をきいてみると、何でも、芝居を見せてやると仰言つて引つぱりだしたのです。その途中で、寫眞屋へ上つて、いやがるこの女を無理に納得させて寫眞をお撮りになつたさうです。（ポケットを叩いて――）その證據品はこゝに持つてゐますが――「おれの眞心はこの通りだ。記念のために取つておけ――」と仰言つたさうです。ねえ、あなた。ところが、飛んだ芝居見物をさせてくださつたので、こちらさまはお樂しみでしたでせうが、僕の一家は大悲劇です。その上に、まあ、情ないぢやありませんか。待合の歸りに、女房の帶へお入れになつたのが拾圓札一枚――（卓上に投げつけて――）これです。これです。この呪はれた拾圓です。情ない。情ない。僕の女房は、まだ、まだ、淫賣婦までにはさせなかつたのに……

ある男　そ、そりや買ひ物だ。

無頼漢　なんですつて……？

ある男　お察しする。おゝ、おゝ、おゝ……（泣く――）

無頼漢　僕も、くさつたつて男です。なぜ金を受けとつた。女房を責めると、貰つた覺えがないと言ひます。ます〳〵遣り方が情ない。僕は、こちらさんのご名譽を考へ、あれから幾晩か考へに考へぬきました。が、どう思つたつて問題がちがひます。このまゝぢや、諦めろつたつて諦められません。

ある男　さうですとも。さうですとも……

無頼漢　僕は、けふ、最後の決心をしてきました。こちらと話をつけてから、敢然とこの不貞の妻を離縁します。この女は泣いてゐます。ご覽のとほり、そら、あんなに泣いて――ゐます。

（婦人、袂を目にあてる――。）

ある男　察します。察します。私も涙がこぼれて困りませ

ん。

無賴漢　僕は、この汚れた指輪をお返しに來ました。あなた、僕の魂を救つてください。僕は、もう……

ある男　承知しました。私が引うけます。

無賴漢　ぢや、ご承知になつて……？

ある男　罪は一切こちらにあります。これは、實際、人道問題ですよ。

無賴漢　さうですとも。さうですとも。

ある男　社會問題ですよ。大問題ですよ。

無賴漢　えゝ、だから。ですから。ですから……

ある男　よろしい。よろしい。ぢや、率直に言ひますよ。あなた、離緣するのに、奥さんに手切金をどのくらゐ……？

無賴漢　え……？

ある男　あげない譯にはいかんでせう。それを、こちらで持たうぢやありませんか。すつかり、全部。

無賴漢　…………

婦人　あたし、緣をきられるの？

無賴漢　默つてろい。ばか。

ある男　ね。あんたの男も立つでせう。

無賴漢　さうですか。そ、それや必要です。僕は、この女と別れないわけにいきません。

婦人　いや、いやです。いや。別れやしない、別れやしない。（泣く――）

無賴漢　しつ、しつ。默つて。あとで解る。あとで解る……

ある男　どれくらゐ？

無賴漢　（小聲で――）三百圓。

（短かい間――。）

ある男　ふん。それでいゝ。承知しました。お拂ひします。ちよいと、形式上、證據品を見せてください。

無賴漢　これです。（寫眞を渡す――）

ある男　（とつて――）どれ、おや、こりや怪寫眞ですね。はつはつ。まるで抱きあつてゐる。これを見てゐるあなたの氣持、私はつくぐくご同情にたへませんよ。

無賴漢　お察しくださいまし。

（婦人、恥かしさうに顏をかくす――。）

ある男　なるほど、これでみても、あなたの言葉にうそはない。落度はこつちにあるんです。何とお詫びしていゝか。何と、謝つていゝものか……（寫眞をストーブの火に投げる――）

無賴漢　あつ。な、なにをしやがる。（突進する――）

ある男　（立ちあがつて――）貴樣の脅迫罪を消してやるんだ。おい。おれの勤務先を知つてゐるか。青二才。

（間――。）

無頼漢　す、すみません。旦那。かんにんして下さい。すぐ、歸ります。

ある男　はつはつ。と言ふのは表向きさ。さう下手にでりや不憫もます。私のはからひで、君の顔はたてゝやるよ。

無頼漢　えつ。

ある男　（金をだして――）拾圓札が三枚。電車賃にし給へ。そら。（渡す――）

無頼漢　拾、貳拾……

ある男　參拾。そら、君のもつてきたのが一枚。たしかに三枚やつたよ。もう來るなよ。今度は、私は逢はないぜ。

無頼漢　はい。はい。

ある男　歸り給へ。金をしまつて……

無頼漢　何ともすみません。（金をしまつて――）旦那、ご恩は忘れません。

ある男　うん。

（無頼漢、婦人、ある男、去る――ほかの扉口から富豪は入つてきて、胸をなでおろしてゐる。間――。）

ある男　（は入つて來て）や、こゝにお居でゝしたか。

富豪　どうも、覗いてゐて冷々した。人道問題はひどいねえ。

ある男　どうも、計略でしてね。巧く追つぱらつてやりましたよ。

富豪　あとで、僞刑事が問題になりはしませんか。

ある男　用意周到です。勤務先といつたゞけぢや、法にはふれません。

富豪　なるほど。君の手腕には驚いた。

ある男　どう致しまして……

富豪　私は、パルプの會社をたてるが、君に少し働いてもらはう。功勞株をどつさりあげる。

ある男　えつ！

富豪　君は祕書官には惜しい男だなあ。

ある男　パルプ會社はいつ立ちます？

富豪　氣が早いね。

ある男　早く、あなたのご成功ぶりが見たいのです。

富豪　（滿足さうに――）ありがたう。ありがたう……さうだ、貳拾圓借金したつけ。

## （4）戀

伯爵令孃
富豪の息子
ある男

とある日の夕暮――白いテラスの見える伯爵邸の奥の

花園。靜かな木立と綠いろの腰掛。

令孃が本を讀んでゐる。

ある男 （出てきて――） どこへ行つたらう。こゝでもない。

令孃 （目をあげて――） あ、また、ゐらつしやいましたの。

ある男 どうも申譯ありません。また參りました。と言ふわけは、參らなければならない過失をしましたのです。

令孃 さつきから、うろ〳〵してゐらつしやるのが、これで二へんめ。

ある男 ど、どうも濟みません。

令孃 過失つて何でございますの？

ある男 その、靴下止を落してしまつたんです。

令孃 （横をむいて――） ……

ある男 絹のです。絹です。

令孃 早くお探しあそばせ。

ある男 ありがたう御座います。

令孃 お探しあそばさないの。

ある男 探さうと思ひつゝありますよ。

令孃 ぢき、日が落ちますわ。暗くなると、花が隱してしまつてよ。

ある男 えゝ、探します。探します。

（間――。）

令孃 まだ、お探しにならないの？

ある男 、靴下止はいりませんよ。

令孃 まあ、どうして……？

ある男 僕はあと三つ持つてゐますから。あなた、それは「クララの出家」ですね。ちがひますか？

令孃 さうですの。どうして？

ある男 私とおなじ有島武郎黨を發見したからですよ。

令孃 あなたも、ご存じ？

ある男 ご存じは恐縮ですねえ。私、私淑おく能はざる作家ですもの。「クララの出家」「みみづのたわごと」あの人の傑作は貪るやうに讀みました。

令孃 （笑ひを嚙んで――）「みみづのたわごと」は、ほんとに傑作ですわ。

ある男 えゝ、後世不朽の名作でせうね。その證據に、あんなに賣れます。すこし、文學論をやりませうか。私、小さいとき、小說家にならうと思つてをりましてね。さかんに原稿をかいたもんです。

令孃 靴下止をお探しあそばせよ。

ある男 文學論はいけませんか？

令孃 あの、いづれ、ゆつくり――

ある男 そりや、どちらでも。私、お氣に入らないことな

ら、好きな食だつていつでも止めます。ではと、音樂の話、でなければ、婦人參政權問題なんぞは……

令嬢　あたくし、解りませんわ。

ある男　そ、そのご謙遜さが千金です。どうして、いつでしたか、そらずつと前に初めて觀音境内でお目にかゝりましたね。あの時、私が乞食たちに使つたからくりの種をお觀破りになつた、あのご聰明さは忘れやいたしません。失禮ながら、お年ごろの令嬢がたで、さう、ツルゲネフの散文詩を讀んでゐられる方はありませんね。私なぞも……（令嬢本を讀んでゐる――）あ、これは、これは、ひとりで喋言つて申譯ございません。私、よく節度といふものを存じてをります。では參ります。

令嬢（目をあげずに――）さよなら。

ある男（行きかゝつて――）おゝ、何といふ美しいお姿でせう。畫ですよ。名畫ですよ。題は「夕暮の花」とつけませうか。さようなら……（退場――）

（令嬢、立ちあがる。腕時計を見る。腰をおろす。本に見入つてゐると、富豪の息子、そつと忍び足で出てきて、うしろから、令嬢に手で目隱しする。）

令嬢　だれ？

息子　…………

令嬢　だれよ？

息子（手を離して――）ぼく。

令嬢（ふりむいて――）まあ、ひどいかた。

息子（笑つて――）お澄ししてるから。ずゐぶん待つた？

令嬢　えゝ。かなり。

息子　けふ、科外講義があつてね、聽いとく必要のあるやつでね。（並んで掛けて――）手紙よんでくれましたか。

令嬢　讀みましたわ。ゆうべ、ひと晩、考へましたわ。

息子　それで……

令嬢　だいたい解るの。でも……

息子　みんな、解らない？

令嬢　だつて、ブハーリンだの、トルラアだのつて、知らない名前がでてくるんですもの。

息子　そりや、僕の過ちです。

令嬢　でもね。妙に昂奮してしまひましたわ。何だか、ぢつとしてゐられないやうだつたわ。「白い手をしてゐては駄目です……」こんなことがありましたわね。

息子　えゝ、手紙の中に書いて置きました。おや、けふは、その指にダイヤがない。

令嬢（恥かしさうに――）だつて、それも、お手紙にあつたんですもの。

息子　寶石の指輪を飾つた指の美はクラシックになりまし

た。と、僕は書きましたね。
令嬢　さうよ。だから。
息子　あなたは栗鼠のやうに敏感だ。
令嬢　あたくし、あなたを目標にしてゐるの。だから、仰言ることは眞理だと思つてゐますわ。
息子　僕、うれしい。僕、もつともつと勉強します。でも、あなたが、僕の道を勉強してくれるといゝんだがなあ。
令嬢　さう思はないとお考へになつて……？
息子　する心算なんですか？
令嬢　もちろんよ。
息子　多謝。多謝……ひとり素晴らしい同志が出來た。ぢや、いゝ物がある。（鞄から出して――）祕密に讀むのよ。
令嬢　（受とつて――）レェニズムのＡＢＣ。
息子　默つて――そ、それは國禁の本だから……
令嬢　おゝ、恐い。（ベンチの上に置く）
息子　（英雄的感激で――）その臆病さが呪はしい存在なんだ。眞理の前に何が恐ろしいのです。知つてるでせう。あのルーヂンだつて、砦の上で赤い旗をふつて死んだぢやありませんか。美しい見かたや感じかたは氣もちのいゝだけのもので、その實眞理ぢやないかも知れないんだ。甘やかされたブルジョアたちは、こゝに咲いてゐる花のことを、人生を粧ふ美しい裝飾だと言ふでせう。しかし、植物にとつて赤も紫も、花は生殖器にすぎないんです。こんなことを聞かせても、あいつらは仰天して泡をふくでせうがね。ようございますか、眞理を恐れようとする、保守的な、臆病な心を呪ふんですよ。
令嬢　…………
息子　僕たちは、お互ひにブルジョアで、特權階級にうまれてきましたが、だから、よけい、謙虚な犧牲心を自覺しなけりやならないんです。一切を放擲して人間のために――贖罪者の心もちでかう願はなければならないのです。
令嬢　あなた、勞働者や、印半纏をきた人とお友たちになれる……
息子　え……？
令嬢　あの人たち、どんな人間かしら。
息子　ほんたうの人間ですとも。働いて汗を出して喰べてゐる人は――僕も、そんな身分になつてみたい。
令嬢　えらい人つてものは、そんな趣味があるものなのね。プリンス、オブ、ウエルスも、お踊りになるとき、三越で法被を買つてゐらつしやつたわ。……どうあそばして？

息子　僕、センチメンタルになつちやつた。いけない。いけない。
令孃　どうして……？
息子　思ひだしたもんだから。あのね。けふ、とても素晴らしい事件があつたんですよ。
令孃　どこで……？
息子　學校で……さう〳〵。この話は、きつとあなたの心臟を撃つな。話しませうか。涙ぐましい友情ですよ。
令孃　あたくし、伺ひたいわ。
息子　僕たちの大學ですよ。
令孃　えゝ。
息子　大學のそばに「エトアール」といふ酒場があつてね。そこにお葉ちやんといふ可愛い十六になる娘がゐるんです。
令孃　ロマンスね？
息子　えゝ。
令孃　あなたも行くの？
息子　僕、僕、酒がのめないもの。
令孃　それから？
息子　そこは、僕たちの學生倶樂部のやうになつてゐて、お客といふのは學生だけ、ほかの人はひとりだつて來やしないのです。そこへいけば皆んな酒をのむ。歌をうたふ。行つてみると、いつも、その酒場の中には、若い自由と、水々しい青春の生活が渦を巻いてゐるやうなんですよ。その中心がお葉ちやん。耳かくしに結つて、白いエプロンを掛けて、にこ〳〵して學生たちのお相手になつてゐる。いゝ性質の子で、おとなしくて愛嬌があつて、それで場所がらでもなく、夢にも搭れてゐないんです。色の白い、目のぱつちりとした——それは、酒場エトアールの一輪しかない赤い薔薇ですよ。
令孃　それから……？
息子　學生たちはお葉ちやんを愛してゐました。誰もかれも皆んなしてお葉ちやんを妹のやうに可愛がつてゐたんです。誰も彼もお葉ちやんを戀してゐる。けれど誰もお葉ちやんを傷けるやうな眞似はしない。學生つてものは純潔なもんですから——よござんすか。さう言つたわけで、お葉ちやんは學生全體の慰安の泉だつたんです。そこで、あるとき、そこへ集る學生たちは、皆んなで、一つの決議をしたんです。こんな自由な相談は青年でなければ出來やしません。それは、お葉ちやんを全體の愛らしい花としておくこと。お葉ちやんを個人的所有としようとしたものは、永久に學生倶樂部を除名して、その上に、鐵拳制裁に訴へることといふのです。つまり、一致してこの花に手は觸れないで、觀賞しようといふわけな

んです。

令嬢　裏ぎりものが出たんでせう？

息子　まあ、お待ちなさい。するとね。話は變つて、その倶樂部の中に、二人の不幸な學生がゐたんです。ひとりは三好、ひとりは氷川と言ひました。この二人はなぜ、不幸かといふと、二人とも苦學生で、その上、社會科學研究會へはいつてゐるので、多くのブルジョアの友だち仲間から、何につけ、白い眼でにらまれてゐたんですよ。二人とも秀才なんです。あの京都大學事件にも、二人は關係してゐたんですが――

令嬢　つまり、危險思想所有者だつて睨まれてゐたのね。

息子　さう。さうなんです。何にしろ、今日の大學生だつて、その大部分はなつてゐないんだからなあ――そんな譯で、迫害されてゐるこの二人は、不幸者同志手を握り合つて、とても睦まじい親友なんでした。でも、いくら苦學生だつて、たまには酒場へいかないつて法はない。それに一ヶ月に一度は倶樂部の總會があつたりして、三好も氷川も、ちよくちよく、エトアールへは出入りしてゐたんです。もちろん、お葉ちやんに對する決議に署名した二人です。が、たうとう、この二人が親友の仲から、一足とびに仇敵の間になるやうな事件が勃發してしまつた。

令嬢　お葉ちやんのことで……？

息子　さうです。あるとき、三好は、氷川が、人知れずお葉ちやんに對する戀から、潜航艇式に、お葉ちやんのところへ通つてゐるのを發見したんです。するとどうでせう。一方の氷川も三好が、自分と同じやうに學生倶樂部の決議をうらぎつて、お葉ちやんにモーションをかけてゐる行動を看破したんてす。怪しからん。あいつ、僕にも默つてこんな行爲をしてゐる。かうお互ひに考へたのが最後で、さしもの親友同志も、一つの熱烈な戀をはさんで絶交してしまひました。親友と仇敵とは壁一重です。それからといふもの、この二人は、いつも憎惡の眼で見合つてゐる恐ろしい競爭者（ライバル）になつてゐたんですね。でも、お葉ちやんは、戀すべく餘りにいたいけな少女で、どうしても、どつちの物ともなりませんでした。けれど、こんなことが、ほかへ漏れない筈はない。誰いふとなく、學生たちの耳にはいると、倶樂部の連中、怒つたの怒らないのつて、烈火のやうに昂奮したんですよ。日ごろから受のわるい三好と氷川だから堪りません。裏ぎり者をやつつけてしまへつて譯で、わい〳〵言つて、二人が來てゐるだらうと思つて「エトアール」へ押しかけてきたんです。が、エトアールには三好もゐなければ氷川もゐない。そればかりぢやない。お葉ちやんの姿も

ない。不思議だ。

令嬢　まあ。

息子　ひとり殘つてゐるお葉ちやんの親父にきくと、はつきりした返事をしない。やつと、問ひつめると、そのとき、この親父が、とてつもない白狀をしたんです。何を白狀したと思ひます。問題はもう三好氷川ぢやないんです。三好も氷川も學生たちも知らないうちに、かねて、お葉ちやんの美しさに眼をつけてゐた、有名な金持が、お葉ちやんを千圓ばかりのお金でお妾に買ひとつてしまつたんです。それがゆうべの事でした。お葉ちやんのゐないのはその譯なのでした。かはいさうに、かはいさうに……

令嬢　いやしい人だわ。何ていふ……

息子　さあ、それをきいて學生たちは默つちやゐません。今度は、その親父の頭に雨霰と鐵拳制裁を加へて、店も何もかもひつくり返してしまひました。お葉ちやんがゐない、寂しい、共通の絶望にかられた學生たちは、そこを出ると、期せずして、學校のそばにある廣い野原の方へやつてきたんです。皆んなの眼には淸い涙の露、胸には、あの金持の暴戾と慘虐を憎む炎が、湧きあがつてゐる。と、そんな時に、ふと、來かゝつた丘の下を覗くと、不思議々々々々。いまは仇同志となつて口もきかないと聞いてゐた三好と氷川とが、仲よく、昔のやうに、それどころぢやない。それより、もつと名狀しがたい親密な態度で、物語つてゐる姿を發見したぢやありませんか。おや。

（令嬢と息子の手が、いつか、しつかりと握られてゐる。國禁の本は地べたに落ちてゐる。）

息子　學生たちは、思はず聲をのんだ。そして、彼らの話に耳をかしたのです。「すまなかつた……」と三好が言つた。「すまなかつたなあ……」氷川も泣きさうになつて言ひました。そして、三好も氷川も、お互ひに無骨な手で眼をふいてゐました。お葉ちやんの消失、あるブルジョアの暴戾。その悲しみと怒りとが、この二人の暖かな友情をよびさましたのでせう。それから二人は、無限の意味をこめた眼で、野のむかうの靄にけむつてゐる街の方を見つめました。「見ろ。あすこには人生がある。社會がある。あそこには正義の敵がいつぱいゐる。戰はう。いつしよに戰はう……」氷川は、痛烈きはまる聲でかう言ひました。「……よし……」すると、三好も呟きました。「勝たう。死ぬときはいつしよに死なう。共同の敵。共同の敵……」三好と氷川は、「三好」「氷川」と呼合ひながら、かたく手を握つた。すると、その時、感激のために抑へきれなくなつた學生たちは、すべてを忘れて丘の下に突

進しました。そして、裏切者である三好と氷川とを選手のやうに胴あげして、「校歌……」を歌ひながら踊りくるつたのです。共同の敵へ。無智の敵へ。暴戻と慘虐へ。戰へ。戰へ。戰ふ者は、僕たち青年のほかにはないのだ。自由と知識と勇氣のある若者のほかにはないのだ。

令孃　(すゝり泣いて――)

息子　それから、學生たちは、こぞつて、新思想研究會へ入會しました。けふのことです。けふ――あゝ、僕、思つても思つても、涙が、涙がでてきますよ。こんな、こんな大きな感激……どう思ひます。共鳴しますか。どう思ひます。

令孃　あたくしだつて憎むわ。そんな、純潔を盜むやうな人は、心から憎むわ。

息子　そして、そんな、鬼のやうな盲らがいつぱい居る。鬼にくるしめられてゐる哀れな人間がいつぱいゐる。ごらんなさい。森のむかう。こゝはお伽話の中の花園だけど、そら、森の向うには街がありますね。あそこを支配して、のさばり返つてゐるのが鬼どもなんだ、鬼どもがカデラツクやリンコルンに乘つて飛びまはつてゐるんだ。そして、僕もあなたも鬼の子供なんだ。

令孃　……康彥さん……

息子　あなたは、それで滿足できる?

令孃　できない。いや、あたくしに、人間の道を敎へてください。このまゝぢや堪らないわ。堪らなくなつたわ。

息子　僕といつしよに……

令孃　えゝ。ごいつしよに……

(二人、自然に接吻する――ある男、遠く現はれて、はつとして消える――。)

息子　うれしい……

(令孃、驚いて立ちあがる――。)

息子　僕のものですよ。

令孃　知らない。知らない。あとで……(顏を掩つて逃げて行く――

息子　お待ちなさい。お待ちなさい。(間)ぢや、あした。さようなら……

(鞄をもち、樂しさうな口笛を吹きながら、森の奥へ退場――ある男、出てきて、落ちてゐる本を拾ひ、それをポケツトへ入れる。花の路を歩きながら――。)

ある男　警戒か、追放か――なあにモダンボーイの變り種だらう。いゝお道樂といふもんだな。

(口笛、遠く消えて行く――。)

# 第三幕

## （1）解散々々

書生

時を經た、ある夜——伯爵邸の廊下。中心は電話機である。どこかで暫らくピアノの音が聞える——電話のベルが鳴り響くと、書生君、あたふた走つてきて受話機をとる。

書生　（電話口で——）あゝ、もし／＼、さうです。總裁の邸ですが——えつ、えつ、解散——ほんとですか。はあ。はあ。それで、はあ。はい。はあ。承知しました。はあ。はい。はあ。承知しました。はい。はい。承知しました。さよなら。

（受話機をかけると、奥へ飛んで行く——）解散です。解散です。臨時議會が、たゞいま解散になりました。

（去る——また、出てきて、電話をかける——。）

書生　あ、もし／＼、伏島邸ですか。はあ。はあ。こちらは藤代家ですがねえ。ご主人はご在宅ですか。え、なに。解散の電話でお出かけになつた？　え、こちらへ。さう、そりや結構です。實はその用事、えゝ、えゝ、どうも大事件ですなあ。さう、さう。え、今度の總選擧——なあに、大丈夫ですよ。その、政事は勢ですからなあ。はあ。はあ。ぢや、さようなら。はあ。はい。はあ……

（受話機をかけて——）いそがしいぞ。いそがしいぞ。

（去る——）

## （2）小夜曲

伯爵夫人
令嬢

紅いスタンドの點いてゐる令嬢の部屋——令嬢がピアノを彈いてゐる。ショパンか、シュウベルトのものがいゝ。

伯爵夫人、はいつて來る——

夫人　たいへんよ。たいへんよ。ピアノどころの騷ぎですか。

令嬢　なあに？　お母さま……？

夫人　議會が、いま、解散したのよ。

令嬢　まあ。

夫人　お父さまが總理大臣におなりあそばすのよ。

令嬢　ほんとに……？

夫人　選擧にかちさへすれば——それが、憲政の常道とかつていふものなのよ。さあ、これからが、たいへんだ。落着いてる時ぢやありませんよ。あたし、今夜は寢られない。ぢやあね。いきますよ。まあ、いそがしい。いそ

がしい。（去る）

（令嬢、考へてゐる。それから、ピアノの蠟燭の火を消して、小さい卓のそばの椅子にかける。曳出しから寫眞を出して眺める。やがて、手紙をかき始める。長い長い間――書き終つて讀む――。）

令嬢（靜かに）「……とりいそいで申しあげます。お懷しいお懷しい、（ペンを取つて何か直す――）あたくしの……こんなこと申しあげてお叱りあそばすで御座いませうか。もし、お叱りあそばすなら、どうぞお叱りあそばして下さいませ。あたくし、絶對の奴隷でございますもの。康彦さま――たゞいま、母がはいつて參りまして、こんど、父が總理大臣になるかも知れないと話したのでございます。さだめし、喜んでゐると思召でございませう。けれど、あたくし、反對に心配を增したのでございます。それは、かね〴〵お話いたしてをりますやうに、總理大臣になると、父はます〳〵分らず屋になつて、あたくしたちのことを理解してくれなくなるやうな氣がするのでございます。お怒りあそばさないでね……その譯は、どうしても、父も母も、同族でなければ結婚を許してくれない意向なのでございます。あたくし、そのことが心配で心配で堪らないのでございます。それで、父が總理大臣になりましたら、あなたはお父さまが華族におなりあそばすやう、あたくしの父に仰言るやう、お父さまにお願ひしてくださいませ。あなたのお父さまが華族におなりあそばせば、すぐ、すら〳〵と話は成功すると存じます。

總理大臣つて、何でも思ふまゝに出來るお役目でございませう。あなたのお父さまさへお言ひ出しあそばせば、あしたからでも華族になれると思つてをります。康彦さま――あなたさまは、こんなことを、きつとお笑ひあそばすでございませう。けれど、お願ひでございます。あたくしを哀れと思召したら、ぜひ、手段として、さうあそばして下さいませ。さうでなければ、寧ろ、父が總理大臣なんかになつてくれないはうが嬉しうございますわ。ぜひ、ぜひ、あたくしの心もち、汲みとつて下さいませ。心せくまゝ、亂れ書きお許し……お寫眞を前において、この手紙したゝめてをります。では、いつものやうに今度の金曜に――お休みあそばしませ。では、熱い熱い……を籠めて……

（手紙を封に入れて書く。間――それから、寫眞をとりあげて見入る。靜かに、しかし、情感をこめて唇にあてる――。）

## （3）密談

伯爵
富豪
ある男
伯爵夫人
書生

伯爵邸の應接間——
夫人と富豪とが物語つてゐる。

富豪　……と言ふわけでしてね。つく〴〵弱つて居りますです。
夫人　それも、原因はご主人にあるのではございませんか？
富豪　どう致しまして——家内のは悪性のヒステリイですな。長いこと、病院通ひをしてをりましたが駄目ですよ。婦人病といふのは治らないものと見えましてね。
夫人　奥さまは社交界はお嫌ひなのでございませうか？
富豪　柄でないですよ。あんな汚ない婆ではねえ——あなたがたとは人種が別なんですからなあ。
夫人　あんなことを仰言つて——
富豪　悪妻は百年の不作と言ひますよ。
夫人　少し、交際社會へお出ましになると、お氣が紛れますのに。あ、自動車がまゐつたやうです。歸りましたのでございませう。
富豪　さうらしいですね。
夫人　ちよいと失禮して……
富豪　さあ、さあ、どうぞ。
（夫人、出て行く——間——その間、富豪、部屋の中をこつ〳〵歩く。葉卷を吸ひながら——）
ある男　（登場して）これは、いらつしやいまし。
富豪　やあ。どうも、いつぞやは有難う。
ある男　どう致しまして——
富豪　たいへんな事ですなあ。
ある男　覺悟はきめてゐても、晴天の霹靂でした。不信任案——解散——と、間一髪を入れんのですから。私、飯もくはないんですよ。伯爵閣下はすぐいらつしやいます。あつ、電話のベルが鳴つてゐます。いやあ、からだが三つあつても堪らん。ご免なさい。ご免なさい。
富豪　總理大臣秘書官はひまぢやない。
ある男　さう、ひまぢやない。私、新らしいモーニングを誂らへなきやなりませんし。あつ、閣下がお呼びだ。ベルが鳴つてます。どうも。どうも……（去る——）
富豪　はつ〳〵。獨樂のやうな男だ。
伯爵　（登場して——）やあ。ようこそ。

富豪　いよ〳〵、やりましたなあ。

伯爵　やつた。やつた。反對黨の奴、ひどい眞似をしでかしましたよ。何しろ、わが黨が不信任案を上程するや否やさ。明らかに背水の陣だ。しかし、まさかとは思つてゐたんだが——

富豪　いづれ、選擧干渉で勝つ寸法と見えますなあ。

伯爵　恐れることはあるまい。現政府も今日で三年と四ヶ月、もう國民に飽かれてゐるからな。

富豪　さう〳〵。お次はこつちの番ですとも。國民は、政變そのものを喜ぶ性質があるんです。それに、民權黨の經濟尊重主義は好評を博してゐます。解散ときた。明日の市場は一齊高の氣配をみること疑ひなしですよ。が、閣下はお忙はしいのでせう。

伯爵　えゝ、これから、本部の最高幹部會議があつてね。

富豪　閣員の選定ですか？

伯爵　それもある。選擧は勝ちさうですからなあ。總選擧の對策——これは一刻を爭はなければならない。で……

富豪　率直に申しあげませう。どのくらゐ、寄附いたしませうか。民權黨の公認は、ほゞ、何人ぐらゐ……

伯爵　さう。かれこれ二百名かな。

富豪　とすると、それだけの費用が二百萬圓。

伯爵　全體から見て數百——は要るが——

富豪　よろしい。公認費用だけ、私がひきうけませう。

伯爵　さうして貰へば仕合です。

富豪　寄附ですから公明正大ですとも。よろこんで、私は自己の信ずる政黨を援助しますよ。

伯爵　なあに、ご安心なさい。わが黨は必らず政權を掌握する。諸君のご好意を裏切ることは絶對にない。

富豪　それが、民權黨の人氣を博する所以なのです。

伯爵　で——私は主義として人材を登用してゆかうと思つてますが、これは重大にして重要の政策なんだがね。例へば、君のやうな人物が野にあるのは好もしくない。私の希望としては、君なんぞは、宜しく貴族院の議席を與へられて國家のために働いていゝ人物だと考へてゐる。

富豪　どうも、お恥かしい。

伯爵　常に更新の氣を導いていく上にでもね……

書生　（登場して——）佐久間前代議士、渥美前代議士、日本民　新聞記者、飯山院外團幹事がいらつしやいました。

伯爵　それ〴〵、待たしておけ。第二、第三、第四と、ありつたけの應接間の用意をして置け。今夜は、よとほしお客があるぞ。

書生　はい。はい。

富豪　もう、獵官運動が始まりますな。

伯爵　さう。それは選擧區に對して、よほどの信用の差異を生ずるので……自動車はいゝか。出かけるぞ。

書生　かしこまりました。（去る――）

伯爵　それからだ。來年は萬國經濟會議がロンドンで開かれる。その代表は、見渡すところ、君のほかないんだがね、まあ、引受けていつて來給へ。君の今までの國家に對する功勞は、全く、今のまゝ一平民で置くべきではない。大學總長ですら、男爵を與へられた前例があるんだから……

富豪　もし、國家が命ずるなら、私は身命を堵して働きます。私は、一身を國家のために獻げてゐる。

伯爵　それから……と……

夫人　（珈琲をもつて出て――）あなた、尙風會の皆川子爵からお電話が……

伯爵　さうか。では、ちよいと。（去る――）

ある男　（出て――）奥さま。萬歳銀行頭取の使ひが待つてゐます。弧冠りを三つ持つて來てゐます。

夫人　さうですか。それは／＼……（去る）

ある男　ご要件はすみましたか？

富豪　すみましたよ。私は、援助することに決めた。喜んで。

ある男　それは結構でした。だが……

書生　（出て――）前代議士鹽見多右衞門樣、ほかに、紹介狀ご持參の方が六人。

ある男　待たして置け。紹介狀持參者は歸してくれ。

書生　いちおう、御前に伺はなくてもいゝのですか？

ある男　生意氣いふな。僕は閣下の祕書官だぞ。行け。

（書生、去る――。）

ある男　で、念のためにご注意しますが、これは私の老婆心からです。私は、あなたを大切な人と思つてますので……

富豪　ふむ。

ある男　あなたは今度の寄附金をですね。決して無證書で出してはいけません。

富豪　しかし、政黨から證書をとるわけにはいかんでせう。

ある男　それとも、全部を與へる方針ですか。返るなら、寄附でなく、貸金とすることが出來るとしたら、どちらをお選びです。

富豪　そりや、きまつてゐる。が、貸金にする方法はあるまい。

ある男　ひとつ有ります。

富豪　ある？

ある男　えゝ。伯爵の名義で證書をおとりなさい。閣下は

必らず出しますよ。もちろん。形式ですから。

富豪　（膝を叩いて――）そ、それは名案だ。形式だから。形式だからね。

ある男　私は、あなたのご恩に報ゆるのです。パルプ會社の例の……

富豪　ありがたう。ありがたう。いや、こりや、妙案だ。

ある男　金錢問題はきちんとして置く必要がありますね。あ、閣下です。

（伯爵、登場――。）

ある男　閣下、ご用はありませんか。

伯爵　私は出かけなくちやならない。

富豪　たいへんですなあ。

伯爵　何分にも――君は、殘つてだね。來客を引見してくれ。どうせ、獵官運動にきまつてゐるが。

ある男　はい。はい。

富豪　では、いづれ。どこかで……

伯爵　さう願ひませう。いや、どうも失禮しました。忙しいばかりで――人間政治家となるなかれだ。

ある男　大政治家にでございますね。

伯爵　はつはつはつはつ。

富豪　あはつはつはつ。

（三人、出て行く――。）

## （4）　獵官運動

ある男
書生
第一の客
第二の客
第三の客
新聞記者
第四の客

前景と同じ部屋――灯がついてゐる。

ある男、チョッキに金鎖をからまして威容を正してゐる。

ある男　さて、これから訪客に接することとする。ともかくだ。君は應接室から應接室をまはつて、閣下が逢へない。僕が代理することを通じてくれ給へ。それから第一番をよこしてくれ給へ。閣下でなければいけない客は斷してくれ給へ。そこで、呼リンを鳴らしたら次の番だ。

書生　承知しました。

ある男　働いてくれ給へ。いづれ骨折に對しては忘れやしない。

（書生、出て行く――。）

ある男　いやはや、人間、政治家たるなかれさ。忙はしい

ばかりで――（ポケットから吸ひさしの葉卷を出して吸ふ――）コロナ、コロナ、マグナーはうまい莨だ。コロナ、コロナ、マグナー鑛か……さて、お客さまがお出になつた。

（第一の客、は入つて來る――。）

ある男　さあ。どうぞ。お掛けください。選擧區へ電報をうちましたか。

第一の客　え丶。四千七百通ばかり打つて來ました。

ある男　あなたはご心配ありますまいね。當選六囘だと思ひましたが。

第一の客　いや、七囘です。ところが、今度は安心もなりませんでねえ。私の選擧區はご存じの通り北海道でしてね、私の在野中に、反對黨がどん／＼鐵道網を完成してしまつたので――何か、地方民の信用を得るお土產かいるのですよ。私は無論、公認はされませうが、事實そればかりぢや困るのです。特にお次ぎが我黨天下ときまつてゐる今日では……

ある男　さう。ことに然りです。私は幸ひ、閣下の絶對的信用を受けてをりますので、よろしく、あなたの苦ちうを傳へて置きませう。

第一の客　どうぞ、何分とも――これは私一人の問題でもないですからなあ。何しろ、前の選擧で、長年の民權黨の地盤がくつがへされてしまつたのです。今度で恢復しなければ永遠に時機がありますまい。

ある男　なるほど、ごもつとものお說です。それも閣下にお傳へしませう。閣下は私の提言をよく、お容れ下さいましてね。淸谷前代議士が幹事長になつたのも、實は、私が大部分、骨を折つたのです。

第一の客　いや、そのことは聞きました。淸谷君も感謝してゐましたよ。そこで……

ある男　そこで……

第一の客　あなたは、事業に興味がありませんか。

ある男　さあ。

第一の客　私の地方は、まだ／＼未開地でしてね。文明の施設は非常に餘地を殘してゐるのです。例へば、私は、こ丶に二ヶ所の水利權を持つてゐますが、善い相棒がないので着手してをりません。どうです、一つ、雪國へご出馬になつては――とても、い丶事業ですぜ。

ある男　耳よりの話ですね。

第一の客　い丶仕事でさあ。地方的に見て獨占事業ですからなあ。

ある男　もし、私を必要とするなら――

第一の客　いや、それは常々、故郷でもお噂してゐるのです。あなたのお名前は田舍でも珍らしいものぢやない。

ある男　私も、ひとつ、あなたを參與官にしてあげたいですね。私が內閣總理大臣の位置にあつて……
第一の客　どうぞ。どうぞ――
ある男　一つの空想ですが……
第一の客　私も二つの電氣會社のうち、あなたを一つの社長にしてみたい。
ある男　實に結構ですな。
第一の客　私の空想ですがね。
ある男　私のも空想ですがね。
第一の客　ではと……これから終列車で田舍へ歸りますので。
ある男　さうですか。それは、それは……
第一の客　閣下のご前ていを宜しく。
ある男　承知いたしました。私がうけた好印象も落ちなくお傳へしておきます。
第一の客　では、さようなら。多分、今度の臨時議會でお目にかゝれませう。
ある男　では。失禮。ご奮鬪ねがひます。
第一の客　えゝ。心命を堵しますよ。我が黨のために……
（出て行く――）
（ある男、呼リンを鳴らす――間――第二の客、登場――）
第二の客（頭髮をしごいて）總裁は居らんのかね。總裁は……
ある男　…………
第二の客　總裁は居らんのかい？　僕は、院內總務の飯島だが……
ある男　ご用件を伺ひませう。
第二の客　君では解らん――總裁はどこだ、飯島が逢ひたいと言つてくれ給へ。
ある男　本部の最高幹部會です。そちらへおいでなさい。
第二の客　本部の――おゝ、忘れてゐた。忘れてゐた。我輩も出席せねばならないのだつた。
ある男　何の用事でおいでゝした？
第二の客　ほかぢやない。我輩の選擧區へ總裁を引張りださうと思つてね。そこで、一席、辯じてもらはふ算段だよ。蓄音機よりは效果があらうさ。ぢや、行くぞ。いやあ、失敬。（去る――）
ある男　何て奴だ。あいつは勝目はない。あゝいふのを落選面といふんだらう。
（呼リンを鳴らす。第三の客、は入つて來る――。）
ある男　あなたは……
第三の客　前代議士鹽見多右衛門と申す人間でございます。

ある男　はあ。はあ。

第三の客　失禮ですが、あんたは好男子ですねえ。女の子を泣かす顔ですな。

ある男（面喰って――）な、なんですつて……

第三の客　美男子でいらつしやいますよ。人相がいゝ。女は夢中になりますよ。

ある男　ご用件を承はりませう。

第三の客　えゝ、ざつくばらんに言ふことに致しますが。私の家は待合をいたしてをります。月見家といへば一枚看板でね。私が言へば、土地の一流どころでも、いやとは言へないのです。いゝ妓がゐますぜ。それでさ。今度、我黨が天下をとつたら、私をどこかの縣知事にしてもらひたいのです。知事さんにねえ。あんた、骨折つてくれたら、一生無料で私のところで遊ばせますぜ。どんな名妓でもお好み次第といふ寸法で――どうです。さあ、どうです。

ある男　あなたが、あなたが、縣知事になりたい……？

第三の客　さうです。なあに、ちよいとで結構ですよ。さう、閣下に言つてください。私は一日でもいゝ。大禮服をきて、人から閣下と呼ばれてみたいんです。私は、地方政治にはかなり、自信があるんですからねえ。

ある男　ともかく、さうお傳へしておきませう。

第三の客　私の意見をのべてみませうか。

ある男　結構です。たくさんです。ほかに待つてる人がありますから。（呼リンを鳴らす――）

第三の客　なあに、ご遠慮はいりませんよ。私はいそがしくはないし……

ある男　こつちが急がしいのです。では、失禮。いづれ、また。

（新聞記者、登場――。）

第三の客　おや／＼、お新規さまか。どれ、ぢや、よろしく……

ある男　もし／＼。煙管をお忘れですよ。

第三の客　ほい。冗談ぢやない。これは、純金の透し彫りですよ。冗談ぢやない。（退場――）

ある男　さあ。どうぞ。

（記者、着席する――。）

第三の客（顔をだして――）あんた。いつでも電話をかけて下さい。雛子でも梅丸でも呼んでおきますぜ。無料でいゝ。いゝかね。お金はとりませんから……（去る――）

ある男　どうです。あれが猟官運動といふ奴です。いゝゴシップですな。

新聞記者　昔も今もね。では、いかゞでせう。時間がない

ので、何か、あなたから民權黨の對選擧觀といふやうな問題で……

ある男　承知しました。だが、新聞へは、幹事長の名で書いてください。

新聞記者　よろしう御座います。（原稿紙と鉛筆をだす）それでは……

ある男　ではですね……（咳ばらひをして——）えゝ、今回の解散は、我れ人共に意外とするところであるが、殊に、その動機の不純なる點に於いて、反對黨は我が立憲政治そのものの運用上、一抹の汚點を印したることは否むことができない。殊に、その解散が、國民に信任を問ふに非ずして、有力なる反對黨、及び、無力なる中立議員を威嚇するの目的に於てなされたことは、多數國民の憤激あたはざる點である。卑劣なる現政府は、かくして、總選擧にのぞみ、一方弱腰なる議員の抱込を期すると共に、他方、甚だしき干渉をもつて自黨議員數の多數を制せんとするのである。かくの如きは、實に封建の昔に返るの變體的行爲であつて、立憲治下の恐るべき恐怖時代の出現である。國民は宜しく監視すべし。我が黨は多數國民の輿望を負ひて、必らず、この非法的變體勢力に必勝を期すべきを信する。今次の選擧は眞に此の一戰である。正義勝つか不正義勝つか。恐らく民權黨は勝つであらう。國民の意志は我が黨の上に存することを信ずる……何だか、ステートメント風になりましたな。

新聞記者　（書きながら）結構です。結構です。もう、締切に時間がありませんから……國民の意志は……我が黨の……信ずる……信ずる……（紙と鉛筆を納めて——）いや、ありがたう存じました。

ある男　どう致しまして。

新聞記者　では、これで。

ある男　さようなら。遊びにき給へ。

（記者、出て行く——。）

書生　（出て——）どか〳〵と六人、きました。たいがい、運動者のやうです。

ある男　たまらない。たまらない、まあ。待たしておけ。それから、次をよこしてくれ給へ。

書生　はい。はい。今夜は夜通しでさあ。

（間——第四の客、登場。）

第四の客　お忙はしさうだから用件だけ申上げておかう。

ある男　さう願へれば仕合せですな。

第四の客　實は、私は元代議士の岩村といふもんです。民權黨とは關係が深い。顧問の松倉さんなんかとは、辛酸を倶にした仲でなう……

ある男　ご用件は……？

第四の客　今は田舍に隱退してゐるが、これでも昔は暴れたもんです。ご存じぢやらうが、あの日比谷の電車燒打を。あの當時なんざ……

ある男　ご用件をお言ひください。

第四の客　おゝ。さうぢやつた。どうも年をとるとな……實は、わざ〳〵、田舍から飛んできたのは他ぢやない。昨年、大學を出た息子のことで、ちよいと……

ある男　どんな話ですか。

第四の客　今度だな。もし、藤代さんに大命降下したらぢや。息子を總理大臣祕書官にしていたゞきたいのでのう。

ある男　えつ。

第四の客　昔のよしみぢや。閣下にさう言つて下さい。岩村が最後のお願ひぢやと傳へてのう。

ある男　それは、それは——しかし、その問題なら遲すぎましたよ。

第四の客　もう、內定したのかな。

ある男　內定ぢやない。確定です。

第四の客　誰ぢやな。

ある男　さあ。それは言へません。しかし、恐らく私でせうね。いや、私です。私が首相祕書官になるのです。

第四の客　ほう。それはご無禮。遲かつたか。そんなら文部でもいゝ。どこでもいゝ。ともかく、出かけよう。（去る）

ある男　はつはつはつ。だが、大學ぢや採用されまい。駙馬哲學指南所でなけりや——あゝ、くたびれた。くたびれた。人間、大政治家となるなかれか。（呼リンを自棄になつて叩く——）これからだ、當世立志傳中の第一人者……

## （５）奥さまの招待

伯爵夫人
ある男
第一の夫人
第二の夫人
第三の夫人
第四の夫人

その翌る日——伯爵邸の食堂。茶の會の用意がしてある。

間——伯爵夫人と、ある男とが出て來る。夫人は盛裝してゐる。

ある男　で——ご相談といふのはどんなことですか。お客さまは、もう、お見えになつてゐるのでせう。

夫人　えゝ、皆さん、あちらに——實はね。けふの席順を

どうかと思つて……
ある男　食卓の順ですか。
夫人　さう。私ども同族の集りだと、わけはないのですけれどね。
ある男　いつたい、今日のお客はどんな方なのです。
夫人　つまり、民權黨の色彩ある官吏の奥さまたちです。いま、皆さん休職ですが、選擧の結果では、また、仕官なさいますのよ。それで、これを機會に懇親の意味を含めて……
ある男　なるほど、なるほど。
夫人　ご先着順はいかゞでせう?
ある男　さう。しかし、あまり平凡ぢやありませんか。
夫人　いゝお考へがございますか?
ある男　ございますとも。無盡藏です。さうですねえ。あゝ、かうなさいまし。ご主人たちの勳等順でおならべなさい。
夫人　勳等順とは……?
ある男　皆さん、勳章所持者の奥さんがたでせう。ですから、勳一等は二等の上席、三等は二等の下といふ風に――これは妙案です。きつと、先例をつくつてしまひますよ。
夫人　ご主人の勳章の階級でゝすね。えゝ。これは妙案ですわ。不公平がなくて、論理的に正しくて。さう致しませう。あなた、智慧者ですねえ。
ある男　なあに、これしきのこと。今に國政を處理するかも知れないんです。
夫人　それぢや始めませう。お蔭さまで、胸のつかへが降りましたわ。
ある男　どう致しまして――何でもご相談くださいまし。特にお姫さまのご結婚のことなんぞはね。私、力の及ぶかぎり最善の道をとりますから……
（二人、話しながら出て行く――間――伯爵夫人、四人の奥さま達を案内して出て來る――）
夫人　さあ。皆さま。どうぞ、おはひりあそばして……あの、それから、お席は、あの、ご主人さまの勳等の順にいたしたうございますの。いかゞで御座いませうか。
第一の夫人　結構でございますこと。
夫人　皆さま、いかゞで御座いませう。
一同　（口々に――）それが宜しうございます。
夫人　それでは南城さまの奥さま。ご主人さまは勳一等の旭日でいらつしやいましたわね。どうぞ、ご上席へ。
第一の夫人　ありがたう存じます。でも、白井の奥さま、お宅さまも勳一でございませう?
第二の夫人　あの、宅は勳一の瑞寶でございますから……

どうぞ、どうぞ。

第一の夫人　さやうでございますか。では、失禮いたします。（坐る――）

夫人　勳二等のご主人さまは……？

第三の夫人　私でございます。

夫人　では、三番目へどうぞ。白井の奧さま、お着きあそばして……

第二の夫人　ご免あそばしませ。（二番目へ着く――）さあ、中村の奧さま。

夫人　どうぞ。佐竹の奧さまも。

第三の夫人　あの、佐竹の奧さま、あなた、上席へお着きあそばせ。

第四の夫人　でも、宅は勳三等でございますもの。

第三の夫人　けれど、宅は勳二等でゐて、お宅さまより位階は下でございましてよ。宅は正四位で、お宅さまは從三位でございませう。

第四の夫人　それはさうで御座いますけれど……

夫人　皆さま、どうお考へあそばす？

第一の夫人　それは勳等でまゐりますの。

第二の夫人　さうでございますね。宮中席次なんかで見ましても。

夫人　では、さうあそばして下さいませ。

第三の夫人　さうでございますか。

第四の夫人　どうぞ、どうぞ。

第三の夫人　失禮いたします。（三番目へ着く――）

第四の夫人　ご免あそばせ。（末席へ着く――）

第一の夫人　さあ、伯爵の奧さま。どうぞ、ご上席へ。

夫人　あたくし、けふは主人でございますもの。

第二の夫人　いゝえ。でも規則でございますから。どうぞ。

夫人　では、秩序を亂してもいけませんから――（最上席へつく――）あの、どうぞ、お寛ろぎあそばして――何にもございませんのです。ほんのお菓子に粗茶ぐらゐで……

（奧さまたち、お辭儀をする。夫人、呼リンを押す――）

## 第四幕

### （1）隱謀

第一の暴力團員
第二の暴力團員
ある男

時を經たある日――朝の光の漲る街上。暴力團員たち

太い杖をついて歩いてゐる。

第一の暴力團員　どこかの政黨本部へいつてみるか。

第二の暴力團員　だめだろ。ともかく、民權黨が敗れて以來、こちとらには不景氣つゞきだ。どつか、いたぶつてやる會社はないかな。

第一の暴力團員　材料がないなあ。どこだつて飯ぐらゐは出すだらうが――

第二の暴力團員　とても空腹じいぜ。

第一の暴力團員　それに、取締がやかましいのでなあ。二三年前はいゝ世の中だつた。どこの會社へいつたつて、包金は出來てゐたもんだ。

ある男　（出て來て――）ちよいと――お見かけするに、諸君は國士を以て任じてゐる方らしいですね。

第一の暴力團員　それがどうした。

ある男　仕事をしてもらひたいんです。實に大問題だ。こんな不合理な問題はめつたにないですよ。

第二の暴力團員　言つてみ給へ。話によつては、我輩、勞を惜しまんで遣りますがね。

ある男　これは、ある株主から出たんだが、そら、丸の内の日本パルプ會社、ご存じですかね？

第一の暴力團員　伏島の會社だ。我輩よく知つてるよ。

ある男　設立してから、さう古くはない。そこに大祕密がある。つゝいてみ給へ。大枚二百萬圓の金が、使途不明だ。驚いたらう。驚くことはない。この金が、ある政黨に流用された傾向があるのだ。

第二の暴力團員　しめた。

ある男　やつつけてくれ給へ。大問題だ。僕は、正義人道のために、この問題を君たちに提供する。働いてみないかね。

第一の暴力團員　ありがたう。感謝する。ちやうど、仕事がなくて困つてゐた。すぐ、行かう。

第二の暴力團員　君は……？

ある男　ほかに仕事がある。

第二の暴力團員　さうか。おや、遠慮なく申しうけよう。

第一の暴力團員　君は誰ですか？

ある男　僕は、ある興信所の事務員さ。早く行きたまへ。輿論の喚起には新聞へ賣込みたまへ。

第一の暴力團員　承知。承知。おや、失敬する。ありがたう。

第二の暴力團員　ありがたう。（退場――）

ある男　これで第一段だ。よろしい。（鞄をあけて莫大な紙幣の束を出す――）まだ、だいぶある。兜町だ。大阪だ。日本全國だ。誰が、誰が氣がつくもんか。はつはつ。この僕が犯人だつてさ。この俺が大泥棒だつてさ……二

百萬圓がこゝに――

## （2）失意の人

伯　爵
伯 爵 夫 人
あ　る　男

時をへた、ある晩――伯爵の居間。美しい日本座敷である。電燈の笠に綺麗な絹の飾りが垂れてゐる。

伯爵と夫人とが沈みがちに物語つてゐる――

伯爵　…………
夫人　（夕刊を讀みながら）……まあ、こんなことを……ほんたうぢやございますまい。うそでございませう？
伯爵　…………
夫人　ねえ。うそでございませう？
伯爵　うそではなからう。
夫人　えつ。
伯爵　しかし、案ずることはない。私は何ひとつ不正なことをした覺えがない。
夫人　日本パルプ會社に行方不明のお金があるつて――
伯爵　それは、多分、伏島が黨へ寄附すると言つたその金だらう。私は、あれが自分の財産を割いてよこすとばかり思つてゐた。會社の資金を流用しようなどとは考へてもゐなかつたが――
夫人　そのお金は、お手許までは屆いたのですか？
伯爵　たしかに――
夫人　お受とりあそばした？
伯爵　伏島自身で黨の事務所まで持つてきたのだ。だが、私は見たこともないよ。正直に話すと、伏島が金の包みを机の上に置いて、ちよいと何かしてゐるうちに、金は誰かに盜まれてしまつたのだ。
夫人　…………
伯爵　民權黨はこんどの總選擧に敗けた。見るも無慘の敗北だらう。その第一の原因はこゝにある、思ひやうでは、この金の紛失も反對黨の遣つた仕業でないかとも考へられる。しかし、私自身に責任はないんだから……
夫人　何といふことでございませう。
伯爵　奇怪事だ。全く不思議だ。と言つて、明らさまには出來ない問題だから。伏島のやつ、何だつて背任的行爲なんぞしてくれたのだらう。しかも、あの會社の株主は錚々たる連中が集つてるんだ。
夫人　その犯人が捕まりましても……
伯爵　これは捕まるまい。誰が訴へて出る。訴へて出るものが、まづ、法律の適用をうけるんだからねえ。困つたことだ。かう、新聞に出るやうになつては……（夕刊を

とりあげる――)

夫人　政黨方面に流用した傾向があると書いてありますね。

伯爵　さう書いてある。

夫人　あなたのご迷惑はございませんですか。今後とも。

伯爵　さあ。あるかも知れない。私の政治的生涯も終りかも知れん。だが、心配はしないでいゝ。いかに問題が進んでも、それ以上に惡くは進展しやしない。

夫人　隱退なさるのでございますか？

伯爵　また、解らないが――選擧の敗北以來、黨員中に總裁排斥の氣運が起つてゐる。けふも、そんな會合があるさうだ。あの男が歸つてくると、いづれ、具體的の情報がわかるだらうよ。

夫人　あなたの黨のかたが……？

伯爵　そんなものだよ。

夫人　あたくし、信じられません。

伯爵　それが世の中さ。世の中は、お前たちの考へてるやうに美しいものぢやない。すべてが利慾だ。私が勝てば內閣總理大臣で、獵官運動者が市をなすだらう。敗ければこの通り、今までの恩義も、仕事も、犧牲も、何もかも忘れられてしまふのだ。祖先から莫大な遺產を私は黨のためにつかつてしまつた。が、それを覺えてゐる者はひとりもない。これが今日の政治家といふものだ。たいてい、さうしたものなんだよ。どの社會だつて同じことだ。

夫人　あたくし、社交界へも出られないでせうか？

伯爵　なぜ。

夫人　あなたが地位をお失くしあそばしたら……

伯爵　ばかを言ひなさい。お前は伯爵夫人でゐられるんだよ。その上に藤代家は伯爵の中でも名門だ。さう悲觀しないでもいゝんですよ。

夫人　あたくし、總理大臣夫人になれるのかと思つてゐたのに、それどころぢやない。たゞの伯爵夫人になつてしまふのでせうか。(歔欷く――)

伯爵　泣くな。泣くな。人間は七轉八起きだよ。それに、まだ、總理を止めた、といふのではない。或ひは私の地位は安全に殘されるかも知れないのだから……

夫人　…………

伯爵　歸つてきたのではないかね。行つてごらん。歸つたのなら、すぐ、こゝへ寄越してもらひたい。

夫人　はい。(眼をふきながら去る――)

(伯爵、新聞をとりあげて讀む。間――ある男、這入つて來る――。)

ある男　ごめん下さい。

伯爵　と、どうだつたかね。代議士會は、總裁不信任案を撤回したらうねえ。

ある男　閣下、けふの太陽新聞の夕刊をご覽でしたか？

伯爵　そ、それは此處にあるが――

ある男　その記事です。一面を埋めた初號見出しのその記事が、急に今までの總裁派の分子をさへ寢返りうたしてしまひました。黨の安全と信用のために、閣下ご自身の處決を希望するといふ決議に……

伯爵　私に辭任せいと命ずるのだね。

ある男　あるまじき所業ですが。

伯爵　お話にならない。短刀をつきつけて腹をきれといふのだね。黨の安全と信用か――はつはつ。寧ろ、はつきり言つてもらひたい。總選擧の費用を私が負擔できなかつた。私はそこで養家を追はれる養子になつたのだ。

ある男　あの犯人は目星がつきませんか？

伯爵　皆目わからない。が、恐らく日本には、もう居るまい。あれほど大膽の所業をやる奴だから。だが、パルプ會社の方は誰がほぢり出したのかね。よほど、鋭い人間にちがひない。

ある男　なあに、會社ゴロといふ商賣人がゐるんです。きつと、そいつらの仕業だと思ひます。それでは、もう、ご用は……

伯爵　いや、待つてくれ給へ。私は君を信用し力にしてゐる。ひとつ、私の進退について考へてくれ。君の腹藏のないところを……

ある男　さあ。それは私ごときものの差出る筋でございませんから。

伯爵　遠慮なく言つてもらひたい。私は決議どほり自發的に隱退すべきものか。それとも……

ある男　强ひて申しあげますと――

伯爵　うん。

ある男　暫らく閑地におつきになるはうが宜しうございます。

伯爵　うん。總裁を止して……が、體面といふ問題もあるだらう。それとも決議をつきつけられて追ひだされなければならないのか。そんた理由でもあるのか。

ある男　私の考へによりますと、閣下がこゝで、小さい體面問題などに拘泥なさつてゐらつしやいますと、とんでもない不祥事が起ります。閣下は一方、ます〱、黨内の敵に乘せられる不利と共に、また、遂に伯爵の榮爵をさへお失くしにならなければなりません。

伯爵　と言ふと……

ある男　簡單に申しあげます。閣下は二百萬圓の債務者でいらつしやいます。

伯爵　債務者——しかも紛失した金のかい？

ある男　さうです。さうです。閣下はあの金を無證書でお受けとりになりましたか。あの金を受けとる前に、何か一札お出しになりはしませんでしたか？

伯爵　それはある。しかし、形式だからね。事の形式として、私は伏島に一札を書いて渡した。

ある男　どなたのご名義で……

伯爵　私の名義でだ。

ある男　すると、それは個人對個人の貸借でございませう。

伯爵　しかし、それは形式だよ。伏島が何を言ふものか。形式は個人同志だが、實質は、あくまでも對政黨の寄附行爲だから。

ある男　それは違ひます。この問題で主要な點は、寧ろ證書の有無よりも貴族と平民との性格的相違の方が多うございます。日本パルプが大穴をあけた。若し、この場合、パルプの社長が貴族でありましたら、社長は自身、財産を抛擲して責任を完うするでありませう。が、パルプの社長は平民でございます。しかも、生れて以來、金錢を理想として働いてきた男でございます。打算と功利の奴隷、黄金の坑夫でございます。パルプが騒ぎだし輿論が盛つてくると、彼は自分の財産を投げださうとは考へません。思ひだすのは金庫の中にある一枚の證文でございます。投げだすどころではない、寧ろ、所有財産を隱匿するでございませう。

伯爵　私は、紛失した二百萬圓を請求されるのかい？

ある男　もし、閣下がこのまゝであらるゝとすれば……

伯爵　隱退すれば……？

ある男　同情を買ひ得ます。第二に、これが政爭問題に進んでいつても、閣下個人のご迷惑にはなりません。

伯爵　しかし、私が公生涯を投げだしても、君の言ふ通りなら、金庫の中の證書は無效にはならないだらう。

ある男　無效にはなりませんが、無效とする可能性は多分に生じます。私は喜んでこの使者に立ちませう。そして、あの男の同情に愬へて、請求の意志を封じてまゐります。殊にあの會社が、閣下に負ふところ多いのは、この場合、非常に有利な一材料になるのです。

伯爵　弱つたことになつてしまつた。

ある男　それとも、閣下は、ご債務をおはたしになりますか。

伯爵　私に財産はない。もし請求されたら、私一家は禮遇停止だ。これは考へよう。私は氣がつかなかつた。とつくりと考へることにしよう。

ある男　さうなさいまし。私、身魂のあらんかぎりお盡し

いたします。
伯爵　どうか頼む。
ある男　お氣を大きく――今までのご恩義は、いつでもこの一身を捨てさせます。どうぞ、いつも私が忠實な閣下の家僕であることをご承知ください。
伯爵　ありがたう。ありがたう。おや、お休み。私は、とつくりと思案してみよう。とつくりと……
ある男　お休みなさいまし。（去る――）
（間――。）
夫人　（出て――）あなた……新聞記者が三人まゐりまして……
伯爵　…………
夫人　あなた……
伯爵　…………
夫人　あなた……
伯爵　…………
夫人　（心配さうに――）どう、どう遊ばしたのでございます……
伯爵　…………
夫人　あなた。あなた……
（やゝ長い間――。）

（３）不意の訪問

ある男
富豪の妻
富豪
女中

あくる日の朝――富豪邸の接客室。
ある男、待つてゐる。富豪の妻、は入つて來る。
妻　まあ。お珍らしい。
ある男　お早うございます。どうも、ごぶさた致しまして
妻　お忙はしうございましたからねえ。
ある男　忙はしいの何のつて――實際のところ、民權黨の仕事は私ひとりが致してゐるやうなので――私がゐなければ、まづ、どうなつていくのか見當がつきません。
妻　あなた、遣り手でいらつしやるから。
ある男　奧さまは、この節……
妻　どうも、頭痛がいたしましてね。この持病さへないと結構なんでございますがねえ。
ある男　どうも二ついゝことはありませんて――お金が唸つてゐれば片一方に……
妻　あら、ご冗談ばつかり。せめて、宅の道樂でも止んでくれませせば、この持病も治るのでございますがね。

ある男　もう、お目ざめでございますか。

妻　はい。只今、さう申したもんですから。二日酔で頭がおもいとかつて……

ある男　ご宴會も多うございますからな。

妻　さあ。どんな宴會をしてゐるのでございますかしら。見ぬもの淸しといふことがございますからねえ。ほんとに、いゝ年をして——お恥かしい。おや、參つたやうでございます。

（富豪、登場——。）

妻　まだ、お茶も來てをりませんのね。ご免あそばせ。（去る——）

富豪　いやに早いぢやないですか？

ある男　ちよいと緊急の件でして——お出かけ前にお目にかゝり度いと考へましてね……

富豪　なにか、藤代さんのお言傳でも。

ある男　いゝえ。いゝえ。今日は個人資格です。世間がうるさくなつて來ましたので、その點でも、いろ／＼。

富豪　さう。それはそれは——全く、弱つたよ。私も善後策に頭をなやましてはゐるが。どうです。紛失した金は出て來ないのですか？

ある男　どうも、犯人が解らん始末ですから。伯爵は犯人は外國へ高飛びしたらうと考へておいでのやうですが、私はさうは思ひません。さうぢやありますまいか。ひよいとすると、案外、目と鼻のところにゐるかも知れませんね。

富豪　まさか——私も外國說をとる。いくら度胸のある惡漢だつて、まご／＼してゐられるものぢやない。

ある男　さうですかねえ。してみると惡漢なんて奴は、大部分つまらない代物とみえますね。よしんば……

妻　（出てきて——）粗茶でございます。たゞ今、お菓子をよこしますから……（去る——）

富豪　どうも、弱つたことだ。私は、神經衰弱になりさうですよ。

ある男　おたがひに——で、會社の方は、どう進行してゐます？

富豪　そこさ。そこですよ。どうも新聞だけぢや濟みさうもない。噂によると、檢事局が注意しはじめさうでね。

ある男　もう、そこまで……？

富豪　それから、反對黨はこれを政爭の道具にしようとしてゐる。馬鹿をみたのは私だけさ。おまけに、その金は誰からも取れないと來てゐるし……

（女中、菓子を持つてきて去る——。）

富豪　これで私の味方してゐた民權黨もおしまひだ。前途の望みはない。私は、いまゝで、望のないものを援助し

てきて、その上、莫大な迷惑を背負はされた。報酬としては申分ないさ。この上、刑務所へぶちこまれゝば世話はないさ。

ある男　勅選と男爵のかはりにねえ。

富豪　私は欺されたんだよ。この總選擧は大勝利た。次の政權はこつちのものだ。こんな、うまい餌をつけてさ。ところが、私はいそめ一匹喰はない上に、釣針をのどに引つかけて苦しんでゐる。そして、釣をした人に、損害を訴へでることもならないのだ。ばか／＼しい。ばかばかしい。お話にもなりやしない。

ある男　ばかを見るのは善人の證據なんですよ。

富豪　君はよく内部の事情を知つてる人だ。いつたい、民權黨側は、私に對してどういふ意向を表してゐますかね？

ある男　あの金の紛失を惜しむのと、政爭の具に供されるのと、このほかに何も考へてをりませんよ。

富豪　では、私個人のことは可哀想とも考へちやくれないんだね。

ある男　由來、政黨屋といふものはさうしたものですよ。金持は光榮を感じて黨費を出すものだ。從つて、こんな場合、あなたに同情なんか表するものですか。寧ろ、意識にさへ、あなたを浮べることさへありますまい。

富豪　しかし、總裁はさうぢやありますまい。

ある男　私の考へるところでは最もさうぢやないかと思ひます。何しろ、あれほどの地位を捨てるか捨てないかの場合ですから。どつちにしろ、お氣の毒なのは、あなたばかりです。

富豪　私は、あの二百萬圓が返してほしい。あれさへ返れば問題は片がつくんだ。總選擧に負けると知つたら、誰がむざ／＼持つていくもんか。

ある男　金を、おとり返しになつたらいゝでせう。

富豪　あの二百萬を……

ある男　さうです。實は、その用件で參つたのです。私は、あなたがお氣の毒でたまらないので……

富豪　とり返すと言つたつてねえ。

ある男　私は、あの當時、念のためにご注意いたしましたよ。あなたは伯爵から借用證書をとつておきましたね。大切な點は、伯爵個人への貸金といふところですよ。

富豪　證書はある。と言つて、伯爵は貧乏人だ。あるものは家と屋敷だけだらう。

ある男　私は、不可能のことはおすゝめに參りません。伯爵家の内情は、噂と話とは遙かに距離がありますよ。

富豪　あるのか？

ある男　あります。たしかに——それも、閣下の注意深さ

から、悉くが、家族親戚の名義になつてゐるんです。總計して、さあ、三百、いや、四百、萬にとゞきませうか。莫大な財産ですよ。

富豪　…………

ある男　考へてもごらんなさい。あれだけの政治生活に報酬のないといふことがありますか。閣下は滿洲にも事業をもつてゐられるさうです。金がないといふことは要するに、あの人の宣傳が功を奏してゐる結果にすぎないのです。

富豪　なるほど。すると、こりやあ……

ある男　一縷どころぢやない。前途はすべて光明ですよ。請求なさい。お取りなさい。誰が利得のない資本を投ずる者があるものですか。しかも、あなたは合法的です。借用證書をとつてゐられるんだから。それでパルプの方へ返してごらんなさい。すべての問題は一日で片がつきますからねえ。

富豪　ありがたい。ありがたい。私は息を吹きかへしてきたよ。伯爵に逢つてみよう。さうだ。出さなけりや……

ある男　出さなけりや、手段はいくらでも——しかし、私の名はお出し下さいませんやうに。私はあなたのご好誼に報ゆるに過ぎないんですから。

富豪　誰が言ふものかね。君は全く助けの神だ。ありがたう。ありがたう。私はこのご恩を忘れやしない。

ある男　いゝえ。お忘れください。お忘れください。私は。善人の味方をするに過ぎないです。いつも、いつだつて……

## （４）　假面を脱いだ猿

伯　爵

富　豪

その午後——伯爵邸の應接間——

伯爵と富豪とが對してゐる。

富豪　それほどまでになさらなくとも宜ささうに思ひますがねえ。それでは閣下が、ひとり責任を負ふと言つた形ですね。

伯爵　いたしかたは無いでせうな。

富豪　何とも言ふべき言葉がない。

伯爵　政權を握る手腕のない總裁は、いつでも、こんな運命に陷るのです。それも、現在の政治家が、あまりに個人的利權を漁る結果だが——私の次に誰か入幕となるか解らんが、まあ、前者の失脚を眞似ないことだ。

富豪　すると、今後は……

伯爵　土いぢりでもしたいと思つてゐる。私は餘りに俗塵をあびすぎたよ。

富豪　あの金さへ盜まれなかつたら――

伯爵　さう。君の顏をみるとお氣の毒でたまらない。あの金さへあつたら、私は今ごろは內閣を組織してゐたらう。君に報ゆることぐらゐ日常茶飯だつたらう。私の腹案では、君に來年の萬國經濟會議へ出馬してもらふのだつたが……

富豪　ところで……

伯爵　ふむ。

富豪　けふは、愚痴をこぼしに伺つたんですが――ご存じでせうな。パルプ會社の問題を――いよ〳〵。司直の手が伸びて參りましたよ。

伯爵　たうとう遣つたか。

富豪　これは面倒な問題です。いちばん惡いことは目下の不景氣で、私としても、無理をする餘裕がない。いつたい、なぜ、あの會社の金を提供したかといふのに、それも無理からぬ事情からきてゐるので、選擧を控へて急に二百萬の手錢はそろふものぢやありません。ほかのこととは違ふ。融通しておけ。埋めておかう。かう考へたのが過失のもとです。それに、當時の、閣下のお言葉も信賴するに充分でしたからなあ。

伯爵　どうも申譯ない。私は衷心から謝つてゐます。

富豪　いや〳〵、これは運命でせう。誰か謝る。誰が謝まられる。そんなことは一つもございません。私は、不肖ながら紳士ですから――しかし……

伯爵　しかし……

富豪　實際の問題か、かう縺れてくると、そこに、何か具體的の應病與藥をほどこさない譯にいかぬのです。これは、私のことばかりぢやない。閣下のご名譽にも關するので……そこで、私はお願ひするのだが、いかゞでせう。私は閣下に閣下お振出しの手形を一枚……

伯爵　そりや、私としても應分の義務がある。私は、事義によつて振出しも裏書きもいとはないが……

富豪　さうして、ともかく、この急場をしのぎたいと思ふのです。私の關係してゐる事業は多い。多いに從つて、要する資本も少なくはありませんのでねえ。

伯爵　で、どのくらゐ出したらいゝか？

富豪　さあ。さう多額のことはいらんでせう。さやう、ともかく、二百萬ほど……

伯爵　えつ。

富豪　それだけ振出していたゞいたら、ほつと一息つけるのですが――

伯爵　しかし、私には、それだけの實力がない。お恥かしいが、實は、その十分の一すらない。私の言つたのは、君のいふ百分の一か二のことだ。

富豪　はつはつ。ご冗談ばかり。
伯爵　ほんたうだ。うそぢやありません。いざと言へば、この家屋敷を提供する。が、それも十萬とはならんでせう。それですつかりだ。何もない。
富豪　ほんとに無いのですか？　と言ふと失禮だが……
伯爵　ほんとに無いですよ。私は政治のために、すつかり失つてしまつたのです。
富豪　とすると、私は手形をいたゞけないわけですね？
伯爵　どうもねえ。君に對しては堪らん場合でもあるが……
……
富豪　と言はれてみても、この事件が片づくわけぢやない。閣下、いかゞです。もう、懸引はやめてお話しようぢやありませんか。私は、閣下が、財産を隱匿していらつしやる事實を知つてゐる。手形をふりだしても、まづ、半分の餘はのこるくらゐ……
伯爵　君は、何をいひだすのだ。
富豪　なに、私ひとり、ばかを見る必要はないと言ふんです。どうか、手形を振出して下さい。私は檢事局の注意人物にまでなつてゐるんですよ。
伯爵　君は、寄附金を返せと言ふのか。
富豪　あの金のことは申してゐない。閣下振出しの手形をいたゞきたいのです。

伯爵　…………
富豪　いかゞでせう。私は、非常に忙はしいのですが。
伯爵　歸り給へ。
富豪　な、なんですつて……
伯爵　我輩は亡恩者を好まない。君は昔を忘却したのか。パルプの權利、朝鮮鐵道の權利、何の利權、それは、誰のために得られたのだ。我輩の政治生活が絶望に終るとみると、君は、不當の貸金まで請求するのか。
富豪　これはこれは――いや、私は忘れはしません。しかし、私はそれらの物に、すべて定價をはらつてをります。私の要求するのは、先拂ひの自分の金なのです。私は、品物をうけとりませんからね。
伯爵　歸り給へ。歸り給へ。
富豪　さう。そんなら手形は要求しません。私は、貸金のはうを取りたてる。
伯爵　…………
富豪　どつちにしろ同金額です。そして、私は合法的で、權利者だ。私は勘定だけは正確にして置きたい。
伯爵　（叫ぶやうに――）歸れ。貴樣は、貴樣は――猿。山猿……

（5） あひゞき

伯爵令嬢
富豪の息子
ある男

夕ぐれ——白いテラスの見える伯爵邸の奥の花園。息子、ベンチの上で口笛を吹いてゐる。間——

令嬢 （登場して——）あら……

息子 こんにちは……

令嬢 なぜ、お部屋へいらつしやらないの？

息子 いきにくいんだもの。

令嬢 なぜ？ 待つてたのよ。お部屋でいつまでも待つてたのよ。ひどいわ。

息子 だつて——僕、いかれなくなつちやつたんだ。君と、お友だちでなくなつてから。

令嬢 いや。そんな……

息子 掛けたまへ。さあ。

（令嬢かける——。）

息子 口笛が聞えたでせう？

令嬢 えゝ。

息子 僕は、三十分前から來てゐるんだ。

令嬢 あたくしだつて——待遠しくてしかたがないでせう。そのことばかり考へてゐたら、綫とりの薔薇の花䕃を六つにしてしまつたわ。

息子 すまない。すまない。

令嬢 さあ。お話してちやうだい。「獨逸男のヒンケマン——」の第二幕目……あれから、どうしましたの。

息子 僕、けふは止さう。

令嬢 どうして？

息子 あの物語は、けふの自然に對して餘りに暗いから。僕さつきから、花の匂ひを嗅いだり、淺黃色の、あの空を眺めてゐたら、ひどく、ロマンチックになつてしまつたんだ。春の夕ぐれはいゝ。そら、白いお月さまが出てゐる。

令嬢 まあ。その氣持が、あなたの仰言るプチブルぢやないの？

息子 ぢやない。詩的生活だ。どんな人だつて思想と生活は異ふんだから。まして、僕、戀を得たんだもの。得たんだもの。得たんだもの……（抱く——）得たんだもの。さあ、顏を見せて。

令嬢 おしろいが斑らけよ。

息子 よし〳〵。笑つてみせて——目をつぶつて見せて——開いてみせて——それから……（キスをする——）

これでよろしい。

令嬢　ひどいわ。おもちやにして……その次は、歌をうたへと仰言るんでせう。

息子　はつはつ。覺えられちやつた。よし。さうしませう。歌ひなさい。これは二人の逢曳の順序なんだ。さあ。さあ。歌はないの。歌つてください。

令嬢　ひどいかた……

息子　歌つて。歌つて。

令嬢　（唄ひながら――）

孔雀は羽を榮に
ひろげて戀を思ふもの
君こひしさに摘みとりし
薔薇さへ花は紅かりき

息子　（ともぐ\に――）

君こひしさに摘みとりし
薔薇さへ花は紅かりき
孔雀も薔薇もわが胸も
君を戀ふべく作られぬ
君を戀ふべく作られぬ

令嬢　あつ。誰か來たわ。あの人よ。

息子　あゝ、幻想が破れちやつた。

（ある男、出て來る――。）

令嬢　何かご用なんですか？

ある男　えゝ、ちよいと――僕、ぢき向うへいきます。

息子　どんな用があるんでせう？

ある男　實は、ぜひ、あなたに聞きたいものがあるのです。と言ふのは……（ポケットから赤い本を出して――）この本ですがね。いつか、このベンチの所で拾ひまして……

息子　あつ。

ある男　えゝ。「レエニズムのＡＢＣ」珍らしい物ですね。え。いや、ご心配になつてはいけません。僕、これで勉強したいんです。

息子　勉強するんですね。

ある男　さうですとも。私は手に入れたくてならなかつたんです。

息子　喜んでさしあげます。

ある男　そりや、どうも――どうでせう。記念にサインをして下さいませんか。

息子　えゝ。してあげませう。お貸しなさい。（萬年筆を出してサインする）これでいゝですか。

ある男（本を受とつて——）結構です。結構です。どうも有がたうございました。

息子　僕、また、澤山ありますから。

ある男　えゝ。ぼつ〳〵拜借しませう。ぢや、いづれ。

息子　さようなら。

（ある男、去る——。）

令孃　あたくし、いつか、こゝへ置いていつてしまつたの。あの本。

息子　愉快々々。また、仲間がひとり。さあ、幻想を呼びかへしませう。お歌ひなさい。（マンドリンを彈く——）

令孃、息子（二人で——）

　孔雀は羽を紫に
　ひろげて戀を思ふもの
　君こひしさに摘みとりし
　薔薇さへ花は紅かりき
　孔雀も薔薇もわが胸も
　君を戀ふべく作られぬ
　君を戀ふべく作られぬ

息子（情感的に——）僕、どう、どうしたらいゝのでせう。

## 第五幕

### （1）現物仲買店

ある男
支配人
ほかに店員たち

市場開催中のある時——店員たち、事務をとり、外交員たち、歩きまはり、支配人、一つの卓に倚つてゐる。

時々、小僧が市場から走つて來る。「東京ガス、六圓六十錢ドタ……鹽水港新株三圓七十錢ギレ……」などと怒鳴る。ある店員が、それを黑板に書く。外交員たち、その都度、耳語し合ふ。

ある男、支配人と對してゐる。

支配人　いくらでも要るんですね。いくらでもですね？宜しうございます。長距離で言つてやりませう。

ある男　いくらでもだ。しかし、煽つちやいけない。大口

の買物おや値が上るよ。

支配人　あんたは物ずきなお客さまだ。上るもんですか。日本パルプの株は、いや氣がさしてゐるんでさあ。誰が買ひ募ふもんですか。あんたのやうな思惑師はゐやしません。

ある男　はつはつ。僕は成金になるよ。おや、預けておかう。この前の五百の方もとつてくれ給へ。（鞄から紙幣束を出す）

支配人　かしこまりました。確かに――

ある男　方々に散つてゐるだらうね。

支配人　えゝ。全國的に買ひませう。なあに、口さへかけりや、誰だつて手離しますよ。何しろ因縁つきの株ですから。

ある男　やつてくれ給へ。皆んな買はう。僕の思惑は外れつこない。日本パルプを建物ごと買つてやるんだ。いゝか、いゝか、買ひ占められるだけ。買ひしめられるだけ……

（2）　離れ座敷

富　　豪
あ る 男
姐 さ ん
藝者二三人

とある晩――待合の離れ座敷。
富豪、ひとりで酒をのんでゐる。
姐さん、お銚子をもつて來る。

姐さん（外で――）ご免ください。（は入る――）いやに、しんみりで御座いますね、

富豪　うん。

姐さん　お酌いたしませう。

富豪　うん。

姐さん　あの人、呼んで置きますですか。

富豪　いや、客がきてからでいゝ。少し、こみ入つた話があるんだ。さうだな。話のすむころに、二三人よこしてくれ。

姐さん　かしこまりました。お酌を……

ほかの姐さん（外で――）お兼さあん。

姐さん　はあい。

ほかの姐さん（外で――）お客さまよ。

姐さん　はあい。（襖をあける――）
（ある男、は入つて來る――。）

富豪　やあ。

ある男　今晩は……

姐さん　ゐらつしやいまし。どうぞ、お敷きあそばして……

富豪　おそかつたね。どうかと思つた。

ある男　ちよいと出られませんでね。大いそぎで馳けつけたのです。

（姐さん、退場――。）

富豪　かなり、待つたよ。はつはつ、藝者をよぶわけにもいかないし……

ある男　それは、それは……

富豪　（盃をさして――）おひとつ。

ある男　恐れいります。どうも。

富豪　めつたな場所を選ぶわけにもいかないし……

ある男　ごもつともです。ご返盃を――。いゝ家ですな。どこか、おつとりしてゐて……

富豪　まあ、私の別莊どころでね。

（姐さん、料理と酒をもつて來る――。）

ある男　いゝ姐さんですね。

姐さん　あら、恐れいりますこと。では、お一つ。お證ですから。

ある男　（受けて――）どうも。

富豪　ぢや、用があつたら呼ぶから……

姐さん　はい。かしこまりました。（去る――）

（短かい間――。）

ある男　ところで、ご用といふのは……？

富豪　それさ。ほかぢやない。私は、君に一件の相談をしたいのだよ。どうしても埒があかないさ。伯爵は一文も返しさうにない。會社の騷ぎはます〳〵大きくなつてくる……

ある男　はつ。はつ。

富豪　それにさ――（立つて襖をあけて見てから――）こいつは祕密なんだが、どうも、可怪しなことが出來てゐるんだ。日本パルプの株の買占をやつてゐる形跡があるんだよ。

ある男　へえ。

富豪　奇怪な事實だ。だが、どうも本當らしい。杳として、目的や本體はわからないんだが。

ある男　それは初耳です。

富豪　さうさ。私自身、このごろ聞いたのだから。

ある男　何だか氣味がわるいですな。

富豪　氣味がわるいさ。目的が解らないだけ、薄つ氣味がわるい。思惑としちや、どうも素人ばなれがしてゐるよ。

ある男　全く。

富豪　そこで、私の不安は增すばかりさ。どうしたつて、あの缺損を埋めて置かなけりやならない。いつたい、いつ、どんな事が始まるか知れないんだから。

ある男　さやう。さうしなければ——と言つて、伯爵は金を返さない。伯爵が金を返さないとすると……

富豪　伯爵は返さないぢやない。返すことが出來ないと言ふのだ。

ある男　やつぱり、さう言ふのですね。

富豪　さう言ふのだ。しかし、君の言ふところでは財産があるやうだし……

ある男　あれで金がないなら、世間に金もちはゐない筈です。が、そりや、取らなけりやなりませんね。出來るだけ早く取返して會社の帳簿を整理しなけりや——いや、どんなことが持ちあがるか知れません。

富豪　さう、なのです。

ある男　單に豫感だけでなく、事實としても。

富豪　さう〳〵。さうだとも。どんな陰謀が企てられてゐないものでもない。私の勢力を嫉んでゐるものもあるから。

ある男　困りましたねえ。全く、困りましたねえ。

富豪　困つた。困つてしまつた。

ある男　まご〳〵してゐると、司直の手と陰謀とで挾まれてしまひます。あなたの現在の地位さへ危ふくなる。と言つてあなた自身の財産を提供なされば……

富豪　冗、冗談いひなさい。私に餘分の金なんかあるものか。こゝの拂ひだつて、實は濟しくづしてゐる始末なんだ。

ある男　だからです。よしんば餘裕があつたつて馬鹿な浪費です。あくまでもこりや貸金で埋める性質のものですからね。（腕を拱いて——）ふうむ。こりや、普通の手段ぢやいけませんな。

富豪　訴訟でも起すか。

ある男　それだけぢや無效でせう。相手は一通りでない債務者です。さうです。たつた一つの方法があるだけです。この方法を措いて、あなたを救ふ手段方法はありません。

富豪　どういふ……。

ある男　まづ、伯爵から家政の實權を剝奪する。隱居をさせるのです。もし、それ以上いゝ方法があれば尙よろしい。それから、伯爵家の新らしい當主を作るのです。幸ひに、あすこには娘がひとりゐるだけですから。

富豪　養子をさせるのだね。

ある男　さうです。さうです。しかも、その養子も普通の義務を感じてゐる男でなければ——つまり、この間の事情に通じてゐる男でなければね。そんなら譯はないことです。伯爵令孃の名儀の金が、二百七十萬圓もあります

から。
富豪　えつ。
ある男　私はすべてを知つてゐます。さうぢやありません
か。さうでもしなければ、この貸金は永遠にとれますま
い。
富豪　しかし、そんな、いゝ養子があるだらうか。
ある男　ありませう。ありますとも。ないことは有ります
まい。
富豪　が、もし、あつてもだ。どうして、伯爵を隱居させ
るのだ。
ある男　訴訟するといつて、辯護士をさし向けなさい。名
譽は華族のいちばん惜しむところです。訴訟するといつ
ただけで、あの人は自から決するに違ひありません。そ
れから、あなたは、飽くまでも訴訟々々を武器として、
伯爵家の養子決定權をお握りなさい。さうすれば成功し
ます。あなたの決めた養子は、きつと、あなたに伯爵家
の債務をはらふでせう。
富豪　しかし、その候補者が……
ある男　ゐますとも――
富豪　ゐるつて……？
ある男　最も養子適任者がゐるぢやありませんか。
富豪　どこに？
ある男　はつはつ。あなたの目の前に……。これほど理想
的の候補者はゐませんよ。
富豪　（膝を叩く――）
ある男　いかゞです？
富豪　結構。結構。あゝ光がさして來た。私は救はれた。
さあ、お祝ひだ。飲まう。大いに飲まう。
ある男　飲みませう。大いに飲みませう。
（富豪、手を叩く。と、藝者たち二三人、出て來る――
――）
藝者たち　（手をついて――）今晩は。今晩は……
富豪　やあ。きれい。きれい。今夜は皆んな抱いて寢てや
る。來い。來い。

（３）　辯護士商賣

伯　　爵
ある　男
若い辯護士

ある日――伯爵邸の應接間。
辯護士とある男が會見してゐる。
辯護士　伯爵は逢つてくださらない。私は逢つて話ができ
ない。とすると、私はいつたいどうなります？
ある男　さあ、どうなるんです。あなたの該博なる法律的

解釋ぢや……まさか、治安警察法にも觸れやしないでせう。

辯護士　冗談はおやめなさい。私は辯護士なんですよ。しかし、困りましたなあ。と言ふのは、私の商賣ができないからです。被告が法廷へ出てこない。判事も檢事も缺席してゐる。いつたい辯護士はどうしたらいゝのでせう。法廷で辨當でも喰へといふんでせうか。

ある男　私は伯爵の代理人ですよ。

辯護士　いや、伏島さんに伺つたところでは、あなたは、原告側のお人ですよ。

ある男　言葉に注意して下さい。私は伯爵の祕書ですから。しかし、何しにゐらつしやつたのです。

辯護士　伯爵家へ出張しろといふのです。それから、伯爵に逢へといふのです。逢つて、訴訟を起すからと通告しろといふのです。それから、私の必要と職業的權限の最大限度で、事件の內容に就いて質問しろ、寧ろ、取調べろといふのです。

ある男　絕對的威嚴をもつてね。

辯護士　さやう。私は辯護士ですから。しかし、どうでせう。伏島さんは伯爵を訴へるのでせうかね？

ある男　何ですつて？

辯護士　伯爵を訴へるでせうかと伺つたのです。

ある男　だつて、あなたは辯護士ぢやありませんか。訴へる意志なくして、何のために辯護士を賴むんです。

辯護士　賴まれる場合も多いですよ。私が袍をかゝへて訪問すると、民事の事件はそれだけで解決するのです。

ある男　そ、そんな薄弱な熱意ぢやだめだ。伏島さんは、二百萬からの貸金があるんですよ。もし。

辯護士　もし、訴訟するとすれば伺いゝわけです。日當のほかに一割いたゞきますからなあ。もちろん、私たちなら三分ですが……

ある男　お願ひだ。もつと、しつかり遣つてくれ給へ。けふは、君の職業名を代へるんだ。辯護士ぢやない、執達吏とね。君は辯護にきたんぢやありませんよ。

辯護士　はい。はい。

ある男　叱られてゐてはいけません。君、いつ、免狀をとつたのですか？

辯護士　今年です。登錄してから二ケ月にしかなりません。

ある男　あなた、何か、書類をもつてきてゐるのですか。

辯護士　いや、まだ、間に合はんのです。その、一件の證書といふのは預つてきましたがね。

ある男　證書――借用證書ですね。

辯護士　さうです。伯爵に示して承認させる手段にですよ。

ある男　私は、まだ、それを見てゐない。目を通して置きませう。

辯護士　さう。それは必要ですな。（鞄をあけて證書を出す。渡して――）ごらん下さい。明らかに借用證書です。

ある男　（見て――）なるほど。借用人が伯爵で債權者は伏島さんだ。金額は貳百萬圓……おや。

辯護士　どうしたんです？　變な聲をだして……

ある男　はつはつ。こりや無效證書だ。君の方が敗訴になる。

辯護士　なぜ……？

ある男　冗談ぢやありませんよ。こりや、覺え書の形式だ。借用期日も支拂期限も書いちやない。君、ご存じでせうね。證書の中で有力なのは、公正證書だけなんですよ。これぢや、永遠に利子を拂ふ必要もないし、永遠に返濟する義務もないんだ。冥途へいつてから支拂ふと言はれたつて、裁判長は否認する權利がない。こいつは書直してもらふ必要がありますよ。どうです。さうぢやありませんか。

辯護士　なるほど――なるほど。

ある男　學校で習ひませんでしたか？

辯護士　習ひましたよ。習ひましたとも。しかし、忘れてしまつたのです。

ある男　これは、かうしませう。とも角、二人の大紳士の問題ですから――私から言つて公正證書に直させてあげませう。

辯護士　書直しますかな？

ある男　そりや。人間は名譽が第一です。伯爵は熊さん八さんの眞似はしますまいよ。

辯護士　いかにも。では、さう願ひませう。訴へる。敗訴になる。從つて、私の報酬も違ひますからな。歸つて、あなたのご厚意を伏島さんにお傳へしませう。

ある男　さうして下さい。すべては證書が出來てからです。この場合、證書が唯一の證據物件ですからねえ。

辯護士　さうです。さうですとも――では、おいとまを――何か仕事があつたら遣らせて戴きたいんですがね。

ある男　えゝ。えゝ。喜んで――私は君のやうな善い辯護士を見たことがない。私は、屢々、君をお賴みするでせうよ。

辯護士　ありがたう。さようなら……。（去る――）

ある男　さようなら――（間――）はつはつ。さようなら。（マッチを摺つて證文を燒く――）　さようなら。さようなら……

（伯爵、登場――。）

ある男　あ、閣下。
伯爵　きなくさい。
ある男　その、辯護士の落していつた鼻紙を燒いたのです。不潔ですからね、窓をあけませう。（窓をあける――）
伯爵　伏島は訴訟をするのか？
ある男　遺憾に堪へませんが……私、懸河の辯をふるつて阻止しましたが、聞いてくれる餘裕がないのです。地位はあつても、成上りの猿ですからねえ。
伯爵　…………
ある男　閣下、この上は金子調達の道よりありません。閣下の努力で、二百萬や三百萬ぐらゐ……
伯爵　それが出來れば苦勞はない。私は失脚者だ。考へてみたが、とても、調達の道がない。
ある男　でも……
伯爵　訴訟には負ける。私は證書を入れてゐるから。私は差押へを受けるだらう。藤代家は禮遇停止をまぬがれない。辯護士はどんな人物だ。
ある男　辯護士は兩貴に輪をかけたいやな奴です。この事件が法廷で勝つといふことを確信してゐるんです。そして、伏島さんを焚きつけてゐるのです。訴へるといふ所まで來たのも、實は、辯護士の才覺なんですよ。有名になる點でだつて、こんな訴訟問題はめつたにありますまい。
伯爵　いよ〱絶望か。
ある男　運を天にまかせるより――相手の方には手段がのこつてをりません。施すべき手段はみんな逃げつくしたのです。
伯爵　運命だらう。惡くなると惡くなる一方だ。私のとる方法はたゞ一つ。どうかして、祖先以來の家の名譽を保持しようとする希望だけだ。ほかの物はいらん。これだけは殘したい。
ある男　と、仰言ると……
伯爵　私の決心だけさ。私は長いこと考へぬいたよ。私は、その方法を發見した。どんな無慈悲でも抗することのできない事實だ。いまはそれだけしかない。
ある男　ご隱居なさいますか？
伯爵　そんな手緩いことぢや駄目だらう。私は、君にお願ひする。どうか、瞬間的な、自殺の遣り方を敎へてくれ。
ある男　えつ。
伯爵　いちばん效果ある處置だよ。私は、私は、名を惜しまねばならない。
ある男　閣下――恥を知る人間は、昔からその道を選んだものです。私は閣下の晩節を傷つけたくありません。私はお止めいたしません。私は閣下に對する尊敬の念を新

にしました。
伯爵　ありがたう。ありがたう。
ある男　それが最後の最も有效な手段ともなるでせう。しかも、閣下は、ご先祖以來の赫々たる名譽を保持されるのです。いや、それだけぢやない。何といふ立派な犧牲だ。閣下のご計畫は、政界の敵と味方とに高尚なる稱讃を博するでせう。藤代家の高貴なる血と、優秀なるご氣質との發露だ。おゝ、おゝ、何といふ悲壯美だ。深刻美だ。男性美だ。それは、それは、それは……

## （4）誰も知らない

伯爵夫人
令　孃
寫眞師
伯　爵

ある日——白いテラスの見える伯爵邸の奥の花園。
寫眞師が、機械を組立てゝゐる。
盛裝した夫人と令孃とが待つてゐる——

令孃　なぜ、急に、寫眞をとるなんて仰言ひましたの？
夫人　それはね。そら、いつかフランスから勳章をお戴きになつたでせう。あの時、撮るのを忘れてゐたからよ。時候も寒かつたし……
令孃　さういへば、珍らしいくらゐねえ。このごろ、めつたに家族でとつたことはございませんのね。
夫人　お父さまがお忙がしがつたから。
寫眞師　まだ、お見えになりませんでせうか。
夫人　もう來るでせう。も少し。
寫眞師　光線がとてもいゝのです。
令孃　あ、いらしつてよ。いらしつてよ。
（伯爵、大禮服で登場——。）
令孃　お父さまつたら、歌舞伎座でみた、森有禮そつくり……
伯爵　うん。森も兇器で死んだ。私も兇器で死ぬかも知れない。
寫眞師　どうぞ、お並びください。えゝ。ご姿勢はどんな風に……
夫人　さうですねえ。
伯爵　私が眞中へ立たう。お前はこつち。奥さんは、こゝ。
夫人　こゝでございますね。
伯爵　さう。これでいゝ。
寫眞師　お姫さま、もう少し、お顏を右……はい、宜しうございます。ご前さまの、おみ足をお揃へあそばして……はい、結構でございます。それからと——では、（シヤツターの音——）はい。ありがたう御座いました。

夫人　ご苦勞さま。

伯爵　よく拵らへてくれ。大切な記念の撮影なんだから……

……それから、急ぐんだ。いゝかな。いゝかな。

（5）夜

伯爵
ある男

ある晩――伯爵邸の應接間。

ある男、ひとり居る。間……伯爵はいつて來る。

伯爵　いゝかね？

ある男　お書齋のお机の上に――

伯爵　ありがたう。

ある男　閣下――（泣く）閣下……

伯爵　あとを頼む。

ある男　閣下……

（伯爵、出てゆく――。ある男、時計を出して見つめる。長い〳〵間。二階から鈍い銃聲が一發。）

ある男　十時二十六分……コルトは手頃でいゝな。しかも、高かあない。

（6）その深夜

富豪
伯爵夫人
伯爵令孃

遺骸の安置してある灯のついた部屋――

富豪が、夫人令孃と話してゐる。

夫人　……で、お話といふのは何でございます？

富豪　まあ、さう改まらないで――さう、重大なことでもありませんよ。

夫人　だつて、お通夜の晩に、親戚も召つかひの者も遠ざけるやうでは――あたくし、何だか胸騒ぎがいたしますわ。

富豪　ご心配ありませんよ。しかし、閣下は、何か遺書でもお殘しでしたか？

夫人　一つもございません。

富豪　奥さんは、閣下の自殺の理由をご存じですね。

夫人　ほゞ存じてをります。あなたの前ですが、例の訴訟問題に就ては、よほど、頭をなやましてをりました。（涙をふく）

富豪　どうぞ、誤解のない樣に――閣下は訴訟の民事方面で惱まれたのぢやありますまい。それが刑事にまで、つまり、政黨的の問題となるのを恐れられたのです。しかし、それは私の意志でも何でもない。

夫人　今となつて、あなたをお怨みはしてをりませんから

――それより、ご用件を承はりたうございますね。こんな人數ぢや心細くつて――あなた、お灯りをたくさん、たくさん、お上げなさい。

（令孃、蠟燭をあげる――。）

富豪　ほかでもありません。閣下のあとの問題ですが――といふより、あなたがたのことなんですよ。そこに私の希望がある。と言ふのは、私の越權ぢやありません。私は、ある權利をもつて申し出るんですが……

夫人　どんな事でございませう？　お金のことでございませうか？

富豪　お金のことは後でいゝのです。それも法的行爲として、このまゝ濟ますわけにはいきませんがね。

夫人　すると……

富豪　その前に、あなたに閣下なき今日、閣下の義務を繼承される自覺をおもちでせうか。といふ譯は、奧さんが、閣下の立場を諒解してゐらつしやるかどうかといふことですよ。

夫人　あたくし、充分に――

富豪　とすれば、私も仕合せです。では、申上げませう。閣下と最大な利害關係をもつ私は、第一にお孃さんに結婚していたゞきたいのです。早まつちやいけない。私が貰ふんぢやない。こんな禿頭ぢやない。

夫人　あなたのご令息……

令孃　（袂をひいて――）お母さま……

富豪　あんな碌でなしぢやない。それに、あれは相續者だ。私のいふのは、閣下の祕書官です。

夫人　えつ。

富豪　あの人を伯爵家の養子になさることですよ。あの人は手腕家だ。ご當家を安泰にするのは、あの男のほかにない。

夫人　お言葉ですが――ご存じでせうか。あの男は、私が、觀音堂の境內でひろつてきた人間でございますよ。

富豪　そ、そんなことが理由になりますか。私だつて、もとは田舍の百姓の伜です。きのふも聞いたのだが、ムソリニは鍛冶屋の息子だつて言ふぢやありませんか。ともかく、ご承認くださらないと大問題ですよ。私は、滿腔の同情と好意で言つてをるのですから……（令孃、去らうとする――）お待ちなさい。お孃さん。

令孃　でも、そんな……

富豪　迷ふと迷惑なさいますよ。もし、あなたが否やを仰言れば、お宅は破產です。明日にも執達吏がきて、この戶棚も道具も、何から何まで差押への封印をはつてしまひますよ。そして、その決定權は私にあるんですよ。私にあるんですよ。それから、名譽のあるご親戚はたく

さんにありますが、お金のあるご親戚はひとりも無いのですよ。言つてきかせませうか。あなたのお家は、私に二百萬からの借金があるのです。働きのある養子でなければ、この借金を返すことができない。返さなければ、あなたの代になつても、いやな訴訟沙汰がついてまはるのです。解りましたか。解りましたね。

令孃　かにして下さい。そのお金を返さないでいゝやうにして——そして、厭なことをおつしやらないでください。

富豪　あなたは天使だ。

令孃　けんくわをしないでね。小父さま。小父さまはお金もちなんですもの……

富豪　でも、大金ですからね。さうでせう。お孃さんはお金を稼いだことがありますか。ないでせう。二百萬圓、私はそのお金がないと會社を潰して、刑務所へいかなければならない。お孃さんは、私に赤い着ものをきせて喜んでゐられますか。さうですか。さうぢやないでせう。あなたの首のふりやうで、どつちにもなるのです。もし、私のいふ通りしたら、ご養子が私に返してくださるまで、待つてあげようと言ふのです。お考へなさい。考へないと、ひとりのお母さまさへ、極端な不幸に落ちてしまふのですよ。

夫人　……ご返事は待つていたゞき度うございます。

富豪　もちろん。只今、承るつもりはありません。いつでも——ですが、誤解をなさらないやうに。私は最後の好意ある方法をお示しゝてゐるのですから。ご親戚にも、どうか、よく仰言つて下さい。

夫人　はい。

富豪　では、これで歸ります。閣下の靈を休めるやうに、お二人で、よく〳〵、お考へください。私は、いつまでも、あなたがたの力になります。

夫人　けふは、お送りいたしませんから……

富豪　いや、どうしまして。おからだを大切になさいまし。

（去る——）

夫人　ご機嫌よう。

（長い間——。）

令孃（斷腸的に——）お母さま……

夫人　お父さまがゐなくなると、すぐにこれだ。これから、どれほど馬鹿にされるか解らない。

## 第六幕

### （1）株主總會

富　豪

ある　男
株主總代數名
重　役　た　ち
會　計　係
少　　年

時を經たある日――大日本パルプ製造株式會社の樓上會議室。

富豪（立つて――）それでは、これから、第七回當社株主總會をひらきます。

（拍手――。）

常務取締役（立つて――）皆さん。こゝに第七回株主總會をひらきまして、皆さんと談笑の間に、當社の洋々たる營業成績をご報告申上げますことを欣快に存じます。さて、從來も、總會ごとに然りしが如く、また、今回のご報告も甚だしく宜しいのでございます。と申しますのは――申し忘れましたが事務の簡捷上、今回は、別に當路責任者として營業損益の實際報告を說明いたしません。印刷にして皆さんの卓上に置いてございます。その表によつてご覽の通り、當下半期の差引勘定は實に貳拾三萬圓強の利益を算してをります。この事實、現況を說明いたしますると共に、倘、本社の事業がいかに未來と可能性の潤澤を豫示してゐるか。その欣ぶべき雄辯なる證明をなしますもので、こゝに私どもは、責任の大、また、會社の將來に對して、甚だしき勇躍を自覺するものであります。

株主の一（自席から――）簡單。簡單。

常務取締役　どうぞ、お靜かに――その理由の一つ。と申しますのは今期の好成績の原因でありますが、ほかでもございません。第一は卽ち全般製紙事業の進步發達といふ點、第二は、卽ち、これに加ふるに、最も著明なる一流行としての圓本の豫約販賣でございました。一つの一圓本に要する紙の總量は、決して尠少なる量ではございません。それが幾つ否幾十の種類として出ましたので、直ちに當社の事業の上に喜ぶべき影響を與へたのであります。然してこの出版界未曾有の現像たるや、決して一時的のものでなくして、今後ます〳〵、否、今後の出版界の主流的形式として、永遠に續くべき形式の一つであると信ぜられる。その理由は……

株主の二　事務の簡捷上、それも印刷にしていたゞき度い。

株主の三　我々は問題をもつてゐる。そこで監査役――この實際報告に間違ひありませんね。

監査役　たゞいま、常務の報告がすみましてから願ひます。

常務取締役　その理由といふのは……

富豪　いや、待ち給へ。ちよいと、今期の配當を決めようぢやないか。

常務取締役　さうですか。な、なるほど。では、さう致しませう。では皆さん、私の報告は文書でいたします。その代り、特に株主諸君を敬愛する意味に於て、先例を破り、最初に今期配當率をきめたいと存じますが……

株主の四　必要なし。

株主の五　かへつて疑はれるぞ。

株主の六　その前に質問したいことがあるのだ。

株主の四　監査役、監査役――この報告は間違ひありませんね？

監査役　間違ひありません。

株主の四　誰が報告を作製しましたか？

會計係　私でございます。

株主の四　帳簿に依つてのみですね。それとも、さうぢやない。君は最初の草稿を改めたことはないでせうね？

會計係　私は……

常務取締役　なぜ、さうした質問をなさるのでせう？　何か、報告にご不審の點でもあるのでせうか？

監査役　それは實際報告ですよ。

株主の一　我々は、今日、すでに重役諸君を信認してゐない。例の太陽新聞の記事は無根ではなかつた。なぜなら、會社はあれ以來、一言の辯解もしやしないぢやないですか。

常務取締役　………

株主の一　報告のどこが實際です。借方にも貸方にも當然あるべき筈の二百萬圓の數字がない。

株主の三　それと、こゝにある稚内の第三工場敷地は、いつ購入したのだ。うそをつくにも程がある。それから、前記の配當利益はどこから出したのだ。諸君は蛸配當をして、我々を欺かうとするのか？

株主の四　なぜ、パルプ株がさがつたのだ？　會社の實質が證明されたからぢやないのか？

富豪　それは、何者かの陰謀からです。二百萬圓事件も、單に、パルプ株買占を目論んだものゝ功利的宣傳にすぎません。

常務取締役　さうです。買占は行はれてゐます。そして、そのこと自身が、パルプ株の有利と實質とを證明してゐます。

株主の五　我々は帳簿の點檢を希望する。

富豪　まあ。おたがひに紳士的に話しあひませう。

株主の四　何が紳士だ。我々は重役を信認しない。會計係備へつけ帳簿をもつて來給へ。

重役の一人　まあ。お靜かに。お靜かに。

（――少年に導かれ、ある男、入場して着席する――。）

常務取締役　いかゞでせう。ともかく、總會の常例議事を進行させようぢやありませんか？

株主の六　我々は總會の意義を忘れてはゐません。我々は株主の權利を行使するのです。

常務取締役　ですが、それは後の問題としようぢやないですか。より必要な議事が澤山に殘つてゐますから。

株主の一　必要とは何です。

株主の四　我々の質問を不必要だといふのか。

富豪　さういふ意味でなくです。ともかく、今期の配當率をきめた上で……

株主の三　二百萬圓の使途を報告してもらひたい。

ほかの株主　（口々に――）　贊成。贊成。

株主の三　然らずんば帳簿を見せて貰ひたい。全株主の委任の名に於て、我々は請求する。

監査役　まあ。まあ。

株主の一　答辯ができまい。重役諸君。二百萬圓の行衞を敎へてくれ給へ。さあ、敎へてくれ給へ。

ある男　（立つて――）　私が說明しませう。私は事情を知つてゐる者です。

富豪　おゝ、君か。君だ。君は我々を救つてくれる。我々の潔白を證明してくれる。

ある男　株主諸君。私も株主の一人として、この問題を明かにすべき義務を有する者であります。諸君、及び我々が拂ひ込んだ二百萬圓の金は、決して無意義なる目的のもとに使用されたものではない。しかも、その使途たるや極めて正確に說明し得るものであります。

富豪　さう、さう。然り。然り。

ある男　諸君！　この金は、社長自身の背任行爲によつて、ある政黨に贈與され……

富豪　な、なにを言ひ出すんだ。君。おい。君……

ある男　しかも……

富豪　だまれ。だまれ。何をのぼせ上つてゐる。僕が、僕が見えないのか。

常務取締役　あなた。お坐り下さい。あなたは正氣でないやうに見えます。

株主の一　謹聽。々々。

株主の三　お話しなさい。お話しなさい。

富豪　言ふと、一言でもいふと……

ある男　……しかも、その金は政黨本部に於て盜まれてしまつたのであります。

（株主たちに拍手おこる。富豪、重役に押へられてゐる――。）

ある男　私は、當時、その政黨々首の祕書役を致してをり

ました。これが事情を知悉してゐる最大の理由であります。諸君。日本パルプ社長の罪はこれだけではありません。即ち、背任罪のみならず、明らかに贈賄罪を構成するものであります。何となれば、彼は贈托前に於て、極めて、具體的なる利權報償を契約したからであります。

富豪　うそだ。すべて中傷だ。貴樣、どこからか買收されたのか。

株主たち　（口々に――）謹聽。々々。

ある男　事實を申しのべれば斯の通りでございます。私は全株主の甚だしき僞辱を補ふることができません。不德漢を葬れ、社會的に葬れ。私は、諸君と共に、この無漢を刑務所へ送りたいと存じます。否、送らねばならぬと考へます。今日、この場に於て、光輝ある大日本パルプ株式會社より、放逐せねばならぬと考へるものであります。

株主たち　（拍手して――）贊成。贊成。それみろ。恐れ入つてしまへ。

ある男　それのみではありません。この男の息子は生來の危險思想者で、國禁の本を耽讀してゐたのであります。が、最前、所持する本の署名から、遂に當局の知るところとなつて、警視廳へ引致さるゝに到りました。私はすべてを恐れることなく申上げます。彼を密告したのは私であります。なぜなら、彼は、不用意にも自己の署名まで記して、その本を私に與れたからであります。

富豪　うそだ。私の息子はそんな者ぢやない。

ある男　諸君！　人格的にも家庭的にも不德極まりたき惡漢を放逐なさい。この男は財界のチブス菌です。ペスト菌です。諸君、このバチルスを撲滅なさい。

富豪　皆さん。この男は忘恩者です。さあ、貸金を返せ。私はこの男から二百萬圓を取立てる權利がある。

ある男　よろしい。あなたの要求が眞實なら、私に借用證書をお見せなさい。私はあなたから借金した記憶がない。

富豪　君は伯爵の債務繼承者だ。

ある男　ですから、伯爵の借用證書をお見せなさい。

富豪　あつ。貴樣、證書もまきあげたんだな。

ある男　株主諸君、この男は錯亂してゐます。放逐しませう。

株主たち　（口々に――）贊成。贊成。

株主の一　（立上つて――）株主總會は伏島社長の解任を決議する。併せて、彼を背任横領の理由で告訴するものである。

（株主たち拍手怒號する。）

富豪　何を言ふか。おれは、永久にパルプの社長だ。

株主の二　惡漢。なぐれ。

株主たち（口々に――）なぐれ。なぐれ。なぐれ。

（どや／＼と突進する。重役連と格鬪が始まる。富豪、重役たち逃げ出す。喊聲――。）

ある男　そこで、誰が社長になるのです。

株主の二　あなただ。あなただ。あなたは會社の功勞者だ。

株主の三　持株をおつしやい。規定どほりなら、直ちにあなただ。

ある男　私の所有株は二萬三千百……

株主の四　えつ。

株主の六　二萬三千百株――パルプですね。パルプ株ですね？

ある男　全部です。全部パルプです。必要ならもつと買ふことも出來ませう。私の方針はきまつてゐる。私は前社長から二百萬圓の徴收金を會社にとる。會社の缺損は埋まりませう。いゝえ、それは裁判所がとりたてゝくれるのです。彼の背任横領は事實ですから――私は各方面の有力者を知つてゐる。大日本パルプの前途は洋々です。諸君、諸君の信ずる有能者をパルプの社長に指名なさい。株主總會の聰明と健全とを示すために……

株主たち（口々に――）あなただ。あなただ。あなただ。

株主の一　（立つて――）株主總會はこの人を社長に選任する。いや、滿場一致をもつて選任する。決議の效力は、今日只今をもつて生ずるのだ。

（拍手――。）

ある男　ありがたう。ありがたう。私はまだ、私の身分を說明しませんでした。私は藤代伯爵家の嗣子です。只今、この大任を托されまして光榮を感ずること非常です。が、ご安心ください。私は一身を會社の爲に獻げます。誓つて、諸君の聰明を掩ふやうな、一つの失敗をも致さぬつもりでをります。

（拍手――。）

株主の五　そこで業務の議事に移らう。會社は今日から新らしい內容なのだ。

株主の一　帳簿をとり寄せよう。會計係をつれて來よう。

株主の三　第七回株主總會は流會した。社長、改めて、再開を宣して下さい。

株主　（口々に――）贊成。贊成。

ある男　（富豪のゐた席に移つて――）それでは、たゞ今から當社第七回定例株主總會を再開いたします。まづ、事項第一と致しまして、定款の定むるところに依り……

## （2）帝國ホテルにて

ある　男
伯爵令孃
伯爵夫人
親戚の人々、來賓だち、ボーイたち
寫　眞　師
指南所の先生

とある宵——ホテルの宴會場。

開幕前から、華麗な管絃樂が聞える。

デザートコースの前で、人々は歡語し談笑してゐる。

この一場中、時を置いて音樂の演奏。及び、時々、寫眞師はフラッシを焚いて寫眞を撮る——

間——デザートコースに入る。拍手。

媒妁人夫婦立つ。ある男、令孃立つ。

幸福に滿ちた拍手——

媒妁人（敬虔な態度で——）皆さん、私は今度のご結婚に就きまして、媒妁の光榮を得ました前田樞密顧問官であります。本夕はご多用かつ、ご遠方のところを、かく盛大にお集り下さいましたことを藤島伯爵家に代りまして、また私からも厚く御禮申上げます。皆さん。私は實に喜ばしい。嬉しくて嬉しくて堪らない。と申すのは、先代伯爵と、個人的に二十數年來の親交を保つてきたので、その忘れ形見が、こんなに美しい、まるで龍宮の乙姫のやうな——（拍手あり——）花嫁になられたのを見ると、まるで、我が娘のやうな心持がして嬉しくて堪らないからであります。私は世に良縁といふ言葉はあるが、それは誠にかうしたご縁をさして言うたのではないかと思ひます。花嫁は女子學習院出身の才媛で、新郎は駙馬哲學指南所を一番で出た秀才である。然も年齒やうやく而立に滿たずして大日本パルプ株式會社の社長であります。まづ、この分で行かれると、この花聟はどこまで出世をしどこまで金持になられるか知れたものではない。今に、必らず、ヘンリ・フォードやロックフエラーもそこのけの大金滿家になられるに違ひないのであります。私は實に喜ばしい。喜ばしいにつけ、新ご夫婦に希望いたしておくことは、何卒、永久に仲むつまじく、親に對しては孝、家名に對しては、ます〳〵、先考の名譽を保持して、名實共に理想のご夫婦であつてほしいことであります。即ち、その道を誤らず、小にしては家名のため、大にしては國家民福のために最善のお働きが願ひたいのであります。どうぞ、皆さんも、この新ご夫婦のため、最大のご後援を賜はりたい。一言、光榮ある本夕

のご挨拶といたします。

（拍手おこる。媒妁人夫婦着席。ある男、令孃、着席——拍手。來賓の一人立つ。新郎新婦立つ——。）

來賓の一人（新郎新婦に——）どうぞ、どうぞ、お坐り下さい。どうぞ……（新郎新婦、着席せず——）えゝ、本夕はこの光榮ある祝宴にお招きいたゞきまして實もつて欣快に堪へない次第でございます。只今、樞密顧問官閣下のお言葉にもありました通り、私も、いはゆる好一對といふ文字はこの新郎新婦ご兩人のために用意されてゐたやうな氣が致すのでございます。齡三十に滿たずして赤手、數百萬の富を握り、かつ、艶麗花の如き佳人を得られ、加ふるに名譽ある伯爵の榮位をすら頭上に戴く。いはゞ、人間の理想、人間の欲望の全部をこの紳士に現實に成就された譯であります。

私は、滿腔の情を傾けてこのご伉儷を祝福いたしたい。皆さんと共に盃を上げたいと思ひます。（一同立つ——）

新ご夫婦のご幸福のために——（一同盃をあげる——）ご健勝のために——（盃をあげる——）祝福に滿ちたご將來のために——（一同乾盃——）……

（一同、着席。ひとりの給仕人がはいつて來て媒妁人に囁く。媒妁人、ある男と囁き合つて給仕人に何ごとかを命ずる。給仕人、去る——。）

媒妁人（立つて）もう一つ喜ばしいご報告を致します。只今、新郎の恩師である、駙馬哲學指南所の先生がお見えになつたさうです。（拍手あり。着席する——）

（うしろを振かへる人々などあり。譯の分らない聲を出し、羊羹色のフロツクコート、感激のためか酩酊か奇妙な足どりで老教師がはいつて來る。拍手あり。）

先生（酔眼朦朧として——）ある男君！　ある男君！

ある男　こゝですよ。先生。

媒妁人　どうぞ。お席はとつてあります。

（ボーイ、新郎の隣りにとつてあつた空席の椅子を引いて待つ——。）

先生（手を握つて——）ある男君！　わしは遲刻してしまつた。はつはつ。怒るんぢやないよ。その、何しろこの嬉しさだ。銀座裏の燒鳥屋で泡盛を一杯きゆーつとな……いや、怒るんぢやない、怒るんぢやない。（ボーイに）おい。給仕君！　わしは洋食はいらんぞ。はつはつ。燒鳥でお腹がいつぱいだ。はつはつ。なあ。ある男君！ありや、君、燒鳥ぢやない。豚の臓綿だつてな。はつはつ。

ある男　お掛けください。先生。

先生　ボーイ。わしは洋食はいらん。水をくれ給へ。

ある男　先生。皆さんが笑つてゐらつしやいますよ。

來賓の一人　先生もお嬉しいのでせう。いゝご機嫌でございますなあ。

先生　ある男君！　もう、演說は、皆さんの演說はすんだのかい？

媒妁人　お先きにすませました。あなたのが殘つてゐるだけです。

先生　すんだ。そ、そりや申譯ない。皆さん、私は遲刻をして濟みません。皆さん、何しろ、私は嬉しくて……はつはつ。銀座裏の燒鳥屋……はつはつ。

媒妁人　さあ。どうぞ。先生の祝辭を――ともかく、新伯爵閣下の結婚ご披露の宴ですから。

來賓の一人　さあ。さあ。どうです。あなたの敎へ子の一人が、こんなに立身出世なさつたのですよ。

媒妁人　あなたを皆んなで待つてゐたのですよ。どうぞ。どうぞ。

先生　（突然に――）諸君！　（急霰のやうな拍手おこる。コップの水をのむ――）諸君！　私は、私は演說をいたします。いゝ心持だ。實にいゝ氣持だ。げーぷ。やあ。皆さんも立つてるな。坐んなさい。坐つて下さい。坐つて下さらんと困るです。（新婦、腰をおろす――）ある男君！　ほい。違つた。閣下。閣下は立つてゐて下さらんといかん。そこでだ。そこでゝす……（俄かに泣く――）

私は感極はまつてゐるのです。私は老人です。私の祕藏の敎へ子が、地の下から天上へとびあがつたのです。（泣く――拍手――）嬉しい。私の酒もさめました。皆さん。考へて下さい。この男は、閣下は、駙馬哲學の證明者です。その効果の立證者です。それは私の指南所の名譽と誇でないと言ふことができませうか。皆さん。皆さんの正面に立つてゐるこの男は、閣下は、皆さんの前で、最も絶妙なる演技をふるつた名俳優であります。ご覽なさい。この燕尾服に包まれて瀟洒としてその風采に於て一點の非の打ちどころのないこの紳士です。皆さん。この紳士の非凡の價値を證明するために、暫らく、この紳士を一人の舞臺上の俳優として見させて下さい。そして、皆さん、この芝居の觀客である皆さんと共に、この紳士のそも〳〵第一幕からの演技の行動を追想させて下さい。何が故に――それは、この紳士の、偉大なる才能を讃めたゝへたいためです。駙馬哲學的絶世の處世術を記錄したいからです。即ち、この尊敬すべき紳士を更に新しく尊敬したいためであります。（拍手おこる――）皆さん、まあ、何といふ不思議な出世でありませうか。この紳士が私の指南所を出ましてから、今日の成功をかち得るまでに實に僅かの時日しかかゝつてをりません。うそのやうです。實際、この紳士が學校を出てか

ら、今日の位置を得るまで、その時間は、芝居でいたしますると、せい／＼二時間半。幕間に休憩をとりましても三時間せい／＼であります。初日は打出しが遅れても四時間とはかゝらないのであります。（拍手あり——）この間に、驚くべし。大會社の社長となり伯爵となる。實に何たる手腕でございませう。僅か三時間のうちに…………觀客諸君！　この紳士は、第一幕に於て、即ちその社會の第一歩に於てゞす。とある觀音堂境内に屯する乞食を利用して、時の民權黨總理夫人にとり入り、その取りなしで總理祕書官となりました。その乞食利用の技巧（トリック）は、世の善良にして愚なる人種からは、惡辣なりとして恐れられ嫌はれてゐるところのものであります。然し、觀客諸君！　諸君は、この紳士の遣り方を非難さるゝでせうか。恐らく全觀客諸君のうち、少なくとも、この食卓にお就きである觀客諸君だけは、寧ろ、喜んでこの遣り方を肯定されると信じます。是なりとお考への諸君は拍手をもつて答へていただき度い……（一同拍手）ありがたう。ありがたう。私は滿足です。次に、第二幕第三幕と進んで、この紳士は、しだいにその駙馬哲學的靈腕をふるつて來ました。この紳士は、總理である伯爵にとり入り、その奇妙なる親友であるところの富豪大日本パルプ株式會社長にもとり入りつつ内密にその各々からの利益を吸つてをりました。この紳士は、遂に富豪が政黨にさし出した二百萬圓を頂戴ししかも、その金の紛失を理由として、遂に富豪と伯爵の二人を除きました。この紳士は、即ち、その金の幾分をもつてパルプ株を買占め、その社長を放逐し、一方、伯爵はその名譽心を利用して、死を選ばざるべからざる窮地に陷し入れたのであります。皆さん。而して、この紳士の得たものは何か。曰く。大日本パルプ社長。曰く、伯爵。曰く、美しき妻。曰く、巨萬の富……

諸君！　この紳士は、その成功の手段を目して、不正漢不義漢と呼ばるべきでありませうか。否、私は、全觀客諸君のうち、少なくともこの食卓におゐでの諸君だけは、この紳士を成功者、當世立志傳中の人として稱讃さるゝであらうことを信ずるのであります。否といふ人々は拍手をもつて答へられたい。（拍手なし——）然らば、稱讃せらるゝ方は手を拍つて戴きたい。（湧く如き拍手——）滿足です。滿足です。おゝ、この大紳士が私の敎へ子だ。私の祕藏弟子だ。私の、私の喜びを察していただきたい。

私の敎へ子はこれほどに偉大だ。私はこの紳士の價値を今一度、たづねてみませう。觀客諸君！　この紳士は尊敬すべきでせうか。尊敬さるゝ諸君は起立していたゞき

たい。（一同起立する。すぐ着席）憎むべき存在でありませうか。憎むべき存在とお思ひの方は起立していたゞきたい。（起立なし——）滿足です。滿足です。では、この紳士をさらに廣い輿論の上に輝かせてみませう。今度はこの食卓以外にある觀客諸君！　立見の方でも大入場の方でも遠慮なく言つて下さい。觀客諸君！　滿場の觀客諸君！　私の質問に諾(イエス)であるなら拍手して下さい。諸君！　この紳士は尊敬さるべき存在でせうか……おや、拍手がない——この紳士は尊敬さるべき存在でせうか……（狼狽して）いかん。拍手がない。拍手がない。

媒妁人　先生！　先生！

ある男　どうなさつたのです？　どこか、劇場の幻影でも浮んだのですか？

先生（夢中で）拍手がない。拍手が……

來賓の一人　また、癖が出てきたのでせう。

先生（笑ひ出す——）ばかな。構ふもんか。こゝにゐる諸君だけが一等席の見物だ。ほかの見物なんぞ——皆さん、盃をあげませう。盃を——さあ、始めた。樂隊！　樂隊！　賑かにぶつつけた……

（葬送行進曲おこる。間——一同、笑ふ——。）

——幕——

# 鈴木彦次郎篇

# 蛇（一幕）

人

主　人
その妻
從　兄
友　達
老僕、女中

八月の晴れた日の午後

海邊の小高い丘上に建てられた別莊――母屋から出つ張りになつてゐる球突室。

舞臺、稍上手寄りに球臺。正面、腰板づきの硝子戸、それを通して、遙かに海が見える。窓の下は小徑になつてゐる。上手、壁にキユー掛、計算器などある。下手、前方に扉、母屋に通ず。後方に食器棚など置かれてある。

主人、上着をぬいで球を突いてゐる。三十歳前後、有產階級の會社員。

友達、正面窓際のソフアにねそべつてゐる。心臟病の畫家。

從兄、上手のソフアに仰向けになり上着で顏を覆ひ睡つてゐる。海軍中尉。――二人とも主人と同年輩。

妻、二十二三、下手のあまり大きくない籐の卓子で、トランプの獨り占ひに餘念がない。卓子のまわりに籐椅子二三。主人のキユーが友達に觸れさうになる。

友達　おい、あぶないぢやないか。（あわてゝ硝子戸の敷居に腰かけ）あゝ、鼓動が激しい。胸が狹くなつてきた。激動と恐怖は心臟に最も害になる。

主人　（意に介せず熱心に球を狙ひ）ついでに、最後まで云つてしまふんだね。僕はもう駄目だ。――つて。

友達　串戲ぢやない。この額ににじむ油汗を見給へ。

主人　（やつと突き終り友達を振り向く）や、失敬、失敬、何しろ。僕も全生命を此の一キユーに賭けてたんだからな。

友達　結果は、どうだね。

主人　さあ、滿足、とはいかんね。明日からの山岳旅行には非常に好運らしいが、今日はいかんな。どうも、球が呪はれてゐる。

友達　呪はれてる？　さう、僕もそんな氣がする。今日には、

惡い豫感が身近かに迫つてゐる。それで、君は海へも行かんのだね。

主人　海へ――馬鹿な！　今日、海へ行く奴があるものかい。

友達　なぜさ。風は和いでるし、波は靜かだし、さつきも、濱は大變な人だつたぜ。

主人　それア、世間には無茶苦茶な連中が多いからな。氣にかけぬものには、何事も起らぬらしい。然し、僕のやうな人間には、愼しんでゐないと、魔の日は的確に魔の日らしい災を持ち來たす。君、今日は何日だと思ふんだ。

友達　十三日で、しかも金曜日だぜ。

友達　あ、魔の日か。なるほど、それで、君は球の結果如何によらず、家に居るのだね。

主人　（友達と妻との顏を鋭く見くらべて）　え、なんだつて、すると、君は、僕が今時分家に居るのが、不自然だといふのかい。いや、君にとつて、僕の存在が、現在、不愉快だとでもいふのかね。

友達　な、なにを云ふんだ。あ、心臟がいかん。ぼ、ぼくは、君が、毎日會社から歸ると、日沒までの僅かの間も惜しんで海へ行く癖に、休みになつた今日、ぢつとして家に居るので、たゞ、聞いて見ただけぢやないか。魔の日とは、逐ひ氣がつかなかつたのだ。僕みたいに、もつと惡い日か、毎日つゞく生活には、魔の日の區別なんかありアしないからな。

主人　惡かつた。神經衰弱が云はせるのだ。氣にしないで吳れ給へ。あゝ、頭が惡い。どうも、海岸の空氣は、僕には荒らすぎる。山だ。山岳旅行だ。山氣が深くなれば、なるほど、僕の頭は不思議に澄んで來る。海は、頭の沈靜を妨げる。

妻　（ふいとトランプの手を止める）　だから、さつさとお出掛けなさいな。毎日、不平ばかり云つてゝ――あたしまで、すつかり、くさ〳〵してしまふ。

主人　うん、ゆくよ。明日はきつと出發するよ。なにしろ、旅行に對しては豫感が素晴らしく好いんだから――それに正太もつれてゆく。あいつは、さすが、山育ちだけに、年はとつても、山に就いちア素敵に明るいからな。

友達　奧さん。どうです、占ひは？

妻　え？

友達　御主人の今度の旅に對するあなたの占ひの結果ですよ。

妻　あたし、それを占つてゐるやうに見えますか。

主人　（自暴に球をつきながら）　こいつに、そんな親切氣があるもんか。おやぢもおふくろも千枝子も、一家こぞ

つて僕の頭には舌を出してゐる。今度だつて、僕は八月の始めから輕井澤へ行きたかつたんだ。そいつを、千枝子がこゝがいゝと言ひ張る。おやぢも、僕が輕井澤に行けば、會社へ出て來ないと思つてるのだから、一も二もなくこゝに贊成なのだ。おかげで、昨日まで會社には出掛けねばならず、頭は、日増しに惡くなる。それを、ただ僕の氣のせゐだ、僕が熱中する仕事を持たぬからだ、と皆で云ふんだ。

（主人、妻を見つめる。妻、素知らぬふりで獨り占ひをつゞけてゐる。）

友達　（ソファに坐りこんで）あゝ、鼓動が滅茶苦茶だ。今日は惡い豫感がある。あいつに、きつと出逢ふらしい。

主人　僕の小さい時からの癖だから、君は大抵知つてゐるだらうが、此の癖が、此の頃益々ひどいのだ。何をするのでも、どこへ出かけるにも、僕は、必ず、來るべき運命を判斷せずに居れない。玉を突くとか、トランプで判するとか、汽車や電車や切符の番號とか、僕の坐つた席の工合とか――すべての事件に對して、何か判斷を託すべきものを求めて、それに依つて、或る直感を得なければ着手できぬのだ。――丁度、受驗生時代や戀に夢中になつてゐる時分のやうな、あのはかない心で、運命を豫知しようと焦つてゐる。どうせ、こんなことには家の連中は同情がない。千枝子がトランプをやるのも、僕が毎晩やらずに居られない――それにおつき合ひのトランプさ。退屈しのぎにすぎないのだ。どうも、近頃愈々たまらなくなつてきた。海が、いけないのだ。此の荒い空氣が惡いのだ。

從兄　（突然）おい。さう海をけなすなよ。海の尊嚴を冒瀆するものだ。

主人　お、海軍中尉、君は眠つてたんぢやないのかい。

從兄　眠られるもんか。（上着を拂ひのけ脊伸びして）折角、白雲に乘じ天涯に魂を悠遊させようとしても、やれ、魔の日だの運命判斷だのつて、迷へる人間の小さい議論を、耳許でやられちや、うるさくて、とてもかなはん。

主人　なんだ。此の位の話聲で眠れぬなんて、日頃の禪の極意はどうしたんだ。それでは、道ゆく人を深山木に見る境地には、まだ〳〵遠いね。

妻　（カードを切りながら、ちらり見て）さあ、義男さん、なんとか仰有いな。

從兄　（ソファに大胡坐をかき）なあに、心頭を滅却すれば、直ちに鼾をかいてごらんに入れるがね。海を罵倒されたんで――我が最愛な大洋を忌避されたので、ちよいと抗議を申し立てたのだ。一體、秀さんみたいに、毎日

毎日、安部晴明の子孫ぢやあるまいし、運命判斷とやらで、おど／＼してちやア、今に、手も足も出なくなるぜ。

主人　現在、旣に手も足も出ないのだ。

從兄　仕樣がないなあ。だから禪でもやればいゝのだが――――けど、こいつア、ちよいと賛成しまいし、――まあ、海が惡けれア、罵倒するもいゝさ。そして、早速好きな山へ行くんだね。ともかく、さう、毎日不安な氣持でゐちやア命がちゞまるよ。ねえ、さうぢやありませんか。藝術家。

友達　不安な日がつゞく――全く命がちゞまりますね。だが、それすら、僕には羨しい。僕なんか殆ど絶望の日の連續ですからな。ちゞまる命どころか、もう燃えつくした蠟燭ですよ。此の瞬間ですら、ひよつとすると、消えてしまふかも知れません。僕の心臟は、もう駄目なんです。それに、今日は一層恐しい。どうも、あいつを見る。その豫感で、身體中びり／＼する。

主人（また球を突き始めながら）君は、さつきから、あいつ、あいつツて云ふが、なんだい、あいつとは。

友達　あいつだよ。――蛇だよ。

主人　なあんだ。さうか。

妻　また、蛇ね。

友達（ソフアにちゞまつて）畜生！　失せやがれ。あいつが來る。あいつが、身近かに迫つてくる。

從兄　愈々以て、度し難したな。君、そんなに蛇が怖いのですか。もつとも、あまり氣味のいゝもんぢやないが――お、秀さん、僕が、今度の歸りにさ、あの、如何にも大洋の魔神どものひそんでゐるやうな印度洋の波のうねりのうちに海蛇の片鱗を見たがな。その時つたら――

友達　あゝ、もう、形容なんか止して下さい。それだけでたくさんだ。脈がをかしくなつてきた。――僕は、蛇といふ字や言葉だけでもぞつとするのです。とても、細い描寫なんかされたら、たまらんです。

從兄　おや、專門の繪の方だつてお困りでせう。

友達　えゝ、昔、あのラオコーン像の寫眞を見て、卒倒し損つたことさへありますよ。どうも生れつきですな。蛇といふと、もう鬼氣に襲はれます。前世は、僕、きつと、蛙だつたかもしれぬ。

主人　蛙は、心臟が惡いかい。

友達　さあ、そこまでは、研究してないね。もう僕なんか、いつそ蛇と出逢ふ位なら、死んぢまつた方がいゝと思ふのだが、それでゐてまた死にたくないな。この心臟ぢや洋行も出來ないし、旅は蛇に出逢ふ恐れと心臟の惡化を伴ふし、――だが、いゝものが描きたい。一つ、いゝもの

を描き上げるまで生きてゐたい。けど、此頃は少し刺戟が強い色さへ使へないのだ。燃えるやうな色彩は、見ただけで心臓を痛める。だから、思ひ切つた繪も描けない。蛇の呪。死の恐怖——あゝ、絶望だ。（頭を兩手でかゝへ、仰向けにソフアに倒れる）

從兄　なんたることだ。君、死か身邊に迫つてるのは、敢へて君たけぢやない。僕もさうだ。秀さんも千枝さんも——此世に生を享けてるもの全部がさうなんだ。だから、人間には、常に覺悟か必要なんだ。禪は、それを悟らせてくれる。——時に、君、おいくつですか。

友達　僕ですか。（起き上る）三十二です。

從兄　さう、時賴よりは五つ若いが、まあいゝさ。どうです、君も笑翁の眞似をして、かういふのは。「一業鏡高く懸ぐ。三十二年。一槌打碎して、大道坦然たり。」喝！

友達　あ、心臓、鼓動、あゝ。（また突伏す）

妻　（大聲に驚き、亂したカードを殘念さうに見つめ）まあ、なんて、馬鹿氣た聲を出すんです。義男さんたら。おかげで折角調子がよかつたカードが滅茶々々だわ。

主人　山寺の坐禪堂ぢやあるまいし、そんな大聲を張り上げて——可哀相に心臓病の先生なんか、今にも呼吸が止りさうに驚いてるぢやないか。

從兄　（苦笑）僕の一喝が、かくまで、到る所に、影響を及ぼすとは思はなかつた。

主人　どうも、船乘りは剛暴でいかん。また、頭が亂れてきた。

從兄　（大あくびをする）あ——あ、膽の坐つてない人間は話せんな。（上着を肩にかけ立ち上る）どれ、久しぶりで、畑を拜見して、それから、波のうねりに、身をひたすかな。

妻　まあ、海へいらつしやるの。

主人　船乘りにも似合はぬ。君は、今日海へ行くのかい。海の神祕を知らぬのか。

從兄　（歩きながら）十三日がなんだ。海には、もつと深刻な神祕がある。

主人　（キューを床板につき）ちよッ。豚の如く强健なるものに呪あれ！

從兄　（扉を開けながら振り向き）なんだつて、ふゝん、小羊の如くおびえるものに禍あれ、か。（退場）

（友達、靜かにソフアに起き直る。主人、不機嫌な樣子で球を突き始める。妻、再び、カードを切る。）

友達　實に、恐しい一喝たつた。身體中の血液が逆流する。

主人　野狐禪のかたまりだからたあ。

妻　ほんとよ。あの聲つたら、蛇どころの騷ぎぢやないわ。

友達　蛇？　いや、蛇よりは、まだましだ。
妻　青木さん。そんなに蛇が恐しいんですか。
友達　えゝ、奥さん、まあ、あの無氣味な姿を想像してごらんなさい。僕は、もうそれだけでたまらんです、あゝ、恐るべき存在よ。（頭をふる）奥さん、僕の一生は、蛇に呪はれてゐます。蛇が現はれては、惡い方に惡い方にと、僕の生涯を誘ひます。恐らく、僕の死も、蛇によつて見舞はれるでせう。
主人　君は、心臟だよ。
友達　おゝ、心臟。然し、僕は、きつと死の床には、蛇が、姿を現はすだらうと思つてゐる。僕には、此の豫感が、可成りの確實性を以て迫る。
妻　（トランプの手を休め）まあ、そんなにですか。そんな極端に恐しいものつて、人間にあるでせうか。
友達　いや、奥さん。僕は、時々、かうさへ思ひますよ。爬虫類は、全世界に於て、次第に衰滅してゆく。だから、恐らく、蛇も、數萬年後には、あの無氣味な姿を地上から消すに違ひない。何故、僕は、その頃に生れなかつた。抑も僕の生れて來たのは早すぎた。――
主人　その頃は、繪かきなんて職業は、なくなつてるよ。
友達　馬鹿云へ、美の世界は悠久だ。
妻　贅彦。
友達　もつとも、僕にとつては、何が無くならうとも、蛇の存在よりは、ましだがね。君は、覺えてゐるだらう。小學校へ入りたての遠足の時、蛇を見て、僕が、公園の池にころげ落ちたことを。
主人　うゝん。小さな蛇だつたな。
友達　あの頃から、心臟がいけなくなつたのだ。何しろ、心臟と蛇――こいつらが、一生、僕を不幸に陷し入れるんだ。いや、僕だけぢやない。蛇は、實に全人類に對して、呪の舌を出してるのだ。エデンの園以來、あいつは、人間の仇敵だからな。蛇の好きな人間なんて、ありアしない。
主人　僕は平氣だな。山歩きなんかしてるとしよつちう出會はすが……
妻　あたしだつて、何ともないわ。こゝだつて、畑へ出ると、ちよい〳〵ゐますよ。美しい黃金色をして、可愛いいぢやありませんか。
友達　串戲ぢやない。蛇を好きだなんて女は、妖女か、ヒステリイ――（口をつぐむ）
主人　はゝゝ、だから千枝子は好きな筈さ。模範的ヒステリイなんだからね。
妻　（カードを卓子にたゝきつけ）えゝ、あたしはヒステリイでせうよ。丁度、あなたが演劇神經病者であると

同様にね。けど、青木さん、そんなに蛇を怖がるなんて、それア氣のせゐよ。神經が作用して、極端に恐怖を誇張してゐるんだわ。主人の運命判斷と同じことよ。

友達　いや、こいつは、僕の魂に根強く食ひ込んでゐます。誇張どころか、實際に出逢つたら、それこそ大變です。殊に、今日のやうに、鼓動が頗る亂調子になつてる日なんかに見ようものなら、即座に卒倒してしまひます。

妻　そんなことがあるもんですか。たかゞ、小蛇一匹位で――此の邊の蛇なんか、食ひついたりしませんよ。

友達　食ひつかれる。――そんなことは、僕にとつては、問題ぢやありません。蛇の姿を見たら最後、それがどんなに小さい奴でも、僕は皿の氣を失つてしまふ。心臓か動くことを拒絶します。

妻　氣のせゐよ。意氣地ない話ぢやありませんか、どんどん實物にあたつて修業なさるんだわ。あんな蛇なんかに苛なまれてちア駄目よ。あたしが、修業させて上げるわ。大丈夫よ。蛇を見たゞけで、いくら弱い心臓だつて止りアしないことよ。

友達　とても、駄目ですなあ。何しろ、僕は物心ついて以來、うなぎ、はも、どぜう、なんてものが食卓に上つただけで、もう、飯が食へないんだから。ねえ、君。

主人　（興味なしに）さうだつたな。（球をつゞけてゐる）

友達　祭へ行つても、あの蛇使ひの看板など見ると、もう氣が變になりますよ。

妻　まあ、呆れたお話ね。だけど、いゝわ。あたし、きつと直して上げるから……でも、青木さん、そんなに嫌なもんなら、なぜ、見付け次第、びし／＼殺してしまはないんです。相手の存在を否定してしまふんだわ。こつちで、ちゞまつてしまふから、いつまでたつても駄目なんだわ。

主人　（無愛想に）此の男に、そんな勇氣があるものか。

妻　あなたに云つてるんぢやなくてよ。ね、さうでせう、青木さん。素戔嗚命は大蛇を退治しましたよ。漢の高祖も蛇を殺しましたよ。

友達　僕は英雄ぢやありません。

妻　クレオパトラは、蛇に乳房を嚙ませて死にましたよ。

友達　あいつは妖女だ。人間ばなれしてゐる。

妻　小蛇に、赤い乳首をかませて――女王の死顔は、實に美しかつたといひますね。

友達　蛇のやうな女だつたといひますよ。

妻　（それに構はず）さう、その小蛇を果物の籠にひそませて――（急に何事か思ひ付き興味深く）あ、さうでしたね、籠の中に蛇をひそめて――あの果物はなんでした

つけ。
友達　――
妻　（主人に向つて）ね、あなた、あれはなんでしたね？
主人　（不機嫌に）僕は知らないよ。青木君に聞いたらいいだらう。青木君となら、大分話がはずむらしいからな。
（球を自暴につく）
妻　（きつとして）え？
友達　あれは、葡萄ですよ。
妻　あ、さう／＼、葡萄でしたね。
（此の時女中入り來る。）
女中　（一禮して）奥さま、あのう、桐村さまの奥さまが、いらつしやいました。
妻　あ、さう。お通しするがいゝよ。あちらのお座敷へ。
女中　はい、でも、お急ぎのやうで、ちよつと玄關で、と仰有います。
妻　お急ぎだつて？　さう、おや、すぐ行くからね。
（女中立ち去る。妻、つゞいて立ち上る。）
主人　（呼び留める）おい、僕は、愈々明日の朝早く山岳旅行に出掛けるぞ。
妻　もう、宣告はたくさん。さつさとお出掛けになるがいいわ。
主人　旅行が一週間。――それから、此處には歸らず、そのまゝ輕井澤へ行き、九月始めまで居る積りだが、おまへはどうするね。
妻　あたし？　あたしは、秋になるまで、ずつと此處に居ますわ。
主人　お前には、僕の頭の工合がわからんのかね。海の空氣が、どんなに僕にとつて悪いか――
妻　だから、あなたは輕井澤へ、いらつしやるがいゝわ。獨りだつて、あたし、せめて夏ばかりも、好きな海邊に居なけアたまりません。
友達　まるで、海の夫人ですなあ。
妻　えゝ、今に、水平線の彼方から、誰か迎に來るかもしれませんわ。ほゝゝ。おや、奥さんがお待ち遠だわ。
（妻、急いで立ち去る。間。主人、球臺に腰かけて頭をかゝへ沈思してゐる。友達、ソファにもたれたまゝ窓外に眼を放つてゐる。）
主人　（思ひ切つて口をきる）君、君は、千枝子をどう思ふね。
友達　（ふりむく）どう、思ふつて？
主人　千枝子は、夏中、獨りで此處に居ると思ふかい。
友達　そんなことはあるまい。今だけの話さ。獨りぢや退屈してしまふし、第一、君が輕井澤へ行くならね。
主人　さうかな。

友達　だつて、その筈ぢやないか。

主人　君は、どうするんだ。

友達　僕かい。それア、君が此處を引揚げてしまふなら、僕たつて厄介になつてゐる理由もなし、明日の晝頃でも東京へ歸るよ。

主人　でも、千枝子は、君に居てほしいのだらう。

友達　まさか。それに僕たつて、君が居ないのに奥さんのお相手でもあるまいぢやないか。

（此の時、老僕、窓下の小徑を來り、丁度友達のねそべつてゐるソファの眞後ろの窓から顔を出す。）

老僕　（大聲で）旦那さまア、此處にいらつしやいましたか。

（友達、突然の聲にひどくおびえる。）

主人　（驚く友達の樣子をぢつと觀察し、改めて老僕に向ひ）おう、正太か、何か、用かい。

友達　（やつと安心し）あゝ、びつくりした。なあんだ。爺さんかい。僕の心臟も情けないなあ。

老僕　これアどうも相すみませぬ。聲の大きいのは持ち前でござりますでな。時に、旦那さま、明日は、一番でお立ちでございましたな。

主人　うん。一番ぢやなけア、あつちの連中と巧く落ち合へんからな。

老僕　さやうでござります。だが、朝の一番だと、今の内にお荷物を出してしまはねば、乘換やなにかで間に合ひませぬでな。で、唯今、馬車屋へ參つて、すぐ取りに來るやうに申して參りました。

主人　さうか、いゝ所に氣がついてくれた。御苦勞だつたな。

老僕　どう致しまして――で、馬車が參りましたら、わたくし、お荷物を持つて停車場へ行き、四時の上りで、先きに送つてしまはうかと存じます。それで、その前にちよつと――お荷物は、あちらのお部屋にまとめておきましたから――旦那さまに一應おしらべ願ひたいと存じまして……

主人　あ、さうか。ぢや、すぐ行かう。

老僕　では、お手數でもお願ひ致します。大抵、手落ちがないと存じますが、はい。

（老僕立ち去る。）

主人　（球臺に腰かけたまゝ、友達をぢつと見つめ）君、ひどく驚いたものだな。

友達　何しろ、眞後ろで、突然だからね。

主人　それにしても、たかゞ爺やぢやないか、馬鹿におびえるな。

友達　心臟のせゐだ。

主人　（語氣鋭く）止し給へ。病氣にかこつけるなんて卑怯だぞ。影を背負つてるからだ。心に暗い影があるものは、事毎におびえるさ。

友達　暗い影？　な、なにを云ふんだ。

主人　千枝子は、君と趣味が合ふからな。

友達　え？

主人　あいつは、僕にあきたらないんだ。それに、今日まで、僕は、午後完全に居なかつたからな。

友達　なんてことを云ふんだ。君から、こんなことを聞かうとは思はなかつた。――情けないことを云ふね。ああ、胸が迫る。君、こんな、明日をも知れない僕が、なんで、そんな大それたことができるんだ。

主人　魂の躍動は、肉體と沒交渉だ。

友達　馬鹿な。何といふ邪推だ。君の頭は大分ひどくなつてるぞ。考へても見給へ。君とは、小學校以來ずつと交際つてる僕だ。千枝さんとの結婚までの經過だつて、始めから知つてる僕ぢやないか、僕の性格ぐらゐ、もう、充分わかつてくれてる筈の君ぢやないか。

主人　――。

友達　どうしたんだ。まだ、うたぐりたいのか。いつの間に、君はそんなになつたんだ。そんな心持だから、千枝さんともしつくりいかないんだ。大抵にし給へ、餘人は知らず、僕をそんな目で見るなんて、呆れて口が利けない。

主人　ふうむ。

友達　ちよッ、君が、まだ、さう見てるなら、僕は早速歸るよ。心臓なんかに構つちア居られない。不愉快の極だ。かう云つてるのさへ馬鹿々々しい。

主人　（激しく頭をふる）あ、待つてくれ給へ。すまぬ。全くすまない。何もかも僕の頭故だ。あんなことを云つて、今さら、かう云へた義理ぢやないが、許してくれ給へ。病氣に免じて水に流してくれないか。

友達　――。

主人　どうか、勘辨してくれ給へ。頭なんだ。神經が云はせるんだ。全く、君を、外ならぬ君を、一刻でも疑つたのは、實際、僕自身すら變な氣がする位だ。

友達　（ほつとして）なあに、君さへ、さう解つてくれるなら、僕ア、何でもないよ。けど、大分病氣がひどいらしいな。

主人　うん、全く困る。山の澄んだ空氣で、靜かに休めて來よう。

友達　それがいゝ。あゝ、やつと動悸が靜まつたよ。明日は必ずゆくんだね。なあに、千枝さんたつて、今こそ、あゝ云つてるが、すぐ、さびしくなつて、輕井澤へゆく

よ。
主人　さうかも知れない。何しろ、あいつも頭の病氣だからな。
友達　うん。大分さうらしい所もあるね。はゝゝ。（急におびえる）あ、どうもいかん。早く夜になればいゝな。どうも蛇が迫つて來る。
主人　また、蛇かい。
友達　うん、今日は豫感がある。どうだい。山にはさぞ居るだらうな。
主人　あゝ、高いとこへゆけば、あまり居らぬが、それまでは、うぢやうぢや居るね。
友達（身慄ひして）ほゝう、恐しいことだ。
主人　なあに、蛇なんか、何でもないが、やはり、ちよいちよい變なものに出逢ふ恐れはあるね。——あ、あいつを、あんな所へ置いてちア、また、忘れるな。
（主人食器棚に近づき、下の抽出から小型のピストルを取出し、それを持つて來て友達に示す。）
主人　まあ、防禦のために、こんなものを、必ず持つて歩くんだ。こいつア英國製の實に精巧なやつだからな。
友達（ソフアから立上り、主人からピストルを受取る）ふん。すばらしいピストルだね。
主人　うん、これでも、持つてると、大分氣安めになるよ。

（扉の外から、老僕の聲がする。）
老僕の聲　旦那さま。もう、馬車が參ります。御用ずみでしたら、ちよつとおしらべ願ひます。
主人　お、忘れてた。すぐ行くよ。ぢや、君、ちよつと、失敬。（あわてゝ退場）
友達（球臺にもたれ、ピストルを玩びながら）秀さんも大分惡いらしいな。無茶なことを云ふ。——あ、また、いやな豫感がする。畜生、でやがつたら、こいつで、一發お見舞申すぞ。（激しく頭をふり悄氣返る）あゝ、とても僕にア駄目だ。それが出來る位の勇氣があるならなあ。
（友達、ピストルを持つたまゝ、力なくソフアに腰を下す。妻、美しい枇杷を盛つた籠を手にして入り來る。）
妻（微笑して）まあ、主人はどちらへ參りましたの。
友達　いま、荷物をしらべに行かれましたよ。明日の旅支度をね。
妻　さう。（皮肉な笑をもらし）丁度、よかつたわ。
友達　え？
妻　いいえ、こつちのこと。ねえ、青木さん、すてきな枇杷でせう。（籐卓子の上に籠を置く）いま、桐村さんからいたゞいたの。（卓子の側にポーズして立ち）どう、ち

よいと、繪にならなくつて。

友達　夏の女とでも云ひますかな。

妻　平凡！　この枇杷に對しても月並すぎるは。まあ、ほんとにきれいだこと。いらして御覽なさいな。此の新鮮な美を感じなけア駄目だわ。

（友達、うなづいてそのまゝ立ち上り卓子に近寄る。妻、贊成をうながすやうに、籠の椅葉を拂び、一房を取り出さうとする。突如、手をひく。と、同時に異樣な物を握つた手を高く上げ絶叫する。）

妻　あ、蛇か！

友達　（極度の恐怖、棒立ちになつて）うツ、出たな！

（友達、夢中で手にしたピストルの引金をひく。銃聲と共に、妻、うゝッ、と呻き聲を上げ、ばたり倒れる。）

（友達、暫く失神狀態で倒れた女を見つめてゐる。急に小刻みに慄へ出し、兩手で胸を搔きむしりながら、低い呻きを發して、籐卓子によろめきかけ、そのまゝ、心臟痲痺を起して卒倒してしまふ。）

（主人、銃聲を聞きつけ、あわてゝ入り來る。扉を開けて、そのさまを見て、驚愕、憤怒、極度に達す。）

主人　あ、たうとう、やつたのか。彈丸をこめてゐた！　あゝ、僕の推量通りだつた。（倒れた二人に近寄り）畜生！　外道！　恩知らず！　何のざまだ。どうするか、思ひ知れ！　（二人を踏みにじらうとする。ふと、呻く妻の手にした玩具の蛇を見る）あ、蛇か。（ぢつと見る。手で觸れる）なあんだ。これア玩具ぢやないか。ゴム製の玩具の蛇ぢやないか。ちよッ、千枝子の度外れた惡戲の結果か！　（やゝ呆然としてゐる）あ、さうだ、一刻も猶豫が出來ぬ。手おくれちア大變だ。醫者だ！

（主人、連呼しながら扉の方へ走り出す。同時に、老僕、開け放たれてゐた扉からあたふた入つて來る。扉の前方で、夢中で急ぐ主人と激しく衝突する。主人、頓着せず、「醫者だ」を叫びながら走り去る。老僕、主人に彈ね飛ばされ尻餅をついたまゝ、倒れた二人を見て、恐怖の餘り口も利けず、たゞ慄へながら指さしてゐる。）

（此の時、海邊の街道から、乘合馬車のラッパ、高く聞える。つゞいて馭者の聲遠く聞えくる。）

馭者の聲　おうい、爺さん、正太さあん。馬車は來ましたせえ。

從兄　今の銃聲は、たしか此の室だな。（さう叫びながら上着をぬいだまゝ、正面の窓を飛び越え入り來る。このさまを見て、すつかり逆上せてしまふ）あ、これアどうしたんだ。どうしたといふんだ。

（從兄、逆上して爲す所を知らず、球臺の周圍を、うろうろ走り廻る。）

馭者の聲　正太さあん。荷物はどうしたんたあ。

（つゞいて、促すラッパの音が、のんびり聞えてくる。妻の呻き聲、低く斷續する。）

老僕　――（ふるへながら、たゞ二人を指さしてゐる。）

――幕――

（大正十五年一月）

# 犬爭狐騒動（一幕）

——心象素描——

此の戯曲の形式に就いて、作者はむしろリアルであることを求めない。だから、舞臺に出てくる人々——主人、娘、息子、執事、青年、香具師、犬、狐、その他大勢の通行人なども、どこかにその人物を端的に表現する扮装でさへすればよい。

時代は過去だけを避ける。

場所は大都會の住宅地、たとへていへば東京の山の手といふ心持。

舞臺は西洋館の玄關前。

扉のあけはなされた玄關。

その横に鍵なりに出張つて窓を四つ持つてゐる音樂室。

玄關前の廣場。

——これだけを可成り印象的に設ける。

上手には通用門があるつもりで、雇人等が出入りする。

下手は稍へだてゝ往來に通じてゐる。だから、扉の開いた玄關は、ずつと上手寄りに設けてある。

○

幕があく。——黄色な動物が、下手からすばらしい勢で驅けてきて、扉のあいてる玄關に彈丸のやうに飛びこむ。

「ポロ、ポロ、お待ち、ポロ。まあ、どうしたの。おや、また、うちんなかへ入つちやつた。ポロ、ポロや。」

（此の家の娘。ラケットを手にして、かう呼びながら、その後を追かけてくる。そのまゝ家の中に入つてしまふ。くるりふりむく。）

娘　不用心だわ。あけつぱなして。

（ばたん、内から扉のしまる音。鍵の音。それと殆ど同時に。）

（バジヤ、バジヤ、どこへいくんだ。よそのお孃さんだよ。馬鹿。あ、たうとう、あのうちんなかへ入つちやつた。バジヤ、バジヤ、しやうがないなあ。）

（散歩姿の青年、かう叫びながら息をはずませ、娘を追驅けてくる。娘が鍵を下した瞬間のめるやうに玄關に突きあたる。——以上、いさゝかも間を置かず、極めて短い時間に行はれる。）

（青年、當惑する。扉を押してみる。そつとハンドルに手をかける。開かない。音樂室の方をのぞく。（間）かるい足音。考へこむ。ひつかゝれたセロの糸のふるひ。横なぐりされたピアノの鍵盤のかるいわめき。）

青年　居たぞ。たしかにバジヤだ。世話をやかせる奴だな。

（玄關側のベルを認める。ためらふ。決心してベルを押す。ベルの音、間近かで高い。ぎよつとする。すぐ、がちやり音がして、扉があく、白髪の執事、馬鹿丁寧に頭を下げてる。青年、びつくりして立ちすくむ。）

執事　どなたさまでございます。して、御來意の筋は――

青年　いや、なに、あゝ、そ、さうですか。

（名刺を出す。執事、鹿爪らしく見る。）

執事　はゝあ、瀨川さまで――だが、當家では、主人がお目にかゝります前に、手前が一應御用向を承るのが、習慣でございますので――どうぞ、御來意のおもむきを

――

青年　いえ、なに、その犬なんですよ。

執事　いや、別に、主人がお目にかゝらぬと申すのではございません。これが、しきたりなものですから。

青年　なにも、そんなにむづかしいこつちやないんですよ。犬を追かけてきたのが――

執事　おいそぎでもございませうが、ちよつとその箇單に。

青年　さうぢやないんですよ。犬なんですよ。その犬が、こゝへ入つたから、ちよつと呼んでいたゞきたいと思つてね。

執事　なに――一體、なんでございます？　どうも手前には解り兼ねますなあ、それぢや主人には取次が出來ませんよ。

青年　困るねえ。犬を呼んでいたゞけア、それでいゝんだ。御主人などに用はないんです。バジヤ、バジヤ、バジヤア。

執事　（びつくりして）君、こ、こまるぢやないか。そんな大きな聲をして――御主人に聞えたら、わしが大變ぢやないか。少し氣をつけてくれ。（語氣をかへ、獨り語のやうに）チヨツ、ちと（頭をたゝき）變なんだな。

青年　なんだと、失敬な。君ぢやわからん。もつと、話をまともに聞ける人を出し給へ。あ、さう〳〵、あのひとならわかるだらう。君んとこのお孃さんを出し給へ。

執事　なに、お孃さん。

青年　さうさ、つい、いま、ラケットを持つて驅けこんだお孃さんさ。あれアこゝの令孃だらう。

執事　ラケットを持つて――うむ、そら、富士子様だよ。

青年　その富士子さんを呼んでくれ給へ。そすれアバジヤ

の行方はすぐわかる。

執事　富士子樣を——馬鹿な。君は一體なんだ。白晝出表玄關から入りこんで——うちのお孃さまはな。君のやうな不良青年とはお近附がない筈だ。いや存じてない。

青年　不良青年？　どこに僕に不良青年らしい證據がある。紳士に向つて言葉を愼め。

執事　紳士？　なにが紳士だ。紳士なら紳士らしくふるまひ給へ。不良めが。

青年　なんだと、フ、見當外れのとぼけめ。三太夫などと喋舌つてるひまはない。大事のバジヤだ。確かにこゝのうちんなかへ入つたんだ。君が邪魔するなら勝手に邪魔し給へ。僕は飼主の權利として自由に飼犬を呼んでくる、どき給へ。

執事　無法者め、お屋敷内にはは入れるならは入つてみろ。この橋本が控へてゐる以上、こゝ一寸も入れるものか。

青年　ハ、、、、天晴な御家老だ。だが、バジヤはどうしたらう。バジヤ、バジヤ！

（セロの音、ピアノの鍵盤のうめき。）

青年　居る〱。あいつ、妙なところへもぐりこんだものだ。バジヤ、バジヤ。

執事　亂暴ものめ、家宅侵入罪だぞ。

青年　なんだ、そつちこそ誘拐監禁罪だ。

（青年入らうとする。執事その腕をつかんで引き戻す。押しのめす。引張る。突く。しがみつく。叱咤。惡罵。書生、出てくる。罵倒。執事應援をこふ。書生青年の足をつかんで引く。のめる。執事、肩先をおしつける。青年ははねかへす。書生後から羽がひじめにする。）

青年　なにするんだ。亂暴もの。こら、バジヤ、バジヤ。

（娘、あわてゝ出てくる。吃驚して此の樣子をみてゐる。手をあげて書生を抑へる。執事と青年、まだ取組み合つてゐる。）

娘　橋本、橋本、ど、どうしたといふの。まあ、手荒らなことはおよしなさいな。怪我でもしたらどうするの。

（執事、やつと手をはなす。娘を見て恐縮、亂れた衣服を直す。「バジヤ、バジヤ。」青年、さう叫びながら、この隙に乘じて、奥へ踏み入らうとして、娘にぶつかる。驚いて、直立不動、辭儀をする。）

娘　一體どうしたといふの、これは。まあ橋本。羽織のひもがきれちやつたわ。年寄の癖に喧嘩なんかして、——（青年の樣子を見る。暴漢らしくないので安心する）この方だつて、いつかの青年同盟の連中なんかとはお違ひになるのにさ。山口、お止しよ。そんなに意氣込んで、みつともないわ。それより、此の方のお話を靜かに伺つ

てあげた方がいゝわ。

青年　え、全くです。なにも僕ア暴漢でもないし、たゞ、鳥渡伺ひたいことがあつて、ベルを押したのに、いきなり、こいつ、いやこの老人が出てきて、あまり見當違ひなことをいふんで――

執事　お孃さま、どうも、とんだところをお目にかけて。なあにこつちが丁寧に挨拶すると、こいついやこの瀨川といふ人はつけ上つて、やれ旦那さまに直接お目にかゝりたいの、お孃さまにお話すればわかるの、まるで不良青年――

青年　なに不良だと。

書生　さうぢやないか。執事を組み伏せて邸内に押し入らうとする人間は、不良青年かどろぼうだらうぢやないか。

青年　どろぼう――書生君、言葉に注意し給へ。紳士に對して無禮な。

執事　だから、紳士なら紳士らしくしろつていつてるぢやないか。

書生　大聲あげて飛び込む紳士がどこにある。

青年　必要があるから、大聲をたてるんだ。深夜でもあるまいし、なぜ不都合だ。

娘　まあいゝわ、靜かにして頂戴な。後生だから――で、あなた、あたしに御用があるつて、どんなお話。あたしでわかることなら、こゝで伺ひますわ。

青年　え、あなたなら、わかつていたゞけるでせう。なに、ほんのつまらぬことですよ。

書生　づう〳〵しい野郎だなあ。

娘　山口、まあいゝよ。

執事　お孃さま。

娘　ホヽヽ、かまはないわ。さ、仰有つて下さい。

青年　犬なんですよ。僕のバジヤの行方を探してるんですよ。

娘　犬ですつて。

青年　え、僕の大事な犬ですよ。犬の運動――毎日、時間を定めてやつてるんですがね、今日も、それで、つれてでてくると、あすこの曲り角で、ちよいと似寄つた犬と――なあに大分毛色は劣つてましたがね――そいつと出逢ふと、急に鼻面を合してぐづ〳〵してたんですが、ひよいと、僕がわきみしてる内に、とつと驅け出しちやつたんですよ。

娘　まあ、似たやうなお話。うちのポロも、つい、いま、あたしと一所にコートから歸つてくる途中、變な犬と出逢ふと驅け出しちやつて、呼んでも呼んでも戻つてこなくて、ずゐぶん困つたわ。

青年　うむ、その筈ですよ。僕がまご／＼してゐると、あなたが、横合から驅け出していらつしやる。ラケットを持つたまゝ、いきなり、ポロとかなんとか、お呼びになつたもんだから、バジャの奴、びつくりして、外れ彈のやうに突走しる。それをあなたが追驅けてらつしやる。すると、あの横丁でせう。バジャの奴、左へ曲つたら、あなたも左へゆかれる。こいつ見のがしちや、と僕も急いで追かけると、バジャの奴、ラケットで追驅けられるものだから、泡食つて、こちらの門内にコースを取る。そこへおあつらひ向に玄關があいてた。あいつ死物狂に飛びこんぢやつた。おやつと思ふと、それに、すれ／＼に、あなたが、とびこまれる。僕もつゞいてとび込まうとすると、内から扉がぴしやりしまつちやつた。――といふわけですよ。あなたのポロなら横町で遊んでましたよ。

娘　なんですつて。そすると、いま、うちんなかへ入つたのは、あなたの犬だと仰有るのですか。可笑しいわ。失禮ですけどね、お間違ひでせう。うちのポロは、あんなにやせちやゐませんよ。横町で、くん／＼云つたのは、あなたの――ほら、あの變な名の犬ですよ。

青年　やせてる――冗談ぢやない、うちのバジャは、あんなすゝけた毛色はしてませんよ。あなたが、すつかり取り違へて、ラケットで、追ひ込んぢやつたのですよ。

娘　まあ、ひどい方。大好きなポロを、あたしが、見間違ふ筈なんてありやしないわ。

青年　僕こそです。どんなに驅け出したつて、うちのバジャを見違へてたまるもんですか。然も、あんな老いぼれ犬と。

娘　ホ、、、老いぼれだつて、ポロは今年三つですよ。ともかく、出して下さいな。

青年　バジャは、四つですよ。あんな犬と、取りかへられちやアたまりやしない。

娘　何ですつて、こつちこそ、そんなことでごまかされてたまるもんですか、第一、犬なんて、さう、やたらに、知らぬ人のうちへ飛びこむもんでせうか。

青年　あなたが、ラケットで追ひ込んだぢやないですか。

娘　あれアポロですからね。ポロは始終うちん中で遊びますのよ。

青年　バジャだつて、うちんなかで、僕が書齋に居れば、机の上にだつて飛び上つて遊んでますよ。

（音樂室で、また足音。ピアノの音、セロの音、稍はげしく鳴る。）

青年　（音樂室を指し）そら、その音でもおわかりでせう。バジャはあなたに追ひこまれて、あんなとこでもないてるぢやありませんか。

娘　音楽室だ、あいてたかしら。
執事　はい。さきほど、進さまがお友達といろ〳〵お弾きになつて、そのまゝお出ましと見え、唯今、手前が、ベルの音で、出て参りますとき、開いてゐたものでございますから、扉をしめて参りました。
書生　行つてしらべて参りませうか。
娘　いらないわ。どうせ、ポロなんだもの。出たくなれア何とかいふから、ほつておゝき。
青年　それア困りますね。ポロなら、いゝかも知らんが、バジヤなんですからね。ちよつと、僕にしらべさせてくれませんか。
娘　生れたときから、そばに居るあたしが間違ふ筈なんかありアしません。あなたこそ、強情はらずに、早く戻つて、横町でそのバジヤとやらを、つかまへていらしたらいゝでせう。馬鹿ね、犬のくせに、主人を間違ふなんて。
青年　それアあなたのポロのことでせう。なんだ、うちの近所なくせに、横町でふら〳〵して、も少し飼ひ方を研究なさつたがいゝですよ、ともかく困りますよ。
娘　こつちこそ迷惑ですわ、大抵にしてお歸りになつたら。
書生　ほんたうですよ。こんな言ひ掛りをされちやお嬢さんもお困りだ。
青年　言ひ掛りだと。
執事　さうぢやないか、君も強情だね。
（女中三人、上手から出てくる。）
女中一　あたしらも、いま中の口で聞いてたけど、ほんとにいやだわ。ポロぢやなけアうちんなかなんかに、入れアしないわ。
女中二　さうよ。いくら、づう〳〵しいたつてね、ほかの犬なんか、玄関から入るなんてこと、ありやしないわねえ。
女中三　變な人、橋本さん、早く譯をいつて歸つて貰つたら、どう。
執事　それが、やせ犬に目がくらんで、のぼせてしまつて、なんといつてもわからないんだよ。
女中一　ぢや、山口さん、無理にも歸へしちまはない。
書生　うむ、だがお嬢さんが、――
娘　さあ、もう、なんと仰有つたつて、うちのポロなんですからね。お歸り下さいな。
女中二　ぐづ〳〵してると、あなたの犬がそれこそ迷子になりますよ。
書生　フ、、、それこそ、飼ひ方を注意しろだ。
青年　君アあとからでてきたんだ。何も知らんくせに御主

人の肩を持つのは止して貰ひたいね。僕は、全く血眼になつて、バジヤの後を追つかけて來たんだからね、さあお孃さん、意地づくにならんでバジヤを早く出して下さいな。

娘　それア居るなら出しますわ。でも居ないんだから仕樣がないでせう。

（また音樂室で荒れ廻る音。）

青年　そら、居るぢやありませんか。

娘　え、居りますわ。

青年　御冗談も程がすぎますよ。そんなら、出してくれたらいゝぢやありませんか。

娘　出せと仰有るの。そら、居りますわ、うちのポロがね。あなたは、ポロを出せと仰有るの。

青年　ポロは横町ですよ。バジヤが可哀相にくん〳〵いつてるぢやありませんか。

娘　バジヤは横町ですよ。ポロは喜んでくん〳〵云つてますわ。

青年　いゝかげんにしろ。僕はひま人ぢやないんだ。

娘　なんです。あたしだつて、こんなことでひまどりたくないわ。

青年　いゝです、あなたまで、さう仰有るなら、僕、踏みこんでつれてきます。

書生　なにする。承知せんぞ。

青年　承知するもせんもない。どつちが無茶だ。

書生　暴を制するには暴を以てなすだ。

青年　腕力に訴へるといふのか。

執事　君、一歩でも入つてみろ。

青年　あの高價な犬を言ひ掛りで奪はれて指をくはへて引込めるか。糞。

（青年踏み入らうとする。書生後から飛びかゝる。執事、横合からしがみつく。青年ふり拂はうとする。女中等、金切聲を出す。「痛ア、ひどいわ。無暴だわ。ポロです、ポロです。」と連呼する。上手から、植木屋二人、飛んでくる。往來から學生三人、走つてくる。植木屋とぶつかる。「手前逹ぐるだな。」植木屋甲、書生Aにつゝかゝる。A「ぐるとは何だ」はねかへす。）

（「もう承知できねい。」「ものもいはずに、なぐるとはなんだ。」口論。遂に、植木屋と學生の亂闘はじまる。青年、書生をつきのめし、踏みこまうとする。娘、大手をひろげて邪魔する。音樂室の音しきり。植木屋執事に呼ばれ、その一人青年に組みつく。學生、それを見て、植木屋の足をつかむ。書生、一人になつた植木屋に助力する。小學生、齒換屋、八百屋、中年の紳士番頭風の者、勞働者、パン屋、あめ屋、御用聞の小僧

洋食屋の出前持、近所のおかみさん。いつの間にか、門内に入つて啞然として見てゐる。）

（娘、しきりに「お父さん、お父さん」と呼ぶ。主人、内から、急いで出てくる。出入の魚屋、天秤棒をふり上げ、上手から走り出て、學生にうつてかゝる。女中一、門外に走り出す。青年、尙ほ踏みこまうとして、娘に突きあたる。娘、叫ぶ。青年ためらふ。主人、その肩をぐつと抑へる。執事、植木屋、その姿を見て手をひく、勞働者、學生と植木屋魚屋の中に入り双方を制す。）

主人　さわがしい。何です、君は。見れば、ゆすりでもなさゝうだが、この亂暴はどうしたといふんです。

青年　あなたが、御主人ですか、僕は、犬をとりかへしに來たんです。僕のバジヤを奪つておきながら、お宅の皆さんは僕にかへして下さらんのです。

娘　（ヒステリカルに）父さん、ひどいんです。ほんとに無茶な方なんです。御自分でボロをバジヤといふ犬と間違へてかへせと仰有るんです。でも、ボロなんですもの。さう申すと、そんなら踏みこんでも、奪ふと強情をはるんです。

執事　手前の落度でございます。どうぞ御勘辨下さい。だが、ほんとに途方もない亂暴者でございます。あの音樂室に居るのをどうしても自分の犬だといつて承知しないのでございます。

書生　お孃さまが、なんでボロのことをお見違ひなさるものですか。いくら、さういつてもわからぬと見えて、こんな無茶をやるのです。

青年　何といつたつて、僕はバジヤを間違へる筈がないのです。それアおうちのボロと曲り角で遊んでました。そこへお孃さんが通りかゝられて、ラケットをふりまはされたんで、バジヤの奴、びつくりして、驅け出し、丁度、開いてたお宅の玄關から、あの音樂室に飛びこんだやつたのです。その後を、僕が追かけたんですから、間違のある筈はありません。

娘　いえ、あたしこそ、ボロの後を追かけて行つたのですもの、ねえ、父さま、あんなにボロを可愛がつてるあたしが、ほかの犬と間違へるなんてこと、ありアしませんわねえ。

主人　うむ。それア名題の犬ずきのお前のことだもの。間違ふ筈はない。

青年　僕の犬に關する知識を輕蔑するんですか。雜誌「犬」の寄稿家たるこの僕を信じ得ないといふのですか。

執事　旦那樣さへ、あゝ仰有つてゐる。

植木屋甲　手前みてえな素寒貧に、うちのボロみてエな犬

が飼へるかい。
青年　なに、俺のバジヤを見てから云へ。
書生　ふゝん、やせ犬か。
主人　惡口はよせ。まあわしにまかしとけ。
（音樂室で、またざわついた音、一同鳥渡しんとなる。そちらを見る。魚屋、學生などこづく「手前、仲間ぢやないのかい」「馬鹿云へ、僕は通り掛りのものだ」「なんだつて緣もゆかりもない奴の犬を持ち上るんだ」「あいつがいきなり、僕らになぐりかゝるからさ」植木屋乙を指す「手前の方からつゝかゝつたんぢやれいか」「僕ア女の聲がするから彌次にとびこんできたんだ」「俺もお藏さんの聲で松の木からとび下りてかけつけたんだ」「さうか」「さうか」「とんだ鉢合せだつたな」「はゝゝ、こぶができたぞ」「はゝゝ、いてエか」「はゝゝ」音樂室で、セロが高鳴りする。）
青年　ほら、あの音です。バジヤです。
娘　いえ、ポロです。ポロよ、ポロよ。
青年　あなたの耳はどうかしてる。バジヤだバジヤだ。
娘　（ヒステリカルに）ポロ、ポロ、ポロ。
青年　（激昂して）バジヤ、バジヤ・バジヤ。
（また、飛び込まうとする。）
主人　まあ、待ち給へ。君は、どうしても・あすこに居るのは、君の犬だといふんだね。
青年　どうしてもつて、確にさうなんですもの。
主人　よし、富士子、お前は確にポロだね。
娘　あたしが、すぐ後を追かけてきたんだもの。決してバジヤなんて犬ぢやないことよ。
主人　よからう。わしもポロだと信じる。
青年　そんな信じ方があるもんか。そのひまに、しらべさしたらいゝでせう。
主人　もちろん、いま、あの室の中をしらべます、けど、もし、それがポロだつたら、君はどうします。
青和　バジヤです。ポロぢやありません。
主人　いや、かりにです、かりにポロだとしたら。
娘　ポロに違ひないわ、かりになんて下らん讓歩よ。
主人　まあいゝよ。ともかく。もし、それがポロだつたとしますね。その時は、かうゐばつた手前、や、間違ひました、おや君もすむまい。いや、君より、こつちがそのまゝおや承知ができない。しらべる前に、一應、そこを御承知願ひたい。
青年　承知するもしないも、そら、バジヤに違ひないのだから――でも、もしですな、もし違つたら、何でも御要求に從ひますよ。
主人　確かに誓ひますな。よし、それぢや、しらべさせま

せう。だが、譲つてゐたら、いゝですか、もしポロだつたら。――

青年　僕の首をあげませう。

主人　首？　冗談でせう。僕は高砂族ぢやないですからな。さうだ、かうしませう。もしポロだつたら、君は、うちのもの全部、雇人もですよ。それに、ポロと、――この全部に、一々、手をついてわびて貰ひませう。お騒がせしてすみませんでしたとね。

青年　ひどい侮辱だ。――だが、いゝでせう。バジヤなんだから。して、もし、バジヤだつたら、どうします。

主人　その逆をやりませう、わしら全部、あなたの前に手をついて、相すみませんでしたとおわびしませう。

青年　よろしい。手をつくんですよ。この地面に一々手をつくんですよ。ハ、、、どうです。おう、書生さん、君なんか、そろ〳〵、用意したらどうだね。

書生　なに云ふんだい。君こそ、ズボンの膝でもぬかぬやうに氣をつけろ。

娘　さあ、父さん、あけませう。音樂室をからりあけて、ポロを抱いて笑つてみませう。

主人　――（考へ込む）

（主人、娘の顔をみる　この會話の間に、種々雜多の通行人、續々と入り來り、前から居合せた人々に事件をたづねては、そのまゝ立ち止り、ポロかバジヤか――に好奇心をあつめてゐる。執事、書生、他の雇人、「ポロだ、ポロにきまつてゐる。」と叫ぶ。學生等「バジヤだ、バジヤだ」と應ずる。植木屋と學生の小突合。彌次馬連も各々どちらかに聲援する。この時、空罐を引いた香具師、車を引いたまゝ入り來る。つゞいて、鞭を持つた香具師いそいで入り來り、人々にたづねる。不審顔して立ち止まる。音樂室の音、愈々はげしく鳴る。主人、橋本、娘の自信ありげな顔に納得して。）

主人　よし、橋本、音樂室の扉をあけろ。

（執事、低頭して内に入る。一同肅然。音樂室の音だげひゞく。青年、娘、殊に硬直して内をのぞきこんでゐる。）

（あけはなされた扉の音。つゞいて、執事の突拍子もない聲。玄關に立ちふさがつてゐた主人、青年、娘、「わあ」といつてとびのく。黄色な動物、一散に驅け出る。「バジヤだ」「ポロだ」一同の聲。動物、泡を食つて、前庭内をぐる〳〵廻る。人々、無中でその後を追ひ廻す。瞬間往來の方で、二匹の犬の聲高く聞える。それに應じて走り廻つてゐる動物、しきりに悲鳴をあげる。（此の鳴き聲、樂器で擬聲音を出すこと）鞭を持つた香具師、急に氣づいて、鞭をあげ、走る黄色

な動物に迫る。鞭の音、門外の犬の聲「父さん、姉さん、どうしたの。」此の家の息子、往來から、門内に驅け込む。香具師、驚いて、檻の中に黄色な動物を追ひこむ。他の香具師、手早く檻に錠を下ろす。息子の後から、二匹の犬飛び込む。檻の中の動物めがけて、しきりに吠える。動物、悲鳴をあげる。香具師、鞭をあげて二匹の犬をうたうとする。呆氣に取られてゐた青年と娘、その樣子を見て、いきなり一齊に香具師のそばに驅けよる。手をひろげる。「バジヤ」「ポロ」その呼び聲に、犬はその呼び主の胸にとびすがる。檻の中の悲鳴。香具師、かまはず車をひき出す。他の一人、その側で鞭をならしながら、共にゆきかゝる。一同啞然。そこへ、女中一に伴はれ、巡査入り來る。）

巡査　（香具師の胸先をとらへ）　どうしたんだ。なぜよその邸内で騷ぐのか。

香具師　へ、へ、御免下さい、旦那、なにねこの狐めが、小屋から逃げ出して、このお屋敷へとびこんだのでね。ちよつとつかまへたところで——これでも、大分、金を食つてゐますからな。いえ、なに、おさわぎなすつたのは、こちらさまが御勝手で——へ、い、まことに相すみません。

巡査　（尚ほおち棒をつかみ主人に向ひ）　どうなされたんです。こやつが、亂暴でも致しましたか。

主人　いや、どうもすみません。なに、その人は別に關係ないことなんで、どうも、こつちの失策ですよ。どうぞお引取下さい。

巡査　あゝ、何かのお間違ひですか。まあ、大したことがなけア、結構です。あ、こら／＼、よその邸内に彌次馬が入つちやいかんぢやないか。出ろ、出ろ。

（群衆、「なんだ、さうかい」「ふゝん、ポロでもなかつたとさ」「狐だつたたア皮肉だね」「これが、どつちかだつたら、また一騷動だつたな。」「香具師め、うまいことしやがつた」「チヨッ、とんだひまつぶしよ」「みろ、あの可愛がりやうつたら、あれぢアお互ひ血眼になるのも無理ねいな」「狐みてエな犬さね」——口に呟きながら、巡査にうながされ出てゆく。青年バジヤを、娘ポロをまだ抱いてゐる。執事、書生、女中、植木屋、啞然群衆を見送る。主人、玄關にぼんやり突立つ。息子驅け寄る。）

息子　父さん、どうしたの、ポロもその犬も勇敢ですね。狐め、きやんきやんいつてた。ポロとあの犬、仲がいゝのよ。僕、歸つてきたら横町でとてもはしやいで遊んでたよ。

主人　進。音樂室の扉を開つ放して出ちやいかんよ。（そのまゝ奥へ入る）

（息子口笛を吹く、犬そつちへ行かうとする。）

青年　バジヤ、バジヤ。

娘　ボロ、ボロ。

（犬、また、戻つて、各々その飼主の胸に、じやれかかる。）

娘　いゝ犬ですこと、ほんとに、ボロに似てますわ。

青年　いや、ボロも立派なもんですね。バジヤそつくりだ。をとこ。――

娘　いゝえ、

青年　あ、さうですか。いや、どうも大變失禮しました。すみません。

娘　あたしこそ。

青年　ハ、、、、

（青年、犬をつれて出てゆく。ボロ追ひすがる。娘、「ボロ、ボロ」と呼ぶ。ボロ、中間に立ち止り、首をひねる。青年、娘、晴やかに笑ふ。）

息子　や、さよなら。

青年　さよなら、おかげさまでした。

娘　ほんとだわ。ホ、、、。

執事　（見送り、感慨無量）　狐は全く魔物だよ。

（一同哄笑。）

――幕――

（大正十五年八月）

# エリザベスの指環（二景）

一六〇二年の秋

イングランド

エリザベス
ハリントン卿
フランスの使節
ノッチンガム伯爵夫人
主　　教
醫　　師
侍　　臣
侍　　女
使節の隨員
若い騎士
樂　　師
（侍臣以下）大勢
ノッチンガム夫人の侍婢

## 第一景

離宮の一室。すべて十七世紀初頭の壯麗な裝飾。中央、稍々上手寄りに女王の座。晩秋の午後——陽に室内が重々しく明るい。喧噪な樂の音が聞えてくる。

侍臣侍女等あわてゝ身じまひをとゝのへ、室内を更に整頓する——侍臣は皆美髯を蓄へてゐる。音樂更に近づく。上手の扉口が開き、十二人の喇叭手二人の鼓手よりなる奏樂隊を先頭にエリザベス女王、フランスの使節を伴つて入り來る。主教侍臣侍女、使節の隨員、その後に從つて來る。

女王、六十八歲、華美な服裝派手な粉飾。だが、どこかに衰頽の色が宿つてゐる。

女王、座に着き、傍に使節を招く。一座の人々最敬禮。音樂、さらに喧しく奏せらる。

女王　（かるく手で奏樂隊を抑へて）もう、およし。そろそろうるさくなつてきたよ。

（はつきり聞えぬ。だから奏樂隊は半分は止め半分は尙も吹奏しつゞける。）

女王　（立ち上つて）およしッ豚どもめ！　いつまで、わたしが食事をしてると思つてゐるのか。氣のつかぬのも

ほどがあるな。ヘンリー八世の御代なら、早速、首斬り人から案内を受けるところだよ。

（奏樂隊、あわてゝ吹奏を止め直立不動。）

女王　（嘲笑）ほんとに、お前達よりは豚の方がよつぽどましだよ。（急に調子を變へ愛想よく使節に向つて）おお、大變失禮しました。何しろ、今では氣の利いた侍臣も居らず、紳士を持ち合はさぬ豚どもばかりですから――さぞおやかましかつたでせう。あれが、わたしのこのみでしてね。

使節　よく承知してをります。陛下の御威德を慕ふあまり、ドヴア海峽のむかうでも、此頃の食事時は、喇叭と太鼓でにぎやかでございます。むろん、陛下の奏樂隊には及びもつかぬ――

女王　（笑）さすが、パリでお鍛へだけあつて美事なお口前――いえ、あれは、このみといふより、わたしの性癖でね。わたしは始終器官の全部を働かしてゐないと不快だ――だから、食事の時、きまつてあの奏樂をやらせる。すると、退屈してゐる耳はよろこび、足は絕えず調子をとつてゐる。それで、わたしは滿足して食事をとるのですよ。でも、あのメロデイも此頃少し激しすぎるのです。おゝ、憂鬱な幻想！　さ、それより、さつきのすばらしい狩の話の結末をうかゞはう。

使節　それで、ギース侯は鹿に追ひつかれたのでございます。そして、鹿の首が肩先にさはると、ぶざまにも氣を失つて倒れたのでございます。陛下、たゞ、それだけのつまらぬ話でございます。

女王　（大笑）

使節　陛下、今度はどうぞ、陛下の勇敢な狩獵隊のおびただしい獲物に就いて、お話下さいませ。

女王　勇敢な狩獵隊。（笑）それは、十年も昔の夢ですよ。わたしは狩もしきりにやる。觀兵式も催す。演習もやつてみる。劍術の試合もやらせる。大宴會も大舞踏會も絕えず催してゐる。けれど、豚どもばかりになつたわたしの家來達は、何につけてもだめなのだよ。勇敢、豪俠、才智、美貌――さういふ男の美德を一身に集めてゐたロバートやローリイなどといふ家來を持つてゐたわたしには、いまの豚どもを賞めて貰ふと反つて不快になります。

使節　そのやうなことがございますものか。フランスは、陛下の勇敢なそして忠實な國民を羨望してをります。で、ロバートと仰せられますと、あの陛下の限りない寵遇にそむいて叛逆を企てた――

女王　さう、そして、ロンドン塔の暗い室から引き出されいたましい最期をとげたエセックス伯ロバートですよ。

わたしが、片時も忘れぬあのロバートのことだよ。

使節　エセックス伯に對して、何といふ御寛大な御心でせう。

女王　そなたはまだお若い。そして海峡のむかうの方だ。ロバートの比類なく美しい人柄を御存じあるまい。なるほど、彼はわたしの手に嚙みついた。だが、最も美しく最も賢い犬に嚙まれたとて、そなたはその犬を撲殺して後悔されぬか。わたしは、犬があやまらないといつて殺してしまつた。そして、今は、無智に柔順ないぎたない豚どもにかしづかれてゐる。

使節　おゝ、エセックス伯、その人こそ、幼い時から、わたくしのあこがれでございます。

女王　（ヒステリカルな笑）なんとでもいはれるがいゝ。そなたが、いくら口を極めて讃嘆されても、ロバートの美しさには、及ぶまい。ロバートの眞價を知るものは、わたしだけだ。海のむかうのそなたにわかるはずはない。おゝ、ロバート。わたしは、あの時、イングランドと結婚したこの指環ばかり見つめすぎてた。この指環に縛られてゐたのだ。けど、そなたに與へたあの指環をどんなに待ち兼ねてゐたのだらう。あゝ、（激しく身ぶるひする）斷頭臺の斧の音が胸にこたへる――

老侍從　（すゝみ出て拜跪する）陛下、尊嚴極りなき陛下。使節と御會見の御席でございます。

女王　（嘲笑）マレー、衰へた神經を酷使せぬがいゝ。

老侍從　然しながら――

女王　もうよい。老いた豚よ。おまへは此の若いフランスのお使が氣にかゝるといふのだらう。パリで育つた教養あるこの若い紳士はね、このことぐらゐで、イングランドと結婚した女王の脈をはからうとはなさらぬよ。さうでせう。お若い方。

使節　恐れ入ります。

（老侍從、恐懼して下る）

女王　マレーは五十年わたしのそばに侍いて、まだ、わたしのほんとの大きさを知らないんだね。こんなときはポーリンでもゐると巧く機嫌を直してくれるのだが――

使節　ポーリンと仰せられると――

女王　若いお方、そなたも巧みに話題を變へる仕方を御存じだね。（笑）ポーリンとは三十年、一時もわたしのそばをはなれずつかへてゐた口返しを知らぬよく氣のつく此上もない調法な年寄つた猫のことだよ。そのノッチンガム夫人と呼ばれるポーリンも重い病で、遠からず飼主の手からはなれようとしてゐるのですよ。

使節　おゝ、陛下の忠實な侍女ノッチンガム夫人は、御病氣なのでございますか。

女王　さう、それが大變悪いのでね。もう、半月も寝てゐるので、此の頃、ひどくわたしの身廻りが片付かないのですよ。ほんたうの男性であつたロバートは斧で首を斷ちきられ、ほんたうの女であるポーリンは明日も知れぬ病氣――わたしは、めつきり年寄つた氣がする。

使節　陛下、陛下は永遠の若さを御頬にたゝへてをられます。

女王　若い紳士、そなたはわたしの年齢を御存じだ。そして、それと對照してをられる。むろん、わたしは、それよりはずつと若い。けれど、わたしは、ロバートと別れてからほんとの若さを失つた。張り切つた若々しさをとり落してしまつた。わたしは、もう生活につかれてます。わたしの胸中に深くきざまれてゐる哀みは、遂に解くすべもなく一日々々とわたしの若さをうばつてゆくのです。

使節　陛下、そのやうなこと――

女王　フランス國のお世辭はおよしなさい。おゝ、クレンマア主教。ロバートの追福を主に禱られよ。

（主教、嚴かに祈る。）

女王　ポーリンの病のため、主の御惠を乞へ。

（主教、祈る。）

女王　わたしの失はれゆく若さを救ひ給へ。

（主教、祈る。）

女王　あ、頭が暗い、血がにぶく淀んできた。樂師達、さあ、いつもの奏樂にとりかゝれ。

（奏樂隊、一齊に例の喧噪な樂を奏す。女王稍々活氣づく。やがて、また襲ひ來る憂鬱に焦々しだす。）

女王　およし、豚ども、何といふ不出來だ。

（奏樂隊、曲半ばで啞然として止める。）

女王　（きつと若い騎士達に目を注ぎ）ホーキンス、グレイ、眞劍の試合だ。フランスの使節が見てをられる。巧な腕前を十分にふるふがいゝ。

（騎士、甲乙、進み出て拜跪する。やがて、雙方に分れ、劍をぬいて目禮。）

騎士甲　陛下の忠勇なる僕、ジエーン・ホーキンス。

騎士乙　女王の旗の下に死すトマス・グレー。

（劍を合せ激しく鬪ふ。）

女王　（突然立上り）見苦しい。退れ。何といふ優長さだ。

（騎士恐懼して退る。）

女王　（使節に向ひ）とんだ生ぬるい試合をお見せしました。あゝ、フランスのお方に、ロバートとローリーの試合をお目にかけたかつた。それは、見てゐても目がくらむほどでしたよ。

使節　（女王の振舞に當惑しながら）あ、有名なウオルタ

ア・ローリー卿でございますか。

女王　あゝ、そのローリーも、今では、小鳥の雛がいじめになり、わたしによぢ登ることのできぬ臆病者になつてしまつた　それにひきかへ、ロバートは最後まで、あまりに勇敢すぎた――主教、なぜ、祈りをつゞけられぬか。

（主教、あわてゝ、天を仰ぐ。侍臣、下手の扉から入り來る。）

侍臣　（拜跪して）　陛下、ハリントン卿が拜謁を乞はれてをられます。

女王　おゝ、ロバートの軍に從ひ、アイルランドを討伐したハリントンが見えたのか。すぐ、こゝへ召せ。

老侍臣　ハリントン卿に拜謁を許されましたぞ。

侍臣　畏りました。（退場）

使節　（よき機會と見てとつて）　陛下、では、わたくしは、後ほど、また拜謁をお願ひいたします。

女王　アイルランドから戻つたハリントンです。別に差支もないでせう。

使節　でも、大分長い間、光榮を給はりましたから。

女王　では、また、逢ひませうぞ。

使節　（拜跪して）　畏多いことでございます。

（奏樂また起る。使節その隨員を從へて上手扉口より退場。樂の吹奏中にハリントン侍臣に導かれ下手扉口から登場。恭々しく拜跪する。女王かろく會釋して側近く招く。奏樂止む。）

ハリントン　唯今歸國いたしましてございます。いつも御氣色麗しい陛下に拜謁いたしまして、ハリントン、恐れながら、無上の喜でございます。

女王　あ、よし／＼、戰況の樣子は大體報告で知つてゐる。どうだ。もう大したこともあるまいね。

ハリントン　はい。一先づ鎭定の模樣でございますが、何せチロンの殘黨は、なか／＼頑強でございますから。

女王　全くだよ。あいつらはみなごろしになるまで、手向ふつもりなんだからね。

ハリントン　至つて捗取りませんので、御機嫌も如何かと、實は心を痛めて參内いたした次第でございます。

女王　いや、さう焦つても詮ないことだよ。あの勇敢なエセツクス伯でさへ、手に餘つた敵だからね。

ハリントン　微力なわたくし、とかく手間取るのでございます。

女王　なあに、ロバートさへまごついて、その焦ちの憤りをわたしへまで向けた位だもの――おう、さういへば、そなたは、あの時以來、アイルランドに止つてゐたのだね。

ハリントン　さやうでございます。エセックス伯に從つて、ウエストミンスタア宮殿を立ち出でて以來の歸國でございます。

女王　ハリントン。遠慮はいらぬ、もつと側近く、お寄り。

（ハリントン膝行して進む。）

女王　（しげ〳〵その顏をみつめ寂し氣な口調で）おう、そなたも大分年寄つてやつれたね。ロバートに從つて拜謁に來た時は、たくましい將軍だつたが――遠征は大分つらいものと見えるね。

ハリントン　おそれ入ります。

女王　さう、ロバートもアイルランドから歸つた時は軍服も土まみれになり、豐かな頰もこけ美しい髭もとゝのはず、たゞ、あの懷しい瞳たけがさびしく光つてゐたよ。ハリントン、わたしには、いま、そなたが出陣の折の樣子が目に浮んでくる。そして、ロバートが、勇しく陣頭に立つてゐるあの均整のとれた姿が――ハリントン、そなたは深い事情は知るまい。ロバートの叛逆は、決して大した根據あつてのことではないのだよ。

ハリントン　わたくしも、さうとは存じてをりました。

女王　犬があんまりじやれつくので、わたしはちよつとぶつたのだよ。すると、あいつは、しきりに吠えたてる。それが喧しいといつて下男どもが飛び出してしまつた。たゞ、それだけのことなのだよ。わたしは、その時、この指環に執着しすぎてゐた。それが、たうとうあんなむごたらしいことを仕出來してしまつたのだ――

ハリントン　恐れながら、御胸の中、お察し申上げます。陛下、だが、なぜ、エセックス伯は、陛下から賜つた生命乞ひの指環をお送りして、お助けを乞はれなかつたのでございませう。

女王　そなたはそれを知つてゐるのか。

ハリントン　はい。チロンと對陣いたしてをります時分、エセックス伯は、あの美事な指環をわたくしに示されて、陛下の恩寵の宏大さを感激してをられました。だから、わたくしは、たとへ伯爵が叛逆らしいことを企てゝも、一命だけは御助けを得ることゝ存じてをつたのでございます。

女王　わたしも、それは不思議に思つてゐる。いくら、利かぬ氣のロバートでも、ロンドン塔の暗い一室で夜半靜かに考へたら、氣も折れて、指環を送つて救助を求めることだらうと、死刑執行のその時間まで、わたしは、今か今かと、あの指環を待つてゐたのだ。

ハリントン　伯爵はかうお話でした。陛下は伯のわだかまりのないあまり開けはなしの心を氣づかはれ、他日の憂のためとてあの指環を賜つたものだと。

女王　その通りだ。ロバートは天才的なお坊ちやんだつたからね。生きてる時分だつて幾度つまらぬことで激昂して、わたしの意をそこねたことか。でも、そなたも知つての通り數ない美しい姿と心の持主だ。嵐が去つて、靜かに話し合ふと、その淸らかな魂が輝いて、わたしは以前よりもましていとほしくなつたものだつたよ。その度度の經驗から、わたしは萬一を氣づかつて、生命乞ひの指環をくれたのを、ロバートの剛情者、到頭それを一度も使はず、三十八の若さで、斧の下になつてしまつた。

ハリントン　伯爵は陛下に反いた罪を深く自責されたためでございませうか。

女王　さうかも知れぬ。だが、わたしは、ロバートが最後まで、わたしを恨み通して死んだやうな氣がしてならぬ。おゝ、指環が見える。あれ以來見えぬ指環が、目の前に浮んでくる、はつきり見えてくる。

ハリントン　陛下、陛下。

女王　音樂をやれ。騎士達、試合をしろ。クレンマア、わたしのためにロバートの魂を祈れ。

（奏樂、騎士丙丁の試合、主教の祈り。各々あわたゞしく行はれる。下手扉口から侍臣急いで入り來り拜跪する。）

侍臣　陛下、ノツチンガム夫人の急の使者でございます。

老侍從　差支ない。申し述べろ。

侍臣　夫人は最早危篤でございます。その臨終に際し、今生の御願ひとして、恐れ多いことながら、陛下の御臨幸をたつてお願ひ致したいとのことでございます。

女王　ポーリンは、もうだめだと申すか、よろしい、すぐに參らう。皆の者、外出の支度をしろ。

侍臣侍女　はゝあ。

（數名の侍臣侍女取急いで　場。女王も侍女をひきつれて座を立つ。）

女王　ハリントン、また逢ふぞよ。

ハリントン　夫人の邸へ臨幸あそばすのでございますか。

女王　今生の願だといふ。行つてやらう。ポーリンはわたしにはなくてならない侍女だつた。三十年の間、何一つ意に逆つたことなく柔順でよく氣のついた愛らしい猫だつたよ。ハリントン、男のロバートと女のポーリンを失つたわたしの身を察しておくれ。色の褪せゆく秋の薔薇だよ。

ハリントン　申上げる言葉もございません。

（女王、ハリントン、上下の扉口より退場。奏樂隊、主教、騎士、尙も夢中で各々の仕事をつゞけてゐる。）

老侍從　（聲を高め）いつまで、つゞけてをられるのか。陛下は立たれましたぞ。

（一同、その聲に驚き、きよとんとして、中止する。）

老侍臣　（首をふり）陛下はお年を召された。

主教　エセックス伯より美しい殿御はおはさぬかな。

老侍從　いや、陛下はお年を召されたわ。

（若い騎士達、顏を見合はせてゐる。老侍從それを見て藹高かに笑ふ。）

## 第二景

第一景と同日の夕刻。

ノッチンガム伯夫人の病室。淸楚な裝飾。秋の落日が室內をほのかに明く染めてゐる。中央の寢臺に、ノッチンガム夫人、病苦にやつれた身を起してゐる。五十餘歲の老女。女王、その枕邊に、室內とそぐはない特に置かれた華麗な椅子に倚つてゐる。

人拂ひをした後で、室內では、たゞ二人切りで話をつづけてゐる。

夫人　（割にはつきりした音聲、但し時々咳き込みながら）陛下、此の際の御臨幸といひ、先ほどからの御情深いお言葉といひ、ほんとに、何といふ光榮でございませう。

女王　ポーリン、何も改つてお禮を云ふにア及ばないよ。わたしが來たことによつて、そなたが、より安らかに天國にゆけるなら、これにこしたことはない。

夫人　さやうでございます。全く、一目陛下にお目にかゝり、一言申上げなくては、到底天國にゆけなかつたのでございます。ありがたうございます。

女王　そんなことはないよ。三十年もそなたを散々に使つたその禮として、わたしは此處へ來なければならないのだよ。もう、そんなことを、くど〳〵云はずに大事な話をしたらいゝよ。長話は病氣に障るからね。人拂ひをしてまで、話したいといふことを手短かに話したらいゝよ。

夫人　御深切にありがたうございます。どうせ、もう、おつつけ天國へ參る身でございますもの、病に障るも障らないもございません。名殘りにゆつくりお話申上げませう。

女王　さう、あきらめるのは病氣の毒だよ。天國からお迎ひの來るまで、大事にして待つがいゝ。わたしは、もう一度、そなたが全快して、わたしの身のまはりを始末してくれることを心から望んでゐるのだよ。

夫人　陛下、そのことこそおあきらめ下さい。わたくしは、とてもおそばにおつかへ申すことはできません。よし、直つたにせよ、もうおつかへすることはできません。

女王　なぜ、そんな事をいふのだね。興奮しては病氣が惡

くなるばかりだ。それなら、私は歸つた方がいゝぢやないのかね。

夫人　（急に力強く）いえ、お歸しすることはできません。わたくしが一言申上げぬうちは、たとへ陛下でもお歸し致しません。

女王　そんなら、その話をしたらいゝだらう。氣を鎭めてね。

夫人　わたくしは興奮してゐると仰有るのでございますか、陛下、同性の人々は、激しい御氣性に耐へ兼ねて、一週間とおつかへ出來なかつた陛下のおそばに三十年の長い間おつかへ致して、あらゆる命令とあらゆる侮辱を、人間以上の忍耐を以て服從して參つたわたくしが、何で臨終の際だといつて興奮なぞ致しませう。そんな感情は、三十年前に忘れ果てゝしまつたポーリンでございます。

女王　何をしやべるのだね。それが、そもそも異常な興奮ぢやないか。熱で頭がうかされてゐる。

夫人　（嘲りを含んだ笑）三十年、心がけてきた、いえ、五年以來筋書をこらしてきた結末をつける唯今でございますもの、少しは心もしまつて參りますわ。でも、頭がうかされてゐると仰有るのでございますね。それア陛下御存じの通りのポーリンなら、さうなりさうな弱い柔順な女でございませう。けれど、ポーリン・ノッチンガムは、陛下の御想像よりは、ずつと強い、ねつい女でございますよ。晝日中、ロンドン市中で判逆を企てようとするやうな單純な腹の淺い吹けば飛ぶやうなあのエセックス伯とは、少し頭の構造が違つてゐる女でございますよ。

女王　病人と思つて聞いてゐると、何を云ふのだね、おまへはロバートに恨があるとでもいふのかね、ロバートは男だよ、美しい立派な男だよ。

夫人　そのロバートに何故陛下は御手を嚙まれたのでございます。

女王　手を嚙んだから、首を斬つてしまつたのぢやないか。

夫人　お言葉通り、思ひ切りよく、すつぱりお斷りになつたのでございましたかね。

女王　――

夫人　あの死刑執行の時間に、――指環は遂に來なかつた――から仰有つて失神なされたのは、確かエリザベス女王陛下だと記憶いたしますが――

女王　（興奮して）ポーリン、何をいふのか。

夫人　（愈々冷かに）陛下、イングランドと結婚遊してゐる陛下よ。興奮遊ばしますな。御病氣の毒でございます。――それから、五年の間、陛下は、心におひまのあらせ

られる度毎に絶えず、おなやみなさいましたね。――あの生命乞ひの指環の來なかつたことを、心から殘念に思召してをられましたね。おそばを片時もはなれぬポーリンは、ようく存じてをります。

女王　（ある幻覺におそはれて）おゝ、ロバート。わたしはそなたにむごかつた。けれど、そなたも、この五年の間、わたしのなやみつゞけた苦痛を察しておくれ。ロバート。生命乞ひの指環はどうしてしまつたのだ。

夫人　陛下、陛下はロバートにだけ、むごかつた、許してくれ、と仰有るのでございますか。ロバートの百倍も千倍もむごくあたられた人々――メリイ女王をはじめ、あらゆる同性の臣下どもに鬼のやうに冷酷にあたられた仕打はどうだつたと仰有るのでございますか。

女王　お前が、そんなことをいふ權利があるのかい。そんな資格があるのかい。

夫人　二人きりの此の室、死ぬ間際のわたくしでございます。そこに何の階級がございませう。資格や權利を正してゐる時ではございません。あらゆる同性と申しました。もつと、はつきり申上げませう。このポーリンには、どんな仕打をなさつていらしつたことでせう。髮をむしる。頭をうつ。足蹴にされる。女豚と罵られる。そして、朝から晩まで、どんな、ひどい扱ひをなさつていただいたでせう。三十年の長い間、ポーリンは一度だつて人間の扱ひを受けたことはございません。虐げられ、壓しつぶされ――それア、たまに可愛がつていたゞいたこともございます。けど、それは人間としてゞはなく、よく動きよくいひつけを守る猫としてね。わたしに較べると犬扱ひをされても、ロバートのふぬけの方が、どんなに幸せでしたでせう。だから、屆いたつもりの指環が屆かず斧で首をちよんぎられたのも犬相當の最期でございますよ。

女王　（激憤に聲も浮づつて）ポーリン、ロバートは指環をわたしに屆けたといふのか。

夫人　はい。どうせ意氣地なしのロバートでございますもの。愈々となつては、もう男のやうでもなく淚を流して指環をぬきとつて、生命乞ひをしたのでございますよ。ロバートは、それでも陛下がお許しないと思ひ込んで、心から陛下を恨み通して斷頭臺に上り、陛下は、また、ロバートの剛情を嘆き悲しんで指環の行方を待つていらしたのでございます。

女王　指環はどうしたのだ。

夫人　こゝにございますよ。（靜かに懷中から指環を取り出し、女王の手にさゝぐ）お懷かしいロバートの指環は、五年の間、こゝに保存されてをつたのでございます。

女王　おゝ、指環、懐しいロバートの指環。命の絶ゆるほど待ち焦れた指環。（間――急に我にかへつて）ポーリン、一體これはどうしたといふのか。

夫人　（冷かに、／＼も心地よげに笑ひ）ロバートは、ロンドン塔から使を馳せて、わたくしにこの指環を手渡し、陛下に生命乞ひを求めたのでございます。

女王　それを、お前は横取りしたのだね。

夫人　（愈々快活に笑ひ）　まあ、さうでございませうね。わたくしは別にロバートを殺してしまふ程、彼に恨もございませんでしたが、たゞ三十年の器械のやうな動物のやうな御奉公に酬いたさに、大事に今迄しまつておいたのでございます。

女王　ポーリン、何といふひどい女だ。

夫人　そのお言葉は聞き倦きてをります。まさか、わたくしが指環の邪魔をしたとは、今の今までお氣付きになりませんでしたらうね。（大笑）　五年間のもくろみが、きつぱり筋書通り參りました。

女王　（激しい怒りのうちにどもり／＼）死ね、毒婦め。よし、神はそちを許すとも、わたしは、決して、そちを許さんぞ。

（女王、殆ど失神狀態で、上手扉口の方に行きかゝる。）

夫人　皆さま、陛下のお歸りでございます。陛下、猶めの三十年間をひつくるめたお禮の指環でございますよ。（ヒステリカルな笑）御命令なさらずとも、直きに天國へ參ります。神さまは、そちらをお許し下さいますでせうね、ほゝゝゝ。

（女王、上手扉口から退場。夫人、その姿を見極めて、力ぬけて寢臺に横はる。夫人附の醫師、侍僕侍婢、入り來る。醫師、すぐに夫人の脈をしらべる。）

醫師　（驚愕して）　お、もう御最期が近い。長いお話が惡かつたなあ。

（女王の侍臣、あわてゝ入り來る。）

侍臣　陛下は唯今、御馬車に移られようとして、御失神されました。

（一同極度の驚愕。もう、すつかり夕闇が室を包んでゐる。夕の鐘が窓をふるはせて鳴りひゞいてくる。）

夫人　陛下も年召されての失神だ。ほゝゝゝ。（鐘に耳を澄し非常な努力で胸の上に兩手を組む）神さま、御惠により、ポーリンは幸福な一生の幕切れをつとめました。おさばきは、御意のまゝに――（息絶ゆ）

（夕の鐘、一同默然として祈禱。）

――幕――

# 西南擧兵錄（二幕三場）

## 第一幕

### 第一場

西鄕隆盛
村田新八
中島健彦
桐野利秋

明治十年二月二日午前。雪多き歲、空稍晴れて薄日かすかに洩る。

鹿兒島より數里離れし山間。日向山溫泉西鄕隆盛宿舍。簡素なる一室。正面に床、軸、置物、稍々下手寄りに一間の障子、廊下に通ず。上手に押込、下手に丸窓あり。

西鄕隆盛（五十三歲）木綿紺飛白の筒袖を着し、大胡坐をかきて碁盤を間に村田新八と對局す。村田も同樣の粗服をまとふ。兩人の間に大火鉢置かる。

村田、黑石をうつ。西鄕應じて白石をうたんとして、その手を引き、苦戰の體にて默考す。暫時無言。村田、顏を擧げ西鄕を見つむ。

村田　どうなされた。さあ、先生の番でごわす。

西鄕　（苦吟して）村田どん、さうせかずと、まあ待ちなはれ。

村田　いくらでもお待ち致す。たが、どぎや考へなされても、今度は先生の負でごわすぞ。

西鄕　なか〳〵――この一石が、死活を決する大事の一手ぢやよ。

村田　（盤面を指し）お言葉ながら、最早、こゝで大勢が極り申した。諦め時でごわすな。

西鄕　ふむ。（考へる――突然、石を盤面に投げ出し大笑）いや、立派な負けぢや。また足下の手に乘り申した。

村田　いつもの伏兵でごわす。先生を負かすには、この手に限りますな。かうさへゆけば、先生、きつと乘つて來られる。急所でごわすよ。乘らぬ工夫なはりませ。

西鄕　工夫――いや、毎度、工夫はこらしとる、そいでも、さう來ると必ずあゝ行きたい俺どんの癖でごわす。――天でごわせう。

（兩人相見て哄笑、廊下を强き足音迫り來る。村田、急にふりむく。障子に人影うつる。）

村田 （鋭く） 誰ぢや。

中島 中島でごわす。

（中島健彦、障子を開け入り來る。旅姿、眉宇に緊張の色漂ふ。一禮して火鉢に近寄る。）

中島 先生、お久しうごわす。お元氣の御様子、何よりでごわすな。村田どんなお變りごわせんか。

村田 先生も俺も此の通りの元氣ぢやよ。

西郷 村田どんな、今、俺を退治て、氣焔萬丈でごわすよ。

（中島の様子に注目し） 中島どん、何か急用でもごわすかな。この雪降りに大汗かいて――まあ、一風呂浴びて來たが可か。

中島 （膝を進め） 先生、火急の用事でごわす。鹿兒島な強か騒動でごわすぞ。

西郷 うむ、中原警部の一件ぢやろ。先日、小兵衛が大根占の獵場へ來てな。しきりに話しとつたが、あれア何かの誤解でごわすよ。いかに政府ぢやとて、俺どんを暗殺する――そぎやさもしい策な取る筈は無い。よう調べて見い。さう云うて歸した筈ぢやが――。

中島 はア、小兵衛どんなそぎや云はれるので、早速、中原以下十名の歸國警部を充分に取調べたでごわす。

村田 どぎや様子ぢやつた。

中島 先生の胸あまり正しすぎる。谷口の密告通りでござつたよ。村田どん、谷口藤太た私學校嫌ひでも、やはり眞の薩人でごわすな。

西郷 中島どん、だが、中原の大酔中にもらした話といふぢやごわへんか。とかく、酔中の壯語は宛になり申さんでな。

中島 俺どんとて、そぎやこと知つとります。だから、嚴しく調べたでごわす。彼奴等もしたゝかものでごわしてな、容易に實を吐かんぢやつたが、天運でごわしたな。中原の懐中から立派な證據物件があらはれ申した。

村田 （きつとして）なに、證據とな。

中島 さうでごわす。川路大警視から中原宛の電報でごわす。電文に曰く、シサツトゲテスグカヘレ、――こぎや誌されてごわした。こいが、先生暗殺せいとの意味で無うて何でごわせう。電文さしつけて、ぎうぎう訊問致したら、遂に事實を白狀な仕つた。先生、大久保どんな、とても昔の市藏どんぢやごわへん。

村田 （沈思） ふむ、さてな。――だが、こや川路どんの一存では無か。先生、どぎやお考へでごわす。

西郷 （事もなげに村田に向ひ） あんた大久保どんの人物は、よう知つてなはる筈ぢや。市藏どんな、そぎやこと

命令するやうな心事陋劣の人物で無か。

村田　お言葉でごわすが、俺にも一觀察なごわす。そや、大久保參議な高潔な人物でごわせう。だが、その高潔が、時には潔癖にすぎることがごわすでな。信ずる道に邁進する勇氣はごわせうが、識見未だし、偏狹の嫌ごわへんか、大體を大づかみに鵜呑みしてかゝる氣宇に乏しく、政策を行ふ上には、一々障害を切り拂はねば、進み切れぬ人でごわす。そいに目下、大久保どんは難局に迫つとる。木戸さんは信が置けん。先生はだまつて寢てござる。そいで、私學校は日に増し榮える。長州人は、そいにつけても、參議を手ぬるしと攻擊する。

中島　（激昂して）　ぢやから、大久保どんな、先生の存在が、氣にかゝるのでごわす。

西郷　村田どんの意見も一應尤もぢやが、いや、そぎやこと無か。市藏どんな俺の胸中はようわかつとる。論は論ぢや。たとひ反對の立場にあらうと、俺どんな昔の市藏どんと思ふとるし、市藏どんぢやとて、吉之助の昔から、俺の心事は、深く見ぬいてくれとる筈ぢや。

中島　先生は神樣ぢや。だが、大久保どんな俗人でごわす。（胸中から書類を差出す）　先生、こいを御覽下され。

（ふるへて西郷へ渡す）　政府の卑劣、明白でごわせう。

鹿兒島の人士、激昂するも無理はごわせん。

西郷　（書類を繰る、始めて驚く）　こや、警察用紙でごわすな。中原、野間口、園田、安樂、お、拇印も押してごわすな。

中島　立派な口供書でごわす。

村田　（沈痛な聲音で）　さうか、既に、そこまで事實が明白になり申したか。

（西郷、巨眼をひらいて、書類を默讀してゐる。村田のぞきこむやうに、きつと見守つてゐる。）

中島　そいばかりではごわせん。政府な愈々陋劣な手段を弄し、赤龍丸を廻して、磯の火藥を全部神戸へ持ち去らうと致してをります。こいぢや私學校の生徒ども、憤慨するも無理はごわせん。

村田　まづいことやりをるな、そいぢやまるで火に油をそそぐものといふぢや。

（俄かに荒々しき足音、障子がらり開けはなさる。旅裝の桐野利秋、ずか〳〵と入り來る。）

桐野　（激昂、せきこんで）　中島どん、どぎやなされた。馬の用意は、もう整へてきた。先生、鹿兒島なでかい騷ぎでごわすぞ。生徒連の激昂、猛烈なものでごわす。もはや、俺どんの手では、鎭め切れぬ。先生、どぎやなさ

れる。村田どん、政府な怪しからん所行致すな。

村田　うむ、今、中島どんから聞いてた。俺達まさかと思ふとつたこと、事實なので呆れてをる所ぢやよ。

桐野　先生、既に事こゝに至れば、俺どんの手では抑へ切れん。どぎやしても、先生の御出馬な仰がにやいかん。中島どん、御用意は未だか。

中島　いや、先生などぎやしても信じなさらん。ぢやに依つて、詳しう事件を說明中でごわすよ。

桐野　足下な悠長な男ぢやなあ。俺どんな、もう出發するばかりに、馬四頭用意致して參つた。村田どん、さあ、俺達とすぐ歸つてくれ。

村田　うむ、心得た。先生、こぎや狀態ではどうもならん。參りませう。

（西鄕、漸く書類から目をはなす。立騷ぐ一座をかるく手で抑へ。）

西鄕　中島どん、拜見致した。（書類な中島に渡す）こや、事實と認めにやいかんぢやらうな。

中島　正式の口供書でごわす。

桐野　そぎやこととうでも可か。生徒どもな最早、擧兵に決しとる。鎭めるもやるも、先生の裁斷一つでごわす。

西鄕　桐野どん、さうせきなはるな。（思案する）事實とすれば怪しからん事ぢや。西鄕の心事疑ふも程がある。俺は武村の吉やないか。（ふと氣付いて桐野中島な見つむ）足下等、警部連を拷問したぢやあるまいた。

桐野　（中島と顏な見合はせ）そや、少しは强か責め申した。だが、彼奴らとて、薩摩武士の端片でごわせう。痛か思ひしたとて、嘘な白狀致すまい。

中島　先生、ともかく、お歸り下され。おそうなつては、愈々大事でごわす。

西鄕　生徒達、なぜ、そぎや騷ぎをるかなう、俺のことは俺どんに委しておけばいゝに。

桐野　（涙ぐんで）先生、生徒等なそぎや吞氣に考へてをらん。先生の出來事な皆我事と考へるでごわすからな。

村田　若い者、先生を神樣と思つとります。

西鄕　（愛情こめて）うむ、若い者な可愛か。この吉を、そぎや思うてくれるか。

中島　ぢやから、先生のお姿見えんと、若い者ら泣きます。たよりないです。

西鄕　可か、村田どん、歸りませう。

村田　はア、ぢや、宿へも申して、早速、用意仕ります。

西鄕　生徒等、逸まつてくれねばいゝがな。若い者な將來の國家をになふ大事な身ぢやからなう。

（村田、立ち去る、西郷眼をつぶり沈思す。桐野、膝に兩手を置き激昂を抑へてゐる。中島、武者震ひして立ち上り、丸窓を開く。雪一陣室内に吹き入る。）

中島　ほう、えらい降りぢやなあ。

桐野　（凜然と立上り）此の雪を踏んで帝都に至り、堂々政府に詰問するんぢや。人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る。正義の前に敵なし、桐野利秋の腕は、まだまだ鈍らぬわい。ワハハハ。

（西郷、つと立つて、床の間の硯箱を持ち來り、懷紙にさら〳〵と書き記す。）

西郷　桐野どん、俺どんの所懷、如何でごわす。

（桐野、一禮して西郷から受取る。）

桐野　七言絶句でごわすな。（誦む、次第に高聲になり詩吟風に吟ずる）

白髮蒼顏非所意
壯心撫劍愧無勳
百千窮鬼吾何畏
脱出人間虎豹群

中島　（雪に首をうたれつゝ悲痛の聲で應ず）

百千窮鬼吾何畏
脱出人間虎豹群

先生、ごきや先生を暗殺せいといふ政府の奴ら、情けなうごわす。

（中島泣く。桐野、西郷を見つめたまゝ滂沱として涙を流す。村田入り來る。）

村田　先生、さあ仕度な出來申した。中島どん參らう。

西郷　（平靜に歸り立ち上る）こや、村田どん御苦勞ぢやつた。（桐野の肩をかるくたゝき）さあ、桐野どん、馬を飛ばして鹿兒島はやつと夕方ぢや、歸らうぢやごわへんか。

桐野　（西郷を見上げ）先生！

（桐野、中島、泣く。村田、桐野の前にある詩を取り上げ默讀す。）

西郷　（丸窓に近寄り）よう降りますなあ、こいぢや鹿兒島に歸るまでにや、大分積るでごわせうよ。

——一時、幕を引く——

## 第二場

肥後伊助　加治木郷士

お由　妻

お　園　嫁
順　吉　孫
西郷隆盛
桐野利秋
村田新八
中島健彦
兒玉十郎、伊丹丈平、外私學校生徒十數名

同日夕暮近く、雪しきりに降る

鹿兒島に程近き加治木郷街道筋、郷士肥後伊助の宅。舞臺、稍々上手寄りに農家の座敷らしき一室、正面襖、三方緣先、舞臺前面は庭、庭木、踏石積雪三四寸、庭を限りて下手よりに柴垣、柴折戶。下手寄りの奧に門口ある模樣。

花道、及び下手の垣外は鹿兒島に通ずる街道の心持。書割りに松並木など。

お由、室内の取り片附けに忙し。順吉、上手隅に小机を置き手習に夢中なり。お由「先生がござらつしやるのだ。坊はあつちへいつて遊んで來なはれ」と追ひ立つ。順吉十歲位、首をふつて「俺どんな先生を拜みたい」と云ひつゝ動かぬ。

伊助、六十餘、庭先に出て柴折戶を開きて、下手奧に向ひ聲をかく。

伊助　先生樣そいぢや、失禮でごわすが、どうぞ、緣先になと御休息下されませ。そのうちに馬も疲れが直りませうから。

西郷（出場せず聲のみ）ぢや、鳥渡の間、休息させて貰ひますか。

（西郷、桐野、村田、中島、いづれも旅姿にて雪を拂ひながら入り來る。伊助、緣先の座に招き、自身も下手緣先に腰かく。お由平伏して奧へ入る。順吉、筆をおきて、西郷を見つめ、再び手習ひをつゞける。）

西郷　こや、えらい御厄介でごわすな。

伊助　どう仕りまして、先生樣にお立寄り願へたのは、伊助末代までもの自慢でごわす。たゞ、むさ苦しうごわすで、――

西郷　そぎやことごわへん。おかげて、馬も人も大助かりでごわすよ。

伊助　折り惡しく、えらい雪降りでごわしてな。

西郷　なに、ふだんなら、鹿兒島まで一息に飛ばすのでごわすがな。ちと急かせたもんで、そいに俺どんなこぎやな大兵でごわせう。馬も鹿兒島までおや乘りつぶされますわい、ワハヽヽ。なう、村田どん。

（此の會話のうち、桐野、村田、中島、聲をひそめて談合中なりしが、呼ばれて村田、面を擧ぐ。）

村田　（微笑を含み）全く、先生にや馬な禁物でごわすな。馬もたまらず、先生もたまらず、例の所、すれましたらう。

西郷　足下察しの可か仁ぢや。少々痛み申すで。

桐野　先生た餘分なもんごわすからな。（一同哄笑、お由、お園、茶とつまみものを持ち來る。）

西郷　お構ひ下されるな。

伊助　濃茶でごわして、恐れ入ります。お園や。馬は大丈夫かの。

お園　はい。向うの厩へつないでおきました。ひどい疲れなやうでございます。飼葉をどつさりやつておきましたから。

村田　こや、何から何まで、えらい御迷惑でごわす。

伊助　時に、桐野さま、鹿兒島なえらい騒動との噂でごわすが、どぎやなるもんでごわせうな。

桐野　どぎやなり申すか、とんと見當なつき申さん。ただ、先生のお力を待つばかりでごわすよ。

中島　街道筋などでも、大分八釜しか風聞でごわすな。何も彼も政府の猿知慧の招く所でごわすよ。

伊助　この邊も、今朝から大騒ぎでごわす。大久保どん始め政府の奴ら、どぎや考でごわせう。尊い先生様を暗殺せいなど申してな。こちらの百姓どもでさへ、先生を眞先きに立て、帝都へ繰り込み、今の政府を一つぶしにつぶせといきまいてをります。

桐野　愈々となつたら、さうでもせにやならぬでごわせう。

中島　うむ、さういへば、此方の喜平どんな熊本鎭臺にごわすな、御達者かな。

伊助　はア、おかげさまで丈夫に暮してをりますが、もし、さうなつたら、早速呼びかへして、お供にさせていたゞきます。

西郷　（嚴然と）伊助どん。他の事は可か。おやが俺、そいばかりはいかん。俺どんな決して政府にや楯突く考はごわへん。靜かに話せば互にわかることでごわす。然し、もし、私學校の者ども連れてゆく場合がごわせうとも、あんた、御子息を呼び返へすやうな不心得しちやならん。鎭臺の兵は、恐れ多くも、お上の軍隊でごわすぞ。

伊助　はア、そいは心得てをります。

お由　でも、今朝からの噂を聞いて、あれ、あの孫めまで、先生のお供致すとりきんでをります。

西郷　（順吉の方を向く）おう、可愛かお子ぢや、何と云はつしやる。
順吉　――
お園　順吉と申します。
西郷　順吉どんか、これ、何歳でごわすな。
順吉　（筆を止め、面を擧げて）十でごわす。
西郷　うむ、よう、勉強さつしやるな。
お由　私學校へ上ると云うて、字ばかり習うてをります。
西郷　ほゝう、感心ぢやな。
（西郷、順吉の机の前にゐざり寄る。）
西郷　どれ／＼、俺にも見せなはれ、うむ、なか／＼可かできぢや。
（順吉、面伏せになり、尙も字を習ふ。）
西郷　さう／＼、手習ひはようせにやいかん。人間な字を知らぬと馬鹿でごわす。ヤツ、そやいかん。そこなはねるとこぢやごわへん、いや、止めちや尙ほいかん、どれ、かして見なはれ。（筆をとつて直す）こぎや引くのぢや、そうれ、こいで字の形が出來申した。
順吉　（草紙をお園に見せ）かゝさま、こや、先生、こぎや直して下はつた。
伊助　（涙ぐみて）先生樣、ありがたうござります。恐れ入ります。

お由　（泣きながら）順吉、えらうならんといかんぞ。忘れちやなりませんぞ。
お園　――（嬉し涙に無言で兩手をつく）
西郷　おう、可か／＼。（その紙を村田に示し）村田どん、どうでごわす。
村田　おう、順吉どんた、なか／＼字な巧うごわすな。えらうなるんぢやぞ。
中島　（感激して）先生、俺どんまで、うれしうごわす。
桐野　（ふと揚幕の方を見つめ）村田どん、ありや、私學校の連中ぢやないか。
村田　（伸び上る）ほう、雪を蹴立てゝ來をるな。大變な勢でごわすな。
中島　（柴折戸に近く進んで）さうでごわす、血相變へて來よる。
西郷　また、騒いでるのか。
（此の時、揚幕から花道傳ひに十數名の私學校生徒、小銃、手槍を持ち、稽古着に大刀たばさみ、袴のもゝだち高く取り、白鉢卷の武裝姿で、ひた走りに走りきたる。桐野、決然として、柴折戸を開け飛び出す。中島、つゞく。西郷、村田、庭に突立つ。伊助一家ぎやうてんしてゐる。）
桐野　（大聲を擧げ）足下等、どこへ行きなはる。

（その聲に、一同、花道に立ちすくむ。その内の主立ちたる者、兒玉十郎、伊丹丈平進み出て、一同を止める。）

兒玉　諸君、桐野先生でごわすぞ。

伊丹　桐野先生、俺達な、西郷先生をお迎へに日向山まで參る所でごわす。

桐野　さうか、そいにや及ばん、（庭を指す）先生な、此處にお出でぢや。

（一同、伸び上り庭内を見る。西郷の姿を認め、兒玉伊丹、急に走り來り、桐野中島とともに庭内に入る。兒玉、伊丹、西郷の前にばた／＼と平伏す。他の十數名、これと同時に、庭外にひざまづく。）

兒玉　先生、お懷かしうごわす。

伊丹　御壯健の體を拜し、何よりでごわす。

西郷　おう、足下達、わざ／＼俺どんの迎にか、御苦勞でごわしたな。ぢやが、足下等の扮裝な何と致したものぢや。

兒玉　（昂奮して）戰爭起すといふことでごわすからな。

西郷　（きつとして）戰爭起す、ふむ、そや、誰が誰にぢや。

（兒玉、伊丹默す。村田、默然として考へてゐる。）

（伊助一家、おづ／＼と見守る。桐野、中島、不安氣に進みでる。）

桐野　政府な何かいたづら致したか。

中島　鹿兒島な變事でもごわしたか。

兒玉　別に變事も無か。たゞ、磯の火藥な奪ひ取りました。

桐野　（愕然として）やつ、火藥な奪ひ取つたとな、いつぢや。

伊丹　今朝方でごわした。

兒玉　菅野少佐始め抵抗もよう出來んで、ほう／＼の體で逃げ申したわ。

中島　火藥などれほど奪ひ取つた。

生徒等一同　全部でごわすよ。

（西郷以下四人、はつと眼を見合はす。）

桐野　（愈々せきこんで）火藥な奪ひ取つた後などぎや致した。

伊丹　（不審氣に）どぎや致したとて——

桐野　火をつけなんだのか。

兒玉　火藥な奪ひ取れば、それで可か思うて火なつけません。

桐野　何にイ火つけんと、そや、失策た。

伊丹　なぜな。

桐野　（舌うちして）ぢやから、足下等に委かせられんと

いふのぢや、火藥庫なそのまゝにして、中味だけ奪ひ取つたでは何とも始末つかんぢやないか。
中島　そいに、菅野さんやて、毆られてそのまゝではよう濟まぬ。こや、政府に早いこと尻尾握られたわい。
兒玉　（恐縮し）俺どんらの誤りでごわす、御免下はれ。
一同　御免下さりませ。
桐野　可か可か。今になつたら、どもならん。先生、こや一大事でごわす。俺どんな一足先きに參りませう。
中島　俺もゆく。すぐに鹿兒島に着き、生徒ら、騷ぎたてんやうせにやいかん。
西郷　（諦然として）うむ、さうしてくれ。
村田　桐野どん、馬は大丈夫かな。
お園　もう、大分疲れも直つたかと存じますが。
桐野　あの馬ぢや、急ぎの用にやたつまい。なあに、可か。どこかで借り申さう。
伊助　（進み出て）桐野さま、藤井どんの廐には逸物が三頭もごわす。俺どん借りて參りませう。
中島　（さへぎり）そいにや及ばん。藤井どんいうたら、藥師の隣でごわせう。
お由　はア。
中島　そいなら、俺どん、よう知つとる。桐野どん、俺が交渉する。
桐野　可か、たのむぞ。そいぢや、先生、村田どん、一足、先きに參る。
中島　（兒玉等に向ひ）足下等、先生のお伴して歸るが可か。伊助どん、御厄介でごわした。
伊助　藤井でごわすぞ。氣を付けていかつしやりませ。
（桐野、中島、西郷に一禮して立ち出づる。生徒等、道を開く。兩人、揚幕をさして、一散に走り出す。雪愈々降りしきる。西郷以下一同、兩人の後姿をぢつと見送る。廐に馬のいなゝき。ねぐら急ぐ鴉聲しきりなり。）
順吉　（緣に伸び上り）桐野どんな勇しか。俺どんもあぎやならう。
お園　（制す）これ！
西郷　（さびしき笑）ほう、順吉どんにも勇しう見ゆるか。可かお子ぢやなあ。
兒玉　先生、俺達の失策でえらいことになり申した。
伊丹以下一同　相濟まぬ儀でごわす。
西郷　（かるく）濟んだことぢや。可か、可か。
（雪空に暮鐘遠く聞え來る。）
村田　（諦然として）先生、意外の大事になり申したたな。
西郷　あ。
村田　こや、とても無事には治まらぬでごわせう。どぎや

なさるお考でごわす。

西郷（凜然として）村田どん、何事も、天でごわすよ。ハ、、、、。

（一同粛然として、西郷の面容を見上ぐ。歔欷するものあり。遠寺の鐘、雪更に激し。）

——幕——

## 第二幕

西郷隆盛
桐野利秋
篠原國幹
村田新八
別府普介
大山綱良
西郷小兵衛
邊見十郎太
河野主一郎

明治十年二月七日、薄曇りの午後。

私學校會議室。正面、足高障子かたく閉ざさる。左右壁。左手奥、一間の襖、人物の出入口なり。正面、上に「敬天愛民」と大書せる西郷の額をかゝぐ。土間、西郷を中心に桐野、篠原、村田、別府、西郷小兵衛、粗末なる圓卓を圍みて、會議中。室內、他に裝飾なし。西郷陸軍大將の正服。篠原、陸軍少將の正服、他は思ひ思ひの和裝にて椅子に腰掛く。

桐野（屹然として立ち）最早、議論なごわすまい。陸軍大將西郷隆盛、政府に尋問の廉ありて上京す。こぎや公言して、帝都へ上るに、何の顧慮する餘地がごわせう。

西郷（落着き拂ひ）そや、俺一人、そぎや云うて行く上には、差支へあらう筈なごわへん。おやが、大兵を引きつれてはな。

篠原　そいぢや、先生な、まだ、政府の陋劣な心事に信を置かるゝのでごわすか。

西郷　なぜな、そや俺どんぢやて呆れ申しとる。

篠原　先生すら、呆れてなはる政府でごわす。お一人で行かれたら、どぎやことになるも知れん。そいが危險でのう。

西郷　なに、俺どんな、どぎやなつても可か。誠意を以て胸中を吐露致したら、市藏どんのこつちや、合點ゆくぢやろ。

別府　大久保どんにや、お逢ひなられんぢやろ。そいまで

に、どぎやいたづらやるか知らん。何せ、先生な暗殺せいと命令する政府でごわすからな。

西郷　一身を捧げた身ぢや。心中何らやましいこと無か。俺の身體などぎやなつても構ふことごわへん。

桐野　先生な、そいでよからう。後に殘つた俺どんら、どぎやなり申すか。

篠原　一萬の子弟、疑を受けた身を、誰がよう雪ぎ得ますか。俺どんら、微力でごわして、此の大任に堪へ申さぬ。

別府　そいに、火藥庫事件もごわす、政府の眼な愈々私學校黨に嚴しうごわす。

桐野　（慨然として）　先生、先生の御一身に萬一の事があつて、一萬の子弟、安閑として生をむさぼると思召すか。

篠原　たとへ、生をむさぼらうと、先生大事の後、私學校一同の運命などぎやなり申さう。先生な俺達の神でごわすぞ。

西郷　（沈思暫時）　さうか。よう合點參つた。川村どんと談合の結果に依り、俺も決心な致さう。

村田　（靜かに）　そや、尤もでごわす。川村どんな先生竹馬の友でごわす。大久保どんとも心を許した間柄ぢや。何か、もたらしたものもごわせう。

別府　（憤然として）　ぢやが、川村どんとて政府の者ぢや。高雄艦を引き連れて來たからには、安心出來ん。

西郷　別府どん、川村純義な誠心誠意な人物ぢやよ。小策を弄する男ぢやごわへん。

篠原　そいも、よか御分別ぢや。ぢやが、迎の大山どん、どぎやされたでごわせう。

桐野　先生、ぢやが、機先な制せられん方よろしうごわすぞ。

西郷　うむ、俺どんな無策無略ぢや。たゞ誠心を以てあたるばかりぢや。そいが、通ぜんとなれア天でごわすよ。

（この時、縣令大山綱良、紋服に袴をつけ、悠然として入り來る。）

小兵衛　（早くもそれを認め）　やあ、大山どん、歸りなはつたか。

村田　先生なお待ち兼ねでごわす。

桐野　川村どん、どぎや申してる、私學校へ訪ねると云はしやつたか。

大山　先生、おそうなつて申譯ごわへん。川村どんな、しきりと先生に御面會を望んでをられる。

別府　遠慮な要らんこつちや、來られたら可か。

大山　ぢやが、川村どんな、こぎや云うてござる。俺どん

も責任ある身ぢや。身輕るに船を飛び出すわけにもなるまいてのう。そいに、私學校の連中に警戒もしてをらるるやうでごわしたよ。

西鄕　そや、川村どんも無理が無か。政府の命で來た身體ぢやからな。また、若い者もなか〳〵、逸り切つてをるからな。

桐野　さうでごわす。政府の者といふと、仇敵の如く思うてますからな。

大山　そいで、甚だ相濟まんが、先生に是非逢ひたう思ふから、艦に來て貰はれんもんぢやろか。と川村どん、しきりに云はしやるが、先生、どぎやなされますな。

西鄕　（暫く考へ、からりと）あゝ、よろしうごわせう。俺どんも、是非逢うてとくと話したか思ふとつたのぢやから。こや行つて見ようか。

（西鄕、氣輕に立ち上る。篠原、急に止む。）

篠原　先生、行きなはろもよろしうごわせう。ぢやが、艦に乘られると、ひよいとすると神戸まで連れてゆかれるが、先生、行きなはるお覺悟でごわすか。

村田　先生、そや、お考へなはる方可か。川村どんと神戸まで行かれると、さつきからの懸念が實現されるかも知れん。

西鄕　ふうむ。

小兵衞　川村どんな、どぎや考で來られたか、お逢ひなさらんと不明でごわす。

別府　そいに、もし、政府一流の卑劣な命を受けて來ないとも限らんでな。

篠原　先生、どぎやなさる。あの艦な、直ぐに神戸へ走るでごわせう。

桐野　そぎやことになつたら、一萬の子弟、生きてはをらん。先生、自身、ゆかれるにも當るまい。誰か、代人を遣はし、一應用件を確めたが可か。

村田　桐野どん、可か所氣附かれた。そいに依つて、先生、お逢ひなはるが萬全の策でごわせう。

西鄕　うむ、そいぢや、そぎや致さう。

大山　なるほどな、こや、上策やごわすが、誰が適任でごわすかな。

篠原　さてな、俺どんたちぢや、かへつて仰々しいでな。

西鄕　（やゝ考へて）可い仁がある。邊見と河野を呼びなはれ。

村田　そや、適任でごわせう。邊見どんの勇、河野どんの才略、相俟つて頗る可か。

小兵衞　丁度、二人とも控室で談議中でごわす。すぐ、呼

んで參りませう。

（小兵衞退場、一同、一時沈默、すぐに小兵衞、邊見十郎太、河野主一郎を伴ひて出場。）

邊見　御用でごわすか。

西鄕　うむ、足下等二人で、高雄艦へゆくのぢや。

河野　（審し氣に）高雄艦へでごわすか。どぎや使者に、でごわす。

西鄕　川村純義どんが乘つてござる。俺どんの代りに逢ふて貰ひたい。

大山　（引き取つて）川村どんなわざ／＼先生に逢ひたうてござつたのぢや。先生も逢ひたか思うてござる。

篠原　ぢやが、先生な、まさか艦にもゆかれない。というて、川村どんも、私學校の若い者を恐れてござる。そいでな、足下達、川村どんに逢ひ、よう話して、充分警戒の上、こゝへ案内してきて貰ひたいのぢやが、どうぢやな。

邊見　ようごわせう。すぐ參ると致す。

河野　（やゝ考へ）はア、畏りました。そや必ず、說伏して上陸させませう。

西鄕　たのむぞ。

（邊見、河野一禮して立ち去らすとする。突然、小兵衞立ち上る。）

小兵衞　邊見どん、鳥渡、待ちなはれ。（改めて西鄕に向ひ）俺どんも行きたかごわすが、許して下はらんか。

西鄕　（情をこめて）おう、足下もか。

小兵衞　はア、川村どんに逢ひたうなり申した。

西鄕　うむ、可か、可か。足下な、川村どんとは深い馴染ぢや。足下、行きなはつたら、川村どんも、さぞ、喜ばれることぢやらう。可か。行きなはれ。逢うたら、俺どんも、久しぶりぢやで、是非逢ひたいと、よう云うて下はれ、な。

小兵衞　（自ら期する所あり氣に）はア、うれしうごわす。よう申しませう。

（小兵衞等三人立ち去る。西鄕、その後姿を見送り、涙ぐむ。）

西鄕　川村どんな、小兵衞の師匠ぢや。懐しう思ふぢやらうな。大山どん、上陸されるだらうな。

大山　あの三人で行けば、大丈夫でごわせう。

西鄕　川村どんな來てくれゝば、事は穩便にまとまるがな。

別府　暗殺の件でごわすか。

西鄕　うむ、川村どんな、話のわかる人物ぢや。政府と俺

どんの間に立つて、實直な使をしてくれる仁ぢや。川村どんを通じての話なら、大久保どんも萬事氷解してくれよう。

桐野　先生、そぎや弱い音吹かんでも可か。

西郷　桐野どん、考へて見なはれ、一萬の子弟を引きつれて上京する。途中には鎭臺がいくつもごわす。幹部な衝突せんでも、若い者ら、どこかで必ず衝突致す。そこ、思うて下はれ。血氣に逸る者どもぢや、必ず血を流して爭ふでごわせう。俺どんな、そいが忍び切れん。たとひ、十人か二十人でも、若い者をむだに殺したら、俺どん、どぎや面して父兄に見え申さう。そいに俺どんみたいな老骨と違うて、若い者な國の寶でごわす。國の寶を失ふことは、西郷、一番辛うごわす。

桐野　御尤もでごわす。が、俺どんな、先生を失ふこと、何より、辛か事でごわす。若い者も國の寶でごわせうが、先生な、再び得難い寶でごわす。俺達の命でごわす。神でごわす。

西郷　桐野どん、西郷を泣かせんで下はれ。

（一座、寂として音なし。急に足音鋭く聞え、襖開けはなされ、邊見、河野、小兵衞、ひきつゞき、急ぎ入り來る。）

篠原　えらう、早か。どぎやなされた。

邊見　殘念でごわす。一歩おくれ申した。

村田　えつ、なぜな。

河野　（慨然として）高雄艦な錨をぬいて、沖合に走り出しましたわい。

大山　（不審顔に）そぎやこと無か。川村どんとの約束では、必ず待つとる筈ぢやつたがなあ。

小兵衞　（舌打して）ところが形勢益々惡化でごわす。私學校の連中な、また失策な致しをつた。高雄艦な政府の艦でごわせう。そいぢやに依つて、若い者ら、頭から敵艦と見なしたのでごわす。

村田　またか。

河野　そいで、小舟で乘り出し、高雄艦に乘り込まうと致したといふことでごわす。しかも武器など、たづさへて、舷側に近寄り惡口雜言な申したので、川村どんも、止まつては、反つて事件を引起すと思はしやつたのでごわせう。俺どんら、濱に參つた時は、既に、黑い煙あげて、島影に向ひ、走り去つた後でごわした。

篠原　うむ、逸り切つとるからな。

別府　先生のお待ち兼ねの川村どんぢや。いくら若い者ぢやとてあまり分別が無か。邊見どん、日頃の拳骨、くら

はしてくれアいゝに。

邊見（豪然として）そいにや、及ばぬ。早速五六人、たばにして、痛かとこ、くらはして參つた。

西郷（沈痛笑をもらし）邊見どん、可か、可か。若い者の罪ぢやごわへん。西郷の足らん所ぢやよ。――川村どんも、たうとう去なれたか。

村田（さびしく）先生、御胸中なお察し致す。

西郷　うむ、（小兵衛を愛らしげに見つめ）小兵衛、足下も懷しい川村どんに逢へなかつたのう。

小兵衛　萬事、終れりでごわす。

大山（不安氣に）先生、かうなつたからには、どぎや行動取りなはる。

西郷（沈思）うゝむ。

篠原（決然として）川村どんも、私學校の連中な容易ならんと思うて歸らしやつたでごわせうな。

桐野（激昂して）愈々大事でごわす。政府の眼な、强か光り申さう。

村田　うむ、もう、いかん。上策は永久に去り申した。かくなつては、默すも途絶え、進んで途開けず、こや、決行するに若かずでごわすた。

篠原　川村どんな手を束ねて歸られた。そぎや聞かしやつたら、鋭い大久保どんのことぢや。最後の手段な取られるでごわそう。

別府　敵な最後の手段を取り申す。こちらも最後の手段でごわすな。

桐野（奮然として）動かずとも、先生の大事になり申す。

村田　一萬の子弟も同樣でごわす。

桐野（昂然と）動くのでごわす。進むのでごわす。政府問罪の大旆をさゝげて、帝都さして繰り出すのみでごわす。

小兵衛　戰機來る。何ぞ畏れんやぢや。

篠原（立ち上り）先生、止むなき仕儀でごわす。國家のため、一萬の子弟のためでごわす。一時の汚名、お忍び下はれ。

西郷（決然として）可か。國家のためぢや。また、こぎや老骨のため、身を棄てゝくれる一萬の子弟の情誼には叛けん。快く、出發致さう。

桐野（欣舞して）先生、御決心なつき申したな。さあ、進むのぢや。陸軍大將西郷隆盛政府に尋問の廉ありぢやよ。先生の背後には一萬の薩摩隼人控ゆ。天下何ものか畏れんだ。ワハヽヽヽ。

篠原　ぢやが、方法も考へにやならん。

小兵衛　そや充分許り申さう。
村田　先生な、どぎやお考へでごわす。
西郷　（きつぱり）殘骸を投げうつた俺どんでごわす。すべて、あんた方の裁量にお委せいたすよ。
篠原　よろしうごわす。先生の御心中な承知致してごわす。早速、相談に移り申さう。
邊見　腕が鳴り申すわ。鎭臺の百姓兵どもに一泡食はすも近日でごわすな。
河野　帝都（みやこ）の花は、丁度、俺達を迎へるでごわせう。
別府　上野の戰が思ひ出される。別府晋介の腕な、まだ冴えとるからな。
篠原　桐野どん、よか考ごわへんか。
桐野　人觸るれば人を斬り、馬觸るれば馬を斬る。正義の前に敵なしでごわすよ。
小兵衛　篠原どん、先づ、九州な大事でごわすな。村田どん、そや、ごわへんか。
村田　ふむ、要するに丈夫玉碎の意義でごわす。
邊見　（凛然として）丈夫玉碎、よか言でごわすなあ。（ぎらり劍をぬいてうちふる）
西郷　（悠然として）丈夫玉碎か。村田どん、すべては、やはり、天でごわすな。ワハ、、、。

（一同、それにひかれて哄笑。邊見、劍をかざして抃舞す。）

——幕——

（大正十五年十月）

# 鬚（一幕）

**人物**

ジヤン　靴工

メリイ　その妻

近所の女　六七名

**時**

英國エリザベス女王時代

**場所**

ロンドン場末の地下室

むさ苦しい地下室。右手は、ジヤンの仕事場になつてゐて、粗末な椅子、仕事机があり、その上に、槌、なめし皮、造りかけの靴、靴型、釘箱、などの道具、雜然と置かれてある。中央には圓卓、椅子二三。その他、さゝやかな家財道具、すべて此の室内に取り亂して置いてある。左手には貧弱な衣裳簞笥、その側の懸け釘に、此の室の空氣に、そぐはない小綺麗な婦人服が懸けてある。正面、稍々右寄りの壁をくりぬいて、半圓の窓がつけてあり、その外側は鐵柵をへだてゝ、街路面になつてゐる。正面、左隅に扉。

幕あく。――メリイ、獨り、ジヤンの仕事机で、出來上つた靴をみがきながら、いら〳〵してゐる。粗末な服裝だが、若くて、きび〳〵してゐる。

初秋の午後、西日が半圓の窓からさしこんで、室内を明く染めてゐる。

メリイ　チエツ、じれつたい。（みがいてた靴を、じやけんに抛りだす）あたしばかり、せつせ働いたつてさ。肝心のジヤンは、どこをぶらついてるんだか、わかりあしないわ。スミスさんとこに屆け物するのに、三時間もかゝるなんて……きつと、どつかへ、引かゝつてるんだわ。また、鬚の手入れなんかしてさ。（くるり、後をむいて、半圓の窓から、外をのぞく）ほら、もう、西日がさしこんで來たわ。まあ、ひとの氣も知らないで、どうしたつてんだらう。（路上を男女數名通る。窓からは、裾から下だけしか見えない）あら、綺麗なスカートだこと、まあ、華奢な靴ねえ。ジヤンにも、あんなの、できるかしら。おや、あの人の靴つたら、底がはなれて、ぱく〳〵いつてるわ。ジヤンが、居たら、呼びこんで、直してやるんだが、ほんとにじれつたいわ。（男の靴、また、窓外に見える）あ、ジヤンだわ。まあ、あのゐばつた歩きつぷり、ほほほ、ひとを待ち呆けさしたくせに、いゝわ、ど

んな顔するか、ひとつ、かくれてやらう。（メリイ、仕事机の下にもぐりこむ）

（ジヤン、登場。二十五六、メリイに準じた粗末な服裝だが、鼻下と頤に、素晴らしい美髭をたくはへてゐる。一杯機嫌で意氣揚々として、入つて來る。）

ジヤン　おうい。御主人さまのお歸りだぞ。いやさ、髭のジヤンさまの御歸館だぞ。ハハヽヽ。俺の歸りがおそいので、奥方には、お冠りを曲げて、お出掛けか。（よろめきながら、中央の椅子に腰を下し、悠然と髭をひねる）まあ、いゝさ。いくら怒つてゐても、今日の話を聞かせたら、きやつ／＼いつて喜ぶだらう。

（メリイ、仕事机の下から飛び出て、いきなりジヤンの襟元をつかむ。）

メリイ　このひとつたら、なにが、今日の話さ。何が、スミスさんへお屆け物なのよ。ひとの氣も知らないで、ごらんなさい。もう、あんなに日もかげつたぢやないの。今日の日も暮れつちまふわ。あなたは、もう、メリイなんか、どうでもいゝのね。あたしなんか、どうなつたつてかまやしないんだわね。

ジヤン　おい、さう、がみ／＼どなるなよ、耳ががん／＼するぢやないか。そりあさうと、メリイ。今日はね。今日こそは……

メリイ　また、今日こそ？　あなたつたら、いつも、今日こそ、今日こそつてさ。今日こそ、メリイは聞きませんよ。

ジヤン　（髭をひねりながら）聞かない？　あとで、聞きたがつたつて、教へないよ。おい、メリイ。一體、俺は、なにゝなつたと思ふ。

メリイ　知つてますよ。そんなこと。

ジヤン　（且つ驚き、且つ得意になつて）ほほう、もう知つてるのか。はてな。あゝ、フリッツの奴が、來て教へたんだね。

メリイ　フリッツなんか來やしないわよ。

ジヤン　ぢや、どうして知つてるんだ。俺はなにになつたと思ふんだい。

メリイ　知らなくつてさ。あなたはね、あたしのジヤンはね、メリイが嫌ひになつて、仕事もいやになつて、お酒を呑んでへゞれけになつたのよ。

ジヤン　と、とんでもない。そんな——そんなふざけた話ぢやないんだよ。俺は、どえらい出世をするんだ。もう、こんな穴倉なんか、おさらばだ。まあ、おちついて、お聞きよ。（メリイに椅子を與へる。メリイ、わざと、自墮落にこしかけるが、稍々眞面目に話を聽かうとする。）

メリイ　あなたが、出世するつて、まあ、どんなこと？

スミスさんが資本でも出してくれるの。それとも、親方が店でも、ゆづつてくれるつていふの。

ジヤン　それ位の出世でたまるものか。メリイ、俺は明日から、ぼろ靴の底なんか、こつ〳〵たゝきあしないよ。あの仕事机もたゝき賣つてしまふんだ。

メリイ　えつ、ぢや、商賣を止しちやふの。

ジヤン　あたりまへさ。いつまで、皮くさくなつて居られるかい。（得意になつて鬚をひねり、メリイの顔をのぞき込みながら）どうだい。嬉しいだらう。

メリイ　なんだか、さつぱり譯が、わかりあしない。

ジヤン　さうだらうよ。俺だつて、今の今迄夢にも思はなかつたことだからな。あまり、幸ひが、だしぬけにやつてきたんで、俺も有頂天になつてさ。お前にや、悪いと思つたけど、前祝つてわけで、角の酒場で、一杯ひつかけてきたのさ。

メリイ　じれつたいね。どうしたつてのさ。さつさと、しやべつたらいゝぢやないか。

ジヤン　しやべるなつたつて、しやべらずにをれるかい。かうつと、さつき、俺アスミスのとこへいつたらう、で、あいつに靴を屆けて、ぶら〳〵、歸つてくると、曲角のとこでおい〳〵つて、呼ぶ奴があるんだよ。ひよいと、向うを見ると、鬚君、鬚君つていふぢやないか。俺も自慢の鬚だが、鬚君て呼ばれたのは、始めてだね。

メリイ　誰なの、いつたい、そんなこといつたのは。

ジヤン　それがさ、お前、金ぴかの宮内官なんだ。

メリイ　宮内官？

ジヤン　（鷹揚に）さうよ。俺も驚いたね。で、宮内官の話は、かうなんだ。このごろ女王さまは、お馬車の御者を探してゐらつしやる。ところが、なにがさて、あの、派手好きの女王さまのことだ。なんでも、この國中で、づぬけて立派な美しい男ばかりを、そろへたい。――と、かう、おつしやるんだ。それで、宮内官先生、毎日、毎日、ロンドン中を、見付けて歩いてるんだが、さて、なかなか、お馬車の御者になつてもはづかしくない立派な男は見付からない――探しあぐんでるところへ、俺が、――この鬚のジヤンさまが、ぼつたり、お目にかゝつたといふものさ。

メリイ　へーい。それで、あなたが、その、御者になつても、はづかしくない立派な男なの。

ジヤン　ふざけるない。メリイ。あたりまへぢやないか。當節の立派な男――美男子の表看板は、この鬚ぢやないか。見ろ、おまへにや、しよつちう、鬚ばつかりいぢくつて、ろく〳〵仕事もしやしない。と、ぽん〳〵云はれてをつたが、日頃、念入りに手入れしてたおかげにア、

お見出しにあづかつて、明日からは、女王さまの御者さまだ。へん、穴倉住居も、今晩ばかり。メリイ、なんて、素晴らしい出世ぢやないか。おまへのいやがつてた此の髪も、こんな出世のてづるになるとは、思はなかつたらう。え、おまへ、なぜ、浮かぬ顔をしてるんだい。俺の出世が、氣に入らぬ譯もあるまいがな。

メリイ　(眞面目になつて、ジヤンを見つめ)　ジヤン、あなたは、ほんとうに御者になるの。いえ、眞面目で、髪にたよつて、出世するつもりなんですか。

ジヤン　(相變らずいゝ氣で)　なぜさ、だれが冗談なんかいふものか。もつとも、あんまり、思ひがけない話だから、さう思ふのも、もつともだが、……そりあさうと、メリイ、おまへにあ、たいへん、氣の毒だが、善は急げつて、こともある。また、おまへにしてみても、亭主の出世するのは、まんざら惡くもないだらう。いやでもあらうが、一つ、金をつくつてくれないか。

メリイ　(冷然と)　お金？　なぜさ。

ジヤン　だつて、新しく御者になる仲間が、三四人、あした、一所に、御殿へ呼ばれるんだ。いづれ劣らぬ立派な髪の持主がよ。それに、女王さまの御者つていふ、派手商賣だ。そりあ、愈々御者になりあ、金ぴかの着物も下さるが、明日の初御目見得に、これぢやなんぼなんでも氣が引けらあね。さうだらう、伊達男の そろつてる所へ、このだぶ〳〵服ぢや、いくら髪だけ立派でも、最初から、馬鹿にされてしまふよ。だから、一つ、服裝だけあ、一通り、そろへて行かうと、思ふんだがねえ。

メリイ　(取り合はず)　ふん。そんなら買へばいゝわ。

ジヤン　買へばいゝたつて、メリイ、その金がある位ならたのまないよ。なに、その靴屋の道具たつて、明日から要らないのだから、賣拂つてしまふけれど、これだけぢや、いくらにもならんからね。だから、ね、メリイ、俺を助けると思つて、亭主の出世を助けると思つて、あれを、(美しい婦人服を指し)　あの着物を、貸してくれないか。え、いゝだらう。

メリイ　(憤然として)　だまつて聞いてれあ、なに云ふのさ。自分ばかりいゝ氣になつて、そんなやくざな出世のために、あの着物なんか、誰が貸すものか。

ジヤン　なんだねえ、メリイ。そりあ。あの着物は、おまへが一生懸命働いて、ためたお金で造へた大事なものだらうが、俺が、女王さまの御者になつてみろ。あんな着物の三つや四つ、すぐに、買つてやらあね。

メクイ　着物なんかのこと、云つてるんぢやないわよ。

ジヤン　へーい。ぢや、何にが、氣に入らないんだ。

メリイ　(憤激して)　そりあ、着物だつて惜しいわ。あん

なに働いて、あたし、自分で買つたんだもの。あたしとしちや大事な紀念品よ。あなたのとこへ來るために、あんなに働いた時の、二人にとつては、唯一つの思ひ出よ。だけど、それだつて、いゝことのためにあ、賣ること位、惜しかないわ。だけどさ、あなたの出世てのは、いつたい、なんなの、女王さまのお馬車の御者になるんだつて、あの氣障つたらしい、顏中、鬚の油だらけな御者にね、ひる日なか、ひまさうな顏をしてぶら〳〵歩きまはり、女さへ見れあ、俺の鬚はどうだいつてな目付をして、惡ふざけする、あの御者に、あたしのジヤンがなるの。そしたら、あたしはどうなるの、ちよいとばかり綺麗な女官のお下りものを着てたつてさ。肝心のジヤンが、あんな、いやみたらしい御者になつたら、メリイは、なんの樂みがあるの。メリイは誰をたよりにするの。えい、口惜しい。

ジヤン　まあ、さう、ぷり〳〵しなくつてもいゝぢやないか。なにも、御者になつたからつて、おまへを見すてるわけでもないし、メリイは、いつまでも、ジヤンの可愛いゝメリイだよ。ね、着物を貸せといつたのは惡かつた。なあに、無理に借りなくたつて、どうにかなるよ。

メリイ　まだ、着物のことなんかいつてる。そんなことぢやないのよ。ねえ、ジヤン。御者になるんだつて、あなたが、馬について、よく知つてるとか、御者が巧いとか、でなけあ、何にも出來ない木偶の坊なら、あたしだつて、こんなに怒りあしないわ。それに、なんていふことなの。鬚で、——切つちやへば、なくなる、そんなやくざな鬚一つにぶら下つて、御者になるなんて、男の恥ぢやないの。子供の時からたゝきこんだ立派な腕のあるあなたが、その腕にたよらずに、やくざな鬚にたよるなんて、あんまり情けない話だわ。

ジヤン　しかしなあ……

メリイ　おだまりなさい。云つちやふわ、今日こそ、あたし、すつぱり云つちやふわ。ジヤン。鬚にぶら下つて、御者になつて、もしも、その鬚がお氣に入らなくなつたら、どうなさるの。でなくつても、あなたより、立派な鬚の持主が、現はれたら、どうするのよ。よくまあ、そんな、たよりないことを、喜んでをれるのね。いつたい、その鬚が、あなたの迷なのよ。鬚が、あなたの仕事を邪魔してるの。今までだつてさ。毎日、二三時間も、鏡とにらめつくらしちや、鬚をひねくつて、仕事を怠けちや、注文をおくらすし、お得意はなくしちやふし、あなたにはあの鬚が一番大事なのね。仕事よりも、メリイよりも。ほんとうに、まあ、いま〳〵しい。そんな鬚があるうちは、あなたはだめよ。なにが、流行りなんだい。あたし

は、ジヤンは好きだけど、鬚は大嫌ひ。そんなやくざなもののあるうちは、あなたの了簡はいつまでもまともになりあしないわ。

（メリイ、卒然として立ち上る。）

メリイ　切つちやいなさい。そんな鬚。

ジヤン　（應じて立ち上り）　切れるもんか。大事な鬚。

メリイ　切つて下さい。お願ひだから。

ジヤン　勘辨してくれ。お願ひだから。

メリイ　切つちまへ。

ジヤン　切らん。

メリイ　ようし。あたしが切つてやるから。

ジヤン　切れるなら切つてみろ。

メリイ　口惜しいつ。待つてお出で、一本殘さず切つてやるから。

（メリイ。興奮して、扉を開けて外に出る。ジヤン、その後姿にあびせて、）

ジヤン　馬鹿め。

（ジヤン、再び椅子に腰を下し、鬚をひねりまはす。）

ジヤン　うるさい女だなあ。俺が御者になるのが、どうしていやなんだ。はゝあ、つまり、やけるんだな。俺が思ひがけない出世をするんで、うれしい先きに、やいてるんだ。そのくせ、今に、いゝわねえ、御者は、なんていふんだらう。子供みたいな奴さ。だが、なぜ、今の男も女もさわぐ、此の鬚が、メリイにあ、氣に入らないんだらう。

（此の時、メリイの近所の女達を呼ぶ聲、それに答へる聲が聞えてくる。）

ジヤン　あ、こいつあいけねえ。メリイの奴、援兵をたのんで、本氣で、俺の鬚を切るつもりだな。だれが、この大事な、出世の鬚を、切られてたまるものか。

（ジヤン、片手で、鬚をおさへながら、うろ／＼、あわてる。女の聲、益々多く、愈々近くなつて、つゞいて、入り亂れた足音が、聞えて來る。ジヤン、半圓の窓からのぞく。日のかげつた街路上に、六七人の急ぎ足の女の靴が見える。）

ジヤン　（窓の方を指しながら）　あ、やつてきたな。こいつあ、困つた。フリツツの女房や、パン屋のおかみなんかに踏みこまれちや、此の鬚も愈々往生だ。

（急いで、扉口にかけより、内から懸命に支へてゐる。メリイの聲を筆頭に、女達の聲が聞える。）

メリイの聲　ジヤン。お開けつたら。

第一の近所の女の聲　ジヤン。卑怯だわ。

ジヤン　（必死となつて支へながら）　あけてたまるものかい。

第二の女の聲　これでも、開けないのかい。

第三の女の聲　たゝきこはすぞ。

ジヤン　女に負けて、なるものか。

メリイの聲　かまやしない。さあ、みんなで押さうよ。

第四の聲　そら、いゝかい。

第五の聲　これでもか。

ジヤン　なにを。

女達一齊の聲　そら、もう一息。よいしよ。

（扉、開け放される。ジヤン。尻餅をつく。メリイを先頭に近所の女六七人、手に手に鋏、剃刀を持つて入つてくる。）

（ジヤン、あわてゝ立ち上る。女達口々に罵いて追ひまはす。ジヤンも、罵りかへしながら、逃げまはり、仕事机の上の、槌を取り上げて、振り廻はす。然し、多勢に無勢、女達、鋏、剃刀で、おびやかしながら、ジヤンの身邊にせまる。遂に、ジヤン、仕事机の上に、押し倒され、兩手兩足を近所の女たちに、おさへつけられ、メリイと第一の女に、鬚を切られる。ジヤン、しきりにもがくが、到頭、綺麗に、鬚を切られてしまふ。）

メリイ　さあ、もういゝわ。

第一の女　すつかり切つちやつたよ。

他の女一同　萬歳。

（女達、みんなで、ジヤンをかつぎ下し、仕事椅子に腰かけさせる。）

（ジヤン。呆然として、無鬚の顔をなでまはしてゐる。）

メリイ　ジヤン。切つちやつたわよ。やくざな鬚、御者にならうとした迷の種の鬚は、この通り、切り落してやつたわ。まあ、よかつた。

（中央の椅子にぐたり腰かける。）

メリイ　（近所の女達に向ひ）ありがたう。あたし、ほんとに、これで、安心したわ。御苦勞さまだつたわね。

第一の女　なあに、こんな御用ならいつでもひきうけるわ。

女達一同　メリイさん。安心ね。もう大丈夫たわ。

メリイ　えゝ、もう御者になりたくたつて、なれあしないんだもの。

第二の女　さうよ。ごらさなさい。ジヤンさんの顔、かへつて、さば〳〵したぢやないこと。

第三の女　ほんとね。

メリイ　ジヤン。さあ、これでいゝわね。もう御者にもなれないし、鏡と首つ引きも出來ないし、あなたのメリイのために、せつせと働いてくれるわね。

ジヤン　（夢から覺めた樣に）うん。あゝ、鬚もなくなつ

た。出世の夢も覺めてしまつた。仕方がない。明日からは、精出して、靴の底でもたゝかうよ。なあに、あ、ハツクショイ（くさみ）鬚がなくなつたら、風邪を引いちやつた。

メリイ　まあ、惡いわね。けど、風邪なら、すぐ直るわ。鬚につられて、御者になつたら、もう、それきりだもの。

ジヤン　うん。もう、御者になんか、なるもんか。

メリイ　あ、うれしい。それでこそ、あたしの一番すきなジヤン。

（メリイ、喜悦に滿ちて、ジヤンの許に走り寄る。ジヤン、氣ぬけした樣にメリイを抱いて。）

ジヤン　おゝ。俺の一番可愛いゝ――ハツクショイ――メ・リ・イ・ハツクショ。

近所の女達　哄笑。

（夕の祈禱の鐘、靜かに聞えくる。）

（舞臺、夕闇に包まれ、一同肅然として。）

――幕――

（十四年一月）

# マウント・ヴーノンの晝（一幕）

**人物**

ウオシントン　（六四）
ネ　リ　イ　その姪（二〇）
ラファイエット　（三八）
侍者。甲、乙。

**場所**

マウント・ヴーノンに於けるウオシントンの私宅。

**時**

十八世紀末、初秋の午前。

**舞臺**

ウオシントンの私室。總て簡素なる造作。正面。三つの窓を持つた壁、右寄りに扉、庭へ出られる。窓をすかして芝生の庭が見える。右壁、据付の古風な暖爐、上に置時計、午前十時を指す。壁に額、三四、左、壁、隅に扉、右隅に机、書棚、室の中央に圓卓、數脚の椅子。暖爐の傍に鳥銃がたてかけられてある。

ウオシントン、机に向つて書見してゐる。粗末な平常服、間もなく本を閉ぢ立ち上つて窓側に倚り外を見る。初秋の朗かに晴れた空、小鳥の聲、折々。

侍者、甲。左隅の扉より入り來る。

侍者、甲　閣下。ラファイエット侯が、お見えでございます。

ウオシントン　おゝ。さうか、此室でもいゝだらう。お通し申せ。

（ラファイエット入り來る。瀟洒なる輕裝、精悍な面容、ウオシントンに近寄り親し氣に握手をする。）

ラファイエット　閣下。一昨夜は晩くまで、お邪魔しまして……どうも、骨牌に夢中になると、時の移るのも氣がつきませんでな。

ウオシントン　いや。さういへば、君はえらい負込んだものだな。手も足も出なかつたぢやないか。

ラファイエット　どうも、一度、けちがつき始めますとね。それにひきかへ、閣下は、素晴しい出來でしたな。ヨークタウン以來の大勝ぢやありませんか。

ウオシントン　（笑つて）冗談ぢやない。戰爭と骨牌と一緒にされてたまるものか。

（兩人、大笑する。ウオシントン、ラフアイエットに椅子をすゝめ、共に圓卓に侍る。）

ラフアイエット　閣下。いゝ天氣ぢやありませんか。わたしは、むろん、畑の方にお出でと思つて、實は、ずうつと、裏の方へ廻らうかと思つた位ですよ。御氣分でも、悪いんですか。

ウオシントン　なあに、身體は、ごらんの通り、いつだつて健康さ。わしも、かうして外を見てると、先刻から、もう、身體が、むづ〳〵して、本を讀んでも、身が入らんで困つてるんだが、何しろ經師屋が來ないんでね。

ラフアイエット　（怪訝な面容で）へい。經師屋に何か御用なんですか。

ウオシントン　なあに、玄關の傍の壁紙を張りかへて貰ふだけなんだが……九時に來るといつて、未だ見えないんだ。マルタでも居れば、まかせてしまふけど、生憎留守でね。

ラフアイエット　珍客でも、お見えになるのですか。

ウオシントン　いや、お客といふ程でもないが、一時には、ノックス君――つまり明後日からネリイの舅になる老人が、訪ねて來る筈になつてるんだ――それはともかくとして、わしは、どうも、妙な癖で壁紙がやぶれてたり、額に塵がたまつてたり、ポケツトがほころびてたり――さういふ事が、氣になつてたまらんのだ。

ラフアイエット　（笑つて）なるほど、それで、さつきから、なんとなし、すぐれぬ御樣子が、解りました。そのことは、奥さまからも、伺つてましたよ。寛容な、何もお構ひにならぬ半面、頗る几帳面な、きびしい點がお有りだつて。

ウオシントン　（苦笑して）やあ、マルタには、始終、あまり氣にするつて、小言を云はれたもんだよ。

（侍者、乙。左の扉より茶を持つて入り來る。茶をすすめてから、内懐から、書狀を出し、ウオシントンに捧げる。）

ウオシントン　（受取りながら侍者に）經師屋が、來たのか。

侍者、乙　いえ、閣下。ピアノが參りました。

ウオシントン　（怪訝相に）なに？

侍者、乙　はいロンドンからピアノが到着致したのでございます。そして、その書狀は、ピアノにくゝりつけてございました。

ウオシントン　（獨白の樣に）ほほう、來るべき者は來ずに、諦めてた物が、とゞいたのか。（侍者に向つて）あ、ともかく、こつちへ運んで來てくれ。

侍者、乙　畏りました。（立去る。）

ラファイエット　ピアノつて云ふと、あの、ネリイ孃への贈物として、ロンドンからお買求めになつた奴ですか。

ウォシントン　うむ。それさ。なにしろ、送り狀がとゞいてから、もう、二月も經つてるのだからね。わしは、すつかり諦めてゐたんだ。で、君も知つてる通り、ネリイには、此間、ギターを遣つたさ。

ラファイエット　（大笑）でも、どうやら間に合つて、よござんしたね。ネリイ孃、伯父さんから、婚禮に際して二重の贈物をされた譯ですな。

ウォシントン　結果に於いてさうなつてしまつた。ネリイには、とんだ儲けものをされたよ。（書狀の封を切る。目をしばたいて、舌打ちする）こいつあかなはんえらい細かい字だ。眼鏡なしぢや、とても讀めぬ。老人泣かせだな。（眼鏡を取りに立ち上る。）

ラファイエット　（氣がるに押止めて）閣下。お差支へなければ、わたくし、お讀み致しませうか。

ウォシントン　それあ、どうも、送り狀みたいなものだらうから……（腰を下して）ぢや、失禮だが、讀んでいただくか。

ラファイエット　（書狀を受取つて）お、これあ、ロンドンぢやありませんよ。ほほう。しかも、わたしの國の言葉だ。

ウォシントン　それなら、尙更のこと、お願ひする。

ラファイエット　（讀み上げる。）

「自由の父、ジョージ、ウォシントン閣下。突然、書狀を呈する一破落者の非禮を御許し候へ。余は、佛蘭西に國籍を有する漂泊の民——海賊に候。頃日、某地點に於いて英商船捕獲致し、その積荷品全部掠奪仕り候が、その中に一臺のピアノを發見致し候、然して、黑漆の蓋に誌せし金文字に依りて、余輩の崇敬措く能はざる閣下がその愛姪に贈らるべき貴重なる品なる事を承知仕り候。余、天下の禁を犯し、奪掠を縱にし、身を遁し居る者には候へど、閣下の崇高なる人格をば、常に仰望致し居り候。尊崇せる人物の所有品を我が物に致す事、如何にも心苦しき次第に候へば、一商人に托して、改めて御送附申上候、此の書狀御讀了なされ、閣下、破顏一笑され、愛姪御欣びなされ候はば、余輩の光榮、これに過ぎずと存じ候。終りに、閣下の御健康を切に祈上候。」（讀終り、書狀を圓卓に置く。暫くウォシントンと見合ひ、兩人哄笑。）

ラファイエット　閣下。お笑ひなされましたな。これで海賊奴、無上の光榮を得ましたよ。

ウォシントン　ふうむ。到頭、海賊先生の御意に叶つた譯だな。

ラファイエット　（感激してウォシントンの手を握り）閣

下。わたしは實に嬉しい。ハミルトン君が、あなたを崇拜し、アダムス卿が閣下の德を讃へてゐるのを聞いても、今日ほど、わたしは閣下の德望を感じたことはない。遠いフランスの一賤民、殊に海賊――最も、心の捻ち曲つた奴にすら、閣下の德は行き渡つてゐる――

ウオシントン　侯爵。老人を赤面させずにおいてくれ。そんなことを云はれると、わしは氣はづかしくてたまらぬ。

（侍者、甲、乙。ピアノを運び來る。）

ウオシントン　おゝ。それか。（ピアノに立寄り）はゝあ、ちつとも損じてない。大分、しつかり荷作りしたと見えるな。

侍者、甲　はい。實に、頑丈に作られてをりまして、解きますのに、可成り苦勞致しました。

ラフアイエツト　（ピアノをなでまはしながら）あ、これですね。成程、金文字で美しく書かれてある。ネリイ孃、さぞ、喜ぶでせうね。

（侍者兩人一禮して立ち去らうとする。）

ウオシントン　おい。一寸待つてくれ。

（侍者甲、立ち止る。乙、そのまゝ退場。）

ウオシントン　あの、ネリイは、どこに居るな。

侍者、甲　先程、お庭の方にいらつしやいましたが。

ウオシントン　さうか。ぢや、すぐ、呼んできてくれ。すぐに、と、云ふんだぞ。お前を欣ばすことがあるからつてな。

（侍者、甲、右寄りの扉から庭へ出る。）

（間。可成り距つた所で激しい甲の聲。）

侍者、甲の聲　誰だ！　泥棒奴！　太い野郎だ！

（ウオシントン、ラフアイエツト、驚愕する。ウオシントン、緊張して。）

ウオシントン　畜生。亦、やつて來たんだな。ようし。一つおどかしてやれ。（暖爐の傍に在る鳥銃を持つて庭へ出る。ラフアイエツト、窓を開け、外を見る。急いで、そのまゝ、ウオシントンの後を追ふ。銃聲二發。ネリイ、反對の扉口から、あわてゝ入り來る。派手な平常着。室中をうろ〳〵してゐる。）

ネリイ　まあ、今の鐵砲の音どうしたんだらう。おや、伯父さまは、あら、大變だわ。若しかしたら伯父さん！伯父さん！

（ウオシントン、ラフアイエツトと肩をならべ、にこやかに話しながら、庭口より入り來る。）

ウオシントン　いや、時々、やつて來るんだよ。でも、今日は、大分利き目があつたらうよ。

ネリイ　あ、伯父さま。まあ。よかつた。あたし、ほんと

に、びつくりしたわ、ほら、まだ、どき〳〵してるでせう。

ウオシントン　おう。ネリイ。おまへ、どこに居たんだ。今、呼びにやつたとこなんだよ。

ネリイ　あたし？　お二階に居ましたの。（ウオシントンの手に在る鳥銃をみつめ）おや、今の鐵砲、伯父さまね、まあ、どうなすつたの、お年寄りの癖に伯母さまに云ひ付けてよ。

ウオシントン　（笑）伯母さんにや叱られるかもしれないが――ほら、此間から果樹園へ來る泥棒ね。今も、忍びこんで來たのを、トムが見つけて騒ぎ出したんだよ。で、伯父さんが行つて、鐵砲でおどかしてやつたのさ（笑）泡喰つて、ポトマツク河の土堤をはひ上つて逃げたよ。

ネリイ　まあ、ひどい方。

ラフアイエツト　奴さん。ひどくびつくりしてしまひましたね。なあに、あの位やらなきや、こたへませんよ。あ、まだ、御挨拶しなかつた。ネリイさん。今日は、またお邪魔してましたよ。

ネリイ　あたしこそ、侯爵。ようこそ。でも、伯父さま、泥棒、怪我をしないこと。

ウオシントン　馬鹿な。おどかしだけだよ。彈丸なんか入つてるもんか。（鳥銃を元の位置にたてかけ）それあさうと、ネリイ。お前に、えらい儲け物をされたぞ。（ピアノを指し）ほら！

ネリイ　（飛んでゆきピアノに抱き着き）まあ、嬉しい。でも、これ、どうして來たの。どうせ、諦めるんだね。どつかで盗まれたんだよつて、伯父さま、ギター下さる時、仰有つたんでしよ。けど、ピアノが來ても、ギターはお取上げなさらないわね。

ウオシントン　仕方がないね、海賊のために二重取りされちまつた。

ネリイ　え、海賊？

ラフアイエツト　やネリイさん。それについちや、面白い話があるんですよ。このピアノをね。途中で、フランスの海賊が、奪つたんですつて。

ネリイ　まあ、御國の――惡い人ばつかりね。

ラフアイエツト　さう、茶化さずに聞いてらつしやい。所が、その海賊、そら、（金文字を指し）これを見て、伯父さまからあなたへの贈物といふことがわかつたんですよ、伯父さまの德は大したもんだ。海賊ですよ。――他人の物を盗むその海賊すら、伯父さまの崇拜者たつたのですよ。そんな尊い、えらい人の物を盗んだことが心苦しくてならない。到頭、改めて、荷作りして、送つて寄越したのです。何といふ美しい話でせう。わたし、今日、

更にはつきり伯父さまの人格の尊さがわかりましたよ。

ネリイ　あら、感心な人ね。でも駄目だわ。それで、伯父さまの徳をほめやうたつて。

ラフアイエツト　どうして。

ネリイ　だつて、さうでせう。そんな遠くの泥棒が伯父さまの徳に感ずる位なら、近所の人——ちやんと、ウオシントンの果樹園だつて知つてる人達が、毎日、盗みになんか、來はしないことよ。

ウオシントン　成程。ネリイの云ふ通りかもしれない。

ネリイ　さうよ。さうにきまつてるわ。その海賊つての、どうかしてるのよ。ピアノなんか使ひもしないし、また、賣るにも何か工合が悪かつたのよ。果物なら、早速食べちまつたかも知れないわ。

ウオシントン　（笑）侯爵。一本參つたね。

ラフアイエツト　いや、燈臺、もと暗し。といふこともありますからね。

ネリイ　あたし、悪口云つたかしら、でも、お許し下さるわね。その代に、彈いてお聞かせするわ。早速ね。今、樂譜を持つて來ますよ。（立ち去らうとする。）

ウオシントン　おつと、待つた。行くならね。トムに云ひ付けて、經師屋へ行つて催促して來いつて、さう云つてくれ。もう、先刻から二時間も待つてるんだ。ぐづ〳〵してると、今日は一度も畑にお見舞が出來ぬかもしれぬ。

ラフアイエツト　ネリイさん、それには及びません。（稍々滑稽的に威儀を正しウオシントンに向ひ）閣下。御下命下さるならば、ラフアイエツト、巧に壁紙をはつてごらんにいれますが。

ウオシントン　いや、それぢや、あまり、恐れ入る。

ラフアイエツト　なあに、玄關傍の所位。巧いもんですよ。宛にならぬ經師屋なんか、お待ちなされず、おまかせ下さい。さうすれあ、閣下も、安心して、畑にいらつしやれるといふ譯でせう。

ウオシントン　さうなると、好都合だが、ぢや、おまかせしようかな。

ネリイ　さうなさいな。今に、マウント、ヴアーノンの名所になつてよ。フランスの侠勇ラフアイエツト侯修繕の壁つて。

ウオシントン　さうだな。ぢや、トムにお手傳ひする樣に云ひ付けるさ。

ネリイ　でも、侯爵も伯父さまも、すぐ、お仕事にとりかかつちやだめよ。あたしの音樂を聞いてしまつてから。いゝわね。

ウオシントン　うむ。ぢや、わしも、ネリイのピアノを聞

いてから、一汗流すとしようか。

ネリイ　さう。伯父さまのお好きな開墾をね。

ラファイエット　いや、ネリイさん。伯父さんなら、開墾は立派にすんでお仕舞ひですよ。北米合衆國といふ大きな開墾をね。

ウォシントン　なあに。わしのは、ほんの、土ならしだけさ。さういへば、侯爵、君には、フランスの修繕といふ大きな仕事が、あるんだね。

ネリイ　さうね。で、その修繕の第一歩を、うちの壁紙から、お始めなさらうつていふんでせう。

ラファイエット　（昂然と）さうです。では一つ、手際よき修繕の第一歩に取りかゝらうかな。

（眉を擧げて扼腕する。一同哄笑。）

――幕――

（十二年二月）

# 池谷信三郎篇

# 三月卅二日（一幕七景）

## ——伯林悲喜劇——

人

横綱二郎（ユーヂと呼ばれる）日本の留學生。

ロッテ　横と同棲してゐる女。以前は淫賣婦。

フリッツ　女の連れ兒。

ゲルダ　ロッテの以前の友達。淫賣婦。

所

伯　林

時

一九二三年

舞臺

三階の一室。留學生横綱二郎の借りてゐる部屋。

窓。開かれた硝子戸の外は露臺になつてゐて、往來を隔てゝ向ふ側の家並が見える。

菩提樹(リンデン)の梢が少し覗いてゐる。

室内は相當立派。ピアノ、蓄音機、タイプライター、卓子、ソフア、スチーム、衣裳箪笥、ケビントランク等。

露臺(バルコン)に植木鉢。壁にはベックリンの繪、淸長の浮世繪、エジプト更紗、それから大きな暦——29と出てゐる。

鳩時計。

右手の戸は臺所に通ず。左手の戸は玄關の部屋に通じ、そこよりこのビルディングの出口に行く。

夕　景

（燈火はまだ點けてない。）

ロッテ、廿五六、痩せぎすな金髪(ブロンド)碧眼。無雜作な束ね髪、餘りお化粧をしてゐない。白の毛のスエーターを着て、編物をしてゐる。

ゲルダ、二十歳前後、丸ぽちやの愛嬌ある顏。鳶毛。綠色の派手な外出着、黑い緣廣の帽子。厚化粧、眞赤な唇。しかし、どこか憔悴の陰影を祕めてゐる。

陽氣な舞踏曲（「マダム・ポンパドウル」ピアノトリオ。）にて幕開く。（隣りの家より聞えて來る音樂。）

第　一　景

ロッテ　（編物をし乍ら）ほんとに暫くだつたね。

ゲルダ　（默つてゐる。）

ロッテ　もうかれこれ一年になるか知ら。

ゲルダ　永いこの伯林の冬も、もうぢきお終ひだわね。
ロツテ　あゝ。
（短き間。）
菩提樹（リンデン）の若葉が、もう直ぐ色づいて來る。さうすると街が明るく光り出す。
（間。）
煙草どう？（編物の手を止めて、自分も一本點ける）
ゲルダ（一本點け乍ら）良い煙草だわね。
ロツテ　灰皿。（渡す）
ゲルダ（燐寸の燃えさしを捨てる）
ロツテ　燐寸つてば、ほんとにあの頃の事を想ひ出すよ。夜晩く歸つて來て、そをつとあの暗い階段を上つて行つた時さ。丁度三本で家迄行けたつけね。三本目の、……
ゲルダ　ロツテ　ロツテ！
ロツテ　燐寸が消えかける時、狼狽てゝ鍵穴へ鍵をさしこんだつけ。何？……ゲルダ。ゲルダ！
ゲルダ　え？
ロツテ　今話しかけただらう？
ゲルダ　あゝ。あたい、昨日ハレンゼーへ行つたのよ。雪解（ゆきげ）の水が、まだ溶け切らない殘りの雪を浮べて、ちよろちよろと流れて行くの。あたいほんとに良い心持だつたわ。白樺の森から、もう若葉の匂ひがして、春の吐息がぼんやり漂つてゐるのよ。
ロツテ　もうかれこれ苺酒が出やしない？
（短き間。音樂止む。）
ゲルダ　フリツツは？
ロツテ　今ユーヂと一緒に戸外（おもて）へ行つたよ。もうぢき歸つて來るだらう。
ゲルダ　隨分大きくなつたらうね。
ロツテ　すつかりユーヂに馴染んぢまつてね、パパ、パパつて云ふんだよ。
ゲルダ　先は弱さうな兒だつたが。
ロツテ　それに日本語の唱歌を覺えてね。
ゲルダ　さう？
ロツテ　毎日肉を食べるんだもの、太るよ。
ゲルダ　毎日？
ロツテ（氣が着いたやうに）それに、毎日、ユーヂがあやつちや散歩に連れてつてくれるんだらう。廣場の公園が近いもんだから。
ゲルダ　料理は誰がするの？
ロツテ　あたいさ。ユーヂはヴイーナーシユニツツエルが好きでね。
ゲルダ　シユニツツエル？
ロツテ　それから、アイスバイン。

ゲルダ　（熱心に）アイスパイン？
ロッテ　（笑ひ乍ら）あゝ。だけど時々、日本の副菜を作らされるんで閉口だよ。でも、もう大部馴れちやつたけど。
ゲルダ　日本の料理つてどんな？
ロッテ　醬油つてもん使ふんだよ。
ゲルダ　おいしい？
ロッテ　まずいよ。
ゲルダ　そんなもん日本から送つて貰ふの？
ロッテ　いゝえ、ハンブルヒへ着く船で分けて來て貰ふんだよ。
ゲルダ　さう？

（間。）

ロッテは日本へ行く心算？
ロッテ　だつて來年はユーデが歸るんだもの。あたい無理にたつて追いて行くわ。
ゲルダ　日本つて隨分遠いんだらう？
ロッテ　あゝ。巴里よかもつともつとずつと遠いんだよ。
ゲルダ　あたいも行つて見たいな。
ロッテ　印度やそれからエジプトを越して行くんだもの。あれね、（壁のエジプト更紗を指さして）エジプトのお土産たつて。

ゲルダ　幾日かゝるの？
ロッテ　何處？　日本？　二月だつて。
ゲルダ　二月？　まあ——。
ロッテ　日本にはこんな灰色の空はないんだつて。明るく澄み切つた靑空の下に、櫻の花が一面に咲いてるんだつて。（段々熱を以つて）日本？　あたいすぐにでも行き度いわ。こんな嫌な想ひ出のこびりついた國、一刻も早く離れて了ひ度いわ。……あたいほんとにまだ見ない童話の國に憧憬れてゐるんだよ。
ゲルダ　まあ姉さん、隨分ハイカラな言葉覺えたのね。それに學者ね、姉さんは。驚いたわ。
ロッテ　そりやさうよ。あたいもう知識階級なんだもの。

（間。）

それに人が皆んな親切なんだつてさ。
ゲルダ　日本？
ロッテ　あゝ。
ゲルダ　さう？
ロッテ　子供が結婚してからも、親がまだ世話燒いてくれるんだつて。
ゲルダ　まあ！
ロッテ　その代り、親が瑞西チーズが好きだと、子供も、お嫁さんも、孫も、皆んな瑞西チーズを食べなきやいけ

ないんだつて。

ゲルダ　親切過ぎるのね。

ロツテ　だけど、あたい坐るのだけは閉口よ。ユーデは西洋館を建てるつて約束したけど。

（間。）

ゲルダ　（自分の家の寒さを想ひ浮べ乍ら、寒さうに）あつたかいわね、この部屋。

ロツテ　蒸氣暖房が通つてるんだもの。石炭といくらも違はないんだよ。それに身體にも良いんだから。

ゲルダ　もう春が來るんだわ。……隨分寒かつたな。（獨り言のやうに）あの氷室の中みたいな冬の夜。……

ロツテ　（しんみりと）ほんとによく二人で晩い冬の街を歩いたつけね。あたい、あの頃の事を思ふと實際ぞつとするよ。

ゲルダ　でも、ロツテ姉さんは幸福だわ。

ロツテ　（獨りで饒舌つてゐる）お客が捕まらないでさ、お腹のペコ〳〵に空いた身體を引摺つて、二時頃、あの暗いルイーゼン街の裏町へ歸つて行つた頃の事。

ゲルダ　（戸外に目をやり乍ら）この頃はそりや不景氣なのよ。一週に一遍も捕まりやしない。（腕を搔く）

ロツテ　（やつぱり獨りで）燈火の消えた獨逸劇場の前を、よく二人で抱き合ふやうにして歸つて行つたつけね。だつて、さうしないと二人とも倒れて了ふんだものね。

ゲルダ　もうすぐロートドルンの、赤い眞紅な花が街を綺麗に色どるんだわ。

ロツテ　まだあすこに居るの？

ゲルダ　家？　あゝ。

ロツテ　小母さん達者？

ゲルダ　相變らずよ。太つちよの上にいつでも脹れてるんだもの。厭やになつちまふわ。

ロツテ　ほんとにね。豚が腎臟病にかゝつたんぢやあるまいし。

ゲルダ　お多福風邪よ。でもあれがほんとの豚だつたら、あたいやこんな饑じい思ひなんかなしいで濟むんだのにね。（想ひ出したやうに胴締を締める）

ロツテ　（笑ふ。又編物を取る）

（間。）

（向ひの窓硝子に夕陽が赤く映えてゐる。）

ゲルダ　誰の？　フリツツの？

ロツテ　あゝ。そろ〳〵あつたかくなるからね。

ゲルダ　あたいなんて、これ、（着物をさして）去年のままよ。それに、（靴を脱いで）こんなに穴があいちやつて。靴下だけでも買はなくちやね。絹の薄い、……

ロツテ　靴下は大事な商賣道具だからね。

ゲルダ　（熱を持つて）近頃は肉色のそりや良いのが流行つてゐるのよ。（急に元氣なく）だけど、……

ロッテ　この間も、エタムの角店で覗いたけど、隨分高いんだね。

ゲルダ　とつても手が出せやしないわ。（手に弄んでゐた革の手袋から紙片を出して）こんなもんが貯つてちやね。

ロッテ　何さ？

ゲルダ　瓦斯の拂ひ。

ロッテ　ユーヂに拂つて貰ふといゝよ。あたいがさう言つて上げようか？

ゲルダ　いゝのよ、どうにかなるもんだわ。（紙片をしまひ乍ら）さう〳〵、あたい又近い內に警察へ行かなくちや。

ロッテ　鑑札？

ゲルダ　あゝ。（間。腕を掻く）

ロッテ　南京蟲？

ゲルダ　（苦笑して頷く）

ロッテ　まだゐるの？

ゲルダ　まだつて近頃はそりやひどいのよ。

ロッテ　さう云つてやりやいゝのに。

ゲルダ　えゝ、さう云つてやつたのよ。そしたら、あの家主の小母さんの云ひ草がいゝわ。これつぽちの家賃で南京蟲を一匹々々鎖に繋いでおいちや、こつちが合ひませんや、ですつてさ。ハヽヽ、……

ロッテ　（笑ふ）

（やゝ長き間。）

ロッテ　ゲルダ！

ゲルダ　何あに？

ロッテ　あのね。今日何んか食べた？

ゲルダ　（力なく）あゝ。

ロッテ　遠慮しなくたつて良いんだよ。何か殘つてゐるんだから。

ゲルダ　（默つて下を見てゐる）

ロッテ　（毛糸を置いて立上る）今、何んかさがして來て上げるわ。（右手の戸を開ける）

ゲルダ　いゝのよ。ロッテ！　もうそろ〳〵御出勤しなくつちや。

ロッテ　まあ、良いぢやないか、宵の口の蝙蝠野郎なんか。

（次の間へ入る）

ゲルダ　（立上つて、鏡で顏をなほす。唇に紅を塗り、ダンスの身振りで歩き、ぼんやり露臺から戸外を見てゐる）

ロッテ　（やがて、皿に腸詰を入れて持つて出て來る。圓卓

に乘せる）
ゲルダ　（戸外を見たまゝ）まだ日の暮れるのが早いわね。あんなに夕陽が赤く向うの窓に光つてゐるわ。
ロツテ　夕暮時つて、何んだか淋しいもんだね、……辛子要る？
ゲルダ　いゝわ。……あら、もうゲラニヤが咲いてゐるのね。ほら、あすこの家のバルコンに。
ロツテ　あつたかいうちにお食べよ。あたいもなんだかお腹が空いちやつた。
ゲルダ　（すぐ來ようとして、ちよつとためらひ、丁度そこに絲で吊るされた、赤い紙の折鶴を見て、獨り乍ら）あら、まあ、面白いもん。なあに、これ？　綺麗だ事。
ロツテ　溫室咲きだらう、きつと。……どれ？　あゝ、それ？　それはね、紙で鶴を拵へたんだよ。日本人つて男の癖にほんとに手先が器用だね。
ゲルダ　ユーヂが拵へたの。
ロツテ　あゝ。フリツツも覺えちやつて、近頃紙さへありや自分で折るんだよ。一マークだの十マークだのもう使へたいお札は皆んな鶴になつちまつて、フリツツのお部屋はまるで動物園さ。
ゲルダ　さう？　（腸詰の方を見てゐる）
ロツテ　食べない？　これでもハツレのお土産だよ。
ゲルダ　おや御馳走になるわ。（帽子を脱ぎ、來て坐る）
（兩人食べる。）
（ゲルダは頻りと食べる。）
ロツテ　近頃はやつぱりあすこの寄席かい？
ゲルダ　いゝえあそこ、拳ボクシングを止められてから、さつぱり客足が減つて了つて、もう駄目なのよ。
ロツテ　何處？　そいぢや。
ゲルダ　何處つて、近頃は定めなしよ。ロココへ行つたり、黑猫へ行つたり。……でもやつぱりフリードリツヒの近所。クルフユールステンダムの成金街は、やつぱり駄目やね。
ロツテ　相變らずやつぱりが出るのね。
ゲルダ　（笑ふ）
（間。）
ロツテ　（ゲルダの口癖に昔を想ひ出して、獨り言のやうに）やつぱりか。
ゲルダ　それからあたいカイザー・カフエへもちよいちよい行つてよ。
ロツテ　（急に熱を以つて）カイザー・カフエ？
ゲルダ　さう〳〵、姉さんはあすこでユーヂと識り合つたんだわね。
ロツテ　（獨りで）カイザー・カフエ！。

ゲルダ　あたいもよく一緒に招んで貰つたつけ。あたい、あの晩の事よう〳〵覺えてるわよ。姉さんが育兒院にゐるフリッツの話をして泣いたあの晩の事。ユーヂも泣いたわね。あの人はほんとに優しい方ね。

ロツテ　（ぼんやり獨り言のやうに、小聲で）カイザー・カフエ！（ゲルダに）ほんとにさうだつけね。お客に身の上話なんかしたの、あたい、生れて初めてだよ。ユーヂがあたいに初めて、ほんとの人間を見せてくれた人なんだもの。

ゲルダ　冬の晩だわ。雪が降つてたわね。

ロツテ　あたいあの人が初めてお說敎した時ね、こんな顏して（ユーヂの聲色で）『ねえ、ロツテ！　よく考へてごらん。こんな生活が人間の生活かい。お前は考へるつて事を知らないのかい。』なーんて初めた時、ほんとに心の中で笑つてやつたんだよ。なんてお坊つちやんなんだらう。良い鴨だつて、あたいはさう思つて、隨分徒費ひをさせてやつたんだよ。その內に、あたいにはなんだかあの人が恐くなり出してね。あの人は皆んな知つてゐるんだ。何もかもちやんと知つてるんだ。そして態とあんな馬鹿なお金を費つてるんだつてね。そんな氣がし出したのさ。

ゲルダ　あの人はほんとに心の正しい方なんだわ。

ロツテ　それにあの晩、あの人が眞面目な顏をして、あたいを救つてやると云ひ出した時、あたい妙にかう氣が弱くなつちまつてね、そいであんな身の上話なんかして了つたのさ。

ゲルダ　でも良かつたわ。あれで姉さんの運が向いたんだもの。

ロツテ　そしたらあの人はすぐその翌る日、育兒院へ行つてフリッツを出して來てくれたんだわ。あたい、あの人が、良いもんを見せてやると云つて、あの部屋の中から、フリッツを呼び出してくれた日の事を思ふと妙にかう胸が詰つて、……（泣く）

ゲルダ　姉さん！

ロツテ　（まだ泣いてゐる）

ゲルダ　姉さん！　ロツテの姉さん。

ロツテ　いゝんだよ。（笑ふ）あの時フリッツは空色の水兵服を着てゐたつけ。あたいの所へ飛んで來て、ママーつて、あの香水の瓶のやうな可愛い手を擴げて、いきなり抱きついてさ、さうしてあたいの頰つぺたへ、チユッとキッスをしたんだよ。

ゲルダ　姉さん、お茶をもう一杯貰ふよ。（注ぐ）

（鳩時計六つなる。）

（戸外には黃昏が靜かに迫る。）

ロッテ　どうしたんだらうね。
　（隣りの家から又ピアノが聞えて來る。「ポンパドゥール」。）
ゲルダ　お隣りの家一體なに？
ロッテ　ユダヤ人よ。毎日。あゝやつちや大勢の人をよんで來て、ダンスやつたりなんかしてるのよ。うるさいつたらありやしない。
ゲルダ　のんきね。こんなに不景氣だつて云ふのに。
ロッテ　あゝ云ふ連中は、マークが下れば下つたで、又それを利用して儲けるんだからね。そいでゐて、エレベーターの代も拂はないんだつてさ。この三階迄皆んな歩いて來るのよ、あすこの家の人つたら。
ゲルダ　姉さんとこはエレベーターがあるからいゝわね。
　（間。）
ロッテ　あのカイザー・カフエの色男のヴアイオリン彈きね。あの男まだゐて？
ゲルダ　誰あれ？　ヘルマン？　あの男なら、ほら、波蘭から來た、タランチユラ、タランチユラつて皆んなが呼んでゐた女ね、あれと二人で、とつくの昔ずゐとくじを極めこんぢやつたのよ。今のはお禿のユダヤ人。
ロッテ　今何が流行つてるの？　やつぱりあれ？（隣りの音樂を指す）ポンパドウール？
ゲルダ　あゝ、まだ良くやるよ。
　（身體を搖すつて唱ふ。）
　Joseph ! Ach, Joseph !
　Was bist du so keusch ?
　……………………
ロッテ　（暫く聞いてゐる。いきなり）止して。止して。
　（急にヒステリカルに泣き出す）
ゲルダ　（びつくりして止める）どうしたのよ。え？　急に。
ロッテ　（猶泣いてゐる）
ゲルダ　え？　ロッテ！
ロッテ　（急に泣き止む。今度は笑ふ）あたいつてどうしてこんなにお馬鹿さんなんだらうね。氣が變なんだよ。ね、氣に掛けないでおくれ。……かうやつて、久し振りであんたに會つて、その唄を聞いてゐたら、急にあの頃の事を想ひ出しちやつたの。ほら、よく三日も何んにも食べないで、あの裏の四階の一部屋に、石炭のない冬の晩、あんたと二人で抱き合つてさ、ぼろ蒲團にくるまつてゐた頃、きつとあたいの耳にはその節がこびりついてゐたんだものね。
ゲルダ　（今度はゲルダがふさいで來る）
ロッテ　あゝ厭や〱。あたいあの頃の事を振り返つて見

ると、もう目の前がぼうつと灰色に霞んで了ふんだよ。あんな生活はもう死んでも厭や。

（となりのピヤノ止む。）

（眞劍に）ほんとに今度、あのユーヂに捨てられたら、あたい、あたいはきつとスプレーのお濠へ飛びこんで死んで了ふよ。

（間。）

（思ひなほして）忘れるんだわ。忘れるんだわ。先きの事だけ考へるんだわ。

ゲルダ　ロツテ姉さんは幸福たわね。先きの事を考へられるんだもの。あたいなんて、どつち向いたつて眞暗だ。

ロツテ　（氣が着いて）そんな事ないよ。

ゲルダ　いゝえ、いゝえ、駄目々々。……だからあたいはずうつと昔の事を考へるの。まだリユーベツクのお父さんの家にゐた頃の事。あの頃は、あたいも無邪氣だつたわ。この世界が光で溢れてゐたわ。……（ふとトランクに目をやる。走つて行く）あら、リユーベツクの？　あすこのホテルのだわね。行つたの？

ロツテ　（見て）どれ？　それ？　あゝ。去年の夏、オストゼーの海岸へ三人で行つたんだよ。

ゲルダ　（懷しさうに考へてゐる。やがて首を振つて）もう止めよう。こんな事考へた後の淋しさつたら。無理酒飲まされた後の醉ひ醒めのやうな、頼りない氣がするわ。悲しさが二倍にもなつてくるんだもの。……あたいも、姉さんみたいに、せめて子供でもあつたらね。

ロツテ　（優しく）何云つてるの？　あんたのは求めるのよ、苦勞を。ゲルダはまだ若いんぢやないか？

ゲルダ　（首を振る）いゝえ、もう駄目よ。

（間。）

戰爭のお蔭でこの國には女が多過るんだわね。

ロツテ　それよか。あんた、タイプライター習はない？　すぐ上手くなつてよ。あたいもう隨分うてるんだよ。

ゲルダ　（氣のなさゝうに）タイプライター？

ロツテ　あゝ。

ゲルダ　ピアノとどつちがむづかしくつて？

ロツテ　そりやピアノよかずつとやさしいさ。

ゲルダ　さう？……でも駄目だわ。タイプライターが上手くなる頃には、あたい干乾しになつて了ふから。（淋しく笑ふ）

ロツテ　そんな事あるもんか。そのうちに良い旦那がつくよ。

ゲルダ　（ゆつくりと）もう澤山。そんな、氣休めは。後から空いたのが參りますつて、車掌に云はれるやうなもんよ。（急に早くぺら〳〵と）そりやね。獨逸人なら、な

い事はないわ。だけど獨逸人なんかと一緒になつて、こんなマークのどん／＼下つて行く國にくすぶつてゐるなんて、考へる丈だつて心細いわ。だからあたい外國人でさへあつたら、誰とでも一緒になる事よ。あたい、とにかく、外國へ行きたいのよ。（又ゆつくりと）男より女の方がずうつと少い國へ。（間）ロツテ姉さんはうまくやつたわね。（獨言のやうに）あんな良い旦那なんて、活動のエキストラみたいに、さうたんとあるもんぢやないわ。

ロツテ　誰の事？　ユーヂ？

ゲルダ　えゝ、さうよ。

ロツテ　（ふざけて）ゲルダはさつきから隨分賞めるのね。あんたユーヂ好き？

ゲルダ　（何の氣なしに）えゝ、好きだわ。

ロツテ　（急に眞劍に、鋭く）ゲルダはいくつ？

ゲルダ　あたし？……（氣が着いて）何云つてるの？　そんな事訊いて。……でも、時々撲つたりする？

ロツテ　ユーヂ？　いゝえ、そんな事はしないよ。

ゲルダ　たまには撲たれて見たいやうな氣になりはしない？

ロツテ　お馬鹿ね、あんたわ。それは戀人同志のうちの事だよ。夫婦になつてから撲つたりするやうな、そんな亂暴な男あたいは嫌ひ。

ゲルダ　夫婦だつておんなじだわ。

ロツテ　いゝえ。違ふんだよ。夫婦つてもんは毎日顔を見合せるもんだらう？　毎日撲たれてゐるなんて、そんなおたまりこぶしがあるもんか。

ゲルダ　さうか知ら？

ロツテ　さうか知らつて、當り前だわ。第一痛いぢやないか。

ゲルダ　そりやさうね。

ロツテ　（ふざけて、からかふやうに）ゲルダは撲たれて嬉しい人があるんだらう？

ゲルダ　（ふざけて）お生憎さま。（急に眞劍に、投げやりに）撲たれる人もなけりや、キッスされる人もありやしない。そんなものがある位なら、あたいこんなにお腹が空いてなんかゐやしないわ。あゝあ。……もう考へないわ。それよかこの腸詰でも食べた方が餘つ程お腹が張るわ。（食べる）……さうして寢るんだわ。

（間。）

（腕を掻き乍ら）南京蟲のゐない新しい布敷（シーツ）の寢臺（ベット）の上で、思ひ切つて寢て見たいわ。

（サンタマリヤの鐘の音。）

ゲルダ　どこの？

ロッテ　ルーテル教會。――もう良い。

ゲルダ　えゝ御馳走さま。

（ロッテ食卓の上を片附け始める。）

（ゲルダは鐘の音に吸はれるやうに窓邊へ行き、そのまゝ聞き入つてゐる。）

ゲルダ　（突然振返つて）ロッテ！　あんただけは、あたいの事、時々想ひ出しておくれ、ね？

ロッテ　何云つてるの？

（やゝ長き間。）

ゲルダ　あたい。もう行くわ。

ロッテ　良いぢやないか。もうちよつと。

ゲルダ　だつて、もしかすると晩めしのお客があるかも知れないわ。

ロッテ　さう？　ぢや、ちつと待つてゐない？　あたい、そこの角のお菓子屋で、チヨコレートを少し買つて來て上げるから。

ゲルダ　良いのよ、そんな事しなくたつて。

ロッテ　いつだつたか、あたいが病氣で二週間も床に就いてた時、毎日あたいにパンを食べさせてくれたあの頃のお禮よ。

（ロッテ右隣の部屋へ皿を運び、やがて外套と帽子を冠つて出て來る。）

（ゲルダは戸外を見てゐる。）

（もうすつかり薄暗くなつてゐる。向ひの窓に燈火が入つて、街燈の光が、青く並木の菩提樹を下から照らす。）

ロッテ　ぢや、ちよつと待つててね。家が空くから。それに、もう追つつけユーヂも歸つて來るよ。

ゲルダ　えゝ。

ロッテ　（行きかける）

ゲルダ　（小聲で）ロッテ！

ロッテ　え？

ゲルダ　ねえ、ちよつと。

ロッテ　（立止つて）なあに？

ゲルダ　あのね。

ロッテ　あゝ。

ゲルダ　あの、……

ロッテ　（氣がつく）あゝさう。どの位？

ゲルダ　コーヒー代だけで良いのよ。

ロッテ　さう？　ぢやこれ丈上げとくわ。（金を渡す）

ゲルダ　ご免なさい。こんな積りで來たんぢやないんだけど。

ロッテ　いゝんだよ。

ゲルダ　（裾をまくつて、靴下の中に金をしまふ）近頃は

どこのカフエでも掛けちやくれないのよ。お客がないと、自分でコーヒー代を拂ふの。

ロッテ　まあ、さう？

ゲルダ　ユーヂが歸つて來ると云ひ惡いから、……ほんとにご免なさい。

ロッテ　いゝんだよ。そんな事遠慮しなくたつて。

（自分の脱いだスエーターをゲルダに着せる。）

寒いだらう？

ゲルダ　有難う。

ロッテ　（左手の戸口に行き乍ら）電燈(あかり)つけると良いよ。

ゲルダ　いゝえ、まだ良いわ。

ロッテ　さう？（去る）

## 第二景

ゲルダ　（戸外を見下し乍ら、半分ロッテに、半分獨り言）もう日が暮れちまつたのね。……街燈が點いてるわ。

（左の部屋で鍵の音。）

（昇降機(リフト)の音。）

（舞臺暗くなつてゐる。）

（ゲルダは椅子を露臺に出して、ぼんやり戸外の街を見てゐる。どこからともなく、物乞ひの手廻しオルガンがソルベーヂの唄を彈いて通る。）

ゲルダ　（合はせて鼻聲で唱ふ）

（オルガンの音消えて行く。）

（ゲルダ首を振る。）

ゲルダ　あのお爺さんの手廻しオルガンときたら、………

（輕く歔欷く）

（馬の蹄、鞭の音。）

（やゝ長き間。）

（再び昇降機(リフト)の音。）

## 第三景

（左の隣室から子供の聲で『桃から生れた桃太郎』の唄聞ゆ。）

（鍵の音。）

槇の聲　（隣りの部屋で）さあ、お自家(うち)だよ。

（隣室に燈火點く。合ひの襖硝子が光る。）

槇の聲　今日は良うあんよしたね。

フリッツの聲　眠いやう。

槇の聲　さあ早くママに只今をするんですよ。お土産(みや)を持つて。

フリッツ　（桃太郎を唱ひ乍ら入つて來る。六つ位の男の子）暗いなあ。ママー！

槇　（入つて來る）ロッテ！（壁のスヰッチを捻る。天井

の裝飾燈（カンドリエ）點く。露臺（バルコン）の人影を見て）ロッテ！　どうしたんだね。燈火（あかり）も點けないで。

フリッツ　ママー！　（走つて行く）

ゲルダ　（立上つて振向く。涙をかくす）

フリッツ　（怪訝な顔をして立止る）

槇　おや！

ゲルダ　今晩は！　ヘール・マキ！

槇　今晩は！　どなた？

ゲルダ　私よ。ゲルダよ。（手を出す）

槇　あゝ、さうか。（握手する）……よく來てくれたね。ロッテは？

（買物などを置く。）

（鈴蘭の花束を解いて、ピアノの上の花瓶にさす。）

ゲルダ　まあ！（笑ふ）今しがた迄居たのよ。お會ひにならなかつたの？

槇　いゝや。

ゲルダ　今そこの角のお菓子屋へチョコレートを買ひに行つたの。

槇　あゝさうか。ぢや入れ違ひだ。僕達はバイエリッシエ廣場の方から來たから。公園でちよつと子供のお相手。ハヽヽ。

フリッツ　（土産の菓子包みを椅子の上に置いて、ポカンとゲルダを見てゐる）

ゲルダ　フリッツヒエン！　小母さんを忘れたの？

フリッツ　（首を振る）

槇　御挨拶は？　ゲルダの小母さんですよ。ママーのお友達。

フリッツ　（半分氣が着いたやうに、半分解らないやうに）アーベント、タンテ！　（キッスをする）

槇　そこは寒かない？　こつちへ入ると良い。

ゲルダ　いゝえ。夕方の空氣はほんとにせい／＼致しますわ。

（硝子戸を閉めて、序に窓のカーテンを引いて、中へ來る。）

（スヱーターを脱いで、ソフアに腰を下ろす。）

槇　どうかしたの？

ゲルダ　いゝえ。

槇　だつて眼が光つてゐる。

ゲルダ　（目を伏せる。微笑む）　癖なのよ。

槇　そんなら良いけど。

ゲルダ　今、ロッテといろ／＼昔話をしたもんですから。それに、かうやつて、ぼんやり夜の街を見下してゐると、妙に悲しくなつて了つたね。

フリッツ　（ピアノの蓋を開ける。『桃太郎』を彈かうとす

る）

槙　フリッツ！　今はいけません。お客様だから。

ゲルダ　いゝえ、構はないのよ、

槙　あつちのお部屋へ行つてらつしやい。着物を着替へるんですよ。ママのゐない時は獨りでするんでしたね。

フリッツ　（ピアノの蓋を開けつ放しにして、しぶ〳〵立上る）

ゲルダ　いゝお子ね。あゝ、さう〳〵、あたし忘れてゐた。（手提袋から紙に包んだものを出して）ほら郵便切手。（開けて見せ乍ら）これはダンチツヒのよ。これからこれはアメリカ。……

槙　いゝね。

フリッツ　有難（ダンケ）う。（切手を貰つて、お辭儀をして右の部屋に去る）

第四景

槙　（紙包みの一つを解いて）どう？

ゲルダ　えゝ、有難う。

槙　さあ。

ゲルダ　えゝ。（取つて食べる）

槙　時々、ロッテがお前さんの話をしますよ。

ゲルダ　さう？

槙　僕も時々心掛けてはゐるんだけど。（ポケットから夕刊を出す。）弗が二萬一千か。

ゲルダ　え？　二萬！　まあ——！

槙　（夕刊を置く）不景氣な事だらけだ。

ゲルダ　又コーヒー代が上るわね。

槙　さう〳〵、茶でも入れやう？

ゲルダ　いゝえ、今御馳走になつたばかりなの。

槙　さう？……早く歸つて來ないかな。フリッツが眠たがつてゐるのに。……あゝ、ゲルダ！　それ迄ダンスでもやらないか？

ゲルダ　えゝ、（笑つて）フリッツのピアノを追拂つて、大人が騒ぐのね。

槙　ハヽヽヽ。（蓄音機に盤をかける。）

ジンミー。

ゲルダ　（立上る。着物をなほす）

（蓄音機鳴る。）

"In Berlin an der Ecke von der Kaiserallee, ......"

槙　（態と丁寧にお辭儀をして）Bitte, Fräulein! darf ich mal ?

ゲルダ　（ロココ風のお辭儀をして）Sehr gerne !

（兩人踊る。）

フリッツの聲（隣室から）パパー！

槇（踊り乍ら戸口へ行つて）おとなしくしてるんですよ。もうすぐママが歸つて來ますから。それ迄、こつちへ來ちやいけませんよ。

（兩人時々唱ひ合せ乍ら踊る。男は活潑に女は力なく。）

ゲルダ　もう止めるわ。

槇　さう？　おや（又丁寧にお辭儀をする。蓄音機を止める）

ゲルダ（さも草疲れたやうにソフアに身を投げる）やつぱり絨氈の上ぢや駄目ね。

槇　調子が悪いな。

ゲルダ　それに私ぢやね。（笑ふ）

槇　近頃ちつともやらないもんだから、足が云ふ事をきかない。

ゲルダ　ロツテと踊らないの？

槇　とてもそんな元氣はないさ。毎日顏を合せてゐる女と踊つたつて始まらない。夫婦なんてものは熱情つてもんが段々なくなつて行くんだからね。

ゲルダ　そんな事ないわ。

槇　何か素晴しい事件が起れば良い、なんて時々思ふ位だよ。

ゲルダ　あんまり幸福過ぎるからよ。

槇（菓子を頬張る、又ちよつと新聞を取上げて、その日附を見て、急に何か考へつく、笑つて）さうだ、ねえ、ゲルダ！　面白い事があるよ。

ゲルダ　なーに？

槇　一口乘つてくれないか？

ゲルダ　何？　今話した素晴しい事件？

槇　二人でちよつと狂言をするんだ。

ゲルダ　えゝ？

槇（新聞の日附けを示し）今日は、ほら、ね。

ゲルダ（うなづく）

槇　ロツテをちよつとかついでやるのさ。

ゲルダ　ロツテを？

槇　あゝ。

ゲルダ　どうするのよ？

槇　もうぢきロツテが歸つて來るだらう。だからこゝで二人でちよつと狂言をして、いちやついて見せてやるのさ。

ゲルダ　駄目よ、そんなこと。

槇　ロツテの奴きつと嫉くよ。

ゲルダ　當り前だわ。駄目よ、そんな事。

槇　構はないよ。その位の事でもなくちや、夫婦なんて實際詰らないもんだよ。

ゲルダ　だつて、ロッテがほんとに怒つちまつたらどうするの？

槇　そんなこたない。あいつは、俺がどんなにあいつを愛してゐるか、ちやんと知つてゐるんだから、……でも少しは嫉くよ、きつと、狐色位に。

ゲルダ　そこで貧乏籤引くのは私だけなんでせう。眞平だわ。お斷り。

槇　ねえ、ゲルダ！　頼むから手傳つておくれ。ね？

ゲルダ　大丈夫？

槇　俺が引受けるよ。

ゲルダ　ぢやどうするの？

槇　（ちよつと考へる）先づかうするのさ、（電燈を消して）ゲルダ！　お前上衣をお脱ぎ。

ゲルダ　上衣？

槇　（今度は机の上の置ランプを點ける。机の上と、その傍の長椅子を赤く照らし出す）お前は私の云ふ通りにすればいゝんだよ。

ゲルダ　（上衣を脱ぐ）

槇　それからシャツも。

ゲルダ　（シャツも脱ぐ）

槇　靴。

ゲルダ　（靴を脱ぎかけて、靴下の穴に氣がつき、あわてゝそれをかくすやうに、又穿く）嫌や、嫌や、靴だけは嫌や。

槇　どうして？

ゲルダ　どうしてゞも。

槇　ぢやいゝや。

（その時、昇降機（リフト）の音。）

ゲルダ　エレベーターよ。

槇　歸つて來た。さあ、早く早く。

（兩人抱き合つて、長椅子に腰を下す。左の戸口を見ないやうな位置に、暫くさうしてゐる。）

（鍵の音。）

## 第　五　景

（やがて左の戸開く。）

ロッテ　（入つて來る）待つた？（帽子を脱いで、紙包を卓上に置き兩人に氣が着く。そのまゝ、ちよつと立止り、そうつと又引込む）

（槇とゲルダの兩人は横目で見て、笑ひをこらす。）

槇　（耳語く）もういゝよ。

（兩人立上る。）

（間。）

ロッテの聲（隣りの部屋から、やゝ震へて）只今！

槇（耳語く）早くお着。（隣りへ）ロッテかい？

（ゲルダ着物を着る。）

ロッテ（戸を開けて入つて來る。默つて椅子に坐る）

ゲルダ（振り悪るさうにして、槇を見る）

槇（笑ひをこらしてゐる）

（間。）

ゲルダ（堪へられなくなつて）あたし、もう歸るわ。

ロッテ（默つてゐる）

槇　まだいゝぢやないか。ロッテも歸つて來たし。　ゲルダと目配せして笑ふけれど、ゲルダは眞面目に困つて了つてゐる）

ゲルダ　だつて、……

槇　まだ早いぢやないか。

ゲルダ　えゝ。

槇　ぢやもつとおいでよ。良かつたら今晩一晩遊んで行つたらいゝ。

ゲルダ　でも、……（默つて困つてゐる）

槇　今日はなんか御馳走して上げるよ。ね、遊んでおいでよ。

ゲルダ　えゝ。（少しためらつてゐたが、この言葉に）ぢや、お邪魔ぢやなけりや、……

槇　邪魔なもんか。（ロッテに）いゝね？　ロッテ！

ロッテ（默つてゐる）

（まづい沈默。）

ゲルダ　やつぱりあたし歸るわ。……ロッテ！　さやうなら。

槇　どうして？

ゲルダ（默つてゐる）

ロッテ（前を向いたまゝ）いゝぢやないか。

ゲルダ　でも、……歸るわ。

ロッテ　さう？（立上つて、冷やかに）さやうなら。

ゲルダ（帽子を取つて行きかける）

ロッテ（鋭く）ゲルダ！

ゲルダ（立止つて）なあーに？

ロッテ　そこにチヨコレトーが買つて來てあるわよ。

ゲルダ　えゝ有難う。（ちよつとためらつてゐたが、やがて決心したやうに）ぢや貰つて行くことよ。さやうなら、ヘール・マキ！　さよなら、ロッテ！　また來るわ。

ロッテ（皮肉に）時々いらつしやい。月水金は、あたい、タイプライターを習ひに行つてますからね。（間。獨り言のやうに）南京蟲のゐない新しいシーツの寢臺（ベッド）の上か。（立上る。新聞を手にして讀みながら、ぶら〳〵歩く。無

心に小聲で)『ルール地方又不穩。』……(溜息)
ゲルダ　(左の部屋に去る)
槇　(追いて去る)
ロツテ　(人がゐなくなると、急に新聞を置いて、ピアノの前の椅子に腰を下し、顔を埋めて、聲を出さずに、身體をゆすつて歔欷く)
ゲルダの聲　(隣室から)だから云はないこつちやないの。
槇の聲　(同樣に)大丈夫だよ、又おいで。ね？　活動へでも行かう。……二人で。
(鐘の音。)

## 第六景

槇　(口笛を吹き乍ら入つて來る。スヰツチを捻る。カンドリエつく)
ロツテ　(顔を上げて、涙を急いで拭き、又もとの冷やかな表情にかへる)
槇　(部屋を横切つて、卓子の上の葉卷をとり、右手の長椅子に腰を下し、葉卷に火をつける)
(長い沈默。)
ロツテ　(指で數へ乍ら)あなたと、ゲルダと、フリツツ。……二人か。活動は何やつてるの？
槇　(ちよつと横眼を使つて、笑ひをこらへてゐる。葉卷をさも暢氣さうに吹かす)アルト・ハイデルベルヒさ。
(間。)
ロツテ　鳶毛の女と、金髮とどつちがお好き？　あなたは。
槇　さあ？　(壁と天井に首を曲げて)そいつは難題だな。薔薇とチヨコレートとどつちが好きかつて訊かれるやうなもんだね。
ロツテ　フオイ！　(指に唾をつけて、壁になすりつける)金髮の女にね。憚り乍らそんな甘口には乘りませんよ。
槇　一年前の言葉が出たね。
(長い間。)
ロツテ　(急に泣き出す)
槇　(立上つて、側に行く、肩に手をかける)おい！
ロツテ　(ヒステリカルに突き放す。激しく泣く)
槇　(少し困り始める)おい。ロツテ！
ロツテ　知らなくつてよ。知らないつ！
槇　(獨り言のやうに、その實聞えよがしに)少し藥が利き過ぎたかな。
ロツテ　嫌ひ、嫌ひ。あつちへ行つて！
槇　困るなあ。(段々困つて來る。仕方なくそこの椅子に坐る)
(まづき、長き沈默。)
ロツテ　(泣き止む)あゝあ。(深い溜息をして、立上り長

椅子の所に行き、默つて傍の編物を手にする）
（間。）
ロッテ　（鼻歌を唄ひ出す）
槇　おい、ロッテ！
ロッテ　（冷やかに）何か御用？
槇　まだ怒つてゐるのかい？
ロッテ　いゝえ。（自嘲的に笑つて）あたし、初めから怒つてなんか居ませんわ。
槇　いゝや怒つてゐる。
ロッテ　怒つてませんたら。
槇　怒つてるから、怒つてると云ふんだ。
ロッテ　だから怒つてないから怒つてないつて云つてゐるのよ。
（間。）
ロッテ　（編物を持つたまゝ立上る。溜息。バルコンに出る。獨り言のやうに）夜だわ。あすこらあたりの明るい空が、ポッツダムの廣場か知ら。あの下に人々はひしめき合ひ、抱き合つてゐるのだわ。それだのに、あのお月様の冷い事。
（間。）
ワンダーフオーゲルの人達が通るわ。渡り鳥が。女學生も混つてゐるわ。マーガレットの髮に結つて。……

（春の通りをワンダーフオーゲルの群が通るらしく、ギターの音に合はせて、『菩提樹』の唄を歌つて行く。）
ロッテ　あたしだつて昔はあんな時があつたんでわ。
（ワンンダーフオーゲルの唄、段々消えて行く。）
（ロッテきゝ入つてゐる。）
（やがて、振返る。）
ロッテ　お化け！　（變な恰好をする）
槇　（びつくりして振返る）何んだ？
ロッテ　ホホ、、、、。（急に陽氣に笑ひこける）驚いた？　ホ、、、、。
槇　（今度は槇が眞面目になり出す）
ロッテ　（急に笑ひ止む）ねえ、ヘール・マキ！
槇　馬鹿！　何んだい？　改まつてヘールだなんて。
ロッテ　あのね？
槇　あゝ。
ロッテ　あたし、今日おもてゞ面白い事聞いたんだけど、ほんとか知ら？
槇　何んの事だよ？
ロッテ　二つのものが高い所から落つこちると、大きさや重さにかゝはらず、おんなじに落つこちるんですつて。
槇　馬鹿だな。
ロッテ　嘘？

槇　そりや、眞空の中の事さ。
ロッテ　いゝえ、空中でもおんなじですつて。
槇　馬鹿云へ。空氣には抵抗つてもんがあるんだよ。
ロッテ　いゝえ、あたしはちやんとした人から聞いたんですからね。
槇　そんなら、試して見るがいゝ。
ロッテ　えゝ。……試して見るわ。（獨り言のやうに小聲て）試して見るわ。
（間。）
（隣りの家から、ピアノの音が無關心に漏れて來る。又『ポンパドウール』の曲である。）（會話の時は靜かに）
槇　又始めたな。まるで世界にあの曲一つしかないやうだ。
ロッテ　（默つてゐる）
（間。）
ロッテ　ヘール・マキ！
槇　又か。止せよ。
ロッテ　見てゝ頂戴。（編物を取上げ、毛糸の玉だけ切り）この毛糸の玉と、それからね、……（バルコンの欄干に足をかける）
槇　（段々、ロッテの樣子の變なのに、氣がつく。あわてゝ立上る）
ロッテ　それから私のからだと、……
槇　（急に不吉な豫感に捉へられて、いきなりバルコンに飛んで行く。兩人の姿カアテンの向うにかくれる）
（ほんの瞬間不安な靜寂。）
（バルコンのカアテンのかげから急に陽氣な笑聲が聞えて來る。）
ロッテ　（槇と抱き合ふやうにして出て來る）
槇　（息をはずませてゐる）何んだ、お前。
ロッテ　（笑ひ乍ら）驚いた？
槇　驚いたよ。（力なくそこの椅子に腰を下す）
（短き間。）

## 第七景

フリッツの聲　（右の隣の部屋から）パパ！　開けてもいい？　（『ポンパドウール』を口笛吹き乍ら入つて來る。ロッテを見つけて）ママ！　いつ歸つて來たの？
ロッテ　今。
フリッツ　僕ちつとも知らなかつた。（ロッテの方へ寄つて行く）
ロッテ　（フリッツの頭をさすり乍ら）ママはね、そこのバルコンから這ひ上つて來たの。今ね、パパがこの坊やの

毛糸の紐で、（手にしてゐた毛糸を示し、眞劍な顔付きて）ママを引き上げてくれたの。

フリッツ　嘘云つてらあ。（離れて）四月お朔日かつがれる奴アばーか。（ふと壁の暦を見る。大業に）ドンナウエッタ！　パパは無精だな。（椅子を壁に寄せて、その上に乘り、暦を剝す）卅、卅一、卅二、（下へ飛び下りて）ぢやなかつた。今日は四月のお朔日よ。

ロッテ　（横に）馬鹿ね、あんたは。

フリッツ　この紙頂戴ね。僕、鶴折るんだから。

ロッテ　（いきなり夫の首に手を廻して）さあ、踊りませうよ。

横　（元氣なく立上つて）あゝ、踊らう。

（隣りの音樂が無關心に、陽氣な舞踏曲を奏し續けてゐる。）

（兩人踊る。）

フリッツ　（隅のソファに、觀客の方を向き乍ら坐り、無心に一心に鶴を折つてゐる。）

（そのフリッツの無邪氣な姿にスポットを殘し、舞臺を段々暗く絞る。）

――靜かに　幕――

（一九二七、二、一四）

# 獨り（二幕）

人

木村

ナタアシア（妻）

ミチカ（息）

馬橇の馭者

時

一九二三年冬

所

チタ市の郊外

舞臺　木村の家の一室。淸楚で、どこか事務的な感じ。左手の壁に玄關に通ずる戶口、正面の壁に窓二つ。右手の奧の隅は出張つた露西亞風の暖房（ペチイカ）になつてゐて、その前面、壁に沿つて寢てべり臺（ディバン）。その更に前面の壁に、寢室へ通ずる戶口。中央に卓子。サモワールその他がのつてゐる。吊電燈（カンドリエ）、椅子等。

## 第一幕

午前。——窓の向うに雪の町外れが見える。陽（ひ）が眩しさうにさしてゐる。

木村、中年の日本人。先の細くなつてゐるズボンを穿いて、毛皮の外套を着、手に一枚の紙を持つて、部屋の中を行つたり來たりしてゐる。何事か興奮してゐるらしい樣子。

ナタアシア、小柄な露西亞の女。隅のディバンに腰を下し、うつ向き加減に編物をしてゐる。

（間。）

木村　（快活に、熱を持つて）日本人だ。十七人。十七人來るんだよ。ナタアシヤ！

ナタアシヤ　（ちよつと眼を上げる。その瞳には何かしら暗い淋しさが宿つてゐる。又うつ向いて手を動かす）

木村　ねえ、ナタアシヤ！

ナタアシヤ　（眼を上げずに）何度仰言るの？

木村　もう何年になるかねえ。……十年、十年にはなる。十年間の間と云ふもの、俺は日本人の顏をまるで見ずに暮して來た。三年のあの放浪の後で、俺は黨に身を投げ入れた。さうして、此町（ここ）に落着いてから七年間、俺はこ

のシベリヤの曠漠とした雪の野原の眞中に、ぽつんと取殘されたやうなこのチタの町で、たつた獨りの日本人として、忠實に仕事の爲に身を委ねて來た。俺は日本人である事を完全に忘れて來た。世界と云ふ大きな概念から日本だけを隔離しようとする、あの二十何年間の教育を雪解の泥濘道に、無殘にも踏み躙つて來た。俺の頭の地圖には、やうやく色別けの線がなくなつて行つた。俺はたゞ人類の幸福を目的てに進んで來た。それが、……それなのに、昨日モスクワの本部から、これを（手の電報を示す）受取つた時からの、この俺の心の中の明るさはどうだ。長いシベリヤの冬が逝つて、あすこの教會の丘の向うに、溫い六月の太陽が耀き出したやうに、遠い昔に忘れられてゐた不思議な溫い氣持が、ふと俺の心の中に甦つて來たのだ。もう多分一生その土地を踏む事もない。生れた故國の人々に、俺は今日會ふのだ。（卓子の上のサモワールを捻つて）ナタアシヤ？　お湯がないよ。

ナタアシヤ　さう？

木村　濟まんがさしておくれ。

ナタアシヤ　ミチカを呼びませう。

木村　ミチカ！

（間。）

木村　ミチカ！

ミチカの聲（右手の奥の部屋から）何あに？

木村　ちよつとおいで。

ミチカ（六歲位の少年、右手の戸口から顏を出す）何？

ナタアシヤ　あのね、お臺所へ行つてお湯を持つて來ておくれ。

ミチカ　あゝ。（引つこむ）

木村　橇はまだ來ないか？　もう十一時を廻つてゐる。

ナタアシヤ　來れば鈴が聞えますわ。

木村　ねえ。ナタアシヤ！

ナタアシヤ　………？

木村　俺はまだ日本語がしやべれるかしら？

ナタアシヤ　知らないわ。

木村　お前は怒つてゐるのか？

ナタアシヤ　どうして？

木村　どうしてつて、……

ミチカ（這入つて來る。サモワールにお湯をさす）

木村（一杯注ぐ。妻に）お前は？

ナタアシヤ　後で頂くわ。

木村（ミチカにも注いでやり、自分は飲む）

ミチカ（コップを持つて去る）

木村（手の電報をもう一遍讀み乍ら）この人達は皆んな今度のあの日本の大地震で、特別にこゝの通過を許され

て、故國へ歸る人々なのだ。皆んな胸に憂ひと悲しみを懷いて、歸りを急ぐ人々なのだ。その人達の心を想ふ時、俺が今、こんな、自分乍ら可笑しいと思ふ位、嘆き過つてゐる、この感傷も決して意義のない事ぢやないやうな氣がする。俺は、彼等を温い心で慰めてやらなければならない。俺の心の中に押しかくされてゐた本能が、それを俺に命ずる。……机の抽斗に入れ忘れられたハンケチに、ふと、古く振られた香水の匂ひを嗅いで、別れたその日の戀人を想ひ出すやうな、そんな、和やかな、懷しい氣持で。……俺にはこの十七人の人々が、皆んな親しい氣がする。皆んなどこかで一遍會つた事のある人のやうな氣がする。十七人の顏が一人々々はつきりと俺の幻の中に生きてゐる。（ぼんやりと幻影を追ふやうに瞳を耀かしてゐる）

ナタアシヤ　（押し默つて、夫の興奮を淋しげに見守つてゐる）

（間。）

木村　地震か。東京は燒け爛れた焦土となつたのだ。俺はほんとに久しぶりで、あの年老つた、たつた一人の母親を想ひ出す。母親もきつと死んで了つたのだらう。いやそれより前に、饑ゑて死んで了つてゐたかも知れない。俺が最後に手紙を受取つてから、もうかれこれ七八年にもなる。あの頃俺はハルピンにゐた。俺に棄てられた母親はどんなに辛い日を送つた事だつたらう。こんな事を書いて寄こしたつけ。母親は、わざと、省線の戸口で手を挾み、その感謝のお金を、と云つてもほんの涙金のいくばくで、やつとその月を過ごして來たと書いてあつた。俺はあの混み合ふハルピンの驛の中で、何度人知れぬ涙を拭つた事か。煙を殘して消えて行く汽車のあとを見送り乍ら、どうして俺はあの客車に飛び込まなかつたかと、何度悔いた事だつたらう。

（間。）

だが、俺の心はあの時旣に、力強いこの主義の爲に、どうしようとてもなく引張られてゐた。俺は悲壯なヒロイズムを、母に對する悲しみの中に築き上げた。それに俺はお前と云ふ者を持つてゐた。俺はやゝともすれば鈍らうとする意志を、あゝやつて、お前と云ふ偶像の中に培つて來た。それから七年間、影のやうに俺の後ろに附き纏つてゐた、お人好しの人情と云ふ奴を俺は完全に打ち殺してやつた。この同じ現世に生きる過渡期の人々の惱みを、社會苦を、身に沁みて、見聞きし感じたのだ。例へて見れば腸チブスの病人が、饑いからと云つて、何か食べ物を與へようとする、おざなりの人情と云つたものと、俺は汗みどろになつて取組んで來た。―段々、集會な

どてやる、演説口調になつて來る）人の世の多くの救はれざる不幸は、その當初、ちよつとしたこのおざなりの人情から來る手控へに依つて醸されて行くのだと云ふ事を、俺ははつきりと自分に云ひきかせて來た。俺は幸福を作る機械に迄、自分を凍たく、無機的に作つて了つた。その間と云ふもの、お前はよく俺の爲に働いてくれた。俺はお前に充分の愛を表示し得なかつた事を心から詫びる。だが、兩人のお互ひの愛が、油となつてこの機械が今の今迄動いて來たのだ。それはお前も解つてくれてゐる筈だ。

ミチカの聲　パパ！　ねえ、パパ！　どうして露帝は殺されたの？

（兩人ちよつと默る。）

（間。）

ミチカの聲　ねえ、どうしてさ？

木村　そんな事は、もつと大きくなると、ひとりでに解るんだよ。（ナタアシヤに）本でも讀んでゐるんだね？

（戸外の陽がかげつてくる。）

ナタアシヤ　（ひとりでぼんやりと物を想つてゐる。獨語のやうに小聲で）ハルビン！　ハルビン！

木村　ハルビン！　さうだ。あの頃の事を考へると、俺は不思議と明るい氣持ちになるんだよ。……俺は毎日、何んと云ふ事もなく、驛へ行つた。さうして一日ぼんやりと、出て行く汽車のあとを見送つてゐた。あすこでお前と知り合つたんだね。ナタアシヤ！

ナタアシヤ　（うつとりと前方をみつめる）

木村　雪解けの泥濘。灰色の雪空。薄汚い馭者の群。あの石の建物の影に、お前の持つた薄桃色のライラックの花が、どんなに明るく俺の心を慰めてくれた事か。俺は勿論、花を買ふお金もなかつたし、第一そんな心の餘裕なんかありやしなかつた。俺は毎日、お前の賣つてゐる花束の匂ひを、ほのかに鼻に嗅いで、あの空虚のやうな漂泊の心を和げて來た。

ナタアシヤ　あなたはよく、人混みの暗い驛の建物の隅で、ぢいつと私の顔を凝視めてらつしたわね。

木村　さうだつた。俺はお前のその、何か物を考へてゐるやうな、青く深まつた瞳の底に見入つてゐたのだ。俺はそこにはつきりとうつつてゐる、自分自身の悲しみの姿を慈んだ。お前はまだ櫻桃のやうな赤い頰をした、もつと若々しい少女だつたね。……花が早く賣り切れて、お前がいそ〳〵と歸つて行く時、俺はいつでもたまらなく嬉しい氣持がした。それに引きかへて、終列車が着いて了ひ、驛に最後の人の影がなくなる頃、賣れ殘つた花束をそのまゝ抱へて、しよんぼりとあの暗い道を歸つて行

くお前の後姿を見送つてゐると、俺は不意に、眼の中が熱くなるのを覺えたつけ。……たうとうあの日、俺は、何んと云ふ事もなくお前のあとをつけて行つた。

ナタアシヤ　あの時、そりやあたしびつくりしたのよ。だつて、郵便局の角を曲つて行くと、自分の跫音が妙に高く響くやうな氣がしたの。それであたしは振り返つて見たのよ。そしたら、……

木村　お前は顔を赤くしたね。そしてすぐライラックの花束に顔をかくして、……

ナタアシヤ　（段々朗らかな氣持に引込まれて行く）だつて、三尺と離れてない所に、あなたのお顔が、ぢいつとあたしを凝視めてらつしたんですもの。

木村　たまらなく綺麗な聲だつた。お前は、一番最初に俺に話しかけた言葉を覺えてゐるかい？

ナタアシヤ　あなたつて、……？

木村　さうぢやない。アラ！　つて、そ云つたんだよ、小さな聲で。それから、あなただつたの？　つて、まるで幼い時からのお友達のやうな親しい言葉だつた。それから、お前は花を一輪俺の釦の穴へさしてくれたつけ。

ナタアシヤ　そしたら、あなたはいきなりあたしをお抱きになつたのね。そして、……

木村　氷つた夜道の上に、兩人の影法師が、吸はれるやうに寄つて行つた。あの晩はお月夜たつたんだねえ。

ナタアシヤ　あなたは、ね？　ね？　つて仰言るんですもの。

木村　（似するやうに）ね？　ね？　（笑ふ）

ナタアシヤ　それから、あたしが、えゝ、つてそ云つたんだわ。

木村　それから？

ナアタシヤ　それから、……知らないわ、そんな事。

木村　（しんみりと）ナタアシヤ！　（抱く）

ナタアシヤ　（默つて胸に顔をつける。小聲で）あたし、あたし、……（歔欷く）

木村　（小聲乍ら激しく）ナタアシヤ！　（強く抱く。暫く兩人で抱合つてゐる）

（馬橇の鈴の音が遠くから聞えてくる。）

木村　（急に氣がついたやうに）來た。

（兩人離れて聞き入る。）

（鈴の音段々近着いてくる。馬の蹄の音。）

木村　（又幕あきの時の、あの嗅いだ氣持に歸つて行く）日本人！　に、ほ、ん、じん！　不思議な響た。

ナタアシヤ　（ぢいつと夫の顔を凝視めてゐる。濡れた瞳の中には、激しい絕望の影が添ふ。それが段々云ひ知れぬ淋しさに變つて行く）

木村　（自分の感激に引摺られ、かまはずに喋いて行く）橇(トロイカ)に乗る。シヤン、シヤン、シヤンと鈴が鳴つて行く。驛に着く。すると汽車の中から、ぞろ／＼と出てくる。俺かうやつて、帽子を脫つて、やあ皆さん！　と聲をかける。皆んな何んて云ふかしら？　皆んな俺を取卷いて、先づ握手だ。それから、初めまして、……いや、そんな改まつた言葉は使ひやしない。

（馬橇の音止まる。）

木村　やあ、これはお揃ひで、と俺が云ふ。……（さう云ひ乍ら左手の戸口を開けて出て行く）

ナタアシヤ　（毛糸の編かけを片付けて、お茶を新しいコップに注ぐ）

木村　（アストラカンの帽子を冠り、馭者を連れて這入つてくる）お前か？　暫く顏を見せなかつたね。

馭者　（髯を生やした、もうかなりの年配。いかにも樂天家らしい男）何ね、あんた、嬶あが三つ子をひり出したもんでしてね。あゝ、奧さん、今日は！　三つ子をね。いやはや。

ナタアシヤ　（輕く會釋する）

木村　生めよ、殖やせよ、地に充てよ、ですか。ハハ……

ナタアシヤ　一杯。（注いだコップを出す）

馭者　やれ／＼これは有難い。ひどい寒さでね。戸外(おもて)は。又降りさうですよ。

木村　（窓の外へ目をやつて）あゝ、さう云や曇つたやうだね。朝の内は明るい陽がさしてたが。

馭者　風です。いやはや。（手を運動させる）ひどい風でね。（手袋を外す）

木村　丈夫なのかい？

馭者　わしかね？

木村　子供。

馭者　そりや、あんた。……頂きますよ。（コップをとる）お蔭で、わしの牛乳を半分減らされると云ふ廻り合せでしてね。幸福の分配と云ふ奴でさ。ハ、、、……

ナタアシヤ　（右手の戸口を開けて、何か云ふ）

ミチカ　（出て來て、今度は左手の方へ行く）オーバシユス？

ナタアシヤ　あゝ。

ミチカ　（左手の戸口から出る）

馭者　（コップを置いて）さう／＼、かうしちや居られない。もう着く頃だ。ぢや出掛けませうか。

木村　ぢや、行つてくるよ、ナタアシヤ！　（輕く額に接吻する）

（木村、馭者を連れて左手の戸口から出て行く）

ミチカの聲　プーシキンのお伽噺ね。

木村の聲　あゝ、よし〳〵。

歌手の聲　（何か露西亞の民謠、——ヴォルガの舟唄。——を口吟む）

（鈴の音がし始める。橇が出たらしい。）

ナタアシヤ　（ぼんやりと戸外を見てゐる。いきなり涙がこみ上げてくる。聲を出さずに、肩だけが激しく震へ、やがて、窓にもたれて忍び泣く。）

（左手の戸が開く。）

ミチカ　（這入つて來る。默つて立止る）

ナタアシヤ　（人の氣配に振返り、いきなり狂氣のやうに走り寄つて、ミチカを抱き上げる）ミチカ！　ミチカ！　お前は、お前は露西亞人の子だね？　露西亞人だね、ミチカ！　（ミチカを抱き上げたまゝ、ぢつとその顏を凝視めてゐる、ミチカも默つて見てゐる。やがて、力なくミチカを落すやうに下す。とぐら〳〵と眩暈でもしたやうに、後ろへよろける。そのまゝデイバンへ腰を下す）

（馬橇の音と、ヴォルガの舟唄が段々遠離（とほざか）つて行く。）

——幕——

×　　×　　×

間奏曲として、——

Troika en Jaineaux —— Tschaikowski

（チアイコフスキー作曲『馬橇（トロイカ）の曲』）

×　　×　　×

## 第二幕

間奏曲のピアノの終りが、馬橇（トロイカ）の鈴と蹄の音にダブつて行く。その鈴の音の中に幕が上る。第一幕と同じ部屋の中。

夜。——吊電燈が卓子の上に丸い光を落してゐる。ナタアシヤがその光の下に、卓子に靠れて、ぢいつと觀客の方を、どこと云ふ事もなく凝視めてゐる。

時々、窓を打つ吹雪の音。

ナタアシヤ　（ふと氣が着いたやうに、吹雪の合間を洩れて來る鈴の音に耳を傾ける。何んとも云へない複雜な感情が、彼女の瞳の中をあわたゞしく去來する。立上る。又坐る。今度は急にほかんとする。この狀態の時、馬橇がおもてに止る）

（左手、玄關で鍵の音。人聲。）

木村　（やがて、左の戸口を開け、帽子や肩にかゝつた雪を拂ひ乍ら這入つて來る。第一幕とは反對に、ひどく憂鬱に、むつつりとしてゐる。やがて右隅の暖房（ペチイカ）の前に行き、濡れた毛皮の外套をそこの釘にひつかけ、そのまゝ力な

くデイパンに坐り、ぼんやりと考へに沈んでゐる)

(暫く氣まづい沈默。)

(やゝ長き間。)

ナタアシヤ　お歸りになつたのね。

木村　あゝ。

(間。)

ナタアシヤ　あなた。

木村　…………?

ナタアシヤ　…………(何か云ひかけようとして默つて了ふ)

(又長い沈默。その間に馬橇が歸つて行く音。)

ナタアシヤ　外は雪ねえ。

木村　あゝ。ひどい吹雪だ。

(沈默。)

ナタアシヤ　あなた。

木村　何んだ?

ナタアシヤ　どうしてそんなに默つてらつしやるの?

木村　…………

ナタアシヤ　あなたがそんなに默つてゐらつしやると、この夜の中に、あたし達はこのまゝ氷りついて了ひさうな氣がしますわ。

木村　俺はいつその事、世界が氷の中に閉ぢこめられて了ふ方がましだと思つてゐる。俺達のミイラが、マンモスのやうに氷の中に眠る時、初めてこの世の上には幸福がやつて來るのだ。人々の考へがからうもかけ離れてゐる間、結局、いつ迄行つても、幸福はドミノの二つの數なのだ。

ナタアシヤ　あなたは、お出かけの前迄、あんなに明るく、噪いでゐらつしたぢやないの。

木村　それだけに俺は今、暗い谷の底に轉つてゐるのだ。俺は、たつた今迄、彼等のぱつ合せの言葉の一つ一つに、すつかり好い氣持になつて、有頂天に浮れ廻つてゐた自分自身のお人好しに、限りない侮蔑を感ずる。俺は一日、彼等に温い氣持で接して來た。さうして今彼等を驛迄見送つて來たのだ。彼等を乗せた汽車の煙が、灰色の夜の雪空に溶けこんだ。汽車は小さく吹雪の向ふに消えて行つた。小さく、小さく。……ふと、俺は雪の吹きかけるプラットホームに立つて、凍たく光る二筋の軌道(レール)を、ぢいつと凝視めてゐるたつた獨りの自分の姿を見出した。俺は頭の中に妙に眞空を意識した。空虚(うつろ)な隙間を感じた。と、忽ち、底の知れない淋さと、車を焦すやうな瞋りとが、そこの隙間からこみ上げて來た。俺の感情ははつきりとした捌(は)け口を見付けたのだ。俺は限りない敵意を彼等十七人の後姿に投げかける。(ひどく興奮してゐる)

（間。）

木村　彼等はいそ〳〵と故國（くに）へ歸つて行くではないか。今頃、明るい食堂車の卓子（テーブル）で、温い肉入りのシチイでも啜り乍ら、モスクワで買つた淫賣の話でもしてゐる。故國に殘して來た懷しい家族の顏を頭に想ひ浮べてゐるのだ。俺の言葉にばつを合せたあの悧巧さうな口の下から、國へ歸れば、彼等はやつぱり忠臣藏に感激し、大楠公に淚を流すのだ。俺の事なんかシベリアの小驛の名前と同んなじに、もうすつかり忘れ切つて了つてゐるのだ。それだのに、俺は、この俺はたつた獨り、又このチタの町に、俺は、……（感情が高潮して、言葉が出ない）

ナタアシヤ　（ぢいつと夫を凝視める。淋しさの影が不思議と薄らいで行つて、何か、强いものが萌ざしてゐる）

木村　俺は今日位、自分が日本人である事を强く意識した事はない。

ナタアシヤ　（低く溜息を吐く）

（吹雪の音。）

木村　（かまはずに）家の爲、親の爲に自己を棄てる。と、人は孝行と云つてその德を讃へる。國の爲に家を棄てる。と、忠義と云つて銅像が建つ。人類の爲に國を棄てる。と、……？

ナタアシヤ　（夫が興奮してくるに連れ、彼女は益々冷やかに變つて行く）左側通行の國の道路を、後向きに逆さまに歩いて行く人があるんだわ。右側を歩いちやいかん、と注意されると、俺は、左側を歩いてゐるのだ、と云つて威張るんだわ。

木村　お前には信念がないのだ。思想がないのだ。

ナタアシヤ　あたしにとつて思想なんて云ふものは、どうでもいゝんだわ。あたしは、そんな、あなたが今迄思ひ過ごしてらつした程、それ程深い女ぢやないのよ。あたしはたゞあなたに愛して頂ければ、それだけでよかつたんだわ。あなたが身を犧牲にして求めてゐる遠い幸福なんて、あたしにはどうでもいゝものだつたんだわ。あたしはたゞ女なの、あたしは、さうやつて忘れられてゐるあなたの愛が、きつといつかは又戻つて來る、と固くさう信じてゐたの。（立上る。深く溜息を吐く）

木村　（ぢいつと妻の方を見初める）

ナタアシヤ　（左手の戸口から消える。間もなく、帽子を冠り、外套の釦をかけ乍ら顏を出す）それなのに。……

木村　（不審さうに）お前はどうしようと云ふのだ？

ナタアシヤ　（極めて冷淡に）お別れしますわ。

木村　（飛び上る）…………？

ナタアシヤ　モスクワからの電報が來て、あなたが、あんなに喚いでらつしやるのを見て、はつきりとあたしは、

あなたにとつて自分が異國人である事を知りました。あたしは、あなたのお留守のこの一日を、ぢいつとそこの卓子に坐つて、考へぬいたの。……底の知れない溝が、永遠に兩人の間に口を開いたのです。

木村　さつき、あんなに嬉しく、俺の抱擁を受けてくれたお前ぢやないか。あのハルピンの想ひ出話をした時に。え？

ナタアシヤ　あの時は、もう一遍ハルピンの頃のやうに、あたし達は何んにも忘れて愛し合へると思つたんだわ。それが却つていけなかつたの。蠟燭の灯の消える前の、最後のきらめきだつたのね。あたしはミチカに最後の救ひを求めました。けれど、ぢいつとあの黒い瞳を凝視め、あの高い頬骨を見てゐると、あたしは力なくあの子を膝の上からすべり落して了つたの。

木村　お前迄がこの俺の淋しさを解つてはくれんのか。

ナタアヤヤ　あなたの淋しさが深く大きければ大きい程、この溝も亦底知れず深いのだわ。何故ならば、あなたの淋しさは、動機は違つてゐても、結局、御自分を日本人だと自覺する事なのですもの。

木村　どうしても行くのか？

ナタアシヤ　かうやつて今迄通りの生活を續けて行くのはつまり、お互ひに不幸と愁ひとをその溝の中に投げ合つて行くだけの事ですわ。

木村　こんな吹雪の夜を出て行くのか。

ナタアシヤ　魂の在所（ありか）を失つたこの家の中のつめたい事。

（吹雪の音が激しく聞えて來る。）

木村　お前はどこへ行くのだ。

ナタアシヤ　あの町の燈火（あかり）をたよつて歩いて行きますわ。

木村　この町には、身寄りもないのぢやないか。

ナタアシヤ　道で初めて出會つた男に、あたしの身を賣つて了ふかも知れません。

木村　お前は自棄を起してゐるのだ。

ナタアシヤ　いゝえ、あたしは新しい希望を求めに彷徨ふのだわ。（行きかゝる）

木村　（哀願するやうに）お前には俺がこんなに苦しみ惱んでゐるのが眼にうつらんのか？

ナタアシヤ　人は皆んな、自分だけが苦しんでゐると思つてゐるのだわね。（そのまゝ、靜かに左手の戸口の向うへ消えて行く。戸が彼女の後ろに閉まる）

木村　（強く）ナタアシヤ！　（いきなり飛上つて彼女を追はうとするが、又立止る。激しい心の動搖。突然、強い決斷が彼を支配する。それは決してあきらめてあつてはならない。積極的な一つの意志である。そのまゝ卓子に戻り、觀客に向つて坐る。燈火（あかり）を消す）

（窓の外の雪明りの街に青白い粉雪が降つてゐる。時時さつと窓硝子にうちつける。）

（沈默。）

（やがて、右手の部屋の方からかすかに歔欷く聲が漏れて來る。戸がちよつと開く。光がさつと線になつて、卓子の上のサモワールと木村の横顏を輝す。瞳が光つてゐる。）

（戸がもう少し開く。戸の向うに、さつきから眠らずに、ぢいつとそこに立つたまゝ、こつちの會話を聞いてゐた子供のミチカが、白い寢間着のまゝ、泣き乍ら、しよんぼりと立つてゐる。）

ミチカ　（父親の顏を淋しげに凝視める。）

木村　（ミチカの姿が眼に這入ると、いきなり立上り、ポケツトからピストルを取り出し、その先をミチカに向ける。ピストルが光る。）

ミチカ　（眼を瞑つて、そのまゝぢいつと立つてゐる。）

（暗い部屋の中に、斜めに漏れた寢室からの光の線の中に、浮影りのやうに、この親子二人とサモワールとピストルが浮ぶ。）

（窓の外には青白い夜を雪が降つてゐる。その情景のまゝ靜かに。）

——幕——

（一九二六、七、三〇）

# 歸りを待つ人々（一幕）

**時**
或る冬の曇り日の朝
**所**
或る港の波止場の出迎人控室
**人**

——Aの會話——

山路茂雄　狂へる醫學士。登場せず。
父
母
兄
その妻　卽ち嫂。
妻　初枝。
息子
弟　義雄。
友人A　吉田。
友人B
弟の友人

——Bの會話——

石本五郎
父
母
妹　葉子。
佐野　石本の外遊中の友人。卽ち洋行歸り。
學友O　太田。スポーツマン。
同　I　井坂。文士。
同　M　まだ大學生。正木。
同　P　特徴なし。
同　S　同。
Suzanne Alphandéry　石本の妻。純粋のパリジャンヌ。
　その他。
見窄しい老船員。新聞記者。その助手。事務長（パーサー）。船のボーイ。ヴァイオリン彈き。

**舞臺**　破目板の假普請。窓をすかせて、ランチのマスト、煙突、等。
右手（觀客より）の隅のストーブを取圍んで、山路を出迎へる人々。その會話——A。
左手にも亦一群の人々。卽ち石本を出迎へる人々。
若い大學出位の人多し。中には角帽を冠れるのも居

る。その會話――B。

左手、ずつと離れて、見窄しき年老いたる船乗風の男ひとり、觀客の方を向いて居睡りをしてゐる。

備　考

簡單なる裝置としては、背景に黒幕を用ひ、その中央に窓枠を表し、その左右に分れて演ずるのも良いであらう。全體の調子がどこに焦點があると云ふ事もなく、例へば夜汽車の出る前に、東京驛の待合室などに居ると、どこからともなく、いろ／＼の會話の斷片が耳に入つて來る、と云つた工合に、漠然とした、もや／＼とした會話の中から、觀客は段々と、歸つて來る二人の人間とその周圍を描いてくれゝば良い。從つてAとBの會話の交錯は、演出者の考へによつて、出來るだけ細かくする事も良い。又は、その間に、いろんな用のない人間、例へば出迎人とか、外人、船員、通辯、又は人を探しにやつて來る人間とか云ふやうな人物の出入りを、適宜に行つてもかまはない。勿論なくつてもかまはない。

左手にゐる見窄しき老船員は、醉つてねてゐる。時々にや／＼と笑ひ、時々眼を覺して怒鳴る。即ち、觀客の注意が餘り片一方の會話に焦點が適ひ過ぎると、それを攪き亂すやうに怒鳴るのである。――即ち此の戲曲は或る意味の不統一を要求する。

Bの會話はその會話の性質上、若々しく、陽氣である。Aの方はうち濕つてゐる。

煙草の煙。欠伸など。

――B（陽氣に、）――

P　まだかなあ。

M　（時計を出して見て）もう九時を廻つてゐる。

O　（腕時計を見て）嘘吐け、まだ八時前だ。

M　だつて、俺は驛で合せて來たんだ。

O　そんな筈はない。俺のはナルダンの標準時計だからな。

M　見せてごらん。

O　（逞しい腕をさし出す）

M　なあんだ、止つてるぢやないか。

O　（腕を耳へ當てゝ）成る程。こいつはいかん。

I　（背後の方から）ハヽ、流石スポーツマンの待つてる時計は違ふな。ストツプウオツチと來てやがる。

（一同笑ふ。）

見窄しき老船員（眠つたまゝにや／＼と笑ふ）

――Ａ（低く）――

友人Ａ　山路君も隨分變つたらうな。

友人Ｂ　そりやさうさ。兎に角もう、……何年だつけな？

友人Ａ　さう、大正、……俺も忘れたよ。

母　もう八年でございますよ。（息子を指さして）あの子が九つになりますからね。

友人Ａ　成程、九年！

友人Ｂ　九年て云や、かれこれ一昔だからな。

友人Ａ　あの縮れた眞黑の髮の毛にも、きつと白髮が交つたに違ひない。兎に角普通の九年とは違ふからね。

友人Ｂ　さうだ。あの房々とした髮の毛は有名だつた。アストラカンつて仇名があつたからね。

弟の友人　いや。散切りですよ。きつと。西洋ぢや罪人は、……

友人Ａ　おい君？

弟の友人　（氣が着いて、間のわるさうに口を噤ぐ）

父　（笑ひ乍ら）いや、かまはん、かまひませんよ。ほんとなんだから。

友人Ａ　（父に）だつて、あなた。精神に異常を呈した時になすつたことなんですから、犯罪とは云へませんよ。

父　いゝや、伜は狂人（きちがひ）ぢやありません。俺の血統にはそんな、……

友人Ａ　いや、そんな意味で申したのではないのです。たゞ、……

父　（笑つて）笑談ですよ。伜は狂人です。人殺しは皆（みんな）狂人です。たゞ、慢性か、急性かつて違ひがあるだけです。

友人Ｂ　だけど、山路君は裁判の時、きつぱり云ひ切つたつて云ふぢやありませんか。――『僕は狂人ぢやない。氣が違つてあの男を殺したんだなんて、命が惜しい爲に、今になつてそんな嘘を吐く位なら、初つからこんな事はしない。命が要らない程、あの女を戀してゐればこそ、……』

友人Ａ　（小聲で）おい／＼、奥さんが來てるんだよ。

見窄しき老船員　（ちよつと目を覺し、ぶつ／＼呟くやうに）六人！　六人！　（にや／＼と、てれたやうに笑ひ、そのまゝ又睡つて了ふ）

父　私に云はせりや、戀なんてもんが、既に狂人の沙汰ぢや。

母　あなたに會つちや、何もかも、狂人ですわ。

友人Ｂ　（母に）小母さんも昔は狂人だつたわけですね。お安くないね。

母　どう致しまして。私共の若い頃は、御婚禮の日ぢやなけりや、相手の顔が見られないんですからね。戀と云へば、煩ひの本と、仲人の出鱈目に、お互に惚れ合ふ位のもんですよ。

父　それに、狂人ぢやないつて云ふ、それがもう狂人のしるしさ。俺は醉つて居らんて云ふ奴に限つて、ほんとに醉つてゐるやうにね。

友人Ａ　小父さんは相變らず頑强ですね。

母　この通り、一遍云ひ出したら、決してきかないんですからね。いつだつたかなんて、尤も、もう二十年も昔の話、まだ福井の署に居りました時の事でございますが、朝起きて、今日は日曜だから、芝居へでも行かうと云ひ出したんでございますよ。ほんとは土曜なのです。私が暦を見せますと、一枚剝して了つて、それ見ろ、日曜だつて云つて、私が何んと云つてもきかないのです。仕方がございませんから、私、そつと病氣屆を出しといて、出掛けました。丁度雁次郎がかゝつて居りましてね、出しものは、ほら、お得意の小春治兵衞。良いですわね、いつ見ても、あれは、……

父　おい、うるさい。

母　所がそこでお役所の上役の方に會つちまひましたんでせう。山路君、痔の方はもう良いのかねつて云はれた時、側に居て、私が、……

父　うるさいつたら。

友人Ｂ　山路君もそんな所がありましたよ。こりやどうも血統らしいですね。

父　茂雄もあの時、辯護士の云ふ事をきいて、狂人だつて事を承認したらな。只默つてゐさへすりやよかつたんだ。

友人Ｂ　全く。さうすりや散切りにならずに濟んだのだ。

友人Ａ　あのアストラカンもつひに再び見られなくなつたのか。

弟　(息子の髮の毛をひつぱつて)　いや、こゝに名殘りをとゞめてゐます。

息　痛い。ママ！　義叔父ちやんが又僕の頭の毛を引張つた。

妻　(寂しく微笑ふ)

友人Ｂ　だけど又直ぐ延びるだらう。

弟の友人　松澤病院の御飯ぢやねえ。

友人Ａ　おい、君！

友人Ｂ　(妻に)　さうすると、山路君は、きつと、サムソンのやうに、あの灰色の建物をぶちこはして、あなたの所へ飛んで來ますよ、奥さん！

妻　(寂しく笑ふ)

——B——

B　相手の女つてのはどんな人？

P　純粋のパリジアンスだつてさ。

妹　兄さんから手紙でそ云つて來ましたわ。えゝと、……『その瞳はエルプスの深夜の如く、その唇は、……』……忘れちまつたわ。

O　石本君は、あれで中々詩人だからな。

佐野　實際詩人が外國へ行つちやたまりませんよ。あちらの女と來たら、情が熱いですからね。徹底的ですからな、兎に角。一たん戀するとなりや、ピントをすつかりその男に合せますからね。家の事も、親の事も、全で第二義的で、その何んですよ、實際良い所がありますよ、實際。

P　おやおや、佐野さん、お惚氣ですか。インターナショナルの惚氣は罪が深いですよ。

佐野　何、僕は君、國にソルベーヂが待つてたんですから、潔白なもんでしたがね。友人の例からつらつら惟るに、……ですな。

P　どうだか？

佐野　そりや君、僕だつて、たまには美しい碧眼の少女を見て、……たゞ氣持の上だけの話ですが、ついその、……いや、勿論小說の女に惚れる程度にですが、……その何んですよ、ハヽヽ。だから君、いはんや抒情詩人石本君に於てをやですな。

I　どうも、佐野さんの話は、說明詞ばかり多くつて、……

佐野　僕はたゞ純粋美學の立場から見て、……

妹　佐野さん、奥樣に云ひつけてよ。

佐野　困るなあ、さうどうも四面楚歌ぢや。だけど、旅にゐると妙にセンチメンタルになるつて事は事實ですな。殊に、夜、獨り寢のベッドの上で、ピヂヤマの釦などを縫つてゐる。ついうつかりと指へ針をさして了ふ。赤い木苺の實のやうな血が一雫、ポタリと白いシーツの上へ落ちて來る。すると、妙にかう淚つぽろくなつてね、水を一杯吸ひこんだスポンヂみたいに、身體のどこをでもちよつと押しさへすれば、淚が潸然とはふり落ちさうな氣がする事がよくありますよ。

O　あゝ、さうらしいですね。この間も伯林に居る友人からの手紙に、丁度その通りの事が書いてありましたよ。何んでも、窓邊でぼかんと黄昏の街を見下してゐると、ふと、机の上の薔薇の花が、風もないのに、ぼたんと落ちるんですな。その音がかすかに耳に入る。すると、急に、どつと淚がこみ上げてくる。街の燈火（あかり）が二重に霞んで行くつて書いてありましたつけ。

妹　太田さん。お友達つて、女の方でせう。そんな詩的なお手紙を下さる方ぢや。

O　どう致しまして、男ですよ。しかも十九貫もある奴です。日本に居た時には、僕と一緒に、ボートの合宿で、猫を殺して食つた奴です。

妹　まあ。（笑ふ）

——A——

友人B　（Aと兩人、やゝ前へ出て、小聲で）　だけど、當面の問題だが、僕は少し殘酷過ぎると思ふんだがね。

友人A　だつて、仕方がないさ。さう云ふ條件で、兎も角、歸國が免されたんだからね。あつちに居る今井博士の斡旋で、精神鑑定の結果、……

友人B　そりや解つてる。解つてるよ。だけど、君、考へて見給へ。十年ぶりで故國の土を踏む。そこには最愛の妻、懷しい父母、同胞が迎へに來てゐる。それを、君、家へも寄せずに、その足で直ぐ松澤病院の灰色の檻の中へ連れて行かれる。そんな君、……

友人A　法律には、君、感情つてもんがないんだからね。

友人B　そんな事あ、ないと思ふ。近頃は、君、裁判所の判決を見たつて解る事だけど、隨分例外の價値を認めてゐると思ふ。一つの個性、それは兎に角、その人の指紋と同樣、世界にたつた一つのものなんだからね。それが或る環境の中で、或る瞬間に行ふ、或る一つの行爲、その原因とか、感情とか、因果律とか云ふものの總和は、やつぱり、たつた一つのものぢやないか。それを一樣の條文に依つて、一樣の判決を下すなんて、僕には實際、不合理な氣持がするんだがね。

友人A　そりや君、ダニエルでも居て、生きてゐる法律が、……

友人B　ジムメルも云つてるぢやないか、一つの固定した概念で、流動する人生を束しようとする法律と、人生を、概念のカテゴリーに當てはめようとする、……

友人A　だが、君、そりや、……ハヽヽ、もう止さう。

友人B　どうしたんだい？

友人A　いや、學校を出て、十年も經つと、法律の事なんか、てんで頭から拔けて了ふからさ。

友人B　全くだ。學問の忘却律は、白髮の數の二乘に正比例する。

友人A　それに、僕はふと、あの彌生町の下宿を憶ひ出したんだ。山路君と三人でさ。……あれは醫科で精神病學をやる。僕達は高文の試驗で毎日こんな議論をやつたぢやないか。

友人B　さうだつたつけね。それで二人共、勿論おつこちて、尤も、あの落ちた理由は多分に君に罪があるんだよ。

友人A　何故？

友人B　何故つて、ほら、よく冬になると、炬燵に當り乍ら、本を讀んだらう。すると定まつて君が放屁をする。『屁を放つて、面白くなし獨身者』なんて川柳を云つちや、ブッとやる。あれが君、炬燵に籠つて、僕たちの頭を悪くしたんだ。硫化水素はどうも記憶力を減退させるらしい。

友人A　馬鹿を云へ、近因はさうかも知れないが、遠因は、山路が夜おそく歸つて來ちや、燒芋の土產を持つて來たせゐだ。

友人B　その遠因は遠く異國の空に、無期徒刑の宣告を受け、鐵窓の下に呻吟するとはね。君、お釋迦樣と云ひたいが、ビリケン樣でも、……

友人A　おい、止せ。俺達はもつと眞面目に山路君の事を考へてやらなきやいけないんだ。

友人B　だつて、折角俺が眞面目に始めた話を、脫線させたのは君ぢやないか。

友人A　嘘吐け。君だ。聞いてゐる君の態度がいけなかつたのだ。

友人B　馬鹿云へ。

友人A　まあ良い。そんな事は、山路君の無期徒刑の宣告が、苛酷に失したと云ふ事實とは關係のない事だ。

友人B　それは、君、殺した當の男が、何んでも州の知事の身寄りに當るんださうだ。

友人A　さつき云つた因果律の總和が、被告にとつて不利だつたんだね。

見窄しい老船員　六人！（にや／＼と笑ふ）

友人B　兎に角、君はあく迄、山路を病院へ連れて行く心算か？　一日位は良いんだらう？

友人A　いやいかん。僕は今井博士から、固く賴まれてゐるんだ。僕には引受けた義務を果す權利がある。今井博士の骨折を徒勞にさせるのは偲びない。だつて、若しも、一日でも山路君が家にゐた事が解れば、條文は彼を又きつとアメリカへ引戾す。永遠にだよ。さうすれば、今井博士の同情ある骨折は、皆んな水泡に歸して了ふぢやないか。……永遠！　君は永遠と云ふ言葉を知つてゐるかい？　つまり二人の男が向ひ合つて坐る。一人の姿がその相手の鏡に映る。各々はその手の手には鏡を持つてゐる。そしてその鏡には鏡を持つた相手の姿が映る。その手にも亦鏡が持たれてゐる。そしてその鏡に又鏡を持つた、今度は自分の姿が映る。かくして永遠に……

友人B　もういゝよ。……僕には、動機はいざ知らず、結

果に於いて今井博士の骨折は、決して適當な處置ぢやないと思ふ。寧ろ殘酷極まることだと思ふ。後になつて悲しみを二倍にする爲に、ちよつとの喜びを見せびらかすんだ。僕はあの元氣な、何もかも諦め切つてゐる山縣の獄中からの手紙を見て、つくづくさう思ふんだ。

友人A　さう君のやうに、他の氣持を一概に方程式にはめる事はよくないよ。兎に角僕にして見りや、山路にもう一遍富士の山を見せたいんだ。あの奧さんの顏を見せたいんだ。（妻の方を見て）ほら、見給へ、あの晴々とした奧さんの顏を。あれだけで、僕は今井博士の處置を無條件に肯定したくなるね。

友人B　あの晴々とした顏なればこそ、僕は殘酷だつて云ふんだ。生れつきの盲人、もうすつかり自分の宿命の星を諦め切つてゐる盲人の眼を、ちよつとの間開けてやる、その後のその盲人の慘めさを思つてやれよ。僕は最近、ド・キュレルの劇を讀んだんだが、その中にかう云ふ挿話が書いてある。（兄が聞いてゐるのを意識して）何んでも一人の年若い尼さんがあつたんですね。それが胸の病か何かで、もう死ぬと云ふ事が明らかになつたのさ。すると、周圍の者や、親兄弟が、どうせ死ぬのなら、せめて一遍、自分の家へ連れて歸つてやり度いと云ふわけなんだね。何んでも、修道院の規則で、一たん尼さんになつた者は、死ぬ迄神に仕へなければいけない。所謂、娑婆の風にあてゝはならんと云ふのだね。そこで皆んなは策略を考へて、醫者に頼んで、散歩をしなければいけないと云はせる。馬車は近所の貴族から借りて行く。そこで今度は馭者に頼んで、態と車の輪を外させる。そして家へ連れて行く。そこでつまり家の者と一緒に、樂しく食事をとつて、夕方、修道院に歸したんだ。その女は間もなく死んで行つた、その臨終の時、その女はかう云ふ事を云ふんだね。なまぢつかそんな事をしてくれたばつかりに、今、自分の死んで行く氣持が却つて苦しいと云ふんだ。つまり、もうすつかり死を諦めてゐたものを、なまぢ、生に愛着のある人々を見て來たので、昇天の邪魔になると云ふわけなんだ。僕はその氣持は尤もだと思ふ。そんな常識的な、おざなりな人道が、如何に多くの魂を故なく虐んでゐるかと云ふ事を考へると、僕はさつきから、あの奧さんの輝かしい瞳を見てゐて、胸がつまつて仕方がないんだ。

弟　（窓を見てゐる。突然）吉田さん！　こんな曇つてちや見えませんね。

友人A　（振返つて）何がです？

弟　富士です。今、あなた方はそんな話をしてたんぢやありませんか。

友人A　あゝ。さうですね。
弟　外國から歸つて來て、初めて海の向うに、あの山の姿を見た時は、とても嬉しくつて思はず泣けて了ふつて云ふぢやありませんか。
友人A　えゝ。
父　遲いね。義雄！　ちよつと見ておいで。
弟　着きや、何んとか知らせがありますよ。
父　無精な奴だなあ。仕方のない奴だ。

――B――

佐野　（煙草を出し乍ら、Iに）如何？
I　えゝ、有難う。（とる）一本頂きます。
佐野　どうぞ。
I　ゲルベゾルテですね。
O　僕も一本貰ひますよ。
I　スポーツマンの癖に吸ふのか。
O　いや、吸ふと云ふ程ぢやないが、まあ、友達の結婚式でホテルへ行く。すると、そこのテーブルの上に金口が置いてある。とまあ、ちよつと手を出して見たくなる。そんな所なんだ。
I　變な奴だなあ。ハヽヽ。
M　見渡した所、角帽を冠つてるのは僕だけだな。
S　俺は淋しいよ、か。ハハヽヽヽ。
父　正木さんは何をおやりです？
M　僕ですか。初め農科へ入つて黴の研究をやつたんですが、詰りませんから、文科へ變りました。印度の哲學です。印哲です。どうも黴よりは哲學の方が面白いですよ。
O　先のうち、こいつの家へ行くと、かびを切つた後の餅を食はされて、閉口しましたよ。
M　嘘吐け。
I　一體、君は學校へ出てるのかい？
K　いや、あんまり。
I　あんまりつて、たまには行くのか？
M　絶對に行かんな。
父　後、どの位おやりなんですか？
M　こりや手きびしいですな。
I　お宮の見つかる迄だらう。
M　馬鹿！
（一同笑ふ。）
M　石本君もお歸りになつて又大學へお這入りですか？
父　えゝ、何んだかそんな事云つて居ましたが。何をやるんですか。
M　科は？
父　やつぱり哲學科だと申して居りました。

I　戀愛哲學ですかね。

O　卒業論文はきつとかうだよ『異國の少女との戀愛生活に就いて。』

母　ほんまに恥しうおまんのでつせ。碧い眼の嫁なんか、連れて來ましてん。五郎にも困つたもんだす。

S　いえ何、そんな事があるもんですか。勇敢なる新時代の先驅者として、僕は大いに石本の勇氣を稱讃しますよ。

M　それに、相手の女がレツキとした良家の處女に於てをやです。これが淫賣とか何んとか云ふのなら、……

佐野　おい君、何んです、淑女(レデー)の前で、少し言葉の選擇に就いて意を用ゐるんですな。どうもいかん、印哲なんてやると、人間が赤裸々になり過ぎて。

P　一體どうして成立したんだい？

I　何んでもテニスで出來たらしい。テニスは、君、ミツクスなんて粹(いき)なもんがあるからね。

O　いゝだらうねえ。マロニエの花散る、青い南歐の空の下で、金髮の美人と組んでさ、かう、びゆつと、………

（手を振つた拍子に、妹の頭に觸る。櫛が落ちる）

妹　あら、まあひどい。

O　どうも失禮。（拾ふ）

見窄しき老船員　六人だい！

母　わてら、自分より身長(せい)の大つけなお嫁はん貰ふなんか、夢にも思うてまへんでしてん。

S　石本君は前からコスモポリタンだつたからね。兎に角、握飯(おむすび)へバタをつけて食べたりしたからね。だけど五十年來お國粹を守つてゐる小母さんとの交渉は見ものだぜ。

妹　さうそ、この間、そりや可笑しかつたのよ。西洋間がお離れに出來て、ダブルベツドを買つて來たのよ。そしたら、お母さんたら見に來て、まあ。眞四角なお床かい？　西洋人つて餘つ程寢相が悪いんだねつて。

O　それから、お前にも丁度良いだらうつて。

妹　まあ酷(ひど)い。そんなら良いわ、太田さん。先刻(さつき)のお約束を取消すから。ちか子さんに御紹介して上げなくつてよ。

O　そりやいかん。そりやいけませんよ。約束と皮肉とは何んの關係もないんですから。

M　何んです？　葉子さん。耳寄りの話ですね。

妹　實はね、さつき、今日家へちか子さんて、私のお友達が來るつてそ云つたら、太田さんが是非紹介して欲しいつて頼むのよ。だから私あ約束したんだけど、あなたに紹介して上げるわ、ね？

M　今日ですか？

妹　えゝ、今晩。

M　今日は少し困るなあ。（髭をこすり乍ら）十七日で床屋が休みですからな。

I　僕にも一つお願ひします。

妹　まあ、かう希望者が多くつちや、ちか子さんもきつと逢ふこつてせうよ。

I　何、大丈夫です。僕は、たとへ千人戀仇があらうとも……

妹　まあ、自信の強い方。

O　こいつは、兎に角、クロスワードパヅルをインキで書くつて奴ですからね。

I　所で美人なんですか、そのちか子さんて方は？

妹　そりやさうよ。絶世の美人よ。クレオパトラ、ネーケツトフイートつて方よ。

I　それぢや、是非お願ひし度いですな。

M　僕もです。安全剃刀がおありでせう、あなたのお家に？

妹　まあ、……（笑ふ）だけど、……（笑ふ）

M　何が可笑しいんです？

妹　私、白狀して了ふわ。その方はもう奥さんなのよ。今日、旦那様と御一緒においでになるのよ。

M　何あんだ。またかつがれた。

妹　お氣の毒さま、井坂さん。

I　いえ、何。僕は初から解つてたんです。

妹　負惜しみの強い方ね。

I　いや、ほんとです。シャーロックホルムス直傳の三段論法でね、僕にはちやんと解つてたんです。

妹　どう云ふの？

I　第一。——女といふものは、自分より不美人か、又は既婚の女に非れば、喜んで紹介する事を欲せず。第二。——彼女はクレオパトラはだしの美人なり。それ故、當然の歸結として、彼女は既婚也。——どうです。明快なもんでせう。

（一同笑ふ。）

見窄しき老船員（びつくりして眼を覺し、にや／＼とてれたやうに笑ひ、又そのまゝ眠つて了ふ）

——A——

息　ママ、おしつこ。

妻　しやうがないのね。ぢや、おいでなさい。（兩人退場）

父　（小聲で、兄に）だが心配なのは、初枝だよ。あれはもう、ほんとに宥してやつてるんかね。

兄　そりや、大丈夫だとは思ひますが。……あの通り無口で、思つてる事を少しも顔へ出さない女ですから、一體ど

う云ふ風に考へてゐるのか、それが一寸解りにくくつてね。茂雄を憎んでゐるのか、それとも、もう諦めて、……

母　あたしや。さうだと思ふよ。諦めてゐるつてね。

父　俺もさうだ。意志と云ふものを持たない人間は、どうしても運命に敏感になり易いからね。

兄　そんなら良いですが。

母　茂雄が歸つて來て、あれがちよつとでも厭やな顏をしたらね。それがあたしや何よりも氣になるよ。

父　さうだ。兎に角、十年もの間、茂雄はあれの氣持を、五通りにも十通りにも解釋し、考へつめてゐるだらうからね。兩人の眼が合つた瞬間に、茂雄はあれの瞳の輝きの一閃に、そのうちのどれが正しかつたかを、はつきりと判定するんだからね。だから、もし、あれの頭の中に、ちよつとでも怨むと云つた氣持があつたとしたらね、茂雄はそれを當然とは考へてゐても、きつと、どんなに淋しいか。……

兄　その氣持はよく解るんですが、又一方、もう一つの考へ方として、かう云ふのもありはしないかと思ふんです。つまり、自分の罪を、無抵抗に諦められて了ふより、却つて、責めてくれる、つまり責めると云ふ事は強く愛してゐる事だと云ふ事を感じ度い。さう云ふ氣持もありやしませんかと思ふんですがね。

父　そりやお前、想像した氣持と、經驗した氣持との違ひだよ。十年の煩悶を通して來た感情には、そんな夢のやうな餘裕はないと思ふね。ちよつと例は違ふが、例へば一人の乞食に食ひ殘しの鮭をやるとする。やる男は却つて氣が負けて、その乞食の感ずる自尊心の傷つきなどと云ふやうな事を氣にかける。だが、乞食にはそんな考へは夢にもない。永い間の苦しみや厭惡の鍛錬で、そんな厄介な重荷はとうの昔に棄てゝゐる。たゞ、食べたいのだ。たゞ、空腹なのだ。つまりそれだけの違ひがあるんだよ。一人の人の氣持などと云ふものは、その人がその氣持へ到達する迄の、いろ／＼の副作用の總和なんだから、ちよつと脇からそれを云々する事は六ケしい。

見窄しき老船員　（目をつむつたまゝ、ひどく大聲に）六人だい！　馬鹿！

父　（ちよつとびつくりしてその方を見たが、又話を續けて）尤も俺だつて、茂雄のやうな特殊の氣持は體驗したわけではないんだが、それに近い體驗をして來た人々に、お前よりは多く出合つてゐる。さう云ふ人々のさう云ふ場合の表情を知つてゐる。つまりお前よりは年を老つてゐる。年を老ると、兎角、氣持の解釋に、夢のやうな餘

裕を排斥したがるもんだ。單純になつて行く。つまり何んだね、ローマン何んと云ふ奴が身體の脂肪と一緒に、なくなつて行くんだね。

兄　そりや僕だつて解ります。だけど、茂雄は僕より若いと云ふ事をお忘れになつてはいけません。

父　だがこの十年はあいつにとつちや、お前の三十年にあたるかも知れないよ。年と云ふものは、暦の數に比例するもんぢやない。ある個人の頭の働きに比例するんだ。例へばだね、戀人を待つ五分間と、會つてから話をする一時間とは、どつちが永いとも云へないだらう。時の永さなどと云ふものは、感じるだけのものなんだからね。

兄　おや〳〵、驚いた。どうして、お父さんは中々ロマンチストぢやないですか。

父　何ね、たゞお前方に、一番解り易い、ぴつたりとした例をとつたまでの事さ。

兄　成程、感じ方。さう云や何んでもさうですね。惚れて通へば千里も一里つてね。同じ電車の中で足を踏まれても、相手が妙齢の婦人だと痛くない。別に梅干婆さんが踏んだからつて、足の細胞の刺戟が違ふもんですかね。

母　えゝえ、どうせ、あたしや痛く踏むよ。

兄　こりやいかん。飛んだ當りさはりがあつたものだ。ですが、自分の可愛い息子が云つたと思へば、同じ惡口でも腹が立たんでせう。

母　知らないよ。あたしや、感じ方なんてそんな當世風の便利なもんを持合せないからね。

兄　ハヽ。ですが、お父さん、當面の問題として、初枝の氣持を、一應改めて置く必要はありますね。

父　さうだね。

兄　僕が訊いたつて、たゞ笑つてるだけなんだからな。

兄の妻　初枝さんの氣持は、妾、よう く解つて居りますわ。あの時だつて、茂雄さんの事がこちらの新聞に出たあの時だつて、初枝さんは、ちつとも悲しみはなさらなかつたんですものね。妾、あの時は少し怒つて了つた位。

兄　それはお前、氣持の上に起る、一種の錯覺ぢやないのかい？

兄の妻　いゝえ、そんな事ないわ。初枝さんはほんとに晴晴としてらつしやいましたわ。でも、それから、段々、話をきいて、そりや尤もだつて事が、妾にも解つて參りましたの。

兄　どう云ふんだい？

兄の妻　なんでも、初枝さんの氣持はかうなんですつて、茂雄さんと結婚して、餘り何んの障害もなく、從つて、幸福も薄つぺらで、初枝さんにはそれが物足らなかつたのね。茂雄さんが大事にしてた、ほら、琥珀のパイプが

あつたでせう？　ちよつとでも見えなくなると、茂雄さんは眼の色變へて騒いだでせう。あれと、自分と、どつちを茂雄さんは餘計に愛してゐるのかつて、そんな事迄考へたんですつて。

兄　つまり、ノラだね。

兄の妻　でも、ノラのやうに、家を出て行つて了ふ程、それ程茂雄さんに、冷淡になれなかつたのね。兎に角、茂雄さんを愛してゐたのね。それで、自分の姿に何か知ら、あはれみの陰影（かげ）が出來なければ、茂雄さんはほんとに自分を愛してはくれない。さうして、その時こそ、自分も完全に茂雄さんを戀する事が出來るんだつて、さう思つてゐたらしいのね。いや、それを念じてゐたらしいのよ。それで茂雄さんがあちらへ行つて、あの女との問題が起り、さうして、たうとうあの事件が突發した。すると初枝さんの頭には、茂雄さんの淋しい姿が映つた。それと同時に、茂雄さんの頭の鏡に、自分の寂しい姿が映つてゐる事を感じた。それをはつきりと感じた。多年の念願が報いられたのですわ。初枝さんは、その時位、自分がほんとに戀されてゐるとはつきり感じた事はなく、從つて、その時位、茂雄さんを戀しいと思つた事はないつて、そ云つて居りましたわ。

母　まあ、妙な事を考へるもんだね、近頃の人達は。

兄（暫く考へてゐる）初枝の氣持は、ほゞ俺にも解つた。所で一つ、今度はお前に質問があるんだがね。

兄の妻　妾に？　何よ？

兄　お前は、お前も初枝の氣持が解るのかい？

兄の妻　えゝ。

兄　おや、それを肯定するんだね？

兄の妻　えゝ。どうして？

兄　つまり、同感したんだね？

兄の妻　何よ、變な方。

兄　何んでもないよ。……俺も一つ、事件を起すかな。

兄の妻　まあ、嫌（や）な方。あなた位事件があれば澤山だわ。

兄　何んだ？　俺がいつ、……

兄の妻　知らなくつてよ。

母　これ／＼、人様の中で夫婦喧嘩をする人がありますか。呆れた仲の良い夫婦だよ。

父　初枝はあんなに茂雄を愛してくれた。

兄の妻　ほんとでございますわね。ほら、毎年（とし）、クリスマスになると、年（ねん）にたつた一遍許される手紙が參つでせう。いつだつたかも、あの小撚りを送つて參つた時なんぞ、……

母　初枝が指輪にしてゐる、あれだらう？　あの小撚りは一體何んにするんだい？

兄の妻　よくは存じませんけど、何んかにするんでござい

ませう。あの内職で、お小遣ひが良い加減出來るつて書いてございましたわ。……それで、あの時なんぞも、妾が、何んの氣なしに、夜、目を覺したら、初枝さんがぱつちりと目を開けて、あの小撚りをぢつと凝視めてゐるんでせう。蓋ひをした電燈の下に、二つの瞳が光つてゐますの。妾がどうしたのつて、訊くと、靜かに、泣き乍ら話してくれましたわ。初枝さんはあの小撚りを見てゐるうちに、牢屋の鐵窓の下で、夜、この小撚りを撚り乍ら、たつた獨り、さして來る冷い月の光を浴びた、寂しい茂雄さんの姿が浮んで來るんですつて。そして、その瞳の中には、つきりと自分自身の姿が浮んでゐるのが見えるんですつて。さうやつて、初枝さんは毎日、夜になつては、闇の中に瞠いた瞳で、ぢつとその小撚りを凝視めては泣くんですつて。妾、何んだか、いぢらしくなつて……（涙ぐむ）

兄　さうか。おや、お父さんの心配も杞憂でせうね。だけど、可哀さうだな。それだけに却つて。おい、吉田君！茂雄はほんとに狂人なのかね。

友人A　今井博士の診斷ですからね。

兄　だけど、今井博士がわざと氣をきかせて、……

友人B　それも考へられますね。さうだとすると今井博士の人道心（ヒユーマニテート）は茂雄君と云ふ一個人を餘りに考慮に入れ過ぎたきらひがあつて、僕は益々博士の處置に疑ひを置きたくなるが。

友人A　いや、さうぢやない。事實氣狂ひなんだらう。今井博士のヒユーマニテートは、うつちやつて置けばそのまゝのものを、たゞ、診斷して、故鄕へ歸すやうにしたと云ふ點にだけあるので、診斷をした手段の過程に、不正をしはしない。俺はあの人の日頃の人格から推して、あの人が、そんなに迄學者的良心を、人情の前に消す位、センチメンタルだとは思はない。

友人B　それが疑問だと思ふ。俺はあの山路君からの手紙を見ると、その心理の動きに、少しの狂ひをも認められないんだがね。

友人A　例へば？

友人B　一々例は上げられないがね。

母　この間、あたしの所へ寄越した手紙には、何んでも一年にたつた一遍、クリスマスの時だけは、どんな願ひでもきけるんださうでございましてね。一人の男が、まさかとは思つたんですが、豚を一匹つて、さう申しました所が、早速頂けましてね、皆んなして、食べたつて書いてございましたよ。

友人B　豚の話は僕の所へも書いて來ました。あの手紙を

見ると、實際晴々として元氣ですね。……さうそ、一遍、何んでも、日が暮れて、皆んな列を作つて、獨房へ歸る時、梯子段を上るんですつてね。その時ばかりは、上を見ても、下を見ても、身長の高い、皆んな人の五六人は殺してゐるやうな、ものすごい獰猛な連中で、その時ばかりは、自分の身體が如何にも貧弱で、しかも、たつた一人しか人を殺してゐないつて云ふ事が、妙に淋しい氣がするつて書いてありましたよ。

母　まあ、それぢや、もうほんものの狂人ですわね。

妻　（息を連れて歸つて來る）

（一同ちよつと默る。）

父　（やがて）あれも、なまじ狂人の研究なんかしなければ良かつたんだ。木乃伊とりが木乃伊になつたんだ。ハハ、、、。

友人A　かう云ふ心理があるつて僕は何かの本で見ましたが、かうなんです。いつも精神病患者ばかりを相手にしてゐると、段々それが普通になつて來て、何んだか、自分獨り變なんぢやないのか知らと云ふ氣になるんですね。すると人間の妥協性と云ふか、同化性と云ふか、つい、知らず識らずのうちに、その男を、周圍に近着けようとする。何んでもそんな事でした。……そりあ、初めのうちは、つとめて避けようとするでせう。だが、それが、終ひには意思が疑ひを起すんです。さうすると、もう駄目なんですね。

弟の友人　まだかなあ？

息　早く着かないかなあ。僕飽きちやつた。ママ！　パパはどんな人？　良い人？

妻　あゝ、良い方だよ。

息　何を御土產にくれるの？　繪葉書？

妻　あゝ。（淋しく笑ふ）

新聞記者　（寫眞班。助手を連れて出て來る。あたりを探す。友人Aに近着く）あの、ちよつと伺ひますが、山路さんをお出迎ひの……？

友人A　えゝ、さうです。

新聞記者　（名刺を渡す）私、かう云ふもんでございますが、お寫眞を一つ。

友人A　（父に）よろしいんですか？　（名刺を渡す）

父　（名刺を見乍ら）あゝ、新聞の方ですか。かまひません。どうせ解つてゐる事なんですからね。

新聞記者　ぢや、こゝで待たして頂きます。（隅へ坐る）

――B――

I　（Aの連中の方を見乍ら）何んだらうね、あの人達？

P　さあ？

妹　……ぢや、もう一つ白狀して了ひますわ。ちか子さんはね、お兄さんの許婚だつたのよ。

佐野　さうですか。それで解つた。巴里で御一緒に下宿してゐた時も、しよつ中、手紙を氣にしてゐらつしやつたから。私もどうも變たとは思つてゐたんです。下宿の扉（ドア）の隙間から、するするつて云ふあの音。僕のやうな木念仁でさへたまらなく嬉しく、懷しい氣がしましたからね。……私は一邊、鎌を掛けてね、フランスぢや、一週間妻を放つて置けば、妻はその貞操を保管する義務を放擲する權利があるつてね、そ云つて上げたんです。そしたら、石本君は厭やな顏をしてらつしやいましたつけ。やつぱりさうだつたんですかね。

M　もしもし、何んです、淑女（レデイー）に向つて、そんな。洋行すると、どうも人間が赤裸々になり過ぎて、……

佐野　おやおや、聞いてたんですか？　隅へ置けない哲學者だ。

妹　（笑ふ）だけど、佐野さん。そんなありふれたんぢやないのよ。そりや、とつても現代的な別れ方なのよ。

佐野　どう云ふんです？

妹　お兩人（ふたり）が横濱で別れてから、一年經つたのね。さうすると、兄さんは、ちか子さんの手紙の中に、ふと、或る束縛の匂ひを感じ出したのですわ。ちか子さんが、二人の約束を束縛に思ひ出したのに、氣がお着きになつたのですわ。實際、ちか子さんはその時、今の夫の方と段々親しくなり始めてゐらつしたのよ。兄さんはあゝ云ふ氣持の自由な人ですから、ちか子さんが、まだはつきりとそれを云ひ出さない先から、もう諦めて了つたんですね。それで手紙を書いた。あなたが、私との約束を、あなたの新しい戀の門途に際し、少しでも束縛として感じられる事を、自分が知らんふりをしてはゐられない。さうしたら、ちか子さんから答へが來て、別れさせて頂きますわつて云つて來たんですつて。それでお兩人はあつさりと別れて了つたのね。そして、別れる時のお約束として、その後半年の間に、必ずお互ひに結婚して了はうとお約束したんですつて。そして、今度日本で會ふ時は、お互ひに既婚者として、氣持よく會はう、お互ひに惡い事でもしたやうに、氣まづい思ひをし合つたり、又は、かう云ふ關係の男女がよくするやうに、お互ひに仇敵（かたき）でも見るやうな、あんな厭やな眼つきをしないで濟ましたいとお約束なすつたんですつて。

佐野　さつぱりしたもんですね。こんな事云つちや失敬だけど、それぢや、ほんとに戀し合つてゐたんぢやなかつたんですね。

妹　いゝえ、それが可笑しいのよ。兄さんからもその後手

紙で、僕はあの手紙を書き、あの返事を受取つた今、一番ちか子さんを戀してゐる事を感じる。だからと云つて自分には、もうそれを取消す力はない。それは丁度、あの河の底深く、投げこんで了つた彼女とのエンゲーヂリングが、永久に、自分の指には戻らないのと同じ事だつて、さう書いてお寄越しになつたのよ。お兄さんは、指輪をセイヌ河へ投げこんでお了ひになつたんですつて。夕陽が赤く、ノートルダムの屋根を照らしてゐる。お兄さんは、サンミッシエルの欄干にお顏を伏せて、頬がつめたく冷え切つて了ふ迄、お泣きになつたんですつて。

佐野　そこへ、今度お連れになる。奥さんが通りかゝつたと云ふ段取りですかね。

妹　それは、どうだか知らないわ。

佐野　で、そのちか子さんの方は？

妹　ちか子さんもよ。お兄さんの手紙を受取ると、私の所へやつて來て、散々泣いていらつしやいましたわ。それで、妾に、兄さんにどうかしてくれなんて云ふんぢやなく、妾、近いうちに、木村と、今の夫の方、その方と結婚するのよ、なんて、そ云つてらつしやるんですもの。妾には、あの兩人の氣持はまるで解らないわ。よく訊いて見ると、お互ひに深く愛してゐるからこそ別れるとも云ふのよ。

M　つまり結婚は戀愛の墓場だと思つてるんですね。さうだとすりや、却つて古いですね。そんな思想はもう三千年も前に、印度の山奥の、……

佐野　印度の話はもう澤山ですよ。それでなくても戀の話は熱いんですから。

妹　そりや古いかも知れないわ。でも、結婚に依る幻滅の悲哀を、お互ひに深く愛し合つてゐる人に依つて感じ度くはないつて云ふらしいのね。

佐野　そんな氣持の後で、石本君が、初めて出會つた異國の少女の好意を受入れるのは當然です。それに、そんな約束迄あつちや、あちらの女はね、兎に角、……

（このあたりから、Aの山路の妻、ぢいつとBの會話の方を凝視め出す。その瞳が妙に光る。）

佐野　（續けて）……情熱的で、しかも、その情熱を理智で操る事を心得てるるんですから、あちらの女はね。

I　佐野さん、又あちらの女ですか。

佐野　いや、なに。

I　純粹人種學の立場ですか。

佐野　たゞ、例に出しただけです。今、葉子さんから、石本君とちか子さんとの戀の件を聞いてたんです。

C　え？　石本君とちか子さん。ちか子さんて、さつきの人だらう？

佐野　許婚だつたんですつてさ。

I　さうだらう。僕はどうも變だと思つてゐたんだ。やつぱり小說家の觀察は鋭いな。送りに行つた時、石本の瞳がどうも一つ所を凝視めてゐるんだ。俺達の言葉なんかてんで上の空で、たつた一本のテツプをぢいつと握つてゐるんだ。あの時の日傘の主が、そのちか子さんだつたのか。人を見るのはこつちの商賣だからな。

M　小說家なんて、まるで宿屋の番頭みたいなもんだな。

O　あの詩ね、何んかの雜誌に出てた、ありや、どうもただ事ぢやないと思つてたよ。

佐野　だけど、葉子さん、僕には石本君の氣持は解りますよ。あの人には自分の爲に、一人の女性が少しでも邪魔を感じてゐると云ふ事は、とても堪へられない事だつたでせうよ。あの人は、そりや消極的な男だつたんですからね。進んで、人を幸福にすると云ふより、その人のその時の幸福に、少しでも陰影をさしちやいけないと、きつと思つたんでせうな。例へば、あの人と二人で、賑やかな人通りを歩いてゐるんですね。向うから、女連れがやつて來る。すると、定つて、あの人は下を向いて通るんです。僕が訊くと、答へる。つまり、二人の女のうち、どつちかを見る。さうすると、殘りの一人はきつと淋しく感じるに違ひないつて云ふのです。

M　そりや詭辯だ。プラトンだつたか、ソクラテスだつたか、それともアリストテレスだつたかに、こんな話がある。まあ、プラトンにして置くよ、一番短いから。一人の女がそこへやつて來てかう云ふんだ。伜を官吏にし度くない。正直にしてゐれば、下の者から、融通の利かない野暮な奴だと煙たがられ、不正直にすれば、神の御意に背く事になるからつて。するとプラトンが云ふ。そりや違ふ。正直にすれば、神の御意に叶ふし、不正直にして、賄賂でも取つてやれば、下の者からこいつ話せるわいと、喜ばれるぢやないかつて云ふのがある。つまり石本の場合だつて、二人の女に出會ふ。一人の顏を見てやれば、その女は反對に非常に幸福になれるぢやないか。

佐野　いや、僕の云ふ意味はさうぢやない。つまり、ものには、全て、さう云ふ二つの見方がある。石本君は常にその消極的の方をとると云ふ事を云つてるのさ。

I　そりや、さう云ふ所はありましたね。實際氣の弱い所がね。いつだつたかも、夜、どつかの橋の上で、年頃の跛の娘が綺麗にお化粧して通つたのに、すれ違つた時、あの男は眼に一杯涙をためてゐましたつけ。

妹　お兩人の戀はほんとにプラトニックだつたのね。

佐野　さうですね。結婚と云ふカテゴリーに束縛されなくても、今迄通り愛し合へると云ふ所に、誇りをさへ感じ

てゐるのかも知れませんね。

S　いや、戀人の戀と、夫婦愛とを使ひ別けようと云ふ、巴里大流行の行き方ですよ。

I　佐野さんのネクタイみたいな戀だな。

M　やつぱり毛唐の中にゐると、考へ迄も毛唐らしくなるんだね。

佐野　おい君、毛唐とは何んです。君のやうなインテリゲンチヤの口から、まだそんな明治初年の、ちよん髷のやうな言葉を聞くと、僕は實際時代錯誤(アナクロニズム)を感じますね。あちらへ行つて、ヂヤツプと云ふ言葉を聞いた時の、あの淋しさが、ちよつとでも君方に解つたらなあ。

（汽笛の音。）

S　あ、着いたらしい。

――AとB――

（皆、おや／＼云ひ乍ら、窓口へ行く。）

佐野　やあ、見えたぞ。

P　見える／＼。どうだい、あの大きな船の姿は。

弟　やあ、着いた。

I　いゝなあ。僕は船を見ると、このまゝ、あれに乘つて旅がしたくなるよ。

Aの方の母　初枝！

息　（背伸びして）どれ、どれ？

弟　（抱き上げてやる）ほら。

息　あれ？

佐野　あの大きな船が、まるで扇風器の前の蝿のやうに無力に、木の葉か何かのやうに搖れるんですからね。印度洋のモンスンと來たら、哲學も絲瓜もありやしない。山のやうな黒い波が、かう、……

I　佐野さん、見たやうな事を云ひますね。

佐野　だつて君、僕は、……

I　いや、君が印度洋を船で通つたつて云ふ事は事實ですよ。だけど、君が、その嵐の最中、果して眼を開けてゐたかどうかは、たゞ惡魔のみこれを知る、ですからね。

（皆、笑ふ。）

郵船の小僧　（這入つて來る）皆さん、船が着きました。（去る）

P　何んだ、ありや？

佐野　知らせに來たんでせう。

I　ベルみたいな男だな。

佐野　ぢや、僕が行つて來ますから、皆さんこゝで待つて下さい。

Bの方の父　それが良からう。こゝの方が靜かでいゝ。

佐野　（去る）

友人A　おや、皆さん、參りませう。

Aの方の父　初枝！　氣を落ちつけてな。

妻　（やはり、淋しく笑ふ）　はい。

新聞記者　（友人Aに）　おや、こゝでお待ちして居ります。

（助手に）　這入つてるね？

助手　（乾板を調べ乍ら）　えゝ。

息　僕、嬉しいな。

（Aの組の人、全部去る。）

見窄しき老船員　（眼を覺し、いきなり大聲に）　六人だい？

——B——

I　（新聞記者に）　ちよつとお伺ひしますが、（Aの人々の後姿を指して）　今の人達は何んです？

新聞記者　あれは、山路つて云ふ醫學士を出迎へる人達なんです。

O　何か事件でもあつたんですか？

（一同聞耳を立てる。）

新聞記者　えゝ。もう十年程前に、精神病を研究しに、アメリカへ行つたんですが、向うの病院で研究してゐるうちに、そこの看護婦で、Miss Lucie つて云ふ女に惚れましてね、……

M　Miss Lucie 良い名前だな。

新聞記者　まあ、その擧句、戀の嫉妬から、同僚の醫師を殺したんです。ピストルでね。勿論外人です。それで、無期懲役の刑を受けてたんですが、今度その人の先生で、あの有名な今井博士が向うへ行つて、精神鑑定の結果、全く精神に異常があると云ふので、送還されたのです。何んでもその足で松澤病院へやられるらしいですね。

I　そりや可哀さうだ。

妹　だつて奧さんでせう、さつきそこにゐらしつた綺麗なお方？

新聞記者　え、さうです。

妹　お可哀さうだわ。

O　（ふざけて）　これも運命のいたづらか。全五卷。

妹　こんな時にふざける人、妾嫌ひ。

O　これはいかん。あなたにそんな事を云はれると、僕は今の奧さんよりも、もつと慘めになるんです。

妹　まあ、知らなくつてよ。

M　太田、君は御婦人にはもてないよ。

I　（新聞記者に）　それであれですか、……

父　（さつきから、窓の外を見てゐる）　上陸（あが）つたらしいね。

母　（同じ）　あんまり、今朝慌てたもんだすさかいに、眼鏡を鏡臺の上へ置いて來て了ひましたわ。

（外から悲しさうなヴァイオリンの音が流れて來る。西班牙の何か民謠。皆んな暫く聞いてゐる。）

（やゝ永き間。）

O　來たらしいぞ。

S　どれ？

（この時、Aの組の人々、どや／＼と這入つて來る。皆んな打沈んでゐる。船の事務長とボーイが從いて來る。妻は、兄の妻に依りかゝつて、顏を埋めてゐる。Bの組の人々は、變な顏をして見てゐる。息子が縋つてゐる。その他、人物適宜の出入あり。）

――A――

息　パパはどうしたの？

（一同無音。）

息　よう、ママーつたら、よう。

妻　（歔欷く）

母　坊や！

事務長　そんなわけで、まことに申譯ございませんが、いづれ充分調査致しまして、その、責任を明らかに致す心算で居ります。

新聞記者　お着きになりましたか？

友人A　いや。

新聞記者　と申しますと？（直感的に感づいたらしく、口を噤ぐ）

事務長　兎に角、上陸の間際で、誰れも氣が付かなかつたのでした。つい、今しがた、どうもあの方の姿がお見えにならないと云ふので、それから、大騷ぎになりまして、お部屋を探しましたら、お机の中に、これがあつたので、……（ポケットを探る）

――B――

妹　どうしたんでせうね？

佐野　さあ？

――A――

友人B　だつて、君、あの人は特別監視附きぢやなかつたんですか？

事務長　はあ、それは、さうだつたんですが、何しろ、その、……

父　出來て了つた事は仕方がない。見せ給へ。

事務長　はあ。（ポケットから三通の手紙を渡す）

父　（表を見て、二通を友人Aに渡し、一通を開く）

母　（そばへ寄る）

兄　（同じ）

父　（無言に讀む。震へる）

母　（歔欷く）

友人Ａ　（一通の表紙をＢに示し）　お見せしちまうか？

友人Ｂ　そりや、ねえ。あゝ。

友人Ａ　（その一通を兄の妻に渡す）

兄の妻　初枝さん！

妻　（默つて泣いてゐる）

兄の妻　（兄に）　後にしませうね？

兄　（默つてうなづく）

友人Ａ　（Ｂと共に一通を讀む）

見窄しき老船員　（眼を覺し、急にどなる。極めて悲痛に）

六人、六人！　後から後からとひり出しやがる。一體全體、ど、どうしてくれるんでえ。馬鹿！

（そつちへ、氣を取られるもの、取られないもの。）

——Ｂ——

母　五郎どないしたんだつしやろ？

父　まだ見えんか？

——Ａ——

ボーイ　（ポケットから小型の額縁をとり出し、小聲でパーサーに）お渡し致しますか？

事務長　（小聲で）　あゝ。他の方にね。

ボーイ　（母に渡す）

母　（歔欷き乍ら）　初枝の寫眞ですわ。

ボーイ　お机の上にずつと飾つてございました。

父　猫は死を豫感すると、默つて、そつと、人の見ない暗い緣の下へ這入つて行く。あれもたつた獨り、人のゐない、夜の艫邊に立つて、闇の中に白く渦巻く、暗い水を見たのだらう。青白い兩手が水を摑んで、無意識的に船に向つて突き出される。……

（方々で低い歔欷。）

（Ｂの組の人々は、ひそ／＼と語らひ乍ら、悄然と見てゐる。）

新聞記者　（小聲で事務長（パーサー）から何か訊き、ノートしてゐる）

兄　（ボーイに金をやり乍ら）　御苦勞。おや、兎に角、荷物を稅關の方へ廻して置いてくれ給へ。後で宿の者をやるから。

ボーイ　はあ。（帽子を脫いで、お辭儀して去る）

（次のＢの會話のうち、各々、ひそ／＼と談合す。妻だけ、脇で默つてゐる。）

——B。（早く、すら／＼と、）——

佐野の聲（突然裏で）ブラボー！　花嫁花婿の御入來！

石木（外人の女と手を組んで、元氣に這入つてくる）やあ、皆さん。有難う。

母　五郎！

（一同、ちよつと變な氣まづい動搖。やがて、Aの事は忘れたやうに、陽氣になる。）

O　ウエルカム！

M　よう。

J　ビエンブニユ！

S　元氣で良かつたなあ。

I　（佐野に、小聲で）シヤンですね。

妹　兄さん！

石木　あゝ、葉ちやんか。さう／＼、紹介しなくちや。僕の妻だよ。Suzanne Alphandéry, Madame Ishimoto だ。C'est ma sœur, Mlle, Yōko.

Suzanne.（やゝ極り惡るさうに。お辭儀をする、小聲で、日本語で）さよなら。

石木　Ce n'est pas "S.yonara". Ça signifie "au revoir." tu dire dois "Konchiwa"（父の側へ進み）お父さん、暫く。お母さんも來てたんですね。あんまり小さいから。

母　（泣き聲で）丈夫でゐる何よりだね。

石木　お母さんに、僕の妻君を紹介しなくちや。

母　いやゝ、わて。

石木　そんな事云つたつて駄目です。どうせするんですから。食ひつきやしませんよ。

母　ほんなら、お前通辯してんか。

石木　えゝ。

母　それに、あのチユつて吸ひつく奴は御免やで、えゝか？　初めから斷つといてや。

石木　ハ、、、大丈夫ですよ。（妻に）Ma mer.

Suzanne.（愛嬌よく進み、手を出す）こんちは！

母　（おづ／＼手を握り）どうぞ、お心安うに。

石木　お母さんの大阪辯にも困つたな。折角、船の中で正統の日本語を教へて來たのに。

妹　兄さん、西洋館が出來てゝよ。

父　佐野さん、自動車は？

佐野　さう云つてあります。もう直ぐ來るでせう。

石木　おや、荷物に大丈夫ですね。

佐野　えゝ、早速新家庭へ送らせます。郵船の方で、すつかりやつてくれるらしいですよ。

（その時、外で又さつきの悲しいヴアイオリンが聞えて來る。これはこの劇の終り迄續く。）

石木　何んだい、あれは？

佐野　放浪露西亞人のヴァイオリン彈きだよ。どこの波止場にもつきもんだ。君も聞いたらう、マルセイユで？　黄昏の異國の港で、あの悲しいヴァイオリンの音を聞くと、實際つくづく、國を離れて來てゐる事を想ふね。

石本　さうか。日本も中々エキゾチックになつたね。

佐野　あゝ。露西亞から多勢流れこんでるからね。

O　何んて、不景氣な曲を彈いてゐやがるんだ。ブライダルマーチでも彈かないかな。……タンタララー、タンタララー、……（一同陽氣に和す）

——A——

（その時、突然、甲高い異樣な笑ひ聲。）

（一同、Aの組もBの組の人々も、びつくりしてその聲の主を見る。）

妻　（いきなり兄の妻のふところから、さつきの夫の遺書を取り、そのまゝ前へよろけ出る。手紙をかざし）小撚！（ぢいつと、自分の指を見て、小撚りの指輪を外す。その拍子に手紙が下へ落る）

息　（手紙を拾ひ）繪葉書？　（妻が默つてゐるので、何んとなく恐くなつたやうに、兄の妻にすがり）僕、恐いや。

母　（おろおろと、泣き聲で）初枝！　初枝や！

兄　おい！

妻　（そのまゝぢつと手にした小撚りの指輪を凝視め、よろよろと前へ出て、今度はどろんとした眼を動かし、スザンヌの姿が眼に入ると、そのまゝよろよろと近寄り、ぢつとその顏を見すゑる）

——AとB——

Suzanne.　（びつくりして、石本にすがる）

石本　（スザンヌを抱く）

妻　（默つて凝視めてゐる。やがて、聞えない位に）Miss Lucie! Lucie!

（緊張した妙な沈默。）

新聞記者　（かげの方から、そつと、寫眞を寫す。そのシヤツターの音が異樣に高く響く）

（外を放浪ヴァイオリン彈きが、悲しいファンダンゴーを彈いて行く。）

見窄しき老船員　（眠り乍ら、にやにやと笑ひ、それが、やがて、悲痛な表情に變つて行く。口を動かすけれど、何も聞えない）

（この緊張し切つた、活人畫的沈默の中に、静かに幕が下りて行く。）

一九二六、三、八

# 歸つて來た噂

——喜劇一幕——

人

吉　村　　作家（廿八九歳）
小暮京子　吉村の妻（活動女優）
青　木　　吉村の友人
馬　場　　同
山住れい子　京子の友達（活動女優）
記者の聲　（登場せず）

時

現　代

所

東京の郊外

舞臺　吉村の家。書齋、簡單な氣持のいゝ洋間。左手に玄關へ通ずる戸口。右手に次の間へ通ずる戸口。正面、窓から、青葉の茂つた庭が見える。晩春の夕暮時。

吉村と青木と馬場、三人各々煙草などをふかし作ら、氣安く雜談をして、何か高らかに笑ひ合つてゐる。

馬場　ほんとかい、吉村？　ハ、、、、。
青木　ハ、、、、。
吉村　ほんとだとも。
青木　（さも感心したやうに）成程ね。人は見かけに依らんもんだね。
馬場　ハ、、、、。
吉村　だけど、誰にも云つちやいかんよ。絶對に喋らんでくれつて云はれてるんだから。
馬場　大丈夫、大丈夫、絶對に喋らん。
吉村　ほんとにいゝかい、こゝだけの話なんだから。
馬場　解つたよ。
青木　だけど、あいつも仕合せもんだね。お禿のくせに、女優さんに惚れられるなんて。
吉村　夜汽車の二等で、二人竝んで腰かけてた所を、窓の外からチラつと見られたんだから、あいつも運の盡きさ。
馬場　その前島つての、やつぱりあれ？　活動の？
吉村　あゝ。
青木　俺もあやかりたいもんだ。
馬場　せめて浮名位はねえ。
吉村　（ちよつと見廻して）お菓子でも買つときやよかつ

た。獨りだとどうも氣がつかんでね。

(隣家から、蓄音機が聞えて來る。) (Mondolss Im—Canz: notte)

馬場　隣りか?

吉村　あゝ。若い後家さんでね。ついこの間旦那さんに死に別れたんだ。一日蓄音機を鳴らしてゐるか、でなけりや、縁側で、ぼんやり空を眺めてゐたり、爪を剪つてゐたり、さうかと思ふと、ほら、おめでたうつてお菓子があるだらう、あいつん中から、匙で甘納豆を撰り出してゐたり、……

馬場　そんなくはしく覗いたのか?

吉村　いや、自然と見えるんだ。この間なんか、白い絹のワイシャツをひろげて、鋏で四角く切つてゐた。きつと死んだ旦那のワイシャツだらう。そいつでハンケチを造へてゐた。縁(へり)へレースなんかくつつけてね。

青木　成程ねえ。

(間。)

青木　(ゆつたりと煙草をふかし)　奥さんがゐないと落着くね。

馬場　何んだい、他人(ひと)の家(うち)へ來て、……

青木　奥さんがゐると、他の者はすべて第二義的で、……

吉村　そんな事はないよ。

青木　どうだか。

吉村　そりや僻みだ。獨りもんのね。

青木　さうかね。

馬場　(新聞を讀み乍ら)　可笑しな事があるもんだ。

吉村　何んだい?　何か出てゐるのか?

馬場　いや別に何んでもないが。

(間。)

馬場　又鳴らしてゐるね、鼻を。

青木　(氣がついて苦笑する)

吉村　癖と云ふものは妙なもんだ。

馬場　(又新聞へ眼をおとす)

吉村　僕は人間が何かしら癖を持つて生れて來ると云ふ事を考へると、妙に宿命的なものを感じて淋しい氣がするよ。

青木　ほんとにね。……僕はこの間、久しぶりで中學の舊友に出會つたんだが、その男は實に奇妙な癖を持つてゝね。話をしてゐると、相手の着物を摘むんだよ。こんな工合に。……

吉村　變な癖だね。

青木　それがどうだらう、もう中學を出て、かれこれ十年も會はなかつたんだが、やつぱりやるんだ。そいつをね。話をしながら、無意識的に、僕の廻しの袖を摘んでゐる

んだ。

馬場　（新聞を讀み乍ら）低氣壓がボルネオから臺灣の方へ拔けて行つたさうだ。內地へは寄らんらしい。

青木　それから僕は云つてやつた。相變らずだねえつて。その男は淋しさうな顏をして笑つてゐたつけ。（考へこむ）

（間。）

何んだか、ひどく粗末な服裝をしてゐた。色の褪せた薄いクレバネットの肩をつぼめて、それが又、あの賑やかな銀座の通りだけに、妙に貧相でね。僕達は立話をしてゐたんだが、美しい服裝をした女が通る毎に、その男は妙におど／＼道をあけたりなんかしてね。

吉村　屈辱に慣れて了つたのかね。

青木　いゝや、さうぢやない。女の人があんまり傍を擦れ違ふと、その匂ひが、別れた細君を想ひ出させていけないと云ふのだ。

吉村　細君と別れたのか？

青木　棄てられたらしい。その當座は、火のない空虛な部屋の中で、女の殘して行つた移り香を、蒲團の襟に感じ乍ら、ぽかんとして、寢靜まつた夜など、女の腕時計を獨りでこつ／＼碎いてゐたさうだ、金鎚で。……

吉村　金鎚でねえ。

馬場　（新聞を讀み乍ら）三つ子を生むなんて、可笑しな奴だ。母子共に健在とはお目出度い。

吉村　お目出度いかね。

馬場　お目出度いよ。

青木　時計の硝子を粉微塵に碎く音は、妙に佗しいものだつてね、あいつは。……

吉村　さうかね。僕にはそんな經驗はないが。だけど、どうして又棄てられたんだい？

青木　何んでも二人があんまり仲がいゝので、一つの幸福を見ると、必ずそれを崩したがる連中が、陰で散々男の惡口を、有る事無い事、細君の耳に入れたんだね。金棒引きと云ふ奴だ。

吉村　だつて君、そんな事。そんな事位でぐらつくやうぢや、なんだね、その女つてのが、つまり愛が足らなかつたんだね。

青木　君は善良だよ。女なんかと云ふものは、しよつちゆう二本の觸角を伸ばして、幸福がどつちにあるのか、それぱつかり探してゐるんだ。いつも門口に兩足を踏ん張して、男の愛でわづかに引張られてゐる貧しいじめ／＼とした家の中と、それから、明るい燈火の溢れた町の大通と、ぎよろ／＼見比べてゐるんだ。少し惡口でも聞かされて見給へ、まるで尻尾を放した野犬のやうに、……

吉村　君は人生の暗い方ばかり見てゐる。
青木　君は又人生の明るい方ばかり見てゐる。
馬場　（新聞から眼を離たずに）チエッチエ蠅つてもんは可笑しな奴だね。
吉村　（思はず笑ひ出して）君はさつきから、やたらに可笑しがつてゐるんだね。ひとりで新聞なんか讀んでさ。何んだい？　チエッチエ蠅？
馬場　やたらに眠くなる病氣らしい。一月も二月も眠り續けるんだ。さうしてお終ひに死んで了ふんだ。眼が覺める前にね。
青木　何んの話だ？
馬場　何ね、チエッチエ蠅つて云ふ蠅の一種が、その黴菌を媒介するんだよ。あつちへぶん〳〵、こつちへぶんぶん、撒き散らして廻るんだ。
吉村　うるさい奴だね。
青木　どこにゐるんだい、そいつあ？
馬場　埃及さ。埃及の風土病だ。
青木　なーんだ。あちらの話か。日本にはゐないんだらう。
吉村　いやゐるよ。チエッチエ蠅はゐないが、あつちへぶんぶん、こつちへぶん〳〵、やたらに他人の惡い印象を撒き散らして歩く奴がね。そいつに刺されると、お互ひに愛とか友情とか云ふものが眠つて了ふ。良い評判は間接に聞くと二倍に嬉しいが、惡口は二倍に不愉快だ。俺はちよつと便所へ行つて來るよ。便所へ行く間も、安心して殘して行ける友達は有難いよ。留守になると、直ぐ惡口を云はれさうな感じのする男はやり切れないからね、全く。（立上る）
青木　豫防線を張るな。
吉村　ハヽヽ、ちよつと失敬。
青木　皮肉な奴だ、あいつは。
馬場　おや、こゝの細君のゴシップが出てゐるぞ。小暮京子つてのはあれだらう、吉村の細君の事だらう。
青木　あゝ。
馬場　（讀む）『小暮京子、ロケーションの一夜。……』
青木　どれ〳〵。（覗き込む）
（兩人暫く讀んでゐる。）
馬場　やつぱりね。
青木　ほんたうなんだね。僕はちよつとそんな噂を耳にしてはゐたけど。
馬場　俺も聞いた。
青木　さうだらうねえ。
馬場　大體女房をたつた一人で、あんな遠くへなんか放つとくのが間違つてる。愛情は距離だつて云ふからね。
青木　活動なんて、君、暗いセットの岩山はあるし、それ

に、ロケーションの夜汽車なんてねえ、僕も一遍、中央社の撮影助手をして、湯ヶ島の方へ出掛けたけど、實際亂れてるからね。主役をやつて、ラヴ・シンばかり寫してゐたら、そりや自然とそんな工合に、……

馬場　吉村は讀んだのかしら、この記事？

青木　まだゝらう。讀んだら、あんなにすましちや居られまい。

馬場　さうかね。だけど、あいつ、妙に自信の強い男だから、存外安心してるんかも知れないよ。

青木　それもさうだ。あいつ實際細君を信じてゐる。

馬場　良く云へばね、惡く云へばあれだ、ほら、雪國の汽車さ、のろいつて、……

青木　しつ！

（吉村が這入つて來る。青木、馬場急に口を噤ぐ。）

吉村　噂が出たぞ。二つ。

馬場　（ちよつと氣まづさうに、繕ふやうに青木に話し掛ける）さつき二人で話してた男ね、何してるんだい、今？ほら、銀座で君が久しぶりに會つたつて男さ。

青木　あゝ、あれかい。何んでも今は、どこか毛織物の會社へ出てゐるらしい。こんな事云つたよ。俺は人の脊中ばかり見て暮してゐるつてね。朝は巨大な建物に吸はれ行く無數の人の後姿。夕べは郊外の小驛の闇に消えて行く、疲れた灰色の後姿。後姿はものを言はない。――こんな詩を作りましたがね、なんて云つてゐた。私には幸福が皆んな自分に脊中を見せて行くやうな氣がする、とも云つてゐた。隨分老けてね。

馬場　この椅子はいゝね。（ゆつたりと坐り直して。吉村に）高いだらう？

吉村　いゝや、そんなに。……女房の誕生日に買つたんだ。

青木　（何んだかひどく感心したやうに）感服ね。

馬場　（段々探りを入れるやうに）細君、いつ歸つて來るの？

吉村　京十？　撮影が濟むと直ぐ歸るだらう。一本つて契約だから。

青木　君は行かんのかい、向うへ？

吉村　京都？　あゝ。

馬場　大丈夫か？

吉村　何が？

馬場　何がつて、……

吉村　下らん事云ふな。

馬場　君の細君は誰にでも好かれる性(たち)だから、……

青木　さうだ。第一亭主に迄惚れられてゐる。

吉村　馬鹿。

青木　それに若くて美しい。子供でも連れてりや細君とも

見えるし、獨りでゐれば令孃とも見られるし。ちやうど、……

馬場　君はほんとに安心してるのか？

吉村　（事もなげに）當り前さ。

馬場　さうかねえ。

吉村　可笑しな奴だな。君の口眞似ぢやないか。

馬場　君は何んにも聞かん？

吉村　何んにもつて？

青木　こんな事云ふのは不愉快だけど、知つてゝ默つてゐるのも何んだから、……

吉村　何が？

青木　時々妙な噂を耳にするんだがね。

吉村　京子の事か？　そりやさうだらう。女優だの作家などと云ふものは、兎角色眼鏡で見られたがるもんだ。氣持が朗らかだから、さう云つた男女の事に餘り無頓着でね。

青木　友情の垣根を越えずに、一對の男女が交際出來ると思ふのは、そりや一種の感傷だよ。異性から情合ひを感じまいとするのは、衣を濡らさずに、五月雨(さみだれ)の中を行くやうなものだ。

吉村　だけど、出來ない事を出來ないと諦めたり、本能を本能と認めたつて、それが何んになる？　われ〳〵は、かくある、と云ふ事の他に、かくある可し、と云ふ事を考へなくちや。つまりそのあれだ、sein の上に sollen を、……

馬場　吉村！

吉村　（馬場の方を振返つて）え？

馬場　議論の中ばで失敬だけど、君は怪しからんよ。

吉村　何故だ？

馬場　君に聞いた方法を實行したんだけど、やつぱり出來たらしい。

吉村　さうか。

馬場　さうかぢやない。困るよ。

青木　二人目だね。

馬場　あゝ。いやんなる。

吉村　ぢや、養子に貰ふかな、俺が。

馬場　馬鹿を云へ。誰れがやるもんか。折角造へたもんを。

青木　（感心して）成程ね。

（玄關のベルが鳴る。）

吉村　誰か來たな。

（玄關の方へ出て行く。）

女の聲　（玄關の方で）あら、ゐらつしたの？　無論お留守かと思つて。

吉村の聲　いゝや、そんな事、……

女の聲　御迷惑ぢやないの？　奥さんの御留守に上つたりして。
吉村の聲　いゝえ、いえ、ちつとも。
青木　女の聲だね。
馬場　やつぱり奴さん。
（兩人頻な見合せる。）
女の聲　あら、お客様？　この靴？
吉村の聲　友達ですよ。
女の聲　よろしいの？
吉村の聲　構ふもんですか。さあ、……
（吉村、派手な羽織を着た若い女を連れて這入つて來る。）
吉村　（紹介する）　山住れい子さん。女房のお友達。こちらが青木君。それから、馬場君。
（青木、馬場、ちよつと腰を浮かせて挨拶する。）
れい子　（愛嬌よく）　初めまして。
青木　（馬場に）　失敬しようか。
馬場　あゝ。（立上らうとする）
吉村　何故だ？
青木　でも、……
吉村　可笑しな奴だな。直ぐそんな風にとるのかね。
馬場　（中腰になつたまゝ）　いや、そんな譯ぢやないが、……
吉村　そんならいゝぢやないか。
馬場　あゝ。（やつと腰を下す）
れい子　失禮致しましたわね。
馬場　いや、別に、……
れい子　（吉村に）　今日は御注進に伺つたのよ。
吉村　何んです？
れい子　後で云ふわ。
馬場　やつぱり失禮しますかな。
れい子　あら。そんな意味ぢやないのよ。
吉村　今云つたらいゝぢやないですか。皆んな氣の置けない友人ですから。
れい子　えゝ、ぢや今、放送しますわ。それよか、ちよつと髮を直して。……いゝ洋服箪笥ね、これ。鏡がついてるぢやないの。（右手の壁に置かれた洋服箪笥の鏡で、ちよつと髮を直し乍ら）　風が強いのよ。……顔が青いわね。あたし。
吉村　青葉の光ですよ。
れい子　（窓の方へ眼を移して）　ほんと。もうこんなに茂つたのね。お宅は庭が廣いからいゝわ。都會に居ると季節がちつとも解らないんですもの。
（小鳥の囀る聲が聞えて來る。）

あゝ、何あに、あれ？

吉村　文鳥です。さう／＼、すつかり忘れてゐた。今日はまだ一遍も餌をやらなかつた。留守中に干乾しにでもしようものならそれこそ、……ちよつと失敬。（あわてゝ右手の戸口から次の間へ這入る）

（ちよつと話題がなくなつて皆んな默つてゐる。）

（間。）

青木（唐突に）やつぱり、あの？　活動の？……

れい子　あたくし？　はあ。

馬場（少し圖々しく）ぢや、前島かをるさんつて人知つてますか？

れい子　えゝ、よく存じ上げて居りますわ。

馬場　あゝ、さうですか。

れい子　綺麗な方ですわね、あの方。

馬場　さうですか。顔は知らんのですか。

れい子　御存知ないの？

馬場　えゝ。

れい子　ぢや？

青木　ちよつと譯があつて、……（馬場と顔を見合せる）

れい子（敏感に）譯？

馬場（直ぐ釣られて）えゝ。僕達の友達で、頭の禿げた男がゐるんです。若い癖にね。

青木　おい！

馬場　あゝ、さうか。（口を噤ぐ）

れい子　その方が？

馬場　別に何んでも、……

れい子　まあ、可笑しな方。お話しになつたつていゝぢやございませんの。

馬場　ですが、……

れい子　誰れにも喋りはしませんわ。

馬場　ほんとに誰にも？

れい子　えゝ。

馬場（青木に）構はんかな？

青木　さうだねえ。……あゝ。

馬場　こゝだけの話ですよ。

れい子　えゝ。

馬場　絶對に喋らんでくれと云はれてるんですから。

れい子　大丈夫よ。絶對に云やしませんわ。

馬場　ぢや。實はその禿頭の男と、前島かをるさんと、…

……

（吉村手を拭き乍ら這入つて來る。皆んな口を噤んで了ふ。）

吉村　どうしてあんなに糞ばかりするんだらう。

馬場　自分で掃除する心配がないからだらう。

れい子　一羽なの？

吉村　いゝや、番(つがひ)です、面倒臭いから明日(あした)の分迄入れといてやつた。

れい子　まあ！　ホ、、、。

吉村　さあ、放送を始めた。

れい子　放送？　あゝ、あれ？（アナウンサーの眞似をして）T・O・P・K、こちらは京都放送局よ。ホ、、、、。（急に笑ひ止んで、吉村に）あなた、お氣をお着けなさらなくちや駄目よ、ほんとに。

吉村　何んです？　だしぬけに。

れい子　まあ、のん氣ね、あなたは。

吉村　だつて、……

れい子　奥さんよ。

吉村　京子ですか？

れい子　えゝ、さうよ。あなた、何んにも御存知ないの？

吉村　えゝ、別に。

れい子　まあ、驚いた。町内で知らぬは、……

吉村　え？

れい子　京都ぢや、もつぱらの評判よ。

吉村　何がです？

れい子　この間、小林さんが京都から歸つて來た管谷さんから聞いて來て市の井さんに話したのを村松さんが社から聞いて來て私の所へ、……

吉村　あゝあ！

れい子　あゝあ、ぢやないわよ。

吉村　それで？　……

れい子　京子さんが、ほら、あの相手役の森川さんね、あれと二人で、四條の橋の上を、馬を並べてぼか／＼散歩してたのを見た人があるんですつて。

吉村　そりやそれ位の事、……

れい子　そればかりぢやないのよ。まだ／＼。ほら、串に刺さつたお團子があるでせう？　四つつ宛(づゝ)刺してあるのよ、京都のは。それをまあ、（力を入れて）どうでせう、二つづつ仲よく食べ合つたりするんですつて、皆んなの前でよ、それも。それから、新京極のカフエから、二時頃、夜中のよ、京子さんがぐでん／＼に、……もうやめるわ。

吉村　（やゝ不安げに）どうしたんです？

れい子　何んでもないの。

吉村　（强ひて事もなげに）馬鹿臭い。

れい子　あなたが悪いのよ。天の罰(ばち)だわ。

吉村　何故です？

れい子　まあ、とぼけて、皆さんに報告して上げるからいい。

吉村　何んの事です？

れい子　ほら、カフェ・テリヤの斷髪さん。

青木　え？　そんなのがあるんですか？

馬場　怪しからん。俺達にかくして、そんな、……

吉村　嘘だよ、皆んな。山住さん、駄目ぢやないですか、そんな出鱈目云つて。知らない奴は本氣にするぢやありませんか。

青木　細君を働かしにやつて、留守でそんな不埒を働くなんて、……

吉村　嘘だよ。嘘だつたら。

れい子　あら、評判よ、あすこで。

馬場　怪しからん。

吉村　あゝ、うるさい。どうしてかうなんだらう、世間の奴等は。金棒曳き！　チエッチエ蝿！　あゝあゝ！

れい子　まあ、そんなに興奮しなくつたつていゝわよ。

馬場　吉村！　評判が悪いぞ。

青木　いや、あんまり評判が良いから、悪い評判を立てられるんだ。

吉村　俺は時々、自分と同んなじ名前で、全く自分と同んなじ顔形をした人間が、もう一人この世界に生きてゐて、それが俺に知られないで、陰で勝手な眞似をやつてるんぢやないのか、とさう思ふ事があるよ、時々。

馬場　（突然）あれかね、活動で接吻（キッス）をやるのは、ありや、ほんとにやるのかね？

青木　さあね？　吉村？　どうだらう？

吉村　知らん！

れい子　ホ、、、、。

馬場　ほんとうにやるんだらうね。實感が、……

吉村　もういゝ。澤山だ。

れい子　煙草一本頂いてよ。

（間。）

馬場　（立上つてぶら／＼と洋服箪笥の方へ行く）成程、この洋服箪笥はいゝね。高いだらう？

青木　いやに家具ばかり氣にしてるな。

馬場　開けてもいゝか。

吉村　あゝ。

馬場　デカメロンぢやないか、中にかくれて、……（開ける）

吉村　馬鹿を云へ！

馬場　（中から、カラとネクタイをつけたまゝのワイシャツをとり出す）おや／＼、飛んだ戀人だ。……汚ないな。こいつは。

吉村　女房がゐないとそれだけ困るよ。カラをつける度に、垢で襟がひやりとする。そのたんびに、女房の事を、あれだね、……

馬場　ふん、いゝ氣なもんだ。
れい子　あら、もう惚けてるの？　吉村さん！
吉村　いや、眞情を吐露してるんですよ。
（玄關のベルが鳴る。）
誰だらう？
馬場　俺はもう行くよ。
吉村　いゝぢやないか、まだ。
馬場　もう晩いよ。
吉村　さうか？
青木　僕も失敬しよう。
れい子　私も失禮しますわ。
吉村　嫌だな。一度にさうどや／＼と歸られちや。九月の海水浴みたいに、後で僕はぽかんとして了ふんだ。
れい子　又參りますわ。奥さんがお歸りになつたら。
馬場　このスタンドはいゝな。高いだらう？（スヰッチを捻る）なんだ、もう電氣が點くぢやないか。
（又ベルが鳴る。）
青木　ほんとに失敬する。
吉村　さうか。
（吉村に從いて皆んな去る。玄關で挨拶の聲など。暫くして。）
記者の聲　いゝ匂ひですな。何んな香水でせう？
吉村の聲　さあ？
記者の聲　今のは馬場さんでせう？
吉村の聲　えゝ。
記者の聲　あの女の方は、馬場さんの何んか？……
吉村の聲　いゝや、偶然こゝで。……僕の家内の友達です。
……上りませんか？
記者の聲　いゝや、靴ですから、こゝで、もう、……
吉村の聲　さうですか。何か用ですか？
記者の聲　はあ、別に。今そこの谷口さん迄原稿をとりにやつて來たもんですから、ちよつとお寄りして、……
吉村の聲　あゝ、さう？
記者の聲　何か、ゴシップの種はありませんかね？
（間。）
記者の聲　お友達の方の、成りたけ、そのなんです、戀愛事件かなんか、……
吉村の聲　僕は知りません。
記者の聲　谷口さんの玄關に、女の日和下駄があつたんですが、あの方はもう、あれですか、結婚、……
吉村の聲　さあ、知りませんね。
記者の聲　さう、素つ氣なく仰言らずに。
吉村の聲　僕はゴシップの關所です。噂の絶緣體です。あらゆる噂の流れを、僕ん所で中斷してやらうと思つてる

位なんです。

記者の聲　おや、こちらも申しますまい。實は今日、ちよつと、あなたのお耳に入れとき度い事があつて、……

吉村の聲　何んです？

記者の聲　いや別に。

吉村の聲　氣持が悪い。云ひ給へ。

記者の聲　何ね、奥さんの事ですが、……

吉村の聲　又か。

記者の聲　特種なんです。

吉村の聲　もう澤山です。あゝあ！

記者の聲　でもこれは確た、……

吉村の聲　うるさい。歸つてくれ給へ。

記者の聲　あなたが離婚なさるつて噂も聞きましたが。

吉村の聲　な、何んですつて？　離婚？　僕が？

記者の聲　はあ。

吉村の聲　馬鹿々々しい、そんな、……

記者の聲　英國の諺に、人生の二つの大きな幸福は、結婚と離婚だ、つて云ひますが。

吉村の聲　知りません。イギリスの諺なんか。……僕は考へても見た事がない。自分の意志が自分の頭の中ではなく、噂の中で、自分に知られない間に、先に生長してゐるんなんて、實際氣味が悪い事だ。

記者の聲　え？

吉村の聲　噂が擬人を作り、噂が人を心中させる。噂が雰圍氣を作つて、人の意志を誘引するのだ。噂程宿命的なものはない。僕達は飽く迄、噂に引張られないで行動しなければいけない。

記者の聲　でも、奥さんの事は、……

吉村の聲　いゝです。いゝですから、もう、……

記者の聲　でも、……

吉村の聲　歸つてくれ給へ。頼むから、實際。……

（何か云ひ争ふ聲。戸口の荒々しく閉る音。）

（吉村が頭を抱へ乍ら這入つて來る。）

吉村　あゝ、うるさい。（腰を下す）

（吉村しばらく考へてゐる。）

（漠然と不安になつて來る。）

（急に立上つて、いら／＼と室内を歩く。）

（又腰を下す。）

（ひどく不安になる。）

（いきなり立上る。時計を取り出す。時計をしまふ。今度は蓋口を出して中味を調べる。）

吉村　（金を數へ乍ら、小聲で）京都迄、……（もう一遍時計を見る。急に決心したやうに洋服箪笥のワイシャツを摑んで右手の部屋に去る）

（舞臺しばらく空虚。）

（間。）

（突然、隣家からラヂオがニュウスを放送し始める。）

吉村　（外套を着て、帽子を冠り、手にスートケースを持つた旅裝で出て來る。ちつと鞄の中を調べ乍ら）空氣枕、カルモチン、懷爐灰、……荷物はこれでいいと、……うるさい。（いきなりラヂオが聞えてくる窓を閉める。時計をもう一度見て、それから大股に部屋を横切つて、左手の玄關へ通ずる戸口のハンドルに手をやる）

（吉村が戸を引くと、それに引かれて、向う側のハンドルを握つてゐた一人の女の人が引張りこまれるやうに這入つて來る。小暮京子である。洋裝をした女。白狐の襟卷をしてゐる。吉村、呆氣にとられて、妻の顏を凝視めたまゝ、突つ立つてゐる。）

京子　（いきなりソフアに泣き伏す）あなたつて、………

（はげしく歔欷く）

吉村　何んだお前。歸つて來たのか。

京子　（猶ほ泣いてゐる）

吉村　（まだぼかんとして）どうしたんだ、一體？

京子　（泣いてゐる）

吉村　え？　おい、京子！

京子　あなたは、まあ、あんたは、あたしの留守をいゝ事にして、……あゝ、くやしい！

吉村　（やうやく感情の整理がついたやうに、一應は自分の憤慨も傳へないわけにも行かず）俺は今、お前の所へ出掛けようとしてたんだ。

京子　ふん！　熱海でせう。早く行つておあげなさい。停車場に女を待ちぼけ食はしとくなんて失敬ですわ。今頃、黒板に怨み言でも書いてゐますわよ、きつと。カフエ・テリヤの斷髪が。

吉村　何をお前、馬鹿な。

京子　くやしい！（いきなり手提げの中から五六通の手紙を取出して、吉村にぶつける）

吉村　おい〳〵、亂暴するな。痛いぢやないか。

京子　讀んだら解るわよ。これも、これも、これもこれも……

吉村　おい〳〵。

京子　いくら離れてゐるからつて、ちやんと手紙つてもんがあるんですからね。後ろへ廻つて何をしようと、髮床屋の店の中みたいに、ちやんと解つて了ふんですから。……さあ讀んで見たらいゝでせう。しらばつくれて、そんな、……さあ、さあ。

吉村　（仕方なしに一つ二つ拾つて中味を讀む）下らない。誰がこんな馬鹿な事書いてやつたんだ。

京子　熱海はあつたかいでせうねえ。
吉村　もういゝぢやないか。
京子　（又歔欷く）少し自分が有名になると、もう昔一緒にした苦しみなんか、去年の凍傷のやうにけろりとして、まるで雨上りの唐傘かなんかのやうに、さつさと私をお棄てになるおつもりなのね、あんたは。
吉村　何を馬鹿な事。皆んな噓だよ、噂だよ。
京子　あなたは、噂と云ふ便利な逃げ口から、皆んな事實をお逃しになつて了ふんだわ。
吉村　お前は又、噂と云ふものが、どんな醜い人間のやつかみであるか、はかないせめてもの腹いせであるか、と云ふ事を、ようく考へて御覽。その證據には、美人は決して醜婦の惡口を云ひはしない。……そして、その不用意になされた蔭口が、この世の中の人と人との交渉で、どんなに純眞な友情や戀愛を、お湯屋の鏡のやうに曇らせてゐるかと云ふ事を。
京子　だつて、あなた。
吉村　僕達の昔の生活。まだ噂が見向きもしなかつたあの頃の、たつた二人つきりの生活。それを振返つて見ようぢやないか、ね。
京子　ずるいわ。あんたは。
吉村　（口眞似して）ずるいわ。
京子　（半分威嚴を損し、半分可笑しく）まあ！　人の口眞似なんかして。
吉村　お前はよくさう云つたつけね。僕がパンのやはらかい所だけ食べて了ふと、お前はきまつて、ずるいわつて。
京子　まあ。（思はず微笑む）
（間。）
京子　（想ひ出すやうに）あなたがまだお金の爲に、安い童話の原稿を、徹夜して書いてらつした頃、私はそばで、ほら、あのカアテンで造へたカナキンの洋服を着て、あなたの佛蘭西語の本を拔書きしてゐて上げたわね。
吉村　さうだつた。俺がお金の事を云ひ出すとお前はきまつて大笑ひに笑ひこけた。『まあ、可笑しい。まあ、可笑しい。あんたがお金の事なんか仰言つて。』――さう云つちや、お前は縫が破れたやうに大笑ひをしたね。その癖、お前はぽろ〳〵涙をこぼして、……
京子　ほんと。電燈代は拂はないもんで、意地惡の下のおかみさんが、態々便所の五燭の球と取替へて了つたりして。……あの餌差町のお汁粉屋の二階に間借りをしてゐた頃、……（ふと、もういつの間にか仲直りして了つた事に氣がついて、急に威嚴を以つて）あゝ、くやしい！　それだのに、あんたは。
吉村　まだ怒つてるのかい？

京子　だつて、あなたはいつでも勝つたやうな顔をなさるんですもの。

吉村　馬鹿だね、お前は。勝つたの負けたのつて。（外套と帽子を脫ぎ、ソファに坐る）さあ、僕の眼を御覽！　直接にお互ひの眼の中を、ぢいつと凝視め合はうぢやないか。

京子　（男の顏を見る）

（兩人しばらく顏を見合せてゐる。）

（隣家から、Edward German—Nelgyn Dance のレコードが聞えて來る。）

京子　（眼が段々輝いてくる。別の淚があふれて來る。やさしく）あんた！……あら、墨がついてゝよ、お顏に。

吉村　さうかい？　どこ？　（ハンケチに唾をつけて）この邊？

京子　もつと右よ、いゝえ、いゝえ、こつちよ。（中々ハンケチがそこへ行かない）まあ、……（笑ふ）ハンケチをお貸しなさい。私がとつて上げるわ。

吉村　噂なんて、實際、知らない間に顏につけられた墨みたいなもんだね。

京子　ほーら、とれてよ。

（兩人明ろく笑ふ。）

——幕——

一九二七、三、三

# おらんだ人形（一幕三場）

青年A。
青年B。
女。

都會の郊外。

或るアパアトメントの一室。
青年Aの部屋。
窓の向うに立木の梢が見える。
夕暮近くの弱い秋の陽差しが差してゐる。

1

青年A、窓から戸外を見下してゐる。
ノックの音。

A （ふり返つて、女の人に話しかけるやうな調子て）誰あれ？

B 俺だ。
A ………。
B （戸を開けて）這入つてもいゝかい。
A いゝさ
B （這入つて來る）氣の毒したな。
A 何故だ？
B 俺でさ。
A 下らん事云ふな。
B 何をしてたんだ？　窓邊なんかに、しよんぼり立つて。
A 落葉を嚙んでたんだ。
B 淋しい奴だな。
A 馬鹿をいへ！
B 俺は銀座を歩いて來た。人混みの中をね。
A 淋しい奴だな。
B 君も少し街へ出て笑へ！
A 俺はどこでだつて笑へる。
（Aは窓を離れ、兩人は適宜な椅子に坐る。）
B （煙草に火をつけ乍ら）あの女に會つたよ、銀座で。
A ………。
B 資生堂の前だ。誰か戀人と歩いてゐた。
A 俺が昨日さう云つてやつたのだ。たまには、誰か昔の戀人と歩いたらどうだつて。……

B　身長の高い、スマアトな洋服を着た紳士だ。
A　氣持が新鮮になつていゝだらうつて。
B　買物の包みを澤山持たされてさ。
A　揉上を長く伸ばしてゐる男だらう?
B　さうだ、いゝ顔をしてゐる。裕福さうだ。
A　吉田さんて云ふのだ。よく話を聞くよ。寫眞も見せて貰つた。
B　あの女が、人を輕蔑する癖を習得した幾多の材料の一人なんだらう。
A　君よりは偉いさ。輕蔑されてゐる事を知り乍ら、買物の包みを持つてやるんだからね。君にはそんな雅量はないだらう。君はそつぽを向いてるぢやないか。
B　俺がそつぽを向いてるのは意味が違ふんだよ。初めてこゝであの女に紹介された時、これはいかん、と俺は思つた。すると俺の心の中に潜んでゐた悲しい癖が頭をもち上げた。俺は何か魅力を感じる女性を見ると、どうかしてその女の中に、何か知らん、缺點を見つけ出さないと心が落着けないのだ。
A　(默つて聞いてゐる)
B　君も知つてゐるだらう。俺には以前、美しい穏やかな戀人があつた。
A　あゝ知つてゐる。何日だつたか築地で會つた。

B　あの時分、俺は夢中であの女を戀してゐた。だから、他に美しい女性を見ると、俺の心はひどく亂れて憂鬱になつた。それでどうしてもその女の中に、何か俺の戀人よりも劣つた缺點を見つけ出す迄は、氣がすまないのだ。それが見つかると、俺は朗らかな明るい氣持になれた。
A　……………。
B　(話し續けて)その癖が俺の天性になつて了つたのだ。あの女を見た時もそれだつた。俺はやつと、あの人が、やたらに人を輕蔑すると云ふ缺點を見つけて、それで安心してそつぽを向いた。いつ迄もあの女が不愉快な印象で俺の心の中に殘つてゐるやうに。別れた戀人の夢を亂さないやうに。
A　君は不親切な奴だな。俺はその點であの女に同情してるんだ。あの女はあの癖の爲に、希望がなくなつてるのぢやないか。世の中が輕蔑さる可きもので滿たされてゐる時、どこに明日の望みがある?　だから俺はかうやつて、こゝに輕蔑されない一つの存在があるから、安心をしろと云ふ事をあの女に示してゐるんだ。
B　それだけに君は惚れてゐるのだ。
A　馬鹿を云へ。惚れてゐる位なら喜んで輕蔑されてやる。その方が餘つ程樂だからね。君こそ惚れてるんだ。
B　俺は嫌ひだ、あんな女。たゞ、君が常にさう稱してゐる

ろから、君の尻馬に乘つてゐると思はれるのが嫌やで默つてゐるんだ。

A　たつて、君は、あの女が西洋將棋(チエツス)を教へてくれろと云へば、二時間でも三時間でも、ものぐさな君が、きちんとお相手をしてるぢやないか。

B　それはたゞ、あらゆる女性に對する俺の禮儀だ。貞淑な夫人に賴まれたつて、やつぱりさうする。

A　貞淑な夫人か。(輕く笑ふ)

B　殊にあの女は、男性に對する禮儀を知らんから、こと更にさうする。あの女は何かの拍子に、ひよつと眼が合つたりすると、ぢいつとこつちの眼を見返してゐるぢやないか。あんな風に人ばかり輕蔑してゐるから、あの女はやたらに人に惚れるんだ。

A　あの女は人に惚れやしないよ。

B　いや惚れる。現に君に惚れてゐる。あんなにしよつちゆう喧嘩ばかりしてゐて、それでゐて離れられないんだからね。

A　馬鹿を云へ!

B　いゝや、惚れてる。惚れてる。惚れてる惚れてる。……

A　止せ。下らない。

(Aは立上つて窓邊へ行く。)

B　口癖違うつつてるぢやないか。(口眞似て)下らない。

(Bも立上つて、今度は右側の壁に沿つて置かれた寢そべり臺に腰を下す。)

(ポケツトから黒い小さな三つの木の玉を取出し、手品師のやうに、指の間に入れて、二つにしたり三つにしたりしてゐる。)

(どこからかピアノの音がもれて來る。靜かな明るい曲が頁い。)

(間。)

A　(暫らく聞き入つてから)秋――か。

B　(やゝ皮肉に)秋――か。

A　(反撥的に)秋さ。

(又兩人聞き入つてゐる。)

(Bは無心に玉の手品をやつてゐる。)

(間。)

B　鈴木さんの奧さんだね。

A　(戸外を見たまゝ)さうだ。

B　あの人は明るいね。いつでもにこ〳〵笑つてるぢやないか。

A　戀愛をしない人達は皆んな明るいんだ。鈴木さんの旦那には他に愛人があるんだよ。だから、あの夫人はもう夫を愛する必要がないんだ。一日ピアノを彈いて、……

(Aはふり返つて、ふと、Bが木玉をいぢつてゐるの

を見ろ。）

何んだ、そりや？

B　まあ見てゐろ！　（三つの玉の手品をやつて見せる）二つだらう。えい！　ほら、三つ。三角關係と云ふ奴だ。一人の女を二人が愛してゐる。一人があきらめて、ほら、消えた。又現れる。今度はひとりで街を彷徨く。……

A　面白いね。どうしたんだい？

B　昨日銀座で買つたんだ。

A　中々うまいね。

B　俺は今日一日、部屋の中で練習したんだ。

A　たつたひとり、部屋の中で、そんな事してたのか？

B　あゝ。

A　人間はひとりでゐると皆んなそんな事をしてるんだね、何かしら。

B　君は落葉を噛み、あの女は、………

A　又あの女か。

B　あれはどうしてるんだらうね。……爪を磨いたり、……鸚鵡に唱歌を教へたり。羊に昔の戀人の手紙を食べさせたり。……淋しい女だね。

A　（Aは煙草を出して吸ふ。）

B　（さつきから煙草を啣へてゐて）燐寸（マッチ）。

A　（燐寸を渡し乍ら）あんないつも華やかな服裝（なり）をしてゐて、陽氣にはしやいでゐ乍ら、どうかした拍子に、ふいつと淋しさと睨めつこをしてゐるのぢやないか、と思ふ事がある。まだ暗くならない夕暮の街に、ぽつんと、一つともつてゐる灯火（ともしび）のやうな氣がする。あの女は真空を持つて來るのだ。あの女が這入つて來ると、部屋の中に妙な淋しい空虚が出來る。

B　どうして俺達はこんなにあの女の事ばかり話すんだらうね。ことに依るとあの女に好意を感じてゐるのかも知れないぞ。

A　俺達は頭が疲れて、退屈なのだ。……好意を感じてゐる？　馬鹿くさい。簡單にものを見る奴だな、君は。心の鍛へが足りないよ。

B　さう高踏的なものゝ云ひ方をするな。俺は俺自身思つてゐる程偉くはないかも知れないが、君が思つてゐる程馬鹿でもないつもりだ。

A　俺はたゞ、あの女を幸福にしてやらうと思つてゐるだけなんだ。

B　この女を幸福にしてやれる。とさう心に思つたら最後、その男はもうその女に對して駄目だね。

A　駄目か駄目ぢやないか知らないが、俺は今、それでひつかつゝてゐるんだ。悩んでゐるんだ。

B　人間は自分が今悩んでゐる悩みが、一番大きく深刻な

ものだと思ひこみたがるもんだね。それをこれ人間の悲愴癖と云ふ。

A　君の方が餘つ程高踏的なものゝ云ひ方をしてるぢやないか。

B　俺は今、どうしたらこの玉の手品が、手際よくやれるか、それが俺の悩みだ。どうだ、深刻だらう。ほら二つ。……

A　止してくれ。俺は胸がつまつて來た。

B　(無心に手品をやつてゐる)

(間。)

A　どうして俺達はかういら／＼してるんだらうね。

B　俺達にも輾轉癖がうつつたのだ。

A　秋だからだ。秋は頭が疲れる。

B　さうだ。

B　環境が寂然(ひつそり)として靜まるから、頭の中が細かく動くんだ。それで疲れるんだね。

B　疲れてるね、お互ひに。

(兩人沈默する。)

(間。)

(ピアノの音がやがてやむ。)

B　おい。

A　…………。

B　おい。

A　何んだ?

B　何か喋つてくれ。

A　お互ひに自分に向つて喋らうぢやないか。秋の宵にふさはしいやうにね。

B　そんな利己主義な事を云はずに何か喋つてくれよ。俺は自分に喋る事なんか何んにもありやしない。だから、しよつちゆう君の部屋へ、かうして邪魔しにやつて來てるんぢやないか。

A　それだけの爲か?

B　當り前さ。

A　そんなに强がらなくたつていゝよ。

B　別に强がつたりなんかするもんか。

A　ハヽヽ。所で何時かな。(時計を見る)

B　心配なのか?

A　下らん。

(短き間。)

もう止さうぢやないか。

B　何を?

A　お互ひにさぐりを入れたりするやうなものゝ云ひ方は。

B　何時だつたんだい。

A　（もう一遍時計を出して見て）六時ちよつと過ぎてゐる。

（間。）

はつきり云つてやらうか？

B　あゝ。

A　（ぶら／＼と本棚の方へ歩いて行く）要するに俺の感情は、憎惡と愛情の間を縫ふ針なのだ。

（本棚の上には小さな木彫りの和蘭人形の男女が飾つてある。）

（Aはそれを無心にいぢつてゐる。）

時々俺はひよつとした拍子に、こりや俺はこの女を愛してるんぢやないか、とさう思ふ事がある。するとあの女は直ぐ俺を輕蔑し始める。

（さう云ひ乍ら、Aは、丁度人形芝居でもするやうに、和蘭人形の女の方を、高く上げて、男の方を見下す眞似をする。）

俺はます／＼可哀さうになつて來る。こりやいかんと思ふ。この女を救つてやらなくつちやいかん。そこで俺は表面に冷淡を裝ふ。愛すれば愛する程冷淡になつて行く。そのうちにそれが段々慣れて來ると、心迄も冷淡になつて行く。すると、ことさら骨折つて冷淡にしてゐるのが馬鹿くさくなつて了ふ。終ひに今度はあべこべに憎くなつて來る。憎くて憎くてたまらなくなつて來る。

（男の人形をどしんとさせる。）

それが、表に現れて來る。俺は極端に憎惡を投げつけてやる。するとあの女は急に、俺を尊敬し始める。

（女の人形を男の人形の前に跪かせる。）

俺はほつと安心する。又可哀さうになつて、愛情を覺える。

（男女の人形を合はせる。）

すると女が又俺を輕蔑し始める。……さう云つた心の過程を、俺はあれと一緒にゐるとしよつちゆう繰返してゐるんだ。お互ひに反撥し合ひ、……

A　いつ迄も喧嘩をし續けて行く。

A　いゝや、俺達は結局別れると思ふ。

（さう云つて、Aは男女の和蘭人形を本棚の兩端へずうつと離して了ふ。）

B　どうしてだ？

A　人間には感情だけぢや結合して行かれんからな。男と女を結ぶ大きな根が缺けてゐるんだ。不幸な事にねえ。

B　と云ふと。

（間。）

A　全然さう云ふ魅力がないんだ。身體のねえ。

俺達は結局同じ心の過程を繰返して行くうちに、神經を

お互ひに擦りへらして、退屈だけが、丁度雨に洗はれた木の木目のやうに殘るんだ。別れる時の最後の印象で、俺達は離れ乍ら、お互ひに愛し合つてゐるか、憎しみ合つてゐるかゞ分れるんだ。かうか、（人形を離したまゝ向ひ合せて）かうか、ねえ。（今度は背中を向き合せて置く）

（この時、黑い木の玉がBの手から落ちて、飄々と床の上を轉つて行く。）

（兩人でぼんやりそのあとを見送つてゐる。）

（間。）

A　暗くなつたね。

（Aは又窓の方へ步いて行く。）

B　あゝ。（立上る）燈火(あかり)をつけようか？

A　（うなづく）

B　（電燈をつける）

A　月が出たね。あすこの並木の道が白く光つてゐる。

B　（玉を拾つて）邪魔しちやつた。失敬するよ。

A　（ふり返つて）いゝぢやないか。今、紅茶でも入れるから。

B　俺も部屋へ歸つて月でも見たくなつた。

A　さうか。おや。

B　あゝ。

A　川村の小說ぢやないが、明月を食べてお腹(なか)をこはさないやうにしてくれ。

B　大丈夫だ。

（Bは歸つて行く。）

（Aはいら／＼と部屋の中を步き、煙草に火をつけたり、Bの部屋へ行かうとしたりする。）

（やがて又窓の所へ行く。）

（その時、下で自動車の音が幽かに聞える。）

（Aは耳をすませる。）

（窓から見てゐる所を見られるのが嫌やだ、と云つた風に身をひいて、右側の壁に沿つた寢そべり臺に腰を下す。横になる。煙草の煙を輪に出して、天井へ吹きかけてゐる。）

2

女　（默つて這入つて來る）

（若くて美しく、細おもてで、紫がかつた着物に臙脂の裏をつけた、明るい服裝(みなり)。上品な趣が匂つてゐる。が、ぢいつと見てゐると、どこかに救はれない淋しさがある。）

（眞白な毛皮の襟卷と買物の包みを卓子の上に置き、ソフアに投げるやうに身を落す。）

女　疲れちまつた。

A　おそかつたですね。

女　あの方が自動車で逢つて下すつたのよ。吉田さんが。今別れた所。

A　さう？　そりやよかつた。

女　（坐つたまゝ、黒の絹の手袋を外し、チョコレエトの箱を開けてゐる）

A　久しぶりで舊交を溫めたと云ふ所ですね。

女　皮肉？

A　皮肉だ？　何んの爲に。

女　少しは嫉いてるんでせう？

A　馬鹿云つてゐる。

（女は身體を起す。）

女　何んて賴りない人なんだらう。

A　嫉妬が戀愛に幸福を齎すなんて云ふ考へはね、ありや十九世紀の遺物ですよ。博物館へでも行かなくつちや……、

女　澤山よ。愛してもゐない癖に。

（Aはぢいつと女を見てゐる。）

（段々愛情を感じて來る。）

A　（優しく）煙草を吸つちやいけなかつたんですね。ごめん。（立上る）

女　いゝのよ。どうぞ。

（Aは女の方へ寄つて行く。）

パッカアドは搖れなくつていゝわね。吉田さんはパッカアドを買つたのよ。

A　さう？

（女がチョコレエトを一つ食べて、Aにも一つ渡す。）

（受取り乍ら）パッカアド。……

（男が不意に燈火を消す。）

（月光が青白く窓からさしこみ、兩人の影が影畫（シルエット）のやうに浮ぶ。）

（男は又燈火をつける。）

（獨り言のやうに）駄目だ！

女　何あに？

A　燈火（あかり）を消すと、香水の匂ひが鼻につきますね、妙に。

女　さう〱、香水つてば、今日ウビガンのケルク・フルウルを買つて來たのよ。ちよつと、とつて。（手を出す）それ。

（Aは卓子の上の包みをいぢる。）

それ〱、いゝえ、こつちよ。

A　これ？

女　えゝ。

A　（渡す）

女　（紙を解き）いゝでせう、この瓶？

（女は瓶の口を開けて、突き出す。）

（Aが嗅いで見る。）

秋の匂ひがするわね、これ。

A　香水を買ふ戀人。自動車に乘せる戀人。

（窓の方へ行く。）

女　ふん！

A　さしづめ僕なんだ、看病をする戀人かな。

女　（輕蔑したやうに）　恩に着せなくたつていゝわよ。

（ハンケチに香水をふる。）

（今度はコンパクトを出して顏をつくらふ。）

（そのまゝ、ぢつと鏡を凝視めてゐる。）

鏡！　（それから、朗吟するやうに）

『愁によつてその緣の中に凍りたる水よ、……』

（男に）　あたし、時々夜中におそく、たつたひとりで鏡を見てゐる事があるのよ。（返事がないので男の方をふり返る。男が自分の云ふ事を聞いてゐずに、窓の外を眺めてゐるのを見ると、ふん！　と云つた顏付をして、コンパクトをピチヤンとしまふ。又朗吟するやうに）

『なんぢが底深き氷の下に沈みたる落葉に似たるわが思出を求めつゝ、……』

A　（窓から外の夜を見乍ら、獨り言のやうに）

a road that leads no where.

女　（きゝとれずに）　何あに？

A　どこへも行つてない道、つて云つたんです。

女　御苦勞さまに飜譯して下すつたのね。

（間。）

A　茫漠たる秋の夜か。あの路は一體、どこ迄行つてるのか知ら？

女　（だるさうに立上る）　さあ？　（窓の所へ行く）

（兩人並んで窓の外を見てゐる。）

A　ことに依るとどこへも行つてないんぢやないか知ら？

女　そんな路つてないわよ。

A　いゝや。

女　あるの？

A　えゝ。

女　どこに？

A　アイルランドに。

女　何あに云つてるの。

A　ほんとさ。

（間。）

女　落葉がひどいわね、あすこの路は。車がカサ／＼つて鳴るのよ。足が濡れて了つたわ、夜露で、こんな。

（女は足をまくつて見せる。）

少し降りて歩いて見たの。あの人が歩かうつて云ふんで

すもの。

A　毒ですよ、そんな事して。

女　あの人もやつぱり胸が悪いのよ。だから、あの人は、あたしと二人、永い間かゝつて、じわり〳〵と心中をしようとしてゐるのよ。きつと。

（間。）

井坂さんは？

A　今しがた迄こゝにゐたんだけど。

女　さつき銀座で會つたわよ。

A　そんな事云つてた。奴さん夜店で變な手品を買ひこんで來てね。黒い玉を一つにしたり三つにしたりする、……

女　あゝ、買つてたわ。あの方も夜店であんなもん買つたりなんかなさるのね。やつぱり淋しいのね。

A　あいつ、あなたの事を大嫌ひだつて云つてましたよ。

女　馬鹿にしてるわ。ふーんだ！（内心ひどく自尊心を傷けられてゐる）

A　あんな人ばかり輕蔑したがる女は大嫌ひだつて。

女　あの人はね、自分が人に輕蔑されてゐるんぢやないつて證據を、自分に見せ度いのよ。

（間。）

だけど、……

A　……？

女　ほんと？

A　何が？

女　何がつてさ。

A　ほんとですとも。

女　馬鹿にしてるわ。下らない。

（女は卓子の方へやつて來る。）

チエッスしない？

A　（やゝ冷淡に）してもいゝです。

（女が卓子に坐る。）

（Aは西洋將棋をとり、卓子の上へ置き、女と向ひ合つて坐る。）

（暫く默つてやり始める。）

A　ほら、とりますよ。

女　ちよつと待つて、待つて、何んで？

A　この騎士（ナイト）で。（駒を動かさうとする）

女　（手で盤の上を掩ふやうに遮つて）あら、待つて、待つて、待つてよ。ぢやこつちへやるわ。

（又暫くやつてゐる。）

女　あのさつきのお話して下さらない？

A　何んの話？

女　アイルランドの、……

A　あゝ。（將棋盤を指して）ほら、これがきいてますよ。

女　(考へて) えゝ、いゝわよ。

A　(ちよつと考へて) あゝ、さうか。とりかへつこか。(他の手を指す。ゆつくり低い聲で、將棋の方を考へ乍ら、話し始める) アイルランドの地方はね、土地が痩せて、廣漠と荒れ果てた高原がずうつと續いてゐるんですつて。その間に、民家が丁度、ほら、君の駒みたいに、ぽつり/\とあつて、(女微笑ふ) 住民は皆んな疲弊してるんです。時々饑饉なんかゞあると、そりや悲惨なんですつて。(駒の方を考へる)

女　(それから？　と云ふ風をする)

A　そこで或る教區の牧師さんが、骨折つて、政府へ歎願書を出したんですね。すると政府はたゞお金を出す名目がないので、窮民に仕事を與へる爲に、その地方の高原の眞中へ、立派な道路を敷く工事を始めさせたんです。(駒をとる) 所が或る一定の豫算がなくなると、そのまゝ工事は中止になつて了ふ。……

女　(駒を動し乍ら) それで？

A　それで、その荒れ果てた廣漠とした高原の眞中に、ずうつとあてのない道が、長く續いてゐるのです。

女　まあ！

A　旅人が來て、この道はどこへ行つてるのかと訊くと、土地の人が答へる。nowhere.

女　(もう一遍、それから？　と云ふ風をする)

A　(獨り言のやうに) どこへも行つてゐない。どこへも行つてゐない。いゝぢやないですか。

女　(言葉に出して) それから？

A　それだけ。

女　つまらないわ。(同時にチエツスも止めて了ふ)

(女は立上つて又ぼんやり窓邊へ行く。行きしなに、本棚の上の和蘭人形を見る。それが離れてゐるのを見ると、ちよつと厭な顔をして、又もとのやうに並べて行く。)

(男は駒をかたづけてゐる。)

(女はぢいつと窓の外を眺めてゐる。)

(男が煙草を吸ひ出す。)

(間。)

(やがて女の肩が心持搖れる。)

女　(小さい聲で) 解つたわ。解つたわ。

A　(少し呆氣にとられてゐる) どうしたんです？

女　(幽かに泣き乍ら) 結婚なんて目的を考へなくても、あたし達は愛し合つて行けるのね。

A　あたし達ぢやない。あんたがです。

女　(反撥して) どうして、あなたはそんなにつめたいの？

A　つめたい？

女　あなたは、何んの憎惡も感せずに、あたしを離れる事が、お出來になるのね。

A　（少し愛情を回復して）そんな、……

女　（ぢいつと男を見てゐる。急に自信を以つて）厭や厭や、あなたはどうしてもあたしと結婚して下さらなくつちや。

A　平凡な事を云ふですな。（この邊から又段々と男の態度が冷靜になつて行く）

女　どうせ平凡だわ。平凡だわ。だから、あたしの平凡な考へなんか認めて下さらなくつてもいゝのよ。たゞ、あたしがさう云ふ平凡な考へを持つてゐると云ふ事さへ認めて下されば。

A　そんな平凡な考へには、近代的な素養に對しても恥づるがいゝですよ。

女　あたしは近代人だなんて思つた事はなくつてよ。あたしのこの二の腕には大きな種疱瘡の痕があるの。だからあたし洋服なんか着た事はないわ。

A　どつちにしろそんな事は無意義です。ものをはつきりさせる爲に、僕は少し露骨な事を云ひます。夫婦と云ふものはね、お互ひに身體の魅力があつて初めて意味をなすのです。さつき君は、足が濡れたと云つて、足をまくつて見せたでせう。僕には、それが赤子の手の平よりも無感覺なのです。僕はさつき電燈を消しました。僕はまた、闇に籠める香水の匂ひに、花園の幻影を描いただけですもの。あなたは、……

女　下らない。

A　下らなくないんです。

女　解つたわよ。うるさい！

（女は輕く空咳をする。）

（兩人默る。）

（女はぢいつと男を見る。その瞳の中には自暴の光が沈んでゐる。）

（男はます／＼冷靜になつて行く。）

A　（立上つて、書机の本を取上げて讀む。又思ひ返してやめる。）

女　（鋭く）何故おやめになつたの？

A　故意とらしいからです。何んだか敵意でも持つてるやうにとられさうな氣がしたからです。

女　どうせさうなんぢやないの。あなたはもう退屈なさつてるの。あたしを憎んでらつしやるの。

（女は又咳きこむ。）

（男は何か云ひかけて默る。）

（女烈しく咳きこむ。）

A　窓を閉めたらいゝでせう。

A　（女默つてゐる。）

A　（仕方なさゝうに窓を閉める）

女　いゝのよ。（いきなりその窓を開ける）

A　いけません。（又閉める）

　（女又開ける。）

　（男閉める。）

　（女開ける。）

　（兩人爭ふ。）

A　（閉めて）僕にはあんたの健康を心配する義務なんかないんですよ。

女　そんなら、なさらなけりやいゝぢやないの。

A　しなくてもいゝ事を、しなくちやならんから、肚が立つのです。

女　（閉めようと努力して、ひどく咳きこみ乍ら）あなたに、あなたに頂いた、……健康を、……お返し、……お返しするわ。……

A　馬鹿！

　（女を押しのけて、窓に鋲を差込む。）

女　（よろけて、寢そべり臺に倒れ、熱と咳の爲に蒼白い顏を上げて、そのまゝ下からぢいつと男の顏を凝視めてゐる。）

A　（憎惡をこめて暫く見返してゐる）

　（さうやつて暫く兩人は顏を見合せてゐる。）

　（間。）

A　（突然、女の所へ飛んで行き、いきなり女の手を引張つて、今閉めた窓硝子の前に立たせる）見給へ！　こゝにうつつてゐる君の瞳を。こんな、こんなに明るく輝いてるぢやないか。

女　（ぼんやりと窓硝子を凝視めてゐる）

A　（後ろから斜めに女の姿を見てゐる。その瞳が段々やはらいで行き、それが烈しい愛情にうつつて行く。）

女　（戸外の月夜の事とも、又自分の顏とも、どつちの意味ともつかず）明るいわねえ。

## 3

　その時、扉が開く。

　青年Bが這入つて來る。

B　（兩人が並んで窓から外を見てゐるのを見ると、瞬間ちよつと暗い顏をして、又直ぐわざと陽氣に）失敬、君ひとりかと思つた。

　青年Aと女はふり返る。

A　構はないさ。

B　大分練習したよ、あれから。（女に）先程は失禮。

　（女、會釋する。）

面白いですよ。ご存知ですか？（ポケットからさつきの黒い玉をとり出して）二つでせう。えい！　ほら、三つ。又二つ。今度は一つ食べて了ふ。（食べるやうにして、頬邊をふくらませ）これこつちの手の平へ。ねえ。

（Aと女は顏を見合す。）

B　（構はずに、しきりと繰返してやる）えい、えい！　ほら、ね！

（Bの樣子が段々に變になつて行く。）

女　（瞳が段々輕蔑の色を帶びて來る）ふん！

（すると、女の顏がひどく憂欝になつて、救はれない暗い影が彼女を包んで了ふ。）

A　（愛情をこめて、ぢいつと、いぢらしさうに女を見てゐる）

（Bが段々舞臺の前へ出て來て、觀客席の方へ向つてやり出すと、幕が靜かに下りて來て、Bだけ幕の外に取り殘される。）「舞臺の照明は絞り込み。Bにスポット。」

B　（氣がついて、慌てゝ）いかん。（引込み乍ら）俺は又あの女に、人を輕蔑する事を敎へて了つた。

（Bは幕の中へ消える。「スポット絞り込み。」）

——終り——

（一九二六・一〇・五）

# 北村喜八篇

# 狂人を守る三人（一幕）

人物

藤岡　私立病院長　醫學士（三十歳頃）
岡部　友人
小松　友人
Ａ子　藤岡の妻
看護婦
女中

藤岡病院の一室――書齋。

洋室で、正面には大きな硝子窓。左手には、風雅な硝子張りの扉。右手には、診察室及び奥の居間に通ずる扉。

部屋は主人の趣味や性格を現はして、何となくあくどい感じ。床に敷いた絨氈や、赤天鵞絨張りの椅子などすべて色彩の強い、一種毒々しい感じを持つてゐる。

ただ壁だけは淡いピンク色。

硝子扉及び窓の外には、初夏の煙るやうな新緑が映えてゐる。時折風が、半ば開いた窓に掛けてあるカアテンを揺る。夕方近くて、若葉を透して射しこむ陽光が部屋の中にちら／＼してゐる。

右手の扉から、岡部が白い診察服を着て出てくる。續いて看護婦。

看護婦　お脫がせ致しませうか。

岡部　いや、この儘でいゝ――それよりか、濟まないがお茶を――

看護婦　紅茶に致しませうか。

岡部　あゝ。

（看護婦去る。）

（岡部、卓の傍に坐つて煙草を吸ふ。）

（Ａ子右手の扉からはひつて來る。）

Ａ子　もうお濟みになつたの。

岡部　えゝ。

Ａ子　どうも御苦勞樣――あなた、まだ診察着を着てゐらつしやるのね――あたし、脫がせてあげますわ。

（椅子に坐らうとしたのを起ち上つて、岡部の傍へより服を脫がす。）

岡部　ありがたう。僕は奥さんに脫がして頂きたかつたのです。

Ａ子　（微笑しながら）あら、あんなことを――

（二人は椅子に腰を下ろす。）

岡部　すつかり暑くなりましたね。

Ａ子　こんなに暑くちや、診察もお骨折ですわね。

岡部　なに、職業ですから。（窓の外へ眼をやり）あんなに若葉が伸びて來ましたね。

Ａ子　えゝ、氣持のいゝ位にね。

（看護婦紅茶を入れて持つてくる。）

看護婦　どうもお待ち遠うさま。

岡部　ありがたう。

Ａ子　（看護婦に）すみません。女中に言ひつけて下さればいゝのに――

看護婦　（紅茶を卓の上に置きながら）奥樣のも持つて參りませうか。

Ａ子　あたしいゝのよ。――（岡部に）あなた冷たいものいかゞ。（岡部頷く。看護婦に）女中にね、サイダアか何か冷たいものを持つてくるやうに言つて下さいませんか。

（看護婦去る。）

岡部　すつかり喉がかわいてしまつた。失禮します。

Ａ子　さあどうぞ。

岡部　（紅茶を飲みながら）御主人は？

Ａ子　靜かにねてゐますの。

岡部　そりやようござんした――氣違ひでもあんな優しいのはいゝ方ですね。

Ａ子　時々はぎよつとする位怖い眼付をしますが……

岡部　氣違ひには今頃の時候が一番いけないんですからね。

Ａ子　でも、子供のやうにあたしにあまえますのよ。今なども、おいＡ子、おい女房なんて言つてあまえるんでせう。あたし、あなたの診察のすむ時間が來たので、氣が氣ぢやなかつたのよ。やつとの思ひで寢かしてほつとしましたの。

（女中はひつて來て、サイダアとコップを載せた盆を卓の上に置く。）

女中　お拔き致しませうか。

Ａ子　いゝよ。あたしが拔くから。（サイダアを拔いて注ぐ）それから、晩の御支度をね。

女中　何に致しませうか。

Ａ子　（岡部に）何がいゝでせう――あなた、何になさいます。

岡部　何時も御馳走になるばかりで――

Ａ子　何故、御遠慮なんかなさるんです。（媚びるやうな眼で）洋食……それとも……

岡部　何でも結構です。

A子　さう／＼。今夜はあなたのお好きなハムに致しませうね。（女中に）コオルド・ハムに……何か御野菜を用意しておいて頂戴。後であたしお臺所へゆくから。

女中　はい。

A子　用事があつたら呼ぶから――それから、旦那樣に氣をつけてゐてね。

（女中、紅茶茶碗をひいて去る。）

岡部　奧さん、少し氣をつけて下さらないと困りますよ。

A子　何をですか。

岡部　女中も他人ですからね、他人の前では愼まなきやならないのです。

A子　でも……あたし、別に何も申さないぢやございませんの。

岡部　とにかく二人は、他人の前では白々しく裝はなきやならないのです。出來るだけ他人に感付かれないやうにしなきやあいけないのです。

A子　そりやあたしだつてよく存じてゐますわ。

岡部　世間から見れば、二人の關係は許されないんですからね。僕は舊道德に根據を置いた生活をしようなどとは、毛頭思つちやゐませんが――友人が氣違ひになつたのを幸に、その妻君を盜んだなどと言はれては、あんまりいい氣持はしませんからね。

A子　まあ、そんな事――（不機嫌に）あたし、そんな事をお聞きするために、あなたをお待ち申したんでせうか。

岡部　まあ／＼、怒つちや困りますよ。二人の安全のために隱さなくちやならないのです。言はゞ世間との惡い――

A子　妥協だとでも仰しやるんでせう。でも、二人はかうなるより他、仕やうがなかつたぢやありませんか。

岡部　ですから、出來るだけ安全にかくれて、二人は強く愛し合ひませう――二人の幸福な世界を何時までも壞さないやうにね。――（立つて窓際の方へ行く）窓ぎはの方が涼しいやうですよ。こつちへいらつしやいませんか。

（A子も立つて窓際へ行き、岡部と並んで、ソオファに腰を下ろす。A子は、岡部のふかす葉卷の匂にうつとりしたやうに話す。）

岡部　實は――

A子　えゝ？――

岡部　藤岡君の病氣は、もしかしたらなほるかも知れないつて恐れがあるのです。恐れと言つては、あんまり自分達本位にした言ひ方ですが、正氣に返りうる可能性（ポシビリティ）が多いのです。

A子　あの人の病氣がなほるんですつて！――では、萬一なほつたら、あたし達は……

岡部　然し、A子さん、御心配はいりませんよ、治療さへしなきや、一生あの儘です。……然し、なほつた場合に對する決心はかためておかなくちやなりませんからね。

A子　でも、今更しなほさなきやならないやうな決心もありませんわ。

岡部　そりや無論です。二人は今の儘で藤岡君の前に立つんですね。

A子　たくは驚くでせうか。

岡部　驚きますよ、乾度。

A子　怒るでせうか。

岡部　さあ、そりや分りませんね。然し、苦しむでせう。

A子　前よりも一層ひどくですか――(沈む)又、やけにお酒を飲むでせうね。毎日お酒ばかりのんでゐて、人生は不幸だ、人生は寂しいつて、あたしのせゐのやうに言ふでせうね。

岡部　(なだめるやうに)然しA子さん、そんなことはみんな取越苦勞なんですよ。

A子　あゝ、さうでしたわね。あたしすつかり考へこんでしまつた。あたし達は何も心配する必要はなかつたのね。あの儘にさへしておけば、一生夫は氣違ひですからね。

岡部　いはゞ、僕達は自分の幸福のために氣違ひのお守りをしてゐるやうなもんだ。

A子　そんな風に言つちや、あたし達は惡人に聞えますわ。

岡部　實際惡人ですよ――よく考へれば、良心ある醫者として、なほる病氣をなほさないでおくのは罪惡ですからね。

A子　(一寸暗い顔をする)　しかし、たくはあの儘の方が却つて幸福ですわ。今のやうに、なんにも知らない子供のやうにあまえてゐる方が、どれだけ幸福だかしれやしませんわ。

岡部　白痴や氣違ひは、或意味に於てはたしかに幸福です。全く知識はいろんな不幸を敎へますからね。然し、意識しない幸福にはどれだけの價値があるでせう。

A子　そんなむづかしい事なんか――

岡部　こんな事は書齋の哲學者にお譲りするとして、僕達は今の幸福に感謝してゐればいゝのだ。

A子　全くですわ。

岡部　僕にはこんな日が來ようなどとは思はれなかつた。

A子　まるで夢のやうね。

岡部　運命つて實に皮肉だと思ひませんか。僕はあなたが結婚なすつた時、世の中が急に暗くなつたやうに思つた。

A子　あたしも何だか……

岡部　あの時分、僕は絶望のあまり死なうとさへ思つたぐらゐです。

A子　まあ。――でも、あの時あなたは何にも仰しやつて下さらないんですもの。

岡部　僕は藤岡君に自分の戀人を讓つて、男らしい諦のうちに住まうと決心したのです。言はゞ、犧牲といふ美しい名に醉つたのでした。然し、今になつて考へるとあんな感激はみんな嘘でした。

A子　あなたが絶望して荒んでゐらつしやると聞いた時には、あたし何時も心を痛めてゐましたの。

岡部　だが、あの頃は僕も荒まずにはゐられなかつた。――然し、今は何だか自分の生活に潤が出來たやうな氣がする。世間からかくれなければならないだけ、後暗いところがあるにしても、少くとも二人の世界には何となく華かなものがあるやうに思ふのです。

A子　あたしだつて晴々した氣がしますの。だつて、夫はいつもお酒ばかりでせう。それに仕事が急しいの、患者が多いのと言つて、少しもあたしをかまつてはくれませんの――勿論、可愛がつてはくれましたが――あたし、結婚つてこんなものか、夫の愛つてこんなものかと思ひましたわ。

岡部　然し、藤岡君の酒をのんだ氣持には、友達の戀人を奪つたといふ苦しい心が働いてゐたかもしれない。

A子　そりや働いてゐたでせう。でなきや人間ぢやないわ。――でも、お酒をのんだのは今に始まつたことぢやないんでせう。

岡部　えゝ――大學の時も高等學校の時もよくのみました――いくら飲んでも醉ふなんてことの無い男でした。

A子　今度の病氣の原因もお酒でせうね。

岡部　無論、手傳つてゐます。

A子　あの時のことを思ひ出すと、ぞつとしますわ。（身顫する）夫の樣子が變だ〳〵と思つてゐたのですが、突然あたしに抱きついて、ひつ〳〵と笑ふんでせう。まあ、あの時の薄氣味の惡いことつたら！　あの時分は、あたしほんたうに心配でしたわ。やつと病院の名前が知れるやうになつたのに、その病院を閉ぢて狂人の夫を見守つて、あたしは何をすることが出來たでせう。――でも、あなたが來て、病院をもとの儘に繼續して下さつたので、あたしどんなにうれしかつたか知れませんの。でなかつたら、あたしも氣違ひになつてゐたかもしれないわ。ほんたうに色んな意味であなたに感謝しなくちやなりませんの。

岡部　何です、今更改まつて――

A子　でも――

岡部　然し、すべてのおこりはあなた方の結婚がほんたうで無かつたからではないでせうか。と言つて、僕達の關

係をジャスティファイしようといふ譯ではありませんが。

A子　えゝ、さうでしたの。夫は何時もあたしより遠くに立つてゐたんですもの。

岡部　で、あなたは近づかうとはなさらなかつたんですか。

A子　一生懸命に努力しました。でも、駄目でしたの。

岡部　努力で愛は贖はれませんからね。

A子　夫との間に深い溝があつたのです。

岡部　では、藤岡君が氣違ひにならなかつたとしても、あなた方の結婚は破れるのは當然だつたのですね。

A子　おそかれ早かれね、それに趣味や性格なんかもひどく違つてゐましたの。この部屋も夫の好みなんですが……

岡部　随分あくどい感じだと思つてゐた。

A子　初めは壁全部を眞赤にしたいと言ふんです。あたしがさんざ反對して、こんなピンク色にしたんですの。強い刺戟がないと生きられないやうな人なんです。考へると、あの時分からもう神經に異常があつたのかも知れませんのね。

岡部　（沈んで考へ込む）　藤岡君には何處か普通の人と違つたところがあつた。何かしら偉いところがあつたのかも知れない……考へると氣の毒だ。

A子　又、そんな事を仰しやる——あたしだつて氣の毒だとは思ひますわ。でも、考へると恐ろしいのです。脅かされるやうな氣がするのです。（強く）そんなことみんな忘れなきやいけませんわ。

岡部　忘れなきやいけない——さうかも知れない。とにかく、僕達の愛でそんなものはみんな消してしまひませう。

A子　今の幸福を考へると、どんな迫害も怖くはありませんの。

岡部　（A子の肩に手をかけて、抱きすくめるやうにして）僕は全く幸福だ。これだけで十分だ。これ以上何を望まう。二人はかうしてゐさへすればいゝのだ。

A子　あたしの胸は、乙女時代のやうにどき〱しますのよ。

岡部　僕は、初戀の人は、いろんな意味で、何よりもなつかしいものだと言ふことがはつきりと言へる。恐らく、人はどんな戀をしようと、初戀の人は死ぬ迄忘れられまい。

A子　昔のことでも思ひ出しませう。

岡部　どんな小さなことでも、憶えてゐるだけはみんな話し合ひませう。

（この時、窓から人の影が部屋の中へ落ちる。）

岡部　（その影を見て驚いて、小さく叫ぶ）　あ、誰か庭に

ゐますよ！

A子　（狼狽の色を現はし、起ち上りながらカアテンを引いて顔を出す）　あら、小松さん――

（岡部あわてゝソフアを離れる。）

小松　（窓の外で）　あゝ、奥さんですか――暫くでした。

A子　（强ひて落着きを裝ひながら）　岡部さんもいらつしやいますのよ。よくいらして下さいました。どうぞおあがり下さい。

小松　（笑ひながら）　昔の亂暴者の僕なら、窓からでもはひるところですが……扉の方へ廻りませう。（見えなくなる）

A子　（岡部に囁く）　あたし達の話は聞えなかつたでせうか。

（女中、右手の扉からはひつて來る。）

女中　小松さんがおみえになりました。

A子　何故すぐとお取次しないのです。

女中　小松さんが、奥樣は何處だと仰しやいますから、お書齋だと申しましたら、お庭から廻つた方が早いつて仰しやつて、どん〳〵おいでになつたものですから。

A子　それならさうとすぐ言ひに來ればいゝぢやないの。

（小松左手の扉からはひつてくる。）

小松　（女中のしをれてゐるのを見て）　女中さんがどうかしたのですか。

A子　いいえ、別に、不作法に御案內しないものですから。

小松　奥さん、そのお叱りなら僕が引き受けます。僕がどん〳〵庭の方へ來ちやつたもんですから。

A子　いゝえ、何でもないのですの……（女中に）　紅茶とお菓子をもつておいで。

（女中去る。）

小松　岡部君、近頃は如何ですか。

岡部　暫くだつたね。（氣付いたやうに椅子に腰を下す）

A子　（小松に椅子をすゝめながら）　あんなによくいらしたのが、十日ばかりもおみえにならないので、どうなすつたのかと思つてゐましたの。たくが普通の病人でしたら、友達甲斐ないなんて、乾度言ひますよ。

小松　こいつあ、どうも恐れ入ります……で、藤岡君の御樣子は――？

A子　只今は靜かにねてをります。

小松　さうですか。それは結構です。――實は……僕の專門が精神病なもんですから、藤岡君の治療に就て苦心してゐたのです。

A子　なほるでせうか。（せきこむ。急に氣付いたやうに調子を變へて）　ほんたうになほつて下さらなくちやならないのです。――どうも御心配かけてすみませんでした。

岡部　（强ひて落着いて）それで何かいゝ方法でも？

小松　策がありさうなのだ。

A子　まあ！　うれしい。（度はづれの大きな聲で叫んで、うれしさうに笑はうとしたが、それが寂しい笑に消える）

小松　ほんたうにおよろこび下さいますか。

A子　妙なことを仰しやるのね……妻が夫の病氣のなほるのを悦ばない譯があるでせうか。

（女中達入つて來て、菓子と紅茶とを置いて去る。）

A子　いかゞですか。（紅茶をすゝめる）

小松　なほるに相違ないと見當のついた時、僕はすつかり昂奮して驅けつけたのです。しかし……僕は見合さうと思ふのです。

A子　何ですつて！

小松　藤岡君はなほさない方がいゝやうに思ふのです。

A子　何といふことを仰しやるのです。何といふ殘酷なことを。

岡部　君は何といふことを言ふのだ。

小松　ほんたうの幸福といふものは、さう澤山あるものぢやない。寂しい缺けた人生で、幸福はさう滅多に來るものぢやない……凡てを今の通りにしておいた方が、藤岡君にも、岡部君にも、A子さんにも、一番いゝと思ふのです。

A子　（强ひて聲をふるはせて）夫は氣狂、そして妻はその夫を守つてゆく――それで、あなたはいゝと仰しやるのですね……

小松　（A子の言葉を遮るやうに）まあ、奥さん。

A子　それに、岡部さんでもゐて下さらなかつたら、この病院はどうなるのです。夫の努力でつくりあげたこの病院はどうなるのです。私達の生活の安全はどうなるのです。

小松　岡部君には僕も心から感謝してゐます。

岡部　なあに友人としてはあたり前の事だ。

小松　然し、岡部君、病院をたてたほすよりも、藤岡君そのものをたてなほしてくれゝばよかつたのに――

岡部　君は何を言はうとしてゐるのだ。

小松　（眞面にきつとなつて）僕の言葉を理解してくれてもいゝぢやないか。（調子を變へて）岡部君、藤岡君の病氣だつて、さう不治のものではないやうだぜ。

岡部　（ぎくりとする。それを隱して）それぢや、僕がなほる病氣をなほさないでゐるとでもいふのかい。

A子　小松さん、隨分のことを仰しやるのね。

小松　何もそんな風にとらなくつてもいゝぢやありませんか。君とは見方がちがふかもしれないが、僕としては、なほると信ずるのだ……しかし、なんにも言ふまい。三

人の學校時代からの友情を思ふと僕はなんにも言ひたくはない。

A子　何か誤解してゐらつしやるのですわ。

岡部　たしかに誤解だ。でなけりや、邪推だ。

小松　さう強く言はなくともいゝぢやないか。——さう隱さなくたつていゝぢやないか。そんな態度は、僕を怒らせるよ——（激して來た自分を制するやうに）しかし、僕は、なんにも言はない方がいゝやうだ。僕は歸らして戴きます。（帽子をとつて起つ）

岡部　君は侮辱しに來たのか。

小松　君はまた強さうに見せかけようとしてそんな事をいふのか。（涙ぐむ）

岡部　變にほのめかしておいて、その儘かへるといふのは、男らしくないといふのだ。

小松　僕はなんにも言ひたくない。（涙ぐみながら、その感情を制して）僕は昔から亂暴者の癖に、すぐ感情に激して困るんだ。（どつかり椅子に腰を下ろす）

（間。）

（A子は小松の方へ眸をあげたが、その眸は寂しい色を帶びてゐる。それを岡部の方へ移し、軈てうつむく。）

小松　さうだ、僕はやつぱり言はなきやならない。——窓の外で思はず君達の話を聞いてしまつたのだ。無躾なことだと思ひながら。

A子　（割合に平靜に）あたしもさうだと思つてをりました。

小松　君達が今のやうになるのを僕は心ひそかに氣づかつてゐたのだ——しかし、それが事實となつたのをみると、却つて、嚴肅な氣がする。僕は、窓の外で、ひそかに感動させられてゐたのだ。——初戀の人が結びつけられる、それは何といふ美しい自然な事だらう。戀はそれ自らの道を辿るものだ！——それに、藤岡君の今度のことにも、岡部君、君の事を苦にしたのが、大きな原因となつてゐるに違ひない。だから、藤岡君をもとの眞人間にかへしたなら、君達の關係を知つて、以前よりも一層苦しむだらう。それに、君達二人も、不義者として、立派に社會から葬られるのだ。一生社會の表面へ浮びあがれないのだ。——かう思つた時、僕は、あの窓の外で、藤岡君をなほさうと決心した心も挫けて、僕は默つて歸らうと思つたのだ。其處を丁度、奥さん、あなたにみられてしまつたのです。

（岡部とA子、默つて小松を見あげる。）

岡部　君が歸るといつたのは、そのためだつたのか。

小松　さうだ、最初は君達の戀を無條件で肯定した。そして、この事に就ては默つてよく考へようと思つたのだ。——しかし、この肯定の心の上に、更に他の心の叫びを、僕はきいた。君はそれを何だと思ふ。——さうだ。僕は立派に藤岡君を、價人間にしようと決心したのだ！

岡部　（立ち上り）では、君は、僕達を社會から誹らうといふのか！

小松　（靜かに）氣を廻しすぎないでくれ。もう少し僕の言ふ事をきいてくれ給へ。僕は言はなけりやならないのだ。

A子　小松さん。お願ひです。今度は、私からお願ひしますわ。なんにも仰しやらないで歸つて下さいまし。

小松　いや、奥さん。さつき歸らうとした僕を、今は力一杯ひきとめるものがあるのです。暫く喋らして下さい。……奥さん、あなたは、藤岡君の事を思ふと氣の毒だ。怖い、しかし、そんなことは忘れなけりやならないと仰いましたね。

A子　えゝ、申しました。

小松　岡部君、君も同意だつたね。

岡部　むう——然しそれがどうだといふのだ。

小松　其處だ。忘れなきやたらないといふ苦しい努力は、自分の感情を僞る事だ。それはうそだ。虛僞だ。

岡部　うむ！——

小松　僕は忠告がましい事を言ふのではないか、君達はほんたうに生きてくれなくちやならないのだ。忘れようとする苦い努力は、自己への寂しい慰安だ。自己への苦しい辯解だ。社會が何だ。社會と妥協してはならないのだ。假令、君達は社會から何といはれようと、戀の勝利者として、二人の愛の力で、人生を淨めてゆくことも出來るのだ。それに、藤岡君——あの天才的な男を、あの儘にしておくのは忍びないことだ。あれでは動いてゐる屍だ。あの儘死なすのは何といふ殘酷なことだ、藤岡君は立派にならなけりやならない。藤岡君は、是非なほさなけりやならない。——藤岡君はなほつても、決して君達二人に惡いやうにはしまい。君達の關係を知れば苦しむだらう。しかし、悲痛で寂しいながらに、藤岡君には、さらに新しい人生へ、さらに貴い人生へ自己を深めてゆくことが出來るのだ。新しく歩み出すことが出來るのだ。

（この時隣室で騒々しい音。）

藤岡の聲　A子——A子——A子！

女中の聲　奥樣——奥樣——旦那樣か——

（三人椅子から飛び上り、A子が先づ右手の扉を排してはひる。）

藤岡の聲　この部屋は暗くていやだ——もつと明るい處

だ！　もつと明るい處だ！

A子の聲　では、こちらがいゝでせう。

（藤岡、A子と小松につかまりながら出てくる。この時、部屋の中は既に暗くなりかけて、澱んだ樺色の光が室内の色彩と交錯して、一種（dandy）な空氣を釀し出す。）

小松　どうしたのだ。

A子　（女中に）どうしたの。

女中　急にお床の上へ躍びお起きなすつたのです。

小松　靜かにしなくちやいけませんよ。

A子　もし、あなた、小松さんに、岡部さんですよ。お分りになつて。

（藤岡、それには答へないで、大きなうつろな眼を見張つてゐる。）

小松　ソオフアに坐らせたら如何です。

（藤岡動かないので、小松とA子とが支へてゐる。）

藤岡　のどがかわいてしやうがない。かわいてしやうがない。水をおくれ。水を。冷たいビイルだなどと言やあしないよ。もうお酒は飮まうといはないよ。――A子、A子、冷たい水だ。

A子　（女中に）水をもつておいで。

（女中コップに水をもつてくる。）

A子　さあ、おのみなさい。

藤岡　はゝ、ビイルだなあ。（飮む）

（小松、藤岡のむしやくしや生えた髯についた水をハンカチで拭いてやる）

（急に、坐つてゐた眸を、きよろきよろ動かして、小松に）あ、患者さんか……あなたは何處がお惡いのですか……

小松　兄弟の樣に親しかつた僕が分らないのか！……藤岡君、僕だよ、小松だよ――神經にこんなに異常をきたして、記憶を滅茶々々にされて……

藤岡　（急にあたりを見廻し、眼を鋭く輝かし、睨みつけて）誰だ！　誰だ！　又、俺をしばらうとするのは！　いけない――放した、放した！……（自分を支へるA子と小松をふり放して、激しく兩手で自分のまはりを拂ひのける）おゝ、恐い！　さつきも俺がねてゐた時、恐ろしい手で俺をしばりあげるのだ。べつとり血のついた繩で。――俺を絞め殺すのか。俺は――怨をうけるおぼえはない！　又、しばらうとするのか。止せ！　放せ！

（A子と岡部、思はず打たれたやうに見合ふ。）

（藤岡、兩手でそこいらあたりを追ひはらひ、荒れ狂つて床の上に倒れる。小松、後から抱き上げて起す。）

A子　（藤岡の前に屈みこみ、宥めるやうに）靜かにして頂戴。

藤岡　（發作が靜まつたやうに、空虛な眼差で彼女を見るやうな眼付をする。急にA子を認めて、薄笑して）お前も俺をしばらうとはしまいね。――お前さん病人か。青い顏だね。――何處が惡いのだ。――（A子に近より、頭から肩のまはりを撫でる）

A子　あつ、厭だ！　氣味の惡い！　（彼から身を退ける）

藤岡　（又、A子に近よつて、胸から腰を撫でる）　隨分變つた！――隨分變つた！――

A子　（躍び退いて）　何をなさるの。いけません。いけません！

（藤岡、口を歪めて、にたりと笑ふ。）

A子　（發作的に、ヒステリカルに、藤岡の前へ身を投げて）あたしが惡いのです――あたしが――許して――許して――

小松　（A子を抱き起しながら）　靜かにしなくちやいけないんですよ。病人をこの上興奮さしちや――。（藤岡に）奧さんも隨分變りましたよ。

――幕――

（大正十年初夏帝大劇研究會第一回試演臺本）

# 山の喜劇（一幕）

## 誇張された演技を要する諷刺劇

鑛山事務所の一室。

卓、椅子。

夏の夜。

幕開くと、社長と鑛夫頭が卓に向ひ合つてゐる。社長は相手に額を突きつけるやうにして、何か怒鳴つてゐる。

彼は肥つた赤ら顔の男。

鑛夫頭は、勞働者上りらしい、顔の青黑い、善良さうな男。

社長　ダイナマイトが無いツ？

鑛夫頭　はい。

社長　又、無くなつたのか。

鑛夫頭　はい、又紛失しました。

社長　これで二回目ぢやないか。一體、どうしたと言ふんだ。

鑛夫頭　昨日は十五個、今日は二十個――

社長　ぢや、合計三十五個だな。そんなに多くのダイナマイトが紛失してどうするんだ。君は何故もつと嚴重に監督しないんだ。

鑛夫頭　無論、十分氣をつけて監督してゐるのですが、何分近頃は開鑿工事が多いものですから、ついダイナマイトの使用數も多く――

社長　だからと言つて、ごまかされては君の役目が務まらんぢやないか。

鑛夫頭　はい。ですから、至つて嚴重には監督してゐるつもりです。今日も西の坑道が開鑿の必要があつたので、十分審査の上、必要なだけのダイナマイトを與へたのです。ところが、鑛夫の連中、不發の奴が多いといふんです。さう粗製品のあらう筈が無いと思つて、嚴しく調べたところ、二十個といふ――

社長　どうして、そ、そんなに多くのダイナマイトを――

鑛夫頭　それが、どうも――

社長　一體、何處へ隱したんだ。

鑛夫頭　それが、どうもわたしには――

社長　おい、君！　それだけのダイナマイトがあれば、この鑛山の建物の大半を破壞することが出來るんだぜ。ス

トライキ！　さうだ、奴等はストライキをたくらんでゐるんだな。ストライキを！　暴動を！

鑛夫頭　社長、そんな事は――

社長　さうで無いと、どうして君には分るんだ。奴等の近頃の擧動は、どうも變だと思つてゐた。これあ暴動を起す下準備に違ひない。

鑛夫頭　社長、決してそんなことは――

社長　無いといふのか。君は斷言出來るのか。――勞働時間の短縮、賃銀の値上、それが現在の勞働者の合言葉だ。わしは近頃の勞働者の根性を知つてゐる。奴等は何かと言へば、資本家に楯つくのだ。三十五個のダイナマイト――三十五個の――

鑛夫頭　ですが――

社長　いや、これは實に容易ならんことだ。どうも、一騷動起す氣らしいな。併し――(凄く)わしはかういふ場合にはどうすればいゝか、よく知つてゐる。首にするぞと威嚇するか、札束で横つ面をはることだ。わしだつて馬鹿ぢやないからな。――だが、君か早速、正直に報告してくれたのは、何よりも有難い。近いうちに、一つ君を昇進させてあげようかなあ。

鑛夫頭　いや、わたしは、なにもそんなつもりでは――

社長　いや、君が昨日逸早く知らせてくれたんで助かつたよ。わしだつて、素早く防禦準備をしなきやならんからなあ。わしは早速、智能犯の腕利きの刑事に來てくれるやうにと打電したから、今夜にも此處へ到着する筈だ。

鑛夫頭　えゝ、刑事を――

社長　さうだ。先方の都合さへよければ、今夜の八時四十分の汽車で到着するだらう。それから、わしは、手なづけてあるスパイに命じて、鑛夫の動靜をさぐらせてあるんだ。

鑛夫頭　えゝ、スパイを――

社長　さう一々驚くには當らないぢやないか。わしは常々かういふ場合に對する準備はしてあるんだ。現代の資本家はさうなくちやならないんだ。

鑛夫頭　併し、社長、單にダイナマイトが紛失したからつて、すぐにそれをストライキだとか何とかお考へになるのは、――

社長　ふん、君もあいつ等とぐるになつて、わしをだまさうとする氣かね。

鑛夫頭　いや、そんなことは。そんなら、何もこんなことを報告には來ない筈です。

社長　それはさうかも知れん。だが、三十五個のダイナマイト。――無知なあいつ等にとつては、それだけの力は一つの誘惑だ。暴力への誘惑だ。暴動が起つてからでは、

どうにも出來ん。わしは事を未然に防がなくては——

鑛夫頭　然し、社長——

社長　もういゝ。君の忠勤ぶりは大いに認めてあげよう。ところで——（調子を變へて）君は、わしの味方になる氣はないかね。

鑛夫頭　と仰しやると——

社長　君は、この鑛山に働くやうになつてから何年になるね。

鑛夫頭　はい、今年で十二年です。

社長　さうか、十二年か。で——君はこの會社の規定を知つてるね。老後扶養の年限は？

鑛夫頭　はい、あと三年すれば——

社長　若し君がわしを信頼して働いてくれるならば、決して君に惡いやうにはしない、ことに君の老後を困るやうにはしないつもりだ。君には、たしか子供さんがあつたね。

鑛夫頭　はい、三人。上の奴は今年十三になります。來年は小學校を卒業する筈です。

社長　ほう、そんなに大きいのかね。ぢや、それ迄に育てるのは並大抵ぢやなかつたらう。わしにも子供があるので、それはよく分る。二人とも東京の學校へやつてある。今、暑中休暇で一しよに連れて來たのは、姉の方だ。子供つて實い可愛いゝものだ。——ところで、君の長男は小學校を出たら、どうする氣だね。

鑛夫頭　あれは成績がいゝつと言つて、先生もほめて下さるし、本人自身も出來ることなら、街の中學へはひりたいと言つてゐるのですが——

社長　さうなると、君もなか〳〵責任がある譯だな。若し、中學へでも入れるやうになつたら、物入りが大變だらう——

鑛夫頭　この問題も、お恥しい話ですが、實はお金のことで——

社長　むう、さうだらうて。然し、君は會社へ貯金してゐる金もあるし、今數年すれば退職手當の金もはひる筈だし——

鑛夫頭　はい。ですから、若しあれがどうしても中學へはひると言ふなら、その金をとでも思つてゐるのです。勿論、それだけでは足りさうもありませんが——

社長　なか〳〵立派な心掛だ。ところで若し首にでもなつたら——

鑛夫頭　（吃驚して）首——このわたしが——

社長　いや、君を首にするといふんではない。萬一、君がストライキにでも加はつたら、退職手當は無論のこと、あすが日にも生活に困らなくちやならなくなるのだ。

鑛夫頭　はい、はい、それはよく存じてをります。

社長　君ばかりではない。此處に働いてゐるものは、ストライキでも起した日には、すぐにも暮しに困らなきやならない連中ばかりだ。だから、奴等のために、鑛夫頭としての君に特にその事を考へて貰ひたいのだ。

鑛夫頭　そりやもう仰しやる迄もなく――

社長　ストライキなどを起すのは、君達の生活を一層慘めにするばかりだ。そこのところを、よく考へてくれなくちや――ところで、若し君がわしのために忠實に働いてくれるなら、わしは君の息子さんの中學へはひる學資位出してあげてもいゝと思ふのだ。

鑛夫頭　社長、そりやほんたうですか――

社長　君の息子さんは成績がいゝと言ふから、さういふ子に教育させて、有能な人物をつくることは、國家に對して奉公する所以だ。國家のためなら、わしは何時でもそれ位の金を投げ出すのを惜しみはしないつもりだ。

鑛夫頭　有難うございます。

社長　ところで、ダイナマイトの一件だがね――君に賴んでおくが、若し、奴等が何かたくらむやうな形勢があるとか、不穩な動靜があつたら、早速報告して貰ひたいと思ふのだ。それは、君が仲間を裏切るといふよりは、大きな眼から見れば、國家のためであり、又、鑛夫頭としての君の義務であらうと思ふ。

鑛夫頭　はい。それはもう――

社長　（時計を見て、立上り）わしは一寸停車場まで出掛けなくちや――高等刑事の方にこの下りの汽車で來て貰ふことになつてゐるから。――ところで――君、今の話はよく分つたね――萬一君が不利益な立場に立つやうなことがあつても、わしは決して惡いやうにはしないから――分つたね。

鑛夫頭　はい。

（娘はひつて來る。）

娘　お父さん。

社長　何か用かね。

娘　この間からのお願は？

社長　そんなに海岸へ行きたいのかい。

娘　でも、する事がなくて退屈なんですもの。

社長　退屈たつて？　此處へ來てからまだ一週間と經たないぢやないか。たまにはかうした生活を見るのもお前のためだよ。

娘　だつて、此處の生活がたまらないんです。殺風景な周圍と、煤煙と、獸のやうな人達と――

社長　そりや鑛山だもの。仕方がないさ。

娘　暫く海岸へ遣つて下さつたつていゝでせう。秋になれ

ば、又、學校の寄宿舍で――

社長　そりや海岸へやつてあげてもいゝさ。その話なら、あしたゆつくりとしよう。今一寸急ぐから――

娘　ぢや、乾度やつて下さるわね。

社長　うん、うん。

娘　何處へお出かけ？

社長　刑事の方が見えるんで、一寸出迎へに行かなくちや。

娘　刑事の方つて？　何かあつたの。

社長　いや、いや、何でもない――お前の氣にしないでいい事だ。――然し、今夜此處へお泊めするかも知れないから、氣をつけてもてなしてあげてくれ。――すぐ歸つてくるから。

（社長、鑛夫頭、去る。）

娘　あゝ、厭になつちまふわ。折角見學だと言つて連れて來られたのはいゝけれど、赤ちやけた山と、殺風景な生活。何處とゆく處もなく、毎日製煉所の煙突から火山のやうに噴き出す煙を見てゐると、目まひがしさうな氣がするわ。暗い鑛坑の中へはひつてゆく大勢の鑛夫――あの人達は、何て粗野で荒々しいんだらう。まるで獸のやうだ。――でも、あの人達は苦しい勞働を僅かの金に代へて生きてゐる。あゝするより外に生きてゆく能力のない人達なんだらうか。――それなのに、あたし達は安樂に暮してゐる。それがいゝのか惡いのか、あたしには考へるのさへ恐ろしい。どうでもいゝから、もう一日も早く、こんな鑛山から、こんな世界から、何處かへ行つてしまひたい。――あゝ、厭だ、厭だ。――

（附近を通るらしい鑛夫の唄が微かに聞える。太い聲は一脈の哀愁を湛へてゐる。）

娘よく聞け
坑夫のかゝあは
岩がどんと來りや若後家よ……

（扉をノックする音。）

娘　どなた？

聲　事務の岡田です。

娘　あゝ、岡田さん、何か御用？

事務の男　（はひつて來て）あ、お孃さんですか。社長は？

娘　お父さんなら、今出かけましたの。

事務の男　早く行かないと時間に間に合はないのです。わたしはさきから自動車を待たせて、お待ちしてゐたんです。

娘　あら、それはお氣の毒さま。たつた今出かけたばかりですの。

事務の男　あゝ、さうですか。

（周章てゝ去る。）

（娘も去る。）

（寂。）

（青年、細目に扉を開けて中を窺ひ、それからこつそりはひつて來る。）

青年　おや、たしか此處だと思つたのに、もう姿が見えない。（あたりを見廻し）窓の外からこつそり覗いて、たしかに此處にゐる姿を見たのに——可笑しいぞ。——僕の愛するヴィナス！——ふん！——一介のプロレタリアの青年が、ブルジョアの娘と戀をして、自分もブルジョアに成上つて、社會の表面へ浮び出ようといふのか。——椅子がある——卓がある——あの向うには贅澤な寢床もあらうと言ふもんだ。（椅子に坐つて）此處へかうどつかり坐つて、高い葉卷をくゆらしながら、活動的な敏腕な事業家らしく使用人を顎で指圖する。大した身分だ。——僕の果敢ない夢か。——ふん、止すがいゝ——さうだ——打算以外の、より高い、より切ない感情のあるところに、戀愛の戀愛らしさがあるのだ。あゝ戀しい！お孃さん！——

（娘はひつて來る。）

娘　（青年を見て吃驚して）あら！

青年　（狼狽して椅子から跳び上り）僕はあの——鑛務所の書記の——

娘　先日お目にかゝりましたわ。

青年　僕は——その——

娘　父に御用でしたら、生憎、今出かけてゆきましたの。

青年　いゝえ、あなたに——

娘　あたしに——

青年　えゝ。あなたに！

娘　何の御用ですの。

青年　あなたは先日僕をたつた一度御覽になつた切りですが、僕はあれからしよつちゆ、あなたのお姿を拜見してゐるのです。

娘　あら、厭ですわ。

青年　あんまり失禮で、何からお話していゝか分りませんが——あなたは、まだ掘り出されない山の寶石です。あなたの美しさ——その美しさが、ブルジョアの青年の弱弱しい腕に委されるのを考へると、僕はとても我慢がならないのです。あんな世界では、あなたの美は汚されずに育ちはしないのです。

娘　あら、何を仰しやるおつもりなの。

青年　あなたの美しさは、プロレタリアトの世界で育てなければならないのです。山の寶石——それを掘り出す

のは、坑夫です。勞働者です。プロレタリアです。

娘　と仰しやると——

青年　あなたの美は、それを磨き上げてくれるものを探さなければならないのです。——あなたはハイネの戀愛の唄を御存じですか。

娘　えゝ。

青年　あれを女學生式のセンチメンタルな唄だとばかり思つては間違ひです。あの殉情的な戀愛詩が、マルクスと深い交誼があり、社會惡に心を燃やしてゐた詩人の作だといふことを考へなければならないのです。

娘　いろんな事を御存じね。

青年　いや、僕の言ひたいのに、戀愛はあらゆるものを超越して、そんなにも純眞であり得るといふのです。レエニンにだつて戀はある筈です。偉大なゲエテは一生戀をし續けました。ですから、あなたが一介の勞働者と戀をなさつても、いさゝかの矛盾も不合理もないといふ——

娘　あら、あたしまだ戀なんかしやしないわ。これからさういふ場合もあるかも知れませんが。——あなたは、敎育のあるお方らしいのね。

青年　僕か？　いや、謀反氣の多い僕は、學校を途中でとび出したのです。そして、この體を養ふ僅かばかりのパンを得る、たつたそれだけの理由で、此處へ傭はれたのです。然し、血の氣の多い僕は、永久に此處にゐようとは思ひません。だが、此處に來たことを後悔してはゐません。あなただつてさうです。不幸な勞働者に同情し、その人達の生活をもつとよく知らなければならないのです。暗い地の底へ潜りこんで、生活に對する希望も悦もなく、やがて體にしみこんだ泥のために、半身不隨のよろけ病となつて死んでゆくあの人達の生活を、氣の毒だとは思ひませんか。恐ろしいとは思ひませんか。いや、あの坑夫ばかりではない、世界の隅から隅にまで擴がる不幸な勞働者——その生活をもつとよく知る必要がないでせうか。

娘　でも、あの獸のやうな人達——

青年　然し、それは坑夫達ばかりの罪でせうか、あなたは今迄安樂に暮してゐらしたから、勞働者の慘めさが分らないのです。もつと苦勞なさらなくちや——

娘　そりや、さうですけれど——

青年　狡猾な資本家の社長の娘に、あなたのやうな純眞な美しい方があらうとは、僕は夢にも思ひませんでした。

娘　父のことを惡く仰しやるなんて、ひどいわ。

青年　御免なさい。然し、あなたのその純眞さ、その美しさが、ブルジョアの青年に奪はれるのを考へると、僕はたまらない氣がするのです。あなたは我々の味方に——

いや、我々の一人にならなければいけません。ですから、若し、僕のやうな貧乏な青年が――若しもですよ――あなたに戀するとしたら――あなたは――あなたはどうなさるおつもりですか。

娘　それも場合によりますわ。

青年　（急に寂しくなつて）いや、いや、プロレタリアの青年が、社長の娘と戀するなんて、ロミオとジユリエットの場合よりも、もつと譯が惡いのだ。

娘　と仰しやると？

青年　勞働を賃金にかへる青年が、金の利で暮してゆく世界の娘と戀をする――それは、仇同志のモンタギユ家とカプレット家の關係よりももつと惡いのでした。

娘　でも、ジユリエットの方が愛さなかつたとしたら――

青年　ですから、僕の夢はます／＼哀れで、滑稽にさへ見えようといふもんです。

娘　皮肉ね、あなたは。

青年　皮肉でせうか。

娘　えゝ、あなたの皮肉には嘲りがふくまれてゐますわ。

青年　若しさうだとすれば、不幸な運命が僕の心を虐げたからです。

娘　でも、あなたはお喋りね、詩人のやうに。

青年　いゝえ、涙をかくした道化役者とでも言つて頂きたいらんですね。

娘　面白い方ね、あなたは、

青年　實は――お孃さん！

娘　えゝ？

青年　僕は――お孃さん！

娘　（不安になつて）何ですの？

青年　僕は――あの――（手紙を取り出し）あなたを戀してゐるのです！

（社長はひつて來る。）

（續いて、高等刑事、事務の男。）

（青年は狼狽てゝ手紙をかくし、まご／＼してゐる。）

社長　君は何だ！

事務の男　鑛務所の書記の――

社長　何の用だ――何故、無斷で――

刑事　危險な男かも知れない。つかまへ給へ。

（事務の男、青年を摑まへる。）

青年　僕は、なにも、そんな――

社長　樣子をさぐりに來たか、何か仕出かさうとするのかも知れない。

刑事　武器を持つてゐないか、探し給へ。

青年　何か誤解してゐらつしやるのです。僕は――たゞ、ほんの――その――その――

社長　言譯は後で聞く。――ポケットを探し給へ。

（事務の男、青年のポケットをのこらず探す。何にも見つからない。最後　手紙を見つける。）

事務の男　社長、こんなものが――

社長　何だ。――手紙か。――（讀む）お孃樣へ。――何だ、これは。――（封を切つて讀む）「私はあなたのお姿を一目見た日からあなたの美しい幻に惱まされる哀れな青年です。あなたはこの世に存在する一つの美です。その美を、何一つ出來ない糠に高慢ちきな青白いブルジヨアの青年の所有にするのは、私の忍びないところです。あなたの美はプロレタリアアトの所有にならなければならないのです。あなたを愛するのは、私がブルジョアに成上るためではなく、あなたを我々プロレタリアの手で健全に育てんがために外ならないのです。あなたは一刻も早く、あの狡猾で、慾張りで、肥つちよの社長の――」（怒つて）何に、わしを、狡猾で、慾張りで、肥つちよだと――

刑事　（續けて讀む）「慾張りで、肥つちよの社長の手をお離れなさい、私のあなたに對するこの高い感情、この切ない氣持を、どう打ち明けていゝか分りません。私は社會の下層に蠢めいてゐる貧乏な青年ですが、高い眞理を見る眼を失つてはゐません、私はあなたのうちに、求めゐる美の象徴を見たのです。私の心は、あなたに對する愛情で、狂ほしいばかりに燃えてゐます。何卒、この哀れな私のために御返事下さい。」

社長　孃への戀文だな、畜生！

刑事　よくある手です、不良青年の。

社長　こいつ、誇大妄想狂だなあ。

刑事　思想もいさゝか過激です。

社長　（青年に）馬鹿野郎！　何だつて、貴樣は――

（爆發の音。）

社長　（驚いて）あつ、ありや、何だ！

刑事　（驚いて）ダイナマイトですな！

社長　いよ／＼暴動を起しあがつたかな！

刑事　こいつあ危險だ！　ど、どうすれば――

事務の男　社長、ありや夜業の開鑿工事ですよ。

社長　なに、夜業の――

事務の男　たしか、西の七番坑たと思ひました。

社長　なんだ、さうか、馬鹿々々しい。

刑事　（狼狽したのをてれかくしに）奴等にはそんな手早いことが出來ようとは思ひませんでした。はつ／＼／＼。

社長　はつ／＼／＼。

（スパイ驅け込んで來る。）

スパイ　社長、た、たいへんです！

社長　どうしたんだ。
スパイ　た、たいへんです！
社長　どうしたといふんだ！
スパイ　坑夫の連中が――
社長　なに、坑夫の奴等が！――
スパイ　奴等、ダ、ダイナマイトを喰つてゐるのです。
社長　ダイナマイトを喰ふつて、どういふ意味だ。
スパイ　ほんたうに喰ふのです。
社長　ほんたうに喰つて――（手眞似して）喰ふのか。
スパイ　はい。
刑事　危險ぢやないのかなあ。
スパイ　實に甘いさうです。
社長、刑事　甘い！
スパイ　ついさつき、晝の仕事を終へた連中が、組をなして居酒屋へゆくので、こいつあ怪しいと、後をつけたのです。
社長　すると――
スパイ　すると、奴等、居酒屋へ行つて、忍ばせてゐたダイナマイトをこつそり取り出して、そいつを肴に酒をのみ出すぢやありませんか。
社長　へえ！
スパイ　あいつで醉つた醉心地つたら、格別ださうです。
社長、刑事　うむ！
スパイ　奴等、ダイナマイトでも肴にしなくちや、酒の肴を買ふ錢が無いつて言ふんです。
社長、刑事　へえ！
青年　（噴き出すやうに）はつ〳〵〳〵。
（他の者も、それ〴〵異つた笑を爆發する。）

（上演――大正十五年中田正造新派劇一座
神戸、大阪、中國各市にて）

# 海の呼聲（一幕）

その昔、日本の狭い領土に志を得なかつた武士が、自由の天地と力強い生活とを求めて、八幡船に乗つて、朝鮮、明を初めとし遠く呂宋、暹羅の沿岸一帯を——當時の「世界」を荒し廻つた頃の出來事である。然し、事件は全然作者の空想であつて、何等史實に據るところがない。この遠い昔の冒險的なロマンチツクな物語のうちに、作者は一人の豪膽不羈な英雄を描かうとしたのではなく、一つの新しい「社會」を夢みたのである。

海上を航してゐる海賊船。

青白い月の夜。

蒼茫として煙る海は、眠るやうに靜かで、波も穏かである。

船の上には、海賊の配下のもの、酒を飲みながら話し合つてゐる。

切支丹信者の老人が、一人寂しく、一同から離れて、遠く海面を眺めてゐる。

部下　いゝ月夜だな。

部下　一體船はいま何處を走つてゐるのだらう。

部下　東かな。

部下　南かな。

部下　月のありかで分るぢやないか。

部下　西南だといふのか。

部下　そんなところだらう。

部下　お頭は一體博多へ歸る氣か、それとも、明の海岸へ取つて返す氣かな。

部下　そんなことはお頭に委せておくがいゝ。俺達は廣々とした自由な海にゐるのだ。俺達の生活と同じやうに、何處へどう行かうと構ふものか。

部下　自由な海の生活こそ、俺たちの生活だ。

部下　名を貿易に藉りて、民の財貨を奪ひとる、てめえ達は海賊ではないか。

部下　さう言ふてめえは何だ。

部下　俺もやつぱり、その海賊様だ。

部下　はつ〳〵〳〵。

部下　荒くれた海賊なればこそ、かうした生活が出來るのだ。

部下　猫の額ほどのちつぽけな日本で、やれ榮華だ、やれ名譽だと爭つてゐるのが厭さに、かうした生活をしてゐる俺たちではないか。

部下　いかにもさうだ。

部下　男らしく思ふ存分あばれ廻つてくれるぞ。

部下　この世の不淨の財貨をのこらず掠めとつてくれようではないか。

部下　不淨な財貨どころか。

部下　うはつはつはつ。

部下　俺達は自由だ。

部下　海の上こそ、男が力の限り生きることの出來るところだ。

部下　あのせゝつこましい陸地の生活はどうだ。

部下　やれ將軍だ、やれ大名だ小名だ、やれ奉行だ、やれ何だのと、いやはや、一足歩いても息が詰りさうだ。

部下　あすこは、たゞ己の名聞と利得のみを爭ひ求めるあさましい餓鬼の集りだ。

部下　僞りと欺き合ひから出來てゐるのだ。

部下　どんなに亂暴を働かうと、心の掟を守ることを忘れぬ俺れたちとは違ふのだ。

切支丹の老人　お前さん方はさうは言ふものゝ、お前さん方には地の上に住む住家がないのだ――わしと同じやうになあ。

部下　船で寢て、船で起きる――それが俺たちの住家だ。

部下　あんな小つぽけな陸地を、誰が戀しがるもんか。

老人　狐は穴あり、空の鳥には塒あり、されど人の子には枕するところなし――クリスト樣のお言葉だ。

部下　やい、伴天連のおゝいめ、何をまた世迷言を始めやがる。

部下　女子供のやうな女々しい泣言は止すがいゝ。

部下　おめえが長崎でお頭に助けられた時のことを忘れないがいゝ。お前はこの船にゐればこそ、下らぬ讒言もほざいてゐられるのだが、陸に上つてみろ、首のあがらない人間ではないか。

老人　いや、それはわしもよく知つてゐる。日本の土を踏めば、わしは切支丹宗として首がとぶのだ。

部下　可哀さうに。だが、何て亂暴な掟だ。

老人　わしもお前さんたちと同じやうに土の上では住めない哀れな人間だ。

部下　俺たちは、お前に哀れんで貰はんでもいゝよ。

老人　わしはこの世の天國だといふ、あの羅馬や阿蘭陀へ行きたくてならない。

部下　お前もやつぱり夢をみてゐるなあ。

部下　老先の短いお前だ、せい／＼美しい夢でもみて死ん

でゆくがいゝ。

部下　人の心の自由までも奪ふ、陸地は何といふ亂暴なところだ。下らぬ束縛、小つぽけな掟、それが何だ。海の上にあるものは、自由な、力の限り生きる生活だけだ。

部下　その海のために飲まうぢやないか。

部下　さあ、飲まう。

部下　飲まう。

一同　飲まう。

部下　爺さん、お前も一杯やらないか。

老人　わしは酒は好かんよ。

部下　ぢや、この赤いのはどうだ――血のやうに赤いのは。お前が行きたいといふ阿蘭陀で出來たといふこの玻璃の器に並々と注いでのめ。これは、葡萄の實をしぼつてつくつたといふ異國の酒だ。これを飲めばひからびたお前の體にも、若い溌々とした血が流れるぞ。

老人　いや、わしは酒は好かん。酒は惡魔の水だ。

部下　何だと。

部下　勝手にしやがれ。

部下　こいつ、世迷言を並べては、俺たちの酒をまづくしやがらあ。

部下　あゝ、俺は腕が鳴る。

部下　二三日ぼんやり暮してゐると、血が見たくてならない。

部下　早く明の海岸へ押しよせて、切つて切つて、切りまくつてやりたいもんだ。

部下　褌一貫の丸裸に、大刀ひつさげて切り込む時の痛快さはどうだ。

部下　俺はこの間、たつた三人の同勢で、切つて切つて切りまくつて、明の愚民の心膽を寒からしめた時ほど、男らしい生き甲斐を感じたことはなかつた。

部下　八幡大菩薩の旗の向ふところ、何の防備も役には立たないのだ。

老人　お前さん方は、人をあやめたり、人の血を流したりして、それを愉快がつたり、自慢にしたりするなんて、何て情ない恐ろしい話だ。お前さん方は、インフエルノの恐ろしさを知らないのだ。

部下　おゝい、また何をほざき始めるのだ。

部下　インフエルノとは何だ。

老人　インフエルノとは地獄のことだ。

部下　地獄だ？　切支丹でない俺たちに、そんな地獄があつてたまるもんか。

老人　人は誰でも信仰をもたなければならん。お前さん方は暴虐な腕の力だけをたよりにしてゐるが、この世をしろしめす一人の神樣のお力を悟らなければならないの

だ。

部下　おい〳〵、伴天連の爺い。そんなお說敎なんか、この船では通用しないのだ。

部下　こいつ、何時でも泣言を並べて折角の酒をまづくしやがる。

部下　やい、陸で死にそこねた切支丹め、この船であんまり出しやばると――

部下　船底一枚、下に何があるか知つてるか。

部下　鱶の餌食にしてくれるぞ。

老人　まあ〳〵、さう怒らないでくれ。お前さん方はみんないゝ人だ。心からいゝ人だ。だが、信仰をもつと人はもつと强くなれるのだ。

部下　それでお前が强いといふのかい。笑はせあがらあ。

部下　なあ、爺さん、お前、人間は信仰をもたなくちやならないといふが、信仰なんて、酒か阿片みてえなもんぢやないのかい。――そいつを飮むと、うつとりとした夢心地になるといふ阿片みてえなもんぢやないのかい。

老人　お前さんはうまいことを言ふ。成程、さうかも知れん。人は何かに醉はなくちやゐられないのかも知れない。お前さん方が自分の力に醉つてるやうになあ。

部下　そして、お前の醉つてる信仰とかいふ奴は、一番たちが悪いのだ。

部下　お前が喋り出すと、陽氣な氣持がしめつぽくならあ。

部下　近頃のお頭の樣子の變なのも、おゝい、ありや乾度てめえのせゐだぞ。

老人　いや、ありや心に苦しみがあるからだ。

部下　なに、ありや京の商人とかいふ生白い若僧の來たのがいけないのだ。

部下　お頭も少し醉狂過ぎたな。

部下　全くだ。あんな若僧を仲間に入れようとするばかりか、あいつが惚てる女まで身請けしてやるなんて。

部下　だが、いゝ女だなあ。

部下　よせ、こいつ。

部下　女はいゝ器量だが、あの野郞にどうだ。見たゞけでも蟲ずが走らあ。

部下　あいつあ俺たちの仲間ぢやねえ。

部下　海は强い男の住むところだ。

老人　お頭は戀してゐるのだ。

部下　何。戀してゐる。

部下　こいつ、何を言ふんだ。

部下　誰に戀してゐるといふんだ。

老人　あの女に惚れてゐるんだ。

部下　なにを、馬鹿な。

部下　お頭のことを、とやかう言つてみろ、たゞではおか

んぞ。

部下　やい、默つてゐればいゝ氣になりやがつて。もう勘忍かならんぞ。（老人の首つ玉を摑んで）海の中へ投げこんでくれるぞ。

部下　さうだ、さうだ。こんな伴天連のぢゝいなんか、海底深くで、鱶でも相手にお說教するがいゝや。

部下　やあ、お頭が見えた。

部下　噂をすれば影とやらだ。

（海賊王現はれる。）

海賊王　これ／＼、何をしてゐるのだ。

部下　この切支丹のぢゝい、あんまり生圖々しいので——

部下　海へはふり込んでくれようかと思ひまして。

海賊王　いや、許してやれ。そんな弱い年寄をいぢめたつて仕樣がないではないか。同じ一つ船に住んでゐるのだいさゝかの爭から、滅多に命をあやめてはならんぞ。海に住む人間は、この海のやうに、濶達で自由な廣い心を持つてゐなければならん。——（切支丹の老人に）お前もこの船では、變りもので、變人だ。だが、あんまり無駄をきいて、若いものを怒らせるんではないぞ。——もう船室へ行つて寢るがいゝ。

老人　はい。

海賊王　いゝ月だなあ。——酒か。風流な酒だな。——わしにも一ぱい飮ませて貰はうか。

部下　さあ、さあ。

部下　並々と注げよ。

部下　お頭、今度は何處へ行くのですか。二三日無爲に苦しんでゐると、腕が鳴つてたまりません。

海賊王　もうぢきだ。まあ暫くの骨休みだから、ゆつくりと飮め。腹太鼓のはち切れる程飮んで唄へ。

部下　船倉の荷物を下ろしに、博多へも一度は行かずばなりますまい。虎の皮の緞子に、鼈甲や珊瑚がうなつてをります。

海賊王　うむ、それもさうだ。

（法螺の音。）

部下　かうつと。もう見張りの交代だ。

海賊王　舵の方も、見張の方も、みんな代つてやれ。後で又、ゆつくり飮むがいゝ。

部下　さあ、交代だ、交代だ。

（一同去る。）

（海賊王だけ、船の上を歩き廻つてゐる。）

（月かげつて、あたりは夢のやうに蒼茫として來る。）

男　あゝ、お前か——

女　あなた——

（二人相寄る。）

男　お前に會へてうれしい。一つ船に住んでゐながら、碌碌うちとけて口もきく時がないとは、あんまり情ない話だ。お前に會へない一時が一日にも、一日が一年にも思へてならない。

女　でも、苦しさ切なさは人の世の常です。あんまり幸福過ぎては冥利につきます。

男　儘ならぬ浮世とは、この船の中にまであることゝ見える。

女　堰かれ／＼て會うてゐた身が、かうして添ひとげられたゞけでも勿體ないと思ふわ。

男　成程、かうして添ひとげて一つところに住んではゐるが、この幸福が何時まで續くかと、俺は末恐ろしくてならない。

女　もう暫くの辛抱だわ。

男　俺もさう思うて、わづかに心を慰めてはゐるが、二人きりで樂しく暮すことも出來なければ、さうかと言つて陸地へかへることも出來ないならば、この自由な船も、俺にとつては牢獄も同じだ。それを思ふと俺は寂しくて苦しくて、命が縮まるばかりだ。

女　いゝえ、この船に馴れゝば、それも苦にならなくなると思ふわ。

男　だが、俺にはどうしてもさうは思へない。自由だと思つて來たこの船も、やつぱり俺の安住の地ではなかつた。

女　それはあんまり我儘過ぎはしないでせうか。

男　我儘といふよりは、俺の意氣地のないせゐだ。俺は行末を考へれば、所詮は幸福に生き長らへることの出來ない人間だ。

女　それは又、どうして——

男　これ、お小夜、わしと一しよに死んでくれぬか——

女　あら、そんな冗談を——

男　いや、決して冗談ではない。意氣地のない弱い俺には、第一かうした荒々しい生活にはとても耐へ切れないのだ。

女　と言つて、今更——

男　そりや成程、二人はこの船には深い恩がある。ことにお頭には深い恩義を蒙つてゐる。お前の客だからといふだけで、見ず知らずの俺のために、お前を贖つて身請けしてくれたお頭だ。そして、俺たち二人を仲間に入れて、何の距てもなくつき合つてくれる情は、しみ／″＼と身に感じられてならない。

女　では、もう少し辛抱なさらなければ——

男　だが、國禁を犯して、人のものを掠めとつて暮してゆく、道ならぬ生活にはまだしも我慢するとしよう。この

荒々しい強い生活には、俺はとても耐へ切れないのだ。俺にはそれだけの力がない。俺はお前と添ひとげた時、戀の幸福な刹那に死ぬべきだつた。生涯の命をうちこめて戀した戀がなしとげられた時、俺は死ぬのが當然だつた。幸福が達しられた上は、それ以上生きる理由が俺にはない筈だつた。

女　でも、それではお頭の恩を仇で賣るやうなものではないの。

男　だからこそ、俺の心は一層苦しいのだ。

女　何にも言はずに、あたしの身請けの金を出して下さつた時、あたしやうれしくて涙がこぼれました。

男　あの豪膽で情深いお頭は、一國の主としても恥しくない人だ。俺はお頭のことを思ふと、この下らない自分が恥しくてならない。――俺にも力があるなら、この船の人達のやうに、思ふ存分自由に強く生きてみたい。

女　では、何故さうならないの。

男　情ないことには、弱く生れ、弱く育つた俺には、それがしたくとも出來ないのだ。

女　それではあんまり男らしくないといふもんです。それに、お頭だつて、隨分あたし達を可愛がつてくれるではありませんか。

男　可愛がるつて？　お前をどんな風に可愛がるのだ。

女　あら、そんな怖い眼をなすつちや厭だわ。――あたし達に優しくしてくれるといふんです。

男　お頭は、お前に何か言つたか。

女　あたしたちを、まるで一組の人形か何かのやうだつて。

男　（寂しく笑つて）　はゝゝ。お頭の眼には、二人は戀の人形か何かのやうに見えもするのだらう。お頭は幼ない日の戀の夢を、お前のうちに見てゐるのかもしれん。

女　あなたは嫉妬してゐらつしやる。あなたの眼付がよくそれを語つてゐるわ。

男　戀するお前のためなら、俺は嫉妬もしようさ。俺は所詮は戀の痴情に泣きもし笑ひもする愚かものだつた。儚く生れた因果に、せめて美しい戀の花と一しよに死んでゆきたい。――お前、俺と一しよに死んでくれるだらうな。

女　でも、あたし――

男　この世の幸は薄くとも、あの世へ行つて、歡樂の涅槃とやらで、又、花咲かうではないか。

女　だしぬけに、どうしようと仰しやるの。

男　俺と一しよに死んでくれ。

女　（默つてゐる）

男　俺にはこんな生活が恐ろしい。いや、恐ろしいよりは、俺には耐へ切る力がない。さうかと言つて、この船を逃

げ出さうにも、出ることが出來ない。かうしてゐては、みすみす悲しみのうちに命を縮めてゆくやうなものだ。せめて、この戀の悦のなくならぬ間に、お前と一しよに死んでゆきたい。どうだ、一しよに死んでくれるだらうな。

女　いゝえ、あたしは――

男　いゝえとは？

女　（きつぱりと）　そんなこと、あたしは厭です。

男　なに、厭だと。――それは、何故だ、何故だ。

女　死ぬのが厭だからです。

男　俺と一しよでもか。

女　一しよでも厭です。

男　さては、心變りしたのか。戀がさめたのか。

女　いゝえ。

男　では、どうしたのだ。

女　あの時と同じやうに、あなたを思ふ心には變りがないが、この船へ來てから、あたしには新しい眼が開けたのです。

男　新しい眼が開けたとは、どういふ意味だ。

女　あたしは、此處の人たちの男らしい力強い生活を見てからは、今迄よりは別の世界のあるのを知りました。人間を強く育てゝくれる世界のあるのを。あたしは此處へ來てから、いきいきとした力強い力が體に湧き出てくるのを感じます。

男　むう、お前が――

女　あたしはもつと生きたい――もつと――もつと。

男　この俺を棄てゝまでもか――

女　あたしにとつては戀はすべてゞはなかつた。戀に醉ふ時は、戀がすべてに見えても、生きることは戀よりも強いものです。あたしは生きたい――強く！――強く！

男　いや、いや、お前は心變りしたのだらう。俺が厭になつたのだらう。

女　いゝえ、そんなことは――

男　いや、たしかにさうだ。

女　あなたには、あたしの心、あたしの氣持がお分りにはならないのです。

男　強く生きたいといふ氣持がか？

女　えゝ。

男　嘘だ、嘘だ。それは嘘だ。

女　いゝえ、嘘ぢやありません。

男　嘘だ、嘘だ。戀に生きることは強く生きることではないか。

女　だから、あたしの氣持が分らないといふのです。

男　（泣き聲になつて）　お前は――お前は――お頭に戀し

てゐるのだな。だから、そんないゝ加減な言葉をつくつて、俺を宥めようといふのだな。

女　いゝえ、そんなことは――

男　ないといふのか。白々しい嘘は止すがいゝ。さうに違ひあるものか。――あゝ、俺はどうしたらいゝのだ。――お頭はお前を愛してゐるのだ。俺は前からさうではないかと案じてゐた。あの人を貫くやうな眼差は、お前に對する愛情で狂はしく燃えてゐるやうな氣がする。あの眼が俺の心をうちのめして、お前を無理やりに奪つてゆくのだ。

女　何て意氣地なしでせう、あなたは。

男　牢獄のやうなこの船には、俺はもう一刻も住み切れない。俺はみんなから棄てられてゆくやうな氣がして恐ろしい。せめては戀に狂ふ愚か者として死んでゆきたい。さあ、一しよに死んでくれ。死んでくれ、（手を合せて）この通りだ。

女　厭です。あたし、死ぬのは厭です。

男　死んでくれ。後生だ、死んでくれ！

女　厭だ。厭だと言つた　厭です！　あたしは生きたいのです！　この廣々とした自由な海の上で生きたいのです！

男　では、どうしても――どうしても、死んではくれないのか。――（急に勇氣をふるひ起して）では、お前を殺すまでだ。

女　殺す！　意氣地なしのあなたにそんなことが出來て？

男　（半ば狂ふやうに）出來ないでなるもんか。戀するお前を殺して、せめて最後を弱蟲でなく生きるのだ。（全身をふるはして）待て――待て――殺してやるから――

女　人を殺さうといふなら、もう少し落着かなくては手元が狂ひます。

男　（跳りかゝらうと身悶えしながら）もうかうなれば我慢がならん。戀も憎しみも一しよだ。

女　海賊船の船乘にもならうといふ人が、それは何といふ樣子です。

男　ち、ちきしやう！　こ、ころしてやるから――

女　あたしは死ぬのは厭だといふのです。あたしは殺されたくはありませんよ。

（女逃げる。男、後を追ふ。）

（月は暗く翳る。）

（薄闇を通して怒鳴る聲がする。）

聲　誰だ！　誰だ！　誰だといふのに！　待て！　待たぬか！

（海賊王、二人を捕へて出てくる。）

（この邊から、月は明るく照り輝いてくる。）

海賊王　どうしたのだ。白刃なんかふり廻して、痴話喧嘩にしてはあぶないではないか。

男　放して下さい。こいつを殺さないでは――

海賊王　殺す――ほう、それは又、どうした譯だ。

女　いゝえ、自分が死にたいばかりに、あたし迄も道づれに殺さうといふのです。

（この邊から、配下のものが何事が起つたのかと集つて來る。）

海賊王　何故死なうといふのだ。

女　この人には、この船の生活が耐へられないといふのです。それで、戀に醉ひながらあたしと二人で死にたがつてゐるのです。でも、あたしは死ぬのは厭だ。もつと、もつと生きてゆきたいのです。

海賊王　では、お前一人では死ねないのか。

男　こいつを殺さないでは、死に切れません。

女　いゝえ、一人では死ぬ勇氣がないのでせう。

海賊王　（皮肉に）では、わしが殺してやらうかな。はつはつ〳〵。

部下　お頭のお手を患はすのは勿體ない。

部下　こんな奴はすぐにやつゝけてしまへ。

部下　俺たちの仲間の恥さらしだ。

部下　意氣地なしめが。

部下　弱蟲め。

部下　海の中へたゝき込んでしまへ。

（一同、男に襲ひかゝらうとする。）

海賊王　何をするのだ！

（一喝されて一同辟易する。）

海賊王　船のことは、わしが自分で處理する。お前たちは默つてゐろ。

部下　だが、こいつは常々弱蟲の――

海賊王　まあ、いゝ。默つてゐろと言つたら。――（男に向つて）お前さんには、何故此處が居づらいのだ。女を身請けしてやつた時には、一しよに仲間になつて働くと誓つたではないか。あの誓は嘘だつたのか。それとも、女を身請けして貰ひたさの口實に過ぎなかつたのか。

男　とんでもない。あの誓に嘘僞りはありません。

海賊王　では、どうしたのだ、陸地が戀しくなつたのか――あの息詰るやうな狭苦しい陸地か。

男　いゝえ――

海賊王　では、此處で暮すのが厭になつたのか。人のものを奪ひ取る粗暴な生活が恐ろしくなつたのか。

男　それもあります。人の血を流し、人のものを奪ふ、道ならぬ生活が恐ろしいのです。それは人の道ではありま

せん。正しい生活ではありません。

海賊王　それは、こざかしい弱蟲の言ふことだ。では、猫の額ほどの領地を奪ひ合つて血を流すのは一體何だ。小名と言ひ、大名と言ひ、みんな泥棒ではないか。そのうちの一番偉い奴が將軍樣さ。（配下のものを指して）このうちには、將軍樣になりそこねた奴も、一人や二人はあらうといふもんだ。わしは、いや、この船のものは、さうした小つぽけな醜い爭が厭さに、かうした暮しをしてゐるのだ。廣い大空を自由にかける大鵬の心は、又わしの心だ。

男　さう仰しやれば、そんなものかもしれません。然し、わたしにはこんな生活は耐へられないのです。

海賊王　それが何故だといふのだ。分らない人だな。お前さんは此處は、陸地にある世間のやうに、表面は柔和を裝ひ心では奸策をめぐらす惡意や、くだらぬ義理や掟のないだけでも住み好いところではないか。それに、此處ではすべてが公平で平等だ。銘々は、自分の力に從つて働き、自分の欲望に從つて取つてゐる。いかなる奪略品もすべてが平等に分配されてゐるではないか。

男　それはもう――

海賊王　分つてゐるといふのか。それなら、何も不平はない筈ではないか。こんな譯の分つた、男らしい、愉快で自由な生活が、一體他にあると思ふのか。

男　だが、わたしには、その愉快で力強い生活を樂しんでゆくだけの力がないのです。弱いわたしにはそんな力がないのです。人の血を流すのさへ怖くてならないのです。

海賊王　弱い男だな、お前さんは。人の命を奪ふものは、己の命をも惜しまぬだけの覺悟がなくては、出來ない仕事だ。何事をするにもその心の落着きがなくて、何が出來るのだ。わしがかうした仕事をしてゐるのも、海を支配して、自由な人間の國をつくりたいためだ。善惡を越えた樂しい國をつくりたいためだ。それがわしの夢だ。心の願だ。そして、それがこの船のたましひだ。

男　商人の家に生れて育つた弱いわたしには、こんな荒々しい生活は夢にも思はぬことでした。

海賊王　お前は武士の血をひいてはゐなかつたのだな。だが、假令お前が弱くとも、この男らしい自由な生活が氣に入らないのか。

男　こんな荒仕事、こんな恐ろしい生活と知つたら、わたしはあの時死んでしまひたかつた――戀の成しとげられたあの刹那に。

海賊王　お前は戀に眼がくらんでゐるのだ。眼をあけて、もつと男らしくなるがいゝ。

男　こんなことゝ知つたら、あんな誓を立てるのではなか

つた。女と添ひとげたいばかりに、あの時はどんな誓でも、出まかせに誓つたのでした。

海賊王　たわけものめが。己の生活にしつかりした信念を有たない奴はいつでもさうだ。少しは男らしく恥ぢるがいゝ。

部下　お頭、こんな奴は——

部下　もう一刻も我慢がならん。

部下　さきから默つて聞いてゐりや、お頭に向つて、出過ぎた口答へばかりしやがつて。

部下　お頭は、この船の王なのが分らないのか。

部下　やい、旅の若僧、貴樣の眼の前に、貴樣を吞みこむ大海のあるのが見えないのか。

海賊王　これ〱、さう喧しく罵らんでもいゝ。(男に)お前さんの眼には、わしは鬼のやうに見えるかも知れんがわしの心にも情がある筈だ。一つ船に暮したものには、最後まで命を惜しむのが、わしの性分だ。だが、お前はわしたちの生活の邪魔物だつた。わしは假令涙をもつてゐようと、志の前には鐵のやうに堅くなければならない。邪魔物は切りとつて進まなければならないのだ。

男　弱いわたしは、此處ではとても生きる望みがないので、もう死ぬ覺悟はしてゐますが、せめて最後まで戀をしとげさせて下さい。どうか、あの女だけは奪はないで下さい。

海賊王　なに、奪ふ？

女　あたしは意氣地のないお前さんに愛想が盡きました。女の心を捕へるものは、お前さんのやうな男ではなく、男らしい強い男だよ。

男　どうか、そんなことを言はずに、後生だから一しよに死んでくれ。

女　あたしは厭だよ。

男　このばいためが、お前は——どうしても——どうしても——(泣き叫んで、身悶えして、女に跳りかゝらうとして)お前は——

海賊王　さう騷いでも無駄なことだ。お前さんも潔く死ぬ覺悟をきめたがよい。——こいつを縛つて海へ投げこめ！

(配下の者たち、えたりとばかり彼を縛り上げる。)

男　ひどい！　ひどい！　俺の戀を奪ふのはひどい！　ひどい！

海賊王　假令暫くでも、わし達の仲間にはひつたのだ。海賊らしく死ぬがいゝ。海底深くに屍をさらして、清い水葬禮をすますがいゝ。

(配下のものたちは、泣き喚く彼を擔ぎ上げて、船緣近く、まさに彼を海に投げ入れようとする。)

（默然としてゐた海賊王は、この時突然叫ぶ。）

海賊王　待て！　（一同怪訝さうに彼を見る）　待てと言つたら、待て！

（一同、男を下ろす。男はぐつたりと力なく臥す。）

（先刻から、おど／＼しながら樣子を見てゐた切支丹の老人が、進み出る。）

老人　わしはさきから樣子を見てゐましたが、お頭、あんたはこの男が可哀さうになつたのでせう。この男の命を助けてやらうとお思ひになつたんでせう。いゝ事をなさいました。是非助けておやんなさいまし。

部下　やい、切支丹のぢゝい。貴樣の出しやばる場ぢやないぞ。

部下　馬鹿ぢゝい、ひつこんでろ。

老人　可哀さうに、この男もやつぱり神樣から命をさづかつた人間です。人の命は貴い。是非助けておやんなさい。

部下　神樣が何だ。貴樣の出る場ぢやない。

部下　ひつこんでゐないか。

海賊王　わしはこの船の頭だ。言はゞ、この小さな國の王だ。わしの命令は絶對だ。誰もわしに叛くことは出來ない。此處には、下らない義理や、束縛や、掟や、啀み合があつてはならない。それだけにわしの命令は正しくなければならない。（男に向つて）お前は今、わしに向つて、女を奪はないでくれと言つたな。その一言がわしの胸を鋭く貫いた。わしは包み隱さずに言ふが、わしは心ひそかにこの女を戀してゐたのだ。然し、そのために、わしは無理にもお前をなきものにしたと思はれるのは心苦しい。――わしの命令が絶對であればある程、その命令は正しくなければならない。わしの命令は、人間の最も正しい聲でなければならない。海の王の聲は、海の底から響く聲だ。お前は、わしたちの仲間から除け者にされてしかるべき人間だが、お前の命は助けてやらう。だが、この船におく譯にゆかない。だから、この女と二人小舟に載せて沖へ出してやらう。お前たちの力で岸へ辿りつかうと、或は海底深く沈まうと、それは運命のみの知ることだ。

女　いゝえ、あたしは厭です。――あたしは此處で新しい世界を見たのです。荒々しい強い生活に搖られながら、あたしは生きてゆきたい。――あたしは、あなたの男らしい強い力に戀します。――そして、あたしはあなた方みんなの悦となつてゆきたい――強く――たのしく――

海賊王　さうか。では、仕方がない。お前もやつぱり海の強い誘惑の聲を聞いたのだ。――小舟の用意をしろ。この男一人だけ船に乘せてやるがいゝ。

（配下のもの小船の用意をする。）

海賊王　驚きで聲さへ出ないとは哀れた男だ。——自由な強い生活を樂しむことの出來なかつた弱い男だ——お前は取り殘されてゆくのだ。

老人　可哀さうに、可哀さうに、せめて港へついてからなら。

海賊王　わしは大きな志の前には、小さな涙は棄てなければならない。

老人　可哀さうに。天にまします神様、この男の運命にお惠みあれ！——

海賊王　船の掟、強いものゝ誠の心の掟だ。海の聲がわしに美しい夢を育てゝくれる。——遠く舟出せよ、樂しき國へか。（朗らかに笑ふ）はつゝゝゝゝ。——美しい月だ。心ゆくばかり、飲んで唄へ！

（上演——昭和二年七月松竹座にて
藤村秀夫、花柳章太郎一座上演）

# 北極行（二幕）

——ノビレ少將——

人類の意志は、凡てを征服す。
光明へ、光明へと。

## 人物

ウムベルト・ノビレ少將
ベフーネク　チエコスロヷキアの科學者
チチオニ　機關長
トロイアニ　機關士
ヴイリエリ　海軍中尉
ビアヂ軍曹　無電技手
ルンドボルグ中尉　スウエデンの飛行家（後に大尉に昇進す）

## 第一幕

北極圏内の氷原の上。
スピツベルゲンの最北部——ノオスイースト島の東端レイスミス岬の北方——即ち、北緯八十度餘、東經二十八度前後の地點。
何處を見ても、青白い氷と、寒さと、寂寥とで取り巻かれた氷原で、ノビレ少將の一行六名の屯營してゐる天幕がはられてある。天幕は搜索隊の目につくやうに赤く塗つてあるがそれが凍りついて、所々白く霜をおいたやうになつてゐる。
天幕には無電の裝置。

時は、一九二八年六月の上旬——即ち、北極探檢の途にのぼつたノビレ少將のイタリア號が、逆風と濃霧のために遭難した五月二十五日から約二週間を經てゐる。

天幕の外には、ノビレ少將が立つてゐる。四十歳あまりの働き盛りで、果斷と自信のありさうなその面影も、疲勞と困憊と焦燥と憂慮とのために、すつかり窶れてゐるが、尙も救を求めてやまない瞳で、ぢつと空を見詰めてゐる。その傍には海軍中尉のヴイリエリ。氷の上には、無電技手のビアヂが、絶望したやうにどつか

に腰を下ろしてゐる。

ヴイリエリ　おい、ビアヂ君、どうした？

ビアヂ　うん。

ヴイリエリ　おい、どうしたんだ。

ビアヂ　うん。

ヴイリエリ　どうしたといふんだ。

ビアヂ　うん。

ヴイリエリ　おい、元氣を出せ、元氣を。

ビアヂ　僕はもう元氣を出さうにも、出す元氣がないんです。

ヴイリエリ　そんな弱いことぢや駄目だぞ。もう少しの我慢だ。今にきつと救ひの捜索隊がやつてくる。

ビアヂ　僕は、毎日、無線電信を打ち續けです——救ひの無電を——SOS——SOS——遭難したあの五月の二十五日から、もう二週間にもなる。而も、何の救ひの光明も見つからないんです。

ヴイリエリ　いや、君の打つSOSの電波は、きつと何處かの無電に響いてゐる。だから、今に捜索隊がやつてくる、やつて來ない筈があるもんか。

ビアヂ　僕も最初はさう思つてゐました。そして、蓄電池を惜しみながらも、蓄電池の續くかぎり打つたのです。——SOSを！　併し、之れは何處のアンテナにも觸れずに、みんな空中へ消えてゆくやうに思へてならない。もういくら打つても無駄なやうな氣がする。

ヴイリエリ　そんな馬鹿なことがあるもんか。

ビアヂ　いや、僕には何もかも空頼みのやうな氣がし出した。さうなると、無電を打つ手が鈍る。もう打つ氣がしなくなる。何だか科學の力さへ疑はれて來る。

ヴイリエリ　（近寄つて、ビアヂの肩を叩いて）おい〳〵、ビアヂ君、君がそんな風に言ひ出すと、僕たちまで耐りない氣持になるぢやないか。君の打つSOSは、何處かへ響く、そして捜索隊がやつてくる——さう思はないでは、氣持があんまり惨め過ぎる。死ぬより辛い思ひだ。だから、後生だ、そんなことは言はないでくれ給へ。

ノビレ　ビアヂ君、絶望しちやいけない。われ〳〵は大きな仕事をしたんだ——人類のために、立派な仕事をしたんだ苦しみは、最初から覺悟の上だつたぢやないか。いや、死さへも覺悟してゐたんだ。われ〳〵は、人類のために犠牲になることは躊躇しない。併し、われ〳〵は、折角成就した仕事の結果を、全世界に向つて報告しなければならないのだ。またさうするだけの義務がある。だから、最後まで——さうだ、最後まで、生きなければならない——どんな苦しみがあらうと。えゝ、分つたね、ビアヂ君？

ピアヂ（微かに）はい。

ノビレ　この遠い北極の天地では、無電こそ、われ〳〵が全世界の人たちに話しかけるたつた一つの聲だ。そして、君はその口であり、舌である譯だ。だから、君はその口をふさいでしまつてはいけない。われ〳〵のたつた一つの聲を奪つてはいけない。だから、靜かに風の凪いだ時に、一つ放送して見てくれ給へ。きつと、救の搜索隊が來る！

ピアヂ　ノビレ少將閣下、やりませう！　わたしの魂をこめて！

ノビレ　よろしい！　さうなくちやいけない。あらゆる苦しみと戰つて生きよう。それは、自分たちの命が惜しいからでなく、さうしなければならない義務なんだ。

（機關長チチオニと機關士トロイアニが、天幕から出てくる。チチオニは腰の打撲傷のために、跛をひいてゐる。二人に續いて、科學者ベフーネク。）

トロイアニ　何だか荒れ模樣にでもなりさうですね。

チチオニ　どうも北極の氣候は、變り易くて分らない。

ノビレ　チチオニ君、腰の痛みはどうだ。

チチオニ　相變らず痛むには痛みます。ことに寒さが刺すやうにこたへます。併し、これ位の苦しみは何でもありません。氣持の方がよつぽど苦しい。

ノビレ　わたしもさうだ。死は覺悟の上だから、死ぬことは平氣だが、雄圖空しく挫折したことや、探檢隊長としてのわたしの責任を思ふと、胸が張り裂けるやうだ。

チチオニ　閣下、お察し致します。そのためには、どんな事があらうと生きなければなりません。假令手足が凍え爛れてしまはうとも。いやわれ〳〵のうちの誰かゞ死なうと、その屍を越えて、誰かゞ生き殘らなくちやならないのです。

ベフーネク　一體、救助隊はどうしたんだらう。今日も飛行機が見えなかつたやうですね。

ヴイリエリ　えゝ、影も形も。

トロイアニ　SOSの無電が通じないのかしら。かうして救を待ちながら、毎日々々、氷と寒さに閉ぢこめられてゐると、寂しさで氣でも狂ひさうだ。

ヴイリエリ　SOSの電波が、何處のアンテナにも觸れずに、空中に消えて行くんぢやないかしら……ピアヂ君、君は恐ろしい疑ひを、僕の胸に囁いてしまつた。（その疑念を打消すやうに）いや〳〵、そんな事があつてなるもんか。

ベフーネク　さうです。科學の力はそんなに不確實ではない筈です。きつと、何處かのアンテナに響くに違ひない。一つのアンテナに響けば、あらゆるアンテナに響いたも

同然です。地球の全表面に擴がる新聞の通信網は、たちまち活動し出して、全世界の人々に報告してくれる。すると、イタリイは無論のこと、わたしの生れたチエコスロワキアも、ドイツも、フランスも、ロシアも、日本でさへも、われ〱の生存してゐるのを知つて、この北極の空へ、續々と搜索隊を向けるに違ひありません。

ノビレ　一日も早くさうなつてほしいもんだ。さうしたら、わたしは、歷史以來初めて人類が北極の空を征服したのを全世界の人たちに報告することが出來るのだ。わたしの第一回の北極探檢は、北極に於ける陸地の有無をたしかめる事だつた。そして、見事にそれに成功した。今度は、北極の空を科學的に調査して、氣象を觀測することだつた。そして、イタリヤ號は、北極の空低く飛んで、極地帶全體にわたる調査をなした。殊に北極磁氣學に關する結論は、科學上の大きな收獲でなければならない――わたしはそれを人類に報告したい！――それなのに、その歸り道、逆風と濃霧のために、こんなになつてしまふとは……！

ベフーネク　わたしは科學者だから、科學の勝利を信じます。人間の反抗することの出來なかつた大自然を、科學はものの見事に征服しつゝあるのです。今度の北極の空の調査はそれを物語るものでなくて何でせう。而も、それが、最後の一瞬間に、又しても自然のために打ち負された。併し、われ〱が救ひ出されるなら、結局は科學の勝利です。

チチオニ　あの時の嵐――あんなひどい嵐にあつたのは、初めてだ。

トロイアニ　それに、あの物凄い霧は！　まるで地獄の底へでもはひつたやうだつた。

チチオニ　かうして命が助かつてゐるのさへ不思議なのかも知れない。

ヴイリエリ　やつと氷原へ着陸したかと思ふと、すぐ船體がすさまじい勢で吹きとばされてしまつた。

チチオニ　僕は氷の上へ投げ出されて、はつと思ふ間もなく船體は空高く吹き流されてゐた。あの時は、もう絶望だと思つた。

ノビレ　あゝ、愛するイタリヤ號よ……

（間。）

ヴイリエリ　あの中にゐた七名は、一體、どうなつたらう？

チチオニ　一度、遠くの氷原で黑い煙ののぼるのを見た切りだ。死んだのか、生きてゐるのか……

ヴイリエリ　愛する友よ、どうか生きてゐてくれ！

トロイアニ　併し、もしかしたら……？

ビアチ　もしかしたら……？

ノビレ　いや〳〵、死んではゐまい。われ〳〵と同じやうに、何處かで天幕をはつて、救ひを待つてゐるに違ひない。

ベフーネク　それにしても、われ〳〵の一行を離れて、陸地を求めて出發したマルムグレン博士の一隊はどうなつたらう――あのスウェデンの氣象學者は？

ヴイリエリ　相變らず、荒涼とした氷原の上を彷徨つてゐる事でせう。

チチオニ　無事でゐてくれゝばいゝが……

ベフーネク　マルムグレン博士――博士――わたしは、もう一度あなたに會ひたい！

ノビレ　わたしには、あの時の博士の顔が、あり〳〵と目に浮んでくる。あの時は、われ〳〵はみんな、一層死んでしまつたら安らかな氣持でいゝだらうと思つた。博士はわたしに近づいて、濃い決心の色を見せながら、「たゞ死あるのみですね」とさう言ふのだ。併し、その刹那、今死んでは犬死だ。どうしても生ようといふ氣持が、わたしの胸に勃然として湧いて來た。そこで、わたしはかう言つた。「博士、われ〳〵は、自分で自分の命を絶つ權利はありません。あらゆる試練を通して生きませう。それがわれ〳〵に殘された唯一つの運命です。」すると、博士は悲痛な面持をあげて、「ノビレ少將、あなたが、わたしの同行を承諾して下すつたのを感謝します。併し、かうなつた以上は、假令水の中をくゞつても、われ〳〵の仕事を人類に告げずにはおきません。」かう言つて、氷原の彼方の水を指さすのだ。あの殉難者のやうな面影――わたしは、あの面影を忘れることが出來ない。立派な仕事は、人間を高潔な人格にせずにはおかないものだ。

ヴイリエリ　博士一行の食物はまだあるだらうか。

チチオニ　さあ、どうだらう。だが、博士は、こんな冒險的な仕事に慣れない學者だ。書齋の人だ。寒さと凍傷のために歩行の自由がきかなくなりやしないか。それが何より心配だ。

ノビレ　マルムグレン博士や、ベフーネク君、あなたの姿を見ると、知識のために身を犧牲にして惜しまない貴い殉教者が思ひ出されてならない。

ベフーネク　有難う、ノビレ少將。

ビアヂ　博士たちは、果して陸地へ辿りつくことが出來るでせうか。

トロイアニ　陸地――併し、われ〳〵だつて、何時、陸地の土が踏めるか分りやしない。

ビアヂ　あゝ、陸地！　陸地が戀しい！

トロイアニ　僕は、何時も希望を失はずに、勇氣を振ひ起

さうとしてゐるんです。併し、すぐに寂しい絶望の氣持が、霧のやうに心を包んでしまふ。そんな時は夢中になつて、氷原の上を歩き廻つて見るんです。併し、何處を見ても冷たい氷ばかりで、灰色の空が覆ひかぶさるやうに擴がつてゐるだけだ。それに、食物も蓄電池も、日一日と少くなつてゆく。一日二枚のチヨコレエトを、一枚に減らし、一枚を半分に減らして行つても、こんな狀態では、それが何時まで續くだらう。さう思ふと、心細くて氣が滅入りさうだ。（氷原の上を歩き廻る）

ノビレ　（天幕に繋いである愛犬チチナに近寄り、その頭を撫でながら）チチナ、チチナ、お前は人間のやうに口が利けないが、お前だつて寂しいだらうなあ。

ビアヂ　今頃は、イタリイの初夏はどんなに素敵だらう。あゝ、故郷がなつかしいなあ。

チチオニ　故郷のことを思ひ出すだけでも、是非生きてゐたいもんだ。

ベフーネク　わたしには、チエコスロワキアの晩春の頃が思ひ出される。もう今頃は、ライラツクが花盛りだらう。わたしの書齋の横には、見事なライラツクがあつた。窓を明けると、噎せるやうな香が流れこんで來たもんだ。仕事に疲れた目で、ぢつとそれを見てゐると、何だか人生の悦びを感じるやうな氣がした。今頃は、わたしの妻は、あの窓に倚りかゝつて、わたしの身を案じてゐることだらう。

トロイアニ　故郷が戀しい！　たまらなく戀しい！

ヴイリエリ　わたしは、薔薇の咲いた前庭にでも出て、冷たいレモナアデを啜つてみたいなあ。

トロイアニ　イタリイを立つたのは、四月の十五日だつた。親類の者が、早咲きの薔薇を胸一ぱいに抱へて、僕を見送つてくれた。僕の身を案じながらも、その心配を押しかくして、僕を勵ましてくれたあの眼差し！　それから街へ出ると、われ／＼の門出を祝ふ群集が、南國の暖い春の陽を浴びて、往來の隅から隅まで群がつてゐた。娘もゐる。若い男もゐる。年寄りもゐる。みんな溢れるやうな熱誠で、笑ひかけ、勵ましかけてくれた。あゝ、あの人達に、もう一度會つてみたい。あの街を、もう一度歩いてみたい！

ヴイリエリ　あの時は、僕は自動車をかけ下りて、あの一人一人に握手したいやうな、接吻したいやうな氣持だつた。今頃は、イタリイ全土をあげて、われ／＼一行の身を氣づかつてゐてくれることだらう。

ベフーネク　いや、全世界の人たちが、心配してゐてくれるでせう。

チチオニ　ノビレ少將、奥さんもさぞ御心配でせうね。そ

れにお孃さんも。お孃さんのマリイさんはおいくつでしたつけ。

ノビレ　今年七つだ。悪戯盛りだ。

チチオニ　ぢや、何もかもお分りになる頃ですね。屹度、心配のあまり、夜もおちおちお休みにならない事でせう。

ノビレ　いや、あんまりうちのことは思ひ出させないでくれ給へ。心が掻きむしられるやうだ。併し、もしわたしが、この北極の地で倒れたとしても、あの娘の心には、人類のため、科學のために倒れた父の姿が、何時までも淸らかな思ひ出として殘るだらう。それこそ、わたしにとつては、何にも代へられない美しい慰めだ。

チチオニ　さうした美しい感情こそ、神様が人間にお與へになつたものに違ひありません。マリイさんに神のお惠みがありますやう！

ベフーネク　自然を征服して行く科學、そして、その科學の上に位する人間の美しい性情――それを思ふと、わたしは何とも言へない朗らかな氣持です。

ノビレ　ねえ、チチオニ君、僕は何だか日本の春が思ひ出されてならない。君もよく覺えてゐるだらう。（愛犬チチナを抱き上げて）お前も一しよだつたなあ、チチナ。われわれが日本を訪れたのは、去年の一月だつた。暫く滯在してゐると、すぐ春だ。烟るやうな空氣の中に、あの美しい櫻が咲き出して來た。あの極東の花の、一種言ひやうのない美しさは、わたしには忘れられぬ思ひ出の一つだ。日本の人たちは、心からわれわれを歡迎してくれた。あすこでわれわれの完成したＮ三號飛行船は、われわれが日本へ殘して來た偉大な科學の足跡の一つだ。今思ひ返してみると、美しい數々の思ひ出が、なつかしくよみがへつてくる。今頃は、日本の人たちも全土をあげて、われわれのために心配してゐてくれる事だらう。

チチオニ　（感慨深さうに）去年でしたね、あれは。親切な日本の人たちは、どんなに心配してゐてくれる事でせう。

ビアヂ　全世界の人たちよ、どうして救ひに來てくれないんだ！　こんなにＳＯＳの無電を打つたのに！

トロイアニ　（突然）あ！　あれは何だらう！

ヴイリエリ　えつ！　何が！

トロイアニ　あの音！　ブル、、、！　プロペラの音のやうだ！

一同　なに、プロペラの音！

（一同、空を仰いで、耳を澄ます。）

（間）

チチオニ　何にも聞えないぢやないか。

トロイアニ　僕の空耳だつたのかしら。

ヴイリエリ　何にも聞えない。何も見えない。

ベフーネク　トロイアニ君、君があんまり飛行機を待ち焦れてゐるので、何か聞えたやうな氣がしたんでせう。乾度、幻覺（ハルシネーション）つて奴ですよ。

ヴイリエリ　僕はほんたうに救ひの飛行機が來たのかと思つたのに――がつかりしてしまつた。

トロイアニ　何でもなかつたのか――空耳だつたのか――

ビアヂ　一瞬間、悦びで躍り上つた僕の氣持は、又、暗い絶望につき落されてしまつた。

トロイアニ　こんな氣持では、幻も見える。いつはりの音もきこえる。

ビアヂ　救ひ！　救ひ！　何故、救ひが來ないんだ！

ノビレ　諸君、絶望してはいけない。

チチオニ　希望を持たなくてはいけない。希望を！

ビアヂ　希望――希望――（聲が力なく消える）

トロイアニ　希望――希望か――（聲が力なく消える）

ヴイリエリ　何だつて、捜索の飛行機が來ないんだ！

チチオニ　寂しい、たまらない氣持だ！

ビアヂ　よし！　僕はもう一度、無電を打たう！　魂をこめて！　ＳＯＳの信號を！

（ビアヂは無電を打つ。ジイ／＼の音。）

ビアヂ　奇蹟よ！　奇蹟よ！　現はれてくれ！

トロイアニ　奇蹟！　奇蹟！　何故、奇蹟が現はれないんだ。

ノビレ　奇蹟はきつと現はれる。最後まで戰ふものには、必ず奇蹟がある。

ベフーネク　科學の力は、きつと奇蹟をつくり出してくれる。それは、昔の人が見たといふ荒唐無稽な奇蹟ではない。人類が科學の力で自然を征服する勝利の姿だ。

ビアヂ　（無電を打ちながら）救ひ――救ひ――救ひのＳＯＳ――アンテナといふアンテナに響いて――耳といふ耳に怒鳴り立てゝくれ。ＳＯＳの聲よ、響け、響け、怒鳴り立てろ！

トロイアニ　（無電の傍へ寄つて）お前は、われ／＼のたつた一つの聲だ。全世界人たちの耳元へ、怒鳴り立てゝくれ――俺たちの聲を！　俺たちの救ひの聲を！

チチオニ　ノビレ少將、あれは何でせう。（空を指さす）

ノビレ　あ、飛行機だ！

チチオニ　たしかに飛行機だ！

ヴイリエリ　今度こそ、たしかに飛行機だ！

一同　飛行機だ！　飛行機だ！　とうと救ひが來たぞ！

（上空遙かに一葉の飛行機の飛ぶのが見える。）

トロイアニ　救ひだ！　救ひだ！

ヒアザ　奇蹟だ！　奇蹟だ！
ベフーネク　やあ、こつちに這つてくるぞ！
ヴイリエリ　こつちへ這つてくるぞ！
チチオニ　この赤い天幕が見つかつたんだな！
トロイアニ　あゝ、有難い。愈々救ひの時が來た！
ヴイリエリ　みんなして呼び立てよう！
（一同手をふり、踊り廻つて、叫び立てる。興奮し恍惚とした一瞬間。）
チチオニ　やあ、どうしたんだ？
トロイアニ　あつ、行つちまふ！　行つちまふ！
ヒアザ　こんなに怒鳴り立てゝゐるのが聞えないのか。
ベフーネク　どうしたんだらう。急に氣流でも變つたのか？
（一同、狂氣のやうに怒鳴り立てる。）
ヴイリエリ　とうと、われ／＼が目にはひらなかつたと見える。
ベフーネク　あゝ、もう影も形もなくなつてしまつた。
トロイアニ　救ひの光が見えたかと思ふと、まるで稻妻のやうに消えてしまつた。
ヴイリエリ　死ぬよりもたまらない氣持だ。
ベフーネク　夢であつてくれ。夢の方がまだしも仕合せだ。
ヒアザ　何てことだ。運命の奴、何て皮肉なことをしやがる。殘酷だ。殘酷だ。（氷原の上をころび廻る）
（一同、それ／＼昂奮し、絶望した動作。）
ノビレ　いや、諸君、もう救ひの光の見えたも同然だ。勇氣を失つてはいけない。今暫くの辛抱だ。あの飛行機は、まさしくわれ／＼の捜索隊に違ひない。してみれば、われ／＼の發したＳＯＳの無電は、全世界に響き渡つてゐるのだ。捜索隊は、續々として、北極の空へ向つて押し寄せてゐるのだ。われ／＼の救はれるのも、最早、時間の問題となつた。だから、諸君、決して、決して、力を落してはならない。
ベフーネク　ノビレ少將、あなたの仰しやる通りです。救ひは間近かに迫つて來たのです。われ／＼のＳＯＳは全世界に響き渡つたに違ひありません。
チチオニ　もうかうなつた以上は、お互に體を大切にして、捜索隊の救ひを待たう。
ノビレ　さうだ。みんな體を大事にしよう。それが最善の方法だ。そして、最後まで、さうだ、最後まで戰つて生きよう！
（一同、昂奮し、感激して、相擁す。霧が流れ出してくる。）
ベフーネク　霧が出て來たやうですね。
トロイアニ　あゝ、霧だ。
ヴイリエリ　ノビレ少將、天幕へはひつて、少しお休みに

なつては如何です。
ノビレ　いや、わたしはいゝ。
ビアヂ　見る／＼うちに霧が深くなつてくる。
トロイアニ　北極の自然の奴め、また暴威を振るひあがるなあ。
ノビレ　嵐になるかもしれない。諸君、天幕や、諸君の體が吹きとばされないやうに氣をつけて下さい。
（この時、氷の裂ける音。）
一同　何だ？　どうした？
チチニ　あつ、氷が裂ける音だ！
ビアヂ　なに、氷が裂ける―
ヴイリエリ　しまつた！
ベフーネク　どうしよう！
トモイアニ　どうしよう！
（この時、凄まじい音と共に、氷が大きく搖れて、一同の體が同じ方向へよろめく。音響は尙も續く。）
チチオニ　氷が裂けたら大變だ。
トロイアニ　われ／＼のゐるところが浮氷になつて、潮流に押し流されたらどうしよう。何處へ流されるか分つたもんぢやない。
ヴイリエリ　いつ、大きな氷山にぶつかるかも知れない。
トロイアニ　嵐に弄ばれる木の葉のやうな運命だ。
ビアヂ　折角救ひの光が見えたのに、それが幻のやうに消えて行くのか。
ベフーネク　もう駄目かな。
ビアヂ　もう駄目だ。とても駄目だ。
チチオニ　こゝまで耐へ忍んで來たのに、今倒れるのは口惜しい。口惜しい！
トロイアニ　絕望だ！　絕望だ！
（氷原の搖れやうが激しいので、一同、抱き合つて、一團となる。）
――口惜しい！　口惜しい！
――絕望だ！　絕望だ！
――絕望か！　絕望か！
（凄まじい音響と共に、氷原は搖れ、濃霧は物凄い勢で流れるその音響にまざつて、ノビレ少將の聲が、途切れ途切れに聞えて來る。）
ノビレ　諸君、絕望してはいけない。最後まで――最後まで――希望を持て――希望を！　――わたしは、諸君に子供欺しのやうな氣安めを言ふのではない！　諸君にから元氣をつけようといふのでもない！　併し、諸君、最後まで、希望を失つてはならない！　よしわれ／＼が倒れようと、人類のために犠牲になつてゆくんだ。そして人類の進歩は、歴史以來、かゝる犠牲によつて進められ

て來たのだ！　われ〳〵も、その貴い犧牲の一つだ！　愈々死が來たら、潔く悅んで、死に就かう！　併し、最後まで、希望を棄てゝはいけない！　最後まで――希望を！

――幕――

## 第二幕

ノビレ少將一行の露營する浮氷の上。以前の赤い天幕は、風雪に曝されて見る影もない程、痛々しい姿になつてゐる。

時は、六月二十四日の夜。

ノビレ少將以下六名のイタリア號の乘組員は、第一幕に較べて遙かに焦悴し、頰がこけ、髯が伸びてゐる。ノビレ少將とベフーネクは、重い足取りで、氷上を步き廻つてゐる。時々、あたりを見廻したり、空を仰いだりしてゐる。見る目も痛々しい位疲れ切つてゐる樣子である。チチオニはすつかり焦悴した樣子で、その二人を見てゐる。

天幕の傍には、ヴイリエリとトロイアニとが坐つてゐる。トロイアニは立つては二三步步き、又、坐る。

トロイアニ　かう疲れてゐちや、步くのさへやつとだ。この足でもう一度陸地を踏むことが出來るかしら。

ヴイリエリ　僕は、昨夜、六月の雨でしめつた土に接吻してゐる夢を見た。たまらなかつた。

トロイアニ　夢と言やあ、僕は、妻が妙に歪んだ顏で笑ひながら、僕の方をぢつと見てゐる夢を見た。すると、その顏がいろんな女の顏になるぢやありませんか。

ヴイリエリ　女か――女の夢か――

トロイアニ　たまらないなあ。何だか寂しさが心を喰ひつくすやうだ。

（間。）

チチオニ　ノビレ少將閣下――

ノビレ　何だ。

チチオニ　幾度も飛行機が頭上を飛んで、今にも救ひ出されさうになつてゐながら、どうしてかう幾度も裏切られるんでせう。

ノビレ　それも運命がわれ〳〵に與へる試練かも知れない。われ〳〵は、一月にわたる苦しみに耐へて來たのだ。肉體が耐へうる限りの苦しみを忍んで來たのだ。もう一息だ。

ベフーネク　わたしは、二分間と立つてゐる氣力さへない。

それなのに、氣持は悄氣切つてゐる。折角の仕事を、全世界に報告出來ないのが殘念でたまりません。（どつかり氷上に坐る）

ノビレ　併し、世界各國が、われ〳〵の上を氣遣つて、救助の手を擴げてゐるのだ。それを思ふと、感謝の涙がひとりでに流れて來てならない。

チチオニ　大分、夜も更けて來たやうです。寒さがひしひしと迫つて來ます。もう天幕へはひつて、お休みになつてはいかゞです。

ノビレ　いや、わたしは構はない。

チチオニ　閣下、お體を大事にして下さい。

ノビレ　有難う。――それよりか、君は誰よりも體を痛めてゐるから、少し休んだらどうだ。

チチオニ　有難う。併し、今日は何だか救ひの飛行機でも來さうな氣がして、妙に胸騒ぎがしてならないのです。

ノビレ　さうか。

チチオニ　閣下、あなたもひどくお窶れになりましたね。

ノビレ　さうか。――併し、君も窶れたなあ。まるで餓鬼のやうだ。

（間。）

（無電技手のビアヂが天幕から匍ひ出してくる。）

トロイアニ　あゝ、ビアヂ君だ。

ノビレ　ビアヂ君、熱がひどかつたさうだが、どうだなあ。

ビアヂ　もう大分いゝやうです。

ノビレ　さうか。大事にし給へ。

ビアヂ　今、君に倒れられたら、われ〳〵は聲を奪はれたも同然だからな。

ビアヂ　大丈夫です。この命のつゞく限り、わたしの任務を果さずにはおきません。

ノビレ　熱がひどかつたら、この間投下して貰つたウイスキイを少し飲んだら、どうだ。

ビアヂ　有難う。それよりか、閣下、煙草を一本頂かせて下さい。

ノビレ　よろしい。ヴイリエリ中尉、まだ煙草があつたなあ。

ヴイリエリ　はい。

ノビレ　ぢや、みんなで一本づつ喫ふことにしよう。

ヴイリエリ　すぐ持つて參りませう。

（ヴイリエリ中尉は天幕の中へはいつて煙草を持つて來る。一同、一つ所に集つて坐り、力無い樣子で、煙草をふかす。）

チチオニ　實にうまい！

ベフーネク　實にうまい！

ヴイリエリ　マダレナ少佐が食料を投げてくれるまでは、

實に心細かつた。心がいくら張り切つてゐても、いつ餓ゑ死するか分らない狀態だつたからな。

トロイアニ　僕は、あの時は食料を抱きしめて泣きましたよ。

ピアヂ　今日は六月二十四日ですね。

ヴイリエリ　あゝ、さうだよ。

トロイアニ　もう一月になるんだな。

ピアヂ　今、何時でせうか。

チチオニ　十時前後だらう。

ピアヂ　夜のですか。

チチオニ　あゝ、夜の。

ヴイリエリ　靜かだな。地球の果——この北極の空は、しいんと靜まり返つてゐる。

トロイアニ　自分の聲を耳にするのさへ、物凄いやうな靜けさだ。

ベフーネク　今日は、たうとう飛行機の姿が見えないのか。

ピアヂ　少將閣下、今日の第二回の無電を打ちませうか。

ノビレ　あゝ、打つてくれ給へ。

ピアヂ　何と打ちませうか。

ノビレ　さうだなあ。（ヴイリエリ中尉を顧みて）まだ食料はあつたな、ヴイリエリ君。

ヴイリエリ　まだ三四日は大丈夫です。

ノビレ　（ピアヂに）ぢや、一同元氣旺だから安心してくれと打つてくれ給へ。それから、われ／＼のゐる地點を。それからマルムグレン博士一隊の三名、本船と共に吹き流された七名の乘組員の行方も、出來るだけ搜索して頂きたいとさう打つてくれ給へ。

ピアヂ　はい。

（ピアヂは匐ふやうにして、無電裝置へ近寄つて、無電を打つ——じい／＼の音。）

ノビレ　今頃は、母船チタ・ジ・ミラノ號では、われ／＼のことを氣づかつて、みんな心配してゐることだらうなあ。

（天幕に繫いである少將の愛犬チチナが、けたゝましく吠える。）

ヴイリエリ　何だらう。

ノビレ　（愛犬の方へ近寄つて）チチナ、チチナ、どうした？

ベフーネク　あつ、白熊だ！

一同　なに、白熊！

トロイアニ　今、死んでは、それこそ犬死だ！

ヴイリエリ　折角、此處まで生きて來たのに！

チチオニ　銃はどうした？　銃は？

（白熊が天幕に近寄つてくる。一同、逃げまどふ、犬の吠え聲が、あたりの靜寂を破つて、物凄く響く。）

（一同、逃げまどつてゐるうち、ヴイリエリ中尉がやつとの事で、天幕に立てかけてあつた銃を取つて發射する。運よく、白熊に命中する。）

（一同、ほつとして、悦びの聲をあげて、倒れた白熊に驅け寄る。併し、すぐに氣力が拔けて、どつかり氷上に坐る。）

（この時、飛行機のプロペラの音がする。）

トロイアニ　あつ、飛行機だ！

一同　飛行機！

（一同、最後の力をふるひ起すやうに、勢よく、併し、よろめきながら立上がる。）

チチオニ　今度こそ首尾よく着陸してくれ！

ビアヂ　今度こそ救ひ出してくれ！

トロイアニ　今度こそ、裏切らないでくれ、姿だけ見せて飛び去られた後の氣持はたまらない。

ノビレ　何か焚くものはないか。

トロイアニ　食料の包み紙があります。

ノビレ　ではそれを焚け！

（トロイアニは天幕の中へ驅けこんで、包紙を持つて來て、それに火をつける。烟があがる。一同、喚き立てる。愛犬チチナも一しよに吠え立てる。）

ヴイリエリ　何だか今度こそ救ひ出されるやうな氣がする。

トロイアニ　今度助からなかつたら、もうとても生きる氣力がない。

ビアヂ　今度といふ今度は。故郷へかへれさうだ。

トロイアニ　故郷が戀しい。早く故郷へ連れて行つてくれ。

ヴイリエリ　故國へかへつたら、俺は腹一ぱい御馳走をくつてやるぞ。

ベフーネク　妻はどんなに悦ぶだらう。死んだと思つたわたしが歸つたら、妻は悦びの涙で泣いて、泣いてくれるだらう。

トロイアニ　今度こそ、みんな救はれるのだ！

ビアヂ　救ひの飛行機！　早くみんなを助けてくれ！

トロイアニ　早く、早く！

（一同、喚く。）

（ノビレ少將、その樣子を見て泣く。）

ヴイリエリ　閣下、どうなさいました。

ノビレ　諸君、一月にわたる艱難辛苦をよく耐へてくれました！

（一同、ノビレ少將の方を見て涙ぐむ。）

ノビレ　併し、諸君、あの飛行機には、われ〳〵六人が殘らず乘ることが出來ないのだ。

（一同、はつとした氣持になる。この時、フオッカー

式單葉飛行機は、着陸地を求めるやうに、低く一同の頭上を旋回して浮氷の一端に平坦な場所を見つけたとみえて、そこへ着陸する。）

トロイアニ　あゝ、有難い。とうと着陸したぞ！

ヴイリエリ　やつと救ひの手が屆いた！

（重い足を夢中で引摺つて、驅け出す。ベフーネクとチチオニは、悦びのあまり相抱擁する。ノビレ少將も飛行機の方へ三四歩驅け寄る。）

ベフーネク　あゝ、あたしは、何と言つていゝか分らない。

（スウエデンの飛行家ルンドボルク中尉は、飛行機から下りる。一同、歡呼の叫びをあげる。ルンドボルク中尉は、ノビレ少將の姿を見て、つか／＼とその方へ進み寄る。二人は感極まつて、相抱いて、接吻する。一同、昂奮のあまり泣く。）

ルンドボルク中尉　ノビレ少將閣下、よく御無事でゐて下さいました。わたしは、スウエデンのルンドボルク中尉です。

ノビレ少將　有難う。有難う。

ルンドボルク中尉　それから、皆さん、よく無事でゐて下さいました。

（ルンドボルク中尉は。一同と握手を交はす。）

ルンドボルク中尉　今、キングス、ベイには、各國の捜索隊が集つて、あなた方を救ひ出すために、全力をあげてゐます。わたしは、今日、スウエデンの捜索隊長トオンベルク中佐の命を受けて、捜索にのぼつたのです。幸ひ、あなた方の居處を發見して、あなた方にお會ひする事が出來て、こんな嬉しいことはありません。

ノビレ　有難う。よく危險を冒して來て下さいました。

ルンドボルク　長い間、さぞお苦しみだつた事でせう。捜索隊のもの一同、この數時間、慘めな位氣を揉んでゐたのです。みんなもどんなに悦ぶことでせう。

チチオニ　わたしたちは、どんなにあなた方を待つてゐたか知れません。

ベフーネク　今日は、何て幸福な日でせう。

トロイアニ　救ひが間近に迫つてゐるのを知りながら、何時までも此處にゐるのは、たまらない思ひでした。

ビアヂ　とうと救はれたのだ僕は嬉しくて跳ね廻りたい。

（一同、ノビレ少將を中心にして、歡喜に溢れて跳ね廻る。）

ルンドボルク　皆さん、甚だ殘念ですが、わたしの乘つて來たのは、御覽の通り、小型な單葉飛行機です。とても皆さんを一時にお助けすることが出來ません。

（一瞬間、絶望的な間。）

ルンドボルク　ですから、先づノビレ少將閣下をお救ひし

て、しかる後にあなた方をお救ひするために、わたしはすぐ此處へ引返して參りませう。――さあ、少將閣下、何卒、飛行機へお乘り下さい。

ノビレ　御好意は有難う。併し、わたしは、イタリア號の船長として、最後まで殘りませう。それが、わたしの義務です。(間。一同を見廻す)ですから、ペフーネクさん、あなたが先に歸つて、今度の仕事を學界に向つて報告して下さい。

トロイアニ　失禮ですが、閣下、チチオニ機關長が一番體を痛めてゐますから――

ピアチ　チチオニ機關長を先に歸して下さい。

一同　どうぞ、チチオニ機關長を――

ノビレ　では、チチオニ君、あなたは一番健康を害してゐるから、あなたが先にお歸りなさい。

チチオニ　いゝえ、閣下、わたしも最後まで殘りませう。わたしは、學問のため人類のため、寧ろ、悅んで死を選びます。

ペフーネク　われ〳〵が今日まで苦しんで來たのは、たゞ命が惜しかつたからではありません。われ〳〵の仕事を、全世界に向つて報告したかつたからです。ですから、閣下、あなたが先にお歸りになつて、今度の北極探險の全經過を報告して下さい。それがわたしの心からのお願ひです。

チチオニ　さうです、閣下、あなたから先にお歸り下さい。あなたが救はれゝば、われ〳〵みんな救はれたも同然です。

一同　さうです、閣下、是非あなたから！

ノビレ　諸君、わたしは、この北極の地で、諸君と生死を共にし、長い苦しみを分つて來たのです。わたしの情として諸君を後にして去るに忍びない！

ルンドボルク　それはいけません、閣下。わたしは、先づノビレ少將閣下をお救ひするやうにと、搜索本部から命令をうけてゐるのです。あなたをお救ひして、他の行方不明の遭難部員を搜索する手筈について、あなたの御指圖をうける必要があるからです。

ノビレ　いや、わたしは最後まで殘らう。それがわたしの義務です。

ルンドボルク　いけません、閣下。あなたは、是非お歸り下さらなくちやいけません。

一同　(ノビル少將を取り卷いて)閣下、あなたは是非お歸り下さい。

（一瞬間、緊張した間。）

ノビレ　(深い決心の色を見せて)では、諸君、涙をのんで、わたしが先に歸りませう。そして、諸君の無事であ

ることを報告し、且つ、われ〳〵が極北の地で成し遂げた偉大な仕事の經過を、全世界に報告しませう。そして諸君を救ひ出すあらゆる手段を講するために、全力を盡しませう！

ルンドホルク　その點については、最早、心配はありません。わたしは、あなたをミラノ號へ送り届けた上、すぐ此處へ引き返して、皆さんをお救ひしませう。よしまたわたしに不測の災難が起るにしても、他の搜索隊が必ず救ひ出してくれるでせう。殊に、勞農ロシアの碎氷船クラッシン號とマリギン號は、氷を破つて、この地點へ向つて進んでゐます。ですから、數時間のうち、遲くとも數日のうちには、必ずや皆さんをお救ひせずにはおきません。

一同　有難う。有難う。

ノビレ　では、わたしの去つた後は、ヴイリエーリ中尉、わたしに代つてあなたが指揮して下さい。

ヴイリエリ　はい。

ノビレ　では、諸君、さやうなら。全世界の人たちが、われわれの事を氣遣つてゐるのを忘れないで、體を大事にして下さい。そして、最後まで、希望を失はずにゐて下さい。

（一同、涙に咽んで言葉がない。）

ノビレ　母船チタ・ジ・ミラノ號の甲板で、諸君と共に、今日までの苦しみを笑ひながら語り合ふ日を待つてゐます。

（一同、泣く。）

ノビレ　では、さやうなら。

（一同、泣きながら、ノビレ少將と相抱く。）

ルンドホルク　では、ノビレ少將閣下。

（ノビレ少將は、ルンドホルク中尉に伴はれて、飛行機に乘る。飛行機のエンジンの音。）

（一同、感極まつて叫ぶ。）

一同　ノビレ少將、萬歲！　萬歲！

（飛行機の動き出す音。一同、一種悲痛な面持で、それを見送る。）

――幕――

（明治座實川延若、市川壽美藏一座
昭和三年八月興行臺本第一稿）

# 都市覗き繪

――演出者によつて
構成さるべき未完成の芝居――

作者の見るところでは、現代は、二つの大きな思潮の怪奇な交錯をなしてゐる時代のやうに思へる。即ち、マルクス學徒風な言ひ方を以てすれば、歴史的必然性を以て崩壞しつゝあるやうに思へる資本主義の爛熟に見えるまでに爛熟せる文明と、歴史的必然性を以て擡頭し展開しつゝあるやうに思へるプロレタリアートの潑剌たる力とが、二つの歯車のやうにきしりながら、一つは右廻りをしようとし、一つは左廻りをしようとし、そして、それが激しく軋り合へば合ふほど、そこに速力と熱とを増大して、現代の目まぐるしい奇怪な世相と、その世相に伴ふ韻律と色彩と形態とをつくり出してゐるのである。

そして、無數の人間群は、この二つの歯車の上で、哀しい凄慘な踊りを踊つてゐる。そして、歯車の廻轉が加速度的に速力を早めるに從つて、ブルジョアは益々肥りあがり、プロレタリアートは益々痩せ細り、夥しい失業者の群と血腥い犯罪とが、その副産物として飛び出してくるのである。心を痛めるのは詩人のみではない。現代に於ては、冷靜にして勇敢な社會科學の徒も、亦哀しき詩人である。

都市はかゝる世相のティピカルな縮圖である。そして、このスケッチ風な一幕劇は、かゝる都市の薄暗い一角を舞臺としてゐる。

舞臺は夜の公園の一隅で、樹木が一本、その傍にはベンチ。ベンチは瓦斯燈の青褪めた冷たい光に照されてゐる。

背景は、ぼかされたやうに明るい都會の夜空で、附近は遊園地であるために、樂隊の響、客引のかん高い聲、群集のざわめきなどが、風に漂ふやうにとぎれ／＼に聞えてくる。その響には、生存の哀しい喘ぎと、生きよう、生きようとするものの苦しい熱とが、痛々しいばかりにはつきりと感じられる。

幕があくと、勞働者とも浮浪人ともつかない一人の男が、氣力のぬけた態で、よろ／＼しながら出てくる。

浮浪人　人間、腹がへると、からつきし意氣地がなくなるなんて、どうも奇妙な生きもんだなあ。足がふら／＼し

て言ふことをきゝやしない。きのふから水ばかりがぶがぶのむだけで、齒にかゝるものつたら何一つ食はねえんだからなあ。犬も歩けば棒にあたると言ふが、かう不景氣ぢや、往來をほつつき歩いたつて、ろくな紙屑一つ落ちてやしねえ。まあ、今日はこゝらで一つ腰をすゑるとするか。（ベンチにどつかり腰を下ろす）世の中がぐるぐる廻つて見える。誰もかれも、ゴム底の靴でもはいたやうに、音も立てずに大急ぎで、冷淡に、俺のそばを通りやがる。そしてそいつらがみんな、中心のない人形かなんぞのやうにふら／＼動いて見える。かう腹がへると、世の中まで奇體に見えるんだからたまらねえや。（ぺつと唾をはく。間）あゝ、がらんどの胃の腑がちく／＼する。すると、その胃の腑の底から、何でもいゝ、生きろ、生きろ、と怒鳴りあがる。だが、いくらあせつたつて、いくら考へたつて始まらねえ。今夜は一つ、星でも見ながら、このベンチの御厄介になるとするかな。（ベンチに横になる）俺は何だかしみ／″＼人間と話がしてみたくなつた。おい、ベンチ。貴樣、やけに冷てえなあ。（ベンチを撫でながら）こゝが温い女の腕で、こゝが柔い女の腰だつたらなあ——おい、ベンチ——おい、可愛いゝ女——（近づく人の話聲がする。浮浪人は急いで坐り直す）おつと。お巡りにおつぱらはれて、折角の今夜の宿をふいにしちや勿體ねえや。（こつそりあたりを見廻す）

（青年紳士が二人話しながら出てくる。この二人は、現代の縮小語をかりて言へば、モボと言はるべき部類に入れていゝ人間である。彼等はブルジョアの子弟であるか否か、その懐にはお小遣がたんまりとあるかどうか、それとも不良青年であるかどうか、それは此處では大して問題ではない。少量のインテリゲンチヤの香とスマアトな感じとを持つてはゐるが、そのきざつぽい樣子は、惡と享樂とへ急速に轉廻しつゝある現代の一面を如實に示してゐるものと見ていゝ。）

青年一　あのダンサね。あいつ、近頃、待合に出沒するつて話ぢやないか。

青年二　うん、さういふ噂だな。で、相手といふのは君ぢやないのか。

青年一　よせ。僕はまた、てつきり君かと思つてたよ。

青年二　冗談はよせよ。だけど、あいつ、何だかチヤレストンつて感じがするな。

青年一　どういふ感じだい、それは。

青年二　何だか、かう、轉倒した色情つて感じだよ。

青年一　あの女は轉倒した色情つて感じはしないぢやないか、チヤレストンがさういふ感じがするつてのは變だね。

青年二　だつて、昔の踊りには、健全な肉體の動きと健康

な肉慾との現はれがあつたが、現在のシミイにしろ、チヤレストンにしろ、みんな狂的な不健全な享樂が躍動してゐるぢやないか。肉體の狂燥樂だね。そこがまた、現代人に好かれる所以なんだらうが。

青年一　だから、ジャズが世界を風靡してゐるんぢやないか。あの奇怪なリズムがさ。

青年二　それで、君もジャズの崇拜者つて譯かい。

青年一　さういふ君だつて、滿更嫌ひぢやなさゝうだぜ。

青年二　そりや仕方がないさ。時代の流行なんだもの。そして、若い人間はさうした流行に對して非常に敏感なんだ。それが若いもの丶弱味でもあり强味でもあり、而して、特權でもあるんだ。

青年一　いやに理窟つぽいね。

青年二　社會科學は人間を理窟つぽくするよ。

青年一　そんな駄洒落は止せよ。

青年二　で、君は、ジャズと同じやうに、世界的な流行をなしてゐる言葉を知つてゐるかい。

青年一　知らないね。何だい、それは。

青年二　チユウ・チン・チヤオつてのさ。

青年一　そりや、あの得體の知れない國民支那人のつくつた言葉だね。

青年二　うん、さうだよ。それはどういふ意味だか知つてゐるかい。

青年一　知らない。

青年二　チユウ・チン・チヤオとは、男が女の顏を嚙むことだ。

青年一　うふゝゝゝ。

青年二　それ見給へ。君だつて擽つたい氣持がするだらう。

青年一　すると、チユウ・チン・チヤオつて性的なもんなんだね。

青年二　無論さうだよ。ハバロック・エリスの言葉をかりる迄もなく、これは性愛技巧の一つだね。チユウ・チン・チヤオつてこの一語に、現代の性的生活の一面がまざまざと出てゐるやうな氣がしてならない。現代では、性慾は技巧化し遊戯化して來た。而も、人間は、原始的な、動物的な性慾を忘れることが出來ない。こゝに、現代の性的生活の矛盾と、悲哀と、複雜性がある譯だ。

青年一　また例の議論が始まつたね。そいつは今度にするとして、何處か活動でも觀かうぢやないか。

（怪しい男が闇の中から出てくる。彼は、畫家とか文士とか言つた風な職業を志しながら、それだけの才能がなく、さうかと言つて、眞面目に勞働して暮してゆくだけの熱意もないために、何時の間にか社會の下積みになつて、社會の暗黑面を潜り歩いて、やつと生計

を立てゝゐると言つた風な人間である。學生風に袴をはき、角帽のやうなものをかぶつてゐるが、どう見たつて學生には見えない。）

怪しい男　（囁くやうな聲で）　もし、旦那。もし〳〵。

青年二　え？　（彼を認めて）　何ですか。

男　（擦り寄りながら）　例の、その――あの寫眞があるんですがね。

青年一　（感付て、併し）　あの――その――寫眞つて何だい？そんな寫眞があるのかい。

男　ちやんと御存知のくせに、ひやかしちや困りますよ。

青年二　一體どんなのを持つてるんだね。いゝ加減の寫眞に、はやりつ兒の女優の首でもすげ換へたんぢやないかね。

男　そんなんぢや、もう流行おくれでさあ。もつと深刻な奴があるんです。珍寫眞もね。

青年一　まあ、一枚見せて見給へ。

男　（あたりを見廻しながら、懐中へ手を入れて一枚引出す）　かういふ奴がね。

（青年二人、淡い瓦斯の光で覗きこむ。）

青年二　何だ、詰らない寫眞ぢやないか。

男　他にいろんな變つたのもありますが、そいつあ、見料でも頂かなくちや。

青年二　いやに慾張つてるね。

男　でも、見ちまつた後で、一枚も買つて下さらないお客さんがありますからね。

青年一　さうさ。そんなものは、見ちまへば用はないからね。

男　いかゞです、一枚でも結構なんですが、買つてやつてくれませんか。さうすりや、すつかりお見せしますがね。

浮浪人　（わざと大きく咳拂ひする）　えへん！

男　（吃驚して、歩きかけながら、咳拂ひのした方へちらと眼をやる）

青年　（その間に、さつさと行つてしまふ）

男　（咳拂ひをした男が、巡査でもなく刑事でもなく、ベンチに腰を下ろしてゐる浮浪人であると氣づくと、忌々しさうにその方へ近よつて）　やい、何だつて驚かしやがるんだ。

浮浪人　なにも驚かす氣ぢやないよ。咳が出たゞけだ。

男　用もねえのに、うろ〳〵してゐるねえ。

浮浪人　お巡りのやうなことを言ふね。

男　此處はおれたちの縄張りなんだぞ。

浮浪人　うめえ商賣をやつてるな。

男　貴様のおかげで、大事なお客を逃したぢやねえか。

浮浪人　儲けたら、少し分けなよ。

男　（相手があんまり落ちついてゐるんで、少し怖氣づいて）貴樣、何だい？

浮浪人　俺か。へつ／＼／＼。

男　薄氣味の惡い奴だ。（こそ／＼去る）

浮浪人　あんな奴は、世間の藪を大威張りで歩いてる奴だ。俺には、あゝした惡事の才能がないのか、食ふものさへ碌に食へやしない。世間をもぐつて暮らしてゐる奴は、段々下へ／＼ともぐつて行きやがる。何處までもぐつても、底がないと見えるなあ。だが、あゝした男も、たゞ生きたいからだ。生きる――俺は、どうすればいゝんだ。あゝ、腹がへつた。（間）今のきざな野郎のふかした煙草の匂ひがまだ殘つてやがる。（息を吸ふ）こんな匂ひを吸ふと、腹のへつてるのが一層みじめになつて來やがるな。バットかな。――いゝや、バットぢやねえや。こちとらの知らねえ舶來の煙草らしい。いけねえ。いけねえ。こんなうまさうな匂ひを嗅ぐと、脂つこい御馳走を思ひ出していけねえ。――畜生、こんな時煙草でもふかすと、少しや空きつ腹なのも忘れるんだがなあ。煙草の吸殻でも落ちてねえかな。（透かすやうにして地面を探す。何もない。がつかりしたやうに、又ベンチに横になる。暫く間。二三間先きに紙屑が一つ、薄闇に浮いてゐるのが眼につく。彼は、ぢつとそれを見る。風が吹いて來て紙屑がころ／＼轉がる。彼にはそれが、パンか何そのやうに見える）はゝあ、パンかな――やあ、パンが落ちてるぞ！（バネ仕掛の人形のやうに飛び上つて、紙屑の方へ近寄つて、それを拾ひ上げる）なあんだ。屑つ紙か。ちえつ、忌々しい！（紙屑を投げ棄てる。棄てた紙屑は、ころ／＼と轉がつて、それがまた、パンのやうに見える）やあ、やつぱりパンかな。どうもパンだぞ。（また轉がる紙屑を追つかけて拾ふ――この情景に關聯してチヤップリンの映畫「黄金狂時代」を見た讀者には、あの中の何とも言へないユウモラスで悲しい場面を思ひ出して貰ひたい。黄金を求めてアラスカ雪に閉ぢ込められた主人公が、空腹の餘り人間を鷄と間違へて、幾度も打ち殺さうとする哀しい錯覺、この浮浪人の氣持も亦、それと同じ錯覺でなければならない。この浮浪人が、漸く氣力もない程の空腹にも拘らず、この哀しい錯覺に昂奮して、三度屑紙を追ひかけた時、歸宅するらしい市街自動車の女車掌が、急ぎ足でやつて來て、浮浪人に躓いて轉びさうになる）

女車掌　（例の紺サアジに赤襟の服裝。靴下だけは夜目にも白く見えるクリーム色か何かの一寸派手なものを穿いてゐる。女が男の仕事の領域を侵して行つた誇りを、無意識に身體ぢゆうに示してゐると言つたふうな女である。

今しも、地面を伽ふやうにしてゐた男を、急ぎ足て歩いて來た足先て、蹴飛ばすやうにしたので、びつくりして）あら、御免なさい。
浮浪人 い、痛え。だ、だれだい？（哀しい錯覺から我にかへる）
女車掌 ほんとに御免なさい。つい分らなかつたもんですから。
浮浪人 女車掌君か。
女車掌 えゝ、さうよ。あんた何してたの。
浮浪人 （恥しくなつて、まご〳〵して）何してゐた？はつ〳〵〳〵。人間の神經なんて、可笑しなもんだ。
女車掌 どうかなすつたの。
浮浪人 どうもしやしないがね。たゞ腹がへつたゞけさ。昨日から何も食はないんだ。
女車掌 まあ。食べないて、お金がないの。
浮浪人 まあ、さうだ。
女車掌 働いたらいゝぢやないの。
浮浪人 ところが、仕事がないんだ。
女車掌 でも、探したらありさうなもんね。
浮浪人 あるもんか、この不景氣ぢや。君なんか賴もしいねえ。君のその赤襟は、現代に於ける一つの勇ましい勞働服だ。我々男子の仕事を奪つて、女が自分を生かして行く力を示してゐるもんだ。君の服裝は、實に輕快だ。いき〳〵とした生活力がそこに表はれてゐる。羨ましいねえ。
女車掌 ひやかしちや厭よ。
浮浪人 ひやかしぢやないよ。大眞面目だ。君たちが職業婦人として、新しく生きて行くのは、少なくとも現代に於ては勇しい一つの生き方だ。赤襟君、しつかりやつてくれ。
女車掌 おや〳〵、大變なことになつたやつたわね。
浮浪人 でも君、いろんな誘惑があるだらうね。
女車掌 ないことないわ。
浮浪人 世の中には助平が多いんだからなあ。手を握るとか、お尻を抓るとか。
女車掌 （赤くなつて）あらいやだ。馬鹿にしてるのね、この人。
浮浪人 あゝ、あゝ。（どつかりベンチに坐る）
女車掌 どうしたの。
浮浪人 君の勇敢なのに壓倒されたんだ。
女車掌 そんなにあたしが勇敢？
浮浪人 いや、實あ、腹がへつて力が拔けちやつたんだ。
女車掌 お氣の毒ね、何かパンでも持つてると上げるんだけど。相憎なんにも——

浮浪人　俺は、男一匹の癖に、仕事にあぶれて、生きることさへやつとなんだ。だから、君の赤襟姿が勇ましく見えてならないんだ。俺も働きたいなあ。みんなが働いて、みんなが食つていけるやうな世の中にならないもんかなあ。そして、働かずに金肥りで肥つてくやうな奴あ、一人もゐなくなつちまへばいゝんだ。
女車掌　そんな世の中になつたらいゝわねえ。さうなつたら、あたしだつて、紳士面した男や、お金持の奥さんから、輕蔑したやうな眼附で、じろ／＼見られなくてもすむわ。
浮浪人　そりやほんたうだ。
女車掌　あたしね、今夜のおやつを買はうと思つて、こゝに十錢あるの。ほんとに僅かだけど、これあんたに上げるわ。なんか買つておあがんなさいな。大したもんも買へないでせうが、ジャムパン位買へてよ。
浮浪人　でも貰つていゝのかい。
女車掌　ほんとに僅かだけど、人を馬鹿にしてるなんて怒らないでね。
浮浪人　ぢや貰つとかう。有難う。
女車掌　もつとあれば上げたいんだけど、これつぽちつきやないの。
浮浪人　今の俺には、これでも大助かりだ。

---

女車掌　ぢや、さやうなら。あたし急ぐから――
浮浪人　いや、どうも有難う。
（女車掌は、何かしら晴れやかな氣持で歩み去る。）
浮浪人　（今貰つた十錢の白銅を掌にのせて、ぢつとそれを見る）はて、これで何を買ふとするかな。十錢。どつかそこいらにでも、轉がつてゐさうな金だが、今の俺には、なか／＼大事な金だ。暖かい味噌汁に飯でも食ふかな。何か食へるときまると、やけに唾液が出て來やがらあ。
――あなた。
浮浪人　（不意に自分の肩を女の手で叩かれ聲をかけられたので、吃驚して、その方を見る。そこには、ベンチを蔭にして、淫賣婦らしい女が、媚を含んだ眼をして立つてゐる。浮浪人は、吃驚もし少しどぎまぎもして）な、なんです。
女　お前さん、吃驚したの。
浮浪人　今日は、やけに吃驚させられる日だなあ。だが、相手が女だから、惡い氣持あしねえや。
女　あたしをお巡りだとでも思つたのかい。
浮浪人　いゝや、俺は、暖い飯を食ふ考へで夢中になつてたんだ。
女　あたし、さつきからすつかりお前さんの様子を見てゐたの。

浮浪人　へえ。君あ何だ。

女　訊かなくても分つてるぢやないの。

浮浪人　訊かないでも分かる？　分からないたあ。

女　分かつてる癖に。からかつちや厭よ。

浮浪人　變だねえ。刑事ぢやあるまいし、見ず知らずの人間を、さうすぐ分かるもんぢやないよ。

女　ほんと？

浮浪人　ほんたうだとも。

女　そりやお前さん人がいゝからよ。

浮浪人　といふのは、俺が間抜けだつてことかい。

女　いゝえ、さうぢやないの。さつきからお前さんの樣子をすつかり見てゐたが、お前さん、どつかいゝところがあるのね。あたし、何だかお前さんが好きになつちやつた。

浮浪人　よしてくれ。ひやかすのか、おだてるのかしらねえが。

女　いゝえ、あたし、眞面目で言つてるの。あたしはね、からだを資本にして暮らしてゐる女よ。世の中の闇を歩いてゐる女さ。あたし、こんなことは、厭で厭でならないんだけど、どうにも出來ないのよ――生きてゆくにはね。女つてやつぱり男と一緒になつて働かなくちや駄目ね。どう、あたしと一しよに働いてくれない？　お前さん、仕事にあぶれてるつてことだが、いつかいゝめぐりあはせに逢ふこともあつてよ。お前さんには、乾度そんな日が來ると思ふわ。ね、あたしをこんな商賣から拾ひ出して呉れない？

浮浪人　ひどく短刀直入だねえ。で、何かい、俺が男として見込まれたつて譯かい。

女　まあ、さうよ。あたしと一緒になつて見てくれない。お前さんも文無し、あたしも文無し、二人一緒になつて、捨身になつて働いて見たら、乾度何か出來るに違ひないわ。あたし、飾り立てするのは嫌ひだから率直に言つちまうが、さつきからお前さんの樣子を見てゐて、あたし、急にそんな氣持になつたの。

浮浪人　貧乏人が一緒になつて、死身になつて何かやつて見ようつて譯だね。

女　えゝ。さう。勇ましいぢやないの。

浮浪人　あんまり勇ましくもないなあ。何だか哀れつぽいなあ。

女　そんなこと言つちや駄目よ。

浮浪人　お前も變つた女だなあ。

女　ねえ、しつかりやらうぢやないの。

浮浪人　おい〳〵、もう一緒になつた氣でゐやがらあ。

（この時、一人の男が、誰かに追ひかけられでもする

やうに息を切らしながら驅けてくる。二人のゐるのには氣がつかないで、ベンチの端にどつかりと腰を下ろして、はつ〳〵息をはずませてゐる。)

浮浪人　おい、おい。どうしたんだ。

その男　えつ!　(とび上る)

浮浪人　おい〳〵。さう怖がるにや及ばないよ。俺は何も怖い人間ぢやない。一體、どうしたんだ?

その男　(二人を見て、二人とも自分と同じ仲間の人間らしいのを知つて、安心して再び腰を下ろす。然し、默つてゐる)

女　どうしたのさ!

その男　なに、驅けて來たから、息ぎれがするだけだ。

浮浪人　そいつは嘘だらう。何か悪いことでもして、つかまり損つたんだらう。どうだ、圖星だらう。

その男　さう見破られちや、隱したつて仕樣がない。全くその通りです。

浮浪人　で、何をしたんだい。

その男　何つてね、つい、その盗みをやつたんだ。

浮浪人　さうか。そんなところだやないかと思つてた。――だが(その男をじろ〳〵見ながら)お前さん、盗みをするやうな人間にも見えねえがなあ。(成程、その男は、その言葉の通り、盗みをするやうな人間には見えない。優しくて殉情的で、何處か弱々しいところさへある。ちやんとした正業についてゐれば、眞面目に働く人間なんだが、社會狀勢とか境遇とかのために、それが出來ないで、素直に伸びるべきものが伸びないで、いぢけてしまつたといふ風なところがある)

その男　實は、今度が初めてなんだ。

浮浪人　どうもそんな風に見えたよ。で、何だつて、さう息を切らして驅けて來たんだね。どこを踏んだのかい。

その男　いゝえね。盗む時は手際よく盗んだんだが、五六歩來ると、おい〳〵つて呼びとめる奴があるんだ。ぎくりとして振返つて見ると、商人風な男が立つてゐやがる。どうも、そいつの目がいやにぎろ〳〵してゐるんで、何だか怖くなつて、一目さんに逃げ出した譯さ。

浮浪人　もしかすると、そいつ、刑事かもしれないぜ。

その男　俺もさう思つたんだ。まあ、うまく逃げ終せて一安心だ。

浮浪人　で、一體、何を盗んだんだい!

その男　詰らないもんだよ。(懐から指輪を取り出す)これさ。

女　あら、素敵なもんね。

浮浪人　金かい。金なら一寸踏めるな。

その男　金なら大したもんだが、さうぢやありませんよ。

何とかいふ合金で、三つで一兩つて奴さ。

女　まあ、さうなの。でも、本物の金みたいに見えるぢやないの。何日は何でも見かけ倒しね。

浮浪人　何だつてそんな詰らないもの盜んだんだい。やつぱり、生きるといふ嚴粛な事實の前には、人間何でもしないぢやゐられないんだな。

その男　そりやその通りですが、わつしのは少し譯がちがふんでさあ。俺の別れた女といふのは、ひどく指輪の好きな奴でね。――やつぱり食へなくて別れたんですがね。俺は金が出來たら、きつと金の指輪を買つてやるつて約束してゐたんだ。ところが、そいつがどうしても買つてやれなかつた。だもんで、あくどい電燈の光でぎら〳〵してゐる指輪を見た時、つい。ふら〳〵となつちまつたんだ。

女　お前さん、女には優しい人らしいのね。

その男　いや、あまい方かも知れない。だが、俺はどうしてもあいつが忘れられないんだ。髮の毛のちゞれた、頰つぺたの赤い、可愛いゝ奴だつた。

浮浪人　手放しのおのろけかい。

その男　いや、さうかもしれない。今でも夢にまで見る位だからね。それが、約束の指輪をたうとう買つてやれなかつたので、そいつが氣になつて氣になつてならないんだ。いはゞ心の重荷つて奴でね、しよつちゆ俺を苦しめてゐるんだ。

浮浪人　どうもお前さんは、根が素直な、育ちのいゝ人らしいな。だが、今の世の中ぢや、そんな風ぢや、とても暮からうが、でなかつた日にや、そんな風ぢや、とても暮してゆけやしないぜ。だから、お前さんのやうな人間は、自分ぢやその氣でなくても、知らず識らずのうちに惡い方へ引き摺りこまれてゆくんだ。

女　まあ、そんな風に言ふもんぢやないわ。可哀さうに。この人は、今のやうなせち辛い世の中に住んでゆくにや、あんまり優しく出來過ぎてゐるのよ。別れた女のことが、この人の毎日の全部になつてゐるのよ。

その男　いや、俺なんか意氣地がなさ過ぎるんだ。だけど、目さきの利く猾い奴ばかりが、どん〳〵出世してゆく世の中なんだから、俺なんか仕事をしてゆく餘地のないのも、尤もな譯さ。

浮浪人　いや、さう言はれると、俺も一言なしさ。俺だつて仕事にあぶれて、ろく〳〵おまんまさへ喰べられないつて始末だからな。

（暗闇から腕が出て、男の腕をぎゆつと握る。）

刑事　おい、一寸。

その男　な、なにするんだ。

刑事　一寸、一しよに來て貰ひたいんだ。

その男　何の用ですか。人違ひぢやありませんか。

刑事　いや、來れば分る。

その男　わたしは、何もそんな――

刑事　なにを強情張るんだ。貴樣は、さつき露店の指輪を盜んだらう。さあ、一寸來い。

その男　（急におたおた顫へ出して）旦那、どうぞ今度だけは御勘辨を。

浮浪人　ねえ、旦那、今度だけは大目に見てやつて下さい。こいつは決して惡い男ぢやありません。

刑事　（浮浪人をじろじろ見て）お前は何だ。こいつの友達か。

（この邊から、人だかりがして、事件の進行するに從つて、次第に多くなる。）

浮浪人　友達ぢやありませんが、話をきけば、これは可哀さうな男です。つい一寸した出來心で――

刑事　何でもいゝ。君の出る幕ぢやない。

浮浪人　そりやさうですが――

刑事　とにかく、どういふ事情にしろ　盜みは盜みだ。それを摘發するのが、わしの職務だ。――おい、默つて一しよに來ればいゝんだ。

浮浪人　くどいやうですが、盜んだものも大した金目のものぢやないんだし、今度だけは大目に見てやつて下さい。

刑事　おい、いゝ加減にしないか。金目はどうだらうと、盜んだものは盜んだものだ。

群集　どうしたんだ。どうしたんだ。

群集　やけに威張つてるな。

群集　刑事だよ。

群集　刑事か。

群集　盜みをしさうな男でもないぢやないか。

群集　何を盜んだんだ。何を。

會社員らしい男　（刑事に向つて）僕はさつきからこの男の話をきいてゐたんだが、盜みをした心持には大いに汲んでやるべきものがあるやうに思ふんだ。すりや搔つ拂ひの常習犯ならいざ知らず、この男のは、盜まうとして盜んだのではなく、きらきら指輪が光つてゐたから、ついそれが慾しくなつたに過ぎない。だから、決して計畫的になされた惡事ではない。それに幸ひ大した金高のものでもないから、僕が持主に辨償するから、一つ大目に見てやつてくれませんか。かういふ些細なことに、法律的制裁を加へるのは、あまりに苛酷すぎるやうに思へるのだ。

刑事　さういふ見方も尤もかもしれない。併し、かういふ事を言つちや、はなはだ人情味を缺くやうに見えるかも

知れんが、盗みは何處までも盗みで、それを不問に附すといふことは、社會の秩序上、よろしくない事だ、もし犯罪の動機に恕すべきところがあり、又、犯罪が微罪であれば、それは取調の上、說諭放免される譯だ。その間、安心して、この男を僕に委して貰ひたい。たゞ、僕の職責として、犯罪人は犯罪人として拘引しなけりやならないのだ。

浮浪人 （ベンチの上に躍びあがる） 諸君！ 是非諸君に聞いて頂きたい事があるのです。

群集 何だ。何だ。

群集 どうしたんだ。

群集 誰だ、あいつは。

浮浪人 わたくしは、きのふから何一つ食ふだけの金もないので、我ながら自分の情けないのに愛想をつかしてゐる男であります。

群集 哀れつほい事を言ひ出して、寄附でもねだらうつていふ、du手の詐欺ぢやないのか。

浮浪人 如何にせち辛い世の中といへども、わたくしは寄附を強請しようと思つて、諸君に話しかけるのではありません。そも〳〵、わたくしがこの壇上に立つたのは—

—

群集 おい、キ印ぢやねえか。

浮浪人 或は氣狂ひかも知れません。何故なら、わたくしは、現代に於て、良心を傷つけてまでも狡猾に生きようとするだけの勇氣のない、はたはた非富世風な人間たからであります。わたくしは、働くだけの健康な肉體も、働かうとする十分な意志も持つてゐるのである。併し、わたくしには働くだけの仕事がないのである。働く機會が與へられないのである。そのために、この數日間、食ふや食はずの生活をつゞけてゐるのである。貧乏といふものは有難くもないものだが、腹のへつたといふ事は一層苦しいものであります。（みんな、どつと笑ふ） さつきまでは文無しだつたわたくしは、今し方、女車掌君に白銅を一枚めぐまれたのであります。有難いことには、この白銅一枚持つてゐるといふ些細な事實は、わたくしに一杯の飯をくふ事が出來るといふ豫想を與へ、その豫想は又、わたくしの心持を明るくし、元氣づけるのであります。食ふといふ事は、人間の本能であるなら、生きるといふ事は、人間に與へられた特權でなければなりません。

群集 さうだ。さうだ。

女 （浮浪人にパンを差出して） 大急ぎで買つてきたのよ。さあ、召上れ。

浮浪人 さうか。そいつあ有難い。（パンを受取つて、むし

やむしや甘まさうに食ふ）
群集　よう、色男。
群集　うまさうだなあ。
浮浪人　今日は奇蹟的に食物にありつける日である。かうして、多少なりと腹が充ちてくると、元氣づいて來ます。これは、言ふまでもなく、われ／＼の本能が充され、肉體が榮養を吸收するからである。ところで、指輪を盗ん男は、わたくしがパンに飢ゑてゐたやうに、精神的なパンに飢ゑてゐたのであります。即ち、充されざる愛に苦しんでゐたのである。彼自身の告白するところによれば、貧乏故に愛する女と別れたが、戀々たる愛慕の情禁ずる能はず、買ひ與へると約束した指輪を、いまだに與へることの出來ないのを心の重荷として苦しんでゐるのである。そこに於てか、きら／＼と輝く指輪を見た時、憑かれたもの〻やうに、それに手をふれたのであるが、それは恰も、飢ゑたものがパンを求めると同一の現象でなければならない。もし彼がほんとうに盗みをしようとしたのなら、僅か二十錢の指輪に目をくれないで、もつと高價な指輪を盗んだであらうに、その選擇の餘裕のなかつたところに、あまりにも哀切な氣持を見ることが出來るではないか。安つぽい贋造金の指輪も、彼にとつては言はゞ、愛を求める魂の糧であつたのであります。

群集　よう、救世軍！
群集　誰だ、牢に入れる奴は。
群集　黙れ。黙れ。
浮浪人　いかなる犯罪と言へども、それがどんなに小さなものであらうと、決して許さるべきものではありません。併し、この男の盗みは、あまりに人間的で、可憐で、大いに同情すべきところがあると思ふのであります。
群集　さうだ。さうだ。さうだ。
浮浪人　現代のやうな病所缺患の多い時代にあつては、先天的犯罪人でもなく、惡人でもない人間が、心ならずも罪を犯す場合が往々にしてあるのである。成程、犯罪は美はしい人間社會の秩序を破壞するものであるかも知れないが、生きようとする欲望は、人間のつくつた秩序よりも力強いのであります。してみれば、常套的な言ひ方ではあるが、罪を犯したものが惡いのか、罪を犯さしめた社會組織が惡いのか？　この男が、別れた女に對する戀々の情からして、安指輪を盗んで己の果敢ない幻想を慰めようとした氣持は、一面センチメンタルでもあり、女々しくもあらうが、その微罪を責めて、この男の未來を暗くするのは、わたくしの忍びないところであり、恐らくまた、諸君の忍びないところであらうと信じる。もし、この男の罪を問ふならば紳士面して法律の目をくゞ

るより大なる犯罪は、何によつて罰せらるべきでありませうか。現代の社會組織のからくりを巧みに利用して、堂々たる邸宅に坐しながら、多くのものから搾取する類の大なる盗みは、何によつて罰せらるべきでありませうか。

群集　さうだ、さうだ。

群集　ヒヤ、ヒヤ。

（一部の群集は拍手する。）

群集　馬鹿野郎。

群集　よう、マルクス先生。

群集　改造社。

（一部の群集は、冷かしたり罵倒したりする。この兩方が相交ざつて、雜然として騷ぎを起す。）

浮浪人　わたくしは、マルクスの何ものなるかは知りません。併し、冷かしの言葉に、マルクスが引用されるほど、それほどさやうに、マルクスとかレエニンとかいふ人の思想が、流行病のやうに現代に流行してゐるのは、そもそも何を意味してゐるものでありませうか。マルクスが何であらうと、レエニンが何であらうと、少くともそれは、人類を愛し正しく生きようとする熱意であり、よりよき社會をつくらうとする欲求の現はれである。そして、萬人が萬人、それに向つて努力するのは、當然のことではあるまいか。

群集　（學生風な男）よう、トルストイアン。

群集　（同じく）なに、出來損ひの空想社會主義だい。

群集　默れ、默れ。あとを續けさせろ。

浮浪人　どうも愚にもつかぬ勝手な人生觀を並べたてゝ、諸君を煩はして申譯ありません。併し、諸君のうちには必ずやわたくしと同じ考へを抱いてゐられる方が少くあるまいと信じます。ところで、盗みをした男のことですが、幸、此處に會社員らしい方が、盗まれた指輪に對する賠償金を申出てゐられます。ですから、盗まれた人間も損失を負擔しないですむ譯だから、われ／＼一同で、この可哀さうな男の放免を、刑事君に向つて懇願しようではありませんか。

群集　贊成。贊成。

浮浪人　併し、刑事君は、自分の職責上、一度つかまへた犯人を勝手に放免することは、社會的秩序の上からも、職業的良心からしても、出來兼ねるところであらう。刑事君は、自分を甚だ人情味を缺いた人間のやうに言はれますが、その實、わたくしの見るところでは、はなはだ人情味にとんだ人のやうに思へるのである。であるから、刑事君は、この盗みをした男を衆人環視のもとで放免するやうなへまな事をしないで、人知れぬところで、十分

說諭し、將來を誡しめて、放免されるに違ひないと信じるのである。

群集　うまいぞ。うまいぞ。

群集　刑事君、しつかりやつてくれ。よろしく賴むぞ。

女　（群集を押しわけて、浮浪人に近寄る）えらいわ。お前さん、やつぱりえらいのね。あたしの見た目に間違ひはなかつたわ。

浮浪人　やあ、お前はまだゐたのか。お前との話は、まだけりがついてゐなかつたな。

群集　何だ、何だ、その女は。

群集　よう色男。どうした？

浮浪人　今夜は、俺にとつては實に不思議な晩である。その上、俺は一人の女に惚れられたのだ。

群集　よう〱。（囃し立てる）

浮浪人　或は諸君のうちには、この女を御存知の方があるかもしれない。（ひつ〱と淫らな笑をする奴がある）この女は、體を賣ることによつて、暮しを立てゝゐた賤しい女である。併し、現代社會に於て生きるといふ嚴かな事實は、弱い女に心ならずも賤しい職業を強ひる場合がある。であるから、この女に對しても諸君に十分寬大に考へて頂きたいと思ふのであります。ところで、この女はわたしと一しよになつて、地道に眞面目に働きたいと、眞實に申出たのである。わたくしは、その健氣な決心に感動して、これから二人は共々に働いてゆきたいと思ふのである。文なしの貧乏人であるわれ〱二人が、今日から夫婦になる事を諸君の前で披露さして頂きたいのであります。

女　ほんとう、それは。えゝ、お前さん？　まあ、うれしい。

群集　恥かしがらずに、しつかりやれ。しつかり。

浮浪人　世の中は惡と汚れに充ちてゐる。併し、わたしは、世の中を、明るく、樂しく、愉快に考へたい。また、さうしなければならないのである。であるから、われ〱二人は、文なしではあるが、その氣持を資本にして、働いて、働いて、働き通す覺悟である。そして、それでもどうにもならなければ、われ〱は笑つて死ぬだけである。であるから、此處に、二人の手輕な、風變りな、奇妙な結婚式を御披露に及ぶ次第である。――（女に）おい、こつちへ來い。（手を引つぱつて、ベンチの上へ立たせ、二人並んで、ぴよこんとお辭儀をする）

（群集、うれしがつて、拍手し、囃し立てる）

群集の一人　（さきの會社員風な男）諸君、このせち辛い不景氣のどん底の世の中に於て、われ〱は實に愉快な事件に逢着したのである。何だか、世の中が明るくなつ

たやうだ。で、この新婚者の第一歩を祝つて、多少に拘らず寄附して、二人の仕事のもとでの一部にしてやらうぢやないか。

群集　贊成。贊成。

會社員風な男　（帽子を脫いで）　では、いくらでも結構ですから、これへ投げ入れて下さい。

（一同、帽子へそれ〴〵金を投入れる。）

會社員風な男　（それを浮浪人の前に差出して）　さあ、結婚のお祝だ。受取つてくれ給へ。

浮浪人　（躊躇する）

群集　遠慮するな。——取つとけ。——取つとけ。

會社員風な男　みんなの志だ。併し、君が理由なくして金を貰ふのが厭なら、君が愉快な演說をしてくれたお禮だ。君の講演料だと思つて、遠慮なく受取つてくれ給へ。

群集　さうだ、さうだ。——寄席よりは面白かつたぞ。——遠慮するない。

浮浪人　では、有難く頂戴します。

群集の一人　（前へ躍び出して）　君は實に痛快で、氣の利いた男だ。君が失業者であつたのは、要するに、君が仕事にありつく機會がなかつたからだ。——僕がこの男の、いや、この二人の身柄を引受けようう。——（浮浪人に）ねえ君、僕のところへ來て働く氣はないかね。

浮浪人　有難う。仕事ならよろこんでやります。

群集の一人　さうか。ぢや、働いてくれるね。

會社員風な男　僕は實に愉快だ。世の中が面白くなつた。諸君、この二人の前途を祝つて、萬歲を叫ばうぢやないか。

群集　よからう。

群集一同　萬歲。萬歲。萬歲。

浮浪人　（自分の　命の思ひがけない逆轉な感謝し、悦ぶやうに、又社會の悪　汚辱の彼方に、美しい明るい人生の可能性を夢想する詩人の熱情に燃えた瞳のやうに、眼を輝かせながら、みんなに向つて丁寧に挨拶する。女も、處女のやうに羞かみながら、それにならふ）

# 解說

## 伊藤松雄篇

伊藤松雄氏は、明治二十八年一月十三日、長野縣松本市に生れた。けれども、その教育の地は東京であつた。何故なら幼にして上京、東京市富士見小學校に入り、開成中學校を經て、早稻田大學英文科に學んだからである。此小學教育から東京で受けたといふ事實は、作者の傾向を著しく都會的ならしめて居るといふ點で注意に價する。

氏は早くから、恐らくはその早稻田大學在學時代から、當時新劇の上演で名高かつた有樂座の舞臺監督として劇場の實際に携つた。戲曲の執筆に至つては、或はこれも早かつたかも知れない、二十二歳の氏には既に「危急」（一幕）の作がある。伊藤氏は寔に早熟の作家といはねばならない。

その後、氏は國民座、新文藝協會、舞臺協會等に舞臺監督として大いにその演出上の才能を發揮し、新興演劇運動に寄與するところが頗る多かつた。更らに氏は、日本活動寫眞株式會社に文藝顧問として關係すること數次、本邦映畫新興時代の招來にも沒すべからざる偉大なる功績を殘して居る。

然し、天は氏に多方面なる才能と同時に健康を賦與することを惜んだ。かねて病弱であつた氏は、大震災を機として、故鄉に歸つて靜養するの必要を感じ、諏訪湖畔の湿汀莊にその病める身體を橫たへなければならなかつた。けれども、病弱もなほ且つ、氏の劇に對する熱愛と、その若き活動力とを壓へることは出來なかつた。氏は湖畔の水莊にあつても依然として劇作の筆を絕たなかつたばかりでなく、「町の劇場・村の劇場」なる農民鄉土劇運動を起し、自ら「町の劇場」研究所を主宰して、公演を行ふこと六回にも及んだのであつた。

昭和四年四月、病やゝ癒ゆるに及び、湖畔の水莊をあとに、再び出京、居を東大久保四六四に定め、日東蓄音機株式會社の文藝顧問となり、目下氏は旺に新民謠の作に從事し、その作品は頻りにレコード化されて、廣く世に行はれて居る。

著書には、鄉土戲曲集「危急」、映畫劇集「勿忘草」と「三つの魂」、兒童劇集「くしやみ太郎」、飜譯戲曲「カラマゾフ兄弟」、「夜」、大衆文藝作品「山窩流血傳」、「女賊傳」等がある。

また、演出者としての伊藤氏の主なる仕事は、新文藝協會の「法難」、舞臺協會の「死と其前後」「出家とその弟子」「青い鳥」、「父の心配」「思ひ出」「カラマゾフ兄弟」、町の劇場の「木賊の秋」「街の子」「仇討物語」等がある。

なほ映畫作品には、「運命の影」「勿忘草」「三つの魂」「曉の死」がある。

本年、再度上京したる氏は既に官軍赤報隊(三幕)、恩讐追分節(二幕)、の二作を發表して居る位であるから、その健康の恢復と共に、大いなる戯曲的活動に入ることを期待し得るであらうと思ふ。

本集に採錄した六篇だけに就いて見ても頷かれる通り、伊藤氏の戯曲の取材の範圍は極めて多方面である。此事實は作者の空想力が如何に豐富であるかを語つて居るものといはなければならない。また、どの作にも覗はれる舞臺技巧の手堅さも、劇場から生れた戯曲家としての一特色として見遁し難いものである。

「月下香。」昭和二年七月作。雄を欲する雌犬、子供に表はれた性的感覺の享樂、さういふものが、側から女主人公珠子の心理を說明して居る技巧が少し眼につきすぎる憾みがある。失戀の苦惱から生き拔けた男が、昔の戀人に歸らぬところに此戯曲の主題がある。

「霧。」大正十二年十月作。小傳に依ると西洋へ行つた經驗のないらしい作者に此作のあるといふことが、作者の空想力を語つて居る。異國情調を取り入れた。味の深いロマンチックな作品。

「曉の死。」大正十三年九月作。巧みなメロドラマ。上演したら面白く見物出來るものに違ひない。

「甲斐の德本。」昭和二年七月作、同年十一月、都座にて「町の劇場」初演。作者の故鄕の一偉人を拉し來つて戯曲化したもの。作者が情熱をもつて書いて居ることが感じられる。これを讀むと、どの方面から入つても、深く掘つて行けば結局悟入出來るものだといふことがしみ〴〵感じられる。最後の德本の臺詞「どうぢやな、芋粥の味……」といふ一語に此一幕の主題が盛られて居る。

「白粉の花。」大正十四年十月作。元來河合武雄一座のために執筆されたものである。お仙が河合の役であることいふまでもあるまい。自覺なき玩具、破はされてはじめて自分が玩具であつたことを自覺する玩具――。これもメロドラマの一つであるが、後藤がお仙を殺すといふ常套的結末になつて居ないところに作者の見識が表はれて居る。

「想思草。」大正十二年十一月作。大正十四年一月、演伎座にて、新國劇澤田正二郎、久松喜世子等初演。その後大正十三年四月の作にかゝる「想思草後日譚」と合せて、各所に上演せられたため、伊藤氏のものでは或は最も有名な

作品となつて居るかも知れない。大正十四年九月、河合武雄もまた松竹座にこれを上演して居る。異國に身も魂も頽れ果てた娼婦おきよの爛れた胸にふと花咲いた想思草、その珍らしい植民地の雰圍氣、可憐な愛すべき作品である。

## 永田衡吉篇

永田衡吉氏は、明治二十六年十一月、わが社會主義運動史上から忘れ去ることの出來ない紀州新宮の地に生れた。新宮中學校、札幌中學校を經て東京開成中學校を卒業、直ちに早稻田大學英文科に入學、大正六年同科を卒業した。けれども好學の氏はこれに滿足せず更らに同年七月帝國大學哲學科に入つて美學及美術史を三年間修めた。

氏が劇作の道に志したのは旣に早稻田大學在學時代からであつたが、大正七年、大杉榮、大石七分、奥榮一等の諸氏と雜誌「民衆の藝術」を創刊するに及んで、堅く劇作に依つて立たうといふ決心をなすに至つた。ところが其頃丁度警視廳に新劇脚本の檢閲官が設置されることになつたので、氏はその任に就き旺に芝居見物に歩いたものであつた。けれども、素より氏の如き人が官吏としての生活に長く堪へられる筈もなく、十ケ月にして檢閲官の職を退いた。

大正十年、處女作「寂光の跡」を「劇と評論」誌上に發表したが、此作は同年八月、大阪末廣座の試演臺本として、中村紫香、尾上喜久太郎等に依つて上演せられた。

大正十四年、中村吉藏氏主宰の下に「演劇研究」の發刊せらるゝに際し、之に加はつた。

處女作以來今日まで戲曲の作旣に二十篇に達し、そのうち「平家の人々」「秋風落莫」「信州義民錄」「清河八郎」等は何れも東京或は大阪の大劇場に上演せられ、氏の劇壇に於ける位置を大いに高めた。特に昭和三年中央公論に發表され、同年九月直ちに菊五郎、猿之助に依つて歌舞伎座に上演せられた「信州義民錄」は劇壇に喧傳されたものであつた。

永田氏の作品には概して長篇物が多い。氏が研究的であり、構成的な作家であることは此一事からでも推斷される。氏は思附で作品をつくる種類の作家ではない。それは本集中の三篇の戲曲を見ても直ちに諒解される事實である。此作風の原因となつて居る作者の氣質が人生觀照の方面に現はれると、當然正面から人生を直視する態度を取らせる。氏は常に、その作品に於て、がつしりと正面から人生と取組まうとしてゐる。

「厩戸皇子。」　大正十二年七月「中央公論」發表。厩戸皇子を中心として、奈良朝時代の文化史圖のうちに古代思想

と佛敎思想との巴渦を描いたものである。氏は早く早稻田大學在學時代から此劇の材料を調べて居たのであつて、大正九年個人雜誌「稿本」を出した時には、此戲曲の序幕を同誌上に發表して居る。氏は此作が因緣となつて今でもよく奈良に遊ぶといふ位で、作者に取つては深い愛着のある作品である。

「平維盛。」大正十三年七月「中央公論」發表。此作には、もと「煩惱無安」といふ題名がつけてあつた。假りに史上の維盛といふ人物を拉し來たつて、そのうちに人間の煩惱の執拗さを生かした作意と見て大きな誤はないであらう。悲喜劇といふとも素より主題は悲劇的であるが、その運びに喜劇的要素が取り入れられて居るのである。作者は俳優守田勘彌の可撓性を念頭に置いて書いたものだとのことである。

「秋風落莫。」昭和三年一月「太陽」發表、同年四月、市村座にて澤田正二郎一座上演。此戲曲はまた「源義朝」の題名をもつて呼ばれることがある。性格劇と境遇劇との十字路に史劇を打ち立てようとする大抱負のもとに作られた作品である。讀み終つた心に義朝の苦しい、同時に寂しい心持がいつまでも殘る力強い作品、蓋し永田氏作品中の傑れたものゝ一つであらう。

# 河野義博篇

河野義博氏は、明治二十三年九月八日、山梨縣東山梨郡加納岩村に生れた。氏は生後直ちに父母に別れ、伯父夫妻に養育せられたが、其家に子なき故をもつて其儘養嗣子となつた。

郷里の小學校より日川中學を經て早稻田大學英文科に入り、大正四年七月同科を卒業した。卒業後、直ちに三省堂編輯局に職を奉じ一年程此處に勤務したが、此間處女作にして出世作たる「サラセンの王宮」を發表して大いに文壇に認められた。

三省堂を退いた氏は、抱月、須磨子歿後、新藝術座の組織せらるゝと共にその舞臺監督となり、「カルメン」「生ける屍」「剃刀」等を有樂座に上演し、續いて京阪九州北海道に巡業した。

大正八年十二月、淺草、常盤座に於ける興行を最後として新藝術座は解散した。そして氏はその翌年故鄕に歸り、農蠶の業にいそしむ傍ら、意の赴くに從つて戲曲その他の述作に從事してゐる。

氏も亦永田衡吉氏等と等しく「演劇研究」の同人であつ

て、その構成的な作風に南氏はやゝ相通ずるものを持つて居るやうに思はれる。たゞ「故郷」に表はれたやうな力強い土への愛着に至つては氏の著しい特色といはねばならない。

河野氏には、本集採錄の二戲曲のほか、「關白秀次」「醫師の心」「復」「平重盛」「還化」「醫者と行者」「木食仙人」「高村隊長」の戲曲があり、ゴルスワージ、イブセン等の戲曲飜譯、演劇に關する多くの評論等の著述があるほか、近代演劇史論の著書がある。

「故郷。」大正十四年十二月「演劇研究」發表。大正十五年五月、寳塚國民座旗上興行として上演。作者が東京生活を切りあげて故郷へ歸つてから經驗した世界である。氏の故郷の自然と人と生活とが渾然と一つになつて詩化されて居る點、見事な出來榮である。此作は近頃のプロレタリア文學の好んで材料とする小作爭議を題材に取りながら、階級爭鬪よりはむしろ土への愛着といふものをテーマとして居る。河野氏は大正五年二月、早稻田文學誌上に鄕土文藝論の一篇を發表して文壇に初見參したのであつたが、その鄕土愛が此作品で舞臺上に具體的な形を取つて表現された。此意味に於て「故郷」一篇は作者に取つては記念すべき作品であるに違ひない。

「サラセンの王宮。」處女作。大正六年三月「中央公論」發表。學窓を出て間のない作者の若い心が、當時の新浪漫主義或は異國情調といつたものに刺戟されて出來た作品である。ホフマンスタールやワイルドからの影響が多分に覗はれるが、それにしても年齢三十歳に滿たざる氏がこれだけの大作を構成したといふことは驚異に價する。原名は「ブルムーラ」であつたのだが、中央公論の瀧田樗蔭氏の發案で「サラセンの王宮」と改題したものだといふことである。當時の戲曲界には白樺風の卓上戲曲（レーゼドラマ）が旺に流行し、更らに一方にはイプセン風な堅苦しい戲曲が信仰されて居たので、此作の如くその何れにもつかず、一種沙翁劇風な格を備へた作品が、文壇に一脈淸新な氣を吹き送つたことは爭はれない。中村吉藏氏は讀賣新聞紙上で、江口渙氏は帝國文學誌上で、共に此作品に多大の讃辭を惜しまなかつた。

## 田中總一郎篇

田中總一郎氏は明治三十二年十一月の生れである。第三高等學校を卒業し、東京帝國大學文學部美學科に學んだ。第一次「劇と評論」の編輯に從事したが、大震災と共に同誌が廢刊されると同時に京都に去つて、演劇、活動寫眞

等の實際に携つた。戯曲集「午前八時」のほかに多くの戯曲、翻譯、大衆文藝等の著作がある。

「戰塵。」大正十五年四月「演劇映畫」發表。運の悪い、不遇な人間がだん／＼拗くれて、冷くなつて行つて、温い心をまるでなくして了ふ。それが最後へ行つて強い温な友情のためにその失つた温い心を取り戻す。さういふ心理過程を戰國時代の武士生活の中で活かしたのが面白い。特に右京が、武士といふ職業を全然經濟的見地からばかり見て、戰場を露骨に稼ぎ場所と思つて居るのなど、妙に意地の悪い、皮肉な作者の味が出て居る。此味は、此作者の特色の一つらしく、次の「團欒」の中にも表はれて居る。

「團欒。」日本の家族制度に對する一種の批評とも見られる。長男の負はねばならぬ重荷、作者はその不合理を指摘して居る。樂しい集りの意味に用ひられる團欒といふ表題をつけて、その裏にある苦がさを描き出して居るところに作者の皮肉がある。

## 能島武文篇

能島武文氏は明治三十一年五月十五日、大阪市北區眞砂町に生れた。父は武夫、氏はその三男である。長兄は早く病死し、次兄は軍人として健在のよしである。

能島家は能島流水軍術を以て世々尾張藩に仕へて居たところから、氏は海軍々人にされる筈で、早くから能島流水泳術などを習得せしめられたが、近視眼のために此計畫は中止され、戯曲家能島武文氏が生れることになつたのである。

父君が官吏であつた關係で、氏の學校教育は處々に於てなされたのであるが、卒業した小學校は大阪府堺市立市尋常小學校であつた。次いで府立堺小學校を經て早稻田大學英文科に學んだ。けれども、卒業論文まで提出しながら、遂に卒業するに至らずしてやめた。

氏は早く社會の人となつた。大正十一年一月、まだ早稻田大學在學時代から、市村座脚本部に入つたのがその第一歩であつた。そして大震災まで二年近い間、同座脚本部員として劇の實際を研究した。また、此間財團法人日本青年館囑托として、雜誌「青年」の編輯に從事したこともあつた。氏が故鈴木泉三郎氏と共に第一次「劇と評論」を創刊したのも、市村座に入つたのと同年であつて、此時代は「秋の心」（一幕）を同誌創刊號に載せて、山本有三、菊池寛兩氏の認むるところとなつた。尤も處女作といふべきものはこれよりさき、大正八年四月、氏が二十二歳の時に三田文學に發表された。これは小島政二郎氏の推薦に依つた「う

たかた」（一幕）である。「秋の心」に次いで氏は「波紋」（四幕）を「劇と評論」誌上に發表したが、これが恐らく氏の最も長幕物であらうと思ふ。

大正十三年一月、第一次「演劇新潮」の發刊と同時に氏は山本有三氏の下に北尾龜男氏と同誌の編輯を擔當して、大いにその手腕を發揮し、同時に劇評その他の劇論等を同誌に執筆した。翌年同誌の廢刊後は暫く閑地に就いたが、昭和三年に至つて、第一書房の依賴を受けて「近代劇全集」の編輯に從事し、昭和三年二月まで此仕事に從事した。

第一書房を退いてからは、川上樂劇團に招かれてその主事となり、現在は團生の敎育、經營、演出等のために大いに活動して居る。

能島氏は、特に山本有三氏との交友深く、劇作上その他の點に於て常に同氏の指導を受けて居る。

「裸になる一幕。」 大正十四年六月、「演劇新潮」發表。長く遠くへ出て働いて居た息子が歸つて來るといふので、その間に少しは出世をした父親が、その息子にまで體裁を飾らうとして居たのが、偶然のことから裸のまゝ會ふ仕儀になつて了ふ。作者は形の上で裸になつたことが、同時に心持も裸にさせる機會になつたといふところに覘を置いて書いたらしい。

「詩人の靴。」 大正十五年七月、「新潮」發表。輕いユーモアのうちに哀切な氣持が綯ひまぜられて居る。よい仕事をしようと思ひながらその機會を摑むことの出來ない靴屋の焦躁に作者は多大の同情を寄せて居る。新傾向の作品の一つ。岸田國士氏の「紙風船」あたりの影響がかなりある、

「東京小景。」 大正十三年十一月、「新潮」發表。作者の佳作の一つである。六つの斷景のうちに大正十三年の東京を浮き上らせようといふ作者の意企はかなり成功して居る。但し描き出された場景が、中產階級以下の生活者の世界に限られて居る點が、作意に添はぬかも知れない。六場のうち第一場は特に傑れて居る。非常に味の細かい作品である。

「姉の花嫁。」 昭和二年一月、「演劇新潮」發表。母と梅子と信次郎と三人三樣の利己心が互ひに衝突するところに悲劇が生れて居る。姉の梅子が弟信次郎に嫁を貰つて自分が樂をしようと思つたのは間違だつた。

「寂寥の國。」 昭和三年七月、「太陽」發表。慘めな結婚生活から遁れて歸つて來れば、自分が二人の叔父の爭ひの種になる、最初から自分と戀して居た弟の方の叔父と心中すれば自分だけ生き殘るやうな破目になる、さういふ運命の下に生きる女主人公が、人生は「寂寥の國」だと觀ずるのが一篇の主題になつて居る。

# 北村小松篇

北村小松氏は東北青森縣八戸町の產である。『現代劇作家人名錄』によれば、明治三十四年一月四日生れ、八戸中學を出て慶大英文科に入學、卒業後蒲田松竹キネマ脚本部に籍を置き、現時に至る。と書いてある。事實、北村小松の名は、劇作家としてよりは、シナリオライターとしてより一層ポピュラアである。大正八年春、東京日日新聞社で募集した映畫臺本の當選者として北村小松氏は始めて世に出たのであつた。そして、シナリオ・ライターとしての氏の活動は引續き實に眼覺しかつた。

然し、氏の眞價が文壇的に確立したのは勿論その戯曲的進出以後のことである。北村小松氏の處女作戯曲は、大正十年『三田文學』所載の『古巣』である。當時彼は未だ塾の文科生であつた。そして、この作品と前後して、『借りた部屋』三幕が、帝國劇場創立十周年記念脚本募集中の三幕物一篇として入選の榮冠を擔つた。北村小松も、その頃劇作に志す若人の例に洩れず、その第一期の作品『古巣』『借りた部屋』は、チエエホフ、シユニツツラアの影響に負ふところ甚大である。そして、如何に彼がチエエホフに心酔しつゝ鞭撻を受けたかは、後年自ら物語つてゐる。『三田文學選集』にをさめられてある『嫁』一篇も、この種の延長と見るべき短篇である。

しかし、北村小松をして天下に名をなさしめた作品は、大正十五年六月『劇と評論』再刊第一號を飾つた『ステツセル』である。このことを語る前、自分は、彼の轉換に就いて解說しなければならない。その當時、歐洲大戰後の社會的均衡を破つた切實な人間性の現れとして、表現主義戯曲の蜂起が、全世界の劇壇を風靡した。かうした時潮の動きとして、新らしき演劇の實驗室、築地小劇場の創設を持つ前、吾々の若い劇壇にも、山雨を呼ぶたゞならぬ雲行が、眞理を求める焦慮と義憤の中に覗はれた。時代の尖端を直視する彼北村小松も、かゝる開かれた扉の外氣に對して、決して盲目ではなかつた。その當時、彼は、若くして愛の結晶たる家庭を持ち、故山よりの補助をたち切り、生存競爭の眞只中で、荒浪のしぶきに面を打たれてゐた。その上、寒天青森の兵舍に一年の軍隊生活を宣告される身となつた。決然、チエエホフを投げ捨て、ユーヂン、オニイルの讀破に勉めたのはこの頃である。ついでに言ふならば、彼の卒業論文は『ユーヂン、オニイルの研究』であつた。そして、この一文は、後日第一次『演劇新潮』の現代劇作家評傳の中に省略して發表された。なほ、『三田文學』へ『カーヂフをさして東へ』を譯出したこともある。かくして、

彼の物の見方、興味の持ち方が、過去の默想、情趣的徘徊を清算して生活的に進出する時が來た。それが對外的な影響である以上に、内在的な破殻の躍進と見なければならない。かうして生るべくして力作『ステッセル』が世に出た譯である。『戯曲時代』の巻末に載つた『殉職』、『三田文學』の『一九一四年頃の覗き繪』、『文藝春秋』に出た『墜落』等『ステッセル』のグループに入るべき反動的色彩の濃厚な、彼の第二期の作品である。

以上の第二期に屬する作品に於て、北村小松は、アンテ・ミリタリズムを正面切つて强調してゐる。が、彼は、灼熱的鬪志をもつて軍國主義の否なるを摘發し、積年の罪根消滅に復仇の喊聲を揚げんとする實行戰線上の鬪士ではないのである。彼の戯曲家としての眼が、過渡期の資本主義文明爛熟の反影をば、この頃の社會現象に求めて、彼一流のフランクネスを持つた正義感から批判のメスを下して居るに過ぎない。であるから、その作品は、辛辣な筆法を弄してゐながら峻嚴な暴露文學となり得ない。彼は、何處までも仇役には廻れない善意の批判家であるのだ。かくして熱烈な苦さをもつて時の流に棹した轉換期の作品以後、一種の諷刺喜劇に彼の鬼才を閃めかし初めたのも、決して故ない譯ではない。その先頭をなす作品は、『劇と評論』に出た『Neccessitus/ vis, Libertus』である。『セント、ヘレナへ行つたボニー』である。そして、問題の『演劇新潮』所載の『猿から貰つた柿の種』である。この皮肉な警句澤山の扮色されたアイロニカル、コメデーが、近代的グロテスクを變する北村小松をして、假面劇への進展を爲さしめた。即ち『剪燈新話』より題材を借りた『妖怪變化と馮大異』『令狐生冥夢錄』の二篇がそれである。彼の筆は、何處までも明るく、何處までも新鮮で、しかも自由奔放に驅馳されるのだ。舞臺を知らずして戯曲が書けない。かうした過られたる三一致主義の舞臺常識が、一つの因習として打破される時が來た。そして彼北村小松の名も、革進戯曲時代のスタイリストとして吾が戯曲史に記錄さるべきである。

戯曲の色、と言つたならば失笑を買ふかも知れない。即ち、舞臺の色である。彼の戯曲は甚だしく色彩的である。前述の讀んで秋晴れの空を感じ、迫り來る暮色を覺ゆる。自由な明るさに次いで舞臺の色彩は、北村小松の第二の特點である。彼の居を訪へば、その玄關の壁に、郊外風景の一額面が掛かつてゐる。勿論、本人の作である。なほ、驚くことは、玄關の天井に無數の模型飛行機がブラ下つてゐることだ。更に、上り口二疊間にスタンド附きのヴヰクターが威風堂々と据ゑつけられてあることだ。彼は、今春、素人飛行玩具競技會で二等賞を得て、書齋に銀製カップを飾り、蓄音器には、北村小松新案の自製特許品である。かく

メカニツク・コンストラクションに叡智の才を有することは、彼の第三の特質として掲げなければならない。その戯曲に立體的建築美を有するのは、劇作家北村小松の先天的賜物のしからしむるところである。それに時代は、リズムとテンポのスピイド化に向つて進んで來た。キネマとヂヤツズとレビユウの靈感に連れ、單的な社會様式の機構の浸潤を受けて、戯曲の中に映畫生活の踏襲、即ち、場面轉換、構成派舞臺装置が、一つの流行となるに到つた。シナリオ・ライターとし、新時代の帝都行進曲を、近代感覺で體驗してゐる北村小松が、昭和世相のカット・パックをその戯曲の中に適用する時が來た。かくして創作されたのが『人物のゐる街の風景』である。『提琴彈きと喇叭吹き』である。『文藝春秋』の『活動狂時代』、『新潮』の『崇高な繪』である。そして、『夜の七場』である。近作としては『紳士淑女狐踏曲』と『舞臺戯曲』創刊號『市井哲學』を掲げなければなるまい。これ等は、北村小松創作戯曲の第三期のグルウプに編入して、『古巣』『ステツセル』と分類さるべきものである。

今にして思へば近い昔に入つた感がある、震災直後『演劇新潮』で、戯曲時代來ると天下に向つてとなへたことがあつた。光彩陸離、その當時新進作家の榮光を一身に集めて立つた人に岸田國士氏があつた。その後、華々しい進出をなした若い戯曲家を求めるならば、先づ、わが北村小松に指を屈しなければなるまい。彼の作品を初めて舞臺に紹介したのは築地小劇場であつた。坪内博士の、『役の行者』武者小路實篤氏の『愛慾』、中村吉藏氏の『大鹽平八郎』につぐ創作戯曲の臺本として、彼の『人物のゐる街の風景』が選ばれた譯である。吾が國劇文壇に於ける三大家の後を受けて、名もなき一介の若い演劇青年の近作が、光輝ある脚光を浴びると言ふだけに、彼の榮譽も絶大であつた。また後進を開發して斯界に寄與せんため、この英斷を世に問うた小山内先生の熱意と厚志にも意を止めなければなるまい。續いて『猿から貰つた柿の種』が、當局の忌憚に觸れるところがあるとて、省略改題の上、築地の舞臺に出た。この二作が導火線となり、『借りた部屋』『治療室』が近代劇場、『妖怪變化と馮大異』が心座、『活動狂時代』が帝劇女優劇と寶塚國民座、『野球行進曲』が岡田嘉子竹内良一の公園劇場、『質屋と花嫁と紳士』が築地小劇場の淺草出張公演と國民座、『紳士淑女狐踏曲』が新派の若手連と岡田竹内一座等でそれ〲上演されるに至つた。それどころか、何時とはなしに明治座の中村吉右衛門、中村福助一座に『九條武子夫人』なる舞臺臺本を書きおろしてゐる。

彼の第一戯曲集『猿から貰つた柿の種』の序文の中で、恩師小山内先生は、かういふ言葉を送つてゐる。

——小松君は今歩いてゐる。——或は躍つてゐる。——或は走つてゐる。しかし、小松君の足の下には絶えず踏み堅められた土がある。小松君は踏み堅めつゝ歩き、踏み堅めつゝ躍り、踏み堅めつゝ走つてゐる人である。そして、その土は『現代』そのものである。『現代』の本質である。決して『現代』の表皮ではない。決して『現代』の砂礫でもなければ『現代』の塵埃でもない。(中略)小松君の前途は長い。そして、その前途には洋々たる太陽の光がある。と。彼の前途は本當に長い。洋々たる太陽を層一層輝すよう、自分は訴へて止まないものである。(此項執筆者、大江良太郎)

# 北村壽夫篇

北村壽夫氏、本名は壽雄、明治二十八年一月八日、東京市麴町區中六番町に生れた。早稻田大學英文科中途退學、大正十三年處女作戲曲「幻の部屋」を改造社より上梓以來、多數の劇作がある。就中、昭和三年に「騎馬哲學」を發表し、次いで同年十二月これが築地小劇場に上演せらるゝに及んで氏の聲價は大いに擧がつた。氏の活動の概況を傳へるためにその著作及上演年表を左に揭げるが、氏にはこの他にも數百篇の童話の創作がある。

## 著作年表

大正十三年——幻の部屋(十景)、[illegible](四幕)(未發表)。

大正十四年——燈火(一幕)、ありふれた喜劇(二幕)勝と負(一幕)。

大正十五年——四年間(四幕)、凡人(三幕)。

昭和二年——海から來た男(三幕)、當世氣質(三幕)、飛鳥の處女(二幕)、永遠の話題(二幕)。

昭和三年——騎馬哲學(六幕)、ワーテルロー(三幕)。

昭和四年——怪しい貨物船(三幕)。

(以上、主なる作品のみ記す)

## 上演年表

○ありふれた喜劇(二幕)。大正十四年十二月、近代劇場所演。

○四年間(四幕)。大正十五年十月、近代劇場所演。昭和二年七月、大阪七月座所演。

○勝と負(一幕)。昭和二年十一月、於松竹座、伊井一座所演。

○當世氣質(三幕)。昭和二年六月、松竹蒲田撮影所撮影。同年八月、同部俳優により東京放送局放送。

○騎馬哲學(六幕)。昭和三年十二月、築地小劇場所演。

○飛鳥の處女(二幕)。昭和四年四月、大阪放送局より

桃源座放送。

〇永遠の請願(一幕)。昭和四年九月、桃源座所演。

「駙馬哲學。」氏を最も有名ならしめた作品、氏の作品中の作品である。思はず讀者或は觀客を微笑し哄笑させるやうなユーモアが隨處に散見するあたり、作者の才氣が遺憾なく表はされて居る。「駙馬哲學」とは、此資本主義社會に於ける處世術、成功の祕訣の謂である。作者は此作に於て、現代社會の裏へまはつて、其處から所謂暴露戰術を試みて居る。此作が築地小劇場に依つて上演せられた時には偉大なセンセーションを捲き起した。

## 鈴木彥次郎篇

鈴木彥次郎氏は、明治三十一年十二月、東京市深川區島田町に生れた。父君の歸鄉に從つて岩手縣盛岡市に轉住したのは、氏が六歲の時であつた。其地で小學教育を終り、盛岡中學を卒業し、大正六年上京して、第一高等學校文科へ入學した。大正九年東京帝國大學國文科に進み、十三年三月卒業した。同年暮一年志願兵として入營、翌十四年十一月、小田うめ氏と結婚、次いで十五年九月長女紀久子を儲けた。

鈴木氏の文學的活動は早かつた。高等學校に入學と同時に同級生たる川端康成、石濱金作、酒井眞人等諸氏と相知り、更らに三年級に進むに及んで今東光氏と交はり、大正十年には既にこれ等四氏と相計つて第六次「新思潮」を繼承して旺に小說を發表して居た。

けれども、氏の志は元來小說に非ずして劇作に深かつた。鈴木氏の劇に對する愛好心は既に中學時代からのもので、高等學校時代には劇作家たらんとの希望を強く持つて居たのであるが、「新思潮」時代には機未だ熟せず、氏の戲曲が生れなかつたのである。「文藝春秋」の發刊さるゝや、氏はその同人となつたが、依然として戲曲の作意動かず、氏は焦躁の日を送つて居た。

大學卒業の年、即ち大正十三年、氏は初めて多年の志を達成して、處女戲曲「マウント・ヴーノンの晝」を「文藝春秋」三月號に發表することが出來た。この作は大いに文壇に迎へられ、これに刺戟されて氏の戲曲の創作慾は勃然として起つた。

同年秋、「文藝春秋」を去つて同志數名と「文藝時代」を起こし、大いに戲曲及小說を創作し、その文壇に於ける位置を大いに確立した。次いで昭和二年秋、心座演出部に入つて演劇の實際に携つたが、翌年春、一身上の都合に依つて同座を退いた。

爾來不幸にして、氏は健康思はしからざるものあり、暫くその劇作の筆を絶つて居るが、近來、健康も次第に恢復しつゝあるとのことであるから、再び氏の才筆に成る戲曲を見ることの出來る日も遠くあるまいと思ふ。

鈴木氏には、本集に採錄せるものゝほか、「秋の書室」（一幕）、「滿潮の始め」（一幕）、「まだらたび」（二景）、「空氣は自由である」（一幕）、「狹布里遺聞」（四幕）、「高原幻想曲」（三景）等がある。このうち、「狹布里遺聞」は昭和二年九月、新橋演舞場で、心座に依つて、「まだらたび」、及本集に收められた「蛇」、「犬爭狐騷動」、「マウント・ヴァーノンの書」等は各所の小劇團に於て上演されたことがある。

「蛇。」 大正十五年一月、「文藝時代」發表。喜劇の底に凄い淋しさを湛へた作品。蛇嫌ひな作者の實感が作中の人物を借りてそのまゝ生かされて居るのも面白い。

「犬爭狐騷動。」 大正十五年八月、「文藝時代」發表。作者の機智の最もよく現れた作品。狐を檻に入れてさつさと歸つて行く香具師の蔭から、作者が、どんなものだい――と嘯いて居る顏が覗いて居る。愛すべき喜劇である。

「エリザベスの指輪。」 大正十五年七月、「新小說」發表。史實を調べながら史實に縛られずに自由に書いてある。權力は形の上で人間を縛つても心を縛ることは出來ない。ノッチンガム伯爵夫人の女王への復讐の深刻さ、彈ねあがる人間性の強さ、この作者の最も優れた作品の一つである。發表の當時も好評を博したもので、好個な小劇場向きの作品。

「西南舉兵錄。」 大正十五年十月、「新小說」發表。編輯者から特に西鄉に關するものといふ註文を受けて執筆せられたもの。西鄉の舉兵に至る餘儀ない氣持が浮彫になつて居る。上演せられたならば舞臺上に感激的な場景を展開するに相違ない。發表の當時は次の樣な作者の後記がついて居た。

この作、もとより史實に反する所多し。されど、勝田、川崎、陸軍編纂部、藤井、岡本、下中、伊藤、山路、加治木、、田中、櫻庭諸氏の著作に教示せらるゝ所多し。「西鄉隆盛傳」、「西鄉南洲」、「西南戰爭史」、「南洲逸話」、「西南戰役史」、「明治維新史」、「西南集」、「征西軍記」、「西鄉隆盛」、「薩南血淚史」、「大西鄉祕史」これなり、記して謝意を表す。

この後記に依つても作者の周到な用意の程が覗はれる。

「贋。」 大正十四年一月、「文藝春秋」發表。作者は入營の間際に蒼く暗鬱な氣持になつた。でそれを反撥するためにぐつと明るい喜劇をと思つて執筆されたものが此作品であつたといふ。第一に地下室から街路上の足が見えるといふ情景に興趣を覺え、ついで一篇のプロットが出來たのださ

うである。鬚を切られたジヤンが閉口たれないで、すぐメリイの考へに賛成するあたりに特に作者の作意が表はれて居るやうに思ふ。

「マウント・ヴァーノンの鐘。」大正十三年三月、「文藝春秋」發表。作者の處女戯曲、「文藝春秋」最初の戯曲號に載つたもので、當時芥川龍之介、その他の人々から賞讃せられた作品である。出來るだけお芝居的でない材料を、快朗性を基調として書いたものだと作者が語つて居る。上品な靜ないゝ小品である。

## 池谷信三郎篇

池谷信三郎氏は、明治三十三年十月十五日、東京市京橋區舟松町に生れた。曉星小學校、東京府立第一中學校、第一高等學校等を經て東京帝國大學に入學したが、間もなく退いてヨーロツパに渡り、獨逸、伯林大學に入つてその法科に籍を置き經濟學を修めた。

歸朝後間もなく、大正十四年、時事新報の懸賞募集に應じて長篇小說「望鄕」を投じて選に入り、忽ち文壇の認むるところとなり、爾來旺に小說戯曲の創作を發表し、既に左記の數著がある。

「望鄕」、「橋・おらんだ人形」（短篇・戯曲集）、「一週間」（リベディンスキー原作）、「池谷信三郎集」（新進傑作全集）

池谷氏は温いふつくりしたセンチメントと華かな才筆とを持つた作家である。吾人は、氏の作品から思想的若しくは哲學的な指示を期待することは出來ないが、柔しい同情にみちた眼で、ぢつと人生を眺めて居る詩人の姿を探し出すことが出來る。

「三月三十二日。」大正十四年八月作。大戰後の獨逸の國情、當時に於ける在獨日本留學生の生活などを覗ふことが出來るといふ事實的興味もさることながら、登場人物三人の何れの氣持にも作者の同情が十分に行き亙つて居る點を見遁してはならぬ。强ひて言へば、明るい淋しさともいふべき全篇を貫く快い甘さ、これは氏の持味である。原作ではロツテが眞實にバルコンから飛び降りて了ふことになつて居るのを、作者は大正十五年二月になつて、本集採錄の通りに書きあらためて居る。これで「四月馬鹿（エープリル・フール）」を利かせた表題の意味もよく生きるし、結末が大變に明るくなつて居る。然し、作者はとにかく最初はロツテを眞實に飛び下りさせずには居られない位であつたのだから、讀者は惡戯の蔭にある眞劍さを何處までも見遁さないやうに注意しなければならぬ。此作品は、心座（河原崎長十郎、村瀨幸子、高橋豐子）に依つて上演され、更らに新劇協會（伊志井寛、

伊澤蘭奢、花柳はるみ）に依つて上演された。

「獨り。」 大正十五年七月作。作者得意の外國に題材を取つた作品の一つ。思想に依つてどうすることも出來ない民族の血、戀愛さへもこれを越えることが出來ない悲劇、この作者のものとしては思想的色彩の強い戯曲である。

「踊りを待つ人々。」 大正十五年三月作。新しい手法の作品。冒頭にある作者の備考は、演出者への注意になるばかりでなく、讀者へのよき解說ともなるものであるから、その意味で熟讀を要すると思ふ。

「歸つて來た噂。」 昭和二年三月作。表題は、噂といふものが足を生やして家へ歸つて來たといふやうな洒落れた意味である。離れて居る夫婦が、噂だ〳〵と思ひながらたうとう互ひに信じられなくなる氣持が面白い。その噂から悲劇を生まずに喜劇を生んだところに作者の聰明さも新しさもある。

「おらんだ人形。」 大正十五年十月作。男女の間の氣持の細かい解剖。細かい味の作品で大まかに解說するといふことはちよつと難かしい。

# 北村喜八篇

北村喜八氏は、明治三十一年、石川縣に生れた。金澤第四高等學校を經て、大正十三年東京帝國大學英文科を卒業、直ちに築地小劇場文藝部に入り、海外戯曲の飜譯、上演等に從事した。小山內薰歿後同劇場が分裂するや、氏は青山杉作氏等と所謂殘留組に殘つて、依然として築地小劇場のために全力を盡して居る。

評論「表現主義の戯曲」のほか、「朝から夜中まで」、「獨逸男ヒンケマン」「長い歸りの航路」、「蟲の生活」、「ジヤン・ダーク」等多くの飜譯戯曲の著がある。

北村氏は、また早くから戯曲の創作に志し、その大學時代に於て本集に採錄した「死を守る三人」（一幕）を作つて居る。

「死を守る三人。」 大正十年五月作。帝大劇研究會臺本として書かれたもの。岡部とA子とは自分等の幸福のために藤岡を思切つて犧牲にしようと思つた。がA子には最後まで頑張り通すことが出來なかつた。其處にどうすることも出來ぬ人間性が表はれて居る。

「山の喜劇。」 大正十五年、中田正造の新聲劇一座で、神戸、大阪、中國の各市で興行して好評を博したもの。解說は作者の傍註に依つて十分であるやうに思ふ。

「海の呼聲。」 昭和二年七月、松竹座で藤村秀夫、花柳章太郎一座に依つて上演された。此作品にも作者が冒頭に十

分なる解說を附して居るから、此處には說かない。

「北極行。」昭和三年、明治座に於て、「ノビレ少將」の名で、市川延若、市川壽美藏一座に依つて上演され、大いに帝都にセンセーションを捲き起した。有名なノビレ少將の遭難を脚色したものであるが、篇中に漲る迫眞力の强さは、作者の想像力の如何に豐富であるかを語つて居るものと言はねばならない。

「都市覗き繪。」此作にも亦作者の懇切なる解說が冒頭に附されて居る。それを熟讀せられたい。

（編輯部編）

編輯校訂

吉田甲子太郎

清水義政

佐藤十三郎

日本戲曲全集・第五十卷
現代篇第十八輯・第十七回配本

著作權者檢印

禁無斷上演

昭和四年十月十七日印刷
昭和四年十月二十日發行
（非賣品）

著作者　伊藤松雄　永田衡吉　河野義博　田中總一郎　能島武文　北村小松　北村壽夫　鈴木彥次郎　池谷信三郎　北村喜八

發行者　和田利彥
印刷者　島源四郎
製本者　高崎鐵五郎

東京市日本橋區通三丁目
發行所　春陽堂
電話日本橋一三六五
六七四
一八
七八一一
振替東京

東京市本鄕區眞砂町・日東印刷株式會社印刷



